452

明治廿五年三月廿七日第三種郵便物認可
大正七年九月一日發行(毎月一回一日發行)

六合雜誌

九月號

六合雜誌第三十八卷第九號

宗教と民主思想 □今井三郎氏著　定價壹圓五十錢　送料金八錢

基督教新論 □海老名彈正氏著　定價壹圓七十錢　送料金八錢

蜜の流るる地を求めて □別所梅之助氏著　定價壹圓五十錢　送料金八錢

有神論體系 □富永德磨氏著　定價壹圓五十錢　送料金十二錢

スピノザ研究 □波多野精一氏著　定價八十錢　送料金八錢

□警醒社書店□

東京京橋尾張町　振替東京五五三

貧民心理の研究

米田庄太郎氏序。

賀川豐彥氏著。

第參版成る

菊判六百五十四頁

定價金貳圓五十錢

送料金十六錢

千萬言の

説明を聽くよりは、此の
一管の實驗を御覽なさい
品質本位

花王石鹸

くわおうせっけん

花王石鹸製造元
東京馬喰町
長瀬商會

石鹸試驗法

石鹸を些し削つて試驗管に入れ之にアルコールを注ぎ好く振り混ぜて火に炙れば純良の石鹸は透明となる。若し混合物があれば沈澱し遊離脂肪があれば濁渦が見ゆる。又遊離アルカリを含むものは此の液にフユノールフタレイン一滴を落せば赤色に變ずる。

斯の如く純良無上の品質なるが故に絶えず帝國陸海軍、帝國大學赤十字病院等の採用品となり、化粧衞生の第一品として滿天下に賞讃を博するのです。

□七月（長詩）……佐藤清…六三頁
□漂泊者（長詩）……上山善治…六六頁
□光明は吾が寢床を横斷りぬ（シュイラネル）……齋藤未學…六八頁
□笑聲（長詩）……伊藤寥々…七九頁
□富士山頂にて（和歌）……坂本正雄…八一頁
□虚心集（俳句）……一碧樓…八二頁

感想

□美代子の溫泉旅行……わいはん…八四頁
□「蜜の流るる地を求めて」を讀みて……鈴本龍司…九八頁

時評

□倫理上より米騒動を評す……一條忠衞…一〇一頁
□米騒動の後に……一記者…一〇九頁
□弘道會記事……一一三頁

六合雜誌

第三十八卷 第九號

評論

□商工業の理想化……社說…二頁
□基督再臨說を評す……クレー●マッコーレー…九頁
□神々の死(上)……帆足理一郎…一三頁
□英國教界偶感(其一)……會津常治…二二頁
□都會生活と田園生活……佐野袈裟美…二六頁
□愛と幸福……桑田常藏…三四頁

研究

□基督教の哲學的根據(上)……三並良…四六頁
□英國に於ける工場改善の一端……小島幸治…五五頁

文藝

□一葉落(四十三字歌)……土井晩翠…六一頁

六合雜誌

九月號

THE RIKUGO-ZASSHI

No. 452 September 1918

CONTENTS

Idealization of Industry.....*Editorial* 2

On the Second Coming of Christ.....Dr. Clay Maccaulay 9

The Death of Gods (I).....Dr. R, Hoashi.

On the Religious Condision of England of To-day.....

.....T, Aizu. 22

City-life and Country-life.....K. Sano. 26

Love and Happiness..... T. Kuwada. 34

Poilosophical Foundation of Christianity.....

..... Prof. M. Minami. 46

43 Syllabled Poems.....Prof. R, Tsuchii. 61

Iuly (a Roem).....Prof. K, Sato. 63

A wanderer (a Poen).....Z, Ueyama. 64

Topics of the Day.

New Books.

Published Monthly by the

TŌITSU KURISUTOKYŌ KŌDŌKWAI.

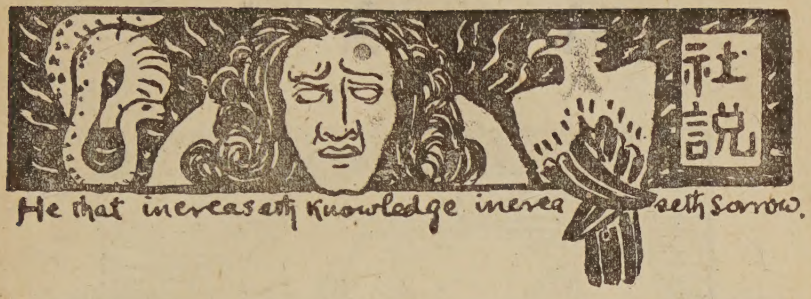
2. Mita, Shikoku-machi, Shiba-ku, Tokyo.

々なる事業に於て、一朝にして巨萬の富を作れる者は殆んど枚擧に遑がない。されば天下の青年の志す所も、多くは工業及び商業の方面に向ひ、俊秀なる者多くは此の方面に吸收せられんとしてゐる。多くの人々は此の風潮を呪ひ、物質主義の勝利黄金萬能の時代なりと罵つてゐる。所謂成金者流の跋扈に對しては吾人も密かに頻蹙してゐる。乍去現代文明に於ける商工業の特殊なる地位を理解することは甚だ大切であると思ふ。

二

一體商工業は如何にして發達したかと云へば、人類生活の便利及び幸福を助長したるためである。人間の他の動物と異る特色中、道具を使用するの特色を見逃すことは出來ない。而して道具なる者は既に先史時代に於て其の發端を有してゐる。爾來幾萬年の間道具は次第に改善せられ、都會の成立と共に分業が生じ、幾多の變遷改革を經て、今日の產業界を現出するに至つたのである。商工業は人類の生活に缺くべからざる者を供給したるが故に、富が蓄積せらるゝに至つたのである。商工業は必ずしも利益を第一義とする者ではない。第一義は天下の有無を交換して人類の利益及び幸福を計るにある。その結果として卽ち報酬として富が與へられるのである。

故に善良なる事業をして失敗するとも吾人は之を尊敬すべきである。產業の目的は必らずしも成功にあらず、人類社會の進步發達に貢獻することが、有力なる標準でなければならぬ。而して今日の資本なる者は、過去に於ける勞力、勤勉、發明の蓄積である。又現代工業の一大要素は勞働である。我等の先祖は幾千年の間青天井の下に於て田畑を耕作し、粒々辛苦の生活を送つた。今日の大規模の工業



商工業の理想化

一

明治大正時代の特色は德川時代に比して、否、他の如何なる時代に比しても產業方面に長足の進步をなしたことである。德川幕府の鎖國政策は我が日本をして內國貿易のみを發達せしめ、國際貿易に於ては支那和蘭二國との取引の外、全く中絕せしむるに至つた。然るに明治維新以來開國進取の國是と共に、商工業は驚くべき進步をなした。日淸日露の兩役は產業進步の紀元を劃し、海運業、貿易、鑛山業、石炭、絹織物、製茶等の如きは漸く國際的關係を見出すに至つたのである。殊に此の度の大戰亂は日本をして歐米交戰國に對して物資の一大供給者たらしめたるが故に、等しく交戰國と雖も、我が國は經濟的に利する所極めて多いのである。

かくて今や約廿億の正貨が日本銀行の金庫に新に充されんとしてゐる。されば產業界の景氣は非常なる者であつて、工業及商業又は經濟の學を修めたる者は、殆んど需用に對して供給する能はざる有樣である。海運業其の他種

成金であつて、歐米幾千萬人否世界幾十國を擧げて戰亂の渦中に投じたるが故に、又幾千萬の人々が互に殺戮してゐるために莫大なる利益をえたる者である。卽ち彼の金庫に藏されたる金は血染の金と云ふことが出來る、之を私藏し或ひは浪費するよりも、速かに其の幾分を割いて社會に寄與するは、賢明にして又安全なる政策である。

四

富其の物は決して呪ふべき者でない、善用すべき者である。國家人類一切の事業は理想と富との協力によつて初めて出來るのである。其の一を缺けば成就し難い。國家は今日租稅の或る部分を敎育及び學術の進步發達に用ゐてゐるが、爲すべき事山の如く、民間の義務的の努力なくしては充分の效を奏しえない。玆に於てか富豪の大なる使命が生ずるのである。吾人は歐米に於て蓄積せられたる富が或は學校の設立となり、學會の勃興となり、發明の奬勵となり、慈善事業となり、宗敎事業となつて多くの美果を生ずるのを見て羨望に耐へないのである。

英國の社會は世界第一の帝國を背景としてゐる。こゝに蓄積せられたる富がある。玆に餘裕有る人がある。玆に敎育有る紳士淑女がある。彼等が生活の餘力を割いて社會の進步發達に貢獻することは目醒ましいものである。又米國には人少く國土は廣い。卽ち殆んど無盡藏の自然の寶庫を有してゐる。或は鐵、或は石炭、或は金銀、或は農產物に於て、殆んど無量無數の富が有る。而して其の富は惜しげもなく社會公共の事業に寄附せられてゐるのである。

近頃我が國に於ても敎育事業社會事業宗敎事業に對して富豪の寄附的行爲の多くなつたことは吾人

に於ては勞働は組織せられたる平和の軍隊の如きものである。鑛山業を初めとして造船業、製絲業、紡績業等に於て幾百萬の男女が夜を日に繼いで營々として働いてゐる。彼等自ら意識するとせざるとを知らざれども、國民及世界の富は實に是の如くにして造られつゝあるのである。

三

斯くして造られたる富が如何にして使用せらるゝかは大なる問題である。我國に於ても歐米と同じく小家族制度卽ち夫婦及其の子供を中心としたる家庭が增加しつゝあるが、尙大體に於て中家族制度卽ち二代若しくは三代の夫婦が同居する家庭多く、而も其の家產を保有するの習慣が牢としてぬけない。故に先祖の蓄積したる富の大部分は其の家に傳はるのである。此の制度は必らずしも惡いとばかりは云はれない。英國の殖民政策の成功は、其の長子相續の制度に負ふ所が多い。次男三男は所謂冷飯食ひなる境遇にあるを以て、志有る青年は慨然として壯圖を萬里化外の異域に試みたのである。

然るに佛蘭西に於ては財產を子女に平等に分配したるため、彼等は鄕里の安樂なる生活に甘んじて、進んで海外に發展せんとする者がなかつた。是其の殖民政策の失敗せる一原因である。從來日本商人の營業振は極めて保守的なる者であつて、質素儉約によつて微細の利を積んで財產を作つたのである。之を愛惜する情の深いのも無理ならぬことである。かくて日本の富豪は其の富を社會公共の事業のために分散することが少なかつたのである。

されども最近の富豪には一代にして產をなせる者が少くない。殊に今度の大戰爭に於ては、成功者自らの努力は勿論大切なれども、時局のために豫想外の利益を與へられたる者が少くない。乃ち時局

金を見ては、誰しも密かに羨望に耐へないであらう。而して家に歸れば妻子は陰慘な生活に疲れた顏をして我を迎へる。自分とても亦毎日々々働いても働いても少しも活しが樂にならない。こうして老い朽ちて了ふのかと思ふと、悲しい涙が頰を傳はる。希望もなく、幸福もなく、光明もなき生活、不平と不安と不滿との生活は、やがて人をして自暴自棄に陷らしめる。誰か云ふ酒を飮み放歌亂舞して居つた者か何の顏が有つて女々しき米騷ぎをなすのかと。米は導火線に過ぎない。爆發物は人心に充滿する失望不平の氣である。だから亂暴するのである。

六

とは云へ、此は是れ人間永劫の世相ではない。社會改良の思想は社會諸科學の進歩と共に一層の光明を人間社會の前途に投じてゐる。エルンスト・アッベのツァイス工場に於ける社會政策的施設の如き、エルバルフィルド市の救濟事業の如き、人道的事業は着々として行はれんとしてゐる。又彼のチャールス・ブース、ミーボーム・ローントリーの如き、中流以下の人々の生活改善の爲めに熱心なる研究をなす者が出て來た。所謂人心不滿不平（コーセスオブイァスコンテント）の諸因は必らずや明かにせられて、やがて社會の結合を更に密接且つ圓滑にするであらう。

かくて資本對勞働の問題が根本よりして解決せらるゝと共に、商工業對其の他の精神的事業の關係も亦更に進歩しなければならぬ。前にも云つた通り人間の事業は多は商工業の作り出したる富と宗教哲學科學等の作り出したる理想との協力によつて成るのである。富は要素（エレメント）であり、理想は動因（ファクター）である。兩者は相俟つて初めて事を成し得るのである。

の喜びに耐へざる事である。希くは更に此の風を盛にしたい者である。之を敢へてせざる時は、財産の尨大なる終に子孫の天分を發揮するの妨害となる。日本の國情にあつては、或る程度迄の財産を子孫に遺すことは無論必要であるが其の程度を餘りに超える時は、却つて禍を子孫に殘すことゝなるのである。

五

又勞働者に對する待遇も大いに改善する必要がある。工場法實施以來幾多の改善の實が多くの工場に於て擧げられた。然し勞働者は未だ其の勞力に比例する程の待遇を受けて居らない。多くの會社に於て拂込五十圓の株券が或ひは二百圓に達し、或ひは四百圓に達し、甚しきは二千圓に達してゐる。從つて其の配當の如きも五割六割より十割以上に及ぶ者もある。資本家並に企業家が過當の恩惠に浴してゐることは疑はれない。之に比すれば勞働者は單に物質に於てのみでなく精神に於ても一層の餘裕と慰安とを與へらるべきであると思ふ。

從來勞働問題を取扱ふ人々は兎角之を經濟的にのみ見ると云ふ弊があつたやうである。人はパンのみにて生くる者にあらず、勞働者とて必らずしもパンのみを以て滿足する者ではないのである。勞働問題は更に心理的に研究せられねばならぬ。米價暴騰の結果各地に騷動の起つたことは由々しき社會問題である。然るに暴民の害を蒙つたのは必らずしも米穀商仲買商のみではない。寧ろ料理店呉服店の如き、米の値段とは一見無關係なる方面に多かつたやうに思ふ。

是果して何のためであらう。物其の平を得ざれば鳴る。美衣美食傲然として街頭を闊歩する大小成

基督再臨說を評す

クレー・マッコーレー

一

目下、日本の基督教界に在りては基督の再臨といふ事が一大問題となり、諸先輩の議論が雜誌上に顯はるゝのみならず、再臨信者の大會等が開催されるそうである。此は實に不思議千萬な事である。殊に怪訝に堪へないのは基督の肉體的再臨といふが如き舊式信仰の信者の內に識者を以て許さるゝ名士諸君の名前を發見する事である。私は此等の名士諸君が依て以て日本の社會に重要なる地位を占め得て居る知力に對して（精神的生命に對してゞ無く）疑惑を懷かざるを得ぬ。私の信ずる處によれば、彼等の使命は、一般識者の間に明白となれる現代的知識の下にのみ可能なるべき基督教を日本國民に宣傳する事に存した筈である。

再臨信者の可能によれば、基督は凱旋の王者として、肉體を以て再び天上より地上に降り、地上の王國に對して自己の王國を建設し、天使及び聖者と共に永久に世界を支配するといふのである。

斯種の再臨信仰は、もと、幾多の他の教義と共に發生した者である。卽ち死者の突然なる復活、基督の天軍と地上に於ける反基督者との恐るべき爭鬪、サタン及び支配に對する物質的征服、平和と善美との時代たる『千年期』の開始、全人類に對する最終審判卽ち一定の所在地を有する天國及び

今や未曾有の世界的動亂に際して、我國の産業界は一大飛躍をなした。目下の社會的紛亂の如き、一時の秩序錯亂に過ぎない。清冽芙蓉の池一時に世界的大洪水の溢流を容れて、鏡の如き水面は俄かに浪立ち騷ぎ、あたら眞清水は濁つて了つた。けれども失望を要しない。水は忽ちに澄み波は忽ちに納つて、芙蓉池は新に漫々たる水をたゝへ、文王四十里の園にも似て、萬民の來り遊ぶに任せるであらう。悲しむ勿れ、憂ふる勿れ、這般の消息は實に是れ現時我國社會の有らゆる煩悶を解決するの一大光明である。

數年前紀州新宮に遊び、同地の友人に案内せられて熊野川を溯りて瀞八丁の絶勝を探つた。漕ぎ、棹し、又引かれて行くこと數里にして二流の注ぐを見る。左よりするは大和より來る十津川、右よりするは伊勢國境より來る北山川である。前者は濁派混々、後者は清冽澄徹。相合して熊野川となる。北山川をさかのぼれば幽邃の絶勝に達するのである。それ十津川は今日の實業熱のごときものにして、北山川は理想主義にあらずや。兩者を調攝して現代の文明あり。北山川のみでは大をなすことは出來ぬ。十津川の濁流のみにては熊野の清流の要素とならぬ。兩者共にあるべく、之を指導し、調攝する大生命ありて兩者はじめて存在の價値あるのでないか。(S、U生)

或は又、死者の靈魂は地下に存する暗黑なる陰府の底に眠つて居るのだと信ずるのに何の不思議も無いと考へる人々もあつた。而して此等の靈魂は基督の世界征服の大業の完成を豫告すべく、間も無く鳴り渡るべき天使の喇叭の音に目醒めるのである。基督が磔刑に處せられた時に於てすら、眠つて居た神の子の或者は目を醒まし、復活せる肉體を以て、墓場より聖京に入り、且多くの人々に顯はれたと信ぜられて居る。而して其は『それ主號令と使長の聲と神の箴を以て自ら天より降らん。其時キリストに在りて死にし者先に甦り、後に活きて殘れる我儕かれらと偕に雲に携へられ空中に於て主に遇ふべし』とテサロニケ前書に證されて居る時期を豫示せる者だと信ぜられて居る。基督は陰府の底に眞に眠つて居る者、卽ち『寢りたる者の復生の首』となつたのである。

天文學的にも地質學的にも無智であつた當年の人々は、私共の生息する此一遊星を以て神の創造力の最も顯著なる産物だと信じた。少くも一般普通人は左樣考へた。地球は宇宙の中心に位する一大水陸團で、日と月と星とは其周圍を廻轉しつゝある。而して彼等に取りては、世界の創造はやつと四千年以前の事であつた。彼等は人間の運命に優る神の關心事は無いと考へた。天界及び下界は明白なる實在であつて、決して象徵では無かつた。此等の兩界は實際に宇宙を構成する部分と一般に考へられた。基督再臨說が極めて容易に成立し且維持されたのは實に如上の世界觀が行はれて居たからである。天と地とは空間上別々に存在する實在世界であつた。同樣に神と人とも全然相隔離して居た。

三

ナザレの耶蘇の誕生と生涯と死との物語は直接に如上の俗間信仰の影響を受けて形成された者である。卽ち基督傳には劈頭から天の使者が地上の色々な人々に下りて種々な重大事件を指揮した事が語られて居る。基督の誕生の歌を牧羊者共に歌つた天使は『彼等を去りて天に上つた』と記されてある。而して基督が洗禮を受けられた時には『天開け、聖靈鴿の如き狀にて降りぬ』。『而して天よ

地獄に全人類を割當てる事、其他一々茲に列擧する事の出來ない程澤山の教義と相關聯して居る。

併しながら二十世紀の今日、私共の生息する世界と物質的宇宙とに關して、小學校教育に於てさへも教へらるゝ疑ふ可らざる事實の何たるかを念頭に置く時は、苟も責任ある地位の人が古代の無智と小供らしき想像との所産たる如上の諸教義を眞面目に考へ、且現代の個人的若くは社會的生活を指導する原理として之を辯護するといふに至つては實に沙汰の限りである。成程此等の諸教義が基督の福音の發生に關する記錄の要素を成して居る事は事實である。併しながら私は敢て問ひ度いと思ふ、古代及び中世紀に說かれた様な基督の再臨が果してある者とすれば、基督は抑も何處から降臨して所謂サタン征服の戰鬪を開始するのであらうかと。

私共が地球と呼んで居る平たい大地の上に、手にて觸れる事の出來る蒼天が懸つて居ると思ふ者は無からう。地球は無限の空間を通じて廻轉する球であつて、私共の眼で上とか下とかいふ事は決して地球には適用されない。太陽が地球の周圍を廻轉するのでは無い。而して圓屋根の様な幾層もの天空が此地球の上に懸つて居るのでも無い。且又最上層の天には神の玉座が在り、其右側には基督が控へ、而して之を取り卷く天使の群は、今は天上及び其他の事務に沒頭して居るけれども、其內には基督と共に空と雲とを通じて地上に降り、地上の反基督者及び惡魔を征服せん時を待つて居るのだといふ様な事は到底信ず可らざる事である。

二

如上の信仰を當年の時代思想に依つて說明する事は一見不當だと思はれるかも知れぬけれども、單にパレスタインに於て、又猶太人の間に於てのみならず、更に隣邦人の間に於ても、如上の信仰は當代の一般人に取つては實に疑ふ可らざる事柄であつた。以上の諸國民の大多數の思想によれば、世界は平たい者で、其の下又は横に地獄が在り、其處でラザロを擯斥した富者の様に人間の靈魂が苦んで居ると考へる事は極めて當然の事であつた。

値ありとすれば、歴史的に且眞實に偶然なる附隨物を凡て拋擲しなければならぬ。再臨の希望とインスピレーションに依つて慰藉を受けた古の人々をして再臨を事實だと信ぜしめた心理狀態を一變しなければならぬ。而して原始基督敎徒が考へて居た樣な文字通りの再臨信仰とは全く無關係に、何等かの精神的意義を以て之を說き直すべく努力しなければならぬ。二千年以前に信じられた樣な天界と地上とは存在しないのである。且つ所謂再臨といふ事は到底不可能なる自然現象である。二十世紀の今日、識者を以て許さるゝ基督敎々師社會に於て責任の位置を占むる人々が、何故に眞面目に全然無根據なる事件の時と處とを論議するの愚を演じつゝあるだらうか。儀文は殺す、活かす者は精神である。眞正なる基督、ナザレの豫言者の福音をインスパイヤした活ける信仰に於ける基督、卽ち精神的基督は絕えず且新しく人類の間に來臨しつゝある。而して此來臨は一切の精神的善事が眞であると同樣に眞である。基督敎の藏する確固不拔の基礎及び基督敎の天下後世に對する保證は實に如上の精神的再臨の確信に存する。

神々の死（上）

（宗敎哲學の大問題）

帆足理一郎

一、緒言

文明の進步と共に、社會生活經驗の推移と共に、吾々が神に就ての經驗も思想も變らざるを得ない。吾等の神は畢竟吾等が日常經驗する或る實在

り聲ありて曰く、爾は我愛子也と』。

併しながら、現代の教育を受けたる者に取りては大空に天上界の存在する事は信ず可らざることである。天上には無數の精靈の國があるとか、『權威及び權力』があるとか、又神の御用に忙殺されて居る無數の神の使者卽ち天使、天使長、ケルビム及びセラピム等が存在するとかいふが如き事は凡て信ず可らざることである。而して神は餘り遠からざる最上天に君臨し、基督は其右側に在りて再臨の準備中である——卽ち天の萬軍と共に地上に降り、此世界及び『神より選ばれたる者』を永遠に救はんが爲めの戰鬪を開かうといふ凱旋的降臨の準備中であるといふが如き事は到底現代人の信じ得ざる所である。

斯く曰へばとて、私は或種の幻象及び信仰が、原始的督教時代に於て既に有識者に取つては單なる象徵たるに止まり、且一層古い時代の無智と迷信との繼承たるに過ぎぬと考へられた事實を否定する者では無い。象徵としての幻象及び、信仰には相當の價値を認めなければならぬ。猶又私は多くの基督教的記錄、特に或種のウロ及びヨハネ文學に於て明白に認め得べき精神化主義比喩化主義及び象徵化主義を無視する者で無い。併しながら依然として次の如き諸迷信存在は極て明瞭である。曰く、子供らしき想像の所產たる舊式天地創造論。曰く、人間の事件に忙殺されて居ると考へらるゝ天使及び惡魔。曰く、天界地上及下界の存在。曰く、夢の超自然的性質。曰く、前兆及び魔術の適中。曰く、惡魔に取付かれて病氣になる事。曰く、幸福と不幸とは精靈が物質界に干涉する結果である。此他一々枚擧するの勞を省くけれども未だ未だ澤山の迷信が在る。而して此等の信仰は決して象徵的な者と考へられたので無く、全然眞實な者と考へられたのである。バレスタインの大多數の人々に取りて如上の信仰が眞實だと考へられたのは、丁度現代の學者に取りて天文學、地質學、化學、現代心理學及び其他の科學の知識が眞實だと考へられるのと同じである。

若し再臨の教義が何等かの意味に於て眞理を藏する者として、眞面目に現代に於て考察すべき價

り、グリシャ思想に於けるが如く、非人格的、形而上學的のものとなつた。グリシャや哲學の代表者なるプラトンは觀念を實在とし、實際經驗の世界を現象とけなし、實在は渾一にして完全圓滿の典型であると見てゐた。此思想が直にクリスト敎の神觀に影響し、神は形而上の存在で、現象界から超然たる絕對完全のもので、全智全能である。同時にユデヤ思想にありし創造の神の觀念が茲にも保存せられ、絕對神は全宇宙の實有を虛無より造出せし創造神となつた。

此中世紀思想に現はれたる神觀は尙今日に於ても傳統的に大部分の人々により信仰せられてゐるのであるが、そは畢竟彼等が明瞭な意識で之を批判することを好まず、只父祖傳來の思想に盲從してゐるから然るので、吾等が苟も吾等自身の生活經驗を土臺として考ふる時には、如何に是等の神觀が不都合なものであるかを見出すであらう。余は今茲に是等の神觀を概略五個に總括して、形而上神、超然神、絕對神、全能神、及創造神となし、科學に根據を置いた現代的新思想の誕生と共に、是等五つ柱の神々の殿堂が俄かに壞れ墜ち、吾等は今其挽歌を歌うて彼等を葬り、新らしき神觀を樹立すべき時なるを宣言するのである。

二、形而上神の死

形而上神を論ずるには勢ひ認識論に入らざるべからざるも、其繁瑣なる議論を避けて、如何にして形而上學的の神が現はれ、如何にしてそが今日の思想上不都合となりなるかを概述すれば足れりと思ふ。

原始人民の間に於ては神は決して形而上學的ではなかつた。彼等の神は人間と同じ樣な利害關係を持ち、お飯も喰ぶれば酒も呑む神であつた。現にお供食、御神酒を捧ぐる日本の神道には其傳說が今に殘つてゐるのである。乍併、神觀の道德化、精神化、哲學化と共に人間は神を日々の經驗事相の內に置くことを勿體ないと思ふに至つた。神は現象と共に流轉すべく餘りに實在である。彼は時間空間の範疇內に生存すべく余りに恒久であり、餘りに充全である。されば神は無始無終完全圓滿の存在として經驗界に在り能ふものではない。經

に附した名目で、其表現は吾等が日常經驗の言葉を借りるより外はない。例へば、國王の絶對權を認る專制治下にあるドイツ人は、哲學に於てどうしても絶對觀念を棄て去ることが出來ず、彼等の神は常に絶對者である。民主的な會社經驗に生活する米國人は、其哲學に於てもゼエムスやデイウイーの如く民主的の哲學を稱へ、神觀も今や民主的となり、神は大統領の樣に絶對者ではなく、單に靈的生活の指導者なりと見る傾向がある。原始時代の人の神は會族の長であつた。王國が出來て、神は其國民の靈的國王と考へられ、王家以上に廣い世界のあることが經驗せられて、世界の王と見る神觀が現はれた。

國家を失て國家觀念が無意義となつたユデヤ民族の如きは、後日イエスの如き宗教的天才を出して、父としての神觀を描かしめた。父としての神觀が現はれて以來、或は會長と見られ或は判官（士師）と見られ、或は國王と見られ、或は世界の皇帝と見られし神は當に死に去つた筈である。傳說にクリストの降誕と共にグリシヤのデルフィに於けるアポロオ神の御乙帳が斜に裂けたとか。クリストの降誕はグリシヤ、ロオマや其他諸國に榮えたる神々の死を告げ、クリスト教の勃興と共に、是迄ありし偶像崇拜、祖先崇拜、鄕土神崇拜、自然神崇拜が衰へて、結局八百萬の神々が人間の精神生活から葬り去られてしまつたと傳へられてゐる。

然るにクリスト教の根本義なる神を父として人類一般を其子等と見、兄弟的の博愛を人間生活の常規とせよと敎へし福音は、中世紀に來り何時しか其實際的方面を輕視し閉却して、哲理的傾向を重んずるに至つた。クリスト敎は其成立分子の內にグリシヤ系の思想を包容してゐた。そはクリスト敎がグリシヤ、ロオマの社會に宣傳せらるゝに至り、會長民族の知識階級にアツピイルするにはイエスの單純な福音を哲學化する必要あり、又グリシヤ、ロオマの學者にしてクリスチヤンとなりたる人はグリシヤ思想により彼等の新に得たる宗敎を解釋せんとしからである。處で、彼等の神觀はユデヤ的なる人格的、實際的分子を益々遠ざか

に、人間の經驗によりて解することの出來ない形而上的の存在は何人に採りても無價値のものであると見るからでもあらうが、只それ計りでなく、人間の知識は現代のプラグマテズムが主張する如く所詮人間的で、其人間的知識で知ることの出來ない樣な形而上的な實在を人間が假定し、或は信仰してゐるのは自家撞着である。何となれば、若し人間が斯る形而上的實在を肯定し得るならば、そは既に人智の內に入り來れるもので、そは正に經驗內のことである、決して超經驗的のものではない。されば、是れまで、苟も人間と靈的の交涉ありと認められし神を超經驗的形而上的存在と見しは妄想である。若し神あるとせば、そは吾等が日々の經驗に顯はるゝ神であつて、少くとも、人間の經驗に現はるる或者しか神と云ふことは出來ないのである。されば故に吾等は形而上神の挽歌を歌つて、經驗上の神を樹立する必要ありと主張するのである。

三、超然神の死

超然神も形而上神と略ぼ同樣の內容を有するものであるが、後者は主として哲學者の神觀であり、前者は神學者の夫れなるが故に、聊か其出發點を異にしてゐるのである。神の超然性を最初に認めたのはユダヤの國が亡ばされて、人民の指導者達がバビロニヤに捕虜となつて往つた後のとで、預言者エゼキエルなどから始まつたので、神を神聖（ホーリネス）と見て夫れを一層聖化するに至り、神は段々九重の奥に祭り込まれた。人間の帝王が昔は國民の直接指導者として、戰爭にも政治にも朝夕の友なりしものが、國が大きくなるに從ひ、段々臣民との關係が遠かり、國を失ふたユデヤ人では戰勝者なる王者が直接に彼等を統率せず、文武百官を備へて間接に之を支配する處から、彼等の神觀も同樣此社會的經驗を象徵して、神は人間の日用事に超然たるものと見るに至つた。

新約聖書時代に世界の末世觀が起り、此世は間もなく破壞されて神の國が來ると云ふ信仰が一般に行はれ、イエスも其信者の一人であつた。此末世觀の後背には人間世界と神の世界との二世界觀的區別がある。人間の世界は今や罪に汚れ惱んで

驗界の事は皆時間的空間的に推移變轉し、凡てそは不完全である、一時的である。吾等は不完全な存在を崇拜する必要はない。吾等の崇敬する神は完全であらねばならぬ。されば完全なるものを求めて、プラトンと同樣、觀念の世界に來らねばならぬ。假令へば、完全の花を求めんとて我等が經驗界の花を檢するに、一も完全なものはない。併し吾等に「完全なる花」てふ觀念はある。プラトンは此觀念自身が實在であつて、經驗事實としての花は皆完全なる此實在の不完全なる模造品に過ぎないと見た。是れメタフヒジカルな花の實在觀である。

乍併、中世紀に於ける實在觀（リヤリズム）と唯名觀（ノミナリズム）との爭は遂に觀念と實在との嚴格な批判となり、觀念は實在ではないと云ふ議論が近世紀の初頭に盛んになつた。カントの如きは、觀念上吾等は百萬圓の金を懷中にし得れど、夫れが事實上百萬圓とはならぬと皮肉つた。觀念は所詮知覺や感覺の抽象である。而して感覺は心の感受性と外界の物の印象とによりて成立つ。吾等の知識は卽ち物と心との關係に過ぎない、物自體に就ての認知ではないとカントは云ふた斯くてカントは觀念の實在を表口から投出したけれど、彼は人間の經驗を離れた、卽ち超經驗的「物自體」の存在を認め、文を實體界として形而上的に考へしが故に、彼が放逐した在來の實在觀は形を換へて裏口からこつそりと這入つて來たのである。

ヘエゲルに至りてはカントの稱へしが如き可知の經驗界と不可知の實體界など二個の世界は在り得ない。宇宙は渾一である。心靈は其實體であつて物質は其現象である。吾等人間は靈體なるが故に宇宙の本體を解し能ふと主張したけれど、彼の稱へし本體の總本尊なる絕對觀念或は絕對的精神はやはり形而上的（メタフヒジカル）なもので、吾等の經驗事相には在り得ない、只想像（コンプレヒエント）し得るだけである。斯して想像し得るだけの形而上的な實在或は神は、カントの物自體と同樣、今日の經驗哲學の排斥する處となつた。新現實主義（ニオリヤリズム）でも新理想主義でも左樣な形而上的な存在を妄想だとして排斥してゐる。それは今日吾等の科學的、藝術的、道義的經驗事實中

何となれば、超然とは宇宙人生の經驗以外にあることで、內在とは其經驗內の事であると云ふ意味なるが故に、若し神が經驗內の事だとするならば、超然である筈はない。若し超然だとするならば經驗內に入り來る筈はない。されば、超然にして而も內在と云ふ人達の考へては、神の一部だけ內在て他の一部が超然だと云ふのであるが、是れは神を物質的に考へたので、恰も水上に現はれたる土地を島と呼び、水に潤たされたる部分を海底と云ふが如く、其處に一の隆起があつて水中に內在する部分と水面に超然たる部分とあるが如きも、神は左樣な物質的形體ではない。神が此世に働き給ひつゝありと云ふ吾等の經驗事實が確實だとするならば、彼は內在てあつて、超然ではない。現在の科學や哲學は經驗事實以上に超然たるものがありても、そは吾等と何の交涉もなきものなるが故に之を超經驗の實在として崇拜することは出來ぬ吾等か崇拜し能ふものありとせば、そは既にそが超經驗的ならざるを示してゐるのである。從つて超然の神は勿論其存在不可能であるのみならず、內在にして同時に超然なりなど云ふ曖昧な考へ方も捨て去らねばならぬ。神は內在と見ても古人の想像せしが如く、神の威嚴を損ずるものではない。人間の經驗に內在すると見て却て吾等が生活の指導者たり理想たり得るのである。されば超然神も形而上神と共に葬り去らねばならぬ。

四、絕對神の死

中世紀の神學は神を Ens absolutum「絕對的實在」だと見てゐた。人間は相對で、不完全で、罪に汚がれて、只神の恩惠に生きてゐるものだが、神は絕對で、完全で、全智全能、萬善の神であると。此絕對と云ふ考への內には超然性、形而上性などを包容してゐるけれど、絕對なる言葉は宗教上一種特別の意義を持つてゐる觀念であるから、前二者と區別して玆に考ふる必要がある。夫れは世人往々神は形而上的でなくても構はぬ、超然でなくても宜敷いが、神が若し絕對者でないならば、吾等の信仰は無益なりと云ふ程まで、神の絕對性に價値を認めてゐるからである。ハアヴアード大學のホツキング敎授の如き現代的學者ですら、我

ゐる。之を如何にして改革すべきや？　人間が改革しようとしても駄目である。その根本的に、又奇蹟的にしか改造さるゝものではない。卽ち神が此世界を破壞して新らしい神の國を建設し給ふに相違ない。神の國は雲の彼方遙か天上にあるのだ。夫れが下界に下つて來て、此現つ世と入れ換るは何でもないことだ、神の大能を以てしては、と斯様に信じてゐた。此頓狂な末世觀、天國と人間界との二世界觀に立てられたる妄想を現にお江戸の眞中でさへ憶面もなく稱道するものがある處を以てすれば、如何に夫れが荒唐無稽の傳說なりとするも、尙現存するものたるは疑ひなく、吾等は此超然觀の迷妄も打破せぬばならぬのである。

中世紀の神學は此末世觀的世界觀を哲學的に二世界觀となし、此世の事相に超然たる神を描き、神は超智的に全智、超道德的に萬善と見、人間に就ける屬性は凡て是れ非神的のもので、神と人とを全然區別してしまつた。斯の如く神祕化され神は近代人の渴仰を繫くに足らぬものから、經驗を重んずるシユライヤマツヒヤアの宗敎以來、神は超然ではなく內在であると云ふ說が盛んになり、ヘエゲル派の唯一觀では汎神敎的に神を全然內在と見んとする傾向を生じた。然るに、ヘエゲルは三體一致論法により「實有」と「靈無」を統合した「轉化」の觀念により、實有にもあらず、靈無にもあらぬ及第三者を想像せし如く、神は超然にもあらず、又內在にもあらず、超然にして同時に內在だと云ふ神學說の基礎を啓き、クリストは神にあらず、人にあらず、而も神にして人なりなどと云ふ神祕的觀念を傳承し、神人合一說を三體一致の論法で解釋した。一般の神學者も之を踏襲し、成程好いクリスト敎の哲學的辯證だと、彼等は異口同音に、神は超然にして內在、內在にして超然なりと云ひ出した。

是れによりて神を全然超然なりと見、人間の經驗と何等の交涉なきものとする超然神敎の弊を避くるとは出來たけれども、神を超然にして內在、內在にして超然と云ふは、恰も無にして有、有にして無なりと云ふが如く、全く對立せる兩觀念を繼ぎ合せて神祕的に無意義のものとなしたのである。

た。處て、彼れの絶對は初めから完全のものなるが故に、彼れの所謂進化は眞の進化ではない、還原である、還歸である。初めから在るものが色々形を換へて、末遂に元の本體に歸つて來るのに過ぎない。

絶對を認むるヘエゲル派の哲學者ブラッドレイは宇宙は全體として完全なるが故に進化などあり得ない、不完全と見ゆるは其一部分を見るからで進化ありと見ゆるも只部分的觀察の結果に過ぎないと云うてゐる。勿論全體として完全なるものに進歩があり得る筈はない。吾等はブラッドレイの如く、宇宙は全體として完全圓滿だと見ることは出來るが、若しさうなると、吾等の創造的努力は所詮無益であつて、既に完全なる宇宙に吾等又何をか加へんやである。吾等は一厘一毛だつて增加することは出來ないであらう。されば我等のなす所は糸遊が春の日光にきらめける様なもので、只動いてゐるだけである。進歩向上しつゝありなど見るは錯覺であつて、吾等の努力奮闘は何等の意義なきものとなつてしまう。

又神を絶對圓滿なものとすれば、彼は絶對に自由であらねばならぬ。若し神が絶對に自由だとすれば、吾等人間には自由なるものは全くなくなつて了ふ。我等は絶對的に神に服從してゐるより外はない。吾等に幾何にても自由ありなど見るは畢竟錯覺であつて、吾等は絶對神の奴隷に過ぎない我等は結局機械である、傀儡である。

由來神を絶對と見るは專制政治の社會經驗から來たもので、今や國王の絶對權を認むる者なきが如く、神の絶對權をも拒絶せねばならぬ。立憲政治の國では天皇は自分の權力を自から制限して人民に或種の自由を與へ、國王は此人民の自由を尊重して、之を侵害することは出來ないと見る。普通神學者の云ふが如く、神は人間に自由意志を與へ給へりとせば、よしそが如何に些少なる自由であつても、其與へられたる範圍内に於て、神は自分の自由を夫れだけ束縛されたものに相違ない。若し神が人間に幾分かの自由を與へた後にも尚其自由を何時にても勝手に取消すことが出來るならば、人間は結局何の自由もない、奴隷の狀態に在

等は絶對を要求する、神は絶對なりと考ふる時にのみ神は吾等の力として作用するのであると、彼の名著「人生經驗に於ける神の意義」なる書物中に論じてゐる。

成る程人間は自分の不完全を認めて、何か完全圓滿の實在に到達したいと願望し、神は吾等が此欣求を充たす盡力として彼れ自身完全圓滿の實在であらねばならぬと思ふ。我等は自然に先例を尚ぶ。あの人は未來總理大臣になるだらうと見込まれてゐる人よりも、現に總理大臣たる人が大臣になる祕訣を教へて呉れると、夫れが生きた教訓として難有感ぜらるゝ。是れと同樣、神は一個の靈的存在として、完全圓滿の理想に向つて奮鬪しつゝある實在だと思ふよりも、既に完全圓滿の實在だと見た方、神の威嚴が確保されることは勿論である。併乍、我等は要望と實在とを混同してはならぬ。神は完全圓滿なるべきを吾等を要望すれど吾等の經驗事相に完全圓滿なるものは一もなく、殊に現代の進化論的筆法を以てすれば、萬物は皆流動し、生長し、發展しつゝある。然らば、此宇宙に生長發展することなき完全圓滿のものがありやう筈はない。ベヤグソンの如きは、完全な物は死物のみ、生きてる物は皆夫れ不完全であると云うてゐる。事物は不完全なるが故に進化發展し得るのである。

されば、此進化的に發展しつゝある世界に既に完全圓滿なる根底ありと見るは不可能であつて、若し神が宇宙の根源として既に完全圓滿、卽ち絶對者であるならば、宇宙には眞に進化の現象は在り得ないことゝなる。ヘエゲルは神を絶對觀念と見たが、宇宙に絶對的實在が既に現存するが故に彼れの所謂宇宙の進化は眞の進化ではない。今迄目に見えなかつたものが具體的に顯現するに過ぎない。さればヘエゲルの神觀は滑稽至極で、眞の實在(絶對者)が自己を空虛にして、夫れが最初物理的化學的に働く物質となり、夫れから植物、動物の域を經て人間に進化し、人間となりて後、意識より自意識に入り、遂に完全の自己實現(セルフリヤクゼエション)卽ち宇宙の絶對者と靈的融合の域に進んで、最初空虛にした實在が再び充實されるものゝ樣に考へてゐ

『困つたものだ』と途方に暮れるばかり。かゝる時勢では宗教の眞意義は忘られてしまひ、宗教には一國家の民心統一以上の目的はないかのやうに思ひなされ、教役者は舊來の教條がこの戰爭で始めて新なる證左を得たかの如く說き立て、智識階級は見えすいた權力者の人格を教壇から褒めちぎつたり、群衆は聖なる言葉に神經的に額いて戰勝を熱狂的に朝夕神に禱つて居る。國を擧げて戰爭熱に浮かされて居る時代には、理智の光暗くなつて感情殊に保護を欲求する感情が徒らに高くなる。これと同時に今日までクエスチョンマークを附けておいた教條なども、サッサと檢査濟の印をつけて適用するといふ時勢。おしなべて戰爭故に人心動搖して懷疑に導くといふのは寧ろ傍觀者の心理で交戰國民は大部分懷疑に陷るには心があまりに緊張して居るから、從前よりも一層オーソドックスになつたと見る方が適當だらう。

「特別禮拜と個人祈禱＝村々の親寺や都市の主な寺では毎日一定時刻(大抵正午十二時とか十二時半とか)に特別禮拜を催うして居る。時間がほんの半時間位に過ぎないのでたゞの人も行けば智識階級の人も行く。またこれ等の寺院は終日開放してあるので、時々刻々に心に憂ある者はこゝに立ち寄つてひそかなる祈を捧げる。一人また一人とぼつ〳〵とたどりゆくその足音は妙に人を誘ふ力があつて、知ると知らざるとを問はずその足跡を踏むでその寺に導かれ隔りたる座に跪きて心よりの祈を捧げしめる。喪服姿の媼の腕に買物籠吊るして、市場の來往に立ち寄る後姿ほど傍人にいたいけなさを思はしむるものはない。この幽かに靜けき法寺の片隅に忍び寄りて貰い泣きの袖を濡ほすことも旅人に許されたる一の特權である。

「寺院内の國旗禮拜後の國歌＝大は聖ポーロ寺やウエスミンスタア院の大伽籃より、小は片田舍の村寺に至るまで、その内壁のそこゝゝは、或は新しい或は古びた英國々旗で飾られて居る。かゝる寺院で會衆一同の口から『神よ我が國王を救ひ給へ』の國歌の賑々しく歌はれるを聞く時は『四海同胞』といふ標幟が一夜の内に『國家安泰』と早變りしたといふ格で、理想の低落がピンと頭にひゞ

る。之に反して人間に與へたる自由によりて神が拘束を受け給ふとすれば、神は恰も立憲君主の如く、自己の權力を限定したるものなるが故に、最早絶對者と云ふことは出來ないのである。

絶對なる實在は吾等の經驗にはないことであるが、絶對の有無は不明として、先づ絶對を存在すと假定する場合に、如何なる結果を生ずるやを考へて見やう。若し神が絶對者であるならば、宇宙の完全圓滿は既存の事實であつて、人間が如何に努力するも、此上何等の創造的進化あるなく、又人間には何等の自由なく、只絶對神の奴隷として傀儡として絶對的に盲從するより外はないことと

なる。

之に反して、吾等若し斯の如く人生を運命觀的に考ふることを好まぬとすれば、勢ひ絶對者の存在を否定せねはならぬ。余は今日の科學が示せる如く、星學上、生物學上、心理學上、社會學上、凡てのものは日々創造に進化向上しつゝありと見る方、人生の現象を解釋するに便宜なりと信ずるが故に、吾等の神觀に於ても、哲學に於ける絶對者の否定と同樣、絶對神を葬つて、絶間なく向上發展し給ひつゝある進化の神を信ぜねばならぬと思ふ。

英國教界偶感（其一）

會津常治

愈出でゝ愈オーソドックス——特別禮拜と個人祈禱——寺内の國旗と禮拜後の國歌——二十世紀の十字軍——『目を以て目をつくのふ』——一道の光明

□愈出でゝ愈オーソドックス＝開戰當時は基督教信者即ち平和論者といふ見解から戰爭罪惡說を眞向に振り翳して戰爭反對を唱へた人達も開戰五年目となつた今日では當時ほどの勇氣はなくてたゞ

られたる、ウエスミンスタアベーの僧都（デーン）でプラトー學者なるイング博士はこの場合最も不人望な平和論を唱導してその機關雜誌の名の示す如く『善意』を以て敵人を遇すべき事を力說して居る。その昨年末の集會に於いては『いつまでこの戰爭をつゞけてもつまりは歐洲文明を自殺に導くに過ぎないから戰爭は止めたがよからう、而して平和促進は英國々教の手より持ち出さゞるべからず』と力むで居られる。不思議な事は和說を唱へるにしても英國々教徒の提議なら人民が耳を假すしその他の人なら相手にしないといふ傾がある。

獨り宗教關係者でない、學者の內でも平和論を力說して筆禍舌禍に罹つて暗黑な月日を送つて居るものも少なくない。主戰論でなければ通用のわるい時節に平和論などを擔ぎまはるのは時勢を知らぬ迂濶者かも知れぬ。併しどう考へてみても、よしや生物は競爭し相食み相滅ぼしてやがて種族全體として發達してゆくものだといふ生物學の原理を眞理とするも、猶戰爭は吾人生物には第二義のもので第一義のものは平和であらねばならぬ。少くともかくあるべき事が吾人の理想である。交戰國の首腦になつて龍攘虎搏の慘劇を演じて居る方々も半夜夢まどかならざる寢覺には、さぞや投げやりし藥のあまりに利きすぎたるに自らおどろきその罪の輕からぬを想ふ時があるだらう。その衷心の苦しみは恐らく道心の光消えやらぬ宗教者に勝るとも劣るまい。たゞ衆愚の惰性あまりに強き爲め狂瀾を既倒に反へす由もなく、自ら欺きてさきの見えすぎた主戰論にひきずられゆくあはれさよ、吾人は少くとも宗教者だけでも時勢の及馬に乘ることを止めさせたいものと思ふ。

（大正七年八月十三日）

いて來る。

□日曜日禮拜の始めか終りには、會衆一同起立して歌ふ國歌を『右の頰を打たれたら左の頰を出せ』といふ在來の說敎とは取組がおかしいからと今差し止めなどしたものならその坊さんはその地位が危い。だから嫌や〳〵ながら檀徒に引きずられて行く坊さんは實に可愛相なもの。

□二十世紀の十字軍＝群衆に引きずられて行く坊さんばかりかと思ふと、群衆に戰爭熱を煽りたてる山法師が少なくない。其人達は今回の戰爭の慘禍の原因を獨帝及び獨逸國民の野心に歸してしまふて、獨帝と人民とは基督敎の不俱戴天の仇敵であると說いて、今回の戰爭は取りも直さず中世紀の十字軍の二の舞だと名づけて居る。カイゼルがマホメットにどれだけ似て居り、獨逸國民がサラセン人にどれだけ似て居るかは別問題として、國際的經濟的問題の紛糾した原因から起つて居る現代の戰爭を、中世紀の宗敎熱で片附けてしまふとしても時勢が違ふ。時勢の推移と共に人心を新にする方法も新に講ぜねばならぬ。

或人はいふこの愛國心皷吹を商賣にして氣受もよかつたり不景氣知らずの坊さんもあるとか。

□『目を以て目をつくのふ』＝敵愾心皷舞のつもりか人氣取りのつもりか某僧正及びその一派は盛に『目を以て目を償ふ』べきことを說き立てた。これは敵の飛行機が白晝倫敦を襲ふて無辜の婦女子を多く殺したのを激昂する民心に迎ひられる提議である。殺された子供の數だけ敵の子供を殺せといふ暴言である。否それ處でない、敵國民を一人でも多く殺すことが世界將來の進步の爲めだと盲信して居るものもあれば、未來永劫敵國人とは握手すまいと念じて居るものもある。但し如上の『目を以て目を償ふ』說に極力反對して敵はどの樣な惡辣な方法を用ゐてもこちらは飽くまで紳士的態度を持して防禦なき都市は攻擊すべからずと力說する大僧正の健在なる事も忘れてはならぬ。

□一道の光明＝群衆がどんなに戰爭熱に浮されやうと、爲政家がその熱の持續に腐心しやうとも喧嘩が人間の理想でない事は爭はれぬ事實である。國家的色彩の著しい英國々敎會でその人ありと知

ある。商業の發達が又都會の隆盛に與つて力あることは言ふまでもない。諸官省や會社や銀行などの所在地として、都會がその地方々々又は國家の中心を形づくるところから、益々增大し來つたことも見易いことである。

その原因は何にあるにしても都會が膨脹し行くことは、色々な社會問題を生ぜしめるに至つた。斯く都會が膨脹し行くことが果して善いことであるか悪いことであるかといふ問題は別として、人間社會を動かして行く樣々な力が働きかけてさうした傾向をつくりつゝあるのであるから、社會の推移し行く自然の趨勢であつて、ある程度までは其の赴くがまゝに任せておくより外仕方がないであらう。然しこの傾向は無際限に續いて行くであらうか。そして都會は益々その人口を稠密ならしめて行くであらうか。現今に於いて四五百萬の人口を有する都會は更に增加して、千萬となり二千萬となりするであらうか。こは勿論大なる疑問であつて、容易に斷定を下し得ないであらうか。現今に於けるやうに急激な程度を示して膨脹し行くものと假定しても、それは稠密の度を益々加へて行くといふよりも、横に卽ち郊外に向つて延長し行くべきものであることは明かである。

そして郊外へ向つての膨脹は、交通機關の發達し完備し行くにつれて、現今よりもずつと都會の中心地を隔つた閑靜の地に住居を構へる者が多くなつて、人家は却つて疎らに散在するやうになるに違ひない。ウエルズも文明の將來を豫想して、自働車、電車、郵便、電話などの交通機關が非常に發達し且つ低廉になり、以て田舍との聯絡が密接になり迅速になりして、田舍に於いても食料品やその他文明的家庭の日用品が都會から易容に配達されるやうになれば、どうあつても都會から離れ難い關係にある人々を除いては、皆地價や家賃の高い雜踏の都會から去つて、自然の風光に親しみ得る田舍に移つて行き、こゝに人口は都會に集中するよりも、他方に散布するやうな傾向になつて行くに違ひないと言つてゐる。(Anticipations參照)

二

さて都會生活は最もよく現代生活を代表してゐ

都會生活と田園生活

佐野袈裟美

一

近代文明に於ける都會生活には、最もよく現代生活の特徴が表はれてゐる。卽ち都會生活そのものは現代生活全體を代表してゐるのである。

現代に於いて見るが如く都會が非常なる發展と膨脹とをなし來つたのには、其處に樣々なる原因がなくてはならない。エルウッド（Charls A. Ellwood）も言つゐるやうに現今の文明都市なるものは、近世工業の生むだものであることは大體として是認してよい。然し單にそれのみが原因となつてゐるのではない。立法行政司法の中心、敎育の中心、軍事の中心等が皆都會に置かれるやうになつたのも、亦その原因でなくてはならない。

實際機械の發明と共に工場は益々大規模のものとなつて、その多くは交通の便利な都會に建設せらるゝに至つたことは何人も知るところである。そしてそれ等の多くの工場は其處で雇用する多くの勞働者を田園より勸誘的に驅り出し來つて都會に集中せしめたとは事實である。それに又一方、では大地主の專橫のもとに苦しむ多くの小作人はその壓迫より逃れ、何等かの幸運にありつかうとする心から、都會に飛び出し來つて勞働口を搜すやうになつたことも言ふまでもない。斯くして田園は益々荒廢し、都會は益々膨脹したのである。近代に於ける普通敎育の普及し行くにつれ、地方人にして更に高等の敎育を受ける爲めに都會に集り來る者の益々多くなつたことも確かである。そしてそれ等の學校を卒業した者は、多く都會で職業を求めて居住するやうになつた。それに益々感覺的になつて行く近代人が、田舍の平凡な單調な生活に倦いて、刺戟の多い、物質的な快樂を容易に得られる都會に憧れるに至つたことも明らかで

ぼして、人々をして神經衰弱に陷らしめる。その外健康を害するあらゆる原因が都會生活に存することは一々指摘するまでもない。

都會生活にあつては人と人との接觸が頻繁であるから、人間を理解する機會に多く遭遇する譯である。てあるから、都會人はある程度まで直覺的に人を理解する點に於いて田舍者よりは優れてゐることは確かである。そして都會人は人間に關する多くの知識を持つてゐて、それを利用することになか〳〵抜け目がない。實際多くの都會人は、いつも相手を利用しようといふ打算的な考へで人に接するか、でなければ極く冷淡な表面的な關係に於いて接してゐるより外しないので、人と人との間に深い愛とか友情とかいふ關係は成り立ち難い。されば人と人との接觸より互に人格を啓發し合ふといふやうなことは全く望むべくもない。自分の利益を計る爲めには人を陷れるものも平氣である。自分に何か不利なことが持ちかゝつて來さうになれば、十年の交りも一朝に棄て去つて顧みないといふ有樣である。人と人とは單なる利害關係によつて近づきもし離れもする。斯くして色々な人々とたゞ表面的に接觸してゐるうちに、自分の個性を全く沒却してしまふのが普通である。都會人が淺薄であり皮相であつて、しつかりした獨自の個性を持つてゐる者の尠いのは確かに周圍の影響によつてゞある。

三

然し都會は多くの俗物を生み出すと共に、また優れた天才をも多く生み出す力をもつてゐるものであることを見逃してはならない。たゞ卓越した個性を持つてゐる者のみは、都會に於ける樣々なる經驗と機會とによつて、益々自己の人格を伸長させ、生活内容を豐富にさせ、うちに持つてゐる才能を十分に發揮させることが出來るのである。人口の割合上よりして都會が田舍よりも多くの天才を出み出してゐることは、ウォードが「應用社會學」の第九章に於いて、フランスのオーダン（Odin）の研究を重に典據にして論じてゐるのを見るならば明らかである。

都會ほど貧富の懸隔の甚しいのを、あからさま

るのであるから、現代生活の長所短所は遺憾なく其處に暴露されてゐると言つてよい。文明の多くは都會を發源地として、段々地方へと傳播して行くものであれば、都會の居住者は新しい文明の恩澤に浴することも早く且つ甚大である。そして都會の居住者は日常生活上樣々なる便益を得つゝあることも亦田園の生活者よりあらゆる點に於いて優つてゐることは言ふまでもない。都會には學校、圖書館等の敎化機關の設備があるところから、人々はそれを十分に利用することの出來る特權を與へられてゐる。又複雜なる經驗は生活上の知識を豐富にさせる。生活は常に變化多くして動的であるから、平凡單調沈滯に陷ること少い。演劇、義太夫、落語、音樂會、活動寫眞、各種の展覽會などが常に行はれてゐるので、目や耳を悅ばせるものが多い。飮食の快樂も亦容易に得られる。然しこれ等の與へるものは多く物質的な感覺的な快樂であつて、其處には精神上又は敎化上の糧となるやうなものの尠いことは言ふまでもない。て、都會生活にあつては、無趣味な機械的なうんざりするやうな仕事にこき使はれて、心も身體もへと〳〵に疲れ切つた後は、物質的な安價な快樂に走つて、僅かに慰藉を得てゐるのである。

都會生活にあつては、多くの人々は樣々なる物質的な誘惑に依てその欲望を刺戟せられるので、贅澤に流れて行くことは免かれない。で、物質的な表面的な刺戟は、人々をして自己の生活に深く反省せしめる餘裕を與へしめずして、次から次へと淺薄に移つて行かしめる。さうした外部的な刺戟と誘惑との爲めに人格は分裂され勝ちになり、一貫した發展を遂げるには非常に不利な地位にゐかれてゐると言はなくてはならない。それに工場や電車やその外往來を目まぐるしく行き交ふ自働車や荷車などより起る音響や、人家の密接してゐるところから隣近所から侵入して來る騷音などが益々銳敏にデリケートになつて行く近代人の神經を痛めしめることは非常なものである。さればこれ等の刺戟は、都會生活に於ける繁劇な機械的な無趣味な仕事や生活難より來る不安動搖や不自然な性慾遂行などと共に人間の健康の上に影響を及

な奢侈や快樂の誘惑がないから、物質的な欲望の奴隷となることは尠い。又骨を削るやうな生存競爭の荒波には割り合ひにもまれずに濟む。田園に於ける仕事は、都會に於ける仕事のやうに機械的な單調な無趣味なものではなくして、變化もあり、相當の趣味もありして愛と悦びとをもつて働くことが出來る。人と人との關係は濃厚であつて、情味が深い。自然との絶えざる接觸は、心の上にも身體の上にも、よい影響を與へつゝあることは言ふまでもない。醇朴な單純な生活を樂しみ、その中に平安な自適な生活を見出さうとする者にとつては、田園こそその行くべきところである。

都會にあつて劇しい生存の鬪ひに於いて心の傷ついた者は田園へ赴かなくてはならない。都會の不自然な生活の中にあつて、健康を害ねた者も亦田園へ赴かなくてはならない。人の世に於いて敗れた者も亦田園へ逃れなくてはならない。田園は傷ついた者弱い者敗れた者に慰めを與へてくれる。衰へた氣力を恢復させてくれる。其處には大なる力がある。

トルストイが田園の勞働生活の中にこそ眞實な自由な健全な生活があるとしたのには、確かに深い眞理のあることが認められる。勿論吾々はトルストイと一緒になつて現代の都會文明を呪ひ、凡ての人が田園の生活に赴かなくてはならないなどと言はうと欲する者ではない。然し都會生活の中に眞實の生活を見失つて了つた者は、一たび田園に赴いて、靜かに反省し、以て自分の本當の道を求めなくてはならないのである。田園に赴かないまでも、なるべく暇を求めて、自然に接觸するやうにする必要がある。そして本當に自分の生活を反省して見なくてはならない。一日に一時間でも二時間でも、人から全く煩はされない自分の時間をつくつて、靜かに自分の生活を反省して見るといふことが、人間にとつて絶對に必要である。盲目的に無自覺的に生活の波の中に揉れ漂はされ押し流されてゐるのであつたならば、一生眞實な生活が營まれるものではない。先づあたりに渦卷く生活の流れの外に立つて、全體を大觀し、以て人生の眞の目的及び理想を攝まなくてはならない。徒

に示してゐるところはない。美服に包まれて、自働車で意氣揚々と大道を疾驅して行く傍には、垢染みたぼろ〳〵の着物を着て、のそり〳〵と歩いてゐる者がある。實にその對照の餘りに極端なのに驚かずにはゐれないであらう。高臺の見晴しのいゝ廣い場所を占領して、立派な邸宅を構へ、家の中には高價な骨董品を竝べ立てゝ、遊惰な日を送つてゐる者があるかと思へば、一方には生活難の爲めにどうすることも出來なくして自殺するより外ないやうな者があるのである。都會の貧民窟に於けるやうな悲慘なる狀態は到底田舍に於いて見られるものではない。田舍にも貧乏人がありはするが、都會の貧民のやうに食ふや食はずにゐるやうなことはない。田舍にあつては、若し食べるものがなければ、食べる物位は與へられ、着る物がなければ着物位は誰かが與へてくれる。全然の窮乏に陷つて死ぬより外どうすることも出來ないやうな狀態に追ひやられることは滅多にあるものではない。はたの人が見殺しにして平氣でゐるやうな薄情なことは決してしないであらう。田舍は何と言つても生活にゆつとりとしたところのあることは事實である。

ロンブローゾーの「犯罪、其原因及び救治法」(Crime: its Causes and Remedies)を見れば、イギリスを除く外の文明諸國に於いて、年々犯罪者と發狂者の數が、人口增加の割合以上に增加しつゝあるさうである。そしてこの犯罪者や發狂者の增加率が都會に於いて最も高いことは言ふまでもない。都會にあつては、毎日殺人、强盜、窃盜、詐欺、萬引などのあらゆる種類の犯罪が行はれてゐる。斯く犯罪者を多く生ぜしめたり、發狂者を多く出したりするのは、都會そのものに多くの缺陷のあることを表示してゐるものである。また不良少年少女の多いことを見ても、如何に都會が惡い感化を子供の上に及ぼしてゐるかが分る。

四

田園の生活にはゆつたりした落着きがある。都會生活に於けるやうな生活の不安は少い。人は大自然の胸に身を投げかけてゐるやうな安らかな心持て生きることが出來る。都會生活に於けるやう

んな境遇のもとにおかれやうと、その境遇に壓迫されて了ふやうなことなく、その中に美と悦びと幸福とを探し出して、王者の如く自分をしつかりと保つて進んで行くに違ひない。

美や幸福は到る處にあるのに、それを感得することの出來ない人は最も哀れな人である。金儲けの爲めにのみ齷齪としてゐるうちに魂を石のやうに冷たく固くして了つた者は、眞の美や幸福を感ずることが出來なくして、最も貧しい心の生活を送らなければならない。一生算盤から目を離すことが出來ないでゐるやうな人々の生活は、考へて見るだけでもぞつとするではないか。それ等の人々は、旅をしても自然の美しさをも知らず、また人と交つても、愛の微妙なる美しい働きをも知らずして、たゞ利己的な欲望を滿足させる爲めに、幾多の人々を苦しましめ泣かしめたことより外には何一つ一生を色どり輝やかしてゐるやうな記憶は持たなくして墓場へ行かなくてはならないであらう。

工場や會社やその外金儲けの地へ急ぐ人にしても、しばし足を緩めて、ほがらかに輝く朝の光を見、樂しさうに囀つてゐる屋根の上の雀の聲を聞くがよいではないか。人性は異常な出來事の中にあるのではない。些々たる日常事の中にこうあるのである。この些々たる日常事に心をとめずして、大なる幸運にでつくはさうとか、大金儲けをしようとか、大なる名聲を博しようとかいふやうなことにのみ心を勞してゐる人は、人生の大半を空しく流し去つてゐるのである。日常吾々が遭遇する些細なことの中に美や悦びを求めるやうにしなくてはならない。

吾々の成功の日や金を攫んだ日にのみ幸福が吾々にやつて來るのではない。その日〳〵の生活の中に幸福を創造して行くところに本當に人生に生きる人の祕訣はあるのである。吾々は吾々の仕事の爲めに、努力し、奮闘し、時には心を惱まし氣を腐らし絶望もするが、また新しい希望を湧かせ光明を見出して行くその過程の中に本當の幸福な生活はあるのである。成るの日が全ての意義の生ずる日ではない。その日〳〵の充實した生活の中にこそ本當の意義はあるのである。いつも生々し

らに齷齪と働いてゐる時間を割いて、自然と交感し、沈思の中に生の本當の意義を覺るやうにしなくてはならない。

機械的な無趣味な一日の仕事に疲れ果てゝ、工場から會社から商店から銀行から官省から自分の家へ歸つて行くとき、街の遠ひ彼方に靜かに沈んて行く眞赤に燃えてゐる大きな太陽を眺めたならば、その美にうたれて誰か無限の喜悅に胸を躍らせない者があらう。そして今はすべての束縛から解放せられた自由の身であることをどんなに懷かしく思ふてあらう。その中に一日の勞苦をも屹度忘れるに足るものがあるに違ひない。新しい氣力は甦つて來るに違ひない。この大自然の瞥見の中には、俗惡な物質的な快樂による忘却の數時間よりも、遙かに多く心と氣力とを養ひ且つ新たにするものがある。

五

都會生活にも田園生活にも各々長所短所がある、長所は飽く迄も利用し又發揮しなくてはならないし、短所は補足して行かなくてはならない。そしてそれ〳〵の生活を完全にするにある。吾々の生活をして豐富な、充實した、生々した悅びに輝くものであらしめる爲めに、吾々はあらゆるものから美を感得するやうにと、吾々の心を養ふことが肝要である。美は到る處にある。都會にも田園にもある。感受性の銳敏な心さへ持つてゐるならば、電車の中にも、千差萬別の人の顏にも人の性格にも、街の中にも、雨の日にも、雪の夜にも、泥濘の中にも、白く日の照る道にも、夏の朝にも、秋の夕にも、森の中にも、芝草の上にも、河にも、海にも、山にも、雜踏の中にも、靜寂の中にも、都會の建築にも、工場の中にも、機械の轟きにも、水の音にも、暴風雨の中にも、晴れ渡つた蒼空にも、煙突から出る煙にも——其處に何等かの美を見出し得るに違ひない。そんな人の生活經驗は、年と共に益々廣く深くなつて行く。何からでも生命の糧を拾ひ上げて、以て限りなくうちの心を豐かにして行く。魂は渴ける如くに、觸れて行くあらゆる事物から受け取る印象を汲ひ込まうとする。吾々の心さへ力强くうちに働いてゐるならば、ど

引かれて居るのである。此が卽ち愛情であるが、しかし、たゞ愛情は、たゞ引かれて居るのみの情に止まらない。必ずや愛せられたもの、自らの愛するものゝ爲めに、何かを希望し、何かを爲さんとする動作を生じ來るものである。人の情は、たゞ情て終る可きでないが、愛情は格別に、さうてある。何かを愛する以上、其のものの爲めに何かを欲求し、何かを爲さんとする。ツマリ愛は情プラス意であつて、情と意と素より離れて居らぬ。親が子を愛するには、親の心が、子に引かれて居るのみならず、子の爲めに、何かを希望し欲求し、何かを爲さずには居らぬ。たゞ何となく其のものに心を引かるゝのみにて、何も欲求せず、何も爲さぬ心は愛情の未だ至らざるもの、未だ以て愛情と目す可らざるものである。親は子を愛す。隨て親は子の爲めに何かを爲すのである。少くとも爲さんと欲するのであるが、子の爲め善かれかしと祈るのである。子の爲に何を爲さんとも欲せず、何等の行動をも執らず、甚だしきは、子の爲め善かれかしとも祈らざる親は、其の子に對して眞の愛情あるものでない。苟も愛すると云ふ以上、愛する情が中心と成り、根本と成りて而して希望か欲求かが生じ來らねばならず、普通の場合何等かの動作、行爲が起るものである。此の事や男の女に對する間に於ても、品物に對する愛に於ても同樣てあると惟ふ。

予が單に愛と云ふ今の場合には、愛情を中心とし、根本として起り來る心の動作、行動を含めて云ふのであるが、斯の如きものとしての愛は、たゞ受動的に心を對象たる何かに引かれるのみでなく、其の對象に向つて自發的に動くものである。例へば金錢を愛すると云ふ場合、卽ち愛の對象が金錢に在る場合には、金錢に心を引かるゝのみでなく。金錢を得んと欲し、得んと企つるが普通である。金錢に心を奪はれるのみでなく金錢を更に得んと欲するのであり、そが爲めに努力を惜まぬのである。金錢に對する愛情は、單に金錢に心を引かるゝのみでない。之と同じく、凡そ愛は其のもの其の事に心を引き付けらるゝのみでなく、卽ち受動的の心が其に引かるゝのみでなく、何かの自發的

て彈力ある精神を保つて、常に新しい光景を開拓しつゝ、しつかりした歩みをつゞけて行かなくてはならない。

眞に生きることを知つてゐる人は、何處に在るにしても、その中から最善なものを攫み取らうとするであらう。どんな境遇も決して彼に取つては無意義ではない。境遇を開拓して自分のものとし、自分の世界を造り出すに違ひない。都會生活の中にあらうと、田園生活の中にあらうと彼にとつて變りはないであらう。

愛と幸福

桑田常藏

一

愛と幸福と題して予の述べんと欲する所は、愛すてふ心の情態動作と幸福の關係に就き、精神修養談として聊か所見を陳べんとするに外ならぬのである。

愛するてふ事は如何なる心の情態動作であらふか、其の對象の男たり、女たり、子たり、物品たると否とに拘らず、心が其のもの或は其の事に引かれ、其のもの、其の事の爲めに何かを希望し、何かを爲さんとする心の動作である。愛は、たゞ愛情かと云ふに、たゞ愛情ではないが、しかし愛情、愛する感情が中心である。愛情が中心となつて居る動作でなくば、愛の動作或は行爲とは云へぬのである。而して其の愛情とは、如何なる情なりやと云はゞ、前に言へる如く、其のもの、其の事に心が引きつけられて居る情である。男が女を愛すると云ふには、女に對して男の心が引付けられて居らねばならぬ。忘れんとするも忘れ能はぬ程、女に引かれて居るのである。親の子を愛するも亦然りで、親として子を愛する以上、親の心は子に

に、人が自己に就き知り得るや否や、自然に起る所の情であつて、卽ち與へられたるものである。而して此の與へられた自己を愛する情は、人が自らを愛する動作、自發的に動くに從つて增々強く成り、發展するのである。自然に起れる愛情を中心とし、基本として、之に人爲を加ふる事に於て愛其者が發展し成長するのである而して幸福なるものは自ら此間に生れ來るのである。

此く云へば、論ずる者ありて言ふであらふ。愛は却て人をして苦ましむるものである。而も人が自愛を重んずるから種々なる不道德、罪惡にも陷るのである。寧ろ幸福は第一に自愛心を始め一切の愛心を斷絕するに於て生れ來るのである。愛は執着である、而して執着は煩惱の本であると。予は斯の如き思想の誤れる事を先づ論明せねばなるまい。而して予は之を爲すに、愛と道德の關係、並に苦樂の關係を檢し、其の誤れるを示すを可なりと惟ふのである。

第一に明にす可きは愛は道德上、正しきか邪なるかに在る。而して玆に自愛を愛の代表として、自愛其ものゝ正邪を辯明しやうと惟ふ。人が自己を愛すると云ふ事は正か不正か、之を決するには先づ人が自己に對して抱く自愛の情は不自然か自然か、合理か、不合理かを知らねばならぬ。然るに前にも云へる如く愛情は自然に與へられたるものであつて、人は受動的に愛情を自己に對しても存して居るのである。然らば之を不自然とも不合理とも云ふ可きでない。人の性情の自然に然る所であつて、此の自然的の性情其ものを全然無視して合理、不合理を云ふ合さでない事は無論である。人が自己に就き考へ來る時、自己に一種の愛情を抱き來るは自然であつて且當然の事である。當然は卽ち合理でないか。しかし自愛を正しと爲し、合理と爲すは單り自己愛情を正しとし合理とするの謂ではない、自己の愛情に基きて自發的に自己の爲にする動作をも正しとし合理とせねばならぬ。而も一切自らを愛する行動、自らの爲めにする動作は皆な正なり、合理なりと云ひ得べきであらふか。予は信ず。予は確に思惟す。自己を愛する行動、自らの爲にする動作は、大體に於て正なり合

動作を爲すのである。しかし愛情、卽ち愛の中心たり根本たる愛情は、本來受動的であるを忘れてはならぬ。愛せんと欲して愛情が起るのではない。愛情が生じて愛せんと欲するのである。親の子を愛するも、其の愛情や受動的である、男の女か愛し、女の男を愛するも亦然りである。而して受動的に愛情が生ずると云ふ事は、愛情の與へられたものなる事を示すのである。あれば愛情は人の心の所生所產であるよりは自然の所生所產で、換言すれば天の人に與ふる所と云ふ可きである。自然と云ひ、天と云ふも、予は語の異るのみと思ふのであつて、兎に角く人間ならざる宇宙的精神的實在の人に與ふる所なのである。人は斯の天より與へられたる愛情を中心とし、根本とし、之を修養發展せしむる事に於て幸福となるのである。根本の愛は愛情で、此は天與だが、之に人の心の動作行動が加はる事に於て、愛情が發展し伸長し、受動的の情と自發的の動作とが相須つて愛其のものが、增々人の幸福を增進するのであると予は惟ふのである。予は其の然る所以を左に論じて見たいと思ふのである。

二

人には自らを愛する心がある。されば愛の對象には自己を含んで居るのみでなく、自愛心は甚だ強きものである、而して自愛の中心は矢張り自己に對する愛情である。人の心は自己の爲に第一に引かれて居るとも云つてよい位、自愛の情は強いのである、しかし予は必ずしも自愛の情が最も強いと云ふのではない。何となれば親の爲に自己を棄てゝ顧みざる孝子、夫の爲に自己を殺して悔ひさる貞婦、國家の爲めに身を棄てゝ快なりと爲す忠臣、救世濟民の爲に一身一家の總てを犧牲として苦とせざる志士仁人も存するのであつて、人は必ずしも最も自己を愛するものだとは云ふ可きでないのである。さりながら一般普通の世態人情よりすれば自愛の情自愛の行動が第一位に居るではあるまいか、兎に角自愛は一の強き愛であつて、自己を愛する愛情は甚だ強きものであると思ふのである。さて此の自己の愛情は、如何にして起つたか、人、自ら作成し、創造したのであるかと云ふ

己の眞の利益に就て正しき知見を有し能はぬのであり、そこから自己を愛する所以の道を誤るのであると予は惟ふのである。愛情も盲目的愛情は危險であつて、自己に對する愛情も、單に盲目的に、無思慮に行動を生んではならぬ。飽く迄も自己に對し愛情を抱くのは善いのであるが、又隨て自己の爲めにせんとて何かを希望し、欲求し、何かを爲さんとするは不正ではないが、たゞ自己の愛情を以て、自己の爲になると思ふ事さへ爲さんと欲し又は爲しさへすれば善いとは云へぬのである。自己を愛する所以に於て誤らざるやう先づ自己の何たるやを根本的に知つて居らねばならぬのである。自己の何たるやを正しく知つて始て正しく自己を愛する事が出來るのである。人が自愛より不正不義に陷り、自愛其ものが不正不義なるが如く想ふに至り、論者の説の如く自己を愛するは却て不道德の如く見ゆるは、誤謬が有るから眞理がない、邪見が有るから正見がないと云ふと同じく本末を顚視するものである。正が有るから、不正が知れるのであり、合理があるから、不合理も分るもの、正しく愛する道が有るから、或は眞正の自愛が有るから不正の自愛が有るのである。試に思へ正の何たるを知らずして如何に不正を知る事が出來るか。ほん物が有り、ほん物を知つて居つてこそにせ物を知る事が出來るでないか。眞物が無いならば僞物は生ぜぬのである。人が自己に對して愛情を有する事は自然であつて而も眞である。愛情としては眞であり正であるが、自發的に實際に自己を愛する所以に至て人が曲るのである、誤るのである。其の曲る事、誤る事の爲に、大體に於て又は本質に於て自愛の行動を不正より不道德なりとは、斷じて云ふ可きでない。

次に愛と苦樂の關係に就きて辯ぜんか、愛は愛情としても、行動(愛情を含める)としても本來、快感を含んで居る、愛する事は苦痛でない。愛せぬ事が却て苦痛である。自然の性情の滿足は快であり、樂である、人が自らを愛するに於て決して不快や苦痛に感じない。しかし愛が目的を達せざる時、障害を蒙る時、不快や苦痛が起る。愛其のもの本質として決して苦を含まぬのみならず、愛情

理なり而も人は不正不義に陷り易く誤り易く現に誤りつゝ罪惡の淵に沈める者も尠からずと、換言詳語すれば、自らを愛するは、自らの爲に計るは、自己愛情の自然に基くものにして、自己愛情の正しきと共に正しと云はねばならぬ。しかし之が爲めに一個々々の行動、凡ての自らの爲にする自愛的行動は正しとは云ふ可らず。何となれば自己の爲めを計るは可なれども正しけれども、人は自己の爲めにならざる事を自己の爲になると誤解して錯れる事尠からざればなり。されば一口に言へば自己を愛する情のみならず、自己の愛情を本として何か自己の爲めに試みる行動と雖も其の精神、其意志に於ては正しと云ふ可しである。故に自己を愛する行動は正しと云ふ可きである、而も其行動の正しき行動にして不正ならざるがためには、眞に自らの爲めに或る行動でなければならぬのである。自己の爲めに善かれかしと意ふて爲したる事にせよ、其の實、自己の爲めにならぬ行動は正しとは云へぬのである。人が自己を愛するの情を有し而して自己を愛するは、自己の爲にせんとするは正しけれとも、人は皆な正しく愛するとは云へぬのである。人、本來は自ら愛す可きものゝ故に自己に對する愛情が自然に生るゝのであり、實際に自ら愛する動作を、自發的に爲すのであり、此の自發的に自己の爲にする動作に含まれたる、其の自己の爲にせんとの精神目的は正しいのであるが、其の動作、其の行爲、そのものは必ずしも正しきを得ないのである。而して正しきを得ない動作、行動が不道德であり、不正であるのである。不正不義、罪惡は畢竟するに愛の誤れる道を取るより起るのである。人が自らを愛するより不正不義を爲すのではない。誤りて愛するより罪惡に陷るのである。而も愛の道を誤る事、自己の爲めにせんとして、實は自己の不爲めを生ずるが如き誤錯は如何にして起るのであるか。斯は一つの大問題であるが、必ずしも難問題ではない。予は惟ふ、人が自ら愛する所以に於て誤るは、自らを識る事が淺いからであると。換言すれば自己に就ての知識が、至て淺劣で、自己の何たるやが諒解されて居ないから、如何にすれば自己の爲になるか、自

れども、自己の思ひ浮べる、あらゆる物は自己に關係あるものゝ自己は、此のあらゆる物に關係を有して居るとせねばならぬ。されば人が自己に關係ある總てを愛すると云ふは、單に總ての者を愛すると云ふも同じき事であつて、天地、一切の物を愛すると云ふ事に外ならぬのである。

日月や地球や、地上の萬物や、自己に關係無きものは一物もないのである。自らを愛の對象と人は爲し得るのみならず、現實に對象として自己を愛して居るのであるが、此の事の正しきと同時に、自己に關係ある總てを愛の對象として愛す可きである。草木、山川、虫魚の類と雖も自己の愛を向く可きである。況んや同じく人類なるに於てをやである。四海は兄弟である、萬人は同胞である。忌む可きもの惡む可き物は人としても物としても有る可きでない。素より關係には淺深大小の別がある。愛の實際の作用、動作にも區別ある可きである。而も總てに對して關係あるを知ると共に愛は總てに及ぶ可きである。總てを同樣に愛せよと云ふのではないが、總てを愛す可きであるのだ。

人にして自己を對象として愛すべきなれば、自己に關係ある總てのものを愛すべきは當然であり、之を愛するは自然、人の性情の自然である。自己の關係の其ものに存するを知らざる間は愛情も起るまいけれども、一たび其ものゝ自己に關係あるを知らば、其ものを愛するは自然である、又之を不正なりとは云へぬのである。單に自己のみを愛するを知つて同胞を愛するを知らず、或は天地萬有に對して何等の愛情を存せざるものは、同胞が、又天地萬有が、自己と密接なる關係有るを知らぬからである。一切のものが自己に關係を有し居り、自己が一切のものに關係して居るを知らば、此知識は自然に一切のものに對する愛情を生むのである。而して自己に對しても愛なく、何者に對して愛なきもの程不幸な者はないのである。之に反して一切を愛する事の出來る者程幸福なものはないのである。蓋し幸福なるものは心の滿足であつて滿足は必ずや安心や快感を含んで居る。人にして見る所のもの聞く所のもの、考ふる所のもの、想ふ所のものに對し愛を以て向ふ事が出來れば、心

が有り、愛するか爲に人は苦まねばならぬのではない。矢張り愛する所以を誤るからである。親が子を愛するに於て、子に對する愛情は心苦しきものでない。男女の愛も、何の愛も、愛の熾な程樂しきものである。しかし一朝、愛する者を失ふか、愛情を有しながらも又進んで自ら子の爲か、何ものゝ爲めか企てる事が意の如くならぬ時、卽ち愛に障害を來たした時に苦痛が生れるのであるが、而も愛は必ず障害を受けるもの苦痛を招くものとは云へぬ。眞正の愛は障害に依て益々增進するものである。のみならず愛が愛として存在する間、人の心は常に快感、喜樂に充たさるゝのである。親が子の爲に、男が女の爲めに、人、皆なが、何ものかの爲に苦しみ惱むは、愛の爲めには有らずして眞正なる愛を充分に有せぬ者である。愛其者の本質は決して苦でなく却て樂であると云はねばならぬではないか。

予は粗ながらも斯くして愛と道德、苦樂との關係を辯明し得たと思ふのであるが、論者の說、卽ち愛を以て人を苦むるもの、罪惡不道德の必然の原因であると見るが如き說の甚だ誤れる事が明であるのみならず、愛と幸福の關係も、既に多少察知し得られると思ふのであるが尙ほ進んで之を論じて見たいと惟ふ。

三

自己の愛が不正ではない事は、既に云へる如くであるが、しかも、自己の愛のみが正ではない。人は自己に關係ある總てを愛するに至て、其の愛情や最も發展伸長したものと成り、幸福も最も大なるものと成るのである。

愛の對象となるものは、素より自己に關係があらねばならぬ、然るに自己は、自己が考へ得る總てに關係を有して居るのであり、考へ得ぬものは自己に取りては無關係である。人間の見聞し得る所、思考し得る所、皆な人なる自己に關係を有して居るのであるから、自己に關係あるものとして知られたるものは。自己が少くとも存在せりとして知れる總てのものである。自己の知らぬもの、關係ありとして知らぬ者が、何程有るか分らぬけ

は他と離れて居らぬ、他も我と離れて居らぬのである。他人は實は他人でない、無關係なる他人でない。米國人も支那人も、全く他人ではない。而して互に共通の關係を有つて居る、今、現に敵國とせる獨逸と雖も決して憎むべきではない寧ろ憐むべきである。人は人と爭ひ國は國と鬪ふべきではない。其の爭ひ其の鬪ふは互に愛する事に於て互に益するを知らぬからである。否眞に自ら愛する所以を知らぬからである。他人を愛するも他國を愛するも、自己に無關係なる者を愛するのでない。自己に關係ある汎てを愛するのであつて、廣く言へば、自己を愛するのである。人は孤立しては存在しない國も他に依存せずには居られない。何かに於て他の助を受けて居るのである。自己丈愛すれば足る、自國だけ愛すれば足ると思ふは、自己を其れ丈け狹小に觀るのである。自己を狹小に見れば見る程、自己の眼界が狹小なのであるが、其の眼界が狹小なる丈け自己の愛の對象が狹小なのである。而して愛の對象が狹小なれば、決して常に安心し常に喜樂なる幸福の情態に在る事は出來ぬのである。而して此點は尙ほ少しく說明を要するのであらふ。

如何に極端なる自己主義の者と雖も、自己の事のみ終日、思ふて居る譯に行かぬのである。見るにつけ聞くにつけ何かを感じ何かを考へずに居られない。而も其の感ずる事、其考ふる事が皆な自他に關係を有つて居るのである。自己丈け愛するを知つて他を愛するを知らぬ者は、向ひ來る人、物、事に對して不平不滿なきを得ぬのである。少くとも不如意の事が多いであらう。不如意の事多ければ不安と苦痛は免れないのである。自己のみ愛する者は他人を愛する事が出來ない。他人の吉事を歡ぶ事が出來ないと共に他人の凶事に同情する事も出來ない。家族の內にすら共に樂む事が出來ない。目に美しき山川草木を見ても、自己の利害にのみ專念なるものには天地の美を味ふ事も出來ない。加ふるに狹小なる自愛心は每に何かの障害を受けずには居られない、而して障害を受くる愛は苦痛を生むのである。されば自己のみを對象とする利己主義の愛は決して幸福を產むものでな

は常に安く而も喜樂に充され得るのである。全く何者も愛し能はぬもの、自己すらも愛し能はぬものは、安心もなく喜樂もないのであつて固より幸福であり得べきでない。もし他を、自己の外の一切のものを愛せざるも、自己のみは絶對に愛する事が出來、何等の障害を受けぬ事が出來れば、安心に喜樂に充さる、事が出來るはづであるけれども、自己其ものが、他一切のものに關係を存して居るのであつて、自己は孤立獨存の生物でないから、他と離れ又他に離して自己のみを愛する事は不可能である。少くとも自己に對する絶對の愛は、他の障害を受けねばならぬ。而も酷たらしき障害を受けねばならぬ。果して障害を受くるとなれば忽にして不安心と苦痛は生れ來るのである。愛其ものは苦痛でもなければ不安ではないけれど、障害を受くれば却て不安苦痛の因と成るのである。されば自己の愛にして單に自己のみに止る間は決して其人を幸福ならしむる事は不可能である。本來各種の關係を、他一切に有する者が、他一切を離れて自己のみを愛せんとするは不自然であつて且不合理である。世間の人々、此理を知らず、自己のみを愛し、或は自己の家族のみを愛し、自己の財產名譽のみを愛して而して幸福ならんと欲するも常に不安と苦痛を脫せざるが如き情態に在るは誠に惜むべき至であるとせねばならぬ。

四

實に大切なるは博愛である。而して博愛なるものは、汎愛であつて、汎てを愛するは、汎ての幸福を自己の欲求の對象とするの謂である。子を愛する親は、子の幸福を以て、親なる自己の幸福と爲すのであるが實に子の幸福は、子の幸福なると同時に親の幸福である。我が子の幸福、我が家の幸福、我が町、我が村、我が縣、我が國、我が世界の幸福は、我が欲求の對象即ち愛の對象と爲す事が可能であるのみでなく、實は然か爲すべきである。何となれば我は世界の人であると同時に世界は我が世界である。世界の出來事は我が見聞し我が思考し得る出來事である。我は直接間接に凡てより影響を受けるのみならず、我も影響し得るのである。四海は實に兄弟であり同胞である。我

ある。何となれば神は汎てのものゝ根本である、汎てのものゝ主であるからである。神を愛するが爲めに自己を輕んずると云ふ事は、有り得べきでない。神を愛するが爲めには、神のものとして汎てを愛せねばならぬ。此は理性の要求である。理性の要求は神の要求である。なぜなれば理性は、吾が心に於ける神だからである。

神と云ふ語を好まぬ人は佛と云ふも可なりだ。神や佛の名を好まぬなれば、宇宙萬有の究竟實在と云ふも絕對の理性と云ふも亦可なりだ。名稱は一二に限らぬ。大切なるは、我ならぬ宇宙的大心靈、人間以上であつて有心識なる天地萬有の根元にして統一者たるものゝ信仰と之に對する愛である。素より予が茲に云ふ信仰は知を含む。知卽ち信である。知なくは愛も生じない。果して神を知り、神を信ずるか、神に對する愛は必ず生じ來るのである。而も愛は成長發展を要する。幾分にても神を愛する以上、其れ丈け人は幸福を享有するのであるけれども、人が發動的に益々神を愛する事に於て、神に對する愛が伸長發展すると同時に人の幸福も伸長發展するのである。

然り而して神に對する愛は人をして自己を正しく愛せしめ、他人をも世界をも山川草木をも金銀をも、如何なる物品をも正しく愛せしむるのである。否少くとも人は斯の如く汎ての愛を神に對する愛の下に置かねばならぬ。人なるもの第一に自己を神のものとし愛し、自己に關係ある汎てを神の爲めに、從つて神の命のまゝ愛するに於て人は始めて正しく自己を愛する事が出來るのであり、自己の受け得べき充分なる幸福を有し得るのである。而も神の命に從ふは、我が衷に宿れる理性の命に從ふの謂であつて神を愛する者は先づ理性の命是れ神命なるを知つて之に服從し行動するを怠つてはならぬ。（了）

い。之に反して自己の愛の及ぶ所が、自己の關係する總てに汎く及ぶ者には見聞する所、遭逢する所、皆愛の對象と成り、一切を愛し一切を歡ぶ事を爲し得る事と成る。然り悲む者には同情を以て之を慰むる心を抱き、苦しめる者は之を助けんと欲す。斯かる心、斯かる欲求は愛情の發動であつて決して心に不安や苦痛を生むものでない。其幸福や至大至高であると云はねばならぬ。誠に人能く汎く愛する事が出來れば、何を見、何を聞くも樂しむ外はない。斯く云ては苦める者、惱める者を見て樂しむ事が出來るかと難詰する人があらふが、予の云ふ博愛汎愛は、單り人のみを愛するのでない、天地萬有を愛するのであるから、實は天地萬有の究極的實在たる神に對する愛を根底と爲して居るのである。故に神を離れて自己も見ず、人も見ぬのであるから、苦しめる人、悲める者を見るも而して同情を寄せて助けんと欲するも毫も不安を感ぜぬのである。苦しむ者には神の愛を注きて慰め、惱める者をも惱を忘れしめ脫せしめんと努むるのであるが、共に苦しみ惱むを要せぬのである。彼と苦を同ふするにあらず、腦を共にするにあらず、却て彼をして我が愛、我が樂に同化せしめんとするのである。而も神に對する愛隨て信を有して居る我であるから何の煩悶も憂愁もないのである、我には愛と幸福あるのみである。素より不安の情の生ずべきでない。

五

博愛は幸福の母である。しかし博愛の根底には神に對する愛がなからねばならぬ。神に對する愛は自己に最も關係深き實在に對する愛である。天地萬有の根底たる神は、人としての自己の根底であつて而も我は神の内に住みて居るのである。而して我は實に神のものであるが、神は又我がもの、我が神である。我が神を愛するは我に最も關係深きものである。神は絕對に信賴すべきもので又絕對に愛すべきものである。自己よりも何よりも愛すべきは神である。而も神を愛する事は、自己も何ものも神のものとして愛する事を含んで居る。神を愛する事は他を愛する事を禁ずるものでない。却て神を愛する以上、汎てを愛せねばならぬので

さうして今一つ私の結論を前取りして云つて見ると、哲學でも、倫理でも、宗教でも之は皆人間或は人間以上の精神的生活をなす所の、絶體の精神から出たものであり、働きである、それで倫理でも、哲學でも、藝術でもさう云ふ精神生活は、それを總括して居る所の絶體的精神から出て居るものと、結論せざるを得ずと云ふのが私の考であります。

そこで第一基督教の哲學的根據と云ふのでありますから、此題で見ても、哲學と宗教との二つが含まれて居るのが分る。さうすると先づ哲學とは何ぞやと云ふ問題が起る。それから又私は宗教とは如何なるものを稱するか、と云ふ議論もしなければならぬ。卽ち第一哲學とはどんな風に考ふべきものか、又宗教が獨立して居ると云ふならば、どんな風に哲學から離れ、或は藝術からも離れて獨立して居るか、と云ふことを申上げなければならぬ。第二は宗教の獨立性に就ても云はなければならぬ。それから今一つ結論としては、一切の歸着點としての形而上學と云ふことを申さねばならぬ。卽ち宗教をも哲學をも、或は其他の精神活動全體の歸着する所のものは形而上學である。斯う云ふやうに私は考へて居るのであります。此形而上學と云ふことも、更に云ひ換へたならば、神の概念の形而上學と云ふやうに廣い意味に考へることが出來るのである。それで私は此三つの問題に就て一つづつお話して行かうと思ひます。若し私の說に御不滿足だとか、或は不明瞭な所があつたならば、御遠慮なく御批評なり攻撃なりして戴きたいと思ひます。

一、私の哲學觀

先づ私の哲學觀を短く、摘んで申上げたいと思ひます。一體哲學とはどんなものであるかと云ふことに就ては、古來いろ〳〵の立場もありますが、それを一々申上げる暇はありませぬ。故に唯だ私の考へて居ることを述べさして戴きたい。尤も私の述べる中には私の考へたこともあるし、他人の考へたこともあるけれども、一々誰が斯う云つたと云ふやうなことは復雜になるから云ふまいと思ひます。

研究

基督教の哲學的根據（上）

三並良

一、私の哲學觀　二、宗教の獨立性　三、一切の歸着點としての形面上學。

私は「基督教の哲學的根據」と云ふ題でお話することになつて居りますが、お斷りして置かなければならぬことは、私のお話が基督教と云ふ所まで進んで行くかどうか、恐らくはそこまで進むことは出來ないで、唯だ宗教と云ふ點に止まつてしまうであらうと思ひます。併し宗教と云ふ大體の點に止つて居るとしても、それから基督教のことは斯う云ふやうになるであらう、と諸君がお考へになることは充分出來ると思ふ。固より基督教のそれ〴〵の教義に就てお話することは出來ないのであるが、基督教の大體の點、神と云ふやうなことに就てはどう云ふ風に考へられるかと云ふことを推論の出來るまでは進むことが出來るであらうと思ふのであります。又私の演題から推して基督教には哲學的の根據がどうしても必要である、と云ふやうに考へられるけれども、何も最初から基督教に哲學的の基礎がなければならぬ、と云ふことを述べるつもりではない。私の結論を前取りして申すならば、私は宗教それ自身は哲學からは全く獨立して存在して居る所のものだ、と云ふ立場を有つて居るものでありまして、此講演に於てもさう云ふ立場を主張して行きたいと思ふのであります。併し宗教には哲學的根據が必要でないと云ふことがどうして云へるか、又宗教の獨立とは何かと云ふことを議論するには、矢張り哲學が入るのであります。

めて云ふならば、自分自身の本質は如何なるものであるか、其能力はどんなものであるか、其價値は如何、其起源は何處にあるかと云ふことを學問自身が自覺して行く學問であると云ふ意味で知識學と云つたのであります。認識學と知識學とは日本の譯語では同じやうに使つて居る場合もあるけれども、詳しく云へば幾らか變へて置いた方が宜しからうかと思ひます。

從つて哲學の中心は——矢張り結論から云ひますと、形而上學ではない、知識學であると云ふことは、今日大多數の哲學者の考へて居る所であります。以前には學問と云ふものは、吾々の意識と離れた客觀的の世界があつて、其世界を、吾々の意識が寫すのである、模寫するのである、又模寫することが出來ると考へて居つたのであります。さうして其人間の意識の方で、寫つて來る所の眞實な客觀的な世界に適應し、評論するのが哲學であると考へて居つた。然らばどう云ふ方法で自分の意識とは全く違つた客觀的の眞實が寫るかと云ふことに就ては、いろ〳〵議論もありますけれども、兎に角其客觀的の眞理と云ふものが寫される、さうして自分が考へ出して行くやうなことは迷であると考へて居つた。それで學問と云ふものは經驗にも依らず、吾々の經驗よりももつと後ろにある、經驗よりももつと廣い、眞實の世界を發見して、さうして此實な、眞の客觀世界と、今此處に自分が持つて居る世界とを比較し、さうして自分の持つて居るものが惡いと云ふことを客觀的の眞な世界に依り照らして知らなければならぬ。さうすると吾々の經驗は詰り現象或は假現であつて、實は空なるものであると、云ふ位に考へられて居た。斯う云ふのは古い形而上學の立場であるが、こんな古い立場は疾くの昔に壞れてしまつて居る。それは哲學界には既知のことである。そんならば別な方面から形而上學を再說することは出來ないか、と云ふことになるが、それは又他の問題である。此ことに就ては尙ほ後にお話するつもりであるが、之は不可能なことではないと思ひます。古い形而學が倒れたからと云つて、新しい形而上學が出來ないと云ふことはない。

之も今日の哲學者の大多數の者にはさう思つて居ることですが、哲學の出發點は何處にあるかと云ふと、認識論にあると思ひます。昔から哲學に就てはいろ〳〵の立場が唱へられて居るけれども、今日の哲學論を進めて行くに就ては、どうしても其第一歩として認識論に基かなくてはならぬと思ひます。然らば其認識とはどんなことをするのであるかと云ふに、學問的の認識は、吾々が物を認め識ると云ふことは、一體どう云ふ條件の下に可能であるか、と云ふことを先づ考へることであります。それからもう一つは、それを認識することが出來てさうして判斷する、其判斷と云ふものが、どうして妥當性を有して居るか、どうして間違がないか、誰れにもそれを當て箝めることが出來るか、その理由も考へて見なければならぬのであります。而して此の學問的認識に就ては、私なら私には認識する所の力があれば、其認識に對して居るもの、即ち對象と云ふものがなければならぬ。然らば其對象となるものはどう云ふものであるかと云ふことも考へなければならぬ。併し又認識と云つても認識し得られるものと認識し得られないものとがあるに違ひない。其認識し得られるものと得られざるものとの境界線は何處にあるかと云ふことも考へて見なければならぬ。遡つて認識の根源は何處にあるかと云ふことも盡ねて見なければならぬ。併し又根源ばかしではなく、認識はどう云ふやうに發展して行くのであるかと云ふ問題も茲に提出されなければならぬのである。

それで學問をするのには此のやうな認識論上のいろ〳〵の問題を先づ考へてかゝらなければならぬ、之が學問の根據である、と云ふことは今日少し哲學的の考のある人は皆な知つて居るのである。ですから認識論と云ふことは又他の言葉を以て知識學と云ひます。獨逸語では認識論のことを Erkenntnistheorie と云つて居りますが、更に之れを廣くして、學問をするのには前に云つたやうな問題の研究を必要とすると云ふ意味で Wissenschaftslehre と云ふ廣義の言葉があります。之れは知識學と譯してあると思ひます。これはフイヒテーから起つたかと思ひます。即ち學問と云ふものは、約

居る。それがなかつたならば、原因とか結果とか云ふことを考へることは出來ない。例へば此家の窓から外を眺めて居ると、郵便脚夫が向ふの家の方へ這入つて行つた。すると家の下女が出て來た。さうして其手紙を受取つたと云ふ一の事實があるとしても、唯吾々に現はれて來る經驗の事實としては、郵便脚夫が行つた、下女が出て來た、又手紙を下女が受取つた。唯それだけのことである。然るに吾々はもう一つの事を考へる。それは郵便脚夫が來たから、それ故に下女が手紙を受取りに出たのであると云ふことである。これは一の原因があつて一の結果を生んだのであると云ふ原因結果の思想、範疇が吾々の意識の中になかつたならば考へることが出來ないのである。若し吾々の意識があつてそれを纏めることをしないものであつたならば、活動寫眞を見る時に、活辯が居ないやうなものである。活動寫眞に說明が出來ると云ふことは、吾々の內部にある所の經驗に依つて非常に複雜になることは出來るけれども極めて根本的の所に經驗に依らずして既にある所の範疇に依つて之を纏めて行くのであると考へなければならぬ。であるから私は學問なるものは、何をするかと云へば、意識に與へられる所の經驗の世界を取りこなす手段を吾々に與へるものであると考へる。意識を超越した對象それ自身を模寫するのが學問ではない。對象は何時も吾々の意識があつて、其意識に與へられる所のものとしての對象で、吾々の意識を除いたならば、對象は與へられないことになるのであります。吾々は此意識に與へられた、對象を記憶として有つて居る。さうして又此の對象として與へられたる所のものを、學問的にいろ〳〵作り替へて行く、斯く作り替へて概念が出來るのであると思ふ。概念とは原因とか結果とか云ふやうな考方に依つて、吾々の意識に現はれて來るものを作り替へて簡單にするのである。簡單にするのは何故であるかと云へば、複雜して居つては全體を支配することが出來ない。吾々が唯雜然たる實在に對して居つたのでは、實在を支配することが出來ない。だから實在を支配する爲に概念を作くるのである。概念を作つて行く時に、秩序

そこで私はもう一歩進んで吾々の意識と云ふものの對象は何であるかと云ふことを考へて見たい。先づ私の考を申しますと、此の對象は意識に對してのみ存在して居るものである。吾々の意識を除けば、認識の對象と云ふものも亦決して存在しないのである。さうして此對象は實際吾々が經驗し、其經驗世界の種々雜多な、豐富な、質的世界として吾々の意識の中に存在して居るのである併し吾々が日々に經驗するいろ〳〵の音であるとか、色であるとか、或は形であるとか、其他數限りのない種々雜多なものが、吾々の意識の中に這入つて來ても、それが唯雜然とバラ〳〵になつて居て、整頓されるとがなかつたならば、それは一向認識と云ふものにも何にもならぬのである。唯活動寫眞のやうに腦裡に寫るだけであつて、そこに何等の思想と云ふやうなものは出來て來ないのであります。吾々がさう云ふいろ〳〵の現象を意識の中に伸ばして行くことは、必要であらうけれども而も對象として現はれて來る所のものは、いろ々々吾々が細工をしないと、吾々の考へ、思索にはならないのである。然らば此の思考すると云ふとは、何に依つて生ずるか。之はカントなどの云つて居ることで哲學上新しいことでも何でもないが、いろ〳〵入つて來るものを吾々が纏めて行くのは、何の力に依るかと云ふと、それは吾々の精神が有するカテゴリー卽ち範疇と云ふものがあつて、此の範疇が吾々の對象として這入て來るものを、內から出迎へて、纏めるやうになるのである。此の範疇は實際から云ふと、既に對象が這入つて來るより先に我々に存在して居る。思索をするのには、向ふから來る所のもの、卽ち吾々の目なり耳なりを通じて來る所のものを、纏めて考へ得る力が備はつて居るから、思索に纏めることが出來るのである。固より這入つて來た所の經驗が、さう云ふ思索をさすのだと云ふ經驗說もあるけれども、若し既に考へると云ふ力の範疇がなかつたならば、思索は出來ないことだと思ひます。さう云ふ範疇の一例としては、原因結果と云ふことを擧げることが出來る。吾々には原因と云つたり結果と云つたりする考方が、既にものを考へる先に存在して

も云はなければなりません。

少し私の話し方が混雑して不明瞭になつたかと思ひますが、尚ほ少し之を説明して参ります。意識は其内容と相對立して居るのである。我々は意識の内容を意識の對象として有つて居るのである。だから此對象は意識に出來るのである。併し吾々には個體的の自我がある。此の個體的の自我は、吾々の主觀と對立して居るけれども、併しながら此の個體的の自我ばかりが自我であつて、それ以外には自我はないのかと云ふと、前云つたやうに茲に私と云ふものを離れた世界があるとすれば、卽ち吾々の生れない前にも世界があり、吾々の死んだ後にも世界があるとするならば、さう云ふ一切の存在を吾々の意識、吾々の主觀が總括することは出來ない。此一切の存在を總括する所の意識は之は私の前に述べた自我ではない。斯う云ふ一切の存在を總括する所の意識があるとすれば、それは私の自我ではない。此點から考へても唯我主義、獨我主義はあり得ないとするのが、當然であると同時に更に一歩を進めることが出來ると思ひます。一切の對象と對立して居る所の主觀があるとすれば、それは個體的の自我ではない、諸君が私と稱するものでもない。私が私と稱するものでもない。此主觀は諸君の意識にもある。此主觀は諸君の主觀にも跨がつて居り、私の主觀にも跨がつて居る。各自の主觀を超越した、さう云ふ主觀がなければなるまい。若し斯う云ふ超越した主觀に依つて主觀と主觀とが繋がれて居ないものであるとすれば、私の云ふことは私が勝手次第に云つて居ることであつて、それが諸君と共通である筈がない。諸君がお考へになつて正しいと云はれることが、私にも正しいと聞かれやうと云ふのは、主觀と主觀を離れた根本があるからだと思ふのである。さう云ふことを私は概念として摘んで云ふならば、「超越意識」或は「意識一般」と云ふ言葉を以て表はし得ると思ふ。

上に述べたやうな譯であるから個々の主觀や或は個々の自我に依つて認識學を立てることは出來ない。認識學では主觀としての意識は一切の對象と對立して居る。さうであるから他人の意識とか、

も亦付くのである。であるから吾々の意識の中に纏められたるものが果して眞な實在其ものであるかと云へば、直ちに眞な實在であると云ふことは出來ないと思ふ。さうすると形而上的の實在があつて、それを寫したるものを吾々が有つて居る、得て居ると云ふことも亦出來ないことになると思ふ。

さう云ふことになると、それは人間が勝手次第にそんなことを云つて自分一人の世界をこしらへて居るのではないか、と云ふ問題が生じて來るのであります。所謂獨逸語の Solipsismus 唯我主義ではないかと云ふ非難があります。佛敎にも唯心論と云ふ言葉があつて、それが吾々の謂ふ唯我主義でありませう。之は總てのものは皆な幻のやうなものである。在るものは唯我れ一人だと云ふのである。けれども一寸考へてもさう云ふことが成立たない筈である。見る所のもの、寫り來る所のものは總て我が心より生じたるものであるならば、試みに往いて電信柱に頭を打ち付けて見ると解る。固より今でも唯我主義を稱うる哲學者もあるけれども、それは實に奇妙な話であつて、さうすれば自分の出產と世界の出產とは同時だと云ふことになる。自分が生れた時と共に初めて世界があることになる。自分の生れぬ前には世界がない、自分の死んだ後にも世界がないと云ふことになる。時々世界があつたりなかつたりするとになつて奇體なことになつしまうのである。併し我と云ふものは何處に在るかと云ふと、私の意識の內容に我がある。さうすると意識の內容としての我と意識とは相對立して居る。然るに之に根據を置いて、更に一步を進て考へると、一切の對象卽ち約して云へば世界の對立する主觀はどうしても、個體的自我である筈はない。それは個體的自我以上であらなければならぬ。更に云ひ換へると世界を個體的自我の內容だとするのは無意味である。然るに個體的自我が自我と云ふべきものであつて、一切の存在を總括する意識が自我ではないから、獨自一個と云ふことは意識に就ては云ふべきことでない故に世界は自分の獨自一個が存在するが故に、存在すると云ふ唯我主義はどうしても無意義である

ものであります。

さう存へて來ると學問に客觀性があり、又一般妥當性があるのは、我々が意識の内容に秩序をつける時には、必ず個人を超越した壓迫に服從し又我々の個人性を超越する規範に從ふから生ずるのである。或はかゝる超越的のものがあると云ふのは一種の信仰であるかも知れません。併し我々はどうしても斯う云ふ規範たる範疇に依りて考へなければならぬ。そこで所謂思想の必然性があるのであります。必然的に考へなければならぬ、と云ふやうな馬鹿なことがあるものかと怒鳴り付けられれば、それ限りであるかも知れませんが、それでは哲學も何もあつたものでありませぬ。私は思索上にも超個人的壓迫に服從して行くのであります これは一種の信仰であります。さうすると哲學も信仰が必要になります。此の點から哲學の考へ方を推し廣めて行けば、宗教の信仰と同じものが出て來ると思ふのが、私の考であります。若し思索上の超個人的壓迫を信ぜなかつたならば、學問は到底成立しません。併しながら考へ方に至つては、哲學と宗教は復た違つたものを持つて居る。假へ哲學がなくとも宗教は獨立して行くことの出來るものであると思ふのであります。それに就てこれから申述べて見ます。

プロード女史の Welfare Work

小島幸治

一

Welfare Work なる言葉は英語に於ても未だ一定した用語となつてゐない。故に我が國に其の適譯の見當らぬのも無理ならぬ事である。恐らく此の言葉を冠して一冊の纏つた著述を公けにした者は、我がプロード女史に始まる。今其の概念を得

或は自分の意識とか云ふのでなく、個々の主觀を超越した主觀であつて、それを超越主觀と云つたら宜からうと思ふ。それはなぜかと云ふと、個々の主觀であつたならば、それは皆個體的のものであつて、それは私の意識の對象に過ぎない。けれども私の意識と云ふやうなことを除いた所に、超越した意識と云ふべきものがなければならぬ。超越意識は自我對象、私と諸君と云ふ自我對象でない、悉皆を超越したものでなければならぬ。さう云ふものが根本になつて吾々は認識をするのであると思ふ。若し斯う云ふものがなかつたならば認識とは實に取止めのないものである。

然るに此超個體的の主觀なるものは他の方面からも觀察することが出來るのであります。私の內に起る所の事實を心理的に觀察すると、前に郵便の例でお話したやうに單に個々の事實であり、私の主觀は單に個々事實が通過する場所であつて、此通過する事實を纏める所に規範と云ふものは一切ない。然るに規範(ノルム)はどうしても生じて來る。然らばそれはどう云ふ譯か、此ノルムはどうして生じて來るのかと云ふと、前に原因結果のことを引いてお話したやうに、それは心理的に生じて來る產物ではない。心理的の經過を斯くの如きものに形ちづくる意識の獨特な、自律的の作用があつてそれを纏めるのであると考へざるを得ない。此の作用をするものがノルムであると考へなければならぬのであります。斯う考へて來ると、一切の規範や思索はどうしても主觀から出來るものではない。それは前に云つた超越主觀——或は之を認識學的主觀とも申しますが——それから出るものだと、考へざるを得ないのであります。

心理學そのものは既に思索の產物であります。併し我々は此の思索は如何な根本から生ずるかと云ふことを考へずには居られません。私は此の根本は一切の規範と同じく認識的主觀或は Das Bewusstsein überhaupt にあると考へるのであります。斯う云ふ超越意識から見るならば、事實的のものは皆なその取り扱ふ材料に過ぎません。そして此の意識はその超越性(apriori)によつて、此の材料たる內容に學的方法と規範的價値とをつける

役する甲は資本家となつた。もう此の時には理想鄉の政治は甲の手に移つて、乙は之に容喙することが出來なくなつて了つた。理想鄉、理想鄉、あゝ其はかくの如くにして滅びたと。

社會改良は決して社會の制度を改良することにのみ着眼してはならない。理想鄉の滅亡は之を敎へるのである。改良すべき者は制度にあらずして其の下に生活する人間でなければならぬ。少くとも之に重きを措かねばならぬ。卽ち社會改良は制度改善に止まらずして必らずや人間敎化の事業に及ばねばならぬ。今日までの社會主義乃至社會政策は動もすると此のことを忘れがちであつた。少くとも其等は經濟的物質的側面に偏して、心理的精神的側面を等閑にしたやうである。されば是等の學を修めたる者には往々にして人生の五重の塔を建つるに當つて五階目四階目ばかりを眼中に置いて、肝心要の一階目に安んじてゐる勞働者をして無暴にも二階三階或ひは其の上に跳躍せしめんとするの弊が有つた。其の結果は社會てふ五重の塔の倒壞を促すのみならず、勞働者自身其の能力以上の又は少くとも之に適せざる仕事に壓服せられて、墮落して命を失ふに至るのである。

二

さればブロード女史の所謂現存の產業制度の內に於て勞働者の幸福を增進せんとするの思想は、一面に於て過去の社會改良運動の弊害を反映するものである。又從來の勞働問題研究者は、企業の營利事業たる簡單にして而も重大なる事實を忘れて、生產要素としての勞働のみを過大視して、苟も勞働者の利益のためならば、同盟罷工を以て企業家を脅迫し、最後には革命を以て國家社會を威嚇するも辭せずてふ口吻をもらすやうな事もあつた。其の弊害の及ぶ所實に寒心すべき者がある。然し是と云ふのも今までの資本主乃至企業家が、往々にして私利私慾をのみ事として、相當の對遇を勞働者に與へなかつた爲である。彼等は宜しくその利益の幾分を割いて、自ら進んで其の工場に働ける勞働者のために、種々有益なる設備を整へ又其の勞働者の向上のために必要なる指導をなすべきである。

るために女史の下した定義を見ると、「ウェルフェア・ワークとは雇主が現存の産業制度の内に於て、彼等自身の工場に於ける雇傭の條件を改善せんとする任意的努力よりなる」と云つてある。先づ此の定義中に注意すべき點が二つあると思ふ。その一は現存の産業制度の内に於てなる語であつて、その二は雇主の任意的努力なる句である。此の事は我等社會改良事業に興味を有する者に取つて極めて重大なる者なれば、次に少しく之に就て論じなければならぬ。而して余は一箇の感想と一箇の寓話とを以て暑苦しい議論に代へるであらう。

曾て谷中の墓地を逍遥して五重の塔を樹綠の上に望んだ事がある。余は其の時ふと人生をこの途に例へて見た。五重の塔も今かうして遠くから眺めると、五階目四階目は見えるけれども、三階目から下は林の後にかくれてしまふ。人も大臣大將になれば其の名は天下に弘まるけれども、下の方に降るに從つて、世間からは一向に認められず、有つてもなくても好いやうに取扱はれる。さても殘念な事、あゝ生き甲斐なき我が命かな。然し乍ら又氣を取直して思ふ、五重の塔の五階目四階目は三階目二階目一階目の上に立つて、初めて堂々の雄姿を現ずるのである。人間の社會も亦その如く、大臣や大將だけで其の政に安んづるの民なく、その命に服するの兵なくんば、到底その存立を全うすることは出來ない。プラトーンの理想國篇は少くとも人民の一人一人を以て各自の現在の境遇に於て一箇の活物たる國家の必須なる成分要素なりとした點に於て、永遠の慰めを我等に齎すのではあるまいか。

又曾てフォッペンハイメルの國家論（ギッターマン英譯）を見た時に、マルクスの寓話として次のやうな事が記されてあつた。曰く、ある時ある處に理想鄉が出來た。人々は皆平等の權利を持つて治者被治者の別もない。土地は皆平等に分配せられて、資本家もなく又勞働者もない。天は圓く地は平に、民は自由の生を樂しんだのである。ところが甲は勤儉乙は遊惰、兩者の財產は次第に隔りを生じた。乙は終に自分の田畑牛羊の類を甲に讓渡して玆に初めて無財產の勞働者となり、之を使

ら此の工場改善の事業も近代社會諸機關の分化に伴つて著しく專門的になつた。例へば一世紀前にあつては、雇主は自ら勞働者を監督し同時に工場一切の經營に當つたのであるが、今日では特に一個人又は工場內の一課をして勞働者の世話だけをせしめると云ふ有樣である。かくて此の工場改善勞働者幸福增進の設備のために、特殊の專門家を要するに至つた。而してこの種の專門家の施設乃至議論が往々にして見るべき者が有つたので、初めて學者の注意を喚起するやうになつたのである。之を要するに工場改善なる名はその實有つてより數十年にしてやうやく現はれた者であると云ふことが出來る。

されば今日の最も進步した工場の設備乃至勞働者待遇法はかやうに古い歷史を持つてゐるのである。例ば醫者や學校教師は產業革命當時からして工場に關係して來たのであつて、工場の食堂は夙に十八世紀の中頃に於て存在して居つたのである其の他工場に浴場を設けることは一世紀餘の昔に於て便利なりと考へられ、娛樂俱樂部は工場法の一も制定されなかつた前よりあつたのである。否更に養老年金や疾病保險すらも既に當時に於て其の端緒を發したのである。又一八五一年に於て或る工場にては早くも一人の工場附牧師を傭つて、勞働者の教有設備の立案監督に當らしめた。これなどは立派に近代工場に於ける專門の工場監督係に當る者である。工場改善の實は古くよりあつた。たゞその名が新しいのみである。

四

最後にこの工場改善に就て是非とも記さねばならぬ二三の注意事項がある。

(一)工場改善を行はんとする雇主は必らずしも一個人に限らない。組合、會社、共働團體、地方自治體、又は一國家であつてよい。是等は各々雇主として個々の勞働者に對するのであつて、此の點が吾人の重きをおく所である。

(二)工場改善は何等利害の念慮によらずして行はるゝも、又は直接の利益を眼目として企てらるゝも共に差支ない。先づ通例は兩者を混同せる動機よりなされる者と思つてよからう。

尤も此の場合と雖も吾人は決して企業家が其の利益の全部を失つてまでも是の如くせねばならぬと云ふのではない。さやうの主張は理論的に不都合であるばかりでなく、又實に勞働問題の將來のために禍根を殘すものである。蓋し勞働問題は決して感情的なる慈善の範圍に於て決せらるべき者ではない。是の如きは寧ろ勞働者の人格を侮辱することになるのである。少くとも其の根底に於て經濟的に妥當でなければならぬ。若し然らずして企業家の利益を無視するならば、生產は成立しなくなり、勞働者はその勞働を賣るべき機會を失ふであらう。

三

扨て以上の說明によつてブロード女史の定義中の二大眼目は略〻了解せられた事と思ふ。ウエルフエア・ワークとは現存の產業制度、分り易く云へば社會制度に何等動搖を來すやうな改革を加へることなく、企業家が其の利潤を失はざる範圍に於て、自ら進んで其の工場に於ける勞働者の待遇を改善し、彼等の幸福を增進するために有效なる方策を取り又必要なる設備を備へること、を云ふのである。余は假に之を工場改善と義譯しておく。早稻田大學の北澤敎授は勞働者幸福增進設備と譯しては如何と云はれたが之も參考に記しておく。何分原語がまだ確立した術語になつてゐる譯ではないから、その譯語に就て深く通論するにも及ぶまい。次にこの運動——と假に云つておく——の歷史を述べて見やう。

由來純益分配（プロフィット・シエアリング）制は夙に英國經濟學者の力說する所となつたが、而も實際家はあまり之に耳を傾けなかつた。然らば實除家なる者は何時でも保守的沒分曉漢かと云ふと決してさいではない。彼等は其の貴き直接經驗によつて學者の未だ嘗て云はざる所を行つてゐる事が往々にしてある者である。此の工場改善運動の如きはその一例である。英國に於ては夙に一八四五年ホーナーは勞働者の幸福を增進するの計畫が當時の諸工場に於て認められたことを記してゐる。否其より半世紀以前にデールはニューラナークに於ける勞働者の幸福增進の計畫を實施しつゝあつたのである。しかし乍

一葉落

（四十三字歌）

土井晩翠

○一　落ちて秋知るべくば生きんため
　血汐に渇き家を焼く
　神戸の騒ぎ君何と見む。

○霜ふみて堅氷いたる、——生きんため
　起りし騒ぎ耳にして
　仰げばあらし雲吹きまくる

○黄金を空に積むとも民衆の
　嫉み怒りに招くとき
　三層の樓一朝の灰。

○利に馳く富にかしこき名ありとも
　救無き身の悲しさや
　巨萬の寶たゞ民の詛ひ。

○民衆の心微妙のはたらきを
　知り得て後ぞ利を計り
　富集めむもよろしかるべき。

○富山の市米の高きにいきどほり
　女性幾百叫喚の
　詛ひに店を襲へりといふ。

○黒潮の流をかなき幾萬の
　魚介の群をはらふ如
　動亂の波世をおほひくる。

(二)工場改善が確かに雇人の幸福を增進すべしと斷定すすることは出來ない。幸福なる觀念は主觀的であつて人によつて見る所を異にする。而も大體に於て吾人の取るべき道は示されてゐる。醫學の大家、職工組合主義者、及び一般公衆の見る所時に各々異れりと雖も、時の經過につれて終に一定の輿論となつて法制の進行を導き、かくて其の工場法制は更に工場改善の進歩を促す。兩者は相倚り相助くる者である。一例を擧げれば前には一日の勞働時間を十一時間に限るさへ、工場改善に熱心なる雇主の義俠なりと稱へられたものであるが、今日に於ては十一時間の勞働は工場法制によつて禁止せられてある。

以上述べた所によつて工場改善、若しくは勞働者幸福增進の意義は明かになつたと思ふ。之に關する各種の實驗を歷史的に討究し且組織的に記述して、新思想を以て工場經營に當らんとする企業家の參考に供したる者が、卽ちプロード女史の好著なるこの Welfere Work なのである。余は更に機會をえて此の書を翻譯し、又は其の內容を紹介し且つ批評して見たいと思ふ。

七月

佐藤清

——に

おゝわれにあたへよ、仰ぎ見る空よりひろき、
おほそらを。わが足の踏む地よりもひろき、
さみどりの地を。
おゝわれにあたへよ、もひとつの日を、
月を。さらにいみじく歌ふ、
おびたゞしき他の星のむれを。
おゝわれにあたへよ、このくるほしき海よりつ
よく、はげしき他のわきたつ海を。
おゝわれにあたへよ、さらにこくあまき
雨を、みぞれを、すゞしくふる雪を。
おゝわれに與へよ、他のいやさらにかをりよき、
木を、花を、この耳にひゞくこゑよりなつかし
き、他のおびたゞしき鳥のむれを。
おゝわがたましいのはてなき奥、
とざされし至聖所のとばりはあがり、
おゝわれ今もゑあがるつゝしみに胸をおどら
せ、さへぎる塵もなき閾をまたぎ、
わきくるふ紫の不思議に胸をうたれつゝ、
目をこらし、さんらんたるひかりのなか、
われ今初めてわが夢のひとを見る。
わが足踏める地は地にきえ、
わが目見る空は空にきえ
日は日に、月は月にきえ、
かぎりなき星はかぎりなき星にきえ、
はげしき海はわきたつ海に消え、
雨は雨に、雪は雪に、
木は木に、花は花に、
なつかしき鳥は鳥にきえ、
わがたましひは今水晶より白くこり、
たゞたゞひなくうつくしきおんみのなかにとけ

○『米高し』何等悲慘の運命を
　暗に示せる言の葉ぞ
　　無形の波瀾世にうづまけり。

○臭き煙吐きて矢の如、自動車の
　はせゆく後に舌吐きて
　　喘げる牛は重荷を曳けり。

○歐洲の大亂四たび年廻り
　陰雲陰霧いや暗う
　　碧の空をいつか見るべき。

○『大局の半も未だ過ぎ去らじ』
　冥想の目に運命を
　　觀ぜる人の夢かまことか。

○支那にして七國の亂、我にして
　元龜天正さも似たる
　　世界の狂ひいつしづまらむ。

○天上のあなた等しく雲亂れ
　あらし狂ひて霹靂と
　　轟雷競ふ、——世のなぞらへに。

○アリーマン、オルマヅウドの戰は
　天のあなたに狂へるや
　　驚異の世紀何を孕める。

○大亂とよべる熔爐のたゞ中に
　すべての物の投げられて
　　やがて渣無き黃金を見む。

○大波瀾四海をおほひ人類の
　またき革命成し遂げて
　　やがてやむべき戰か否か。

○いにしへのノアの洪水、一切を
　呑みて新たの世をうめる——
　　今はた似ずや大亂の波。

おともなくわが全身をおしつゝむ。
かくてわがふむ足はおのづからよきねをいだし、いくひやくの陽はこれにしらべをあはせ、
わが胸に鳴る血はおのづからよきねをいだし、いくせんの月はこれにしらべをあはせ、
わがうちに脈うつ脈はおのづからよきねをいだし、

いくまんの星はこれにしらべをあはせ、
向日葵は黄金の舞踏におのれを忘れ、
月草は濃藍の舞踏におのれを忘れ、
星草は白銀の舞踏を忘れ、——

抱かるゝわれ、抱く空、
たゞとけていつとなるいのちの刹那
われはけしとんで水晶の星となる。

*

いばらの上につめたくもそゝがれし、
永雨よりくれなゐの花はさき、
つめたくもすはだかの柳ひたしし、
ながれより夏の木の葉はしげり、
わがたましひにたえまなくそゝがれし、
さみしさより愛のみどりはしげり、
わがたましひをたえずひたしし、
うれひよりくれなゐの愛はさく。

*

わが愛は夏よりもいと強し、
すはだかの木にみどりばのそよぎをあたへ、
にごれる海に濃藍のうしほをあたへ、
もゆる血を地にあたへ、
おほぞらにすきとほるつばさをあたへ、
うむことしらぬ夏よりも、
わが愛はいと強し。

わが愛は夏よりもいと強し、
わが愛はみどりばよりもみづ〳〵し、
わが愛はおほうみよりもいとはげし、
わが愛は燃ゆる地よりもいとあつし、
わが愛はおほぞらよりもいとあをし、
うむことしらぬ夏より、
わが愛はいと強し。

てゆく。

*

やはらかき絹よりやはらかき、
あさのひかりを掬びつゝ、
ちり多き窓押しひらき、
しづけくもしづまれる家並の上、
鳴りわたるチャペルの鐘をきき、
おり立ちて葉ずれのみどりさわやけき、
ゆふかりの街樹のかげをゆき、
たのしさにうちあふぐ七月の空——
葡萄をとかすかすみに光てり、
やはらかく濃き太陽の光てり、
みまもれば倫敦の空いちめん、
すきもなくちりばむるダイヤモンドに、
わがたましひの空さへおなじにほひにうちふるふ。
おゝをとめらのくびにあたゝかきダイヤモンド、秒よりもとくかはるダイヤモンドにうちふるふ。

此時われとほきおんみを思ふ、
たぐひなくうつくしきおんみを思ふ。
わがあたらしきいのちのいづみ、
よみがへりのくすしきちから、
わがうちの至聖所のあたらしき神、
おゝわれとほきおんみを思ふ、
たぐひなくうつくしきおんみを思ふ。
おゝわがたましひになつかしくかすみたつ
わがはてしなきあこがれの濃き葡萄、
濃くうれし葡萄を、いきよりも激しくふるふ
ダイヤモンドにすきもなくちりばむる
おゝわがたましひの空に照る
絹よりもやはらかきあさの太陽——
おゝわれとほきおんみを思ふ、
たぐひなくうつくしきおんみを思ふ。

*

碧溜璃のかゞやく空、
いきさへすはずすきとほる空、
たかくたかくすみきる空、
おゝ見よ、今不意に身をかゞめ、

廣き流れにみなぎる、
さむるいのち、さむる靈は
すたれたる信條の牢獄をふみにじり
幼兒の心をなつかしむ。

悲しき叫きと悲しき物影と
褪せ行く人の心の愚さと
倦み疲れ行く心の弱さとより
漂泊者を別れしめよ
彼れの寂しき祈りの
幼兒の夢みる心に
銀色の月は接吻けり。

靜かなる光りの雨の降り來れば
なめらかな黑い小鳥
漂泊者の胸に飛ぶ。

街道に雨降り
忍び音の者よ來れり
見えざる者よ、不思議者よ
汝が訪づれの靜かなるに
彼れの心は喜べり
うれしくも、かなしくも
夜闇の底井に停みて。

ふと、漂泊者の心は叫べり
信うすき者よ、さかしき者よ
汝は汝が心をうて、そして
汝が不眞面目なるを恥ぢよ
何事も美しき錦もて飾れる
たわごとなるを知れよ、
さかしきたわごとのわれを廻りて
われが心の悲しく、寂しく
涙ぐむ時のうれしさよ」
只だ一人なる漂泊者の歩みは
靜かなる喜びになりて行く。

靜かなる雨の降り來て
あはれなる若草の蘇がへり
喜びの聲をあげて躍りぬ

漂泊者

上山善治

夏來れば、いづこともなく
黒き小鳥飛び廻り
青き森より、青き森に
靜かなる光りの雨の降り注げば
黒き小鳥羽根うちならし
白日の望もて吾が軒端とび廻る、
漂泊者よ、黒き小鳥よ
なになれば飛び廻る。

靜かなる光りの雨の降り注ぎ
若草のよろこび
漂泊者の心躍りて
大空の日を仰げば
狂うしき祈りと、狂うしき喜悦と
漂泊者の心涙す。

あはれなる黒き小鳥は
古巢たづねて飛び廻る
只だ汝が果をたづねて
孝の心飛び廻る、
汝がいのちの求めの翼は
稚き日の記憶に搏ち鳴りて
さめ行く漂泊者の胸に來れり
榮光の雲長く引きて
大空のふところより來れり。

漂泊者の悲しみに
灼熱の日は輝き
よるべなき異端の寂しさに
久遠の日は接吻けり。

あゝされど漂泊者の悲しさは

『名稱を聞いて何うするのだ。もしそれに名稱が必要だつたら眞、善、美とでも呼ぶがよからう——併しお前はまだ其橋の意味が分るまい』

私は何うして其第三の橋を見る事が出來ないのですかと神樣に訊いた。

『それはそれを擧登つた者の目にしか見えないのだ。』と神樣は言つた。

『其橋は皆同じ天國に達して居るのですか』

『凡そ天國は一つである。決して或部分が他よりも高いと言ふ樣な事はない。其最高の所に達する者は常に憩むために最下の所へ降りて行くのだが、先は一つなるに拘らず最下に居るものは最高の所に擧登る力がないのだ』

私は最も近くにある橋を見て見ると其橋は外の橋よりも中が廣くて其上には向ふへ渡つて行つた無數の人の足跡があつた。何うしてそんなに多勢の人が通つたのか私は神樣に訊いて見た。

『それは割合に傾斜がゆるくて、第一の天國に達して居るからだと神樣は云つた。

私は其足跡のあるものは歸りの足跡であつたのに氣がついた。私はそれが何うしたわけかと神樣に訊いた。

『一度天國に入つたものは其所を立去る樣な事はないが、然し向ふ側に國がないのを恐れて中途から戻つて來るものもあるのだ。

『歸つた人はないのですか』と私は言つた。

『ない。一度天國に入つたものは永久に天國に住むのだ』と神樣は云つた。

而して神樣は私を引張り上げた。私共が天國の大きな入口に來て見ると——何故なら天國には澤山の入口があつて、それは皆開放してあるのだ。——其柱が兩側に高く突立つて居て其頂上を見る事も出來なければ、實際其所に何があるかも分らなかつた。

其入口からは地獄が全部入り得ると思はれる程廣く見えた。

『天國と地獄とは何方が大きいのですか』と私は神樣に訊いた。

『廣い事は地獄の方が廣いが深い事は天國の方が深い。地獄は天國に押込む事が出來るが、天國は地

只だ一人なる漂泊者の友よ
憂ひと、寂しみとの友よ
さめ行く心の寂しさに堪えて
われとわが胸をむしり
あゝただ愚かなる心の
眞純なる聲のみ震へ

若草の呻き躍る。
靜かなる雨の降り來て
漂泊者の心なつかしむ。

——八月八日——

光明は吾が寢床を横斷りぬ（下）

オリブ・シュライナー作
齋藤未學譯

私は少し目が醒めた。あたりはまだ靜かで暗かつた。街を通る轍の音はしなかつた。高笑つて居た女共は居なくなつて巡査の靴音ももう聞えなかつた。眞暗な中で私の胸は大きな手で壓えつけられて居る樣な氣がした。私は呼吸をし樣と左右に身もだえした。而して私はまだ眠りに落ちて夢を見た。

神樣は私を其世界の端れに伴れて來た。其世界は其所で終つて居た。私は瞰下した。入江は測り知れない程深い樣であつた。兩岸の斷崖と二つの橋が架つて居た。

『人間の通る路は此外にないのですか』と私は神樣に訊いた。

『外にも一つあるが、それは此所から遙上の方で餘り傾斜が急だ』

私の其橋の名は何と言ふのかと神樣に訊いた。

一緒に遊んだ事がある様な氣もすれば、また私共は同じ日に生れた様な氣もした。而して私は私の感じた事を神様にお話しすると

『天國では他人に逢ふと皆さう思ふのだ』と神様は言ふのであつた。

其男の人は馳つて來て手をとつて私を其輝く光の中を導いた。而して林の中に入ると彼は聲高に歌を歌つた。すると彼の仲間は訊ねた。其訊ねたのは女であつた。彼は其女に私を紹介した。

『水を差し上げねばなりますまい』

彼女は恁う云つて、兩手に水を掬んで來て私に飲ました。(私は地獄で水を飲むのを怖れた)彼等は私のために果物をとつて來て呉れた。

『熟す様にそれを永く照しませう』

恁う云つて私がそれを食べるのを見て彼等は互に笑ひあつた。

『あの人は大變疲勞れてるから、寢まなければならない。』と男は言つた。

(私は地獄では敢て眠らうとしなかつたからだ)

而して彼は私の頭を彼の妻の膝の上に横へさせて彼女の髮を私の上に振りかけた。私は眠つた。而して私が眠つて居る間私は鳥共が私を鳴き呼んで居る様な氣がした。而して眠が醒めた時には萬象は露を帶んで早朝の様であつた。

男は私の手をとつて私を岩間の隱れ場所に導いた。其所の地盤は大變固かつたが、それから微弱な植物が生えて居た。それから其所には小さな河が流れて居た。

『之は私共の造つた他人の知らない庭ですよ』

と彼は云つた。

『私共は毎日此所で輝いて居るのです。ご覽なさい。地盤は私共の光のために龜裂けて居りますから。それで此小さな流れが出來たのです。ご覽なさい。草花が咲いて居りますから』

彼は巖の上に攀上つて高い所から露を帶びて居るこの小さな花を摘みとつて來て私に呉れた。私はそれを一つ宛兩手に持つと、私の手は光り輝いた。

『出來上ると此庭は皆(みんな)のために開放するのです。』

と言つた。彼は仲間の所へ行つて了つたので私は

獄の中に押込める事が出來ない。』

私共は中へ這入つた。其所は廣くて靜かであつた。周圍に山脈が突立つて居て其中は青明るかつた。それが岩や石の間から差して來るので何うしたわけかと私は神樣に訊いて見た。

然し神樣は答へなかつた。

私は不思議に見廻はした。何故なら私は天國と言ふ所は那麼所とは思はなかつたのだ。

而して暫くすると夜が明けてもした樣に明るくなつて來た。私は太陽が昇るのではありませんかと神樣に訊いた。

『さうぢやない。吾々は人々の居る所に來たのだ』と神樣は言つた。

而して進んで行くとそれは次第〳〵に明るくなつて來て、遂に眞晝間の樣になつて來た。巖の上には草花が咲き亂れて道路の兩側の並木には花が咲き匂ふて居た。到る所に河が流れて鳥が囀り交はして居た。人々は何所に居るのですかと私は神樣に訊いた。

『あの聲は人々が互に呼びあつて居るのだ』と神樣は言つた。

而してもつと近附いて行くと私は彼等の歩いて居るのを見た、彼等は歩く時分に閃々と光輝いた。彼等は何故裸で居るのかと私は神樣に訊いた。

『彼等の身體は皆光るから何所も蔽ひ隱さうとはしないのだ』と神樣は云つた。

彼等は何をして居るのかと私は神樣に訊いた。

『彼等の栽倍して居る植物の上に光を投げて居るのだ。』

或者は群をなし、また或者は一人て働いて居たが、二人で働いて居るのが多かつた。時としては男二人のもあれば女二人のもあつたが、男と女と二人つれのが多かつた。それは何うしたわけかと私は神樣に訊いた。

『男と女とが互に輝き合ふと最も完全な光を出すのだ。多くの植物は發育するのに其光が必要なのだ。然し天國には澤山の植物があるので種々な種類の光りが必要なのだ』

群集の中から一人此方へ馳つた來るものがあつた。近附いたのを見ると其男と私とは幼い時分に

着を脱ぎ初めたが、私は下を向いた時自分の身體の光りを出さないのに氣がついた。

『何うしたものでせう』私は神様に云つた。

『お前の心臟には濁つた血がないか。お前の血は何者に對しても苦くはないか』と神様は云つた。

『えゝ――』と答へて私は考へた。

『今日こそ久しい間云はうと思つて居た事を云ふべきだ。如何に自分の仲間が自分を惡く取扱つたか、又彼等は如何に自分を誤解したか、また自分は如何に彼等に對して大量且つ寬大だらうと考へたか、而して彼等は――』

而して私は神様に語り始めた。然し私が下を見ると草花は皆私の呼吸のために萎んで了つたので私は沈默つて了つた。』

すると神様は私にもつと登つて來いと云ふので私はマントの裾を端折つて後に跟いて行つた。

周圍の巖は次第に高く嶮しくなつて來た。而して私共は遂に雲間に聳えて居る大山脈の所に着いた。私は其傍で人々が働いて居るのを見た。彼等は大きな鶴嘴で地を掘つて居た。私は彼等が力一杯働いて居るのを見た。群をなして働いて居るものもあつたが、多くは一人で働いて居た。私は彼等の額から汗が流れ落ちて、其腕の筋肉が勞働によつて膨れ上つて居るのを見た。

『私は天國で人々が恁麼に働いて居るのを見様とは思ひませんでした。』と私は神様に云つた。私は其所は人々が歌ひ愛しなかつた所の國であると思つた。而して私は誰が其不毛な山脈の麓に稼ぐ事を撰んだのかしらと怪しまれた。私は彼等が働く時に其額に光りを見た。而して彼等が働く時其額から落つる汗の玉は光りを有つて居た。

彼等は何を得んとして居るのかと私は神様に訊いた。

神様は私の目に手を觸れた。すると私は彼等の見出したものはそれまで見た事のない様な光り輝く小さな石であつた事が分つた。而して私は其石の光りと人々の額の光りとが同じであるのに氣がついた。石を見出すと彼等はそれを自分の仲間に渡した。それを受けとつたものは隣の者へ次々と手渡すのであつた。自分の見出した石を自分で持

廣い道路へ出て行つた。

而して光の中を歩いて行くと私は大勢の高い唱歌の聲を聞いた。而して近附いて見ると兩目を閉ぢて歌つて居る一人の者を大勢で圍繞いて立つて居た。而して其閉ぢて居る目に輝いて居る光は私が嘗つて天國で見た何ものよりも光り輝いた。私は其人は誰ですかと一人に訊いて見た。すると『靜かになさい。私達の歌鳥ですよ』と彼は云つた。

『此人は見る事が出來んのです。それで吾々は兩の目があの樣に輝くまで接吻してやつたのです』

而して人々は一層彼の周圍に近く寄つて來た。もつと進んで行くと今度は一群の人々が大笑ひをしながら光の林を横斷つて行くのを見た。近寄つて見ると彼等は手も足もない一人の人間を持搬んで來たのであつた。而して其不具な手足からは嘗つて彼等に見る事の出來なかつた光が輝いて來た。

『彼の人は何うしたのですか』

私は其中の一人に訊ねた。

『之は此世界から墜落して手足を無くした吾々の兄弟です。それ以來彼は獨りで歩く事が出來なくなつたのですが、私共が度々其不具な斷りあとに手を觸れてやつたら今では天國の何者よりも光輝く樣になりました。私共は彼を多量な熱を要する物の上に輝く樣にしたのです。彼は皆のものですから誰も長く彼を獨占する事は出來ないのです。

而して彼等は樹間を進んで行つた。

『之は不思議な國ですね。私を盲と不具者を大怪物だと思ひました。此所は面白い所ですね』と私は神樣に云つた。

『それではお前には目と手が必要だと思ふのか』と神樣は言つた。

私は兩手を拱いて光輝く路を降りて行つた。

私は神樣に云つた。

『私は嘗つて獨り坐つて泣いて居た小な子供でした。私は恁樣を國は夢想して居りました。而して今では再び此所を去りません。此所に停つて私は光り輝きませう』

而して私は其國で他の人々の樣に光り輝き樣と

する心の渇きに類した、いやそれよりも一層強烈な慾望が私の心の中に起つた。

『私も此所で働きませう』と私は神様に言つた。『私も此不思議な冠に石を掘つて鏤めませう。それは私の手によつて發育しなければなりません。そして、もし幾年も此所で働いて一つの石を發見する事が出來なかつたら、少なくとも私は此所で働いて居る人々と一緒に居りませう。私はある丈の石を見出した時の彼等の歡喜の叫びを聞きませう。私は彼等の勝利に加はりませう。私は彼等と一緒に叫びませう。私は冠の發育するのを見ませう』

私は其冠を眺めた時に私の慾望は一層大きくなつて來た。私は私の額からも矢張り微かな光がさす樣な氣がした。

『お前には花園の中の歌聲が聞えないか』

神樣は言つた。

『いや私には何にも聞えません。只冠が見える許りです』と私は言つた。

而して私は渇望の切なるあまり、口をきく事さへ出來なくなつた。私は下の天國に咲いて居た草花の事も其所に聞える歌聲も忘れて居た。而して私は前の方へ駈けて行つてマントを地に投捨てて其所に落ち居た巨大な工具の一つを取上げ樣と踞んだが私はそれを持上げる事が出來なかつた。

『ォ前は何所でそれを持上げる力を得たのか。マントを取上げろ』と神樣は云つた。

私はマントを取上げて神樣の呼ぶ方へ行つた。然し私は後が顧みられた。冠は燃える樣に光輝いて居た。私の愛して居た私の冠は』

私共は一層高く攀登つて行つた。空氣は次第に稀薄になつて來た。素裸な巖の上には草も木も生えて居ないで、あたりは寂然して居た。私の呼吸はせまつて息苦しくなつて來た。而して指先は充血して來た。

『之が天國で御座いますか』と私は神樣に訊いた。

『さうだ。之が最高の天國なのだ』と神樣は云つた。

仍ほ私共は攀登つた。

『さう高くなつては私は呼吸が出來なくなりま

つて居る者はなかつた。時として大きな石が見附からうものなら其所へ大勢寄集つて大きな叫聲を立てるので其聲は空に響き渡つた。そして彼等はまた働き續けるのであつた。

彼等は其最後に見出した石で何をするのかと私は神樣に訊いた。すると神樣は私の視力を強めるためにまた私の目に觸つた。見ると直き足許に巨大な冠があつた。それはピカ〳〵光輝いてた。

『ある丈の石を見出せばそれを冠に鏤めるのだ』と神樣は言つた。

冠は異樣な模樣づけて作られてあつた。其模樣は一樣に要えても其各部分が形を異にして居た。

『各人が何うして自分の石を鏤める所を知つて居るのですか。其樣に模樣が出來て居るのですか。』と私は神樣に訊いた。

『自分の額から出る光で人々は漠然とした冠の形を見るのだ』

『然し、何うして其各々の石が其緣に沿ふて何所にも繼目がなく組合はさるのですか』

『石は生きて居るのだ。それは發育するのだ』

『然し、人々は其働きによつて何を得るのですか』

『彼は其冠の緣が滿されるのを見るのだ』

『併し、最後に鏤められる石は先に鏤めた石を蔽ひ隱したり、または先に鏤めた石が後で鏤めた石に蔽ひ隱される樣な事になりはしませんでせうか』

『それは蔽はれるが、そのため隱れて了ふ樣な事はない。其冠から射す光は鏤めた石の總ての光りである。最初に鏤めた石の光りが無くては後で鏤めた石は輝く事は出來ないのだ』

『何時此冠は出來上るのですか』

『上を見ろ』

私は上を見た、頭の上には高い山脈の塔が聳えて居たが其頂上は雲に隱れて見えなかつた。

神樣はもう口を開かなかつた。

私は冠を眺めた。すると渴望が私を捉へた。死に捉へられた子供に對する女親の熱情の樣な、また其一生を葬り去つた友達に對する愛慕の情の如き、死に瀕せる人の目の眠り行く生命に對する渴望に類せる、または春期發動期に於ける愛に對

が起らないのだが彼は人々の叫聲を聞く事が出來るのだ。彼は冠の大きくなるのを見、またそれからさす光を見得るのだ。地獄は皆彼に開放されて、彼は頂上に達する道を見得るのだ。地獄は彼にとつて極樂を生じる苗床である。彼は木汁の立登るのを見得るのである』

『私は蹲んで働いて居る姿を見やつた。而して其額から差す光りは其仕事の上に落ちた。

『あれは何をして居るのですか』

私は神樣に云つた。

『音樂だ』と神樣は云つて、私の耳に手を觸れたので私はそれを聞く事が出來た。

暫くしてから

『之が天國……』と私は神樣に囁いた。

神樣は何うして叫んだかと私に訊いた。併し私は嬉しさのあまりそれに答へる事が出來なかつた。

而して其人影が仕事を止めて此方を向いた時其顔から差す光線は私を射た。そしてそれは大變光輝いて來て目眩しくて物を見分ける事が出來なかつた。何れが神樣だか、何れが其人影か、何れが自分かも識別出來なくなつた。私共は全く盲になつて了つた。

『あなたは何所においでですか』と私は神樣を喚んだが答へがなくて音樂のみが聞えてあたりは輝き渡つた。

暫くして私がまた物を識別出來る樣に暗くなつた時、私は小さな古ぼけた褐色の婆婆の着物に引つくるまつて其人と神樣とは互に離れて向ふに居むて居るのが分つた。

私は其人の傍へ行つて音樂を奏したいとは敢て言はなかつた。私は其膝許に達する事も出來なければ彼の奏して居る樂器を動かす事も出來ない事を知つて居た。然し私は小さな峰にゐむて、大きな樂器に伴奏して歌ひたいと思つた。

而して私は試して見たが聲が出なかつた。樂器は震ひ聲を出して笛の樣に鳴つたが私はその節に合はせる事が出來なかつたので、默つて了つた。

次に神樣は天國を出て行く樣にと私に合圖をした。

す』と私は神様に云つた。

『空氣が新鮮だからだ』と神様は云つた。

私は眩暈がして來た。而して攀登つてから見ると指の先から血が流れて居た。

間もなく私共は淋しい山脈の頂上に出た。

其所には生物の姿が見えなかつた。遙か離れた淋しい絶頂にもの凄いものが久むて居たそれが男か女か分らなかつた。或點は女の様でもあつたが、其手足は男の様に頑丈であつた。それは男ですか、それとも女ですかと私は神様に訊ねた。

『少なくも天國の性は超絶して居るのだ。高層の所には其區別が分らない。然し最高層では其兩性の區別がない。』

其人影が窟んで彎しく働いて居たが、然し何をして居るのか分らなかつた。

『あの人は何うして此所へ來たのでせう』

私は神様に訊いた。

『血だらけの梯子を登つて來たのだ。一段々々どん底の地獄から登つて來たのだ。而して日一日と地獄に遠遙つて來たが、天國は決して近附かないのだ。あれは地獄極樂の間にぶらついて居るのだ。出發する時に着て來た着物が襤褸々々になつて切れ落つる程辛い奮闘のために其手足は刻々に大きくなつて來た。見張ると其兩の目からは涙が流れ出て、攀登つて來た足跡は血で染まつて居た。恁うして彼は此所へ出て來たのである』

私は人々が互に手を組み合つて合唱して居た花園や、互に連れ立つて歩いて居た山腹を懐ひやつた。而して私は身震ひした。

『獨り此所に居るのは怖ろしいではありませんか』と云つた。

『それは決して獨りではない』と神様は云つた。

『其(その)勞働に對して何が得られるのですか。何も得られない様ですが』

恁う云ふと神様は私の目に手を觸れた。私は地獄極樂の世界が目下に擴つて居るのを見た。而して萬象は皆其中にあつた。

『彼がイむて居る寂しい山の頂から萬象は皆見えるのだ。花園の光りは彼にとつて明かに、彼は花が綻び、流れ、閃くのを見るのだ。山腹には叫聲

思ふとまたしわかれた人聲の様に鳴り出した。
私は耳傾けたが、私の心は鉛の様に冷たく容易に
效かなかつた。私は日の永いのに怠屈してまた眠
らふと思つた。併し尚私は舖道に響く跫音を聞い
た。而して私は突然殴れてもした様な叫聲を聞い
た。
『私共は求めて居る。——私共は求めて居る。——
私共は求めて居る』
而して町隅で奏でて居た手風琴は
『麗はしい——麗はしい——麗はしい』
とむせび泣いた。而して今迄死んで居た私の心
は『愛——眞理——麗はしい——麗はしい』と動
悸打つて叫び出した。それは私が天國で聞いた私
が其所で歌ふ事の出來なかつた音樂であつた。
而して私は全く目が醒めた。
私の寢臺を横斷して色褪せた布團の上に、色褪
せた倫敦の日光の長い黄色な斑條が横はつて居
た。それは私の狹いアテック式の窓からさして來
たのである。
私は微笑んだ。而して私は立上つた。
私は私の前途の長いのを喜んだ。(終り)

笑聲

伊藤寥々

つとめ先で何か面白くない事があつた夕——事
はつい忘れて了つた程の事——
薄暗い家にすご〳〵と歸つて來た、
玄關に誰れもゐない、
茶の間にもゐない、
足音荒く進んで厨に立つた私は、
かまどの前で火を焚いてゐる妻を見た、
妻も何か沈んでゐたと見え、

『何卒私を此所に置いて被下い』

と私は神様に向つて叫んだ。

『私は此山脈の上で歌ふのに不充分ながら、また其傍で働くに充分健康ならず、花園の中で輝き愛するのに不充分な事が私の考へてます様に眞個でしたらお情に私を大きな門口の方へ降りて行かして被下い。私は多聞も顧みず其所に跪いてすゝり泣きませう。もしまたお願ひが叶ひましたら、私は彼等の顔に光りを見る事が出來ませう。私は花園の歌聲をきゝ、また山腹の叫聲を聞く事が出來ませう――』

『それは出來ない』と云つて、神様は指した。

『もし、私は天國に停まる事が出來ませんなら、私を地獄に墮して被下い。そしたら私は其所に居る男や女の手を捉へます。而して互に手を取合つて私共は次第に其天國の道路を上の方に掘開きませう。』

神様は仍ほ指して居た。

其所で私は地面に身を投伏して叫び出した。

『地球は極めて狹くて極めて詰らない所てす。心に天國を見、それを放射するのには不適當な所です』

すると、神様は私の肩に手を懸けて

『下界へ歸つて行け。さうすれば其所にお前の求めるものがある』と云つた。

私は朝になつて目が醒めた。夜の靜寂と暗黑とは過去つた。私は狹いアテック式の窓から朝日を見た。私は兩日を冥つて壁の方を向いた。私は氣怠い灰色な世界を見るのに忍びなかつたのだ。

下の通りを幾百とも數知れない澤山な男や女が流れ通つた。私は舖道に響く其跫音を聞いた。仕事に通ふ男共、遣ひに行く召使、學校へ急ぐ子供共、古い町を靜かに歩いて行く疲勞した様な學者達、前夜の淫樂に疲れて足重さうに歩いて行く賣笑婦や、男や女、我慢出來ない様に氣忙しく歩いて行く美術家、遣ひに行く商人、麵麭を買ひに行く子供共、私は其流れ行く跫足に耳傾けた。

而して小路の入口や、通うの隅で手風琴を奏じて居た。それは震へて時々音がしなくなつたかと

警世の一大良著

早稲田大學教授
ドクトル、オブ、フヰロソヰ
北澤新次郎先生譯

ホランダー博士原著 貧乏根絶論

□現代の社會問題中最も根本的な然かも重要な問題は貧乏根絶の問題である。日本の社會問題も亦貧乏問題を中心として今や沸騰點に達せんとしてゐる。此際『貧乏根絶論』の出版は社會的に最も緊喫の事でなければならぬ。

□本著の原著者は米國ヂョンスホプキンス大學經濟學教授ホランダー博士。博士の學殖、識見及び社會問題に對する熱心が、世界的地位を有する事に就いては、今更ら述ぶる必要があるまい。

□譯者北澤新次郎先生は多年ホ大學に於て直接原著者に師事し、專ら社會政策を研究したる少壯學者で、早稲田大學教授たる事に就いても諸君の知らるゝ通りである。

□原著は一昨年出版せられ、米國の學界、政界に一大刺激を與へた名著である。其の學問的價値と實際的效用に就いては充分の信用を措くべく、又譯述も親切丁寧を旨としたから、吾々は確信と熱心を以て本書を推薦するに躊躇しないものである。

□上下に瀰漫した生活難の聲は、遂に爆發して怖るべき米騷動を惹起した。今や日本の心ある識者は、其の注意を貧乏問題に集中すべき秋になつた。吾々は此際此良著を學者、政治家、學生、社會改良家並に一般讀書子に提供し得る事を無上の欣幸とするものである。

製本出來 九月一日發行發賣

菊版二百八頁 箱入美本 定價壹圓稅八錢

東京市本郷區追分町一九 大學評論社發行 振替東京二〇九〇〇番

妙に冴へない面持ちてちよつとこちらを向いたきり、
肝癪の蟲は忽ち私の頭へ遠慮なく上つたらしい、
神經の一すぢを引いたらしい、
荒び言葉がつひ口を衝いて出て了つた、
妻も何か小聲て口答へた、
冷然とした双眸が私のそれに出會はした、
憤然とした庭下駄をつッかけて妻の傍らに進んだ時、
そして猶も何か言はうと思つた時、
妻の背にあつた二歳の息子がふと私の方を見た、
その圓らな眸には水々した無邪氣さが溢れるばかり、
愉快に廣げられた齒のない口からは、
ケヽヽヽと響く低い笑ひが洩れた、
私はびつくり敗亡した、
おどけた風に廻れ右をして、
飛び跳ねるやうに退却した、
ケヽヽヽといふ笑聲が一段と高まつた、
ホヽヽヽと妻がこれに和した、
振り返つて兩手を廣げて私は「ばア」をして見せた。
燃えさかつた竈の火が美しく輝いた。

診察毎朝及毎夕　但祭日及日曜の他
院長診察月木金午前及午後六時
林、峯間兩副長は目下當院に在勤
東京麹町區三番町卅番地（市ヶ谷見附内）
電番六二番
番五一六番

東洋内科醫院

院長　醫學博士　高田畊安

南湖院

電話ちがさき二番
神奈川縣茅ヶ崎海濱（從停車場半里）
河野、高橋兩副長は目下當院に在勤
院長診察土曜日午後、入院診後應需
診察毎朝但祭日及日曜及土曜の他

默示錄講義

統一教會に於て
毎日曜日午前八時より

近時基督再臨說を高調する者多きに鑑み、其の說の根據たる默示錄及び默示錄系の思想に對し、嚴正なる批評を試み以て、此の種の迷信を一掃せんことを期す。有志諸君の御來會を希望す。

九月一日　擔任者　三　並　良

富士山頂にて

坂本正雄

かけまくもあやにかしこき大富士の高根の上に日を見つるかな

大富士のいたゞきに立ち天が下うち眺めつゝ神をしぞ思ふ

秋津洲くもにつらなる高山の高さをおもひ心おきたつ

かくやくと富士の裾野を照らす日の影も奇しく見ゆる朝かな

ま黒なる石をつたひて富士の峰ゆ鏡のごとき湖を見るかな

山にのぼり神と自然とおのれとの大なるを知る幸ある日かな

おん神の前にぬかづき聲をいだし禱りまつれば風さやに吹く

富士の峰冥夏の日にも白き風さやに吹くなり神にいのれば

さま〴〵の罪をいだきて富士に來つ今こそ神に赦されたるなれ

おん神の懐に居る心こそはじめてすなれ富士の峰にて

落陽堂圖書秋季大特賣

東京市神田區一ツ橋通町
落陽堂

新秋の候を期し各位の御眷顧に酬ゆる爲め當堂圖書特賣仕候に就ては暴騰の爲め切後定價改正のもの多數有之候間此際御注文の程を得候期限は九月一日より十月廿日迄に記に其一部にて一時御目錄に御一報次第送呈可仕候期限以後は總て定價に復し候

	書名	著者	定價	特價	郵稅
▲泰西の	繪畫及彫刻	落陽堂編	三、〇〇	二、五〇	一二
△同	第一卷	同	三、〇〇	二、五〇	一二
△同	第二卷	同	三、〇〇	二、五〇	一二
△同	第三卷	同	三、〇〇	二、五〇	一二
△同	第四卷	同	三、〇〇	二、五〇	一二
△同	彫刻編	同	三、〇〇	二、五〇	一二
▲テダン	神曲	中山昌樹	一、九〇	一、五五	一二
△同	（地獄篇）	同	一、九〇	一、五五	一二
△同	（煉獄篇）	同	一、九〇	一、五五	一二
△同	（天國篇）	同	一、九〇	一、五五	一二
△ダンテ	新生	本間久雄	一、六〇	一、二八	一二
△平敷	佛教史	ユンタイギ	二、五〇	二、〇〇	一二
△香世	自然と人生	帆足理一郎	一、五〇	一、二〇	一二
△宗教	科學と人生	同	一、六〇	一、二八	一二
▲トルストイ	一日一想	加藤一夫	一、一〇	九〇	八
△同	叫び	トルストイ	一、一〇	九〇	八
△我等	地の聲	同	一、一〇	九〇	八
△我等	何をなすべき乎	同	一、一〇	九〇	八
△神	何を信ずべき乎	同	一、一〇	九〇	八
△トルストイ	人生論	ロイヨフ	一、一〇	九〇	八
△トルストイ	民話集	探本弘	一、一〇	九〇	八

△滅び行く宇宙及人類	（脚本）	兒玉昌	一、七〇	一、三五	一〇八
△彼か三十の時		武者小路實篤	一、五〇	一、一〇	一〇八
△向日葵	（同）	同	一、五〇	一、一〇	一〇八
△後に來る者に	（感想）	同	一、六〇	一、二八	一〇八
△ある青年の夢	（脚本）	同	一、四〇	一、一二	一〇八
△留女	（小說）	志賀直哉	一、〇〇	一、〇〇	一〇八
△銀	（歌集）	木下利玄	一、〇〇	八〇	一〇四
△彼等の運命	（小說）	長與善一郎	一、二〇	九〇〇	一〇八
△求むる心	（感想）	同	一、三〇	九六〇	一〇八
△死の舞踏		ストリンドベルヒ	一、三〇	九六〇	一〇八
△嬰人の戀		同	一、〇〇	八〇〇	一〇八
△ノア、ノア		ゴオガン	一、〇〇	八〇〇	一〇八
△ハイネ評傳		藤浪由之	一、〇〇	八〇〇	一〇八
△ヘツペル傑作集		吹田順介	一、六〇	一、三〇	一〇八
△ドストイエフスキー		新城和一	一、三〇	一、〇四	一〇八
△近代音樂家評傳		ロマンロラン	一、五〇	一、二〇	一〇八
△ベエトフエンとミレエ		同	二、三〇	一、八四	一〇八
△ミケルアンヂエロ		薄田泣菫	二、七五	二、二〇	一〇八
△茶					
△文學に現はれたる我國民思想の研究		津田左右吉	三、〇〇	二、四〇	一一二
貴族文學の時代		同	三、五〇	二、八〇	一一二
武士文學の時代		中山昌樹	一、〇〇	八〇	一〇八
△文藝復興の三大藝術家					

心躍らして我がひそやかに夏帯しめぬ　同　庸
まじめな人が俥から下りてあやめ咲くなり　延
赤馬がぢつとして目を閉づる菖蒲匂ふにぞ　同
百合の苔を弄んだりして或時よ過ぎにし　小鍵子
急ぎ通れば桑つみ女らの笑へり　絹亮
撫子の鉢の砂を手にとりし手のほこり　鈴洋宮
柘榴の花のくるしき者らよ灯る　矢双
我ら秋立ちし行李など探すべし　閑口史
雷雨過ぎし桐畑に入らん徑高し　清藏
紫陽花たれたるまゝ墓参の女衆　丹矢人
僅かな飯が腐る朝々の蛾の骸を掃き　兎一碧樓
子鰻が釣れる赤いものをまとうて出てゆく　同
子鰻の胴のほそい眞夏の釣人の暮らす也　同
雑草咲く中の我家よ我が胸覺ゆ　同

投句規定

▲題並に句數を限らず
▲東京市外高田村大原一五二七中塚直三宛
▲封筒に虚心集句稿と明記ありたし

虚心集

一碧樓選

柔の葉の露堪へては夏痩の我ら笑はず　巨鬼
悲しき我らはらからの夏夜の仔馬洗はれぬ　同
仔馬嘶きし月夜の叢に僅かの水をかけ　同
胡瓜握らんとす今太陽の前のむだ花　逸星
胡瓜おほかたはむだ花なるまゝ陰影を踏まへ　同
暴風雨すでに明けし嬉ぶち叩いた　同
矢來のうちとのあやめほかの色なく　嫁が君
蛇苺赤く寝顔に別れ來しもの足らず　同
馬醉木咲くさへぎり云はぜしとする　同
瓜もてる女の瓜の蔓垂れてはかなし　一仙
いそ〳〵泳ぎ端に帶をとく手元光りて　同
青梅ざく〳〵量られて私の仕事　桂川
明易し立ち出でゝ薔薇の葉むなしさ　同
若者づら〳〵床並らべ臥しから梅雨　我樂

言つて、プラットホームを驅け出したときは、これでは大丈夫だと思つた。

「おとうさん、この汽車は半田までいくの」

「さうよ」

「汽車は不思議なもんだね！」

「どうして？」

「だつて早いんだもの、屹度隨分つかれるね」

「えゝ汽車だつて驅け出したらつかれますよ」

「あゝいゝね！お婆さんねてるうちにつくから」

變哲ない會話のうちに急に母を想ひ出したり、お婆さんを思ひ出したりして、途方もない想像がつゞく。

「かあちやん、歸へつたてせうか、もう！——」

「きつと今頃ねてゐるね——あゝまだうちはを使つてるてせう、そして屹度美代子は今頃どこまで行つたかなあ！なんて、さぶしがつて考へてるよ——さうでない？おとうさん」

「さうだらう」と笑つて答へると、「しかし鼠は出ないね、鼠なんかおかあさんはこはくない」と心配する。

「今夜暑くないといゝね」といふと、

「おとうさん、暑いだつて大丈夫よ、サイダーあるんですもの」と笑はせる。そして直ぐに「バナヽ食べたいね」と口走る。子供の無邪氣には笑はざるを得ないが、その可愛さは汽車旅行における好適の銷夏法であつた。

夜汽車は幸ひにあつくなかつた。そしてあまり混雜でなかつた。母が暑かつたら途中で飲むやうにと買つてくれた二本のサイダーも、とう〳〵朝まで飲む機會がなかつた。

「幼年畫報」（ヒルとヨル）一冊と吉田文學士監修の「トモダチ」一冊と、千代紙五十枚と、線香花火二把とは、美代子にとつては可なり幸福な所有であつた。否殆んど想像もつかないほど幸福な、そして內容の豐富な財產であつた。この幸福な所有のよろこびと、おばあさんのところに行くといふよろこびとが、一緒になつて小さい胸に一ぱいになり、迚も眠られさうではなかつた。

美代子は「幼年畫報」と「トモダチ」とを出して開め初めた。新しい雜誌は非常に子供の好奇心と興

美代子の溫泉旅行

わいはん

一　萬正寺溫泉

余はR誌の甚だ面白くないD事件をそこ〳〵にし、J誌の編輯も早く濟まして、七月三十日夜の十一時上野をたつた。一つは春以來全く自由を失つた病母を見舞はむが爲め、も一つは故郷において簡閲點呼の召集に應ずる爲め、も一つは長女美代子の健康のため、及び余自身の腦の不健康を恢復するため、高湯溫泉に登るといふ可なり複雜な用事をもつて、上野をたつた。よる子供を連れて夜行で行くといふのは、何だか淋しい東北落ちの感がした。

美代子は本年の十一月に丸六歳、この九月から幼稚園にでも入れようと思ふが、身體があまり丈夫でないのと、幼い時分に出た皮膚のポツ〳〵が夏になると、まだ澤山に出るので、高湯溫泉にでも這入つたら、ポツ〳〵も直り體も丈夫になるだらうと考へたので、一子供の湯治といふことが旅行の主なる目的であつた。

I兄からは『……しかし御歸省は愉快でせふ』と言はれたが、歸郷を愉快だと思ふ時代は既に十年前に過ぎ去つてゐる、否自分は歸郷を一度でも愉快だと思つたことはない、これは自分の不幸かも知れない。

しかし美代子にとつては非常にうれしいやうに見えた。昨年の二月東京に來てから初めての歸郷であり、それに明瞭な意識と記憶と想像とが生じてから初めての歸郷であるから、珍らしくもありうれしくもあつた。母に別れて汽車に乘つたときは、非常によろこんでゐて悄氣た顏色は少しも見えなかつた。

「かあちやん、早くおかへんなさい」と元氣よく

さうかうするうちに、汽車は早や大宮につく、
「おとうさん、こゝはどこ？」
「どこだかご覽なさい」
「たほみやです」
「たほみや？　おほみやでせよ」
「いゝえ、たほみや、アレたほみやと書いてありますよ」
「あれはおほみやと讀むんです」
「いゝえ、たほみやですか『お』はかうですよ」と云つて『お』をかいて見せる。子供はどこまでも先入主によつて支配さかることが解かる。
「おほみや」と「たほみや」との押問答をしてゐるうちに、汽車は既に發車した。あたりは眞闇で、夏のうつくしい景色が見られないのは、殘念であつた。
美代子は讀書にあいたと見えて居眠りを初めた。可愛さうにと思つて横にねかしてやると、スヤ〳〵と寢入つて了つた。今夜は思つたよりも涼しく、そして汽車の中は蚊もゐないので、ねごゝちがよささうに思はれた。うしろを見ると、赤ン坊をだいた外の奥さんも、首をカクリ〳〵させてゐた。
宇都宮も小山も白河も夢のうちに越して了つた。そろ〳〵窓が明るくなり初たので、「オイ〳〵美代子さん、明るくなつてよ」と揺すぶつても、中々眼を覺まさない。郡山に行つてやう〳〵おき上つた。
「おとうさん、もう太陽が出たの」
「えゝ、とうに出ましたよ」
「もう明るくなつたんだね、夜があけたんだね、おかあさんは、もうおつきしたでせうか、——半田につくのは、まあだですか」
「もうぢきですよ、福島こすと直ぐです」
「まあだ福島に來ないの　隨分遠いわね！」
山や原や森や畑や家や　田などが、刻々にうつりかはつて行くそのうつくしい景色を、ボンヤリ眺めてゐるうちに汽車は松川のトンネルをくぐつて、信達の平野に走つて來た。
「もう福島見えますよ、アレが信夫山、アレが辨天山」

味とをそゝるものであるらしい。殊に文字を覺え初めた子供にとつては、幼稚ではあるがしかもやゝ神秘な、そして優しい想像と究知心とがそゝられて、どの頁も新しい知識で、獨創的で、面白いものであつた。實に讀書は子供にとつて極樂の世界である、うつくしい想像の別世界である。

美代子はまだ幼稚園にも行かないが、片假名と平假名とは全部覺えて自由に書くことも出來た。そして小學讀本の卷の三までは、自由に讀んでゐた。

「おとうさん、この本はいゝ本?」と突然尋ね出した。「どうして」と問ひ返すと、「こゝにサヾナミツクル、シヤウタラウエガクとかいてあるから」

「そう、それはよい本です、それをよく覺えると立派な人になります」

「ほんとに? あゝこれはサヾナミさんが作つて、庄太郎さんが書いたんだね、えらいねえ!」

『ヒルノ ノハラハ オモシロイ
バツタガ オホゼイ トビダシテ
アレ キヤウソウヲ ヤツテヰル
マケルナバツタ ソレ バツタ
ヨワイハマケタ ヘタバツタ』

アハヽ——おもしろいね!

『ヨルノ ノハラハ ニギヤカダ
ムシノガクタイ オモシロイ
チンチンチロリン チンチロリン
キリキリ ハツタ キリハツタ
リインリインイント スズムシガ
ナケバ ガチヤガチヤ クツワムシ』

アハアおもしろいね、おとうさん、おとうさんはかういふ風にかける?」

「かけないね!」

「さゞなみさんはえらいや」

「おとうさん『トモダチ』もいゝ本でせう。これはだれが書いたの?」

「それはね、うむ——寺田先生!」

「寺田先生 ずいえぶんえらいね! おとうさんよりもえらい?」

これには自分も閉口した、偉いと云つてよいか偉くないと云つてよいか、一寸當惑した。

「おとうさん、おばあさんはまだ溫泉にゐるんですか」

「まあだ這入つてゐるの」

「隨分長いわね！　おばあさんの足は直つて？」

「まあだ直らないでせう」

「わたしが來たので喜ぶでせうか」

溫泉につくと、父も母も不意に行かれたので吃驚したらしかつた。しかし美代子を伴れて行つたので、父母のよろこびは一方でなかつた。母は自分の病苦を忘れて孫の壯健を祝福した。

母の病氣は春頃と全く變りはなかつた。母は涙ながらに自分の病苦を物語り、闇黒な悲しい經過を豫想してゐた。いくら慰めても闇いそして苦しい運命を脫すること六ケ敷く見えた。自分もうまちは長いものと聞いて居るが、春頃の經過と全く變りがないのを見て、大に驚きもし、母に深い同情を寄せずにゐられなかつた。

四月中旬母を見舞つたときは、恰度O君の紹介でY町の醫師W氏にかゝつたときて、經過頗るよく母の希望も明るさがあつた。膝は今よりもズツト腫れてゐたが、水藥を塗りつける毎に小さくなるやうに感じ、痛みも日毎にうすらぐやうに思はれた。この分で行けば忽ちよくなると思つた、そして「阿母さん五月になると屹度歩けるやうになりますよ」と言つた。

ところが五月はおろか、六月になつても七月になつても殆んど變りがないのには、母も父も外のものも定めし失望したことであらう。W氏は「飽きないやうに服藥して呉れ」と言はれたが、餘りに長く而かも何等の效果も見えないに至つては、何人も飽かざるを得ないのである。飽いて來ると自然心も迷ひ易い、仙臺定義の「退癌散」がよいとか住の茶釜藥がよいとか、或は名僧の灸がよいとか、湯治がよいとか、酢湯がよいとかいろ〳〵なことを人から聞くと、それをやつて見たくなる。併し病勢の衰へぬうちは、何をやつて見ても效果がない。萬正寺の渦泉に三十日ばかりゐたが、少しもよいことはない、却つてこの頃は、二三分もかゝつて漸く足を伸べたり縮めたりすることも、非常な苦痛だと言つてゐた。

「さう？」と美代子は汽車の窓から覗き出し、「あゝ見える、見える」と小さい手を打つてよろこぶ。——「わたし信夫山で藝者の踊りを見だつたね！そして辨天山でおだんごを買つて食べたのよ！」——やゝ想像に沈んで「おとうさん、渡利はよかつたね！　けしきはよいし、奇麗な河があるし、ひばりは鳴いてゐるし、——ねおとうさんあだ天沼さんねるてせうか」となつかしい記憶をよび起す。天沼といふのは渡利に居るとき、美代子が毎日遊んだ男の子の名であり、辨天山といふのは渡利の東南隅にある小さい山で、阿武隈川をへだてゝ福島市に西面し、市の全景を眺望するに絶好のところである。

有名な飯坂温泉に遊ぶ人が下車する伊達驛（元の長岡驛）をすぎて、桑折驛についたのは朝の七時半であつた。やう〳〵自分の故郷についたと思つた、そして初めて安心した。幼い子供を伴れての旅行は、中々心配なものだ。これから自分の（父の）家までは約一里ある。

下車して停車場の構外に出ると、同じ屋敷のKといふ人に遇つた。Kは鑛山師であるが、中々金が儲からないと見えて不景氣な顏をしてゐた。

「私の母は家に歸つたてせうか、まだ温泉に居りますか」

「まだ温泉に居られます、今日はあなたの阿父つあんも行つて居られんてせう。」

温泉といふのは桑折驛から西方約五丁、睦合村萬正寺にある温泉である。高館山の麓、川の畔りであつて一寸閑靜なところであるが、温泉とはいふものゝ自然の出湯ではなくて、鑛泉の沸かし湯である。それでも浴客は常に絶えないさうである。

母は春からのりうまちすで手足の自由を失ひ、足を前に伸ばして座つたまゝ、自分の用さへ自分で出來ない悲しい有様、多くの醫者にもかゝり、色々の藥も服んで種々の手當を盡したが、殆んど何等の效果もないので、再び温泉と思ひ立つて一ケ月ばかり、こゝに來て居るのであつた。

母はまだ温泉に居ると聞いたので、一時も早く行つて見たくなり、子供をつれてテク〳〵してゐるのがもどかしくて俥を傭つた。

二　高湯溫泉

例の如く八月二日の簡閲點呼も終つたので、四日に高湯溫泉に行くことにした、母は「子供なんか高湯まで行かなくとも、こゝ(萬正寺)のお湯で澤山だ」と言つたが、折角美代子を連れて來たのであるし、又遠くて度々來るといふ譯にも行かないから、愈々美代子をつれて行くことにした。病苦に惱んでゐる母に對して濟まないとも思ひ、又暑さと奮鬪してゐる兄弟や姉妹に對しても氣の毒だと考へたが、しかし贅澤な遊びに行くのでないから止むを得なかつた。

田舍は米が高いので一般に景氣が惡い。東京あたりで四等米位の下等なそしてまづい米を上白だなど言つて、相當に高いのである。この米は今に五十錢になるとは、何人の口からも出る呪ひであつた。そして村人は若し米が五十錢になれば、屹度むかしの伊達騷動のやうな暴動が起るに相違ないと考へてゐた。このやうな時に溫泉に行くなど言つたら、徒らに世人の羨望と嫉妬と憎惡とをそゝるものであるとも考へた。しかし美代子の健康といふことには更えられなかつた。

「おとうさん、あした高湯へいくの？」

「えゝ、あした早く行きませう」

「あねやんは？」

「あねやんも一緒にいくのよ」

「さう！　うれしいね！　わたしすべ〳〵になつて來るよ」

美代子の遊び友達として、十五歳になる妹の淑子を連れて行くことにした。美代子は淑子を「あねやん、あねやん」と呼んでゐた。三人で用意して家を出たのは、四日の午前八時頃であつた。

この日は朝から暑かつた。僕は着物の裾を端折つて風呂敷包みを背負ひ、美代子も妹も裾をはをつて草履ばき、どうせ暑いし、子供を連れての旅行だからと思つて、汽車の時間を無視してゆつくり歩いて行つた。

「おとうさん、けふは隨分あついね」

「えゝ、休み休み行かう」

「わたし、おしりがびつしよりよ」

温泉には近村の婆さんや婦人子供が多いが、大河原在からも二人ばかり婆さんが來てゐた。居るものは大抵一週間位で長くて十日、中には二晩泊つたら歸つて來いと言はれて來たと云つて、こぼしてゐる婆さんもあつた。

自分は母を三四度お湯に入れてやつたが、中々重いものだ、これでは父上も容易でないと思つた。母はM字形になつて、右手を兩膝の下に入れ、左手を腰に廻はして抱きあげて入れるのであるが、中々容易でない。殊に足が痛からうと思ふと、どんな風に手をかけてよいか、一寸解らない。女中や女に任せると、思ひやりがないから、痛くて持つて貰はれないと母は言つてゐた。

「おばんちやんは、東京の孫さんが來て病氣も直りますべ」と、隣室の婆さん達が羨ましがつてゐた。美代子は直ぐに婆さん達のお友達になつて、「幼年畫報」を自慢顏に讀んで聞かせたりした。

美代子には何とも云ひないほど嬉しかつた。お婆さんの足が直らうが直るまいが、たゞその顏を見たゞけで充分うれしかつた。そして二年振りで田舍に歸つたので、凡てのものが珍らしくて仕樣がなかつた。八千代といふ女中と一緒にお湯に這入ると、下着一枚で後の山に行つたり、前の川に行つたりして神祕を漁つてゐた。

母はいつまで溫泉にゐても仕方がないといふので、八月二日の夕方、俥で靜かに家に歸ることになつた。俥の動きで手や足が痛からうと想ふと、立つて見送ること出來なかつた。自分は父と一緒に後から歸つた。

家では秋蠶を少し飼育して居るので、姉嫁も妹嫁も女中も一生懸命に働いてゐる、それに小さい子供がゐるので、迚もうるさくてゐられるものぢやない。母ばかりも靜かな室におきたいと思つて、父と一緒に屋敷のうちの隱居屋を見たが、二階は暑く階下は暗くて陰氣なので、とう〳〵家の西隅の涼しい室に居ることになつた。家に居れば騷々しいけれども、人手も多いし子供もゐるから、何かと便利でそして賑やかでよいと、母は負け惜みを言つてゐた。

を忘れて停車場に驅け出した人は、まだ戻つて來なかつた。

出かけないうちから用意したらくけて汗がにじみ出してゐたのに、燒けた灰を踏むやうな暑い田舍路を歩いては、迚も堪らなかつた。歩く毎に暑い埃が上つて足や裾にくつついた。路の兩側の小草は暑い埃りをあびて萎れてゐた。畦の溝は水が涸れて白くなつてゐた。

しよいこの婆さん達は二三町もおいたかと思ふとき、既に兩足は埃りで白くなり、日にやけた皺のある顏には汗が流れてゐた。しかし暑さや山道には慣れてゐると見えて、左程苦痛にも思はなかつた。僕なら嘗つて夏畦に働いた經驗もあり、又軍隊で鍛練された身體であるから、三伏の暑さや寸餘の埃などには一向ひるまないが、五十近いお婆さんがこの暑いのに、他人の重い荷を背負つて汗を拭きながら歩くのを見ては、そゞろに同情を禁じ得なかつた。

「婆さん、暑いね！足が燒けさうでせう」

「へえ！　今暑いさかりですから」

「しかし婆さん達は、よく丈夫ですね」

「でも山に登ると風があるから、涼しうございます」

「さうですか」

「この頃雨が少しも降りませんから、土も草もやけて餘計あついんです」

「さう！から雨がなくては、稻作に惡いでせう」

「はい、今一番作の大事な時です、どんな作になりますか、米ばかり高くなつて！」

「困りましたね！」

苦しい沈默で汗をふく。なぜ米が高くなるだらう？　誰が米を騰せるにしても、お上でどうにか出來そうなものだ、といふ呪咀と悲憤の雲が沈默の胸に騷ぐ。

「お孃さん、暑いでせう」

と言つて一人の婆さんは蝙蝠傘をうしろに翳す。しよいこは路に慣れてゐるから、小石のないところや、涼しい木蔭を求めて歩いてゐる。美代子は割合に安心であつた。可愛さうなのは妹であつた。

「兄さん、休みませんか、わたし暑くて仕樣がない」

「さう！高湯まで行けるかね」

美代子はあねやんと揃つて、暑さと地息にあえぎながら歩いた。一里ばかりの田舎道を途中三度も木蔭に休んで、桑折停車場についたときは丁度九時半、三人とも汗でびつしよりであつた。

汽車は十一時であつた。約二時間もゆつくり休んで元氣をつけて乘つた。福島で奥羽線に乘り換へるとき、鮭の鑵詰二個と林檎一籠を買つた。そして福島から約三里ばかりの庭坂驛で下車した。庭坂驛は奥羽線最初の停車場である。

高湯溫泉はこゝから歩いて行くのである。山道約二里半ある。所謂吾妻岳の中腹にあるのであるが、この暑い眞盛りに二里半の山道を思ふとウンザリする。

停車場前の小さい茶屋で、出來ないといふのを無理に晝食を注文して食つて居ると、五十位の二人の人が這入つて來た。この人々は微溫湯に行くのだそうである。微溫湯といふのは高湯の南の方て、約三里半ある。浴客は一般に皮膚病や徹毒の人が多いさうである。

暫くするとその一人が頻りに自分の荷物を調べ初めた。「何かなくなりましたか」と聞くと、「味噌漬を汽車の中に忘れて來ましたと、ねぼけたやうな顔付きでいふ。丁度汽車が停車場を發車した後であつた。次の停車場に電話をかけて驛員に調べて貰ふやうにと茶屋の主婦に言はれて、その人は直ちに停車場に驅けて行つた。地方の人々は大抵溫泉に行くとき、米や味噌や味噌漬などを持つて行くのが習慣である。

隨分間のぬけた人もあるものだと思つてゐると自分もこの暑いのに大事な扇子を汽車に忘れたのであつた。

晝食がすむと、茶屋の主婦に頼んでしよいこ（客の荷を背負つてくれる人夫）二人を傭つた。一人は荷物を背負ひ、一人は美代子を背負ふために。馬もあるさうだが、しよいこて澤山であると思つた。しよいこは二人共五十近いお婆さんであつた。

やがて美代子は下着一枚で婆さんの背に負はれ自分と妹とは矢張り裙を端折つて出かけたのは、丁度午後の一時半、暑い眞盛りであつた。味噌漬

答へた。これは先刻の微温湯の浴客で、一人はその荷物を負つた人夫である。人夫は婆さんの亭主であつた。婆さんは

「男足は早いもんだなあ！」と今更の如く頷づく。

「いつ頃微温湯につきましか」

「さうですね、四時につきますべ」

「おとうさん、あれは味噌漬を忘れた人ですか？」

「さうだらう」と笑つてゐると

「味噌漬あつたてせうか？なかつたてせうか？」と子供心に心配する。

和鐵山の茶屋につくと、大へん冷たい清水があるといふので、多くの客が休んでゐた。人々はお茶を飲んだり、ところてんを食べたり、ちまきを食つたりしてゐた。何よりも先きに冷たい清水を一杯のんだ、それから美代子と妹とはちまきを珍らしさうに、そしておいしさうに五六個づゝ頬張つた。婆さん達も勝手の方で何か食べてゐた。

歸り客の若かい青年が二人來て休んだ、そして床の間の赤い礦石を不思議さうに眺めてゐた。「お湯はこんでゐますか」と聞くと「少しこんでゐます今學校の休み時ですからといつた。

暫くすると、男の子供二人つれた先着の婆さんが、馬で出立した。馬の荷鞍の兩側に四角の炬燵櫓二個を倒まに結びつけ、子供は一人づゝ櫓の中に這入り、婆さんは鞍の前方に腰をかけて、兩足を馬の鬣に跨らして乘つてゐる。そして馬蚋でも警戒してゐると、至極安樂な旅行が出來る。この婆さんは吾妻屋に泊るといふことである。

途中でも一回山蔭の岩の上に休んだ。山の上も風がなくて暑かつた。婆さんは岩の上によぢのぼつて、白百合の花を取つて美代子に與へた。「アゝ奇麗だこと」と美代子は叫んだ。しかし百合も桔梗も全く取りつくされてあつた。

「お婆さん、高湯はまあだですか」

「もうぢきですよ、あの山をめぐると見えます」

土橋を渡つて小山を涼しげに廻つて行くと、美代子は突然「アゝ、卵のにほひがする！」と叫び出した。これは卵湯の香りであつた。卵湯は高湯よりも二三町手前にある溫泉で、湯は非常に奇麗である。しかし一般に礦氣が強いと見えて硫黄の

「涼しいところに行つたら休むから、元氣を出して一歩け」と馬鹿にしてつれてゆく。美代子は

『タラウ　ヤ　ダイブツカレタロ
　ケレドモ　オミヤモ　モウスコシ
　マキツタ　アトデ　ヤスムカラ
　ゲンキヲダシテ　オアルキヨ』

と小聲で獨り口を云つて、婆やの背で手を振つてゐる。堪えられなくなつて或る涼しい森の中に這入り、石に腰をかけたときは、一陣の風がさつと吹いて來て何ともいひない清涼であつた。森にはあひにく、水も茶もなかつたので、仁丹四五粒つゝ皆で嚙んで出發した。やうやく坂路である。

「婆さん、疲れたら適當な場所で休んで下さい」

「へえ、お茶屋が途中に二三軒ありますから――」

しかし山の上は涼しくなります」

と元氣をつける。道は新しく一間幅に改築されたので、數年前の凸凹のある狹い路とは比較にならぬほど立派な、そして樂な山路であつた。半道位づゝ隔つたところに小さい茶屋があつて、そして茶屋には冷たい清水があるし、ラムネ、サイダー、ビールの罐なども少しは列べられてあつた。人力車も或る所まではきくし、數日前には自働車が山の中腹まで登つたといふことである。近年東京邊の浴客も來るといふことで、この山中が急に開けて來た。

それに近頃、和鐵を發見したといふことで、高湯道の中頃で採掘し初めたので、山狂ひの礦山師が横柄な顏して俥に乘つかつて時々來る。それを發見したといふ茶屋の爺が、和鐵の赤黒い礦石を床の間に飾り、何々神と書いた妙な軸を下げて祭つてある。恰も成金神が突然舞ひ込んだけはいである。こゝにも屹度近いうち、毒々しい黄金崇拜熱が押しよせて來て山の莊嚴な神氣を瀆し、溫泉の美しい愛の女神を驅逐するであらう。

あゝ文明と俗化とは人間界の離るべからざる惡因緣である。

坂上の茶屋に休んで麥茶を飲んで居ると、三人の旅客が坂下の道を南に岐れて急ぐのが、桑畑の中から見える。しよいこの婆さん、これを見つけて「オーイ！」と呼ぶと、男の方でも「オーイ！」と

硫黄のやうについてゐる。之を見て湯の礦氣の強いのが解かる。湯花は旅館で賣つてゐる。

高湯は眺望のよいところでないが、高山の中腹であるから清涼の氣に充ちてゐる。朝晩などは隨分涼しかつた。澤を越した南の山には可なり廣い運動場が出たので、毎日そこに二三度づゝ美代子や妹をつれて行つて、ぶらんこに乘つたり、鐵棒に下つたり、驅け廻つたり、或は子供と一緒に可愛い唱歌をうたつたりして遊んだ。運動場からは信達平野の眺望や靈山の遠望がきく。溫泉では迚も強勉は出來なかつた。

夜はどの旅館も靜肅であつた。晝は運動場で散々遊んで疲れた美代子とあねやんとは、夕方お湯から上ると、線香花火を二三本づゝあかして遊んだ後、蒲團の上にひつくりかへつて各々自分の本を持ち出して讀むのが、たのしみであつた。

『ツンツンデンデン　ツンデンデン
　ケフハ　カハイゝオキヤクサマ――』

を讀んだり、

『アメハコタイデスカ　エキタイデスカ
　アメハ　ナメタイデアリマス』

など言つて笑はせるのが、美代子の一藝であつた。そして「あねやん、わたしね、もうこんなにすべ〳〵になつてよ！」と言つて、顏や手足を擦るのが毎晩の習慣であつた。

僕は一人で用意して來た old scotch Whisky を四五盃づゝ、ポツリ〳〵と鮭の鑵詰をつゞきながら、晩酌をやつた。それが無上の樂みであつた。深山に無限の瞑想に耽りながら、Whisky の神秘な涼味を掬するのは、實に宇宙の帝王の如き感がした。しかし惜しいことには、四合入れの Red Crown も四五回の晩酌で空になつて了つた。美代子は

「おとうさん、もう罎がからになつたの!?　隨分偉いわねぇ！」と吃驚した樣子、宇宙の帝王も破顏一笑せざるを得なかつた。

居ること數日、大分みな色黑くなつた。美代子も少し飽いて來たので、九日の朝早く歸ることにした。歸るに臨み旅館の主人は問ひて曰く、

「半田でゐらしつては、あの大文學者の野村……隱畔を知つてゐますか？」

臭ひがする。こゝには湯室一つと旅館一軒ある。こゝにつけば高湯に來たと同樣である。

高湯には旅館三軒と湯壺は內湯を除いて四室ある。旅館は吾妻屋、安達屋、信夫屋で孰れも大きい。吾妻屋についたのは午後五時であつた。二里半の山道を途中五回も休んで來たのである。

しかし旅館についたときは、愛憎滿員で失望した。空いた室がないから、割り込み（同室に他人と一緒に居ること）でなければ泊かれないといふのである。美代子は既に婆やから下りて、廊下を步いて喜んでゐる。他の旅館に行つても多分滿員だらうと思つたので、強ひて吾妻屋に泊ることにした。主人の態度や挨拶が甚だ不遜なので、何だか自分の信賴と自尊とを裏切られたやうな不快な感じがした。しかし給仕、今日來ると言つて手紙を出した人があるので、明けておいたといふ六疊の一室を借りて、ホッと安心した。部屋は床飾りもなく少しく陰氣であつたが、內湯の有る側でそして二階でなくて、子供のためには大そう便利であつた。」

部屋がきまると、直ぐ裸になつて出湯に這入つた。湯は元は熱つかつたのであるが、今では適當なカンで大人にも子供にも好鹽梅である。お湯の好きな美代子は大よろこびであつた。お湯から上ると

「おとうさん、もう足がすべ〳〵になつてよ」

とうれしさうに撫でゝゐた。

業が小學校時代に母と一緒に來た時分は、隨分熱かつた。それから十二年ばかり前、明治四十年頃に來たときも熱かつたやうに思ふ。元は三日一週りと言つたが、此頃は五日一週りになつたといふことである。しかし大抵の人は少くとも一週間位逗留してゐる。三ケ年も繼續して一週りつゝ入浴すると、子供などは非常に壯健になり、大概の病氣も直り。殊に腦病精神病のためには甚だよいさうである。

一日數くとも四回位入浴した、夜中におきて熱い湯に這入るのが非常によいさうであるが、今度は這入らなかつた。そして內湯よりも出湯の方に多く這入つた。湯壺の木の緣には、黃白色な湯花が

とを御ゆるし下さい。あなたのお本を拝見いたしますと「武蔵野の一角に立ちて」あらゆるものを静かに観、静かに考へられて居るお姿が目に浮びます。お苦しい様な氣もします。私共の忙しい生活を思ひますと。——かう書きかけた今も、腕白の長男はとんとんと二階へ上つて來て水差の水をこぼしたり墨をいたづらしたりして静かに筆とることさへも妨げます。——もしもあなたのお本の中に含まれて居る分子が、たゞこの静かさであり、その冥想であるに止るならば、今の私とはあまりにかけ隔つて居ります。

今の私は安心の代りに力を求めて居ます。弱きものがたゞ弱きまゝで救はるゝのでは到底滿足が出來ません。弱き者は強くならねばなりません。強くなることがやがて救ではないでせうか。

私はあなたの御本を讀んで磨り硝子の底に潜むやうな光りと力とを認めました。宗教の與ふる力とはまことにかういふ力。犯し難い意氣ではないかと感じました。實に、あなたはこの静觀の中から力を汲み取つて下さいました、この冥想の中にいひ知らぬ愛を引き出して下さいました。

あなたの筆つきはやさしいです。あなたの御考は現實の巷になやむものとはあまりに隔りがあるほどに静寂です凝視的です。而もその惠に流るゝ熱烈なるあるもの、きかぬ氣のあるもの、私はこれをあなたの御文章の一二に認めないては居られません。

私は今、あなたのこの點にひきつけられます。あなたの自然現象に對する觀察の力、これには定評がありませう。あなたの聖書に對する造詣、それはたゞその深かるべきを思ひて知らざるを教へらるゝ外には私には何事も出來ません。

たゞ私はこの一篇を通じて眞摯なる一求道者たるのあなた「生命を進ましめんとて」もがかるゝあなたをしたはしと感じます。

あなたにも自己の生命の糧となるほどな魂の數のこの世にすくないのをなげかるゝことがあるでせう。孔子に同情するあなたイエスに同情するあなたは、やがてこの心の糧に饑うるあなたの御姿ではないでせうか。

「それは僕です！」といふと主人はびつくりして
「へえ！さうですか？それは誠に失禮しました。それではあの福島の渡利にゐらしたのも貴郎ですか」
「えゝさうです、渡利に越した時、新聞記者がいろんなことを書いたものですから、甚だ不名譽になりました」
「いや不名譽どころではありません、私こそ何とも失禮しました。それならおへやに上つて何かお話を承はるのでありました」
と主人は吃驚と殘念の體、それから主人は數年前東京Y紙の記者K氏が來たことや、K氏が隱岐に因んで一詩を賦したことを物語り、それからK氏の書を立派な軸にしておいたのを、出して來て掛けて見せたりした。
初め甚だ傲慢不遜だと思つた主人は、急に慇懃になり、慇懃な態度にかはつた。旅館を辭したのは朝の七時頃であつた。
美代子は再び婆さんの背に負はれて歸つた。
「おとうさん、もう東京に歸るんですか」
「あした夜行で歸りませう、今日は半田に行つて」
「さう、あしたおかあさんのとこに行くんだね！うれしい！——おとうさん、わたしね、初めておかあさんのそばを離れたんでせう！」
「さうです、えらくなつたねえ！」（八、一七記）

「蜜の流るゝ地を求めて」を讀みて

鈴木龍司

別所さん——
の間もお本をありがたうございました。
心忙しい生活をして居る私は早速拜見はして置きながら、つい何も申上ずに今日まですぎましたこ

倫理上より米騒動を評す

一條忠衞

一　現內閣に對する不信任

今回の米騒動には色々な原因が有るやうだが、其の主たる中心の原因は云ふ迄も無く、米價調節の運動であつた。米は我が國では國民の主食物で、嘗て貨幣の役目を爲して居たゞけに、日本人の經濟的生活に於ては、實に衣食住一切の代表者である。常に金屬貨幣に對して、之を補正する公定相場の尺度を爲して居る。一切の物價の騰落に對して直接に大なる原因と爲り、それが直ちに國民の衣食住に影響して、吾人が生命の維持に死活の問題を提供するのである。米價が暴落しても國民の生命の維持に不都合を來たし、それが暴騰しても國民の生命の維持に不都合を來たし、その中庸を執つて民に用ふることが肝腎になつて居る。

私には「心の老いた」所謂教父だちに對するあたの反抗の心もこゝに認めないては居られません。

騒がしいこの世の勢利を煩はしと見らるゝあなたにも、所々見えざる事業に殉じた人々の姿に同情せらるゝの節々、知られずして終る人のなやみに心を寄せらるゝことの中に、私にはあなたの或るなやみが推し測らるゝ様にも思はれます。これは果して非禮なる想像でせうか。

最後に「日備取と木の實と」はあなたが教育に携はつて居らるゝことから特別なる感慨を懐きました。

曙の海

日高沈聲

○遠く鳴る潮の音に夜は明けて薄靄の海舟走る見ゆ
○潮鳴る對岸の山、朝霧の深きが中に夜ぞ明けにける
○曙の光みなぎる大空の澄み渡りたる夏の朝かな
○金泥を流せる如き太洋の夜明ばかくも美しきかな
○帆影の遠くに見るひろき海薄桃色に夜は明にけり
○ほの〳〵と薄桃色に明けてゆく東雲の海島浮きて見ゆ

二　非立憲なる官僚思想と立憲的なる民本思想との衝突

斯様に今回の米騒動の中心原因は、米價問題に關する現內閣の失政に對する國民の不信任にあつたが、然るに寺內々閣はこの騒動を目して暴民の蜂起であると思惟し、警察權を以て壓し、更に戒嚴令又は衞戍上の規則を濫用して軍隊を出動せしめ、良民を馬蹄にかけて蹂躙し、空砲を放つて一齊射擊し、更に實彈を込めて國家の大御寶を擊ち、銃劍をもつて　陛下の赤子を突つ殺したのである。そこで米價調節の運動に專にして他意なかつた國民は、その餘りに武斷的にして壓制なるを憤り、諸國一齊に呼應して官權の暴戾を罵り、生命を賭しても現內閣を倒さずんばあるべからざる激昂となり、燎原の勢を以て擴がつたのである。爾來、非立憲にして法治の精神を知らず、專制武斷にして民意を侮辱すること古今未曾有であつた寺內々閣であるから、人民の怨恨甚だしく制し難く官吏を見ること敵人の如く、軍人を見ること蛇蝎の如く感ぜしめた。斯くて呪詛の赴くところ、官臭を帶びた一切のものに對して破壞心を生じ、壓迫されゝばされる程強く堅くなると黑金の如く、官權に對して恐ろしき敵慨心となり、遂に官民の衝突は到る處に行はれ、人馬ために傷き、殆ど內亂に至らんとする光景であつた。その結果として地方には一時暗黑なる無政府の狀態に陷つた所すらあるので、放火、竊盜、强盜、殺人、强姦すら行はれた。

思ふにこれは明に從來我が國の政治に附隨する官僚思想の發揮に對抗する、國民の民本思想の高調である。我が國の內閣はその多くは公明正大なる政黨に基礎を置かず、常に黨の夜陰に乘じて現はれる如く一部の官僚によつて作られ、國民の輿論を無視し、官尊民卑、國家の政を行ふに公論によつて決せずに一二の私見によつて決し、常に專制的にして立憲的ならぬのが通弊である。それで政府が若し國民よりその失政を指摘される時は、忽ちに言論及び集會を禁じて民論を絕ち、警察及び軍隊の力によつて威壓して策の施すところ無からしむるのである。斯くて官僚政府は國民の口を箝

先年大隈内閣の時に米價低落して經濟界の不況を呈した事があつたが、政府は國庫支出を以て米穀の買上を爲して海外に輸出し、通貨を膨脹せしめて漸く平準を得たかと思つた所が、根底に於て一定の根本政策が無かつた爲めに其の度を失し、寺内後繼内閣に至つて更に之れを助長し、歐洲戰爭を奇貨として益々米その他の食糧品及び燃料品を海外に輸出して出超を誇り、兌換券を續發して通貨を膨脹させ、一部の富豪成金等の生活を利したのみに終つた。その結果として一般の物價を騰貴させ、米價暴騰して下層國民をして其經濟生活を不安ならしめ、彼等が生命の維持を日增に困難ならしめたのである。而も寺内々閣はその原因を米穀奸商の買占賣惜にありと爲し、國民の持米を調査公表し且つ外米の賣出を豫告して悲觀すべきにあらずと稱し、暴利取締令なるものを發したのであつたが、既にその時期を失して居たので何等の效力なく、水中の牛糞となり、却つて米價は暴騰に暴騰を重ねて空然の價格に達し、延いて一切の物價が昂騰して國民の生命は旦夕に逼り、遂に擧國を擧げて怨嗟の聲を發し、政府當局の冷淡と無能とを罵らぬ者が無きに至つたのである。斯くして民間の米價調節運動となり、それが社會的示威運動の形に變つて、怖ろしい今回の米騷動に化したのである。それで今回の米騷動は明に國民が現政府の米價調節の失錯に對する問責の聲であつた。而も日本國民の生命を維持するに最も重大なる米價問題の解決に失敗した現内閣に對する、不信任の聲であつた。殊にこの米價問題が天聽に達し、宸襟を惱まし、内帑賑恤金を下賜されるに至つては、現内閣が食物問題に關して無能にして米價調節に對して非常なる失政であつたことは掩ふべからざる事實で、將にその責任を明にし、自己の不德を恥ぢ、一刻も早く骸骨を乞ふて其の椅子を他の賢人に讓るべきである。自ら惡政を施して國民の輿望に乖き、彈劾の騷動まで惹き起されてもその椅子に齧り附いて吸盤を堅くし、敢て我が身の失德を省みる事を知らぬならば、實に驚くべき政治道德上の犯罪者である。吾々倫理學者の時に警告する所である。

と言つて能からう。既に國民の人格に斯く迄も政治道德上の良心を生じ、獨立自治の國民に達した以上は、今に至つて之れを武斷的に一齊射撃を以て鎭壓しようと思ふなどは極めて兒戲に類することであり、強いて之を爲さんと欲する殺人內閣が繼續するならば、米騷動は幾度でも起るだらうし猶ほそれよりも一層猛烈なる國家的大騷動に及ぶ無きを保し難いのである。吾々は日本帝國の爲めに斯かる不祥事を二度と見たく無いから云ふのである。

三　富豪の奢侈淫佚に對する一般國民の憤怒

それから今回の米騷動で著しかつた特徵は、到る所で米穀商が襲撃され、米穀取引所が破壞され、奸商が退治され、戰時成金が脅され、高利貸が迫害され、備主が勞働者より賃銀の値上を要求され、富豪全體に亘つて政府又は有志團體から寄附金を要請されたことである。これから推して見るに、今度の米騷動は、米價暴騰に苦しむ者と苦しまぬ者との對陣となり、反感となり、衝突となり、遂に腕力に訴へるに至つたことを證明して居るのである。換言すれば、今回の米騷動は一面から見れば明に貧富の爭であつた。蓋し富者と貧者とは人間の經濟的生活に於ては、兩極端の對立である。幸福と不幸との矛盾である。若しこの二者が全く別箇の社會に住んで居て、其の間に何等の生活關係を有して居ないならば、米價が幾ら暴騰しても人を怨み世を呪ふの道理は無いのである。けれども、富者と貧者とが一箇の社會に同棲し、而かも同一の國民として同胞の團結を爲し、國家經濟の增進に關して直接間接に努力し、相互に扶け合つて利益を交換して居るので、他人あればこそ自己も生きて居れるのである。自己と他人とは共生であつて、唇齒補車の關係を有して居る。卽ち個人と社會とは一身同體のものであつて、吾々の經濟的關係に於ては連體的であり協同的であることが了解される。富めるも貧しきも、等しく社會の一員であつて、互にその恩澤を社會的に蒙つて居るので、自己の社會に全く無關係であると云ひ得る者は一人と雖も居ないのである。それで此の同一

し手足を縛して、徐に自己の劣惡なる政見を布いて私腹を肥し、唯だ我が功名利達を念として毫も國民の福利を顧みないのである。然るにかゝる政治の不德にして失敗に終ることは古來よりの定論であつて、殆ど批評する價値も無いものである。六韜には『天下は一人の天下に非ず、乃ち天下の天下なり。天下の利を同じうする者は天下を得、天下の利を擅にする者は天下を失ふ。天に時あり地に財あり、能く人と之れを共にするは仁なり、仁のあるところ、天下これに歸す。』と書かれてある。管子には『政の興るは民の心に順へばなり。政の廢るは民の心に逆へばなり。』とある。論語には『政を爲すには德を以てす。譬へば北辰の其の所に居て衆星の之に共ふが如きなり。』とある。更に『其の身正しければ令せずして行はれ、其の身正しからざれば令すと雖も從はず。』ともある。民意を重んぜざる非立憲なる官僚政治の末路は、極めて明瞭で、說明を俟たずして知られる性質のものである。それで天智天皇は下の如く聖斷されて居る。『其れ天の君を立つるは、是れ百姓の爲めなり。然れば君は百姓を以て本を爲す。古の聖王は一人の飢寒も之を顧みて身を責めたまふ。今、百姓の貧しきは則ち朕の貧しきなり。百姓の富めるは則ち朕の富めるなり。未た百姓富みて朕の貧しきは之れ有らず。』と。非立憲なる官僚の輩は、幾度もこの聖斷に現はれたる民本思想を反讀すべきである。

今度の米騷動は大阪が最も甚だしく、實に代表的であつた。大阪は曾て天智天皇の都された所で烟氣城中に起たざるを憂へ給ふて、三年の課役を免ぜられた地である。然るに昨今、米價暴騰して再び烟氣城中に起たざるに至り、人民飢餓に逼り遂に自ら奮起して米價調節の擧に出でたのであつたが、武斷殺伐なる官僚政府の爲めに兵刃を以て脅さるゝに至り、內帑賑恤金の御下賜があつたので、流石の野蠻なる官僚內閣も今更恐懼措く所を知らざる有樣になつた。之れを以て觀ても、今回の米騷動が軍閥によつて作られたる非立憲なる寺內々閣に對する一般國民の民本的憤慨であつて、人民によつて爲さるゝ立憲政治の澎湃なる思想であ

ば梶も取り艪も漕ぎ、或は深海に飛び込んで魚貝を漁つて生活して居るので、自ら意思が強固になり、獨立自存の氣象に富んで居る。夫が働きが無くとも意に介せず、却つて自ら働いて夫を養つて居る者すら多いのである。海濱又は島嶼に生れた女子が男子勝りに氣慨あり、權力が強く、女子の社會的地位の高いのは一般的であると云つて可い。隨つて此等の漁村に住む女子は經濟的獨立の思想が發達して居るから、家庭の生活に對する困苦と責任とを實感する程度が強い。昨今のやうに米價が暴騰して生活の困難なる時には、從つて收入も少ない點からその苦痛を感じ、これが救濟の策に對して大なる責任を感ずるのである。これは新しい教育を受けて會得したのでも無く、夫の入智慧によつて理解したのでも無く、全く自己の經濟的境遇から生じた自然的な自覺である。卽ち家庭の經濟的責任を男子の手に委ねて、その從屬者として生活して居るのでは無くて、女子も之れに加はり、相本位的に獨立の主體として解釋して居る結果である。それが爲めに米價暴騰して家庭の生活難を痛切に感ずるに至り、直ちに自治的にその解決に向つて運動を開始したので、數百人の婦人が團結して一の政治運動を起して、米屋、富豪警察署、市町村役場に押し掛けて米價の調節を圖つたのである。

それて其の精神に於ては自己の生命の維持を主張するので、その方法に於ては極めて自治的であり、民本的であつた。官尊民卑、男尊女卑の社會に於て、女子が斯の如き行動に出で、皷旗堂々として生活問題を携げて當局者と接衝したのは、日本女性史上の一大事件である。これは日本女子に到來すべき新なる氣慨を示し、その社會的地位を向上せしめる先驅者として、非常なる功績であつた。殊に戰後に於ける日本女子は、政治上に於て經濟上に於て、男子と機會均等なる舞臺に立つて國家の爲めに將た世界の爲めに活動しなければならぬ責任者である。それには一般の日本女子は男子に依賴する舊來の因襲を脫して、自治的に民本的に獨立自存の人格者にならねばならない。米騷動に於ける女子の團結的行動は、婦人運動の第一

の社會に屬して居る住民は、連體生活の自然的要求からして、機會均等なる生活權を人格の上に與へられて居るのである。その社會に生活することを何人と雖も禁ずる譯に行かず、又た何人からも禁じられずに自由に生活して能いのである。それで幾ら米價が暴騰して下層民に生活難を感ずることがあつても、富者はこれに向つて死を要求することは出來ないのみならず、社會連帶の責任からして之を救濟する方法を講じて、共にその苦樂を分たなければならぬ義務がある。又た生活難に苦しむ下層の人民は、富者に對して生活機關の獨專を警告し、公平なる分配を要求して能いのである。富者が考へて居る財產なるものは縱令私有財產であつても、それは社會連體の倫理的要件からして、公有物である。單なる私有に非ずして、公有の中の私有である。それで富者はこの自己の財產を最も有利に、而も社會公共の爲めに、消費すべき義務者である。而も自らこの財產を處分し得る名譽ある地位の人である。これが富者の使命であり、富の貴い所である。然るに生活難に苦しむ人民を利用して暴利を占め、奢侈淫佚を極め、社會同胞の苦痛を顧みぬ冷酷なる富者は、全く自己の使命を知らざる者である。戰時成金等が一擲千金の利益を懷にしてたわいも無い馬鹿事に費し、連日連夜遊興に耽つて散財振りを競ふに至つては、國家經濟の蠹毒なるを以て、一般民衆の怒を買はざるを得ない譯である。一圓に二升の米を買ふに全日又は翌日まで勞働せねばならぬ者の無數に居る社會に於て、一回に百圓の食膳を平げる者が居つては社會の物議とならざるを得ないではないか。今回の米騷動は全く一方に於て斯かる奢侈淫佚の行爲を專とする富者に對する世人の反感であり、憤怒であり、怨恨であり、道德的制裁であつた。

四　生活問題に對する女子の自覺

今度の米騷動は富山縣下の漁村に於て漁師の女房連によつて火蓋を切られ、續いて愛媛縣下又は兵庫縣下に於ける漁村の女房連によつて擧をされたのであつた。これは頗る面白い現象で、研究を要する點である。思ふに漁村の女子は生れ落ちると怒濤の聲を聞き、山なす激浪を眺め、長ずれ

意味に於て、今回の米騒動は一の倫理運動として將た正義に反する者を膺懲する道徳的制裁として我が國の社會に非常なる貢獻をしたと云ふべきである。唯だ恒産なき民衆の怒てあつた爲めに、自ら恒心なくして多少の亂暴に陷り、良民に迷惑をかけた點は幾重にも將來を愼まねばならぬ點である。是れは又爲政者に於て、特に勘考すべき點であつて、單なる犯罪人として法を以て民を罔するが如き暴戻なる司法官たらざらんことを祈る。若し司法官にして敢てこの暴戻を民に試みる不徳の官吏たる場合には、吾々倫理學者は彼等を道徳上の法廷に引いて、その犯罪を人道上より嚴正審判するに躊躇せざる者てある。

米騒動の後に

一記者

一

八月中旬、殆んど全國に瀰漫したる米騒動は是れ何の兆候ぞ。これは恐くは我國の社會的歴史に一新紀元を劃する現象といはざるをえない。大正三年の大戰爭前に比すれば賃銀は著しく增加したれども物價は二倍以上の暴騰を示した。衣食住に關する一切の物價は騰貴また騰貴となつた。殊に今春來國民の常食たる米は天井知らずの勢ひにて騰貴して一升五十錢を突破した。政府は百方手段を講じて調節を計つたが、その効がない。何となれば世界を通じての食糧缺乏のため、我が國の穀類が自然に歐洲交戰國殊に聯合軍側に供給せられた。兎に角歐洲交戰國に於ては戰死者八百萬を超え、負傷者三千五百萬を過ぎたりとせば、生産的に活動する人々の缺乏はいふ迄もない。この事實の存する限り、我が國の穀物が幾分づゝ歐洲に移動しつゝあるはやむをえない。米價はかくして暴騰した。而して當局は之を抑制することが出來なかつた。終に此度の騒擾の突發となつた。

騒擾は忌むべきことである。然れどもこれを豫防する方法を講じ得なかつた政府當局の責任は重大なるものである。現政府は徒らに言論の自由を壓迫するのみにして、この方面に就いて何等積極

歩に於ける勝利として、月桂冠を得たものである。若し教育ある女子が今後相率ゐて斯かる團結的行動に參加し、女子の社會的地位を開拓して止まなければ、女子參政權問題に於ても、女子勞働問題に於ても、破竹の勢を以て成功するであらう。今や我が國の女子は唯だ進むべき一事あるのみである。引つ込み思案に耽るべき場合では無い。

五　結　尾

之を要するに、今回の米騒動は米價調節に失敗せる現內閣に對する不信任に由來したのであるが先づ女子の生活問題に對する自覺によつて火蓋を切られ、社會的示威運動となるに及んで男子がこれに呼應して事件は益々大になり、日本全土に擴張されたのである。然るに現內閣が非立憲なる官僚內閣であつたが爲めに、その特色を發揮して武斷壓制を極めるに至り、騒動は急轉して立憲的なる民本思想の大反動となり、遂に官民の大衝突を演じたのである。傍ら現政府に保護されて巨多の暴利を占めた大小成金の奢侈淫佚に對する一般人民の激怒は、化して貧者の富者に對する制裁となり、事件は益々錯雜して、大正年間に於ける大騒動となり、日本歷史に一大不祥事を殘したのである。

けれども幸に吾々はこの騒動によつて幾多の有益なる敎訓と結論とを與へられた。先づ專制武斷主義又は利己的個人主義が凋落して、社會連體的生活の時代に入り、協同の倫理を以て精神と爲し人格の平等權を以て民本的に生活するやうに成つたことである。人生に於て生命を維持し、個人の人格をその社會に實現して行く上に、機會均等なる、經濟的生活を條件とするやうに成つて來たことである。一言で申せば、協同の倫理（Ethics of Co-operation）を奉じて、個人主義と社會主義とを調和した、人格主義の時代に這入つて來たのである。これは世界の大勢であつて、人生の理想の赴く所であるから、吾々はこの思潮に棹して人格を完成しなければならない。これは最近に於ける倫理學者の通論であつて、亦た實に民衆の聲として各人の人格的意識に現はれつゝある。今回の米騒動に於て、それが明に發揮されたのである。この

何等かの暗示を受くるや、忽ち放火掠奪を敢てして恥ぢず、是れ大國民の襟度を有せざるもの歟へられざるもの罪なきが如しと雖も、吾人は大に民衆の自重を促がさゞるをえない。示威運動は宜しく堂々たるべし、決して破壞運動に始つてはならない。今後民衆は如何にしてこの意志を表白すべきかを研究せねばならぬ。又今後の政府の教育の方針も大變化をなさねばなるまい。從來の形式的教育を放抛して生活を基礎としたる教育を行はねばなるない。當局者は都市もしくは炭坑等に集まれる勞働者の教化に一層熱心せねばならぬ。殊に特殊部落の人士に對する優遇、朝鮮人に對する態度をも一變せねばならぬ。神戸、京都等に於て是等の人々が騒動の渦中に投じたらしく傳へらるゝは多少の事實があるからであらふ。

之と同時に所謂成金者流の生活が一變せねばならぬ。彼等の虚榮的生活は禁止せられなければならぬ。貪欲飽くなき高利貸業者の如きも此際大に反省せねばならぬ。富豪の使命はその富を社會公共の事業に使用するにあり。之を怠る者はかゝる騒亂の際に民衆怨恨の府となること往々にして然り。誡めなければならぬ。宗教家も一方に於て理想と信仰を說くと共に、生活を基礎として之を說くことを忘れてはならぬ。政府當局者も此際責任を負うて内閣總辭職をなして、民心を緩和すべきである。一切の過去をして、將來の幸福の原因たらしめよ。此度の騒動によりて我が國の社會問題が重要視せられ、この解決法に一段の進境あらば吾人は禍を轉して幸となすことをうるのである。

的施設を試みなかつたではないか。現政府はよろしくこの責任を負ふべきである。

二

概して民衆は柔順なるものである。彼等は好んで亂をなすものでない。されど彼等一度起たば群衆心理の作用の結果として豫想外の結果を生ずるのである。故に民衆をして大不平なからしめ、滿足と感謝と希望とを以て日々の業務に從事するやう、指導し訓練するは當局の大なる責任である。由來我が國の代々の政府はこの點に於て懈怠の譏りを免かれないのである。

記者嘗て英國に於て社會的敎育、經濟、慰安のあらゆる方法の存するを見て、この訓練と設備とありて、猶この國に惡漢罪人の存すること殆んど解釋に苦しむと思うた。我が國に歸るに及びて、かくの如く放任するにかゝはらず民衆犯罪者の數比較的に少きに驚いた。勿論文明國中に於て、我國の在獄者の數は最も多數なるは明白なる事實なれども、社會的敎化の手段方法の講ぜられざるに比すれば犯罪行爲の少きは國民性及び自然の影響に因るものと認めざるをえない。

當局者は徒らに社會主義を呪ひ、時には苟くも社會といふ文字さへも嫌ふに至りたるは言語同斷といはざるをえない。而して勞働階級に對する敎化、慰安の道は甚だ不完全なるに氣付かずして此度の騷亂を突發せしめたるは爲政者の無爲無能に驚かざるをえない。

一體、我が國は今や文明の過渡期に存するを知らねばならぬ。農業文明より轉じて商工業に、定住文明より移動文明に、村落文明より都市文明に島國文明より帝國文明に移らんとする過渡期にある。然るに從來の敎化及び政策は農業文明、定住文明、村落文明、島國文明を對象としたるものであつた。或は靑年團の統一となり、神社崇敬の奬勵となり、在鄕軍人會の組織となつた。是等は如上の舊文明を指導するに足れども商工業文明、移動文明、都市文明、帝國的文明を指導することが出來ぬ。

三

民衆も訓練と愛とを缺乏するが故に、その一度

弘道會より

□印●度●　なるカーシー●ヒルス●ユニテリアン同盟より、該同盟第三十一年會に於ける決議として下の如き挨拶狀が屆いた。曰く『カーシー●ヒルス●ユニテリアン同盟は謹んで日本統一基督教弘道會に敬意を表す。』猶本年三月本會總會に於ける決議に基き本會が該同盟に送つた挨拶狀に對しても深厚なる謝意を表して來た。

□米●國●　なるユニテリアン協會より未だ直接に本會に通知は無いけれども、クリスチャン●レヂスター●に依れば、今年五月開かれる該教會總會は下の如き決議を爲して居る。曰く『米國ユニテリアン協會第九十三年會は日本統一基督教弘道會に對して深厚なる敬意を表す。』

□佛●蘭●西●　のシャール●ワグネ（チャールス●ワグナー）と曰へば日本では『簡易生活』の著者として僅に其名を知られて居るけれども、彼れは實に佛蘭西に於ける自由基督教の一大指導者であつたのである。先頃彼れが永逝したに就いて米國ユニテリアン協會は總會の決議として特に吊意を表した程である。序でを以て佛國の自由基督教運動に就いて一言すれば、該國にはユニテリアンと稱する團體は無いけれども、ユニテリアン主義は儼存して居る。然もユニテリアン主義がリフオームド教會の中に大に行はれて居ると云ふに至つては甚だ興味深き現象と謂はなければならぬ。佛蘭西に於ける全リフオームド教會の三分の一強は自由基督教主義である。シャール●ワグネは過去數年間此の佛國自由主義リフオームド教會の會長であつたのである。日本に於けるリフオームド教會と曰へば所謂日本基督教會である。所謂日本基督教會は寧ろ保守的傾向を帶びた團體であるけれども、私共は其の保守的團體の中にも漸次同志者の出現するのを認めて愉快に堪へぬ者である。超宗派的自由主義を標榜する我會の使命は益〻重大である。

□教●會●合●同●問●題●　は新しく日本の教界の問題となりつゝある。八月初旬御殿場に於て開かれた平信徒大會は全國より百數十名の代表者を集めて此問題を討議したそうである。何等具體的の結論には達しなかつた樣であるけれども合同の氣運が動いて居る事は事實である。然るに米國新英州地方に於ては特に昨冬以來合同的精神甚だ旺盛であつたのであるが、近著の雜誌に依ればマサチユセツツ州ロウエル市の組合教會とユニテリアン教會とは去る六月終に永久的合同を斷行したそうである。今簡單に其經過を述ぶれば斯うである。戰時に於ける經費節減の一策として、今年正月ロウエル市の組合教會は同市のユニテリアン教會に對して石炭儉約の目的を以て冬季間合同禮拜を自己の教會に於て行はん事を提議した。而して此提議は直に贊同せられたが、當時組合教會には常任牧師を有しなかつた爲め、ユニテリアン教會の牧師は組合教會牧師代理の職をも兼ぬる事となつた。然るに此合同禮拜は最初より非常なる成功であつた。出席者は從來別々に集會した時以上に多數であつた。新しき興味と新しき敬虔の念とは日曜毎に深まつて來た。日曜學校も合同の結果大成功を示した。且つ從來ユニテリアン教會のみの牧師であつたハツセー氏は從來組合教會で行はれて居た祈禱會をも指導して從來に比較して非常に多數の出席者を得るに至つた。而して斯種の合同禮拜は嘗て本誌五月號に紹介

旅嚢より

内ヶ崎作三郎

青桐のしげみをわけて鳥海の山の雪より凉風來る。（酒田にて）

あさな〳〵いみじき空のみ光をうけてや開く紅蓮白蓮。（尾張にて）

志波山に國見し立てば綠りこき廣野かすめてすゞ風ぞ吹く。

虹のごと影を巨流にひたしつゝゆきゝする人しはの大橋。

野を山を夏はかざれど北上の流九十九里たゞ秋の聲。

みちのくの紫波の郡の夏盛り金瓜一皿凉風を呼ぶ。

天地のくしき力のあらはれか龍蟠虎踞の槲の大樹。（陸中日詰にて）

岡田哲藏著

我が斷片

價金貳拾錢　稅金二錢

MYFRAGMENTS

金貳拾錢　金貳錢

右合本

金四拾錢　金四錢

我が環境

金六拾錢　金四錢

MYENVIRONS

金四拾錢　金貳錢

發行所　東京市芝區三田

振替東京一〇〇〇三番
電話芝五八五五番

六合雜誌社

彼は何物をもことさらに作爲せんとはせぬ。然し彼が感受し、觀察し、判斷するものが自然の形に成り出づる。かくして成れる自然の作が「我が斷片」として見はれたのは三年前である。其後の作の集まれるを分類し配列したのが「我が還境」である。彼はさきに數年の觀察と思惟の結果を集めて「靜觀と思想」と名くる一論集とした。その範圍は主として今の思想界、卽ち他の人の心の世界であつて、それを攻究の對象としたのであつた。然してその成果は世の常の論文の形であつた。「斷片」と「環境」とはかく人の心界に限られず、他の思想に介せられず、彼自らが直ちに自然に接し、人生に接し、得たるまゝの印象を表現したのである。その表現の方式も、散文とも詩とも就かぬ、自由にして獨特のものである。然して成し得る限り短き辭に多くの意義を包含せんとの試である。自由に眞實に他の思想や形式に累せられざらんと願ふのみならず國の境を越え、時の流れの外に立つは彼の望である。

した通り、單にロウエル市に止まらず、新英州各地數十の教會に於て實行せられたのであるが、ロウエル市及び二三の他の地方に於ては此種の合同を永久的の者にしやうとの議起り、ロウエル市は率先して其理想を實現し、終に同市に於ける組合及ユニテリアン兩教會は全然一個の新教會を組織しAll Souls Church, Cong. regational-Unitarian（組合主義且ユニテリアン主義なる凡ての靈魂の教會）と命名するに至つたのである。從來教會の合同と曰へば村落に於ける教會間か、若くは極めて微力なる教會間にのみ行はれた事であつたが、右ロウエル市に於ける合同は其資力に於ても其歷史に於ても組合派及びユニテリアン派に於て極めて重要なる地位を占むる兩教會の間に行はれたのである。米國の教會史に關する多少の知識を有する者に取つては如上の出來事は實にエポックメーキングの意味を藏する事件である多くの點に於て米國の基督教會と極めて密接なる關係を有する日本の基督教界に取つても如上の事件は極めて重大なる意義を持つ者であると思ふ。（今岡生）

我等の宗教

毎月一回五日發行
定價一冊金七錢
稅五厘
一ヶ年稅共金八拾錢

我れ等同人相計つて、宗教の本質を學理的にも又實際的にも研究する所の新誌を發行し、以て眞に自由主義の基督教を徹底せしめんとす。載せんと期する所の大略は凡そ(一)聖書の研究、特に難解の章句(二)耶蘇傳の研究(三)諸教の研究(四)近代の思想と宗教(五)宗教哲學上の根本問題(六)我れ等の信仰(七)如何に兒童に聖書を物語る可き乎等なり。

(第二卷第八號)——八月五日發行——

□民衆と人格……三並良
□エスの演說……寺岡たみ子
□金(ディヴィース)……瀧内秀網
目次
□幕の彼方……大橋房子
□自己凝視……沖野岩三郎
□新しき酒と古き革嚢……さち子

(第二卷第九號)——九月五日發行——

□第二年の卷頭に題す……三並良
□一歩の差……三並良
□暴君のなやみ……大橋房子
□默示錄系の思想の評論……三並良
目次
□默せる心……芳夫
□尋ぬる人々(メースフイールド)……瀧内秀網
□曲線……ふさ子

發行所 東京市芝區三田四國町 宗教研究會
振替東京三八三九四番
電話芝五八五五番

統一基督教會集會案內

一、禮拜說教（每日曜日午前九時）擔當　三並良

一、傳道講演（每日曜日午後六時半）　沖野岩三郎

一、聖書講義（每日曜日午前八時）　三並良

別揭廣告ノ通リ

一、靈交會（每木曜日午後六時半）　沖野岩三郎

舊約聖書を研究中、猶會員諸君の信仰告白、宇宙、人生等に關する質疑等有りて頗る有意義の會合也

一、日曜學校（每日曜日午前八時）　諸家

滿五歲以上の少年男女の入學を歡迎す

□どの集りにも、又どなたでも自由に御出席、御聽きになるとが出來ますから、御遠慮なく御來會下さい、歡迎いたします。

東京三田芝園橋際

統一基督教會

電話芝五八五五番

自由基督教會集會案內

但し自由教會は夏期中集會は悉く休む。

□講演（每日曜日午前十時より）

內ヶ崎作三郎、安部磯雄、岸本能武太、岡田哲藏、小山東助、永井柳太郎、今岡信一良、相原一郎介の諸氏之を擔當す

□聖書講義（每日曜日午前九時半より）

相原一郎介氏擔任

□思想研究（日曜日午前九時）

Sir Oliver Lodge's "Substance of Faith" の輪講

文學士今岡信一良氏指導

以上會場は女子音樂學校講堂に於てす

□家庭集會（隔週木曜日午後六時半より）

各教會員の宅を巡回して開催し、相互の親睦を計り信仰に關する疑義を糺し共進互琢の實を擧げんとするものなり

□本會は大正四年六月成立し、自由基督教の立場より包容的信仰を宣傳し、現代の思想と生活に適應する宗教生活を樹立せんとする人士の組織せる獨立自給の團體なり、同感の士の來會を歡迎す。

神田錦町三丁目女子音樂學校內

自由基督教會

電話本局三七三九番

◎第一高等學校教授　三並良著　（好評嘖々）

新版

我は斯く信ず

四六判二百餘頁
定價金壹圓
郵稅八錢

□東亞之光評――著者の熱烈なる信仰を披瀝したものである。著者は熱心なる基督信者にして、強烈なる信仰の上にその生活を展開し、信仰を生命として現代に奮闘しつゝある人であるから、本書の如きも、徹頭徹尾熾烈なる信仰的感情思想を以て一貫し、何物をも燒き盡さずんば已まないの概がある、而してその所謂の眼目とするところは、信仰を以て、天地の大生命が人間界に移り來れる大なる化育の根源とし、吾人は、此基礎の上に立ちて絕えざる努力を繼續し行く間に、不知不識、神性が成長具備して來て、遂には、人間の生活をして、人間以上のものたらしむるに至り、眞の生命が活躍する。玆に於て、初めて、眞の力あり、自由あり、歡喜があり、神と交渉することが出來て、人世無上の光輝と歡喜とに浴し、眞に意義ある生活を營むことが出來るといふことを力說してある。

□日本及日本人評――舊信仰を打碎いて、それを流動する生命となし自己に吸收して以て科學的文明を背景とせる現世に於て新たなる信仰を得んとする著者の努力の跡を示したるものが本書にして、曾て二三の雜誌上に發表せられたるもの、飽迄も神を信じ其處に安心立命を求めんとする著者の眞摯なる努力を多とせざるを得ず、近時續出する輕薄なる俗書と類を異にす敢て江湖の一讀を勸む。

發賣　東京市芝區三田　振替東京一〇〇〇三番　電話芝五八五五番　六合雜誌社

本誌讀者諸君の特權

◎圖書取次！

一、東京市內發行の書籍ならば定價の金額丈御送り下さるれば別に送料は要しませぬ。但し法律書、醫書及び教科書は元價が非常に高いのですから送料を添へて下さい。

一、御送金は可成安全な振替貯金にて御拂込み下さい。（振替口座は東京一〇〇〇三、六合雜誌社宛）

一、本部へ當て返書を要する質問書御發しに際しては必ず返信料を添付して下さい。

一、御注文に際しては必ず書名著者氏名及び發行所等を御記し下さい。（海外よりの御注文は郵稅を要します）

六合雜誌社營業部
電話芝五八五五番

本誌定價			
壹冊	一ヶ月分	金廿五錢	稅一錢
六冊	半ヶ年分	前金壹圓四拾五錢	郵稅共
十二冊	一ヶ年分	前金貳圓八拾錢	郵稅共

●海外は郵稅一冊に付金八錢（淸國を除く）
●特別號出版の際は規定以外の代金を申受く

本誌廣告料		
特等	表紙二三四面	一頁 金貳拾圓
普通一		一頁 金六圓
普通二		半頁 金四圓

●表紙四面は一頁以下の廣告は御斷り申上候
●二回以上連續揭出の際は特別割引可仕候

大正七年八月廿八日印刷納本
大正七年九月一日發行

（毎月一回一日發行）

定價 廿五錢 本號

發行兼編輯人 東京市芝區三田四國町二ノ六 今岡信一良
印刷人 東京市本鄉區眞砂町三十六番地 日比野幸一
印刷所 東京市芝區三田四國町二ノ六 三光堂
發行所 統一基督教弘道會

發賣所 東京市芝區三田四國町 六合雜誌社
振替東京一〇〇〇三番
電話芝五八五五番

Library of the
PACIFIC UNITARIAN SCH
FOR THE MINISTRY
Berkeley, California

ライオン水歯磨

新涼肌に快き時

ライオン水歯磨の含嗽のさわやかさ！

ライオン歯磨
ライオン石鹸
東京市本所外手町
本舗 小林富次郎
支店 大阪東區博勞町四丁目
名古屋市角名町二丁目
上海・漢口・天津・北京

（明治廿五年三月二十七日第三種郵便物認可）（大正七年八月三十日印刷納本）
（大谷雜誌第三十八卷第九號）大正七年九月一日發行）（毎月一回一日發行）
（本號定價 金貳拾五錢）郵稅一錢

明治廿五年三月廿七日第三種郵便物認可
大正七年十月一日發行（每月一回一日發行）

六合雜誌第三十八卷第十號

六合雜誌

十月號

秋は實りの時なり知識の庫に收獲を急げ！

太田善男先生譯

英國デヰッド・ヒユーム原著

最新刊

ヒユーム人性論

■中判總布裝九ポイント約四百頁

定價壹圓七拾錢（送料內地八錢）

人生の妙諦を說て餘蘊なし

人間は何よりも先づ人間そのものに就て十分知らなければならない。卽ち『人性學とは何ぞや』てふ問題の解決が第一に必要である。ヒユームの人性論は正に吾人に此關鍵を與ふるものである。一讀哲學の堂に上り再讀宇宙の眞を把握し三讀人性の妙諦を悟る。千百の雜著は本書の一卷に及ばざること甚だ遠し。譯文平明更に拮屈聲牙の迹なし。從來一般哲學書を以て唯々難解のもの、とのみ思へる者は、恐らく本書に接して其卓越せる譯筆に驚嘆するであらう。

高橋五郎先生譯註

カアライル論文選集

總布裝四六版箱入美本
價壹圓參拾錢　送料八錢

カアライルをして一朝にして名を成さしめたる稀代の奇書『サートル・レザルタス』（一名衣服哲學）外數篇を譯出註解せるもの。著者は世界の文豪譯者は現今我那飜譯界の泰斗、巧みに原文の味ひを移へ得て亦譯筆の妙を極む。

戶川秋骨先生譯註

エマアソン論文選集

總布裝四六版箱入
壹圓參拾錢　稅八錢

本書は收むる所『神經說』以下八篇は何れも未だ嘗て我が讀書界に紹介せられざる一粒撰の名篇佳什である。殊に第五篇に論ぜられたる『戰爭と成金論』は實に現代に對する豫言的快文字である。敢て新秋の讀書界に本書を提供する所以である。

發行所　東京・麴町・有樂町　振替東京壹四四八九

阿蘭陀書房

本局電話　三四〇四番　四八七四番

千萬言の

説明を聽くよりは、此の
一管の實驗を御覽なさい
品質本位

くわおうせっけん

花王石鹸

石鹸試驗法

石鹸些し削つて試驗管に入れ之にアルコールを注ぎ好く振り混ぜて火に炙れば純良の石鹸は透明となる。若し混合物があれば沈澱し遊離脂肪があれば濁濁が見ゆる。又遊離アルカリを含むものは此の液にフユノールフタレイン一滴を落せば赤色に變ずる。

斯の如く純良無上の品質なるが故に絶えず帝國陸海軍、帝國大學赤十字病院等の採用品となり、化粧衞生の第一品として滿天下に賞讃を博するのです。

花王石鹸製造元
東京馬喰町
長瀨商會

■警世の一大良著■

早稲田大學教授
ドクトル、オブ、フヰロソヰ
北澤新次郎先生譯

ホランダー博士原著 貧乏根絶論

□現代の社會問題中最も根本的な然かも重要な問題は貧乏根絶の問題である。日本の社會問題も亦貧乏問題を中心として今や沸騰點に達せんとしてゐる。此際『貧乏根絶論』の出版は社會的に最も緊喫の事でなければならぬ。

□本著の原著者は米國ヂョンスホプキンス大學經濟學教授ホランダー博士。博士の學殖、識見及び社會問題に對する熱心が、世界的地位を有する事に就いては、今更ら述ぶる必要があるまい。

□譯者北澤新次郎先生は多年ホ大學に於て直接原著者に師事し、專ら社會政策を研究したる少壯學者で、早稲田大學教授たる事に就いても諸君の知らるゝ通りである。

□原著は一昨年出版せられ、米國の學界、政界に一大刺激を與へた名著である。其の學問的價値と實際的效用に就いては充分の信用を措くべく、又譯述も親切丁寧を旨としたから、吾々は確信と熱心を以て本書を推薦するに躊躇しないものである。

□上下に瀰漫した生活難の聲は、遂に爆發して怖るべき米騷動を惹起した。今や日本の心ある識者は、其の注意を貧乏問題に集中すべき秋になつた。吾々は此際此良著を學者、政治家、學生、社會改良家並に一般讀書子に提供し得る事を無上の欣幸とするものである。

■製本出來■九月一日發行發賣■

■菊版二百八頁■箱入美本■定價壹圓稅八錢■

東京市本郷區追分町一九
大學評論社發行
振替東京二〇九〇〇番

月刊雜誌
毎月一回
一日發行

人性

一部改正定價
金參拾錢
郵稅壹錢

六冊（半ヶ年）前金稅共金壹圓七拾錢◦十二冊（一ヶ年）稅共前金參圓參拾錢

人性十月號

科學的人生觀……佐多芳久
オストワルドの知識概論……池田直孝
岡田式諍坐の姿勢に就て……マスターオヴアーツ 岸本能武太
人の毛の話……理學士 阿部余四男
愛山文集を讀む……三上義夫
性的犯罪と過失……フランツ・ミルレル
幻覺と錯覺……醫學士 氏家信
現代の家の生活……文學士 吉田靜致
米國近時の救濟事業の新傾向……島村育人
合衆國に於ける戰時研究……テー・エー・エーツ

雜報

科學研究奬勵給費○交通機關問題○在外本邦移民○都市人口增加○陸上無電擴張○ナイル河の河速○衞生敎授任用○市の低能兒○米穀酒造禁止事項

新著

「螢と住血吸蟲病」○「生命の起原及進化」○「人類の搖籃地」

連載論文

人類は適應的「メカニズム」である……クライル 小野寺一男

東京市本鄕區龍岡町三十四番地
發行所 人性發行所 振替口座東京三八二二二番 電話下谷一六七二番・四〇七九番

THE RIKUGO-ZASSHI

No. 453 October 1918

CONTENTS

From Agricultural Civilization to Industrial Civilization. ..... Prof. S. Uchigasaki. 2

America's Participasion in the war. ..... Dr. S. Takahashi. 8

Religion and Faith. ..... I. Hitaka. 21

The Death of Gods. ..... Dr. R. Hoashi. 30

Super-Sectarian Faith. ..... Rev. N. Kubushiro. 42

A Christian's Criticism of Class-Conflict. ..... Rev. S. Imai. 47

Freedom and Limitation. ..... N. Kudo. 58

Ethical Theory of Meucius. ..... T. Ichijo. 66

The New Christ. (Poem) ..... H. Yosano. 80

The Soul's Field. ..... Prof. K. Sato. 83

Awakening (Poem) ..... M. Nakamura. 85

He is Dead. ..... Rev. I. Okino. 91

Topics of the Day.

New Books.

Publieshed Monthly by the

TOITSU KURISUTOKYŌ KŌDŌKWAI

2. Mita, Shikoku-machi, Shiba-kn, Tōkyō.

診察毎朝及毎夕 但祭日及日曜の他
院長 診察月木金午前及午後六時
林、峯間兩副長は目下當院に在勤
東京麹町區三番町卅番地(市ヶ谷見附内)
電番六二番
番五一六番

東洋内科醫院

醫學博士 高田畊安

南湖院

電話ちがさき二番
神奈川縣茅ヶ崎海濱(從停車場半里)
河野、高橋兩副長は目下當院に在勤
院長診察土曜日午後、入院診後應需
診察毎朝 但祭日及日曜及土曜の他

□孟子の倫理說……一條忠衞…六六頁

文藝

□新しき基督（長詩）……與謝野寬…八〇頁
□たましひの畑（長詩）……佐藤清…八三頁
□目覺め（長詩）……中村宗貞…八五頁
□罷工同盟（譯詩）……松尾敬天…八七頁
□虛心集（俳句）……一碧樓…八八頁
□ふみちやんより（長詩）……田中葦城…九〇頁

說苑

□彼は死せり……沖野岩三郎…九一頁
□新刊紹介　□編輯だより

六合雜誌

第三十八卷　第十號

論說

□農業文明より工業文明への推移……社說……二頁
□參戰前に於ける米國の輿論……高橋清吾……八頁
□宗教と信仰(上)……日高沈聲……二一頁
□神々の死(下)……帆足理一郎……三〇頁
□超宗派的信仰……久布白直勝……四二頁
□階級爭鬪信條の基督教的考察と批判……今井三郎……四七頁
□自由と制限……工藤直太郎……五八頁

研究

六合雜誌

十月號

□本書の出現は現代宗教界の一驚異なり

今井三郎氏著

宗教と生思想

△四六判總布製▽
△定價金貳圓▽
△送料金拾貳錢▽

增補訂正
第三版成る

凡そ現代人の生活に新しき意義を附與せる所のものは何ぞやと云ふに、そは萬有に徹する博大なる人類的愛と、社會的奉仕の中に自己の充足を見出さんとする共同責任感と、此二つの傾向なり。而して前者は宗教の目的とする所にして、後者は是れ民主思想の標榜する所に外ならざるが、今や此二つの生活意識が兩々相喚發して、今日の人間生活に新生面を創り出せるの事實は、政治にまれ、產業にまれ、文藝にまれ、一切の生活現象に徹して明かなるべし。本書は鴻儒バッカム博士の門に出て、社會哲學を專攻せる著者が、多年の蘊蓄を傾倒して、此等現代生活の二大動因たる宗教と民主思想とに對する史的解明を試み、併せて其發達を詳叙せるもの、苟も人生をより善く、より高く生きんと欲する者は、本書を繙く事により一大光明を發見すべし。

□現代人の要求を滿すは獨り本書あるのみ

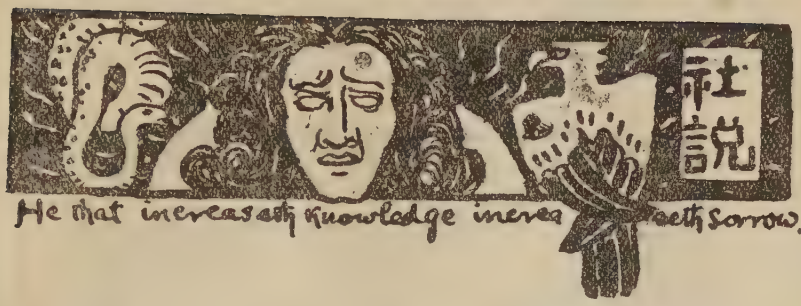
發兌　警醒社書店
東京尾張町
振替東京五番

クスたることが多い。然し乍ら、日本國民が少くとも二三の異人種の混成であることは事實である。而して此の日本國民は、屢々海外に發展を試みたのである。然るに其の後終に鎖國令一度出でゝ、德川三百年の治世によつて、我が國の文明は純然たる島國文明と化し去つたのである。

其の夢を醒ましたる者はペルリの黑船である。世界史上の日本は新なる出發點を見出した。斯くて日清日露の戰役を經、殊に歐洲戰爭の開始以來、日本の世界に於ける地位は益々重きを加へたのである。島國文明は過ぎ去つて世界的文化の潮は、澎湃として秋津島の岸邊を侵した。今日まで日本從來の思想生活に甘んじてゐたる者は、直ちに一切の價値判斷を世界の標準に對照することゝなつた。

是の如き思想上の一般的變化に伴つて、教育制度の改革が行はれた。維新前に於ては、一切の高等教育は一般庶民に對して其門戸を閉さした。而して辛うじて高等教育の堂に參じえたる武士階級も亦、若干の除外例を別として、比較的保守的な朱子學の一端を覗ふに過ぎなかつた。然るに佛國大革命以來、四民平等の權利は認められ、凡ての子弟は貴となく賤となく、一樣に國家の費用を以て普通教育を與へられることゝなつた。この風潮は我國に影響を及ぼした。我が國の小學教育は初め米國の制度に倣ひ、後獨逸の其を採用し、更に日本固有の教育思想の自覺に伴つて今日に至つたのである。卽ち日本は明治四十餘年の治世に於て、大なる教育上の革命を經たのである。のみならず新聞雜誌の普及は日本國民の知識慾を刺戟することが多大であつた。

この教育上の改革と共に、日本國民の科學思想は大いに發達した。近時文部省は訓令を發して、中等學校に於て物理化學の實驗室を新設せんとする時は、相當の補助金を與ふべしと云つてゐる。發明



農業文明より工業文明への推移

內ヶ崎作三郎

一

今回の米騒動には色々な見様が有る。或る人は之を階級爭鬪、卽ち上流社會に對する下層社會の反感であると云ひ、或る人は勞銀率を中心とする勞働問題であると云ふ。或る人は又特殊部落の一般社會に對する反抗であると云ひ、又或る人は露國の過激思想が我が國民に傳染したる最も由々しき結果なりと論じてゐる。これらの意見には何れも多少の眞理がある。否、寧ろ以上の種々なる原因が相合して這般の不祥事を起したのである。兎に角、今日の社會事情が、自然に爭擾の氣運を助長したことは、疑ふべからざる事實である。

明治維新を境界として、日本の文明は全く其の面目を一新したのである。維新前の日本文明は島國文明であつた。抑々我等日本人の祖先は、何處を以て發祥の地となしたか。日本の先住民族は果してアイヌなりしか。アイヌと熊襲とは同種なりや否や。是等の興味有る問題は今尙歷史家のスフイン

斯くの如き工業の勃興は、人間の精神をして合理的ならしめ、又自然と政治上の權利を一般社會に分配せしむる者である。殊に都市工業の發達は、地方農村の人口を吸收して、種々なる社會問題を起す。都市人口の稠密、之より結果する術生上道德上の弊害は、社會改良家の經營慘憺たる努力を要するに至つた。死亡率、特に幼兒の死亡率、私生兒、傳染病等は、都市人口の急激なる增加に伴つて益々多くなる。

今や是等の弊害を伴へる新なる工業文明は古き水田文明に取つて代らんとしてゐる。今日の工業は手工業より機械工業に進んでゐる。工場に働く幾百萬の職工女工は、日夕機械を相手として働くのである。彼等は次第に柔軟なる情操を失つて、本能的とならんとする傾向がある。彼等は單身鄉關を出てたる一種の風來漢に過ぎない。美はしき鎭守の杜や、靜けき祖先墳墓の地は、遠く百里の彼方にある。去る者は日々に疎し、彼等は終に鄉土に對する憧憬の念と祖先に對する崇拜の心とを失つて了ふ。彼の雇主は三代重恩の主家にあらず、唯々單なる勞働契約の對手である、生產過程の協力者である——と云ふやうな思想は、或ひは意識的に或ひは無意識的に、滔々として彼等の社會に流れつゝあるのである。

又一步を鑛山や炭坑の中に踏み入れよ。暗黑と苦痛と死の恐怖の外に果して何があるか。此處に働く所の坑夫の狂暴なる野獸的性質を帶びて來るのは尤もの事である。酒と女と歌と、それから彼の賭博とは彼等の生命である。ダンテは聖なる淑女ビアトリスによつて天堂に導かれた。然し乍ら彼等坑夫の樂園の關門は、是等の罪惡によつてのみ開かれるのである。——而も日本の勞働者は比較的に多

の奨勵に就ても亦、當局者は樣々に苦心してゐる。但だ科學思想の普及と共に、國民の心理が合理的になつて、單なる一片の感情に基く迷信や否更に信仰までも、多少之によつて減殺せられるのは免るべからざる勢である。

二

第三の、而して最も抱括的なる變化がある。何ぞや。日本、否、東洋固有の農業文明の外に、工業文明の發達したことである。維新前の日本の文明は農業文明、否、特に水田文明であつた。先祖傳來の財產と云へば、先づ第一は田地田畑である。其の田畑を根據として、代より代へと一定の鄉土に生活したる所謂舊日本の國民は、其の家、其の田畑、其の鄉土に對して棄て難き愛着の心を持つて居つた。彼等は土の子であり、土の人であつたのである。先祖代々の墳墓、一村一鄉の鎭守の神、是實に土に生れ、土に生き、土に死ぬる人々の思想の中心であつた。農民と迷信、農民と因習、これらは相離れ難い者なのである。

英國に於ては十八世紀の半ば頃より十九世紀の前半に渡つて、所謂產業革命が行はれた。この產業革命が今の日本に於ても行はれつゝあるのである。殊に此度の大戰亂が、我が國の工業を助長し、或ひは勃興せしめたことは實に多大である。現に大正六年中の新設會社の數は二千二百十六にして其拂込金は四億九千萬圓に達した。大正三年に於ける造船業は十三萬六千噸であつたが、六年度に至つて四十五萬噸となつた。大正四年十二月末に於て、職工十人以上を使用する工場は三百七十三であつたが六月末までに六百五十二となつた。其の他は推して知るべしである。

は必らずしも急進的に勞働者の合同を奬める者ではない。然し乍ら職工組合の成立を不快とする資本家にして、萬一にも彼等の間に一大トラストを起して、勞働者並に一般消費者の利害を顧みず、唯々私利私慾をのみ計るやうな事が有るならば、資本主義制度に對する呪の聲は終に已むことがないであらう。

政治には人民の代表權有れども、產業には勞働者の代表權がない。我等は今にして天下の資本家に告げる。工業文明の勃興と共に敬をのみ主とする所の道德は廢れた。新道德の中心は愛に置かなければならぬ。盲從の倫理衰へて協同の倫理は起つた。而して吾人の之を說く所以は、革命ならざる進化こそ、我等が聖なる憧憬であるからである。

■ 國家に對する至高の賜物は生命の血潮なり。 ——マツキンレ——

■ 『運命』は改善を含めり。宇宙の說明は、其中に向上的努力を容れざる限り、決して完全のものにあらず。 ——エマーソン——

量の知識慾を持つてゐる。一箇の銅錢を投ずれば、見よ世界の大勢は彼等の眼前に新聞紙上に展開されるのではないか。其處には何が有る、革命、擾亂、勞働爭議の報道があるのである。我が國も最早勞働不安乃至は社會的不安を、對岸の火災視することは出來なくなつた。知らず、我等の取るべき道は如何。

三

思うて此處に至る、現時の社會人心の動搖は、終に是れ農業文明の末期の呻きにして、又是れ工業文明の勝鬨である。人口の都會化は纏て又社會の工業化である。これよりして種々なる弊害が百出する。之を救ふの道は、農業文明の改善によつて、農村の改良によつて、都市の煤煙と共に四方に飛散する、工業文明の害毒を中和することである。戰後に於ける英國諸般の改造は、彼の地の識者の最も熱心に研突したる所であるが、而も事實は彼等のペンの如く、しかく容易に動く者ではない。

然るに思ひきや、英國の社會には一箇の豫期せざる福音が傳へられた。英國の農村が戰爭によつて復活せられた。開戰以來英國人は食糧の不足に苦しんだ。これがために國内の土地は殘す所なく耕され、戰前に方てローントリー其他の社會改良家によつて叫ばれた主張は實現された。我が國の農村は戰前に於ける英國の其の程衰頽してゐない。然し乍ら其の弊未た甚しきに至らざる今日に於て之を改善しなければ、果ては由々しい國家の問題となるであらう。

兎に角に、我が國は已に工業文明の時代に足を入れた。國民の頭腦は合理的になり、其の生活は世界的になつた。我等の一切の施設は、此の事に關する充分なる理解に基いてなされねばならぬ。吾人

代並びに將來の世界文明の骨子とせねばならぬとなして、悲慘なる大戰亂の火蓋を切つた獨逸の軍國主義、專制主義の跳梁跋扈を呪詛したのである。

第二は、英米兩國は等しく英語國民で、その國民的思想も感情も又はその社會組織に於ても、兩國は傳統的に相分離するを得ざる關係を有してゐる。米國の祖先は多くは英國より出でたのであるから、今回の大戰亂に際しても中立を標榜しつゝも、人情の上から自然英國に傾ざるを得ない。又佛蘭西は米國獨立戰爭の際、米國の惡戰苦鬪をなせるに同情して、多大の兵員と軍費を送つて、極力米國を援助し、前後十年間よく幾多の困難を排して、獨立革命の宿志を貫徹せしめた。それ故、佛蘭西は米國に取つては建國の恩人で、米國民は傳統的に佛蘭西の同情に感謝してゐるのである。この度の大戰爭に佛蘭西は獨逸軍の侵入を蒙り、國家の危機に陷つてゐるのを、袖手傍觀するは祖國獨立援助の恩義に報ゆる所以に非ずとなし、米國は大いにフランスの困難なる地位に同情したのである。

第三には、米國資本家及製造工業者の聯合國に好意を表したことである。開戰以來英國は嚴重なる海上封鎖を行ひ、獨逸の海外交通及貿易を杜絕せしめ、獨逸の經濟力を打破せんとしたるが爲に、米國の對獨輸出品は大打擊を受くるに至つた。それ故米國の豐富なる製造工業軍需品、食料品を獨逸に輸出するを得ず、こは米國資本家の最も苦痛とするところであつたが、之を聯合國に輸出して利益を獲んとしたのみならず、米國資本家は聯合國に巨額の投資をなした關係上、聯合國が勝利を得て、その投資の利益を保障さるゝことを願つたのである。もし聯合國にして敗北すれば、忽ち株式の大暴落を演じ、資本家は莫大なる損失となるのである。

第四には、米國は中立諸國の中で最も經濟力並びに天產を有する强國である。無限の天然資源を擁し、且つ絕大なる富力を有して、世界に雄視してゐるのであるから、米國の向背は交戰國に取つては實に大問題であつた。米國の好感を得て、石炭、鐵、銅、その他軍需品、食糧品を輸入せんと

參戰前に於ける米國の輿論

高橋清吾

參戰前の米獨外交經過

一　歐洲大戰開始と米國の態度

歐洲大戰亂勃發するや、米國大統領ウィルソン氏は、米國は嚴正中立を標榜して國際間に處する旨を屢々天下に聲明した。然るに獨墺兩國のあらゆる橫暴、輕侮を蒙りつゝ、陰忍よく平和政策を維持してゐた米國は、何故奮然蹶起して、その絕大なる富力と人力を賭して、聯合國と共に、乾坤一擲の大戰爭を敢行するに至つたか。私は今この問題を考察し、米國參戰の眞相を闡明したいと思ふ。

米國參戰の輿論を大觀すれば次の四大要素に歸着する。第一には戰爭開始以來獨逸は、自國の有力家を米國に派し、盛んに獨探及陰謀團を放つて、大規模の陰謀を行ひ、米國のあらゆる階級と聯絡を取り、米國民を籠絡して獨逸に左袒せしめんとした。幾多の獨逸系米人は獨探に使嗾されて親獨主義を採るに至つた。獨逸の陰謀が益々露骨になつて、全米にその勢を逞しうするや、比較的正義の觀念強く、愛國的なる國民は一齊に奮起して、陋劣なる獨逸陰謀を剿滅して、米國は世界に宣言せる嚴正中立を擁護せねばならぬと云ふ聲が起つた。獨逸人は文明國にあるまじき行動に出づるならば、米國は聯合國側に立つて、獨逸と開戰せねばなちぬとさへ叫ぶ者も出づるに至つた。殊に米國文明の中心と稱せられ、最も清敎徒的色彩強く、自由、正義の觀念に富んだ新英州地方よりは、ハーヴアート大學のエリオット博士卒先して、排獨論を唱へた。由來英佛の聯合國は、獨墺諸國の官僚、軍閥を以て國家組織の根本としてゐるのに對して、自由、平等の民主制度を以て國を形成してゐるのである。英米佛の民主的なる國家組織を以て、現

めるが、英國は非人道なる海上封鎖を行ひ、獨逸食糧の道を絶ちて、獨墺一億二千萬の非戰鬪員を饑死せしめんとするのである。その非人道的行爲は果して孰れにあるや。米國は獨逸の正當なる自己防衞の手段に對しては、手痛く抗議を申込み、猛烈なる追求をなすのであるが、英國の背倫非道の殘虐行爲に對して平然としてゐる。獨墺の手前抗議を試みることはあつても甚だ微溫的な八百長的抗議に過ぎない。米國政府の不誠實なる態度は、我國の忍び得るところに非ずと憤慨して、獨墺國民間には反米的感情は澎湃として漲つた。そこで獨逸は種々なる苦肉策を弄し、米國と、墨國、南米諸國、及びキユバ、ハイテ、又は日本との離間策を講じ、米國と利害を異にする諸國と軋轢、紛議を生ぜしめ、米國を窘め、ウィルソン政府の信用を失墜せしめんと試みた。

かく獨逸はその獨特の大規模なる陰謀を以て、獨逸系米人を放嗾し、又自國の有力者を米國に入り込ませ、又は駐米獨逸大使官員をして、全米に暗中飛躍をなさしめ、米國は宛然獨逸陰謀の策源地となつた。鐵橋の破壞、軍需品工場の爆破、軍需品運送船の爆沈、炭坑の同盟罷業、其他獨逸陰謀に依る大慘害が、瀕々として各所に起つたのはこの當時である。こゝに於て兼て聯合國側に好意を有し、聯合軍の不振に同情し、且つ獨逸の卑陋狡獪なるマキアベリズムの權謀を憎む米人の間には、對獨反感が鬱然として昂つたのである。自由正義を愛し、公明正大なる國策を重んずる米人の中には、かゝる非道なる權詐奸謀を以て、獨立國を攪亂せんとする文明の假名を冠れる野蠻國をば、自己防衞の爲め、正義の力に訴へて倒さなければならぬと叫ぶものもあつた。當時の駐獨米大使ゼームス・ゼラード氏はその著『滯獨四年』に述べて曰く『予が伯林滯在中獨逸國民は米國は嚴正中立を聲明せるに拘はらず、英佛の味方をなして、陰に陽に聯合國を援け、且つ外交上米國大使は國際法の上のみならず、實質上英佛の利益を代表擁護せるものと確信し、反米的氣分は日々に昂じつゝありき』と。

かくて獨逸は米國に對して極度の不滿を感じ、

したのである。それ故聯合國も獨墺諸國も、開戰以來種々なる方法を講じて米國を動かさんと非常な努力を盡くした。更らに交戰諸國は米國のみならず、南米、支那、其他の中立國に多くの運動者を送つて、その參戰の目的を宣傳せしめ、中立國の好感を博し、經濟的援助を得、あはよくば、中立國を說得して自分に加擔せしめて敵國に當らしめんとした。就中、米國に於ける親獨派の暗中飛躍は益々猛烈を極め、米國をして同盟國側に左袒せしめざれば已まぬと云ふ概があつた。その結果民間に於ては、聯合國派と親獨派とは錯雜混淆としてゐたが、米國政府は飽くまで嚴正中立を維持し、平和政策を採つたのである。されど予が滯米中精細に觀察したところに依れば、如何に親獨派が活躍をなすも、又如何に聯合國が米國の輿論を動かさんとしても、米國の參戰は問題ではなかつた。勿論獨逸の權詐極りなき奸策を憎むものは、自由の爲めに獨墺に對して宣戰することを主張し、政治界、新聞界、敎育界、實業界の一部には極端なる聯合國派が多くあつたが、米國は自ら干戈を取つて、獨墺と鐵火の間に見えんことは、爲政者も國民も一般に夢想だにしなかつたのである。

二　獨逸の對米不滿

獨逸はあらゆる努力を以て米國の好感を得んと種々籌畫するところがあつたのであるが、米國政府は依然嚴正中立を膠守して動かず、益々冷靜に構へてゐるのみならず、英國は勝手に國際規約を蹂躙して、航行中の中立國の船舶を悉く停船せしめて、臨檢し、一切の郵便物又は搭載貨物を檢閱する。それを米國では默過するのである。偶々抗議を申込むことがあつても、一向手強く出でず、獨墺側への申譯的又は形式的抗議を試みるに過ぎずして、內心は聯合國側に好意を持つてゐるのであると同盟國側は信じたのである。獨逸は白耳義やルクセンブルグの中立地帶を單に自衞上、戰術上洵に餘儀なく侵さざるを得なかつたのであつて、獨逸は之に對して充分の報償をなすことに聲明してゐるに拘はらず、米國では人道の敵とか、暴虐なる侵略主義とかあらゆる誹謗を以つて、獨逸を責

り益々巨額の軍需品及食糧を輸入して、戰鬪力を增大しつゝあるのである。それ故獨逸では米國より食糧品、軍需品の輸入が不可能になり、且つ軍事公債を米國に就て募集するを得ず、單に敵國を制する丈ならば、眞正なる中立國と見ることが出來ない。米國と聯合國との交通及貿易を阻害し、聯合國の戰鬪力を滅殺せねばならぬ必要が起つて、茲に第一に取つた策は、潛航艇戰を行つて、聯合國の海上權を破壞することであつた。米國加奈陀、南米より聯合國に對する食糧品、軍需品原材の輸出を壅塞杜絕せんとしたのである。而して聯合國に對して潛艇戰の火蓋を切り、歐米通商破壞の第一聲を擧げたるものは、彼の有名なるルシタニア號事件であつた。獨逸がルシタニア號を擊沈したのは、米國の軍備を侮り、且つ米國の對獨戰爭熱を輕んじたるのみではなく、獨逸としては自衞上敢行したものであつた。猛烈なる海底戰を行つて、國內の人心を緊張せしめ、志氣を鼓舞し又獨逸の勝利に依つて速かに戰爭を終結せしめたいと欲したのである。これより、聯合國並びに中立國の船舶にして獨逸潛航艇に擊沈さるゝもの續々として相繼ぎ、莫大なる軍需品、食糧品は海底に沈められるのである。茲に於て、米國の經濟界に空前の恐慌を惹起した。米國の對外貿易は大打擊を受け、紐育タォール街の株式は暴落を演じた。海上保險の破產するもの續出した。米國の資本家、製造工業家は大いに苦痛を感じたのであるそれ故資本家階級を代表する諸新聞及諸組合は熾烈なる獨逸攻擊の氣勢を擧げた。戰爭不可避の叫び聲は全國に起つた。ルシタニア號擊沈以來、米國の婦人子供に至るまで、『ルシタニア號を忘るゝな!! Remember the Lucitania!』と叫んで、惡虐非道なる獨逸の蠻行に憤慨したのである。殊に純潔なる淸敎徒の血潮が建國祖先以來、遺傳的に血管に流れ、か弱き婦人子供に對して、敬虔なる宗敎的感情を有し、正義、人道の觀念比較的強き米國民は、悲壯なるルシタニア號の最後を悼み、兇暴なる獨逸海軍の毒牙の犧牲となりて、空しく海底の藻屑と消えた、哀れなる同胞に對する同情の聲は翕然として全國に起つた。殊に波荒き洋上に圖ら

米國亦獨逸に對して反感を抱き、兩國の國際關係は事毎に圓滿を缺いたが、米國政府は戰塵漠々たる歐洲の天地を觀望し、戰局の推移を考察しつゝ依然中立を嚴守して國際間に處したのである。

三　獨逸米國を侮る

獨逸は開戰以來その苦衷を米國に訴へ、多くの有力者を派して運動せしめ、或は新聞雜誌を買收して、獨逸を辯護せしめ、獨逸參戰の公明正大なるを說き、中立國の蹂躙に對する辯明をなさしめ情實に訴へ、理義を盡くして、大いに米國の輿論を動かさんとしたが、米國は依然中立を墨守して動かず、獨逸の陷穽、苦肉策に乘ぜらるゝ一寸の隙もないのみならず、獨逸の露骨にして、大膽なる陰謀奸策は、米國識者の感情を害し、對獨開戰を叫ぶ者も續出したのである。それ故、獨逸は苦心慘憺たる凡ての陰謀、企畫が水泡に歸すると見るや、遂に業を煮やして、米國たのむに足らず、英佛と一つ穴の狐である。我國の公明正大なる精神を無視するならば、此方にも考があると云ふことになつて、公然排米政策を取つて、米國を窘しめんとしたのである。されど內心獨逸は米國を敵として戰爭をすることを好むものではなかつたが、獨逸は當時米國の軍備の甚だ不完全なるを輕侮し、又米國は遠く歐洲戰場に大出兵を行ひ、聯合軍と共に獨逸に膺ることは、地勢上經濟上、到底不可能なるを見透かし、のみならず、米國は獨逸に對して宣戰するならば、國內の平和論者、又は一千萬の獨逸系米人は奮起して反對を叫ぶ、國內は紛亂相繼ぎ、到底擧國一致の大戰爭を遂行する力がないと、大いに米國を見縊つて、高壓政策を取つて米國を屈服せしめんとしたのである。前にも述べた通り獨逸は實際に於て米國と戰端を開くことを望んでゐない、却つて、米國の好感を得て之を利用せんとしてゐたのである。ところが、米國は毫も獨逸の對米政策に動かず、のみならず、米國政府はとかく聯合國に同情してゐる樣に見える。聯合國が嚴重なる海上封鎖を行つてゐる故、獨逸では、米國より軍需品及食糧品を仰ぐことが絕對に不可能になつた。これに反して、聯合國はその優勢なる海軍を以て制海權を掌握し、米國よ

こゝに於てウイルソン大統領は閣僚として最も信頼せるヴライアン氏を止むを得ず罷免して、新にランシング氏を國務卿に任じ、平和主義のウイルソン氏にしてその決心を遂行せねばならなかつたことを觀れば、如何に國民の對獨反感が猛烈に政府を強要せしかを了解し得らるゝであらう。

四　米國民心の緩和と獨逸の平和會議

米國の意外に強硬なる抗議に驚いた獨逸は潜航艇戰を出來る丈小範圍に止めるといふ回答を米國政府に致した。米國では獨逸が案外に折れて出たので、頑張る張合もなくなつて、兩國の紛爭問題は無事に解決し、國際の危機を脱することを得、兩國は從前の如く平和なる關係に復したのである。それ故米國民の中には歐洲大戰爭もこれ以上流血の慘狀を見ることなくして、現狀のまゝて終結を告げるであらうと云ふ意見を抱くものも生じたのである。獨逸は米國民心の緩和せるを見て、それを利用し、米國の好意を迎へんとした。米國の感情を宥和し、この勢に乘じて獨逸系米人及親獨論者を操縱して大いに平和熱を鼓吹し、大統領を動かして、米國をして戰爭を仲裁せしめんと云ふ魂膽があつた。又米國民の中には平和の曙光近きにありと確信するもの漸く多く、米國の新聞雜誌には平和に關する意見は盛んに出でたのである。

この氣運に乘じて、一九一六年十二月十二日獨逸首相ベートマン・ホルウエッヒは議會に於て平和演説をなすに至つた。かくて獨逸は米國政府を通じて、聯合國に平和を提議した。大統領ウイルソンは獨逸の依頼を諾して、獨逸の平和提議を聯合國に通達せしめて、其回答を求めた。同月二十二日聯合國より平和條件として、獨墺の征服せる一切の領土を還附すると、白耳義の獨立を認め、獨逸の侵入に依りて蒙つた財産上の損害を賠償すると、及戰後獨墺は軍備を制限すること等を承認するならば、直に講和提議に應ずる旨を回答して來た。而して、聯合國は米國をして、獨墺側の平和條件は如何と問はしめたるに、獨墺側は具體的平和案件に一言の費すところなく、平和條件の内容は平和會議に於て發表すると答へて來た。

ずも遭難し、船と運命を共にした婦人子供に同情の涙を灑がざるものはなかつた。その後サセックス號の撃沈となつて、米國に益々反獨熱が昂じて獨逸野蠻主義を倒せと叫び、大いに敵愾心を發揮した。のみならず、戰局上聯合國の不振に同情して米國民は、盛んに人道を叫んで、ウイルソン政府に迫るに獨逸に對して強硬なる抗議を提出し、もし獨逸にして飽までも殘虐なる潜航艇戰を續行せん決心ならば、米國亦當然之れに對する方策を講ぜねばならぬ旨獨逸に對して通告せんことを以てしたのである。米國民は米國の抗議に對して、獨逸が滿足なる回答を與へざるに於ては、開戰辭するところに非ずと云ふ覺悟があつた。

ところが政府當局者、卽ち外交の衝に當れる國務卿ブライアン氏は、絶對平和論者であるから、今や米獨國際關係が非常に險惡に赴きつゝある時に澁みても、絶對平和論を唱へ、一體戰爭は双方が惡いから起るのである、英獨いづれも間違つてゐる、又ルシタニア號は英國船である、中立國人は交戰國の船舶に乘るには危險なることを覺悟せねばならぬ。米國は中立を守つて、交戰國の一方に軍需品、食糧品を賣りつけて、利益を得てゐる以上は、その輸送船が敵國に發見さるゝのは當然のことであると大膽なる平和論を主張し、ウイルソン大統領の抗議文書に署名することを拒絶したのである。或はブライアン氏の平和論の裏面には野心があるものとして、彼は大統領に當選するを得ざりしより、ウイルソン大統領に對して內心穩かならず、偶々ウイルソン大統領の對獨抗議に澁んで絶對平和論を楯に取つて、その署名を拒みウイルソン大統領を窮境に陷らしめんとしたのであると說く論者もあるが、これ政治は陰謀權詐であるとなす徒輩の自己の政治屋的心から他の心事を忖度せるもので、ブライアン氏は、個人的感情又は些々たる私憤から國策を謬るが如き人物ではない。彼の平和論は一時の政略として弄されたる奸策的平和論ではなかつた。彼の這般の行動は全然彼れが主義に忠實なるの致すところと見るが至當である。彼の節度の大なる志操の堅固なる、權宜奸謀を能事とする我國の政治家流に比すべきではない。

ないと決心して、國民を鼓舞しつゝ豫定の計畫に向つて奮進した。

然るにその數日以前の一月中旬『チンメルマン文書』事件なるものが勃發して、再び米獨兩國の紛議を醸し、兩國の關係は更らに逆轉して一抹の暗雲が湧き起つた。これは獨逸外務次官チンメルマンが、日本とメキシコとを同盟せしめて兩國に當らしめんと畫策せる秘密文書であつた。この秘密文書が端なくも華盛頓政府の手に入るに至つて、米國政府の陋劣なる獨逸の陰謀に對する反感は益々烈しくなつた。獨逸の陰謀事件が米國の計發するところとなりて、世界に公表せらるゝや、チンメルマンは議會に於て『獨逸は自國の正當なる存立上、片務的なる中立國に對して、相當の手段を講ぜざるべからず。メキシコに對する外交書が一中立國に於て公表せられたりとて、我國は決して恥辱とせざるなり』と述べて公然米國に對して挑戰したのである。茲に至つて兩國の國際關係は益々危險に瀕し、その前途暗澹として、形勢の推移豫め測るべからず。

五　無制限擊沈の宣言と米獨國交斷絶

獨逸は一旦自ら聯合國に對して平和を提議したるに拘はらず、聯合國は獨逸の提議を拒絶せる以上は、獨逸は最早や文明破壞の責に任せず、慘憺たる人間殺戮戰を續行し、文明破壞の蠻行を演ずるものは、その責聯合國に在りと天下に聲明して曩のサセックス號事件の誓約を破棄して、更らに猛烈なる潛航艇戰を開始することに決した。かくて形勢は急轉直下して一月三十一日に至つて、獨逸政府は米國大使、ゼームス・ゼラード氏に對して、二月一日以後獨逸海軍は、無制限なる潛航艇戰を行ふべき旨を通じて、二十四時間を限つて、その回答を求めた。伯林から華盛頓まで電報を打つには二十四時間を要する。幾ら急いで本國政府訓電を仰ぐとも四十八時間はかゝるのである。然るに二十四時間以内に返答をせよと云ふのであるから、米國に取つては全く無理を持ちかけられたのであるが、獨逸は左樣なことは委細頓着なく、疾風迅雷的に豫定の計畫に進んだのである。獨逸政府が無制限擊沈を米國大使に通告を發した翌日には、

越えて一九一七年一月二十二日、ウィルソン大統領は、上院に於て米國が持久的世界平和を保障するものと信ずる平和條件を聲明して曰く『若し米國が平和會議に參加するものならば、米國は交戰國は侵略政策を造就するあらゆる軍事的施設を廢することを要求する。又專制政治、軍閥政治が國際間に努力を揮ふ限りに於て、自由民主の文明は常に威嚇を蒙り、到底持久的平和を望むことが出來ない。それ故我國のモンロー主義の精神を國際間に適用せしめねばならぬ。』と。若し米國の如上の要求が交戰國が承認するならば、米國は何時たりとも仲裁の勞を取るに吝なるものに非ずと云ふ意である。ウィルソン大統領は、獨逸は果して、誠意ある平和を希望してゐるか否やを試みる爲めに探りを入れて見たのである。ところが米國の希望するが如き條件は、一として獨逸の承認され得べきものではない。もし獨逸にして米國の主張は同意するならば、その國是を否定するものである又國家の生命とした侵略政策の非なることを自ら世界に廣告し、平國に屈服するものである。況んや獨逸は官僚軍閥に依つてその國家が組織せられ、四十年間汲々として軍備の充實を計り帝國主義實現の爲め乾坤一擲覇業を敢行したのである。然るを今にして米國の平和條件に聞くならば、これまでの獨逸の努力も犧牲も勝利も水泡に歸せざるを得ない。殊に米國のモンロー主義を以て平和條件の主眼とせよと云ふが如きは、獨逸の到底忍ぶ能はざるところである。モンロー主義は、自己制限（セルフ・リミテーション）の政策で、一面國際的デモクラシーに外ならぬのである。官僚軍閥で固め上げた侵略主義の獨逸は如何にして、米國の如き自由主義、平和主義を採用することが出來よう。畢竟獨逸に取つては到底出來ない相談を米國から持ちかけられたのである。茲に於て、獨逸は米國を懷柔して、自國に有利なる仲裁を取らしむることは、全然不可能なりと悟るや、自國の存在の爲め、開戰の目的の爲めに飽くまで戰ふの外はないと決心して、米國の仲裁による平和を斷念したのである。その上は聯合軍に再び起つ能はざる大打擊を與へその戰鬪力を殲滅し、獨軍に降服せしむる外に取るべき途は

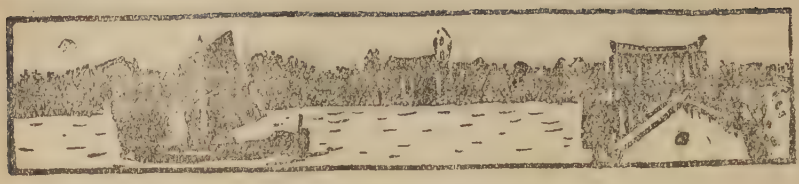
ところが、三月十三日歐露の一角に突如として世界を驚倒せしむる大革命が起つた。露國の民主主義が專制的官僚政府を粉碎し、三百年間榮華を誇つたロマノフ王朝は槿花一朝の夢と沒落し、勞兵會、社會黨を以て假政府を組織し、共和國を建設するや、その疾風迅雷的大革命に世界齊しく啞然たる間に、英國首相ロイド・ヂョーヂ氏は他國に率先して露國新政府を承認した。米國亦革命政府に同情して、デモクラシーの爲めに戰ふ新露西亞を極力援助したのである。露國革命の勝利に依つて、米國は、聯合國と手を携へて、自由民主の文明を保全せんが爲めに獨墺と戰つてゐると云ふ口實を完全に得たのである。ウイルソン大統領は"Democracy against autocracy"を叫びて、民心を緊張せしむると共に、飽くまでもWatchful-waiting Policy 卽ち自重政策を取つて、國民に臨んでゐたが、國民の團結力は益々鞏固なるを致し、愛國熱漲りて、擧國一致して對獨開戰を叫ぶや、ウイルソン大統領は愈々決心の臍を固め、四月二日臨時議會を召集して、對獨宣戰を提出して述べて曰く、

『米國は領土的野心、又は經濟的野心よりして獨逸に宣戰するものに非ず。たゞ獨逸の壓制主義、軍國主義を打破して、永遠に世界平和の威嚇となり、國家獨立の不安となる禍根を滅絕せんとするのである。獨逸軍國主義の兇暴なる凡ての國際規約を破棄し、中立國を蹂躙し無辜の生民の生命財產を奪つてゐるのである。のみならず獨逸の支配者階級は、陰謀譎詐至らざるはなく、或は親獨派を煽動して我國を攪亂し、或は勞働者を使嗾して社會の秩序を破壞せんとす。我國に駐剳する獨逸大使官員をも使役して陰謀を企てつゝある獨逸政府に對して、吾人は最早や一片の信用も有せぬのである。玆に於て我建國創業の國是たる自由、獨立を擁護する爲めに、獨逸に對して宣戰せんことを提議したのである。然れども吾人は決して獨逸國民全般を憎むものに非ず。米國は官僚軍閥に依つて支持せられ、世界にかくの如き慘禍を與へたるホーヘンツオルレルン家に對して宣戰を布告するものにして、決して獨逸國民を敵とするものではない。吾人

最早や大西洋の各方面に於て、獨逸潜航艇は大活躍を開始し、聯合國並びに中立國の船舶の撃沈さるゝもの頻々として起り、洋上廣く幾多の修羅場を現出したのである。

獨逸から最後通牒とも見るべき通告を受けた米國は、以前から餘程の覺悟があつたものと見えて毫も取り亂した樣子はなかつた。國民の心は大いに緊張し、一種森嚴なる趣きがあつた。新聞、雜誌及各種の演説會、集會等には、米國民の決心、覺悟を説くもの多く、戰爭氣分は全國に磅礴として漲り、開戰を呼號するもの益々多くなつた。然るに政府は至つて冷靜に構へ、依然平和政策を膠守したのである。いざ戰爭となつて、敵の砲火の的となり最も悲慘なる犧牲を拂はなければならぬものは中流及下流社會の人々である。彼は果して死の境に急ぐ決心があるであらうか。苟くも戰爭を開始したならば、國運を賭して奮進せねばならぬ。戰爭に從事して國家のあらゆる不利益や悲慘や艱難の起るのは覺悟の前でなければならぬ。然してこの大戰爭を敢行するには、眞に擧國一致せねばならぬ。それには先づ軍需品工場に、炭坑に、食糧品の收獲に戰時勞役をなし、更らに砲烟彈雨の戰場に敵砲火の的となり劍戟の錆となる中流及下流社會の覺悟と奮起を求めねばならぬ。彼等は果して開戰の覺悟を有するであらうか。又議會は果して宣戰を布告するであらうかと、大統領は、靜かに政黨の形勢を觀望すると共に、民心の趨向に注視するを懈らず、時局の發展を愼重に考察してゐた。

かくて民心は大いに緊張して今や牢固たる覺悟が國民に表示せられたるを見るや、二月二十六日上院に敎書を送つて武裝的中立を宣言することを提議したるが、三月十二日の新議會に於て、この提案は通過した。その結果米國の全商船は直に武裝を整へ、艦隊には戰爭準備を行はしめ、國内には政治、經濟、産業其他あらゆる方面に於て戰爭準備の聲高く、政府は軍隊の召集を行ひ、全國の諸工場を動員して軍需品工場たらしめんとし、戰時勞役制を設け、日夜汲々として軍備の大擴張を計つた。



宗教と信仰（上）

日高沈聲

一

宗教の存立は如何なる宗教に於ても、苟もそれが人類の宗教意識に根ざして成立して居る以上、其宗教本來の根本要義の顯揚としての信仰を離れては考へられない。宗教が宗教として成立する根本條件は、信仰の確立と擁護とにある。信仰の確立は其宗教の本義の發揮を明確にし、信仰の擁護は其宗教の存在の權威と品位とに關し絶對承認を要求する。此兩者に依つて宗教は常に消極的には其生命を維持し、積極的には其本來の面目を發揚する。私が此兩者を宗教成立の根本條件として玆に數へた理由はこれである。信仰の礎なくして宗教が存在した時代と社會も曾て世界に出現したことは聞かない。其社會と其文化と其民族とに特有な程度に發達した信仰の上にそれ相應した宗教が現はれて居る。卽ち生活の發達の程度に應じた信仰が宗教の進步の程度を示して居る。一言にして云ふならば、宗教は信仰の支配の下にある。極言すれば宗教とは信仰と云ふことに歸着する。げれども宗教と信仰とは全く分離して考察することが出來る、生活指導の理想としての宗教、若しくは生活意識の內的要求としての宗教、若しくは自己救濟の生命と力としての宗教は、到底信仰とは絕對に分離して考察することは出來ない。卽ち宗教が自分の生活に卽した活動の原力或は理想となつた場合には、信仰と宗教とは相卽不離の關係の上に立つて居る、

は兇暴專斷なる官僚軍閥の犧牲となり、軍國主義の爲に、尊き生命を戰場の泥土に委しつゝある獨逸國民に對して、一片の同情なきを得ない。然れ共暴虐殘忍なる普魯西軍國主義に依つて、自由と正義に基ける世界文明は將に倒壞されんとす。我等は國家の自由の爲め、自衞の爲めに武力に訴へて、カイゼル與黨の官僚軍閥を討滅し世界の人道的文明を拯はねばならぬ』と天下に聲明し、光榮ある世界の民主文明の爲めに飽くまで戰はぬばならぬと叫んだのである。

併れども米國が宣戰の理由として聲明せるが如く世界の民主主義の爲めに戰ふと云ふことは、果して眞にウイルソン大統領の精神から出でたものであらうか。又は一種の政略であつたらうか。この眞相を研究することは洵に興味ある問題である。ウイルソン大統領の對獨宣戰の眞相は、果して何處にあつたか。これは次號に詳しく述べるとゝする。

記者曰く、本稿は談話筆記なるも、匆卒の際且つ編輯締切切迫せしため、校閲を經る遑なく、或はその意を盡くさざるところなきを保せず。尙氏は『予が觀たる米國の參戰』なる題下にて本誌次號に寄稿せらるべしと云ふ

（一つは全體的一つは部分的で且つ其研究の目的方法をも全く異にして居る）が無關係であるに係らず否定若しくは肯定の同一結論に到達することのあるものもないではない。それで宗教を論ずると云ふ研究的態度から云へば宗教は單に研究の對象に過ぎないことになるから宗教の絶對性などを始めから假定する必要はない。全く信仰家の立場から離れて純粋な學者研究家としての態度と見地から誠實に公平に何等の偏見に煩はさるゝことなく大膽に評論の自由を標榜して起つべきである。ソレで信者に採つて絶對であるべき筈の宗教も、研究家の自由な立場から云へば、社會現象若しくは生的現象或は人性自然の心理的要求としか考へられないことになつて、宗教本來の難有味は全く消えて仕舞ふ樣なことがないとは云へぬ。要するに研究家の純粋な研究的態度から云ふならば、眞理の探求に忠實であるべきことが研究家の第一條件であるから、研究の結果を豫想して曲論詭說を吐いて世に阿ぬる樣なことがあつてはならぬことは勿論自分の要求からも全然獨立して一切を顧みる必要はない。何故にさうかと云ふに宗教が自分のものになるかならぬかと云ふこと、卽ち宗教を信ずると信ぜぬとは宗教を單に學問的研究の對象となす純粋な研究家の立場から云へば、直接な問題ではなくして寧ろ第二第三の問題である。卽ち純粋な研究家の立場から云へば宗教を自分のものとして信ずると云ふことが當面の問題ではなくして、宗教を研究の對象として取扱ふことが直接の問題であるからして、研究の結果が當然社會の要求に反する樣な場合が起つたとしても、社會の要求を迎合せんが爲めに若しくは或る權威を懼れて眞理の光を蔽ふ樣なことがあるべきではない。卽ち學者に取つては宗教は何處までも研究の對象に過ぎない、或人は私の此主張に對して激しく反對するかも知れぬがそれは純眞な研究家の態度から一步滑べつて宗教に對する利用的態度を採つたか更に進んで信仰の領域に兩足を踏み入れて居ることに氣付かざる不注意である、此事に就いては後に論ずる。

私の云ふ所は眞理の探求を唯一の目的とする純

けれとも宗教を以て自分の生活から獨立した一個の社會的生産（ソシアル・プロダクション）として純粹な客觀的態度に依つて、之を學術的研究の對象として自由討究の問題たらしむる場合に於ける學者論評家の研究的態度から云ふならば、信仰を離れて宗教を考察することが可能であり且つ正當である。こゝに明かに宗教を信ずることゝ、宗教を論ずることゝの差別が生ずる。宗教を信ずることは宗教と同化することで自分が宗教其者の中に沒入することである、若しくは宗教を自分の所有となすことである、それで宗教を信ずると云ふことは飽まで其宗教を自分のものとなすこと或は宗教のものと自分がなることである。宗教の生命が自分の生命となり自分の生命が宗教に依つて養はるゝ所に信仰が存するのである。謂はば信仰に依つて宗教に繋がるのである。宗教を土臺として考へれば信仰は自分が或る宗教と同化したことの發表の形式であるが自分を土臺として考へれば信仰は宗教の内容となる。詰り信仰を得たと云ふことは宗教を得たと云ふことになる。てあるから宗教を信ずると云ふことは徹頭徹尾自分と云ふ主體の要求を離れては考へられない。信ずると云ふことは自分自身が信ずることに外ならない。卽ち全く自分と其生活との要求に基く自發的行爲である。自分に取つて最も直接な切要な實驗である、然るに宗教を論ずることは宗教に對する自分の直接な要求から全く離れて間接に極めて冷靜な客觀的態度を持して出來ることである。宗教を論ずることは比較宗教學からも、心理學からも、哲學若しくは神學からも、又は歷史學からも社會學からも出來ることで、各異つた見地と見解から說明し解釋することが出來る。從つて研究の結果は必ずしも常に同一の斷案に歸着すると云ふことは出來ない。或者は否定し或者は肯定する。而して其否定若しくは肯定の理由も必ずしも同一てはない。甚だ相違した見解に依つて肯定或は否定の同一結論に到達するものもある。卽ち同一の結論が相違した理由の下に現はれるのもある。又學者論評家の研究の立場が異なる所から例へば宗教哲學から論評するものと社會學若しくは歷史學から研究するものとの如き全く立論の經過

具體的の材料から、一定の原理或は結論を引き出すまでの推理や斷定や假定や皆思惟作用の運用に過ぎないから、具體的の事實が思惟作用の抽象に依つて、概念化の一定の心理的順序を經て始めて研究の成立が可能となる。思惟作用を除いては研究と云ふことの成立する譯がない。卽ち眞理研究に於ては概念化の形式の過程が避くべからざる必要の要求である。

眞理は其内容の如何に係らず抽象せられた概念の形に於て、發表せられ、捕捉せられ提示せらるゝ外に道がない。卽ち眞理の探求は其發足の目的と結果の適用とが如何なる所にあるにもせよ、心に斯く思ひ、斯く信じ、斯く假定し斯く斷定する一系の心理的順序に過ぎないから、抽象に始まつて抽象に終る譯である。卽ち研究と云ふことは抽象的な概念の取扱である。宗教の如き純粹な心理的事實を取扱ふ場合に於て、特に其然る所以を知ることは最も容易である。私が宗教を研究の對象として取扱ふ學者の提唱する唯理説を、抽象的眞理と名けた所以はこゝにある。

二

宗教を論ずると云ふことは、宗教の本質と價値とに關する一般的特性に就いて論ずることにも解せられ、又信仰告白の意味に於て自家の實驗と思索とに基く見解の論述（私が後に論ずると前に述べたもの）にも解せられ、或は又特定の或宗教に關する研究考察の意味にも解せらるゝ。私が以上述べた所は第一及び第三の意味に就いてゞあつた。卽ち第一の意味に就いて云ふならば、既成の各宗教に通ずる普遍必然の一般特性として是認せらるべき根本原理の成立に關する意義の考究て之に由つて宗教の本質と價値とに就いて明確な觀念を捕へて飽まで徹底的に之を理解しやうとする理智の要求である。此意味に於ける宗教論にあつては、推理と組織とを重要とする。第三の意味に於ての宗教論は第一の意味に於ける特殊な場合と見てよいと思ふ。只第一の意味に於ける研究では重に哲學若しくは心理學の範圍に屬するが、第三の場合に於ては、教理や歴史に關する研究論述をなす様になるから、此點から云へば其間に研究の範

眞な研究家としては、始めから宗教に對して利用的態度を採つたり、自分の信仰擁護の必要から論を進むべきではない。無色透明な眞實な學者的態度に依つて公平に論評すべき權威と自由とを常に保留して置くべきことを云ふのである。卽ち宗教が一個の研究の對象として學者の自由討究の問題たらしめらるゝに於ては、豫定の結果を假想して構論すべきことは純眞な學者的態度ではないと云ふのである。一言にして云ふならば、學者は宗教を取扱ふのであつて信ずるのではない。宗教が研究の對象として取扱はるゝ限りに於ては從つて其結果が如何かに落着するかは問ふ所ではない。それで宗教若しくは信仰を否定することは、宗教家若しくは信者に取つては恐るべき破壞であるが、學者としては避くべからざる必要の結論であると云ふ場合がないとは云へない。學者の宗教に對する態度は、純然たる理論上若しくは思想上の問題としての取扱であつて眞理若しくは原理の探求、卽ち肯定或は否定の終極の決定若しくは價値批判上の心理的或は認識的決定である。ソレて實際上の要求としての卽ち信仰の對象としての宗教とは餘程緣遠いものと云はなければならぬ。よし兩者の間に密接な關係があるとしてもソレは極大限度に於て理論上の事であつて實際上の要求の上に立つた生活上の效果から云へば、決して直接なものではない。要するに研究家の立場は純然たる抽象的眞理の提唱に止まる。實を云へば信仰も思想上の抽象に過ぎないとも云へないことはないが、信仰は少なくとも實際生活の要求の上に立つた意識的な精神活動であつて、現實生活の精神的要素としての自覺がある。それて個人的である。從つて其個人或は其個人の生活を離れては無意味である。卽ち經驗上の論據に立脚する。であるから信仰が思想上の抽象としてもそれは經驗上に抽象せられた思想上の抽象である。一般妥當的な理論上の純眞理の抽象とは區別して考へらるゝことが出來ると思ふ。私は玆に此兩者を峻別して考へる、卽ち一方を抽象的と云ひ一方を具體的と名けて置く。

宗教の研究に於て其取扱ふ材料が如何に具體的てあつてもそれが研究である限り、其與へられた

に之が彼等自身の信仰であると稱する。第一に私がこゝに質して見たいことは「詰り同一」であると云ふことの意義である。私が此言葉に就いて解するところは、佛教も基督教も研究して見れば其極致は同一に歸着すると云ふ意味である様に思はるゝ。もし此意味であるとすれば、更に此意味を言ひ換ゆれば。宗教として兩教とも同一の共通した一般特性を供へて居ると云ふ意味になりはしまいか。もしそうであるとすれば、最早や佛教でも基督教でもない。此二宗教に共通した普遍性で、思想上に抽象して造り上げた概念的な宗教と云ふ觀念である。思想上の抽象たる觀念の一致に依つて、互に相違した發達の起源と歴史と教理信條の異つた組織とを以て成れる特殊な宗教である基督教と佛教とを——現に互に相違した希教機關と信仰標的とを以て、活動して居る有機的集團たる兩教を——無差別に同一であると斷定することが果して正當であらうか、同一なるものは兩教ではなくして、兩教に共通した宗教的普遍性ではないか若しくは兩教の共通點を思想上に抽象して構成した兩教のいづれの特性からも獨立した唯の宗教と云ふ觀念ではないか。私の此の主張を更に明白にする爲めに下の比諭を設けて説明して見やう。

こゝに或學者があるとする。其學者が有ゆる國民の文化上の變遷發達の經路から生理上、心理上の凡てに亘る作用構成等生活機能の一切を研究し盡したとする。そうして其學者が自ら研究して結果を發表して、世界の人類は皆同一である、其證據は是れ〳〵であると云つて、人類の社會に必然に起り來たる社會組織と其運用の上に現はるゝ類似や、生活經驗の一致などを、一々例を示して説明したとする。其時其學者が斯の如き論據の下に凡ての人類は同一であると云ふ揚言に對して、吾等は之を如何に解釋すべきか、一寸考へると、之は日本人も支那人も、乃至は歐米人も、皆同一である。否地球上に生存する世界の人類は悉く同一であると云ふ意味に解せらるゝ様だが、併しそれは果して正當な解釋であらうか。若し玆に二人の個人を並べて其二人の生理上心理上の構成及び作用を研究し、其中に現はるゝ現象及び事實が、或

圍と目的とに相違が生ずる譯であるが、併し私は之を共に同一の型に入れて置く。其理由は共に一個の學問として、成立するからである。卽ち自己の直接な現實の要求と無關係に論究せられ得るソレ自身の目的と意義とを有する純粹な學問的陳述であるからである。然るに第二の意味に於ける宗教論に於ては、自家の宗教的實驗に基く特殊な人生觀上に於ける思想的生産の任意的是認である。それで其論述は純粹な學問上の抽象的理說の組織ではない。其論述の全體を通じて自分と云ふ主觀の働き、卽ち個性と境遇との支配の下に統一せらるゝ自意識の働きが、濃厚に現はれて居ることは其特徵であつて、自分と其生活とを除いては成立しない。卽ち全經驗の統一主體としての自己の人生肯定の可能に對する確信の論述である。一言にして云ふならば、自己の信仰告白の徹底である。ソレて此意味に於ける宗教論に於て切要なことは實驗と徹底である。第一の場合に於けるが如く普遍必然の一般原理の考察でもなく、第三の場合に於けるが如く研究の結果の組織でもない。第一第三の場合に於ては其論究思索が自分の生活と必ずしも深い交涉を持つことを要しないが、第二の場合に於ては其陳述と自分の生活との交涉とが、最も密接な關係を有して居る。卽ち其人の論ずる宗教は其人の宗教であつて、其人の告白は其人の信仰である。第一の場合は考察であつて、第二の場合は告白である。第三の場合は觀察であつて、第二の場合は實驗である。第一の場合は批判であつて第二の場合は自覺である。第三の場合は說明であつて、第二の場合は生活である。卽ち前者は客觀的(第一批判的一般的(第三)記述的であつて、後者は人格的個人的意識的主觀的である。こゝに吾等は信ずることを論ずることゝ信じて論ずることゝの相違を知ることが出來る。一つは客觀的な理智本位の態度であつて、一つは主觀的な情意本位の生活である。私が自由思想家と稱する人々の宗教に對する態度に就いて、少なからず疑問を抱いて居るのはこゝにある。彼等自由思想家——私も自由思想家の一人たることを自ら承認して居るが——云ふ佛教も基督教も詰り同一であると、而して更

族精神があり、國土的特徴があり、又ソレに根底する文化がある。互に特有な斯の如き天賦と、自覺と經驗とに依つて其生活と歴史とに發揮した實力と、伎倆又現に兩國民の有する生活の理想、趣味、性向等の間には各互に超ゆべからざる幾多の優劣と相違とがある、のみならず兩國民相互の容貌、體格、風俗習慣等の一切を考へて來れば、何に一つとして全く同一なものはない。況んや歐米人と日本人とを比較するならば、其互に系統を異にした文化を有する點から云つても、容貌、體格風俗習慣等の相違から見ても到底支那人との比ではない。斯様に考へて來れば、世界の人類は歴史的にも、地理的にも、社會的にも、心理的にも、又は生理的にも、皆相違した系統と經驗との中に生活すると云ふことになる。若し此事實にして是認を得るならば、先きの學者の揚言とは、全く反對の結果に到達した譯になる。吾等は此矛盾を如何に解釋せば、正當な意義を此双方の主張から得ることが出來るか。云ふまでもなく同一であると云ふのは、各國民の生活經驗の總和としての文化現象の形態上の一致、若しくは生存條件としての心理的併びに生理的法則と作用との類同の如きを指すのであつて、全く抽象的概念的の考案である。故に世界の人類が歴史的に社會的に若しくは地理的に經驗を同じくし、組織を等しくし、目的の追求を共にするとしても、それは全く抽象的に斷定せられた判斷であつて、一々の事件或は現象其者の具體的に有する個別的絶對的成立に對しての斷定ではない。卽ち人類と云ふ概念上の抽象からの判斷には共通の一致が存するが、國民と云ふ具體的の活動、若しくは個人と云ふ個別的、若しくは絶對的經驗からは、各の事件或は組織に獨立した個別的絶對的特殊性がある。從つてソレより生ずる價値と目的と意義とには、其事件其組織に固有な絶對性がある。斯様に論じて來ると、世界の人類は同一であると揚言する學說と相違すると主張する事實との間に、何等の矛盾なくして共に各立論の根據を異にした眞理の提唱であることが分かる。

一定法則の下に說明せらるべき共通の一致を發見し、其趣味に動かされ益〻深く其二人の生活、經驗等に現はるゝ凡ての點を研究し行くに從ひ、愈〻其二人が生理的にも心理的にも社會的にも、若しくは歷史的にも或同一法則の假定に依つて說明せらるべき類似と一致に制約せられた生存であることが、明確になつたとした時、此二人は如何に考へても同一であるべきであるが、此場合吾等は其二人を同一とは決して思はない、問ふまでもなく其二人は明かに別個の存在であつて互に、統一した自我意識の明確な指導と自覺とに依つて豐富な然かも互に異つた意義と目的とを有する經驗と境遇との中に自己の特殊な生活に追隨し醱酵する最高價値の保存と伸展とに努める。全く二人は別人て別個の特殊な存在てある。只二人の生活上の組織、作用、目的、經驗等の中に形式上の統一てあり、事實上の一致が發見せらるゝに過ぎない。——卽ち心理的には喜怒哀樂の情、想像、思惟、判斷、記憶等の諸作用の如き——生理的には消化營養、生死、發育等の諸作用併びに身體及び諸器管の構成の如き——社會的には家庭生活、團體生活。政治組織の支配等の如き——卽ち同一なものは、二人の個人其者ではない。二人の有する心理上、生理上又は社會上の支配或は其法則、組織作用等の形式或は事實上に或一致と或統一とが發見せらるゝに過ぎない。言ひ換れば二人は心理上生理上又は社會上から觀察すれば、形式的には必然に事實的には偶然に、或同一法則或は作用組織等の支配を受けて互に異つた理想と趣味と目的とを有して互に置かれた境遇と經驗との中に生活して居るのである。一言にして云へば二人は意識的に互に生存を異にした二人格の對立である。斯樣に考へて來れば人類を支配する心理的、生理的、社會的、歷史的、法則と作用と組織とが、必然に若しくは偶然に一致し類同すると云ふ理由の下に、直ちに日本人と支那人若しくは歐米人が同一てあるとは斷定が出來ない譯になる。日本人には日本人に傳來した歷史的國民性があり、地理的性癖があり、それに依つて培養せられ煥發せられた文明がある。同樣に支那人には支那人に固有な民

神は全能なるが故に、邪惡を直に滅し能ふべけれど、態々之を滅さないで打棄て置くとすれば、神は恐らく萬善と云ふことは出來ない。假令へば茲に井に陷らんとする子供がある。自分は走つて往つて之を助くる力を持つてゐる。乍併、之を見捨てゝ置くならば、自分は道義的の人格と云ふことは出來ぬ。神の場合も是れと同樣、神若し邪惡を絕滅する能力を持ちながら、世に邪惡の存在を默許し置き給ふとすれば、彼は萬善ではあり得ない、神は惡である。惡なる神は眞の神ではない。吾等の所謂神とは少くとも善の力であらねばならぬ。マックタガアトは神の三屬性（キャラクテリスチックス）として善と智と力とを擧げてゐる。神若し善ならずば、神ではない、吾等が崇拜の對象たる資格なきものである。されば神は必ず善なるべきを其根本的特質とする。處で、是迄傳說的に信じ來れる全能は果して神の特性なりや否や、是れが問題となるのである。中世紀に於てはオウガスチンの如きプラトン哲學に囚はれた神學者が現はれて、邪惡は善の欠缺（イーヴル）に過ぎない。從つて、虛無が實在でない如く、惡も實在ではないと云ふ考へ方がありし爲め、邪惡の問題は寧ろ等閑に附してあつたのである。然るに文藝復興の頃から官能的（センスリアル）實在を著しく高調して、現實の經驗界に吾等が感得する邪惡は消極的に善の欠缺てはない、積極的にそは實在であると云ふ考へが强くなつた。殊に今次の歐洲戰爭などが動因となつて、思想家は何故に神の宇宙が存在するや、神若し全智全能なれば何故に此邪惡を卽座に絕滅し給はないのである乎。若し之を爲し給はないとすれば、剿滅することが出來ないのであるか、或は態々剿滅し給はないのであるか。若し態々絕滅し給はないのだとするならば、何の理由ありて然るのである乎。從來、此問題は自から二個に分たると考へられ、人間の道德的罪惡と自然に起る邪惡と二つに區別されてゐた。而して傳說的には前者は比較的容易に解決され、後者は寧ろ困難なるが故に神の神秘は人間の能く解し得る處ではないと誤魔化してゐたのである。

前者が比較的に容易に解決さるゝものと見えしは、人間は自由意志を持つたものとして創造され

神々の死（下）

帆足理一郎

五、全能神の死

神の全能の問題に就き反旗を翻へして堂々戰つた近代最初の人は蓋しジョン・スチユアート・ミルであらう。彼が神の全能を否定して以來、神學者は口を揃へて傳說を辯護したけれど、要するに曖昧な晦澁論であつて、結局理屈では解し得ないが、クリスト敎の信條は全智全能の神を信ずるにありとなす傳統主義の告白に過ぎない。此問題に就ては余がhb.Dの論文としてシカゴ大學に於て研究せるもの、英文で印刷中であるから、委しいことは茲で話す必要はないが、只其概略を通俗的に、聊か前述の三神に就てよりは委しく述べたいと思ふ。夫れは前の三神は主として哲學的の神であるが、全能の神は現實に宗敎上の神であつて、傳統に囚はれた大多數の人が信じてゐる所なるが故である。余は茲に全能の神の存在を假定せし場合に於ける問題を現代の神學者が如何に解決せんと試みたるかを述べ、終りに全能神の挽歌を奏せざるべからざる所以を示すのである。

一　全能神と邪惡の問題

神の全能は通常神の萬善と共に傳統的信條であつて、神が全能なるも萬善にあらずとせば、勿論邪惡の問題は起らないのである。吾等は神の萬能を信せんとする時、神若し同時に萬善なりせば、神の統御の下にある此世界に、何故に罪惡ありやと云ふ問題が起る。乍併、此場合、神が萬善であつても全能でないとするならば、其問題は直に解決されて了ふ。何となれば、神は萬善なるが故に邪惡の存在を好み給はないが、力が足らないから一時に之を剿滅することが出來ないと云ふ辯明が成立つ。之に反して、神の全能を立てんとすれば、邪惡の存在は神の萬善の問題となる。何となれば、

暗の經驗が必要である。人は邪惡の巷に奮鬪して其品性を鍛鍊し、剛強な人格を獲得し得るのである。獅子は其仔を斷崖絶壁の上から蹴落すと云ふてはない乎。是れ其訓育である、修養である。人間も邪惡の手段によりて訓育せられ、偉大なる靈的發展を遂ぐるのである。

是れ一往御尤もな議論である。乍併仔細に點檢すれば、之に反對するミルや、ジョンソンやマックダガアトや、「邪惡と進化」の匿名著者などの說が正しい樣である。彼等は曰く、成程邪惡は品性陶治の手段となつてゐる。人は罪惡を犯して、罪惡の經驗がなかつたならば斯程までも偉大な人物となることは出來なかつたであらうと思はるゝまで、偉大な人傑となることがある。例へばオウガスチンの如き、トルストイの如き、皆道德的に亂暴な生活を送つた末、其罪惡のどん底から復活し來りしが故に、斯樣に偉大な人格を贏ち得ることが出來たのである。罪惡は實に德育の一手段である。

乍併、吾等はミルと共に、其反對の現象をも考へねばならぬ。人は往々苦難を通うして善人となると同時に、幸福を通うして惡人となるものである。此兩方の場合を枚擧すると、結果は屹度相殺されるであらう。併し双方共實は例外の場合であつて、普通の場合、善き境遇に置かれた者は善人となるもの多く、惡い境遇に置かれたものは惡人となる者が多い。惡の境遇を脫して善人となりし者は千人に一人、萬人に一人である。人は苦難に逢へば逢ふ程益々意地きたなくなり、根性がひねくれて了ふのが普通である。善行は善を生み、惡行は益々惡の種を蒔く、惡が敎育的手段として善用されし場合は除外例であつて、最大多數の場合、惡は破壞的分子である。決して善の奬勵者ではない。

一度び罪惡を常習とした者が、後日改悛して善人となつた後でも、彼は容易に元の常習に誘惑され易いものである。一旦浮川竹の身となりし婦人が、奇麗に足を洗つて新生涯に這入つた後でも、一寸した動機から、元の古巢に舞ひ戻つて、籠の鳥の生活に腐れ付くことあるは、往々吾等の耳にする處ではない乎。邪惡は敎育的手段ともなるが

たものだと信ぜられしが故である。人が自由意志を持つてゐる以上、善惡二者の自由撰擇が出來なくてはならぬ。若し惡を擇ぶ自由なしとすれば、彼れの自由意志は眞の自由ではないことゝなる。されば、彼れが自由意志の行使により惡を撰び、罪を犯したりと假定せよ、其責任の原頭は彼れ自身の意志なるが故に神の責任ではない。斯樣な論法て、神の無罪放免を主張した神學者は、次の問題に來つて手古摺つた。卽ち、道德上の惡は人間の責任に歸すべきも、地震、海嘯、暴風、洪水、旱魃など人間の意志と何等の關係なき邪惡は一體誰れが作つた、誰れの責任に歸すべきである乎。自然は神の創始せるものと信せられてゐる。今、自然の理法の欠缺により生物を惱ます色々な天災地變が起る。夫れは直接神の責任ではない乎。神學者の或者は自然的邪惡は人間の罪惡の懲罰として來るものであるから、間接に人間の意志に其責任を歸すべきだと云ふけれど、善人も惡人も分ちなく禍ひする地震や海嘯を誰れか人間の罪惡の結果だと見る現代人があらう。

假りに一步を讓りて、自然的邪惡も道義的邪惡と同樣、人間の自由意志に基因したものだと假定するも、斯る自由意志を持つた人間は一體誰が創つたのである乎。彼等神學者は皆神の創造に因ると云ふ。然らば、罪惡を犯す樣な人間を作つた神は間接に人間の罪惡の責任者ではない乎。神若し全能なりせば、假令ひ自由意志を人間に與ふる場合にも、尙罪を犯さない樣な人間を創り給ひ得しに相違ない。若し然ずばとせば、彼は全能と云ふことは出來ぬ。玆に於てか神學者は他に逃げ途を工風せねばならぬ。古い試みでは、邪惡は教育的に造られたものだとしたのであるが、夫れが不都合だと見る人は飜つて全能の意義を限界してゐるのである。先づ前者から先に論じて見やう。

二　邪惡の教育的必要說

此說を信ずる神學者は曰く、神は全智全能なるが故に、邪惡を立處に剿滅することが出來るけれど、其存在を是認し給ふは別に理由あるが故である。卽ちそは教育的理由である。人間は艱難に遇はざれば幸福を知ることは出來ぬ。光を知るには

す能はず、非論理なことをなす能はず。之を爲し能はざるが故にとて彼れは全能なるを妨げず。全能とは道義上論理上可能なることのみを爲す力を云ふのである。されば、神が人間に自由意志を與へんとして同時に惡を撰擇する能力なき樣にするは論理上不可能である。此論理上不可能のことを爲し能はないからとて吾等は神の全能を否定することは出來ぬ。彼等は又曰く人間は道義的人格として創造されたものである。道義的人格は善に味方し惡に逆つて戰ふことによりてのみ獲得し得べきもので、邪惡との格鬪がなければ、道德はあり得ない。されば邪惡は道德成立の必要條件であつて、神が若し邪惡の存在を絕對的に撲滅し給はゞ、道德的生涯は此世から奪ひ去られて了ふ。されば道德成立の必要條件として存在する邪惡を絕滅することが不可能なるが故にとて神の全能を否定することは出來ぬ。

斯樣にして神學者は神の全能の意義を限界し、論理上道德上不可能なることを爲し得ないことは決して神の全能を傷くるものではないと云ふ。併し彼等は今一步退いて深く考へねばならぬ。彼等は全宇宙を神の創造物だと云ふ。然らば、論理も道德も同樣神の創造であらねばならぬ。若し然りとせば、神は自由意志を持つてゐても尙罪を犯さないことを得る樣な論理を持つた自由の人格を創造し得たに相違ない。又惡と戰ふことを必要とするは現在宇宙の常態であるが、現宇宙を作るに當り。神が萬善であたならば、惡と鬪ふの必要なき道德的の人間を創造するを合理的とすることが出來た筈である。何となれば、論理は神の創造によるもので、如何樣にもお意の儘に作ることが出來た筈なるが故である。然るに神が自分で作つた論理に拘束さるゝ樣では未だ以て眞に絕對的全能の神と云ふことは出來ぬと、マックタガアト一派の人は云つてゐる。人が罪を犯す可能なんか難有迷惑の恩惠である。神は論理に背いても尙人に罪を犯す自由など與へなかつた方が一層道德的ではないか（コンシステンシイ）吾等は論理上の一致よりも道義上の一致（コンシステンシイ）を尊重すると云ひ、ハックスレイの如きは『自分は機械になつても傀儡になつても構はぬから、どう

そは蓋し例外の場合で、普通の場合、善美の方が遙かに善美の人格を作る敎育手段となつてゐるのである。

されば、善を造るに善なる手段を以てする方適當なるを知りながら、態々神が善を造る手段として惡を用ひ給ふは謂はれないことで、若し然りとせば、神は萬善とは云へなくなる。借りに一歩を讓りて、善も惡も結局大善に至る敎育手段と見、神が惡を用ひ給ふたからとて、そは只手段であつて目的ではない。目的が善なれば手段はどうでもよいと云ひて、神を辯護することが出來得るであらう乎。『結果(エンド)は手段(ミンス)を正當化す(ジャスチフワイス)』と云ふ此考へ方を例解すれば、直に其不都合なることが分る。例へば玆に一人の親ありて、子供の足を態々折りて骨接醫者に送る。彼は必ず其怪我が快癒することを知つてゐるから斯くしたので、是れによりて子供は苦痛を學び得たと假定する時、吾等は此親を決して非難せないであらうか。神が人間を罪惡に苦しましめても亦彼等を救濟する方法あるが故にとて、人間を苦惱の底に沈め給はゝ、上述の親と同樣非難すべきではあるまい乎。否、全能の神の場合には罪惡の手段によらざるも尙人類を敎育する他に幾多の良法あるべき筈なれば、他に方法あるにも拘らず、之を用ひずして、態々彼の親の樣に子の脚を故意に打挫くが如き方法によりて人間を敎育し給ふならば、神全能には相違ないであらうが、萬善と云ふことは出來なくなる。否、萬善所ではなく、神は果して善なるや否やを疑はねばならぬ。何となれは善によりて善果を得る方法を知りながら、之を取らず、態々惡に因りて善を得んとする者は決して善者ではあり得ないからである。

處で、神學者は邪惡を以て神の敎育手段とは云へなくなつた。別に逃け途を見出さねばならぬ。そは卽ち全能の意義を限界することである。

三　「全能」の意義限界

神學者は全能の意義を限界して曰く、全能とはどんなことでもし能ふと云ふ意味に解することは出來ぬ。神は全智なるが故に論理的である。神は萬善なるが故に道德的である。されば神は惡を爲

は先づ彼等の主張する、道德的生涯は必ずや惡と鬪はねばならぬ事業を必要とすると云ふことゝ、意志の自由は善惡二道の自由撰擇を意味すると云ふことを彼等の神觀に適用して考へねばならぬ。彼等は、神は完全に道德的だと云ふ、完全に道德的なるが故に惡と鬪ふ必要はない。惡と鬪ふことによりて品性を鍛練するは人間の事である。神は完全なるが故に左樣な道義的奮鬪の必要なしと。

右の辯明は成程と感心さるべきだが、彼等は最初、道德的生活には必ず善惡の對照が必要である惡に逆つて戰ふ生活の事業がなけれ道義は成立しないと云ふた。而して神は惡なき道義的生命を創ることが出來ないからとて其全能を毀損することはない。そは事物本然の性質として不可能の事なるが故てあると云ふた。若し此議論を徹底的に擁護しようとするならば、神も道義的の存在として惡に逆つて戰ふ戰士と見らねばならぬ。併し、若し神が惡に逆つて戰はねばならぬとするならは、彼は萬能だとも萬善だとも云へなくなる。何となれは彼は常に惡により抵抗されてゐるからである。又神は宇宙の創造者てあつて、神自身の生活の內惡に逆つて戰ふ事業ありとせば、そは神自身の內に惡あるを意味するものなるが故である。

之に反して神は萬善にして惡を抱容せず、又惡に逆つて戰ふ必要なき完全の實在なりとせば、是れ偶ま以て彼等の論據の薄弱なるを示せるものてあつて、若し斯る實在宇宙に有得とせば、道義的にして同時に無惡なるは事物本然の性質として不可能てはないことゝなる。神御自身が其好適例てはない乎。されば神が左樣な道義的靈體であつて惡の存在を必要とせざる實在なりせば、人間を創造し給ふ場合にも同樣、道義的にして而も全然無惡の存在として作ることが出來た筈てある。若し造ることが出來なかつたとすれば、彼は全能と云ふことは出來ぬ。何となれは、彼は出來得べき事を爲し能はなかつたからてある。

第二に、彼等神學者は、神は絕對的自由を保ち、而も惡を爲さず。彼は行爲する毎に惡を擇ぶ自由あるも必ず善を撰び給ふ。而も絕對的に自由の存在てあると。若し然りとせば、其處に絕對的自由

か常に善のみを行ふ人間として創造して貰いたかつた、惡を爲す自由の如きは鐚一文の價値なきものて、そんな自由など買ひ手があればどんな安賣てもする』と云ふた。

四　全能論の自家撞着

吾等は今茲まて議論を進めて來た、卽ち、神が邪惡を此世に認許し給ふは、他に良法あるにも拘らず是れも敎育の一手段として利用し給ふのではない。事物本然の性質として、正邪、善惡、悲喜哀樂の對照がなければ人生は無意義である。人間は吾等の對立事故の經驗を經てのみ道義的に敎育さるゝので、それなくば彼は機械になつて了ふ、傀儡になつて了ふ。ハックスレイは斯る機械たらんことを希望せしも、自己人格の自由と獨立を尊ぶ吾等は如何にしても邪惡の經驗を經されば道德的性格を發展することは出來ぬ。又惡を擇ぶ可能なければ吾等に自由ありとは云ひ難い。見よ、茲にハックスレイの希望せし如く、吾等に善行のみの自由ありと假定し、惡行を爲す自由なしと假定せよ。此場合、吾等の自由は半減されて了ふ。併し夫れても自由であるには相違ない。善惡兩樣の自由ある場合を三百六十度の自由とせは、善行のみ自由は百八十度の自由に過ぎない。併し夫れても自由は自由である。而して此自由を自由に行使し善事の內から或る善事を擇び行ひ、他の善事を捨る自由ありと假定せよ、斯る行爲の自由が屢々經驗さるゝ時、必ずや吾等の價値判斷に於て或種の善行は他の善行よりも一層好き善だと云ふことになり、善事の內にも自から高下の區別を生じ、小善を避け大善に就くを以て一層道義的の生活となすに至るてあらう。さすれば此世に善行だけの可能しかない場合に於ても、生活の經驗は自然〳〵と大善小善の區別を生じ、遂に善惡の區別が發生するに相違ない。されば意志の自由と惡の存在とは離るべからざる關係にあるもので、惡がなければ自由意志は在り得ない、自由意志がなければ人生は機械になつて了ふ。處で、神が人間の自由意志の爲に惡を除き給はないからとて決して其全能を非難することは出來ぬと。

併し此等の議論には自家撞着の矛盾がある。余

解となる。神が萬善なれば、よし彼れは全能ならずとするも、天地を創造し給ひし時、自分の性格と同樣善なるもののみ作り給ひし筈である。然るに事實然らずして惡も同時に造り給ひしとすれば彼は萬善だとは云へなくなる。

之に反して、神は萬善なれど萬物を悉く創つた譯てはない。卽ち彼れが創り給はざる物が此宇宙にある。そは邪惡てある。惡は始めから存在してゐたのてあらう。或は神ならざる人が創造したのてあらう。或は惡魔が創つたのであらう。されば神の責任ではないと、かう云ふことも出來る。若し然りとせば、吾等は神を絕對的に萬物の創造主と云ふことは出來ぬ。神は只宇宙の善なる半面のみの創造主てあらう。或は既存の材料を使つて、善なる世界、人生、人格などを創造し給ひつゝあるのであらう惡魔が今宇宙を惡化せんとしつゝありとせば、神は宇宙を善化美化せんと働め給ひつゝあるに相違ない。吾等は神の存在を信じて惡魔の存在を否定することは出來ぬ。若し惡魔が人心の妄想であるならば、神も人心の妄想てあらねばならぬ。惡魔は多分神と同樣、既存の材料を惡用して、益々惡を造らんと力めつゝあるに相違ない。神は惡魔に逆つて戰ふ善の勇士である。吾等人間は彼の旗下に相集りて、惡と聞いて創造的に進化するものてある。

神も既存の材料を使ひ、又惡の勢力に逆つて戰ひつゝ善の世界を打建て、善をして益々善ならしめんと努力し給ふ點に於て、彼れの行爲は創造的である。此意味に於て、人間も同しく創造的である。只人間の場合は其創造的行爲が神に較へて、殆んどお話にならぬ程貧弱だと云ふまてある。若し此意味に於て神を創造主と云ふのなら差支へはないが、そは是迄傳統的に信じ來りし如き創造主とは其意義内容が全く違ふ。されば、吾等は神を萬物の創造主（クリエーター）とは云へない。從つて創造神の觀念も吾等の神觀から葬り去らぬはならぬ。

物質や物力が虛無より創造されたなど云ふよりも、無始無終に存在してゐると見る方、今日の物質不滅說や物力不滅說にも能く一致する。然るに

者にして而も惡を爲さゞる實在が此宇宙に存在することを白狀するものである。然るに彼等は自由意志と、惡を撰ばないと云ふ制限とは、事物本然の性質として兩立しないと云ふた。故に神が人間を作る場合に自由意志を與ふと同時に惡をなさゞる樣制限を加ふることは出來ない。そして之が不可能なるが故にとて神の全能を傷けないと云ふたではない乎。然るに今神御自身の性質に於て、絕對に自由なるも尙惡を擇はないことを得る可能を認め得るならば、人間を創造する場合にも夫れが可能であつたに相違ない。卽ち人間は意志の自由を以て尙善惡の撰擇に誤ることなく、常に善のみを擇び行ふ樣作ることが出來た筈である。然るに此可能率を人間の場合に實現することが出來なかつたとすれば、神は全能だと云ふことは出來ない。

以上の理由により、如何に小理屈を附けても、此世に邪惡が存在する以上、所詮神は全能と云ふことは出來ぬ。されば吾等は現在、惡の存在を確認してゐるが故に、其當然の論結として全能神の換歌を唄うて、彼を葬らねばならぬ。神學者は全能神を墓場に送るに忍びないと云ふ。何となれば吾等の多くは神は全能なりと信ずるが故に、神は吾等の賴りになるものであある。若し全能ならずとせば神を信ずる必要なしと思うてゐるからである。乍作吾等覺醒したる現代人は神の全能を信ずる爲めに彼れの萬善を疑ふことを好まない。そは彼れの全能を立てんが爲めには彼れの萬善を否定せねばならぬからである。神は善の代表者である。吾等は寧ろ全能の神を葬つて、萬善の神にかしづきたいのである。吾等が神の全能を否定するからとて、直に神は無能だと云ふ者と考へてはならぬ。全能と無能との間には幾億萬里の差があるか分らぬ。吾等は神の全能を信ぜざれども、彼は人間に較へては殆ど話にならぬ程大能なるに相違ない。但し絕對的に全能ではないと云ふに過ぎぬ。

六　創造神（クリエタアーツド）の死

天地萬物創造の神も傳統的に世界の宗敎が信じ來れる處で、クリスト敎では、神は萬物の創造主であつて、神に創られざる物は一物もないと云ひ來つた。若しさうだとすると、直に惡の存在が不可

第一に、神は形而上の神ではない、經驗の神であつて、吾等が日常生活に密接な利害關關を有し、吾等と共に靈的生活を營み給ふ神である。彼は超然にあらず、吾等の生活經驗に內住し給ふ者である。然り、吾等の生活經驗中或種の經驗（善美の如き）を神と云ふのである。神は吾等が善美の理想として、吾等の先輩として、指導者として、吾等と共に働き俱に樂しみ給ふ。彼は絕對者ではない、絕對的に完全ではない。されば彼は吾等と共に進化し給ふ神である。吾等は吾等の小なる程度に於て創造的に人格の向上を圖り、宇宙の進化に參與する如く、吾等の神は大なる程度に於て、彼れ自身の一層偉大なる人格的靈的進北を遂げ、宇宙の向上發展を企圖し給ふのである。神は全能ではない、乍併、吾等の無能なるに較べては殆んど計り知られぬほど大能なる靈力である。されば常に吾等の靈的指導者として、吾等と共に生の鬪ひを戰ひ給ふ神である。彼は宇宙の創始者ではあるまい。宇宙は無始無經に存在せるもので、限りなく變轉しつゝある。其轉化の內に善の戰士として、美の創造者として、常に宇宙を善化、美化、淨化聖化せんと努力しつゝある吾等は指導者として、神は常に有益なる吾等の靈的奮鬪の鼓吹者、奬勵者たるに相違ない。

乍併、神は完全ならざるが故に、吾等は神に助けらるゝと共に、神樣の事業を助くることが出來る。神若し絕對萬能なりせば、吾等の助力は畢竟無益である。何となれば、既に完全なる神を助くる餘地は勿論ないからである。又、彼れ若し全能ならば、神の事業を助けて「天國を此世に築かん」など吾等が企つるは神を侮辱するものではない乎。然り、吾等が全心全靈を捧げて天國の建設に從事せんなど云ふこと夫れ自身が既に神の萬能を否定せるものではない乎。神若し善美の代表者として、醜惡に逆つて常に戰ひ給ひつゝあるものとすれば、吾等が一事の醜惡に打勝つは卽ち神の事業を眞實に扶助する譯である。吾は神に助けらるゝと共に、神にも助力を致すことを得るが故に、人生の貴く且つ意義ある所以を知るのである。

現代人の自意識は益々明瞭となり、人格的義務

神が物質を創造せりと云へは、其神は誰れが創造したかと云ふ疑問が直に起る。夫れよりも、物質は自存のものであると見る方、進化論的に事物を解釋するには大に都合よいのである。神こそ却て物質中より進化し來りたる靈的存在なること、恰も人間が同樣物質より起りて生命に進化し、植物動物の域を經て、心的、精神的、靈的の人間に迄進化し來りたるが如きものかも知れぬ。昔の人は事物の根原を重視した。吾等は事物の現在及將來即ち其理想を重視する。されば、吾等の神は吾等と同樣、其根原は物質であつても差支へない。吾等人間の貴きは其根原が貴いからではない、其現在に於て、そが靈的の實在なるが故である。又將來に於て、一層靈的進化を遂くべき可能を示してゐるからである。されば、今吾等が、物貨の起原を神に求めずして、神の起原を無始無終の物質に求むるも決して神を冒瀆するものではない。同じ論據により、物質や能力がよし無始無終なりとするも、只夫が爲めに決して貴いものとはならぬ。そが善美の靈的存在にまで進化した時に貴くなるのである。或は、そが善美の靈に奉仕する點に於てのみ、貴いのである。昔の人は家柄自慢で、現在其人が人格の卑しい男であらうとも、先祖が偉かつた場合には其人を貴んで呉れたのである。然るに現代人は、親が非人であらうと穢多であらうと、其當人が偉ければ偉いとして貴ぶのである。神も人も其根原は物質であつても物力であつても差支へない。吾等は其現在及將來に於て其價値を批判せねばならぬ。余は進化の人を信する如く、進化の神を信ず。故に、神を萬物の絶對的創造主として既に進化の必要なき靈體とは信じ得ないのである。

七　結論

吾等は形而上神、超然神、絶對神、全能神及創造神なる五つ柱の神々の爲めに神葬式を濟せた。併し、吾等は只破壞を事とするものではない。吾等は不合理な神觀を葬ると同時に、合理的な現代的神觀を建設せねばならぬ。先づ從來高級な文明人の信じ來つた神の特性から、以上五個の特性を差引かば何が殘るであらう。

此はみな一にならん爲なり

約輪傳十七〇廿一

福音書の信仰は決して一宗一派が、是を獨占すべきものでない。福音書の信仰は超宗派的である。或る人が『總ての人の胸の中には、同じハートが波うつ』と言つたが、この世界萬人の心にひゞく處の靈的實驗を發表したものが福音書である。イエスの宗教である。世界には宗教一つ、ヒユマニチー一つ、『此はみな一にならん爲なり。』

一體我等がキリストの人格の感化を受けるとが、或は靈の賜を得るとか云ふが、此は皆超宗派的の實驗である。キリストの超宗派的實驗が我が心の内の超宗派的實驗に共鳴するからである。我が派より以外に通用の出來ぬ處のものに、どふして世界人類が共鳴する事が出來るか？　是はキリストのみならずパウロに於ても、彼の宗教的實驗の一番大事な處が超宗派的實驗に根ざして居ればこそ、其の書翰は總ての宗派より讀まるゝのである。オーガスチンに於て然り、ルーテルに於てまた然りである。たとへウイスレーの如きロージャー、ウイリヤムの如きチャンニングの如き、一宗一派に屬してをる人でも、今日に於て『彼死すれども猶ものいへり』と言つて、世界の人々より敬慕されて居る處は、實に彼等の超宗派的信仰の賜である。ウイスレーはメソヂストのみ之を專有すべきではない、チャンニングはユニテリアンのみ之を專有すべきではないのである、かの人々は實に各派共通の信仰の先輩である。パウロが言つたように『預言は廢り方言は息み知證も亦廢れん』て宗派的の衣裳はいつかぬぎ捨てらるゝ時代が來る、されど萬人の胸の内に波打つ信仰を望と愛とは、いつまでも廢る事はないのである。今日歐洲の戰場に於て宗教家が親しく實驗しつゝある處のものは之である、あの塹壕の中にはメソヂストも居ればバプテストもユニテリアンも居るであらう、それ等の人々の胸の中に波打つ處のものにアッピールするに非ずんば、本當の活ける宗教ではない。そこで戰爭後歐米に於て教界が一大刷新を有すとせば、私は其の邊から來るであらうと信ずる、戰場生活に於ける宗教的實驗は舊い宗教根性

超宗派的信仰

久布日直勝

責任の觀念が益々強烈を加へつゝある。吾等は封建時代に於ける君臣の關係に於けるが如く、只上より恩惠を仰いで以て滿足し得るものではない。我等は慈善院の厄介者ではない。吾等は獨立の人格である。神から多大の靈力を得て、吾等が日々の精神生活にいそしむことを得るが如く、吾等も神の事業に吾等の靈力を以て奉仕することを喜ぶのである。吾等は神の愛を得て悦ぶと同時に、又神に愛を捧げて、一層其喜びを增すものである。此愛や、奉仕や、若し神が完全圓滿絕對萬能の實在なりせは、そは全く有名無實のものとなる。されば、吾等は是等傳說的の信條を排して、限りなき善美の發展の爲めに奮鬪し給ふ進化の神を信じ、積極的に限りなき善美の理想を實現せんが爲めに奮鬪せねばならぬ。吾等は斯くて宇宙の進化に何物をか眞に貢獻しつゝ進み往くのである。吾等は宇宙の創造的進化を信ずる。吾等が日での行爲は凡て夫れ此創造行爲に善か惡か、建設か破壞か、何れか其一なる効果を齎らすものである。されは、吾等の一擧手一投足は全宇宙に取りて事實上莊大の意義を有するものである。然るに、若し其處に絕對萬能の神ありせば、吾等の努力は凡て夫れ無用の徒勞である。無意義のお芝居である。吾等は過去の生活經驗によりて善美の理想を打建て、之を實現せんが爲めに奮鬪しつゝある神を信ずるが故に、吾等の生命は彼れに取りても、吾等自身に採りても、又宇宙全體に取りても、大に意義あり價値ありと信ずるものである。

命が生れざる限り、各宗派の内にこの超宗派的信仰が勃々として湧くよふに成らねば、宗派合同や眞の意味に於ける協同一致の傳達事業は出來るものでない。自由基督教の立場は是である、昔はユニテリアンとツリニテリアンとが、いろ〳〵神學上の議論をして居つたが、現今ではかゝる論據は甚だ薄弱となつて來た、加之ユニテリアンの神觀其のものが近頃は盛に哲學上の批判を受けるよふになつて來たではないか。勿論、自由基督教はユニテリアンの内に生れ、オーソドックスの内に其の感化を及ぼしたのであるが、自由基督教とは、そんな神學上の爭いではない、自由基督教は實に信仰の據て以て立つ處、人格の據て以て立つ處を指し示す主張である、自ら信じ自ら考へ自ら實行する信仰の勇者を造り出すことが自由基督教の眞の目的である、して見れば自由主義の信仰は、人文の發達とともに勝利を得べきものである。

今日基督教界を眺むれば、各派の内に超宗派的信仰の特長が現はれてをる、メソヂストには人間が罪を悔ひ改めて新らしき人として生れ更はるといふ熱烈なる感情が其の信仰の内に現はれる。バプテストにも特長がある、日本のバプテストにはまだ生れて居ないよふであるが、英米のバプテストには美事に發達して居る、卽ち眞に救はれたる教會員を養生すると云ふ事、又た自由と理想とを愛し、青年にインスピレーションを與ふる若か〳〵しい信念の發露である。またカルビニズムの信仰の内にも宗教的訓練と云ふ特長がある、今日の教會に於て訓練しなければ人物は出來ない。我々は大に之等の特長を採らねばならぬ、しかし是等の貴重なる超宗派的實驗を活かし得るものは、外ではない、前に述べた處の自ら信じ自ら考へ自ら實行し得る處のクリスチャンでなければ、之を我が靈魂の内に受け入れて發展せしむる事は出來ない、自由基督教は之等の點から考へて、實に將來ある宗教である、自ら信じ自ら考へ自ら實行する事は自由基督教の信仰的特權である。

更らに進んで、この超宗派的信仰に活きてをる教會には使命がある。其の第一は教會をリベラライズする事である、自分の屬して居る教會の中に

を打破するに與つて力あるに相違ない。

こゝに色々な御方が御出席に成てをるであらう、メソヂストもユニテリアンも日基も組合も聖公會或はバプテストに屬する人々もあるだらう、而して私が以上申述た事には御異論はないと信ずる。然らば如何にせば、この超宗派的信仰をもつと各派の内に盛ならしむる事が出來るか、又た如何なる貴きものが我等の信仰に生れて、初めて超宗派的信仰に徹底する事が出來るか？。是は今日我國の基督教界に於て最も大切なる問題である。

自由基督教の使命はこの問題を解決する處にある。自由基督教徒とは統一教會に屬する人々のみ言ふのではない、自由基督教は各派の内に各教會の内に盛んに生れつゝあるのである、私も組合教會内に於ける自由基督教徒の一人である。然らばどふ言ふ風にして生れつゝあるかと云へば、超宗派的信仰の實驗をドグマ以上に、信條以上に、宗派的儀文制度以上に重んずる處から生れつゝあるのである。其れは何か？　言ふまでもなく『自ら信じ、自ら考へ、自ら實行する事である。例へば一教會を牧する牧師者に於ても、自分が『自ら信じ自ら考へ自ら實行する』よふに、會員にも『自ら信じ自ら考へ自ら實行をす』べくインスパヤし得る人でなくてはならぬ、傳統的信條や自分が信じて居る事を、其儘盲從的に信ぜしめようとするが如きは、舊時代の牧師者である。故に教會の信仰箇條や牧師の說教にめくら判をつくと云ふでなく、自分の胸の中に起つて來る處のものに根據を置き、『自ら信じ自ら考へ自ら實行する』、こふ言ふ人々が教會員として價値がある。是が内に生れざる限り超宗派的信仰と云ふものは生れない、卽ち自由基督教が超宗派的信仰を生み、超宗派的信仰が自由基督教を生む事にあるのである。イエスの信仰は皆「我がもの」であつた、『自ら發見し自ら信じ自ら考へ自ら實行された』ことが福音書となつて傳へられて來た、パウロに於てもガラテヤ書の冒頭に於て、我が說く處の福音は『人よりに非ず又人に由ず、イエスキリストと彼を死より甦らし、父なる神に由て』授けられたと告白してをる位、内なる信仰を重んじたのである。如斯内的生

界の響きに應じてをると信ずる、或は婦人矯風會の運動の如きも、近頃社會が之を顧迎するように至つたのは、矢張り基督の精神を實行すると云ふ世界の響きに應じて行くからである。過去の教會は過去に葬らしめよ、將來の教會に立つて將來の社會に醒むべし、今やクリスチャンが世界の運命を支配しなければならぬ時代が來た、之は何處から出て來るかと云へば、矢張り自ら信じ自ら考へ自ら實行するを得る、自由基督教の信仰が教會を支配するからである、いづれの國に於ても教會が社會に醒むる處は自由主義の信仰ある邊から醒めて行くのである。

今回の夏期講習會は、決して一宗一派の獨占的信仰を傳へる爲めではない、其の主意書にあるが如く、最も純粹なる基督教的生命の鼓吹、最も進歩せる宗教思想の發揮、及び現代其者の批判的研究であつて、總て超宗派的態度である、いづれの教會に屬する人々でも、又それ以外の人々でも、自ら考へ自ら信じ自ら實行せんと志す兄弟姉妹は、我等に共鳴し、本會を盛大ならしむると共に、我國の各教會内に超宗派的信仰が益〻勃興するよふに努力せられん事を希望する次第である、是が爲めに祈り度いのである。

階級爭鬪信條の基督教的考案と批判

今井三郎

愛、奉仕、公正を中核とする基督教の根本思想と根本的に相背馳する社會主義の要素は(1)經濟的運命論、(2)階級爭鬪論、而して(3)無神論とである。

吾人は本誌八月號に於て經濟的運命論を論評したが、本篇に於ては階級爭鬪の信條を考察批判せんと思ふ。社會主義の思想に於て、此の階級爭鬪の

此の尊い超宗派的信仰を、自分が火玉となつて起す事である、若しも將來に於て宗派の合同の如き事が實行さるゝとすれば、超宗派的信仰の賜より外にはない、かの協同傳道の如きも、未だ本當に心の中を打割つた一致ではない、超宗派的信仰が各教會の中に盛んに生れて、其の信仰が勢力を占め勝利を得るまでに出來るお話ではない。近來英國に於て、盛んに此の教派合同運動、教會一致運動が行はれてをるが、其の運動を見ると實に面白いことがある、何でも頭字には『自由(Free)』と云ふ字がつく、フリー、キャソリック(Free Catholic)、フリー、チャルチ、カウンシル(Free Church Council)と云ふよふに『自由』の字がなければ運動が出來なくなつてをる、面白い現象ではないか。我國に於ても金森通倫、內村鑑造氏の如き熱烈なる信仰を有つて居る人が、盛んに傳道する事は非常に善い事であるが、こゝにどふしても賛成の出來ない一事がある、其の運動の前後を見れば、排斥と云ふ不倫理的行爲が運動方のクリスチャンの間に起る、かゝる狹隘なる舊時代の行動が我國の傳道運動に共ふよふでは、我國の基督教界も前途遼遠と云はねばならぬ。斯く考へて見れば、實に貴いものは自由主義の信仰である、我等は大に奮起して自己の教會の中に、この自由主義の信仰、超宗派的信仰を扶植する事に勉めねばならぬではないか。

第二に教會をソシャライズする事、教會が社會に醒むる事である。今日の教會の十中八九は社會に醒めて居ない、中世紀の教會其のまゝである、だから將來この自由主義の信仰卽ち超宗派的信仰が起つて居る處の教會は卒先らて社會に醒むる事が必要である。私はこの頃、世界の人々の聲が心に響いてならぬ、それはどふ云ふ聲かと云へば、教會はあの聖書の中に現れて居る基督の愛、基督の精神をもつと社會に實行して呉れと云ふ聲である、是は確かに今日世界の人心の要求である、この人心の要求に應じ得る教會はドシ〳〵傳道が出來る。かの救世軍の如きは宗教と云ふ見地から論ずれば、誠に幼稚なものである、されど實際イエスの精神を社會に實行すると云ふ點は、確かに世

に汗して生活する者のみが生存の權利を享有する時代の出現するまでは此の爭鬪は決して終局を見るものではないといふことである。此の階級爭鬪に關して暗示されて居る重要なる幾多の問題がある。例へば抑も階級爭鬪と云ふ事は眞に存在して居るものかまた、階級爭鬪なる教理上の抽象的存在か、然し乍ら現實の社會に於て階級爭鬪の存在を否定する事は無效なる事に屬する。日々の新聞を見よ階級爭鬪を象徴するに充分なる幾多の事件が形を更へて新聞の三面記事を賑はして居るでないか。未だ社會に發露されざる幾多の問題が潜んで居るに違ひない。國民生活の最大の缺陷を曝露せる米暴動は抑も又何事を暗示するか。現代生活に於ける人事關係中確に階級爭鬪の事實ある事は否定し得べからざる事である。吾人は社會の各階級に爭鬪の事實あると共に、ヒユマニテイの流れも亦、大社會の中にありて、靜に併しながら確實に流れて居る事實を見遁すべきものではない。これがゼラルド・スタンリイの意見である。社會主義者なるゼ・ラムセー・マクドナルドは、歴史の階級爭鬪的解説の效果を否定して居る。現歐洲戰爭に關し十五世紀十六世紀に於ける歐洲の爭鬪に關しても、彼は階級爭鬪に就ては消極的態度を執て居る。

マクドナルドは云ふ、歴史が階級爭鬪の存續の如く觀察するのは、それは只『社會の表面』のみであつて、決して社會の中心が、しかく階級爭鬪に依て構成されて居るものではない。寧ろ社會はコオポレイションに依る團體であると云ふのである。クロポトキンの著『ミユチユアル・エイド』中に論ずる所はこの種の所論を裏書するものである。

人種の進歩、人類進化の歴史を見るならば其處には實に人類生活の大部分は協力一致（コオポレイション）に依るでふ事實と、議論とを最も明瞭に解説して居るのである、過去に於て社會進化の爲めに協力的生活が爭鬪、相互相食む生活よりも、より勢力があつたことは事實である。そこで近代の歴史的研究の光に照らして、進化意志として階級爭鬪の教理は嚴密なる意義に於ては、守り難き説であると云ふのであ

教理は直接に經濟的運命論より發達し來たれるもので、經濟的運命論に於て引用せるコンミュニスト、マニフェストによりてもその事が明確である。

經濟的狀態が社會の狀態、或は社會の進歩と直接關係を有するものであり、經濟的狀態が、事實上社會狀態を決定すると云ふ事は、世界何處の都市に於ても散見するところの事實である。エンゲルスは『人類の全歷史は階級爭鬪の歷史で、治者と被治者、資本家と勞働者間の爭鬪の歷史で、かゝる階級爭鬪の歷史は勞働者が開放されたる社會に到達し得ざる進化の歷史を形ち造て居る』と云ふ樣なことを最も强烈に明確にマニフェストの各頁に論議してある。而してそれは進歩の機械としての階級的爭鬪を代表する。羅馬帝國の壞崩に伴ふ經濟的狀態の變化として封建貴族階級が一階級として勢力を有するに至り、奴隷制度は農奴制度と變化するに至た。封建制度が一新階級を破壞すると同時に、中產階級或は資本家階級が勢力を得、農奴制度が破棄される。かくの如きは一般勞働者階級の事業ではない。玆に新しき經濟問題が起り、奴隷が階級的特色を破壞しやうとする。抑も勞働者階級の使命は階級的爭鬪信條の徹底的解說にあるものであつて、只單に資本家階級に對して反抗するものではない、彼等は彼等の階級の生存の擁護と能率的活動とを目的とする對資本家階級の一團體を組織することにある。斯くして社會主義なるものは、本來爭鬪的機關として現出したものであつて、建設的事業に對する代表的機關としてではなかつたのである。かくの如き觀念を肯定するならば此の意味に於ける社會主義は歐洲戰爭に於ける聯合軍のスロオガンの採用すべきもので、所謂彼等の運動は『戰爭を防止する爲の戰爭』(a war to end war)でなければならぬ。マルクスの說に據れば、この二者の中間の存在を否認する社會は飽くまでも二ツの階級に分裂し、不斷に爭鬪を持續するのである、其處には妥協の可能性がない、かゝる社會的危機の時代にありては以上の二階級は永遠に爭鬪を持續するのであつて、汎く言へば社會の救濟に對する只一つの希望はこの勞働者階級の勝利する時萬人が眞に勞働に依て、額

故に、徹底的に階級感情又は階級的偏見を表白するものではない。階級的アピイルスをなすものは非社會主義にして、社會主義者は社會的アピイルスをなすといふて居る。

エチ・ジ・ウエルスの如きは世界的階級爭鬪なる觀念に對しては殆ど嘲笑的に『公平なる意志を有するに拘はらず、男女何れかに偏重する階級間の單なる建設的會合』と言ふて居る。

要するに彼等の意見に從ふウエルスの如きは階級爭鬪の信條と云ふものは社會主義にありては本質的な、又最も肝要なる部分ではないと云ふのである。現代的に進歩せる社會主義者は此の階級爭鬪なる觀念を寧ろ排斥して居ると見るとが出來るのである。只に階級爭鬪なる根本的事實に關して各社會主義の間に異なれる意見を開放して居るに止まらず、實に此の思想を受け入れて居るものゝ間にも尚多種多様の異れる解說、答案を見るのである。そもそも例へば階級爭鬪なる觀念は、階級憎惡を意味するであろうか、階級意識の宣傳者は、謂はば觀念の說敎者であると言ふならば、ジョン・スパアゴウ、其の他の建設派の思想家は『否』と反抗するに違ひない。寧ろ反對に、階級爭鬪の眞の敎理と云ふものは、階級憎惡の呪咀より社會を救濟するものであらねばならぬ。如何となれば、勞働者が、資本家が經濟的狀態から勞働者に對して反對すると理解する時には、資本家が彼れ自身資本家政策の犧牲になつて居るのである。斯かる時には彼等に對して個々人は憎惡の情を感じない、寧ろ冷やかなる哲學の見解を取るに至るのみである『彼等の努力は平和なる改善を持ち來さむが爲に』努力するのである。併ながら『中外社會主義評論』中にジョン・スパアゴウの『立會主義の本領』なる著書が紹介されて居るが、其の中に運働者は資本家に對して徒に憎惡の感情を表白せない、階級的反抗心は歷史の所産である、階級意識を有する勞働者が憎惡の感を持てするも社會の知識が彼を擊射して復讐的行動を阻止する云々と云ふのである。

勿論之れは階級的憎惡の觀念を直接宣傳するものではないが、然し可成それに近いものがあると

る。

階級爭鬪の第二の問題は、若し階級爭鬪が人類の歷史に於て、進步の促進力を構成し階級爭鬪が人類生活を高め、進め、深め行くとするならば、而して又若し現存階級なるものが撤廢されたりと假定して果して其の結果は如何、更に又現存する階級爭鬪なるものが、全然この世から撤廢され今は過去の物語りと云ふ時代が假りに出現したとして其の結果は如何。論理的に批判すれば斯かる質疑は、それ自ら自殺である。階級爭鬪の信條は、然しながら、あらゆる社會主義者に依て確實に受け入れられて居る。一九一二年米國に於て採用されたるナショナル・プラットフォム・オブ・ゼ・アメリカン・パアティに於て、社會は物質的利益の上に基づく爭鬪的團體、階級に區分されて居る。根本的に云へば、此の爭鬪は生產力を有する資本家と勞働者との二階級の爭鬪である云々とある。

經濟的運命論の場合に於けるが如く、この階級爭鬪なる信條の意義も、亦社會主義者中にありて、それぞれ相異なる解說を有するのである。左翼派と稱するものゝ如きは實にこの階級爭鬪に關してマルクスの敎理は一致し、卽ち雇主と、雇人との間の爭鬪を是認して居る、此の所謂勞働者と非勞働者との間の問題は特に米國社會主義に於ては最も論議され擴大され居るものである。之に反して建設的社會主義者は、この信條を改正すべきもの、しからざれば、全體否定するものなりとして居る。スパアゴウは、社會主義者は決して階級爭鬪なるものを創造し、又階級意識なるものを發展せしめたのではない、ただ現代社會主義に於ては、勞働者は社會の平和なる改造の爲に、政治的運動の團體生活を爲すに過ぎないのであると言ふのである。

マクドナルドの如きは更に進んで階級爭鬪なる觀念を全然排斥して、社會主義の本意力と云ふものは爭鬪ではない、創造的想像叡智並に倫理觀念に依て爭鬪を非難するのである。かゝる爭鬪は謂はゞ完全なる社會的調和に向ふ進化の道程である一の出來事である。而して進化に對する意志は、經濟的に非ずして倫理的である。社會主義者は夫れ

爭鬪を透してのみ實現さるべきものである、』

歷史の階級爭鬪的解說が眞實であるか否やは、別同題として、階級爭鬪そのものは日ありて見ゆるものは、見遁すを得ざる明白なる現存の社會的事實である。

併ながら階級爭鬪の觀念が現社會に存在して居ると共に『階級協力』なる事實の存在をも見遁してはならぬ、勞働者と資本家との『ストライキ』『ダイナマイト』等の種々なる出來事は形を更へて日々生活の中に見ゆることであるが、之と共に各階級が、互に相協力しつゝある事實をも見遁すべきではない。例へばコオペレイションであるとか、コオパアトナアシップであるとか、いふやうな、ある一の目的に對する勞働者と資本家との協同的精神、或る一の目的を完成する爲に協力一致する理解ある、團體生活と云ふものが實際上社會生活の中に麗しき花を咲かして居るのもある。卽ち階級協力生活の顯現である。現代的敎會は、須らく、此萬人共通の要求を認識、尊重する協力生活、又は組合組織の思想を尊重するのみならず其處に實に強い協力一致の生活の營まれつゝある事實をも認め、然かも尙ほかゝる理解か、健全なる、最も意義なる生活樣式なる事を高調し、更に進んで斯の如き生活が眞に理想的社會生活の表現なる事を力說し、現に此組織に依て生活しつゝある勞働者竝に資本家に對し靈感と激勵とを與ふべきである。階級爭鬪の事實と同樣に階級協力一致の事實を認むる新時代の敎會は先づ差一に階級憎惡てふ觀念を含む階級爭鬪なる言條に對し極力反對しなければならぬ。所謂階級爭鬪なる思想が陷級憎惡なる精神を誘致して居るやうに新時代の敎會は團體生活の中に、卽ち勞働者と資本家との理解ある團體生活の中に、眞に愛と奉仕と四海同胞の思想とを徹底せしむる爲に、比の世には消極的なる階級爭鬪思想の現存を認識すると共に實に彼等の間に善良なる意志と公正の觀念の上に成り立て居る社會の實在する事を力說せねばならぬ。其處に協力一致の麗はして團體のあること、而してそれが、ライフの意義と價値とを闡明するものなることを說くべき倫理的責任を感じなければならぬのあてる。

見なければならぬ。惟ふに社會主義者運動の多くの指導者の階級爭鬪の觀念が階級憎惡の觀念を包容すると云ふ事を拒む。只マルクスの徒は何處までも階級憎惡の感情が强烈であると思はれる。此の階級爭鬪の異れる解說とその意義とを心に止めて置て、却て、組織されたる基督敎、尠くとも現代的基督敎の此の問題に對する態度は抑も、如何なるべきであろうか。現代的敎會の第一の義務は、あらゆる事實を認識することである。異なれる幾多の社會的階級の中に確に一種の爭鬪が實現されて居ると云ふ、此の生ける事實を無視することは出來ぬ。

階級爭鬪の信條を否定するところのゼラルト・スタンリ・リイの如きも、尙ほ勞働と資本家との間に現存するところの關係を認め、その關係を力說して居るではないか。過去に於ては、彼の言ふ、富豪は實に銃砲を手にして地上を濶步し、而して自然界に富源を探し步いたものである。現代に於ては富豪は機械を以て此の地上を統御して居る。貧しき者は富者の機械に過ぎない、謂はゞ富者の意志が貧者の勞働に現はれるのである。貧乏人は金滿家の機械を運轉し、機械は六百人分の勞働をなす。富者はその貧乏人に對し一人分の賃金を仕拂ひ、五百九十九人分の賃金は富者のポケットにおさめられるのである。

貧者は其の機械的活動に疲れ、戰慄すべき幾多の事件が彼等勞働者の前に迫り、彼等を强迫して居る。彼等は其の爲に戰慄して居るのである。『社會は今や史上曾てなき最も長き取引として空前の最大爭鬪を開始した。白色のテントは野をおふて居る、銃砲を有する資本家と、恐ろしき眼光を有する空拳の勞働者とが何事かを爲さんとして居る。』

敎授ラウセンブッシュは言ふ『人道が眞に使命を以て居る時に、勞働階級者が社會に或る確固たる勢力を得むと望むことは、寧ろ避くべからざることである。併しながらそれは決して容易なる、また、苦痛なきことではない、それは最も勢力ある階級との利害の爭鬪を豫期せなければならぬ事であり、斯くの如くにして來たる社會の進步は階級

社會に徹底せしむる爲めには階級爭鬪を要すると主張するのである、併しながら『奉仕の王國』は社會的爭鬪、又は階級的憎惡の觀念より來たるべきものではない、ただ相互の正しき理解、所謂自己と團體との有機的關係を理解し、自己の所信を明かにし自己の使命を悟り、社會團體に奉仕する生活が營まるゝに至るまでは恁うした理想的境地を見出す事は出來ぬのである。

此の階級爭鬪の實際問題に對して敎會は實に困難なる問題を有する、現存の各階級に對する敎會の態度は如何。敎會に於ては理想として、所謂階級の存在を認むるのは適當ではない、所謂一視同仁で、富めるも貧しきも神の臺前に於て、皆これ神の愛子で、其處に差別的待遇あるべき筈のものではない。しかしながら現存の社會狀態に於ては、其處に種々なる階級上の相違がある。富める者、貧しき者、智識あるもの、智識なきもの、其處に幾多の階級を認めぬ譯には行かぬのである。併しながら彼等は其の階級をもつて敎會生活を營むに非ず、實に其の幾多の異なれる階級に屬する個人個人が一團となつて其處に神を中心とする愛と奉仕と公正とを理解の內容とする團體生活美を現顯すべきものである。この敎會生活の精神が引いて社會生活そのものに適應されねばならぬ。敎會は謂はば一つの社會である、奉仕を信條とする團體生活の典型であらねばならぬ。ジエラルド・スタンリ・リイは『現代に於てはあらゆる產業の問題は本質的に宗敎的問題である。資本家並に社會的指導者をして宗敎的ならしむべき時代である』と云ふて居る。又バツク・ホワイトは勞働者と資本家との關係について敎會の採るべき態度は寧ろ第二の方であつて勞働者に同情して、寧ろ資本家に反抗すべしと主張するのである。以上の二政策何れも不道理なりと云ふに非ず併し乍ら兩者とも危險性を帶ぶと云ふ點に於て一致すると思ふ、由來斯くの如き問題は何れも最もデリケートな問題であつて理論その儘に實際生活に當嵌るものではないのである。例へばある富豪に對して最も寬大、公平にして、不幸なる同胞の救濟の爲めに努力すべしと要求したりとせよ。內にイエスの如き完全なる

社會の中に善良なり意志と公正との觀念を力あらしむることが、現存の社會狀態を改善する根本要素である。枯ち果てたる木はよき果實を結ばぬ、憎惡と爭鬪が四海同胞と協力とを生むものではない。愛は憎惡の觀念よりもより多く强烈である。相互協力の力は相互爭鬪よりも進化の道程に於てより强烈なるものである、『汝の敵を愛せよ、汝の憎む者を祝し、呪ふ可からず』とはイエスの主張の中核思想ではないか、而して此の思想、愛の積極的態度が總ての社會問題を解決する鍵である。新時代の教會はこの福音を宣傳せねばならぬ。それは單に勞働者に對してではない、寧ろ、より多く資本家に對して此の福音が宣傳されさければならぬ、階級憎惡の觀念が只單に勞働者の側にあるのではなくして、實は寧ろより多く資本家側に此の精神が蔓延して居る様に見ゆるではないか。イエスの教訓の根本主張は、それは所謂善良なる意志、協力一致、四海同胞、或は公正等の精神的生活を以て現存の不完全なる社會狀態乃至社會爭鬪に對立して居るのである。イエスの教訓の一なる無抵抗主義なる言葉は文字通りに現代社會組織に適應さるべきものではない。併ながら其の無抵抗主義なる教訓の眞精神が徹底的に理解されねばならぬ。此の理解が現存の幾多の社會問題の進歩的階級に必要なる點である、『階級意識爭鬪に就て考へるものは誰でもそれは廣義に於てのみ必要なるものであり、直接には非倫理的附帶に反抗して擁護ざるべきものである』、とは基督教社會主義者ホオルの言である。この社會階階の信條に關して全社會主義者に共通なるものがある。それは、來るべき社會主義者は、階級差違、階級特權の破壞を意味すると云ふのである。彼等は富の問題に關しても完全なるデモクラシイを夢想して居る。彼等の內には基督者が少くない。イエスはデモクラット中のデヒクラットである。

社會生活に缺くべからざるものは家系の相違、金力、權力、學識の有無に非ずして、『奉仕』てふ思想を社會に徹底せしむるにある。革命的社會主義者をして言はしむれば、奉仕を中心とする社會生活は實に所謂天國であるが、かゝる思想を現實

イエスの教訓に忠ならんと欲すれば教會は愛、奉仕、公正を中心とする協力の精神を鼓吹しなければならぬ。愛は憎惡よりもより強烈である。吾人は奉仕、公正を標語とする個人、また團體の生活を尊重する『弗』(ドル)が人間の眞價を決定すと主張するいかなる思想、組織、團體、慣習でも反抗せねばならぬ。基督教の黄金律は『人』そのもの、卽ち人格中心主義である。現代的基督教會は憎惡を憎惡し、嘲笑を嘲笑し、愛を愛することを宣傳せねばならぬ。吾人は所謂世の强者の改悔の爲めに祈禱を捧げねばならぬ。併し乍ら、公正の爲めに猛然として立たねばならぬ。

終に社會主義が基督教の精神と根本に背馳する點は、彼等の多數が無神論者、唯物論者であることである。斯かる無神論的傾向は經濟運命論の消極的解決より起つたものであつて、それは革命的社會主義の特色である『無神、無主人』が彼等共通の叫びである。抑も神の實在は言語を超越せる實在であつて、社會主義の無神論的傾向は彼等が理屈で作り上げた觀念である。そこには心情の通ふ何ものをも見出すことは出來ぬのである。宇宙人生はそれ自身神秘的實在そのものである。理性のみが人生のあらゆる問題を解決する鍵ではない。吾人はこの事實を無視すべきでないと思ふ。卽ちそれは、無神論を唱導する彼等のある者は眞に公正の見地に立つて社會改造の至誠に燃ゆるの士ではないか。これ實に矛盾の明白なるものである。主よ主よと呼ぶ者、必ずしも天父の意志を體驗する者ではない。一教一派の信條を嚴守することが謂ふ所の宗教的生活でもない。宗教の精神が、個人に、團體に、肉化徹底するを以て理想とする。彼等のある者は『過去の宗教に對して挑戰する必要は無い、如何となれば、それは軈て自然死を見るべき運命のものなればである』と豪語して居る者もあるのである。吾人はこの提言に對して抗議する必要を認めない。然し乍ら、挑戰として喜んで歡迎し、享けられるであらう。

吾人は基督教の根本主張と背馳する社會主義の要素の一般を論じた、卽ち社會主義の中核は經濟的運命論であり、而してそれは唯物的運命論的で

精神的調和と、麗はしき道理性が生きて居る人格者ならざる限り、斯くの如き提唱は寧ろたゞ爭闘を誘致するのみであつて、決して彼等に奉仕と公正の精神生活を理解體驗せしむる以爲てはない。又之と反對に、資本家階級に對して特に排斥的態度をとり、勞働階級者に同情するが如き事あらばこれ又イエスの敎訓と一致するものではない。富めるが故に排斥すべき理由はないのである。イエスがエルサレム殿上に革命的至誠を以て兩替屋を排斥せし態度と、傲頑不遜なる學者、パリサイの小數特殊階級者に對するイエスの徹底的態度を聯想せずには居られない。徒に資本家階級に相拮抗するが如きはイエスの精神ならざるのみならず、たゞ彼等に反感と階級的精神とを增進せしむる機會を與ふるものであつて、決して歡迎すべき賢明なる態度でも、公平なる判斷でもないのである。エドワアド・スタイナアが階級爭闘の問題の基督敎的解決に關する所論は本問題の研究に最もよき參考の一つである。

敎會が革命的精神を鼓吹することや、各階級統一の思想を排斥し一階級としての資本家の存在が社會に害毒を流すと主張する事は決して困難なる業ではない、また革命思想を力說し、革命運動を鼓吹する事は容易なる業であらう。問題は主張の具體化、主張の生活化である。いかに識別すべきか、いかに愛と奉仕と公正の精神に基く社會改造の福音を宣傳すべきであるか、又如何に此の精神を一人〳〵の中に徹底せしめ、現實の社會生活そのものに徹底せしむべきであるかと云ふ點であつて、特に吾人の注意を要する點は憎惡、爭闘、反抗の觀念によつて社會を改造するに非ず、愛、奉仕、公正の精神をもつて社會改造を計劃すると云ふ事である。卽ち社會の弱點、暗黑面、罪惡に對して徒に反抗的態度を執るのでない。實に愛と奉仕と公正の精神に基く社會改造の Working out の Plan を提供するのである。かゝる社會改造の事業は勿論容易なる業ではない。肝要なる點は非難排斥ではない、奉仕と公正とである。この精神にして個人と社會とに徹底せんか、敎會は社會よりより多くの尊敬を受くべきものである。

は一定の制限を以つて始めて力強く發揮さるゝのであるが、ルッソーの如き感情本位の自由狂となる時には、自己及社會の生活規準を無視するのである。彼は無制限なる感情的自由を以て藝術とし、又人道主義の實現であるとしたのであるが、其實人間の社會性及共存性を否定した本能狂であつた。

自由狂（eleutheromania）は單に外的な又は人工的な範圍又は制限を無視するのみではなく、我等の生活發展の經路に必要なる眞の制限をも顧みぬのである。例へばフレデリック・シュレーゲルは僕の云ふ意味の自由狂者であつた。と云ふのは彼は詩人の變幻多樣なる氣分と云ふものは、凡て制限とか法則とかに制さるゝものに非ずして、これに超越するものであると云つたからだ。ダンテの如きも他獄六道の繪卷を詩に作つて、當時の人々を驚かした程の空想家であつたが、シュレーゲルの云ふが如き氣分開放の自由狂ではなかつた。トルストイは彼は同胞に對する同情觀念を說く時には、彼は一種の自由狂者の如き觀があつた。ニイチエも超人を力說する時には熱烈なる自由狂者であつたかも知れぬ。然し乍ら、この二者はルーソー主義の自由狂とは全然反對の位地に立つてゐる。ルーソーは自然のまゝの感情、又は無制限なる本能の働きを以て人間生活の基礎とし、又社會生活は各個人の感情の擴張であると云ふのであるが、トルストイは感情生活に信仰と云ふものを取り入れて、その無制限なる又放縱なる感情の擴張に確實なるリミットを置いた。ニイチエも本能生活を說いたのであるが、本能を自然のまゝに放任する無節操な狀態に生活するのでなくして、意志の力を以て本能を統一し、整理し、又選擇して眞に偉大なる本能のみを發揮する時に人間生活の自由があると說いたのである。更らにバイロンの自由主義もシュレーの同情主義にも明かに自由狂の分子を認めらるゝであらう。されど彼等の自由狂は、當時英國社會に暴威を揮ひつゝあつたオリー主義に對する反抗の聲として見れば、彼等の自由狂も是認さるゝ所がある。ところが今日の社會は自由を得んが爲めに、凡ての社會生活の規準を打

あり、無神論的であつて、何れも基督教の根本精神と相背馳する思想である。階級爭鬪の信條に於ては卽ちその內に階級憎惡の觀念及び不正なる意思が含まれて居る、如斯きはイエスの愛と公正とを內容とする精神生活と絕對的に相容るゝものではない。無神論が非基督教的なるは論を俟たぬ。

而して彼等が現實生活の唯物的基礎の確立を力說し、完全なる社會の民主化、民主思想の社會化の爲めの爭鬪を持續せんとする點に於ては、イエスの使命と契合共鳴する所のものあるを認めぬ譯には往かぬ。

自由と制限

工藤直太郎

一

民本主義が我國の一大社會思潮となるに從つて、個人生活又は社會生活上の自由を叫ぶ聲が日增に增大するに至つた。然し乍ら、自由と云ふことに二個の樣式があることを知らねばならぬ。一はヂャン・ヂャック・ルーソーの唱へたるが如き感情的自發の自由である。卽ち感情の無限の自由を求むるのであるから、その自由の內容に何等の範圍も限定もない。他は個人生活、其內外兩面の生活に於て、自己の生命を擴張發展せしむる時にその擴張過程を確實にならしむる保證として、發展の道程に一定の規範を設けることである。無制限の自由と、無選擇の感情の發展とは、近代の生活開放論者の中で、ルーソーに最も強く現はれてゐる。ルーソーは感情的自由を、個人又は社會の自由を無視する程に擴張した。極端なる感情的自由を主張したるが故に、個人生活の自由を保證する社會制度さへも無視したのである。愛と自由と

情的自由主義者はa law for thingのみを認めて、a law for manを無視するに至るのである。ルツソーは人間の原始的なる感情にのみ重きを置いて、人間の自然性そのものゝ自由を極端に主張したのであるが、彼はその結果人格の自然より異つた努力的方面を認めずに、單に自然的な動物的な自由のみを認めたるに依つて、彼の自由主義は眞正なる人格的主義に非ずして、何等整齊せられざる放縱なる本能的自由主義に墮した。卽ち彼の自由主義は一定の選擇と目的と統一とを有する人格的意義あるに非ずして、進歩と高上とを認めざる本能的自由主義であつた。

人間を單に自然現象と目するものは、それは科學的に又は感情的立脚地から考察したにせよ、單に無制限なる自由擴張を觀ずるのである。彼等から見ると、個人及社會の成長發達は、たゞ自然性を擴大すればその目的を達せられると信ずるのである。デデローはルーソーと同樣に、極端なる自然擴張を力說した人て、近代開放論者の先覺者てある。併し彼は自由の人格化を等閑に附したので、その自由論は自然の無秩序と混雜と不整齊を肯定するものとなつた。更らにデッケンスはその人生の見解に於て極端なる自由主義者であつた。彼は餘りに自由なる人生觀を有してゐたから、彼は藝術上偉大なる天分を有するに拘はらず、人生に對する自由主義と、その藝術上の自由主義を調和することが出來なかつたのである。感情的自由主義者（之を感情的自然主義者と云つて宜ろしい）卽ちロマンチストは、感情的に生活內容を擴張せんと欲し、その感情に對する凡ての制限規範を排斥するのである。ところが、知識的自由主義者は、恒に知識と力との擴張を求め、而して之れに制限を加ふるあらゆるものを排斥するのである。自由主義者は知識的に又は感情的に如何に生活を自由ならしめんとするも、我等は人間に對する法則 a law for man と物に對する法則 a law for thing が存在することを忘れてはならぬ。然し乍ら何故にその二つの法則が調和することを得ず分立してゐるかと云ふ理由を知らねばならぬ。もしも人間は自然現象であつて、その生活を外的に擴張する

破せねばならぬと云ふルーソー當時の社會狀態とは異つて、社會に自由を擴張せんが爲めに要する正しき制限と訓練が、今日の社會に缺如してゐる故に苦みつゝある時代である。

過去數世紀間の世界歷史は開放の歷史であつた。色々の天才が起つて、個人生活及社會生活の開放を叫び、社會の非人道なる舊制度及習俗を打破し、而して自由なる新生活を創造せんとする生活改造の使徒となつて、奮鬪して來たのである。近代の開放論者と目せらるゝユーゴー、ワグナー、イブセン等は如何に熱烈なる生活改造家であつたか。過去一世紀間の歐洲の民衆はことにあらゆる壓制者と烈しく戰つたのである。近代の民衆は凡て社會の反抗的氣分に育成されたのである。それ故極端な自由思想に感溺した人々は、各自の義務を顧みることよりも、その權利のみを求め、片務的自由に墮し、生活上の自由を保障する爲めに、自己及社會の制限と制裁を憎惡するに至つた。

二

有機的、組織的社會を構成してゐる我等は、眞に生活上の自由を伸張するには、外的なる自由を棄てねばをらぬ。自由は單に淺薄な無定見な個人的觀念から割り出さるべきではない。自己の內的要求に基いて、眞實なる人格的基礎に自由の領土を伸張せねばならぬ。勿論僕は人間生活の外的な又は內外的な一切の法則に對して反抗することは、近代の社會運動の全部であるとは云はぬ。ルーソー式の無政府的無社會的自由狂は、民主的なる近代社會を構成する大なる刺戟であつたらうが、近代の社會思潮の全部ではない。たゞ我等は過去數百年間ルネッサンス以後、漸次力强く明白に現はれ來つた、人間生活に對する自由的見解が、社會及個人の發展を促すに力あつたことを忘れてはならぬ。世は漸次自由主義平等主義に進むに從つて、その傾向が極端になると、人間に對する法則の觀念(a law for human nature)を薄弱ならしむることは疑を容れぬ。

エマーソンに云はせると、この世に相異つた二つの法則があると云ふ。一は人間に對する法則、他は物に對する法則である。ところが、極端なる感

自由に非ずして、却つて不自由となるのである。それ故無制限放縦なる最高の人間の法則は集中の法則である。集中といふのは、擴張とは反對に、一定の法則規準と歩調を共にして確實に自己發展を遂げることである。極端なる自由主義者は、自己以前何物をも存在しなかつた様に、社會を組織する秩序法則を無視して傍若無人に生活するのであるが、それは自己の生活を無制限に擴張して却つて自らその生活の領域を縮小窘束するのである。知識的自由主義と感情的自由主義とは、近代社會を構成する二つの大きな潮流であつたが、今や社會はこの何等の内的制限を有せざる放縦的擴張に依つて慘苦を受けつゝあるのである。

アーネスト・ルナンは、多くの人は益々知識的に發達して來ると、不知不識その反對の傾向を求むるに至るのである。卽ち不合理の分子を求むるのである。極端に知識的になると、その生活は絶えず威壓的なる知識の渦に巻き込まれ、常に動搖不安を感ずる。それ故全く無智であると云ふ狀態の世界を想像して、辛くも平安を感ずるのである。かゝる人は婦人を愛するならば、自然のまゝ衝動のまゝに生活するが如き單純なる婦人を愛するのである。その知識的頭腦は沙漠（オーシス）に綠水を求むるが如く、純朴なる自然生活を渇望すると云つてゐる。知識上の無制限なる自由の寂莫は、感情を無制限に自由ならしむることに依つて融和さるゝのである。又無制限に感情を擴張して、その結果秋風枯葉の堪え難き落莫の感に陷ることを經驗するものは、その安息所、慰安所を知識界に求めて、寂莫の苦しみを脫せんとするに至るのである。

とに角、知識上、感情上の自由主義も一定の制限を設けて始めてその本領が發揮さるゝのである。然るに自由主義と云ふと、單に社會生活及個人生活の無節制の擴張を意味するが如く信ずる人が多いのであるが、開放發達に一定の制限を設けこれに準じて生活改造に努力して行くところに眞の自由生活がある。

四

フランス人やロシヤ人は個人生活並びに社會生活の改造に就て、極端から極端に走るのであるが、

ことに依つて、成長するならば、人間は人間として内的に集中して成長することも出來る筈である。人間は自然以上の靈能のある生存物であると云ふのは、單に事を行はんとする力を有するといふよりも、事を行ふと云ふことに於て行爲を制限する力を有するからではあるまいか。人間以外の動物は本能や自然機能の命ずるがまゝに、何等の顧慮も思索もなく、直にその衝動のまゝに事を爲さんとするが、人間は凡ての行爲に於ては、非常なる努力的制限と考慮とを費すのである。

三

エマーソンに云はせると、神は人間の靈性の高上と、その擴張の爲めに存在するものであると共に、一面人間の內部生命の放縱なる分子を制限する力である。卽ち inner check であると云ふのである。知識と感情とを擴張し、自由とならしめんには、我等は一層生命の內的集中（コンセントレーション）と選擇と云ふことを嚴密にする必要がある。その時は我等の才能が最も強く表はれる時である。我等の生活樣式を眞正に選擇するといふことは、眞正なる標準を有せねばならぬ。而して眞正なる標準を有するといふことは、我等の行爲に於て、常に自己の衝動に制限を加ふることである。由來人間はその制限と自制とに準じて、その自由を欲する要求心も亦發達して行くのである。

新古典主義の文學者又は藝術家は集中の法則、卽ち統一、規準、目的の法則を以て最高の人生律と觀じたのは至當の事であるが、彼等はこの人生の法則を、生命の有せざる偏狹固牢なる形式主義（フォーマリズム）と混同したから、その人生律に對する考が彼等の藝術並びに人生觀に禍を招いだのである。然るにルーソー一派の感情的自由主義者は、人生の統一、規準及目的を無視して只管その感情を無限に擴張して行つたのである。その弊たるや、博愛平等の精神を社會に實現せんと欲し乍ら、却つて社會の凡ての法則規約を無視して放縱主義に墮するに至つたのである。人間生活の自由を求め乍ら、人生に對する特殊なる法則を無視したから、生活に何等の統一規範のなき混亂せる放縱生活を見るに至つたのである。一定のシステムを有せざる生活は

國教なるものは、ローマ教とルーテル宗との妥協に外ならぬ。フランス大革命の思想も、シエレーやバイロン時代の英國ロマンチシズム新運動に影響を及ぼしたる丈で、實際社會卽ち政治、經濟、產業の上に大なる改造又は變動を與へて居らぬではないか。商工業の急激なる發展と共に、幾多の富豪現はれ、社會に嚴然たる金權の勢力を確立したが、彼等成金黨は貴族と妥協して、資本階級の利益を擁護した。更らに又カーライルやラスキンやキングスレー等の盛んに攻擊したるマンチエスター學派の經濟主義と云ひ、ミルの功利說と云ひ、要するにその根底に彼等の妥協精神が活動してゐるのである。

英人の妥協精神は甚だ功利的で、不純粹で決して感服されぬが、彼等は自由を得んとする時には、何事に依らず、その發展徑路に一定の制限（リミット）を設けるを常とすることを忘れてはならぬ。而してその制限も、その生命の發展するに從つて、進化するので、不斷の創造進步に準合するのであるから、生活上の法則も制限も融通の利かぬ偏窟固陋なるものではない。生命のない形式主義（フォーマリズム）ではない。英人の妥協主義は決して贊する所ではないが、而かも彼等はその個人及社會生活上に、a law for things を認むると共に、a law for man を重んずることを知らねばならぬ。それ故、現代社會制度を更らに自由にし、更らに人道的にし、個人の生活を更らに高上せしめんとするには、單に自然的な感情的な、無節操なる自由發展に委してはならぬ。自由を保障する正しも制限（リミット）の有せざる自由は、個人及社會の壞滅を意味するのである。生活上の極端なるドグマ又は機械化を避けて、同時に極端なる放縱なる自由主義を排し、眞正なる一定のリミットを生活の中心として合理的改造を遂げつゝ進むは、現代社會の人道的進步に對す最高の奉仕ではあるまいか。

英人はその國民性としてあらゆる様式の開放に制限を求め、制限に開放を求むるのである。その國民性及其國民的教養を一言にして盡くせば功利的である。エドマンド・バークは自由は一定の法則で制限せぬばならぬ。無制限の自由と無撰擇の自由は、個人及社會生活の破産であると云つてゐるが、これ英人の生活傾向を説明するに足る者である。彼等は理想と實際とを區別してゐる。理想は理想として結構であるが、實際とは全く別物である。宗教、政治、道德其他凡ての方面に於けるトラデションは不安全にして又時代遲れのものであらうが、それで實際生活上格別不便がないならば、何も勝手の知れぬ理想論を擔ぎ出すに及ばぬと云ふのである。

これ一面彼等の生活傾向に根ばりついてゐる保守主義の結果であると思ふが、之を彼等の制限主義、又は經濟主義を解釋するのが適切であらうと思ふ。保守主義ならば、傳來の制度、文物及び習慣を尊重することでなければならぬ。然るに英人はトラヂションを決して尊重してゐるのではない。彼等の賢明なる寧ろその缺陷も短所も充分御承知になつてゐるのだ。たゞそれで一通り社會及個人生活の安祥と幸福が保たれるならば、一概にそのトラデションを排斥して社會の根底を動搖せしむるに及ばぬと云ふのが彼等の生活態度である。萬事に就て、制限と調和と、自己反省を以て進む英人に進化（イボルーション）があるが、革命（レボルーション）がないと云ふのはこの故である。彼等は一の道具にしても、それが、すり減て役に立たなくなるまで、使つた方が德用だと云ふのが、彼等の態度で、人生に於ける幾多の思想も制度も、習慣も、役に立つ間は自己の生活に利用せんとしてゐるのである。

理想と現實を分ける英人の功利的性格は僕は決して感服するものではない。ニイチェ其他の大陸の思想家より、英人は僞善者であると攻撃さるゝのは、彼等の功利的性格が禍をなしてゐるのではないか。彼等は凡ての生活に就て中間を歩むが故に、問題がある度に何事にも妥協主義を發揮するのである。政治、道德、宗教、文學いづれの方面に於ても妥協を以て進むのである。今のイギリス

一　王道總論　以爲らく、孔道を實現する者は王者なり。而して王者の道に於て最上のものは、唯だ仁義に依る王道あるのみ。王覇は臺池鳥獸を樂むによりて行はれず、肥肉肥馬を畜ふるによりて行はれず、聲音便嬖の存するによりて行はれず、又民の多く土地の廣きによりて行はれず、兵革の强く利得の大なるによりて行はれず。唯だ德を以て王たるによりて行はる。而して德を以て王たるには民を保つにあり。卽ち民心を服するにあり。換言すれば人の和を得るにあり。かくて民を保つには恩を以て百姓に臨むにあり。然るにこの恩卽ち同情は忍びざるの心にして何人にも嚴存せり。故に王たる者はこの忍びざるの心によりて王道を爲すことを得べし。若し之を能はずと云ふ者あらば是れ未だ恩を用ゐざるの人なり。譬へば吾が力百鈞を擧ぐるに足るも一羽を擧ぐるに足らず、明は秋毫の末を察するも輿薪を見ずと云ふ類なり。故に王の王たらざるは爲さゞる故なり、能はざるに非ず。されば王たる者は先づ吾が老を老として人の老に及ぼし、吾が幼を幼として人の幼に及ぼし、以て四海を保たば覇道直ちに成り、天下は掌に運らすべし（梁惠王章句上。是れ東面して征すれば西夷怨み、南面して征すれば北狄怨み、奚んぞ我を後にすると曰ふ類にて、民の之を望むこと大旱の雲霓を望むが若し。故に王者たらん者は民を虐ぐるの國に往きて之を征せば、民之を水火の中に拯はるゝと爲し、簞食壺醬して王師を迎へん。若し其の父兄を殺し、其の子弟を係累し、其の宗廟を毀ち、其の重器を遷さば、民何ぞ之を迎へんや。反つて仁政を行はざるの結果は天下を爭亂の巷に化するに至るべし。故に武斷的侵略は覇王の道にあらず。專制主義は王道に反せり。王道は仁義を以て主義となす。と（梁惠王章句下）

二　王道各論　孟子は以上の如く王道の意義を述べ、而して王道の實行方法を論じて曰く、王者政を發して仁義を施し民心を服するには、一定の法を制して生活の道を與ふるにあり。否らざれば假令道義の學を講ずると雖も、是れ徒勞のみ。さて法を制するには自然の理に則り、且つ必要なるものより始むべし。（一）先づ穀物蔬菜に關しては

研究

孟子の倫理觀

一條忠衞

第一　事蹟學統

孟子、名は軻と云ひ、魯の公族孟孫子の後なり。世人敬して孟子と云へり。大凡紀元前三百七十九年同二百九十四年頃の人にて、孔子を去ること一百有餘年にして出でたり。孟子は子思の正統を承けて立てるものにて、實に孔子以後の大儒なり。當時は天下亂れ、諸侯放恣にして干戈を事とし、攻伐を以て賢となし、傍ら楊墨の言大に行はれて孔道日に衰ふるに會し、孟子は蹶起して四方に遊說し、孔子を祖述して以て後世に傳へんと努めたり。號して曰く、我は善を正し惡を戒むる者にて、禹周公孔子の三聖を繼ぐ者なり、我豈辯を好まんやと。故に孔子の學に忠にして一步其の上に出づるを欲せず、唯だ私淑して之に學ばんことを願ひたり。然れども其の論辯の巧妙にして道理の暢達せるため、孔子の未だ及ばざる所を發揮して創見せる點甚だ多し。孟子の倫理說は彼れの大著孟子一篇に於て之を見るを得べし。

第二　王道論

孟子は孔道の政教一致の趣旨に從ひ、道德と政治には離るべからざる關係ありと考へ、政治の實現は道德の實踐によりて之を期すべしと爲し、倫理の第一義は道德政策の研究にありと見たり。孟子は之を王道論と稱し、開卷第一章に於てその總論を述べたり。

をして禽獣たらしめんと欲するものなり。人にして禽獣たらば互に相食むのみならむ。仁義を充塞するの否なること是に由りても明かなり（滕文公章句下盡心章句上告子章句上）。夫れ仁は人の心なり、義は人の路なり。卽ち仁は天爵、人の安宅にて、義は人の正路なり。故に安宅に居らず、正路を舍てゝ由らざるは誤なり（離婁章句上）。而して人の學ばずして能くする者は其の良能なり。慮らずして知るものは其の良知なり。然れども是れ共に仁義たるのみ。核提の童その親を愛するを知らざることなく、其の兄を敬するを知らざること無きが如し（盡心章句上）。是れ仁義は吾人の道にて之を遠に求むる要なく、爾く我が誠に存する所以なり。而して身を誠にするには道あり。卽ち善を明かにすること是なり。誠は天の道にて之を思ふは人の道なり。至誠にして動かざるもの未だ之れあらず。又誠ならずして能の動くもの未だ之れあらず（離婁章句上）。故に天下の廣居に居りて天下の正位に立ち、天下の大道を行くなり。若し志を得れば民と共に之に由り、志を得ざれば獨り其の道を行ふ。富貴も之を淫する能はず、貧賤も之を移す能はず、威武も之を屈する能はず。此れ之を大丈夫と謂ふ（滕文公章句上）。而して仁を賊する者は之を賊と謂ひ、義を賊する者は之れを一夫と云ふ。彼の紂の如きは是れ一夫なり。故に一夫の紂を誅するは君を弑すると異る。君を弑するは否なり。然れども紂を誅するは可なり。何となれば、紂は君にあらず。君とは王道を行ふ仁德の王者を謂ふものなればなり。卽ち民に迎へらるゝ者の稱にして、斥けらるゝ者の稱にあらずと（梁惠王章句下）。

第四　性善論

扨て斯の如く仁義を以て至善となし、人生の理想と目すべきとは自明の眞理なれども、世人の常に之に反戻して不仁不義を爲す所以のものは何ぞや。不仁不義を爲すは是れ人性の必然に出づる所にあらざるか。若し然りとせば、理想の實現は不可能なるのみならず、無益の業たらむ。理想の實現が人生に可能なるには抑も如何なる原理に基くか。卽ち品性陶治の可能性は果して吾人に存するや否や。是れ孟子の懷ける疑問にして、彼の學說の死活問題なりき。

農時を妨ぐべからず。然らば食して餘りあらむ。魚鼈に關しては繁殖を保護して濫獲を禁すべし。然らば食して餘りあらむ。山林に關しては時を以て入らしむべし。然らば林木は用ゐて餘りあらむ。桑を樹ゑ帛を織り、鷄豚狗彘の畜その時を失ふなからしめば、用ゐて餘りあらむ。斯の如く生活貨財にして餘りあらば、民をして生を養ひ死を喪して憾むところ無からしめむ。生を養ひ死を喪して憾むところ無ければ、卽ち法則立ち敎化興るものにして、王道是より始まらむ。(二)而して、更に進んで民の生業を制し、道德心の基礎を授くる所なかる可からず。何となれば、恒産なくして恒心ある者は惟だ敎育ある得道の士のみ能く爲すべし。民の若きは則ち恒産なければ恒心なき者なり。苟も恒心なければ其の放辟邪侈に任せて不善を爲さゞること無からむ。之が上たるもの爲めに其の恒産を制せず、其の罪に陷るに及んで從つて之を刑せば、是れ民を罔するものなり。焉んぞ仁人位にありて民を罔するの制を立つるの理あらむや。是の故に明君の民の産を制るや、地を度りて民を置き、口を計りて田を授け、刑罰を省き、稅斂を薄うし、一歲出づるところ仰いて父母に奉事するに足り、俯して妻子を畜養するに足らしむ。若し樂歲相續いて已まざれば以て修身飽くべく、若し凶年に遇へば積蓄するところ亦た以て死亡より免るべし。然る後、庠序の敎を設け、孝悌の義を以て之を導き、驅りて善に之かしむ。故に民の之に從ふや頗る輕易にしてまた戮力を要せずと梁惠王章句上。

第三　仁義論

孟子は斯の如く仁義は王道の目的なりと說くと共に、至善卽ち人生の目的なりと觀たり。仁と義との言は古より行はれたり。然れども、孔子は主として仁のみを說きたるに反し、孟子は時勢の要求に應じて仁義を併唱したり。以爲らく、楊子は唯だ己が身を愛するの利を知りて、他人の爲めに致すの義を知らず。故に君なるものなく、從つて國家なるものなし。墨子は之に反して、愛に差等なく、至親を視ること路人に異らず。故に父なるもの無く、從つて孝なるもの無し。斯く人にして君なく父なくして可なりとせば、二子の說は是れ人

あらずと。此れ山の性ならんや。人に於ても然り、豈に仁義の心なからんや。其の良心を放失する所以のものもまた猶ほ斧斤の木に於けるが如し。然るに朝旦より良心を放失するを爲さば、焉ぞ以て仁義を保つべけんや。然り、良心放失すと雖も、未だ終絶せざるものあり。其の夜間、心裏靜の時に到れば、則ち善惡の念あるべし。是に於て之を培養せば以て仁義の美を爲すを得ん。然るに旦晝の不仁不義は日に之を反覆するにより、心裏常に平靜の時なく、以て行爲は禽獸に違はざるに至る。人此の種の禽獸を見て以て未だ嘗て仁義の心なしと爲す。是れ豈に人の情ならんや。故に仁は人心なり義は人路なり、其の路を舍てゝ由らず其の心を放つて求むることを知らざるは謬れり。學問の道は他なし、其の放心を求むるにあり（告子章。句上）。されば仁義禮智は外より我を鑠すにあらず、我に固有するものなり。人之を知らざるは意識せざるのみ。求めば之を得べく舍つれば之を失ふものなり（告子章。句上）。故に其の心を盡す者は其の性を知り、其の性を知れば天を知るべし。其の心を存し其の性を養ふは天に事へ以て命を知る所以ありと（盡心章。句上）。

第五　修德論

斯く性の善にして、仁義の實現に可能の條件を具有するとは既に明かなり。然らば吾人の本務たる此の仁義を心に求め德を修むるには、如何なる方法に據るべきか。孟子は三箇の條件ありと爲せり。

一　不動心　言うて曰く、仁義を心に求むるには心を動かさゞるを要す。心を動かさゞるには勇を養ふべし。勇を養ふには、曾子が孔子の大勇に本づき身に反みて理に循ひ直不直を以て勇怯と爲せるを倣へば、要約を得たり。而して勇によりて心を動かさゞるは、元と志と氣との關係より求むるものなれば、能く此の關係を究むるを要す。夫れ志は心の之く所にして一心に於ける主體なり。心に得るに因りて能く動くものなり。氣は志の卒にて充滿して志の運用たるものなり。心に得ざるも能く自ら動くものなり。因りて志の向ふ所に氣は常に從ふべし。故に吾人は志に對しては敬以て之を持し、精明の體を失はざるを要す。氣に對し

一　四端論　孟子は以爲らく、理想を實現する可能性は仁義卽ち至善として、吾人の意識に必然的に固有するものなり。故に人性は善たり。若し之を知らんとせば、須らく主觀的に吾人の情を見るべし。情は性の發動せるものなれば、情の已に善なるあらば性の善なるは推して明かならん。夫れ人には忍びざるの心あり。此の心は人の本心より生ずる情にして以て善を爲すべし。是を惻隱の心と云ふ。人にして之なきは人にあらず。惻隱の心は仁の端なり、羞惡の心は義の端なり、辭讓の心は禮の端なり、是非の心は智の端なり。此の四端は各人之を有すること四躰の如く、一に心の作用なり。故に自ら之を行ふ能はずと云ふものは已を賊するものなり。四端は火の燃へ泉の達するが如く、之れを充たさば四海を保つに足るも、充たさゞれば以つて父母に事ふるに足らず。故に四端にして擴充すれば道德は自ら實現せらるべし。是れ性の善なるに理由するものなりと。（公孫丑章句上。）

二　放心論　說いて曰く、性の善なるは四端の作用に源すること以上の如し。然らば次に惡行爲に由つて來る方面より尋ね見れば如何。惟ふに人性の善なるや自然に出で、惡を爲すや人爲に出づ。猶ほ水の下きに就くがごとく、激して山に行るが如し。この點に於て彼の告子の說は誤れり。又凡そ類を同じくする者は擧て相似たり。譬へば耳目口鼻のごとし。心に於ても然り。萬人その價値作用を同じうせり。是れ心は元と理義なればなり。聖人は心の同じく然る所以の道を盡したるに過ぎず。而して理義の吾人の心を悅ばすことは、猶ほ美肉の我が口を悅ばすがごとし。然るに人の之を悅ばざるは、外物のために其心を陷溺するもの有るに由る。夫れ牛山の木は嘗て美なり。然るに大國の郊外に在るを以て、斧斤之を伐るもの衆からば以て其の美を保つべけんや。然り、美すでに失はると雖も、根株のなほ存するもの無きに非ず。其の日夜の息するところ、雨露の以て潤うところあれば萠蘖の生なきにあらず。是に於て之を養はゞ、猶ほ以て其美を現すべきなり。然るに直ちに牛羊を牧するあり。是を以て彼の如く濯々たり。人その濯々たるを見て以爲らく、嘗て此の山に材

なきを要す。言は元と心に出づ。苟も心にして理に明かなれば言に病なし。凡そ言の偏重するもの之を詖辭といふ、之を聽けば必ず蔽隔するところあるを知る。言の拘檢するところなきもの、之を淫辭といふ、之を聽けば必ず陷溺するところあるを知る。言の義に遵はざるもの、之を邪辭といふ、之を聽けば必ず正直に離叛するを知る。言の能く其の短を護するもの、之を遁辭といふ、之を聽けば必ず困屈行はれざるを知る。此の如くして詖淫邪遁の辭、將に口より出でむとすれば、先づ其心の蔽陷離窮するところあるを知るが故に、其辭をして發生するところ無からしむ。之を言を知ると曰ふ。蓋し心は隱微の地なり。若し此の病言を爲すもの下に在れば、民相感通し政に服從せず、以て上の法教を害す。若し人君たる者此の病言を用ゐて之を政治に施すときは天下皆之に倣ひ、三綱是に由りて施み、百行是に由りて壞れむ。斯れ萬世不易の定說なり。後世聖人出づるなりと雖も必ず吾が言に從はんと公孫丑章句上。

第六　批判

一　(一)鄒魯の學は先王に始まり、孔子子思相次いで之れを祖述したれども、世は次第に暗黑時代となり、合從連衡に努め攻伐を以て事となし、楊墨の言橫行して天下の人心其の岐路を失ひ、道德今や地に落ちんとせり。此の時に當り能く孔道の趣旨を辨へ、之を祖述して諸侯を說き、霸道を賤みて王道を明かにし、楊墨の學に拮抗し、以て鄒魯の學の消長を己が雙肩に擔うて起てる者は孟子なり。自ら號して三聖の後となりと稱せるは尊大に似たりと雖も、其の自任亦た愛すべく、事實に於て亦た然るものあるを見る。

(二)先づ彼れの王道論を觀るに、是れ孔子の謂ゆる先王の道なり。蓋し孔子在世の當時、諸侯は孔子の學を迂遠なりとして斥けたるを、孟子之を遺憾なりと爲し、王道は迂ならず、王者何人と雖も行はんと欲せば易く行ひ得べく、且つ王道に據らざれば治國平天下の業は期待すべからざることを立證せんとするにありたり。隨つて孟子の謂はゆる王者は、聖人なる君主專制者なり。國法は道德に基きて制定せる明君主の意志なり。故に此の

ては之を暴にすると無く、順以て之を養ひ、充塞の用を缺かざることに勉むべし。何となれば、志の向ふところ單に一なれば氣を動かし、氣の存するところ單に一なれば遂に志を動かし、血氣の慾となり反つて心を動かすの結果に到ればなり（公孫丑章句上）。

二　養活然之氣　孟子は思ひらく、心を動かさるには心氣の關係を究むべしと雖も、尙ほ氣卽ち感情の中和を要するを以て、進んで活然の氣なるものを養はざれば不可なり。活然の氣たるや、形迹指すべきなく微妙にして言ひ難しと雖も、誠に之を言へば下の如し。曰く、其の氣たるや極めて盛大にして、初より限量なく、又極めて剛勁にして屈撓すべからず。蓋し天地純粹の氣にして人の得て生ずるものに非ず。但だ其の自然に順つて直養し人欲を以て害することなければ、其の剛大なるもの長へに存し、覆載の間に充實して到るところ必ず之に接するを得む。而して人能く此の氣を養成すれば、其の氣は道義と合うて之が明をなし、勇決にして善行爲多く、薄志弱行に出づることなけむ。是れ義に志して之を心に積集すれば道は其の心に行はれ、體氣旺盛にして活然の氣乃ち其の中に生ずればなり。然れども、活然の氣は義を積集することなく、唯だ偶然に義に合ひたるを悅び、復び之を掩取せんとするによりて來らず。何となれば、浩然の氣は吾人の道とするところ內に義と合して直く、心に疚しからずして始めて自ら發し自ら暢ぶるものなり。苟も心に疚しき所あれば浩然の氣は生ぜず、又一たび不義の行ひあれば氣は中斷して舒びず。故に平日養義の細玄なるものと雖も必ず之を事として勉むべし。初學決して豫め其の效を期すること勿れ。之に久うして當に自ら充つべきなり。其の未だ充たざるは集義の功至らざるが故にして、只だ其の心、事あるを忘るゝ勿れ。而かも妄に作爲して之を助長せしむべからず。助長は徒らに益なきのみならず、反つて之を害するに至るを以てなり。彼の宋人の苗長に於けるが如く然かする勿れ（公孫丑章句上）。

三　知言　仁義を心に求むるには心を動かさず、以て浩然の氣を養ふべしと雖も、尙ほ言に病

理なりと謂はざる可からず。

（三）次に孟子は國民の不道德は一面に於て經濟的生活の不完全なるに起因すと考へ、法の制定に關して大に經濟的事情に留目せるに、實に千古の達識なりと云ふべし。殊に近世の社會情態に於て、貧者の不道德に陷り、彼等の社會に犯罪數の多きは主として恒產なきの結果にして、生を養ひ死を喪するに足らず、隨つて痒序の教を受け孝悌の義を學ぶの餘祐なき爲めなり。故に國民の經濟生活を保證して民を安ずるに非ざれば、政治も道德も其の他一切の文物は、其の發達を期すべからざること現時世界の趨勢なり。孟子は千古の昔に在りて既に之を明言せるは、其の創見の偉大なること惟だ驚歎せずんばあらず。而して孟子は王必ずしも利を曰はん亦た仁義あるのみと言へるが如く、經濟的利益と道德的正義とを調和して、義利合一の間に生活の價値を定めたるは、論語の謂ゆる子罕に利を言ふ命と與にす仁と與にすと云ふ、孔子の經濟道德論を繼承せるものなり。

二

（一）孔子の仁は愛を主としたれども（伊藤仁齋の語孟字義に依る）義をも包含せり。然るに孟子の時代に逮びては、道德亂れて君臣共に其の順路を失ひたるに由り、正を主とする義を仁に配合して、仁義を併唱するの要ありたり。當時仁義の語は先儒の曰へる道德 Moral の通用語なりしや否やは判明せざれども、孟子は之を道德 Moral の意味に用ゐたることは明かなり。卽ち仁義は人生の目的にして、當に從はざる可からざる人生の道卽ち本務なりと見たり。又之を心或は良知良能とも見、子思に從つては誠又は天道人道とも說けり。故に孟子の仁義說は君主又は臣民或は宇宙の民として、完全なる理想的人格の狀態に到達するを目的とせる完全說 Perfectionism なり。然れども、孔子の如く愛に重きを置きたる快樂系完全說にもあらず、又佛陀の如く眞知禁欲に重きを置ける合理系完全說にもあらず。惟だ其の孰れかと云はゞ、元より孔子に交するものなり。而して孟子の仁義は知情意を均等に包含する理想的人格の特性なれば、其完全說はグリーン Green の自我實現說に近し。邦儒伊藤仁齋のグリーンに類するものあるは、全く孟

點より推せば、孟子の論は正論にして、之を實行せば治國平天下の功は疑を容るゝの餘地なけむ。然れども、是れ孟子の理想なり。聖人たる梁王の此の世に出現せざる限は望むべからざること也。又勉めて諸侯に說くと雖も、用ゐられざれば如何とも爲す難し。是れ君主專制政治の弱點にして、立憲政治の次いて起る所以なり。立憲政治の趣旨は人民の參政意志を重んずるにあり。アバラハムリンカーンの謂はゆる Government of the people, by the people, for the people なり。故に孟子は孔道の主旨に從ひ、君主專制を理想としたれども、一方に於ては又國民の意志を尊重し、其王者を迎へ其の權限を與ふるものは、一に人民の意志に在りと爲せり。卽ち王者は人民によりて人民の爲めに設けられたる統治機關なりと見たり。此の點より推せば、孟子は民主政治を主張せんとする傾向あり。されば孟子の王道論は聖人なる君主の專制政治を主張するにあれども、其の根底に於ては人民の道德的輿論を背景とする民主政治に在り。卽ち王道論は仁義を政綱とする君主的民主政治論なり。換言せば仁義を政綱として、一代又は世襲の君主を載く民主政體を可とせんとする倫理說なり。然れども、世襲の君主は必ずしも聖人たるを保すべからざれば、歸するところ孟子の論は堯舜の如く、人民の輿論に順つて一代にて主權を讓渡する一代明君專制政治を正論と爲すものなり。さて其の王者たるべき萬乘の君は道德的輿論とよりて其の天命を定むとせば、其の實際的方法は果して如何にすべきか。孟子に正見なしと雖も、望む所は今日の代議制を以てするにあらむ。然らば人民は法の權限內に於て、何人と雖も君主たるべき權利を有するを以て、君主は結局或る年限間、統治權を有する總統の形に變らざるべからず。是れ蓋し孟子の眞意ならん。因りて觀れば、孟子は王道論は畢竟するに、支那の國體を明かにせる政治道德論にして、此の種の國體に於ては蓋し何れの國に適用すと雖も眞理なるべし。又假令、君主制體の國に在りても、立憲的に責任內閣を組織し、人民の輿論に基きて仁義を政綱として國家を建設する場合には、この王道論は萬世を通じての大眞

服從を教へたるのみ。是れ甚た誤れり。爾來支那人は善政を仰望して之に服從し、又は苛政に對して革命を起す等の國民的自覺は大に發達したれども、個人の權利義務に關しては其の思想甚だ幼稚なり。此の事は日本に於ても亦た然り。現代の立憲法治國民には極めて患ふべき點なり。

三 (一)性善の論は孔子子思の學說に於て、已に之を包含せりと雖も、孟子に至りて始めて之を公言し、明晰なる研究をなせり。孟子は何のために性善の論を爲せるかを尋ぬるに、是れ懷疑說 Scepticism 主觀論 Subjectivism 便宜主義 Conventionalism 利己主義 Egoism 等に對する反駁にして、道德の普遍的妥當性を明かにせんと欲したればなり。孟子の性は子思と同じく、宇宙の本體が人の意識に於て發動して進行する情態を謂へるものなり。卽ち今日に於ける良心の價值作用に當る。孟子の意は吾人の道德的意識に於ける價值作用は規範の評價に於ては、元と善を以て理想と爲すと云ふにあり。告子は之に反對して道德的意識は元と善惡の別なく孰れにも從ふことを得と云ふにあり。是れ告子は良心に對して意志活動に於ける自由を言はんとする者にて、孟子は良心に對して意志活動の理想を言はんとする者なり。故に告子は性を自由の方面より研究し、孟子は之を價值の方面より研究せる者なり。然れども、是れ孰れも必要條件にして決して相容れざる性質のものに非ず。何となれば、道德上より人性と謂はば其の概念には二個の觀念を有すべし。一は道德的意志の自由又は不自由に關するもの、一は道德的價值の有無に關するもの是なり。孟子は後者の觀念によりて前者をも統括せんとしたるにより、遂に論爭の端を開きたり。然れども當時に在りては、人性に存する價值理想を論定して、仁義說を唱へ、懷疑說又は利己說利他說を打破する必要ありたるにより、性善の論の出でたるは頗る故あるものにて、東洋倫理學史上甚だ重要なる學說なり。

(二)四端論はこの性善論を立證せんが爲めに設けられたるものにて、吾人の良心作用に於て、道德的價值の普遍的妥當性を明示したるものなり。四端は意識の解剖としては正確ならざれども、是

子の正統を承けたるに基けり。次に孟子は仁義を行ふ完全の人格者を大丈夫と謂ひ、否らざる者を一夫と謂へり。而して王者は大丈夫たるを以て、臣にして其の君を弑するは元より不忠なるも、紂の如き一夫を誅するは大に可なりとせり。是れ支那の如き君主的民主政體の國に在りては、勿論正論にして支那民國道德のためには缺くべからざる教なり。革命即ち是なり。革命に關しては周易に一卦あり、『革は已むる日にして乃ち孚あり。元に亨る。貞に利し。悔亡ぶ。』と定義されたり。孔子は之を解說して曰く、『冢に曰く、革は水火相息む。二女同居して其志相從ざるを革と曰ふ。已むる日にして乃ち孚あり。革つて之を信とす。文明以て說ぶ。大に亨りて以て正し、革りて當る。其の悔乃ち亡ぶ。天地革つて四時成り、湯武命を革めて、天に順つて人に應ず。革の時大なるかな。』と云へり。孟子は全くこの孔道に本づきて革命を是認したる者なり。是れ君主專制國に於ては、蓋し政治道德上の眞理たるを免れざるを以てなり。ミュアヘッド氏が氏の倫理學に於ける動機論に於て、ロムウキルの行爲を倫理學上より是認したるは、亦た同じ道理に本づけるものなり。然れども是は君主專制國に於てのみ、蓋し免るべからざる政治道德上の眞理なり。立憲君主政體の國に於ては、自ら責任內閣を有するを以て天子の政治に關しては鼎の輕重を問ふこと無く、政治的失德は凡て國務大臣の罪なれば、單に閣臣の辭職引責によつて解決せらるゝものにて、革命と云ふが如きこと無し。殊に日本の如き萬世一系の君主立憲政體の國に於ては勿論のことなり。學者之を混同すべからず。

（二）次に孟子の仁義は本務として躬行する時は孔子と同じく自己のために行ふことあり、又家族のため國家のために行ふことあり、決して過去に於ける西洋倫理說の如く、絕對の個人主義に偏することなく、個人を顧みざる社會主義に陷ることなし。是の點最も宜し。然れども、孟子は孔子と同じく、國政を專ら聖王の善政に委任せんとするものにて、國民直接の參政に關しては說かざるを以て、個人の權利義務に就きては講究せず、唯だ

り。

（二）孟子は不動の心を養ふには先づ健全なる感情を養はざるべからずと爲し、子思の中和說を發展して活然の氣なるものを論じたり。浩然の氣とは道德の修練によりて來れる優美なる情操にして、快不快滿不滿の旺盛なる意識作用なり。孔子の謂はゆる心悠然として萬境に接するものなり。故に此の發達せる意識作用を有する者は、天地人三才に通じて確固不動の心を有することは尤も昭然たる事實なり。故に道德的修養の極致は、實に斯の情操を自然的に養成するにありと見るは大なる識見なり。而かも孟子は之を以て倫理研究の洞奥なりと主張せるは、倫理學上の大發明なり。彼れの頭腦の深遠にして如何に創見に富みしかは、此の一事に因りて測知することを得べし。孟子と時代を同じうせる西洋倫理史上の偉人、アリストテレースの頭腦と雖も未だ斯の如き發明なし。

（三）孟子は浩然の氣を養ふには又一方に於ては知識をも要すと爲し、正確なる知識の道德的判斷を說きたり。卽ち是非善惡に明かならざるは知識の病なりと爲し、知言の說を揚げたり。卽ち言は口に出づると否とを問はず、知的判斷なること疑なし。而して孟子は道德的判斷に際しては、此の四言に該當するや否やによりて正否を決すべしとせり。是れ蓋し緊要のことなり。西洋倫理學史に於ては古來より、道德的判斷の研究に關しては道德的標準又は道德律の方面より判斷の主體或は對象に關する研究に走り、動機論結果論に重きを置きたり。卽ち行爲の抽象的研究なりき。然るに孟子は本務の方面より德の樣式に重きを置きたり。卽ち行爲の具體的研究なり。孟子の揭げたる四個の標準は何れも本務の實踐躬行に際して判斷上に大なる利益を與ふべし。而して彼の知言說は動機論にも結果論にも偏せず、其の兩面を見るものなり此の點は輓近倫理學者の態度に均し。

非の心は智的作用に當り、惻隱の心又は羞惡の心は情的作用に當り、辭讓の心は意的作用に當るは一目瞭然たるべし。然らばこの道德的意識の價值作用より來る動機及び結果は、時に告子の曰へる如く惡たることありと雖も、其の理想の本體に於ては既に善たることは明瞭なる事實ならざるべからず。

(三)放心論は告子の曰へる如く行爲の時に惡なることある所以を說明して、性の善なることを立證せんとするに在り。孟子はその惡なる所以は非價值的行爲の習慣に成れるを以て、價值的行爲によりて之を挽回することを得べしと說き、以て善の性なることを提唱せり。此の論最も可なり。蓋し吾人の惡行爲及び惡品性は、之れを善行爲及び善品性の習慣によりて回復することを得べし。是れ品性陶冶の可能なる所以なり。人格は斯くしてと考へたるにより、彼の說は意志自由說 Libertarianism にて告子の說と相合するものあり。而して心を盡して善行爲善品性を求むるを以て倫理の究意實現せらるべし。孟子は而かも之を取捨自由なり目的と爲せり。是れ孟子の倫理說は孔子のものと同じく實際的活學にして、西洋倫理學者の如く學究的原論のみを弄することなし。又孟子は仁義は我が心にありと爲せるに因り、道德律に關しては其の起源は自我 self にありと爲す所の自律說なり。然れども、天道なりと爲し、點より觀れば他律說なり。而して其の指示するものは、誠卽ち良知良能なりと說くものなれば、こは今日の良心に當る。其の良心は生れながらにして之れを本有し、學ばず慮らずして直覺するものと爲したるに因り、先天論 Apriorism 又は直覺說 Intuitionism なり。

四 (一)孟子の修德論は敍上の理由に本づきて來れり。彼は先づ心を動かさゞるを以て道德的修養の基礎と爲せるは大に創見なり。何となれば、欲望の統禦に於て動機の撰定は常に健全なる意志を要すればなり。而して健全なる意志とは感情によりて妄りに動かされざる强固なる意識作用なり。卽ち確固不動の心なり。彼の惡行爲又は道德的薄弱は、皆な感情によりて心を動かしたる結果な

◎第一高等學校教授　三並良著

新版

我は斯く信ず

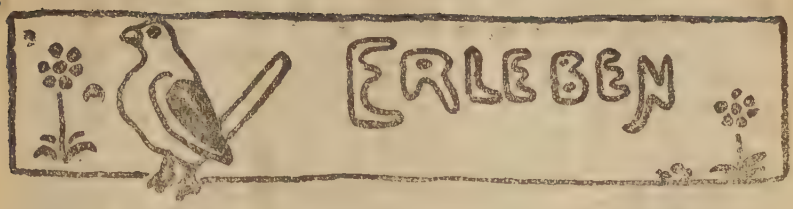
（好評嘖々）

四六判二百餘頁
定價金壹圓
郵稅八錢

□東亞之光評――著者の熱烈なる信仰を披瀝したものである。著者は熱心なる基督信者にして、強烈なる信仰の上にその生活を展開し、信仰を生命として現代に奮闘しつゝある人であるから、本書の如きも、徹頭徹尾熾烈なる信仰的感情思想を以て一貫し、何物をも燒き盡さずんば已まないの概がある、而してその所說の眼目とするところは、信仰を以て、天地の大生命が人間界に移り來れる大なる化育の根源とし、吾人は、此基礎の上に立ちて絕えざる努力を繼續し行く間に、不知不識、神性が成長具備して來て、遂には、人間の生活をして、人間以上のものたらしむるに至り、眞の生命が活躍する。茲に於て、初めて、眞の力あり、自由あり、慰藉があり、神と交涉することが出來て、人世無上の光輝と歡喜とに浴し、眞に意義ある生活を營むことが出來るといふことを力說してある。

□日本及日本人評――舊信仰を打碎いて、それを流動する生命となし自己に吸收して以て科學的文明を背景とせる現世に於て新たなる信仰を得んとする著者の努力の跡を示したるものが本書にして、曾て二三の雜誌上に發表せられたるもの、飽迄も神を信じ其處に安心立命を求めんとする著者の眞摯なる努力を多とせざるを得ず、近時續出する輕薄なる俗書と趣を異にす敢て江湖の一讀を勸む。

發賣　東京市芝區三田　振替東京一〇〇〇三番　電話芝五八五五番　六合雜誌社



新しき基督

（アンリイ・バタイユの新詩集「神聖悲劇」より）

與謝野寛

砲彈は大なる磔刑の基督の像を打てり、
十字架は碎けて散りぬ。
されど、巢の上に翼を張る鷲の如く
基督は凝然として立てり。
彼は無量の重荷と、固定せる
磔刑の姿態より解かれたり。
かくして一人岩石の上に立てる彼は
傾ける老木の柳の如し。
彼は默す。
彼は永久に神なり、されど既往と同じ神にあらず。
何人も想ひがけざりし奇異なる顏と
新しき相好（さうがう）とを持つ
この破天荒なる基督は、やがて、
突如として、岬の如き高さに
刑苦の身を勝利の身に變じながら

我等の宗教

毎月一回五日發行
定價一冊 金七錢 稅五厘
一ヶ年稅共金八拾錢

我れ等同人相計つて、宗教の本質を學理的にも又實際的にも研究する所の新誌を發行し、以て眞に自由主義の基督教を徹底せしめんとす。載せんと期する所の大略は凡そ(一)聖書の研究(特に難解の章句)(二)耶蘇傳の研究(三)諸教の研究(四)近代の思想と宗教(五)宗教哲學上の根本問題(六)我れ等の信仰(七)如何に兒童に聖書を物語る可き乎等なり。

(第二卷第九號)——九月五日發行——

(十三號目次)

□第二年の卷頭に題す……三並良
□一歩の差……三並良
□暴君のなやみ……大橋房子
□默示錄系の思想の評論……三並良
□默せる心……芳夫
□尋ぬる人々(メースフイールド)……瀧内秀綱
□曲線……ふさ子

(第二卷第十號)——十月五日發行——

(十四號目次)

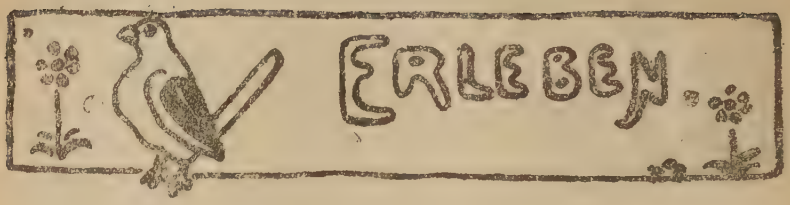
□宇宙と我……三並良
□古代ギリシヤの精神……瀧内秀綱
□默示錄系想思の評論……三並良
□未定……沖野岩三郎
□過去と未來……村上雄策
□あこがれ(エー、イーラッセル)……瀧内秀綱
□よるふかみ……芳夫
□其他……

發行所 東京市芝區三田四國町 宗教研究會
振替東京三八三九四番
電話芝五八五五番

默示錄講義　統一教會に於て　毎日曜日午前九時より

近時基督再臨說を高調する者多きに鑑み、其の說の根據たる默示錄及び默示錄系の思想に對し、嚴正なる批評を試み以て、此の種の迷信を一掃せんことを期す。有志諸君の御來會を希望す。

十月一日　擔任者　三　並　良



俄かに弛められたるその腕を
虚空の上に伸ぶるならん。
この神を復活せしむるは平和の神なり、
黒雲を押分くる自由の神なり。
その神は呼ぶ「來れ、前に」と。
ああ、何れの使徒も豫見せざりし聖體よ。
この死像は縛められたる基督にあらで、他の基督なり。
砲彈に由りて彫造せられし壯嚴なる表象よ。
終に、汝の十字架は碎かれたり。……聖薩萬歲。

主よ、基督敎徒の神よ、聖約の神よ、
汝が人類の間に降り給ひしは
——信仰は其れを告ぐ——世界を救ふためなりき。
さて、今こそ、汝は福音を遂げ給ひつれ。
汝は、新しき理法の作れる新しき苦難の上に、
汝の行爲の無効にして、
更に第二の奇蹟を要する事に想ひ到り給ひしならん。
或はまた、汝の地上に恐怖を置き、
ゴルゴタの山よりも高く、莫大なる殉難の屍を
積み重ねたる餘儀なさに就て、

岡田哲藏著

我が斷片

價金貳拾錢　稅金二錢

MYFRAGMENTS

金貳拾錢　金貳錢

右合本

金四拾錢　金四錢

我が環境

金六拾錢　金四錢

MYENVIRONS

金四拾錢　金貳錢

發行所　東京市芝區三田　振替東京一〇〇〇三番　電話芝五八五五番　六合雜誌社

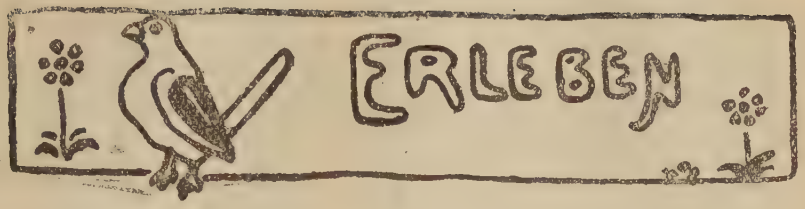
彼は何物をもことさらに作爲せんとはせぬ。然し彼が感受し、觀察し、判斷するものが自然の形に成り出づる。かくして成れる自然の作が「我が斷片」として見はれたのは三年前である。其後の作の集まれるを分類し配列したのが「我が還境」である。彼はさきに數年の觀察と思惟の結果を集めて「靜觀と思想」と名くる一論集とした。その範圍は主として今の思想界、卽ち他の人の心の世界であつて、それを攻究の對象としたのであつた。然してその成果は世の常の論文の形であつた。「斷片」と「環境」とはかく人の心界に限られず、他の思想に介せられず、彼自らが直ちに自然に接し、人生に接し、得たるまゝの印象を表現したのである。その表現の方式も、散文とも詩とも就かぬ、自由にして獨特のものである。然して成し得る限り短き辭に多くの意義を包含せんとの試てある。自由に眞實に他の思想や形式に累せられざらんと願ふのみならず國の境を越え、時の流れの外に立つは彼の望てある。

たましひの畑

佐藤清

わがたましひのはたを見よ、
なみだもてくさぎり、
心勞と汗をもてたがやし
わがたましひのはたを見よ。
石にやぶりし爪の血を
どろごと鋤にうちそゝぎ、
むらさきに膨れしもろてをふるひ、
あらし吹く日、あめふる日、
みぞれする日、たがやしし
わだたましひのはたを見よ。
をとめらのおもひよりつきつめし、
のぞみもてうゑつけしたねはめざさず、
狂人のおもひせちなりし、
ねがひもてそだてしたねはみのらず、
かつゆきてあれしはたをめぐり、
かたき地にかうべをたれて、
いのるすべさへ知らざりし、
わがたましひのはたを見よ。

あめの日、あらしの日、
みぞれの日はまはすぎゆき、
あまき陽はおどりつつ、
すべ〳〵したるつちにふり、
つゆよりもろきつちにふり、
をとめらの髪よりもつやゝかに、
をとめらの腰よりもやはらかき、
すべ〳〵したるつちにふり、——
つちはあたたかきいのちをあびて、



主よ、神の死が、彼等の贖罪の代りとして
猶足らざりしことを知り給ひしならん。
されど、今は成就せり。
森を焚く狂暴なる砲彈を讃へん。
ああ基督よ、既に世界は十字架より解かれたり。
汝は、汝の多くの子等の間に新しく死にながら、
再度の贖罪を彼等のために遂げ給へり。

沖野氏の『煉瓦の雨』

同人沖野岩三郎氏が昨年末から本年六月までに發表した創作集『煉瓦の雨』を今回福永書店から出版發賣する事になつたので、詩人與謝野晶子氏は其の出版を祝した左の如き暗示に富んだ祝辭を送られた(記者)

× × × ×

私は嘗て統一教會のお伽會に行つて、沖野氏のお伽話の前に百餘の兒童が圓い眼に涙を溜め、頬には血を漲らせて恍惚となつて居るのを見た。其子供達はほんとうに幸福さうであつた、ウエスト・ミンスタア寺の祈禱の場に居た人々よりも幸福さうであつた。幼稚な私は沖野氏の創作の前で何時もあの圓い眼であり輝く頬でありたいと思つて居る。さうした幸福でありたいと願つて居る。

與謝野晶子

らつこの毛よりすべ〳〵し、
びらうどよりもすべ〳〵し、
ひろく、ふかく、こゝちよく、
うちにあやかしの力をもてば、
青き莖ははてしなくはえ、
あか、あを、みどり、うこんから、
むらさき、こん、とき、とびいろの花はさき、
かはる〳〵しぼみ、みをむすび、
こき陽の微塵のなかに落ち、
またはえ、さき、みをむすび、
はてしなきよろこびはかぎりなき
かなしみにつながりたえやらず、

目覺め

中村宗貞

頭が痛む、肉が萎む、力が逃げる
病み滅び行く肉の悲しい慟泣は
「死が近づく」
脈々としてたちのぼる香よりも、
あざやかに、つよく、ををしく過ぎゆく。

やがてみづ〳〵し梨のつゆなすかをり、
桃のみの乳と密よりこきかをり、
あをぞらよりも酸き青梅のみのかをり、
くちづけよりもあまき柿のみのかをり、
密柑の花のゆふづつのかをり、
霜に發するすごやけき林檎のかをり、
すきとほる煙に虹をゑがきつゝ、
わがたましひのはた全體にたちのぼる。

絶えざる危險信號に慄え
目を瞑つて戰く
恐ろしい暗黑の洞窟に吸はれて行く

このましきものをおひもとめ、
みもだえしつつさかんなるこゑをあぐ。

見よ、もとむるものはむらがりきたる、
まねかざるにもとむるものはむらがりきたる、
濃藍のかゞやく海を越え、
すずしき貿易風にふかれ、
ふしぎなる木の實はむらがりきたる。
氷雪の凝りなす山を越え、
青空こがす北風にうちもまれ、
ふしぎなる木の實はむらがりきたる。
はたはよろこび、胸を張り、
ちからのかぎりししむらをあげ、
あらゆるこびをもてこれにくちづけ、
はげしきこゑにおのれを忘れ、
もろてをまきていきをのむ。

微笑は蜜よりこくながれ、
かげらふよりもむしあつくたちのぼる。

やがてひともとの青き莖はえ、
黄金の花を四方につけ、
滿身陽をあびうちわらふ。
ふるひを洩るゝこき金粉の陽のなかに、
花はこゑもなくしぼみ、
空すかし見ゆ青き微分子の陽のなかに、
かぐはしき實をむすび、
若草のすみれのごとく、
陽のなかにやがてこぼれおつ。
わがたましひはこれを見ていたみを感じ、
さみだれのなみだにひたる。
されどまたひともとの青き莖はえ、
碧玉の花を四方につけ、
おほそらにむかひうちわらふ。
それもやがてこゑなくしぼみ、
かぐはしき實をむすび、
麹よりこき陽のなかにこぼれおつ。
それを見てわがましひはふかく沈み、
ばしばみのためいきに胸をうつ。
されどつちはすべ〳〵し、

初秋の
朝の空(詩)
研ぎ澄まし
澄渡つた
朝の青空は、誰のものぞ
罪なき穢なき男の、清き靈のものぞ

うひ〳〵しき處女の、美しき靈のものぞ
土に生くるもの、美を喜び給ふ
神の瞳の輝よ
澄みたる瞳の光は溢る
罪の子は、神々しく晴れたる空を
仰ぐに堪えず

罷工同盟

松尾敬天洞主人

不平共鳴不穗秋。　罷工同盟警告臻。
勿驚職工治安策。　吾今具狀語眞因。
戴星役々踐月歸。　一日僅得錢數緡。
動車揚々吹氣來。　半年多數幾萬銀。
資本豈唯容獨專。　勞働本是同胞親。
豈與世人却不覺。　天地萬物一體仁。
互去私慾存天理。　與衆俱樂太平春。

目に入るもの
耳に入るもの〳〵總てが
心と肉體から壯さを奪つて行く
此の冷い幾十百日のつながりの後
今日、突然、身體の一角に
急に、力が湧き
忽に足の先まで充電し
立上つた身體はッツ〳〵と歩く
誠に健康なる者の心に
此の力は何處から來た
明るい空の彼方からか
此の瞬間から暗い冷い洞窟が消え失せて
光明と希望に充ち〳〵た
樂しい世界があつた
洞窟、暗黑、悲哀
それ等はまとこに
自らが發する
自らが作りなす雰圍氣であつた
見よ、神の御惠は
目の前に足許に溢れ漲り

實に
目覺めて見れば眩惑するばかり
此の世界は
尊い幸福の寶玉と眞珠に充ち溢れ
誰でも、自由に、心の儘に
取るに任せてある
我等は健全になり得る
我等は樂しくなり得る
悲しい道があるのでない
不幸な道があるのでない
それは總て我等が造るものである
神の榮光に歩む時
我等の道は愉悅極りなき光明に輝く
自らが發する惡臭と惡臭が作る殼を棄て
眞裸になつて
幼い者の心となつて
宇宙に瀰漫する
此の神の無限無量の御惠に浸れ

夏夜の風が吹き汝等を憫むや　桂川
砂畑の花しと〳〵くひくき露草があり　同
夏の夜の我が肉體むなしくさするべし　絹亮
此宵の虎杖の太ければ父母よ　同
土用の雲立ち畑の草花のきらるゝ事なし　鈴洋
夏夕の樫葉の下にありなほ去りがたい　宮直
犬を泳がせて月の出てゐる海にそむいた　得
日焼の腕に乳兒抱へてあやすや男　木染月
鳥も飛ばぬ秋の空を高く見る我か　未醒
朝顔終りの花よ女教師のつとめ　閑々
青田道にて諾ひし事の誤ちたりし　史
我が指先しびれる夏夜のお前方去れよ　高木生
老夫肌暑く日暮の己が家を見た　清藏
母よ我れはかなしく口答へつゝ泳ぎに出づる　一碧樓
同

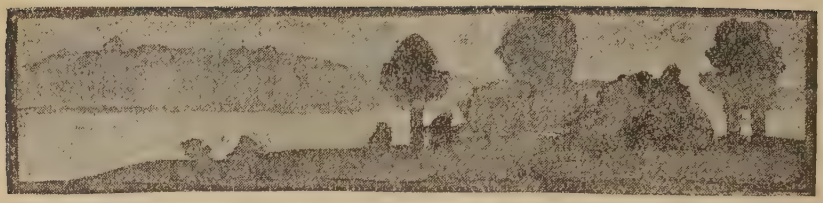
投句規定

▲題並に句數を限らず
▲東京市外高田村大原一五二七中塚直三宛
▲封筒に虚心集句稿と明記のこと

虚心集

一碧樓選

我らひそやかに網下して月の出せまる　巨鬼
笑ひ堪へたる我等が日暮の山に眞向きて　同
いさゝかの茄子は花つけて誰も無言で通る　同
腦みの夜の林檎の落つるを覺えたり　同
刈草つむ馬の靜かな朝の私達の姉妹　同
或夜の馬の馬草食ひ居る淋しさやある　同
我れ仰ぎたる二階の者よ來竹桃よ　飛天櫻
桃の葉の茂り今日も働く悦びてす　同
桃の葉の茂り祈り必ずきかれます　同
女の刈る草のよく刈れる何か言ひたく　同
夫婦年若く苗をさす苗の蟻よ　一仙
葉月の一樹嚴かにゆるがすものゝなし　同
われ室々をめぐり夜の花火があやして　同
虫が紙に包まれて音立てゝ夜中てす　同



彼は死せり

沖野岩三郎

九世紀から十世紀へかけて、希臘教、羅馬教、回々教がスラヴ民族の間へ入つた。所がスラヴの酋長は其の何れの宗教を信じて可いか判別がつかないので使を派して其の視察研究をなさしめた。使者はコンスタンチノープルに往つて、ヂャスチンアン皇帝の建設にかゝる聖地大殿堂を視た。そして其の莊嚴な儀式に感服して羅馬教の信ずべき教である事を歸り報じたのであつた。

そこでスラヴの酋長はヂャスチニアン皇帝の妹アネを妻に呉れるなら羅馬教を信じても宜いといふ事を言ひ送つた。アネは神の道を擴むる爲には身を犧牲にしても宜いといふ精神から北の寒い國スラヴの酋長に嫁いだのであつた。さうして此の一人の女の力はスラヴの民族を一時に受洗せしめて擧國一致基督教を信じたのは九百八十八年であつた。

斯う云ふ野蠻人が終には基督の縫目なき衣を破つて、強大な羅馬教を二つに引裂き東方希臘教會の本山をスラヴ民族の間に移して終つて、スラヴの政治を執る者は卽ち神の代表者として絶對の權威者となつたのである。

スラヴ族は政治の慾望が無く、又た政治や戰爭には到つて下手である。彼等は文學美術の國民である。彼等は政治を天子に一任して其の命令を聞くと同時に宗教上の命令をも聞いて居た。所が千八百五十年頃からフォイエル、バッハの唯

ふみちやんへ

北米　田中葦城

まろ〳〵と
肥えふとり
にこやかにほゝゑむ少女は
實に淨く、麗はしく、
可愛ゆくもあるかな！
みよ！
無邪氣にして、飾らず
つゝましく、あとけなきその
小さき姿を……
汝は實にいまだ蕾なり、然り
花にはあらで花の蕾なり。
されば百花爛漫の春は
遠く彼方にねむりをれども
物いふ花と汝やかて開かむおゝ至上者よ！　爾の
いつくしみの御手をたれたまへ！！
あゝ可憐なる少女子のうへに——

つれ〴〵の日

高橋芳夫

木の若葉、天つ光りにてりかへり
眞晝どんより小搖やまずも
夕嵐生命の前を吹きめぐる

かなしさまでに夕陽の赤さ
もや一重かすめる月のうす光り
若き孤獨の瞳にうらさびし

鼎浦先生へ

近からば躍る心を笛吹きて
夜をも日をも師を慰めむ

傳へられ意志から行爲に現はれた。恐ろしい言葉とは何であつたか。曰く、『彈丸は言葉よりも明かなり！』

トレーポフ將軍は首府の知事として監獄の視察に行つた。所が囚人中に＝虛無主義者の＝知事に對して敬禮しない者があつたと云つて看守は棍棒を揮つて囚人を亂打したのをトレーポフ將軍は平然として其の號叫する樣を視て居たといふ事が傳へられた。

百九十三人事件の公判があつて民論の諤々たる時此の噂が傳はつたのであるから事件は其儘に治まらなかつた。

ウエラ・ザスーリチといふ一少女が知事を其の官衙に訪うた。何心なく撻を排して現はれた知事は轟然たる音響と共に身を紅にして倒れた。彈丸は明かにザスーリチの心を語つたのであつた。恐怖主義（テロリズム）は茲に起原を開いた。

爾來スラヴの王室には妖魔のやうな此のテロリズムが幾度か祟つた。歷山二世が千八百七十八年七月の末日に黑海ニコラエフ港で暗殺せられかけた以來、彼は七回の危險に遭遇した。千八百八十一年三月一日觀兵式の歸途、カタリナ溝渠の傍で王冠を地に委して手足所を異にした彼が『朕を冬宮に運べ』と叫んだ最後の言葉は何たる悲慘な事であらう。時は我が明治十四年三月十三日の事で、スラヴ族最後の皇帝ニコライ陛下が十四歲の幼童であつたのである。

千九百十八年七月、其のニコライは淋しい片田舍で囚人の如くに射殺された。續いて其皇太子は父ニコライが祖父歷山の悲しい最後を見たと同じ年齡に『汝の父は犬の如く死んだ。』といふ淺ましい罵倒の中に殺されて了つた。ニコライの死んだ時、『朕を冬宮に運べ』とさへ言ふ事が出來なかつたのである。

千六百十三年、ロマノフ家第一世ミハイルが王位を踐んでから三百四年、地球の六分の一を所有し、二億の民に神の代表者として蒞める彼ロマノフ家は悲しい結末を告げた。悼ましい哀話を殘して世界の歷史に其の結句を印した。此の大事は何から起つたか、千九百十五年の改選後民心が官僚

物的哲學が入つて來、ダアヴインの進化論やミルの功利論や、ショウペンハウエルの意識と現識としての世界といふ著書が輸入せられて、敎育あるものは驚異の眼を睜つて夫等の著書を讀んだ。そして當時の青年をして『ダアヴインの爲なら喜んで斷頭臺上の露と消えよう。』と叫ばしむるに到つた。彼等は盲從から眼が覺めたのであつた。

千八百六十一年に農奴解放の事があつた時、文壇から恐ろしい一つの贈物を國民に提出したものがあつた。夫れはツルゲーニフの『父と子』で、其の主人公バザロフをして世界最初のニヒリズムを說かしめたのであつた。彼は總てのものを否定して從來の宗敎思想を根底から轉覆しようとした。彼は宇宙を神の仕事場であるといひ、人間を神の愛子では無くつて營々として働く勞働者であると云つた。ラフアエルもミカエルアンゼルも世界の放蕩息子であつて彼等は一個の靴工にすら及ばないと叫んだ。

彼は此の書を著して長途の旅に上つて再び都へ歸つた時、友人に對つて『父と子』の評判は如何にと聞いた。友人は對へて言つた。彼の恐ろしい響きはバザロフの仕事だと。丁度其時都てはニヒリストの一團が暴動を起して爆彈を投げつゝあつたのである。一文士の書いた著書が此れ程民の心に影響を及ぼしたのであつた。

千八百七十三年の冬、ペテルブルグの郊外にある一小屋では公爵クロポトキンが百姓達を集めて平民主義の講義を始めた。公爵の中から斯う云ふ人が現はるゝ程であつたから、遂に翌年カザン寺の前で、『土地』『自由』と書いた赤旗を押立てゝ練歩かうとした連中があつたので、官憲はこれに對して慘酷な抑壓を加へた。そして言論の自由も集會の自由も奪はれて終つた。彼等は手も足も出なくなつて遂に百九十三人事件を醸したので、其の連累者は一千四百名の多きに上り、彼等は特別裁判を受けて千八百七十八年一月二十四日死刑の宣告を受けて直ちに殺さるべき筈であつたが、幾分か民意を緩和する爲に其の半數を特赦したのであつた。しかし此の特赦の爲に民意は和がなかつた。彼等の中には忌はしい恐ろしい言葉が口から耳に

である。

彼の如く悲慘な最後を見乍ら何故斯る平民的行爲があつたか、私はこれを宗教の德だと云ひたい。彼はカタリナ溝渠の側で殺される朝も、常の如く禮拜堂に出て一家擧つて讃美し祈禱したのであつた。萬民悉く神の子て悉く兄弟であり姉妹であるといふ思想が深く彼の頭に浸んでゐたればこそ、民を恐れて觀兵式を延期したり、爆彈を投げた兇漢を蛇蝎視しなかつたのである。皇帝が脚に爆彈を投付けられ乍ら轎を降つて負傷した少女を慰むるなどは殆ど信じられない話ではないか。

最後の皇帝ニコライも平民主義の人であつた。彼は平民といふ言葉に非常なる共鳴を有してゐた。彼は舞踏の名手クセシンスカヤを愛して熱い戀に陷つた。父皇はニコライの此の平民との戀の熱を冷さんが爲に日本漫遊を思ひ立たせたのであつた。彼は生命の如く愛したクセシンスカヤを故國に殘して、櫻の咲く溫かい日本の國へ遊びに來た、そして浪靜かな琵琶の湖邊を逍遙する時、日本の一警官津田三造の爲に其の顏面を斬られた。地球の六分の一を有する大國の皇太子が失戀の心の負傷を癒さんが爲めに遙々尋ねて行つた國で不意に冷たい刃を顏に當てられたとは何たる悲慘事てあらう。十四歲にして祖父の悼ましい慘死を目擊した彼は今や異國の警官から其の生命を脅かされたのであつた。

日本を去つた彼の後半生は更に不幸なものであつた。彼は獨逸から賢い皇后を迎へた。皇后は賢過ぎる程賢かつた。二人の間には一人の愛する皇太子が生れた。しかし皇太后は此の一人の孫を愛しなかつたのみか、チャーギンといふ男に命じて之れを暗殺せしめやうとした。チャーギンは長崎に永く居て、日本人を妻にして子まで產した男である、津田三造の亡靈が女と產れてチャーギンを唆かしたのでは無からうか、ニコライと日本とは飽まで悲しい關係が保むれねばならなかつた、彼は遂に日本と戰爭を始めて散々に破れた。

曾ては事もあらうに馬を盜んだといふ泥棒のラスプーチンが彼の家庭へ入込んだ。そして賢過ぎる程賢い皇后は此の妖僧の意志の儘に操られた。

打破といふ思想を鼓吹せられたからであつた。民心の一轉する所遂に神の代表者も其の力が及ばなかつたのである。

斯る悲劇を産んだロマノフ家は其の悲慘な死に値する程の冷酷と暴虐とを民に加へたのであらうか。彼の一家が常に倨傲尊大萬軍の將として天の一方から人民を土壤の如くに見たのであらうか。そして此の悲劇を最後の報償として得たのであらうか。否々さうでない、ロマノフ家には平民の血と心とが通つてゐた。歷山二世がカタリナ溝渠に其の雙脚を投飛された前日、內務大臣は彼れ皇帝の前に進んで、虛無黨の一員を捕縛した時、近く彈丸は歷山の身を襲ふべしと云つた旨を上奏した。左右は皆な明日の觀兵式を中止する事を奏請した。しかし歷山二世は夫れを聞入れなかつた。皇后は涙を以つて諫めたが矢張り聞入れなかつた。そして觀兵式が留つての歸途、一兇漢の投げた爆彈は皇帝の脚に當つたが、爆發しないで地上に落ちた。そして行列を見てゐた花賣の少女を怪我せしめた。皇帝は橇を跳降りて、『此の罪無き少女を傷つけたのは誰だ！』と叫んだといふに到つては殆ど我々大和民族には實の心根が推測出來ないのである。況んや兇漢を見て『おゝ見事なる偉丈夫よ！』と感嘆したと云ふに到つては、如何に彼が國民卽ち平民を接觸してゐたかゞ明である。

政治といふ制度、習慣といふ因襲、夫れ等が多くの民を困しめたであらう、專制政治といふ無自覺の制度が知らず〳〵多くの百姓を苦しめたであらう。しかし皇帝自身は眞に民を愛し民に近かうとしたのであつたらう。虛無黨員が同志を糾合しようとする時、皇帝の詔書を僞造して『朕は斯の如く民を愛するが左右の公卿が邪魔立するから速に身邊の奸臣を除いて吳れよ。』といふ意味を書いてあつたさうである。

或時虛無黨員の一婦人が男の如く斬髮して街路を步いてゐた。歷山二世の玉車が通過するので恭々しく敬禮した。翌日警視廳から件の婦人に出頭せよとの通牒があつた。行つて見ると、『昨日皇帝は御身の男裝せるを見て不快に思はれた、願はくば女は女らしく髮を伸して下さい。』と云つたさう

新刊紹介

■基督教神學

オー・エイ・カルチス著
小幡久五郎譯
基督教興文協會

原著は我邦の神學校にても教科書として用ゐられ思想上はアルミニアニズムとカルビニズムの妥協を計らんとするにあり。序論は進化に觸れて人格の發展と特色及宗教の性質等を詳說し、本論に入りては、所謂系統神學の一般的構成法に隨つて人類の救極より基督論贖罪論より三位一體論に到達す。序論中の奇蹟論て著者は奇蹟の歷史的批評よりも概念的に之を辯證して其保守的立場を守つて居るが、聖書論では可成りの自由攻究を認めて居る。著者自ら序文中に彼此抵梧して所論の不徹底を自認して居るのは寧ろ奇である。譯文は渡場透徹して居る。（價二、五〇）

■日本基督教史（下卷）

山木秀煌著
洛陽堂發行

先に出版した上卷の後をうけ關ヶ原より德川中世までを記述して居る。德川家康と基督教、伊達政宗の遣歐使、禁教令の發布と理由、家康時代の基督教徒迫害、大阪陣と基督教、秀忠の切支丹迫害、家光の迫害、島原の亂、鎖國令の發布等は其興味ある尤なる章である。血潮をもつて書かれたる日本基督教會史一卷は秋夜の讀書に適しく思ふ。（價、一、八〇）

■守るべき日曜日

中山昌樹
稻澤謙一共著
木原外七
興文協會出版

先に懸賞募集した論文を集めたもの日曜日を守り方を說きすゝめて居る。（價〇、一五）

■人生詩人ブラウグニング

帆足理一郎著
洛陽堂發行

英國近代の大詩人、人生の眞善美を憧憬して靈的奮鬪を歌つた詩人の生涯と十三篇の邦語譯を集めて居る。人生を內的にあたゝかく見たこと彼の如きはない。彼は宗教道德上の大詩人であつた。著者は英文學を研究し殊にブラウニングに私淑すること深い。本書始めに詩聖小傳をかゝげて彼の思想と生活を叙し、詩はヒバ過ぎ行くやサウル等の名篇現在して居る。ヒバの一部は嘗て本誌にものつた。邦譯で此難解の稱ある詩を味ひ其深い詩想をくむことの出來るのは大に感謝すべきである。裝幀も清楚でふさはしい。（價一、八〇）

統一教會と自由教會

▲芝區三田四國町の統一教教會は秋季に入りて大に活動せんとしつゝある。三並良君は非常に元氣にして約翰默示錄の講義を始められてゐる。之によりて再臨說を批評せんとせられるのである。沖野岩三郎君の懸賞小說は九月初旬より大阪每日新聞に揭載せられた。

▲神田區錦町三丁目十番地女子音樂學校內の自由教會は七月より休會して、時々會員宅にて組會を開いてゐた。九月十五日の第二日曜の午前十時より禮拜說教が始まつた。十五日、二十二日は內ヶ崎作三郎君擔當せられたし午前九時より十時まで今岡信一良君の英文宗教的名著の研究、九時半より十時迄原田長治君の羅馬書研究がある。八月中旬附近の錦輝館及び工科學堂の近火ありて女子音樂學校はその屋根を損せしも、その害極めて輕微なりしは不平中の幸であつた。

十四歳の時祖父の鮮血を見て以來、悲しい悼ましい事は絶えず彼の身を離れなかつた。そして遂に殺された。誰か此の哀話に涙を灑がぬものがあらう。しかし我らは考へねばならない。彼は全能の神を代表して希臘教を信ずるスラヴ族二億の民を統禦してゐたのであつた。彼は實に神の代表者の名を冒してゐたのであつた。けれども時は來た、人が神の代表者として總ての權を握るに堪えない時が來た、王として神の代表者として宗教上の專權を握つてゐたニコライは、博愛、自由、平等を旗印とした百姓の聲に壓しられて其の宗教上の專利權を投捨てなければならなくなつたのである。

民心が彼を離れた時、既に彼は神の代表者で無くなつた、縫目なき基督の衣は更に寸々に引裂かれたのであつた。そして彼は一個の平凡なる失戀失意の凡人として寒い西比利亞の片田舍に追放されたのであつた。

神の代表者が殺された——我等は更に深く考へねばならない。希臘教會の主權者は凡人と化して了つた、そして慘殺された、犬の如くに慘殺された。けれども希臘教會の中で養はれた宗教心は全世界の兵力を以ても潰す事は出來ない。露國二億の民は悉く宗教の束縛から放たれた、しかし彼等は宗教から放たれたのではない。彼等は更に最も深い強い宗教に進んで行くであらう。自由に平等に彼の宗教は此の悲しかりし經驗の上に立つて深く民心に浸染するであらう。

神の代表者は死ぬ事がある、しかし神は死ぬ事がない。希臘教會は四分七裂するであらう、しかし宗教は消滅したのでない。彼は死せり！　悼ましく死せり！彼は殺されたり！　慘酷に殺されたり！　我々は自己を顧るがよい。我々は自成といふ王國を守つて居た。そして專權を振つて居た。我々は無自覺に專制に生きてゐた。露國の皇帝達のやうに、しかし我々も何時しか此の氣儘で壓制な專制な自我が悲しい最後を遂げて、博愛、自由、平等の新しい自我が產れて來なければならない。我々は常に、彼は死せり！　悼ましく死せり！と叫びつゝ自己の靈性を顧る必要がある、本當に自己を顧みる必要がある！

本誌讀者諸君の特權

◎圖書取次！

一、東京市內發行の書籍ならば定價の金額丈御送り下さるれば別に送料は要しませぬ。
但し法律書、醫書及び教科書は元價が非常に高いのですから送料を添へて下さい。

一、御送金は可成安全な振替貯金にて御拂込み下さい。
（振替口座は東京一〇〇〇三、六合雜誌社宛）

一、本部へ當て返書を要する質問書御發しに際しては必ず返信料を添付して下さい。

一、御注文に際しては必ず書名著者氏名及び發行所等を御記し下さい。（海外よりの御注文は郵稅を要します）

六合雜誌社營業部
電話芝五八五五番

本誌定價			
壹冊	一ヶ月分	金廿五錢	稅一錢
六冊	半ヶ年分	前金壹圓四拾五錢	郵稅共
十二冊	一ヶ年分	前金貳圓八拾錢	郵稅共

●海外は郵稅一冊に付金八錢（淸國を除く）
●特別號出版の際は規定以外の代金を申受く

本誌廣告料			
特等	表紙二三四面	一頁	金貳拾圓
普通		一頁	金八圓
普通		半頁	金六圓

●表紙四面は一頁以下の廣告は御斷り申上候
●二回以上連續揭出の際は特別割引可仕候

大正七年九月廿八日印刷納本
大正七年十月一日發行

（毎月一回一日發行）

定價 廿五錢
本號

發行兼編輯人 東京市芝區三田四國町二ノ六 工藤直太郎
印刷人 東京市本鄉區眞砂町三十六番地 和田操
印刷所 東京市芝區三田四國町二ノ六 三光堂
發行所 統一基督敎弘道會

發賣所 東京市芝區三田四國町 六合雜誌社
振替東京一〇〇〇三番
電話芝五八五五番

編輯の後

▲聖なる秋は來た。吾人は新にせられたる元氣を以て讀者諸君に見えんとしてゐる。序に諸君に編者として注意を求めたい事がある。それは紙價及び印刷費の暴騰である。時局のために物價の騰貴は非常なものであるが、紙價は特別である。幾度となく騰貴して、今日に至りて益々其勢が強い。吾人は月刊雜誌の多くの經營者として甚しき困難なる位置にある。しかれども讀者の經濟的負擔を此上に重くすることは出來ぬ。されば、といつて、さらぬだに財政難を感じつゝある本誌の負債を增加したくない。故に止むなく紙數を減じて百ページ以内とするに至つた。これ偏に讀者諸君の諒察を求むる點である。平和回復と共に紙の價低落すれば更に紙數を增加して諸君に酬ゆる所ありたい。

▲讀者諸君の知らるゝ如く本誌は四月號、七月號、九月號は安寧秩序に害ありと認められて發賣禁止を蒙つた。本誌寄稿者が至誠を披瀝して時事を論じて筆禍をえたるは願くば理解あらんことを望む。たゞ訛いて詳かならず、論じて過ぎたる點もありてこの災難に遭遇したのである。吾人は今日以後、更に熱心を以て時事を論じて時代指導の任務を盡さんことを期す。本誌の如き思想的立場にある雜誌は一人でも多くの同情を要する。若し本誌の使命ありとすれば讀者諸君にその知友の間に本誌を推薦せられんことを望む。

▲大正四年一月より本誌の記者たりし一條忠衞君は今回辭任して、工藤直太郎君之に代ることゝなつた。吾人は一條君の努力を感謝すると共に新進氣鋭の新編輯者に多大の望みを囑するものである。一條君は同人として本誌の寄稿家たるはいふ迄もない。工藤君は大正五年早大英文科の出身である。

▲高橋清吾君は八月十日歸朝した。同君は大正三年より四年間米國に留學し、コロンビア大學に於て政治學、自治制度を研究し、昨年同大學にて「日本國家起源論」にてドクトル・オフ・フイロソヒーの學位を領せられた。九月より早稻田大學に於て政治學史、自治制度の講義を開始せられてゐる。今後本誌のために時々寄稿せらるゝであらふ。同君が滯米々遠く稿を送つて本誌を飾られたるは吾人の感謝する所である。

▲會津常治君の英國宗教界評論第二回は稍々遲れて達したるが故に次號に割愛した。同君は東京高師英語科の出久しく教職に在りたる後、英國オックスフオードのマンチエスター學院に學ぶこと三年、七月下旬歸朝せられたのである。讀者諸君は既に同君の數回の寄稿に接せられたのであるが、今後は時々本誌のために執筆せらるゝであらう。

▲佐野袈裟美君の夫人は長男を擧げられ豊美と命名せられた。佐野家の清福を祝す。

▲此春以來病臥せられたる相原一郎介君の夫人は近頃大に快方に赴かれ、目下鎌倉に轉地靜養中である。

▲一時危篤の報が傳へられたる代議士小山東助君は近頃輕快せられ秋日和に乘じて散歩などせられつゝあるとの事、吾人大慶に堪えない。

▲岡田哲藏氏は今回西伯利遠征軍司令部附を命ぜられ、八月十二日東京驛を出發せられた。追つて同氏の消息は本誌に揭載せらるゝ筈。

（一記者）

最新刊

沖野岩三郎著

煉瓦の雨

裝幀・富本憲吉氏

四六判布裝箱入
定價壹圓四拾錢
送料——金八錢

本書に對する批評感想を寄せられたる十一名家

□與謝野寛氏
□岡田哲藏氏
□西村伊作氏
□賀川豐彦氏
□佐藤春夫氏
□三並良氏
□富本憲吉氏
□加藤一夫氏
□内ケ崎作三郎氏
□與謝野晶子氏
□生田長江氏

「大阪朝日」の大懸賞小說當選者として、頓に文壇に雄視するに至りし沖野氏の創作九種を蒐めたるもの卽ち本書である。沖野氏は文壇に於る新進作家であるが、閱歷の貧弱なる青年作家ではない。永き宗敎家の生涯に於る豐富なる經驗と觀察と見聞と思索とは、溫潤にして而も深刻に、周密にして而も徹底せる、一種特異の人生觀を其胸に養はしめてゐる。氏が其人生觀のレンズを透して社會と人物と事件と運命とを描寫したる此九篇の創作が、文壇諸派の間に於る大小の潮流傾向に超越して、眞に異色異彩ある獨特の一大境地を拓き出してゐるのは、洵に當然の現象である。思ふに大正七年以後の日本文學を語る者は、是非とも本書を一讀するの必要に迫られるであらう。

新春

德富健次郎著

□第四拾壹版□

三六判四百六十頁
緣金裝羽二重表紙
著者スケッチ色刷
特撮寫眞版五葉
定價壹圓六拾錢（送料八錢）

元版　東京市京橋區　卅間堀三丁目
福永書店　振替口座東京　四〇四六六番

統一基督教會集會案內

一、禮拜說教（每日曜日午前十時）（當擔）三並良

一、傳道講演（每日曜日午後六時半）沖野岩三郎

一、聖書講義（每日曜日午前九時）三並良

別揭廣告ノ通リ

一、靈交會（每木曜日午後六時半）沖野岩三郎

舊約聖書を研究中、猶會員諸君の信仰告白、宇宙、人生等に對する質疑等有りて頗る有意義の會合也

一、日曜學校（每日曜日午前八時）諸家

滿五歲以上の少年男女の入學を歡迎す

□どの集りにも、又どなたでも自由に御出席、御聽きになるとが出來ますから、御遠慮なく御來會下さい、歡迎いたします。

東京三田芝園橋際

統一基督教會

電話芝五八五五番

自由基督教會集會案內

但し自由教會は夏期中集會を悉く休む。

□講演（每日曜日午前十時より）

內ヶ崎作三郎、安部磯雄、岸本能武太、岡田哲藏、小山東助、永井柳太郎、今岡信一良、相原一郎介の諸氏之を擔當す

□聖書講義（每日曜日午前九時半より）相原一郎介氏擔任

□思想研究（日曜日午前九時）Sir Oliver Lodge's "Substance of Faith" の輪講

文學士今岡信一良氏指導

以上會場は女子音樂學校講堂に於てす

□家庭集會（隔週木曜日午後六時半より）

各教會員の宅を巡回して開催し、相互の親睦を計り信仰に關する疑義を糺し共進互琢の實を擧げんとするものなり

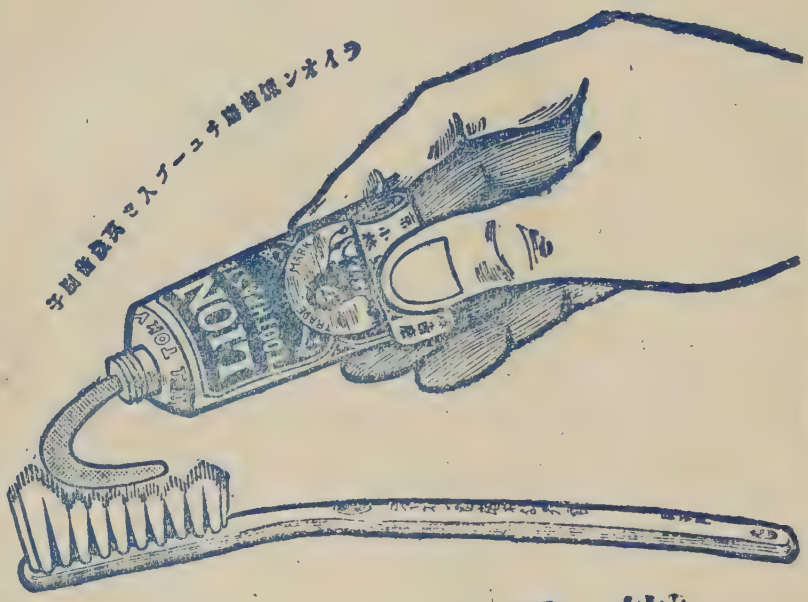
□本會は大正四年六月成立し、自由基督教の立場より包容的信仰を宣傳し、現代の思想と生活に適應する宗教生活を樹立せんとする人士の組織せる獨立自給の團體なり、同感の士の來會を歡迎す。

神田錦町三丁目女子音樂學校內

自由基督教會

電話本局三七三九番

（明治廿五年三月二十七日第三種郵便物認可）（大正七年九月三十日印刷納本）
（六合雜誌第三十八卷第十號）（大正七年十月一日發行）（毎月一回一日發行）



搾り出しよき

ライオン煉歯磨

チユーブ入！

さわやかなる香味！
すがすがしき使心地！
旅行用には即ちこれ。
家庭用には最も上品。

（本誌定價）金貳拾五錢）郵稅一錢

454

六合雜誌

明治廿五年三月廿七日第三種郵便物認可
大正七年十一月一日發行（毎月一回一日發行）

六合雜誌第三十八卷第十一號

十一月號

THE RIKUGO-ZASSHI

No. 454 November 1918

CONTENTS

Some Pioneers of Liberal Christianity.
.....Prof. S. Uchigasaki. 2
Bureaucratic Social Policy and Democratic
Social Policy .....Prof. I. Abe. 12
Future of Unitarianism in Japan.....Rev. N. Imaoka. 21
Shrines and Temples as Advertisement
Agencies.....Dr. R. Hoashi. 27
Some Defects of the Japanese Character.....N. Kudo. 34
Religious Condition of England of To-day.....T. Aizu. 43
Biology and Altruism.....S. Yamaguchi. 47
On the American English.....Dr. N. Ishida. 56
On the Freedom of Press and Speech.....T. Ichijo. 90
On my Message to Japan. .....Dr. Caroline. E. Furness. 97
Topics of the Day.
New Books.

Published Monthly by the
TŌITSU KURISUTOKYO KŌDŌKWAI
2. Mita, Shikoku-machi, Shiba-ku, Tōkyō.

千萬言の

説明を聽くよりは、此の
一管の實驗を御覽なさい
品質本位

花王石鹸

くわおうせっけん

石鹸試驗法

石鹸ん些し削つて試驗管に入れ之にアルコールを注ぎ好く振り混ぜて火にかければ純良の石鹸は透明となる。若し混合物があれば沈澱し遊離脂肪があれば溷濁が見ゆるゝ又遊離アルカリを含むものは此の液にフユノールフタレイン一滴を落せば赤色に變ずる。

斯の如く純良無上の品質なるが故に絶えず帝國陸海軍、帝國大學赤十字病院等の採用品となり、化粧衞生の第一品として滿天下に賞讃を博するのです。

花王石鹸製造元
東京馬喰町
長瀨商會

□私は斯う思ふ……沖野岩三郎…六八頁
□苦痛の快感……大橋房子…七二頁
□黄い月(長詩)……佐野袈裟美…七七頁
□不死の鳥(歌)……西淵峻…七九頁
□虚心集(俳句)……一碧樓…八〇頁
□一路(創作)……橘高一無…八二頁

研究

□法律倫理學上より觀たる言論著作・印行・集會・結社の自由……一條忠衞…九〇頁

海外思潮

□日本に齎らせるわが使命に就て(ウアツサー大學教授哲學博士フアネス女史)…九七頁

時評

□基督教會は一になるか……クレー・マコレー…一〇三頁

□弘道會より

六合雜誌

第三十八卷　第十一號

□自由基督教の先驅者……社　說……二　頁

評　論

□官僚的社會政策と民本的社會政策……安部磯雄……一二頁
□日本に於けるユニテリアン運動の將來……今岡信一良……二一頁
□祖先崇拜と神社佛閣の廣告的利用……帆足理一郎……二七頁
□日本人の慢性的御都合主義……工藤直太郎……三四頁
□英國教會偶感……會津常治……四三頁
□生物は本來利他主義……山口祥吉……四七頁

說　苑

□米國の日用英語……石田昇……五六頁

文　藝

□藝術短論……吉田紘二郎……六二頁
□まぼろし……佐藤清……六四頁

六合雜誌

十一月號

賜天覽 基督教大辭典

青山學院長ドクトル オブ、デビニチイ（神學博士） 高木壬太郎先生著

▽第參版△

外容

四六倍二版 一千六百餘頁 長八寸九分巾六寸五分厚さ二寸五分
六號活字三段組 說明事項三千百有餘 插圖百四十三個 脊革箱入

定價十八圓
特價十四圓
期限十一月一日ゟ十二月中
全一冊送料市內四錢內地卅二錢清、臺、朝鮮六十五錢

基督教大辭典は、即ち基督教百科全書にして基督教に關する事項は勿論之と間接交渉ある文學、哲學、政治、法律、鄉土、歷史、美術に關する事項も網羅したれば教界空前の偉觀なり

記載事項の內容

▲本辭典は、基督教の唯一經典たる『聖書』中の辭句を註譯し『聖書中の地名、人名等固有名詞を詳解す。
▲本辭典は、基督教の教義を解明す、たとへば『復活』『三位一體』といふが如き辭を說明し、其意義の由來變遷を記述す。
▲本辭典は、基督教によりて起れる、動亂、改革、事業等の歷史を述べ、基督教に交涉ある帝王、武將、政治家、哲學者科學者、詩人、評論家の性行を傳ふ。
▲本辭典は、基督教の發達並びに教會の歷史を記し、其に伴ひて變遷したる教理、慣習、儀禮等を詳記し、異言者、使徒殉教者、高僧、改革者、傳道者、牧師の傳記を揭ぐ。
▲本辭典は、現今世界にある各派の性質由來を記述し、基督教の諸運動、諸團體及び其主腦となれる人物を紹介す。

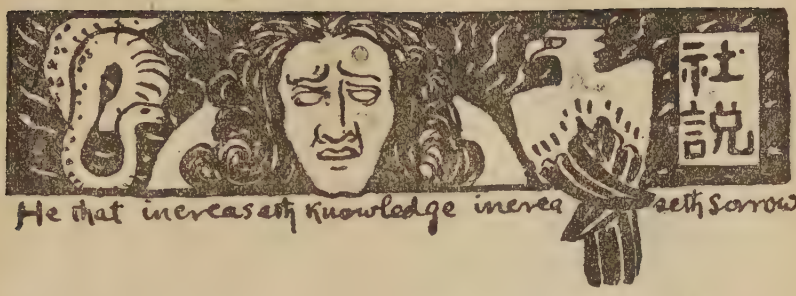
故に本辭典一卷を備ふる時は、聖書總論、聖書歷史、基督教發達史、教會史、聖書古物學、聖書地理學、聖書神學、聖書辭典、組織神學、西洋哲學史、歐洲文學史、改革者、傳科學者傳、宗教家傳、哲學者傳、詩人傳、評論家傳を蒐めたるに均しき實質を供給す。

基督教は歐米今日の文明の淵源を成せる者にして、是を解せざれば、遂に文明の眞相を探る可からず。故に本辭典は、本邦の**宗教家**、**政治家**、**教育家**、**文學者**、**新聞雜誌記者**、**語學者**、**歷史家**、**學生**の**座**右に備へて適**切**に利益を受べき書

東京京橋區尾張町二丁目
警醒社書店
振替東京五五五參

此論文を纏めたいと思ふ。

アリウス派の神學者で最も古くして有名なるはウルフイラス Ulfilas である。此人は紀元三百十一年に今日の羅馬尼亞に生れた。恰かもその時は基督敎及び羅馬帝國の危機であつた。この歲に辛うじて基督敎徒に對する迫害は止み、後十二年にしてコンスタンチン大帝が卽位した。更に三年程經て、ニカア會議が開かれて、正統派の信條が成立した。ウルフイラスはコンスタンチノープルに於て勉學し、希臘羅典語に通じた。それと前後して彼は基督敎を信じた。彼は異敎徒なる自分の地方の人々に新たなる福音を傳へたいといふ熱心なる希望を懷いた。三百四十一年、三十歲の時、彼はゴスアの監督に任ぜられ、ダニューブ河の北方に住むゴッス族全體を管理する命を受けた。居ること七年にして、地方に新宗敎に對する迫害生じ、一時ダニューブ河の南方、現今のセルヴイア、バルガリア地方に退いた。然れども彼は前後四十年の間布敎に從事した。彼は勤勞と冒險の生活を續けた。彼の熱心が遂げられ、彼の國民は新宗敎に歸依した。しかし國王は之に反對し、猛烈なる迫害が行はれ、幾多の信者は殉敎者の死を遂げた。而してその信仰はアリウス派の流れを酌めるものであつた。ウルフイラスは眞の牧者としてゴッス人の間に生活した。殊に平和にして、批難すべからざる生活を送りて模範を示した。或は敎育事業に從事して無學文盲野蠻蒙昧なるゴッス人に少からざるの精神的感化を與へた。又は新約全書の全部、舊約全書の一部をゴッスの言葉に飜譯してゴッス人の讀み得るやうにした。これがゴッス人の讀み得たる最初の書物であつた。之がウルフイラスの大事業であつて當時のゴッスの言葉は今日の英語、獨逸語の源となつたものである。或る人がウルフイラスのゴッス語譯の聖書の中にある



自由基督教の先驅者

內ヶ崎作三郎

一　ウルフイラス

抑々基督教の中の正統派、非正統派と云ふことは何時頃から分れたかと云へば、紀元四世紀頃よりはつきり分れて來たのである。丁度其時基督教界の二大思想家で、アサナシウスとアリウスと云ふ人があつた。アリウスの說は父と子と聖靈は同格のものではない、父は子よりも大なるものである、神は基督よりも大なるものであると說いた。所が之に對抗したアサナシウスは父と子と聖靈は三つにして一つである、基督は卽ち絕對なる神の化身であると說いた、そて三位一體（トリニテー）と云ふ教理が生じて來たのである。私の云ふ自由基督教はアリウスの神學が發端であると考ふるのである。そこて今ユニテリアン派、若くは自由基督教の進步發達を叙述するには必ず此處より出立しなければならぬ。私は此アリウスの基督教神學の源泉より過去千五百年の間に現はれたる主なる人物、殊に世界の文明に影響を及ぼし、國家民族に大なる感化を與へたと目せられる人々の傳記を中心として

ウス派は却つて異端視せられてゐたからである。されど彼は首都に着くと間もなく病死した。アリウス派もアサナシウス派も共にこの偉人の葬式に敬弔の意を表した。さて三百八十一年の宗教會議に於てアリウス派が敗れ、アサネシウスの三位一體論が勝を占めて、ニカア信條が成立した。やがて敗者は迫害を蒙つた。東ローマ帝國の地中海海岸の國々は皆アサネシウスの神學に傾いて、アリウスの神學は地方の野蠻國の間に行はれた。二百年の後にはアサネシウス派の神學が其方面にも段々に普及して、遂に全くアリウス派の神學は其跡を斷つに至つたのである。併しながら二百年の間ウルフイラスの傳道の結果が著しく好影響を遺して居つたことが證明せられた。四百十年にアリウス派のゴッス人が大擧してアラリックに率ゐられて羅馬帝國を攻めて、伊太利に侵入して首都を包圍した時に、その態度は往昔の野蠻時代のゴッス人と趣きを異した。聖オーガスチンはゴッス人が制慾及び人道的精神を示したことを承認してゐる。是等の事實はウルフイラスの感化の結果であると認めなければならぬ。

ニ　ソシナス

瑞西にルイス・ヘッチエルと云ふ牧師があつたが此人は自由基督教を唱へた爲に千五百二十九年にコンスタンスに於て死刑に處せられた。之は自由基督教の犧牲者の先驅である。さう云ふ殉教者を二三人擧げて見ると、千五百三十九年波蘭のクラッカオに於てカザリン・フォーゲルと云ふ婦人が自由基督教を信じた爲に燒き殺されたのである。此婦人は八十歳になつてから、聖書の精細なる研究を試みた結果三位一體論に疑惑を生じ、之を發表した。友人親類等の極力諫めるにも頑として諾かず遂に市場に於て燒殺された。彼女は極めて大膽に勇ましく殉教者の死をとげた。次に擧ぐべき人はソシナス

「主の祈」の言葉を今日の英譯聖書のと比較して見ると、三分の二は共通の語源を有して居ると云ふことである。さればウルフイラスの新アルファベット及び此事業は後世のスカンヂネーヴイヤ文學、英文學、獨逸文學の源泉を作つたものである。英文學の先驅者にはケドモンやサイネウルフの如き詩人があつた。散文の方面に於てはアルフレット大王の如き名君があつた、殊に中世紀の英語をロンドン語で統一したチョーサーが現れた。シェークスピアやミルトン等が出て英文學を大成したけれども、若し彼等に先んじてウルフイラスがなかつたならば、この事業は幾多の頓挫或は困難に遭遇したことであらうと思はれる。獨逸文學の中興の祖はマルチン、ルーテルであつて、彼が聖書を獨逸語に飜譯した爲に近代獨逸語の源泉をなしたと云はれて居るのは隱れもない事實であるけれども、彼に先んじて、ウルフイラスがあつた爲に、彼の困難は幾らか減じて居るのである。

此ウルフイラスは英文學、獨逸文學の先驅者であると云つて宜いのであるが、之は彼の人格の一端が其長所を現はしたのであつた。彼は人物としてなか〳〵偉い所があつた。殊に人の儀表たるの器を備へた人であつて、其友人にして弟子であるオーキセンテウスの批評の中に、『最も正直なる言語の人、眞正なる基督の信仰告白者、敬虔の教師、眞理の說教者、その功績に準じて余は賞讃するに適せずと雖も、余の沈默を守る能はざる底の人』といふ句がある。以てその人と爲りを想見すべしである。彼は四十年の間ダニューブ河地方を遍歷して布教に從事してゐたが、後コンスタンチノープルの宗教會議に呼び返された。それは三位一體論を批判する紀元三百八十一年の大會議であつたかも知れない。三百三十七年コンスタンチン大帝卽位後、久しい間常に、アリウス派が東歐に勢力を振ひ、アサナシ

た。

波蘭はソシナスの氣に入りて、國籍をも移さんとし、神をのみ天父として拜する教會の會員たることを許されたしと望んだ。されど頻々たる點にて教會と一致すること能はず、彼は入會を許絶せられた。されども彼は自若として、彼の信ずる神と眞理に就いて屢々所論を發表して多くの人をして心痛せしめた。反對派の人々は彼を國王に訴へ、又伊太利の浪人に對して政府が餘りに寛大であると攻撃した。よつて彼は四年間滯在したクラッカォを去つてクリストファー・モルステニアスといふ貴族の保護を受けた。貴族はその領土内に於ては絶對の權利を有したれば、ソシナスを無罪と宣言した。この貴族はその一女をソシナスの妻に與へたれば、彼は波蘭の第一流の家柄と緣續さとなつた。然るに妻は一女を生みたる後數ヶ月にして病死した。其内に本國のタスカニー太公が死んでソシナスが殘して置いた毎年一定の收入のあつた財産は殆んど無くなつた。されど彼は柔和と忍耐とを以てこの打擊を耐へた。彼はクラッカォに歸りて基督教社會の迷蒙を除いて、個人的及び家庭的の苦痛を忘れんと試みた。この一事は彼が天職であると確信したのであつた。

千五百八十八年に至りて彼の勢力はリスアニアのブレストの總會（スィノッド）に於て完全に確立した。彼は波蘭の反三位一體派の相違を除去して、教會を統一し、混沌たる意見を完全に調和したる宗教系統に變じた。この時に當りてユニテリアン派の人々の意見の紛々たるものは洗禮の問題であつた。ソシナスは洗禮は教會の永遠の式典として見做す要なしと考へた。されば幼年より基督教的訓練を受けたる人々には洗禮は指定せられなかつた。

てある。フウスタス・バウラス・ソシナスは千五百三十九年十二月、シエンナに生れた。彼は三歳にして伊太利テ一流の法律家であつた父を失うた。彼は二十三歳までは法律を勉強した。その間彼は宗教に對する研究的精神を感じ、當時一般に行はれたる謬見に對しては一種の洞察を有した。千五百六十三年彼がリオンに滯在中ツーリツヒに於て伯父レーリウスの急に病死したとの報に接した。彼はその遺稿を手に入れんがために出立した。レーリウスは敬虔にして博學なる青年であつた。彼はフアウスタスに幾分かの感化を與へたらしい。フアウスタス・ソシナスは約三年間瑞西に滯在して伊太利に歸つた。後タスカニー太公に宮仕をした。十二年間彼は名譽の位置にありて、贅澤な生活をしてゐたが、或る時考へて見るに、今のやうな生活をしてゐた所で人生の根本問題には少しも觸れて居らぬ、何とかして一層自由な位置に立つて、自分と人との救濟のために眞面目に考へて見たいと決心した。今の人から考ふれば餘りに眞面目腐つたことを考へたやうであるけれども、文藝復興より宗教改革時代にかけて、人生の根本問題を眞面目に考へなければならぬと思ふ人々が少からずあつたのである。而して彼は二十五歳にして伊太利を旅立して、兩三年は瑞西のバーゼルに滯在して、神學上の智識を增さんがために勉學した。

千五百七十七年に至りて、彼は神學上一切の遠慮を捨てゝ公然自己の信仰を告白した。神の眞理は之を胸中にのみ秘め置くべきでないと覺悟した。彼は友人と自由に宗教上の議論を闘はし、基督の救主たる職分に關する論文を發表した。時に今の墺地利領トランスルヴアニアに三位一體論に反對の運動が起り、ソシナスは其招聘を受けて、バーゼルより同地に赴いた。千五百七十九年に彼は波蘭に轉住し

てある。

そこで自分の職業に安んずることが出來なくなつて歐洲各國の旅行を思ひ立ち、佛蘭西、伊太利、獨逸、瑞西等を巡歴してルーテルやその他の改革者と會見した。しかしながら彼の抱いたる意見と相容れざるものがあるので、彼は之を悲しんだ。彼は或る所では醫師を業とし、且つ醫學書を著述し、又或る所では文學を業とした。千五百三十四年巴里に於て、彼は當時の宗教革命の大黒柱と云はれたジョン・カルヴインと會見した。この會見に續きたる兩者の文通は終にセルヴエタスに禍を來したのである。當時セルヴイタスの鋭利なる頭腦を以て見れば、カルヴインの宗教改革の意見は徹底して居ないのであつて、大分カルヴインを冷やかして居る、次の様な文字がある『君の福音は律法と混じつてゐるに御氣が付かれぬか。君の福音には一神と眞の信仰と善行とがない。一神の代りに三頭の怪獸がゐる。眞の信仰の代りに不幸なる惡夢がゐる。而して善行に關しては君は畫餅のごとしといふ。然らば人類は頑迷なる愚物にすぎない。君の神學に於ては神は專制獨斷の怪物に過ぎぬ。』

カルヴインも大に怒り、口を極めてセルヴエタスを罵り、もし彼がゼネバルに來れば、生きては還さぬと敦圍いた。尤もセルヴエータスの言にも隨分猛烈なる句があつた。たとへば、『土耳其人、シズアン人もしくは野蠻人もかゝる言葉の爭ひ(三位一體論)を笑はずして我慢が出來ると思はるゝか。三位一體の傳說はマホメットの神には輕蔑の豐富なる原因であらふ。猶太人は之を想像するだに恐るゝ。何となれば彼等は之を以て冒瀆であると考ふるからである。曾にマホメット教徒やヘブライ人のみならず、野の獸も吾人の狂熱的思想(三位一體)を輕蔑するであらふ、何となれば神の作り給へるものすべ

さてソシナスは新教徒中の反對派より折々侮辱を受けたれども、又クラッカオに住する羅馬教徒の憤怒を買つた。千五百五十八年のこと、ソシナスが病臥してゐた時に、大學生に指嗾せられたる亂民が、或る朝彼の寢込みへ踏み込んで、半裸體のソシナスを引張り出して大通りを引き廻はしてから虐殺せんとした。幸に通り掛つた大學の教授二人が亂民を鎭めて彼の命は助かつたが大切な圖書室が全く破壞されてしまつた。千六百四年三月彼は病死した。苦難多かりし一生の最後の瞬間を樂しみつゝ瞑した。

三　セルヴエタス

次に自由基督教の犧牲になつた人はミカエル・セルヴエタスである。彼は千五百十一年に西班牙のツデラに生れた。父はヴイルネエヴアの名ある人であつた。彼は非常な秀才で十四歳にして、希伯來語、希臘語、拉典語を讀み、又他の學術にも通じた。十九歳の時皇帝チヤールス五世の懺悔僧（コンフエツサー）を勤めて居たクウインタナの秘書に任ぜられた。當時は有識階級は宗教改革を注目した。セルヴエタスも聖書を研究して羅馬教會と異る多くの點を發見した。終に彼は宗教改革のために一生を献じた。彼は少年時代より學者的傾向を有し、種々なる題目について獨立して思索する習慣を有した。又醫學解剖學に通じて肺臟に於ける血液の循環を發見した。千五百三十一年、二十二歳にして「三位一體論の誤謬に就て」と云ふ書物を書いた。續いて二冊の對話文を出して同じ問題を論じた。彼はまた聖書の註釋を著はしたが、後彼が生命を賭したものは「基督教の復古」であつた。この書の五六部のみが燒かれずして後世に傳はつた。一冊は巴里の國民圖書館に、他の一冊は維也納の帝國圖書館に保存され

ゼネヴアの奉行は有名なる學者に對する宣告は殘酷に失すと考へ、他の郡部に於ける新敎徒の意向を尋ねしに、右の宣告に同意すといふ回答をした。要するにカルヴイン一派は羅馬敎會の弊風のうちに育ちたれば、この無慈悲なる裁判を敢てしたのであらふ。然らざれば賢明なるカルヴインの態度として不可解の極である。千五百五十三年十月二十七日セルヴエタスは生きながら燒き殺された。刑に先じて三位一體論に服せよと求められたれども、セルヴエタスは聞かずして曰く、基督は「父は子より大なり」と揚言せられた、聖書にては神と神の子とを區別してあると答へて之に應じなかつた。

刑場シャンペルはゼネヴア郊外の高地である。セルヴエタスは柱に縛られ、その足は地に達してゐた。硫黄を散らしたる藁と木の葉の冠を戴かせられた。彼の著書は膝の邊に結びつけられた。それから薪に火が點ぜられた。彼は非常に苦しんだ。この絕叫は觀望者を泣かしめた。二十分ほどして彼は最後の息をついた。かくして有名なる醫學者にして改革者が死んだ。聖書を合理的に研究したるが故に、彼は燒き殺されたのである。自由基督敎はかゝる貴き犧牲あるが故に發達したのである。

て惟一つの神を讃美するのみてあるからてある。』

彼は一時リオンに醫術を開業してゐたが、舊門下の維也納の大監督ペーター・ボルミエールの客となつた。彼は基督教復古論を四年の勞力の結果として著はした。この書は羅馬教會に輸入せられたる腐敗を指摘し、基督教社會を原始教會の信仰と生活に復せしむるを目的とした。羅馬教會も新教も共に激してこの書の流布を妨げた。殊に羅馬教會は大恐慌を來たして彼を捕へて裁判に附した。彼の生命は風前の燈の如きものてあつた。所が千五百五十三年四月七日に彼は牢を破て逃げてしまつた、すると維也納の裁判官は缺席裁判をして財產を沒收した。また發見次第餘り熱くない火で炙り殺すと云ふ判決を下した。當時歐羅巴にはよくやつたことてあるが、缺席裁判の時は、其席へ被告人の藁人形を置いて之を刑に處することがあつた。セルヴエータスの藁人形は五俵の書物と共に維也納に於て燒刑に處せられた。

而してセルヴイタスは伊太利のネープルスに逃れやうとしたが果さずして、瑞西のゼネヴアへ行つた。するとカルヴインはサア來たと云ふので直ぐに捕へてしまつた。當時ゼネヴアに於けるカルヴインの勢力は非常なものてあつて其の御機嫌に逆ふ者は悉く處分せられたと云ふ程である、カルヴイン及び其友人が檢事となつてセルヴエタスを告發した。宣告に曰く『吾人は汝ミカエル・セルヴエタスを縛りシャンペルと呼べる地に運び、柱に結び付けて、手書及び印刷になれる汝の著述と共に、汝の肉體が灰燼となる迄に生きながら燒かるゝことを宣告す。而して汝は汝と同じ事をなすべき他の人々への見せしめとして汝の日を終らざるべからず』。

々さうは行かぬ。一時の姑息の方法で治るものではない。そこで、それには根本的治療法を施さねばならぬ。それには病狀に依つて種々の方法があるであらう。或は外科的手術を施さねばならぬこともあらうし、又は長い間醫藥に親しまねばならぬこともあらう。或は溫泉や海邊に轉地療養をする場合もあらう。病氣の治療方法には細目すれば色々方法があるであらうが、大別すると以上の二方法に出でない。

二　社會政策の二方法

それを今日の社會問題に就て具體的に云へば、應急手當は慈善事業であつて、貧乏と云ふ社會組織の病氣に對して應急手當を持つて之を治療することである。貧乏人には差當り慈善事業を以て、衣食の手段を講じてやる。救濟金や救助米を與へて當座の凌ぎとする。貧乏人の中に犯罪者があれば、その出獄せる時に保護を與へたり、職業を與へたりするのである。社會一部の階級の窮迫困憊を應急的に救濟するのは慈善事業に俟たねばならぬ。然し乍らこれは他力を以つて一時の間貧乏人や犯罪人を助けるのみであつて、貧民の生活に永久的なる治療を施したとは云へないのである。たゞ當座の凌ぎで、間に合はせに過ぎない。他力のみを以つてしてはこの病弊を根本的に芟除することが出來ない。たゞ一時苦痛をとめると云ふ效能はあるであらうが、治療方法としては尙不完全である。疾患を根治するにはどうしても根本的治療法を用ゐねばならぬ。根本的治療法とは他力でなく自力を以つて治療することである。自ら努力して自己の病弊缺點を治療匡正するのである。卽ち自助的精神が最も大切である。自分で自分を助けると云ふことは、あらゆる事業に於て甚だ迂遠な樣であるが、結局成功成就の捷徑である。我等が病氣を治すにしても、單に醫者の診察や服藥した丈では、到底根本的に治癒することが出來ないのである。第一自分の精神を確かに持つて病氣に負けない氣力を養はねばならぬ。單に醫者や醫藥の他力のみを賴みにして自分の精神が不甲斐なく、惰弱では何にもならぬ。病氣は氣で持つといふから先づ自分の精神を丈夫に持つて自ら努力して治癒

官僚的社會政策と民本的社會政策

安部磯雄

一　文明と社會病

社會問題と云ふことは、今日擴く用ゐられ、一種の流行語となつた觀があるが格別その問題は六ツ箇敷ものではない。社會を人間の身體に譬へると社會と云ふ有機體は病氣に罹るとする。その病氣を大別すると二つになる。即ち一は貧乏と云ふ病氣、他は罪惡と云ふ病氣である。世界の文明進歩に依つて、社會は益々複雜になつて行くのであるが、一面に於ては社會の病弊が次第に重大になるのである。今日社會と云ふ大身體が社會病と云ふ重病に襲はれて、現代人士を惱ましてゐるのである。

ところが如何にすれば今日の社會的疾患を治癒して、この病魔に苦める現代人を救ふことが出來るか。これが問題である。然し、理窟から云ふならばこの問題は何も六ツ箇敷ものではない。困難であるのはそれが實際上の解決方法である。私は飽くまで社會組織を個人の身體に譬へて說かうと思ふのであるが、社會組織が一大病患に侵されてゐるならば、我等の身體の病氣に對すると同樣に、これを治するに應急治療方法と根本治療方法の二つがあると思ふ。應急手當ては患部に膏藥や繃帶を施して一時の苦痛を止める。然し鳥渡した怪我や輕微なる風邪位ならば、有り合はせの膏藥や丸藥位で直に治るであらうが、根蒂の深き重病には仲

の構造を改善せねばならぬ。それには單に政府で建築條令を作るばかりでなく、人民に自發的に屋を家改良せしむる機會を與ふることを計らねばならぬ。人民が自覺して、石、煉瓦、コンクリートを以つて家屋を建築する時代に至らねば到底火災を完全に豫防することが出來ない。然し乍ら、今日木造家屋を全部防火設備の建築に改めることは、一朝一夕で出來るものではない。三十年を要するか五十年かゝるか見當がつかないのである。それまでには緩急の二方法を併用して行くことが必要であると思ふ。

三　民衆の自覺と勞働組合

これと等しく今日の社會政策は、根本的なるを要すると共に、一時的なるものも必要とすると思ふ。然し一時的手段のみを以つて當面の問題を瀰縫してはならぬ。同時にその問題の根本に溯つてこれを精細に研究し、その問題の由つて來る所以を明かにし、之れに對して、根本的なる解決を講ぜねばならぬ。たゞ一時の姑息極まる遣繰算段に腐心してはいかぬ。問題を根本的に解決して、社會の缺陷不安の根源を一掃せねばならん。然るに今日の政治家、又は社會改良家の實際に行つてゐる施設を觀ると、毫も徹底せるところがない。根本的な手段は少しも採つて居らぬ。それ故今日の社會政策は當面の事件のみに拘泥してゐて、永久的な手段を講じないから、その施設は朝三暮四、少しも標準が立つてゐない。絶えずその方策が動搖して權威がない。政府や政黨の社會の綱領を見ても、いづれも姑息なる應急手段のみを麗々しく掲げて、眞に社會の病根を研めて、これを永久に根絶せんとする努力的手段を閑却してゐる。それ故單に一時の人氣取り社會政策に腐心するに過ぎない。偸安苟且、姑息瀰縫の政策たるや、今日の政治家のやつた跡に徵すればすぐ判るのである。米騷動が起つて、民心が紛亂動搖すると、直に一千萬圓の鉅費を國庫より支出し、富豪や特志家の寄附金を募集して、米の廉賣を始めて、一時の騷擾を鎭壓し、一時の平安を糊塗せんとするのである。又官權を濫用して、人爲的に米價を調節せんとする。單に政府の權力を以て立所になるべしと信じ

する工夫をせねばならぬ。

これと同様に貧困者も他人の救濟のみを俟つことなく、自ら進んで、自己の生活狀態の改善に努力せねばならぬ。たゞ袖手して以つて他人が食物を自分の口に投げ入れるのみを待つてゐるのでは何にもならぬ。更らに貧困窮迫に對して應急手當をなすには、多額の資金を要するのである。貧乏人に一時の衣食を給するも金であり、出獄人の世話も金を要するのである。ところが根本的治療は自分自らを助けしむる手段を講ずるのであるから多額の資金を必要とせぬのである。自ら努力してその生活狀態を改善せしむる機會を與ふのであるから、直接物質を與ふる必要はない。

この二方法の孰れがよいかと云ふことは、私は遽かに斷言は出來ないが、後者の方法が、今日の浸潤深き社會の病弊を根本的に泥絕することに於て更らに重んずべきものではないかと思ふ。然し永久的救濟施設のみを說いて、目前の幾多の悲慘なる事實を忘れてはならぬ。差當り貧困者の苦痛を救ふには、どうしても應急手當、救貧事業の如きものに依らねばならぬ。それ故今日の社會狀態の缺陷を匡救するには、緩急の二方法を用ゐねばならぬのである。

例へば東京市の家屋は多くは木造の粗末なもので、防火構造でなく殆んど燃料で家屋を作つてゐる樣なものである。これを壯麗完全なる歐米都市に比較すると到底お話にならぬのである。それ故東京市には火災が頻々として起る。ことに十二月から一月、二月にかけては毎日の樣に各所に火災が起るか、都人も亦冬季を火災の時節として年中行事の如く思ひ、敢て怪しまぬ。江戸の花火事と云ふが、大正の帝都に於ても未だ火事は名物たるを失はぬ。ところが火災を防ぐにも要するところ二方法に出でない。則ち應急消火と永久的なる防火設備である。應急消防には消防組なるものが各區にあつて、蒸汽喞筒（ポンプ）や水道を以て防火に從事する。然し消防組の仕事は火災の蔓延を防ぐと云ふ丈で、積極的に火災を未前に防止する手段を講ずるのではない。火災の慘害を絕滅するには根本的方法に出でゝ、都市改良を企てねばならぬ。家屋

らしめ、飽くまでその主張を貫徹して、その體面を保つのである。

今日獨逸でも官營保險をやつてゐる。獨逸政府ではこれをやつてゐる爲めに、年々一億馬克（マルク）の金額を支出してゐるのである。官僚的專制的であると云はるゝ獨逸さへも、勞働者の利益を擁護伸長して、國家の產業を益〻盛大ならしめ、國富を增進せんと苦心してゐるのである。然し獨逸の樣に國家が保險をやると云ふことは仲〻六ケ敷いのである。今日我國が之を實行するならば、どうしても四五千萬圓の金を要する。然し乍ら政府が勞働者の團體を認め、彼等を協同一致せしめて置いたならば彼等は自力的に相互保險をやる。勿論勞働者の中にも色々階級があつて、職工と云つて一藝を備へてゐるものは、保險をする能力はあるが、土方と云ふ勞働者階級になると仲々困難である。それ故それ等の勞働階級に對しては、政府自ら相當の手段を講じて、救濟せねばならぬ。勞働者が鞏固なる組合を組織し相互保險をなして自主獨立の基礎を作る時には、無法なる資本家に壓制され、その利益を蹂躙さるゝこともない。勞働者の背後には組合が控いてゐるから、賃銀問題の際などは資本家と談判して、有利なる條件を得ることが出來るのである。これが結局資本家と勞働者の意志が疏通することになる。資本家は勞働者に對して、封建的な舊弊思想を以つて、單なる雇傭關係を以つて壓制專斷を以つて臨む時代は、何事にも立憲的なる民本的なる今日、全く過ぎ去つたのである。一國產業の進步發展を期するには、どうしても資本家、勞働者、相互の利益を計り、互にその權利、義務を認めて、兩者協力して事業に膺らねばならぬ。徒らに頑迷固陋したる主從思想を以つてしては、今日の如き濟經界に處して、列强を角逐することが到底出來得ぬことである。

四

然るに我國の爲政者の中には、勞働者が一致團結して、その勢力を得てその眞正なる權利及利益を擁護することを非常に嫌つてゐる者が多い。彼等の思想は全く封建時代の頑迷なる舊弊思想で、今日の資本家對勞働者の關係を以つて、全然主從

た米價調節は全然失敗に歸した。一千萬圓を支出して幾許の調節をなして、一般國民を救ふことが出來たのであるか。政府は不自然な應急手當に腐心すればする程、その反對に米價は益〻暴騰して、國民生活は日に日に急迫を告げ、今や中流下流階級の生存までも脅かされつゝある現狀ではないか。一片の政令や權力で、國民生活の不安動搖の根源を芟除せんとするが如きは、到底不可能である。然るに前政府の採つた社會政策は概ね斯くの如くして、火事になつてから、火を消すと云ふことのみ力を注いで、その根本問題たる家屋の改造を等閑に附してゐるのであるから、姑息手段を用て一時を瀰縫するのみで、埒が開く筈はない。

社會政策の根本要件は個人の自覺に訴へるより外にない。卽ち各個人が自力を以て積極的にその生活を改善向上せしむるを得る機會と手段を與ふることに、爲政者及社會改良家が留意せねばならぬ。いかに貧乏人でも、彼等に相當の改善方法及その機會を與へてやるならば、自力を以つてその生活を改善することが出來るのである。自力を持つて奮鬪すれば、必ず根本的にその缺陷を匡救することが出來ると思ふ。貧民や勞働者の救濟を單に國家にのみに委せず、勞働者自身が、獨立した立派な團體を組織して、自己の地位を改善向上を計らねばならん。歐米諸國の勞働組合制度及その地位は如何に進步して、又如何程社會的大勢力を揮つてゐるかと云ふことは我國人の想像の外である。その組合の目的は勞働者全體の利益を保護し、その生活內容を向上進步せしめんとするにある。組合に於ては相互保險の制度を設けて、一週一回宛會員よりその收入の何分の一かの會費を徵收する。もしも勞働者の間に不幸病氣にかゝつて暫く休業の已むなきに至ることがあれば、その給料の三分の二を組合から受取ることが出來るのである。それ故假令病氣で休業する時でも、勞働者の生活は安全に保障さるゝのである。勞働者が死亡すれば、その葬式費や遺族の手當を組合が負擔するのである。同盟罷業が起つて、勞働者が失業すると云ふ場合には、組合の積立金から勞働者の平常の給料を支出して、勞働者に生活上の憂ひなか

資本を擁して信用組合を組織してゐるのであるから銀行や高利貸から金を借りて不當な利益を貪らるゝことは絶對にない。獨乙全國の信用組合で融通する金額は、年々三十幾億圓といふ巨額に達するのである。

苟くも人間にして自助の精神がないものはない。たゞその程度が各人に依つて異るのである。勞働者にしても、彼等に對して充分なる機會と適宜の手段を與へるならば、自助自立してその生活を改善することが出來るのである。國家が餘計な干渉をせずとも、その途さへ拓いてやるならば、勞働者は立派に團體を作つて、相互保險も購賣組合も、實行し、その生活を向上せしめ、よく資本家と一致協力して、我國の產業を發展せしむることは明かなことである。この事實を知り、世界の經濟趨勢を觀ながら、我國では未だ一つも實行することが出來ないと云ふのは、洵に驚くべきことではないか。日本の政治家の考へてゐる社會政策は實に不徹底極まるもので、一時の姑息繕縫策に過ぎない。彼等は社會政策は社會繕縫策なりと解釋してゐる。社會政策と云へば必ず慈善事業、救助事業と信じて、一時の動搖を糊塗して、果敢なき太平を偸むのである。幾百年の間、封建的な非立憲な主從關係に養成せられた我國民は、自主、獨立の氣慨がない。人をして自ら助けしむると云ふ自助的精神を養はしむる政策を採ることを知らない。我國人の救貧と云ふ考へは、一時に貧乏人に衣食を與へて助けることである。人に情けで物を恤み與へることだと思つてゐる。根本的に貧者の生活內容を研究して、その缺陷の根源を明かにし之を匡正すると云ふ考は全くない。鳥渡衣食を與へて、貧困者が喜ぶ顏を見ると、貧乏救濟の目的が達せられたと考へてゐる。甚だ不徹底なやり方だ。封建時代に於て明君と謳はれたものゝ事蹟を看ると、勿論明君であるから、人民を愛撫する。然し其愛撫も甚だ情實的な姑息な愛撫で、合理的に永久的に人民を愛撫するのではない。人民に自由と權利とを與へない。否情實的な涙金を以つて恩を着せて、一時の太平を偸み、却つて、領內の人民の自由と權利を奪つて、竊かに自家の權力を伸張

の關係と觀るのである。それ故主人は自分の傭人に對しては、如何に無法な事を命令し、又はその面目を傷けても、主人なるが故に壓制的に使役する利權がある、又傭人は傭人たるが故に、主人の無法なる注文にも畏つて聽從せねばならぬと云ふのである。彼等は勞働者が團體でも組織すれば、直にストラキを働いて資本家に反抗し、社會の秩序を紊亂するものだと斷定してゐるのである。歐米諸國の勞働團體が如何なる大事業をなして、國家の產業上に大貢獻をなしてゐるかを知らざる彼等は、勞働團體と云へば直に社會主義者の秘密結社同樣に見做して、勞働團體の設立に助力を與へる所が、却つて此氣運を壓迫せんと努むるのである。我國の產業發達は歐米諸國のそれに比して、實にお話にならぬ程度にあるのは、我國從來の爲政者並びに政黨者が近代產業組織の根本を無視したからである。卽ち勞働者の勢力を得んことを懼れて極力これを壓迫したからである。勞働者の眞正なる權利及利益を保護せずして、何んで產業の進步發展があらう。

英國勞働組合の別動體とも見るべき消費組合は二百七十萬人の會員を有し、一年の支出費は十六億圓と云ふ巨額に達するのである。消費組合は勞働者の必要品を直接生產者から購入するのであるから、生產者、販賣元、小賣商、卸賣商と三重四重の仲介者の利益を全然省くのである。それ故必要品を非常に安く賣ることが出來る。それ故勞働者は物價が少々騰貴しても少しも困らぬ。彼等の生活は一時の物價騰に不安動搖を感ずることはない。日本でも今日の如き急激なる物價騰貴に依つて、中產階級及下層社會はその日々の生活を脅かされ、不安困憊の極致に達してゐるのである。近頃漸く目醒めた連中もあると見えて、小賣市場を開くなどゝ騷いでゐるが、それすら種々なる惡因緣に左右されて思ふ樣に實行が出來ない有樣である。

更らに獨逸では都會勞働者及田舍の小百姓の信用組合の勢力は實に侮るべからざるものがある。彼等は政府の力のみに依賴せず、自ら努力して一致團結して其利益を伸長しつゝあるのだ。大なる

日本に於けるユニテリアン運動の將來を論ず

今岡信一良

ユニテリアン運動の史的發展

概して我國今日の教勢は行詰りの狀態に在ると思ふ。現狀を以て推せば今日以上の進展を觀る事は殆んど不可能事かとも思はれる。集會の不振は恕すべしとするも新鮮活潑なる精神的生命の躍動を認め得ざるに至つては眞に由々敷大事である。偶々教界の新事件を以て目される出來事ありとすれば基督再臨說といふが如き狂熱的迷信の流行に過ぎないのである。併し本論の目的は廣く我一般の教勢を論ずる事に存せず、唯私共に最も近き關係を有するユニテリアン運動を研究する事に在る。

日本に於けるユニテリアン運動は今を去る事三十二年卽明治二十年米國ユニテリアン協會代表者ナップ氏の來朝に依つて始まつたと謂つて可いのであるが、實は故福澤諭吉、矢野文雄及び金子堅太郎氏等が大に其の日本傳道を慫慂したのに基くのである。隨つて日本に於けるユニテリアン運動は當初よりして極めて有望な者であつた。殊に明治二十二年來マコーレー氏が日本に於けるユニテリアン・ミッションの主任者として定住するに及んで先進學院の創立及び惟一館の新米等を始め、事業着々として進渉し前途極めて有望であつた。併し基督教界の內部より異端邪說として蛇蝎視された事は今日猶一般基督教徒に取りてユニテリアンといふ言葉其者が直に異端を意味するの一事實に徵しても明である。さりながら異端呼ばはりをされるだけ、それだけ我がユニテリアン運動は特色に富んで居たのである。一見微々たる一小團體の力を以てして猶能く日本の思想界殊に基督教界を震撼する事を得たのは偏に異端の異端たる所以であつた。隨つてユニテリアン運動の存在には極

せんと腐心したのである。これでは一向有難くない。今日の政治家のやり口も亦之と似通つたところがあつてどうも感服が出來ない。小口保險、工場法、米の廉賣、養育院もよいが、更らに一歩進んで、國民に自主獨立の氣風を作ることを工夫せねばならぬ。官權を以て萬事成るの思想は最早や今日の複雜なる社會制度には適合しなくなつた。爲政者が眞に社會政策を實行して、國民生活の安固福祉を計るならば、必ず國民の自由自立の精神に依頼せねばならぬ。お上のやる仕事はよいに定つてゐるから、人民はたゞ畏つて見て居れ、命之れ奉ずるのだと、國民の自由、自立の精神を無視して、姑息極まる社會政策を行つて、一時を凌がうとするのは、知らしむべからず、依らしむべしの官僚的社會政策である。今日の勞働者はその方途宜しきを得ば、充分に自助發展せしむることが出來るのにも拘はらず、却つてその自由、向上を制壓して、たゞ愚劣なる善政主義を以つて民を壓迫し、慈善的、恩惠的なる姑息政策を行ふならば、昔の名論のやり方とは聊かも異ならぬ。かゝる方法を官僚的社會政策と云ふ。勞働者に平等の機會と、憲法の保障する自由を與へて、彼等をして自助的にその生活を改善せしむることは目下の急務である。これ卽ち民本的社會政策である。勿論我國現在の社會狀態では、一時的の應急手當も大いに必要だ。然し一時的施米や義捐金などの慈善事業にのみ信頼してはならぬ。當坐の急に應ずると共に、社會の病弊の由つて來りたる根源を研究し、これを救治せんとする根本的の治療法は更らに必要である。されば爲政者も政黨も警世家も少しくその眼窩を大にし、思ひを國家將來の發展に致して、根本的なる社會政策を確立せんことを希望するのである。

の相違は無いかも知れぬ。併しながら他宗教に對する寛容の態度に於てユニテリアンは全然正統主義者と其撰を異にして居る。ユニテリアンは神道をも佛教をも包容し得るのである』と。併しながら私は不幸にして如上の説明の中にもユニテリアン運動の根本的特色を發見する事を得ない者である。他宗教に對する寛容の態度は必しもユニテリアンの獨占物では無い。律法と豫言者とを廢せずして之を成就せん事はユニテリアンのみならず凡ての基督教者の態度である。現に私はユニテリアンの何人よりも佛教に對してヨリ深き理解と同情と同化力とを持つて居る正統派教會の人を知つて居る。私は斯く考へ來つて、松村介石氏の率ゐつゝある道會の態度の方が一層旗幟鮮明で徹底的であると思ふ。併しながら私は何も道會の主義綱領を賛成する者では無い。

私はユニテリアン運動は最早組合教會や日本基督教會やメソヂスト教會や聖公會などに對立する一個獨立の教派としての存在を必要としないと思ふ。何となれば近年、組合教會は固より、他の正統派教會と雖も自己の教會員中ユニテリアン主義を奉ずる者があつても決して之を破門放逐する様な馬鹿な事はなくなつたからである。ユニテリアン主義が正統派其者の内部に普及される事が出來れば何を苦んで異宗別派を建てる必要があらう。元來ユニテリアン運動の起りは決して新宗派を樹立する事に在つたので無く、唯所謂正統派教會より排斥された爲め止むを得ずして獨立の一派を形成するに至つたのである。米國に於ては一方戰爭の爲め、他方ピルグリム・ファーザース米國上陸三百年祭の接近せる等の爲め、元來一體であつたけれども途中で相分離した組合教會とユニテリアン教會とが近時大に接近し來り、中には再び昔の同一體に歸つた教會さへある事に鑑みても、私は日本に於ける今後のユニテリアン運動の教派的發展に對しては大なる疑問を懷く者である。併しながら私は既存の統一教會及び自由教會までも無用だといふのでは無い。一個若くは二個の模範的ユニテリアン教會を有する事は至極結構な事且必要な事と思ふ。若し一層完全なる教會を造り得る見

めて明白なる意味と使命とを認める事を得たのである。併しながら私は今ユニテリアン運動の歴史を述べる積で無いからして直ちに本論に入りて次の如き問題を提出し度いと思ふ。卽ち多大なる希望と深甚なる意義とを懷いて開始された我がユニテリアン運動は開始以來三十餘年の今日果して如何の狀態に在るだらうか。殊に今後は如何なる方針を以て進むべきであらうか。

ユニテリアニズム進歩的正統主義との接近

ユニテリアンと異端とが異語敎義となつた程ユニテリアンが急進的であつたのは最早昔話である。今日では所謂正統派敎會の信者中にもユニテリアンと同等の信仰を懷いて居る人が少からず發見される。組合敎會の如く大體に於て進歩的な敎派に於ては無論であるが、聖公會・日本基督敎會メソヂスト敎會等の內部にも私は現に幾多のユニテリアンある事を知つて居る。今日に在りては正統派敎會とユニテリアン敎會との區別は三位一體說の信不信にあるのでは無い。聖書の高等批評を採用すると否とにも存しない。代償的贖罪說や奇跡を信ずると否とにも存しないのである。以上の諸問題に於ては大體上所謂正統派敎會に於ても進歩的な人々は凡てユニテリアン主義に成つて仕舞つて居ると謂つて決して過言で無いと思ふ。若しユニテリアン主義なる者が單に上述の如き一定の敎義を信奉する事に盡くる者であるとすれば最早ユニテリアンズムは其使命を遂げ盡した者と謂はなければならぬ。隨つて最早存在の意義を有せざる者と謂はなければならぬ。私は縞かに我國目下のユニテリアン運動不振の一因は斯種の無意義無特色の存在を繼續しつゝある點に存するのでは無からうかと思ふ。『ユニテリアンの敎會に行つても一向新思想に接する事を得ぬ。ユニテリアン敎會の說敎と組合敎會中殊に進歩主義の敎會の說敎と果して何程根本的に相違する點があらうか。』とは私の多くの友人の一致する感想である。之に對して最も有力と思はるゝユニテリアン側の說明は斯うである。『成程基督敎の解釋だけに就て曰へばユニテリアンと進歩的正統主義者との間には根本的

神學や教義の如何は第二義的事項たるに過ぎぬ。神學や教義が如何に最新なる者であつても若し其の神學及び教義を絶對的眞理となし、依て以て教權的に人心を支配する様な態度に出づれば其は最早眞正なるユニテリアンでは無いのである。之に反して神學及び教義は多少舊式な者であつても若しそが自由主義及び進歩的態度の所産なりとすれば私は之を稱して同じくユニテリアン若くは自由基督教と稱するのである。此點に關してはユニテリアンの人々自身さへ誤解を持つて居る程であるから、ユニテリアン以外の人々が正當なる理會を有しないのは蓋し當然の事であらう。併しながら誤解は訂正されなければならぬ。從つて私は所謂トリニテリアンの人々に對してもユニテリアンの人々に對しても同様に先づユニテリアンズムなる者に對する從來の謬見を打破せん事を希望する者である。

神學若くは思想として見たるユニテリアンズムてさへ最早所謂正統派教會の内部に普及されて居る事は既に述べた通である。然るにユニテリアンズムの本領は信條や教義に存せずして唯自由主義と進歩的態度とに存し、ユニテリアンズムとは取りも直さず純粹なる基督教其者の謂である事を私は發見した。隨つて宗派としてのユニテリアン運動の無用無意義は愈明白を加へる。是れ私が前に今後のユニテリアンズムは超宗派的運動たる事に於て一大新使命を自覺する事を得と述べた所以である。

ユニテリアンズムの新使命と統一

基督教弘道會

然らば超宗派的運動とは果して何を意味するか。私の考ふる所によれば今後のユニテリアン運動は基督教各派の識者及先覺者を網羅せる團體の運動たるべきだと思ふ。卽ち宗派及び信條に關係なく、基督教會其者の開拓者啓發者を以て任ずる一般自由基督教徒若くは進歩的基督教徒の運動であらねばならぬと思ふ。上來度々論じた如く今日の所謂正統派基督教會内に自由主義若くは進歩思想の浸潤して居る事は意想以上であるけれども、未だ決して全然自由主義若くは進歩思想になつて

込が立てば現在の統一自由教會を合同せしめてユニテリアン主義の教會的努力を一所に集中した方が善いと思ふ。併しながら私は今後ユニテリアン主義の教會を地方の都市及び村落に建設するといふ事は餘り必要も無い事だし且到底成功しない事だらうと思ふ。

ユニテリアニズムの新使命

假に前述の如く、日本に於けるユニテリアン運動は最早存在の意味を失つた者としても、そは決してユニテリアン運動の滅亡を意味せずして、寧ろ勝利を意味する者である。併しながら私は實にユニテリアン運動の使命は未だ決して遂げ盡されて居らぬと思ふ。成程獨立な一教派としての存在殊に發展の無用は前述の通であるけれども、私は今後のユニテリアニズムは超宗派的運動たることに於いて一大新使命を自覺することを得ると思ふ。但し此は今日の如く不振の狀態に在るユニテリアン運動を救はんが爲めの窮策で無い事は無論である。私はユニテリアンズムの本領を研究した結論として斯く述べるのである。ソコでユニテリアニズムとは何ぞやといふ問題を改めて茲に提出する必要が起つて來る。詳論は之を他日に讓り直ちに結論を曰へば、ユニテリアニズムは決して一定の神學若くは信條を指す者で無く、純粹なる基督教 Pure Christianity 其者を意味するのである、純粹なる基督教とは基督の基督教の謂である。神學や儀式や制度より解放されたる純粹福音の謂である。更に換言すれば純粹なる精神的生活其者の謂である。隨つて三位一體論に對して唯一神說を主張するとか、基督の贖罪と奇跡とを否定するとか、聖書のインスピレーションを信奉しないとかいふが如きは末節枝葉の議論であつて、實はユニテリアニズムの本領でも何でも無い。現にユニテリアニズムの代表的學者とも謂ふべきジエームス・エフ・クラークやフレデリック・エッチ・ヘッヂの如きは紀元第四世紀に於けるニケア會議に於てアリウスの非三位一體說が勝利を占めなかつた事を以て基督教の進歩の爲に幸福であつたと見て居る位である。ユニテリアニズムに於て尙ぶ所は態度の進歩的で自由主義なる點にある。隨つて

Liberals と稱される様になつた例もある。私達は區々たる宗派の繁榮策に腐心すべきで無く、偏に神意の實現に努力すべきであるから名稱などはどうなつても善い位に思ふ。併しながら日本に於ける自由基督教の發展に對して最も大なる貢献を成した者は所謂ユニテリアン派の人々であるから當分の間ユニテリアン若くは統一基督教の名稱を保留するも善からうと思ふ。

進んで件の自由基督教協會若くは統一基督教弘道會の經營すべき實際の事業に論及すべきであるけれども其點は他日改めて執筆する事とする。

祖先崇拜と神社佛閣の廣告的利用

帆足理一郎

一 表面的日本

文展の繪畫彫刻など一瞥すると、殆んど皆其表現が或る典型に囚はれて、表面的或平面的なもの計り、少しも内面的な立體的な表線が見當らぬ。緻巧の纖細、色彩の艶麗は有之も豪宏雄渾又深邃幽玄の趣きあるもの全くなしと云つてよからう。時代の藝術は所詮時代の國民性しか表現することは出來ない。日本國民が表面的で平面的で、どうして藝術家に奥行のある内面的な作品を要求することが出來やう。然り、日本人は表面的である少くとも現代の風潮は一層表面的になりつゝある様である。彼等は東洋の文明を神秘的だの靈的だのと威張り、西洋文明を物質文明だの、現金主義だの拜金的などゝ嘲笑し來つた。併し、事實は全く反對で、世界の文明國中日本人ほど現金主義で物質的で表面的な國民はないであらう。

日用の交際振りに於て、進物の遣り取りとか、知人の送迎とか、婚禮其他の祝ひ事などに虚飾虚

仕舞つて居るといふ事は出來ないだらう。自由主義の主張若くは進歩思想の宣傳は未だ未だ今日の一般基督教界に取りては必要事項である。換言すれば所謂正統派諸教會を離れて獨立に存在する教派としてのユニテリアン運動で無く、正統派諸教會に内在し且超越する協會としてのユニテリアン運動は極めて必要且有意義な者であらうと思ふ。而して我が日本統一基督教弘道會は却ち如上のユニテリアン運動の機關を以て任ずる者である。

斯く曰へば直ちに一の疑問が起ると思ふ。成程超宗派的自由基督教協會の存在は必要且有意義の事であらうけれども其協會は何もユニテリアン運動若は統一基督教弘道會たる事を要しないでは無いか。成程ユニテリアンズムの本領は超宗派的であるかも知れぬけれども事實上ユニテリアンてふ名稱には幾多の宗派的連想が附隨して居るのである。又統一基督教てふ日本語は必ずしもユニテリアンの和譯で無いにしてもユニテリアンに對して極めて密接なる關係を有する事は事實である。隨つて宗派的連想を有する名稱(ユニテリアン)若くは團體(統一基督教弘道會)を以て全然宗派を超越せる事業を經營する事は甚だ不得策では無からうか。以前からユニテリアン若くは弘道會に關係ある人はそれで善いかも知れぬけれども、從來正統派教會に屬して居る自由主義基督教者は會の趣旨には賛成しながらもユニテリアン若くは統一基督教弘道會の名稱を襲用する事に反對する人が少く無からうと思ふ。之に對して私は、成程尤もな議論であるから場合に依つてはユニテリアンとか統一基督教とかいふ名稱は全然之を撤廢しても一向差支無いと思ふ。現に元と米國に於けるユニテリアンの有志に依つて發起されたる萬國宗教大會の如きも、千九百十年伯林に於て開會された大會までは『ユニテリアン及び其他の自由宗教家の萬國大會』International Council of Unitarian and other Liberal Religious Thinkers and Workers と命名されて居たけれども、右大會以來全然ユニテリアンてふ文字を撤廢して仕舞つて『自由基督教徒及び其他の宗教的自由主義者の萬國大會』International Confrets of Free Christians and Other Religious

じてゐるから、墓場などどんなにして置いてもよささうなものであるが、彼等が死者の靈を尊重することは直に彼等の亡骸を尊重する心となり、其墓場を大事にしてゐることは遠く日本人の及ぶ所ではない。西洋の墓場は宛然たる公園で、花咲き鳥歌ふ清淨な場所である。墓場は死者の靈を慕い德を回想する場所である。墓場にはベンチなど備付ありて、家人相率ひ、辨當など持つて來て、半日を死者の墓邊に送り、古き思出でなど語り合ふことは決して珍しくはない。吾等は西洋の墓場に入りて決して鬼氣に襲はるゝ樣なことはない。公園に入るのと殆んど大差なしである。日本の神道ではクリスト敎と同樣死者の上天或は神靈化を信じながら、矢張り墓場に對する親しみを感ぜしめ得ない。

又西洋人は死は死として飾りなく之を表現せんが爲めに葬式などに死の色なる黑色を用ゆるが、日本人は反對に葬式に白衣を着る、是れ何の意味であるか分らぬ。愛する者の葬式に臨む當面の悲しみを掩ひ隱さんとて、光明と純潔とに晴れやかな色彩なる白色を用ゆるのだとすれば理由ないてもあるまいが、墓場を暗黑の巷に化せしめてゐる日本人の心理狀態として、其葬式の當時のみ光明ある靈的のものたらしめんとするは謂はれないことである。寧ろ西洋人の如く率直に悲哀を悲哀として、暗黑の涙を暗黑の色を以て表現する事が正直な眞情の發露ではない乎。又一旦墓場に送りたる以上は、其處に一層淸き靈的の省察を試み、死者の靈が久遠に墓場の土と化するのではなく、墓場は只故人を追想する機會を與ふる場所として、此處を陰鬱の林間に埋沒せず、可成晴れやかな心地よき場所たらしめ、故人の光明の方面、善良の方面のみを追想する樣にすることが、吾等の內的要求を率直に表現したものとして、寧ろ適當な處置だと思ふ。約言するに、日本人が葬式に白衣を纏ふは僞善である。而して墓場を淋しからしむるは消極的に死者を吾等の追慕より遠ざからしめ、却て其德を歎美する機會を失はしむるものであつて、決して祖先崇拜の道に叶ふたものではないと云はねばならぬ。

禮多く、遠くまで見送りに往けば自分の大事な業務に差支へるので厭なのにも拘らず、義理づくに見送りに往つたり、ない袖を振りちぎつてまで盆節季の進物を送つたりする様なことは勿論偽善であるけれど、茲には其方面の考察を略し、日本人が最も眞面目なるべき、又眞劍に其心事を飾りなく吐露し表現すべき宗教の事に就て、如何に物質的現金的表面的なるかを見て誰れか憤慨せないものがあらう。

二　祖先崇拜の墮落

日本人は祖先を崇敬すると云ふ。成る程、祖先を大事にすることは甚だよいことである。乍併、祖先崇拜をせないとて常に日本人が非難してゐる西洋人と何れが眞に祖先を大事にしてゐるかは、彼我其墓地を比較對照して見れば直に分る。日本の神道は民族的宗教であり、皇室は國民の宗家として祖先崇拜の中心となつてゐる。佛教も此民族的宗教に一歩を讓つて夫れ自身民族化して了つた。處で、佛教の如き世界的宗教も日本では『王は十善、神は九善』の諺に洩れず、時に聖武天皇の如く自から『三寶の奴』と稱して佛門に頭を下げた王者がなかつたではないが、大體に於て外來の宗教は如何にそが世界的になるに拘らず、王門により代表されたる神道に隷屬せざるを得なかつたほど、祖先崇拜が強烈なる宗教的意識となつて現はれてゐたのである。されば我が日本に於ては祖先崇拜が純朴な渇仰の誠となつて表現されて居るべき筈なのに、事實は全く反對である。日本の墓場は恰も塵溜の様に汚たなく、場所も多くば寂寞邊陲、訪ふ者をして鬼氣に襲はるゝを感ぜざらしむる能はぬ。日本人にして『墓場』と云ふことゝ『汚れ』と云ふことを聯想しないものは一人もあるまい。墓場に入ることは厭やな淋しいこと、何か自分に墓場の汚れがくつつきはすまいかと思はしむる。墓場を如斯氣味惡るき場所、居心地惡るき場所たらしめしものは、畢竟日本人が眞に祖先を大事にする道を知らぬからである。彼等の宗教心が表面的で、祖先の人々に對して靈的の親しみと渇仰を缺いてゐるからである。

クリスト教國では死者は靈の國に行くのだと信

がある。夫れは花屋から直接に送らすのであるから、『何の誰れから注文を受けて送り届けたのである』と云ふ意味を表はす爲めに花屋が名前を書き示してゐるに過ぎない。

私は祖先崇拜の日本人が却て崇敬の意味を沒却して葬送を自己廣告に利用してゐる心事の陋劣を惡まざるを得ない。之を惡むと同時に、日本の宗教が如何に墮落してゐるかを悲まざる能はぬ。或人が私に『日本に留學せよ』と警戒して呉れた。私は喜んで日本に留學してゐるが、日本の文明を深く觀察すればする程、其低級なることに驚かされる。西洋の文明はクリスト教の感化の下に發展し來つた。彼の古代文明の研究で有名なクランヂの如きは、祖先崇拜は他の凡ての宗教を屈服せしめた。佛教も印度、支那、日本に於て、結局祖先崇拜に併呑されて了つた。併し祖先崇拜を亡ぼして宇宙的大靈の精神的な崇拜を世に宣傳したものは獨りクリスト教であると云つた。併しクリスト教は祖先崇拜を滅したのではない、併呑したのである。少くとも、其福音の本論に於て、神と人との關係を父子的相愛の情を以て表現せる如く、祖先崇拜の精神は決してクリスト教によつて除外されたのではなく、寧ろ大成されたのである。『預言や律法』を毀たんが爲めでなく、『之を成就せんが爲めなり』とイエスの云ひ給ひし如く、クリスト教は祖先崇拜の精神を今一層深い意味に於て抱容し盡した。さればこそ、祖先崇拜を棄てしと云ふ西洋人に却て崇敬の眞が現はれてゐる。

彼等は故人を敢て祖先として崇敬しないであらう。否な、祖先なるが故にとて特別に崇敬しないかも知れぬ。乍併、彼等はクリスト教の根本義によつて、凡ての人を一樣に神の子として、卽ち己が兄弟として敬愛する。處で、西洋人は葬式の行列が通ると、他人の葬式で全く自分と無關係の人であつても、帽子を脫ぎ路傍に立ち止まつて、靈柩の往き過ぐるまで靜肅に敬意を表してゐる。日本人が祖先崇拜者だと自から標榜せるにも拘らず、見ず知らずの他人の葬式に對しては全く不作法なるには今更驚かざるを得ない。例へば日本人は葬式の行列の中を切斷して通行することを敢て

三　葬式の虚禮と廣告的行列

以上の事柄にも增して一層日本人の表面的な僞善を表白せるものは、葬式の虚禮虚飾に富んでゐることである。私は昨日須田町を電車で通過する時、豪家の葬式に出逢つた。數百の花、而も多くは造り花を各一人宛の人夫に持たせ行列を造つて通る、其次に數十の放鳥の籠が來る。又其他色々な葬式の贈物を親族や友人から貰つたのが麗々しく掲げられて持ち運ばるゝ。故人の靈を送る爲めに造花を使用するは如何にもアーチフヒシャルで、殊に其放鳥なる鳩は何の意味であるか、きつぱり分らぬ。肉に囚はれてゐた靈の解放を象徴する爲めに、籠に捕はれてゐる鳩を放つことは如何にも意味ありげであるが、其實、是等の鳩は皆葬儀社に飛び還つて了ふのじやさうであるから、彼等は決して解放されたのではない、只葬式の行列に加はつたに過ぎない。

斯様な無意識的に動物の會葬を强ゆることが如何に虚飾虚禮であるかは、先づ甚だ咎むべきことでもないとして、見てゐた私をして最も不愉快に感ぜしめたのは其放鳥の籠や、花輪、造花の連などに附着したる送與者の名札の餘りに大なることであつた。東洋文明は精神的だと云ひ、日本人は自分の德を謙遜して寧ろ之を隱蔽せんと勤むるなど云ふことを幼少時から聞かされてゐた私には實に異樣な感じに打たれざるを得なかつた。私は思ふた、此葬式は盛んであるが、夫れは花多きが爲めでなく、放鳥多きが爲ではない。夫れは只名札の行列なるが故であると。其證據には電車中の人々が皆其名札のみを讀んで、あれは誰れだ、彼れだ、と評してゐる。察する所、送つた人も其名札を讀まれんが爲めに送つたので、眞に故人に對する禮儀として送つたのではあるまい。甚しきに至つては『何の某』と名前を書いた下邊に『人夫付』と云ふ文句あるを見た。是れは丸るで商品の廣告である。廣告の行列である。

西洋の人も葬送の爲め花輪を送る、夫れは故人の墓を飾らんが爲めである。されば送與者の名前を麗々しく書き示めす樣はことは決してない、只巾半吋、長さ三四吋位の紙片に名が付けあるこ

から俗物となつてゐるのである。序でに云つて置くが、此圓覺寺が建長寺かに日本一の聖僧があるとかにて、或る日客あり、禪の弟子たらんことを求めたと。日ならずして今道心は聖僧が何時も煙草を吹かしてゐるのを見て、『師よ、煙草は衞生上害ありと聞くが、果して如何』と尋ねた處、聖僧曰く『然り』と。『然らばなぜ師は煙草を薫らし給ふか』と詰問せし處、聖僧曰く『いや、是ればかりは止められぬ』と。今道心は『意志の鍛練を誇り、悟道の眞に達せしとぞ聞く聖僧にして尙此言あり、何ぞ僞善の甚しきや』と一喝して山を下れりと云ふことである。

佛門や神道が世俗の虛榮や廣告に利用されてゐる計りでなく、之を喜んで歡迎してゐる宗教家によりて充たされてゐるのは既に日本の傳統的宗教の死滅せることを語るものである。而してそは同時に、從來の宗教が生氣を失つて、是れに代るべき新宗教の到來を期待してゐるのである。

新らしい宗教然り、新らしい宗教とは何なるべき、そは必ずしもクリスト教たるを要しない。そは佛教と稱してゐても、神道と名乘つてゐても差支へない。但しそは下述の如き條件を具有するものでなくてはならぬ。卽ち、そは人間社會の關係を通じて、人間全體と宇宙全體との關係を正整せんと努力するものでなくてはならぬ。そは我が兄弟、我が祖先、我が國民、我が民族などの如き、或る限られたる人間の社會關係を通り越して、まともに人間生活の根底なる宇宙全體の精神生活と呼吸相通じ、脈絡相通ずるものであらねばならぬ。そは宇宙の大靈を信じ、それに近づくこと慈父の如く親友の如く人格的で、此大靈と生活の理想を同うし、目的を同うし、趣味や憧憬を同うし、相愛し相慕ふ戀人同士の如き同情同感の間柄にあるものでなくてはならぬ。新郎は新婦の愛の喜びに充たされて、身邊にある凡ての人々に吾が喜びの情を表現し、我が新婦に對する愛を以て隣人を愛す。彼れが新妻を得たるの悅び斯の如くにして、彼れは眞に愛者たるを得る如く、宇宙の大靈に愛の誠を致す信仰の勇士は、同時に我が肉の兄弟や我が友達や、我が國民や、我が民族を超えて、一

意とせない。西洋人は謹愼に其行列の通過し去るまで待つてゐる。

是を以て之を觀るに、人は祖先崇拜などと人間を崇拜し、或は自分の祖先たる人間のみの崇拜を事として、遂には人間すらも眞に崇拜せない様になる。只廣告に利用するか、否らざれば、我れ關せずと知らぬ振りするに至る。之に反して、超人間的宇宙の大靈に父の如く親しみ近づくものは、近か廻りにある人間即ち吾等の『隣人』を一層靈化して靈的に取扱ひ神を敬する如く、彼等の靈をも尊重するに至る。

四　神社佛閣の墮落

日本人が葬式を廣告に利用する祖先崇拜が墮落して無意義となり、今や宗教として何等の價値なきを證明せるものであるが、日本人は神社佛閣の崇敬に於ても等しく物質的、表面的、外形的であつて、佛教も神道も一般人民の宗教として最早其精神的價値を失つたものと云はなければならぬ。夫れは東京市内の神社佛閣が如何に自己廣告に利用されてゐるかを見れば分る。例へば一寺の入口に街燈がある。其街燈に『信濃屋』とか或は『若葉亭』などゝあるから、商店か料理屋の軒燈かと思つてゐると、夫れは間違で、内には某寺の本堂がきらめいてゐるのである。軒燈に示めされし名は即ち寄附者の名であつて、寺の名ではない。寄附者は寺を利用して自分の屋號を廣告してゐるに過ぎない。亦斯る廣告的寄附を受け取る寺の住職は同様物質的で、現金主義で、宗教の何たるかを解してゐないことは勿論である。鎌倉や江の島に往くと尚一層此廣告術が盛に行はれ、建長寺の奥の院にある半僧坊など云ふ、嚴かめしき天狗様に禪の妙機と幽玄の思ひあらしめむべき聖境は全く俗界の俗物に俗化されて、天狗も石佛も、燈籠も手水鉢も、石段も玉垣も皆寄進者の名目の大文字によりて滿たされ、殊に甚しきは魚河岸や料理屋や、所謂『連中』の名前によりて麗々しく飾られてゐる。人或は云はん、夫れは寄附者が俗物なるが故に神聖なるべき寺院の殿堂を廣告に利用したのだと。乍併、斯る俗物の跋扈を寧ろ歡迎してゐる寺院自身が既に業に其宗教的精神的職分を失却して、自

る。西洋の輸入本を机上に置いて、自分勝手な理窟を捏ねて、書齋から今日の社會を覗いたならば、何もかも一時の現象に外ならぬ。紛雜、混沌たる今日の社會現象も、流れに浮ぶ泡沫で、その底には世界文明は滔々乎として流れ進んでゐる。何事も進歩發展の道程だ。安心して可なりといふものもあらう。

又は世道交も喪び、澆風淳源散す、仁義日々に頽れ、人心滔々として利慾妄執に趁り、一世を擧げて澆漓に墮せんとすと、長大息久しうする慷慨家もあらう。又は人事凡て明朝を議すべからず。人間のことは結局なる様にしかならぬ。理想も希望も餘計なことだ。何事も之れ浮世ぢやと諦め玉へ、世の中は貧ぢや有德ぢや苦ぢや樂ぢや、何んぢやかぢやとて末は無茶苦茶、と野狐禪的に五濁惡時の群生海に見きりをつけて、萬法一如と悟り切るものもあらう。迷朦混沌たる社會の波に漂ふて、迷ふも悟るもその人の勝手であるが、併し、今日の社會現象を基として考ふるならば、迚も現代の學者や宗教家の迂論、迷說に耳を傾くることが出來ぬ。所謂碩學とか宗教家とか云ふ連中は、この不安動搖の恐慌時代によくも平氣で漠然たる理想論や、人道論を唱へ、或は机上遊戲の倫理說や古色蒼然たる宗教論を縷述するものだと駭かざるを得ない次第だ。

安價なる樂觀說や理想論で、この動搖不安の時代を忘れさせうと、一時を糊塗せんとしても、內實は自身も亦悟り切れず、迷ひの闇に彷徨つてゐるのだ。この世界に誰れが安心した様な顏をしてゐる者があるか。平安晏如たる顏をしてゐるものがあるとすれば、それは自己の迷心を蔽つてゐる知識的僞善者か、又は佛樣、神樣を笠に被て御座る宗教家であらう。

二　浮足及腰の學者宗教家

一言以て之を蔽へば、現代は明かに不安動搖の時代である。ところがこの不安の原因は分らない。ある人は戰爭の爲めだと云ふ。戰爭が熄むと、世界人心は固定して、不安の影は忽ち斂まるであらうと云ふ者もある。又は、今度の大戰爭は人間生活の組織を根こそぎに覆へした。一切の傳統、組

視同仁、全世界の人、全人類、全萬象、全衆生を愛する人たらざるを得ないのである。斯る愛を教ゆる宗教は恐らく、何等の殿堂を持たないであらう、何等の儀式を重ぜないであらう。そは自己廣告に利用さるべき何等物質的な表現を持たないであらう。斯る宗教は各自の靈の奥底に燈臺を燈し、玉垣を結へ、神に對し、人に對し、最も清き最も美はしき愛の誠を以て奉仕せんことのみを日夜祈願し、且つ努力するものである。

願くば吾等日本人をして一切の腐敗した、精神なく生命なき宗教を棄てしめよ。而して更生の氣分豐かに、新らしき靈の宗教に奉ぜしめよ。人間としての人格的意識を强め、人格的態度を以て萬物に接し、萬物の榮へを致し、之によりて一層己が人格的意識を高め、神に對し人に對し、一層清く美はしく愛の奉仕にいそしむものたらしめよ。(十月十八日)

日本人の慢性的御都合主義

工藤直太郎

一 動搖不安の時代

何んだか知らぬが、一向落ちつかぬ。爲政者も國民も皆及び腰になつてソワ〳〵してゐる。人心は堪えず左右に動搖してゐる。何んとなく物足らぬ。この儘ではどうしても濟まされぬ氣がする。ところがこの不滿、不安の原因は明瞭りと解からない。右にせんか左にせんか、此處暫くはどうしたらいゝかと無明の闇に迷つてゐる體である。その趨歸するところ何人にも見當がつかぬ。惻々として路岐に泣き、哀々として素絲を悲しむと李白が誦んだが、目下の人心は丁度これだ。この不安、不滿は今や世界一般に低迷しつゝある暗雲であ

金持の亭主の力も大いに與つて力があるが、多くは細君の贅澤がよく巍然たる聖堂を中空に聳えしめてゐるのである。今日の教會の說く天國は金持本位の天國で、貧民本位の天國ではない。紛々たる宗教上の爭ひが英國にあるが、これは寧ろ信仰上の爭ひではなくして、その實教會の政治上、經濟上の爭である。本當を云へば、國教も羅馬教も高教會も低教會も、ウエスレー派も、メソヂスト派も枯涸びた教義を基として爭つてゐるものは、十九世紀以前の者なら知らぬこと、二十世紀の打算文明の今日、そんな野暮な人間は一人もなくなつた。本當を申せば、彼等は教義などはどうでもよいのである。たゞ教會の經濟力を擴張せんが爲めに檀家の爭奪を互にやつてゐるのである。要するに金の問題で、互に嫉視反目してゐるのである。片田舍の小寺の牧師よりも教區（パリッシ）の牧師の方が有難いと云ふのは、人情であらうが、それは片田舍の坊主よりは教區の坊主が收入があると思つてゐるからだ。更らに都會の僧正よりも、年俸、十五萬圓もとる大僧正の方が有難く思つてゐる。信仰の上から見ると、片田舍の托鉢僧でも、カンタベリーの大僧正でも甲乙の差別があらう筈はないが、年に百圓丈餘計に取る坊主が、百圓丈少くとる坊主よりも百圓丈信仰が深く、百圓丈悟りも增してゐる樣に門葉衆が思つてゐるのである。破れ法衣をつけた坊主では、天國に導いて貰ふにも幾分心もとない。動もすると天國と地獄を取り違ひ相に思はれてならんのである。然るに眞紅の法衣嚴めしい僧正に引導をお頼みすると、天國の入國は何んだか間違がない樣な氣がしてならぬ。そこで坊主でも金を多くとれるものが有難く、教會でも金の餘計にあるものが、天國氣分に富んでゐると信じてゐるのだ。と云つてゐるが、英國にもよく〳〵悟り損ねた坊主があると見える。

教會や牧師は平時の時には神明に世界同胞や博愛主義も說くが、ひと度び他國と事を構へる段になると、ゴタ〳〵してゐた國内の宗派の爭ひは一時に忘れた樣に立ち消えて、呉越同舟、以つて敵國に向ふのである。敵國の宗教は異端だ。外道だ。敵國の用ゐてゐる聖書は我等の使つてゐる聖書と

織、制度を全然破壊し去つたが爲めに、人心はその適歸するところを失つたのである。隣のロシアは滅び、羅馬尼、塞爾比亞、白耳義が丸潰れになつて、世界人心に及ぼしたる深刻なる影響は、到底、神聖羅馬帝國の崩壊や、ナポレオン戰爭の比ではない。又個々人から出來た社會組織を思ひ切つて改造して人間生活に新らしき標準と價値を作つたフランス革命の比ではない。それ故に惡鬼羅刹の焦土に歐洲文明が新に建設さるゝまでは、世界民心の不安動搖は歇むものではないと說く者もある。或はさうかも知れん。然し僕は何事も分らぬ。

何處に安祥としてゐる國民があるか。この世智辛い時代に、太平樂を並べてゐるのは、日本名物の成金輩か、然らずんば、この世を茶にする悟り屋以外に居らぬだらう。野蠻人か、然らざれば亡國の民の外には何處を尋ねても、安閑としてゐる民族はあるまい。復た何處に安心立命を得た人間が居るか。恐らくは隱遁脫世の腐儒か、然らざれば義務的義捐金で活きてゐる宗教家などの外には、一人として安心立命を得たものはあるまい。勿論職業柄とて安心立命の境に達したやうな顏をして說法もなし、議論もし、衆生濟度に努めてゐるのは、曾に東方君主國の宗教家諸君のみならず、英米諸國に於ても掃溜に棄て切れぬ程ある。併し乍ら彼等の生活を繼ぐ物質的方面を奪ひ去つたならば、彼等は一日數十錢の給料で勞働する貧しき婦人程の覺悟をも持ち得まい。成程糊口の道が安樂に開かれてゐる間は、天國は近きに在りとか、理想に生きよとか、世は善に向ひつゝありとか尤も千萬なことを申すが、一度び經濟上の荒波が彼等の頭上を襲ふならば、岐阜提燈の樣な彼等の人生觀はみる〳〵中に破壞されて了ふであらう。極樂は近けりと感謝した彼等は、生活の逼迫に依つて、この世からなる三途の川は近けりと嗟嘆して、逆に助けて下され、お救ひ下され、せめて哀れをかけて下されと取り縋るところは、神佛ならぬ最も悟り切れぬ穢身汚土の凡夫人であらう。

ローントリーと云ふ英吉利の牧師は、今日の教會は、金持に基礎を置いてゐる教會で、金持の細君や、娘子供のお情けで建てられてゐるのである

塵刹をてらしたまふ。一切の群生は光照をかふむると云ふところであるのに、よく〳〵悟りそこねた坊主共は常に妄執我慾の爲めに一部の政治家、野心家の手先きに使はれて、一心堅實の門葉衆を五劫の無明に彷徨はしめ、塗炭羅刹の苦しみを與へたのである。正覺の足らぬ坊主共こそ、洵に迷惑千萬な厄介者ぢや。

不安不滿があるならば、我門に來れと宗教家は云ふ。併れ共、金權と政權を離れたる宗教家は河童の水を離れたるが如きものではないか。彼等の說法は古色蒼然二千年來の枯淵びた悟りである。

要するに今日の宗教も人種と國境以外には出でない。世界同胞主義も博愛主義も平和の時のみである。一度び戰爭が始まれば、神樣の眞理を攝取してゐるのは、我國のみと、政治家、軍人の御手先になつて、正義の爲めの戰爭を是認する。成金思想が盛んになれば、經濟的天國を說く。科學思想が國民を風靡すれば、科學的宗教を叫ぶ。民本思想が流行すれば、民本主義の宗教を唱へる。常に國民の一時の好尙、流行に左右されて、足元はいつもグラ〳〵してゐるのである。學者だと威張つてゐる連中も斯の通りで、時と場合に依つては、御用思想も說けば、民本思想も說く。西洋から新思想が輸入されると、忽ちそれに附和雷同して、騷ぎ立てる。自分の思想を常に時勢風潮に追從せしめようと腐心するのである。洵に御都合主義の考へである。それ故一連不動の確乎たる信念や思想はない。御註文に依つては、いつも仕立て直しが利く思想を仕入れてゐるのだ。まことに便利な頭腦である。

四　憂慮不徹底病

日本人は感情的な國民である。ロマンチックな國民であると云ふものがある。或はさうかも知れん。然しよく考へて見ると、日本人の感情には何等持久性と徹底性が伴はぬ。一時は熱狂するが、線香花火の樣に直ぐパッと消えて仕舞ふ。甚だあつけない。諦めがよい。悟りが早い。何事にも一時の感情的靈感に使はれて、手を出すが、長つゞきはしない。最後まで、やり出すと云ふ強靱なる氣慨は、日本人の感情に伴はぬやうだ。鳥渡した

は内容が違ふ。その國民は野蠻だ。非人道だと痛罵して、世界同胞主義を弊履の如く棄て去つて、忽ち擧國一致の態度と早やがわりするのだ。それ故政治家はまた宗教家の弱點につけ込んで、巧みに彼等を操縱、使嗾して、愛國熱を喚起させ、義勇兵や軍事公債を募集するのにその手先に使ふ。

三　野心家の宗教利用

古來史上に照らすに、國家の紛亂又は國際間の戰爭にいつも政治上に宗教家を手先に使つて、之を利用した。十字軍の戰爭や百年戰爭は申すまでもないことであるが。カロロ帝のスパイエルの宗教會議や、シウマルカルデン同盟も全く宗教が政治の紛爭の中に引き入れられたのであつた。更らに英國のイリサベス時代の政爭も、佛蘭西のユグノーの爭亂もバルトロメオの虐殺も、三十年戰役も、チャーレス一世時代の革命も、メッテルニヒの神聖同盟も皆凡て一代の政治家又は野心家の手先となつて、宗教は爭亂の渦中に巻き込まれたのである。近代になつても愛蘭土自治問頭に、ウイリアム●ピットが、愛蘭土の舊教を政治上の紛爭に巻き込み、愛蘭土問題で見事に失敗に終り、悶々の思ひを抱いて、天壽を完ふすることが出來なかつた。更らにグラッドストーンでもパーネルでも、バンナマンでも、近くはアスキスでも皆愛蘭土問題に手を燒いたのも、全く宗教上の紛爭が政治上の紛爭とゴッチャに錯雜つて政教既に慢性的の腐れ緣が結ばれてゐるからだ。ロイド●ジョーヂは流石に偉いところがあつて、政教分離を先決問題として、愛蘭土問題の解決を計らんとしたが、浸潤久しき惡因緣に妨げられて、到底彼の思ふ壺には嵌らなかつた。愛蘭土問題は今以つてドタクサ紛れになつて、英帝國永遠の禍根となつてゐる。宗教は爭ひの上にありと云ふのは宗教その物の本質上眞理であらう。然し乍ら、古往今來悟り切れぬ塵世の野心家、俗物どもは宗教を常に俗界の爭ひの下に置いた。宗教家も亦つねに君主や政治家や軍人等の手先きに利用されて、進んで爭ひの下に罷り參じて、その野心利慾の傀儡となつて、同黨伐異の爭亂を繁からしめたのである。

本來宗教の有難いところは、超日月光を放つて

溜めることも巧かつたが、功利哲學も餘程徹底してゐたと云ふ。そのベーコンは眞理は混雜なる論理より出で來るよりも、より速かに論理の徹底せる誤謬より出で來るものだと云つた。

此世に於て正しくあることに次いで、最善のことは、明快にかつ的確に間違ふと云ふ事である。と同じ本家のハックスレーと云ふ科學者も云つてゐるが、正誤の中間を何方にも附かず、ふら〳〵と彷徨つて居たのでは何時まで經つても、何所にも歸着するところがない。之に反して間違つてもいゝからその間違は明確で、條理が立つて、始終一貫してゐるならば、これを推究する時には、いつかは、事實に突きあたる。誤解を徹底せしめたその刹那には忽焉として、一道の眞理を發見するに至るのである。徹底せる迷は則ち悟てある。

然るに我が宗教家は仲々賢明で、迷はざるに先立つて既に悟るのである。それ故その悟りも實に輕薄、不眞面目の至りだ。確固たる信念が伴はぬ。少しでも自分の利益になる樣なものを見出すと、忽ち悟道を一擲して、俗界に飛び出して、儲け仕事をやると云ふ甚だ御都合主義の悟である。

如何なる方面に如何に迷ふとも我々は一理に徹底する限り、決して損をする心配はない。あれもよし、これもよし、と、不徹底極まる妥協、調和主義を振り廻はすのは、自ら眞理を拂拭するので、何時まで經つても、人を感服せしむる信念を得ることが出來ぬ。河上博士も云つてゐるが如く、箱の中に入れられた鼠も、左を噛り、右を噛り、手あたり次第に噛り散らした丈では、一生浮ぶ瀬はあるまいが、どこの隅でも、その一隅を攫かまへて、飽くまで放さぬと云ふ努力を以て噛る時には、ポッカリとその箇處に穴が明く。暗黑の世界忽ち變じて十方遍滿の光明世界となるのである。

五　不透明なる日本文明

佛蘭西のヴォルテールは、進歩は常に極端主義より來ると云つた。徹底的保守主義か又は徹底的自由主義か、いづれかに徹底して人生を解釋するところに進歩がある。（以下十二行省略）マルクスが出でたり、マキアベリが現はれたり、ニイチエが出でたりトルストイが現はれたり、さてはカイ

障害物に逢ふと直ぐ挫折て仕舞ふ。

何か問題が起つて、議論が面倒臭くなると直ぐ妥協調和を試みるのは我國民の犯性だ。ところがこの妥協は英人の様に打算主義、功利主義から來たものでもなく、感情的の一時的妥協であるから、その妥協に信念が伴はぬ。徹底せぬ。いつもグラ〳〵してゐるのだ。それ故又他の感情に支配されれば、その調和も妥協も直ぐ破壞されて仕舞ふのだ。英人は宗教、德育、藝術、政治、經濟、その他あらゆるものに對して妥協主義を採つて來たのであるが、何事にも精力主義の妥協は彼等の意志の妥協である。それ故持久的で徹底してゐる。彼等の文明は徹底的な妥協から生れた。妥協意志と努力を以つて徹底して行くと、その極致に忽焉として新生命が湧き出づるのである。兩者とその性質が全然異りたる新らしき眞理が生るゝのである。英吉利の國敎なるものもローマ敎とルーテル宗との妥協に外ならぬ。その憲法政治も、君主と議會の妥協である。その哲學も經濟說も英人特有の功利主義との妥協に外ならぬ。妥協も徹底すれば新しき眞理を發見して、別個の文明を創造することが出來るのであるが、日本人の妥協力には感情的なる諦め主義が伴つて、意志的徹底力が全く缺如してゐる何事にも中途半端もので滿足してゐるから、何物をも創造することが出來ぬ。總てのものを求めて、遂に皆無（ナッシング）に到達するのは、日本人である。日本文明はいつまで經つても、不徹底、不透明で、和洋雜多なものが、何等の統一脈絡もなく、雜然として轉つてゐるのである。我國民の思想及生活程度が脈絡で無雜で混亂してゐるものがなからう。新古和洋の制度、習慣、思想がゴチャになつて少しも消化されてゐない。日本國民は確かに慢性不消化病に罹つてゐるのだ。喰つた食物が少しも消化分解しされずに、直通直下、食道を貫通するのであるから、毫も身體は營養分を吸集することが出來ない。慢性胃弱と、慢性神經衰弱に罹つた日本人から、徹底的の元氣を求むるのが無理である。

徹底的妥協文明の本家にいつの時代であつたか、ベーコンと云ふ哲學者があつたが、彼は金を

安動搖の暗黑時代は去るものではない。政治家も宗教家も、教育家も少し腰を据えてやつて貰ひたい。善政主義でも、天國主義でも、良妻賢母主義でも、何んでもよいから、徒らに右顧左眄、依違逡巡せず徹底的にその信念に驀進するがよい。而れば今日の不安動搖の世界を拯濟する何物かの眞理光明を發見するに至るであらう。それで犧牲になるならば、何事も君國の爲めと觀念して諦めて貰ひたい。

併し乍ら誰れかこの不安動搖の狀態にある人々を導くであらう。この不安の世界に於て、國家を安固の位置に据え、國民生活に安定を與ふるは何人であらう。朝夕不安の狀態にある人心に誰れか十方無量の光明を與へて呉れるであらう。政治家か、宗教家か、はた哲學者か、僕は知らぬ。

英國教界偶感

會津常治

紛々たる諸宗派——宗派爭ひは信仰の餘瀝か——國教萬能の國——宗派爭ひも畢竟對內問題のみ

一　紛々たる諸宗派

傳道會社の基督家だけを見て基督教の正體を見届けたと早合點して居る人は、基督教國に來つて基教が幾多の宗派に分れて、相爭つて居るのを目撃したら嚇驚かさるゝことだらう。日本では餘り目立たなかつた聖公會も、英國では國教であるだけに實に盛んなものである。上は王家の諸儀式より、下は公立學校の朝夕の祈禱、村々町々の母寺の禮拜は、すべて英國々教の儀式禮拜である。都會では非國教の諸派も相應に會衆を集め得るが、足一度び地方部落に入ると、非國教諸派は實にみじめなもの、目貫の場所に巍然として天に聳ゆる

ゼルやリーヴクネヒトが出てたりする變轉多様なるところに世界文明は無限に進展するのである。世界は永遠に疑の世界である。疑は疑を生み、世界は問題の無限の提供者である。人間の生活も努力も要するにこの疑を解決せんとするものに過ぎない。疑より解決へ、解決より疑に無限に連續するところに進歩も發展もあるのだ。

ところが移り氣多く輕薄な日本人はこの疑に對しても解決を與へたことはない。神經衰弱と慢性胃弱に罹つてゐる日本人は疑を解決せんとする氣力も根氣も盡き果てた。たゞ西洋の思想家が解決して呉れた學說の糟粕を嘗めてゐるのだ。眞に徹底する氣力のない民族に、深酷なる民族文明が起らぬのは當然のことだ。自然主義、浪漫主義、人道主義、本能主義、民本主義と、日本に西洋の思想は隨分輸入された。併し乍ら、これ等の思想を徹底的に解釋して、我國民思想の血となり肉となつて、眞に我國文明の進歩の要素となつたものはあるか。我國民の生活問題も何一つとして解決されたものがない。無執着にして、移り氣多い我國民は、自己の生活問題さへも徹底的に解決することを得ず、中途半破にマゴ〳〵して、亡國民の如き活氣のない顏をしてゐる。我國民のやり方を見ると、問題の投げ出してある。研究の中止である。情實的な妥協調和である。悟りそこねた諦めである。又は問題の投げ出してある。而して自然消滅であり、自己滅却である。一口に言へば慢性的無解決である。日本國民は何等偉大なる疑問も解決も有せない。長く封建制度の壓迫に慣れた我國民は傳統的に依賴主義、他力主義になつて、自己の生活問題を先輩に解決して貰つたり、政府に依賴したり、又は西洋人に解決して貰ふのである。他人の解決して呉れた規範を、一點の疑問も抗議もなくして之を守つて生活すると云ふ國民であるから誠に世話がない。彼等に疑問も解決もないのは當然のことだ。我國今日の社會には東西の思想制度が雜然混亂して、融合するところなく、毫も透明なるところないのは、無氣力、無執着の國民性の反映である。何事にも不徹底にして、御都合主義に拘泥つてゐては、何時まで經つても、目下の不

の隔り以上であるといふも過言ではあるまい。この外近代都會文明の生むだ救世軍クリスチャンサイエンスセオソフイなど着々として成功の域に近づいて來る。殊に可笑しいのは、菜食論者までが、一種の宗教的色彩を帶びて居る結果、愚民の間ではヴェジテリアンとユニテリアンと混同される滑稽もある程である。

二　宗派爭ひは信仰の餘瀝か

隱遁的氣分を僧院組織で滿足させる羅馬正教は、愛蘭一國を席捲して英蘭の一角より押し押し寄せて來たのも、千三四百年前の古物語となつてしまつた。宗教的熱狂と政治的野心とを打つて一丸としたこの傳道團體も、年を經るにつれて愛蘭さては英蘭西岸のともすれば睡氣を催す風土に化せられてか、こゝの僧院、かしこの尼院に行ひすまして、獨り人間の前に身を淸くする禁慾僧尼もまたその後大陸より渡り來る托鉢僧の一團も、皆安易生活を偸む隱居僧と化して敎化の力を失ふたので、改革また改革、反動また反動、幾度か殉敎者の聖血をながしたその揚句、表面上羅馬法王の掣肘を脫し得て英國々敎を樹立したのも束の間、羅馬正敎をば羅典民族の宗敎で、我々の宗敎ではないと、口に說きつゝ信仰は何時の間にか、羅馬正敎の方へ逆戻り。これを慨して立つた非國敎諸派をば、異を樹つる好事家の口舌宗敎と見做して、迫害を加へ、英國々敎獨り諸宗派を網羅し、卓越した完全無礙なものと思ひ込んで居る。之に對し非國敎派は、國敎を目して國恩に忸れて威福を恣にせるものとなし、國民を救ふの道は國敎を解體して、權威の地より引き下ろすにありと叫んで居る。然し腹の中を割つてみれば、對等の待遇を受けるなら、國敎と合同したいものだと折々謎をかけて居る。元來は信仰の自由、良心への忠實から異を樹て派を分つたのだらうが、其派あまりに多く、その爭あまりに猛烈なので、吾人はこれは信仰熱心の餘瀝か、乃至は自分獨りよがり他人の信仰踏みつけの結果か、判定に苦しむのである。

三　國敎萬能の國

一敎區（パリッシ）の國敎寺をばチャーチ（母寺）とか敎區寺と呼び、非國敎の寺々をばチャペル（禮

ものは英國々教の母寺で、老若の聽衆も日曜毎に堂に滿ちて居るが、非國教派は、曰く組合派、曰くバプテスト派、曰くウエスレー派、曰く原始美以（メソヂスト）派、曰く改正美以派、曰く普蓮土派、曰くユニテリアン派、曰く何と、其名は却つて我等には耳馴れたものだが、其建物も其實力も共に貧弱なもの、すべてが合同した處で、諤々の議論徒らに高く、其結束力頗る疑はしいので、到底國教の敵でない處でその國教にも高教會（ハイ・チャーチ）低教會（ロー・チャーチ）の二派あつて、其相違は一見非國教派相互の相違以上、均しく國教に屬する母寺でも、其牧師の信仰的趣味によつて、或は高教會となり、或は低教會となり、そのはぢき出された異分子はまた新たに一寺を建築すること珍しくない。高教會といふのは頑固にして、儀式を重んずること羅馬正教と擇ぶ處なく、低教會は自由なること、非國教派と相距ること遠くない。其羅馬正教の勢力は、愛蘭では勿論の事英蘭でも中々侮り難く、國教信者の内にも、何等かの方法を講じて、其寄附金の幾分を羅馬法王に献上しなくては天國往生が遂げられぬと思ふものが少なくない。この事實は宗教的主權者に憧るゝ心の國境を超越することを語つて居る。英國西海岸コーンウオール州の某村落では、在來の八百屋が國教信者であつた爲めに、非國教派の人々は、この八百屋の顧客となるを屑しとしないで、非國教派の一人を推して八百屋を開かせた。從つて避暑客が新たに此村へ行くと、二軒の八百屋が隔日交互に注文を聞きに來るので、元來宗派心微弱な人でも、自分は國教だつたか、果た非國教だつたか自問自答して、どちらの八百屋の世話になるか、決定しなくてはならぬ珍現象を呈した。こんな宗派の論議立てが日常生活の凡ての方面に行はれたら大變だ。八百屋、肉屋、パン屋、菓子屋、靴屋、洋服屋、洗濯屋、すべて自分と同じ宗派の者の經營したものでなくては、氣が濟まなくなると煩雜さ思ひやらるゝ。

國教と非國教との宗派上の距りは、淨土宗と禪宗との隔り處ではない。國教と普蓮土派、國教とユニテリアン派との隔りの如きは、佛教と儒教と

異端め、無信仰者め、野蠻人めといふ排他的、侮辱的、憫憐的、感情が頭を擡げて來る。基督信者にあらざるものは、良心を缺如する如く思ひなさるゝ。曾てオックスフォードで一既婚婦人が青年を誘惑しておきながら、巡回裁判所へ虚僞の訴をした時、審判官はこの婦人が無神論者であるからこの婦人の陳述は全部信を措くに足らぬとして申立て、全部を無視し青年の申立てだけの材料で判決を下してしまふた。思ふに今日と雖も基督教信者と、未信者なる外國人との間に、爭の起つた場合には、これと同じ心理狀態に陷ることであらう。

この時には宗派の差別は、消滅して新なる敵に向ふことになる。畢竟ずるに宗派爭ひも、一の内輪喧嘩に過ぎない。爲政家は對外關係安易の時には、宗派相互の軋轢を增大させて勢力を殺ぐやうに、宗乘や教義研究を奬勵して、鎬を削らせ、對外關係困難な時は、一視同仁諸宗派の注意を外に集めて、一致協力して國家の手先に使ふ。爲政家の用意はさる事ながら、吾人宗教信者としては、是非共宗派爭ひの如き末事に沒頭しないで、短刀直入信仰の奥の院に進みたいものである。

生物は本來利他主義

山口祥吉

一

生物は本來利己主義者であるとは從來一般に考へられてゐる處で、此考に一大根據を與へたるものは、ダーウヰンの生物間に働らくと假定した生存競爭説である。ダーウヰン流の進化説明を以てすると、單細胞なる微生物から一つ系統とは想はれない程顯著なる進化を遂げた人類に至るまで、其間を爲す無數生物の進化段上に在る各種の生物

拜堂）と呼ぶ。但し愛蘭へ行くとチャーチといふのが羅馬正教寺のこと、その他はすべてチャペルといはれる。人口三百に充たぬ一寒村でも、其母寺の住職は大學卒業生、其待遇は年額三千圓、人口三四萬の都會の母寺のものは、一萬圓を踰え大伽籃の僧正は、二萬五千圓から五萬圓、（オックスフォード僧正）十萬圓（ロンドン僧正）、カンタアベリー大僧正の如きは十五萬圓で、現首相ロイドジョーヂ君の三倍である。所で非國教となると村寺の住職でも千五百圓に充たぬもの多く、其領袖格で八九千圓を出てないから、事實上國教派の二分の一、或は三分の一で甘んじて居るのである。その昔教育がまだ普及しなかつた時代、（英國で地方大學がザラに出來たのは最近十五年間のことだ）でも、母寺の住職は出來るだけ大學卒業生を以て之に充てた。則ちどんな片田舍でも、母寺のある處必ず大學教育を受けた紳士を土着させて、地方の住民を指導して來たのである。この制度は一方からは國民の自由伸長の精神と、型に嵌めるといふ非難があつたが、他方では教養ある紳士は斯くの如く生活すといふ、生ける模範を地方人民に示すことによい方法であつた。

これが英國々教制度の一長所である。母寺の住職が學問の源、奥方が慈悲の源と見做されて居つた。そこで住職の奥方になつて、天晴一村の儀表と仰がれたいと考ふるものがあると見えて、母寺住職へは可成り身分のある人が嫁いで來る。之に反して非國教の牧師連の家族の御實家は貧弱なもの、女論客めいた妻君を持ち合はせて、惱まされて居るものが少なくない。同じ大學同窓生でも國教住職ならば、閨閥をたどれば州僧正や州僧都までの出世が出來る。僧正以上は何々卿呼ばはりて貴族院議員、その奥方は何卿夫人、その住宅は宮殿呼ばはりされるである。永年大學教授を務めて居た人でも、招かるれば僧都位の位置でも喜んで趨り、世人も亦之を榮轉と呼んで居る。

四　宗派爭ひは畢竟對内問題のみ

宗派爭ひ如何に劇甚なりとも、これは國内だけのこと一度對外關係になつて來ると、我等は基督教信者であるといふ大旌旗の下に集まつて來る。

い、此種の指導力は生物に內在する生本來の面目である。斯る考察こそ進化の事實を說明するに無理のない自然的な考へ方である。以下少しく斯る立場から生物の狀態を觀察して見やう。

二

生物中尤も下等なるものは單細胞生物である。此生物中醱酵素菌の如きは他生物の爲めに有要なる働らきを勤めてゐる。或は魚類や複細胞微生物に身を供して食となる獻身的無數の微生物があり、又直接他生物の食物とはならなくとも、果物や動物死體を解體して之れを幾多の要素に分解し以て他生物の生成に發育に無限の資料を供するが如きは、人類が誇りと爲す古科學文明の機械力にも增して遙に偉大なる働らきを演じてゐる。或は病原菌の如きものに至つては、人の最も恐れ且つ嫌ふところのものであるが、此病原菌こそ積極的利他の急先鋒である。一方に病原菌の活躍がある爲めに無數の生物は强健なるものが適當として生存してゐられるのである。今日此病原菌の最も活動せる舞臺は人體で、人體は實に一面から觀ると病原菌と醫師の一大活戰場である。世界の醫師は現代科學文明の精華を醫術に應用して幾多の武器を造り、以て押し寄せ來る無數の病原菌を驅逐せんと努力してゐるが、それでも文明國の醫師はいつも病原菌の爲めに苦しめられてゐる。病原菌は常に攻勢であるが醫師は常に守勢である。手には何等の武器もなく唯身を以て迫る病原菌がいつも優勢で、科學的最新の文明力を應用する醫師の方がいつもタヂタヂの態度である。時に或種の病原菌を人力を以て驅逐し得たかと思へば、病原菌は更らに新らしき精鋭、併かも一度も出現したることなき病原菌が出現して文明國のの醫師を飜弄してゐる。人間の誇なる現代科學文明の力は眼にも見えない程微細なる病原菌の前には實にミヂメな狀態にある。

文明と共に又病氣も從つて進步するとは將に現時の有樣であるが、所謂文明に伴つて新らしい病原菌の出現あるも、之れを見て直ちに兩者の間に有機的因果の關係が存在すると考へてはならぬ。之れを無機的に唯時間的に考へる丈けならば何も

進化狀態は、重もに生存競爭の結果であると云ふのであるが、此考察によると各種の生物は他の生物の發達進歩の爲めに働らくてふことは全く否定されて、唯自利に汲々として奮闘した我利々々者が適者であり生存者であり優勝者であつて、利己主義の最も強大なる徹底者が最優者と云ふ事になる。そうすると人間は本來利己主義の最も甚だしい優勝者となつて仕舞つて、從つて人の爲めに利他を說き道德を說くは、全く人性に背馳したる思想を說き行爲を强ふるものとなる。此處に於てか或は老子流に、人は本來利己主義者にして由來人性は惡なるが故に道德を說き利他的善行を勸めねばならぬと云ふかも知れないが、然し本性に背馳した道を說き行爲を强ふるは全く無意義である。

偖て一見した處では全生物は唯自己の生存の爲めにのみ營々として力作する樣にも想はれるが、深く觀察すると、自己の生存の爲めてふ背後に尙ほ子孫の繁榮と進歩の爲めと、高等種族の發達進化に餘裕と資料とを供する爲めてふ遠大なる利他的配備の裏在するを觀取せざるを得ない。而して斯る態度は下等なるものに至る程一層著しく現はれてゐる。かくして利己は寧ろ利他の前提であり豫備的能度である樣に想はれる。一體進化の事實を說明するに、各自生存の爲めの競爭の結果と考へては、說明上に甚だしい無理が出來て多くの難關と一貫說明の連絡に缺陷を生じ從て多くの牽强附會を敢てせねばならぬ樣になる。自利に汲々たる生存競爭を以て生物進化原因の主動力と爲すダーウキン說に對し、其後非難百出して今日に於ては進化說明としての生存競爭說は殆んど倒れて仕舞つたと云つても、無理からぬ觀を呈してゐる。

自體生存の爲めには勿論競爭をせねばならぬ。しかし各自競爭の背後には一つの目的に向つて働らく一大協同の動作があり、一見各自勝手に働らく全生物の奮闘にも之れに內在的の一貫指導力が存在して、此指導力が各個體に働らいてゐて之れが卽ち子孫や高等種族の爲めに獻身犧牲的利他的能度となつてゐると考へざるを得ない。斯る指導力を何も生物以外の超自然力に求めなくともよ

てゐる。今假りに病原菌の活躍が人體に無いとするならば如何であらう、今日の儘の人であつたならば、必ずや地上の人類は擧げて肉體的にも劣惡極まる者に退化して、人生は此處に暗黑となり、而して理想も價値も目的も終に闇の世界に消えて仕舞ふであらう。

三

次に植物に就て少しく考察して見やう。動植物學者の調査に據れば現存する世界の生物類は凡そ六十萬種で、その中四十萬種は動物で殘りの二十萬種が植物である。此等植物の多くは地中空中より無機物を取り、これを其食料となして生長する。而して此等が利他の働らきを演じてゐる樣は實に盛んなるもので、先づ彼等の生活其ものが既に動物の生活に對して大なる利他的行爲である。卽ち動物の吐き出した炭酸瓦斯を吸入してそれを炭素と酸素に分解し、炭素は以て自體の營養に酸素は之れを大氣中に放散する動物の生活に不用有害なるものを植物は取つて分解し整理して大氣を清むる樣は、動物にとつては極めて有利で都合がよい。

又動物の生活するに必要なる食物の大部分は、各種の植物は身を提して動物の前に犧牲を甘受してゐる。斯く言へば或は人あつて曰ふかも知れない。植物が動物を利せんとして生活するのでなく、動物が自利の爲めに行動してゐるのであると。余と雖も全然之れを否定しないが、此說は動植の關係に就て動物意識をのみ考へて植物意識を全然顧みない考へである。下等なるものはいつでも割の惡いものなるは宇宙の通理であるが、動物に對する植物も此理に洩れざるは、植物に對して甚だ氣の毒であるから少しく植物の爲めに辯じやう。植物を食べて生活する動物の種類は植物の種類よりも其數甚だ多い、植物の現在種類二十萬種に對し植物を主食として生活する昆蟲類丈けでも、其數二十四萬に上つてゐるとはウォーターハウスの計算である。斯る大多數の種族が植物が若芽を出す頃から盛んに發生して貪食しても、毫も其植物の種類は盡きないで他積の許す限り盛んに繁殖してゐる。若し植物に利他的意識の存在を假定しないならば、自然界の植物は擧げて動物の體軀を害す

差支はないが、文明そのものには何も病原菌を造る能力はない。所謂今日の文明なるものが、甚だ不健全なので、病原菌等が之れを矯正して愈優良なる、偉大なる、而して健實なる文明たらしめんとして其能産者なる人類の爲めに働らいてゐるのである。醫術は甘き母の如き愛であるが病原菌には賢明なる嚴父の如き愛がある。今日文明國に於ては日々に新たなる幾多衞生的設備の進歩發達は、病原菌のお蔭に依ること頗る大で、又人類社會に身心强健者の存在若くは之れを理想として努力する者の存在するは病原菌に負ふ處甚だ多い。人間なる機械が文明と共に段々都會に密集生活を爲し、多方面に身心の過勞を致せば人間なる機械は益劣惡にならざるを得ない。不具不健全なる人間の輩出多在するに至つては、宇宙の進化生物の進化は其一貫の理法に於て、此處に始めて逆理を演ずることになる。人愈々多く人智益々進んで淘汰又旺盛ならんとするは、文明の力に非ずして、全く人類祖先の分れ原始の兄弟分なる原始菌の働らきである。此働らきは實に健實文明の建設に偉大なる役目を演じてゐる。

荒淫の害惡なるは醫師や宗教家や道德家の唯に教ふる處なるのみならず、無言の雄辯を以て、徽毒菌や淋病菌も亦教へてゐる。此種徽菌の働らきは一面人の精神的方面に、人倫の健全なる發達を刺戟しつゝ、他面に於ては不姙症や出産兒の夭折や不具者の出生をもたらして、强健なる體軀者の優勝と幸福を祝してゐる。荒淫多色が人生を害したるの事實は甚だ多く其歷史も亦古くより存在してゐる。昔は淫だらなるポンペイ市にベスビアスの大噴火があり、又ソドムとゴムラの町には天から硫黄の火が降つて共に彼等を滅したとの事であるが、今は徽毒菌を通して人々は眼前にこの天理を學んでゐる。

幾多の病原菌は人類より最も忌み嫌はるにも拘らず尙ほ人生向上の爲めに汲々として働らいてゐる。人より有害無要視せらるゝ病菌は衞生官や聖人賢士の如くに人を教へ、或は强健なる體軀を人生に與ふる父母の役目を務め、斯くして健實なる文明を促進するに、有力なる一つの原動力を爲し

る。美花の存在は一面自體として好く生きたい意識作用の表現と共に、又利他的意識作用の結果と考へずしては說明がつかない。之れを生存競爭の自利主義から考へると、美麗なる花を開く爲めに寧ろ枝を折られ幹を切られる恐れあるを如何、昆蟲類は花瓣の美を賞して他花受精の勞を取るのでなく、彼等の尤も好める花の副產物なる蜜が花の奥に存在してゐるので、これを取らんが爲めに昆蟲等は赴くのである、視覺を通してよりも臭覺に導かれて。然るに人類に至つては視覺を通して花より得る利益は頗る大なるものがある。卽ち花は人に快感と慰安を與へ、又人類に美容と美裝を促進するに甘だ有効なる力源を成してゐる。或は間接には詩歌や藝術に重要なる資料を提供して、共に人生の文化的向上に優婉なる一つの重大役目を演じてゐる。

植物はまた動物の爲めに幾多有要なる利他作用を呈してゐるが、直接には動物の食となりて彼等の生命をさゝへ、間接には水源を構成し助成して、斷へず動物の渴を醫する計に備へてゐる、その外植物は蟲や鳥や獸に居所を提供して、風雨寒暑には動物の隱れ家となり、休息時には安眠所となり、動物の生を守護するに保護色を與へてゐる。

生きて既に動物を利し死して又人を利してゐるのは植物で、樹木の材は人類の實際生活上に甚だ擴大なる效用を務め、建築に道具に細工物に紙に衣類に藥品に染料に燃料に廣く人生を益してゐる。大古倒れたるものは地下に石炭と化して、今日科學文明の世に交通機關に產業製造に大なる働らきを爲してゐる。古人が虎は死して皮を殘し人は死して名を殘せと、同胞を敎へてゐる遙か前より植物は生きて動物を益し、死しては又石炭となつて人生の向上に役立つてゐる。

以上は正面より觀て植物が動物を益してゐる有樣を述べたのであるが、裏面から利してゐる狀態をも少しく述べて見やう。それは肉食植物と有毒植物の作用である。先きに擧げたるを直接利他と云へば之れは間接利他である。此間接利他作用は宇宙の經濟則に重要なる役目を演じてゐるが又進化則にも同樣重大なる働らきを爲してゐる。現今

る有毒植物に其籍を譲つて仕舞ふ筈である、そは動物の營養料になる植物は盛んに食べられつゝあるに獨り其危を免れてゐるものは、卽ち有毒植物であるからである。然るに有毒植物の數は極めて少くして植物界は依然として動物に有要なる植物を以て滿されてゐる。

又植物が澤山の實を年々結ぶことも利他意識の存在を假定せずしては其說明甚だ困難である。植物は殆んど其實を結ぶこと少くも何十より或は何百或は何千或は何萬或は何十萬の實を能く結ぶ、若し此等の結害行爲が彼等自身の爲め丈けであるとするならば、甚だ無意義で不可解なるものがある。そは地球の表面は既に各種の植物を以て滿され、とても彼等の結ぶ千分の一も其實は萠えるものではない。否徹底的に言ふならば結實行爲が既に利他意識なくして說明の出來る筈はない。偖て澤山結んだ實は年々不用のものに歸して仕舞ふが動物が之れを取つて食べ、且つ利用するに至つて始めて意義が出て來る。結實行爲は自己と云ふよりも子孫の爲め、卽ちその種族の繁榮の爲めに働らく行爲と考へざるを得ない。彼等の結實行爲は彼等個體の爲めには何等利する處がないのみならず、結實の爲めに寧ろ個體の老衰を早めてゐる。斯く自體の老衰を早めて迄も無數の害を子孫の爲めに得た動物の爲めに結ぶことは、之れ卽ち利他的行爲である。或は尙ほ強辯する者ありて植物に意識の存在を許すは不可なりと曰ふかも知れないが、本論文は植物意識を論ずるが主旨でないから深入りはしないが、植物にも意識の存在を許す可き幾多の事實があり、又植物意識の存在を假定すべき多くの理由存するに、否定するは甚だ困難なる事由の多在するを述ぶるに止めて置かう。

花の存在も利他行爲である。植物自體の爲めならば何もあれ程の美麗なる花瓣と馥郁たる芳香とを發しなくともよい。植物に利他意識の作用を許さない植物學者に取りては花の存在は一つの解き難い謎である。故に彼等は植物に花の存するは甚だ贅澤であると、如何にも植物自身の爲めであるとするならば極めて贅澤であらう、然し之れを利他作用と觀察して來ると深甚なる意義が出て來

具や製造物の貴重なる原料となつて、人類の生活を利してゐる點は甚だ大きい。或は彼等の行動が人の智力を刺戟して種々の發明を促してゐる。卽ち飛行機や樂器の如きも鳥や蟲聲に負ふ極めて大なるものがある。猛禽や猛獸類になると一種人類の强敵として原始人を苦しめた事ではあるが然し彼等の爲めに戰鬪法に種々の武器工夫に頭を働かしめられ、愈々智力の多方面に發達する機會を與へられたるを想へば、人類の發達に相當利他の效用を務めてゐる。尙ほ彼等の體軀は又人類生活に有要の原料を與へてゐる。

動物も植物と等しく一面人類の實際生活を益すると共に、他面又思想生活上に貢獻する處は決して少々ではない、詩歌に音樂に美術彫刻に眞理の思索に哲學の構成に宗教思想の助成に多々働らいてゐる。

偖て以上述べたる處によつて、生物界に働らく利他作用を通觀するに、利他は下等なる者が高等なる者の爲め、親が子供の爲め、個體が團體社會の爲め（之れは未だはつきりとは述べなかつたが生物の社會生活が之れを證してゐる）に働らくを通則としてゐる。そして生物界に働らく利他作用の範圍は下等なるものより高等なるものに至るに從つて狹まる樣、恰度山の形狀の如くスリバチを伏せた狀態を爲してゐる。

斯くして人類は最早他生物の爲めに利用さる可きものでもなく、進んで利他的行爲を取る可きものでもない事が自然に結論せられる。人に於ける利他行爲は專ら人類の爲めに働らかしむればよい。親は子孫の爲め、個人としては社會及び國家の爲め、又人として身心の進步發達程度の低い者は高い者の爲めに働らく樣にならねばならぬ。翻つて人生社會の現狀を觀ると、まだ〳〵進步發達の餘地は充分にある。社會國家の爲めに勉む可き點も極めて不完全であるに、身心のよく發達し進步したる者を、愈々重んじ益々榮えしめる樣な制度や思想が、社會を指導し、人心を隈なく支配するに到るは前途尙ほ遙かなるを想へば、人界に於ける利他はまだ〳〵未成品である。

世界に存する既知の肉食植物即ち蟲食植物は五百種ばかりであるが、我が國に産するものでも十八種ばかりある。此等は各所に散在してゐるが昆蟲類の好みそうな場所にやはり存在して、小蟲類の生命を脅かしてゐる。葉面の汾泌や腺毛を以て小蟲類に鞭の教育を施してゐる、即ち膠の如き粘着液は小蟲を教ふるに居所に行動に用意周到を、又重量〇・〇〇〇〇八二二瓦なる輕微のものにも能く感應する腺毛の敏感力は、小蟲に機敏を教へてゐる。若し之れ等に堪え得られないものは即ち生を失はねばならぬ。斯くして小蟲は教育され淘汰されて優良種が繁榮する様に助成してゐる。

有毒植物は肉食植物の手の屆かない大なる動物の爲めに同様なる目的を以て存在し且つ作用してゐる。人間の様な靈智を有する動物に於ても、弘法にも筆の誤りの様な失敗をしば〳〵多食の結果演じてゐるを見れば、他の動物に於ては種を嫌はず貪食するならば飛んでもない失敗を招くは必然て、多くの動物は本能指導以外の植物は容易に食べないのも有毒植物の結果であるが、又多くの動物が食物に對しては極めて敏感で且つ機敏にも用意週到を以て行動してゐるは實に有毒植物のお蔭であるが、之れ又動物の進化促進上に働らいたる效は決して少々ではない。

四

此處では動物の利他を觀察して見やう。昆蟲類は自體生存の爲めに營々として勉めてゐるが、斯くして體を肥し子孫の繁殖を計つて呉れる事は、鳥類や獸類には甚だ好都合で別けても鳥は小蟲類を主食物としてゐるが甚ず多い、獸類も亦主として食を小蟲や小動物に取てゐるのが少くない。鳥獸の利他的方面は人類丈けになる。最も之れは主則としてゞあるが、副則を云ふならば或は彼等の吐く炭酸瓦斯や糞尿が植物の營養になるとも云へやう、又植物の葉や幹を食する蟲を食べる事によつて植物を利し、或は一小動物の敵を遙か上の動物が食する事によつて、間接に小動物を保護するとも云へやう、然し此等は正則的な利他ではない。鳥獸は鮮からず人類を利してゐる、或は食物となり香料となり衣服となり裝飾となり、又多くの器

米國でよく賣れて居る巻煙草にMuradといふのがある、何といつて買ひに行けばよいか、兎角「ムラッド」と發音したがる。少つとも通ぜぬ。そこで一寸首をひねつたら今一色より外發音の仕方がないといふことが別る。それは云ふ迄もなく「ミューラッド」である。躓いたら考へさへすれば活路はある。若しそれでも先へ通じないで日本でやつた英語は役に立たぬ。エ、クソッといふ癇癪が起つて來たらば、今度は英語の一年生になり下つて、宛然先生の前でアルファベットの發音をやる時の様にはつきりと「エム、ユー、アール、エー、デー」と綴字を讀めば屹度手ごたへがあつて番頭は莞爾として品物を渡して呉れる。但し我輩はチェスターフィールド黨だ。こんな事は誰でも知つてるのだが、誰てもやりたがらぬ。兎角變テコな發音をしつこく繰返して癇癪の虫を踊らす許りだ。何故といへば綴字を讀むことなんかはとうの昔卒業してるといふ了見があるからだ。イヤどうして小供だ〳〵。米國の小供よりも發音はまづいではないか。大人ぶらずと無邪氣にやらねばならぬ。我輩は英語ではちと自信のある方だつたが、渡米後時々右のアルファベットの音讀をやらねばならぬ羽目に陷つた。そこで此奥の手をこれから渡米される方々へ進呈して御試用を乞ふ次第である。

Thank You と相手がいつたら何と受けたらよいか、默つて居つても事は濟むがポライトでない、通常 You are welcome と答へる、「ありがたう」に對して「どう致しまして」といふ様な譯合だ、「もと〳〵貴方の爲に致したのですから御禮には及びません」といふ意味である。其他「ありがたう」に對して Don't mention it といふ受方もあるし字義通りである。「ユーアール」を口の中で早くいつて了ふから「ウェルカム」丈しか聞えぬことがある。

誤つて人の足を踏む、Pardon me! か Excuse me! と云へば夫でよいが、思ひ掛けない瞬間に「パードン・ミー」が調子よく出て來ない。知つてゐても言出さなければ知らぬも同様だ。帽子を取る頭を下げる、それでも事は濟むがそれでは丸で唖の旅行だ。習つた英語を咄嗟の間に役に立てるやうに

米國の日用英語

在米　石田昇

歸朝後出版する積りで餘暇に筆を執つて居る「初對面の米國」と題する草稿中の一章——禁轉載

ちと古い話だが小供の時に甘さうな櫻の實の色つやに引かれて一つ二に口に入れて見たが、種子ばかり大きくて見かけ程の味のないのに失望したッ切り、此年になる迄櫻は觀るものと定めて了つて居たが、渡米後市場の前を通つて李程粒の揃つた梅ンぼうを一籠下げて歸つてから大好物の一つとなつた。これも英語のお蔭か。我輩日用英語のお話をする不了見を起したのもそんな譯からと思召せ。

偖て日用英語といつても廣い、いはゞ會話のはしくた、何から手をつけやう、Yes から口を切らうか。我國でも「さうです」といふ意味を表はす言葉は幾通りもあると同じやうに米國にも數多くの「スラング」がある。時々獨逸語の「ヤー」かと迷はされるのは Yeah「イェーア」といふ發音である。日本から來たての人は往來で「イェーア」と受けられて時節柄尻込して相手を避けるといふ俗語、其實ありふた Yes のシノネム、Yep と來ては品が下るが、Uh-huh といふ鼻音を聞いては親しみがあつて何となく懷かしい、打解けた間柄に使用される、これが美人の口からでも出たと假定すると新鮮な櫻ンぼうを食ふ樣な味があらう。

ゝれば英語の會話はそんなにむづかしいものではなくなつて來る。何故といへば日本語の代りに英語を置換へさへすればよいからである。かういふと其置換へが一仕事ぢやないかと云はれる方があるかも知れぬが、置換をする前に取るべき態度に就いての躊躇が少なからず會話の澁滯を來すやうてある、これは我輩の僻目かも知れぬ。

曇り日で雨が降りさうだつたら Looks like rain といふ it が省略されてる、日本の文章と酷似してゐるではないか。glad to meet you と初對面の時早口にいつて握手する、I am の省けて居るのも前同斷、Was nice though は「了ひ迄見なかつたれどよかつた」といふ樣な場合に言葉尻を端打つて though 丈で間に合はして居る、it のぬけてるのは勿論のこと。

How are you? 若くは How are you? も初對面の時から使用される、之に對して Fine, thank you とか Very well とか少し「ホームシック」の氣味だとか有體に挨拶をする。それと同時にこちらからも How do you do? と問返すのが禮だ。How do you feel, this morning? といふもよく聞く言葉だ。

I beg your pardon は二度繰返して言つて貰ふ時に使ふ言葉であることは我國に居つた時から承知して居つたが、其他 What did you say? といふのが多く使はれる、前者はどちらかと云へば鄭重な言葉で後者は仲間同志が眼下の人に使ふ言葉のやうてある。

尋ねられて一寸思出すに時がかゝる樣な時に Let me see といふ言葉を挾むで絶句する、頭の「レット」が早く口の中て發音されるから「ミゝセー」といふやうな風に聞える。

I'll let you Know は字義通りて「レットユー」を縮めて「レッチュー」と發音することが多い、

I'll tell you といふ文句もよく聞くのだが、多くは意味を強める丈に用ひられる、「それは一體かういふのです」と譯していゝ場合も少くない。話に實が入つて來ると米人は人さし指て相手の胸を突くやうにして Don't you see? とやる、「ネー君、さうぢやないか」といつた樣な意味てある。

練習するのが會話の秘訣だ。何事にまれ落付が大事である、狼狽は禁物、身體を眞直にして優しい目つきと落付いた句調とで相手の顏をまともに見ながら「パールドンミー」といふのが禮である。帽子は必ずしも取らなくともよい、婦人にあやまる時丈でよい。「パールドン」と云つた切急いで行かねばならぬ折もある、例へば寸時を爭ふSubwayの昇降出這入、エレヴエーターの中の混雜の際などであるが、矢張之に對しても足を踏まれた上は上記の「御免なさい」に對して答へる暇さへあれば Certainly とか Sure とか挨拶する、時によると踏まれた方から「パールドンミー」と先を越されることがある。それは踏まれるやうな所へ足を出して置いたのが惡いからといふ樣な意味合にも取れるが特に外國人に對して叮嚀なのかも知らぬ。例へば我輩のやうな赤毛布の外國人が四つ角に立つてきよろ〳〵見廻はしながら無意識の廻轉運動をやつて居つて傍を通る婦人があるにも氣が付かず、ばつたり肩先に打當つたすると、婦人の方から最初に「パールドンミー」といふ言葉が出るのを經驗することがある、「所不慣れの外國人が物に見とれて居るのに氣が付かずに、妾が側を通つたものですから貴方が打當るやうになつたので全く妾が惡かつたのです」といふ意味を二つの言葉に縮めたやうに聞えて却つて赤面の至りである。かういふ機會に米人の美風が味はれる。そこで會話の秘訣は單に知つて居る英語を間拍子よく繰るといふ許りでなく、禮儀作法の一部と見做して取扱ふといふ所にあるらしく思はれる。

其他の受言葉としては Yes, No 以外は次の樣なのが普通に使用される。

is that so? is it? Are you? Have you? Can you? 等であつて動詞の現在の代りに其場合〳〵に應じて過去を使用することゝなるから相手の話次第では Was that so? と受けねばならぬ、從つて此種の受言葉には多數になつて來るそして此等の受言葉對しても相手が Yes なり其他の應答をするのであるから、日本人同志話してる時の呼吸と大差がないといふことが別る。既に話しをする態度が一致して居るといふことを念頭に置いてか

を云つたらこつちの番號を言つて見るのを忘れてはならぬこれも、常識が會話の手傳ひをする一例だ。先の番號を聞返すのか、こつちの番號を尋ねるのか、金を投込めといふのか、どちらか一つだ、聞き取れなかつたとしても大したことはない、そこで愈々當人が電話口に出て來たならば其名を確めて This is Ma……と自分の名をいふ（男ならば）ことは自分と變りはない。「一寸待つて下さい」はJust a minute といへばよい。

書かねばならぬことが澤山あるけれど自分も turn in する時刻だから此位にして置かう。要するに新來の日本人は妙に癇高い聲を出す、これは普通の會話には禁物だ。おつとりと丸みのある音聲を出さねばならぬ。相手に聞える丈の聲で充分だ。緊張してる聲はこちらでは腹立聲と間違はれる。氣をつけねばならぬ事だ。何しろ長い道中だし、それに耳馴れぬ言葉の刺戟が絶え間なしだし、風俗習慣の相違、鄉里の戀しさ等が一時に集つて來るから癇高い聲を出す位は無理もないことで、エキスキユーズされることであるが念の爲めに附加へて御參考に供するのである。會話は一の「アート」であるといふ立場から我輩の眞意のある所を汲んで貰ひたい。（をはり）

石田醫學士は長崎醫學專門學校敎授にして永く本誌の誌友である。目下米國ボルテモーア市に留學して精神病學を研究中である。英文學に造詣深き同氏は直ちに米國の日常語に興味を覺えたのである。言語は交際の要具、本文は間接に日米親善のための一つの貢獻である。（SU生）

英人が I think といふ場合に米人は I guess といふ、例へば「一弗細くなりますか」と尋ねると I guess I have と答へるやうなものだ。Worry といふ語は名詞としても動詞としても時々使はれる。

小さくて可愛らしいものは cute「キュート」といふ Tis cute といふやうなものだ。Cuty kid 可愛い小娘(子)といふ俗語もちよい〳〵耳にする。Doctor を Doc と縮めていふのは商人か小供で「ハオアーユー、ダック」とくる、alright 位であしらつて置けば澤山だ。

頼まれたことを承諾して「してあげませう」といふ時には I'll fix it for you といふ、或は……fix it up……ともいふ

Come roud は「やつて來給へ」で Drop in といふ言葉も同意義に使はれる。

turn in は、就寢の意味で「私の休む時間です」と之を使つて平たくいひたければ It is the time for me to turn in でよろしい。

Would you mind……, Would you care……,

May I ask you……いづれも叮嚀な言表し方で屢々用ひらるゝ、其他 Could you tell me……と往來などで人に物を尋ねる時にはいふのが普通なやうだ「クッドユー」が「クッヂュー」といふやうに聞える。

小供に話しかける時は Hello 位でよい、向ふでも「ヘロージョーン」とか「ヘロチャーレー」とか返事する。ベービーに「左樣なら」を云ひたければ「グッドバイ」ぢやいけない、Byby「バイバアーイ」と云はなければ通ぜぬ。電車に乘つて乘換が入る時は Conductor 車掌に Transfer to……と目的地を話せばよい、但し目的地は明瞭に發音されねばならぬ、我輩の上記の奥の手を應用するのを忘れてはならぬ。何故といへば類似の町名があるからうつかりしてゐると飛んでもない方角へ持つて行かれることがあるからだ。

こつちへ來て電話をかけるのを躊躇してはならぬ、「もし〳〵」の代りに Helle といへば交換手でも Hello と答へる、そこで先の番號をいつて please と附加へる、もし交換手が何か譯の分らぬ事

ければならぬ。

Imaginationは想像であると同時に、直感であり、反抗である。凡べての新生は何時もImaginationから生れて來る筈である。Imaginationが實現せられたる刹那に、それは科學的知識となり、死せる公式となつて來る。直感と反抗の力を失つた刹那にImaginationは平凡人の法則となり、藝術上のマンネリズムとなる。宗教上の形式となる。

キリストの生涯は一のImaginationから他のImaginationへの絶えざる歩みであつた。

生涯を通じて絶えず自己の藝術に對して、眞實に不滿を感ずることのできる作家のみが、永遠に伸び展げられて行くImaginationを持つことができる。

私がこゝて考へて見たいと思つたのは、Imagination をば天上の神に向けないで、下界の人間の群のなかへ向けなければならないといふことであつた。

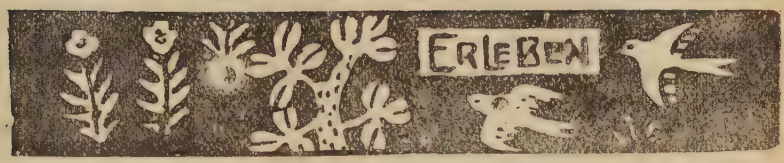
人間の心の世界は無限に開拓せらるべき筈であ

る。永劫無邊際な時空のなかにつゝまれた人間の靈しき運命、微妙なる心情のはたらき方、魂の動き方……そこには永遠に天才のImaginationを待つべき幾多の暗黑界が鎖されてゐる。

現實に即した文藝に若し潑溂たる生命を缺いて來たとするならば、それはImaginationが常識に墮してしまつたからである。

何處までも私たち人間の、刹那的な現實を尊め。しかし現實の底に徹して行かんとする私たちのImaginationは絶えず新しきものを以て更へられなければならぬ。神の祭壇に行く前に、先づ兄弟の心の前に跼かなければならぬ。私たちのはImagination天翔るには、餘りに多くの悲哀や、神秘や、尊さを地上の兄弟の心のうちに、宿命のうちに、見出すべき筈ではないか。

宿命を信ずることの強い私はImaginationをCreateする力と解するよりは、むしろ追ひ索めんとする力と解する方が妥當であるやうに思ふ。まして、それは無のなかゝら空なものを想ひ描くことではない。



藝術短論

吉田絃二郎

サンタイヤナがエマアソンを評した言葉のなかに、エマアソンは山から下つて來た天啓ではなくて、下界から生れた反抗であるといふやうな意味のことがあつた。元來エマアソンは超科學的、超知識的な詩人であり、思想家であつたことは誰も否むことはできない。サンタイヤナ自身もエマアソンを最も豐かな瞑想的詩人として評してゐる。

この最も豐かな Imagination を持つてゐたエマアソンが、天の聲を語る詩人でなくて、人間界の革命的思想家であつたと評するサンタイヤの言葉は興味ある暗示を與へる。

藝術、宗教、哲學のなかから Imagination を除いたとしたならば、それは翅を失つた鳥のやうなものでなければならぬ。佛陀やキリストの宗教も、ミケランゼロの藝術も Imagination の翅によりて、私たちの思想界に齎らされたものであつた。

自然主義の藝術は何時も現實に即した、そして何時も醒めたる理智によりて自然を觀、人生を靜察したやうに考へられてゐる。しかし現實のなかに飛び込んで行くあの冒險的な、全的な、思索生活は、Imagination なしに何うして實行せられやう。過去の古い殻を破つた新しい文藝上の運動は、何時も Imagination から生れて來な

珍らしく晴れた或夏の夕方、わたしはウォタルー・ブリヂの袂に立つて、行き交ふ人々を眺めてゐた。十人のうち一人ぐらゐは、いくらかの美しさをそなへた女がとほつて行つた。二十人に一人、三十人に一人、或はうつかりすると五十人に一人ぐらゐしかほんとの美しさをそなへた女はとほつて行かなかつた。若い男は殆ど一人もとほらなかつた。とほつて行くものは恐怖と心配とにおびえた獣のやうにびく〳〵してゐる顔だけであつた。

さすがに長い薄明の時間も薄暗にかはつて行き、ふと見ると、赤いファルスド・クォータの月が、鐵色ににごつたテムズの水の上におちてゐた。右に見える聖保羅のドームも、左に見えるウエストミンスタ・アベも、もうくらやみにつゝまれ、エンバンクメントの樹陰からは、なやましい色をした街燈が見え始めた。

「エーア・レードがあるかも知れない。」

わたしはさう思ふと、すぐチューブに行くつもりになつて、ブリヂのわきの石の階段をおりかけた。その時、或中年の男がわたしの前を横ぎつて行くのを見た。

「いゝ天氣ですね。」とその男がわたしに話掛けた。「エーア・レードでもありませうかね。」

「えゝ、どうもあんまりいゝ空ですから、今夜あたりあるかもしれませんね。……しばらくありませんから。」

「どうです、あのサアチライトは！　こちらのデフェンスも中々よくいつてるといひますから、向うでも困つてゐるでせう。」

「えゝ。」

わたしは其時初めて男の顔を見た。いゝ倫敦語を使つてゐるが、顔立ちからいふと、どこか東洋人といつたやうな所があるとわたしは思つた。そして眼の中にすばらしくけだかい火をつゝんでゐるのが、わたしに強い感銘を與へた。

それからわたしだちはいろんな話を初めた。全體わたしの性質として、氣の合はない人となるとどうしても話が出來ないけれど、話し出すとなると、何でもかでもぶちまけて言つてしまふ惡い癖があるので、大低の人はすぐ氣をわるくしてしま

まぼろし

佐藤清

今日私は一人の友人を見た。私の Imagination は彼の魂のうちに人間性の美しさを見、宿命の寂寞を見出すであらう。けれども彼の全體は決してそれだけではない。

私は明日また彼を見るであらう。明日私の心に映る彼は、更に大なるもの、更に深きもの、更に永久的なものを持てるものでなければならぬ。自然によりて造られたる凡べてのものは定義するには餘りに偉大であり、把握せんには餘りに速に伸び展がりつゝある、そして自然の偉大なる創造力の片鱗を直感することのできるものは Imagination のみである。

理智の梟は無限の創造界を翔るには餘りに弱い翅を持つてゐる。

藝術家の Imagination が見出す作品は新奇なものや、人間の小才を働かした獲物の綴り合せであつてはならぬ。それは渾然たる生命そのものゝさながらな姿でなければならぬ。それは Imagination によりて造られたものであつてはならぬ。それは Imagination によりて直感し得られたるまゝの共鳴樂でなければならぬ。

彼の心から手細工的小利巧さが捨てられて、彼の魂そのものが全我的に、素つ裸な無智の嬰兒となつて、永久な或るものを追ひ索むる時、彼の Imagination は淨められるゝ。藝術は生きる。

このやうに淨められた Imagination を不幸な隣人たちの生活の底に向つて働かすことのできる藝術家を私たちは待つてゐる。

わたしのたましひをおのゝかせた。

よあけまへのほのかな眞珠の光が、どこからともなく露草のかほりを發散してゐるのが感じられた。そして白鳥の翼の音がそのあひだからかすかに、しかもうきぼりのやうにはつきりとわたしの耳にきこえて來た。白鳥の翼の音には、しほからい遠い海の悲と、そこに葬られてゐるいきものゝうめきとがからみついてゐた。

「セルヴィア！　セルヴィア！」

白鳥の音はきづついた荒鷲の血のしたゝる音にかはつて行く刹那もあつた。

「ベルジアム！　ベルジアム！」

また檻を破りてた猛獸が檻の番人を足蹴にして、さかれた肉を笑ふこゑにかはる刹那もあつた。

「ロシア！　ロシア！」

やがてわたしの前には夜がすつかりあけてゐた。わたしは目の光のけだかい男といつしようにウエストミンスタ・アベの前に立つてゐた。

ペーヴメントはごむのやうにやはらかい綠と空色の細かい花の絨氈にかはつてゐた。アベを仰いで見ると、いきをしてゐるやうに、綠葉と虹色の花をふるはせてゐた。アベは春の密柑の木のやうに強いかをりを發散してゐた。

わたしだちはそれから靜かにトラファルガ・スクエアのほうへ歩をうつした。すべての家、すべての銅像、人間の手になつたすべてのものが、花と綠とにつゝまれてゐるのをわたしは見た。植物が地からいのちを吸うてゐるやうに、さういつたものも悉く地からいのちを吸うてゐることをわたしは見た。

わたしの足は地を歩いてゐることを知つてゐた。そして同時に同じ水平の天を歩いてゐることをも知つてゐた。

とほる人も、とほる人も、ばらから、或はゆりから、或はさふらんから、或はすみれから生れた人のやうな喜びとうつくしさとがあつた。

ふ。此人は不思議にそんなことには頓着なく、むかうでも思ひ存分のことをいふし、わたしも思ひ存分のことをいへるので、わたしは夢中になつていろんなことをしやべりつゞけた。

氣がついて見た時はもう夜が更けてゐた。お茶を飲ませてくれる所もなく、バスも通らず、しかたがないから、チャリング・クロスまで歩かうと思つて、二人でエンバンクメントへおりて行つた。わたしだちは隨分古い友人のやうに、おたがひの腕をくみあはせながら、クレオパトラス・ニードルの下をとほり、うつかりして、ウエストミンスタ・ブリヂまで出てしまつた。

わたしだちはいつの間にかウエストミンス・アベの見えるどこかに立つてゐた。

「火をかけませう、」とけだかい目が合圖をした。

「えゝ、」とわたしは賛成の意を表した。

其時わたしは幾萬といふ白鳥の翼の音が四方に起るのをきいた。ハイド・パアクからバキンガム・パレスにかけて、サファイアのほのほがうづまき起るのをわたしは見た。聖保羅からタワへかけて。それからシティ全部にかけて、エメラルドのほのほが湧き起るのをわたしは見た。テムズのながれがダイヤモンドのほのほにかはつて行くのをわたしは見た。ブリチッシュ・ミュージアムのリーデング・ルームのドームが黄金に燃え、パアラメントとアベとが白銀に燃えてゐるのをわたしは見た。市街の家屋が、すがたもくづさず虹のやうに燃えあがるのをわたしは見た。

狂風の中にきこえる音樂のやうに、六百萬の人間が泣きさわいでゐるのをわたしはきいた。

火がしづまるのを見たとき、はじめてわたしは異常の興奮から呼びもどされるさわやかさを覺えた。そして一世紀が一刹那に飛んでゆき、一刹那のうちに一世紀がまきこまれて行つたやうな不思議な感動が、わたしの身をふるはせた。過去と未來とが逆に流れて行つたやうな不思議な感動が、

のであらうか。

『短い夏の一夜さに忠義の缺くる事もあるまい』と云つて出征しようとする若い武士の袖を引止めようとする花嫁の時姫、自分は北條時政の娘だ、しかし聖君は時政の敵である。夫につくか親につくか、落着く途は唯一つといふ羽目に立つた時、斷然夫である三浦義村の爲に產みの父時政を刺殺さうと誓約するとは何といふ恐ろしい悲しい道德破壞だらう。夫婦道といふものは武士道よりも重い強い力があつたのであらうか。

自分の愛子を殺しても主君を助けねばならぬといふ程武士道を守つた政岡でも『武士に生れたは果報か因果か』と言つて疑惑を生じてゐるではないか。人道と云ふものは武士道よりも遙に重い深い力をもつて居たのであらうか。

斯んな重大な思想が今まで永い間日本人の間には如何なる田舍の女子にまでも喰灸されて居ながら誰も其の文句を驚きも怪しみもしなかつたのは何故であらうか。つまり此れを大きな問題として考へなかつたからである。唯夫れだけである。

二

明治維新から今日までの思想界も變遷を考へてみても隨分ハラ〳〵する事がある。明六社以來の出版物を讀んでみると慄然とする程極端な議論が公表されてゐる。福澤諭吉の「天は人の上に人を作らず、人の下に人を作らず、」と云つた言葉は學問のすゝめとして日本中に行渡つた。しかし其の當時別に問題を起さなかつた。加藤弘之の國體新論の如きは今日であれば、發賣禁止位で濟みさうにも思はれない程過激なものであると思ふ。

明治十三年四月、片岡健吉等九十餘名は五萬九千人の代表として議會開會の請願書を出した。其の請願書の中に『天の斯民を生ずるや之に賦するに自由の性を以てせり、之に與ふるに碩大の力を以てせり。』國家は人民の集合なれば國家の事則人民の事なりといふやうな文句がある。これは確かに今日の民本思想民主思想と同一である。明治の初年に斯んな思想は日本中に瀰漫してゐたのであらうか、今更民主思想といふやうな議論に驚かねばならぬのであらうか。

わたしたちがトテナム・コート・コートまできたとき、そのときまでわたしのそばを離れなかつたけだかい目の光をもつたその男は、いんぎんにわたしの手をとつてわかれをつげた。

「これからどちらへいらつしやいますか」とわたしがきいた。

「え、こんや巴里へまねらうと思つてゐます。それから伯林へ、それから……」

「それから？」

「紐育へ、……それから……」

「それから？」

「東京へ……」

次の瞬間にその男は群衆のなかに姿をかくしてしまつた。

わたしの立つてゐた路傍のみせさきをつゝんでゐるまつしろいカーネーションのかほりに、わたしは全くおのれを忘れてゐた。（八月十六日）

私は斯う思ふ

沖野岩三郎

一

思想に舊いとか新しいとかいふ區別があるだらうか、今の人達が頗る新しいと思つてゐる事も、夫れが何百年何千年昔の人に言古された事かも知れない。唯夫れを驚き怪んで問題にするかしないかが議論の要點である。

例へば日本の文學には『女の道』といふものがあつて、戀愛を控除すれば總てのものは零（ゼロ）となるといふやうな思想が充滿普及してゐた。『女の道立ち申さず候間不孝とは思ひ乍ら覺悟を極め申候』といふ淨瑠璃の文句は何といふ家庭破壞な文句だらう。女道といふものは孝道よりも重い力があつた

しい目に逢はせて殺した、そして日本は神國だといふ強い觀念を植付けられた日本人の頭には到底外國を愛し外國人を愛する事は出來なくなつた。尊敬したり恐れたりはしても愛する事は不可能になつた。

だから明治年間の小說を讀むとき面白い事實を發見する、夫れは飜譯小說の人名である。何故飜譯小說中にヘンリー、ジョージ、メリー、コセットの名が逸見、丈二郎、毬子、小雪に變じ甚だしきは、ヘダ・カブラが江田蕪子となつて現はれたのであらうか。

三百年來基督敎排斥の方便として外國人を卑しめた習慣と遺傳とは心の中に深く喰入つて、どうしてもヘンリー、メリー、コセットでは泣けない。『何だ毛唐人の色事か。』と云つて一笑に付して了はねばならなかつた。巡査が百姓に恐れられたのは其の衣服が洋服であつたからだ。論より證據羽織袴で巡査に執務させたなら、天保老人は吃度『番太』と云つて尊敬を拂はないだらう。

何故日本人はメリーやコセットの名に泣いてやる事が出來なかつたか。夫れは西洋人だからだ、西洋人は卽ち耶蘇敎だからである。神國の民は邪敎である耶蘇敎徒の爲に泣いてゐては首が飛ぶかも知れぬといふ恐怖心が心の隅にあつたからだ。

五

時代は一變した。日露戰爭後日本人の頭には北歐の强烈な文學、南歐の濃艶な文學が入り込んで來た。ノラだのマグダだのいふ女は羽を擴げて日本中を飛あるいた。サッフォー、アイダといふやうな芝居が田舍の小い劇場でも演じられ、カチューシャ可愛の歌は殆ど知らぬものが無くなつた。

今の時代にノラを野呂子（ロコ）だとかマグダを管子（グダコ）だとか言つたら滑稽の極になる。ヘダ・カブラを江田蕪子で通つた時代とは違ふ。

復活が舞臺に上された時、松井須磨子が舞臺上で馬太傳の或章を永々と讀んだ。しかし誰も素見すものが無かつた。

ハンネレの昇天が演ぜられた時、山川浦路が『聖靈を汚す罪』を論じても大向ふから混ぜ返さなかつた。

三

「日本は神國だ！』此の一語は非常な力があつたらしい。日本は神國だから外國人と交際してはならない、降るアメリカに袖は濡らさじと歌つて死んだ女の心は何所から出て來たのであらうか。日本人は昔から外國嫌ひであつたらうか。

『日本は神國だ！』といふ一語が、維新の際多くの英雄豪傑を殺した。伊井大老も、吉田松蔭も、横井小楠も、大久保甲東、森有禮も詮じつめれば神國黨に殺されたのだ。夷狄視されて殺されたのだ。こんな連中は露國の優しい失戀の皇太子を斬り、李鴻章の老顏に彈丸を見舞つた。

何故日本人が日本は神國だと言はねばならなかつたか、遠き昔の事は暫く措き近世では德川家康以降の切支丹迫害が此の思想を產んだのであると思ふ。

切支丹！　夫れは夷狄の敎である。切支丹！　夫れは異國の神の敎である。日本には日本の神がある。日本は神の國である。天降つた神の經營し給うた國である。此の神國の敎を他にして外國の敎を信ずる者は卽ち國賊である？

此の考を助長養成しつゝ三百年來訓練した日本人の頭は一種不可思議なものになつた。繪本太功記でも鎌倉三代記でも妹背山でも仙代萩でも隨分キワドイ思想を含んでゐるが夫れは神國民である日本人の發言であるから差支がない。福澤も加藤も片岡も日本人だから差支がない。併しイプセンやズウデルマンであれば不可い、同じ思想でも大統領政治の國の人間が言ひ出した民本主義（デモクラシイ）などゝ看板を立てゝ侵入して來れば不可い、夷狄討つべし、外敵防ぐべしと云つたやうに騷ぎ出す。そして國內にある危險思想は平氣である。

だからシエンキエウイツチの二人畫が發賣禁止になつて好色五人男が發賣出來る。マグダやノラが改作させられて太功記や鎌倉三代記が其儘唸られてゐるのである。そして日本は神國なのである。

四

斯う云ふやうな矛盾を現出した理由は外國人のみの信ずべき宗敎だと思ふ基督敎が中に狹まつて居たからである。三百年間に百萬近い人を慘たら

ルな心理には、オリヂナルを通り越してグロテスクと見える物が意外に喜ばれるのかもしれません。オスカー・ワイルド一味の耽美派があの英國文壇に一時勢力を振つてゐたのも、キプリングの作品がその題材を物珍らしい印度の風土から取つたといふ事實も、ゆきつまつた現代人が如何に新奇なものを求めてゐるかといふ事を語つて居ります。現在の日本の知識階級の人々が谷崎氏の藝術を歡迎し、見知らぬ異境に舞臺をとつた作品がぼつ〳〵表れてくる所から推して考へれば、日本もかうした傾向を免れ得ないとみえます。

ワルイドの口眞似をするわけではありませんが、喜びが我々に快であると同樣に、悲しみにも苦しみにもある種の快感があるとは云へないでせうか。いな、場合によつては悲哀の快感の方が、苦痛の快感の方が、より濃厚なものゝやうに思へはしないでせうか。

二

普通の心理學でも苦痛の意識を不快の意識と明かに區別してゐますが、これを快感と結びつけては居りません。たゞ例外として、ごく輕微な感覺的苦痛は快の感じを起すけれど、それは寧ろ新奇（ノベルティイ）だといふ事の快感であつて、苦痛そのものゝ爲に惹き起されたものではないとして居ります。リボーはその情緒の研究に於いて、苦痛の快感を悲哀の快感、殘酷の快感、醜の快感、血を見るの喜びと共に、病的快感の中に入れて居ります。

スペンサーなどの云ふ所によりますと、我々の生存に適した事、我々を進化せしむる事は我々にとつて快であり、反對に、我々の生存に適さない我々を退化せしむるやうなものは我々にとつて苦痛となるのだといひます。そして一派の進化論者は、生存に適さない事を快とした爲に自滅した種族があつたゞらうといふ假說さへたてゝゐます。しかし快樂を追ふ事が必ず健康を增進させるときまつたわけでもありません。本能をゆくがまゝに赴かしめた爲に自殺的結果を生む事もあれば、喜びの極、發狂してしまふものもあります。

三

クオバヂスの活動寫眞が普通の寫眞と同樣に淺草で映されてゐる。シビリゼーションの映畫にキリストが出ると觀客は拍手する。

何所の活動小屋だつた、チャプリンを茶武里某だとは言はない。メリーで、ハンネレで、ウロンスキイで、其儘で子供の頭に覺えられる。ジャベルト、ジャンバルジャン其儘で手に汗を握らせるやうになつた。

街頭に『クリスマス賣出し』といふ看板を平氣で掲げるやうになつた。ジョージもメリーも太郎もお花も同じ感じで迎へられるやうになつた。

日本人の幼稚な連中の頭は小說や演劇や活動寫眞の爲に何時の間にか西洋人と握手した。其間には『日本は神國だ！』と云ふ攘夷的の言葉が無くなつた。從つて暗殺根性も無くなつた。

そこて始めて我々は世界人の心で今一度日本の在來の文學を見直さうではないか、耶蘇敎國の人間の言ふ事ばかりが新しい恐ろしいものでないといふ事を考へようでは無いか。

思想に新舊が無いのだ。これを問題にする事の遲速があるのだ。私は斯う信ずる。

苦痛の快感

大橋房子

一

オスカー・ワイルドは善が美しいと同樣に惡にも美しさがあると云つたさうですが、谷崎潤一郎氏は善の美より惡の美の方が遙かに美しいと云つてをられます。善惡の標準さへはつきりとはつきかねる今の世に於いては、何れが善の美、何れが惡の美と見分ける事も出來ないでせうが、あらゆる美味をなめ盡した廿世紀の人間のアブノーマル

なるらしうございます。痺れた心とはよく云つたものでしびれの苦しさには擽つたいやうなをかしさがあるやうに、叱られる事に慣れると、默つて頭を下げてゐる間に、勝手な空想を樂しむやうになるのではないかと思ひます。ひどいめにあふ繼子の話や、打擲されるお姫樣の話を聞く時に、我々は「可哀さうに」と思ふ裡で、私かに面白がつたり、時には羨しがつたりさへしてゐます。

五

「腹が空いてもひもじうない」といふと、多少あまのじやくのやうに聞えますが、ストイシズムや武士道に現れた、苦痛を苦痛としない思想にも美しい所がないとはいへません。しかし禁慾と苦行との結果は、遂に禁慾を禁慾とせず、苦行の苦しさを苦にしなくなるのみならず、禁慾そのものに苦行そのことにいふべからざる喜をもつやうになります。

東方宗教の感化によつて生れた、中世紀の修道院生活にも之に似た事實があつたらうと思ひます。柱の聖者シメオンのやり方が虛飾的だと云つたら不敬にあたるかもしれませんが、彼は柱の上で大歡喜を得てゐたといつたら叱れないですむでせう。山奥の荒地に入り込んで、食べるものも食べずに禁慾と苦行との生涯を送つた修道士の生活をたゞ暗いもの苦しいものとばかり思つたらそれこそ大違ひで、彼等は一面に於いて我々には想像のつかないやうな快樂を味つてゐたのでせう。

信仰は苦樂の標準なり見方なりを一變する故に、特に宗教生活に於ける苦痛の快感をとり出してみる事は出來ないでせうが、斷末魔の苦しみの中に「父よ彼等を赦したまへ」と祈つたイエスの御心にならつて、「艱難にも喜びをなす」の思想は長い基督教史の上に美しい光彩をそへました。半生を暗い牢獄に過した罪のない一信徒さへ「恩寵溢るゝの記」をしるし、病苦に惱む貧しき傳道者も「逆境の恩寵」を感じ得たといふ事實そのものは、宗教生活に於ける一大奇蹟といはねばなりますまい。

六

リップスの感情移入説に從へば、フアウストの

文藝復興運動で有名なカルダンはその自叙傳の中に、「自分は苦痛なしに生きて居られない。時々烈しい衝動が起つてくると、苦痛のみ自分を救つてくれるやうな氣がする。」といふやうな事を申して居るさうです。そして彼は涙の出て來る程我と我が身を責めさいなむのを常としてゐたといひます。

健康な人には分らない事でせうが、生れつき蒲柳なものなどは、何時の間にか週期的に襲うて來る病苦を待つやうになります。そして病氣の經過を一種異樣な興味をもつて見るやうになります。いつたい慣れるといふ事、アット・ホームに感じるといふ事は、しつとりした快さを與へるものですから、此の場合には純粹の苦痛の快感といふ事は出來ないかもしれませんが、醫者の與へる一時的苦痛や、藥のにがさなども、しまひには不快でなくなります。手術後の繃帶交換はずゐぶん苦しいものだといひますけれど、それも慣れゝば退屈な病院生活に於ける一つの樂しみになるのではないかと思ひます。むつとした交換場の空氣、厚く巻かれた繃帶をとかれる氣持、リゾールの鼻をさすやうな匂ひ、醫者の手の冷く皮膚に觸れる感じ、ガリガリと頭に響く傷口をかく音、うつむいた人々のかすかな鼻息新しいガーゼと冷い藥の傷口にしみる心持、患部の痛みを壓しつけるやうな新しい繃帶のまき心地——こんなものは回復期の患者に何ともいへぬ快感を與へるにちがひありません。

四

「悲しい」と囁く時我々は、甘い涙が悲しみを溶いてくれるのを感じます。「苦しい」と叫ぶ時我々は、縛られた繩をとかれるやうな快感を味ふ事ができます。美術に表現せられた憂鬱な調子は此の點に最も觸れてゐるのではありますまいか。戀人や詩人や藝術家のなやましい氣分は、最も高尚な最も贅澤な苦痛の快感といふべきではないでせうか。

まゝつこ根性とは一寸意味が違ふかも知れませんが、いぢめられる事に慣れた繼子は、それと同時にいぢめられる事に妙な愉快さを感じるやうに

黄い月

佐野袈裟美

虧けかけた黄い月が、遠くの低い黒ずんだ森の彼方からのぼりかけてゐる。

六七人の人が、橋の上に立て、それを見てゐる。

私も丁度其處へ通りかゝつたので、思はず足をとどめた。

夢のやうに淡い黄い月であるけれど、何といふ不思議な魅力をもつてゐることであらう。

人々は皆默つて凝つと見入つてゐる。

人々の心は、皆それ〳〵の思ひを懐きながらも一つの大きな神秘の力の中に融け合つてゐるに違ひない。

私はその時すべての人が懐しく感ぜられて、涙ぐましいやうな溫かい愛の悦びに胸が溢れて來るのを覺えた。

眞赤に燃えてる太陽

地平線の彼方に沈まうとして太陽は今眞赤に燃えてゐる。

何といふ大きな神秘な姿であらう。

地上のあらゆる物は、金色の光の波に乘せられて悦び躍つてゐる。

人々の胸にも限りない悦びが湧き上つて來る。

一日何の樂しみもなく機械のやうに働いて來た人も、家に歸り行く足を暫し止めて、西の空に燃えてゐる太陽に見とれるに違ひない。

たゞ食つて行く爲めにのみ働いてゐるやうな望みのない乾枯びた生活も、一瞬間はなやかに輝くのを覺えるに違ひない。

地平線の近くに眞赤に燃えてゐる太陽！

何といふ永遠な靜かな姿であらう。

そして自由と幸福の象徴として、多くの人々の魂のうちに、力强い新しい生命を、無限にそゝぎ

苦悶は單にファウストといふ人物——又はファウストに扮する俳優のみの苦悶ではなく、ファウストを見る事によつて我々自身の内面に體驗する苦悶だといひます。悲劇に出てくる人物がいろ〳〵の意味に於いて苦悶をもつてゐる以上、それを見る我々はその刺戟によつて、我々自身の中にその苦悶を體驗してゐるのです。そして我々が娯樂の爲に、愉快ならん事を求めて劇場に行くからには我々は苦しむ事によつて高價な快感を得ようとしてゐるのではありますまいか。

複雜な内的苦悶をありのまゝに描寫し、解剖する事に妙を得た近代文學は、苦痛の快感を味はんとする要求に應じて起つてきたものでありませう。暗い、そしてえぐるやうに鋭い心理描寫の盛になつてくる一方には、著しく主觀的な告白文學といふやうなものが起つてきました。そしてほんたうに泣いて讀み明かすやうな美しい、面白い物語りはもう一時代前のものとなつてしまひました。イプセンやショーは考へさせるといひますけれど、ストリンドベルヒに至つては讀んでゐて苦しくなります。そして我々は青い顔をして、八の字をよせて「面白かつた」といひます。

何でも通りいつぺんの事では氣がすまなくなつて、異常な快感を苦痛の中にさへ見出さうとする此の病的傾向は、今後どうなつてゆくでせう。息苦しいやうな現代の空氣の中に生れ出てきた我々は、どのみち此の疫病の病毒を受けねばなりますまい。しかしながら、いくら古いと云はれても夢を見てゐると嘲笑せられても、私はあの人を醉はしむるやうなロマンティシズムの藝術を過去の墓場に葬つてしまひたくありません。鬱血したやうな病毒がぬぐひ去られたら、其處には前にもまさる程希望に充ちた、かゞかやかしい新世界が開展せられるでありませう。

不死の鳥

西淵峻

花は咲き鳥はうたへり天地(あめつち)にかよふ切なる心
一つより
光みち命かゞやきフエニックス心を出てゝ空
を翔れる
雲間より洩りくる日影淡くして若き木の芽の
靜かなるかも
ほゝゑめる力の如くポポラアは風にゆるゝよ
青き朝風
鳥影も宿すべうなし一(ひと)とせに花も咲かずて梧(あを)
桐(ぎり)は散る
まさびしき我れの心の怯(おく)れをば埋めとして君
の生れし
君が心大五世界の眞中に光りて嘆く初秋の
風
世に多き寶の中に心こそまされる寶君よ守ら
む
秋靜か外(と)の面(も)の光我が裏(うち)の光と合ひて銀に光
るも
うつろなる我れの心の扃にて友や泣くらん魂
あらば(以下四首哀悼歌)
雲となり霞となりてかへりゆく心の湖(うみ)の悲し
みの朝
くやみなき命の果ての死の旅をたゞそれをの
み友に喜ぶ
御心は海にたとへむ一度も己れの慾のために
騒がず

込むことであらう。

汝自らを信ぜよ

たゞ頼るべきは——自己。
失敗して打ち碎かれた時も、其處に見出すのは自己より外にはない。
強く、更に強くなれ。
そして如何なる場合にもしつかりと自己を攫んでゐよ。
自己は一つの世界である。
然しそれは大なる世界の中に包まれてゐる。
一個人にして、また人類である。
一個人として完全にならうとすることは、卽ち人類全體への奉仕である。
自己の生命に徹底することは、卽ち宇宙の大生命の運動に參與することになる。
されば何よりも先づ汝自らを信ぜよ。
飽く迄も信ぜよ。
そして王者の如くしつかりした雄々しい歩みをつゞけて行け。
すべての努力は、たゞ自らの內心より湧き上る強い要求を滿足させる爲めにのみするがよい。
行け汝——偉大なる者よ。
何を顧慮することがあらう。
たゞ自らの力を頼め。
世間の俗衆が汝を認めないからとて、それが汝にとつて何であらう。
決して俗衆に媚びて汝自身の價値を低めるやうなことをするな。
汝は彼等に與ふるに、常に汝の最上のものをもつてするがよい。
如何なる侮蔑をも堪へ忍べ。
忍べ——そして永遠の世界を彼方に望んで進め。
絶望と悲觀とのにがい盃を、汝の魂の唇に近づけしめるな。
常に汝の魂をほがらかに保て。
愛と悦びとはすべてのものの母である。
——されば愛と悦びとに生きよ。
生きよ——強く生きよ。

我等の宗教

毎月一回五日發行
定價一冊金七錢
稅五厘
一ヶ年稅共金八拾錢

我れ等同人相計つて、宗教の本質を學理的にも又實際的にも研究する所の新誌を發行し、以て眞に自由主義の基督教を徹底せしめんとす。載せんと期する所の大略は凡そ(一)聖書の研究(特に難解の章句)(二)耶蘇傳の研究(三)諸教の研究(四)近代の思想と宗教(五)宗教哲學上の根本問題(六)我れ等の信仰(七)如何に兒童に聖書を物語る可き乎等なり。

(第二卷第十四號)——十月五日發行——

(次目)——(十四號)

□宇宙と我……三並良
□古代ギリシヤの精神……瀧内秀綱
□默示錄系思想の評論……三並良
□未定……沖野岩三郎
□過去と未來……村上雄策
□あこがれ(エー、イーラッセル)……瀧内秀綱
□よるふかみ……芳夫
□其他……

(第二卷第十五號)——十一月五日發行——

(次目)——(十五號)

□宇宙とは何ぞや……三並良
□父の沈默……大橋房子
□默示錄思想の評論(其三)……三並良
□憐殺……沖野岩三郎
□レフユージを求めて……ふさ子
□秋ふかみ……芳夫
□米國通信……治部茂
□消息……

發行所
東京市芝區三田四國町
宗教研究會
振替東京三八三九四番
電話芝五八五五番

虚心集

一碧樓選

實のる草に海傳が寄する歩み通さん　一仙
草の實裾につけて來て家ぬち淋しからずや　同
打伏すまゝに夏の夜のゆがめる疊　同
夜逢へば女ほと〳〵と單衣の裾たゝき　同
曲つた山路の俺達の滿月が大きく出たぞ　巨鬼
萩の夕風に踵あげしかすかなる息す　同
重ね着の夜の出歩きしとやかな風うくる　同
黍の幹固く摑めば夜の唄歌ひ過ぐる若者　同
かまきり稚く斧たてゝ冷ゆる　桂川
眞夏の蝶々黒く風たつごとし　同
向日葵日にめぐりては驕らんとする　同
女もろ手をひろげては夏果つる風　同
製糸場のま晝の葵はうすく　ひさし
盆花をさゝぐる此身すぐれずも　同

日本統一基督教弘道會案內

十一月中諸集會

三日（日曜）午後二時

米國ヴッサー大學教授　理學博士　ファネス女史歡迎會

席上女史の『米國の參戰に表はれたる道義的精神』と題する講演あるべし

十一日（月曜）午後七時　月次例會

戰時に於ける英國の社會狀態　會津常治氏

日時未定　通俗學術講演會

演題未定　法科大學教授　法學博士　牧野英一氏

毎日曜　午前九時　思想問題研究會

（神田區錦町三丁目女子音樂學校內自由教會にて）

H. G. Wells, God the Invisible King　輪講

指導者　文學士　今岡信一良氏

右諸集會共參會歡迎

會場思想問題研究會以外は凡て惟一館

事務所　芝區三田四國町二惟一館內（電話芝五八五五）

目的　宗派及び信條に拘泥する事なく純正なる基督教を研究開發且實行するにあり

會員規定　本會の目的に贊成し本會正會員若くは名譽會員二名以上の紹介に依りて入會を申込み理事會の承認を經且毎年金六圓以上の會費を納むる者を正會員とす。次に本會の目的に贊成し毎年金三圓以上の會費を納むる者は本人の申込に依りて贊成會員たることを得。但贊助會員は發言權を有するも議決權を有せず且本會の役員たることを得ず

事業　本會は本會の目的を達する爲め下の事業を行ふ。月刊六合雜誌（會員には無料にて頒布す）の發行、研究會、講演會、講習會、傳道、圖書の發行等

郵便傳道　本會は地方在住志道者の爲に宗教問題に關する信書の質疑に對して同じく信書を以て迅速に應答すべし　但何等の報酬若くは料金を要せず

岡田哲藏著

我が斷片

價金貳拾錢 稅金二錢

MYFRAGMENTS

金貳拾錢 金貳錢

右合本

金四拾錢 金四錢

我が環境

金六拾錢 金四錢

MYENVIRONS

金四拾錢 金貳錢

發行所

東京市芝區三田

振替東京一〇〇〇三番

電話芝五八五五番

六合雜誌社

彼は何物をもことさらに作爲せんとはせぬ。然し彼が感受し、觀察し、判斷するものが自然の形に成り出づる。かくして成れる自然の作が「我が斷片」として見はれたのは三年前である。其後の作の集まれるを分類し配列したのが「我が還境」である。彼はさきに數年の觀察と思惟の結果を集めて「靜觀と思想」と名くる一論集とした。その範圍は主として今の思想界、卽ち他の人の心の世界であつて、それを攻究の對象としたのであつた。然してその成果は世の常の論文の形であつた。「斷片」と「環境」とはかく人の心界に限られず、他の思想に介せられず、彼自らが直ちに自然に接し、人生に接し、得たるまゝの印象を表現したのである。その表現の方式も、散文とも詩とも就かぬ、自由にして獨特のものである。然して成し得る限り短き辭に多くの意義を包含せんとの試である。自由に眞實に他の思想や形式に累せられざらんと願ふのみならず國の境を越え、時の流れの外に立つは彼の望である。

夕のギスを聞き桐の幹々の白くて　同
我聲おだやかならず夏夜ひゞかし　唉風子
鍬一ぴきを擔みたる西日はげしき　同
暇あらぬ身のそこら虎杖が花つけけり　狹青
かゝる男淋しく熟れかけし無花果を指し　同
蟬をつかみ事もなく歩いて來しや　同
日覆はた〳〵夕べとなりし陽の色よ親しむ　鼓腹
炎天の木蔭の牛の瞳の澄みて　一鳴
秋日さす布團の輕い一日の我にて　飛泉
コスモス咲き搖るゝ工場の笛のはげしく　高木生
秋暑く青い木の實の尖り　茨士
母よ冷やつく月しろの横雲のなびき　清藏
我が魂よ樹々の秋の我が家　一碧樓
船音をさせて苦しい秋の朝日が射した若者　同

投句規定

▲題並に句數を限らず
▲東京市外高田村大原一五二七中塚直三宛
▲封筒に虚心集稿と明記ありたし

診察毎朝及毎夕　但祭日及日曜の他
院長診察月木金午前及午後六時
林、峯間兩副長は目下當院に在勤
東京麹町區三番町卅番地（市ヶ谷見附內）
電番六二番
番五一六番

東洋内科醫院

院長　醫學博士　高田畊安

南湖院

電話ちがさき二番
神奈川縣茅ヶ崎海濱（從停車場半里）
河野、高橋兩副長は目下當院に在勤
院長診察土曜日午後、入院診後應需
診察毎朝但祭日及日曜及土曜の他

往ししてゐた。文明の喧囂と、生活の努力とは、混然たる不思議な騒音をなして、この場の雑沓より他には、何物をも人の心から奪ひ去るやうに見えた。其時彼は、この雑沓の中を、只獨り、何人にも氣付かれずに、そこともなく消えてゆく一人の人があることを思つた時、急に眼の前の擾騒が遠く消え去つて、寂しい荒野を越えて、世界の果ての無の世界を見る様な氣持がした。『文明と生の波は、永遠に「現在」の濱邊にざわめいてゐる。しかし、その中には、何時の間にか一つ一つ遠い海原に押し返へされては、行衛も知らず消えてゆく泡沫のあることを忘れてはならない。』彼は其時此處ことを考へた。けふはその考へが再び彼の頭に浮んで來て、あの鏡の影との間に、何等かの關係があるかの様に思はれたのであつた。

二

高木は柔かな草の上に仰向けになつた。何處かで蟲が鳴いてゐる様である。時々頭の上の葉の中で、何かしらばた〳〵する。

高木の眼は大きく見開いては居るが、その實何も見てはゐない。此處時の彼の眼は、心の中の薄闇をすかして、一寸した物の姿をも、その中から見逃すまいとしてゐるのだと云つた方が適切である。彼は營々として思想の糸を手繰り寄せてゐる。

高木は唯物論者ではない。故に、死を單なる物質の壞滅放散であるとは考へない。彼は唯心論者ではない。故に、そは彼心内の一觀念の滅却であるとも考へない。彼は「生命」といふ幽靈を有り難く思つては居ない。彼に從へば、「生命」は桃大郎と同じ事である。從つて「生命」は嘘であるといふ。彼は「生命」といふ言葉を聞く時位、大いなる侮辱を感ずることはない。要するに彼にとつては、死は物にも非ず、心にも非ず、有にも非ず、非有にも非ざる一物の消滅である。

『俺は或時、或所で生まれたのである。』ふと彼は考へた。『要するに俺といふ一つの影が、この世界といふ不思議な鏡面に現れたのだ。』——世界といふ不思議な鏡面——彼はこゝに彼の解決を得たと思つた。彼は二三度眼をぐり〳〵させた。彼は考へ續けた。『俺は五十年の間、何かやるであらう。そ

一路

橘高一無

一

高木は何物の實體性をも許容しなかつた。彼は有無の概念を否定した。彼には本性もなく、また現象もなかつた。

高木はけふ街を歩いてゐる時、ふと陰鬱になつた。彼はよく晴々しい快活から、急に慰められぬ深い沈鬱と寂寥とに落ちていつた。併しけふの憂鬱は、それとは稍々性質の異つたものである。

彼はけふ職を求めて芝三界まで歩いて行つたが、それは遂に徒勞に終つた。彼はいま、疲れ果てゝ家路に向つて歩を運んでゐる。けれどそれが彼のこの憂鬱の原因であるとも思はれない。

高木は力なげに首を落して、蹣跚として歩いてゆく。傍を過ぎ行く人は、有てもなくまた非有でもないらしい。彼は何ものにも眼をくれず、ぼんやりと思ひ沈んだまゝ郊外へ出た。

緩い坂路は軈て寂しげな林の中に終つてゐる。萎えた様な青草が一杯に生ひ蔓り、毒々しい蛇苺の實の赤い班點が、この一筋の細い路を兩側から靜かに道挾んでゐる。夏の曇り日の午後の沈滯した空氣を遠方のエンヂンの音が仄かに搖がして、その弱々しい音波がそよともしないしげみの間に消えてゆく様である。

彼はけふあの社の重役の扉を押す前に、ふとその傍の姿見に映つた彼自身の影を、さつきから何度も思ひ浮べてゐる。彼は歸へる途中、何かの事からそのことを思ひ出した。そして、彼は急に陰鬱になつた。

それはその影が、不思議な考へを彼に暗示したからである。二日前に、彼は或る賑かな街で、わびしい葬式の一群を見た。そこには、電車や自動車がひつきりなしに通り、無數の群衆が右往し、左

ある。

『げに、我々は裸である。國家も人民も裸である。裸でさえあれば戰爭は起らない。我々が正義を唱へて、暴惡の國を懲すのは、彼をして裸にする爲の方便に過ぎない。戰爭に實體はない。裸の方便としてのみ、それは價値あるものである。』

高木が此處まで考へた時、高木はむっくり起き上つた。靜かにあたりを見まはしたが、人の氣配もしない。夕暮である。緩い傾斜の草地に靑さびた陰鬱な光が鈍く照りかへつてゐる。草地の端れには櫟の林が黑々と立並んで、その背後の松が、勢よく幾本となく襯せてゆく西空にくっきりした銳角の影像を描いてゐる。しっとりした草の匂がぷん〳〵鼻をつく。櫟林の向に、尙幾つかの森や草地や、まばらな人家を隔てゝ、鐵道線路の堤防が、長々と走つてゐる。

『日が暮れるのだ。』彼は向ふの高臺に、まばらに見える薄茶氣た電燈の光を見た時、こう思つた。そして彼は、ふと、目の前の用向きのことを思ひ出した。彼は急に帽子を被り直して、着物をぱた〳〵云はせた。

『俺は不甲斐ない奴だ！』

高木は全く違つたことを考へ乍らこう呟いた。彼は一寸空を見上げて、ゆる〳〵と歩き出した。そして、不平らしく矢鱈に唾を吐き散らしたりした。

三

高木は此年で三十四になる、頭の側面に大きな禿があるが、彼はこれをかくす爲に、何等の通俗手段を弄しない。額の廣く出張つた、鼻の大きくがつしりした、そして癖のない、しかし何處かいら〳〵した雙の眼の所有者である。丈は六年前に五尺四寸あつた。鼻下に黑々した形のいゝ鬚を蓄へてゐるが頰が恐ろしく落ちてゐるので鬚と口とが妙に浮き上つた樣に見える。時々頰に皺をよせて笑ふと、二本の大きな前齒が眼につく。

彼は嘗て僧侶であつた。併し、それは少年時代の數年間に過ぎない。彼は嘗て文筆を以て世に立たうとした。併しそれは、その後彼の中に起つて來た、より急速なる解と救ひとを要する宗教上の

うして死ぬ。すると俺の生涯は、まるで、遇然鏡面に現れ、悲喜様々の面相をしては、またわけもなく去りゆく鏡の影と何等選ぶ所はないではないか。』

こんもりした灌木の茂みの向で、ふと足音が聞こえた。誰かゆる〳〵と歩いてゐる様である。時々樹の枝に手を觸れては、ポキリと折る音がする。併し、その音が高木の聽覺を刺戟したかどうかはわからぬ。

高木は身動きもせず、依然として瞑想を續けてゐる。

『鏡の影といふ運命は、何といふ悲しい運命であらう。俺達はみんな寂しい影と影である。

『どうして一人の人が、他の一人の人を苟めにも見下げることが出來やうぞ！　世界中、誰が一人として、そうした特權を有つてゐるであらう。それといふのも、みんな「我」以外の不純なものを考へるからだ。この純粹の寂しさに徹しないからだ。

『俺達は二六時中、常に一種の不純な「我」を持つてゐる。常に世間とか、血族とかの概念がつき纏ふてくる。そして何等かの意味に於て一種の虛榮と自惚と偏心とを持つてゐる、だが、こうした凡ての不純な考へを取り去らねば本當の「人間」にはなれないのではないか。自他や血族や人種等の差別に依つて、親疏の區別を置くのが、已に抑もの誤謬ではあるまいか。

『こうした様々の不純な考へのある爲めに、人間は常につまらない強がりを持つことが出來る。譬へば智惠學識に特別な價値がある様に考へて、これに對して、常に一種の誇りをもつてゐるのだ。又天才のある人は、殊更に一般人を卑しむて、己の天賦に特殊の價値を賦しやうとする。

『俺も嘗ては、そういふ經路を通つて來た。併し今の俺には、どうしてもそうとは思へない。同じ寂しいひとりぼつちの影と影との間に、塵程の價値の高下のあらう筈がない。我々はみんな裸である。裸で生れて、裸で死ぬ。しかし裸て生きる人は世界にどれだけあるであらう。いま人間に缺けてゐることは、この「裸で生きる」といふことで

前脚をかけてクン〳〵泣いたりした。高木は今更の様に、つく〳〵娘のあどけない顔に見入るのであつた。通つた鼻筋やさかしい眼つき等が、如何にもよく生前の母親を思はせたからである。

婆やは買物に出てゐて、家にはゐない。彼は蕪然として、娘の相手になつて繪本を讀んだりした。

午後は娘や小犬が遊びに出たあとで、高木はひとりて彼の書齋に立罩つた。彼が友人と謀つて、僅か三號で仆れた○雜誌の校正版や、寄贈の殘りなどが、其處こゝに散らばつてゐる。卒業後の二年間は、ある新聞社で文藝欄を受持つたこともある。二三の宗教雜誌や法律雜誌の編輯事務をとつたこともあつた。日本橋あたりの夜學校の教師をしたこともある。最近三年間は、ある中學校の教諭の職にあつて、一方小さな譯書を出したり、時々雜誌等に寄稿したりして暮して來た。しかし、ことしの五月限り、彼は斷然中學校を辭した。

書齋の丸窓の上に、すぐ楓の青葉が掩ひかぶさる様に茂つてゐる。その向ふが杉の森になつてゐて、森の下生が青々と盛り上り、陰鬱な綠色を仄かに、そうして、もの靜かに天井へ投げてゐる。

秋の聲は聞いても秋の色は見えない。靜寂な綠こうした氣持で彼はぼんやりと机に凭れた儘、森の綠を瞶めてゐる。右手から丸窓を通して射してくる鈍い白光を受けて、心持机が光る様に思はれる。硝子障子もあけ放してあるが、そよとの風もない。

空は朝から曇つてゐる。午後は一層それが重苦しくなつた許りだ。

彼は彼のこれまでの生活が、よかれ惡しかれ、一の重大な激變（カタストロー）に到り着く可き日の、漸次近付きつゝあることを意識した。そして彼は一種の故しらぬ踊踏と失心とを同時に經驗した。

この來たらむとする激變（カタストロー）の契機は、已に業に長女の死と、その後の愛情と諦めとの中に含まれてゐた。妻の死はこの契機に一層重要な他の動機を與へるものであつた。彼はこうした心機の益々熱し來りつゝ、しかも尙、あの際鋭い一點に於て遲緩し停滯してゐるのを感ぜざるを得なかつた。

彼は只ぼんやりしてゐる。草を見て、土を見て

煩悶と要求との爲に裏切られた。彼が救世軍には
せ參じたのは彼の二十一の秋である。しかし、彼
に一時の滿足と救ひとを與へた基督教も、軈て彼
の疑の的となつた。救世軍をはなれた高木は、あ
る私立大學の哲學科に身を置く樣になつた。
手ぶらで大學に入つた高木は、また手ぶらで、
ぼんやりと大學の門から出て來た。只、漠然たる
有神論者が、無神論者にかはつたまでゞある。こ
れから後の七年間は、高木にとつては、外的にも
內的にも最も苦しい暗闇の年月であつた。
その暗闘の年月を思ひ浮べて、高木はぼんやり
と、今朝は緣側に座つてゐる。
見るから狹苦しい庭である。次女のおつぎが彼
の前で淸と戲れてゐる。淸といふのは、眞白な相
の子の小犬であるが、二三ケ月前、この界隈をさ
まよひ步いてゐたのを、彼が家へつれて來たので
ある。その後淸は丸々と太つて來た。
彼の家族はこの小犬と、七つになるおつぎと彼
と、六十幾つになる婆やとの四人で盡きる。彼の
妻は昨年、長女の雪子と相前後して、肺勞の爲に
世を去つた。彼の考へが何だか、ある定形をとり
はじめたのはこの頃からである。それからは、彼
は見るから寂しい人となつた。樣々な社會的な位
置や名望に對する野心も努力も見えなくなつた。
彼は只次女のおつぎを連れて、寂しいやもめ暮を
した。
淸と散々ふざけて面白がつてゐたおつぎは、稍
々飽いて來たものと見えて、緣側に上つて、父親
のそばへ寄つて來た。
『隨分、疲れたわ。』おつぎはこういつて、小さい
吐息をついた。そして兩腕を父親に投げかけた。
高木は幼い娘を抱きしめて、激しく頰ずりをした
りした。
小さな細長い庭の片隅に、可憐な芙蓉が咲い
てゐる他は、花らしい花は更に見られない。只中
央に塵が堆くなつてゐて、雜草が至る所に生ひ
蔓り、彼方此方に毒々しい黃色い花が頭を擡げて
ゐる。高木の前に暫く立つて尻尾を振つてゐた淸
は、やがて氣を變へて雜草の中をひとりで戲れて
ゐたが、時々高木の所へ歸へつて來ては、緣側に

の「祈りの心」に似る虔庵な心境に浸沒し、沈潜してゐる彼は、故しらず涙がこぼれた。涙がこぼれて机の上に落ちた。落ちたとたんに彼は立ちあがつた。そして自分の生活の様相に、何等かの變化が來なければならないと思つた。

そう思つた高木の心には、何等の隙もなかつた高木は靜かに自分を眺めた。そして、同じ不思議の鏡面に動く他の寂しい影を眺めた。ありとある虚榮や、慾望や、憎惡や、憤懣や、强がりや、また、輕卒な喜悦や恐怖や悲しみは、夢の様に高木の心から消え去つた。

そして、高木はこうしては居られないと思つた。

北陸前の友へ

高橋芳夫

○近からば涙ぬぐひてかたらむか夢をかされし汝が遠つ國

○見おろせば鼎浦入景秋の色蒔々として黄昏にけり

○ひもすがら氣仙氣仙沼烏賊釣りの歌うたひつゝ汝れはすこやか

○うつしみの轉だあはれをしりそめし汝か二十四の秋の故郷

○いざさらば別れて去なむ今一度ふりかへり見る故郷の灯よ

松の幹を見て、障子を見て、又草を見て土を見る彼は只ぼんやりと考へてゐるに過ぎぬ。彼は明瞭な意識を追つてはゐない。彼の意識は頗る不明瞭であるが、彼の思惟は、しかし、頗る明晰に働いてゐる。

彼は今、彼の「一生」を靜かに、そして幽暗な氣持で跳めてゐる。過去と、そうして、未來とを貫いて。

過去とそして未來とを一筋の糸に縫いて、それを現在の轉瞬に於て跳めるのである。この路は單調で、そうして寂しい、そして、その周圍は、すべて神秘である。摩訶不可思議の蒼白の鏡面である。

私は幽暗といつたが、彼はまさしく、この幽暗な氣持の中にぼんやりしてゐる。この幽暗な氣持の中から何物かゞ湧き出るであらう。彼はそれを待つて、只ぼんやりしてゐる。

四

學生時代は一生には區切りがあると思つた。學校とその修業年限とに、特別な意味と存在とがある様に思つてゐた。

丁度、無窮から無窮に流れる時の様に、年とか月とかの目盛りがあり、その一つ一つの目盛りが明治十年だとか、大化元年だとかの特別な名と實體とを所有してゐると考へるのと一般である。

學校を出た高木は、職業の爲に一種の偶像を拵へた。その偶像は彼を束縛した。そして彼の眼と心とを鈍らせた。

彼は、今、人生を一本の糸に見た。しかも、始めも終りも茫漠とした陰暗な一路だと思つた。

人間は何處までいつても孤獨である。只この恐ろしい、和解されぬ孤獨の重荷に堪え乍ら、この仄暗い一路をとぼ〳〵と目當てもなく辿りゆく許りである。併しこの純なる孤獨の狹い隧道を通り抜けることによつて、はじめて我等は廣やかな「純生」の碧い海原を見はるかすことが出來るのではないか。この光と豐饒との桃源に到達するには、人は只眞の孤獨と虚虚との純なる「祈の心」の如き心境に入ることによつてのみ可能である。——神を失つた高木は神を念じない。しかし、今こ

て試みられたる、言論著作印行集會及結社なる行爲なしには、一切の法律は立法され得ないのであるから、言論著作印行集會及結社に關する自由そのものを他の法律的條文によつて制限することは不可能なことで、法律の範圍内と云ふ語は隨つて無意義なものに終らねばならぬからである。法律を制定する自由なるものが、法律によつて制定されると考へることは、デレンマに陷つた循環論法だからである。法律を立法する自由なるものを制限する法律を立法すると云ふことは、自己が自己を否定することであつて、それは全く不可能な事柄である。縱令、國會の議場に於て、議員が其の言論に就いて憲法第五十二條により絕對的なる自由を許容されて居ると云つても、其の絕對的自由を議員に許容した憲法第五十二條なるものは、議員の言論の自由によつて立法されたのであつて見れば、議員の言論に對する自由を許容する法律の存在を假定すると云ふことも、循環論に過ぎぬからである。然らば法律の範圍内に於ける自由と云ふことは、院外に於ける場合の言論に對して議員が立法したものであるかと云ふに、必ずしもさうでは無い。憲法第二十九條に於ける言論の自由に關する法律は、一般法であり根本法であつて、憲法第五十二條に於ける院内の言論の自由に關する法律は特別條規である。前者は國民全體に共通なる普遍法であつて、後者は議員にのみ限られた特殊法である。のみならず、院内に於ける議員は一般國民によつて選擧された者であるから、議員が院内に於ける場合でも、又選擧民が院外に於ける場合でも、立法權に參與する根本的資格の上には同質のものであつて、言論の自由に關しては内外の差別が無い筈である。然らば憲法第二十九條に於ける法律の範圍内と云ふ語は、如何なる意味のものであるか。其れは何の意味も無く、全く蛇足なものに過ぎぬか。將た大に意義あるものであるか。是れは一つの研究問題である。

余の考へる所に依れば、この法律の範圍内と云ふ語は大切なる條項である。飽く迄も保存して置くべきものである。けれども、其の意味は憲法第二十九條以外の特別法規のことでは無く、實に法

研究

法律倫理學より觀たる言論著作印行集會及結社の自由（一）

一條忠衞

第一節　緒言

我が國の憲法の中で、人民の自由に關して權利義務を規定して居る條文は數箇條あるが、現下の日本社會の狀態に於て、時代思潮より觀て吾々に最も重大なる關係を有して居る條文は、實に憲法第二十九條である。同條には、『日本臣民ハ法律ノ範圍內ニ於テ言論著作印行集會及結社ノ自由ヲ有ス』と規定されて居る。普通に之れを略して言論集會の自由に關する規定として知られて居る。今この條文を見るに、三箇の要素を有して居ることが直ちに判斷される。一は『言論著作印行集會及結社』と云ふ語で二は『法律の範圍內』と云ふ語で、三は『自由』と云ふ語である。そこで此の條文は如何なる意味になるかと云ふに、言論著作印行集會及結社と云ふ吾々の行爲は、自由と云ふ條件によつて規定されて居るのであるが、其の自由なるものは法律の範圍內と云ふ條件によつて制限されて居るのである。此處で吾々に一の疑問を生ぜざるを得ないのである。言論著作印行集會及結社なる法律行爲が、自由と云ふ法律的條件によつて規定されて居ながら、其の自由なるものが他の法律的條件によつて制限されて居ると云ふことは、一種の矛盾である。何となれば憲法治下に於ては自由と云ふ條件によつ

し、更に進んで法理學の一分科たる法律倫理學(Rechtsethik)上より觀察して、正確なる知識を根底とした解釋を施さなければならない。余は斯かる趣旨からして平素の意見を披瀝して、憲法第二十九條を解釋するに必要なる基礎的知識を論定して見たいと思ふのである。最初に法律倫理學上より見たる自由の意義を述べ、終に言論著作印行集會及結社に關する法律倫理學上の意義を明にしたいと思ふ。

第二節　法律倫理學上に於ける自由の意義

一　自然法派に於ける自由の意義

法律倫理學は法律の本質を論ずるに當つては、常に倫理學、哲學、社會學、心理學を根底として居る。故に學問の知識を基礎として自由を論ずるのである。殊に法律上の自由と云ふことは、責任能力に關係した言葉であつて、法律行爲の中心的要素を爲して居る概念であるから、隨つて先づ倫理學史上の意志自由論對意志必然論の論爭に出發するのが順序である。扨てこの議論は何時頃から起つたかと云ふに、中世紀の基督敎神學に於て、惡の起源を說明するに就いて生じた問題である。人の意志が若し神によつて定められるゝ必然的のものであるならば、惡を爲すと云ふことも神の命令で無ければならない。然るに神は善を勸め惡を懲しめ給ふのであつて見れば、その罪とする所の惡なるものは如何なる性質のものであるか。その起源が解らぬとになる。ところて基督敎の僧侶達には、選擇の自由(Wahlfreiheit)と云ふ觀念が生じ其の有無を論ずると云ふ風が起きた。吾々の意志は果して善惡を選擇するの自由を有して居るか何うかと云ふ疑問であつたが、惡の起原を說明する爲には、何うしても自由選擇を以て正說としなければならなかつた。是に於て彼等は人間には善惡を選擇し得る意志と云ふものを、神から與へられて居ると考へた。是れは實に彼等の偉大なる發見であつた。アウグスティヌスの神政主義(Theocracy)も亦た是に原因するので、之れを繼承したアキナスの自然法(Lex naturalis)と人定論(Lex humana)の說も、源を是の自由選擇論に發したの

律全體の精神内と云ふ意味である。尙ほ民法に於ける『公ノ秩序又ハ善良ノ風俗ニ反スル事項』以外の場合である。卽ち具體的なる法文としてゞは無しに、法律の根本精神に反せざる範圍内に於てと云ふ、抽象的なる論理上の意味である。換言すれば、法律の範圍内と云ふとは、法規上の具體的な特殊的制限では無しに、法律上の抽象的なる普遍概念としての制限である。さうして前者は自ら後者の中に含まれて居るのである。是れは實に自由と云ふ人間の意志に嚴存する事實であつて、自由そのものゝ性質に外ならぬのである。卽ち法律上の自由は、法律上の普遍的制限としての必然の中に成立して居るのである。故に言論著作印行集會及結社に關する自由は、法律的自由そのものゝ性質として、法律の根本精神に反せぬ範圍内に於て、始めて自由たり得るのである。單に治安警察法又は新聞紙法に牴觸せぬ範圍内と云ふ意味では無しに、治安警察法とか新聞紙法とか云ふ特殊法規の有無を問はずに、法律の根本精神に反せぬ範圍内に於て、言論著作印行集會及結社の自由は、法律的自由そのものゝ根本特質として、必然的事實なのである。然らば斯かる意味に於ける自由と云ふものは如何なる性質のものであるか。又その自由によつて爲さるゝ言論著作印行集會及結社と云ふ法律行爲は、如何なる性質のものであるか。これに對しては今日の憲法學者は、正確な研究を爲して居ないのである。誰が書いた憲法學の講義を讀んで見ても、憲法第二十九條を正確に批判的に講究して居る者が無いのである。隨つて其の不完全なる憲法學の講義に養はれて來た官吏が、臣民に於ける言論著作印行集會及結社に關して正確なる知識が無く、その行政の上に司法の上に失策の多いのは當然の結果であつて、臣民の權利義務を侵害する行爲の頻出するのも自然の勢である。けれども、是れは法治國民として一日も傍觀して居る譯には行かない事柄である。これは憲法學者の大なる責任である。憲法學者は須らく此の憲法第二十九條に關して、嚴正批判の下に最大權威を有する學術的說明を與へなければならぬ。それには、從來の研究に一步を進めて、法理學より觀察

れに反して其の短所は、謂ゆる其の自然狀態なるものは事實的存在としては荒唐無稽に流れ、謂ゆる原始人類に於ける自由平等なるものは餘りに架空的なことである。それから絕對的に自由なる個人が未だ社會も無く法律も無い自然的狀態に於て、契約によつて社會を作り法律を作つたと云ふことは、考へることの出來ない事である。殊に自然法なるものが、自由なる個人の意思を拘束すると考へることは、非常なる矛盾である。假にかゝる不合理な民約なるものが當事者間に生じたとしても、其れが如何なる理由を以て子孫の意志を拘束するの條件となるか。若し先祖の民約が子孫の意志を拘束するならば、人間は依然として自己の人格に於て自由の意志を有せぬ者ではないか。此等の缺點を修正して、自然法主義をして近代の理想主義に轉換せしめた者は實に、カントである。

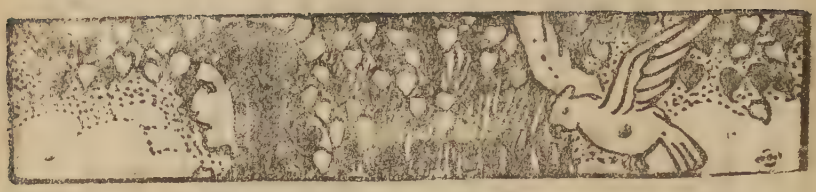
二　カントに於ける自由の意義

カントの倫理說の特徵は自然法主義に於ける民約說の影響を受け、個人の自由を主張し、權利義務の觀念を明にして、人格の眞相を示した點である。カントの考に依れば、人間と云ふものは誰でも人格を有して居る。各人はこの人格を目的として生存して居るのである。卽ち吾々の人格と云ふものは其れ自身を目的として、智情意と云ふ精神の三能力によつて生存して居るので、他人の手段となつて取扱はれる者では無い。故に人間は互に自他の人格を目的として生活すべき者であつて、之れを手段として生活してはならぬ。各自に偉大なる目的を有して居る者として待遇しなければならない。所で自己の人格を擁護すると共に他人の人格を尊重せねばならぬことは、人格に固有する屬性であつて、身體に兩手の附屬して居るやうなものである。是れが卽ち權利義務であつて、人格の本質である。卽ち人格は自分自身を目的として存在して居るので、相互にその權利義務を尊重して生活せねばならぬので、人を自分の利慾の道具として使つてはならぬと云ふのである。カントは此の意味を一層明にする爲めに、意志の自由を主張し、意志が自由であるが爲めに道德が可能であると說き、無上命令（der Kategorische Imperativ）

てある。

斯くて中世紀に於ける法律倫理學は全く神學的法理學であつて、基督敎の造化主義によつて、神意に本づいて法律上の自由を說明して居たのである が、中世以後に至り自然法派(Naturrechtschule)と云ふ學派が起つて、人類に於ける自然狀態を以て立論の基礎として、人爲に基いて自由と云ふものを說明するに至つた。國家と云ふものは、人間の契約によつて構成された人爲の制度であつて、人性の自然に生じたものであるとする民約論である。この自然法主義は宗敎改革又は文藝復興の思潮によつて益々精練され、個人主義と合して自由民權の急先鋒となり、古來の希臘哲學、中世の加特力神學、君權絕對說、神授君權說等の敎權を脫して、人民主權の思想を提唱して個人の自由を主張したのである。グロチウス、ホッブス、プーフエンドルフ、スピノザ、ロックを經てルーソーに至り、此の思想は極點に達した。ルーソーの意見によれば、自由平等と云ふことは人類の自然的狀態に於ける黃金世界であり、吾人の身體に屬する不平等なるものは自然の定めたものであるが、獨り政治上の不平等に至つては是れ實に人約(Le consentement des hommes)の然らしめたものであると爲し、その結果たる國家法律その他一切の文明を呪詛排斥して、速に自然に還るを要すと爲し眞個の意味に於ける自然的及社會的契約を以て國家を作り、之れに由つて法律を說明し、人は自己以外の他人に服從する義務を負はずに、能く其の固有の自由を保有する權利があると云ふのである。

扨てこの自然法說に於ける自由の意義を觀るに、中世以前の解釋に比して著しい進步は、理想的なる自然を描いて現實的缺陷を改造せんとした點である。古來の神權又は君權の奴隸より免れて個人の人格と云ふものを認めた點である。卽ち絕對的の壓制に對して、民衆の輿論を重んじた點である。殊にルーソーが法律を以て自由を根底とする國民全體の意志表示たるべきものとして、規範的に解釋した點である。佛蘭西革命又は北米合衆國獨立戰爭の精神はこゝに立脚したのである。之



日本に齎らせるわが使命に就て

ヴアッサー大學教授 哲學博士 カロリン・ファネス女史

一 國際平和の根本問題

世界の現狀を見て最も大問題と考へますのは、國際親善であります。然らば、その國際平和は如何にして實現せられ、又永く維持することが出來るでありませうか之に對する答は極めて簡單であります。國家關係も、個人關係と同樣で、友情は相互の知識的理解と衷心の信賴の結果であります。國際間の知識を深くするといふことは、互にその國民の思想や生活を理解せしむるものであります。信賴の念は互に誠意を以つて交はるところより自然に起る尊き感情で、決して自己の利慾より生ずるものではありません。國家にしても之と同樣で、兩國民が相互の道德標準を了解する充分の知識を養ひ、互に國民精神を尊敬して、自由なる交際をなすところに、眞正なる平和が生ずるのであります。兩國の政治家や外交家が互に交際すると云ふことも、國際關係に於ては缺くべからざることであります。けれども眞に國民的親善を期するには、私共は一部の政治家や外交家の手にのみ委せて置くことが出來ません。永久的にして根底ある平和を期するには、國民が交際して、互にその思想生活を理解せねばなりません。眞に理解すれば、國際間の憎惡、反感などは決して生ずるものではないと思ひます。

二 佛蘭西に現はれたる米國民の友情

を叫んだ。彼はメタフイジック、デル、ジッテンの一節に於て、『自由と云ふことは自分自身以外の或る原因によつて活動する狀態では無くて、自分自身の原因で活動する場合をいふのである。』と云ひ、又た『抑も原因と云ふ概念は必ず何等かの法則によつて決定されると云ふ概念を伴ふて居るのである。自由と云ふことは決して無法則のもの(Gesetzlos)では無い。必ず法則によつて決定されて居るのであるけれども、其れは謂ゆる自然法則とは全く獨立して居ると云ふ意味である。自由なる原因は必ず不易の法則に一致して居るのである。けれども、其の法則は自分自身に特有なものである。全く法則から離れては決して自由と云ふ意義を有することは出來ない。』と言つて居る。カントは此の倫理上の自由論を法理論に應用して、理性的個體實在の自治(Autonomie des vernünftigen Eidzelwesens)なる理論を設けて法律上の自由を說明し、各人をして自己の立法的意志の主體と爲して、自餘一切の政治問題に言及したのである。

今このカントの說いた自由に就いて考へて見るに、彼は自由と云ふものを自己の人格より發する權利義務であると爲し、それが logical life として theorize されて居ると見たのである。それて自由と云ふことは單に中世紀時代の修道僧によつて解されて居た選擇の自由と云ふ意味では無しに、自己決定(Selbstbestimmung)又は自動(Spontaneität)と云ふ意味に解したのである。卽ち自然法則でも無く、又た無法則でも無く、自分自身に特有なる一種の原因であり法則であると彼の見たのは、其の點に關してゞあつた。是れはカントの偉大なる所であつて、道德及法律を可能ならしむる根本的原理である。けれども、彼はこの自己決定の意味に於ける自由を說明するに當つて詳細でなかつたので、且つその人格の解釋に於て個人を主として社會を閑却した傾があつて、彼の法律倫理說には尙ほ幾多の不備を有して居るものである。

(未 完)

共通などは何にもなりません。日米兩國はその民族、國情を異にしゐるのでありますが、精神思想に於ては兩國は共通してゐた點があります。卽ち、人道、眞理、正義、信愛、名譽を尊重することに於ては、兩國民は同一であります。誤解、偏見、反感、憎惡は互に眞精神を了解してゐないところから生ずるのであります。ところが、我國民の大多數は兩國從前の誤解は、私共の共同の敵の陋劣なる離間策に依つて起つたものと信ずる樣になりました。そこで私共の第一の任務として、わが國民の精神を充分に明かにして、友愛の情を日本國民に示して、兩國親善の楔子としたいと思ふのであります。この重大事に對して、たゞ一部の職業的な外交團の仕事にのみ委せて置くわけには行きません。兩國民の誠意を通じて、互にその精神を理解するところに、何物を以つても破壞することが出來ない鞏固なる友愛が生ずるのであります。

四　日本に齎らせる私の使命

私は今回日本に渡來して、同地に數ヶ月滯在しようと思ひますのは、よくかの國情を研究し、日本の婦人に對して我國の婦人の思想感情をよく傳へて、永く渝らざる友愛の連繫を結ぼうとする爲であります。日本婦人は如何なることを考へ、又如何なることに興味を以てゐるかを、よく研究したいと思ひます。日本婦人は大方家の中でのみ仕事をして、外には滅多に出ず、餘り社會的活動はせられない樣に聞いてゐます。それ故、世界的思想に觸れず、その社會的地位も男子に比して非常に低いと云ふことも聞いてゐます。けれども、日本婦人は之を自覺して來たが、それとも、未だ無自覺の狀態にあるかは、米國に居りました丈ではその眞相が分らないのであります。

私は世界各國のあらゆる婦人の生活狀態を研究することに非常に興味を以つてゐるのでありますが、殊に日本婦人の生活狀態を研究することは以前から私の希望であつたのです。私共は如何なる國の婦人と雖も、その生活を向上せしめ、更らに自由なる生活を創造して、世界の進步に盡さんとする高尙なる努力に對して深き同情を有するのであります。婦人の思想、感情を高め、その生活を

多くの國民を包容せる國家が、自由に圓滿に交際を續けて行くと云ふことは誠に困難なる問題であります。ところが現に佛蘭西に出征してゐる百五十萬の我同胞は、國情を異にした佛蘭西國民と最もよく接觸し、提携する絶好の機會を得てゐるのであります。兩國民の友誼の濃かなる、將來如何なる事件が起らうとも、その床しき關係を截斷することが出來ないと信じます。これと同樣なる交誼は伊太利とも結ばれたのであります。又英國と制度、習慣、言語を等しくする我國は、この度の大戰爭に際して、同國とは永久に渝らざる血族關係を自覺したことは申すまでもありません。

數百哩の北佛蘭西の戰場や巴爾幹半島の戰場には民族を異にし、國情を異にした國民が、互に手を携へて、砲烟彈雨の中を祖國の爲め自由の爲めに奮戰してゐるのであります。佛蘭西人も英國人も白耳義人も米國人もともく〳〵に平和の爲めにその尊き血汐を戰場に流してゐるのであります。彼等の血汐は互に混じて戰場を染むると同樣に、胞々たる友情は互に心の中に通つてゐます。その戰線の背後には、聯合國の婦人團は、看護婦となり救護班となり、武器、食料補給隊となつて、千辛萬苦を忍びて働いてゐるのであります。英國、佛蘭西、伊太利、白耳義、塞耳比亞の國民は一心一體となつて、同一目的の爲め理想の爲めにこの大戰爭に從事してゐます。

三　極東戰線に於ける國際的交誼

極東戰場に於ける聯合軍に就ては、私は確實なることは申されませんが、日本は四年以前この大戰に參加して、最も勇敢に忠實にその本分を盡くして、聯合國の爲めに貢獻せるところは實に尠くないのであります。けれども日米兩國はまだ完全に了解してないことを殘念に思ふのであります。兩國の國民的敎養の相違もその原因の一つとなつてゐるのでありませうが、この相違は單に表面的のものに過ぎないと思ひます。勿論我等の思想生活の樣式は、歐洲（ヨーロッパ）から分れたものでありますから現在戰ひつゝある敵國とも、その生活樣式に於て共通してゐるのであります。けれども正邪に對する國民精神に於て互に異にしたならば、生活樣式の

スリーヴ氏であります。

又米國赤十字協會はゼエーン・デラノ孃を通じて、日本の赤十字社に對して敬意を表する樣にと私に依頼しました。ヴアッサー大學の女學生も日本の女子と互に通信して、兩國親善の一助たらんことを希望してゐます。米國女子參政權擴張會も會長カーリー・チャップマン・カット夫人を通じて日本婦人に宜しく傳へて呉れる樣に申されました。更らにユニテリン教會の婦人團（私もその會員であります）も、日本のユニテリアン教會に屬する婦人團に對して、敬意を表することを私に依頼して來ました。殊に私の屬してゐるボーキーズイーの教會は、日本の婦人とは密接なる關係があるのです。同教會の牧師サンダーランド博士は四年以前、日本に渡航し、數週間滯在して、ユニテリアン擴張の爲め各地に講筵を開き、親しく日本の識有と交はれましたので、日本には廣く知られてゐます。

私は米國婦人の諸團體の使命を帶びて日本に渡航するのでありますが、日本の婦人の力で、鞏固なる日米親善の連繫を結ばんことに努力したいのであります。この目的を達する一助としては、兩國の青年男女が、互に文通することも宜しいと思ひます。私はこの意見を全國專門學校長會議の席上に於ても申し述べました。ところが多數の人々が私の意見に贊成してくれまして、努力を與ふる旨を約束致しました。

五　事業はその緒に就きしのみ

專門學校長會議はいまだ何等具體的なる實行には着手しませんが、二三の學校は私の意見に同意して、既に日本の識者と文通を初めました。ボーキーズエーの高等學校の學生は日本の京都の學生と文通を始めました。日本の少年、少女からも面白い手紙を得ました。

他國と通信すると云ふことは、國民の國際的知識を擴め、他國に對して、同情と尊敬の念を拂ふに至つて、國際友誼の根本を作る要素となるのです。それ故私は手紙を以つて、日本婦人と交際したいと云ふ人の爲めには、出來る丈紹介の勞を取らうと思ふのです。私はなる可く、我國人の意向

自由ならしめんとすることは婦人自身の爲めばかりではなく、國際間の友誼關係を深くして、世界の平和を保つことに力あるものであります。

私共は國際間の友誼を增進するために、米國有識階級の婦人團を組織して、日本に渡りて日本婦人と親密なる交際を遂げたいと云ふことを久しき以前から希望してゐました。米國愛國婦人會委員長アンナ・ショー夫人は我國の婦人の戰時活動の采配を取つて居られるのでありますが、同會の本部は華盛頓にあります。その婦人會は平時に於ても維持したい考へで、婦人の生活狀態を向上改善して、國際平和に貢獻したいと云ふのが、同會の本領であります。これが、全國に凡そ二十の支部會があつて、いづれも熱心に活動しておるのであります。同會の總裁は聖路易（セントルイス）のフイリップ・ノース・ムーア夫人であります。私は同會の敎育部の委員に擧げられまして、日本婦人の敎育視察の任務を帶びてこの度日本に渡航することになつたのであります。

私は同會を代表して、五十萬の會員を有する日本の愛國婦人會に敬意を表したいと思ひます。ヴアッサーアルマネー協會（私もその會員であります）は既に多くの日本婦人と交際してゐます。この協會は米國に於ける知識階級の婦人の組織するもので、六十有餘の專門學校及大學卒業生を會員にしてゐます。協會の目的は廣く婦人の思想及生活を向上せしめ、生活上男子と同等なる機會を與ふることにあります。而して敎育界に於ける婦人の能力を廣く社會に認めしむることにあります。最近同協會はその範圍を擴張して、外國に支部會を設立し、同一の目的を以つて活動することに決定しました。一つは既に加奈陀に設立せられましたが、私は日本にもこの協會を設立することを委任せられたのであります。日本には日米兩國の專門學校卒業生は可成あるさうですから、これらの知識階級の女子を糾合して優て一協會を設立することが出來ようかと思ふのであります。米國女子專門學校卒業生協會の總裁はウイスコンシン大學總長ロイス・マッシュウス氏でありまして、その外交委員長は、バーナード大學學長のギルダー・

基督教會は一つになるか

クレー・マコレー

一

外國特に米國に於ては、基督教の眞相及び不變的要素に關する議論が目下極めて盛である。基督教界に存する偏狹なる宗派心は幾多の宗派的宣教師の派遣を受けつゝある非基督教國民を惑はす者て傳道上由々しき障碍物であるから、出來得べくんば、全然それは破壞すべき者だと多數の識者は確信しつゝある。多數基督者の實際的提携を圖る爲に從來種々なる努力が試みられたけれども、未だ眞に包括的なる共同運動の試みられない事は天下周知の事實に屬する。主として『福音主義』とか『使徒以來の繼承』とか更に『聖公主義』といふが如き名目の下に包含せらるゝ一種の思辯的教義的試驗及び教權的傳說等が今も猶勢力を有するが故に、基督教社會は分離且孤立せる幾多團體（必ずしも互に反感若くは敵意を有せざる）を生ずるに至つた。而して此等の諸團體は全世界に散在する自由基督教徒若くは合理的基督教徒の諸團體に對しては今も猶表面上排斥の態度を取るのである。

然るに、今や督基教の眞相を宗派的反感の中より救ひ出して教祖の『皆一にならん爲め』てふ祈禱を實現せんとする大々的變動が考察され、且つ此處彼處で實行されつゝある。此事實を念頭に有する私は敢て日本基督者諸氏、卽ち宣教師諸氏に依つて入信せられたる基督者諸氏に對して近着の米國雜誌に顯はれたる次の論文の一讀を切望する。

二

ジョン・デー・ロックフエラー氏が『基督教會の將來』と題する注意すべき小冊子を刊行した事

を日本の有識者に傳へる積りであります。

私共は大西洋沿岸に立つて、過去四年間歐洲の戰雲を眺め來てました。我國が聯合國に投じて獨乙と戰爭をなす以前より、幾多の婦人等は大西洋を渡つて人道の爲めに盡くしました。露西亞の爭亂に依つて、漸次私共の視線は極東方面に注がれて參りました。ことに極東の一角日本の國勢に注目する樣になりました。最近我國の識者の間には、極東の趨勢を研究するの急務を說くもの多く、私は今太平洋沿岸に參つて、遙かに日本を望みますと、誠に愉快になるのです。世界は廣いようでも案外狹いものであります。この小さな世界に於て何で詰らぬ國際間の誤解や紛爭にのみ耽つて居られませう。私共は愛すべき日本國民と更らに友誼を深くし世界平和の爲めに盡したいと思ふのであります。（記者譯）

（シアトル●サンデー●タイムス所載）

フアーネス博士は米國ユニテリアン團體の熱心なる會員の一人である。目下日米親善の使命を齎して東京に滯在中である。フアーネス女史は天文學者である。吾人は遠からず、女史の專門的論文を發表し得ると思ふ。この論文は女史が渡日の途中シアートル新聞記者に語りたるものである。（記者）

秋夕旅懷

德隣跛脚居士

落葉聲乾蟋蟀殘。孤燈影裏夜漫々。懷君鄕夢驚猿响。霜滿關山落月寒。

小春

晴雲白散寥青新。天地無些不小春。甑葉也嫌秋頂瘦。裁將白雪作頭巾。

全七日間基督教的生活を鼓吹する者である。其は全人民の教會即ち眞正なるデモクラシーとなるであらう。一切の宗派的主張は破棄される。即ち競爭て無くして協同が高調される。詳言すれば大都會にありては大なる宗教的中心を以て、而して小町村にありては互に相競爭しつゝある多數の將に滅びんとしつゝある教會の代りに一二の强大なる教會を以て、當該社會の基督教的生命を結合し且つ一切の偉大なる運動を指導するに至る。即ち文字通りに神の國を地上に建設するに至るのである。

世界が今日要求する所の者は一層精神的なる一層非形式的なる宗教である。今日の如く様々に相分離せる諸教會が幻象を見、且寛大と包容と勇氣とを有し、而して一切の無用物及び障碍物を抛棄して神の愛と活ける基督の精神との根本原理の上に立つに至らば、必ずや活ける神の教會が出現して基督教統一の新時代を開始するだらうと思ふ。

ロックフエラー氏は代表的浸禮教會員として認められるゝ人である。隨つて氏の大膽なる意見は偉大なる印象を與へ且驚く可き賞賛を博しつゝある。

四

紐育に於ける一宗教雜誌クリスチャン・ウアークはロ氏の小冊子に對する有名なる牧師諸氏の意見を徵しつゝある。贊成意見の內にグラッデン博士の說が出て居る。續いてエーケッド博士の說が載つて居る。エーケッド博士は今日ロ氏の如き人より斯の如き提議に接する事は光榮ある會心事であるといふ確信を述べて居る。猶彼れは基督教諸教會に對して新しき音信を同時に傳へん事を欲する。即ち彼れは基督教の信仰上に於ける根本的一致點を呼んで『新』若くは『自由』基督教と謂はずして『イエスはガリラヤを巡回し彼等の會堂にて教へ且神の國の福音を傳へたり』てふ最古の傳說に從ひ、單に『神の國の福音』と謂はんと欲する。

は時代の傾向を察知するに足るべき意義深き一事例である。ロックフェラー氏は世界戰が開始された時の驚き、及び至る所に『基督敎は失敗せり』てふ聲の叫ばれた時の驚きに論を始めて居る。然るに開戰後第四年目に至つては幾百萬の男子及び婦人が最も平凡なる方法を以て、世界の賞贊に値する特色及び氣質を其の日常生活中に實現しつゝある。自己犧牲、反利他心、慈悲、謙遜、及び寬大等の諸德は到る處に發見される。卽ち『多くの人々は基督の生涯を送りつゝある。彼等のインスピレーションは神より來る』。併しながら若し彼等は何敎會に屬するかと問はゞ、彼等は決して喜ばないのである。

ロックフェラー氏は現存の敎會が如上の人々に對して、彼等の要求し且期待する權理を有する指導と安住とを與へる事の出來ない事實を認めざるを得ぬと曰つて居る。而して彼は結論して曰く、如上の精神的勢力は一定の組織を得ずして終に消散して仕舞ふか、或は一種の新敎會を樹立するに至るか、或は現存の敎會にして曠古の大機會と大要求とに應ぜんが爲には復生し且改造されなければならぬ。ロックフェラー氏復生の敎會を描寫して曰く、『其は活ける神の敎會と呼ばれるだらう。而して基督及び基督の活ける精神の中に顯はれたる神に對する愛、及び此愛を基督的生活に實現する事が此敎會へ入會せんとする者の有すべき資格である。此敎會を掩ふ空氣は溫情と自由と歡喜の其れで、其は未成立宗敎の徒をも引き附け得る程に同情に富み且判然たる者である。此敎會は儀式及び信條を神の國卽ち敎會に入る者の有すべき條件としては根本的に必要な者だとは宣言しないだらう。信條で無くして生命、卽發表する所の者で無くして爲す所の者、換言すれば何を持つかで無くして何であるかゞ試驗されるのであらう』。

三

彼は進んで此敎會の目的を定義して、理論的宗敎で無く、應用的宗敎の發表に在ると曰つて居る。卽ち新しき敎會は社會的、道德的、市民的及び敎育的等一切の重大なる人生問題に對する溫き興味を有するのである。其は一週中一日だけで無く

本誌讀者諸君の特權

◎圖書取次！

一、東京市內發行の書籍ならば定價の金額丈御送り下さるれば別に送料は要しませぬ。但し法律書、醫書及び教科書は元價が非常に高いのですから送料を添へて下さい。

一、御送金は可成安全な振替貯金にて御拂込み下さい。（振替口座は東京一〇〇〇三、六合雜誌社宛）

一、本部へ當て返書を要する質問書御發しに際しては必ず返信料を添付して下さい。

一、御注文に際しては必ず書名著者氏名及び發行所等を御記し下さい。（海外よりの御注文は郵稅を要します）

六合雜誌社營業部
電話芝五八五五番

本誌定價			
壹冊	一ヶ月分	金廿五錢	稅一錢
六冊	半ヶ年分	前金壹圓四拾五錢	郵稅共
十二冊	一ヶ年分	前金貳圓八拾錢	郵稅共

●海外は郵稅一冊に付金八錢（淸國を除く）
●特別號出版の際は規定以外の代金を申受く

本誌廣告料		
特等	表紙二三四面	一頁 金貳拾圓
普通		一頁 金八圓
普通		半頁 金六圓

●表紙四面は一頁以下の廣告は御斷り申上候
●二回以上連續揭出の際は特別割引可仕候

大正七年十月廿八日印刷納本
大正七年十一月一日發行

（毎月一回一日發行）

定價 廿五錢
本號

發行兼編輯人 東京市芝區三田四國町二ノ六 工藤直太郎
印刷人 東京市本鄉區眞砂町三十六番地 和田操
印刷所 東京市芝區三田四國町二ノ六 三光堂
發行所 東京市芝區三田四國町 統一基督敎弘道會

發賣所 東京市芝區三田四國町 六合雜誌社
振替東京一〇〇〇三番
電話芝五八五五番

弘道會より

□米國參戰の目的　は果して何であるか。十ス女史が來朝され今後數ヶ月日本に滯在して月十九日夜、本會の例會に於て新歸朝者ドクトル高橋清吾氏の試みられたる講演は此問に對して極めて明快なる解答を與へた者であつた。高橋氏の研究によれば米國の參戰は始めから擧國一致では無かつたのである。併し今日では眞に擧國一致である。始めは必ずしもデモクラシーの爲では無かつた。併し今日では眞にデモクラシーの爲である。由來米國の政治は政府の政治で無くして國民の政治である。多少不純なる目的の要素を含んで居た米國の參戰をして名實共眞にデモクラシーの爲の者たらしめた原因は爲政當局者を監視し鞭撻する米國民一般の政治的識見と熱心とに依るのである。私はウイルソンの誠意を疑ふ者では無いけれどもウイルソンの背景を成す米國民一般の高級なる政治的興味の標準を一層エライと思ふ。

□日米兩國婦人間の親交　を促進する目的を以て先般米國ヴアツサル女子大學教授ファネス博士大歡迎會を開催する豫定である。

□會員の動靜　高橋清吾君は在米四年、コロンビア大學の博士號を得て先般歸朝、早稻田大學の教授に就任せらる。羽山勝治君は佐倉聯隊に入營中の所先般無事歸京。小林嶽之助君は今般支那上海英租界福州路書上洋行に轉勤。佐野勝也君はハーヴード大學神學部に遊學猶今般左記諸氏新に正會員として入會せらる、謹んで歡迎の意を表す。

北澤新次郎氏
會津常治氏
石橋智信氏
今井孝暉氏
小林嶽之助氏
和田操氏
工藤直太郎氏
戸板せき氏

遺憾ながら我國には未だ右の始き米國婦人團體なき故、廣告欄所載の通り本月三日本會主催の下にファネス博士大歡迎會の出席者に依つて熱情を以て決議せられたる者に御座候。幹事シー・エヌ・アサートン』に相應する自由基督教徒の婦人團體なき故、

月刊雜誌
毎月一回
一日發行

人性

一部改正定價
金參拾錢
郵稅壹錢

六冊(半ヶ年)前金稅共金壹圓七拾錢・十二冊(一ヶ年)稅共前金參圓參拾錢

人性十一月號

■口繪　先住民族の裝飾品分類圖及び西ヶ原貝塚斷層

■戰爭と人口に就て……文學士　木村久一

■宗教觀念の生物學的觀察……山口祥吉

■生花界の心理提要……理學士　松島種美

■先住民族論……東京帝國大學人類學教室　大野雲外

先住民族とは何ぞやてふ最も興味ある問題を徹底的に詳論せるもの、住居・風俗・體質・食物・漁獵・武器・品物・裝飾・土器製造法・石角器製造法・宗教・船舶・結論の十三章、四十頁の大論文

■愛山文集を讀む……三上義夫

■最古の人類は如何？……ミゲオット　クライル

■人類は適應的メカニズムである……小野寺一男

本編は毎號連載の大論文にして最も科學的價値の充實せるもの、本號にはその第七章及び第八章を全部掲載す。

發行所　人性發行所
東京市本鄉區龍岡町三十四番地
振替口座東京三八二二二番
電話下谷一六七二番・四〇七九番

統一基督教會集會案內

一、禮拜說教（毎日曜日午前十時）（當）三並良

一、傳道講演（毎日曜日午後六時半）沖野岩三郎

一、聖書講義（毎日曜日午前九時）三並良

別揭廣告ノ通リ

一、靈交會（毎木曜日午後六時半）沖野岩三郎

舊約聖書を研究中、猶會員諸君の信仰告白、宇宙、人生等に對する質疑等有りて頗る有意義の會合也

一、日曜學校（毎日曜日午前八時）諸家

滿五歲以上の少年男女の入學を歡迎す

□どの集りにも、又どなたでも自由に御出席、御聽きになるとが出來ますから、御遠慮なく御來會下さい、歡迎いたします。

東京三田芝園橋際

統一基督教會

電話芝五八五五番

自由基督教會集會案內

但し自由教會は夏期中集會は悉く休む。

□講演（毎日曜日午前十時より）

內ヶ崎作三郎、安部磯雄、岸本能武太、岡田哲藏、小山東助、永井柳太郎、今岡信一良、相原一郎介の諸氏之を擔當す

□聖書講義（毎日曜日午前九時半より）

相原一郎介氏擔任

□思想研究（日曜日午前九時）

H. G. Wells God the Invisible King の輪講文學士今岡信一良氏指導

以上會場は女子音樂學校講堂に於てす

□家庭集會（隔週木曜日午後六時半より）

各教會員の宅を巡回して開催し、相互の親睦を計り信仰に關する疑義を糺し共進互琢の實を擧げんとするものなり

□本會は大正四年六月成立し、自由基督教の立場より包容的信仰を宣傳し、現代の思想と生活に適應する宗教生活を樹立せんとする人士の組織せる獨立自給の團體なり、同感の士の來會を歡迎す。

神田錦町三丁目女子音樂學校內

自由基督教會

電話本局三七三九番

◎第一高等學校教授　三並良著

新版

我は斯く信ず

（好評嘖々）

四六判二百餘頁
定價金壹圓
郵稅八錢

□東亞之光評——著者の熱烈なる信仰を披瀝したものである。著者は熱心なる基督信者にして、強烈なる信仰の上にその生活を展開し、信仰を生命として現代に奮闘しつゝある人であるから、本書の如きも、徹頭徹尾熾烈なる信仰的感情思想を以て一貫し、何物をも燒き盡さずんば已まないの概がある、而してその所說の眼目とするところは、信仰を以て、天地の大生命が人間界に移り來れる大なる化育の根源とし、吾人は、此基礎の上に立ちて絕えざる努力を繼續し行く間に、不知不識、神性が成長具備して來て、遂には、人間の生活をして、人間以上のものたらしむるに至り、眞の生命が活躍するに於て、初めて、眞の力あり、自由あり、慰藉があり、神と交涉することが出來て、人世無上の光輝と歡喜とに浴し、眞に意義ある生活を營むことが出來るといふことを力說してある。

□日本及日本人評——舊信仰を打碎いて、それを流動する生命となし自己に吸收して以て科學的文明を背景とせる現世に於て新たなる信仰を得んとする著者の努力の跡を示したるものが本書にして、曾て二三の雜誌上に發表せられたるものを集めて一卷としたるもの、飽迄も神を信じ其處に安心立命を求めんとする著者の眞摯なる努力を多とせざるを得ず、近時續出する輕薄なる俗書と趣を異にす敢て江湖の一讀を勸む。

發賣　東京市芝區三田　振替東京一〇〇〇三番　電話芝五八五五番　六合雜誌社

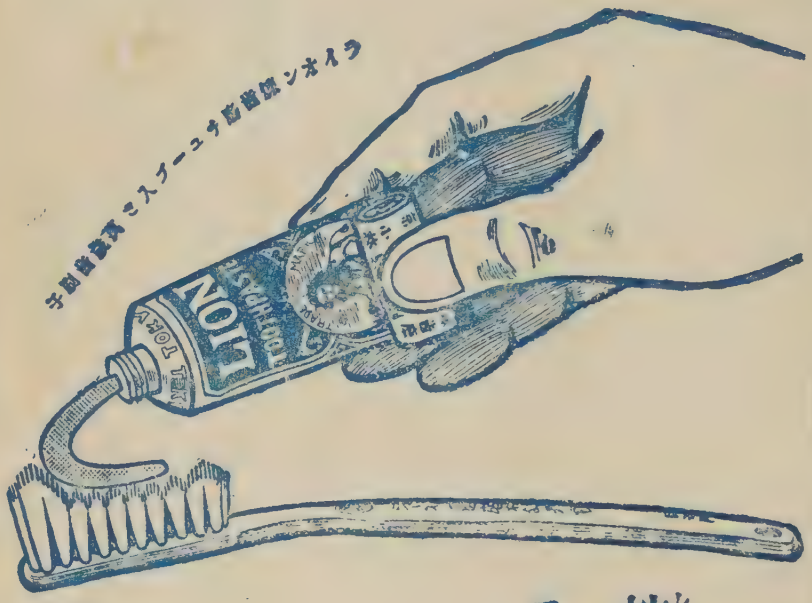
默示錄講義

統一教會に於て
毎日曜日午前九時より

近時基督再臨説を高調する者多きに鑑み、其の説の根據たる默示錄及び默示錄系の思想に對し、嚴正なる批評を試み以て、此の種の迷信を一掃せんことを期す。有志諸君の御來會を希望す。

十一月一日　擔任者　三　並　良

（明治廿五年三月二十七日第三種郵便物認可）（大正七年十月三十日印刷納本）
（大合資雑誌第三十八巻第十一號）（大正七年十一月一日發行×毎月一回一日發行）



搾り出しよき ライオン煉歯磨

チユーブ入！

さわやかなる香味！
すがすがしき使心地！
旅行用には即ちこれ。
家庭用には最も上品。

PACIFIC UNITARIAN SCHOOL
FOR THE MINISTRY

（本誌定價）金貳拾五錢）郵稅一錢

明治廿五年三月廿七日第三種郵便物認可
大正七年十二月一日發行（每月一回一日發行）

六合雜誌第三十八卷第十二號

六合雜誌

十二月號

THE RIKUGO-ZASSHI

No. 455 December 1918

CONTENTS

At the Conclusion of the Great War.....Prof. S. Uchigasaki. 2

Truth as the Eternal Vicfory..... Z. Nomura. 13

Religion and Personality.....R. Hoashi. 25

Profession and Artistic Spirit..... .....K. Sano. 34

Soccal Lite in England of To-day.. ....T. Aizu. 40

Religious Awakening After the War.....T. Ueyama. 49

On the Freedom of the Press and Speech. ..... T. Ichijo. 54

An Interview with Edwad Carpenter.....Prof K. Sato. 61

Give and Take..... ....Pev. I. Okino. 66

From Siberia.....Prof. T. Okada. 71

The Dawn of Peace.....Prof. R. Tsuchii. 81

Moral Spirit in the Participation of
The United States of America in the Great War.
....Dr. Caroline E. Furness. 97

Ne Victory of Liberal Education. .....N. Kudo. 83

Topics of the Day.

New Books.

Published Monthly by the

TŌITSU KURISUTOKYŌ KŌDŌKWAI

2. Mita, Shikoku-machi, Shiba-ku, Tōkyō.

千萬言の

説明を聽くよりは、此の
一管の實驗を御覽なさい
品質本位

花王石鹸

くわおうせっけん

石鹸試驗法

石鹸ん些し削つて試驗管に入れ之にアルコールを注ぎ好く振り混ぜて火に炙れば純良の石鹸は透明となる。若し混合物があれば沈澱し遊離脂肪があれば濁渇が見ゆる。又遊離アルカリを含むものは此の液にフェノールフタレイン一滴を落せば赤色に變ずる。

斯の如く純良無上の品質なるが故に絶えず帝國陸海軍、帝國大學赤十字病院等の採用品となり、化粧衛生の第一品として滿天下に賞讃を博するのです。

花王石鹸製造元
東京馬喰町
長瀬商會

□與謝野一如……沖野岩三郎……六六頁
□西伯利の野より（英詩）……岡田哲藏……七一頁
□うぐひすと水晶（長詩）……佐藤清……七三頁
□至誠無息の曲（短歌）……西淵峻……七五頁
□虛心集（俳句）……一碧樓……七六頁
□綠玉盤（短歌）……伊藤寥々……八〇頁
□平和の曙光（長詩）……土井晩翠……八一頁

時事公論

□自由教育の勝利……工藤直太郎……八三頁
□北米通信……永井柳太郎……九五頁
□米國參戰に現れたる道德的精神……ヴアッサー大學教授哲學博士　ファーネス女史……九七頁
□新年特別號『文明の改造』豫告……七八頁
□弘道會より……
□編輯の後……

六合雜誌

第三十八卷　第十二號

□歐洲大戰亂の終局に際して……內ヶ崎作三郎……二　頁

評論

□眞理は永遠の勝利者……野村　隈畔……一三頁
□宗教と人格……帆足理一郎……二五頁
□職業と藝術家的精神……佐野袈裟美……三四頁
□現代の英國社會生活……會津　常治……四〇頁
□戰後の宗教的自覺……上山　善治……四九頁

研究

□法律倫理學上より見たる言論著作・印行・集會及結社の自由（二）……一條　忠衞……五四頁

文藝

□エドアルド・カアペンタアを訪ふ……佐藤　清……六一頁

六合雜誌

十二月號

クリスマスの贈物には

蘆村蘆谷重常先生著

舊約こども聖書

四六判上製三百七十頁
寫眞版名畫十四葉
地圖二葉挿入
定價壹圓五拾錢
送料金八錢

最新刊

舊約聖書に記された、信仰の厚い聖人や預言者たち、えらい王様、強い大將などの様々な面白いお話を、子供に分り易いやさしい言葉で書き、毎日曜毎に一章を讀めば一年間に舊約の歴史が分る本で、愉快な中に深い教訓があり、神を敬ひ正義を守る立派な人物になるには是非とも讀まなければならぬ本、未來のウヰルソン、未來のロイドジョーヂになりたい少年讀君にぜひこの本をおすゝめします。

新約こども聖書

四六判洋裝製美本
名畫十二葉 地圖一葉
定價金九拾錢
送料金六錢

再版

基督信者の家庭には何よりも大切な新約聖書の文章が、難解で子供に讀み難いのは何よりも殘念な事です。此本は四福音書の記事の大部分を、其の順序を正し、子供に分り易く面白く書き改めた、唯一のこども用基督傳であります。

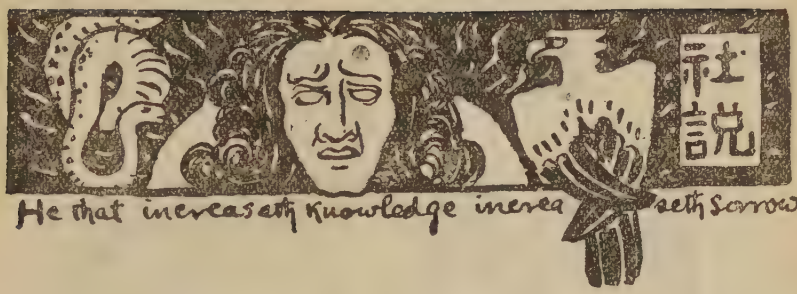
お伽物語 天國の方へ

四六判洋裝美本石版
數度刷挿畫數葉挿入
定價金六拾錢
送料金六錢

「幻の國」「新しい朝」等十二篇、大きな人道的理想と深い基督教的情操を、愉快な空想の中に醇化したお伽噺、溫い、愼ましい心を子供に與へる貴い讀み物であります。

東京京橋 尾張町 警醒社書店 振替東京五五三番

去に於ける凡ての歴史的大事件の如く、思ひかけぬ時に、想像するだに能はざりし條件の下に休戰條約は締結せられた。吾人はこの大戰亂の最初より獨逸軍閥の政策及び外交に對し恒に反對の態度を採り、嚴正なる文明批判の權威を以て、大戰亂の經過を注目したのである。吾人は聯合軍の破れざるべきを豫言した。或る軍人と政治家と實業家とが、ヴェルタンの陷落を豫言したる時に、吾人はこれに反對した。又今年三月同盟軍が西部戰場に一大攻擊を採りし時、吾人は必ずしも英佛軍の爲めに悲觀せず、彼等の堅忍不拔なる國民性はフォッシュ元帥の戰略と相俟つて必ずや踏み止るべき場所を見出すならんと公言した。然れども、獨軍を決定的に敗退せしむることも殆んど不可能なることゝ考へた。殊に獨墺同盟軍が、小露西亞ウクライナ及び羅馬尼に於て殆んど無盡藏の食糧の供給地を占領したるが爲に益々獨墺軍を絶對的に敗北せしむることの不可能なることを信じた。恐らくは聯合軍、同盟軍疲勞の極或は引分けに終るならずやとも想像した。而して萬一かゝる狀態にありても、大戰亂の結果として、人類はその社會的改造及進步に於て得るところあらんと、推定を下した。然るにこの夏以來北米合衆國の大軍次第に西部戰場に集中し、聯合軍の偉力は益々堅實を加ふるに至つた。斯くして同盟軍は朝に破れ、夕べに退き連戰連敗の悲境に陷つた。兵器及食糧の供給が缺乏するに至つたのであらう。兵士の素質が著しく低下したる爲めであつたかも知れない。然るに今秋に至つて、ブルガリアが崩壞し、土耳古は土崩し、墺太利、匈利は解體した。カイゼルを中心としたる流石の獨乙の軍閥も漸く不安の念を抱くに至つた。彼等は手を更へ品を更へて講和の機運を促進した。ところが足許より鳥が飛び立つ樣に伯林、漢堡、キール等に革命の運動が突發した。カイゼルは身を以て西部戰場の大本



歐洲大戰亂の終局に際して

內ヶ崎作三郎

一

歐洲大戰亂は近代世界に於ける一大低氣壓であつた。其吹き來るや突如として地球上十六億の生民を驚かした。一九一四年七月二十九日以來本年十一月十一日に至るまで約四年三ヶ月の間其暴威を逞うした。その間世界は暗黑を以て覆はれ、絕えず電光閃き、雷霆內に叱咤した。世の人は最後の審判に遭遇したるが如く、戰々恟々として、不安なる數星霜に亘れる一大惡夢を結んだ。死せるキッチナー將軍はその暴風雨は少くとも三年間荒れ狂ふならんと豫言した。されど一大低氣壓の襲ひ來るや雲を驅り雨を飛ばし、樹を拂り、屋を覆し、人々は日光と晴空とを仰ぎ見る間がなかつたが、始めあるものは終りあり。東天の白む頃暗黑の王は寂時鳴りを靜めて、明け渡るこの世は、忽然として積雲の間より洩れ出づる朝日影を仰ぎ望むのである。

大戰亂は突如として、終局に達した。不思議なる一切の現象の如く、過

た。勿論遙か北方のケーニスベルグのカントの大哲學がときめいたけれどもそは寧しろ除外例であつた。ゲーテは世界主義者（コスモポリタン）であつた。シルレルはその思想、哲學、藝術を以て人類の爲めに、ベートーヴェンは奈翁（ナポレオン）が皇帝の位に卽くまでは彼に對して、讃嘆渴仰の念に燃えたのである。然れどもカントは一八〇七年に沒し、ベートーヴェンは一八二七年、ゲーテは一八三二年にこの世を去つて以來獨逸は文化史は著しく變化した。

獨逸の文化は最初世界主義的、人道主義的であつた。獨逸人は文化史（クルトールゲシヒテ）に重きを置いた。例へば、英人の書いたる歷史は帝王、政治家の活動に加ふるに商工業の發達を記載したるもの多しと雖も、獨逸の文化史は哲學、文學、藝術の發達に重きを置いたのである。然るに十九世紀の後半に至つて、その文化は民族的並びに國家的色彩を濃厚にするに至つた。この事實を理解する爲めには吾人は普魯西の發達史を追想せねばならぬ。普魯西は中世紀に於ては、今日の獨逸の東北偶に位し、チユートンの武士階級に依つて支配せられ、古來この地方の武人は慓悍決死の輩にして、馬に乘り、疾風の如く、出沒して、戰爭又戰爭を續けた。土地素より荒蕪不毛殖產興業の發達すべくもあらず。勢ひ尙武を以て民族の國是となすに至つたのである。宗教革命の頃この地方の大名は新教を信じて、普魯西侯と號し、隣國波蘭（ポーランド）のスラブ民族の國家に匠隷した。一六一一年に至つて、西のブランデンブルグの公國に合はせられて、一六四四年に至つて全然波蘭より獨立するに至つた。而してブランデンブルグはホーヘンツオールレン家に支配せられたるが故に、普魯西もその系統を君主と仰ぐに至つた。ホーヘンツオールレン家は元來南方獨逸に起りたるものなれども一四一五年ブランデンブルグに君臨した。爾來普魯西はそ

瑞に逃れ、社會民主黨の首領シャイデマンはカイゼルの退位を要求した。かくして局面は急轉直下して獨軍は未だ戰はざる大艦隊と大陸軍を擁して休戰を聯合軍に求めざるを得なかつた。外觀堂々として、併かもその心髓朽敗したる巨木倒るゝも亦斯の如きか。百戰百勝の大投機師の最後の大決戰に、脆くも失敗するも亦斯の如きか沈默なる眞理は、十一月十一日の休戰條約の文面を藉りて、狂暴なる野心と、隱險なる政策と、非人道的なる戰術廢れ再び立つべからざる樣に、摧破されたと宣言したのである。

二

吾人は數年に亘つて、本誌上に於て、獨逸の政策及野望に對して、批評を加へたるが、この機會を利用して、更らに此大戰亂の意義及敎訓を考へざるを得ないのである。吾人は一面に於て、獨逸國民に同情なきを得ない。彼等は古より統一せられざる四分五裂の民族であつた。佛蘭西革命の當時に於て今日の獨乙は三百六十の王國、公國、選擧侯國等に分れてゐた。その西南部諸洲には、佛蘭西、白耳義、和蘭文化と共鳴すべきものがあつた。麗しき萊因の洗ふところその兩岸には詩歌と哲學と、傳說の極めて豐富なる都會が發達した。ワイマーに於て、ゲーテ、シルレルの詩の魂が伸暢し、ブランスウイックに於て、レッシングの思想が培養せられた。ハイデルベルグとマイン河畔のフランクフォルトに於てシューズの神がその隱れ家を求めた。ニュールンベルグの古き町に於て、中世紀の神秘的の氣分が、立つ去り難げにたゝへ〳〵した。

十八世紀後半より十九世紀の初頭に至るまで、獨逸のローマンテシズムの運動は、この地方に起つ

せられた。彼は鐵血政治家であつた。彼は軍國主義を以て獨逸聯邦を統一した。されど彼は極めて、思慮深くして賢明なる政治家であつた。故に獨逸は甚だしく隣邦諸國の怨恨の府とはならなかつた。然るに一八九〇年ウイルヘルム二世卽ち前獨逸皇帝、現ホーヘンツオルレン伯の帝位に上るに及んでビスマルクは敬遠せられ、彼の政治的判斷は重んぜられず、曠世の大政治家はその餘生を不平と閑散の中に送つたのである。前獨逸皇帝は、多方面の才能を有したる君主であつた、彼は政治、外交、財政文學、藝術、軍事に至るまで、相當なる理解を有したのである。但し彼は一種の誇大妄想狂にして、節制と己克の精神を缺き、屢々脫線的言動をなして、識者をして、顰蹙せしめた。

索遜（サキソニー）にトライチケと云へる學者が現はれ、彼は歷史家として、萊府大學講壇に大雄辯を揮ひ、青年學徒を激勵した。彼は性質から云へば、寧ろ普魯西氣質の人にして、その軍國主義に共鳴した。一八六六年[illegible]伯林大學の敎授となりて、力の福音、軍國主義を力說し、この後援に依つて、獨逸の文化を[illegible]へきことを唱導した。稍々ニイエの哲學は超人の道德を說いて、基督敎の博愛謙遜の德義を女[illegible]りと罵倒した。英人にして獨逸に歸化したるハウストン●チャンバーレンは獨逸を謳歌して、世[illegible]の民族なりと激賞した。最近には、ベルンハルヂー將軍盛んに戰爭に依つて文明の進步すべきことを力說し、さらぬだにお國自慢の病膏肓に入りたる獨逸國民を中毒した。嘗て詩人ウーランドは『獨乙よ、獨乙は世界に冠たり』と歌つた。獨逸國民は、普佛戰爭以後の國民的進步に自ら眩惑して、獨逸を以て世界第一の文化國家を以て任じた。かうして、ゲーテやシルレルやレッシング等の唱へたる文化（グルトール）は著しく國家的色彩を帶ぶるに至つた。

の領土と努力に於て進歩發達し、一七〇一年に至つて、フレデリツキ大王の祖父は、普魯西王と稱するに至つたのである。フレデリツキ大王の下にありて、普魯西は征服と侵略を續けた。フレデリツキ大王は好機會を捉へて、墺太利領のシレシヤを併合し、後墺太利又露西亞と協力して波蘭土を分割した。フレデリツキ大王は被征服民族を普魯西人と雜婚せしめて、その道德及思想の進歩を計らんとした。現代獨逸の國家的文化の原因は既に存在したのである。然るに、軍國の普魯西も奈翁の侵略の爲めに、疾風に卷かるゝ枯葉の如く散亂した。一八〇六年のエーナに於ける大敗北より一八一三年萊府の大勝利に至るまで七年間獨逸諸民族は共に、この大侵略者の馬蹄の下に蹂躙せられたのである。茲に於て、政治家にはスタイン、軍政家にはシャルンホルスト、學者にはフヒテ現はれて、新獨逸精神を唱へたのである。然れども奈翁戰爭以後に大小二十六州に分裂したる獨逸民族は、隋圓形の如く二箇の中心を有した。北部諸州は普魯西は盟主と戴かんとし、南部諸州は墺太利を戴きてこれに對抗せんとしたのである。而して時偶々ウイルヘルム一世を助くるに天才的政治家ビスマルクを以てして、遂に普魯西の覇業を大成したのである。一八六四年ビスマルクは丁抹と戰つて、シレシウイツク●ホルスタキンを併合した。一八六六年彼は墺太利と戰つて、その勢力を碎き、一八七〇年遂に佛蘭西と戰つて、ナポレオン三世を降伏せしめた。翌年一月巴里落城に先んじて、ヴイルサイユの宮殿に於て、ウイルヘルム一世は獨逸聯邦元首に卽位した。

三

一八七一年よりウイルヘルム一世の死したる一八八八年まで獨逸の政治はビスマルクに依つて指導

産にしたてはないか。支那に孰れかに中心を有したる獨探の集團は百方苦肉の計を籌らしめて大隈内閣の瓦解を目論んだてはないか。其他彼等は佛蘭西の政治家を誘惑し、米國の内政を紊さんとしたるが如きその罪數ふに遑ないのである。

五

然れども吾人は獨逸の軍閥のみを責むることが出來ない。一八七一年以來獨乙の産業は眞に驚愕を値する大進歩をなした。一八五〇年には農民は全人口の六割五分、一八七〇年には四割分であつたが、一九一二年には二割八分に減小した。これ一面工業の發達る語を統計である。大小成金は暗中飛躍を試みた。獨逸銀行は戰爭前八億數千萬圓の正金を貯へてその投資の場所をバグダッド鐵道に見出し一億六七千萬圓を注入たしではないか。その頭取アーサー●フォングウキンネルは前獨逸皇帝の助言者の一人である。又チッセンと呼べる富豪あり。彼は獨乙國内に港灣、船渠、鑛山を有し、佛蘭西に於ては鐵山を有し、露西亞に於ては倉庫業事業を經營し、その他ブラヂル、アルゼンチン、印度等に於ても大なる倉庫を有してゐる。彼は小亞細亞に於ける獨乙の資本を擁護せなければならない、ことを極論して獨逸の軍閥を働かした。露西亞も亦小亞細亞に於て大資本を投じてゐたのである。獨露の衝突は止むを得なかつたのである。其他の富豪にクルップあり。バルリンあり。シエーメンあり。而してそれ等の事業には概ね獨逸其皇帝を大資本主としてゐたのである。シエーメンは嘗て山本内閣の辭職と關連してその記憶尚讀者の胸中に鮮かなるものがあらう。クルップは世界的名聲を轟かせる大軍器製造所なれば、茲に之を說明する要はあるまい。バルリンは漢堡亞米利加汽船會社の社長にして猶太人の

獨逸人は惟らく我等は世界第一の文化を有する。之を世界に宣傳するは我等の高尚なる義務である。この爲めには、戰爭も侵略も敢て辭するところではない。前獨逸皇帝は嘗て『獨逸は文化なり』と演[illegible]した。かくて汎護主義（パンジャーマニズム、ウイルト・ポリテーク）、世界政策が公然主張せらるゝに至つた。彼等は內にあつては、小學より[illegible]學に至るまでの敎育機關を通して、汎獨主義を宣傳した。又は新聞雜誌記者を買收して音頭取りを[illegible]しめた。小冊子は雨霰の如く國民の間に蒔かれた。かくして、自らの短所を顧みず、他の長所を[illegible]るが如き軍國主義者が養成せられた。

四

既に[illegible]依つて自國の文化を他に强へんと決心したのであれば、この大目的の爲めには、如何なる手段を辭[illegible]べきではない。戰爭の目的は勝利に在る。勝利の爲めにはあらゆる手段と方法を講すべきである。先づ敵狀を知らねばならない。敵とその味方とを離間せねばならない。相成るべくは敵を買收せなければならない。かくて世界空前の大規模の探偵組織と國際隱謀とが獨逸軍閥者流に依つて計畫されたのである。そのために最も禍を被りたるものは日本帝國である。日淸戰爭後の三國干涉に於ては獨逸がその指導者となつたのである。黃禍論（エーローペリル）を唱へて我日本の國際的價値を低下せしめんと試みたるは、前獨逸皇帝に非ずして誰れぞや。米國の有力なる新聞を買收し、日米開戰の噂を立てしめたのは、彼獨逸の軍閥に非ずして誰れぞ。日本の海軍が、墨哥に一軍港を設立したりと云ふ訛傳を流布して、米國人をして恐日病に罹らしめたるも、彼獨逸の軍閥に非ずして誰れぞ。大隈內閣が、日獨開戰を斷行するや獨逸の軍閥は非常に憤慨し、其大使は『日本國民覺えて居ろ』と云ふ棄獨白を置土

多くの職工は社會主義者にして、四百萬票の投票を有し、獨乙帝國議會に於ける一大勢力なれども、秘密外交の結果戰爭は突如として開かれたるが故に、彼は之に策應すること能はず、袖手傍觀の態度を採らざるを得なかつた。殊に露國の事情を知らざる勞働階級は露國を以て專制政治の代表者たるかの如く誤解し、露獨戰爭を以て一種の十字軍戰爭の如く考へたのである。神ならぬ彼等はいかで露國がやがて過激派の掌中に歸すべきを豫知することが出來なかつた。第五階級の農夫は孰れの國に於けると同じく政治には極めて冷淡である。要するに政治に冷淡なる國民は必ずや一種の應報を受けなければならぬ。

大戰亂はかゝる原因よりして生起したのである。スラブ民族の壓迫、巴爾幹の諸問題、英國嫉視、佛蘭西の復讐も亦何等かの刺戟を與へたに違ひがない。然れども以上の三大理由卽ち、軍閥と文化の結合、財閥の煽動、國民間に於ける政治思想の缺陷がこの世界空前の悲劇を發生せしめたのである。

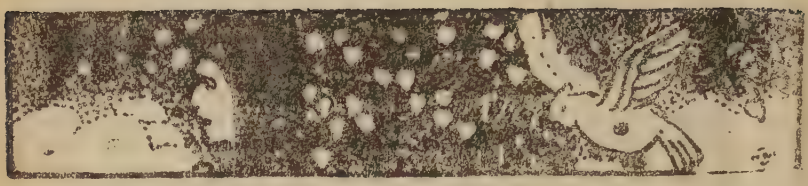
この戰爭に於て獨逸は三大失策を敢てした。第一は白耳義の中立を破つて、英國の參戰を挑發したことである。第二は無制限の潛航艇戰を斷行して、北米合衆國の參戰を挑發したることである。第三は露西亞過激派を使嗾して露國に解體せしめ、遂に自らもその毒に感染せんとする傾向のあることである。而して獨逸は充分その報酬を得たのである。彼等は四年以上に亘つて、其祖國を守つたのである。その義勇報公の精神は賞すべし。然共その無鐵砲なる國家政策に至つて大いに非難せざるを得ない。始め彼等は一擧して巴里を衝き、軍を東に旋らして露都を陷れんと計畫した。然るにリエージュの要塞は容易に陷らず、マルヌの開戰は佛軍をして名をなさしめた。獨軍の不成功はこの時に於て既

富豪である。彼は開戰以來鐵道運輸を總監し、獨軍をして東西南北に自由に移動するを得しめたる大才幹である。而して彼は今回の休戰條件の辛辣なるに驚いて、失望の極その事務所に於て自殺したと傳へられた。かゝる事實に徴しても、獨逸財閥はこの度の戰爭に大いに責任を有することが明かである。商工業が理想化し、道德化するに非ざれば將來に於ても戰爭の危險は潛在するものと覺悟せねばならぬ。

六

內にあつては軍閥の自負心あり、外にあつては財閥の敎唆あり、偶々墺太利皇太子の暗殺の機會にその戰亂が突發したのである。獨逸文化病に心醉したる國民の多數は、獨逸にして一度び起たば、愛蘭は英國に背むき、印度は英國より離れ、日英同盟は破れ、英國女子參政權運動者は益々その內政を紊亂するならんと想像した。然れ共軍閥者流は、一度び巴里を衝けば、我事必ず成らんと、都合よき夢を結んだのである。然れ共獨逸國民にして、英米佛諸國民の如く政治的訓練を受けたりしならんには、これを未前に豫防し得たかも知れないのである。不幸にして獨逸は官僚政治の本家本元である。國民の政治的訓練は甚だ不完全なるものがある。或觀察者は獨逸國民を五の階級に區別する。第一階級は軍閥及び官僚である。第二階級は財閥、第三は大學敎授及び學生、第四階級は熟練なる職工、第五階級は農夫である。

一八七一年以來軍閥及財閥は世界政策の聲に目覺めた。然かも官僚政治なれば政治的自覺は徹底しなかつた。大學敎授は官吏なれば、專門の研究には自由なれども、國家政策を批判するの力がない。



眞理は永遠の勝利者

野村隈畔

一　世界歴史の變化

今や世界における人類生活の現象は、走馬活を如く變化してゐる。而かもその展開する側面は刻々に急激な變化と殘虐とを示現し、何人もその轉化の眞相を豫想することは出來ない。そして亦何人もこの否定することの出來ない慘憺たる現象と戰慄するやうな側面とに對して、晏如たることは出來ないであらう。情あるものは必ず憂戚哀悼し、知慧あるものは必ず思索默想し、意志あるものは必ず何等かの解決を努力するであらう、けれども何人か果してこの偶然性の多き現象に對して、明瞭な透見と徹底せる理解とを得るであらうか。

ラムプレヒトが言つたやうに、世界の歴史は常に繰り返へすものであるならば、現時の世界大戰は果して何を繰り返へしたものであらうか。何人も豫想し得ないこの急激なそして殘虐な生活現象は、果して何を繰り返へしたものであらうか。いかに直覺の銳敏な歴史家と雖も、亦いかに觀察の徹底した心理學者と雖も、世界歴史の上にかゝる急激な變化を展開するとは豫想し得なかつたであらう。宗教の發達し文化の發展した二十世紀の初頭において、塞比亞の無名の一青年が墺國皇儲を射殺するなどいふことは、果して何人が豫想し得たであらうか。しかもそのサラエヴオにおける只一發の銃聲が雲蒸龍變して、全世界の人類を慘憺たる戰爭に捲き込むとい

に歴々として明かであつた。彼等は三百萬の壯丁を殺し、一千億圓の國帑を漸くその覇圖の大頓挫を悟つた。前獨逸皇帝は奈翁の如く天才的軍人に非ず。匆惶して和蘭の國境に向つて走つた。

凡そ一國一民族の文化と軍閥を以て世界併呑を畫して未だ成功したるものはない。その項羽は七十餘戰は勝つて、垓下の一戰に破れた。成吉思汗、忽必烈の事業は夢の如く大閣の朝鮮征伐は失敗に終つた。歴山大王東征は頓挫し、ヂリアス●シーザーは空しく刺客の手に斃れ、奈翁は聖ヘレナの月に嘯くに至つた。前獨逸皇帝を中心としたる軍閥の末路何を敎へるか。吾人之を三思せざるを得ない。

吾人は獨逸及獨逸軍閥の凋落を喜ぶ。然れども吾人は獨逸文化の復活を希望する。軍閥の世界は征服の壓制より開放せらるべき獨逸文化は世界文明の進歩の爲め必ずや偉大なる貢獻をなし得べきを信ず。普魯亞を中心としたる一つの獨逸は崩壞した。ミュンヘン、ドレスデン、萊府、ハイデルベルグを中心としたる西南獨逸、社會民主黨の獨逸、此度更らに勢力を揮ふてあらう。吾人は休戰條約の成立を大いに祝する。然も八百萬人の死者に對して、何んの言葉を以て彼等を弔慰すべきか。唯この大戰亂の原因を探り、その敎訓を學び、將來文明改造を實現するを以て彼等の偉靈を滿足することが出來るであらう。

現下の世界情勢をいかに觀察するにしても、大體二樣の解釋が出來るやうに思ふ。そして現に世の識者は二樣の見解を持して居ると思ふ。卽ち一つは現下の世界情勢は或る一定の因果的法則に遵つて變化しつゝあるもので、斯うなるのは當然であるといふ見解と、も一つは世界大戰は戰慄すべき殘虐を示現したに拘らず、理想の光明に向つて發展しつゝあるといふ見解である。前者は何等かの原因となる事實によつて歸納した解釋で、後者は豫め想定した方向によつて演繹した解釋であると思ふ。前者の見解を科學的靜觀的であるといひ得るならば、後者の見解は理想的樂觀的であると云つてもよからう。成る程、見樣によつては、現下の世界情勢は決して偶然に變化しつゝあるのではなく、相當の誘因となるものがあつて、必然的に一糸亂れず整然と轉化して居るもので、いかなる現象も、いかなる側面も決して無意味なるものではなく、從つてその間に因果律といつたやうな法則を科學的に發見することが出來ると見ることも出來、又理想論者のやうに、世界の變化はいかに暗黑な側面を示現するにしても、結局理想の光明に向つて發展するものであるから、決して悲觀すべきものではないと見ることも出來るであらう。そして常識的な一般の人々はこの二樣の見解を同時に取り入れて巧みに結合し、そこに一種の折衷的な理解を持つて居ることゝ思はれる。勿論他にも種々の見解があるに相違ないが、しかし大體以上の二樣の見解に攝取して差閊えないと思ふ。

然らばこの二樣の見解は果して如何程眞實なものであらうか。いかほど世界の情勢に對して根本的には人生そのものに對して、根據と確實性とを有するものであらうか。科學的な見解が眞理であらうか、理想的な見解が眞理であらうか。勿論一見したところ孰れにも眞理が包含されてあつて、孰れをも否定出來ないやうに思はれる。若し孰れも眞理であるならば、吾々はこの二樣の見解によつて人生の意義乃至價値を決定すべきものであらうか。然り功利的實用的な人間は利巧であるから、二つの見解とも取り入れて、都合のよい時にはこれを結合し、都合の惡い時には分離して孰れか一

ふことは、いかなる人も豫想し得なかつたところであらう。更にかゝる世界の大戰が如何に結着するにしても、まさか中歐における獨逸、墺洪國、露西亞の三大帝國をして斯くまでその衰亡を悲慘ならしむるとは、何うして推察し得たであらうか。否、いかに全智全能の神と雖も、自己の創造したこの人類が斯くもお互に虐殺獸食を擅にするとは到底豫想し得なかつたところであらう。人間の初めて子を產むや、たゞ可愛い一心で子を育て、そして將來における喜びと光明とを夢見るのみであつて、その子が成長して後親の貯へた財產を悉く蕩盡し、遂には殘虐にもその親を弑殺するであらうなどいふことは、親としては絕對に考へ得ないところであらう。けれどもかゝる忌はしきそして恐ろしき結果が當來しないとは、何人が果して斷定し得るであらうか。しかし臣にしてその君を弑し、子にしてその親を弑した亂臣賊子は古來歷史上に決して尠しとしない。否現下の世界大戰において、吾々はもつと戰慄すべき、もつと悲しむべき殘劇を刻々目擊しつゝあるではないか。

二　變化とその見分

諸君！若し世界歷史は繰返へすものであるならば、吾々は現下の世界大戰に對して何等悲しむべき理由を持たない。亦これを善導すべき何等の方法をも持つことは出來ないであらう。何故ならば、反覆といふことは人間の力をもつて否定することの出來ない永遠の法則であるから。けれども現下の世界大戰は果して何事の反覆であらうか。子供が成長して後その親の名を顯揚するにしても、又は反對にその親を弑殺するにしても、歷史家は同樣に何事かの反覆であると斷定するであらう。しかし反覆の過程に果して歷史があるであらうか。

學者は各々その專門に從つて現下の世界大戰を各方面から觀察し、その間に何等かの因果發法則を發見し、その轉化の方向に對して一條の光明を投げようと努力してゐる。吾々は決してその希望と勞力とを排斥するものではない。又その結果に對して何等の價値をも認めないものではない。しかしその尊い希望と努力とが果して完全な結果を齎らし得るや否やを危ぶむものである。

ないだらう。人生僅かに五十年。長生きもしないで生活を營みながら、何故にお互に血を流し骨を挫いて爭ふのであらう。愚痴なるかな人間、悲慘なるかな戰爭と判斷する。更にも一人の天文學者は、偉大なるかな宇宙の法則！永遠にして變化あることなきこの法則は、果して何者がよく蹂躙し得るであらう。天體には運行の法則ある如く生物には進化の法則がある。宇宙はこの法則に從つて運行すると同じやうに、生物及び人類は適者生存、自然淘汰の法則に從つて發展する。生と死、戰爭と平和、そこに何等の意義があらうか、これ皆進化的法則の自然的實現のみ、生と死、戰爭と平和、共に讃美せよ、天空に燦爛たる星晨のあるやうに、是等は地球の表面における美しき花であると判斷するであらう。

三　變化と偶然性

諸君！この三人の天文學者の戰爭觀はいかに異ることであらう。而かも三人共同一の科學的見地において、そして同一の事實に對して、殆んど相反的な見解を持して居るではないか。況して見地を異にして而かも見解を均ふすることがあるなら ば、そは實に不思議といふべきである。見地を同ふして猶ほかくの如くその見方を異にする。況んや見地を異にして見方の異なるは最も當然といふべきである。けれどもこゝに一つの不思議がある、それはかくまでに互に相反した見方が、而かも孰れも同等の眞理を包含して居るといふことである。卽ち吾々は三人の見方の孰れをも絶對に肯定することも出來なければ、亦絶對に否定することも出來ない。言ひ換へれば、三人の見方は孰れも一面において同等の非眞理を包含すると同時に、他の一面においては同等の眞理を包含して居る。從つてそは互に相反するに拘らず、而かも同時に成立し得る所以である。人々が三つの見方の孰れに左袒するも自由であり、又孰れに行くにしても相當の滿足を得るのは、この便利な不思議があるからである。

こゝて前の問題に立ち歸つて、現下の世界情勢に對する科學的見解と理想的見解との眞實性を吟味して見よう。これは勿論その見地を異にして見

方を應用する、さうすれば大抵の現象は說明がつく。しかし人生の意義といふものはかくして決定すべきものであらうか。

二樣の見解の孰れが眞實であるかを決定する前に、吾々は一つ理解しておくことがある。それは同一の事實に對して種々の見方が成立し得るといふことである。卽ち一の曲線に對して或る人は凸線と判斷しても亦或る人は凹線と判斷しても、孰れも否定出來ないやうなものである。勿論これは立場卽ち視點における見方の相違であるが、しかし同一の立場にあるもの必ずしも同一の見方をするとは限らない、卽ち科學的な見方をする人は必ずしも科學者とは限らない。科學者にして理想論をやるものあり、又宗敎家にして科學論をやるものも決してないではなからう。例へばこゝに三人の天文學者があつて現下の世界大戰を批判すると假定して見よう。一人は謂はゆる宇宙的絕對觀の立場から地球を觀察し、無限無窮の宇宙大に比すれば殆んど芥子の如きこの地球は、限りなき星晨の間に散在する一遊星に過ぎない。一個の小星たる地球は靜肅にして燦爛たる宇宙に對して、何等積極的意義を有するものとは思はれない、若し何等かの存在的意義があるとすれば、そはたゞ必然的な天體運行の法則に順應して居るといふに過ぎないのであつて、地球の表面に變現する現象の如きに至つては、全く何等の意義も有つてゐない。神の見地から見れば、善もなく惡もないやうに、宇宙の見地から見れば、世界の變化に意義もなく價値もない。戰爭も平和も否人類の存在すらも悉く泡沫に過ぎないと判斷するであらう。然るに一人は之れに反して人類の存在に同情愛慾し、整然として運行しつゝある宇宙における地球は、矢張りこの整然たる法則を示現して決して誤ることはない。勿論地球は宇宙に比すれば言ふに足らざるほど小さいものであるけれども、星には星の軌道あり月には月の軌道ある如く、地球には亦地球の軌道があつて一定し、そして是等諸星の軌道は永遠に整然として決して變化あり齟齬あることない。然るに芥子の如き小星の表面に蜉蝣のやうに現れた人類は、なぜこの整然たる法則を自覺し得

に不可能であるから。

こゝに一人の行爲者があるとするに、その者の行動を評して善でもあり惡でもあり、そして善惡の結合でもあると言つたならば、恐らく何人もその判斷の意義を疑はざるものはないであらう。又その行爲は自由でもあり必然でもあり、自由と必然との結合でもあると云つたならば、決して正氣でなした判斷とは受取らないであらう。然るに科學的說明と理想的說明とは正にかくの如き判斷をして居るのである。成る程現下の世界の情勢は、見樣によつては科學的にも說明が出來るし、又理想的にも說明が出來る。しかしそれが相對的である爲めに否定することも出來るのである。容易に否定し得るやうな理解によつて、何うして劇造的な根本要求を肯定することが出來ようか。

諸君！現下の世界大戰を惹起したやうな複雜な人間生活は、科學論や理想論によつて單純に說明が出來るであらうか。人間生活のいづこに Like produce like といふやうな法則が存在し得るであらうか、又人生發展のいづこに理想に對する接近といふやうな過程があるであらうか。若し人間の生活が科學的法則や宗敎的理想の如きものによつて、自然的にそして整然と發展するものであるならば、そこに何等の問題もなく又何等の要求も必要はないであらう。けれども人間の生活は少し落ち付いて考へて見ると、決して法則や理想によつて決定されてゐないことが容易に解かる。言ひ換へれば、人間生活を根本的に決定するものは自然的法則でもなく、又單なる理想でもなく、ブートルウの謂はゆる Contingence なるものが最も強い決定原理であることが解かる。こゝに三人の貧困者があつて到底餓死を免れない狀態にあるとする。卽ち三人の究極の運命が餓死に至るのが自然的であり、そして理想的であるとする。然るに一人は自己の運命を悲觀して自殺し、一人は自己の運命に柔順に服し得ないで竊盜を働き、も一人は幸ひに富豪の知己を得て生命の安全を保つたとする。さうすると三人の內たゞの一人も自然的餓死を遂げたものはない。今これらの生活現象に對して果して科學的說明が可能であらうか、理想的說

方の相違に過ぎない。從つてそは人生に對する絶對的の根據と確實性とを有つてゐないことは當然であらう。前に述べたやうに、見地を同ふして而かも相反的な見方が成り立ち、相反的な見方にして而かも同等の眞理をもつて同時に成立し得るとせば、孰れも相對的の眞理を有して居るけれども、しかし人生の意義を決定し得るやうな絶對的の確實性を有つてゐないことは明かである。事實吾々は何の衝突も感ぜずに是等二樣の見解を持して居る。そして世界の情勢はいかに激變があるにしても、そは何等かの說明が可能であり、又何等かの意義が存在し得るものと決め込んでゐる。そして實際に世界の情勢は科學的にも說明が出來、又理想的にも說明が出來る。そして又科學的說明が眞實である程度に理想的說明も眞實であり、後者が確實である如く前者も同じく確實である。そして又兩者は相對的であるといふ共通の眞實性を有つて居る爲めに、實用的に結合することも出來る。

けれども相對的の眞實性を有つて居るといふことは、吾々の常識的理解を滿足せしむるに過ぎないものであつて、これによつて人生の意義乃至價値を決定することは到底出來ない。若し吾々が單に理解をもつて滿足するならば、科學的說明も結構であるし、理想的說明も結構である、この兩者を實用的に結合し得るならば更に結構であらう。けれども吾々には理解の滿足の外に自律的決定的な要求がある、卽ち價値を自發的に決定せんとする强烈な要求がある、ショウペンハウエルの謂はゆる Das metaphzsiche Bedürfnis といふものを有つてゐる。この要求は自發的で創造的なものであるから、單なる理解によつて滿足せしめ得ないことはいふまでもない。卽ちこの要求の要求する當爲といふものは理解によつて決定することは出來ない。理解はいかほど確實でそして眞實であるとしても、それ丈けでは決して形而上的要求を滿足せしむることは出來ない、言ひ換へれば、當爲を決定する根據を有つてゐない。そこで吾々は根本的な不滿と不安とが生じて來る。何故なれば、相反的な見解を立し得るやうな常識的實用的理解によつて、人生の意義乃至價値を決定することは絕對

吾々は自己の內面性において無限の創造力を包藏するからである。

吾々は走馬燈の如き世界の激變に眩惑して茫然としてはならない、又世界の人心を惑誘せんとする暴論愚說に捲き込まれてはならない。吾々は世界の激變を惹起した根本の創造力を摑まなければならない。吾々は決して不安を起してはならない。

諸君！所謂自由思想家をもつて自任するものゝ態度を見よ、彼等は恰も吾こそ人類生活の根本方向を摑み、世界變化の眞相を透見し得たと自信し、そして三軍を叱咤する猛將の如き傲然たる態度をもつて、不安動搖に浮沈する人心の歸向を指導せんとしつゝあるではないか。彼等は主張するであらう、世界變化の過程には整然たる法則があり、人類發展の方向には永遠の理想がある、將來の人類はこの法則を自覺すると同時に、永遠の理想に向つて努力しなければならないと。そして不安に疲れた人類は覺束なくも、所謂法則とか理想とかいふものを求め漁つて右往左往してゐる。嗚呼！

哀れなる哉人類！諸君！吾々は今やかくの如き醜態を演することを止めねばならぬ。そして所謂識者思想家なるものゝ專賣的に强制する科學論或は理想論に、果していかほどの根據と確實性とを有するかを靜かに考へて見なければならぬ。

こゝに心理觀察の銳敏な學者があるとする。彼れは突然半鐘の音を聞いて火事と判斷し、その方向を知らんとして小さい露次を飛び出したるに、群衆の右方に走るを見て忽ちその方向を直覺し、火事は右方にありと叫ぶが如きものである。然るにその反對の露次から飛び出した者は、矢張りその方向を直覺して火事は左方にありと叫ぶであらう。そして群衆はこの學者の叫びを聞いて彼れ等は狂人なりと笑ふであらう。諸君！所謂識者なるものゝ科學論及び理想論は、將にこの學者の叫びの如きものである。彼等の漠然たる主張に何等の根據も確實性もあることない。人生の意義及び價値を決定せんとする吾々の形而上的要求は、相反的な理解によつて指導せらるべきものではない。火事は同一方向にありとするも、見樣によつては

明が正當であらうか、若し第一者及び第二者が科學的であるとするならば、第三者は非科學的でなければならぬ。第三者が理想的であるならば、第一及び第二者は非理想的でなければならぬ。かくしてこの一小事件に對して科學論も理想論も成立しないのである。若しこの現象を決定したものが法則でもなく理想でもないとするならば、果して何者が根本的に決定したであらうか、それは言ふまでもなく偶然性そのものでなければならぬ。偶然性こそ第一者を決定し、第二者を決定し、更に第三者を決定した絶對の根據でなければならぬ。そして以上の事件の如きは人生における例外的なものでも假想的なものでもなく、極めて有りふれた日常の出來事であるとするならば、偶然性は實に人生全體を根本的に決定するものと云つてよからう。

四　偶然性と眞理

諸君！今や世界における人類生活の情勢は走馬燈の如く開展してゐる。而かもその刻々の展開側面はます〳〵激烈と殘虐とを增加しつゝある。情熱あるものは冷却せしめられ、知慧あるものは喪失せしめられ、意志あるものは根柢から失望し、挫折せんとしてゐる。諸君！この滔々たる人類生活の大波濤は那邊に向つて展開せんとするであらうか。人類生活の根本方向は那邊に求むべきであらうか。人生の意義及び價値は果して那邊に決定すべきものであらうか。

諸君！吾々は單なる理解や漠然たる方向を求めて安んずることは出來ない。吾々は虛空を求めて東西南北に走るが如き狂態を繰り返へすことは出來ない。吾々は人生現象の全體を根本的に決定する動かすことの出來ない創造的な力、卽ち當爲を確實にそして强烈に把握して、もつて人生の意義乃至價値を徹底的に規定しなければならない。解かり易く云へば、吾々は各自內面的に無限の力を得て、それによつて哲學的には人生の意義乃至價値を規定すると同時に、實踐的には一切生活の具象的な價値を創造しなければならない。かくして初めて吾々は世界のいかなる激變にもいかなる轉倒にも動ずることはないであらう。何故なれば、

前にも述べたやうに、法則や理想を弄してゐるものは偶然性を理解すること殆んど不可能であるから、これを今言語によつて理解せしむることの困難を覺悟しなければならない。

これを佛教流に解して見れば、偶然性は法則にあらず、理想にあらず、法則と理想の結合にあらず、偶然性は非法則にあらず、非理想にあらず、法則と理想との非結合にあらずといふことが出來るであらう。然らば偶然性は實際に無いものであるか、否偶然性は無にあらず、有にあらず、有無結合にあらず、結合にあらざるにあらずといふことが出來。かくして吾々は偶然性を具象的に理解し得ずして、遂にその言語に窮するであらう。然らばこれを儒教流に解して、偶然性は法則にあらず、理想にあらず、法則と理想との中庸にありと言つたならば何うであるか。言ます〳〵妙にしてます〳〵不可解と言はねばならぬ。古來、眞理兩極端にあらずして中庸にありなど言つて居るが、これほど不可解な表現はない。中庸とか中間とかいふとは、到底直覺に依らずんば解すること出來ない言語である。ベルグソンがあの難解な形像（Bild Image）を說明する爲めに、それが實在論者の物象よりもより流動的であり、觀念論者の概念よりもより實在的であるといふ理由によつて、『形像は物象と概念との中間にあり』と言つて居るが、恐らくこれは失敗の說明と云つてよかろう。世界の學者にして恐らくこの『中間』の哲學的意義を解したもの、殆んど一人もないと言つてよからう。かくの如く眞理の說明は困難なものである。印度人も支那人も泰西人も悉く失敗してゐる。しかも失敗するのが當然である、何故なれば有限の言語によつて無限の眞理を摑まんとするのであるから。

然らば偶然性は遂に理解し得ないであらうか、必ずしもそうではない。吾々は『偶然性』なる言語によつて捕捉した眞理は、何等かの意義を有つて居るに相違ない。この意義を言語によつて求むるのでなく、言語を手段として言語の裏面に、伏在する或る動的なものを摑むことによつて、その意義を理解することが出來る。言ひ換へれば、言語を手段とするに拘らず、出來る丈け言語の形式上の

右方にありとしても左方にありとしても、或は東にありとしても西にありとして一向差支いない。これは單に理解を主とするからである。けれども實際の必要に當ては、火事は何處にあると具體的にその所在を確めなければならない。吾々の要求も亦かくの如く具體的な直接的なものである。この要求の何たるかを內面的に摑むとによつて、吾々は方向や理解を超越すると同時に、不安動搖を根本的に除くことが出來る。然らば要求とは何であるか、偶然性そのものである。

世界の現象はいかに激變するにしても、その根柢には必然的な創造力がある、それはしかし法則でも理想でもない。人類生活を支配する永遠の力は、決して科學者のいふやうな自然的法則でも、樂天家のいふやうな理想でもなく、そはたゞ唯一の偶然性そのものである。偶然性は無限の創造力であり、永遠の發展力である。法則や理想などを弄つて居る間は、人類は永遠に自己の生活の眞相を理解すると出來ないと共に、又永遠に自己の價値を創造すること出來ないであらう。唯一の創造力たる偶然性を理解し且つ體驗し得ないものは、世界人類の永遠のそして無限に神秘の發展眞相を解すること出來ないばかりでなく、又人間として何事も爲し得ないものであらう。偶然性こそは永遠の創造力であり、永遠の眞理であり、そして人生の意義及價値を決定する絕對の當爲者である。偶然性を解するもの、これ眞に眞理の把握者である。

五　眞理の新しき解釋

諸君！余の殆んど囈語の如き議論に辟易してはならない。余は決して好んで奇論を吐くものではない。余は飽くまで永遠のそして具體的の眞理に忠實ならむと欲して居るものである。そして余は眞に偶然性の永遠の眞理なることを信ずるものである。

けれども眞理を理解すること却々容易なものではない、これ吾々は殆んど遺傳的に習慣や言語によつて繫縛されてゐるからである。しかしこれを理解し得ば、眞理ほど單純なそして力のあるものはない。然らば偶然性とはいかなるものであるか、

自由は吾々における體驗自證の事實であつて、何人にも否定の出來ない明白なことである。卽ち體驗的には何人に對しても普遍的な根據と確實性とを有つて居る。それは體驗的であるから理解と方便とを超越する。言ひ換へれば、自由は法則や理想によつて理解さるゝものでなく、又自由は價値を創造し當爲を實現する手段でもない。却つて自由は最も根本的な體驗の事實であるから、それ自身直ちに價値であり、直ちに當爲である。從つて論理的には法則も理想も自由によつて創造されたものである。この意味において自由は何人に對しても明白な事實であり、又何人においても最も强烈な根本要求であるけれども、たゞ吾々は言語により理解によるが故に、「自由とは何ぞや」と問ひ得るのである。

是において余は自由に對して新しい現代的な解釋を試みねばならぬ。偶然とか飛躍とかいふことは餘りに漠然としてゐる、自己決定といふことは餘りに抽象的である。吾々現代人は具體的で而かも必然的創造的に哲學的解釋を欲してゐる、そしてそれに余の解答は斯うである、

自由は自我の發展動向である

と。尙筆を改めて余の自我哲學を論じよう。

宗教と人格

帆足理一郎

一

人は已が求むる處のものを崇拜する。原始人民は禽獸草木日月星辰を崇拜した。夫れは是等のものが直接彼等の生命と離るべからざる關係を持てるものなるが故に、是等の自然物に接近して生の力を得たいからであつた。例へば禽獸崇拜の著名

束縛を脱却してその内部に滲入することによつて、偶然性の眞相を摑むことが出來ると思ふ。

こゝにおいて偶然性は法則にあらず、理想にあらずといふ理由によつて、これをhasardのもの若しくはrandomなものと解すべきでない、眞理は決して危險なものでも出鱈目なものでもない。眞理は必然的なことをして創造的なものである。吾々は必ずしもブートルウのContingenceなる言語に拘泥する必要はない。もつと正當にそして動的に解すれば、そはベルグソンの所謂Jumpである。卽ち飛躍である、更に根本的にはエラン・ヴイタールである、これを當爲的に言ひ表せば自由である。創造ということも價値ということも自由によつて解すことが出來る。偶然性とは卽ち自由そのものである。自由は決して法則にあらず、理想にあらず、けれども自由は法則に根據を與へ、理想に光明を與へる。法則と理想とは自由によつて初めて相對的眞理性を得ることが出來る。自由は唯一の眞理である、唯一の創造者である、唯一の當爲である。

諸君！この自由の境地に立つて世界における人類生活の激變を觀察して見給へ！世界變化の眞相は立ろに理解出來るであらう。そこに果して何を發見するか、法則か否、理想か否、たゞ偶然性卽ち自由を沿々として大波濤の如く發展するを見るであらう。世界の人類はその否定すべからざる必然的な形而上的要求によつて、自由に憧憬し、自由を絶叫しながら、自由の具體的獲得に向つて、或る時は瀑澗たる溪流の如く、或る時は急轉する渦巻の如く、或る時は逆捲く怒濤の如く發展するを見るであらう。その壯觀なるや實に言語に絶すと雖も、これ決して法則や理想の然らしむるところでない、たゞ自由の一波一浪に過ぎない。生るものはたゞ自由のみ、發展するものはたゞ自由のみ、創造するものはたゞ自由のみ、自由を外にして何者もなく、自由を外にして何者も理解することは出來ない。自由は實に人類生活における永遠の根本的方向であり、永遠の勝利者である。

けれども諸君誤解してはいけない、前にも言つたやうに眞理は決して理解し易いものではない。

信じてゐた。彼等の宗教に於ける神に對する態度も頗る低級な功利主義で、日常生活の幸福の爲めに、又は消極的に災を避けんが爲めに、神の助力を求めたのである。息災延命一家繁昌は決して稻荷樣のみの專賣特許ではなかつた。宗教は悉く夫れ日常生活の福祉冥加の爲めであつた。併し人間は何時までも自分の幸福をのみ追ひ求めて生くるものではない。最初一の自動的物體として宇宙の波に浮き上つた生命はアミイバより人間に至るまで其長い〳〵進化的過程を經、種屬の發展に伴うて個性の意識が少しづゝ明かになり、人間の原始時代は此個性の肉體的存續の爲めにどれだけ外界に逆つて悲慘な戰を續けたか知れぬ。宗教は實に生存競爭の武器として、原始人民が生活の安全と發展を企る精神力として此世に生れ出てたのであらう。乍併、人間は單に自分の現狀に滿足してゐるものではない。彼れが他動物に勝れて偉大なる點は其超個人超人間的努力に存する。成る程彼れは其環境を人間化した。太古の人は其崇拜する禽獸草木や日月星辰までも人間化した。人間的の活物を思つてゐた。後日是等の自然物を棄て去つて、宇宙の大靈とか大原理とか大根原とか云ふ哲學的な形而上的な存在を崇拜するに至つても、尙其人間化を離るゝことは出來ないのである、是れ吾等が注意に値ひする問題である。

二

既成宗教の最も優秀なるものは勿論クリスト教と佛教であらう。而して宗教は原始的時代の素朴な擬人說（アンスロポモフヒズム）より一步進んで人格主義（パアソナリズム）のものとなつたのであるが、人文の發達と共に宗教は益々此人格主義に中心を求めて來るやうになると私は思ふ。概括的に云つて、クリスト教が佛教に勝れたる重要點は、そが一層人格的なる處にある。勿論佛教でも觀音だとか勢至だとか、或は釋迦を應身佛と見るなど、人格的分子が少ない譯ではないが、不動や藥師や普賢や文珠や素と是れアンスロポモオフヒズムの遺物であつて、其昔ウバニシャッヅが多神教を併呑して汎神的一神教に移り、釋迦の無神論を經て擬人的表現の一切を法海一如の水に投け込んでゐたものが後日復舊したものに外なら

の事實として北米のインディヤン人種の如きは各
舍族別々に鷲とか狼とか袋鼠とか熊とか云ふ動物
を其舍族のトオテム卽ち標號として崇拜してゐ
る。鹿や狼なるトオテムは彼等の神であつて、平
常最も大事に尊重してゐるものである。鹿族の人
は狼は殺しても鹿は殺さぬ。又狼族の人は鹿を殺
しても狼は殺さぬと云ふ風に、各舍族のトオテム
となれる動物を同族の人間以上に尊敬したものて
ある。併しトオテムを殺さぬことは通常の場合て
あつて、何か舍族の大祭があると彼等は其トオテ
ムなる動物を殺して奠祭の供物とし、同族の者一
同集つて其肉を喰ふ。是れは同族意識を強むると
云ふ社交的事實のみでなく、彼等はトオテムの肉
を共食することによつて、其トオテムの血が彼等
の內に流れ、彼等はトオテムの如く強くなるもの
と思うてゐた。彼等は卽ち彼等の神を喰うて神の
如く強からんとを願ふたのである。此神を喰ふ現
象は決して蠻民のみ特徵ではなかつた。中世紀の
キャソリック教では聖餐式に葡萄酒とパンを供へ
之をクリストの血肉とし、肉を喰ふものとして頂い
たのてある。十八世紀のフランス革命頃モンテス
キュウは、其鋭犀なる批評が教會の忌憚に觸れん
ことを恐れ、トルコ人の歐洲文明觀察記に擬して
『クリスト教徒は彼等の神を喰ふ』とて聖餐式の愚
を罵つた。實際中世紀のクリスト教徒は彼等の神
を喰つたので、神を喰へば、卽ちクリストの肉や
血を啜れば、クリストの如く強き賢き完全なる神
人となると信じてゐたからてある。キャソリック
教會では此聖餐式の儀式と其意義（卽ちクリスト
の血肉を喰はさればクリストの如き不死の生命を
得ることは出來ないと云ふ信條）はクリスト自身
が創始されたもので、彼の十字架の前夜弟子達と
の別宴に於て之を宣傳されたものと云ひ傳へてゐ
たけれど、其實、其肉を喰へば其者の如くなると云
ふ親念は原始時代の社會から遺傳されたもので、
キャソリックの聖餐式はトオテミズムの一變形に
外ならぬ。

昔の人は近代人に較へて遙かに物質的であつ
た。彼等は駝鳥の足を喰へば足が達者になると思
ひ、鷄の頭を喰へば早起きが出來るやうになると

格的分子である。宗教が人格を根底とすることを遠かるに從つて宗教は哲學に墮して了ふ。波羅門が人格的(寧ろ人間的)分子を超越して汎神的のアートマン哲學となり、佛教が人格的表現を假現と見て眞如哲學に墮して了つた。私は墮して了つたと云ふ、何となれば、宗教の對象なる神の本體を眞理だの、絕對だの、第一原理だのと云ふに至つては最早宗教ではない。そは哲學である。されば佛教が宗教である間はやはり阿彌陀や大日如來を究極の實在として崇拜してゐる間である。神學は勿論宗教ではない。だから神學的に神の本性だの絕對性などを云々する樣になれば、夫れは宗教でなく、哲學となつて了ふのである。

三

然らば宗教は何故に人格的考察又は態度を必要とするのである乎。換言すれば、神は何故に人格的であらねばならぬ乎。吾等は何故に非人格的の眞理や正義や善美を崇拜し得ないのである乎。日本人の忠義心は宗教的だと云はれてゐる。夫れは宗教的に熱情的であるからであるが、日本人が愛國心に熱狂し得るのは日本の愛國が忠君と共に稱へられ、愛國の對象が天皇によりて代表されてゐるからである。米國人などゝ愛國心を鼓吹する爲めに國旗に向つて敬意を表せしむると日本人以上であつた。併し國旗が單なる國旗である間は宗教的愛國心とはならぬ。然るに今度の戰爭に於けるが如く、正義人道の愛が殆んど人格化されて彼等の愛國心は實に宗教的の熱情と化してゐるのである。即ち米國の國旗は生きたデモクラシイ(パテリオティズム)の標幟として人格的の力を以て米國民を指導してゐる。されば人間の忠義心が人格的對象を持つに從つて一層宗教的となり、又忠義心が宗教的となるに從つて其對象が人格化され、アンクル、サムは米國魂の權化として國民の精神生活を支配するに至る。

思ふに、宗教の對象が常に人格的なるは夫れ崇拜する人間が人格的存在に至上の價値を認むるからではない乎。嘗て生きんが爲めに、幸福を得んが爲めにのみ神を求めし原始時代より進歩發達し來れる文明人は今や道德に於ても快樂説や幸福主

ぬ。乍併人間の宗教的欲求は何時までも抽象的な原理原則を崇拜することは出來ぬ。何等か人格的應答のあるものでなければ尊信の對象となることは出來ぬ。處で釋迦の沒後、間もなく釋迦自身が佛陀として、人格神として崇拜される佛教は起つたのである。眞言の大日如來はヴェダのデヴアから脫化したものであらうが、今日大乘佛教の最も近代的となりたる眞宗に於て崇拜する阿彌陀如來は報身佛とか云つて佛教の三位一體の一に擬せられる神であるが、是れとて其人格的表現は假りてあつて、其正體は如何と追究すれば佛教徒は答て曰く、宇宙大靈の本體は卽ち眞如である、眞理であると。

佛教の根本義を究追すると、諸佛は皆假現であつて、其主宰神とも見るべき阿彌陀如來すら人格的分子を褫かれて、抽象的な『眞如』に歸して了ふ。此處が佛教とクリスト教との徹底的に異つてゐる所以である。卽ちクリスト教では、眞理とか美とか善とか云ふ如きものは只神の特性（アツツリビュウト）と見るだけて、是等の特性を具へた本體なる神は卽ち人格的實在である。佛教では人格的表現を假現と見て、非人格的眞理を實體と見るが、クリスト教では非人格的特性なる正義や愛や眞善美の點に是等のものを體現した實在なる人格神ありと見るのである。

プラトンの至上善やスピノザの實體（サブスタンス）やヘエゲルの絶對觀念やロッツェの宇宙根原（ワルドグラウンド）やスペンサアの第一原理やベアグソンの生の衝動（エラン・ヴヒタル）や——是等哲學者の思索に基く宇宙の至高者はクリスト教の神の如く人格的のものと云はんより寧ろ佛教の眞如の如く非人格的のものと云ふ方が近いのである。ロッツェのワアルドグランドを人格的と見はクリスス教的ではあるが、そは人格的實在が宇宙根原だと云はんより、宇宙根原が人格的であると云ふ意味であつて、ロッツェの人格觀は吾等人間界の人格觀とは大に趣きを異にする人格を想像せるものなるが故に、假令へそは宗教的ではあつても、尙哲學的非人格の分子を多量に殘存するものと云はねばならぬ。

私は思ふ、宗教の宗教たる所以の一とつは其人

たものであらう。朋友關係は男女の愛の如く完全な結合ではなく、親子の關係は聊か階級的で、平等なる靈と靈との結合と見るには足らないであらう。人間的滿足の極致として恐らく男女の相愛關係の如きものはないのは、所詮それが全く純なる相互的、情的、道義的即ち人格的關係なるが故である。されど人間的滿足は人生の欣求の究極ではない。我等は何故にか知らぬが、超人間的實在、即ち宇宙的大人格的に向つて憧れざるを得ない。吾等の愛心は男女關係の夫れの如き愛を超越して、今一層恒久なる、今一層完全なる、今一層清き美はしき靈的の結合に向つて不絕憧憬の歩を進め、努力の足踏みを急ぎつゝある。

吾等は個性即ちインデイヴヒデユアリチを通り越して人格即ちパアソナリチイたらんことを求めてゐる。吾等は自然の本能に繫がれ又は環境の權威に支配されてゐる外律的な個性から進んで自己の心的生活を自から統御し、自律的に外界に向つて行道する獨立自由の人格たらんことを要求してゐる。我等の宗教が人格的なるは是れが爲めである。吾等は此微力を盡して成し遂げ難き處、之を超人間的の人格力に求め、彼れの偉大なる靈力を藉りて吾等の人格を一層光輝あるものたらしめんと欲求してゐる。宗教は今や實に是れが爲めに存在してゐるのである。人或は云はん、それでは宗教は人格完成又は向上の爲めにする功利的のものではないかと。宜敷しい。吾等の宗教は所詮功利的であるかも知れぬ。而も其功利は物質的なものでなく、高尙な靈的欣求である、最も高尙な豐富な清き美はしき生活の爲めにする功利である。斯る意味に於ての功利主義なれば吾等の喜んで遵奉すべき處ではない乎。吾等は宇宙の大靈と人格的道義的融合の關係に入らんとする功利の爲めに宗教を奉じてゐるのだと云はれても、決して恥づべき所はないではない乎。

四

然り吾等の追求する所は人格の向上である。而して人格の圓滿な向上は神と人との靈的融合によつて遂げ得らるのであるから神を信じてゐる。恰も若い男女が清らかな相愛の關係によつて相互の

義や功利主義や便宜主義を見下げて人格主義の道徳を至上とするに至つた。同時に宗教に於ても吾等が神に求むる處は、此個々生命の幸福や快樂ではない、單に生活欲の充全なる滿足のみに向つて神に憧れてゐるのではない。吾等は內的の欲求として先づ已が人格の完成を求めてゐる動物や野蠻人に個性（インディヴィデュアリチイ）はあるてあらうが、彼等に人格はない。宇宙の進化は無生物より生物を生じ、生物に心的生活の發展すると共に個性の觀念は發生した。併し個性は今や一層進んで人格の觀念を生じ人間は其文化的過程を通うして彌々人格的分子の增殖に努力しつゝある。

されば吾等が神に求むる所は人格的要素の發展である、向上である。吾等は宇宙に人格的の神ありや否や理論的に證明することは出來ない。併し人間の內的生活に人格的要求があつて、不絕、外界の事物に向つて人格的關係を結ばんと努力し、宇宙の精神力を總括的に大なる靈的人格と見て、人格的に之に接近しよう、又人格的に融合しようと求めてゐる吾等の生活經驗は否定すべからざる事實である。吾等は宇宙の人格的存在を追求して是れと人格的に交涉することによつて、卽ち道義的、相互的、友情的關係を結ぶことによつて、我が生命の至樂となし、究竟の滿足を見出すものとなす。其何故に然るかは吾等の知る處ではない。見方によつては是れも一種の快樂主義であるかも知れぬ。併し夫れは物質的のものではなく精神的の滿足である。我等の生活に於ける至上の滿足は美衣美食ではない、高位高官ではない、又富や名や成功ではない。夫れは靈と靈との融合である。一つの靈が他の靈と結合して二者一體、兩體一心の融合を遂げることである。靈と靈との融合は神秘的のものであつて、二者別々の存在を有しながら、尙靈に於て一體として結合してゐる。夫れでは全く一體であるかと云ふと、必ずしも然らず、兩個の精神は各別の働きなし、兩者各別の個性人格を保存してゐる。

此兩體一心なる靈と靈との神秘的融合を日常の生活事相を以て例解すれば、多分夫婦關係、或は男女相愛の關係が最もよく此間の消息を具體化し

想なき人の生活を見よ。彼れの生活は支離滅裂て行き當りべつたりの目當てなき中心なき、萍の如く漂々浪々、今日はこちらの岸に咲き明日はあちらの岸に咲くと云ふ、其日々々、或は刹那々々の斷片的生活を送つてゐる。從つて前後左右に矛盾撞着計りて、昨日の我れを今日は全く否定し去るかと思ふと、翌日は又今日の生活に對して反逆を與し、自分が過去の生活を無意義なものにして了ふ。

人間此世に生れて自分の生活の意義を創造し得ない位詰らないことはない。宇宙の事物は皆夫れ創造的に進化しつゝある。人間は獸類の域を脫して、其人格的個性を創始し、意義と價値とを創造しつゝ進んて往く。而して吾等の生活に意義と價値を與ふるものは卽ち高遠の理想てある、恒久の目的である。吾等は神なる宇宙的英雄、宇宙的人格の實在を信じて、彼れと靈交（コムニオン）の生涯に入り、神と目的を同うし、理想を同うし、憧憬を同うし趣味を同うし、同情同感の境地に入る。是れ神人合一の秘訣てある、靈的融合の神秘てある。宗敎は卽ち吾等が個々人格の限りなき向上に對する努力に最も偉大なる衝動を與へ、吾等が人格的發展に最も必要なる愛の力を注ぐものである。愛は夫れ人格の匂ひを作り成す最大の要素てあつて、人は清き愛の理想に統一されて茲に神的生活を營むを得るものなるが故に、吾等の理想の內容は常に清き愛の限りなき抱容力を押し廣げて往くことであると云つてよからう。

愛なき所に人格はあらず。愛とは二個以上の靈が相抱合して一層偉大なる靈的生命を實現することなるが故に、人格の向上は清き愛の限りなき發展を措いて他に求むることは出來ないのである。要するに宗敎は神なる人格の理想を與ふ。而して人格的理想の內容は清き愛の限りなき發展である。卽ち愛の發展は人格の發展である。之を家族より國家に、國家より全人類社會に、全人類社會より全宇宙の森羅萬象に及ぼし、愛を以て萬物を抱容し盡すに至つて、吾等の人格は最も大なる發展を遂ぐるのである。之を是れ神的生活と云はすして將た何をか神的生活と云ふことが出來やう。宗敎と人格との關係は卽ち斯の如きものてある。（完）

人格を向上せしむることが事實である如く、我等は之を大にして、神と人との相愛關係によつて人間の人格を向上せしめ、神的生活に入り得るものと信ずるのである。されば吾等の所謂人格とは何であらう。既に述べた通り、人間は生れながらにして人格ではない、それは只個性ではあり得るけれど人格ではない。人格は吾等が生活の努力によつてアチイヴする所のものである。人格は個人生活の凡てではない、其の或る方面を云ふのである。若し之れを花に譬へて云ふならばそは花の色でもない、形でもない、人格は花の匂ひである。櫻は其の色を誇り、菊は其の形を誇るであらうが、吾等が最も床し味を感ずるは芳香複郁たる梅花である。『疎影横叙水清淺、暗香不動月黄昏』の風致は梅に於て初めて見ることの出來る雅趣である。元來色は情的のもので、形は智的のものである。風霜を凌んで氣骨稜々たる餘韻を存する所梅の匂ひ香はしき所以であつて、人間に於ても梅の如く智と情なる形と色に加ふる意志の力を以てする所人格の匂ひが床しいものとなるのである。

之を文明史的に考へて見れば、智的なグリシャ文明は形の藝術なる刻彫となつて現はれ、形(form)又は觀念の學問なるプラトンやアリストテレスの哲學となつた。又情的なイタリヤの文明は色彩の藝術なる繪畫となつて現はれ、レナイサンスの先驅となつたダンテやボカチオやペツラアクの變愛文學となつた。併し是れはユデヤ文明なる意志の宗教、道義的な宗教を加へなければクリスト教的人格の匂ひは成立たぬ。斯くて智情意の三面を代表したグリシャ、イタリヤ及ユデヤの文明が流を合して近代人の人格を培養してゐるのである。

今個人心理に就て考へて見るに、智情意の統一された全人的態度は卽ち人格の匂ひであつて、是れは主として宗教的修養によつて體得することの出來るものである。何となれば人格とは精神生活の統一された自意識を云ふのであるから、心的生活を統一するには高ひ生活を目的とせる理想がなくてはならぬ。理想は卽ち人間生活の統一者であつて、宗教は神なる最高の理想を吾等に與へて、吾等の日常生活を統一するからである。試みに理

何の意義も認めてゐなく、また何の希望も期待も抱いてゐない。工場に、商店に、役所に、銀行に、會社に、鐵道に、新聞社に、また學校の中に働いてゐる人々が、皆な役目的の機械のやうに働いてゐるにしか過ぎなくして、深い愛と興味とを感じ悦びをもつて働いてゐるやうな人々は極く少數に限られてゐることは否まれない。多くの人々がその仕事をしてゐるとき、足に重い鐵の鎖を引き摺つてゐるやうなのが目に見えるやうである。眞の目的を有せずして、多くは一時的の仕事をしてゐるのである。

然しそんな風に仕事をしてゐるのは、自らを欺いてゐることに外ならない。自分の仕事の上でいゝ加減な勞作をしてゐることは、取りも直さず自分の生活をいゝ加減に生きてゐることである。本當に徹底した眞實の生活を生きようとする者には、到底そんな生溫い姑息な仕事を續けてゐられるものではない。吾々の仕事の中に、吾々の魂をうち込み、熱誠を捧げて努力するのでなかつたならば吾々の仕事はいつ迄たつても吾々にとつて餘所々々しい親しみのないものであることを免れない。境遇に強ひられていや〳〵ながらしてゐるやうな仕事に、どうして眞面目に努力を注ぐことが出來やう。そしてたゞ物質的な報酬をのみ目當にして働いてゐることになると、その仕事を苦しいものと感ぜずにはゐられなくなるのであらう。さればいつも呪ふやうな心持を懷いて働いてゐなくてはならないことになる。然し吾々はいつ迄もそんな狀態のもとに止つてゐてはならない。そんな無意義な生活を送つて平氣てゐられるとすれば、その人自分の生活を價値あるものにせしめようとする強い要求を持つてゐない人である。

二

現代の人々よりも確かに古への人々は、自分の造り出す物の中に、自分の精神を打込むことを忘れなかつたやうである。彼等は誠實な良心をもつて働いてゐた。彼等は刀劍を造るにしても、陶器を造るにしても、家屋を造るにしても、家具を造るにしても、その外如何なる商品を造るにしても決して等閑（なほざり）にしたり胡魔化したりはしなかつた、

職業と藝術家的精神

佐野袈裟美

一

「現代に於て最も缺けてゐるのは、自分の職業を愛するといふことのやうに思はれる。彼等は自分の仕事を不精無精にやつてゐるに外ならない。彼等は喜んで仕事を休むであらう。社會の階級の上から下まで全體を通じてさうなのである。政治家は自分の職分の中に、それから得られる物質的な利得を見るばかりである。彼は古への爲政家が自國の政務を巧妙に處理して行くところに感じたやうな誇りをば知らないやうに思はれる。製造家はその品質の名譽を保持して行かうとするよりは、その生産品を僞造して出來るだけ多くの金を儲けようと努力するばかりである。勞働者はその雇主に對して多少の敵意を持つてゐて、自分の仕事を等閑にする。仕事を吾々の幸福であり、生きる爲めの理由であると考ふべき筈であるのに、現代の殆んど凡ての人々は、厭々ながらも餘儀なくしなくてはならないものであり、呪ふべき苦役であると見なしてゐるやうに思はれる。」以上はグセルの「藝術」の中にロダンの言葉として書かれてあるのであるが、確かに近代人の通弊を指摘したものと言はなくてはならない。

多くの人々は自分の仕事を愛してゐない。悦びをもつて働いてゐない。彼等はそれを自分の上に壓しかゝつてゐる重荷の樣に思つて、ひどく嫌つてゐる。生活の資料さへ他から得られる方法がつきさへすれば、今迄やつて來た仕事を皆悦んで棄て去つて最早全く顧みないであらう。其厄介な厭な仕事から逃れてもつて懶惰に安逸に呑氣に暮したいと願つてゐないものは實に尠いであらう。多くの人々は只金を取りたいばかりに厭々乍ら働いてゐるのである。其外には其仕事に對して彼等は

る。その人とその仕事とは自然な狀態で密接に繋がつてゐる。單に生活の必要に迫られて仕方なくいや〳〵ながら働いてゐるのではなくして、うちにある活動力が自ら仕事となつて表はれて來るのである。

カーペンターは、「實際唯一眞實の經濟は、諸君の日々の勞作そのものが、悦びであるやうにすることである。然るときは、いや、然るときにのみ、諸君は人生の信賴し得る確實なる道にあるのである。」と言つてゐる。幾人の人が實際日々の勞作の中に眞の悦びを感じてゐるであらう。自分の仕事に對して深い宗教的な感謝を捧げ得る人こそは、本當に正しい仕事をしてゐるのである。その人は何をしてゐやうとそれには拘らない。靴を造つてゐやうが、兒童に教へてゐやうが、工場で働いてゐやうが、田を耕してゐやうが、眞正の藝術家がその製作に從事してゐるときのやうな敬虔な熱心な純一な態度をもつてするならば、如何なる仕事をも藝術的な領域にまで高めることが出來るであらう。

ミケル・アンジエロは目覺めた時いつでも働けるやうに、大理石の魂を寢床の側へ持つて來て置いて、着物を着たまゝ寢てゐたさうである。自分のする仕事に對して、その位深い強い愛と執着とを持つてゐるならば、屹度立派な優れたものを拵へ上げることが出來るに違ひない。何よりも眞正なる藝術家のやうな精神をもつて働くといふことが必要である。吾々が眞に吾々の仕事を愛してゐるのであるならば、仕事そのものの中に、慰めをも悦びをも感じてゐなくてはならない筈である。仕事の勞苦を忘れる爲めに、他に物質的な低級な快樂を求めて行く必要はない。長い時間の勞作を續けるにしても、心から悦びを感じ、自ら進んで働いてゐるのであれば、決して甚だしい疲勞を來すものではない。厭々ながら仕方なく働いてゐるとき位疲勞することはない。仕事の爲めに神經衰弱を來すのは、つまりかうした興味のない狀態のもとに無理に働いてゐるからである。他の人の意志のもとに强要せられて餘儀なく働いてゐる人、饑渴に迫られて仕方なく恐怖のもとに働いてゐる

人の目にとまらないやうな隱れたところや細かいところをも、手を省いていゝ加減にしておくやうなことはしなかつた。であるから、彼等の造つたものを見れば、其處に彼等の精神を窺ふことが出來るやうに思はれる。彼等の人格は其處にあり〳〵と表現されてゐるのを見る。古への繪畫や彫刻に、現代の人のそれよりも、より多くそれを描き又は造つた人の精神が打ち込んであることは確かである。それは精神をこめて精進努力したことに就いて澤山の美しい逸話の遺つてゐるのを見ても分ることである。現代人は藝術品をも、商品のやうに單に金に換へる爲めに、ほんの間に合せな一夜作りのものを拵へてゐるにしか過ぎない。況してや、藝術以外の仕事に從事してゐる人々の大部分は、一時的な無責任な請負仕事をしてゐるやうな弛んだ心持でしてゐるのである。

緊張した心持をもつて、自分の事業、自分の仕事に從事することの出來ないほど不幸なことがあらうか。熱意をこめて吾々の毎日の仕事に從事することが出來るならば、すべての勞苦は忘れられる。いや單に勞苦が忘れられるばかりではない。其處から無限の悅びと幸福とが湧き上つて來る。打ち碎かれた者のやうに氣力なく働いてゐるのは慘めである。吾々は吾々の仕事に、勝利者のやうな勇ましい心をもつて近寄り、その仕事を眞に吾々のものとして熱愛する迄に征服して了はなくてはならない。眞の成功は其處にある。

人に使はれて、人の爲めに働いてゐるのであると思つてゐるうちは、どんな仕事も皆詰らない面白味のない厄介な呪はしいものであるに違ひない。吾々の仕事が、人から與へられたり、他の意志のもとに强ひられたり、必要に迫られて餘儀なくしなくてはならないものであるのと、吾々が自らの意志と强いうちからの要求よりして選んだものであり、自ら進んで如何にしてもなし遂げようとするものであるのとは、其處に非常なる相異がある。自ら好んでしてゐるところには、如何にも自然な無理のない、見てゐても心持のよいものがある。その仕事が如何にもその人に適はしいものに思はれ

そしてそれ〴〵重要なる役目を果してゐるのを見るのは喜ばしいものである。」と。

人々にはそれ〴〵自己の性向に適したそれ〴〵の仕事があるに違ひない。それを求めて開拓して行かなくてはならない。そして吾々の仕事は、饑渇の不安や恐怖に戰きながら仕方なく働くところにあるものでもなく、人から強ひられて厭々ながら働くところにあるのでもなく、單なる物質的な報酬を目當にして興味もなく機械的に働いてゐるところにあるのでもなく、自己を實現し、自己を發展せしめる爲めに、吾々の心の奥底から湧き上つて來る強い要求に驅られて努力するところにあるのである。それは愛をもつてする活動であつて、其處には深い悦びがなくてはならない筈である。

然るに近代人の多くは本當の自分の仕事を見失つて了つてゐるのである。其處から多くの不幸が生れる。生活の必要に迫らるゝまゝに、又外部からの誘惑のまゝに餘りに無鐵砲に無反省に仕事の中へ飛び込んで行つて、手當り次第に何でも割のよささうなことをしやうとしてゐる。それがそもそもの誤りである。一時の不便や一時の不利や困難を排して、永遠に價値のある本當の自分の仕事の爲めに努力するやうにしなくてはならないのである。眼前の利益や名聲に目を眩まされてはならない。本當に自己をうちから生かす道を求めずして、何處に直實な生活があらう。吾々の生活を生き甲斐あるものにせしめるやうな一生涯の仕事を求めて、その仕事を藝術家の魂をもつて征服して行くにある。

ロダンの言つた次の言葉を吾々は深く味つて見べきであると思ふ。「で、若し仕事が生存の手段である代りに、その目的となつたならば、如何に人生は幸福なものになるであらう。然し、この驚異すべき變化を持ち來すには、凡ての人間が藝術家の範例に倣はなくてはならない。いな寧ろ彼等自身が藝術家にならなくてはならない。何故なれば、藝術家といふ言葉の廣い意味よりすれば、私の考へるところでは、自分のなしてゐる仕事に對して悦びを持つてゐる人といふにあるからである。さればあらゆる職業に藝術家のあることが望ましい

人、單に物質的な報酬ばかりを目當にして齷齪と働いてゐる人——かうして奴隷のやうに働いて平氣で當り前のやうに思つてゐる人々は、實際氣の氣な人々であると言はなくてはならない。そんな狀態のもとに止まつてゐては、眞に自由な價値ある生活を一生通持ち來すことが出來なくして終つて了はなくてはならない。

自分のとつて行く仕事を、自分の意志の支配のもとにおき、內心よりの強い要求よりするものであつて、卽ち自分の人格や魂を打ち込んでする、自己の實現、自己發展の活動であらしめるところまで高めて行くことに努力しなくてはならないのである。其處に到つてこそ、人々は奴隷のやうな生活から脫して、自主的な自由な獨立した生活を營むことが出來るやうになるのである。

三

エマーソンは言つてゐる。「各々の機能と性質とが補足し合つてゐるやうな人があるものである。地質學に適するやうな、山脈や岩石に趣味を持ち、持異な點や化學的變化に對して銳敏なる眼を持てゐる筋力の逞しい外出好きな人があるものである。斯かる人には最初に化學を學ばせ、次いで地質學上の踏査をさせるがよい。或は人は人間や哺乳類や又それに近似した動物などの博物學に、或る人は禽學や魚類や昆蟲類に、或る人は植物に、或る人は全世界が構成されてゐる要素に、それ〳〵魅力と天職とを見出すのである、……て、又海に趣味を持つて生れて來る子供があつて、父の家から逃げ出して船の水夫部屋の人となるならば、海へ行かなくてはならぬやうにされてゐるのである。或る人は外國の地を旅行するのを好み、或る人は辯護士となり、或る人は天文學者となり、或る人は畫家に、彫刻家に、建築家に、また技師となるであらう。斯くして如何なる種類に於ても自然の一片とてはないのであるが、人は生れながらのものであつて、その人の天才の開けるに從つて晩かれ早かれそれに一身を捧げるやうになる。それて、詩人があり、哲學者があり、政治家があり、雄辯家があり、僧侶があり、醫師がありするのである。人間が世の中にそれ〳〵の適所を得て、

十一時、若くは午後二時頃半から、所在の教會に集められ、その年齢や讀書力や男女によつて、幾多の級に分たれ聖書を讀むだり基督教物語を聞いたりして情操を養ふ。時としては遠來の珍客を招待して、遠國の珍談を聞かせてもらうこともある。娯育學校の方はまだ新しい試みでもあり、且つ何れかと云へば下層貧階級の幼兒養護の必要上生じたものであるから、都鄙を通じて居ない。都會貧家の子弟は此處で始めて日曜日ならぬ普通の日に、むさ苦しき巳が父母の家を出でゝ、一日中の數時間を日當りもよく空氣の流通もよい娯育學校で、巳が母以上の母らしい娯母の手によつて見守られつゝ、社會生活をなすのである。

富家の兒はかゝる娯育學校に來る必要がないので、この時代には、猶巳が父母の使用人たる家庭女教師の手で、我儘一杯な「お坊ちやま」生活をして居るのである。但し娯母の世話になる代りに、入れかはり立ちかはりある家庭の泊り客（中以上の家庭になると泊り客の絶え間がない）にチヨイチヨイ接する機會がある。が日本の子供ほどに大人の玩具にはならないやうな社會組織になつて居る。

二

社會生活に入る第三歩は貧富兩階級で、雲泥の相違がある。貧家の兒童は娯育學校からひきつゞいて、公立小學校に入る。大抵は滿七才位になる。そして十二三歳まで在學する。この公立小學校では彼等の社會生活が復雜して來たとは申されぬ。學友の家庭が娯育學校時代のものと大差がないからである。富豪や貴族の子弟は全然沒交渉なものである。處で少し優秀なのになると十一歳頃から試驗の上中央小學校に行く、更に優秀なものになると公立中學校に入學する。公立中學では全生徒數の二割五分に當る席を、これ等の優秀者の爲めにあけておく。これで始めて下層貧家の子弟が其社會生活を擴張して、中等社會に闖入するのである。處で富家の兒童になると家庭女教師の手で甘やかされて居る時期が、男兒で八九歳女兒で十二三歳まで續く。この年まで甘やかされて居たはよかつたが、これから大公共學校へ寄宿入學して、

ことてある。例へば藝術家の大工は、巧みに梁を造つたり枘穴を造つたりするところに幸福を感じ、藝術家の左官は、漆喰を塗るに悦びをもつてし、藝術家の馭者は、その馬を注意深くするところに誇りを感じ、街中にあるものを轢き倒すやうなことはないであらう。斯くてこそ眞に立派な社會が構成されるのではないか。」と。カーペンターもまた同じ意味のことを言つてゐる。「すべての人は一種の藝術家でなければならない。そしてその仕事に快樂を求めなければならない。その仕事が本當に自己の表現であり、自己解放であるといふことを感ずることによつて。かくしてこの世は喜悦に充ちるのである。」と。

吾々のとつて行く仕事は單なる生活の手段であつてはならない。それは吾々の生活を意義あり價値あるものにせしめる爲めの目的とならなくてはならないのである。その時には吾々の生活は皆生々した輝かしいものになるに違ひない。

現代の英國社會生活

會津常治

一

抑も英國の兒童が生れて初めて社會生活に入るのは何時であるか。彼れの社會生活の第一歩は命名式(クリスニング)の時である。其父母兄弟姉妹の間にだけ知られて居た彼れは此の時始めて其教會其寺區の人々に親しく紹介されるのである。又これと前後して其地方新聞の出生欄に其嬰兒の存在否出生が發表せらるゝ。これてその村人や同宗派の人々に知れ渡る。

兒童が社會生活に入る第二歩は日曜學校入學か娯育學校入學の時である。日曜學校へは殆ど凡ての兒童が四五歳から行き始める。多くは日曜の朝

英國の兒童が社會生活に入る第四歩は實生活に入る時である。下層社會貧民階級のものは、公立小學校の上級になれば卒業してもしなくても、或は商家に雇はたり或は工場に通つたりするやうになる。かくしてさゝやかな給金の内から親がかりのものは、幾分の食費を親に納め殘りて各自の衣類の仕末をしたり、交際費娯樂費にしたり稀には結婚費を積立てる。併しこれ等は殊勝な部類に屬するものゝやり方で、殊勝ならぬものは其全部を無駄に遣つてしまふ。彼等にとつては社會生活は、閉店後若くは終業後其好む友達と手を携へて家路を急ぎ、夕食を濟ました後再び出でゝ友と共に街頭を徘ひて、喋々喃々、時に喧騒と思はれ狼藉と名づけられるまでにさはぎ散らして、宵の口をすごし疲れて始めて家に歸へるのである。幸にして健全な分子の感化の下にあるものは、僅かに終業後の時間を利用して通俗講義に出席し、若くは古本を求めたり借覽したりして讀書する。而して機會を捉へて公共事業に關係するに至り、遂に其小社會の重要人物になるに至らずは已まない。通俗講義の幹事、日曜學校の校長、學務委員、勞働組合の地方幹事、勞働黨の代議士、市會議員、大學評議員等は、皆前記小社會の産物である。日本では公共事業に携はれば、自家の資産は無くすものと相場が定つて居るが、英國では公共事業に自ら進んで携はるものは、人一倍餘計に稼いで、そして自己の私生活は出來るだけ切りつめ餘力を擧げて、公共事當に盡す、こゝに英國隆盛の根底が横はつて居る。勞働階級の健全分子の社會生活振りは、吾人の大に學ぶべきものである。

次に中流社會の兒童否少年の社會生活に入る道筋を見ると、先づ公立中學校や私立文法中學卒業後、直ちに實業に從事したり下級官吏生活に入る少年も少なくないが、これ等は中流と云ふよりは寧ろ下流社會の上の部と名づくべきもので、英國で眞の中流といへば其資産に於て、優にその子弟に充分なる學校教育を與へて、卒業後もその子弟の收入などをアテにせぬ所か、世界漫遊費や、大陸旅行費位は苦もなく出せる程度の資産がなければならぬ。この中流社會といふものゝ資産上の資

始めて所謂學校生活といふ一種の社會生活を營むのである。而してこれ等の大公共學校生徒にとつては。學校生活が彼等當年の社會生活全部である。其學校生活なるものが社會生活の縮圖である。舍長なる教師の監督の下にあつて、自治生活を營む。違反者の所罰の如きも寄宿生相互の制裁に待つ、一種の體罰も公許してある。散歩區域もその學校所在地半徑一哩以內と定めた所もある（ハーロー）擬國會の如き討論會もある。上級生と下級生の別がやかましい、かくして彼等は學校から實社會へ飛び出しても、餘りに狼狽しないやうになつて居る。上級生になると目下は、カーキ色の軍服をつけて調練して居る。卒業と共に軍隊に入營するだけの年齡に達して居るものは極めて少ない。學力優秀なものは大學に來てから將校養成隊で更に半年位鍛えられてから入營する。學力普通の者は陸海軍所屬學校に入るか、またはこの學校內の將校生徒隊で訓練を受けてから試驗の上將校に採用してもらふ。處で中流の家の兒童になると前記の大公共學校へ行く資力もなし、さればとて公立小學校に行く氣にもなれないので、大公立學校に準じて建てられた歷史を持つ私立の文法中學校に入學して、大公共學校生活の眞似をするか、若しくは始めに公立小校に居て十一歲以上になつてから、公立中學校への入學試驗を受けて入學する。公立中學校の殆ど全部は寄宿舍のない學校である。然しこゝでも社會生活を練習さす爲めに、全校生徒を數個の家（ハウス）に分ち各ハウスにはハウス長があり、各ハウスは相異なる色の運動帽を被つて、各ハウスの團體精神發達に務めて居る。其ハウス長の苦心は一と通りでない。こゝの生徒は各自の家庭へ歸れば、その行きつけの日曜學校其他の教會關係の少年俱樂部とか少年體育部があるし、學校へ行けば授業の外に大公共學校寄宿の社會生活を眞似た生活もなさねばならぬから、外所眼には一種の鵺生活と見える。併し大多數の健全分子はかゝる鵺生活から產み出されて行くのである。要はこの二種の相隔つた社會生活を打つて一丸となす其生徒の個性にある。

三

と人との交友である。物の扱方よりは人の扱方に苦心する。こゝに英國教育の長處がある。人の氣を損はぬやうにといふ消極的態度に止まらない。更に進んで人に氣持よくさすやうにといふ積極的態度に出る。自分は大學といふ小社會の一員だからこの社會の名譽を尊重し福祉を增進することを務める。學期中の大學生活は交友の練習期節である。糞勉强蠟勉强するよりも一個の人間味のある學生々活をする。それで居て寸陰を惜んで夜更けに、或は朝まだきうちに勉强を濟ませて、知らん顏をして居る。或は級長とか、幹事とか委員とか、種々の名譽職で小社會の爲めに力を盡すと共に、其地位を維持するに必要な勉强も怠らない。この精神はさきに述べた下流社會の健全分子の中に認められるものと全く同一である。

大學卒業後はその目指す目的に依つて、直ちに實社會へはいる者もあるし、更に學校生活をなすものもある。古來の學者の職業といはれて居る僧侶、法律家、醫師になることについて云へば、僧侶になるには大學の神學科卒業後、英國々教僧が志望なら、日本昔時の國分寺に相當する僧正伽籃附屬の神學校に一ケ年以上在學して、後僧正の課する資格試驗を受ける。これに及第すれば一番下級の僧職「キウレート」になる、キウレートは各國分寺領内に百名以上三百名もあつて、その俸給も年八九百圓といふ英國の生活程度では頗る貧弱なもので、しかもこの俸給で十年もそれ以上も我慢させられる。幸にして昇進してヴイカアとなるか、レクタアとなつて寺區駐在のものになると多少生活らしい生活を營むことが出來る。非國教の諸宗派は、國教に對抗する必要上僧侶養成に全力を盡す、卽ち大學卒業生を更に三ケ年修業年限の其派の神學校で教育する。その神學校を卒業し始めて其派の一人前の僧侶になる。

法律家卽ち辯護士や其他法律關係の資格を得るにも、矢張大學卒業後辯護士の事務所で實習すること數年の後、辯護士會の資格認定試驗に及第して、始めて一人前の資格を得るのである。開業醫の資格を得るにも矢張り大學卒業後實習を經る必要がある。

裕が、日本のそれと雲泥の差のあることを忘れてはならぬ。中等教育だけでは滿足しない少年は大學へ行く。その行き方に色々ある。まづ中學の三年が濟むだ頃、大學の下級地方試驗といふものを受ける。これに合格すれば中學教有を半分受けた證明になる。次に中學の卒業間際に大學の上級地方試驗といふものを受ける。これに合格すれば學力上では、大學入學の資格あるものと見做される。また實生活に飛込むにもこの兩面の地方試驗合格が立派な履歷になる。さて牛津劍橋の兩大學を筆頭に二十個に近き各地の大學は、皆この上級地方試驗合格者を入學せしめ得る收容力を持つて居ない。そこで入學試驗といふ關門を設ける。中學校の最上級に近づけば商業科と受驗科と分れるのは、この受驗準備の必要上からである。入學試驗に合格するまで、二年でも三年でも中學に在學する。試驗合格が中學卒業になる。この入學試驗に合格しても、それだけでは平凡な一大學生たるに過ぎぬ、多少なりとも頭角を顯はし得る自信のある者は入學以前に特待生の試驗を受ける。この競爭は猛烈である。

受驗者四五十名に就き一名合格する位はやさしい方で、八九十名から二三百名の受驗者すらある。斯様な劇烈な競爭に堪へたものは、入學當初から既に其待遇を異にせらるゝ。第一著書なり紳士錄の學歷なりに特待生であつたことが明記される。大學の特待生であることは其大學の維持校友、講師、敎授であることゝ社會的評價に於いて優劣ない、日本では大學卒業の成績が其人の一生涯附いてまはるが、英國大學では入學試驗成績が物を言ふ。序だが日本では命日に重きをおくのに、英國では誕生日に重きをおくのも面白い對照である。この特待生の榮冠を得ることは大學生が社會生活に於いて、優勝の地位を占むる第一歩である。勿論卒業成績も四等の優等生がある中に一等と二等とは紳士錄に明記される。これは其功德が一生涯ついてまはる。

四

偖大學の學生々活は實に愉快な社會生活である。大學といふ一個の社會で、先づ鍊るものは人

の標語である。卽ち社會の爲めにその有り餘る財力智力を傾けたいのである。大學の敎養を受けてこの公共精神に牛津とか、劍橋とかの烙印を附して世の中へ乘り出すのである。家産餘りある故に所謂職業を求むる必要に迫られない。直に公共事業に沒頭することが出來る。自分獨りが英帝國の藩屛だなどとは自惚れないが、かく公共事業に盡すことが畢竟するに自己を守る所以であることは隱約の間に心得て居る。この心掛が開戰以來英國貴族の國事盡瘁振りに能く表はれて居る。

五

自分は前章に於いて英國の少年が如何なる經路を辿つて、世の中へ出て行くかを述べた。上流中流下流皆夫々經路は異なるが、等しく實社會生活に入ると急がずあせらず、その執る業務に興味を持ちて、默々として働いて居る。彼等は向上心に乏しいので低き位置で滿足して居るのか、彼等は世間が彼等の眞價を認むるの遲いのに對して不平がないのか。否々、彼等は向上心もあり不平もあるが、それを露骨に性急にさらけ出すにはあまりに粘液質である、「斯うして眞面目に勤めて居れば今にどうかなる」といふ「正直の頭に神宿る」を確信して居る。彼等にこのネバリ性ある上にその特徵を認められるものは「社會生活に對する興味」である。二三人寄れば會を開く、そしてその會に一種の人格を認めて之を培養し之を成長させずば已まない。日本では一種の宗派とか黨派とか組合とか學會とか、同窓とかほか見えぬ諸團體も、英人にとつては一の人格を持てる社會として受取られる、これが爲めに盡すことは一種の愛情である。この社會生活其物を一個の愛人の如く取扱ふ所に英人の社交性が見える、或る東洋の哲學者はこれを以て彼等の神だと評した。「社會生活に對する興味」の產物として、公共事業に盡瘁する。多少でも地位財產名譽ある人で、公共事業に携はらない時は頗る肩身が狹い、加之延いては自身の本職まで、いつとはなしにさびれて來る。公共事業に携はる關係者はこゝて上下の別なく交際する故、上下の兩社會の安全瓣にもなる。上下共に餘し得たる餘暇を有益に利用することが出來る。

之等の職業は夫々鞏固な組合をなして居て、團體生活を營むで居る。その社會の制裁の強いことても、我國にあるこの種の團體の比ではない。團體を組織してその組合員全體の利益を保護するのを以て、その會員の義務と心得て居る。會員がこの熱心があるので、選ばれてその幹事とか會長かになる人も眞劍で、その團體の爲めに盡す。任期が大抵短かい（一年位）から引請けることが億劫でなく、またその團體中の目ぼしい人は大抵一度はそれ等の名譽職に就けるといふ希望がある。事務幹事の任期は云はゞ終身である。かくして極めて少數の終身從員と熱心なる通常會員とに由つて、その會の仕事は圓滑に運轉して行く。

大學卒業生で後官吏志望の人は、高等文官試驗を受ける。これも日本で見ると同じく牛津劍橋兩老大學の敎授講師や出身者が試驗委員の大部分を占めて居る爲め、兩老大學の卒業生はこの方面へ進んで行くのに、ロンドン以下の地方大學に比して都合がよい。初任は內勤で年千八百圓外勤（印度勤務の官吏は特殊な高文を受ける）で年二千二三百圓とか聞いて居る。

其他實業社會へはいる者は、夫々手蔓を求めて進入して行く。而して食へるだけ（獨身なら千五百圓から二千圓妻君持ちなら二千五百圓以上）貰へればそれ以上は脇目もふらず、內職を考へずにその與へられた仕事に專心從事する。卽ち所謂自ら顧みてデーセントな生活が出來れば、餘力をあげて自分の修養と自分の仕事の改良に盡す。その身分に應じて、其所屬の社會の爲めに盡す心掛は實に見上げたものである。

上流社會の少年が社會生活に乘り出す第四歩は大公共學校卒業後牛津か劍橋かの大學に入る。學力に自信のあるものは進んで特待生の試驗を受けて、中流社會の優者と覇を爭ふが、多くのものは事勿れ主義で、貴族學生とか紳士學生とかの名のつく贅澤學生になる。贅澤學生といふ意味は放蕩學生ではない。たゞ大學を以て學術修得の場所といふよりは、寧ろ選良人士の交友機關と見做すのである。こゝではかの大公共學校氣質が遺憾なく發揮されるのである。所謂「公共精神」これが彼等

戰後の宗教自覺

上山善治

一

自覺を說く者に自覺のないほど、悲慘なものはない。戰後の自覺と云ふ事は、政治に於ても、敎育に於ても、決して度外に付すべきものでない事は明かである。

基敎にせよ佛敎にせよ、人間の自覺と云ふ事に力說止まない宗敎に於て、戰後に於ける各自の自覺が必要である。自らの自覺が、如何なる價値と生命とを齎すかと云ふ事は、すべての宗敎者の考ふ可き事であらねばならぬ。特に現今の世界動亂によつて、宗敎が那邊まで變化して行くかは、今から斷定は出來ない事ではあるが、少くとも、從來の宗敎が、實際に於て變化して行かねばならぬと云ふ事は、何人も認むる處であらう。

基敎にせよ佛敎にせよ、戰爭を人類の一必要事であると認めて居る者はない、人類の墮落から戰爭が起る、そして人類が悲慘と苦悶とに陷入る、それを救濟すると云ふ事は、宗敎の一事業であり目的であるに相違ないが、一面から云へば、宗敎の消極的な微弱な力を示すと同時に、戰爭を惹起しない程度に、人類を導き得なかつたと云ふ事にもなる。戰爭によつて、宗敎は必要であると云ふ消極的の考へは、宗敎者が凡庸である事や、無氣力であつたと云ふ事のみを示すものである。宗敎者が戰爭に於ける奉仕は、社會的地位から、當然なす可きものであつて、それによつて、完全な宗敎的意志を遂行するものと思つたなら、大間違である、更に進んで戰後の使命に、大なる自覺を起さねばならぬ。

二

今時の戰爭によつて、基敎者は起つて軍隊慰問を起した、そして吾が國からも、何人かの代表者

この餘暇の利用といふことは、英國社會生活で著しく眼につく。一年三回の休暇、即ちクリスマス、イースタア、バンクホリデイには官公職の人は殆んど凡ての仕事に從事せるもの、鐵道や郵便や食事に關係ないものは、殆んど全部休業し、或は歸省し或は轉地する。その休暇にあこがれること歸るべき家もなく轉地すべき目あてもなき我々には、實に滑稽と思はるゝ程である。かくまで氣狂眼で休暇を貪り樂しむはやがて來らむ四ヶ月間脇目もふらず働かむ爲めである。働いてこそ休息の有難味のわかるものぞ。

更に英國の社會生活で眼立つものはかく公共の爲めに沒頭しながら、而かも公共に呑まれてしまはない。即ち個性の自由をどこまでも維持して居る。斷つておくが公共精神を發揮することと個性の自由を維持するといふことは一見、矛盾したやうだが、それは考へ方が淺いと思ふ。個性を滅却しないで、公共の爲めに盡すことは徹底した個性本位の人には敢て英人でなくとも可能なことである。

更にまた英國社會生活の基調をなすものは、何かといへば、民心の底深く流れて居る基督敎的精神だと思ふ。近世英語で聖書が書かれてからすでに三百有餘年の月日が經つた。この長年月の間この入れ易く讀みやすき形をとつた聖の御敎がその民心に深く沈み渡つて居ることは蓋し想像の外である。表面にこそ異端も見えやう。無神論もあらはれやう。然しながらその根底には、自らは知らずとも基督敎の精神が見えつ隱れつ流れて居る。而してこの精神を以て彼等の社會生活を織り出さねば已まぬ原動力を與へた。

上來述べ來つた英國の社會生活は、今回の戰爭の爲めに如何なる變化を來たしたかは、其生活の根底に橫はる精神に思をひそめた者は、容易に想像がつくことだと思ふが、自分は章を改めて述べてみるつもりである。

（大正七年十一月十六日）

基教は歐洲の一角に、そして佛教は東洋の一角に起つた、けれども、基教が今や人種の專有物でないと同樣に、佛教も人類の專有物であるべきでない。すべてこれらの宗教が、人類的發展をなすに至らねばならないと云ふ事は、今更云ふまでもないが、基教にせよ佛教にせよ、人種的臭みをはなれて、各自の眞髓を失墜せない限りは、人類的に濾過されて行かねばならない、卽ち基教が眞に日本人の基教たり得、佛教が歐人の佛教たり得る事によつて、各宗教の完全を期する事が出來るのである。かかる性質を有する兩者にして、基教が歐洲狀勢に大關係を有し、佛教が東洋狀勢に大關係を有する事は、それらの發生分布によつて、當然と云はねばならない。亦兩宗教が東西兩洋の時局に切なる責任を感ずると共に、兩洋平和に何等かの方法と自覺とがなくてはならない。卽ち全世界をして、再びかくの如き禍亂に陷入らしめないと云ふことである。これによつて兩宗教最大の自覺は、全世界平和の鍵は、彼れ等の掌中にあると云ふ事と知らねばならぬ。如何なる政治手段によつて統一されたる國民であつても、宗教的訓練を經ないものにあつては、何時かは紛爭混亂を脫ることは出來ない、そして徹底的自覺のない處から、理想的融和の境地が出來なければ、人類生存の共通的樂天地を得ることが出來ない、これによつて宗教者の最大自覺がなくてはならぬ。於此、今後世界永遠の平和の實を擧ぐるには、如上の所說から、少なくとも佛基兩教の大使命の自覺によつて協力的行動を强要せねばならぬ。これが實行を見ると云ふ事は、決して難事ではない、兩者互に各自の責任と理解との努力によつて、從來の障壁と羨望嫉視とを、除去する事につとめばならぬ。

吾が國ほど雜多の宗教思想を有する國はない、そして各自相當に、國民の信仰の土臺を有するに至つては、單に教理や習慣や、理解のない宗教政策やなどで、それらの統一は困難であらふ。畢に政府が三教合同を夢みたが、その方針の本來を誤つたため、何等の化學的施設をなさずに、水と油とを混和しようとした、極めて無智なものであつたのみか、只だ形式的に宗教と政治とを結合しよ

が歐洲の天地に向つたり、亦最近西比利亞出征軍の慰問事業となつた。これらの事は戰時宗教者の好適事であるに相違ないが、これら人類の慘禍を目擊した人達から、或は余輩の寡聞であるためかも知れない、亦その發表の期に達して居らないためかも知れないが、未だ痛切な聲を聞かないと云ふ事は、少々物足らない感がないでもない。慰問が必要であり、物資の供給が必要であると云ふ問題は、慰問當初の目的でもあり、計畫でもあるに相違ないが、今度の事業から、一大自覺の叫びを聞かねばならぬと思ふ。卽ち人類永遠の平和は、戰後宗教者の手によつてのみ立てられ、而して一大平和社會問題も、彼れ等の手によつて解決されねばならぬ事を自覺せねばならぬ。

凡て歷史は常に繰り返へされて行く。今時の世界動亂によつて、戰爭が戰爭自身の塊根を、根こそぎ掃蕩するものと思ふ事は、聯合國が獨逸の軍國主義を打破壞滅を以て、最後の目的として居るためであらうが、それによつてのみ、永遠の平和は來現し得べからざる事は明かである。

聯合國が獨逸の軍國主義によつてうける、利害關係の一致によつて、獨逸を征服する、それがために各國が利害關係によつて、相互の感情を損傷し合つてはならない。獨逸の蜘蛛手にかゝつて、本體のわからない程に叩き伏せられ、漸く東亞西比利亞に於て、命脈をつなごうとしてすら、恐ろしい毒牙に危うく殲滅しかゝつた露西亞が、吾が國の威力に漸く挽回し得たその後の行動には、不滿の點がないでもない。危急の場合の救濟主に向つてのこうした態度は、恩に報ゆるに仇をもつてすると斷言しても決して過言ではない。これらは單に吾人の耳目に觸れた一片にしか過ぎないが、吾人は人類永遠の平和を、戰爭終結と共に來現し得ないと信ずるのである。それであるから、聯合國が獨逸の軍國主義打破を以て、相互にこの種の跋扈を警戒し合ふと云ふ事のみによつて、完き平和は來現するものでない、於此、余輩は宗教者の大使命の自覺を、先づ吾が國の宗教界に於て望むのである。

三

くみ。口に信仰を賣るの時代は、佛教基教共に今後長くは續かない。殊に信仰なき者の信仰を説き内に鬪爭と貶謀とを事とするの甚しい佛教者は、先づ自己の改更の強要をなすと共に、その修養と生活とに於て、千古の墮眠を破らねばならぬ。事實に於て、社會的勢力もなく、長き歷史の餘香のみ煙れる中に、大使命を有する宗教の脈膊が何處にあるであらうか。徒らに因襲的形骸に眠つてはならない。

戰後の大使命の自覺に佛教が醜劣なる宗派鬪爭から、飜然協力一致に入るの要ある時、基教に於て各派合同の試が起つた。互に各自宗教の改更に努力するを得ば、更に進んで佛基兩教の社會的協力は、決して難い事ではない。

世界戰亂の大警鐘は。閉ざせる宗教の門戸を叩きて、眠れる宗教者を呼び覺しつつあるを、熟考せねばならぬ事を信ずるのである。

（十一月十日稿）

晒稻

凹邨居士

飛蟲促雨擣簷間。晒禾斂來落日間。看喜君恩周寡婦。拾收遺穗提兒還。

閑夜

德隣居士

唫情橫出俗情辭。正是東山月上時。壁响蟲聲千萬種。窗昇竹影兩三枝。

うとする事は、宗教思想が政治思想と、大に異なる天地を有する事を知らないからである。政治が國民統治のために、宗教團體を使用する事に於て宗教思想の何たるかを知らないでは、或はその外形的運動の協力が出來たにせよ、決して政教一致を擧げたといふ事は出來ない。宗教家が自覺のない・そして理解のない合同行動ほど、無生命なものはないからである。それであるから、あした三教合同は、いづれの方面から見ても、無價値なものであつたと云はねばならぬ。今後若し三教合同を事實に表現しようとするには、政治當路者は、各宗教者の誤謬見解の打破と、各自の徹底的改更との自覺を待つてでなければならぬ。於此、眞の平和が宗教者の責任であると云ふ自覺に立つを得ば、國民生活上に、美しく平和の光りが現はれて來るに相違ない。この責任觀が未だ宗教者流に、徹底的に存在しない限りは、從來のやうな羨望嫉視の愚昧な境地を、脫る事の出來ない事は明白であると同時に、國民生活の上に、眞の平和の來現を見る事の出來ない事も明白である。

四

政黨者が互に敵視すると同樣に、佛教者か基教者を、基教者が佛教者を——基教に於て少ない——敵視する事は、極めて愚なる事である。これらの事件は、吾が國に於ては、佛教の圈内に基教が割り込んで來たと云ふ形から、先づ佛教徒から向けられた事であつて、これに對する基教の感情の衝突もあつたことであらう。往時に於て、こうした事は止を得ない事であつたとしても、今日に於ては否今日以後に於ては、宗派の鬪爭や、教派の堰き合と云ふ事は、決してなすべき事でない。各宗教が「人類の最大幸福は平和にあり、平和は宗教的訓練によつて眞に成立される」と云ふ大使命に覺醒して、相互協力の實を擧ぐる事であらねばならぬ。故に爾今、この覺醒と寬度とを有し得ない宗教は、如何に千古の背景を有するとも、國民生活の進運に妨害ありと、斷定するを余輩は憚らない。而してその絶滅の要ある事をも信ずるのである。

外に羨望嫉視の眼を向け、内に貧逆の牙手をふ

常なる意義を有して居る。蓋しカントが自由の意義を高調し、之れを道德可能の基礎と爲し、その法律を論ずるに當つて此の無上大法を以て理想的標準としたことは、大なる功績であつた。殊に選擇の自由を一轉して自己決定の自由に化したのは、彼の非凡なる識見であつて、今日に於ける心理學、刑事人類學、刑事心理學上の研究と合して居るので、最近の自由意志論の趨勢と相一致して居るものである。併し乍らカントは自由の本體たる人格の觀念に於て、之を個人の理性とのみ解したのである。合理性卽ち人格と解して、その精神的方面のみを高調したのである。從つて人類と他の生物との關係又は個人と社會との關係より、人格を觀察することを忘れて居たのである。それが爲めに、カントの考へた人格には人格の精神的方面のみ存して、人格の生物學的方面又は社會學的方面が缺けて居るのである。これは直接にはカント時代にはまだ生物學とか社會學とか云ふ學問が發達して居ない結果でもあつた。その爲めにカントの考へた人格には個人と云ふ點のみが明になつて、社會と云ふ考がまだ十分に出來て居ないのである。隨つて社會は個人の總和に過ぎぬ結論になつて、國家の統治作用は單に保護政策となり、遂に個人の自由をして放任に移らしめ、極端なる個人主義に墜するの傾向があつた。所て其の反動として、フイヒテの國家社會主義の提唱となり、續いて新カント派を生じ、カントに還れと叫び、行爲の規範の內容は其の適用が社會的理想に合致する場合に於てのみ正當であると主張するに至り、カントの個人に偏依した觀念的理想主義の不備を補ふに、社會的意義を以てしたのである。これが爲めに新カント派に於ける自由意志の意義は終にスタムラーの純法律學によつて、個別意欲（des getrennte Wollen）のもので無くて、結合意欲（des Verbindende Wollen）のものとなり、社會的生活の終局目的を、自由意欲人の共同體と爲し、社會的生活を以て法律の根底と爲したのである。此の意味に於てスタムラーはカントとの缺點を是正せんとしたのであるが、而もカントの個人を主とする主觀的なる形式的觀念と社會を主とする客觀的なる現實法學とを調和

研究

法律倫理學より觀たる言論著作印行集會及結社の自由（二）

一條忠衞

三　社會哲學派に於ける自由の意義

（一）新カント派に於ける自由の意義

カントと同時代に出て、學界の重鎭たりし人はフィヒテである。彼はルーソーの影響を受けて自然法論を著し、カントの影響を受けて自由を根據として法律倫理を說いたのである。彼の考に依れば、元來人間と云ふものは自由なものである。自身以外に何人と雖も之に法規を課するの權利が無いと云ふのである。隨つて國家及び法律の基礎と云ふものは主權者たる各人が各瞬間に表示する所の自由承諾であり、國家の目的は個人の自由及び原權(die natürlichen Urrechte)の實現であると說き、個人主義に基く法治國主義を提唱したのである。けれども、彼は晩年に至つて普佛戰爭の影響を受けて、民族主義となり、商業的鎖國主義となり、カントの個人の價値を尊重する學說を經濟的方面に應用して、國家の各個人を經濟主體と爲して其の生存權を重じ、國家社會主義の第一聲を放つたのである。

このフィヒテの法律倫理說は、カントの學說の缺點を補はんとする意味に於て、非

を繼承して、自由と道德とを結合し、道德は自由によつて始めて可能となり、この道德は獨り個人的のものでは無くて國家的社會的のものであると爲したのは、實に彼の卓見であつた。

(三)功利學派に於ける自由の意義

自由に關する大陸の法律倫理學が純理論的にして、且つ宗教的なるに對して、英國に於ては經驗論に立脚する功利主義の法律倫理學が起つた。その主唱者はベンザムである。尤もその濫觴はアダム・スミスに發したのであるが、之れを公に力說したのはベンザムである。彼は最大多數の最大幸福(the greatest happiness of the greatest number)の實現を以て法律の目的と爲し、特に立法に重きを置いたのである。各人は自身の幸福の最良の批判者であると爲し、個人の自由行動に對する制限なるものに於て、その隣人と同樣の自由を確保するに必要でない一切の制限はこれを除去するを以て、法律の目的たるべきものと爲したのである。

このベンザムの學說を祖述して更に發展せしめた者は有名なるジョン・スチユアート・ミルである。彼は一八五九年に『自由論』と云ふ本を公にして、個人的功利主義(indiuidul vtilitarianism)に關して詳細に之れを說明したのである。以爲らく、他人に何等の損害をも及ぼさぬ範圍內に於て、各個人は三種の自由を要求することが當然である。第一は思想及び思想發表の自由である。これは自分の考ふる所を發表する自由であつて、他人を害さぬ範圍內に於ける自由である。第二は職業及び趣味の自由である。第三は結合の自由である。この三種の自由は人間には最も肝要なるものである。而して人類は何事に於てもその當人が見て以て利益であると思惟する所の生活を營むの自由を與へられて置く方が、他方より此の方が利益であると云つて强制的に行はせられるよりも利益が多い。卽ち各自に自由を與へて事に從事せしむる方が、畢竟するところ其人にも亦社會にも利益が多いと云ふことになる。先づ第一に其の人間が自己の能力を完全に發達させることが出來る。次に考へねばならぬことは、人によつては知識の足らぬ爲めに自分に取つて如何なることが利益だかを知

し得るの理論を見出し得なかつたのである。

(二)ヘーゲルに於ける自由の意義

この新カント派の思潮に對して、法律を全く客觀的に解釋したのはシェリングである。彼は自我を否定して絶對を認め、個體意志(des individuelle Wille)を排して、絶對意志(des absolute Wille)を立てたので、其の絶對なるものは宇宙間に於ける生活(ein Leben)であると爲した。而して此の說を繼承して立つた者はヘーゲールである。彼はシェリングの絶對なるものは、彼の謂ゆる精神(Geist)であると解した。さうして此の精神は、主觀的精神(subjectiver Geist)、客觀的精神(objectiver Geist)絶對的精神(absoluter Geist)の三段の進步を爲すのである。第一段は精神の個人に於ける發展であり、第二段は精神の國家に於ける發展であり、第三段は精神の美術宗教學術に於ける統一である。此の三種の段階を通じて、其の精神なるものゝ實質は『自由』であつて、その自由の實現された狀態が『道義』(Sittlichkeit)である。進化はこの自由の發展して完成された形であり、法律は實にこの進化の一段階である。さうして、自由と進化と道義と法律との關係によつて、主觀的精神が客觀的精神となり、客觀的精神が絶對的精神となり、吾人の道義は國家に於てのみ完成せられ、法律はこれが爲めに極めて重要なる役目を爲し、個人は遂に偶然たる特殊的存在を超越して普遍の中に歸入することに由つて、世界の終局目的は達せらるゝと考へたのである。

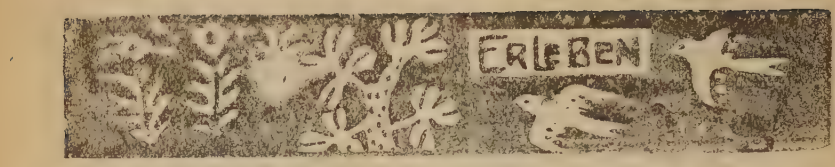
之に由つて觀るに、ヘーゲルの法律倫理學は明に新カント派の缺點を修補することを目的にしたばかりで無く、カントの自由意志論を繼承して彼の人格論を改造したのである。先づカントが個人に偏して社會を忘れた點を改めて、ヘーゲルは個人と國家とを文化的關係と爲し、個人を國家に於ける進化的段階の一分子と見て、個人の自由意志は共に國家の自由意志であると爲し、個人の人格と國家の人格とに有機的關係を見出したのである。此の點はヘーゲルの倫理說の長所であつて、吾人の人格に於ける自由の觀念は次第に鮮明になつて來たのである。而して彼はカントの根本原理

い。若し國家と云ふものが一から十まで人民の爲めに指揮命令しなければならぬならば、人民の依頼心は益々增長して進取の氣象は衰へ、發刺たる精神を見ることは出來なくなるであらう。斯樣に國家進步の上より見ても、個人の發達と云ふ點より見ても、他人を侵害せぬ範圍に於て各人に自由を與へて其人の努力に任せて進むことが、人類を進步せしむる唯一の道であることは最も明瞭なことであると。これがミルの自由論の大意である。

今このミルの意見を見るに、如何にも尤な議論であつて、動かすべからざる眞理を主張したものである。その後スペンサーはこのミルの論旨を繼承して、更にこれを生物學の進化論に基いて最も確實に證明したのである。それからシヂウキックも亦た同一の主義を採つて、彼の政治學原論に於て多くの頁を費して居る。斯樣に英國の功利學派に於ては、個人主義の上より自由を論じ、自由主義を以て一貫して居るのが特徵である。これが又た英國民に於ける思想上の共通な特徵にもなつて居る。彼等は其の自由主義の長所は、人の活動の能率を高め、產業に於ける生產の能率を高め、分業の發達となり、責任觀念の强固となり、獨立獨步の進取的有爲的精神を奬勵する點にあると考へて居るのである。

此等の英國式功利主義の系統を帶んで、獨逸の法學界に異彩を放つた者はイエリングである。以爲らく、目的は全法律の創造者である。自然に於ける因果律は機械的であるけれども、人間の意志に關する因果律は心理的である。人は『故にwei』行爲する者では無くて、『爲にwei』行爲する者である。目的の無い意志と云ふものは無く、目的の無い行爲と云ふものは無い。各人は自己の目的に對して利益を有するものであるが、人生は自己の目的と他人の目的との利益的結合である。此の結合は先天的に存するものでは無くて後天的に造らるべきものであつて、自我に於て目的を組織して全體の目的とすることが國家の作用であつて、法律の效用である。この目的の組織は我は我の爲めに在りとなすところの利己的自己主張を利用する報酬及び强制と、世界は我の爲めにあつて我は世界

ることが不可能であると云ふことである。然らばこの場合には抑も何人がその人の利益を能く知つて居るか。其の人が自分の利益を知らぬならば、其の人の眞の利益を何人が知り得るか。自分が知らぬことを他人が彼れ以上に知つて居ると考へ得らるゝことは不可能である。假へば人の足に適した靴を探し出すことの極めて困難なことに似て居る。隨つて各個人の發達に最も能く適したる政府の如何なるものであるかを發見することは至極困難である。如何なる點まで政府が干渉すれば宜いのか、那邊より以上は干渉しては却つて不利益であるかと云ふことを明に認識し得る政府を作ることは、仕入の靴が足に合はぬと同一な難事である。若し自己以外の人が斯ういふ事をすれば其の人に利益であると知つて、それを指圖して其人に之れを實行させることにすれば、各人は遂に形式的になり、規則の奴隷となるのみであるから、是れは人間の獨創力を全滅させることになる。各人に獨創力と云ふものが無くなつた曉には、國家の生命は亡んだも同樣である。故に人には各の自由を與へて、各人が銘々に思ふ存分に許して置くのが、社會の進歩を促す所以の中心點を多く造つて置くとになるのである。各人に自由を與へて各人が自分の考を以て最も利益であると思惟する所を斷行して往くことは、社會を進歩させる最大なる力を其處に貯へて置くやうなものである。之に反して個人に任せて置くことを危險視するのは、恰も人を病人扱するものであつて、其の干渉によつて益々その人をして病を重くするに至るのである。吾々は自ら自身の健康に注意すべき者である。絶へず人を看護して居れば、其の人は病氣で無くとも、遂に病氣にならざるを得ない。それと同樣に、社會も個人に自由を與へて進ますべきもので、一より十まで國家が干渉して往くことは、國民全體を平凡化する方法である。これでは天才の出現は覺束なく、悉く凡人たらざるを得ない。それで教育なるものは個性に從つて吾人自ら爲さねばならぬもので、國民全體を一樣に教育しようと試みることは國民の獨創力を枯渇することであつて、國家將來の發展を害すること是より甚だしいものは無



エドアルド・カアペンタアを訪ふ

倫敦にて　佐藤清

英吉利に來る前から、英吉利に行つたら會ひたいと思つてゐた人が三人あつた。ひとりはトマス・ハアデであつた。わたしは英吉利の現代の作家を多く讀まないから、他の作家のことを多く言ふ權利はないが、ハアデだけは十年前と同じに今尙好きだ。

それからつぎに會いたいと思つてゐた人はイエッであつた。此人の作は澤山讀む暇がなかつたけれど、「イニスフリの湖水」や「けものにかはつた人間の悲」や、「樂き牧羊者の歌」を讀んで以來、此人がほんとに懷かしくてたまらなかつた。愈こちらに來てさぐつて見ると、ハアデはドウセット・シャイアの田舍に引籠つてゐるらしいので、是は初から諦めてしまつた。それから偶然イエッの住所がわかつたので、ロンドンのアドレスにして手紙を出して見た。殆ど二ヶ月程たつてから返事がきた。手紙はdictatedとしてある。自分は倫敦にゐることは殆どないくらゐだ。それに此頃は目をわるくして物も書けないとしてあつた。そんなわけでイエッに會はうといふ望みも破れてしまつた。

けれど、も一人英吉利であひたい人があつた。それは純藝術家としてゞはなく、寧ろ預言者としてかなりわたしにアッピールしてゐたエドアルド・カアペンタアであつた。此人は久しい前からシエフィールドに住んでゐるといふ話をきいてゐたの

の爲めにあるとなす所の倫理的自己主張に基く愛及び本務心によつて行はれる。法律は國家的強制の組織である。故に規範と強制とは法律に缺くべからざるものであるが、斯かる形式が法律の目的では無くて、その内容が目的である。法律の内容は社會の生活條件の確保に存するので、此の社會の利益が卽ち法律の目的であると。イエリングは議論の上には別に自由に關して論じて居ないのであるが、英國流の個人的功利主義(individual utilitarianism)を換質して社會的功利主義(Sozialutilitarismus)に轉じ、法律の目的たる社會の利益を標準として法律の解釋適用及び立法を爲すべしとする、利益法學(Interessenjurisprudenz)を建設し、後の社會學的法律學派に刑事學の新傾向に頗る大なる影響を與へたのである。けれどもイエリングは法律なるものは社會の目的の爲めに社會が創造したので、個人は之によつて社會が認めたる範圍の各自の利益を確保する手段を與へられるとしたのであるから、個人の權利と言ふものは個人に於ける利益保護の手段に外ならないと云ふ結果になり、その個人に於ける利益保護の確保はそれ自身にあつては目的を有するものでは無くて、社會の利益を確保する目的の手段とするに至るのである。換言すれば、イエリングは爾來の法律に於ける個人本位權利本位より社會本位義務本位に推移するの端緒を開いた者である。故にイエリングに依れば、個人の自由と云ふものは社會の法益を實現する手段に過ぎないので、其れ自身に於ては目的では無いと云ふのである。隨つて個人の自由意志と云ふものは、社會の意志によつて或る目的の下に手段たる役目を爲して居るのである。是に於て吾々はカントを顧みるに、甚だしい徑庭の存するとを知るのである。カントは個人の人格と云ふものは、其れ自身に於て目的を有して居る自由の主體で、他人の手段では無かつた。然るにイエリングは之を社會の目的を實現する爲めの手段と見たのである。所て吾人の法律行爲に於て、責任能力の根本要素たる意志の自由と云ふものは、自己決定的のものでは無くなつて、社會決定的のものに成るのである。隨つて吾人の人格は社會性のものに化して個人性を失ひ、義務を主として權利を客とし、遂に意志の自由を否定して道德の可能をも危くし、個人をして社會の奴隷たらしむる傾向があるのである。イエリングの社會的功利主義は、この意味に於て幾多の難點を有するものである。(未完)

ゝ、それからエーイーもいゝ。』さう言ひ〳〵わたしに茶をついてくれながら。『あなたは砂糖を用ゐますか。』

『いゝえ。』

『日本ぢやどうします』

『わたしどもは茶は茶だけしきあ飲みやしません。日本の茶はいゝかをりがしますよ。』

『ほんとにこちらの茶はカムフラージュですね。ミルクと砂糖で。』

（序でだから言つておくが、去年の秋以來、此砂糖もレストランではくれなくなつた。實際此頃の倫敦の茶は、茶好きなわたしには實際たまらない程まづい。カムフラージュといふ言葉も其頃からはやり出した流行語である。）

『あなたのゐる所は愉快ですか。』

『いゝえ、下宿ですから、ちつとも愉快ぢやありませんが、始終外出してゐますから、たいした苦にはなりません。』

『食物は？』

『食物はたいさういゝんです。お上さんが英吉利人ぢやないんですから。』

『英吉利人の料理と來たらたまりませんからね。英吉利人は全く料理といふことを知らない。野菜でも何でも湯で煮ることしきや知らない。

『うちのお上さんもさう言つてゐました。だいち英吉利の女中はポテトーの皮を剝く方法を知らないつて。ガルスウオルシイの此頃出したパンフレトにも同じことが書いてありました。』

『ガルスウヰルシイ？』といつて、カアペンタアはわたしの發音を聞きとれなかつたらしく、やつとのことで解つてもらふ。

『倫敦に知合はありますか。』

『あまりないんです。——時々教會へ行きます。』

『何かためになりますか。』といつたカアペンタアの一句には嘲笑に似た皮肉が交つてゐた。

『ミス・モウド、ロイデンの話が好きで、よくシティ・テムプルに行くんです。』

『あの人のことなら、わたしも聞いてゐます。』

『先月は Sex problem の話を四回つゝけてやりました。』わたしは其時ふと別の考が浮んだので、

で初からあへるかどうかと危ぶんでゐた。ブリチッシュ・ミュージアムの讀書室に通ふやうになつてから、わたしは、すぐ近處のラスキン・ハウスといふ別名のある出版會社のショウ・ウインドウの前に屢々立つて見るやうになつた。そして偶然にも此出版會社がカアペンタアのものを全部出してゐることに氣がついたので、或日わたしは「わたしの書物の話」といふシイクス、ペンスのパンフレットを買つた序に、著者のアドレスを店員に聞いて見た。

「著者のアドレスはお知らせしないことになつてをります。お手紙をお書き下さい。そしたらそれを先方へお屆けしませう。」と其小さい女店員が言つてくれたので、わたしは早速手紙を書いて投函した。

幸にも、其年のくれ。クリスマスが過ぎた頃、カアペンタアが倫敦に出て來たので、初めてバンクラス・ステーション近くの宿にたづねて見た。其時はひどく風邪をひいてゐて、碌々口もきけないと言ふ風で、筆談なんかしてくれた。

それから半年程たつた。六月の或日、突然カアペンタアから手紙が來た。近いうち倫敦に行くがまだ同じ所にゐるか。冬には暇が見出せなかつたとある。わたしはすぐ返事を出すと、折かへし、例の宿にゐるから、火曜日の五時頃話しに來いといふ返事が來た。

四時半まで讀書室にゐて、それから例のカアトライトガアデン十八番をたづねた。すぐカアペンタアが帽子を手にもつて出て來た。客間に人がゐるから、そこまで歩かうと言ひ〳〵、一町程行つてから、一緒に茶飲所にはいつた。

此前會つた時とは見違へるやうに元氣がよかつた。時に常談口もきいた。最近の寫眞そつくりだつた。灰色の髯、血色のいゝ顏、落込んだ眼窩、高い鼻、茶色がかゝつた眼暈にとりまかれた綠の瞳——鋭い所はないが、眼鏡ごしにじつとわたしの顏を見詰めた時は、流石に強い光があつた。

『愛蘭のものを讀んでゐられるさうですね。わたしは餘り讀んでゐないが、グレゴリ夫人のクフリンはいゝ。戰をしてから接吻する所なんか實にい

た。それからわたしにミス・ロイデンの事を聞いた。

『あの人はほんとに頭腦のいゝ人て、論理的で、直截て、outspoken てす。』

『outspoken?』カアペンタアはわが意を得たといふやうな、それても少し驚いた顔付をして、それから、『日本ては sex のことを教へますか。』

『いゝえ。けれどわたしだちはそれを周圍から自然と學ぶことが出來るやうになつてゐます。わたしだちは素足て歩くやうな國民てすから。』

（序てにいつておくが、日本でいゝことがたゞ一つある。それは日本人が素足て歩いてゐることだ下駄をはいたりぬいだりする煩勞も、素足て歩き得る樂さと自然さとを思へば、言ふに足りないやうに思ふ。願くは何んとかして膝を屈して坐ることだけよしたいものだと思ふ。折角のいゝ一つのことも、膝を曲げて坐ることに依つて、無茶苦茶になつてしまふ。）

『自然に！さうだ。こちらても田舍ならさういふことも出來ますね。動物を見たりして、自然と……しかし倫敦の子供等には出來ない。』

六時になつたので、わたしは椅子を立つた。其時カアペンタアの太いおほきい腕がわたしの肩にあつた。カアペンタアの唇が強くわたしの唇にさわつてゐた。

『good boy!』

さういつてカアペンタアはベットの縁に腰をおろした。わたしも並んでそこに腰をおろした。わたしは強い彼れの腕を身のまわりに感じた。外へ出ると、ガアデンのゆふかりが日光にふるえてよろこびの聲をあげてゐた。（九月十二日）

『あなたは英吉利人ですか。』と聞いて見た。

『え、。けれどもわたしは英吉利人のやうな氣がしませんよ。兩親はコーンウオオールとスコットランド生れです。』

カアペンタアは更に stupid といふ言葉を用ゐ、此戰爭で英吉利人も少しは目が醒めるだらうと附加へた。わたしもそれをきくと、いゝ氣になつて『英語は corrupt して、此頃はいゝものが出來なくなつたさうですね。』と言つて見た。そして其次に、愛蘭文藝復興は此 corrupt してゐる英語に新しい生命を賦與したもので 畢竟するに、英文學の復興だといふ、誰かの説を言はうと思つてゐると、『英語でもいゝものはあること はありますが――』ときたので、會話の下手なわたしは、『え、』と言つたきり、言はうと思つてゐたことを取逃してしまひ、ぢつとカアペンタアの顔を見詰めるより外なかつた。

『日本では ロシアにインタヴエンションをやるてせうか。』とカアペンタアが話題をそらした。

『するやうに思ひます。けれど人民全體は極めて old だといふ話です。』

『それを聞いてうれしい。』

それからわたしたちは外へ出た。日光が雨のやうにガアデンのゆふかりのしげりにふりそゝいでゐた。カアペンタアは歩きながら、親しい友人のやうに、自分の左腕をわたしの右腕にくみあはせた。

客間はまだ人がゐたので、二階のベット・ルームにわたしを案内してくれた。

それからわたしに著書目錄をくれて、何か讀んでくれたかといふから、大概讀んだ、持つてゐてまだ讀まないものもあるとわたしが言ふと、『デモクラシイへ』だけはパアマネントのものでせうとカアペンタアが言つてゐた。わたしは The Art of Creation が好きですと言つたら、あれにも何かありませうと言つてゐた。それから intermediate sex の話をした。sex psychology の會が近いうちにあるが、せんだつては、婦人の前で、self abuse の話をする人があつたといつて、そんなことは十年前までは想像もされないやうなことだつたと言つ

はうとしたといふキリストの教も亦同じ理屈であるといはねばならぬ。

我に自由を與へよ、然らずは死を與へよとは徹底した言てある。大いに與へよ然らずんば奪へと云ふのである。

戀する人は戀人の爲に何を要求するか。戀人の總てを得んとする事が其要求である。其身をも心をも愛をも總てを自分の物にしたいといふのが其の要求である。けれども軈て夫れは自己の肉をも魂をも愛をも總てを與へたいといふ事である。戀人同志の何れかが弱かつた時、強い者に奪はれるのである。けれども双方が同時に捨てねばならない。與へんとする力、奪はんとする力此の力が對等てある時に双方が同時に死んで解決をつける。夫れが心中てある情死である。我々には身も魂も財産も悉く打捨てゝ而して奪ひたいといふ程のものを見付けたい。藝術家は藝術を云々する、しかし彼には名譽財産生命が藝術よりも尊い。だから全く藝術の爲に總てを捨つる事が出來ないでゐる。隨つて藝術を心中する事が出來ない。

宗教家は愛を説き神を説く。けれども神を眞の戀人の如く恭ふものは少い。神を得んとする事戀人を得んとする如く熱烈なる人は少い。互ひに與へんと奪はんとする程間が杆格して神と情死する人は少い。しかし宗教を信ずるものは神の總てを奪つて而して自分の總てを與へる決心でなくてはならない。

神は嫉妬である。舊約書の言葉は眞理だ。エホバは嫉み深い。何となれば戀人が戀の相手の總てを奪ひ度いやうに、神は我々の總てを奪ひたい、我身も魂も心も總てを奪ひたい。我々は夫に對して少しでも反抗する時、缺てを奪はれんとする神は嫉むのである。我々は此の神の熱烈な愛を得たい。

キリストも然う云つた。キリストよりも優りて愛するものがあつてはならない。キリストを信ずるものは總てをキリストに奪はせねばならない。キリストの爲に我々は總てを投げ與へたいと同時に、此の基督の爲に總てを奪はれたいと思ふ人がクリスチャンである。基督信者の終局はキリストと心中する事である。

與奪一如

沖野岩三郎

我々には總てを與へたいといふ心がある。そして總てを得たいといふ心がある。此の二つの大いなる矛盾を如何すれば宜いか、昔から宗教とか道徳とか云ふものが此の二つを如何にすべきかに就いて種々に考へたのであらうが未だ完全に解決が付いてゐない。

正しき事の爲に責らるゝ者は幸也と云ふて犧牲の精神を鼓吹するも天國は卽ち其人の者なればなりと云ふ大なる利得問題があるからである。

汝等が罵られ迫害された時喜び樂めと云ふも、天に於て汝等の報多きを豫約せんが爲めである。だから基督教倫理も『大いに與へよ而して大いに得よ』といふに外ならぬ。尺蠖の伸びんとするや先づ大いに屈すといふに外ならぬ。

儒教と雖も矢張り然りてある。德孤ならず必ず隣ありと云ふてはないか。隱德と云ふも天の知り給ふを欲するのである。

釋迦が一切衆生は吾が子なりと悟つたのも、大いに捨てゝ大いに得たのである。

須達長者は王舍城で釋迦の教を聽いて非常に感心し舍斷城に歸つて祇園精舍を建てようとした。そして祇陀太子の園を買はんが爲に金貨を象の背に積み車に滿載して其の地を得んとしたのは何故であるか。畢竟佛を供養し大いに捨てゝ幾百萬億の幸福を得ようとしたに他ならぬ。今日に到るまで東半球の到る所に響き渡る佛寺の鐘の音は直ちに祇園精舍の鐘の響きを連想せしむる程有名な此の精舍も矢張り大なる報酬を精神的に得んが爲に捨てた物質の結果である。

一核を植えて無限の實を收むる如く一を施して萬を得んとするが供養の本旨てある。畑を耕して眞を發見した時、持物の總てを賣つて其の畑を買

も取除けられて誰かの別莊が建てられて居たかも知れない。

キリストが國家を愛して泣いた時、國民が彼れを奪つて猶太國といふ日本の四國位の小い國の愛國者にして終つたなら、彼は此の彈丸黑子の一小國の愛國者として羅馬政府に反旗を翻した位が結末であつたらう。

キリストが若し當時の宗教家に愛せられて、彼の愛の全體が宗教家達に奪はれて終つたなら、彼は或一部の宗教家から新しい宗教家として聰明な豫言者として一時の賞讃を得たに過ぎなかつたであらう。

キリストが若し神を愛して神を奪ひ得たならば彼は單に信心深い男として聖者として一時の德望を一身に集め得たに過ぎなかつたであらう。神は此のキリストを奪はうとした、總てを奪はうとした。而してキリストは神を奪はうとした、總てを奪はうとした。熱心に狂的に我を忘れ家庭を忘れ鄉黨を忘れ一國を忘れ在來の風俗を忘れ習慣を忘れ道德を忘れ宗教を忘れて神を愛しようとした。神の總てを奪はうとした。そして總て打忘れ打捨てたものを神を奪ひ得るによつて更に完全に無缺にしようと欲した。しかし神は一步をキリストに讓らなかつた。キリストは一步を神に讓らなかつた。血の出るやうな、肉の割けるやうな苦しい思をしながら、キリストは戀ひに戀ひ焦れに焦れた。そして十字架の上で『我神我神何ぞ我を捨て給ふや。』と嘆いた。キリストは神を戀慕うて遂に苦悶して死んだ。心臟が破裂して死んだ。彼は神と共に心中した、情死した。

相愛する者が言ふに言葉がなく、施すに術がなく、『我汝を愛す』と繰返して居ても尙足りないで相擁して泣いても尙足りないで、泣いて泣いて泣盡して遂に其の魂と魂と結び合つて死ぬ。そして愛情の爲に死ぬ。こんな美しい心中があるなら、こんな美しい情死があるなら、其はキリストを解釋する事の出來る情死である。

『我が神、』彼は死する時我が神と云つた。我夫よ我妻よ我愛する者よと云つて死ぬと同じやうに我神と叫びつゝ死んだ。

心中出來ない時に怎うするか。失戀するのである。片思ひて苦しむのである。返されない愛の爲に悲しむのである。

多くの人は家庭を圓滿にしようと思ふ。卽ち家庭を自分の理想通りに奪つて終はうと思ふ。けれども其所には常に謀反人が現はれて來て思ふ通りにならない。遂に片思ひに終つてしまふ。

多くの人は社會を愛する。そして社會を自分の理想通りにしたいと苦心する、社會を自分の心の中に奪はうとする。けれども社會は汝を愛しようと思はないで却つて汝を嚙み痛つける。

多くの人は國家を愛する。そして自分の思ふ樣な美しい國家にしたいと思ふ。國家が自分の愛を奪つて呉れゝば宜いと願ふ。けれども多くは其の希望が達し得られない。

人生の事は總て此の與へんとする愛が受入れられないか、又は奪はれんとするものを奪ひ得ないかで苦しむのである。全世界の人の魂を奪はんとする偉大な愛は軈て全世界の人類に自己を與へようとする事である。一切の衆生を吾子として奪はんが爲めには先づ自身の總てを一切衆生に奪はせねばならない。

キリストは家庭を愛せんと欲して家庭から捨てられた。故郷の友達を愛しようとして捨てられた。國家を愛しようとして國家から捨てられた。宗教家を愛しようとして宗教家から憎まれて蹴られた。神を愛しようとして神を奪ふ事が出來ないで『我神、我神何ぞ我を捨て給ふや。』と嘆いた。

キリストが若し家庭を愛した時、彼の家庭がキリストの愛を入れてキリストを奪つたならば、彼はナザレの一寒村で、親に孝行を盡し兄弟に親切を盡した一良民であつて、知事から一枚の褒狀を頂戴するが結局であつたらう。

キリストが若し鄕黨を愛した時、鄕黨が全く彼れの心に奪はれて終つたならば、彼は村會議員となり郡會議員となつて、故鄕の土木工事に熱中し、彼方の橋梁此市の道路と其新事業に奔走したり、青年會の總會や風俗の改良會に奔走して一生を終つたかも知れない。そしてナザレの小い丘上に一基の紀念碑が建てられて百年の後には其の紀念碑

FROM SIBERIA

A Year Ago And Now.

A year ago I wanderd alone among the Japanese Alps,
When even alpinists were rarely found there,
For the autumn was well advanced.

When I climbed tkose lofty peaks,
And communed with the mountain spirits,
Never more at home was my self.

Wesn I trod over the craggy paths,
Admiring grandeur at every ascent,
I was free as the mountain air.

A year hence and now I find me,
At the other side of the Sea of Japan,
At the Harbour of Vladivostok.

Battles are now nearly over,
Eor at the coming of the Sons of Japan,
The enemies have been quick to flee.

But we are not the single nation,
Here are the allies assembled togetoer,
Holding a military international conference.

Commanders and their representatives meet to discuss,
War materials, war prisoners, sanitation, finance,
Martial law, and counter-espionage.

All are keen in argumentation,
Eager to accompiish the common end,
But no less eager for each nation's interest.

I also sit among them often.
I mingle myself in discussions too.
But how uncongenial to an alpine lover!

Yet when I leave the mounains and come among such confusion.
They say I am serving a great caue;
They say 'tis my glory thus to share in this great World War.

『何ぞ我を捨て給ふや。』彼は死ぬ時神の裳を確く握つてゐた。何ぞ我を捨て給ふやと呼ぶ時、彼は捨てられては居ない。彼の心は益々深く神の懐に深く食入つて行つた。彼の手は益々確く神の裳裾を握つて居た。彼は神を確く擁して離さなかつた。

キリストは如何にして死せしか。若し斯ういふ事を問ふ人があるなら私は言ひたい。『キリストは神を抱いて死にたり。』キリストは心の臓が破れるまで神を戀焦れてゐた。そして神を愛して愛して夫れを自分のものにしたいと思つたが、神の愛は更に大きかつた。神はキリストの愛を受けたばかりて満足しなかつた。神は森羅萬象を愛した、一切衆生を愛した。過去現在未來を愛した。縦横無盡に愛した。しかし此の大きな愛を見てキリストの心は益々燃えた。そして遂に其の神の裳を握つたまゝ『我魂を汝に托す。』と云つて死んだ。十字架は彼れが情死した永遠の記念碑である。

大いに奪はんとしたキリストは大いに與へた。總てを與へた。我々は此の基督の心裡に溢れてゐる熱情と愛とを味ふに非ずんば基督を理解する事が出來ない。我々の心は愛に充ちてゐる、我々の心は燃えてゐる。我々の心は愛に充ちてゐる、我々の心は大いに奪はんとしてゐる。そして其の矛盾が衝突して涙となり詩となり歌となり祈となつてゐるのである。我等の共に死ぬべき者は何であるか、我々は小い一人の魂を抱いて死ぬ事を願はない。我々は小い事實の爲に心中する事を欲しない。我々は萬有を抱きしめて死にたい、宇宙を握つて死にたい、神の懐に、然り萬有よりも尚大いなる神の懐に懐れて、『何故我を捨て給ふや。』と泣きつゝ死にたい。そして我等の本懐を遂げたい。斯うして死ぬ事が神を信ずる者の美しい血あり涙ある死ではなからうか。我々は此の五尺の小身を粉に碎いてそして永遠に消えない神を抱いて死にたい。

うぐひすと水草

倫敦にて　佐藤清

うぐひすの思へる

一

むねふかくいたましき
ひめし思をうたふ
わがうたの意味、をとめら知らば、
なやましさに、
かぐはしきいきたえん。

二

わき、わき、わきあふる、
愛のよろこびうたふ
わがうたの意味、をとめら知らば、
太陽のよろこびに、
葡萄の泉うちにやぶれん

三

やがてわかれのなげき、
いと遠き思をうたふ
わがうたの意味、をとめら知らば、
しんにいるうれひ、
目より明星をうち消さん。

四

やがていやはての雲のきれ、
きれはてし思をうたふ
わがうたの意味、をとめら知らば、
天地のひろさ、
たましひの火は一時に消えん。

Hands

Hands of many people I grasd these days,
English, Americans, French, Italians,
Russians, Chinese, and Czech-Slovaks,
Generals, Colonels, Majors, Captains,
Naval officers, and seafarers,
Some big, some small, some warm, some cold,
Some hard, some soft, some dry, some wet,
Till I feel loathsome of them all,
For each of these grasps threatens to nipe away
The memory of the touch of that one hand
Which I held in mine while parting
Under the starry heaven of that eve.

Fair Russian Maidens

Fair Russian maidens I met on the street,
So fair that made me turn back and admire!
But only a moment and they passed away.
Shall I meet them cgain, who can tell?
Or, if I met them again, shall I recognize them?
Or, if I recognized them, shall I speak to them?
Then, wherefore did they attract me even a moment?
Only to testify the beauty of their race!
As individuals lost they will be to me for ever.
But they keep up in me a beautiful memory of their race.

October, 1918. Tetsuzo Okada.

至誠無息の曲

西淵渡

一ッ道守るとしもは思はねど愛の道こそ一つなりけれ

鴇色の少し褪せたる曉の月のそくなり青桐の窓

家もなき人の子なれば木の下に身をよせ來ては君をおもへる

青梧のたて直すとてつのぐみし新芽のさきの窓に光れる

空の鳥夕日の方にさして飛ぶ黄金の夢をまどろむすべなし

消息に書き洩したる事などを思ひ出でつゝ今日も目醒めぬ

我れを超えひとを越えつゝ心をば導く心あればぞ友よ

心のくま越えて導く力なり念ゝ不息のまことを念ず

音絶えぬ、かの太陽も雲の中に溶けて了ひし如く思はる（病床にて抱月氏の悼を聞く）

（一八、一一、六）

水草の思へる

一

あゝ身にたへし雪解のいたみ、
雪解に溶けてあともなき、
みじんの陽の力をしたふ、
やるせなかりし思は過ぎ。

二

ぬるむ水かぐはしく、しんのなか、
つめたさは魚のはく泡にきえ、
あゝあたゝかき淺みどり、
あけの明星身に生ふる。

三

みどりの奥にひそむ太陽、
くもりなき白き太陽、
うちのいのち傾けつくし、
うまれくる太陽にあこがるゝ。

四

ながかりし雪消のいたみに見るも、
たとへがたなきこのいたみ、
今うまれくる太陽にあこがるゝ、
秒ごとにまちわぶるこのいたみ。

（大正七年九月）

・八月號倫敦雜詠正誤

「クリスマスの朝」のうち
十二行目　涙をさそふいみじきもの動き
五十三行目　主に求む。主に祈る。主に叫ぶ。

「バンクラス公園」のうち
四十九行目　煤煙にそめられし低きホーソン

「愛と寂寥」のうち
二十八行目　むらさきのけむり吐く薔薇もなく

「あゝバビロンのながれのほとり」のうち
十二行目　青草になすはらからの赤き血も、
十六行目　うたへと人のわれにいふとも。

「花の音樂」のうち
一行目　そゝりたつ迫持のちからはほどけ、
十五行目　とけあひてなすソプラノに言葉を忘れ、

汝が手の野菊よいさゝか諍ひし　同
すた〳〵來た方が明るくて菜種蒔く男にて　狹青
花野を戻り夜は弱うて君責めがたし　同
殘暑の室の目覺めを微笑み迎へ　一鳴
階下の秋暑き夕餉ともなれば君に別れぬ　同
蟻が這ふ葡萄園にて君と日暮るゝ　滿巨斗
茸山開きの男なるさへ憎まれず　竹三郎
木犀が咲いた子の足どりを危ぶみし　我樂
芙蓉の莟みし我窓の巖の日々　高木
栗の木の下を去らず女も　清藏
瓦工存分に日中にゐて赤いかまつか　魄鳴子
柿を頒つやさしうて舟板の白らけ　一碧樓
茹栗の匂ひやさしく疊やさしく　同
栗畑の道のくねりよ忘れず來たり　同

投句略規

▲句數題並に名を限らず
▲東京市外高田村大原一五二七中塚直三宛
▲封筒に虛心集稿と明記ありたし

虚心集

一碧樓選

深夜黍の毛が垂れて俺を責めるのだ　逸星
黍よ垂れ毛よひとゝき君ら默つて　同
草花をかざし墓地の明るみにも堪へ　同
今いが栗の或は人に碎かれん土　嫁が君
吾が信仰の霧出づる旭に耻ぢ　同
すべり木朝見れば露をうれしとす　同
生花が腐れて夜毎々々の虫をきゝます　巨鬼
つめたい夜の山が續いてゐる〳〵する俺達　同
秋の野の馬行けば薄暮の俺が突立ち　同
むなしく芙蓉を持ち歸る田道の眞直ぐな　ひさし
子持鮎の串太く男どかとすわつた　同
刈稻此日の幸福な暖かい土をふみます　五湖
九月の潮が身近く押寄せる祈ります　同
十月よ町中に出て貧しき母子　風來子

『文明改造』豫告

十二月二十五日發行　定價五拾錢

□國際聯盟問題と日本の地位　法學博士　吉野作造
□英國文明の特質　會津常治
□大戰に現はれる佛蘭西文明の特質　山崎直三
□大戰と米國國民教育　早大教授　帆足理一郎
□國民の政治的自覺と戰後經營　早大教授　高橋清吾
□戰後の勞働問題　法學士　鈴木文治
□農民生活の改造　八代義定
□社會改善論　法學士　平山六之助
□戰後の宗教改革　今岡信一良
□現代基督教の危機　文學士　佐藤清
□天文學と社會の進步　哲學博士　ファーネス
□婦人職業問題の倫理學的意義　一條忠衞
□戰後の文化哲學　野村隈畔
□宗教思想と國民生活の更新　相原一郎介
□軍國主義の沒落と社會黨の興隆　工藤直太郎

其他文藝には吉田絃二郎、沖野岩三郎、與謝野昌子、在英佐藤清の諸氏例により麗筆を揮はるべく、材料を精選し、內容の充實を期して、諸君の机上に見ゆべく、希くは本誌の眞卒なる努力を次號の誌上に調せられむことを。

六合雜誌新年特別號

慘風悲雨前後五箇年間の世界大戰は獨墺の屈服に依りて終熄し、再び平和の光を仰ぐに至れり。聯合軍の百難不撓の勇戰は、世界征服の覇圖を有する中歐同盟國の軍國主義を根本的に覆滅せり。然れども光輝ある平和の再來は實に人類の捧げたる絶大なる犧牲の結果にして、幾千萬の人命と幾千億の財寶を蕩盡したるなり。今や人類の血と涙の慘苦より世界改造の第一步は初まれり。自由の鐘は人道の曉に向つて打鳴らされたり。世界文明の新生に際して我國民の責務は彌々重大なり。國際關係は益々複雜になれり。我國民は果して如何なる信念と覺悟を以て世界文明の新紀元に蒞まんとするや。世界人類は新らしき自由民本の思想に依りて更生せるを思はゞ、誰れか思想の威力を認めざるものあらんや。强靭なる獨墺の軍國主義を打倒したるは、單に劍戟砲火の力のみにあらず。人道を世界に確立せんとする自由國民の正義の精神に外ならず。

我が『六合雜誌』は微力ながら過去三十餘年間、自由思想の立脚地より、社會の人道的進步の爲めに、努力し來れり。常に社會思想の嚴正なる批判と嚮導に任じ、聊か乍ら我國民の思想生活に資せるを確信す。本誌はこの意味に於て、新年特別號を『文明改造號』となし、大破壞後の大建設、來るべき文明改造の大事業、此間に行はるゝ有形無形の努力と要求を各方面より講究闡明して、我國民文明改造の一端に供せんとす。

□日本文明の改造　內ヶ崎作三郎

□カイゼルと獨逸社會民主黨　安部磯雄

平和の曙光

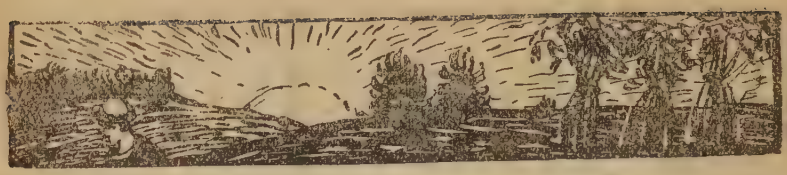
土井晩翠

千萬のむくろを積みて功成らず
　無道の報、國破れ
　家失へる悲鳴の狂ひ
雷霆の怒の如く全歐に
　轟き荒れしチユウトンの
　末路あらしに散る葉に似たり
鐵と血のあらびの權化、全歐を
　馬蹄の下ににじるべく
　立ちし蠻軍かく亡ぶ、見よ
「あはいなるバビロン斯くぞ亡びむ」と
　天使は海に大石を
　投げぬ、ゼルマン見よ天の罰
霜枯の軍の場に自動車の
　爆音さびし、白旗を
　立てゝ進めるゼルマンの使者
白旗をたてくる敵の使者引きて
　微笑湛へぬ、元帥は
　手に秋霜の文握りつゝ
ロマノフとハプスブルグの滅亡に
　ホーヘンツオレン跡追ひて
　鼎の脚の三つ皆倒る
驕慢と無道のあらび報ひ來て
　千仞の坂、圓石を
　投ぐるが如く亡び沈むや

綠玉盤

伊藤寥々

湛然としてこの一ところ水よどみ綠玉盤のしゞま深しも
雲來れば雲をしとゞめ風過ぐればわづかに皺み淵はもだせり
瑠璃なせるこゝの淵はも陽に背き天にせまれる巖ひたせり
これやこのふとりし吾子の頰のぬくみわが唇にふれてかなしも
すゞやかに睜りし吾子の眸にぞ己がいのちの輝きを見る
草むらにうづくまりつゝわが思ふ大天地の美しさかも
身のまわり坪ばかりなる土に生ふるその草々の千よろづの色
何といふ草にかあらむ紅ふかき小さき葉こゝだもてるひと莖
ある草はすい〳〵と延び黃なる花うなづき交しゆれかやまざり
かゞやかしき夕陽の中を馴り巖の紅葉の水にちり散る



自由教育の勝利

―官僚的劃一教育の敗滅―

工藤直太郎

一、世界改造の曙光

慘風悲雨前後五星霜の世界大戰は獨墺の屈服に依つて終熄し、世界人類は再び平和の天日を仰ぐに至つた。聯合國の百難不撓の勇戰に依りて兇暴なる中歐の軍國主義は永く頓挫したのである。併れども自由正義の光輝ある勝利の裏面には、世界人類の捧げたる絶大の犧牲があるのである。幾百萬の人命と、幾千億の軍費とを蕩盡した人類の限りなき血と涙があるのである。この悲慘なる大犧牲を拂つて贏たるものは自由民本の思想である。卽ち人間生活の眞價値の確立であり、世界文明の改造である。歐洲大戰亂の受難者は最も光輝ある自由民本の創造者、誘掖者である。光榮ある民主文明は、彼等幾百萬の死骸の上に輝くのである。腥凄荒涼の戰場に立てる十字架より世界の自由と人道が救はれたのである。

二、大戰の開始と英佛の危機

今回の大戰に於て、我等が最も痛切に感じたのは、英米に於ける自由教育の精神が最も人道的に發現せることである。由來英米の教育は獨逸の教育の劃一的なるに反して、甚だしく自發的であり、人格的である。獨逸の教育は頭腦を教育すれども人間

暴の報い暴に亡ぶと警めを
　千載遠く殘し得て
　カイザアの名を朽ざらしめよ

領内に敵の一兵入れずして
　土崩瓦解の奇蹟見る
　天の怒は火よりもはげし

堅城のストラスブルグはたメッツ
　ケルン、マインツ、コブレンツ
　併せて共に一朝に棄つ

龍王の威を鎭むべき百千の
　海の堅艦ことごとく
　舳艫ならべて敵に奪はる

「劒戟に亡びむ劒をとるもの」と
　聖の教の現證の
　ひとつ今はたゼルマンに見る

皇天に代る權威と高ぶりて
　世を見下せし果を見よ
　亡家亡國楚囚の恨み

赤旗をたてゝ逃るゝ親王の
　自動車追ふて水兵の
　一團銃を一齊に擊つ

大空に沿るまでに旗赤く
　潮漲るゼルマンの
　子もマルセイユ歌ふ聞かずや

賢と愚のへだゝり計る三十の
　年のあしたは如何ならむ
　世界の潮日に日に高し

ゼルマンの粕をねぶりし閥族の
　夢は破れぬ東海の
　空は今より春にほふべく

來るべき聖誕祭よ世の東
　世の西ごほりホザンナの
　讃頌天に地にどよむべき

永遠の春の曙見え初むる
　一千九百十八の
　歳に今逢ふ祝はざらめや

サライボの銃聲一發、墺國皇儲の胸間を貫くや、直に全歐に暗雲を巻き起し、獨逸積年の野心の乘ずるところとなり、獨軍巨砲八月の天に轟きリーヂュ要塞の攻略と急轉して、有史以來の慘憺たる歐洲大戰亂の幕は切つて落されたのである。白耳義の運命はリージュ要塞の陷落と共に危機に瀕し、僅か二週間にしてその全土を擧げて獨軍の馬蹄に蹂躙せられ、敗殘の白軍はイープルの一角に窘迫された。破竹の如き獨軍はオスタンドを略し、イープルを衝き、カレーを脅かし、實に英國曩古の危機であつたが、當時英國陸軍の兵力は僅かに十三萬五千に過ぎなかつた。白耳義政府の求援によりて、匆惶敗殘の白軍を應援するを得たのは、僅かに七萬五千の小兵であつた。小弱な備兵を率ひて國を驅つて自滅の運命に急ぎつゝあると、カイゼルは英國を嗤つたのはこの當時のことである。兵員備はらず、武器彈藥の準備未だ成らず、戰局日々に非にして、雪崩の如き獨軍は北佛平原に殺到し、佛軍は遂にマルヌ河畔に退却し、白軍はフランダースに於て獨軍に一蹴され、巴里は再び一八七一年の昔に返つて都を遠くボルドーに移し、悲慘なる籠城をする準備をした。されど、堅忍不拔の英國民は少しも周章することなく、大戰を前に控へて兵員をも募集すれば、武器彈藥をも製造し出す。軍需品や食糧省を新設して徐ろに持久戰の覺悟を定めた。獨軍の砲聲をきゝつゝ、開國以來初めて徵兵制度を採用し、敵の闘聲をきゝ乍ら英國工場の大動員を行ひ、國内の全工場を擧げて、軍需品工場とした。堅實なる自由、自制の精神を飽くまで發揮した英國民は、日夜孜々として軍需品製造に全を盡くした。上流中流の階級より出でたる百七十萬の婦人勞働者と、三百萬の男子勞働者は、彈藥製造場に、銃砲工廠に、製艦廠に、製造所に炭坑に死力を盡くして働いた。自由民の尊き奉公の精神と、殉道の義心より纔か一年有半にして、軍備充實し、開戰當時僅に十三萬の陸軍は、三百五十萬の大軍を北佛戰線に送り、その威力は一昨年七月、英軍のソンム及アンクルの大攻撃となつて現はれた。かくて英軍は開戰以來二年間にして、ボーモンハメルを略し、ヴイミーを衝

を教育することを閑却して來たのである。其教育は組織統一とを尊ぶのであるが。根本の人間教育を顧みぬのであるから、知識教育には非常に秀れても、人格教養が缺けてゐる。這般の大戰爭に於て、獨逸人が國際法を無視し、占領地帶に於て、殘虐なる行爲を敢てし、住民に塗炭の苦みを與へたのは、兇暴なる軍國主義の爲めとは云へ、一面獨逸國民教育の缺陷が暴露せるものである。

我國人の多くは英國民をこれまで、商業國民と見てゐた。曾て奈翁（ナポレオン）は英國人を一番頭（シヨツプキーパー）であると嘲けつた樣に、英人は自己一身の利害の打算以外には、家族も社會も國家もない自己本位の國民であると見たのである。又英國は近代個人主義哲學の發祥の地であるから、英人は個人的思想の最も發達せる國民で、君主や國家などは眼中にない。露國のレーニン一派の矯激なる行動は革命を國家の上に置くが如く、英人は個人を國家の上に置くと見たのである。それ故、忠君愛國の念が薄弱で、權利と主張があるが、國家に對する犧牲の精神などは勿論持ち合はせないと信じたのである。我國の官僚輩が、常に英米の新思想を呪ひ、常に之れが侵入の抑壓に努めたのは、我國人は英米人の如く極端なる個人主義、打算主義に流れ、忠孝の精神が弛廢し、國家觀念が薄弱となると云ふ主張からであつた。然るに曩古の大戰爭に於て、至醇なる犧牲の精神を發揮して、國難に膺り、祖國の爲めに盡くしたのは、實に主我的打算的と云はれた英國民であつた。

獨逸は聯邦組織以來帝國主義的政策を以て國是とし、日夜軍備充實に汲々として、過去四十年間國民の全精力を軍國主義に傾倒せしめたのである。かくて國力を傾盡せる大陸軍を擁して、世界政策の覇業を實現せんとした。國家のあらゆる制度組織は凡て軍國主義の目的に向つて計畫された。英國外務次官ロバート・セシル卿の云つた如く『獨逸の教育も、商業も工業も凡て軍國主義の文化にして、人類の福祉、世界の進歩に寄與せんとするものならで、他國の自由獨立を威嚇して慄るべき國家的野心を遂げんとする軍事的企畫の一部』であつた。

身を擲つて奮戰したのである。聯合國は『眞實に獨立せる主權の下に白耳義及び其他の被侵略地が完全に回復せらるゝまで我等は干戈を斂めず』と宣言して、暴虐と壓制に抵抗したのである。アルサス・ローレンは民族の自由の爲めに佛蘭西に還附せねばならぬ。波蘭（ポーランド）は露獨兩國の壓制を脫して獨立せねばならぬ。ボスニヤ、ヘルゼゴヴイナとセルビヤは合一して南方スラブ民族の獨立國家を組織せねばならぬ。カステンランドのトリエスト地方は墺太利の征服的壓制を脫して、祖國伊太利に復歸せねばならぬ。この大戰爭は個人の開放、民族の獨立、國家の自由を大目的とせる自由戰である。今回マヂアール民族が墺太利の羈絆を脫してアルフエルト平原を中心として洪牙利共和國を宣言し、チエツク・スロヴツク及びモラヴヰアン民族が、ボヘミヤに獨立國を建設し、更らにウクライナの獨立、芬蘭（フインランド）の獨立は皆民族の自由より實現したのである。實に歐米人の自由獨立の精神の熾烈なる、長く壓制的なる封建制度に慣れ、徒らに官尊民卑の迷妄に耽る卑屈なる奴隷根性を有する東方國民の夢想だにせざるところである。ネルソンを以て英國の自由を確保し、ヘーグ元帥を以て其繼續者と信ずる英人は、たゞ自由の爲め、開放の爲め、壓制と戰ひ、生命財產を拋つたのは現に這般の大戰に於て見るが如きものである。義勇公に奉じ、死して後に已むは、單に軍國主義の專賣特許ではない。何んとか魂を有する官僚國民の專有物ではない。

四、自治精神の發揮

英國の陸軍は最初から非常の困難酸苦を嘗めてゐる。義勇兵は三年の訓練を經なければ、迚も精銳無比の陸軍國を以て鳴る獨兵と拮抗することが出來ないのである。それ故出征する英兵は皆陣中で死ぬる覺悟を有たねばならぬ。故キッチナー元帥が、戰爭三ヶ年繼續說を唱へて、英國陸軍の新組織を斷行する以前、獨軍の壓迫を蒙りて英國空前の危機であつたが、自由精神に燃えたる若き義勇兵は上流中流の社會より雲の如く集つた。昨日まで學窓の下に研究に餘念なかつた牛津（オックスフオード）、劍橋（ケンブリッヂ）大學の學生は直に筆を投じて銃を把り、北

き、バポームを收め、イープルに進みヂリ〳〵と獨軍の鋒鋩を碎き、ヒンデンブルグ線に壓迫したのである。

三、自由と愛國精神

英國新聞マンチエスター●ガーヂアン紙は、大氣焰を擧げて曰く、『英國民はキング●ジョーヂの爲めに戰つてゐるのではない。一アスキヤや一ロイド●ジョーヂの爲めに戰つてゐるのではない。そんな小なる目的の爲めに戰つてゐるのではない。更らに大なる目的、卽ち英國民族又は英國民と共に、自由平等を奉ずる民主的國家の爲めに戰つてゐるのである』と。英國民は本能的なる、盲目的なる、偏狹なる、而して愚昧なる愛國主義の爲めに戰ふことを知らぬ國民である。自覺せる信念を持して、個人及國家の自由的、合理的存在の爲めに戰つたのである。

英國民は自國を金甌無缺の國體とは信じて居らぬかも知らぬ。アルフレッド大王やロイド●ジョーヂの事などは餘り自慢してゐないかも知れぬ。けれども、大英帝國の憲章たる自由、民主の精神を飽くまで之を擁護し、社會平等の進歩と幸福を保證して英國の存立を確定にするのは、自己の義務であり、特權であると信じてゐるらしい。たゞキング●ジョーヂの王威に眩惑し、人種的偏見に根據を置く狂熱的な盲目愚昧なる沒人格的愛國主義は英國には見當らない。英國民の愛國主義は、知識的、自覺的にして、個人の自由と人格の尊嚴より起るのである。

歐米近代文明の特質は、民衆の自由の要求であつた。個人の自由、社會の自由、國家の自由、國際の自由を主張し、不法なる壓迫に對して、正當なる自由を求めたのである。卽ち人間生活の開放を求めんとあらゆる努力をなしたのである。眞正なる人格的自由は近代文明の一大標幟であつた。自身に不當なる壓迫を被れば個人としての自由を守り、自家に壓制を被れば家族としての自由を守り、自國に壓迫を被れば國家としての自由を守り、苟も自由を犯さるゝ所、死を屠して之と戰ひ、歐洲大戰亂開始され、自由の死活問題が迫るや、フリードムス●コースの爲めに國民自各一

る。我上流社會が徴兵忌避の亡國行爲に腐心するが如き、遊惰軟柔な惡習は英國にはない樣だ。畏くも上　皇室の寵光を玉ひ、國民の瞻仰を受ける華胄子弟にして、知識德操共に社會の上流に置くことが出來ないものが、隨分多いことを見たならば、英國上流社會の子弟が、實に勇敢で、奉公の精神に富めるは、只々驚くの外はないであらう。英人は國家の自由は個人の自由であると信じてゐる。又個人の正義は國家の正義であると確信してゐるのである。それ故彼等の行爲は、外的な權力に支配されざる自發的行動である。知識的敎養深く、社會的訓練に富んだ彼等は、崇高なる理想と信念の爲めに戰つたのである。それ故彼等の愛國心は眞に自己の理想に徹底せるものである。一部の軍閥や官僚に煽動された無智蒙昧なる專制國民の愛國狂ではない。

英國で徴兵令を布いたのも、義勇兵では愛國心の强い前途有爲の靑年が最も多く死ぬので、戰後の結果、國家の前途を顧慮した爲めになされた手段である。政府が徴兵令を議會に提出した時、國民がそれに反對したのは、決して徴兵忌避に依るのではない。一朝有事の際には、政府の命令を待つまでもなく、直に義勇奉公の誠を捧げて祖國を守ると云ふ自治的精神が國民にあるから、そんな必要はないとしたのである。英國は官僚國とは異つて、國民は政府に靑從するのではなくして、政府が國民の精神に從つて行くのである。それ故いつも國民が主で、政府は之を補佐する後見役に過ぎない。それ故秘密外交の生ぜる軍閥や官僚の戰爭ではなく、國民の戰爭である。國民は國是、更らに廣く世界の自由人道是に戰つたのである。

有名なるバース銀行では社員の中千百三十五人の出征者を出し、其中九十五名は戰死してゐる。又英國銀行は經濟的に國家に大貢獻したのみでなく、更らに血稅卽ち社員の人命を國家に拂つてゐるのである。更らにテレグラフやデリー・メールの如き大新聞社の多くの社員は爭つて出征したので、殘つた記者は平時の數人分の仕事をせねばならなかつたのである。又下院議員にして戰死したものは、昨年末までに三十二名程あるが、その議

佛戰場に馳けつけて、祖國の爲め、自由の爲めに奮戰し、後日の英國軍備完成の相のくさびとなつて戰場の露と消えた。當時の英國海軍卿ウエストン●チャーチルが云つた様に、開戰當初祖國の危機を拯つたものはその上流中流の階級であつた。卽ち愛國主義を、自由と正義の觀念の中に懷抱する知識階級の人々であつた。

開戰前オックスフォード、ケンブリッヂ兩大學には各々四千人以上の學生が在學してゐたが、戰爭となると擧つて義勇兵に應募して、後に殘つたものは、千人足らずであつた。而かもその殘れるものは、身體に故障のあるものとか、外國留學生とかであつたと云ふ。貴族、富豪の子弟にして、祖國の大難に殉じたるものは、數知れぬのである。

英國の華族は七百軒あると云ふことだが、その中から百四十人の戰死者を出してゐる。負傷者の數は約五百人に上ると云ふから、一軒の華族から一人づゝ戰場に送つてゐるわけだ。前首相アスキスの息子も戰死し、一人は負傷し、藏相ボナ●ローの息子も僅か十九歲の少年で、オックスフォードに學んでゐたが、血氣にまかせて直に出征して、フランダースエーゼル河の激戰に重傷を負ひ、後バンスタインの攻擊で可愛相にも到頭戰死した。現首相ロイド●ジョーヂの息子も出征してゐる。皇太子アルバート殿下さへも、砲煙漠々たる塹壕の中に、泥に塗れ血に塗れ兵卒と共にあらゆる艱難困苦を忍んで奮鬪したのである。アルバート殿下が塹壕に於て軍隊を檢閱中、敵彈が飛來して、腰に下げたる雜囊を破つたと云ふ危機一髮にも處したのである。

時英國に留學してゐた僕の知人が、一英人から、日本は日露戰爭の時には、露國の如き大國を相手にしたのであるから、日本の華族社會にも定めし、多數の戰死者や死傷者を出したであらうと自分の國に引き較べて同情的に尋ねられて誠に赤面した相だ。某國の華族子弟にして、日露戰爭には一體何をやつたかと、訊かれると甚だ當惑せざるを得ないではないか。我貴族社會には、徵兵忌避の目的で、園藝研究に洋行する某々公侯等の息子の様なものが大部分を占めてゐるのであ

如き獨軍の殺到を國境に支へ、惡戰苦鬪以て英佛軍に戰爭準備の餘裕を與へ、聯合國の危機を救つたのである。當時の英國首相アスキスは、ギルドホールに於て、白軍の奮戰に感謝して曰く、『過去三週間に於ける白耳義國王及その國民程明白に大膽に、小國家保全の一大義務を自覺し、壯烈なる意氣を以て國家の自由獨立を完ふしたる例は他に求め難し。リエージュ防禦戰の如きは後世自由史中の最も靈感的一章として忘れるべからざるものなり』と。爾來勇敢なる白耳軍は英佛軍と手を携へて、祖國フランダースの一角を死守し、獨軍の鋒鋩を破り常に英佛海峽を維持して、よく英佛の聯絡を保ちて、聯合軍を最後の勝利に導いたのである。

又羅典文明爛熟して既に衰亡期にありとまで云はれた佛蘭西に今回の大戰に於て、熾烈なる愛國心と、不盡なる國民精力を發揮したのである。一八一四年十月ヂョッフル元帥の率ゐる佛軍のマルヌの大捷も、有史以來慘烈無比のヴエルダンの攻防戰も永遠に佛人の血を沸かしむるであらう。現代佛蘭西人には、『軍國主義の野望を有する獨逸とは斷じて道を共にしない』と叫ぶ氣慨がある。この鬱勃たる國民精神が凝つて、半歲に亙る血河屍山のヴエルダン攻防戰に於て、其勇敢なる意氣を以て全世界を驚倒せしめた。彼等は勇將ペタン統率の下に、祖國の運命を雙肩に擔つて、堅塞ヴエルダンに立て籠り、血染めて翻る三色の下雪崩の如き强襲軍を相手に骨碎け、血涸るまで奮戰したのである。『紐育サン』紙の通信記者をして、『嗟乎この虐殺よ!!』と戰慄せしめたヴエルダンの慘戰は、實に有史以來の大規模の虐殺戰であつた。又去る七月十八日第二のマルヌ戰たるシャトー・チエリーに於ける佛軍の勇戰は、大瀾を既倒に回へし、連日獨軍を擊破して、遂に之を屈服せしめたのである。殊に大戰に際して、健氣なる佛蘭西婦人の活動は、崇高なる犧牲の精神と熱烈なる愛國心を遺憾なく發揮した。銃砲工廠に、彈藥製造場に、製艦廠に、炭坑に、農場に、軍需品食糧品輸送に死力を竭くして働いて、男子をして後顧の憂なく戰線に立たしめた。學校、劇場、又は社交倶樂部の

席には花輪を捧げて、戰死者の英靈を弔つてゐるのである。國民の自由人權の母なる議場に弔はれたる殉道の英靈は、永く英國自由史上に芳薫を放つてあらう。

又倫敦の市街を歩くと、よく軍服を着た男が窓を拭いたり、商品を陳列したり、電車や馬車を運轉せしめたりしてゐたと云ふ。これは出征の兵士が休暇で歸家してゐるので、明日は再び出でゝ戰場の露と消ゆるかも知れぬ命であり乍ら、寸暇を惜んで一心に業務に勵んでゐる有樣は、何んとも云へぬ人間の麗しさではないか。負傷して本國に賜暇休養してゐる中に、藝者狂ひをしたり、女郎を買つたりする自暴自棄の某國の軍人とは聊か勝手が違ふ。

英國では戰前までの課稅は三十億圓であつたが、今日では五十五億圓に增稅されてゐる。それも國民が政府に迫つて增稅せしめたので、之を我國の所得稅を賦課するのに、審査の困難なるに比較すれば、思ひ半ばに過ぎるものがある。我國に於て政府は戰時利得稅を課したが、幽靈帳簿を二つも三つも拵へて、國稅を胡麻化さうとする陋劣不德の成金富豪連が多いのは、實に憤慨すべきではないか。忠君、愛國などゝ口にこそ云ふが、私利我慾の外社會國家を顧みざる非國民的人間が、至るところ蠢々してゐるのである。又英國に於て百三十億圓の公債の如きも、始めは六分の利分であつたが、國民が政府に迫つて四分に減ぜしめた。それ故戰時中諸株騰貴と云ふ景氣を示してゐる。勞働者の給料や時間の如きは、平時は中々正確に實行さるゝが、戰時中彼等も國家の爲めに、犧牲的働いて多くの勞働時間で、少ない賃錢で滿足したのである。

五、自由國民の奮戰

開戰前までは我國民の多くは白耳義と云ふ國は商業國で金があるが、戰爭には極て弱い國民であると信じた。然れども一度その全土が狂暴なる獨軍の馬蹄に蹂躙せらるゝや、正義の血潮奔つて有名なるリエージェ要塞の勇戰となつたのである。獨軍今日の敗滅の運命は實に白耳義軍のリエージェに於ける奮戰に萠してゐたのである。雪崩の

大和魂的愛國心は決して日本人の專有物ではない。旅順攻撃位な戰爭ならば、四百哩の西部戰場に日々行はれてゐるのである。去る八月オワズ河畔及びアルゴンヌ森林に於ける米軍の勇戰には流石の獨軍も辟易して敗退せざるを得なかつた。アルゴンヌ及シユーマンデータムの激戰に於ける米軍の決死奮戰は、歐洲大戰史上永遠に光輝を放つてあらう。今夏以來の戰爭に際して、獨軍は最も惱まされたのは、精力橫溢なる勇壯氣鋭の米國の爲めであつた。獨軍がヴエルダシ要塞附近からメツツに追ひ込まれセダンを占領され國境防禦線悉く擊破されたのは米軍の爲めであつた。

六、官僚的教育の敗亡

自由民主の英米人が、軍國主義の獨墺と戰つて遂に勝利を收めたのは、要するに彼等が受けたる自由教育の精神が遺憾なく發揮せられたるが爲めである。卽ち彼等の自治的、自發的精神がよく壓制と盲從の軍政國家を打破したのである。英米國民は、彼等の傳統と制度と教育に依つて、眞正なる自己の人格を實現する自由を求むる念が實に熾烈である。それ故國家興敗の大戰爭となつても、たゞ政府當局者に熱國心を喚起されて、始めて出征したり、戰時事業に從事するが如きは全く自由國民の資格がないものと信じてゐる。某國の様に忠君愛國を官營として、之を無智蒙昧なる國民に配布して、愚劣偏狹なる愛國心に盲動せしめて自己の野心を滿す様なことは、文化敎養の高き自由國には全然ないのである。

それ故英米人は國家の危急に際しては、爲政者の煽動に依らずとも、自發的に國家の爲めに一命を抛つのである。米國では壯丁を徵兵に登錄する時でも、日本の様に市役所や村役場が壯丁に命令するのではない。政府はたゞ壯丁が最寄の登錄所に出でて、登記を受けられたいと各新聞に廣告するのだ。本年九月十二日に、十八歲以上、四十五歲までの男子は徵兵登錄をせられたいと各新聞に廣告をしたら、僅か一日丈で全國千三百萬の壯丁が登記を終へたのである。それで誰一人不平の云ふものはない。米人が自治的精神に富んでゐることは實に驚く外ないであらう。

舞踏室さへも、軍需品製造場となつて、花の様な婦人も、勞働服を纏つて、轟々たる器械の運轉の裡に、藥品や鑛油や、煤烟で眞黒になつて、日夜立ち働いたのである。彼等は銃劍を執つて砲火の前に立つこと以外に、如何なる荒仕事にも男子に代つて從事したのである。

我國の婦人にして、果してこの氣慨があるであらうか。一朝有事の際、男子に代つて荒仕事をなし、英佛婦人の如く一國興敗の根源となる後方勤務の大使命を果すことが出來るであらうが。虛榮心のみが豐富で、頭腦が貧弱で、意志も氣節もなく、偏屈で、因循で、依賴主義で、肉體の脾弱な我婦人は一朝有事の際、男子の手纏ひ、足がらみとならざれば幸である。

華名虛實の愛國婦人會を虛榮展覽會となす某國の貴婦人とは佛蘭西婦人は聊か異るのである。

米國に於ても亦參戰以來二百億圓の軍費を蕩盡し、二百二十萬の大軍を佛蘭西戰場に送つて、聯合國の最後の勝利を速進したのである。無限の物資を擁する米國が絶大なる努力を以て軍事上、經濟上聯合國を援し、民主文明の確立に戰つたのである。若しも米國が聯合國に加擔しなかつたならば、戰爭の終局は今尙前途遼遠であつたかも知れぬ。獨逸軍閥や、某國の軍閥などが、米國參戰の當初、貧弱な傭兵制度の米國が、世界の大陸軍國に對して何程のことか成さん。米國が聯合國に與ふる援助は單に經濟上に留まるであらう。大西洋三千哩を隔てた歐洲に大軍を輸送することは到底不可能であると、高を繰つてゐたのであつた。ところが豈圖らん、米國陸軍卿は徵兵令を發した、瞬く間に三百萬の壯丁を召集したのである。而して昨年の五月より本月八月まで僅かに一年三ヶ月間に二百二十萬の大軍を編成して、大西洋の波濤を蹴て遠く歐洲に輸送し、不可能なりと信ぜられた大軍輸送を遂行して、世界人士を驚嘆せしめたのである。志したことならば如何なる大事業をも遂行せずんば已まぬと云ふ米國人の強靱なる氣慨に今更ら驚かざるを得ないのである。某々國の軍閥より輕蔑されてゐた米兵は佛蘭西戰場に於て、實に鬼神をもあざむく勇敢なる戰爭をしたのである。

する。自由、自治の德性を敎養して、人格の實現を期せねばならぬ。自由人を作りて自由政治を與らしめ、國際的に人道を擴張する國民を作らねばならぬ。これ今回の歐洲大戰亂の吾人に致せる最も意味深き敎訓である。

北米通信

（在米永井柳太郎氏より記者に宛てたる私信の一部）

（前略）

米國人は英國人よりももつと自治的精神が旺盛であるやうに見ゆる。御承知の如く、米國は來年在佛米兵四百萬在米營兵約百萬合計五百萬の大陸軍を組織する目的を以て、本年九月十二日を期し、十八歲以上四十五歲以下の男子は米人たると小生の如き外人たるとを問はず、凡て附近の徵兵登錄所に出頭して徵兵名簿に登錄すべき事を命じた。然るに政府は此命令を各個人に傳達するにあらず、唯新聞紙をして普通の記事として揭載せしめたるのみなるに拘らず、當日は雨を衝いて登錄所に出頭する者引きも切らず、中には父子共に徵兵年齡に相當し、相携へて出頭するもあり、一人の不平を云ふ者なく僅かに午前八時より午後九時に至る間に全國約千三百の壯丁が登記を終へたるに至ては唯か其自治的及び國家的精神の旺盛なるに驚かざるものぞ。小生も又徵兵名簿に登錄し、一生の中二度徵兵檢査を受くべき事となつたのも又興味ある思ひ出なり。

各大學にはSATCと云ふものが出來たステューデンツ、アーミー、トレーニング、コルプである。學生は在學の儘軍籍に入り、日々軍事上の訓練を受け、政府は學生に月三十弗の手當及び裁服食料の補助等合計一人に約百弗を支給するのであ

忠君愛國の國民だと威張つてゐても、徴兵忌避の非國家的行爲の多い國民とは聊か違ふのだ。英米人は團體生活に於て、常に組織的に訓練されてゐるから、直ぐ軍隊に入つても、三年間教練した日本の兵士の二人分位の活動が出來る。英米が今度の大戰に急拵への陸軍を戰場に送つて、軍國主義の獨軍を擊破したのは、全く自治的精神の訓練に依るのである。眞に人格的の自由と獨立を尊重する自由政治の下にあらざれば、眞の强兵を得ることが出來ない。

某國の如く軍閥が時代後れにして愚劣極まる青年團や在鄉軍人會を組織せしめて、國民思想の官營を計つたり。人格の自由を壓迫したりするのは自ら國家を敗滅の端に導くのだ。英米自由國民が、この度の大戰亂に際して、驚くべき程、愛國の赤誠を捧げ、義勇奉公の精神を發揮したのに、盲目的なる忠君愛國を國民に鼓吹し、皇帝を偶像的に國民に崇敬せしめた最も愛國主義に徹底した露國に於て、危險極まる過激派が出現して、國家を滅亡の運命に陷らしめたこの悲慘なる現象を官僚軍閥の輩果して何んと見る。

某國の教育は官僚的、劃一的形式的にして、毫も個性の教養や人格の訓育を顧みない。若し人格教育をしてゐるものがあるとすれば、そは官僚的人格の教育である。否、國民を輕蔑して官僚に對しては卑屈になれと云ふ教育である。小才の利いた人間、又は機級的人間、官僚の道具となる人間を作るが、眞に『人間』としての教育をしない。斷片的人間を作るが、全人格の實現となる個性を教育しない。卽ち人間教育をしないのだ。自治自由の精神を發揮する人格の根本を作ることを顧みないで奈何で立憲的自由政治が盛んになるであらう。それ故官僚道德あつて國民道德なく、家族道德あつて社會道德なく、國家道德あつて、國際道德ない軍國教育が非立憲にして他力盲從の國民を作るのだ。世界中で某國民程國際的知識を缺いてゐる國民はなからうと思ふ。世界の進運と大勢を見る目がないから、小弱な軍國文明に滿足してゐるのだ。

これからの教育は必らず、人間の教育を必要と

米國參戰に現れたる道義的精神

ヴアーサール女子大學教授
哲學博士　ファーネス女史

一

戰爭の不祥事なる事は申す迄もない。殊に永い間、歐洲の天地を砲煙を以て閉ざした此度の戰爭は、實に全人類の不幸であつた。けれども飜つて、此度の戰爭が私共に與へた敎訓は如何に大なるものがあつたか、又私共が色々の方面に於て道義的精神の精髓を實現する爲に、如何に好き機會を與へられたかと思ふ時、私共は轉感謝せざるを得ないのである。

抑米國は如何なる理由を以て參戰する事となつたのであらうか。若し米國が領土を擴張したいとか、澤山の償金を取りたいとか、又は有利なる權利を獲得しやうと云ふ野心から參戰したのだと考へる人があれば、夫れは大變な間違である。尤も國威の保護と云ふ事も參戰の理由の一つではあるが、米國民にして斯る事を念頭に置くのは少數の識者丈である。大多數の民衆が米國參戰の理由と信じて疑はざる處のものは、只人道主義あるのみである。

人道主義と云ふものは、人類全般の幸福と進步向上とを目的とする道德上の主義である。人道主義は强者が弱者を勞り助ける主義である。破船其他の災難に際して婦人や子供が一番先に救助せらるゝのは、彼等が特に重要な者であるからではない、强者が弱者を勞り助けるのが人道主義の主張であるからである。

る。米國では各個人の個性が能く發達し、そのまゝ放任して置いても日本の兵士一人前位の仕事が出來るのであるのに、政府が大仕掛のミリタリーオルガニゼーションで此能く發達した人間を更に軍隊化しつゝあるのです。個性の發達を奬勵する自由政治の下にあらずんば其強兵を得る事は出來ませんせう。

小生は此頃時々歌を作る一ッ二ッ御目にかけまハドソン河畔に佇みて

故郷に通ふわが思ひかな
　リンコルンを吊ひて

音に聞くウールオス塔は高けれど
　いかで及ばん君がほまれに

リンコルンのみちしるべせし一筋の
　ほかにあらめや正義人道

汽車中にて

アメリカの山みるたびに思ふかな
　富士の高根の秋やいかにと

野も山もみわたすかぎりあれはてゝ
　花一つだにみぬアメリカの旅

ロツキーのみねにもミシシツピーの平野にも
　咲きほこらせん大和なでしこ

まだ澤山あるがマア此位にして置かう敎會の諸兄姉に宜敷く。早々

十月十三日

永井柳太郎

相原一郎介氏夫人は久しく御病氣中のところ藥石効なく十一月廿八日遂に御永眠されたり。謹んで哀悼の意を表す。

人の間にも入交つて、誰彼の差別なく取引もして居るユダヤ人も、宗教上の事となると自分達の團體には斷じて他宗の人を交へない事になつて居た。斯の如く色々の宗教宗派が各自高い障壁を築いて、互に反目しつゝ思ひ々々に仕事をして居たのである。處が愈此度の大戰爭に我が國民が參加する事となつてからは、斯う云ふ排他的の態度が餘程改善せられて來た。

歐洲戰爭に參加の爲編成せられた軍隊慰問の目的で、基督教青年會は陣營の近くに集會所を建設し、之れを兵員慰問の爲に開く諸種の集會の用に供した。初めの中は、ユダヤ人やカトリック教會の信徒等は新教徒の設けた此の建物を用ふる事を快しとしなかつた。けれども、わざ〳〵軍隊慰問に來た斯う云ふ人々は大に集會所の必要にを感じ次第に狹隘なる考を棄てゝ、青年會の建物を快く使用する樣になつた。其の他何宗派の代表者も、軍隊慰問の爲に陣營所在地に集まる宗教家等は互に親交を增し、皆一致協力して尊い働に從事する樣になつて來た。

過日青年會幹事の一人から面白い話を聞いた。米國にルーテル教會とて一つの小さい宗派がある。此の教會の主義として、自分等の集會には決して他の宗派の人を交へない事になつて居る。此のルーテル教會を代表する一人の牧師が矢張り軍隊慰問に來た。そして自分の教派の信徒丈の爲に宗教的會合を開かうとして、青年會設立の集會所借受けの申込をした。所が青年會の方では、其の建物は誰でも自由に入場を許す集會でなければ使用させない規定となつて居るから、誰でも參會を許すならば使用してもよろしいと答へた。之れを聞いた牧師は失望して仕舞つて默つて歸つて行つた。一週間程すると其の牧師は又青年會の幹事を尋ねて來た。そして云ふには、私は茲暫くの間軍隊生活の實況を目擊して大に悟る處があつた。之れからは何人の參會をも歡迎するから御會の建物を貸して集會を開かせて頂きたいと。斯くして狹隘固陋であつたルーテル派も皆と提携して働く樣になつたと云ふ事である。

三

初め暫くの間米國は參戰を躊躇して居た。夫れは米國の青年が彈丸硝雨の間を生命を賭して往來するのが恐しかつた爲では決してない。又家庭の者が自分の愛する夫や子や兄弟を失ふ事を恐れ厭うた爲でもない。同胞の骨肉を食み合ふ樣な慘酷な仕事は人道主義を奉ずる者の決して好まない處であるからである。

けれども、獨逸が國際條約を無視し、武裝無き中立を冒して弱者に對して無慘なる暴虐を恣にしたる旨の確報を得た時、我が米國民は人道主義の爲に立たざるを得なくなつたのである。「人道主義の爲に立て」とは國民凡ての聲であつた。臨時軍隊特別增補の案は國民の熱誠を以て可決せられた。二十一歲より三十一歲迄の男子は皆兵員應募の資格を有するのである。そこで兵員應募者の爲に各地方に便宜登錄所が設けられ、應募者記名の日一日は全國を通じて休日とせられた。募集の結果良好なりし事は何人も意外に感じた程であつた。

應募者の中から選拔採用せられた青年等は、急拵への兵營に萬端極めて不自由な生活をしなければならなかつた事は勿論である。遽に不自由な軍隊生活に入つた子供の上を案じるのは何處も同じ親の情で、彼等の父母等は何かと安否を問うてよこす。けれども當人達は何れも至つて平氣で、不自由位は少しも意として居ない。父母への返事は何れも申合せた樣に軍隊生活の愉快な事丈を報告して居る。

私は日本へ來る前に、シャトルの近くにある兵營を訪問するの好機會を得た。そして多くの事を學び得た事を非常に幸福に思ふのである。

二

私共の特に注目すべき事は、此度の我が參戰が宗敎界に與へた影響の實に大なるものがあつた事である。從來米國に於ては宗敎界に可なり激しい暗鬪があつた。同じ基督敎の中にも澤山の宗派があつて、夫れが今迄中々折合が付かず互に反目して居たのであつた。其中でも最も勢力のあるカトリック敎の如きは、嚴然として排他的の態度を採つて居たのである。又日常萬般の事に關しては何

令に服從して居る。平常ならば流行變遷の可なり激しい我が米國に於て、參戰以來は國民擧つて勤儉の德を實行せんとし、必要のない物は新調を控へ、何でも成る可く古い物で間に合はせやうとする樣になつた。其の證據には、衣服等の流行は茲二三年は元の儘である。

斯う云ふ氣風を養成せられたのは全く我が參戰の賜物である。

此の永い戰爭の完全な終結を見るのも近い中であらう。其の曉には、參戰した國々は皆代表者を出して後始末の和談に取りかゝるであらう。其時に當つて各國が只自國の利害のみを頭に置き、各自勝手な要求許りして居たならば、決して有終の美果を納める事は出來まい。各國共、只我國の爲に利あれかしと云ふ狹い考を捨てゝ、人道の爲に之れは斯くすべきものである、人道の爲に之れは斯くしてはならないと云ふ樣に、人道主義卽ち人類全般の幸福と進步向上とを各國共通の主眼として事を議したならば、萬事が誠に立派な解決を見る樣になるであらう。

四

自分は天文學者の立場から此の世界の狀態を見る時に、斯樣な小さい世の中で、小さい人間達があちらで衝突したり、こちらで爭つたりして不滿な生活をして居る事を考へると、如何にも馬鹿らしくなつて來る。

小さい世界に、短い生命を盜賊の樣に互に爭鬪掠奪を事として暮すのも一つの暮し方、又互に兄弟姉妹の親しみを以て平和に樂しく暮すのも一つの暮し方である。希くは私共は後者の樣な生活をして行きたいものである。そして、眞に尊敬すべきものに對しては充分の尊敬を拂ひ、同時に自分等も亦眞の尊敬を受け得る者となつて行きたい。

眞に尊敬を價するものは人の持物の多い事ではない。外から付けた社會的の地位でもない。人の身にそなはつた人格である。內に存する立派な品性である。勝れた天賦の才能である。隨つて國家の品位を定めるにも、只に軍備の大なるを以つて偉とし、富力の勝れたるのみを以て大となし、之れに特別の尊敬を拂ふ事は私共の取らない處であ

由來宗教と云ふものは、人の心の奥底に横はる自然の要求であつて、萬人共通の尊い感情である。宗派と云ふ様な人爲的の區別を設けて美しい宗教心を傷け、尊い宗教的活動を小さく狹く限つて仕舞ふ様な事は誠に愚な事である。斯様な陋習を破つて、多くの宗教宗派の間に美しい調和を見る様になつたのは、此度の參戰に依つて現れたる最も愉快な出來事の一つである。

又軍隊生活に入つた人々は、其の日常生活に於て、デモクラシーの精神を遺憾なく實現するの好機會を得たのである。小さい例を擧げれば、曾て、所得稅の割當をなす爲に、軍隊に於ても各自の財産より上る所得を調査せられた事がある。其の時一兵卒にして多くの財産を所有する者が、夫れより上る所得に對して多額の所得稅を課せられた。處が彼は努めて自分の納稅額を仲間に秘す様に注意をした。何の爲かと云ふに、若し自分が多額の所得稅を納める事が仲間に知れる時は、自分は仲間から金滿家として特別扱ひをせらるゝに違ひない、其の事を恐れるからであると。

又曾て、歐洲行の軍隊輸送船の中で、徒然の慰みに懸賞の角力が催された。一人の青年は此の角力に勝つて十弗の償金を貰つた。けれども彼は其の賞金を直ちに相手の負けた青年に與へて仕舞つた。どうした事かと思つたら、負けた方の青年は手形では二萬五千弗も持つて居るけれども、手許に現金がないので不自由して居るからそれを與へたのだと云ふ。斯うした小さな事もデモクラシーが行はるゝ好機會となるのである。

參戰以來、實業界に於ける激烈な競爭の結果、比較的小規模の事業が、少數の大規模の事業に合せられ、其の結果として、資本家や實業家にして實業界から手を引く者が可なり多く出た。斯様な人々の中で、巨萬の財産を擧げて赤十字事業等に投じ、其の身も一社員となり、デモクラシーの爲人道の爲に一生懸命に働いて居る者がある。而も彼等は、人道の爲に餘念なく働く事は、實業界に於ける働きと比較して遙に愉快な事である事を發見したと云つて非常に滿足して居る。

一般の國民は善く一致して、喜んで食料の制限

弘道會より

□平和來　空前の世界戰は終に結末に近づきつゝある。併しながら單なる平和條約を以て一切の問題の解決せられぬ事は謂ふ迄も無い事である。今や新しき幾多の大問題が戰爭の結果として誘起されつゝある。世界は戰後に於て戰時にも優る努力と緊張とを要する。而して此事は日本に於て特に左樣であると思ふ。隨つて、かれて、日本社會の指導者且日本教界の識者を以て任ずる我會の活躍すべきは正に此秋にあると思ふ。

□日米兩國婦人の親交　を促進する目的を以て來朝されたる米國ヴッサー大學天文學教授ファーネス女史に對する歡迎會を本會主催の下に十一月三日帷一館に於て開會した。席上女史は平山夫人の通譯により『戰時の米國に表はれたる道義的精神』と題して二時間に亘る演說を試みられた。『自分は天文學者であり且理想家である。天文學上より觀察すれば地球は無限なる大宇宙の一小分子たるに過ぎぬ。其の一小分子たる地球上に割據する國と國とが互に爭鬪するが如きは愚の極である。相互に提携し努力して偉大なる國際的平和の實現に貢獻し度い者である』と結論された。同氏の感想談を聞くの愉快を有する事を得た。『歐米の戰地及び社會より日本を觀る時は日本は情なき迄に小さく見える。時としては聯合國の一員であるや否やさへ疑はれる位である。眼前一時の成金に目くらみで永遠の大計を誤る樣な事あれば其は實にゆゝしき危險である。歐米諸國は火と血とのバプテスマを受けたのである。戰後の覺醒と活動との目ざましさは眞に刮目の期待に値すると思ふ。日本は或意味に於て今や一大危期に在るのでは無からうか』といふのが論旨であつた。氏自身親しく目擊せられたる事實に基ける議論であつた爲めに來會者の反省と興味を喚起せる事甚だ大であつた。

□會員の消息　浦鹽派遣軍司令部附として從軍せられたる岡田哲藏氏は來月凱旋の筈。久布白直勝氏の市民教會は漸次發展の緒に就きつゝある由。伊東三三雄氏及び星島二郎氏は何れも去月華燭の典を擧げらる。(今岡生)

てあるから玆には省略する。猶同日の會合には青年會慰問使として歐羅巴の戰地に趣かれたる山本邦之助氏來會せられたるを幸ひに、

會者一同の深く滿足せる所であつた。內容の紹介は氏自身特に本誌の爲に執筆せらるゝ筈

る。私共は、先づ其の國民の品性如何、才能如何を研究して後初めて其の國の品性を定めたいのである。

チエック・スローバック人は、幾百年間墺洪國の虐待を受け、憐むべき境遇の下に置かれた民族である。そして今迄極めて微々たる民族的存在を續けて來たのである。けれども此の民族は非常に天才に富んだ民族で、文化に貢獻する處少からざるものがあつた。彼の有名な宗教界の大革命家ジョン・フツスを出したのはチエック人である。今此のチエック・スローバック人が、墺洪國の羈絆を脫して、民族的存在を明かにしやうとする時に私共が熱心に之を助けやうとして居るのは、彼等の天賦の才能を尊敬し、之れを助けて一層の發展をなさしめ、人類同胞の進歩向上を目的とする人道主義を實行しやうとする希望からである。

私は敬愛する日本の兄弟姉妹に對して切に望む。如何なる事に當る時も、常に人類同胞の幸福と進歩向上とを念頭に置き、人道主義の美果を納め、以て世界各國より永く眞の尊敬を受くる國民となる樣に大に努力して頂きたい。

（統一基督教弘道會に於ける女史の講演の大要を平山信子女史の通譯し且つ筆記せられしものなり）

冬來たる

高橋芳夫

歐洲戰亂五星霜　百雷轟く白黃の空
屍山を築く　血なまぐさき國原吹雪
哀れ無限のかなしみの　ラインの河の滔々と歷史の流れ
老も若きもをしなべて　誰か多恨の涙なき
肉の戰ひ劍は折れ　靈の劍に光あり
湯になやめる何億の　軍人
めぐみの露にうるほへて　夢地辿りぬ十一月
人道正義勝利の叫び　天は閉ざせる雲間より
平和の光りとこしへに　放ちたまへり
動亂の光りも消えて　思ひ出の
なごめる空氣の中に　躍りもつきず
心うれしき樂園の　祈禱感謝のクリスマス
莚に祝さむ　冬空のもと

（七、一一、二〇）

我等の宗教

毎月一回五日發行
定價一冊金七錢
稅五厘
一ヶ年稅共金八拾錢

我れ等同人相計つて、宗教の本質を學理的にも又實際的にも研究する所の新誌を發行し、以て眞に自由主義の基督教を徹底せしめんとす。載せんと期する所の大略は凡そ(一)聖書の研究(特に難解の章句)(二)耶蘇傳の研究(三)諸教の研究(四)近代の思想と宗教(五)宗教哲學上の根本問題(六)我れ等の信仰(七)如何に兒童に聖書を物語る可きや等なり。

(第二卷第十五號)——十一月五日發行——

(十五號目次)
□宇宙とは何ぞや……三並良
□父の沈默……大橋房子
□默示錄思想の評論(其三)……三並良
□憐殺……沖野岩三郎
□レフュージを求めて……ふさ子
□秋ふかみ……芳夫
□來國通信……治部茂
□消息……

(第二卷第十六號)——十二月五日發行——

(十六號目次)
□宗教の獨立性……三並良
□レクュージを求めて……大橋房子
□默示錄系思想の評論(四)……三並良
□死の勝利……沖野岩三郎
□コスモスの花……芳夫
□來國通信岡山だより……
□消息……

發行所
東京市芝區三田四國町
宗教研究會
振替東京三八三九番
電話芝五八五五番

編輯の後

■本年も餘すところ僅かに一月となつた。既往一年を顧みれば甚だ月並の樣だが洵乎として夢の如しだ。いつも年末になると來年こそはと思ふ。今年も新春劈頭人並みに計畫したことも相應にあつた。それが何程成就されたかと訊かれると甚だ愧しい次第だ。疎懶業空しく成らず、僕の樣な愚物はいつも後悔が後に立つて、賢人智者の樣に先きに立つた例しはない。當てにならぬ望みを當てにして、來年は、來年はでせめて命を繋いで行く中に何かの拍子にポツと死んで仕舞ふのかも知れぬ思へば情けないが仕方がない。いつそ『吾身元魯鈍。進退不關情』と諦めるか。

■昨年の暮は戰雲漠々として何時天日を見るか豫想することも得なかつたが、聯合軍の奮鬪に依りて戰局急轉し、俄かに戰雲の影斂まり、平和の光を仰ぐに至つた。一陽來福、希望の光洋々たる新春を迎ふることが出來ると思ふと誠に喜ばしい。六合雜誌は新年特別號を出して聊か世界文明の新紀元に副はんとし■同人は皆健在です。內ヶ崎氏は學校のことで相變らず多忙です。吉田、一條、冲野、野村の諸氏は諸雜誌から賴まれて新年號の原稿で仲々忙しい樣だ。相原氏も元氣で時々編輯室を覗かれます。浦潮派遣軍司令部參謀部附として從軍せられた岡田哲藏氏から『一發の砲聲も聞かず、とても戰爭氣分は起り不申候』と云ふお便りがあつた。尙氏が本號に寄せられた英詩『西伯利の野より』は誠に面白いものだ。殊に最後の『美しきロシヤ乙女』は實に幽麗を極め、しかも床しき哀韻を帶びたところ〳〵ろ情感に迫るのである。氏が近來の妙調てあると思ふ。

■三並氏は御病氣にて引籠り居られるとのことなるも、速に全快せられんことを祈つて居ます。

■前庭の樹木悉く落葉。蟲聲破窓に細く、寒た。詳しくは前頁の豫告を御覽下さい。尙新花哀草霜間に顫ひ、暮鴉疎林に悲しく『索落盧山夕』もかくやと思はれる。(編輯子)

子　規

○臍さむし柿喰ふ宿の旅枕
○柿に思ふ奈良の旅籠の下女の顏
○竹垣の外は上野や蟲の聲
○通夜堂の前に粟干す日向かな

統一基督教會集會案内

一、禮拜說教（毎日曜日午前十時）（當擔）　三並良

一、傳道講演（毎日曜日午後六時半）　沖野岩三郎

一、聖書講義（毎日曜日午前九時）　三並良

別掲廣告ノ通り

一、靈交會（毎木曜日午後六時半）　沖野岩三郎

舊約聖書を研究中、猶會員諸君の信仰告白、宇宙、人生等に對する質疑等有りて頗る有意義の會合也

一、日曜學校（毎日曜日午前八時）　諸家

滿五歳以上の少年男女の入學を歡迎す

□どの集りにも、又どなたでも自由に御出席、御聽きになるとが出來ますから、御遠慮なく御來會下さい、歡迎いたします。

東京三田芝園橋際

統一基督教會

電話芝五八五五番

自由基督教會集會案内

但し自由教會は夏期中集會は悉く休む。

□講演（毎日曜日午前十時より）

内ヶ崎作三郎、安部磯雄、岸本能武太、岡田哲藏、小山東助、永井柳太郎、今岡信一良、相原一郎介の諸氏之を擔當す

□聖書講義（毎日曜日午前九時半より）

相原一郎介氏擔任

□思想研究（日曜日午前九時）

H. G. Wells, God the Invisible King の輪講文學士今岡信一良氏指導

以上會場は女子音樂學校講堂に於てす

□家庭集會（隔週木曜日午後六時半より）

各教會員の宅を巡回して開催し、相互の親睦を計り信仰に關する疑義を糺し共進互琢の實を擧げんとするものなり

□本會は大正四年六月成立し、自由基督教の立場より包容的信仰を宣傳し、現代の思想と生活に適應する宗教生活を樹立せんとする人士の組織せる獨立自給の團體なり、同感の士の來會を歡迎す。

神田錦町三丁目女子音樂學校内

自由基督教會

電話本局三七三九番

岡田哲藏著

我が斷片

價金貳拾錢　稅金二錢

MYFRAGMENTS

金貳拾錢　金貳錢

右合本

金四拾錢　金四錢

我が環境

金六拾錢　金四錢

MYENVIRONS

金四拾錢　金貳錢

發行所

東京市芝區三田

振替東京一〇〇〇三番
電話芝五八五五番

六合雜誌社

彼は何物をもことさらに作爲せんとはせぬ。然し彼が感受し、觀察し、判斷するものが自然の形に成り出づる。かくして成れる自然の作が「我が斷片」として見はれたのは三年前である。其後の作の集まれるを分類し配列したのが「我が環境」である。彼はさきに數年の觀察と思惟の結果を集めて「靜觀と思想」と名くる一論集とした。その範圍は主として今の思想界、卽ち他の人の心の世界であつて、それを攻究の對象としたのであつた。然してその成果は世の常の論文の形であつた。「斷片」と「環境」とはかく人の心界に限られず、他の思想に介せられず、彼自らが直ちに自然に接し、人生に接し、得たるまゝの印象を表現したのである。その表現の方式も、散文とも詩とも就かぬ、自由にして獨特のものである。然し乍ら成し得る限り短き辭に多くの意義を包含せんとの試である。自由に眞實に他の思想や形式に累せられざらんと願ふのみならず國の境を越え、時の流れの外に立つは彼の望である。

クリスマスの贈答品

ピーアス原著
皆田篤實譯
口繪　小川千甕氏

聖者の話

東京神田
江原書店
發行

▼四六判二百頁挿畫入美本定價金壹圓送料八錢▲

西洋の有名な聖ワランシスやジエロームの以下諸聖者の面白い逸話を十編だけ集めたもので、文章は平易で、綺麗な挿繪が澤山あり泰西の名畫子供にも能くわかり、家庭の讀物としても至極適當のものである

賣捌元　東京市神田區仲猿樂町四　越山堂書店
電話本局一三九二番振替東京一一九五四番

祝

クリスマス

本

印刷所

東京市芝區南佐久間町
壹丁目三番地

電話新橋一三二二番
振替東京三八六六五番

本誌讀者諸君の特權

◎圖書取次！

一、東京市内發行の書籍ならば定價の金額丈御送り下さるれば別に送料は要しませぬ。但し法律書、醫書及び教科書は元價が非常に高いのですから送料を添へて下さい。

一、御送金は可成安全な振替貯金にて御拂込み下さい。（振替口座は東京一〇〇〇三、六合雜誌社宛）

一、本部へ當て返書を要する質問書御發しに際しては必ず返信料を添付して下さい。

一、御注文に際しては必ず書名著者氏名及び發行所等を御記し下さい。（海外よりの御注文は郵税を要します）

六合雜誌社營業部
電話芝五八五五番

本誌定價

壹冊	一ヶ月分	金廿五錢	税一錢
六冊	半ヶ年分	前金壹圓四拾五錢	郵税共
十二冊	一ヶ年分	前金貳圓八拾錢	郵税共

◉海外は郵税一冊に付金八錢（清國を除く）
◉特別號出版の際は規定以外の代金を申受く

本誌廣告料

特等	表紙二三四面	一頁	金貳拾圓
普通	一	一頁	金八圓
普通	一	半頁	金六圓

◉表紙四面は一頁以下の廣告は御斷り申上候
◉二回以上連續掲出の際は特別割引可仕候

大正七年十一月廿八日印刷納本
大正七年十二月一日發行
（毎月一回一日發行）

定價 廿五錢
本號

東京市芝區三田四國町二ノ六
發行兼編輯人 工藤直太郎
東京市本郷區眞砂町三十六番地
印刷人 和田操
東京市芝區三田四國町二ノ六
印刷所 三光堂
發行所 統一基督教弘道會

發賣所
東京市芝區三田四國町
六合雜誌社
振替東京一〇〇〇三番
電話芝五八五五番

（明治廿五年三月二十七日第三種郵便物認可）（大正七年十一月三十日印刷納本）
（大合雑誌第三十八號第十二號）（大正七年十二月一日發行）（毎月一回一日發行）

御進物には

ライオン歯磨

クリスマス用にも
御歳暮用にも

ライオン
歯磨の
各種
製品に
限ります。

ライオン歯磨
ライオン石鹸
本舗 東京市本所區外手町
株式會社 小林商店
支店 大阪東區瓦町二丁目
名古屋市東名町四丁目
上海 漢口 天津 孟買

（本誌定價）金貳拾五錢 郵稅一錢

明治廿五年三月廿七日第三種郵便物認可
大正八年一月一日發行(毎月一回一日發行)

六合雜誌第三十九卷第一號

六合雜誌

文明改造

新年特別號

前京都同志社大學神學部教頭
京都帝國大學文科大學講師

日野眞澄先生新著

基督教教理史

總クロース製、函入、菊判九百頁、定價四圓五十錢送料十二錢

本書は大正三年九月以降、著者が京都帝國大學文科大學に於て講述したる著者の最も得意とせる研究にして、所論該博にして精細、明快にして周到、實に著者が廿有餘年の蘊蓄を披瀝したる結果なり、されば著者半生の心血を注ぎたるといふも過言に非ず、其質に於て量に於て敎界稀に見る偉觀たるのみならず、眞に本邦空前の大著述たり

愈々發賣仕候

發兌　東京銀座　警醒社書店　振替東京五五參番

千萬言の

説明を聽くよりは、此の
一管の實驗を御覽なさい
品質本位

花王石鹸

くわおうせっけん

石鹸試驗法

石鹸ん些し削つて試驗管に入れ之にアルコールを注ぎ好く振り混ぜて火に炙れば純良の石鹸ば透明となる。若し混合物があれば沈澱し遊離脂肪があれば濁濁が見ゆる。又遊離アルカリを含むものは此の液にフェノールフタレイン一滴を落せば赤色に變ずる。

斯の如く純良無上の品質なるが故に絕えず帝國陸海軍、帝國大學赤十字病院等の採用品となり、化粧衞生の第一品として滿天下に賞讃を博するのです。

花王石鹸製造元
東京馬喰町
長瀨商會

THE COLONIZATION

Vol. IIII. No. I. Jan. 1919.

Office: Shokumin Kyoikukwai-Shuppaubu, Setagaya, Tokyo.

植民

月刊

第四卷第一號

新年號 特價十錢

一冊十錢　半年分六冊三十錢　一年十二冊六十錢

●南洋方面に發展すべし……侯爵 大隈重信

◎獨逸植民學校參觀記……油谷治郎七

●ブラジル土地購入の方法……大島喜一

◎勞働神聖と海外植民……吉村繁義

四十五錢の米を食ひあきた人
月給が廉くてやり切れない人
帝國の大使命を自覺せる人は
外國へ行かずとも是非とも本誌に來れ!!!

◎南米通信●フイリピン通信◎ブラジル通信

●内外コロニアルポリシイ……坂本正雄

◎日米問題の將來……法學博士 添田壽一

●講和と植民地問題……海外植民學校々長 崎山比佐衛

每號揭載

●海外渡航船案内 ◎植民政策講話 ●地理、外國事情 ◎大使公使領事の月々の消息 ●海外寫眞畫報 ◎船會社旅館案内 ●植民地衛生の話

東京府下世田谷 北澤四十三

海外植民教育會出版部

電話番町三四二二 振替東京二五三八六

▼柳宗悅著　一月下旬發行

宗教とその眞理

四六版總布製
ジオット筆銅版一葉
紙數六百頁內外
定價送料未定

究竟の眞理とは如何なるものであるか、此問ひに對して此一書は淺からぬ暗示を人々に與へるであらう。神の內容に就ての宗教的思索が著者の長い間の企であつた。人は宗派に妨げるれる事なく共有の神をこゝに見得るであらう。然も彼の新しいものゝ見方は、埋もれた數多の眞理を驚く可き價値に甦すであらう。東洋の土に血を受け、西歐の文化に育てられた著者は、東西の宗教の理解に對して特殊な天佑の補佐を受ける。誰か無益にも『宗教の日本』をこゝに否み得るであらう。一國の名譽は一つにその宗教の深淺に依存する。此著書はかゝる未來の名譽に向つて確實な一つの證印を明かに示すであらう。

有島武郎著作集

第十輯　小さき者へ　第十版　定價金五拾五錢　送料六錢

第十三輯　生れ出る惱み　第十三版　定價八拾錢　送料六錢

東京牛込神樂町二丁目十一番地　叢文閣　振替貯金口座東京四二八八九番

謹賀新年

診察毎朝及毎夕　但祭日及日曜の他
院長診察月木金午前及午後六時
林、峯間兩副長は目下當院に在勤
東京麹町區三番町卅番地（市ケ谷見附内）
電番六二番
番五一六番

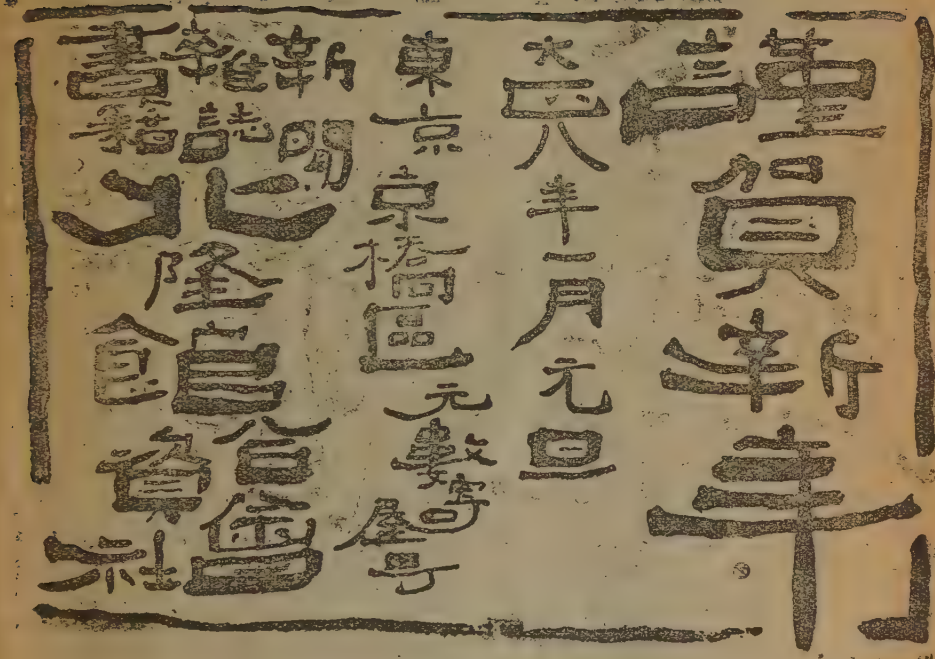
東洋内科醫院

院長　醫學博士　高田畊安

電話ちがさき二番

南湖院

神奈川縣茅ヶ崎海濱（從停車場半里）
河野、高橋兩副長は目下當院に在勤
院長診察土曜日午後、入院診後應需
診察毎朝但祭日及日曜及土曜の他



謹賀新年

大正八年一月元旦

東京京橋區元數寄屋町

新明雜誌社

北隆館

八百會

書籍

食貨社

◎第一高等學校教授　三並良著

新版

我は斯く信ず

（好評噴々）

四六判二百餘頁
定價金壹圓
郵稅八錢

□東亞之光評——著者の熱烈なる信仰を披瀝したものである。著者は熱心なる基督信者にして、濃烈なる信仰の上にその生活を展開し、信仰を生命として現代に奮闘しつゝある人であるから、本書の如きも、徹頭徹尾熾烈なる信仰的感情思想を以て一貫し、何物をも燒き盡さずんば已まないの概がある、而してその所說の眼目とするところは、信仰を以て、天地の大生命が人間界に移り來れる大なる化育の根源とし、吾人は、此基礎の上に立ちて絕えざる努力を繼續し行く間に、不知不識、神性が成長具備して來て、遂には、人間の生活をして、人間以上のものたらしむるに至り、眞の生命が活躍する。茲に於て、初めて、眞の力あり、自由あり、慰藉があり、神と交涉することが出來て、人世無上の光輝と歡喜とに浴し、眞に意義ある生活を營むことが出來るといふことを力說してある。

□日本及日本人評——舊信仰を打碎いて、それを流動する生命となし自己に吸收して以て科學的文明を背景とせる現世に於て新たなる信仰を得んとする著者の努力の跡を示したるものが本書にして、曾て二三の雜誌上に發表せられたるものを集めて一卷としたるもの、飽迄も神を信じ其處に安心立命を求めんとする著者の眞摯なる努力を多とせざるを得ず、近時續出する輕薄なる俗書と選を異にす敢て江湖の一讀を勸む。

發賣　東京市芝區三田　振替東京一〇〇〇三番　電話芝五八五五番　六合雜誌社

東洋大學々生募集

（規則書入用の者は郵券貳錢封入の上申込むべし）

■大學部第一科（哲學、倫理科）
第二科（國語、漢文、哲學科）

■專門部第一科（倫理、教育科）
第二科（倫理、國語、漢文科）

各科學生募集

■入學志願者は成るべく四月十日以前に願書を差出すべし四月十一日第卅二學年の授業を開始す、入學期限は四月卅日迄

■入學資格

は中學校、師範學校、文部省指定の宗教學校を卒業したるもの、又は文部省指定の資格所有者は第一種生に無試驗入學を許し其他は第二種生に編入す。別に聽講生の規定あり。在學中は徵兵猶豫、卒業者には修身科、教育科（第一科）、修身科、國語、漢文科（第二科）の中等教員無試驗檢定の特典あり。

名譽學長 上井圓了　學長 境野 哲（舊稱哲學館）

東洋大學

東京小石川白山（振替東京三七二六）

新年讀書界の偉觀

THE RIKUGO-ZASSHI

No. 456 January 1919
"Reconstruction" Number

CONTENTS

Frontispiece: Genii Gardant de la tombe...R. de St. Marceau.
Christmas, of memorable 1918.....Dr. R. Hoashi. 1
Reconstruction of Civilization.....Prof. S. Uchigasaki. 4
The Grand Age after the War.....Prof M. Minami. 11
The Former Kaiser versus the Social Democrats. Prof. I Abe. 18
What Will Japan gain by the Peace-Treaty;..Dr. T. Tanimoto. 27
Tendency of the Education in U. S. A.....Dr. R. Hoashi. 33
About the League of Nations.....Dr. S. Takahashi. 44
Dignity of the French Civilizaton,..... Dr. N. Yamasaki. 49
The Significance of the Cosmic Self.....Z. Nomura. 51
Foundation of Democrcy.....S. Okami. 66
Buddhism and Peace.....Y. Date. 77
Expansion and Reform of Educatioin. .....Dr. T. Misawa. 85
Crisis of Christianity.....Dr. K. Sato. 90
Reconstruction of the World and Future of Japan,..K. Ojima. 49
Reconstructiou of the Peasant's Life.....Y. Yashiro. 100
The Last Breath of Militarism.....N. Kudo. 110
Possibility of the League of Nations.....Prof. S. Yoshino. 126
Characteristics of the English Civilization.....T. Aizu. 137
Fundamental Problems in the Reconstruction of the World .....K. Sano. 141
Democracy in Home-Life.....Mrs. N. Hirayama. 151
Astronomy and Social Progress. .....Dr. Caroline E. Furness. 161
Psychology of Militarism.....Prof. M. Anezaki. 175
To Miss. Katrina Merzliahova .....Prof. T. Okada.
Literary Supplement.
Topics of the Day.
New Books.

Published Monthly by the
TŌITSU KURISUTOKYŌ KŌDŌKWAI
2. Mita, Shikoku-machi, Shiba-ku, Tōkyō.

内村鑑三著　最新刊

基督再臨問題講演集

四六判二四八頁　定價六十錢　送料六錢

現今世界の思想界に於ける最大問題は實に基督再臨問題なり。此問題は空前の大戰爭と關聯して深く識者の覺醒を促がし期せずして世界各地に熱烈なる信仰復興問題を惹起せり。我國基督教界の最高權威内村先生亦此運動に共鳴する所あり決然靜かなる新禱室を出でゝ街道に立ち多年の沈黙と渾身の熱誠とを傾注して其確信の爲め獅子吼せらる。本書は其講演集なり思ふに大和民族は之によりて深遠なる世界的問題の眞相を窺ふを得ん。

中目覺著　最新刊

土人教化論

親しく蕃太土人の實生活を視察研究して得たる所より異民族に對する知識を普及し夫を撫育教化する方針を明かにせしものなり。

四六判一二〇頁　總クロース　定價八十五錢　送料六錢

文學士和辻哲郎著　最新刊

偶像再興

四六判四四頁　總白布裝箱入　定價一圓八十錢　送料八錢

著者はその序文に於ていふ。「予はあらゆる偶像の胸を通ずる一つの大いなる道を豫感する。さうして過去未來に亘る全人類の努力が畢竟この道に向つて集まつてゐることを感ずる永遠に現在なる生命はこの道の上にあつて躍動するのである。予はその光景を描き得むことを願ふ。その光景のさまん〳〵なスケッチはこの書の内に收められた。世界の改造が要するに個々の人間の改造に歸着することを信ずる人々は、この書のうちに多くの同感すべきものを見出すに相違ない。

和辻哲郎著

ニイチェ書簡集

四六判五二四頁　定價一圓五十錢　送料八錢

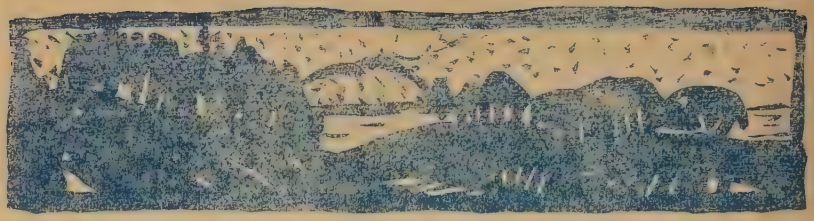
ニイチェがその愛する母と妹とに與へたる書簡集にして最も眞誠の意味に於けるニイチェの傳記なり。彼の内面的生活の記錄なり。

發兌

東京市神田南神保町十六
振替東京二一六二四〇番

岩波書店

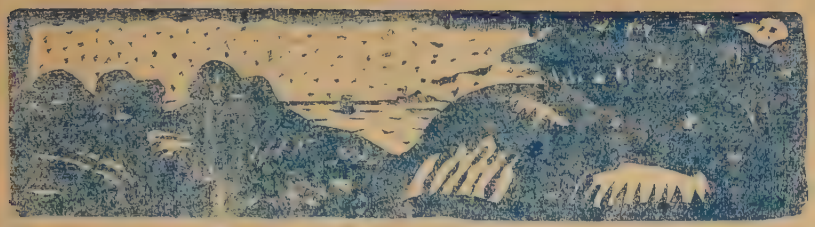
『文明改造』



國際聯盟は可能なり……法學博士 吉野作造…一二六頁
英國文明の特質……會津常治…一三七頁
世界文明改造の根本問題……佐野袈裟美…一四一頁
家庭に於けるデモクラシー……平山信子…一五一頁
天文學と社會の進歩……ヴァッサー大學教授 哲學博士 ファーネス女史…一六一頁
▲消えぬ光(和歌)……西淵峻…一七四頁
軍國主義の心理(現代思潮)……文學博士 姉崎正治…一七五頁
冬のうた……吉田絃二郎…一八三頁
平和來(和歌)……野口精子…一八五頁
To Miss, Katrina Merzliakova……岡田哲藏…一八六頁
斷篇三章(長詩)……土井晩翠…一八七頁
虛心集(俳句)……一碧樓…一八八頁
一生のこと(長詩)……白一鳥…一九〇頁
軍人の友に……石田三治…一九四頁
母としての女子生活費用の負擔に就て……一條忠衞…二〇〇頁
相原なか子夫人を悼む
近事彙報
弘道會より
編輯餘錄

創作

ゲラルの一夜……沖野岩三郎…一頁
ハートのI……本多季磨…一九頁
放蕩息子……長澤幸一…四四頁



新年特別號

六合雜誌　第三十九卷　第一號

表紙及カット（有田四郎）
口繪　墓を護る精靈（サン・マルソー）

Christmas of Memorable 1918……帆足理一郎……二頁
文明改造の第一歩……內ヶ崎作三郎……四頁
▲新春詩壇……一〇頁
戰後に來らんとする偉大なる時代……三並良……一一頁
カイゼルと獨逸社會民主黨……安部磯雄……一八頁
▲佛心鬼面……二六頁
講和に由る日本の獲得如何……文學博士　谷本富……二七頁
米國教育の趨勢……ドクトル、オブ、フイロソフイー　帆足理一郎……三三頁
國際聯盟に就て……ドクトル、オブ、フイロソフイー　高橋清吾……四四頁
佛蘭西文明の品位……文學士　山崎直三……四九頁
宇宙的自己の意義……野村隈畔……五一頁
民主論の根底……岡見愼二……六六頁
佛教と平和……早大講師　伊達保美……七七頁
戰後教育の擴張及改革……ドクトル、オブ、フイロソフイー　三澤糾……八五頁
現代基督教の危機……在倫敦　佐藤清……九〇頁
世界改造と我國の將來……小島幸治……九四頁
農民生活の改造を論ず……八代義定……一〇〇頁
▲瑣言屑語……一三六頁
軍國主義を弔ふ……工藤直太郎……一一〇頁

思想界の高級雜誌

日本統一基督教弘道會（東京市芝區三田四國町二番地　振替東京一〇〇〇三、電話芝五八五五）

趣旨　戰後の我國精神界に於ける最大要務は基督教各派の識者が區々たる私情を拋つて相結束するに在り。而して最も純粹なる基督教的生命の鼓吹と最も進歩せる基督教的思想の發揮とを圖るに在り。動もすれば時代の進運に遲れんとする基督教會は斯の如くにしてのみ覺醒する事を得べく、一種行詰りの狀態に在りと見らるゝ基督教傳道は斯くの如くにしてのみ進展する事を得べし。本會は實に如上の精神的運動の急先鋒を以て任ずる超宗派的團體也。

會員規定　本會の目的を贊成する者は一定の基督教會に屬すると屬せざるとを問はず、且教派及び信條の如何を論ぜず、何人と雖も下の規定によりて本會々員たる事を得。每年金六圓（月額五十錢）以上を納むる者は理事會の承認を經て本會正會員たる事を得。而して每年金三圓（月額二十五錢）以上を納むる者は申込次第、贊助會員たる事を得。但贊助會員は投票權を有せざる以外すべて正會員と同等の權限を有す。

會員の特權　一、每月本會機關雜誌六合雜誌（定價金二十五錢）の配付を受く。二、各種の本會出版物賣價を割引せらる。猶小冊子類十餘種の無料配付を受くる事を得。（本會發行出版物一覽は申込次第進呈）三、本會館に於ける圖書室（日刊新聞四種、新刊諸雜誌約六十種及び各種宗教書類を藏す）及び遊戲室（ピンポンの設備あり）を利用する事を得。四、入場料を要する本會主催の講演會等に於て無料聽講を許さる

事業　月刊六合雜誌（會員には無料にて頒布す）の發行、研究會、講演會、講習會、傳道、圖書の發行等

郵便傳道　本會は地方在住志道者の爲に宗教問題に關する信書の質疑に對して同じく信書を以て迅速に應答すべし。但何等の報酬若くは料金を要せず。

思想研究會　每日曜九時より十時まで神田區錦町三丁目女子音樂學校內自由教會に於て開催。當分の內今岡信一良氏指導の下に H.G.Wells, God the Invisible King を研究す。有志者の參加を歡迎す。

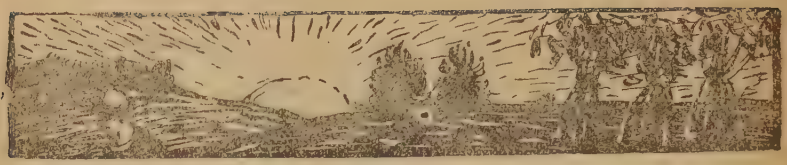
六合雜誌

新年特別號

「文明改造」

口繪解題

口絵に出したるものは巴里ルクセンブルグ書堂に藏せらるゝ R. De St. Marceau アドル・ニド・サン・マルソーの彫刻、Genii gardant le secret de la tombe 墓の秘密を護る精靈である。精靈のよりかゝりたる甕の中に永遠の神秘が隱れてゐる。大戰亂の犧牲となれる八百萬人の墓の秘密はそも何ぞ。文明改造の光りはこの壺の中より輝き出てなば、死せるものは復活して永遠の勝利を謳歌するであらふ。



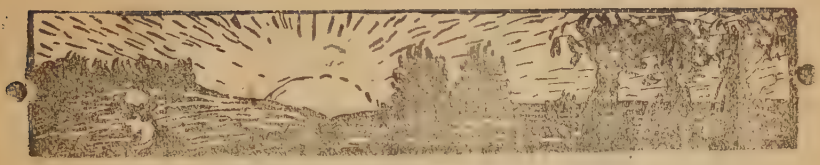
CHRISTMAS OF MEMORABLE 1918

O joy, the Monstrous war is o'er!
O joy, the Powers of Darkness down!
Let's raise our cry like lion's roar,
At this new age's Christmas Dawn,
To hail the Prince of Peace with joy!

Here comes the age of freedom, love,
And righteousness to every man
That dwells on earth, where Strife once throve,
But now as brothers all are won
And greet the Lord of Love with joy!

After a storm calmer the sea;
After a war lovelier the peace:
The sea may storm again, but we
Shall have no war, nor "armed peace".
All hail the prince of Peace with joy!

Let people rule themselves in peace,
Every race in every land,
And seek their wisdom's golden fleece'



To bring all men to equal stand,
And serve the Lord of Love with joy!

Through mankind no distinction keep
Of white or Red or Black or Yellow:
Races are differed but skin-deep.
Let each to each be friendly fellow
And hail the Prince of Peace with joy!

All men and women, rich and poor,
Shall vie no more in sordid gain,
But practice each Love's righteous lore
To build an age of gold amain
And greet the Lord of Love with joy!

Oh joy, the Autocrat's evils gone!
Oh joy, the oppressed peoples then
Restored to their Humanity's throne!
Let sixteen hundred millions of men
All hail the prince of Peace with joy!

By Riichiro Hoashi,

December 25, 1918.

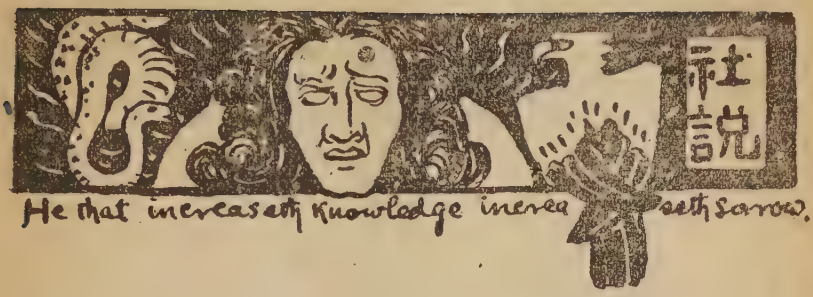
よ。此方に押し寄せて來ましたよ。戸を擲き壞す見幕です。』夜の女王は之を聞いて吃驚した。女王は『さあ皆さん力を合して押して下さいバンやお前は何をしてゐるんだ。もつと押さんかい。偉い力だな。もう弱り初めた。もう峠は起した。テルテルお前は見たのかい。』テルテルは『あー見ましたよ。大きな恐ろしい奴等さ。彼等は青い鳥は有つてゐますまい』

これは譬へである。詩歌である。劇である。然るに一九一四年七月の下旬にこの戸を押し開いて、軍魔の群が飛び出した。彼等は、四年三ヶ月の間その暴威を逞した。約八百萬人の壯丁は死し、五百萬人は不具者となり、その爲めに三千數百億圓の巨額が費された。これは有形的損害であるが、無形的損害に至つては、之を統計を以つて現はすことが出來ない。貞操を蹂躙せられたる處女、奴隷の如く虐待せられたる俘虜、子を失へる母、夫に別れたる妻、家族に捨てられたる孤兒、これらの人々の苦き經驗、悲哀と悔恨との分量は如何なる數字を以つてして表はすことが出來ようか。

各大學の精英は空しくその血を以つて戰場の草を染めた。幾多の創見と發明との源泉たるべかりし頭腦は空しく爆彈の爲めに碎かれた。久しき間塹壕中に半野獸の如き生活を送りたる文明人は、その道德的情操に於て、又宗教的感情に於て、著しく退歩したではあるまいか。勝者も敗者も、各の家鄉に歸れば、田園は荒れ、貯蓄は失はれ、經濟的壓迫の下に來るべき數十年を苦まねばならぬ。見樣に依りては、歐洲の文明は、一世紀の退歩をなしたと斷言しても宜しい。

二

然れどもかゝる貴重にして莫大なる犧牲を拂つた以上は、人類は大いなる教訓を學ばねばならぬ。永久的の結果を刈り取らねばならぬ。この大戰亂の突發するまで、歐洲列強の人民は、各自の文明に醉うてゐた。彼等は大磐石の上にその家を建てたりと確信してゐた。衣食住は安樂となり、旅行は愉快となり、文化の華は永へに歐洲の天地を飾るならんと期待した。吾人も亦大戰亂突發する三年前まで彼の文明の



文明改造の第一歩

内ケ崎作三郎

一

メーテルリンクの『青い鳥』に於てテルテルとミテルと云ふ少年少女が幸福の表號である青鳥（ブルーバード）を探して夜の天國に入つた。女王はあらゆる部屋を固く閉して見せようとはしない。然るにテルテルは如何なる錠をも開くことの出來るダイヤモンドの鍵を有つてゐる。夜の女王もテルテルがこれを利用するを止むることが出來なかつた。テルテルの最初に開けたる戸から五六の幽靈が逃げ出した。女王は犬の助けを藉りて辛じて之等を元の部屋に閉ぢ込めた。テルテルの次に開いたる部屋は病魔の潜めるところであつた。小さい風邪の神は隙間より逃げ出でた。女王に呼び止められて再びその室に歸つた。やがてテルテルは次の戸を開かんとしたるに、女王は油斷するな、そこには軍魔がゐる。彼等はいつもよりも恐ろしく力強くある。若しその一疋でも逃げ出したならば、何事が起るかは、天が知り玉ふのみである。常に、この魔神等は重々しく身動きが自由でない。然しお前がその洞窟を覗き込む間彼等は戸を背後より押しつけねばならぬ。テルテルは用心に用心を重ねて戸を少し明けて覗いて見たが、呼び出した。『速く、！速く、！　皆さん一生懸命に戸を押して下さい、彼等は私を見つけました

神の國は、心靈の王國を指したるものなれども、同時に地上に於ける理想の社會を聯想したものであつた。然れども中世紀の歐洲に於て羅馬皇帝は世俗の社會を支配し、羅馬法王は心靈の社會を支配する分業は行はれし以來、政治家のなすところと、宗教家のなすところは、互に疎遠するに至つた。故に宗教家は、神の國の福音を說け共、これを政治的に實現せんとするの熱心を缺き、政治家は、その政策を宗教的道德的基礎の上に置くことを忘れた。故に實現の生活に於て政治と宗教道德は相離れ、動もすれば、政治は、權謀術數となり、宗教は未來生活に對する一種の憧憬に溺るに至らんとした。されば今日以後に於て兩者は接近せざるを得ない。政治は宗教的、倫理的、哲學的の理想を離るゝ能はず。宗教家は、その理想を以て政治家、軍人、實業家を鞭韃することが必要である。

三

吾人は歐米强國の代表的政治家に依つて、國際聯盟の提唱せらるゝを歡迎するのである。同時に吾人はこの政治的理想に對して、宗教的道德的の基礎を提供せねばならぬ。基督教を非難する人は曰く『基督教は失敗に歸した。一切の宗教は破產した。歐洲は基督教文明を以つて誇つたのであるがこの大戰亂を豫防することが出來なかつた。これ確かに、既成基督教諸派の缺陷及弱點を暴露したものである。』と。一體基督の眞髓は何んであるか人類の進步發達を妨ぐるが如き獨斷的信仰箇條は決してその眞髓ではない。吾人は羅馬教會の組織、訓練、藝術、儀式を尊敬する。然れどもその自由進步思想に對する壓迫、教會萬能論、法王の絕對主義の如き、果して今日の識者を心服せしむることを得るか。希臘教會は、建全なる小部分を除いては、因習迷信とに囚はれた。英國國教會の如き、その富と力と學とは尊敬するに足れども依然としても十七世紀の思想より脫出するを得ないではないか。其他非國國教の諸派に至つても、ある者は三位一體論に囚はれ、或者は處女降誕說を墨守し、ある者は基督再臨論を高調してゐる。その至誠と熱心とは尊敬するに足れども、國際聯盟の精神として果して充分なりや否や、傳聞するとこ

恩澤に浴し戰爭來の噂を以て風聲鶴唳に過ずと考へてゐた。吾人は彼の文學を味ひ、藝術を愛し、その偉人を仰いだのである。然るに何ぞ圖らん。その建物は岩の上に建てられずして砂の上に建てられたのである。疾風吼號、大水氾濫すれば、見るまに土崩瓦解するに至つたのである。要するに大戰以前の世界は安全なる世界ではなかつた。人類同胞の意識が政治的、外交的に充分に實現されなかつた。個人として親切なる人々は英國にも米國にも佛蘭西にも伊太利にも露國にも、獨逸に於てさへも多かつたのである。然れども一度び戰の喇叭響き渡れば、風前の枯葉の如く、之等の善人は、何等の力なく、各自の國民的大勢の赴くまゝに任せざるを得なかつた。卽ち國際的意識はよく政治家、外交家、資本家、軍人の間に徹底せざりし故に、この空前の大悲劇が、演ぜらるゝに至つた。

故に戰後の大問題は、國際聯盟より大なるはない。國家がその存在を確立して、外部より侵略征服せらるゝ危險より脫すれば、社會的民本的に發達せざるを得ない。かくて國民各自の間に正義と公平が行はれ、各人に機會が分配せらるゝに及んで、各個人の精神は國民的たると共に、國際的に進まざるを得ない。國家的より一躍して國際的に進むは不可能なことである。この度の大戰爭の原因は一八一四年のウヰーン維納會議の決定が不滿足なりしことが原因の一つである。奈翁（ナポレオン）の歐洲戰爭は、被征服國民の國民的自覺を挑發した。而してその自覺は維納會議に於て充分なる滿足を與なかつたのである。ウヰルソン大統領の主張にして、來らんとする講和會議に採用さるゝとすれば所謂民族自決主義に依りてこの缺陷は補はるゝであらう。故に今日の最大急務は、各國民はその內容を社會化し、民本化して、各人にその天賦の能力を發揮すべき機會を與ふることである。かくして各人の人生觀、國家觀、世界觀は大きさと深さと、高さとを加ふるに至るであらう。その當然の結果は、國際的聯盟となつて現はれざるを得ない。

吾人はウヰルソン大統領或はロイドヂョーヂ氏の如き有力なる政治家に依つて、國際聯盟が提唱せらるゝことを喜ぶのである。實は東西古今の聖賢も漠然乍らもこの理想を有したのである。例へば基督の

ばならぬ。凡ての人に對して、好意を有せねばならぬ。好意的人格者とならねばならぬ。吾人は弱者に對して同情を寄せねばならぬ。吾人よりも文明に後れたる人種に對して指導せねばならぬ。

基督教の第三義は、個々の心靈が、神の大靈に充さるゝと云ふことである。吾人は神の定義を下さんとするに非ず。然し乍ら宇宙の根本に大生命を認めざるを得ない。この大生命と接觸し、交通する時に於て吾人の心靈は、法悦を以て感激し、勇氣と希望とが與へられ、獨創的精神が湧するのである。又かくして人類の同胞意識が強められるゝのである。

この三大精神は基督教の根本義である。世界の基督教徒はその末義に拘泥せずしてこの根本に立つならば、國際聯盟は容易に成立し得らるゝであらう。國家が社會化し、民本化せずしては國際的に進む能はざるが如く、保守的基督教はその内容を進化せしめ、一層自由なるものとなすに非ざれば、國際的宗教となつて、國際聯盟の精神的基礎を提供することが出來ないであらう。

この度の大戰亂は人心のドン底を洗ひ浚ひに暴露したのである。その暗黑面は悉く開放された。戰後の宗教は、その反動として、又その補償として、人心の最高を示させねばならぬ。過去の宗教が多くの弱點を有したりとすれば、將來の宗教は、多くの長所を發揮せねばならぬ。この理想が實現せらるゝ曉に於て、貴重にして莫大なる犧牲の意義が現はるゝであらう。失ふ所多かりしが如く、得るところも亦多くなるであらう。國際聯盟は戰後の最も重要なる問題である。而してこの成立を促す爲めには、世界各宗教は一層自由進歩の色彩を帶びねばならぬ。これ卽ち文明改造の第一歩である。

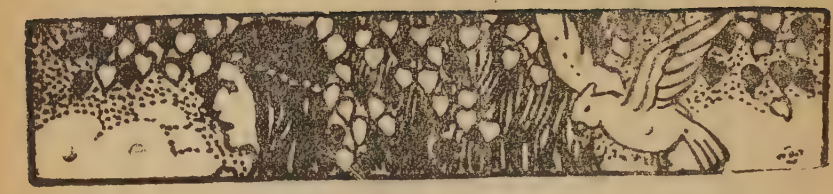
ろに依れば、英國國教會を中心として各宗派の同盟は、國際聯盟の成立の爲めに大なる努力をなしつゝありと云ふことは吾人の意を強うするところである。米國に於ても、同樣なる運動が行はれつゝある樣てある。然れども同時に吾人は基督教自らがその根本に立ち還つて、末葉を捨つるの大英斷を行はねばならぬ。故に基督教の根本義を考査するの必要がある。

四

基督教の第一義は、受くるよりも與ふるは幸なりと云ふことてある。かく云ふは必ずしも、物質慾を放棄せよと云ふのではない。然し乍ら吾人は取らんが爲めに取るに非ずして、與へんが爲めに取ると云ふ覺悟がなければならぬ。清泉は涌むこと多ければ湧くことも多いのである。太陽は自ら取らずして常に與へつゝあるではないか。吾人は與へんが爲めに學ぶのである。學んで而して後に與ふるは正當なる順序なれ共、その學ぶことの窮りあるを知らないのである。

然れども與へんが爲めに學べば、常に學ばざるを得ない。歐米の實業家には、與へんが爲めに儲くるものが多い。ロックヘラーは市俄古大學の爲めに五千萬圓を投じ、スタンフォードが七千五百萬圓をスタンフォード大學に投じたるが如き、又カーネーギーやフォードの平和運動に對する寄與の如きこの態度を語るものではないか。我國の實業家にも奇特の人士輩出したれどもその與ふる金額極めて寡少てある。要するに我國の實業家は儲けて然るのちに與へんとする。實際容易に儲くる事能はざるものてある。我國民にして國際聯盟に加入するの希望あらば、この寬大なる精神を學ばねばならぬ。

基督教の第二義は、力よりも愛を重んずることてある。吾人は力を輕んずるものではない。されどその力は愛に伴はねばならぬ。基督は力の人であつた。彼は謙遜と柔和と信賴との體現であつた。獨逸は愛より離れたる力の實現に熱中したのである。而してその末路はダンテの『神曲』に於ける地獄の魔王の如き運命に陷つたのである。吾人は島國根性より脫せねばならぬ。猜疑と嫉妬と邪推より自由とならね



戰後に來らんとする偉大なる時代

三並良

一

全世界の住民をして未曾有の不安の裏に呻吟せしめたさしもの大戰も、獨逸全土に於ける食糧の窮乏と社會主義の運動とによつて、遂にその降服となり、終局を見ることになつた。是れ誠に世界人道の爲めに、慶賀せざるを得ざることである。吾々が五年ぶりで、平和なクリスマスや新年を迎ふることの出來たのも目出度きことであつて、心から「至高きところには榮光神にあれ、地には平安、人には恩澤あれ」と唱うることが出來る。此の時に當り、吾々は今度の戰爭が什麼な結果を齎したか、卽ち所謂總勘定をする時も來た譯である。此の總勘定の中には或は軍事上什麼結果を來したか、或は工業上、商業上或は經濟上に什麼結果を來してゐるか、否なそればかりでない、數へあげれば色々なことがあらうが、それ等は無論此處で私が論ずべき事柄ではない。私が考へて見たいと思ふことは此の總勘定の中に宗教道德のことはどうなつて居やうかと云ふ事である。今度の戰爭に依つて宗教道德に、どれだけの變化が與へられたか、もう一つふみ込んで道德宗教がどれだけの勢力を得てゐるか、そのことを考へる時機が來たと思ふ。

無論戰爭をする事は喜ぶべき事ではない。昔から『兵は權道なり』と云つて濫りに用ふべきものでないとされてゐる。老子も『兵は不祥の器、君子の器に非ざ

四　　郁

人生眞夢境、日月若風帆、灼矣烟花嶺、忽爲積雪巖、栖々過六十、碌々世中凡、齒骨未全落、眼精若霧緘、殘生又幾許、半禿孤編衫、已矣此塵世、宜爲換骨函、亭中風月好、詩酒學阿咸、宅畔江山遶、自比退思盦、口常念聖典、可以去譏讒、意恒賤貨財、誓無近貪饞、明朝年歲改、心事貴正嚴、今夜豈驅鬼、荒情兼可裘、

四　　郁

三聽隣鷄報五更、整衣直上覺王城、法燈添歲道光朗、鏡餅祝正神德明、有母有兒身共健、不寒不餒世方清、一聲唱起无量壽、無限天恩欲荅情

四　　郁

名走利奔人若帆、一家風味別酸醎、爐邊煎茗守寒歲、飽嚼鹽楳氣不凡、

德　　隣

兩箇初鴉告曉辰、新迎二十有五春、屠蘇一盞献遐壽、壯我北堂還曆人、

德　　隣

碌々偸生歲月遷、男子雄志有誰憐、思親情淚燈空暗、客舍蕭々又一年、

良寛　和尙

寒爐無炭誰爲添、空床有書手脯伸、今夜此情唯自知、他時異日如何陳、

國上山下是僧家、麁茶淡飯供此身、終年不過穿耳客、唯見空林拾葉人、

喬林蕭疎寒鴉集、東籬黃花兩三枝、千峰萬嶽唯夕照、老僧收鉢傍谷歸、

生涯懶立身、騰々任天眞、囊中三升米、爐邊一束薪、誰知迷悟跡、何問名利塵、夜雨草庵裡、雙脚等閑伸、

良　　寛

春夜二三更、等閑出柴關、微雪覆松杉、孤月上層巒、憶人山河遠、含翰思萬端

らぬ互に本心を云はないで、探り合ひをしてゐる。秘密は惡い、日本の外交は秘密主義だと云ふが、初めから思ふ所を明示してかゝると、どれだけの利益が得られるかあやしいものである。これを例せばトランプ遊びをする時、手をあけつぱなし、敵にカードを見せておいてする樣なものである。若しこれて勝負が出來るものなら外交でも、秘密を開放してもよい譯になる。が全然秘密なしに總てあけつぱなしにして、外交が出來るか、恐らく試みた人はあるまい。故に秘密もせねばならぬ。道德上宗教上要求されてゐる樣な事は國家と國家との間では行ふ事が出來ないと云ふ人がある。内部でもこれから先の政治は黨派の上に立たねばならぬ、日本に憲政會、政友會とある樣に、外國でも色々の政黨があるが、それ等政黨間には黨派の駈引があり、色々の黨略と云ふものがある。だから純粹に宗教道德の要求する樣に正直に行けるものか極めて疑問である。かやうな譯であるから政治と云ふものは面白いものであるが、昔から宗教道德に生きてゐる人達は、自分の信念や信仰が危くされると云ふので、政治には立入らずに世を送つた人がいくらもある程である。こう云ふ事を考へて來ると政治はどうも宗教道德と相容れない。相容れないばかりでなく、更に進んで國家の存在のためなら、どんな不道德な事でもすると云ふ風になる。

二

そこで軍備も必要になつてくる、場合に依つては劍を執つて戰爭もやれば、人も殺す、土地を奪ふ事も辭すべきでない。自分の國家の存在に必要なら敵の良民も殺す、敵の財も奪ふ、大凡自分の國を守るには何事でもやると云ふ事になる。これ即國策を立てる所以と云ふ政治家がいくらも出てくる。之れが爲めに教育も、人心の統一も必要だ外國の侮りを受けてはいかぬから、産業の奬勵もせねばならぬ、軍備も擴張せねばならぬ、これが即ち國策だと云つてゐる人もある。若しこう云ふ國策から出發して政治をするならば、この政治が道德宗教と相容れないのは當然である。全く相容れない事もなからうが、肝心な所て相容れない。

るなり』と云つてゐる。併しながら戰爭は絶え間がない。政治上已むを得ないから兵を用ひると云ふ口實の許に戰爭をしてゐる。さう云ふ譯で戰爭は政治の上から引き起されてゐる。唯戰爭をしやうとしてやれるものでない。いつも政治家が口實を設け引き起してゐる。

そこで宗教道德と政治の關係はどうなるかと云ふ面倒な問題が起つてくる。この問題は昔から絶えず起つてゐるが、今度も起つた。併し實際政治の局に當つてゐる人々は、政治の宗教道德とは相容れないものであると正直に白狀してゐる。政治に從事してゐる人々に道德や宗教の要求する様なことは實行が出來ない。今日は國際道德と云ふものがあり、人道が唱へられてゐるから、出來得る限り道德に背かないやうにはするが、戰爭をはじめて人を殺す事になると、それは既に宗教道德にあてはまつてゐない。戰爭をやる以上は、初めから宗教道德を無視してかゝらねばならぬ事になる。殊に外交上の事は國家と國家との事件であるから、個人と個人との間の様に、自分の損害を忍んで他のために利益になる様な事は出來ない。たとへ自分は我慢が出來ても國家に害を及ぼすこととなると、責任上遠慮する譯には行かないと考へられてゐる。例へばキリストの山上の教訓の様に『右の頰を打たれなば亦ほかの頰をも轉して之に向けよ』と云ふ事は、國家としては實行が出來るものでない九州を奪はんとする者ある時、これに四國をもあたへる譯には行かない。『上衣を取らんとする者には下衣を亦とらせよ』とか『一里の公役を強なば之と偕に二里ゆけ』と云ふ具合にはとても行くものでない。トルストイの無抵抗主義には賛成者が少くないが、政治家としては賛成するものはあるまい。若しこの說を執ることになれば、國家と云ふものは存在し得ぬであらう。彼は政治家でもなく宰相でもなく、野に於て叫ぶ人であつたからあれでよかつたが、若し彼を政治家たらしめ、責任ある位置に立たしめたなら國家は瓦解するより外はあるまい。無責任な所で云ふ事は易いが、責任の場所でそれを實行し得るか甚だ疑問である。又外交官と外交官とが互に交涉をする時は、初めか

報ずる所によると國内の疲勞に堪えないで降伏した。一體今度の戰爭は墺國から起つた。それに獨國が同盟の誼から助ける事になつた。敵には露國が立ち、英國、佛國亦それに味方する事になつた。さすれば源は墺國である。其れに拘らず墺國が眞先に降伏して講和を初めたと云ふのは、極めて破廉恥の事である。墺國は元來獨國と共に倒れる迄戰ふべき筈であるのに、それを考へないで、自分を救ふ事のみをやつてゐる。固より獨國の中には初めから、墺國は歷史上頼みにならない國柄である。之れに只一人の皇儲が暗殺された計りの事に國を擧げて戰禍の巷に赴くなら、墺と一所に亡ぶるぞ、と敎へた學者もあつた。併し遂に共に立つたが果して一所論者の言の如く、墺國は頼みにならぬ事が分つた。これで兎も角講話談判が初まらうと云ふ大勢になつた。此の講和會議の結果は果してどうなるか、私共には分らない。

三

併し此處に大に考うべきことは、米國が戰爭に參加したと云ふ事である。これは獨逸があまり軍國主義をふり廻すから、それを壓へなければならぬ、獨逸の軍國主義が世界に覇を稱する様になつては、大變だと云ふ道義心から參加したものらしい。固より私共にはよく分らないがさうらしい。殊に米國は今度の戰爭によつて、大に金を儲けたから何億の軍費を使つても差支へない位置にある。多くの人には米國に常備兵がないところから、彼れを侮つてゐたが、立ち所に百萬二百萬の兵をつくつて世界を驚かした。實にえらい。然らばどうしてこんな事が出來たかと考へて見るに、之は結局國民の敎育の力にある。建國以來常に精神的に琢かれ、訓練されてゐる爲めである。軍隊に這入れば秩序を守る事位はすぐ出來るし、平常の運動好きな習慣から操練などもすぐ出來る様になる。日本の様に先づ靴の穿き方、洋服の着様など、一々敎へるとなれば、二三年はかゝるであらう。米國民にはそんな必要はないから、常備兵はなくとも大軍が直ぐ起せる譯である。米國は今度の戰爭に參加し、軍國主義を根絶し、自由の精神、民本主義を擴張し、戰爭を地上から絶たしめねばならぬ

人を殺し國を奪つて、それでどれだけ宗教や道德と相容れるか。負傷兵を大切にするとか、非戰闘員に害を加へぬなど云ふ事は無論結構だが、非常な人殺しをして居ながら、これまで道德の要求に背かないとは云へるものでないのは、明白なことである。

今度の戰爭はこう云ふ主義の上から、國家の爲め已むを得ないと云ふのでひき起された。歐洲の政治家は善人計りではない、自國の勝手な利害を考へて英國、獨逸、佛蘭西、伊太利などの政治家達が始めた事に違いない。我等は外交の美しき言葉に眩惑されてはならない。そしてその結果はどうなるか。歐洲は殆ど瓦解して仕舞ふのであるまいかとも考へられる。露國はまあ殆ど亡んでゐる有樣である。獨逸の將來はどうなるか。必ず非常なことになるに相違ない。此間米國から歐洲へ渡りそれから歸つて來た青年會慰問使の山本君に會つた。氏の話によると五月か六月かに英軍も佛軍も、獨逸軍のために追ひまくられて、巴里を距る數十里になつた。最早遠からず巴里は陷落する。さうしたら佛國が蹂躙されるのは忽ちのことである。さうなると獨軍が英國へ渡るのも手間はかゝらないから、英國も忽ち蹂躙されてしまう。さうなれば仕方がないから英國は亡びる迄戰ふ決心をした。けれともそれでは困るからとバルフォアだかが、米國に渡つて『存亡は旦夕に迫つてゐる。今戰地に米軍は三十萬居るが、これだけでは大勢を盛り返すことは出來ないから、直ぐ百萬或は二百萬の兵を送つてほしい、そのかはり米國の欲する事は何でも聞くから』と云つて嘆願したと云ふやうな話であつた。そこで米國が義氣を起して非常な大兵を送つた。今米國兵は歐洲に二百萬程も行つてゐるが、それが卽ち佛國英國を救ふた譯である。フォッシュ將軍は偉いに違ひない、併し討ち漏らされた英、佛の兵ではとても盛り返す事は六ケ敷しい。米國が大軍を送つたために今日の戰勝が獲られたのである。これから見ると英國佛國の國力は非常に減じてゐるとも見られる。伊太利は無論の事、廿五萬の捕虜を一時に出した。露國は最早瓦解してゐるではないか。墺太利は新聞紙の

云つてゐる。なぜなら軍國主義及カイゼルを倒さうとして、獨逸國民をも共に苦しめる事になるなら、勞働者の階級が承知しない。卽ち英、佛等の勞働者が同情して、それではいかぬと云ふ事になるから、必ず穩當な條件で話がつくだらうと云つて居た。されば頗る面白い見方であると思ふ。

五

今度の戰爭は實に慘憺たるものであつた。併し悲慘ではあつたが、これが遂によき結果を生む事にはならないだらうか。今迄政治と宗教道德とがはなれてゐたのが總勘定の時になると、怎うしても宗教道德と離れた政治ではいけないと云ふ事になりはしないか。現に米國は戰爭の爲澤山の兵士をつくつたが、今後は天下の平和の爲にこれを全部解散し、軍備の擴張に反對すると云ふ事である。

若しさうして平和に向へば卽ち我々キリスト教者の理想としてゐる所に一步近づく事になるので、非常に結構な事である。戰爭は悲慘である。併しそれは人間が迷つてゐたから起つたことで、神は此の人間の罪惡を用ひて、元に引返し眞實な道を步む樣にせられたと見る事が出來る。此の戰爭の結果、矢張全人類が利益を得なければならぬ一個の國のみが利益を受けるのでなく、全人類が平等に受けなければならぬ。戰爭は悲慘だが、世界の歷史を見るといつても結果は人類を向上せしめてゐる。三十年戰爭の時、スウエーデンのグスタサフ・アドルフーはプロテスタント主義を唱へてカトリックと戰ひ、遂に彼は戰死したが、その精神は歷史の上に少なからぬ光明を與へてゐる。十七世紀に於ける英國の革命はクロムエルのピウリタンの精神でもつてやつたから、英國の歷史は彼の爲めに光明の方面に向つた。こう云ふ例は澤山ある。戰爭は確かに人類の損害に違ひない。而し又人類は此の爲めに進步するとも云ひ得る。政治が宗教道德と握手をする樣になるのは人類の進步である。卽ちキリスト教が勝ちつゝあるのである。戰爭の初め、キリスト教は滅びたと云ふ論者か多かつたが、此の結果を見て、殊にピウリタン的な米國や獨逸に勃興せんとしつゝある精神を見て、それが如何に立派な結果を齎らすであらうか

軍國主義を破れば世界は平和にすると云つてゐる。獨逸は平時から平和會議にさへ反對してゐたのであるから、米國がこれを考へたのは無理からぬ事である。併しながら米國はかやうに考へてゐるのであるとしても、果してそれの實行が出來るか否か私共には斷言は出來ぬ。現に米國が海洋の自由と云ふ時に、英國は已に之に反對してゐる。英國は自國の艦隊は金城鐵壁であるから、從來の樣に存在せしめねばならぬと云ふのである。若し英國がさう云ふならば獨逸はその陸軍を殖す事を主張し得る譯である。

講和談判の結果は怎うなるか分らないが、最近の休戰條件として傳へられるもの、中には、獨逸に向つて其の要塞や、軍艦、武器を悉く引き渡せと要求し、ヘリゴランド島なども占領すると云ふことであるらしい。このヘリゴランドと云ふのは小さな島だが、獨逸には大切な島である。これは元來英國のものであつたが、二十年計り以前にエジプトに於ける英獨貿易の衝突の爲め、以後獨逸は其處に商賣をしない代償としてもらつたのであ

る。然るに今こう云ふ侮辱を忍んでまで獨逸が屈服するかどうか、甚だ疑はしいのであるが、併し今日獨逸國内の事情を考へて見ると、獨逸は最早軍備の事は重きをおいて居ないらしい。私は多くの人々と違つて獨逸は軍國主義の國民ではないと思つて居る。軍國主義はプロシャの主義である。カイゼルが軍國主義をふり廻して居る間に、國民全體の元來の性質たる平和主義や民本思想は大に勢力を得て、それが食糧の缺乏と相待つて、最早カイゼルも如何ともする能はざるやうになつて、彼れは遁げ出した。今日の獨逸は民本主義、社會主義の勝利である。是に於て平和會議で獨逸は軍備全廢を提唱するであらうと思へる。

私は二ヶ月程前に國民新聞に出た原首相の「戰後と新思想」に就いて述べた文章を見て非常に面白いと思つた。私はこれからの政治はどうしても新思想でやらねばならぬと思ふ。此の原首相も今日の世の中は民本主義になつた、政治と道德が今迄の樣に離ればなれになつてはいかぬと述べ、更に講和に於て獨逸に過酷な要求をしてはいかぬと

り、權勢に反噬を試みる。ビスマルクも之れには閉口したが、然かも賢明なる彼は、社會黨を正面から壓迫を加へて彼等を絶滅するの不可能なるを知つて、社會黨の先きを掻いて、勞働者の生活狀態を改善し、その不平不滿を緩らげ、勞働者を社會黨から離脫せしめて、極力危險思想を制遏して現在の社會黨を裏面から壓迫を加へて、之が絶滅に力を注いだのである。

炯眼なるビスマルクは社會黨及勞働黨の政見を實行したのである。然し彼は國家の力て社會黨的思想を統一せんとしたのであるから、一方社會黨勞働黨の政見を先手を打つて之を實行し人心を收攬すると共に、他方に於ては、自ら目して危險となす思想及社會黨を極力壓迫し之が根絶を期したのである。その結果ビスマルクの國家社會主義となつて現はれた。社會政策として第一に實行されたのは、勞働保險である。之が今より三十五六年前てある。この政策は割合に效果があつたが、併かもそれが爲めに、社會黨の急進的運動を緩和することが出來なかつた。社會黨の一部は多年政權を恣にした官僚さへも、我黨の主張を實行せねばならぬことに立ち至つたのは、明かに官僚の屈服てあると愈々鼻意氣が荒くなつた。社會黨の躍氣運動は愈〳〵國民を動かした。その後總選擧毎に社會黨議員の數は次第に增加して、最後の總選擧卽ち一九一二年一月に行はれた總選擧に於て、社會黨は百十人の議員を議會に送つたのてある。獨逸帝國議會の議員總數は三百九十七名てあるが、その中百十名の社會黨員が議會に入つたのであるから、如何に國民間に民主的風潮が澎湃たるかを察し得らるゝてあらう。

二

元來獨逸には英米の樣に大なる政黨がない。小黨分立の形で、一九一二年に於て見るに、黨派の數は十四あつた。尤も政見や立場の相違から多數に分立してゐるのではないから、問題があれば、これらの多數の小黨はその政見に依つて互に聯合して、二大政黨となるのである。その中で社會民主黨は最大多數黨てあつた。而して社會黨議員の獲たる投票は四百二十三萬八千九百十九票て、故

を想像することが出來る。キリスト教は此戰爭に依つて、一層其の信仰を强められ、一層其發達を助長される事になる。歐洲の人々は空しく戰はないで此の偉大なる收穫を得んとして居る。これは正しくキリスト教的精神の勝利である。彼等歐洲人には此の精神が平常の生活の中に浸潤してゐる。我々も亦た教會を足場にしてそういふ精神を立派に生かして行かなければならない。教會と云ふものがやつて、それが國民の實際生活のなかへ浸潤し、輿論をつくるものとならねばならない。歐洲のキリスト教は滅びつゝあるのではない。今や活動せんとして居る。今度の戰爭に依つて愈々熾になりつゝある。諸君願はくばクリスト教徒である事を誇りとして、充分國家のために働いていたゞきたい。私は我國家を救ひ、否な天下を救ふものはキリトス教の外にないと信じて疑はないものである。

カイゼルと獨逸社會民主黨

安部磯雄

一

獨逸の社會民主黨が盛んになつたのは、鐵血宰相ビスマルクが權力を揮つて中外を壓した時であつた。當時の獨逸政府の政策と社會黨の政見とは非常に相違し、むしろ兩者全然反對の地位にあつたと云ふ方が正當な位であつた故に、當初はビスマルクは權力を以て極力社會黨を壓迫した。然るに十九世紀後半紀より漸く自覺し來つた民主的思想は、國民の下流社會又は政界の一部には愈その勢を得、當局者が如何に權力を以て高壓を試むるとも、思想を制壓することが出來ない。政府の壓迫が加はれば加はる程、反動的思想が澎湃として起

十五年以前の舊制度をその儘墨守してゐるのである。極めて不合理のことゝ云はねばならん。一選擧區より何人を出すと云ふと人口十萬の區より一人宛の割合に定めたのである。ところが商工業の急激なる發達に伴つて、都會の人口は年々大膨脹を來たし、これに反して、田舍の人口は年々減退の現象を來たしてゐる。社會民主黨の地盤は都會にあるのである。然るに選擧制度は四十五年前の舊制をそのまゝ踏襲してゐるのであるから、假令一都會に人口三十萬人ありとするも、一人しか議員を出せないのである。

それ故實際の勢力から云へば、社會民主黨は更らに多數を占むべき筈であるが、選擧法の不公平にして、官憲の壓迫の爲めに一九一二年の總選擧に際して、社會民主黨は實際の勢力を發揮することを得なかつた。商工業の急激なる發展は勢ひ人口の都會集中の現象を來たし、都會を差措いては國論の趨向を覗ふ事が出來ない時代となつてゐるのであるが、獨逸の官僚軍閥は飽くまでも、都會人の政治的勢力を抑制することに努めたのである。都會に地盤を有する社會民主黨はこれが實に不平に堪えないのである。

三

殊に社會民主黨に對して高壓手段を採つたのはカイゼルである。彼はビスマルクとは氣が合はず、ビ公を政府の要路より却けて、自分の獨舞臺となつて、何事も獨斷擅行を敢てした。カイゼルは甚しくビ公を嫌つたのは、色々な理由があつたらうが、一つはビ公は社會黨の氣嫌を取つて社會政策を實行したからであつたと思ふ。ビスマルクのやつた社會政策は何も、社會黨に屈服した爲めではなく、正面から社會黨を壓迫しても到底目的を達することが出來ぬと悟つたので、社會黨の先手を打つて、彼等の主義と見るべきものを幾分實行し、民心を收攬して、陰然社會黨を壓迫し、危險なる社會黨を裏面から絶滅せんとした術策であつた。

然しカイゼルから見たならば、ビスマルクは實に意氣地がない。高が野武士の社會黨を擲き潰す位は朝飯前だと思へたのである。それ故、帝權は絶對至高のものであると信じたカイゼルは、天下

選舉者の獲たる總投票數は一千二百十八萬八千三百三十七票であつた。之に依つて見れば、社會黨員の得票數は總投票數の三分の一以上を占めてゐる。次は中央黨であるが、その得票は前者の半數即ち二百一萬二千九百九十票である。社會民主黨議員候補者の得票數の割合で、同黨員が當選するとすれば、社會民主黨は百三十名以上の議員を出してゐなければならぬ。ところが實際に於て百十名しか當選せぬことは不思議であるが、その理由は獨逸の選舉法は社會民主黨に取つては非常に不利益に出來てゐるからである。その理由は第一に、獨逸の選舉區に於ては候補者に制限があるから、同一の選舉區からは候補者が幾人も出る。ところが一選舉區より一人の議員と定まつてゐるから、幾人候補者があつても、結局一人しか出ぬのである。ところがこの一人も總投票數の二分の一以上の得票がなければ當選はせぬ。例へば一選舉區に四五人の候補者があるとして、孰れも總投票數の二分の一の得票に滿たぬ時には、その比較的多數の投票を獲たる二人の候補者を擧げて、決選投票を行はせるのである。これに勝つたものが、結局議員になるわけである。ところが、獨逸には、この決選投票が實に多い。一九一二年の總選舉に際して、社會民主黨に對して大いに援助を與へた二つの政黨がある。一は國民自由黨、他は進歩民黨である。社會民主黨がこの友黨以外の黨派と決選投票をやる時には、この二友黨が社會民主黨を助けるのであるが、若しも、社會民主黨が、この二政黨と決選投票を行はねばならぬ場合には、常に社會民主黨を嫌惡してゐる他の反對黨が、二政黨を援助して社會民主黨を打破せんとするのである。それ故社會民主黨が國民自由黨又は進歩民黨と競爭せねばならぬ時には、反對黨に乘ぜられていつも不利益を蒙るのである。

第二は獨逸の選舉制度が不完全にして、社會民主黨に對しては極めて不公平に出來てゐることである。獨逸で現行の選舉區の制度を定めたのは四十五年前のことで、その時より見ると、今日獨逸の社會組織其他凡ての國民的趨勢は日進月歩の勢を以つて、進歩してゐるのに、選舉區制度丈は四

も一つ社會黨はカイゼルに對して反噬を試みた事件は、一九一二年の總選擧の時である。この選擧に於て、前にも述べた通り、社會民主黨の議員は一一〇人出たのであるが、新たに議長を選擧することになつて、進歩民黨のケンフが議長に當選した。副議長は二人あるが、一人は社會民主黨の首領シャイデマンであつた。獨逸では、議長、並びに副議長に選擧されると、皇帝に拜謁を願はねばならぬ規定になつてゐる。拜謁を賜はるには、形式として願書を提申せねばならぬ。ところがシャデマンはその願書に署名することを固く拒んだのである。これが又物議を醸もして、スッタモンダの末遂々第一副議長の選擧のやり直しをやつた。勿論シャデマンは問題が持ち上ると直に辭職したのである。これを見ても如何に社會黨は事々にカイゼルに對して極端なる反對行動を採つて來たかを察し得らるゝでつらうと思ふ。又カイゼルが社會黨を壓迫する手段は自分の所謂神權を以てするのみならず、神の名を藉りた。卽ち敎會を利用して社會黨を壓迫したのである。國會議院や市會議員の選擧がある毎に、選擧前豫め各敎會に命令して社會黨議員候補者に不利益を試みしめるのだ。牧師などには自分の帝位の神聖を說いて、大いに神權說を鼓吹し、選擧の當日には會員をして何人を選擧せしむる樣に努めよと仄めかすのである。神聖なるべき敎會も獨逸ではいつもカイゼルの手先きに使はれて、皇帝や官權の野心の爲めに利用せらたのである。

それ故社會黨はいつも皇帝や敎會の處置が氣に喰はぬ。「非皇帝」「非敎會」を呼號して愈〻壓制者に反抗したのである。外には皇帝、官僚、軍閥の壓迫あり、內には敎會の抑制ありて、社會黨は實に困難を嘗めたのである。それ故その發達も遲々たるものであつたが、百難不撓の奮鬪に依りて今日の勢力を致したのである。

四

獨逸の社會黨は斯の如く、非常な壓制と、困難を經て發達して來たものであるから、その主義綱領はあまり社會主義のことを說いて居らぬ。これが社會の黨仲々賢明にして用意周當なところであ

の事は何事も、朕の意の儘であると自惚れて、ビスマルクの方針を全然打棄てゝ、社會黨に對しては高飛車に高壓政策に出でたのである。一九〇三年の總選擧の時、カイゼルは社會民主黨に對して次の如き挑戰的宣言書を發表した。

『予等ホーヘンツォルレルン家のものは、神より王の位を受けたものであるから、予等が職務を執行するに際つて、唯神に對して責任を負ふのみである。

獨逸帝國を建設したのは、議會の多數黨、若しくは、議會の議決ではない。實に軍隊の力である。

獨逸帝國の主宰者は唯一人である。卽ち予はその主宰者である。若し予に反抗するものがあれば、予は之を粉碎する。

汝等臣民は唯一つの意志に服從せねばならぬ。その意志とは、卽予が意志を云ふのである。汝等臣民は唯一つの法律を遵奉せねばならぬ。その法律とは、卽予が法律を云ふのである。

予に取つては、社會民主黨なるものは、國民の敵、祖國の敵と云ふことゝ同一義である。宗教、道德、平和の爲めに戰へ。破壞黨を亡ぼすが爲めに戰へ。神と共に進め。國王に不忠なるは大なる不名譽である』

カイゼルはかゝる考を以つて、社會黨に對してゐたので、社會黨もカイゼルに對して少しも遠慮しない。カイゼルは帝權の神權說を振り廻す毎に社會黨は意地になつて、民主主義の氣焰を擧げるカイゼルは壓迫を試むれば、試みる程、社會黨は反抗し、愈々勢力の扶殖に努めたのである。

獨逸の國會議事堂の新築落成したのは、今より廿五六年前のことであるが、議會の開院式に際して、カイゼルは式場に臨んだ。議員は皆起立して最敬禮を行つた。然るに社會黨のみは申し合はせた樣にそのまゝ席について起立せぬ。勿論カイゼルに對しては最敬禮などをやらなかつた。これが問題となつて、社會黨員は皆懲罰委員に附せと一時は大騷ぎを演じたが、社會黨の勢力を惧れて、政府も與黨も手强いことも出來ず、結局問題は有耶無耶の裡に葬られた。

第八、軍費の負擔を輕減すること。
第九、訴訟費用は公費を以て支辨すべきこと。
第十、醫藥の費用及埋葬費は公費を以て支辨すべきこと。

これが社會民主黨の綱領であるが、實際上社會主義の看板とも見るべきものはこの中二つしかない。卽ち最後の九、十の二つである。その他のものは。彼等の本領とする社會主義的のものに非ずして、全くデモクラシーの鼓吹である。大部はデモクラシーて、ソシヤリズムは鳥渡上置きに入れた位のものである。デモクラシーを以て國民の人氣に投じたところが、社會黨の巧妙なる政策である。

社會黨の基礎も固まらざる中に、初めから正直に社會主義を唱へれば、必ず上流、中流社會の反抗を受ける。又官僚、軍閥からは極度の壓迫を蒙るのである。それ故先づデモクラシーの旗幟を掲げて、社會黨の基礎を固めんとしたのであるが、幸にデモクラシーは人氣に投じて社會黨は次第に勢力を得るに至つたのである。然しまだ社會黨獨力て議會に多數を占めることが出來ない。然し乍ら、今日の如き不公平にして沒條理極まる選擧法が改正されるならば、社會黨は議會に二分の一以上を占むることは容易であらうと思ふ。ところが今や獨逸にては、革命と共に社會民主黨を基礎とするエベルト內閣が出現し、社會黨は俄かに勢力を得たのであるから、社會黨にして善良なる政治を行ふならば、獨逸は此後社會黨の國家となるであらう。デモクラシーの目的が貫徹されなば、その次に起るものはソシアリズムの運動である。デモクラシーは政治上の革命を意味し、ソシアリズムは經濟上の革命である。政治組織の革命に次で起るものは、經濟上の革命でなければならぬ。この度の大戰に依つて、經濟上獨逸は非常に疲弊した。この疲弊困憊を如何にして恢復せんかと云ふことは獨逸國民の大問題である。戰後獨逸の生產を增進し、經濟的發展を遂げんとするには、從來の經濟組織に大革命を與へて、社會主義の主張の如くに、國家は統一的に軍隊的に生產をやつて行かねばならぬ。國家の力に依つて、生產と人力と

る。獨逸の社會黨は多くはマルクスの影響を受けてゐるのであるが、社會黨の從來のやり方を見ると甚だ巧妙を極めてゐる。カイゼルや官僚、軍閥の大勢力に壓迫されつゝ自黨を發展せしめんとするのであるから、なまじつか社會主義めいたことを說けば、國家を毒する危險思想だと云つて、官僚軍閥より社會黨は極端なる高壓を被つて絕滅せしめらるゝやも計り難い。それ故大敵を控いての戰爭であるから一通では行ぬ。先づ穩和なる民主主義を標榜して國民の信望を博し、官僚、軍閥の鋒鋩を鈍らしめ、徐々自黨の勢力を擴張せんとしたのである。それ故一九〇三年の總選擧に於ても社會黨はその本領たる社會主義よりも民主主義を看板にして、人氣を得て、好結果を贏たのである

一九〇三年の總選擧に際して社會黨の揭げたる綱領を示すと。

第一、男女共一人につき一個の投票權を有すること。

第二、男女は法律上同等たるべきこと。

第三、政府は議會に責任を負ふべきこと。

第四、常備軍に代ふるに國民軍を以てすべきこと。

第五、言論及出版の自由を保障すべきこと。

第六、訴訟費用は公費を以て支辨すべきこと。

第七、醫藥、埋葬の費用も亦公費にて支辨すべきこと。

第八、累進法に依り、所得稅、及遺產稅を徵收すべきこと。

この綱領はその後になつて多少修正增補されたが、改正せるものもその內容、精神に於て之と大した相違はない。尙念の爲めに改正綱領を揭げると、

第一、普魯西に於ける複選擧法を全廢すること、

第二、地方自治制を完全ならしむること。

第三、政府をして全然議會に責任を負はしむること。

第四、敎會を國家より獨立せしむること。

第五、公立學校は無月謝たるべきこと。

第六、出版の自由を保障すべきこと。

第七、生活費の低減を計るべきこと。

講和に由る日本の獲得如何

文學博士　谷本富

一

今年宮中に於ける御歌會始の勅題は「朝晴雪」と云ふのである。是れは誠にめでたい題で、恰も好し今年々頭の吾が國家の狀態に相應して居ると謂へる。蓋し今次の世界大戰は實に有史以來未曾有の大戰で、自分は平素物事の先途を豫言して餘り間違はない事を私に誇として居るが、併し此の大戰の何時終熄するかと云ふ事だけは、言當てることが出來なんだ。回顧すると大正三年の九月、卽ち開戰後數週日を經て『大阪每日新聞』の一記者が訪問して來たのに應接すと、先生は此の戰爭は敵味方孰れが勝つと思はれるか、又それは凡そ何時頃結末が附くと考へられるか、一つ御高見を伺ひたいと云ふ口上であつたから、自分は臆面もなく、此の戰爭は勝敗幾多の波瀾はあらうが、結局は聯合軍の勝利に極つて居る、從つて獨逸文化は地に委して、佛蘭西流なり英吉利、亞米利加流の文明が行はれる樣に成らう。而してそれは大抵十ヶ月以內に片付くだらうと答へた。その事は談話記事として、精しく同紙上に揭載せられて居る。

然るところ戰爭は十ヶ月は愚、一年二年乃至三年經過しても、急に止みさうに見えず、やがて四年以上に及んだのは、實に意外である。併し是れは如何なる人にも見當は附かなかつた樣で、曾てキッチナー將軍の言つた所なども、今から觀ると當つて居ない樣である。それにしても聯合軍必勝の豫言は遖に的が外れず、今や遂に獨逸の屈服となり、休戰條約も何の雜作もなく締結せられ、近く講和談判の開始せられる迄に運んだのは、大慶至極である。

尙ほ自分は、此の戰爭の自ら止む樣に成る順序や、米國の立場如何に就いても、色々と新聞雜誌

の無駄を省いて國民は一致團結して、經濟の發展を計らねばならぬ。この國家的社會主義が今後獨逸に於て實行されることは明かである。獨逸は今後社會黨がその年來の主義主張を行ふ實驗室である。社會主義の根本目的たる生產と分配の公平を期することに於て成功するならば、歐米各國も亦必ずや獨逸に倣ふに相違ない。この度の大戰は人間の物質的改造から見て實に深き意義あるとを思ふ。カイゼルの沒落はデモクラシーの勝利であると共に、社會主義を大規模に實驗する可能性は明かに表はれたのである。この意味に於て大戰の終結に對して滿腔の喜びを感ずる。

佛心鬼面

◆舊臘十三日文部大臣邸に於て臨時教育會議主査會が開かれて、人心歸嚮統一案を審議した相だ。昨年五月田中陸相の肝煎で、全國青年團中央部大會を東京で開催し、官僚、軍閥總出の大活動を演じ、一時は大した騷ぎであつたが、我國の一部階級には今尙國民思想を以つて軍制統一とか、艦制統一とか云ふ樣に、お役人の手で統一し得るものと考へてゐるものがあるから驚がざるを得ない。國民思想の統一も面白からうが、この忙しい時代によく〳〵暇な役人があるものだ。

◆一昨年五月、寺內首相は地方長官又は警察部長會議の席上、『近來民主主義に藉口して、我國體に背戻する危險なる言議を試むるものあり。國民指導の大任に當れる諸君は、よく國民思想の趨向に鑑み、その向背を過るなからむことを望む』と演說して大いに國民思想統一を叫んだものだ。

◆徒らに煩瑣なる官制を設け、船舶管理令や物價調節令を濫布して、經濟上の統一を強行し、却つて經濟界に混亂を與へ、又は滿鮮の植民地に軍人行政を布いた官僚內閣ならば、國民の立憲的自由思想を制壓して、偏狹なる官僚主義に國民を束縛せんとするは別に不思議ではないが、苟しくも、政黨內閣の下にある教育會議委員が官僚的人心統一策を試みるとは全くお話にならぬ。

◆官僚學者の云ふ危險思想とは、國民が最も健全なりと信ずる立憲的自由思想を指すのだ。即ち聯合國が國運を賭して奮戰せる共同の目的に當るのだ。戰後永久的平和、又は國際聯盟を組織する根本精神に當るのである。封建時代の專制政治を夢みて、國民思想をお役人の手で自由自在に切り盛せんとするは全く濟上の沙汰である。思想や人心は一部の階級に依つて統一支配さるべきではない。

◆鹽っ煙草の如く國民思想を官營として偏狹なる官僚主義、國家主義に盲從せんとするのは、聽て獨逸の二の舞をするに至る。世界全般に澎湃たる自由、民本の思想を制壓して思想上の中立を保たんとするか。

◆民本思想は決して一時の流行思想ではない。たゞ當然來るべき思想が漸く人間生活の實質的價值となつたのだ。民本思想は一部の官僚階級を除いて國民否世界人類に取つて眞理である。眞理には流行も時代後れもない。我國民思想は既に立派に統一されてゐる。教育會議委員諸君は今更こんな餘計な問題で心配するに及ばぬ。心配して貰いたい問題は他に幾らでもある。《德隣》

竟吾が同胞國民の思想はまだ舊習を脫せざる所が多く、口には平和とか何とか謂つて居ても、心には矢張り武威を輝し領土を擴張する事を夢みてゐる者が尠くない。そんな連中に對しては、自分は飽迄も今度の講和に由つて吾が國の獲る所は案外多くあるまいと云ふ事を、豫め注意して置きたい。青島は固より取つて置きたいのは山々だらうが、最初からの行掛りて、恐らく支那へ還附せずとは濟むまい。せめて山東の鐵道でも收め得られたらば、足れりとすべきであらう。西伯利の東邊は永く吾が掌中に置きたいなどと、蟲の好いことを放言して憚らない人もある樣だが、是れ亦然るべき理由を發見するに面倒である。此の處にも矢張り鐵道その外多少の利權を收め得られたらば、滿足して居らねばなるまい。南洋諸島丈は或は吾が有に歸するかも知れぬが、固より大した物ではないらしい。

斯う言つて仕舞うと、それては働き損のくたびれ贏けて、徒勞である、無駄骨折であると憤慨する人も多々あらうが、併しさう憤慨するには當るまい。此の戰爭に由つて吾が國が利益した事は、實は決して尠少とは思はれない。先づ以て手近な所より申さば、鬼の居らぬ間の洗濯やら何やらで、吾が國民の公に私に贏けた事は、神武開闢以來と申して好からう。正貨の積立は忽ち拾數億圓の鉅額に上り、債務國は一躍して債權國と早變りを演じ、從つて民間にも亦大小成金の出來た事は、現著掩ふべからざるものである。否是れは啻に金錢上の利得そのものばかりではない。商業工業そのものに色々の工夫發明も出來たらうし、化學の研究などは特に著しく催進されたに相違ないとすれば、戰後もどうか懈怠せずと更に奮發向上して貰ひたい事である。

尙且つ陸海軍人の功勳は、遙に西洋人も一層明に認める事が出來たに相違ない。西伯利邊では固より勇武にして而かも訓練規律の正しいのには、誰も感服しながら、鐵砲の擔ひ方が惡いとか、愛嬌に乏しく武骨極るとかと、往々惡口もある樣に聞及ぶが、それに就いては某少將の辯解では、何分日本の軍人は只戰爭の爲にばかり敎育してある

に書いた事もあるが、孰れも略ぼ見當が違はず、別して去る十月下旬雜誌『大觀』の需に應じて、講和條件に就いて答へた條項の如きは、その後間もなく發表された休戰條約のそれと大體に符應するのを觀て、心竊に愉快でならぬ。同じ雜誌にも獨逸最負の官僚學者達は、未だに目醒めず、講和するにしても五分々々の條件で、雙方交綏と云ふ外はあるまいなどと言つて居るのは、曲學阿官で實にあかん事である。笑止千萬と謂ふ外ない。

但しいざ講和談判と成つては、吾が日本政府からは果してどんな條件を持出すべきであらうか、否それどころではない、さしづめ大使の人選が頗る面倒らしいから困る。一時は山本伯の呼聲が高かつた様だが、自分はそれは斷然惡るいと考へた。同伯の手腕は固より敬服に堪へぬが、人物閱歷は到底國民一同感心する事は出來ぬ。將又伊東子爵も同じく敏腕ではあらうが、何となく面白くない。加藤男爵は頗る立派だが、兎角毛嫌せられる様で、とても物に成らぬだらうし、牧野男爵などと來ては頭からお話に成る代物とは思はれない。大隈西園寺兩侯は固より承知すまいが、それならば言分はない。別して大隈侯の方が世界的名聲からして最上等と思つたが、何分アノ老體ではと懸念する者もある。已むを得ず珍田松井の兩全權大使で我慢するより致方なからうと、あきらめて居た所が、内田外相自ら出掛るらしいので、稍意を強くした。と謂つても内田子爵の外交的手腕に多大の望を屬する譯ではないが、何はともあれ自分は今度の講和談判はデモクラシーの精神を發揚するものであるから、少くも近代思潮の一致を諒解して居る人でなくては駄目だと考へた。それは失敬ながら以上列擧の人々は大抵不向で、先づ内田子爵ならば可なりと思ふからである。

二

さて大使の方はどうかかうか曲りなりに人選が出來たとしても、其の會議に持出す條件は一寸考に窮する。自分の見込てはマア格別大した獲物はあるまいと想うて、大使として行く人にも太だ氣毒である。下手をすると或は復故小村侯爵の様に國民から怨憎せられる事が無いとも限らない。畢

米國邊に出稼の連中には、實は同胞ながら赤面する様な手合も決して少くない様で、折角遙々と米國に渡りながら、常に故國に戀々として、世界の大を觀る能はず。下らない坊さん達の貧弱陳腐なお說教を聽いて安心したり、偶々茅原華山氏の閑暇なのを知つて態々出講を乞ふたり、奈良丸や何かの低級趣味で嬉しがつたりする様では、誠に心細い。どうか幽谷を出て、喬木に移るの心掛があつて欲しい。

北米合衆國の對日態度も、談判次第では今度は多分改正せられる事と信ずるが、暫くそれはそれとして、尙ほその外は今度の大戰に由つて吾が國の獲得した無形の利益は、非常に大なるものがある様に思はれる。

第一には國とか國家とか云ふ事の外に、世界とか人類とかの爲にすると云ふ事が、一層明に分つたらう。是れは主として陸海軍の出動に就いて言ふので、今度の事は固より直接には國防と云ふ譯ではない、寧ろ人道の敵を亡すと云ふ大抱負で遣つたのに相違ない。是れが人間思想の一大進歩と謂へる。

第二には國家學とか國法學とか謂ふ獨逸流の官僚學者を粗述した憲法解釋も、是れから一變して、曲學阿世の漸く其の跡を立ち眞に民本的政治が行はれる様に成りつゝある事である。勿論それは現政府を眞の政黨政府と看て云爾ふ譯ではない。吾が政黨には大々的改良を施さねばならぬ必要がある。否從來所謂政黨内閣の思想は今日では最早古い。いづれ戰後は英國などでも自ら一變するであらうし、延いて吾が國へも影響することのあるのは、疑はないが、何はともあれ獨逸流の官僚萬能が廢止に成るのは難有い。

四

否是れは固より啻に政治には止らない、社會百般の事が大となく小となくデモクラチックに成る事は、鏡に照らして見るよりも明かである。由來吾が國の官僚輩は格別に此のデモクラシーなる言葉を忌み嫌うて、蛇蝎視する様だが、それは大間違である。デモクラシーは固より決して金甌無缺の國體を毀損せんとするものではない、それは一

のて。致方ないと云ふ事が、新聞紙上に見えて居た。地中海邊に活動した海軍の方にはそんな事も無いらしい。何にしても斯く吾が日東帝國民の眞價を彼等に證明し得て餘りありとすれば、此の上はそれを利用すれば宜しい譯て、區々たる領土や利權よりは寧ろその方が大切であらう。

此に於て起る問題は、戰後は國際關係に於てかの白人黃人など云ふ人種上の差別を一掃し、萬事平等に交際する樣にしたい事て、それが出來れば今度の大戰に由つて吾が國の獲た所は頗る大だと謂へやう。マウ少し露骨に言へば、從來亞米利加合衆國の吾が國に對する態度を斷然改めて貰ひたい。卽ち入國移住を自由にし、歸化を許し、土地所有を許し、すべて法律上同等に取扱つて貰ひたく、又拉丁亞米利加諸邦への出入も、何等沮碍しない樣にして貰ひたいと云ふのてある。ハート高平、ランシング石井の申合せなどては、不十分て紳士契約も何もあつたものてないと云ふ事を、それを一番堂々と今度の講和談判の序に持出して遂行して見たい。

三

聞く所では米國大統領ウヰルソン氏は夙に國際聯盟を組織し、國際裁判所幷に仲裁和解所を設け、尙且海上自由を保證する樣にして、以て今後永く戰爭の禍を免るゝの意見を有し、又これを實施すべく着々步を進めて居るらしい。是れは至極結構な事て、自分共も夙に萬國平和を渴望し鼓吹して措かざる者だから、無論雙手を擧げて大賛成をする筈だが、どうしたものか吾が國の學者論客の中には、此國際聯盟に加入する事に就いては、些か躊躇の色が見えるからをかしい。併しそれも一應は無理からぬ事て、現狀の儘て以て國際聯盟が成立したならば、吾儕日本人は他の白人の爲に桎梏を施され、手も足も動かない樣に成つて、泣き寢入りて居るより外なからうと懸念するからである。乃ち此の際先づ豫め人種的差別の僻見を一掃して、自由平等にしたいと言ふのである。講和大使は此の大役を甘く仕遂げる覺悟があつて欲しい。

勿論それは吾が同胞國民も亦此の際自ら反省して、大に改良することを心掛けねばならぬ。從來

英國も戰後必ず之れを十分實施するに相違ない。然かもそれで以て同國の立憲君主制が廢滅に歸するなどと早合點したらば、物笑ひであらう。

卽ち一言以て之れを掩はゞ、戰後は國家民族の發達進歩と同時に、社會生活は諸般の方面に於てデモクラチックたり、インターナショナルたり、ソシヤリスチックたる事は爭ひ難い。そこて今度の

米國教育の趨勢

帆足理一郎

一

四年以上に亘つた世界の大戰は、急轉直下ドイツの敗北となり、茲に休戰の實現は勝利の平和を聯合與國に與へんとしてゐる。一時は潛航艇の跋扈により英佛の存亡も疑はれる程であつた此戰爭が、勿論他に色々な理由もあるが、主として米國の參戰によつて、ドイツをして全く攻守轉倒せしめ、前後の沒落を急速ならしめたのである。此戰爭は此の氣運を催進したものと觀れば、其の賜物や蓋し大なりと謂へやう。若夫れ從來デモクラシーに加へられたる幾多の非難の如きは、今度北米合衆國の成功を觀たらば、思半に過ぎやう。斯くして自分は今後益〻教育の改良、宗教の革新を絕叫しやうと考へて居る。

爭に於ける米國の貢獻は實に偉大なものであるが、そは軍に兵力に於てのみてなく、寧ろ民本主義人道主義の正義を叫んだ世界的理想の宣傳と實行に於て、最も偉大な貢獻を與へたのである。

米國參戰の當時に在りては、第一に民心の統一がなかつた。第二に、聞に合せに作つた兵士の戰鬪力が疑れた。先づ第一の場合から考ふるに、米國は元來平和主義の國で、幾度か米國の商船がド

種の政體で、政體と國體とは自ら別なものである。簡單に言へばデセクラチツク●モナーキー卽ち民本的君主制と謂ふ事は、强ち不合理の名稱ではあるまい。昔の或る學者が政體を區別して云々した事などは、固より不精確で悉く採るには足らぬと思つたらば宜しからう。

然り而して自分の今玆に特に高調する所は、戰後の形勢は大小內外の社會生活、皆悉くデモクラチカルに成るに極つて居ると云ふのである。卽ち法律も然り、倫理、道德も然り、敎育も然り、宗敎も然り、文學、藝術も亦然り、否然らざるべからざる樣革新すべしと云ふのである。文字なども詰屈難澁なる漢字は自ら減廢し行いて、やがて羅馬字を採用せらるゝ樣に成らうと思はれる。

尙ほ一步を進めて考へると、此のデモクラシーと云ふ事は又萬事が漸く世界共通と成る事を意味するもので、國體や政體は別として、各國固有の特色ある風俗習慣なども、追々均一に成り行くことは爭はれない。去れば今後社會生活の革新と言ふ者は、又必ず世界的國際的と云ふ事を眼中に置かねばならぬ。國家も亡びる譯ではなく、民族も滅する譯ではないが、然かも獨逸流の國家主義や民族主義は、その官僚主義軍國主義と共に地を掃ふに至らねばならぬ。

將又社會主義的色彩も、各方面に於て漸く鮮明に成ることは爭はれない。勿論それは極端な破壞的な過激派などを好しとする譯では、毛頭これない。然かも所謂社會政策、所謂社會改良、所謂國家社會主義の如きは、決して惡るいものではない。否吾が國でも從來の官僚政府すら早多少はこれを行ひ始めて居た樣である。故伊藤公爵が夙に社會主義は必ずしも惡むべきにあらず、ビスマーク亦實に之れに據つて國政を行はんとし、吾輩亦同意見だと言つたのは、遠に卓見である。近頃は西洋學者の中にもソシャリズムの代りにソシエチシズムを說く者がある。否それより以前にソリダリデーを說く者もある。孰も社會主義の一面に橫はる弊害を矯正しやうと云ふので、自分も亦同意するが、併しそれで以て全然廣義の社會主義を排除する譯には行くまい。所謂國家社會主義の如きは、

く、兵士の或者はオリンピック競爭の傍歐洲見物にでも往く考へて出掛る者もあつた。併し戰備の進行と共に國內の民心は統一され一層緊張を加へて來た。國民は擧つて正義人道の爲め戰はねばならぬことを自覺した。單に兵役に服して實戰に參する計りでなく、國內にありて軍器の製造は勿論、農工商に從事する人々が老若男女の分ちなく、各其分に應じて日々の勤勞に努力するは戰爭の目的を遂げしむる所以であつて、兵士の犧牲と少しも異る處なきを自覺した。斯くて消極的には食糧の節減を自發的に實行する。軍事公債を買ひ、戰時稅を喜んで出す。又積極的には進んで能率增進、生產の增殖を企圖した。半年過ぎ一年經つ內に多民族の集合なる米國は其始め步調合はず、主張に於て、又實行に於て餘り統一なく、開戰の爲め或は國家の分裂を來たすかも知れぬと恐れられた米國民は益々擧國一致、各自自分の責任を極度に果さんとする自主自發的な態度を以て人道擁護なる理想の旗下に集中して來た。是れ誠に自主的民心の統一を實現せし天下の偉觀である。

第二に、米國兵の戰鬪力は疑はれてゐた。訓練なき兵、實戰の經驗なき兵、どうしてドイツの精兵と輸贏を試むることが出來ようと。そは單にドイツ人の輕蔑の言葉であつた計りでなく、聯合軍の方でも米國が參戰しても只經濟上の助力になる位に過ぎないと多寡をくゝつてゐる者が少くなかつた。而も見よ、米軍は體力に於て優勝者である計りでなく、軍隊に酒を呑ましめず、醜業歸を近かしめず、其道義的資格（クオリチイ）に於て、彼等は遙にドイツ兵の優勝者であつた。學生や商人や職工や官吏などまでも寄せ集めた一夜作りの軍隊が如何に軍紀嚴肅に、堂々と歐洲の山野に奮鬪せしことよ！單に軍人のみでなく、各種の生產工場が一夜作りに軍用品の製造所と化し、自働車工場は軍用飛行機の製作所となり、擧國禁酒を實行して無用となつた釀造所は、軍用化學品の工場と化した。

二

斯の如く、米國民が農工商、官吏、學生の別ちなく、臨機應變、忽ち軍人となり、或は忽ち慣れぬ軍需品の製作に從事しても其能率高き、所謂融

イツの潜航艇によつて挑戦（チャレンヂ）され、侵害されても容易に動かなかつた。ルシタニヤ事件の時など、中立國民を犯すドイツを膺懲すべしと叫ぶ者が少くはなかつたが、自國の利害にのみ動くことを肯しとせない米國人は寧ろ消極的に自分を非難して、左様な危険な地域に中立國民は寧ろ足踏み込まないことが肝要であると云つた。殊にラフオレットやブライヤンの如き平和黨の非戰論者は、米國は中立國とは云へ其實聯合側に糧食彈藥を供給してゐるから、中立侵害として、潜航艇の災禍に罹る我が商船に關して、宣戰するほどドイツを非難することは出來ない、先づ自からの中立違反を責むべしと云つた。併し昨年二月ドイツは無制限に潜航艇戰を宣言して、交戰國、中立國の差別なく警戒區域内に侵入するものは無警告で打沈めると孰圍いた。斯くて容易に立たなかつた米國は、軍閥的に暴逆なドイツの人道を無視した潜航艇戰に對して、自國の爲めのみでなく、英佛の文明、然り世界の文明を擁護し、『世界を安全なる民本主義の住家ならしむる』爲めに干戈を採つて戰はざるを得ざる場合となつたのである。

大統領ウイルソンは宣戰を布告した。彼は長廣舌を揮つて宣戰の理由を述べた。そは全く正義人道擁護の爲めで、ドイツ國民と戰ふのではない、ドイツの軍閥政府と戰ふのだと云つた。ドイツ國民は狂暴なる汎獨主義に誤られ、專横なるカイザアに欺まされてゐる。我等若し劍を抜いて立たなかつたならば、世界は階級的な、專制的な、軍閥的なカイザリズムに蹂躙されて了ふかも知れぬ。吾等は平和を愛す、されど眞の民本的平和を齎らすにはドイツなる野獸の蠻行を喰ひ止むるに武器を以てせねばならぬ。此場合武器は平和の對價であると辯護した。斯くて米國は參戰したが、國内平和論者、社會主義者、ドイツ系統なる市民の反對やI、W、Wの卑劣な妨害が少くはなかつた。又參戰の理由に關しても大統領一派の如く正義人道を大聲叱呼する者のみではなく、經濟上商業上米國の利益を保護する爲めに戰ふのだと算盤珠から割出した者もあり、或は米國の國力を試驗（テスト）する爲めにやつて見るのだと、遊戲分子を交へた者も少くな

ある處のもの引出すことてある。卽ち天稟の個性を發揮し、生徒の獨創力を發展せしむることてある。獨創力、發明力を養成するには教師が與ふる印象卽ちイムプレッションよりも生徒が爲す表現卽ちエキスプレッションが必要であるとした。處て、下は小學より上は大學に至るまて生徒のエキスプレッションを重視し、六つ七つの子を講壇に立たしめてお伽噺をさせたりする。人は習得した處を言葉に言ひ現はして一層其知識を愽め、是を文章に書き現はして尙一層精確の知識となる。米國の中學、大學ては日々の課業をレッスンとは云はず、レシテエションと云つてゐる。Recitation とは寧ろ復習の義である。教師は前日學生に翌日の日課を與へ、之を教科書により圖書館に於て研究し、翌日教室て報告さすのてある。教師は之を批判し、間違を正し、更に總括的の知識を與へて、將來の研究に資し、且つ之を指導してやるのてある。

彼等は生徒の個性を自由に發展せしめんと思ふが故に、又個性はユニイクなものてあつて、宇宙の總全を組織せる活分子なるが故に、個人々々が其個性を發展せしめず、個人として特殊な社會的貢献を爲すことが出來ないのは個性としてのみならず、社會として既に失敗なるを信ずるが故に、彼等は各自の自由發展と云ふことを如何に尊重してゐるか分りはしない。處て、米國の教育は劃一主義注入主義の反對てある。國定教科書など勿論ない。各洲によりて違つた教科者を採用してゐるが、夫れは日本の如く教科書萬能主義に之を採用した譯ではないから、補助讀本の撰擇を自由にし且つ之を廣く大に利用してゐるのてある。

開發主義が學校教育に適用されて、學生各自の自主自發研究心を鼓吹し、何か新しい意匠發見などを奬勵してゐる計りでなく、廣く社會教育に應用されて、着々效果を收めつゝある。社會教育の開發主義的方法として最も大なものは公共圖書館の設備てある。圖書館は決して民衆に外部から知識を注入しはせぬ。其讀む所見る所各人各自の自由に放任してある。世に圖書館ほど自發的教育の好機關はない。誰れも外部から何れの本を讀めと

通の利く廣汎多角な人物として養成されたのは、一體何に由りて然るのか。又民心の統一に別に態とらしい術策を講ずることなく、只高い人間生活の理想を掲げて、各自自發的に協同一致せしむることが出來たのは、一體何に由りて然るのであるか。私は云ふ、是れ皆教育の力であると。處で、過去に於ける米國教育の狀況を考へて、戰後如何に發展し往くであらうかを茲に考へて見たいのである。

十九世の後半に於て米國の教育思想を支配せし二大思潮はフロベルの開發主義を代表するハリス一派のヘエゲル趣味に充ちた自己實現主義の思潮と、ヘヤバアトの流を汲んだデカモ一派の品性の陶冶を目的とする知育主義の思潮であつた。單に思潮と云つても、實用主義の米國では思潮のみの思潮はなく、常に實行の伴へるものなることは勿論、歐洲で組織立てられた教育主義が其地では色々な傳統に囚はれて實行されず、只學說としてのみ殘つて居ることが多いけれど、米國人は能いと信じた主義理想を直に實行しようとする。彼等は又實行のテストによりて證明されたものしか尊重しない。處で、教育學說としては歐洲の先進國に一籌を輸するものがあつたであらうが、米國は實に實際教育の進歩發達せし事に於て、世界に冠たりしを記憶せねばならぬ。處で、ハリスやデガモの教育主義は過去の米國を支配せし教育の實際であつたのである。

ハリスがヘエゲル派の學者として教育家として多年米國教育會の代表者として米國の教育に貢献せし處は誰れも認めてゐる處である。米國は民本主義の國で只獨りの學者によりて凡てが支配される譯ではないからハリス一人を採りてフロオベルの開發主義を代表せしむるのは間違である。私は只一般にフロオベル派の教育が如何に實行されたかを概述するのである。ヘエゲルはフロオベルの開發主義に開發或は發展の歸局を與へ、人生は絶對的完全の實現に對つて進み往くと云ふ教育の目的を與へた。而して教育の過程は知識の供給ではない、知識を得る能力の發展である。教育は外的に或物を兒童に與ふることではなく、兒童の內に

に於て何の困難も感じない所以である。

總じて開發主義の教育は絶對者を目的とし、各個人持獨な天性を切瑳琢磨することであつて、各個人は絶對なる總全の有機的分子（オーガニック・エレメント）なるが故に、一人にても其天性を發揮せない場合は宇宙の總全に夫れだけ欠缺が生ずる譯である。故に國民各自の個性を最も完全に發展せしむると云ふことは、民主國の教育主義として最も至當なものとせられてゐたのである。

三

フロオベルの開發主義と同時に米國の教育を支配せし他の思潮は既に述べたる通り、ヘヤバアトの品性陶冶主義即ち人格主義の教育である。ヘエゲル及フロオベル派なるハリスの感化が大なりしだけ、同時に米國の教育者中にはデカモの如きヘヤバアト派が中々盛んであつた。歐洲ではヘヤバアト去つて後、スペンサアの實利主義的科學教育が盛んに稱へられた。國家が教育を司る以上善良の市民を作ることが第一の目的であらねばならぬ。善良の市民たるには經濟人（エコノミック・マン）としての修養が必要であるから、ドイツのレアル・シュウラ（實科學校）見た様に實用の學を重せなければならぬと云ふのであつた。併し米國人は英國人の衣鉢を傳ふる所最も多かりしだけ、英國の教育主義が『紳士（ゼントルマン）』を作るにありし如く、米國でも實用の學を重んじつゝも尚品性の陶冶即ちUpbuilding of Moral Characterが凡ての教育の目的とせられた。

人格の養成、品性の練磨をヘヤバト式にやるには、先づ次の順序が必要である。即ちヘヤバアトは當時の心理學によつて、人間の品性を形成するは悪習慣を去り、良習慣を作ることであると見た。良習慣を作るには意志の鍛練が必要である。意志の鍛練には先づ良き行爲の動機（モオティヴ）を與へねばならぬ又良き動機を得るには良き欲望（アザイヤ）を起さしめねばならぬ。良き欲望を求むるには先づ良き感情を起さしめねばならぬ。而して感情は常に知識に伴ふもので、美しいと云ふ感情を起さしむるには美しい花か何かを見せねばならぬ如く、良い感情を起さしむるには良い觀念（知覺）が必要であると云ふことになる。處て、教育の目的は人格の建設で、教

強いながら、讀むと讀まざるとは民衆の勝手であるが、入場料が無代であるのみならず、自由に借り出しが出來る、一週間或は二週間、そして二週間の後戻して再び同じ本を借ることが出來る。一人で一回二三冊の本が借れる。借賃は勿論ない。斯様な圖書館が人口一二千の村や町には必ずある。讀むと讀まないとは自由だが、斯く便宜に讀書が出來る様鼻先に突付けられては、日々の勞働の餘暇、夕飯の後など圖書館に這入つて讀書せざるを得ない。只新聞や雜誌計り見に這入る人も勿論あるが、各自自分の趣味に從ひ勝手な勉強が出來る。勝手に好きな勉強をして人間は自分の天性を發揮する。

學校教育のみを以て教育の能事畢れりとなすは間違である。學校は教育の一少部分であつて、其大部分は社會的になさるゝものである。カアライル曰く、近世に於ける大學校は圖書館なりと。圖書館の設備を等閑にしてゐる日本の如きは國民教育を云々するの資格なきものである。米國人が一般の政治、經濟社會狀態に就いて廣汎の智識を持ち、非常に常識に富んでゐるのは社會教育が發達してゐるからである。米國では勞働者も農夫も新聞を手にせないものはない。新聞は又日々の出來事を詳細に報道する。民本主義の米國では政治の秘密を許さぬ。何事も明ら様に國民に報告する。報告されるから國民は夫れに就いて是非曲直の理解を持ち、國政に趣味を感じ一層同情を持つ様になる。政府の執政は常に批評されてゐるが故に、能く理解を經さへすれば心から同情と一致と共働（コオペレエション）を見ることが出來るのである。

家庭に於ても米國では日本の様に教育を學校に任かすことなく、晩餐の時、或は晩餐後の一家團欒に親達の口から聞く色々な世間話しがどれだけ兒童の知識を增進してゐるか分らぬ。米國人は老人と子供との關係にも民本的で、日本に於けるが如く隔て少く、大人は能く兒童の相手として談笑することを好むのである。又兒童の科學的知識を增進する爲めに、小學時代から無線電信や電話機などを頑具同様に取扱はせてゐる。是れ米國人が一夜作りの兵士となつても機械を取扱ふことなど

先づ學者、教育家、政治家なるウイルソンを筆頭として、エリオット博士の如き教育家と學者と思想家を兼ね。ジョダンの如きは魚類學に於て世界のオーソリチイと云はれ、而も同時に米國三大教育家の一人で、詩人であり雄辯家であり、又平和論者として政治家を兼ねてゐる。斯様に多方面の發達を遂げた人材が米國に頗る多いのである。又各自の個性天才を重んずる米國では若くして大事業をなせる人が少くない。ハアヴアド大學には二十前後の哲學教授がある。飛行機から墮いて名譽の戰死を遂げたニユヨオクの舊市長ミッチエルは三十そこ〳〵で六百萬の人口を有する大都會の市長となり、又今回の戰爭でウイルソンに次いで最も世界的の手腕を發揮し、米國人の輿望を一身に集めた食糧監督官フウヴアは四十の坂を越へた計りの若者である。斯様な天才者が外に幾何あるか分らぬ。げに米國は天才と發明家の國である。現代世界で發明品を最も多く出せる國は米國であつて、其由來する處は實に個性を重んずる開發主義人格主義の教育に在るのである。

四

以上述べたる處、十九世紀後半に於ける米國の教育であつたが、前世紀の末より現世紀の今日まてフロオベルやヘヤバアトの教育主義に對抗して益々其勢力を扶植しつゝあるはデユウイー一派の實際主義的教育である。米國現代の哲學者て最も大なるものは勿論デユウイーであるが、彼れは同時に教育學者であつて、彼の感化は今や全米國の教育界を風靡せんとしてゐる。元來フロオベルも、ヘヤバアトも、スペンサアも歐洲人て、從來の米國は歐洲の思想に支配せられてゐたのであるが、セエムスやデユウイーのプラクマチズムは米國に於ける民本生活の所産であつて、茲に初めて米國獨特の哲學を形成したのてある。勿論同種の哲學が歐洲にない譯てはないが、最も眞正な發展を遂げたのは米國に於てゞある。實際主義の如何なるものであるかは茲に餘白がないから之を省略することゝして、只其教育に應用された方面だけに止めて置かう。

デエウイー一派の教育家は先づヘヤバアトの知

育の原理は知的に良い觀念を與ふることゝなる。ヘヤバアトの知識主義の教育は先づ斯様なもので、米國では一時非常に此主義が流行したのである。

此主義に從へば知育の目的は情育で、情育の目的は意育であり、意育の目的は卽ち人格の建設と云ふことになる。處で、米國人は常に家用の教育を重んじつゝも、凡ての知育情育の最後の目的は意志の鍛練、品性の陶冶にありと云ふことを忘れなかつた。而して民本主義の米國人は個々獨特の人格を養成し、獨特の品性を磨くことを第一とした。斯くて彼等は自主、獨立、自治の精神に富んだ、常識の發達した、融通の利く、快活な Open-hearted な親みある國民を作つた。

個人の自由を重んずる米國の教育は型に嵌つた劃一單調な人物を作つて其處に民心統一の基礎を作らうとはせなかつた。世に米國位多人種の集つた國はないので、而も夫れが移民の集合で、歐洲の各國から各國異つた習俗傳說を持つて集つて來た國民の子を教育するのであるから、國家的に思想の統一とか、民心の調和を計るには如何にすべきかと云ふ問題は、同一民族の國なる日本人などが迚も想像も附かない程困難な國家的大問題であつた。而も彼等は劃一主義の教育を取らず、個性の自由發展を重んじた。全く統一の目的に反してゐるやうで、それが實は最も良き民心の統一策であつた。夫れ眞の統一、協同は各自の理解と同情を基とする自發的の一致協同なるが故である。

各自の人格を重んじ、先づ人間たらんことを以て目的とした教育は如何にも融通の利く人間を造つた。勞働者や學生が一夜作りの兵士となつて其能率甚だ高きを示した。大學のキャンパスで平服の儘お一二〳〵と號令かけられて練習しつゝあつた義勇兵が侮り難き戰鬪力を有せるので敵人の膽をつぶした。米國人は商人を官吏になしても、工場主を政治家にしても直に其地位に適應せしむることが出來る。是れ徒に人間を職業教育に運命づけないで、常に趣味廣い人格の教育に重きを置いてゐるからである。されば米國では學者にして教育家、教育家にして政治家を兼ぬる人が少くない。

成長であつて、一時期に於ては其時期に於て最も充實した生活を營ましむることであると云つてゐる。されば學校は準備生活ではなく、實生活である。兒童は兒童として充全の生活を營むことが卽ち教育である。されば學校と社會との區別は從來よりも一層少なくなるので、米國の學生は社會の一員として常に社會生活の經驗を積んでゐる。米國の大學に於ては平和問題と禁酒問題の演說や討論會が過去十數年間毎年の年中行事なり、多額の懸賞を懸け、州內、或は地方の三四州、或は更に全米國に亘る雄辯の競技が、ベエスボオルやフートボオルの競技と同樣行はれてゐる。又中學の生徒達てさへ常に政治問題社會問題を捉へて討論や演說の競技をやつてゐる。彼等は小國民として小國民だけ社會の活問題に實際接觸せんと努めてゐるのである。又小學校に於て舊來、教室に出入の時、行列を作りてピヤノやヴアイオリンの彈奏に足並みそろへて出入せしめしことは昨今大分廢れてしまつた。夫れは實生活に於て吾等は常に音樂調子で步行するものではないから、劇場や停車場と同樣、行列を作らなくても尙押し合ひへし合ひをやらぬ樣な習慣を作るが肝要であると見るからである。それ學校を社會化した一例であつて、デユウイー等の教育說に感化されたものと見て宜敷からう。

五

名譽ある戰勝國なる米國今後の教育は結局デユウイー主義の教育である。ドイツ哲學の糟粕なる絕對觀を棄て、個々人格の限りなき創造的進步發展を企圖し、發展成長より外に、卽ち教育より外に教育の目的なしとする進化主義を益々徹底せしむるであらう。又女子參政權は州に於て既に大部分認められてゐるが、早晩中央政府に於ても認めらるゝに至り、從來よりも一層女子教育は盛んになり、舊來に於て敢て男子の夫れに遜色なかりしもの、今後は家婦として母としての人格教育が男子よりも一層婦人に必要なるが故に、男子以上に女子の學藝（カルチユラル）教育が高調されるであらう。米國は全く禁酒國となり、次に禁煙も實行せられ、社會政策が一層徹底的に行はれ、勞働と資本、貧民と富豪、

育主義を棄てゝ情意主義の教育を建てた。プラグマチストは曰く、兒童は知識によりて行爲するにあらず、行爲によりて知識を得るのである。觀念の内容は行爲によりてしか得らるゝものではない。されば觀念(知識)を與へんより先づ實行せしめよ。實行は必ず知識を生むであらうと。是れ意志の鍛練に知識を重んぜず、行爲を重んじ、人格の養成に人格其者、卽ち『以心傳心』ではなく『以人傳人』の必要を重視する所以である。日本の或る中學校長が一昨年米國の教育を視察して歸途サンフランシスコで觀察の結果を新聞記者に報告して曰く『米國は知育に於て勝れてゐるが、惜む哉德育に於て缺けてゐる』と。彼れが德育に缺けてゐると云つたのは、米國の學校には日本の夫れの如き『修身』なる課目が全くないからである。此學校長は日本の修身なるものが實は德育ではなく知育であることを知らず、卽ち知的に道德の觀念を與へんとするもので、行爲的な德育でないことを知らず、米國の教育家が各自の崇高な人格を以て人格を教育する、私の所謂『以人傳人』の德育を解し得ないから、斯樣な馬鹿な報告を臆面もなくやつたのである。

第二にデユウイーはヘエゲルやフロオベルの教育說を批判し、其開發主義は勿論賛成であるが、開發の目的を確定した絶對の完成に求むるは間違ひである。教育は成長である發展である。成長發展以外に教育の目的はない。成長の目的は限りなき成長である。或る特定のゴオルを實現することではないと云つてゐる。斯くて從來宇宙の總全を目的とし、動もすれば個人を以て只其總全の一分子と考へ、恰も手足が人間全體の一分子である如く、社會或は宇宙の總全を過重して個々の人格を方便視する傾向ありしを批難し、個性の目的は絶對者なる總全にあるのではなく個性其者であるとなす、徹底的な民本主義の教育を稱へてゐるのである。斯くて米國の教育は益々個性を重視するに至り、將來に於て一層多くの天才者、發明家、偉人英雄を産出するであらうと思ふ。

第三に、デユウイー等は教育は社會生活或は彼世の生活の爲めの準備ではない。教育は絶間なき

單り、獨逸にのみ存せるに非ずして、英國、露國、佛國、伊國、巴爾幹諸國また然りである。而して米國に於いては主として地理的關係の上から、軍閥の出現を觀ぬけれども、金權の橫暴は、國內に於いてさへも甚しきものがあつて、この財閥が海軍擴張を主張して、南米及び東洋に經濟的發展をなしつゝあつた事實は、普く、世の知る處であつて、今回の米國參戰と雖、其の初めの動機たるやまた、米國資本階級の政府壓迫に因するもの大なりと思はるる理由がある。其れ故に、歐洲戰爭を以て、一に、獨逸の罪に歸するは、決して穩當なる判斷と云ふべきではない。

只、獨逸がナポレオン戰爭のために苦難に陷り就中プロシャの如きは、亡國に近き悲境に遭つたので、プロシャの識者等は一切の希望を『將來』にかけて、愛國心を皷吹し、國威の恢復を圖つたのであるが、獨逸統一の漸やく成らんとする頃には世界の植民地は多く、聯合諸國の手に歸して居つたために戰勝に乘ずる獨逸の膨張政策は、世界到る處に於いて沮止せられ、其の結果、獨逸の商工業は軍旗を飜へして、巴爾幹より東洋を策するに到つた。この點に於いて獨逸は今回の戰爭に對する當面の責任者となるのであつて、リーブクネヒト一派の非戰論者の主張は別としても、開戰前駐英大使たりしリチノスキー公の覺書に徵するも、更にまたタネンブルグ一派の膨張論に觀るも、獨逸が、戰爭の發頭人なる事實は動かぬ處と考へる

卽ち、經濟的帝國主義は交戰各國に存在せるのであるが、獨逸以外の國々は獨逸が火蓋を切るまで、もう少しく具體的に謂へば、獨逸に火蓋を切らせるまで受け身になつて居つたので、獨逸は戰爭に對する當面の責任者と見做さるゝ事となつたのである。

二

歐洲戰爭は以上の如くにして、財閥と軍閥とを中心として起つたのであるが、愈々、砲焰相見えるの秋となれば、各國ともに民衆の力に賴つて、其の雌雄を決する事となる。處がこの民衆、殊に第二十世紀の自覺しつゝある民衆なるものは、問題が直接彼等の利害に關するか、若くは正義人道

其他生産分配の不平均より來る問題が、個人人格の尊重を基本とする教育の成果として圓滿なる解決を見、米國は民本政治の花として永く世界に模範を示すであらう。要するに、米國の教育は各自天稟の才能を限りなく發展せしめんとする機會均等主義であつて、國家社會を目的とせず、各個人の圓滿なる發達により共同生活の實を擧げんとするものである。（完）

國際聯盟に就て

高橋清吾

一

去る七月半ばより初まれる聯合軍の連勝は、中歐諸帝國に於ける內部の困難を愈々助長せしめて、茲に休戰媾和の日を速進するに到つたのであるが、次いで開かるゝ平和會議にては、かのウイルソン大統領、グレー、アスクイス兩氏及び、聯合國勞働團體等の提唱にかゝる『國際聯盟』なるものが將來に於ける平和の保障策として論議さるゝ事と思ふ。

抑も、今度の戰爭は、其の原因を軍閥と財閥との聯合即ち、經濟的帝國主義に求むる事が出來る。少くとも、其の重大原因が、こゝに存する事は、獨逸今次の動搖に於いて軍閥と財閥とが凋落しつゝあるを觀ても分るのである。

戰爭開始以前より獨逸識者の多くは、獨逸文化の宇內に冠絕せるを誇稱して、之を世界に普及するを以て獨逸民族の使命なりと考へたのであるが、眞面目にかく考へた人もあらうけれども、其の多くは、文化喧傳の民族的使命論を以て、經濟的帝國主義を道德的合理的に擁護せんと努めたに過ぎぬと觀らるゝのである。

この經濟的帝國主義（Economic Imperialism）は

三

工業文明は政治、社會組織の缺陷に入りて、內に於いては貧富の爭ひ、資本と勞働との確執を惹起し、外にありては經濟的帝國主義の貪婪（ドンラン）となり終に今日の如き社會問題を現出するに到つたのであるが、英米に於いては、一般の思潮が、勞働者若くは其の團體をして生產分配の一切機關に參與せしむる方針なるが故に、かの英國勞働黨の綱領の如き極めて穩健なる調和的政策が、政府の方針となれば、男女普通參政權と相俟ちて、英米の經濟政策を純粹なる國民的、卽ち、國內に於ける各階級の利害を善く調節せる意味の國民的なる基礎の上に立てる事となるだらふと考へられる。富の分配を公平ならしむる經濟政策は勞働者の生活を保障すると同時に彼等の子弟を敎育に依りて立身せしむる機會を得せしむる事となるを以て、社會內の階級的鬪爭は、健實なる中流階級の出現、若くは、智識ある勞働階級の成就を通じて、徐ろに調和さるゝ事となる。これ公民敎育の機會を出來得る限り社會の下層にまで及ぼさんとする努力が、各國識者の間に存する所以である。

國民協和の上に立つ經濟政策は外に對しては非帝國主義的政策となる。卽ち國內の資本は國民一般の利益を無視して、資本家の利益にさへならば何處にも流出すると云ふ樣な事ではなくなるので、隨つて資本の侵略的性質を持たなくなるのである。假りに、資本家の思ふが儘に外國投資が出來ても、回收に困難なる場合、之を政府が援助しないのであるから、利に敏き資本家等は、固よりかゝる危險を冒すを欲するものではない。

また、資本が國民的資本として流出しても、若し、回收困難の際に戰爭を敢てする事となれば、畢竟戰費の方が投資額より遙かに多額に上るのみならず、犧牲を拂ふものは國民の多數者なるが故に、外國投資のために、戰爭を初むるの愚策なるは國民の善く知る處である。かるが故に資本はなるべく國內に於いて廣く融通さるゝ事となり、其の剩餘は、平和的性質を帶びて外國に流れ出づる事となるのである。

更に關稅政策は如何と云ふに、概して、各國と

の訴へに依る以外は、容易に誠心を以て參戰せぬので、獨逸では戰爭を『祖國のため』と稱し、また米國參戰前の聯合國は、小弱國擁護、正義等の言辭を以て、內國民心並びに、世界の同情を求めたのであつた。而して、露國革命並びに、獨逸の海底戰は米國大統領をして戰爭の目的を『The World safe for Democracy』と宣言せしむるに到つた。卽ち聯合國はこの道德的理想を以て、民衆の誠意ある援助を得るに到り、終に、今回の如き勝利となつたのである。

聯合各國の政府が一度び、世界主義のための戰爭なりと宣言して、民衆の贊同と、彼等の多大なる犧牲を贏ち得たる以上は、來るべき平和問題もこの主義に準據して決せらるべきは當然である。

而して戰爭が軍閥と財閥との聯合よりなる經濟的帝國主義の必然的結果なりとすれば、平和問題の中心も、こゝに來るは、また、自然の順序である。

ウィルソン大統領等の所謂、世界民主主義なるものを確立せんとするには、少くとも二つの方面から世界の改造を行はなければならぬ。其一つは國內に於ける、政治、社會組織ばあつて、其の二は國際組織である。この兩者の改革がなければ、戰爭の道德的理想なる『The World safe for Democracy』が實現さるる事とならないのである。卽ち、兩者が相俟つて、世界民主主義の安全境を齎らす事となる。

國內の改革は、第一に、外交軍事の監督權を國民の代表者たる機關に收むる事であつて、これに依りて初めて、外交の公開、軍備縮少と云ふが如き平和政策を導き入れる事が出來る。獨逸は勿論てあるが、米國に於いては上院と大統領とのみが外交權を有するが故に、下院をも外交に參與せしむる事となれば、一層確實なる改革が出來ると考へる。普通選擧權や婦人參政權の如きも歐米諸國は恐らく、悉く實現するに到ると思ふが、これは政治の改革をして健實ならしむる上に缺くべからざる要件である。

次ぎは資本と勞働とに關する社會の改革である。

以上の諸改革は、前にも述べた通り、國際組織の改造と相交渉して、初めて、『The World safe for Democracy』が具體化さるゝのであつて、國際的改革がなければ、ウィルソン氏の大理想であり且つ、聯合國多數人民の渴望する世界民主主義は來るものではない。世界民主主義の具體的內容及び國際組織の改造は次號に述べる。（未完）

佛蘭西文明の品位

山崎直三

一

此度の大戰に於て、佛蘭西は明かに作て上聯合軍の主腦であつた。前にヂョッフル、後にフォッシュ、ペタン等の諸將軍の作戰が聯合軍を統率して最後の勝利を贏たのである。各聯合國は之等諸將の意見を尊重して、忠實に之に從つて行動したのである。ある人は佛蘭西の領土で起つた戰爭であるから、佛蘭西の將軍が、聯合軍の總指揮官となつたのであると云つたが、この戰爭が假令獨逸國內に起つても、又は露國の領土內で起つたとしても、陸軍ならば必ず佛蘭西が聯合軍の主力となつたに相違ない。佛軍の地位は海軍に於ける英國海軍の地位と同樣であるから、どうしても佛軍が聯合軍の運命を双肩に擔はねばならぬのである。

又ヴエルサイユに於ける休戰條約に關する會議に於ても、佛軍の地位が外交上最も重要視されたのである。休戰條約の原案も佛蘭西語で書かれたもので、それを各國は自國語に飜譯したのである。佛蘭西語は外交文書に重きをなすが如く、戰場に於ては佛蘭西軍は聯合軍の主力である。

その他軍需品に於ても、例へば火藥、飛行器、大砲、機關砲の如きも佛軍最も多く有してゐた。

も自足自給主義を廢業して自由主義、卽ち、自由貿易政策を採る事となるであらう。

元來自足自給主義は實力を充實すると云ふ意味より觀れば、結構な事であるが、動やともすれば一國を孤立せしめ、軍閥は國防を名として、跋扈し、資本家等は經濟の獨立を名として保護政策を主張し、以て、各々其の私腹を肥やして、民衆を犧牲にするに到るものである。其の例は今度の獨逸である。米國にありても、この種の例に必ずしも漏るゝとは限らぬのである。或る經濟學者等は今度の戰爭は、益々一國の自給自足政策の必要を感ぜしむると云はるゝが、予輩は寧ろ之に反して今度の戰爭は一國自足自給主義の根本的誤謬を證するものであると云はざるを得ない。

偏狹なる愛國主義は一國を驅りて滅亡の淵に瀕せしめ、二十世紀の國際經濟社會に於ける自足自給政策は一國を擧げて好戰の鬼と化するものである。歐米各國ともに、自由貿易政策を本義として關稅は歲入のため若くは、特別產業保護のために課するに止めんとするは、故あるかなである。

一國が他の國々と經濟的に相賴り相輔くる處に文明のエフイセンシーが現はれ、またこの經濟的利害關係あるが故に、國際協和と云ふ事も成立するのである。

四

要之、國內に於ける改革は個人の集團なる社會の健全なる發達と其の幸福とを圖るために、個人の權利を平等に認めて、個人の自由發達を保障し更に個人が經濟生活を營むに當りて階級をなしつゝある事實を認めて、各階級調和、卽ち、社會調和の政策を採る處に存する。予輩は之を社會奉仕を眼目とせる社會調和と稱するのである。

固より國內の改革は、何處の國でもかくせねばならぬと云ふものではない。國々には、皆、事情があるのであるから、其れ等の事情を參酌せねばならぬ。政治的訓練の足らぬ國民には其れ相當の參酌を要するのであつて、只、世界民主主義を實現せんとせば、以上の如き標準を立てゝ、大體の政治的、社會的改革を行はねばならぬと云ふまでの事である

るが、一面に於ては怖ろしく理智と直觀に秀れてゐる。實に透徹した緻密な頭腦を有つてゐるのである。數學者で有名なポアンカレーやバスチール研究所の創設者パスチールの如きは一見この矛盾した樣な國民性を最もよく代表してゐるのである。又哲學者のベルグソンの如きは明かに佛蘭西ならでは生むことの出來ない天才である。あくまで科學的、理智的にして、その纖鋭なる理性は科學の微と精を盡さずんば已まぬと云ふ風であるが、一面幽婉なる美的感情がその哲學全系の主調となつてゐる。獨逸哲學者に見るが如き觀念哲學ではない。飽くまで科學に立脚してゐると共に、詩と想像の永遠界に我等を誘ふのである。

佛蘭西は氣候が穩和で、地味が膏腴で、山水の秀麗は歐洲第一の稱がある。かゝる環境の中に育つた佛蘭西人は人情に厚く、氣立が優しく、快活で、開け放しで仲々親切である。勇敢であるが平和を愛する國民であるから、世界に於て佛蘭西人程愛せられる民族はあるまいと思ふ。

この度の大戰に於て、佛蘭西は戰場に於て、聯合國の主腦であつた如く、平和となつても、依然世界文明の中心となることは疑を容れない。過去千年に亘つて燦然たる文化を造りたる佛蘭西民族の天才と精力は、この度の大戰に依つて更生し、戰後益〻獨特の文明を創造するであらう。

宇宙的自己の意義

野村隈畔

一 眞理

余は眞理に對する自分の新しい解釋として、『自由は自我の發展動向である』と云つてゐた。讀者は定めてこの解釋を訝かつたであらう。或る人

裝甲車も最初は英國に於て發明されたのであるが、これを更らに改良を加へて、威力を發揮せしめたのは、佛蘭西である。快速と攻撃力を以て獨軍を壓倒した、小型攻撃車の如きは、佛軍に依りて作られたものである。又佛軍の速射砲も精鋭無比を以つて名を得たのである。殊に有名なるヴエルダン要塞の攻防戰に於て潮の如く殺到せる獨逸の强襲部隊を『火の幕』で遮つて、之を粉碎したと云ふ七十五ミリ巨砲及十七吋の榴彈砲の如きは、實に佛軍の魂として誇つたのである。佛軍は軍隊及軍器の精鋭を以て作戰上聯合軍の主腦となつたのである。

講和談判は何處で行はれるか知らないが、多分ヴエルサイユであることは動かぬ說であらうと思ふ。ヴエルサイユ宮は、佛蘭西革命に於て既に有名なる宮殿であることは諸君の御承知の通りである。戰爭中屢〻聯合軍の參謀部となり作戰計畫が此所で遂行されたのである。又聯合國の大立物がこゝに會議を開いて外交の大綱を定めた。今回の休戰條約を決定したのもこゝである。要するに佛蘭西は戰場に於て講和會議に於て聯合國の中心である。

二

佛蘭西は歐洲に於て最も傳統的な國家で、その制度文物が仲々歷史的のものが多い。哲學、藝術、科學、政治、外交其他各方面に於て、世界文明の中心となつたのである。私共の勉學した巴里大學は歐洲最古の大學で、歐米近代の大學制度は多く巴里大學を模範としてゐるのである。希臘、羅馬の美術品其他の文物が今日佛蘭西に遷されてゐるものが澤山あつて、古代文明と近代文明が渾然として融合し、獨特の文化を創造してゐるのである。近世世界文明を闡かにせんとするには、その淵源となつた佛蘭西文明を研究せねばならぬ。殊に審美的て美術思想の豐かな國民であるから、藝術の叢淵として、世界の藝術家、文學者の渴仰の的となつてゐる。佛蘭西人程一般に美的感情に富んて藝術的なる國民はないのであるが、それと共にまとに理智に目覺めた科學的な國民てある。美術、音樂、文學を愛し、頗る夢幻的な空想的な情熱の國民てあ

め、それからライプニッツの分けたやうに『永恒的眞理と事實的眞理』といふものに分類し（若しかく分類し得るとせば）、そしてこれを理論的に說明するが眞の理解であるかも知れない。しかし余は今このやうな哲學的乃至論理的理解を求めようとして居るのではない。余の現下の世界情勢を根本的に支配してゐる創造力を摑まうとしてゐる。そして余はかゝる創造力を自證的に自由そのものであると信じ、自由は人類の生活乃至文化における形而上的乃至當爲的創造力であると考へてゐる。卽ち自由は眞の具體的眞理である。だから余は率直に「自由は自我の發展動向である」と言つたのである。これは又「眞理は自我の發展動向である」と云つても同じことだと思ふ。何故なれば眞理は余にとつては、一種の槪念ではなくて創造し發展する「力」であるから。かくして余は眞理と自由とを同一視して居る、眞理は自由の知的要求に過ぎない。けれども吾々は理解によるが故に「自由は自我の發展動向である」といひ得るのである。

自證的な自由を「自我の發展動向である」といふと、甚だ六ヶ敷くなる、卽ち自證的なものを理知的に解釋することであるから、却つて自由の意義を不明瞭にする傾きがある。更に言ひ換へると、吾々は自我とは何ぞや、自我の發展動向とは何ぞやといふ問ひに對する解答を、理解した後でなければ自由の意義が解らないといふことになる。然るに自我（これは「我れ」でも「自己」でも言葉は構はない）とか、自我の發展動向（これは創造でも當爲でも構はない）とかいふことに對して、古來徹底した解答が與へられてゐない。さうすると自由は結局解らないといふことになりはしまいか。しかし吾々はそれほど案ずることはないと思ふ。前に屢々言つたやうに、吾々は單に眞理に對する槪念的理解を目的として居るのでなく、刻々變轉しつゝある世界情勢の前に立つて、その發展方向を當爲的に決定する創造力を摑めばよいのである。言ひ換へれば、人類生活の意義及び方向を永遠に決定する創造力を具體的に內面的に把握して、それによつて現在及び將來における吾々の生活乃

はこれは眞理の解釋ではなくて自由の解釋であると思つたであらう。又或る人はこれは自我に對する解釋であると思つたであらう。成る程さうである。余は孰れをも否定しない。けれども亦孰れをも肯定しない。前にも屢々言つたやうに、眞理は決して容易に理解し得るものではないから。西洋人は機會をIamusfaced.な禿頭に比して居るが、丁度眞理もその如くで、前から捕へようとしても後から捉へようとしても、辷つて中々摑みにくいものである。そこに又眞理の眞理たる妙味があると思ふが、一般の人々にはこの禿頭の妙味が解らない、そこでつまり眞理といふものは解らないといふことになる。けれども確かと摑んで見れば、眞理は決して兩面を有するお化けでもなく、又禿頭のお爺さんでもなく、却つて若かい生々した、そして極めて愛らしいものであるかも知れない。

諸君！　吾々は二個の毬を交互に空中に上げて、片手でこれを操つること中々六ヶ敷い。しかし幼い女の子がよくこれを巧みに操つることは、吾々の目擊して居るところである。かの輕業師の如きは、五六個の毬（若しくは棒や皿の如き）をよく美事にお手玉にとつて、決して辷らしたり逸したりしないことは、亦何人も承知して居るところであらう。若しこゝに千古の大輕業師があるとせよ。彼れは幾千の眞理の玉をも美事に手玉にとつて、決して辷らすことはないであらう。そして彼れは意氣揚々として自己の神技を誇り、眞理の玉は決してお化けでもお爺さんでもない、又摑み難いものでも逸し易いものでもない。それは前からでも後からでも、右からでも左からでも、上からでも下からでも自由に摑むことは出來る。眞理の玉は面あり面なし、面あるにあらず、面なしにあらず、禿にして禿にあらず、非禿にして非禿にあらずと言ふであらう。

然り眞理は理解し易きにあらず、理解し難きにあらずである。理知によるが故に理解しがたく、自證によるが故に理解し易いのである。（かういふと余は甚だ大悟徹底したやうに聞えるが、實は余自身にも眞理の自證に閉口してゐる）。本當にすれば眞理とは何ぞやに對して先づ眞理の概念を定

うに、自由とは何ぞやは又自我とは何ぞやといふことであり、しかも自我とは何ぞやは卽ち眞理とは何ぞやといふことである。かくして自我は理解の根據であるから、自我によつて初めて吾々は自由の當爲的意義及び眞理の具體的價値を理解し得たといふことが出來る。そしてこの理解によつて吾々は、吾々の現在及び將來における生活乃至文化の意義及び方向を具體的に決定する當爲的創造力を、最も强烈に最も獨自的に把握することが出來る。解かり易く云へば、吾々の自證的な內面的自我によつて、生活の一切價値を自發的に創造することが出來るのである。そしてこゝに人間生活における無限の確信と無限の勇氣と、それに伴ふ無限の權威とが油然として湧いて來る。

諸君！　こゝに暫く沈思瞑目して內部の皷動に診觸せよ、震絃の僞らざるリズムに交響せよ、そこに神聖なる祈りと讃へとの祭壇があるであらう。

二　自己

然らば自我とは何であるか、余はこれをむづかしく理解しようとするのでなく、たゞ現代文化の意義及び方向を根本的に決定する爲めに、個人主義の文化史的意義を明かにする必要上から、その豫備的根據として理解しようとするのであるが、それにしても決してこれは易々たる問題ではない。吾々はこの問題に深入りする前に、先づ世界の人類が歷史上いかやうにこの自我を理解して來たかを、一寸考へて見たいと思ふ。これは自我はいかなるものであるか、又それを人類がいかに考へたかを歷史的に乃至事實的に知る便宜があると思ふ。しかし勿論これを精密に研究することは、余の今の目的でなく又到底不可能であるから、余は古來普通に自我を沒却するもの、謂はゞ無我と犧牲を主張するものと考へられた宗教において、いかやうに考へたかを簡單に理解しようと思ふのである。

眞理とは何ぞやといふことは、同時に自我とは何ぞやといふことである。この問題は人類あつて以來の永遠の問題であると思ふ。尤も古代の人類が眞理とか自我とかいふことを意識してゐたが、

至文化を當爲的に決定せんとして居るのである。この實際的なしかも形而上的な目的に對して、何も吾々は徹底した論理的解釋や概念的理解を廻避するものではないが、しかし目的が實踐的である丈け、吾々は根據の具體的確實と當爲の強烈な創造力とを要するのである。否らざれば吾々の形而上的要求は何の得るところもなくなる。從つて余は「自由は自我の發展動向である」といふ余の解釋に對して、その論理的徹底を求むるよりも、むしろそれが人類の生活意義及び方向を決定する如何程の具體的確實性をもつてゐるかを、確めれば充分であると思ふ。

勿論これが爲めに吾々は、自我の發展動向に對する論理的理解を免れたわけではない。或はそれを功利的若しくは實用的に理解しても差支へないといふことでは猶更ない。吾々は自我の具體的な發展動向たる自由をもつて、生活乃至文化の意義及び方向を當爲的に決定せんとするには、自我及び自我の發展動向といふことに對して相當の哲學的理解を必要とする。もしこの理解がなければ吾々の生活方向を指導すること出來ない。けれどもかゝる理解の背後には必ず自證的根據の潛在することを忘れてはいけない。卽ち吾々はいかに論理的に徹底的に理解したといつても、若しそれを自證的に體驗し得なかつたならば、何等の力ともならないであらう。理解は必ず體驗を必要とする、否理解は體驗の必然的發展でなければならぬ。この意義において余は、自我も自我の發展動向も自證的であると思ふ。自證的であるといふことにおいて、自我も自由も眞理も區別すること出來ないが、しかし吾々が自我（及びその發展動向）を徹底的に理解することによつて、眞に自由從つて眞理といふことを理解し得ると思ふ。だから余の哲學的考察においては、自我そのものが理解の唯一の根據となるのみならず、價値及び當爲の具體的根據でもある（これは猶詳論しないと解らない）。こゝに眞理とは何ぞや、若しくは自由とは何ぞやといふことは、自我とは何ぞやといふことに歸着する。言ひ換へれば、前に云つたやうに眞理とは何ぞやは卽ち自由とは何ぞやといふことであるや

的乃至實踐的に理解されてゐたことは、彼の言によつて立證することが出來る。二つの意義といふのは卽ち當爲と價値である。言ひ換へれば、自我それ自身の當爲と價値である。卽ち「我れは眞理なりといふことは、「我れは當爲であり價値である」といふことである。自我は直ちにそのまゝ當爲であり價値であるが故に、眞理たることが出來る、眞理は當爲と價値を外にして何者でもない。かくいふと甚だむつかしいが、基督の自證的乃至實踐的理解は斯うである。彼れ曰く「人に爲られむと欲ふことは亦その如く人に爲せ」と。これ卽ち「己れの欲する所亦人に施せ」といふことである。彼れ又弟子に云つて曰く、「爾の如く爾の隣りを愛せよ」と。これ單に前の意味を云ひ換へたに過ぎない。何故に己れの欲ふところを人に爲し、己れの如く人を愛すべきか、これ卽ち「己れ」（我れ、自我）はそれ自身當爲であるからである。こゝに當爲といふことは純粹の自己意欲であるといふ外に、何とも解釋のしようがないが、（これは後にだん〳〵說く）たゞその當爲の發展は「自己中心」であるといふことを固く牢記して貰ひたい。だから「己の欲ふところ」「己の欲せざるところ」「己れの如く」といふ自己中心的な言葉が必ず前に出るのである。自己中心卽ち自律といふことは當爲の本性である。自我は徹頭徹尾、自己中心であるが故に當爲である。

こゝで一寸付け加へておくが、孔子の思想が全く自己中心的であつたといふことである。これは實に面白いことである。曾子が「孔子の道は忠恕のみ」と觀破したが、忠恕といふことは卽ち自己を中心にするといふことである。卽ち己れに信實なるこれ忠で、己れを推して人に及ぼすこれ恕である。だから孔子は「己れの欲せざる所これを人に施すこと勿れ」とか、「之れを己れに施して願はざれば亦人に施すこと勿れ」と、繰返して言つてゐる。これは單に同情とか思ひ遣りとか深切とかいふことではない、眞の自己中心が道德の根本たることを示したものである。言ひ換へれば、自我はそれ自身當爲であるといふことが、忠恕の根據になるのである。彼れの「仁」といひ、「仁義」とい

どうかといふことは疑問であるが、彼等が意識するとしないとは余の問ふところでない。何故ならこの問題はその本質において形而上的當爲性のものであるから、最初の人類がこれを明かに意識しないに拘らず、彼等の思索乃至生活を悉く根本より創造して來たことは事實であるからである。言ひ換へれば、この問題に對する自發的要求があつて初めて、人類の一切生活がその具體的實現（即ち解答）として展開されたものと見るべきで、從つて一切生活の根柢にはこの問題の必然的潛在を豫想して差支へない、否豫想せざるを得ないからである。この意味において世界の人類がその生を享けて以來、眞理とは何ぞや自我とは何ぞやてふ問題に對して、思索し努力し奮闘して來たことは明かな事實である。そこに人類生活の永遠に亘る史的生命と必然的價値とが存在すると思ふ。若し前者を哲學的問題といふならば、後者を宗教的問題といつてもよからう。しかしこの二つの問題は同時に同一の問題である。前者の實現的解答は同時に後者の實現的解答でなければならぬ。余はこの問題に對する最も徹底した唯一の解答として、基督の言を引用しようと思ふ。それは何人も熱狂的に摸倣する「我れは眞理なり」といふ福音書における言である。

「我れは眞理なり」、基督はこれをどういふ意味で言つたのか、解答であるか、主張であるか、そんなことはどうでもよい。しかし吾々の今の問題の立場から考へて見ると、實に全完なそして面白い自證的解答であると思ふ。即ちこの偉大なる言葉は二つの問題に對して全一的に解答して居る。「我れは眞理なり」によつて自我の何たるかを明かにすると同時に、眞理の何たるかを明かにした。言ひ換へれば、自我の何たるかは同時にそのまゝ眞理の何たるかである。だから「我れは眞理なり」と自證的に言ひ得たのである。「我れは眞理なり」は同時に「眞理は我れなり」である。基督がこの自己の自證的解答をいかに理解したかは、余の深く詮議するところでないが、余はこの言葉の内に尠くとも二つの重要な意義が包含されて居ると思ふ。そしてこの二つの意義は亦基督によつて自證

よつて規定される、卽ち自我は當爲なるが故に自己の價値によつて客觀の價値を規定する。當爲と價値とは物の表裏の如く離るべからざるものである。當爲が集注的求心的であるとすれば、價値は解放的遠心的である。

余は基督の自我論をむづかしく理解しようとするのではない。たゞ彼れがいかに自我を肯定したかを見たまでゞある。彼れが他にいかなる言動があるにせよ、決して自己を否定するやうな無我論者、或は犧牲主義者ではなく、却つて自己を最大限に肯定した强烈な自己肯定者であつたことは疑ふ餘地はない。そして「我れは眞理なり」といふ直覺的叫びの中に、自我自身が當爲であると同時に價値であることの二つの無限意義が包含されてゐたことは、彼れの他の言葉や動作によつてそれを裏付けたことで解かる。だから基督はワイルドが評したやうに、地球上における唯一の、人類歷史上における最大の個人主義者であるといふことに、余は決して躊躇しないものである。

三 Atman

然らば佛敎はどうであるか、佛敎はいかやうに自我を肯定してゐるものであるか。吾々は佛敎といへば、直ちに悲觀的な亡國的なそして聞くからに抹香臭い敎へであると想像するが、そは果して抹香臭いほど自我を否定するものであらうか。或る人はいふであらう、佛敎は初めから無我の敎へである、自我を肯定しないことは解かり切つてゐると、果してさうであるか。成る程、佛敎では「諸行無常、諸法無我、寂滅爲樂」など云つて、非活動的厭世的で誠に現代的な敎へでないやうである。しかしこれが佛敎の根本義であらうか、否釋迦世尊の眞意であらうか。印度の聖者瞿曇(Gautama)はキリストの解したやうな「自己」を理解し得なかつたであらうか。

吾々は我れを通常「が」といつて非常に厭ふべき穢はしいものゝやうに思つてゐる。そして直ちに「我慾」と聯想して、我(が)は慾(よく)のかたまりである、罪惡の凝結であると考へるのであるが、そして勿論これは佛敎思想の影響であること確かであるが、しかし佛敎の根本義がこゝに在るとは

ひ「禮樂」といひ皆悉く自己に集注して來るものである。當爲の發展は求心的である。孟子は面白いことを言つてゐる、「欲する之れ善なり」と、これを言ひ換へれば、「自己意欲即ちこれ當爲なり」といふことである。

然らば自我は價値であるとは何ういふ意味であるか、基督はかう言つてゐる、「人もし生命を失はゞ全宇宙を得るとも何の益かあらむや」と。諸君！これは實に雄大壯嚴な言葉ではないか、これが吾々人間の言葉であると思ふとき、吾々は眞に自己の無限大を感せずにゐられない。勿論彼れ基督はいかなる言葉で叫んだか余は知らない。しかしそれを吾々の言葉に譯してすら、猶その意氣の雄大と無限の權威とを失ふことはない。況して彼れ自身の心術と態度とにおいてをやである。諸君！人類がこの地球に生存して以來、かくも自我の價値を莊嚴に而かも理想的に表現したものが他にあらうか。吾々の言葉はいかに有限であつても猶無限大の實在を象徴することが出來るではないか。

生命といふのは即ち自己の生命である、否自己そのものである。「人もし自己を失はゞ全宇宙を得るとも何の益かあらむや」である。(この「生命」を「自己」に言ひ換へた卓拔な青年哲學者がわが日本にゐる。彼れは嘗てオイケン哲學を猛烈に批難して思想界を警倒せしめた深刻な思想家である。そして彼れは「基督の生命といふ言葉を自己といふ言葉に改めて初めて、吾々の要求を端的にそして深刻に言ひ現はすことが出來ると叫んだ。余はこれに贊成する、そして基督の眞意はやはりこの「自己」にあつたと思ふ。)諸君、基督は價値といふむづかしい言葉を使はずに、自己の價値の永遠にして無限なるを言ひ表した。何故なら全宇宙といへども自己に匹敵すること出來ないからである。即ち自己は全宇宙よりも偉大なものである、全宇宙滅すといへども猶滅びざるものはこの自己である。永遠に滅びざるものにして初めて價値がある。言ひ換へれば、自我はそれ自身價値なるが故に全宇宙よりも偉大であり、全宇宙よりも永遠であるしかも全宇宙における價値の差別は自我の價値に

チャンドギヤに「我れはブラーマンなり」など言つてゐる)。

これは「自己」(Self)に對する偉大なる觀察であると思ふ。吾々は實にこの自己であると同時に、宇宙の森羅萬象は亦この自己の顯現である。自己を離れて何者も存在することは出來ない。從つて自己に匹敵する何等の實在もあることない。自己は唯一のサトヤ(Satya)である。この自己を摑むものは卽ち眞の知識(直覺)であつて、これを逸するものは無明である。而してこの自己は靜止的虛無的なものでなく無限の創造力であることは、チャンドギヤにおける說明によつて明かである、卽ちそは「一切を作し、一切を欲し、一切を包括するものである。言ひ換へれば、創造作用であり持續作用であり、乃至破壞作用である。これらの作用はそれ自身當爲であると同時に價値である自己にあらざれば、決して爲し得ないところの働きである。俗間では後に是等の作用を神聖視し、遂に擬神化してブラーマ(生成の神)とヴシヌ(維持の神)とシヴ(破壞の神)とは三位一體であるといふやうな、變な信仰を成すに至つたが、兎に角、アートマンは生成發展の宇宙的自己であることは疑ひない。

印度民族はこのやうな澄澈たる信仰と深遠なる哲學とを有する種族であつた。この種族の中に生れた彼れ釋迦牟尼はいかに賢明であると雖も、吠陀以來發達したこの偉大なる思想を否定することは出來なかつたであらう。彼れいかに大膽勇猛であるにしても、ウパニシャドにおけるアートマン卽ち自己卽ち眞我を否定することは出來なかつてあらう。然り彼れは決して自己(我)の否定者ではなかつた、否却つて熱烈な自己肯定者であつたむしろ大膽な主我論者であつた、無常無我主義者ではなくて常住有我主義者であつた。釋迦はアートマンを「如來」と見、「佛性」と見た。言ひ換へれば、自己若しくは我れは如來であり、佛性であると見たのである。然らば彼れは何故に轉法輪の初期において、盛んに苦を說き無常無我を主張したが。これ彼れはかの尼乾子(ニルグランタ)學派や順世學派等の似而非論法を折伏せんと欲したからである。是等

余はどうしても考へられない。余は釋迦の無我說が何に基因するかを、一寸遡つて明かにしておかうと思ふ。

一體印度アーリヤ民族は初めから厭世的な不活潑な無我論者でなくて、却つて自己を極度に肯定した快活な樂天的な「我れ」の主張者であつたと思ふ。彼等がいかに宇宙を考察し自我を考へたかといふことは、彼等の思想の結晶たるウパニシャドの哲學によつて知ることが出來ると思ふが、それは決して靜止的のものでも厭世的なものでも、又無我的のものでもない、却つてそれと正反對であることは歷々として證明することが出來る。彼等の思索乃至生活は實に「我れとは何ぞや」てふ形而上的問題をもつて始まつてゐる。そして彼等は自證的に「我れはそれなり」（ブリハドアーラヌヤカ）と云つてゐる、「それ」とは卽ちアートマン（Atman）である。勿論考察の銳敏な彼等は、その本性上からマーヤー（無明若しくは現象）を斥けてヴドヤー（審知）を重んじたことは非常なものであるが、しかしそれが爲めに決してアートマンの本性を見失ふことはなかつた。

アートマンとは主觀的にいへば吾々の「自己」であるが、客觀的に云へば宇宙の本體である。卽ち彼等は吾々の內心における「我れ」を擴充して、宇宙的自己卽ち梵の觀念に達した。然らば「我れ」とは何であるか、アートマンは元來呼吸とか精氣とかいふ意味であるが、現代の言葉でいへば生命である。卽ち「我れ」は生命であり、生命はアートマンである。「それ」とは卽ち生命である。Chāndogyaupaniṣhad にかう言つてゐる。「これ我がアートマンにして心の中にあり、米粒よりも小に、麥粒よりも小に、胡麻粒よりも小に、罌粟粒よりも小なり。これ我がアートマンにして心の中にあり、大地よりも大に、大空よりも大に、天よりも大に、多くの世界よりも大なり。一切をなし、一切を欲し、一切を嗅ぎ、一切を味ひ、一切宇宙を包括し、言葉なく叫びなし。是れわがアートマンにして心の內にあり、これわがブラーマにして、この世を去りて後には、それに行きそれとなるべし」（ブラーマ Brahma はアートマンと同義に解してよい。

の時に小兒また饑渇すと雖も、先きに毒氣を聞くが故に來らず。母兒に語りて曰く、「汝藥を服するが故に毒をもつて乳に塗る、汝藥既に消し終れば我れも亦毒を洗ひ去る、汝卽ち來りて飲むべし、乳を飲むとも苦きことなし」と。その兒聞き已りて漸々に還りて飲むが如し。善男子、如來も亦爾なり、一切を度せんが爲めに諸の衆生に無我の法を修するを教ふ。是の如く修し已れば永く我が心を斷じて涅槃に入る。世間の諸の妄見を除くが爲めの故に、世間に出過するの法を示現するが故に、又世間の計我虛妄にして眞實に非ざるを示すが故に、無我法を修して身を清淨にするが故なり。たとへば女人その子の爲めに苦味をもつて乳に塗るが如し。如來も亦爾なり、空を修するが爲めに說きて「諸法悉く我あることなし」といふ。彼の女人乳を洗淨し已つて而してその子を喚び、還つて飲ましむと欲するが如く如來も亦爾なり。如來藏を說く、この故に比丘は怖れを生ずべからず。彼の小兒の母の喚ぶを聞き已りて漸く還つて乳を飲むが如く、比丘も亦爾なり。自ら如來秘藏の有らざることを得ざるを分別すべきなり』と諄々として敎へた。すると迦葉のこれに對する反駁は、實に猛烈を極めて面白い。

『世尊、實は我あることなし、何を以ての故に、嬰兒生る時知曉する所なければなり。若し我あらば卽ち生るゝの日尋いて知ることあるべし。是の義をもつての故に定んて我なきを知る。若し定んて我あらば生を受けて已來終沒なかるべし。若し一切皆佛性の常住なる有らしめば、壞相なかるべし。若し壞相なければ何故に剎利、婆羅門、毗舍、首陀及び旃陀羅、畜生の差別あらんや。今業緣種々にして同からず、諸趣各々異るを見る、若し定んで我あらば一切衆生に勝負なかるべし。是の義をもつての故に定んて知んぬ、佛性これ常法にあらずと。若し佛性定んでこれ常と言はゞ、何に緣りてか復殺、盜、淫、兩舌、惡口、妄言、綺語、貪恚、邪見なりと說く。若し我性常ならば何が故に酒を飲んで荒醉迷亂する。若し我性常ならば盲は色を見るべからず、聾は聲をきくべからず、瘂はよく語るべく拘躄よく行かん。若し我性常ならば火坑、

の學派は婆羅門の末期に於て盛んに利己主義や物質的快樂主義を主張して、アートマンの眞意を誤り人心を惑亂して、吠陀以來の偉大なる信仰を滅却せんとしたから、釋尊は猛然立つて是等の主張を斥け、以て眞我の光明を永遠に闡明せんと欲したのである。殊に尼乾子學派に對する彼れの反感は非常なものであつたらしい。彼れは屢々「尼乾の徒」といふ言葉を使つて、彼等を攻撃してゐる。だから釋尊の無我論は決して彼れの眞意ではなく、たゞ眞我を闡明するための一の方便であつたことは明かである。そして彼れは明かにこのことを彼れの末期において自白してゐる。

四 佛性

然らば釋尊の所謂「我」とはいかなるものであるか、彼れはいかにそれを闡明し且つ主張したか、彼れが從來の說たる無我論無常論苦痛觀に對して、いかにその正反對の有我論常住論若しくは常樂觀を闡明したか、これ吾々の最も興味ある研究である。釋尊はかの浩瀚なる大般涅槃經（Mahāparinirvāṇa）において佛性を反覆說明して居るが、殊にその中の『如來性品』において稍詳しく「我」を闡明してゐる。今釋尊とその弟子迦葉（かせふ）との問答を少しく引用して見よう。迦葉疑心をもつて『世尊、三十五有（うぢ）（諸法萬有を指す）に我ありやと否や』と問ふと、釋迦はこれに答へて、

『善男子！　我とは卽ちこれ如來藏の義、一切の衆生は悉く佛性を有す、卽ちこれ我の義なり。是の如きの我の義は本より已來、常に無量の煩惱に覆はる、この故に衆生は見ることを得る能はず。（中略）たとへば女人の一子を生育するに嬰孩にして病を得ば、女慾惱して良醫を求めむ。良醫既に至りて酥、乳、石蜜の三種の藥を合し、これを與へて服せしむ。因つて女人に告げて「兒藥を服し已らば暫く乳を與ふること勿れ、藥の消し終るを待つて然る後これを與へよ」といふ。この時女人卽ち苦味を用ゐてその乳に塗り、兒に語りて曰く、「我が乳に毒を塗れり、復た觸るべからず」と、その兒渴乏して母の乳を得んと欲するも、乳の毒氣を聞きて遠くに捨て去る。その藥消（化）するに至り母は乳を洗ひ、子を喚びて之を與へんとす。是

の義）を成就することを得ば、乃ち證知せん。この因緣をもつてよく殺すものなし』

かくの如く二人の回答は頗る面白いものであるが、これを永く引用することは余の今の目的ではないから、余は『四倒品』における言を引いて結論にしよう。曰く『無我に我想、我に無我想これを顚倒と名く。世間の人も亦我ありと說き、佛法の中にも亦我ありと說く。世間の人有我を說くと雖も佛性あることなし、これ卽ち名けて無我中において我想を生ずとなす、これを顚倒と名く。佛法有は則ち是れ佛性なり、世間の人佛法無我と說く、これを我の中に無我想を生ずと名く。若し佛法必定じて無我なり、是の故に如來は諸の弟子に敎して無我を修習せしむと言はゞ、名けて顚倒と爲す』と、是れに因つて之を觀れば、釋尊の眞意は決して無常無我にあらずして常住有我の眞理を闡明するにあつたことは、最早や疑ふ餘地はない。言ひ換へれば、佛法無我にあらずして却つて佛法有我であること、涅槃經における釋迦の言によつて明かである。けれども眞我の眞性は容易に理解することと出來ない、迦葉の如き知慧第一の弟子と雖も尙外道の妄論に惑亂されてゐる。況んや凡人をやである。當時我に關して非常な爭論のあつたことは事實であるが、佛敎卽ち釋尊の說に對しても或は無我論なりといひ、或は無常論なりと云つて大に非難のあつたことも明かである。しかし「我性は常住にして變易あることなし、頗彌山は崩倒すと雖も如來豈同じく壞せんや」（鳥喩品）て、全宇宙滅すといへども永遠に滅びざるものは吾が內心の「自己」である。佛敎に於ける八萬四千の法門は畢竟じて自我の註釋に過ぎない。かくして余は人類における大なる宗敎は、絕對に自我を肯定するものであることを知つた。

諸君！「一切の衆生悉く佛性を有す」とは、卽ち一切の衆生悉く如來藏を有してあり、一切の衆生悉く眞我を有してある。從つて一切の衆生は悉く內心に當爲と價値を有すてある。諸君この見地に立つて人類文化の未來の方向を透見せよ、恰もContingence の立場に立つて現下の並界情勢を大觀すると時と同じく、そこに何等問題の凝結はな

大水、毒藥、刀劍、惡人、禽獸を避くべからず。若し我常ならば本更ふる所の事忘失すべからず、若し忘失せずば何に緣りてか、我れ曾て何れの處にか是の人を見ると言はんや。若し我常ならば則ち老少盛衰ありて往事を憶念すべからず。若し我常ならば何れの處にか止住する、涕唾、青、黃、赤、白、諸色の中にありとなすや。若し我常ならば身中に遍ずること(恰も)胡麻油の間空處なきが如くなるべし。若し身を斷ずる時は我も亦斷ずべし』と。

迦葉の反駁は到底稚氣を脫せずと雖も、頗る痛快で又峻烈である。けれどもこれに對する釋尊の解答は又實に巧妙を極めたものである。今その一部を引用すると斯うである。

『善男子たとへば雪山に一味藥あり、名けて樂味といふ。その味極めて甜し。深叢の下に在りて人のよく見ることなし。(併し)人ありて香を聞き卽ちその地に是の藥あるべきを知る。過去世の中に轉輪王ありて彼の雪山において、在在所所に木筒を造作して以てこの藥に接す。是の藥熟する時地より流出して木筒の中に集る、その味眞正なり。王既に沒し終りて後その藥或は酢、或は鹹、或は甜、或は苦、或は辛、或は淡、是の如きの一味その流處に隨つて種々異ることあり。この藥の眞味は停留して山に在り、猶し滿月の如し。凡人の薄福以て掘鑿して苦乃に功を加ふるに至ると雖も、而かも得ること能はず。復聖王ありて世に出現し福因緣をもつて卽ちこの藥の眞性の味を得るが如し。善男子、如來の秘藏その味も亦爾なり。諸の煩惱の叢林に覆はれて無明の衆生見ることを得る能はず。一味とはたとへば佛性の如し。煩惱を以ての故に種々の味ひを出す。所謂地獄、畜生、餓鬼、天人、男女、非男非女、刹利、婆羅門、毗舍首陀なり。善男子、佛性は雄猛にして毀壞することがたし。故によく殺害するものあることなし。若し殺するものあらば卽ち佛性を斷ぜん、是の如きの佛性は終に斷ずべからず。性もし斷ずべくばこの處あることなし。我性の如きは卽ちこれ如來秘密の藏なり、是の如きの秘藏は一切のよく毀壞燒滅することなし。壞すべからずと雖も然かも見るべからず、若し阿耨多羅三藐三菩提(さとり

て米國の如く建國以來共和の精神を以て滿され純然たる民選に依りて大統領を選出する共和國あり。然るに佛國の如きは久しく專政國家の下に統一せられたる國家思想が民主思想に依りて政治的に指導せらるゝ所にして官僚式共和政治なり。斯かる有樣なるを以て譬へ我國に民主思想が侵入したればとて米國或は佛國の如き共和國となるの怖れも無く、露國の如く不統一なる虛無的國家となるものに非ず、然るに一部有識者中には此の思想の漸次我國に勢力を得る有樣を目して慷慨悲憤し、之を剪滅せんと欲するもの無きに非ず。然れども余をして忌憚なく所信を言はしむれば我國は先帝の遺德により立憲君主國となりたる以上、之れが有終の美をなさんと欲せば此の制度の根源たる民主思想を國民に普及し、以て眞の立憲政治の妙味を味はざる可からず。此の故に民主思想の普及は吝すべきものに非ずして、寧ろ慶すべきものたるや言を待たざるなり。

一　民主主義とは何ぞや

然らば民主主義とは如何なるものなるやと言ふに、萬事國民の自覺に據りて喚起せられたる輿論に從つて、處理する主義を意味するものなり、而して此の意義たる單に政治的のものに極限せらるべきものに非ず、實に吾人の社會生活の總てに於て實現せらるべきものなり。古來如何なる國家も或る意味に於ては輿論の力に賴りて支配せられたるものなりと言ふことを得べし、然れども其の輿論たるや國家全體のものに非ずして、國家內の一小團體或は王の重臣數名の輿論によりて支配せられたるに過ぎず。今古代に遡つて原始時代に於ける民族的團體の場合を考ふるに、酋長は有事の時に當つては部族を一處に召集し、部族全體の意向を問ひて事を決したる實例少からず、之れ實に民主的精神の發露せるものなるが、之れを以て現代民主主義と同一なるものと速斷すべきものに非ず。然れども古代にありては種々なる問題が斯る會合によつて討論せられ文藝、美術、科學の如きものは、斯かる會合に於ける論難批評によりて進步發達せると同時に、他方に於て國民全體を一般に敎育したる功蹟に至つては沒すべからざるものあ

いてあらう。之を要するは、自我は永遠に滅びざる創造力である、人類文化の永遠の發展における源泉であると同時に、その潮流の動向である。そこに法則にあらず理想にあらざる無限の Contingence あるが故に、これを如來藏(Tathagata garbha)といふのである。卽ち藏といふのは無限の創造力を包含して居るからである。自我は自發的創造なるが故に「如來」といふ、如來とは流動の意である故に「來るが如し」と譯す、決して靜的寂滅的な實在ではない、Im Anfang war die Tat この Tat こそは自我である、卽ち宇宙的自己である。然らば自己卽ち眞我とは何であるか、自我はいかにしてそれ自身に當爲と價値とを有し得るか、自由卽ち Contingence は何故に自我の發展動向であるか、これを明かにして初めて吾々は、個人主義乃至民本主義の文化史的意義を理解し得るであらう。(つゞく)

民主論の根底

岡見愼二

抑々民主主義なるものは現代世界を風靡する一大思潮にして此の大勢を迎ふる國家は隆盛に赴き、之に逆ふ國家は衰運に向ふの觀なきに非ず。然れども各國各々特有の國民性を有し其の風俗習慣傳統等を異にせるを以て同一なる民主思想も甲國に入つては立憲君主制となり、乙國に入りては共和制となりて現れ、一律を以て論ずべからず。卽ち具體的に政體となりて現はるゝ場合には、國民性に適應せる政體となるものなり。例へば英國の如きは全國民の合意に據りて、世襲的主權者が今猶ほ英國皇帝として承認せられ、種々なる權利を保留し所謂立憲君主國として現存し、之に反し

し、自由討論に附するにあり。斯くて相互に論難攻撃して其の極に達せば論者の意見が相互に疏通して密接なる關係を有し、自然と組織せられて統一の實を擧ぐることを得べし。例令ば今我國に於て食料問題起りたりとせんに、吾人の注意は此の問題に集中せられ各種の意見は世に發表せられ甲論乙駁極り無きが如きも、其の極に達する時は、是等の意見は相互に關連して密接なる關係を生じ遂に各種の意見が組織せられ、茲に公的意識又は輿論と稱するものを形成するに至る。

然れども吾人は社會的生活の結果として團體的意識を得すると同時に、個人的意識を有するが故に、兩意識は常に互に影響感化して已む時なく、遂に各自の意見の差異なるものは主とし各自の見解の相異に歸着するものなり。今輿論の組織せらるゝ道程を表を以て示せば次の如し。

（一）注意（事件に關する公衆の注意の喚起）
（二）意見の發表
（三）自由の討論
（四）各種の意見の相互的感化と相互的連絡の發生
（五）輿論の構成

然れども各自の意見を糾合組織して此に一輿論を構成せしむるには敏腕なる指導者の必要あり、之れ實に政治界に於て偉大なる政治家を要する所以なり。惟ふに輿論なるものは隱然天下を覆す程の權威を有するものなるが事の大小輕重を問はず總べて直接輿論に依りて決せらるゝものなりと過信すべきものに非ず。輿論なるものは事件に對する大方針を定むるには、充分なる潛勢力を有するものなれども、其の實行方法の細目取捨等に至ては、常に專門家卽ち公衆の意見を代表する、政治家等に據つて行るゝものなり。

此に於てか政治に關し、政治家中に自由競爭盛に行はれ、適者を適所に置くの結果を生じ、遂に專門政治家は勢ひ素人政治家を政界より驅逐し去るを常とす。故に彼等專門的政治家にして惡德を行ふ場合には、公衆は宜しく輿論の力に依賴し制裁を加へ以て彼等の智育、德育を向上せしむるの外良策なし。而して此の實行方法として一般國民

り、例へば希臘古代のアゼンスの社會狀態は遺憾なく此の事實を證明するものなり。

蓋し太古に於ける斯る制度及び風俗習慣の如きも決して歷史的に發達したるものに非ずして、寧ろ一社會相傳、父子相傳の傳統的制度なり、而して是等傳統の多くは神聖視せられたるものにして、又例令神聖せられざるまでも善良にし便宜なるものとして墨守せられたるものなり。

古代にありては交通機關未だ發達せず爲めに輿論なるものは地方的にして、一國家内に於ても一地方の輿論に對し他地方は何等聞知することなき狀態なりき。然るに人類の智識が次第に啓發せらるゝに從ひ、交通機關も漸次に改良せられ、一地方の意見は容易に他地方に傳達せられ、相互に影響して一國内の輿論の範圍は漸次擴大せらるゝに至れり。特に最近六十年間に於ける交通機關の進歩は驚嘆すべきものにして數千哩の長距離の通信も近々數時間を要すれば足るの狀態となり、斯くして一國の輿論の如きも時々他國民の意見の爲めに感化影響せらるゝに至れり。

二　輿論とは何ぞや

然らば輿論とは如何なるものなりやと言ふに此の問題を考究するに先ち社會意志と個人意志との關係を詳かにせざる可からず。世人往々個人意志と社會意志とを區別して考ふる者なきに非ざるも兩者の關係は斯く判然と區別し得るものに非ず。何となれば各自の有する個人意志が社會的に組織せられて社會意志となりたるものなれば社會意志の一部として個人意志なるものあるなり、故に社會意志と個人意志とは同一なるものに非ざるも、全然分離すること能はざるものなるや明白なり。此故のに吾人若し社會意志を研究せんと欲せば普通の心理學者の如く狹隘なる範圍の研究を廢し宜しく其の範圍を擴張して社會内の各種機關の相互的關係に着眼せざる可からず。

次に社會意志の統一と云ふ事は社會を組織するに當り重要なる問題なるが是れ決して社會内の各人をして同一問題に對し同一なる意見を有せしむる必要なし。然れ雖も社會意志の統一に最も必要なる要件は各種の異說をして遺憾なく一般に照會

を論ずるの傾向なきに非ず、然れども兩者の間には判然たる分界の存するものなれば、暫く其の說明を試みんと欲するなり。抑々輿論なるものは既述の如く一定期間に於て眞面目なる注意と討論とに依りて建設せられたる確固不拔の意見にして、一時的の利害關係上より論及せる演說や無責任なる新聞雜誌の意見及び流行式著作の如きものとは全く其選を異にするものなり、然らば通俗的印象とは如何なるものなりやと云ふに其の議論たるや鍛鍊陶冶せられたるものに非ず、議論淺薄泥辨にして變化し易く決して信賴するに足らざるものなり。

論者或曰く輿論なるものは團體內の意見中平均數を以て顯はされたるものなりと、然れども是れ大なる誤謬なりと言はざる可からず、何となれば輿論なるものは種々なる意見が關連して構成せられたるものにして單純なる平均數を以て顯し得るものに非ず。若し平均數說にして正當なりとすれば、討論者の能力は討論數の平均數を以て計算し得るが如き不合理に到達し、到底吾人を滿足せしむること能はざらしむるを以てなり。

五　輿論の種類

既述の如く輿論なるものは鞏固たる團體的意見なるが其の內に自然から異なれる輿論あり、今吾人は便宜上之を大別して一般的輿論及び特種的輿論の二種に分つ。

一般的輿論とは一社會內に於ける各種團體の輿論の大部分、及び社會全體より見たる輿論等是に屬す、卽ち家庭、學校、俱樂部、組合等各種團體の輿論及び一國一社會の全體的輿論例令ば獨逸帝國の軍國主義、佛國民の國家に對する理想、或は英國の自由主義米國に於ける各州統一に關する國民の理想又は宗敎、敎育、商業、工業、農業、其他の風俗習慣に對する團體的理想の如き此の內に含まるゝものなり。

然るに特種的輿論は之に反し特種專門家間に生ずる輿論にして例令ば法律家、銀行家、理學者、政治家、軍人、役人、石工、大工等種々なる專門家、內の輿論なり。而して是等團體に屬する者は自己の屬する特種團體の意見に賴つて事に對する

の道德心を奮起せしむる抑事件の眞相を公表して彼等の惡德行爲を天下に曝露せざるべからず。之れ實に國民の注意を此の點に集中せしめ、自然的活動力を發せしむる唯一良法なり。例へば市政改良團、社會政策學會、結核豫防同盟、禁酒會の如き私的團體を通して、政治家の惡德矯正に盡力し以て國民を共鳴せしめ、輿論を喚起せしむることは、政治家の精神を向上せしむる一途たるや智者を待ずして明かなり。

三　小數蔑見の必要

顧ふに輿論に從つて事を決するに當り、小數反對論者は時々最大多數の爲めに壓迫せらるゝこと少からず。然れども如何なる點より見るも輿論の構成には小數反對論者の必要あり、此の反對論者あるが爲め輿論は益々鍊磨せられ鞏固となることを得るなり。且つ最大多數の最大幸福の爲めに小數者の幸福を犧牲とすることは必ずしも常に正當なるものに非ず。何となれば如何に最大多數なればとて、小數者の正當なる利益を尊重し保護する必要上彼等の利益を犧牲にするの義務を有するものなり。例へば此に一家十名の大家庭ありとせんに其の內七名は天下の名士と接解して直覺的に智德を增進することを得たり、然るに他の三名は病氣其の他の事故の爲め其の利益に浴すること能はざりしとせんに、此の場合に於て小數者は最大多數の利益の爲めに、彼等の利益を放棄せざる可からざるかと言ふに、斯かる場合に小數者と雖も個人の智德を增進する事は、個人的方面及び社會的方面より觀るも必要缺く可からざるものなれば、小數者たりと雖も斯かる場合にありては、彼等の利益保護を要求することは道德上正當なる權利なり。且つ小數反對論中には現代を超越せる名論卓說少からざりし事は古今の歷史を通じて動す可からざる事實なり。且つ小數論なるものは現代の輿論に滿足せざる聲にして、是れ實に將來の文明に偉大なる貢獻をなし、益々吾人の思想を向上せしむる唯一衝動劑たり文明の母なれば之を尊重して圓滿なる發達をなさしめざるべからず。

四　輿論と通俗印象との差異

世人往々輿論と印象との間の區別を無視して事

元來貴人、富豪學者等の生活趣味及び思想は一般國民の同情より遠ざかり行くの傾向あり、是れが爲め彼等は時々孤獨に陷り、或は精神の涸渇に困しむこと無きに非ず。例令ば此に一富豪ありと假定せんに彼等は一般世人との交際を避け、金銀を散じて富者と交り時に豪遊に數萬金を費して悔ゆるの色なく、斯くして自分から進んで一般國民の生活より遠からん事を企圖するの傾向あり。且つ彼等の不德行爲は漸もすれば無敎育なる勞働者より甚しき行爲を敢行して怪まざる事少からず、例へば訓練なき利己主義を滿足せしめんと欲し、其の結果として幾多の生靈を犧牲となし顧ざるか如き憎むべき者少からず。且又貴人富豪、成功者等は常に確固たる階級的束縛を受け、時としては自己の地位、威嚴を保たん爲め有害無益にして何等の價値なき行爲を敢して怪まざることあり。而して斯る階級的束縛は地位が高ければ高き丈け益々其の束縛力强きを常とす。此の故に凡庸なる一般國民は階級的束縛少きを以て比較的思想の自由を得るものなり。然のみならず彼等は木訥にして質素なる生活に滿足し、法律家、政治家、商工業者の如く巧言令色、權謀術數を用ふること稀れなり。

次に兩者間の思想上の差異に至つては、看過すべからざるもの少からず。例へば勞働者は時間に從ひ規定の仕事に盡力するがゆゑに、時間に對する責任及び勞働に對する責任を自覺す。然るに企業家資本家等は社會に對する自己の責任を自覺せず彼等の企業に對する考へは恰も競馬の技か奕博にても爲し居るが如き觀念を有するも、自己の事業は社會一般の需用を增進せしめ國家の爲めに盡力し居るものなる事を自覺せず、單に自己の利益を增進せん事を目的として生產に從事し居るものなり。然れ雖も彼等の多くは詭辨を弄して曰く如何なる人にても求むるものには之を頒つと、然るに他方に於て彼等の物價を定むるに當つてや、經濟的原則を應用して最高利益の獲得に焦慮す、此に於てか價格の高價なる爲め僅少なる富者の需用を滿足せしめ得るも、一般國民に直接の恩澤を與ふること稀れなり。且つ彼等特種階級の人々は概し

態度を決し、一般的公衆の意見に影響を受くること稀れなり。勿論特種團體の輿論と雖も全然他より獨立せるものに非ざるを以て間接には一般的輿論を無視すること能はざるなり。何となれば彼等は日常生活に於て一般國民と共同生活を營み居るものなるを以て、一般的輿論の後援なくんば最終の目的を達すること容易ならず。

此の故に吾人の日常生活に直接の關係を有する大工場、鑛山等に同盟罷工起り、或る食糧問題が起りたりとせんに一般國民の注意は喚起せられ、特に是等問題と密接なる關係を有する團體の行動及び輿論は一般國民間に傾聽せられ、種々なる討論の結果一般的輿論なるもの組織せらるべく、此に於てか一般的輿論の後援を受くる團體は早晩最後の勝利を贏ち得るものなり。又今日の國際問題に戰爭起りたりとせんか國民の注意は政府及び兵士の行動に集注せられ、一般輿論の後援に賴つて始めて最後の勝利が期待し得るものなり。

六　公衆の社會に對する貢獻

惟ふに公衆の社會に對する貢獻の偉大なることは古今を通じて一貫せる事實なるが餘りに平凡なる爲め世人より看過し去らるゝを常とす。蓋し一般公衆は人生の源泉と密接なる接觸を爲し何等の虛飾なく赤裸々なる場合少からず、此の故に彼等は直覺的に情緒によりて支配せられ是れ執着して止まず、爲めに喜怒哀樂の情に支配せられ易き事到底特種階級に企て及ばざる處なり。是れ實に彼等の行動に虛飾なく眞摯を以て生命とせる所以なり。斯くの如き眞摯にして强烈なる情緒の要求を滿足せしめんとする、過激なる運動は單に偉人又は特種階級の命令指導によりて遂行せらるゝよりは、寧ろ一般國民の輿論に軟つて敢行せらるゝ場合多し。例令ば佛國革命に於ける、米國獨立戰爭及び次で起れる南北戰爭の場合に於ける、常に大勢を支配し大局を定めたるものは、決して智識階級や權勢家に在らずして、全く學識德望なきも眞摯にして確固たる決斷力を有せる一般國民なりし事は識者の一般に承認する處なり。是れ實に一般國民の社會に對する一大貢獻なりと言はざる可からず。

論を助長せしむるが如きこと少からず。

是を要するに一般國民の意志を尊重して輿論の判斷に賴つて事を決行する時は、大局を誤ることなきは近世史の吾人に與ふる敎訓なり、且つ又輿論は如何に紛糾錯雜せる問題をも快刀亂麻を斷つの勢を以て、解決し得る天才的活眼を有する證據なりと言ふべし。然れども時としては其の判斷優秀ならざる事無きに非ざれども最後には成功を贊するものなり、何となれば其の行爲たる國民全體の後援を有するものなればなり。顧ふに一國の政府が種々なる異論を傾聽するの雅量と餘裕なく、濫りに新說を危險視して極力壓迫に從事する處にありては、激論不平は反動的に起り收支すべからざるに至るものなり、此の故に我國の政府當局者にありても深く此處に鑑み、公衆の社會に對する貢獻の偉大なることを信じ、之を自由に放任して健全なる輿論を組織せしめざる可からず。若し徒に過激論を撲滅せんと欲し壓迫を事とするに於ては時々奔命に疲れ反て政府の威信を損するが如き失敗に終ること無きを保せず、故に奮起一番斯かる愚策を棄て暫時種々なる思想を放任し輿論の制裁に依り愚論を排斥せしめ、以て健全なる輿論を喚起せしむることに努力せば、所謂最少の勞力を以て最大の效果を納むることを得べし。

七　民主主義反對論

民主主義に關し古來幾多の論戰ありしも要は簡單明瞭なり、民主主義讓成論者は思へらく此主義こそは人類の發達に伴ふ自然の大勢にして、其根底を人類の本能に發するものとなし、自由討論の結果組織せられたる輿論なるものは、事件に對する大局の判斷を誤まるものに非ずとの信仰を有する者なり。然るに反對論者は民主主義は多數人民の政治なり、而して一般國民は天下の大問題を了解するの能力なきを以て、民主政治は無能力者の政治なりと罵倒するものなり。一八五七年頃マコレー氏は米國の民主主義を攻擊して曰く眞正なる民主制度は早晩文明と自由との破壞者なり、故に米國の將來は暗憺たるものにして廢退を免るゝこと能はざるべし。何となれば米國政府は最大多數の利益を代表するものにして、小數なる富豪有識者

て時間と仕事との間に一定の精確なる責任觀念に乏しく、爲めに時間に顧慮せず自己の欲する處を敢行して怪まず、遂に勞働者より不快の眼を以て監視せらるゝこと少からず。

蓋し貧賤なる國民程自己の所有物僅少にして欲望を滿足せしむるに足らず、此に於てか勢社會的共有物を增加して、其の恩澤に浴せんと欲する熱烈なる感情を有す、此に於てか自己の利益と云ふ事よりは社會一般の利益と生命の安全及び共同生活の必要を痛切に自覺し、熱烈なる要求を爲し居ること富豪權勢家等の到底想像し能はざる所なり此に於てか彼等凡俗は社會全體の利害憂戚に關する感覺の鋭敏なる事、特種階級の企て及ばざる所なり、之れ實に吾人が輿論が天才的に賢明なる判斷力を有するものなりとの確信を有する理由の一つなり。

由來米國は不統一なる國家なりとの嘲りを免かれざりしが、今次歐洲大亂に際し彼等の輿論の判斷力は遺憾なく發揮せられ、米國衰亡論者を唖然たらしめウィルソン大統領を中心として、輿論の力は一糸亂るゝことなく善く大局を制して遺憾なからしめたり。又英國の如き民主主義の國家にありては事件に對する自由討論は遺憾なく行はれ、輿論の力に賴つて處理せらる、而し一般國民は過激なる思想を喜ばざるを以て討論の結果は過激思想の失敗に歸するを常とす。十九世紀より二十世紀に渡り幾多の過激思想は英國に輸入せられしが、爲めに何等の大事變をも喚起せず反つて是等の思想の爲めに英國の思想界は益々鍛錬、淘冶せられ健實なるものと成れり。最近過激なるシンジカリズムの佛國より英國に入るや一時は思想界を驚愕せしめ至る處に議論の花を咲せたるが、其の結果は健全なる思想の勝利となり、過激論者は一敗地に塗れて如何ともすべからず。然らば等しく自由を尊ぶ佛國に於て何故に過激論盛に行はるゝやと云ふに、由來佛國民は理想を尊び理想を追ふて生活し居る國民なるを以て、其の極過激思想の發生を促す傾向あり、且つ佛國共和政治なるものは官僚的臭味を有するものなるを以て、國民中政府の壓迫に滿足せず反抗的態度に出で、遂に過激

ば輿論なるものは決して一片の愚論に非ず、且つ又社會内の最大多數は愚民にして有識者は小數なるを以て、多數人民の輿論は誤謬多き愚論なりと信ずるは大なる偏見なりと言はざるべからず、假令は此に百人の一團體ありし、其の内九十人は無智にして僅かに十人の有識者ありと假定せんに、彼等の輿論は愚民なりとの斷定を下し得るものに非ず、何となれば小數有識者と多數愚論との間には、常に何等かの交通ありて相互に影響感化し居るものなるを以て、小數智者と多數愚者との交通が全く謝絶せられざる以上、愚民政治となるの怖れ無し、故に最大多數の國民は無智なりとも白痴ならざる以上、輿論政治は愚民政治となるが如き確實なる理由を發見すること能はざるなり。

平和と佛教

講師 早稲田大學 伊達保美

一

今次の世界戰が種々なる方面から、其の參戰國の地球上認め得られる殆んど總てを網羅したることに於て、其の戰亂に費された生命及物質上の犧牲の尨大なることに於て、其の關聯する處の影響の甚大なることに於て、其他樣々なる立脚地からの觀察に於て、人類の歷史が曾て記憶しなかつた空前の出來事たることを何人も思はずには居られないであらう。

歷史家は大戰の勃發を以て、セルビアの一青年の手に依て放たれた銃彈の流血事變に因るものでなく、歐洲列强間の近世に於ける複雜微妙なる國家的運動の當然の歸着と說くであらう。併し乍ら吾人は更に這般國際間の權力抗爭上の衝動に基くものとしての觀察の外に、或は其根抵に、如何に近世の物質文明の燦華に眩惑醉倒した民衆精神の

等は全然貧者の前に腰を屈して憫みを請ふ者たるべければなりと極論せり。然るに幸か不幸は此の豫言は一度も實現せられざりき。近代に至りレッキーは、其著「民主主義と自由」に於て論じて曰く最大多數の政治は愚民政治なり、何となれば一國内の國民の多數は無資産者なり、而して彼者は由來愚民なるを以てなりと、然れども吾人の考へはレッキーの意見と相異點少からず、其の主なるものを擧ぐれば國民は貧者は愚民なりと云ひしも智鈍は貧富に依つて區別すべきものに非ず、故に吾人の信ずる所を以てすれば貧富の別なく、多數人民は抽象的に眞理を探究するの能力なきも、各自の信頼する指導者の意見と共鳴し同情して彼と同一歩調を取るの正當なることを自覺し決自するの判斷力を有するものなれば、輿論の判斷は正鵠を誤るものに非ず。

世人往々太古の希臘羅馬の民主政治の缺點及び衰退の理由を根據として、民主政治を攻撃するもの無きに非ず、然れども太古の民主政治は現代の民主政治と其の意義に於て相異せる點少からず、何となれば古代にありては共和政治の下に奴隷制度は公認せられ、奴隷を待つに非ざれば日常生活に差支を來すが如き狀態にあり。然るに今日の民主政治に於ては斯かる名實の伴はざる者に非ず、且つ古代に在りては現代の如く交通機關の發達を見る能はざりしを以て、其の事件を決するや一國の輿論に非ずして一地方の輿論によりて決せられたるに過ぎず、此の故に眞の一國の輿論なるものは知ること能はざりしなり。然るに現代にありては交通機關の發達せる結果として、民主主義の國民にありては、一國の輿論を遺憾なく覺知し、其指導の下に國政を爲し居るものなり。此故に古代を以て今日を談ずるは一騎打ちの古代の戰法に頼つて、現代の復雜せる戰術を論ずるが如く笑止千萬なりと言はざる可からず。是を要するに民主主義反對論者は人民の多數は愚民なりと一概に輕蔑し終り、富者を重視するの嘲を免かるゝこと能はざるのみならず、時としては寧ろ輕薄論たるの嘲りを甘受すべきもの無きに非ず。何となれば議論圓熟して玆に輿論が組織せらるゝものなれ

また吾人は是れが結果として、精神的傳統乃至羈絆からの解放と物質的文明の謳歌とを擧示せざるを得ない。

吾人は今、來るべき戰後の轉期を以て這のルネッサンスの人文思想の上に現示した處に比せんと稱した意味は、強ち來るべき新文化が近代的思潮傾向を一掃し去つて、更に別個のものゝ出現を期待するとを言はんとするのではない。若し一部の論者にして、科學的文明を呪咀するの餘り平和の到來と共に、科學的文化が全然其の痕跡を絕つべきであらうと占し、或は絕たしむべきを期するならば、それは人智の趨嚮發展を解せざるの徒言である許りでなく、又敢て吾人の與せざるものである。

元より吾人は近世の科學的文化に對する全部の隨喜者ではない。而して科學的文化が其の全能性を高調することに於ては、それは既に自己の適法の領域を超えんとする越權を稱すべきである。また科學的文化は物質的讃美を將來して、黃金萬能の風潮を助長せしめたことを否定しない。けれども是等は科學的精神乃至科學的文明が其の發展の道程に於て過使せられ、惡用せられたことに基くものであつて、科學的文化その者の本然の資質によるものでなく、又科學的文明その者を呪咀し拒斥すべき理由を形成するものではない。寧ろ科學的精神その者は人間知性に賦與せられた特權的機能であり、此の精神を健全に發育せしめることは永久に持續せらるべきものであらねばならない。されば若し之れに反して全然科學的精神の啓發を阻止せんとするならば、或は科學的文化の衰頽を希求するならば、それは人文の進化に逆行せんとする錯誤の企圖か又は偏狹なる護教家の一空言に外ならない。而して其の結果は再び教權の羈絆に苦しむ「暗黑時代」への復歸を導くものである。

三

吾人は近代的精神の一として傳統的組織からの解放を算へた。卽ち近代の出生によつて、眞に生くべきことを目覺めた個人は、最早傳統的思潮を其のまゝに鵜呑みに抱持せんとはしなかつた。彼等は自己の心眼を開くことを教へられたとに依つ

趨嚮が、物心兩面の平衡を破つて、一方面的狂奔に傾走するの大勢を國家的にも個人的にも示したかといふことに、中心の禍原を見出し得るであらう。

大戰の開始をかく觀察するならば、大戰の終結は是れに好箇の對照と教訓とを示すものである。素より大戰の結末を說明するには、未だ漸くに休戰條約の締結に依て、平和の克復が保證せられたゞけであつて見れば其の事情の精細を告げ得ないとは云へ、少くとも地圖の上に於て、猶優越的地位を保有してゐた獨逸の比較的に急遽的なる屈服の原因の中には、戰禍の永續的傾向に對する獨國民の諸種の不安等を算ふる以上に、其の屈服の來由を思想問題の敗北に歸することを得るであらう。

因て觀れば、吾人は物質偏重の文明、權力的國際競技の歸結としての世界戰の發生を說くことを得ると共に、思想問題の現實性の發端を告ぐるものとしての世界戰の終末を解することが出來る。而して此の世界戰を人文史上の一大轉期として記念した吾人は、此處に其の當來の時期に對する機を求め得るであらう。

二

然らば此の世界戰は人文史上に如何なる意義の時期を劃するであらうか、乃至如何なる新文化が此の世界戰の後に於て地上を蔽ふであらうか。而して又此の世界戰を最後の機會として、人類は永久に戰亂の禍から遁れて平和の淨界を示現するであらうか。

吾人は先づ世界戰の齎らすべき人文史上の意義を以て、近代を釀成せしめた文藝復興（ルネッサンス）に其の近き類例を求めんと欲する。ルネッサンスに於て、吾人は單に中世紀の教權的歷史的傳統に對して、古代學藝が、時代の要求に應じて甦つたのでなく、Jakob Burckhardt の卓邁なる研究が示す如く、現實に眞に生きんとする近代人の誕生を意味するものであつたことを知る。然して人文の歷史は此の近代の出生に依て、一大啓蒙期を展開した。而して其の最も大なる果實の一として吾人は自然科學的精神の發生と其の成功とを稱し得るであらう。

の物質偏重の潮流に主因するものと解しやう。併し乍ら吾人は近代的精神の特徴を以て單に物質謳歌の傾向を以て其の全面と見做さんとするものではない。既に知られるが如く、近代の出生は一面物質的開發による自然界の征服であると共に、他面精神的啓蒙による組織的傳統の解放である。前者によつて物質的文明の燦華が生ずべく、後者によつて思想的奔流の飛躍が導かるべきである。この二箇の潮流は實に近代的なる人間に植付けられた根本自覺であつた。けれども此の兩者は同一道程の上に並行せる發展を示さなかつたのである。即ち科學的開發による物質的文化が社會的中心興味の標準を成して、近代の特異性を獨占した。而して思想の解放による努力は前者の赫奕たる Wirkung が洽く人目を奪ふために比して、未だ社會的現實性を發揚し建設するに至らなかつたものと觀られる。謂はゞ、物質的文化の一面が重用せられ過重せられて Hypercultie をなしたのである。

かくて物質偏重の一面に馳つた文明の最後の決算として、今次の世界戰の發生を觀ることは慥に意味ある妥當の見解であらう。、之れと共に、從來潛土的書齋的潮流のものであつた思想問題が顯在的社會的現實性を現はしたものとしての、世界戰の終結を觀たことは更に深甚の敎示を垂れるものでなくてはならない。

吾人が此の平和の後に將來せらるべき文明の趨嚮に對して、此の人文史上の一大轉機たるべき世界戰の終結を以て、ルネッサンスに其の類例を徵せんとした所以は、中世紀の精神的羈絆から古代學藝に還へることに依て新時代を劃した如く、物質的偏重から精神的深淵に遁れることに依て中世紀的時運の再來を意味し、豫期するのでなく、ルネッサンスによつて近代的舞臺の幕を開いた一般民衆が其の一面に奔馳した結果、今や他面の意義を高調することに依て、一層近代的精神の眞髓を發揚し此れによつて、從來の文化に於て社會的に閑却せられた部面が表面的出現を示すことを豫想するのである。

五

すなはち約言すれば、戰後の社會的興味は思想

て、屢々傳統的敎條に背いて思索し敢て神罰を恐れざる者となつた。而して之れが爲めに、意志の強い思想家が幾度か傳統的權威に觸れて苦しめられた事蹟を殘した。併し思想の解放自由が漸く大勢を成すに比例して、傳統的權威は其の無力を露示し、思潮の奔騰に任せることを餘儀なくして仕舞つた。

此の傾向は精神界乃至思想界に一定の公準を廢棄したとに依つて、一種の混沌時代を現出せしめたに違ひないものであるけれども、是れと全ての人々が各個に思想問題に關し得べきことの當然性を示し、かくて精神界乃至思想界に於ける特種の發言者の位置が覆されて、全人が齊しく發言者であり提唱者であり得る機會が與へられたものである。就中思想問題に親近なる關係を有する詩人藝術家の群から提唱せられた數々のものは現に吾人が解決をなすべく承繼いて居るものである。哲學的思惟の開展に於ても、近代は其の思想傾向の多端であり多面であり、且つ鋭犀であつたこと、殆んど過去に比儔を求め得るものであつた。

併し乍ら、是等近代に於ける燦然たる思想活動は畢竟問題を問題としての提唱であつた。個人的に觀て重大の意義を藏し、社會的に觀て顧慮すべき提唱であつたものも、大觀すれば、未だ書齋的論議の圈内に在つて、直ちに街頭に通ずるの問題を成すものでなかつた。何等か實際的効驗を豫期した近代思想の奔流も、一般社會的には唯新しき問題の存在を示すに留つて、洽く社會民衆全般への波及を見るには至らなかつた。然して社會の中軸階級は夫等問題が早晩現實性を呈すべきものとの暗示を受けたけれども、彼等の生活の中心興味は依然物質的文化に對する憧憬と粘着により多く懸つて居たものである。それにも拘らず、吾人が一の銘記すべき事項は這般近代に於ける思想の解放は、成立宗敎の敎權に對する自由なる突破であつたこと、又成立宗敎の支持者の思想問題に對する無敎育と無資力とを示したことである。

四

吾人は這次休戰條約の成立し了つて、世の同一觀察者と共に空前の世界戰の發生を以て近代文明

より遠からしめられたのである。かくて今や此の絶大の機運は、彼等本來の面目を發揮すべき秋であると共に、又彼等の境地を恢復すべき機會でありねばならぬ。

吾人をして且らく佛教に就て語らしめよ。廣大中正、寛宏、大乘佛教の包擁的素質は、種々なる思想問題と親近の接觸をなし得て、之れを嚮導し統裁することを得べきである。かくて卽ち其の本然の面目を發揚して、文化の改善と平和の增進に寄與せられねばならない。併し乍ら、之れが爲めには佛教者は今此の至要の時機に當つて、先づ內に省みて、大なる自覺を喚起せねばならぬ。而して此の使命を切に感激すると共に、其の世界的なる主張と本領とを高調せねばならない。卽ち世界的大勢の趨く所を了察し、世界的思潮の注がるゝ所を知得し、汎人類的救濟の覺悟と地球永遠の平和に參するの氣魄とを養成すべきである。若し夫れ之れに反して、片々たる守株頑迷、徒らに偏狹固陋の第二義的領地を墨守して、僅々たる名分を保重せんとするならば、そは攝化救濟の大用を阻害する許りでなく、又自らを禍し自らを亡すの途に就くものである。

七

吾人は我國の佛教者が將に面接しつゝある此の世界的危機に際して、護國的精神を宣傳して、外來思潮の浸潤に備へ、而して國民思想の指導に資せんとするの企を贊する。併し乍ら交通の發達は地球上の距離を短縮した、然して交通は益々往來の頻繁を導くものである、最早吾人は疇昔の鎖國的保守を夢想することも不可能であると共に、一切が全て國際的に置かれたことを自覺せざるを得ない。人家の稠密せる街區に於て、吾人は獨り自家の火の元を要愼する丈けで、接近區域の全ての家屋をして齊しく火災の發生を防備すべきことを知らしめないならば、危險は完全に除かれたものとは言へない。吾人は全ての憂國の士と共に、世界時局の轉機に際して國家を安祥ならしむることを希念するものである。而して、之れと共に佛教者が更に其の攝化の大用を擴大して、全人類をして平等に救濟すべきことの大覺悟を要望するものであ

問題の一次性現實性の上に立脚すべきことである。而してこれは今次の世界戰に依つて突發したる新しき現象と觀るべきよりは、過去に伏在しつゝ育成せられたものが、顯示的の存在を呈するに至つたことである。

然して此の思想問題の現實性は、戰後の時代に特異の色彩を付すると共に、これが直に世界民衆の上に精神的安息を將來して、平和の淨域を築き上げるか否かは疑問とせざるを得ない。近代的啓蒙の洗禮を浴びた民衆は、こゝに思想の解放乃至自由の意義を名殘なく發揮すると共に、戰後は暫らく思想界の群雄蜂起時代を現出するであらう。而して之れに伴つて、樣々なる思想問題の送迎に煩はされるであらう。

此くの如くして思想問題の現實性と其の多端とは、他面に於て戰後に來るべき經濟界と併せて地上に武力的戰爭の代置物として臨むであらうとなすことは、決して難解なる想像ではあるまい。從つて戰後世界民人の永久平和に對する保障は、懸つて是等問題に善備し良導することに在るは言を俟たないことである。

然らば如何にして這般時代の機運に應同して、民衆の啓發と善導とに當るべきか。この問題は今や戰禍の終熄と共に、吾人をして愼重省慮せしむべき至切の急務である。而して就中、成立宗教の興亡消長を試驗すべき絶大の機會であらねばならぬ。

六

先づ戰後當來すべき思想問題の奔流は成立宗教の力用に對する好箇試金石であろう。彼等宗教者は如何にして、思潮の大勢を指揮し、民心の統一を企畫し、人類平和の增進に參與すべきか。良に此の人文史上の一大轉期に際會して、當來の文化を保全し、人類の平和を確保することは、一切の成立宗教が步武を齊しくして向ふべき共同任務である。

諸宗教は與に這般人類救濟の目的に立つものであつた。唯夫等は近代文明の趨嚮に對して、深き反省と努力とを怠つた爲め、暫らく時勢から退けられ、徒らに拱手傍觀して、現實の世界との接觸

く偏見固執の對立の如きは、速に共同高遠の任務の自覺に依て拭去るべきものである。かの佛教各派の學徒を便し、佛教隆盛の中心國たることを示すに足る綜合的佛教大學の設立の如き、聲のみ早くに聞えて實の容易に行はれざるも、內外の觀て遺憾とする處であらう。

今や佛教者が在來の陋習を一掃して、大乘眞詮の慈光を宣揚せんと志圖し、此の世界的大時局に顧みて人類平和の聖業に向進せんとする爲めには、內に陣容の充實を整へて、外に同じく共一の目的に邁進せんとする他宗教と握手帶同して、世界文化の改造と戰後思想界の動搖氾濫に防備することの大自覺を喚起せねばならない。かくて若し佛教が此の一大感激に立脚して、其の本領を發揚することを得たならば、而して其の結果として世界人類の福祉と平和が將來せられたならば、それは佛祖龍悲の冥鑑に應ふるものであり、又世界民人の幸慶である。(了)

戰後教育の擴張及改革

三澤一紳

一　戰後教育の要綱

教育は國民の平的武裝である。大亂茲に其終を告げ講和後の問題に重大ならんとする時、人は必然思を國民の教育に寄せざるをえない。軍人は國民的國防の充實に對して、實業家は產業の發展に對して、政治家は憲政及自治の進步に對して、經世家は國民思想の統一及社會的生活の安固に對して、道德家は道義觀念の向上に對して、司法家は遵法的精神の發達に對して、學者は科學的知見並に研究的態度の徹底に對して、藝術家は美的趣味の涵養に對して、衞生學者は國民の保健並に體力增進に對して、夫々國民教育に望み且つ責むると

る。全世界の安泰は軈て我國家の安泰を確實にするものであることを着眼せねばならない。

近き過去以來、佛教の中心國が我日本であることは事實である。而して佛教が我國文化の進運と深甚の關係を有して來たことも呶々を要しない。或意味に於て佛教は我國文化と親密不離の關係に在つたと言へる。此の我國の文化に終始して護國的精神に寄與する處のあつた佛教は、今や卽ち國家の國際的位地に鑑み、世界的風潮の大勢に省みて、更に汎人類的教旨の本領を發揮すべく、蹶起し努力すべき機運と必要とを覺悟すべきである。

佛教は其の歷史に於て、平和的建設の貢獻者であつた印跡を屢々殘してゐる。乃ち佛教は進んで此の事蹟を以て世界全般の平和の史乘を飾らんとする一大勇猛心を發念すべきである。而して之れが爲めには、先づ佛教者自身の一大自覺に俟たねばならない。吾人は現在の佛教者に就て、時機に相應ずべく甚だ遺憾を感ずる多くの點を見出すからである。

八

佛教者が今日、世界的新文化の建設と永久的平和の實現に任ぜんとする爲めには、自ら先づ內に省みて諸般の覺醒をなさねばならぬ。

人格の修養、品性の陶冶は餘りに古く言ひ馴らされた文辭であつて、然も猶今日多くの佛教者に取つて反省自覺の第一項目たることを値するものがある。之れと共に、識見知能の增進は其の世界的發展の途に上るべき一次的要件でなくてはならぬ。若し夫れ低級なる傳道者が孫引的知識の編纂を以て、低級なる部落の喝采に歡喜するに至つては甚だ憫笑を禁じ得ない。須らく彼等は人格の修練と俟つて知識の直輸出入者であることを要する。

若し又教團的宗派の現在に就て觀れば、其處には、又排すべき幾多の陋習を見出すであらう。無意義なる樣々の形式階段の如き、僅に朽廢爲すなきの古光を喜ばすのみであつて、教祖宗師の素志に反し時代に逆行する錯誤の滑稽を示すものに外ならない。

更に飜つて諸宗派の間に於ける傳習的遺風に基

交渉にもしくは相殺的に國民子弟の上に作用したならば、彼等はどうしてその適從するところを知らうか。あらゆる敎化的勢力の一致調和といふことは決して容易なことでないに相違ない。恐らく文部省の力でも、內務省の力でも出來ないことで、國民全般の自覺に依るの外はない。併し乍ら、此事の出來るまでは、眞正の國民敎育といふものはありえないのである。

四　敎化資料の集成と整理

社會の分化に伴つて國民敎化の勢力に分裂を來すが如く、文化內容の複雜となるに從つて之が統合集成といふことほ益難事となり、あらゆる敎化の資料を國民の個々及全般に與ふることは不可能に屬する。十七八世紀に於てすら既に百科全書的敎科書の企は空しき努力に終つた。併し乍ら、無限なる文化の寶藏中より、其永遠的價値、現代的價値、國民的價値の標準に從つて、尤も貴重有効なる敎化資料を選擇集成し、之を被敎育者の受容力及被陶冶性の程度及限界に按配することは可能にして必要である。單だ漫然と歷史と因習と偶然的決定とに由つて國民敎化の資料を編成適用すべきでない。新しき時代は新しき文明人、新しき社會人を要求する。之れを養成陶冶するには、僅に新しき材料の附加を以てしては足れりとしない。選擇と組織との仕變へを要するのである。學科の整理、輕重の附け直し、學科內容の整理、しかも之を根本的に行ふの必要がある。

五　敎育機關の增設

敎育慾の向上は社會必然の勢である。そしてそれが社會の最上層と下層とに於てよりも中層に於て尤も旺なのも亦理の自然である。或意味の國家政策よりすれば、下層社會に對する强制的敎育の普及向上は最も必要である。吾々は義務就學の奬勵、補習敎育の强制、靑年團の指導、通俗敎育の施設に對して贊同を否むものではない。併し乍ら、或は好餌を以て文化的食慾に乏しき階級を釣り、或は威力を以て敎育を押賣する一面に於て、自覺ある向學心と効果に富む被陶冶性と社會的貢獻の豐かなる素質とを具ふる靑年に對して十分なる敎育機關の供給を怠ることは、先後本末をあやまる

ころがあるに相違ない。此等の注文に應じてよく其社會的機能を完了せしむる爲には、我國民教育の上に大々的擴張と改革とを施さねばならぬ。

戰後教育の要綱は、帝國の國是方針を確立し、國民の使命及覺悟を闡明するにある。あらゆる教化的勢力の調和一致を圖るにある。諸の教化的資料及手段を整理集成するにある。しかして大に教育機關を增設し、優良なる教育者を招致養成し、之をして其有する最大能率を發揮せしむるにある。

二　國是と使命

内にあつては君民一體、四民平等の理想を擁護擴充し、外に向つては世界協和の主義下に國民の膨張發展を謀ることは、我帝國不動の國是でなければならぬ。しかしてよく此國是を實現すると共に、東亞民族の獨立と其文明的才能の發揮とを確保幇助することは、我國民天授の使命でなければならぬ。之れか爲に吾々は世界、特に東亞民族との接近及同情理會の增進を圖らねばならぬ。之れが爲に吾々は正義に基く宏量及抑損と強力に恐れざる權利の主張とを知らねばならぬ。之れが爲に吾々は君民の間を隔つる一切の障碍を除き、國民の平等を裏切る諸の特權と不條理とを撤廢せねばならぬ。しかも國民個々の實力及品格に於て、將た國民の社會的組織及生活狀態に於て、世界の國民並に東亞民族の尊敬を買ふに足るものあることは、尤も大切なことゝいはねばならぬ。

三　教化的勢力の一致調和

如上帝國の國是と國民の使命及覺悟たるや、之を國民教育の大精神たらしめ、之を國民の間に徹底せしむるに於て、ひとり教育者の言說に託するのみならず、宗教家は之を法壇より叫び、學者は之を講壇より論じ、記者はその筆により、藝術家はその作品に依り、政治家及實業家は其施設經營の上に之を具現實證しなければならぬ。教科書の說くところと法制の定むるところと干格し、教室に鼓吹するところと社會に行はるゝところと矛盾し、教師の勸むるところと政府の行動するところと咀嚅する如きことでは教育の力も全く消されてしまうであらう。學校と新聞雜誌と圖書館と藝術もしくは娛樂機關と家庭と社會生活と各別個に沒

る單純と偏倚とを墨守する結果として惧れらるべきではなからうか。

六　優良教育者の招致

時代の進運に伴ひ個性の種態に適應する多様の教育機關を增設し、その內容を充實し、その機能を發揮せしむるには、益多數の優良なる教育者を養成招致せねばならぬ。現存の機關に於て在來の因習的教育を行ふにてすらも、之を有效に遂行しうる丈けの教師に缺けて居るのが今日の實狀で、教師の缺乏と其品質の低下とは次第に大なる脅威たらんとして居る。其原因たる教育の發達に伴ふ教師養成機關の不備といふこともあらうけれども、教育者の社會的位置の低いといふこと、其待遇の公正を缺いて居るといふこと、其活動と自由との範圍が著しく制限せられて居るといふことが根本原因をなして居ることは明である。卽ち從來教育者の生活に於て、有爲なる青年を引着するに足るものが缺けて居る爲に、教育界が次第に空虛となり行くのである。教育者だから忍耐しなければならぬ、教育者たるものは之れで滿足すべき筈である、といふやうな考は誤てある。苟も氣概あり、向上心あり、名譽心あり、しかして自己に恃むところの或物を有する何人も滿足し忍耐しうる生活、否大に希求しうる生活を許すにあらざれば、教育界に人物を招致することは出來ない。教育者は固より成金たらんとし、野心的政治家たらんとするものとは資質を異にせねばならぬ。併し乍ら、他の何れの社會にも向かない青年を拉し來つて以て優良なる教育者に仕立てやうとするのは無理な注文である。他の社會に於ても相當活動しうる人間を强ゐて、何人も滿足しえない生活に繫がうとするのも亦是れ非法といはねばならぬ。教育の改善及充實は何よりも先づ人の問題である。人の問題は結局待遇の問題である。待遇とは勿論物質上に限らない。が、物質上のことも當然含まれねばならぬ。

七　教育者をして其最大能率を發揮せしめよ

之を爲すの道如何。先づ制度と法令との限定する範圍を必要の最小限度に止め、創試の自由と權

ものてあると思ふのてある。吾人は國家が尤も有能なる人材を多數に養成するの必要上よりして、青年時代の敎化を出來うる限り完全にして其才能を遺憾なく開發せしむるの敎育經濟よりして、はた又個人の自覺的要求を十分に滿足せしむるの社會的義務よりして、先づ中等敎育及高等敎育の大々的擴張を圖らんことを希望する。中等敎育は最早限られたる『英才』の敎育であつてはならぬ。中等社會全般の敎育でなければならぬ。中等敎育をうけて更に文化的向上の意氣と餘裕とを有するものは、悉く高等敎育をうくることを許されねばならぬ。中等敎育をうけんとするに當り、又は中等敎育より高等敎育に移らんとするに際し、無意味なる淘汰と無益なる低徊とを免れねばならぬ。しかも中等敎育及高等敎育の機關は其廣さに於て凡ての志望者を容るゝに足るのみならず、其種類に於て社會生活の各部門と個人性能の多樣とに應ずる丈けのものがなくてはならぬ。凡ての向學心に富む青年は尤もよく自己に適する敎育機關に於て其敎育をうけることが出來るやうにならねばならぬ。今日の敎育機關は甚だしく其數に於て缺乏して居る許りでなく、其種類に於て現代の複雜なる社會活動及職業の部門を代表すべく餘りに貧弱である。否それよりも大なる缺陷は、學究的もしくは記憶的才能を偏重して殆んど他の性能を顧みざることてある。それゆゑに、如何に獨創應用の才に富み、如何に社會的實務に有能てあり、如何に統率經營の力に秀でゝも、もし學究的、記憶才能に短であつたならば、小學以上の敎育をうけることが出來ぬ、よし之をうけることが出來ても自己の興味と志向に副はざる抑壓的敎育しかうけることが出來ないといふ有樣てある。所謂英漢數の記誦的知識の偏重に由つて多くの獨創的實務的統率的人材を淘汰し、講義筆記の制度に由つて精神能力の大部分を數年間の休眠狀態に置く今日の敎育制度は、人材の養成ではなくして寧ろ或る意味に於て人材の殺害てある。敎育機關の增設は自由選擇と自由競爭とを可能にし、以て敎育の解放と改善とを招徠する。所謂高等遊民の產出の如きは、敎育機關の擴張よりも、そが社會の進運に伴はざ

る時、現代の基督教が今や生死の境界線に立つてゐることを思はずにゐられない。こゝに『危機』といふ文字を用ゐたことが、讀者の視聽を聳かすための、月並なジャナリズムと誤解されることをも、わたしに敢てしめる程、わたしには、現代の基督教の疾患が痛切に感ぜられて仕方がないのである。

*

神學の系統は、一面に於て、基督教を化石させた。教令制度は、他面に於て、基督教を物質化した。基督教の精神を西洋學者から學ぶよりも、東洋人のわれ〳〵の方がもつと端的に基督教の精神を摑める筈である。基督教が日本人にわからなくなつたのは、西洋から逆輸入されたからではなからうかといふ疑さへしきりにわたしには起る。素朴な東洋の宗教が、素朴な東洋人なるわれ〳〵に依つて、正當な理解を得られぬといふことは、到底想像し得べからざることのやうにわたしには思はれる。

*

われ〳〵は、宗教の眞髓を以て、自己の安心立命を得るにあると考へてゐた。けれど基督教の目標は命なる自己の安心立命にとゞまるであらうか。自己の救だけにとゞまるであらうか。自己の安心立命と自己の救とは自己に依つてのみ獲得されるものであらうか。少くともわたしにさうは思はれない。自己の救は自他友愛の精神の昂起のうちにのみ完成される。個性自由と伸長とは、自他友愛の精神を離れて實現することを望むことは出來ないやうにわたしには思はれる。

*

わたしは基督が未來を信じてゐたことを否定しようとは思はない。けれど彼が現實の世界に神の國を建てようとして、生死を顧みなかつたことが、單なる未來の信仰に依ると斷言し去ることをわたしは欲しない。少くともわれ〳〵にとつては、未來といふことも、現實を離れては存在し得ない。われ〳〵は生きて初めて死も意味がある。われ〳〵の世界は現實を離れて他に之を求むることは出來ない。

能の活用とを擴張するにある。行政家との關係を親密圓稽にすると共に主客の位地を明にするにある。十分なる資源を供給して理想の實施に支障なからしむるにある。其職責と權限とを理解する有能の視學機關を完備して指導督勵の實を擧ぐるにある。或は視察旅行に、或は海外留學に、或は講習會に、或は研究會に、或は教育圖書館の設置に或は大學擴張事業に、諸般研修向上の便宜と機會とを豐富にするにある。獨り監督の局にあたるもの丶みならず、社會が彼れの事業に對し、相當の理解と深厚なる同情とを有つにある。しかして最後に吾人は彼れの生活に安固と多少の餘裕とを與ふることの必要を附け加へなければならぬ。生活の不安定は人を生活の爲め戰鬪に追ひやるであらうが、教育の爲に戰鬪には英氣を殺ぎ勝である。生活の餘裕は或人にとつては逸樂の機會と誘惑とを與ふるかも知らないけれども、それは精神の廣さと深さとを造る上の大なる要件である。かくて教育者の爲に與へられ、供へられ、施爲せらるゝ凡てのものは、皆教育者の力となり、教育の效果成績となつて社會に復り來るのである。教育の改善は教育者の改善に始まらねばならぬが、教育者の改善は一方より優良なる青年を教育界に導き入るゝにより、他方既に在る教育者をして其最大能率を發揮せしむるの道を講ずるによつて致すの外はない。

現代基督教の危機

在倫敦　佐藤清

生活問題を解決する鍵が無いと信じてゐるわたしにとつては、現代の基督教をよく〳〵觀察して見

*

基督教の精神を措て、現在及び將來のあらゆる

を企てることが出來る。個人、民族、人類の間に、友愛の精神の昂起する時、其時を措いて地上の神の國を求めることは出來ない。

*

基督教の精神の一は態度に存する。態度とは抽象觀念ではない。水蒸氣の如く常に動いて已まぬ。態度は常に自己に向つてくる一切の生活問題に觸れなくては目に見えてこない。水蒸氣は寒冷がくれば雪となり、溫暖がくれば雨となり、空すめば空に溶けいり、飛散すれば雲となる。

*

われ〳〵は個人の解放を主張する。われ〳〵は自己の靈魂生命を以て無上の至寶と信ずるからである。個人はそれ自身目的である。他の如何なる何物に對しても手段となつてはならない。そしてわれ〳〵は今の世に此個人の尊嚴が殆と顧みられてゐないことを見る時、われ〳〵は總ての何ものよりもまづ個人の解放を獲得しなくてはならない。われ〳〵は先づ良心の自由を獲得しなくてはならない。良心の自由は個人解放を包含する。良心の自由を獲得しない限り、個人は永久に奴隷である。そして個人に對して如何なる態度をとるかに依つて、基督の精神の有無が判斷される。

*

われ〳〵は民族の解放を主張する。個人が個人を支配することの不合理なる如く、一民族が他民族の上に主權をとることは不合理である。個人が同等の地位に立たなくては、そこに友愛の精神が起り得ないやうに、民族とても、同等の地位に立たなくては、民族と民族との間に友愛の精神が起り得ない。個人の解放と民族の解放とが、同時に行はれなくては、世界人類の間に友愛の精神を造ることは出來ない。此簡明直截なる眞理に對して執る態度に依つて、基督の精神の有無が判斷される。

*

英吉利に動いてゐる勞働運動のうちに愛蘭の民族的獨立運動のうちに、北歐の預言者らの叫んだ世界主義のうちに、しんの基督の精神の勃興を見ないものは、古典の死文字を弄するより外はない。

＊

『地上に神の國を建てる。』是れ以外に基督教の精神はあり得ないやうにわたしには思はれる。地上に神の國を建てるといふまぼろしを見る人々のみ、基督の精神に生きてゐる人だちである。古人の糟粕に過ぎない神學の講釋をしながら、此まぼろしを見てゐない人々は、基督教を去る極めて遠い。教會制度と、信條と、因習とを楯にして、基督の名を犯さない多くのすぐれた文藝のうちに、また驚くべき精神のこもつた現代の社會運動のうちに、膨湃昂起してゐる友愛の精神に目をふさいでゐる人だちは、基督教を去る極めて遠い。地上に神の國を建てるとは、現存のやうな基督教會の建設を意味しない。目に見えぬ友愛の精神の建設こそそれである。此まぼろしを見てゐないものは基督の精神をもつてゐる人だちではない。

＊

基督の精神に依つて燃やされる此まぼろしは、基督の再臨を信ずる迷妄とは恐しくちがふ。此まぼろしは現實の社會狀態を最もよく實感し、最もよく色讀し得ることに依つてのみあらはれる。現實の社會生活に卽して、之を光輝に變へんとする憧憬に依つてのみあらはれる。赤裸々なる現在の社會生活に大膽におもてを向けて、之に對して與へる假措することなき批評に依つてのみあらはれる。二千年も昔に死んでゐる文字を字句通りに解釋することを黃金の信仰と思つてゐる人だちには此まぼろしはあらはれない。現在社會に生きてゐるわれ〳〵共同の生活のなやみをなやみぬいたものでなくては、此まぼろしはあらはれない。

＊

基督教の精神の一は態度に存する。多く內容には存しない。われ〳〵は同一の態度に依つてのみ地上に神の國を建設することが出來る。神とは內容である。內容は千差萬別を極める。千差萬別の內容を一律にして神の國を建てることは出來ない。內容は個人の自由選擇に任せなくてはならない。基督教の精神の一は實に態度に存する。愛とは態度の名である。憎とは愛の他面に過ぎない。愛に依つてのみ初めて、個人、民族、人類の融合

に於て革命の歷史なりと。文藝復興、宗教改革より英佛二國に相前後して起れる產業上並に政治上の大革命は、誠に近世史上の四大事實である。四大革命である。而して佛蘭西大革命は種々なる事情よりして最大の刺戟を世界の各國に與へた。蓋し此の大革命の產物は何よりも先づ國民主義と立憲主義とであつた。爾來白耳義希臘の獨立、南米諸共和國の出現等何れも伴んの國民運動乃至立憲運動の一ならぬは無かつたのである。然り、而して我國明治維新の政治的社會的變革の如き亦其の一飛沫のみ。

英國の詩人にして又哲人たるエドワード、カーペンター翁は、曾て「民主々義の方へ」を高唱してタベの空に嘯いたのであつた。ポルトガル國王の退位、中華民國の出現、露國皇室の歿落、獨逸革命の成功等、世界は走馬燈の如く「民主々義の方へ」向つて進展した。吾人は決して輕々に之を歡迎する者ではない。唯最近世界の經驗したる事實を列擧して、識者の愼重なる考慮を促さんとするのみ。

二　大戰亂の教訓

歐洲の大戰亂は殆んど萬人不用意の間に突發した。一部憂國の士は、國際的平和の到底保證すべからざるを說いて、今更のやうに國力の充實を唱へた。殊に戰爭初期に於ける獨逸の優勢は、益々此の種軍國主義乃至國家本位主義の氣勢を高めた。獨逸の制度に由る所多き青年團は普く地方農村に設立せられ、國民は皆國家のために一切を犧牲とせざるべからずと教へられた。

而して又露國革命以來、我國の識者は國民思想の漸く動搖せんとしつゝあるを見て、これが豫防救治に心を惱した。全國の神官に對して特別の訓令は發せられ、世界の大勢に鑑み、國民をして其の歸趨を知らしむべしとの命は下つた。高等師範學校に國民道德科を新設して中學校に於ける修身教授の任に當り若しくは校長の職を行ふ者を養成せんとし、或ひは大いに儒教思想の復興に努むるなど、一として彼等が經營慘憺たる苦心の跡ならぬは無いのである。然るに我國民一般の大戰亂、否寧ろ之より結果したる海外の政治的乃至社會的

てあらう。

＊

古き基督教は生きながら死せる信徒と共にわれ〳〵の前に滅びつゝある。けれども新きいのちは新き衣を纏ひ、世界の表に日の如くあらはれつゝある。此第二の驚くべき現象に對して目をとぢてゐるものは、インペリアリスト、キアピタリストと、これを謳歌してゐる無智なノミナル、クリスチヤンのみである。

＊

現實の社會狀態を凝視せよ。まぼろしはそこからのみあらはれる。そして此まぼろしのみわれわれのいのちでなくてはならない。此まぼろしのみ基督の精神でなくてはならない。（九月十七日、倫敦にて）

世界の改造と我國の將來

小島幸治

一　革命の連續

革命と云へば誰しも流血を思ひ慘劇を想ふかも知れない。然り、有史以來幾多の革命は不幸にして流血と慘劇とによつて伴はれた。乍併革命は常に必らずしも斯くあらねばならぬ者ではないのである。又革命と云へば或は西洋の特產物たる危險思想の如く考へる人が有るかも知れない。けれども實際に於ては必らずしも其とは限らぬのである。堯舜の禪讓以來、支那の歷史には幾多の革命が記されてある。我國に於ても大化の改新より明治維新に至るまで、革命の起つたことは一再に止まらない。而して是等の革命は決して破壞のための破壞ではなかつた。

史家常に論じて曰く、近世の西洋史は或る意味

生活難とは何を意味するか。多くの人は之を指して愚問であると云ふかも知れない。乍併物事はさう簡單に行くものではない。勿論生活難とは生活を維持するに足る物資並に勤勞（サーヴィス）を得るに困難を感ずることであると考へても宜しからう。けれども人間が其の生活を維持するに要する所の物資並に勤勞の性質及び分量は決して一定してゐるものではない。人智の未だ發達せざる時には、所謂生活欲望を有するのみであるが、文明の進歩に伴ひ、人間は次第に文化欲望を併發して、單に生きるのみでなく、より善く、より幸福に、より高尚に生きんことを要求するに至る。從つて彼の要する所の物資並に勤勞は假令其の量に於ては左程增加せずとも、其の質に於て著しく多様になつて來る。今や此の種の物資並に勤勞——彼に取つての生活必需品——を求むるがために、最も鋭き苦痛を感じてゐる者は中等階級である。

内田銀藏氏は我國目下の狀態にては、大略五百圓乃至五千圓の年收入有る者並に其の家族を以て中等階級と稱すべしと云はれた。然し同じく五百圓と云つても田舍中學の寄宿舍に泊つてゐる獨身の青年教師ならば其の生活は必らずしも困難でない。之に反して東京の中央に堂々たる邸宅を構へてゐる辯護士ならば五千圓の收入が有つても其の生活は決して樂ではないのである。乍併兎に角に社會の中堅を以て目されてゐる多數の教養有る人士が、如何に生活難に苦しんでゐるかは、茲に詳言を要さない。

人或は云はん、是の如き生活難は大戰亂の餘波なる自國經濟界の一時的變態による者であつて、平和來ると共に早晩其の跡を斷つてあらうと。自分は之に答ふるに現代世界共通の現象たる富の集中、土地の兼併を以てし、戰爭なくとも中等階級は年と共に滅び行くことを明にしたい。乍併此の事に就ては既に田島博士が『貧富問題』なる論文の中に論じ盡して居られるから、今は先づ省くことゝする。

五　三大救治策と其功罪

富力の集中に應て又政權の偏倚を意味する。甲乙二國の戰爭は往々にして甲國の資本階級と乙國

變動に學ぶ所は頗る大なる者があつた。過般の所謂食糧運動に際して、炯眼の士は決して此の事を看過しなかつたであらう。

有馬頼寧氏は華胄界稀に觀る見識家である。頃日某慈善團體の祝賀式に臨んで、大要左の如き意味の事を云はれた。曰く慈善の事たる本來純然たる人道的精神を以て行はるべきものである。然るに古來人々は動もすれば單なる一片の感情より、或ひは宗教上の間の滿足を得るの一手段として、或ひは又自家の名聞を求めんがためにのみ慈善を行つた。而して這般の騷擾に際しては、世の富豪は多く一種の防禦手段として多額の寄附をなしたのであると。斯くの如き意味に於ける寄附をなさしむるに至れる我國の無産階級（プロレタリカン）と、之をなすべく餘儀なくせられたる我國の富豪とは、共に意識的に又は無意識的に大戰亂の教訓を學びえたる者と云ふことが出來るであらうと思ふ。

三　國民精神の動搖と中等階級の破産

國民精神はたしかに動搖してゐる。或は已に憂ふべき狀態に陷つてゐるのかも知れぬ。乍併これが豫防救治の策を施すには、先づ以て其の根本に溯らなければならぬ。彼の佛蘭西大革命は、決してヴオルテーテールやルツソーの如き所謂革命新文學者の煽動のみによつて起つた者ではない。寧ろ當時の特權階級たる僧侶と貴族との壓制に苦しめる第三階級たる平民の反抗に根ざした者と見るべきである。骨と皮ばかりになつた農夫の背に肥え太つた僧侶と貴族とが馬乘りになつてゐる當時の風刺畫は這般の事情を描きえて妙なりと云ふべきである。露獨の革命亦此の例に洩れないと思ふ。洞察（インサイト）を以てツルゲネフやトルストイの社會改良家としての傳記を讀み、又曾てペリスの「獨逸及び獨逸皇帝」を繙いた者は、幾分の暗示を受けて居つた筈である。

若し我國をして一大レボレユーションの渦中に投ずる者が萬一にして有りと假定するならば、其は近時學者文人の口にする民本主義、若しくは海外に於ける政治的社會的變革にあらずして、より具體的により手近に在る或る者でなければならぬ。何ぞや、生活難の壓迫即ち是れ。

撤廢して集合契約を行ひ、企業者の過當の利益を貪る者を戒め、生産物の社會的評價を適當の平面に高める。二に對しては勞働紹介所を設け、勞働者の子弟に强制的技藝訓練を施し、都市に密集せる勞働者を適度に分散せしめ、失業保險を强制する。三に對しては大規模なる社會保險制度を以て、主要なる救濟法とすべしと。此の方法は勞働階級に對しては確かに有效なる者である。乍併富豪の土地兼併其の他種々なる原因より結果する所の中等階級の沒落に對しては、未た充分なりと云ふをえない。

茲に於てか一派の人々は第三の方法——社會主義の實現——を以て最後の而して唯一の貧富調節策なりと考ふるに至る。果して然うであらうか。オイゲン・リヒテルは既に一書を公けにして、社會主義實現の曉に於て、人間は依然として滿足する能はず、終に再び大擾亂に陷る所以を明快に敍述してゐる。然り社會主義的國家の人民程不自由なるはない。國家は人民の誕生より敎育や職業の選擇や其の他一切の生活に干涉する。社會は餘りに機械的となり、人々は再び昔日の自由競爭主義の經濟組織を追慕するに至る。

五　我等の行くべき路

果して然らば吾人の行くべき路は如何。社會政策的諸般の施設、本より不可ではない。乍併之と共に必要なる者は經濟思想の倫理化である。前に述べたウイザーズ氏の說は、茲に至つて非常に重要なる意義を有してゐるのである。經濟と道德との調和を計つた者曩にラスキンの徒有りと雖も、彼等は本來が一種の道德的社會改良家であつて、其立論は多く經濟學以外の者より出發してゐるのである。然るにウイザーズの如きは純然たる經濟學者であつて、自家の科學的研究の結果前述の如き結論に到着したのである。而して世人が皆是の如き說に耳を傾くるまでには、前途遼遠——否、或ひは永遠に不可能であるかも知れない。人類に取つて何よりも危險な事は人間の有する人性（ヒューマニティー）の崇高を疑ふことである。而して今や多くの人々は此の人性の深い又遠い意義を忘れてゐる。否寧ろ根底より之に疑惑を挿んでゐると云つてもよい。

の資本階級との利害の衝突に起因する。其でなくとも資産なき多數の人民は、少數特權階級のために利用せられることが有る。斯くて資本階級に對する勞働階級の反感は、日に月に甚しくなり、何處に向つてか破裂せずんは已まない。之が調和解決の方策約そ三個を擧げることが出來る。(一)上流社會に於ける奢侈の禁斷、(二)勞働者に對する社會政策の實施、及び(三)社會主義の實現である。

第一の方策に就ては河上博士が『奢侈と貧困』との中に於て、現在の經濟制度の内にて貧乏を救治し得べき唯一の手段なりと云つて居られる。今博士の論文の材料となつたウィザーズ氏の「貧乏と浪費」の大要を摘記すれば次の通りである。資本と勞力とは生產の二大動因なるが、各々供給に於て制限せらてゐる。今の人多く奢侈を好む。而して奢侈品の生產は必要品の生產よりも利益多し。故に本來生活必需品の生產に向けらるべき資本と勞力とは、多く奢侈品の生產に用ひられて不足を來し、斯くして必要品の生產費は增加し、其の價格は騰貴して生活難を起すに至る。故に吾人は皆消費者として、奢侈品の使用を減ぜざるべからず、ウィザーズ氏の言ふ所甚だ善し。乍併奢侈品なる者は物本來の成立より然る場合は少く、寧ろ或る一定の物を適度以上に適當なる時日又は場所以外に於て使用する時にさうなるのである。開業醫に取つて必要品である抱俥夫も、學校の教師に取つては奢侈品となるかも知れない。商人に取つて必要なる自轉車も學生に取つては無用であるかも知れぬ。凡て此の間の識別は、非常に微妙なる問題であつて、全く人々の自發的處決に待つより外はないのである。此の說は深き洞察によつて成れる者にして、輕々に其の迂を笑ふことは出來ない。

第二の方策は多くの經濟學者によつて唱へらるゝ者である。曰く現代の社會に貧乏の存在するは國民的配當額が絕對的に不足せるためにあらず、唯分配の方法未だ全く正しからざるによるのみ。自由競爭主義の產業必ずしも不可ならず、唯之を誤導するが故にのみ、(一)過少給勞働者、(二)失業者、(三)就業不能者等の窮民を生ずるに至る。一に對しては勞働契約に於ける從來の個人契約を

一

所謂米騒動なるものが突發して、しかもそれが重大なる政治的社會的意味を含蓄して、國の朝野を愕然たらしめた。暴力を以て問題の解決を期して相當に効を收めたその事が先例となつて、今後に於ても此種の暴動が頻發するものと見、また暴動の内容と經過に社會主義的氣分の流動を察し、我國も亦決して社會主義的思潮の免疫地帶ならざることを思うて、大いに是が善後策に苦心しつゝあるものゝ如くに見ゆるけれども、實は朝野の識者悉く一政府問責の材料とするには餘りに大なる問題に突如として逢着して、問題の取扱に窮しつゝある現狀である。『まことに仕末に困る問題が出來た』といふが異口同音の嘆聲であつたらう。

自分が玆に大いに論議して見たいと思ふのは、さしあたつて國家として米價問題を如何に取扱ふべきや、米價問題の根本的解決策如何といふことである、しかし今日に至るまで此根本問題を取扱つて、國家の食糧政策に光明を與ふる底の議論は一つもなされて居ないようである、當時仲小路農相の措置を批難の對象として米價問題を取扱つた人々も、自身として確とした具體的の調節意見は持つて居なかつたようである。政府は近く國民經濟調査會なるものを組織して、主として米價問題を調査審議すべしといふ、博識明達の士相會してそも如何なる名案良策を生み出だすか、自分等は大隈内閣時代の米價調節委員會の成蹟に徴してあまりに多くを期待し得ぬ。

米の問題は即國民糧食の問題である、國民の生命確保の問題である、國民糧食の問題が國家として最大の問題たることは、歐洲戰爭の教訓を俟たずとも自知自明の問題である、而して我國に於て此問題の解決を至難とするは、米の生産增加が至難のためではない、外米輸入の至難のためではない、自分等は我國狀に照らして猶生産增加の餘地ありとし、人口の增加に超越し得べきを信ずるものである、況んや外米輸入の道あるに於ては米の供給は益々潤澤であり得べきである、只今日に於て米の供給不足を感じたのは一時的現象であつて永久に亘るべき性質のものではない、されば米價

農民生活の改造を論ず

（米價調節の根本義を論じて農村問題解決の方策に及ぶ）

八代義定

人間社會は畢竟嘘のつき合ひである。自己存立の爲めには一切の方便は是認せられねばならぬ。正義とか人道とか其等は皆僞善者の口實である。止めよ、止めよ、我等は唯欲する如く行はんのみと。人生に對する絶望の聲、自暴自棄の叫び、之を聞いて我等は暗然として涙にくれざるをえない。

戰亂收まり、歐洲各國は今將に政治的、經濟的、社會的、教育的乃至宗教的大改造を受けんとしてゐる。かゝる改造を受けたる後の彼の國々が如何になり行くかは斷言しえない。乍併これら改造の企てが多く個人主義と反對なる意味に於ける社會主義或ひは少くとも社會改良主義に基く者なることは明かである。而も前節に於て述べたるか如く、社會主義的の國家は決して吾人の理想鄉ではないのである。日本人がウィルソンを謳歌してゐる時に、彼の地の評論雜誌「ザ・ネーション」は數々大統領が暴民心理（モッブ・スピリット）に餘儀なくせられたことを痛嘆してゐる。米國の共和政體は決して英國の立憲君主政體より理想的な者ではない、吾人の努むる所、社會的政治的變革よりも、先づ第一に精神的改革でなければならぬ。而して其の目標は、人性に對する絶望を除去するにある。人性の中に潛む高くして淸き或る物を展開して、人間精神の頽勢を挽回することである。若し然らざれば人間の將來は實に救ふべからざる墮落あるのみだ。世人は宜しくこの大問題を眞面目に攻究せねばならぬ。

は、農民に對する一種の侮辱である、一種の虐待である、疲弊困憊其極に達せる農民がかつて壹石拾圓といふ暴落に際し苦痛堪へ難きの時にありても、其堪へ難き苦痛を忍受して暴力に訴ふるが如き態度には出でなかつた、自分は玆に再び繰り返して言ふ、天下何人か農民の境遇に同情せざる、米價を下落せしむれば生產者を虐待することゝなり、米價を騰貴せしむれば消費者を壓迫することゝなる、米價中を得せしむるの道如何……

自分はいついかなる場合を通じても國民の食糧品たる穀類の價格は可及的低廉ならんことを希望する、而して此希望を實際化せしめんが爲めには生產者の生活の保障を必要條件とする、生產者の生活を保障して其生產物を比較的利害の觀念の外に置かしむることを以て米價調節の根本方針としなければならぬ、然らざれば消費者の生活の安定は永久に期待することが出來ぬ。米價調節の根本的解決が農村問題の根本的解決と相俟たねばならぬの理は此處にある。

米價調節の方法として政府の執つた米の一部分管理と收用令とは應急策としてやむを得ぬことであつたらう、別にそれ以外妙案も良法も見出し得なかつたであらう、米價に制限を付したといふこと殊に米價にのみ制限を付したといふことは農民に對する一種の侮辱なりとはいふものゝ事實かくありし以上その處置を默認する代りに今後米價暴落の際にはこれに相當の制限を付して市價を維持するの責任の當局者に存することを言明して置きたい、生產物價を決定するものは如何なる時處に於ても生產者の權利であつた、只我國の農民のみ永い間此權利を拋棄して居た、此農民の尊い犧牲の精神=たとへ無知より來たるにもせよ=に我國は今日までの安定と繁榮とを得たのである、わけて我國の商工業の今日の隆盛は農民の此犧牲の精神に負ふ所頗る大なるものがある、我商工業の隆昌に伴ふて海外貿易の發展となり、海外貿易の發展は通貨の膨脹を促し自然にあらゆる物價は騰貴の趨勢を現したのである、米價また此大勢に順應した、必ずしも買占等の人爲的手段にのみよるのではない。

の調節はおのづから一時的米價調節と永久的米價調節とに別けて研究され論議されなければならない、こゝには主として永久的米價調節の問題を取扱ひ序を以て一時的米價調節の方法に及ぼそうと思ふ。

前にも言つた如く米價問題の解決の至難は生産増加の至難の故ではない。生産者と消費者との利害が衝突するといふことである、需給の調和が困難であるといふことである、然らば何故に生産者と消費者との間に利害の衝突が生じ、需給の不調和が生ずるか。生産者たる農民が努力を生産に傾注して其最善をつくせば幾割かの生産を増加し得るは明白の事實であるけれども、生産が増加し供給が夥多となれば必ず米價は暴落する、從つて生産者たる農民の經濟的不幸を招致することゝなる、實に我農民は此經濟的不幸の中にあつて多年苦き經驗を嘗めつゝあつた、農村疲弊の一面の原因となつてこゝに國家の一大疾患を醸生するに至つた、=而して今日の米價暴騰は一因を農村疲弊に發するの理は後に說く、=かるが故に農民の生産増加の努力は却つて農民生活の悲慘を形成する陷穽であるといつてよい、國家の生命確保の重任を負ふ農民が、國家の爲めにする最善の努力が自ら縊るの結果を招徠すとは何たる矛盾ぞ、天下何人か農民の境遇に同情せざる、さはれ米の供給にして不足せんか、消費者を如何、壹升五拾錢といふが如き價格はまた一般消費者の堪へ難しとする所、今回の暴動の動因となつたことによつても其苦痛の度を察することが出來る、自分の生産者と消費者との利害の衝突とはこれをいふのである、需給の不調和とはこれを指すのである、農村農民の疲弊は米價の一時的暴騰によつて恢復さるべき程度のものではない、此一時的暴騰によつて多く利したものは農民中の一小部分であるけれども、米以外の農産物價の騰貴も米價に伴ひしを以て、一般農民も昨年來は收入所得を増して居ることは疑ひも無い事實である、されば農民の生産物中の第一位を占むる米價にのみ制限を付することは、然り農民の生産以外の他の物價の騰貴はそのまゝに放任して獨り米價にのみ制限を付すること

價の低落は施肥量等にも多大の制限を與へて居たのは數年來の實狀であつたから、確かに這裏の消息も米の生產量に違算を生じた一理由となつて居るのかと思ふ、自分が曩に農村の疲弊が米價の騰貴に關係ありと言つたのはこれである、由來商工業の隆盛と農業の發展とは兩立し得ぬ、我國の近狀もこれを證據だてゝ居る、こゝにも生產量に違算を生ぜしむる一因がある、

自分がかつていつたことがある、滿洲の野に露兵と戰つて首尾よく勝つた日本も、戰後年々の洪水に散々の目に會はされた、これは洪水の名によつて露西亞に復讐されたのだと言つてもよいと、其意味はこうである、洪水の多くなつたのは山に木が少なくなつたからである、山に木が少くなつたのは何故である、國の農民が田畑の收入で生計の維持が困難となつたので山の木を賣つて補充したからである、田畑の收入でナゼ生計が困難となつたか、これは田畑の收入が俄かに減じたためでなく各種の負擔が膨大したからである、各種の負擔が何故に膨大したか、それは戰爭の影響である、戰爭のため農家の子弟は兵隊に出る、勞力は減る、勞力の不足のため田畑の收入は尠くなる、稅は殖える、公債は引受ける、物價は騰貴する、それらの關係で田畑の收入ではとても間にあはなくなつた農民が盛んに山の木を伐り出した、山に木が無くなつて洪水が多くなつた、田畑は荒された。而して農村疲弊の度は益々甚だしくなつた、露西亞の復讐とはこれを指したのである、洪水が多くなつたので治水費土木費は增した、治水費土木費が中央地方の財政の壓迫となつて農民の惱みを一層大にした、我國に於ける農村疲弊の大いなる原因はまづこゝらにあると思ふ、帝國農會の調査による農村疲弊の原因には內因として十ケ條、外因として五ケ條を數いてあるが、此最大の原因をば入れてない、それから前にも述べた農民の生產物の價格が他の物價と不均衡のために生ずる收入の減少、これも入れてない、獨り帝國農會の調査のみならず、現代のあらゆる農村研究家の眼界から此重要問題が逸出して居るのである、自分等が常に骨に徹し髓に觸るゝ底の農村研究なしとする所

永久的米價調節の方法として世間の一部に米穀官營の議をなすものがある、自分等の見る所を以てすれば米穀官營專賣は國家非常の場合、必要の前には何物をも犧牲にするを厭はざる時にありてすらも容易ならぬ困難の伴隨することを思ふ、況んや平時に於てをやである、未だ農業倉庫の制すら完全に實現せざる我國今日の狀態にありては、米穀の國營は机上の空論たるを免れぬ、自分等も理想として米穀國營の唱導者である、しかしながらその實現には幾多の準備的事業の存在することを知悉して居る、されば今俄に米穀國營の斷行を期しても實際が是を許さぬことゝ思ふ。

然らば何を以て米價調節の根本策となすか、自分は直ちにその持論たる『一部落單位農民共濟組合法』をして國策たらしむるにありとする、產業組合法の活用と、農業倉庫の設置を內容とする農民共濟組合法を全國に實施せしむることである、是米價調節の根本策を樹立する所以の道であつて、併せて農民救濟農村振興の唯一の方法である、

本年に於て特に米の供給不足を呈したのは何に原因するか、買占の結果か、賣惜みの結果か、はたまた生產不足の結果か、それとも輸送配給の關係か、仲小路氏の說明する如く本年度に於て米の海外輸出の數量が前年に比して多くないものとし、また米の消費量に大變化を來たすべき事態が內に無かつたものとすれば、原因は叙上の四因中に求めなければならぬわけである、第一の買占は政府が取締りに尋常以上の注意を拂つたそのために却つて問題を惹起したほどであるからそれを唯一の原因とすることが出來ぬように思ふ、それから賣惜みであるがこれもよしあつたにせよ一部分に限られてあつてあれほど騷ぎの原因とするにはこれも亦無理のように思はれる、輸送關係も亦然りである、自分の見る所では實際生產量が農商務省の農作豫想とは違つた計數になつて居るものかと思ふ、それに米の海外輸出が前年と大差なしとしても、補助穀類の輸出が內地米の消費量に影響を與へたのではあるまいか、米の收獲違算なるものは農村の生產力に多少の缺陷を生じたことを意味するもので農村の衰頽と密接の關係を有する、米

らざる、されば自分をして今少しく農村振興の問題を論ぜしめてほしい、自分がさき頃農民間に一種の組合の設立をはかつて其趣意書をかいて見た、それを茲に採録する。

國民精神の振作＝その精力の有機的統一、その能力の組織的訓練＝これ實に國家として世界に優勝の地位を確保する主要條件である、獨逸は何故強い、此主要條件を比較的によく具備して居るからである、露國は何故潰亂したか、此主要條件を或種の事情の爲に喪失したからである、然らば我國は如何……此主要條件を具備しつゝあるか、喪失しつゝあるか、省みて吾人は我國力の現狀に多くの不滿を有するものである、わけて吾人は我國民中數の七割を占むる農民階級の精神能率の弛廢に深慨を有するものである、建國以來立國の基礎を形成しつゝありし我農民階級が、一面歷代爲政者の產業政策の不徹底と、他面彼の世界的產業革命の大暴風とに影響され攪亂されて、動搖常なき有樣に農村衰亡の難問題は發生した、而して我國民をして我國礎の危機を痛感せしめ愕然たらしめたのは、現時の歐洲大戰亂である、食糧問題を中心とする產業獨立問題、平素農的訓練を缺きたる兵員の戰場に於ける能力問題、此二者は別して我國家國防の問題の論議の對象となつた、否ならざるを得なかつた、吾人は此時局の大教訓を感受して、國民總員と努力を共にして此國家國防の根本問題の解決を期待した、農民を強うし堅うする以外眞の意味の國策の確立はない、然るに今日に至るまで此國家の存亡を決する重大なる農村問題の根本的解決策の見るべきものなきを遺憾とする、茲に於てか吾人は多年の苦心の結果に基づき『一部落單位農民共濟組合法案』なるものを提唱した、是我農民全體を一個の組合組織に統一せんとするものである、生產と消費其他の一切に團體的訓練を企圖するものである、然り相互扶助の精神獨立自營の觀念を調整せしめたる團體的訓練の中に國家民人存立の大義は顯彰せらるゝと確信する、（以下略……）

いよ〳〵米價調節の根本策にして併せて農村問

以てある、帝國農會調査の農村疲弊の原因は左の通り。

内因

一、耕作反別の過少なること、
二、收穫漸減率の存すること、
三、農業組織經營の不完全なること、
四、商的經營宜しきを得ざること、
五、農民生活程度の上進、
六、農民心理の變遷、
七、農民の慣習、
八、農家人口の增加、
九、農民の負債、
十、農民人格才能の缺陷、

外因

一、經濟組織の變遷、
二、國民生活の變化に伴ふ負擔の增大、
三、法律制度の變遷、
四、社會的經濟的の設備の不完全、
五、現代文明の惡影響(殊に都會の壓迫)

自分等は前記の各項目を以て何れも農村疲弊の理由たるを否むものではない、只重大なる原因の一二の閑却されたるを指摘したのである、それらの內因外因の錯綜するところ、農村をいやが上にも悲慘ならしめた、而してみえを張り體裁を飾らうとする人心の弱點にからうじて彌縫されて現狀の維持があつたのである。

自分は米價問題の根本的解決を企てゝ農村振興の問題に及んだ、然り自分等は消費者の生活の安定をはかるがための米價調節の問題は是非共生產者の生活の保障に賴らねばならぬの理を思ふものである、此理路を辿らずして米價問題の解決をはからんとすれば重大なる國家の危機を醸生せしむることゝなる、然り生產者に生活の保障を與へずしてその生產物價の下落をはからば、擾亂は地をかへて農村農民の間に起るであらう、柔順羊の如き農民なれば問題の解決を期して暴力に訴ふるが如き處置に出でずとするも、『非賣同盟』の如き形をとりて消費に對抗するに至らんか、これ由々しき國家の大事ではないか、天下有心の士まづ思ひをこゝに致せ、誰かその結果の重大なるに慄然た

組合の成立となる、而て自分は此組合制を國家法律の力を以て一日も早く實現せしめたい、これ『一部落單位農民共濟組合法案』の名ある所以である。

されば農民共濟組合法とは現在の產業組合法の中に經世濟民の秘義の多量に含蓄するを認めてより、以上の醇化合理化とを企圖する事業に付する名稱である、別言すれば西洋諸國に發達せる諸種の組合に範を採りて制定せられたる我國の產業組合を、我國狀に適應せしめて我國民共同生活の美を濟さしめんとするの計劃に對する名稱である、農民共濟組合法は大要四種類に分てる產業組合形式を融合統一せしめて自治共濟の實を大ならしむるを理想とし眼目とするものであるけれども、事は順序あり物に本末あるの理を閑却するにあらざれば、組合種類の採用は一に其組合組織者の四圍の事情を參酌して其居住地に適應する一種類一形式によりて開始せしめんとするものである、されば生產組合の形を採るも可、販賣組合の形を採るも可、信用組合の形を採るもまた可、購賣組合の形をとるもまた妨げず、要は入り易きを撰みて以て組合制の確立を促すものである、それと同時に政府に向つては中央產業組合銀行幷びに中央農業倉庫の設立を勸奬したい、前者は以て農民共濟組合資金の融通機關たるべく、後者は以て年々五百萬石程度の米穀の貯造機關たらしめたい、さすれば或程度までの米價の調節は達成し得ると思ふ、而して全國農民組合にして各自農業倉庫制を應用し活用することゝなれば米價調節の根本的解決の道はおのづから開展せらるゝであらう、玆に於てか米の官營專賣また簡易に實行せらるゝのである、然りかくして國民の需給關係以外人爲的不正手段を以て米價を動搖せしむることは全然不可能となるのである、農民共濟組合法の實施は農村問題の根本的解決であつて、併せてまた米價調節の根本的解決であるといふ自分等の見地はこれで略了解せられたであらう。

自分は叙上農民共濟組合法に就て相應の說明を試みた、さりながら自分等は必ずしも組合法の實施を農村に限るべしとするのではない、都會住民の生活の安定をはかる方法としても組合法による

題解決の唯一の方法たる『一部落單位農民共濟組合法』の內容を語るべき順序となつた。我國に於て產業組合法の制定されたのは明治三十三年、三十九年と四十二年の兩年に法規中不備の條項の修正を行ふてまづ法規としては完全に近きものとなつた、日本全國に於て組合數は實に壹萬壹千と稱すれど相當に實蹟を擧げつゝあるものは僅に貳千位のものであるといふ、組合の發達は一に組合員の親和力卽ち組合觀念の徹底如何にあるにかゝはらず、その親和力卽ち組合觀念に缺くる所あるが爲に組合事業の不振を致しつゝあるのである、此點は組合事業に意を注ぐものゝ常に口にする所である、自分は多年組合制を研究して先祖代々出生の地を同うせる一部落民を網羅して組合の單位とするとによりて親和力の發揮擴張は容易に期し得るの理を發見した、それと同時に組合の內容實際を組合員全部の諒解の下に置くの道亦一部落を單位とすることによつて期待し得る、而して組合を組合員全部の監視の中に在らしむれば、組合不振の第二の理由たる理事者の不德義は存立を保し難きことゝなる、此第一第二の不振の理由にして消滅するに至らば、組合發展の方途自づから定まるわけではないか、所謂組合利得は小數よりも大數に在るの理を以て、組合設立の最初より組合員數の大と組合區域の廣とを期し、組合員居住地の遠近、觸接の親疎を問はず爲に組合員の親和と統一とを缺き、或は組合理事者の施設に對する組合員の監視また充分なる能はず爲に其間幾多の情弊を釀し組合を禍するに終る等の障害矯正策は卽ち此一部落單位の組合制にあるではないか、現在の日本の農村の多くは數個部落の聯合に成るが故に一部落を單位として一村に及ぼし、一村に聯合組合を設くれば組合利得の增大も期し得べく、各部落組合の統一もはかり得るわけである、茲に於て農業倉庫の設置活用とならば組合事業の發展はおのづから促進せらるゝであらうと思ふ。かくして組合と組合員の實生活との關係相卽不離たるに於て農村自治の實績また顯然たるに至るであらう、一部落を一村に及ぼし一村を一郡に及ぼし一郡を一縣に一縣を一國に及ぼすとに於て始めて全國農民

疲弊困憊その極に達し、人心已に倦み、講和熱日々に熾烈を致し、これまでも屢々米國に哀訴し、或は羅馬法王を動かして講和をなさんとして、つねに聯合國の峻拒に會つて果さなかつたが、過日伊軍の爲めに致命的大退敗を蒙り、暴民各地に蜂起し、ボヘミヤ及ハンガリーは獨立を宣言し、國家は多數の民族を中心として四分五裂の形勢となつたので、墺國政府は遂に屈服して聯合國と單獨講和を締結し、社會黨は官僚政府を覆滅して共和國を建設し、茲にカール皇帝は退位し、ブタペスト郊外の一古城に蒙塵し、一千二百年に亘る歐洲最古の王朝ハツブスブルグ家は悲慘なる末路を見るに至つた。前後五ケ年間共に手を携へて奮戰せる友國と別れた獨逸は、無援孤立の悲境に陷り、その國家的大覇圖は全く挫折した。茲に巴威は率先して聯邦脫退を宣言し單獨講和をなすの決心を示すや、絶望的なる獨逸國民を驅つて革命に至らしめた。漢堡、キール、ブレーメン、リユウベック其他の北獨諸市に於て暴動蜂起し、漢堡及びキール軍港は革命派の爲めに占領せられ、軍艦の若干隻亦革命兵士の爲めに奪取せられ、伯林は赤衞軍の支配するところとなり、國内の反亂分裂測り知るべからざるものあり、多年國民を制束せる流石の軍閥も遂に、國民の前に兜を脫ぎ、ヒンデンブルグ元帥は白耳義のスパ大本營よりその麾下の軍隊を悉く擧げて革命派に提供せんことを新政府に提議し、國民の不平を緩げ、國内の秩序を保ち國家の分裂を未前に防がんとしたのである。

軍國主義が暴壓を悉にせる獨逸に於ても、その軍國主義的大理想の實現の到底不可能なるを自覺せる國民は、露國革命後、その民主的傾向を著しく增進せるは疑を容れない。食糧品の窮乏は此民主的傾向と相俟つて、民間の講和熱を煽つたのである。反之時代精神を解せざる保守派及軍閥派は飽迄頑固說を唱へ、以て一步も讓らざらんとするより、民主的、否革命的氣勢は却つて反撥的に昂つたのである。獨立社會黨のダヴドは昨年十二月帝國議會に聲明して曰く、『社會黨は革命を希はず。然れども保守派の國的趨民向を顧みざる頑迷なる態度は之を挑發するの虞あり』とダヴエトは民心

の利福の甚大なるものあるはこゝに論ずるまでもなからう、今日都會住民の生活保障の一機關として最も有力なりと認めらるゝは購買組合の設立である、猶都會勞働者の相互扶助の機關たる勞働組合の設立に對しては別に稿を改めて大いに論究したい、農村と都會とを問はず組合法の活用が人間性の健全なる發達の重要素たることは、眞に人間性を理解するものゝ否み得ぬ所であらう、自分等が組合的經營を國家に要求する所以のものまた實に玆にある。

軍國主義を弔ふ文

——獨逸帝國主義敗滅の徑路と社會黨政府の出現

工藤直太郎

一　獨逸軍閥の沒落と革命政府の出現

今春以來西部戰線に於ける第五回に亘る獨軍の大攻撃は悉く失敗に歸し、剩へ滿を持して放たなかつた聯合軍の大逆撃を受けたので、過去數ヶ月の大攻撃に於て殆ど精力を歇くしたる獨軍は、連日大敗し、月餘ならずして、ヒンデンブルグ線を奪取せられ、遂に佛獨國境に壓迫せらるゝに至つた。又墺匈軍もヴイスチラ河及アシアゴ高原に於て、伊軍の爲めに大敗を蒙り、五十餘萬の俘虜及莫大なる軍需品を鹵獲せられ殆んど戰鬪力を失つたのである。更らにサロニカに於て戰備を整へつゝあつた聯合軍は俄かにブルガリア軍を攻撃し、十萬の俘虜を獲得し、大敗せるブルガリア軍を追つてその國境に殺到したのでブルガリアは遂に屈服し、單獨講和をなし、土耳其又降伏して、中歐帝國の野心は悉く失敗に終つた。就中、墺匈國は

ト方面より伊太利國境を踰えアシアゴ高原を蹂躙し、ベネチヤ平原を席捲し、伊軍をヴイスチラ河西岸に窘迫し、更らに巴爾幹に於て、マッケンゼン軍はブルガリア軍を援けて、塞耳亞を蹂躙し、サロニカの聯合軍を一蹴し、羅馬尼に殺到し、忽ち全土を征服し、羅都ブカレストを占領し四面敵圍に陷れる無援孤立の羅軍は遂に屈服し、單獨講和をなし、屈辱的なるブカレスト條約を締結し、巴爾幹半島は殆んど獨墺軍の馬蹄に蹂躙されたのである。

露國に於ては過激派假政府を倒し、遮二無二媾和に盲進し、露國の混亂紛糾その極に達するや、獨逸は露國の紛亂に乘じて、ブレスト・リトウスク單獨講和を締結せしめ、ポーランド、ウクライナを分割獨立せしめウエストキア、リウォニア及びクールランドの波羅的(バルトック)三州をその勢力下に置き、軍事的並びに經濟的に露國の咽喉を扼せんとしたのである。更らに芬蘭を獨立せしめ、歐露悉く獨乙の支配の下に置かんとした。沃野千里のウクライナを領有し、南露の富源を收めたる獨逸は更らにコーカサスに魔手を伸ばして、黑海の制海權を收めコーカサスの要港にして石油石炭の產物無盡藏なりと稱せらるゝバツームを土其耳軍と協力して占領し、裏海の南北よりペルシヤ、トルキスタン、アフガニスタンに侵入せんとし、印度及彊犁(イリー)は益々危く、亞細亞全州を征服し、世界統一の覇業實現せんとした。世界は獨墺軍の馬蹄に慴伏せざるべからざる形勢にあつた。獨逸軍閥は之を以て、民心を收攬して、軍閥に對する國民の信賴の念を復活せしめ、國內の窮逼を拯ひ、一道の活路を得たのであつた。更らに露國戰線にある百七十萬の軍隊を露國との單獨講和に依つて、西部戰場に旋回移送して、未だ米國の大軍の西部戰線に現はれざるに先き立つて、聯合軍を粉碎し、一擧に講和を求んとしたのである。去る三月廿一日以來五ヶ月に亘る獨軍の大攻擊は軍閥最後の精力を傾倒したものであつた。否獨逸國民の精力を擧げて決戰を敢行したのであつた。聯合軍は獨軍の死物狂の猛擊に依りて、デリ〳〵と退却し、フランダース、ソンム、エーヌに於て大退却を續行し

の趨向を無視する軍閥に對して、屢警告を發したのである。中央社會黨首領シャイデマンは前首相ベートマン・ホルウエッヒの御用となれりとの非難嘲笑ありたるに不拘、昨年五月議會に於て、『我等は自己防衛の正當なる戰爭として、政府を援助し來れるが、侵略戰爭には斷じて加勢する能はず社會黨は、無併合無償金の講和を欲す』とまで極言したのである。今回の革命に際して、軍閥を顚覆し、スパの大本營に居たカイゼルに對し退位宣言書に强制的に署名をせしめたのは、最も社會黨中穩和派として、從來政府を支持（サポート）し來つた彼シャデマンであつた。獨立社會黨の首領ハーゼは中央社會黨のシャデマンと協力して新政府を組織し、共和を宣言した。今回のエベルト政府は社會黨一派によりて組織されたので、社會黨は戰時中常に軍閥の壓迫を蒙りつゝ、隱忍以つて如何にその勢力を國民に扶植せしかを知るに足るであらう。內閣員中多數社會黨代表者はエベルト、シャデマン、ランツベルグにして、少數社會黨代表者は、ハーゼ、ディットマン、バルト等である。エベルトとシャデマンは共に首相の資格を有し、聯立首相とも云ふべきものである。二派の妥協成立に對して、伯林市中は熱誠を以て之を迎へ、又勞兵會の大多數が之を贊助し、露國革命の如く分裂混亂に陷ることなく、よく國內の秩序を維持し、新國家の建設に努力してゐるのである。獨逸國民は政治的敎養高く、よく組織と統一とを重んずるのであるから獨逸は今回の革命に依つて無智蒙昧にして煽動に盲動する露國民の革命の如く國家の混亂分裂を惹起する憂は絕對にないと思ふ。

二　戰局の急轉直下

かく獨逸の革命を成功せしむるに至つた大なる原因は獨逸軍閥の決死的活動であつた。彼等の活動は軍閥最後の精力を振り搾つた活動であつた。過去三ケ年の戰爭によりて漸く疲弊困憊せる獨逸國民は講和を求むる聲は日々に切實になり、軍閥の地位も動搖來さんとした。それ故軍閥は最後の勢力を傾到して、聯合軍を屈服せしめて、國民の信賴を昔日に復せんとしたのである。

昨秋獨墺の攻勢伊太利に於て成功し、トリエス

つゝ、遂に最後の打撃を齎らせり。此打撃たる徹頭徹尾、打撃の目的たる罪惡に相當するものなり。蓋し、最後の打撃はセダンに於て來り、所謂傭兵と獨軍の嘲笑せる英軍はモンスに於て戰爭を終れり。而して昔時ホーヘンツォルレルン帝國が天下に宣言せられたるヴェルサイユ宮に於て、聯合國は同帝國の滅亡を宣す。吾人は衷心より獨逸に於ける革命が獨逸に於ける自由主義政府の建設の因とならんことを希望して止まず。然れ共、一切の獨逸人民をして戰爭より生ずる慘禍の責任を負擔せしむる能はず。戰場並に國內に於ける獨逸國民の運命は、世界歷史に於て、人類の裁判の上に殘るべき記念物なり』と。獨逸皇帝及軍閥は自己の野望非違を逐げんとて自ら招きたる罪障とは云へ。獨逸軍國主義の悲慘なる末路を顧みて、吾人は一掬の涙を禁ぜざるものである。

三　世界政策の末路と自由主義

本年一月英國首相ロイド●デョーヂ氏は勞働會協議會に聲明して曰く、『今日我等の理想とするところは、戰爭開始當初に於ける理想と毫末の差甄あらず。卽ち軍國主義の威嚇を芟除すること、制壓されつゝある國民の釋放及法律と條約との履行是れなり。聯合國の目的は決して復讐的に非ず、又帝國主義的に非ずして將來に於ける人類の自由、平和、幸福に對して、必須缺くべからざるものを穫んとする目的なることを予は今日程深く確信したることなし』と。

これ豈ロイド●デョーヂ氏一人の理想に止まらんや。アスキス、ウイルソン、クレマンソー、オルランド皆然り。軍國主義の打破と、人類平等の幸福を必然ならしむる恒久的民主的平和を實現せんが爲めに、聯合國は國力を傾倒して共に兇暴なる軍國主義討滅の大義に奮進したのである。而してこの理想に背進して、之を阻害せんとするものは、實に人類共同の敵にして、人類進步の源泉なる自由、人道を制遏せんとする壓制者である。ベルンハルデー、マツケンゼン、ヒンデンブルグ、ルーデンドルフ等の所謂普魯西軍閥がホーヘンツォルレルン王家の兇暴なる軍國主義を補佐煽動して、世界人類に斯の如き慘禍を與へたる公罪は斷じて

ソンムの要地アミアンの急危を告ぐるに至り、更らにエースに於ける佛軍はシャートー・チエリー地方に後退し獨軍は提に乘じてマルヌ河を渡り、巴里は危機に瀕し、聯合軍は再び開戰當時の悲境に陷つた。然れども無謀にして非打算的なる人命浪費的攻撃は、獨軍の末路を速める動機となつた。獨軍の勝利はその悲慘なる末路の前提であつた。第二のマルヌ戰には第二のデッフル元帥が出現した。卽ち聯合軍の運命を擔つたフォッシュ將軍であつた。獨軍は攻撃の續行によりて百五十萬の損害を蒙り兵力極度に消耗して、又餘力なきに至るや聯合軍は俄然全力を注ぎて逆撃を開始し、獨軍をマルヌ河に破り、狂瀾を既倒に回へし、連戰連勝朝に一市を陷れ、夕に一山を奪取し、獨軍を佛獨國境に敗退せしめ、遂に獨逸を屈服せしめ休戰條約を締結するに至らしめた。

去る七月までは、伊太利に、巴爾幹に、露國に北佛戰線に連戰連勝、意氣將に世界を征服せんず概あつた獨軍は、七月十八日マルヌの決戰に一敗血に塗れ、得意の絶頂より俄然奈落の悲境に轉落した。國内は社會黨の天下となり、國民離反し、カイゼルは和蘭に蒙塵して、同政府に抑留の身となり、多年專權を弄せる軍閥は永遠に氓絶せる悲劇を顧て、獨逸軍閥は果して如何の感慨かある。『倫敦タイムス』は社説に述べて曰く、『獨逸國民の偶像として、尊崇されたるカイゼルは、突如として天災厄の身に及ぶと共に、人民の爲めに忽ち背かれ其神權なるを自稱せる帝權をも否認せられ、彼が體現せる一切の事と物とは今や悉く國民呪咀の標的となれり。古來歐洲に於て、吾人未だ斯の如く沒落破滅の範圍廣大にして、急激なるものを見ず、そゞろに往古のザーキゼス、ダリアス等の運命を顧望せしむ。ナポレオンの衰運と雖も、之をカイゼルの失落に對比すれば、徐々として漸進的なりき。顧みれば獨軍は戰勝の餘威に乘じて佛の領土を長驅し一方東歐を席捲しつゝありたるより以來、僅かに數月を閲するに過ぎず。然かも今や遽々然として平和を哀求す。軍國主義の崩落は古昔希臘帝國の悲劇的末路と其經過を同うせり。絶大なる精神的偉力は隱密の間に徐々として立働き

とを待つたのである。獨逸の官僚軍閥は、軍國主義の爲めには、何物をも犧牲に供して顧みず、獨逸の商業も工業も、科學も一として軍事的企畫の一部ならざるはない。軍國主義の實現に野猪盲進するところ竟に世界征服の野望となりて人類の平和、自由を日々に脅威するに至つり、而してサライボの銃聲一發、直に全歐に暗雲を巻き起し、獨逸積年の野心の乘ずるところとなり、獨軍巨砲八月の天に轟き、リーヂエ要塞の攻略と急轉し、有史以來の慘憺たる歐洲大戰亂は開かれたのである。精神文明を誇負せる獨逸人は人類の嘗て經驗せざりし、背倫非道の蠻行を演じたのである。獨軍の占領地帶に於ける慘虐なる手段は天人共に惡むべきものにして、世界人類を戰慄せしめ、義憤を發せしむるに至つた。世界の五分の四を擧げて獨逸膺懲に奮起せしめたるは、『必要の前には、一切の法則、規約は一片の反古なり』との暴君の暴言である。

劍を以て立ちたるものは劍を以て斃ぶ。古來軍國主義を以て、その大野望を永く實現するを得たるもの幾許ありや。亞細亞、歐洲を席捲して、以てペルシヤ波斯大帝國を建設せる歷山大帝の雄圖も大帝の終焉と共に、雄圖空しく地に委し、神聖羅馬帝國も漁陽の撾撃バンダル人の侵入を蒙りて脆くも土崩瓦解し、歐洲全土を馬蹄に蹂躙し、四億の國民を震慴せしめたる英雄那翁（ナポレオン）の鴻圖も、遂に自由の劍を以て倒さるゝに至り、絕海の孤島に悶々の惱みを煙波の蕩漾に托しつゝ天命を完ふするを得ざりしを思はゞ、武を以て世界に覇を唱へんとする軍國主義の實現、嗟乎、亦難い哉。

半月旗を以て歐洲亞細亞を慴伏せしめたるビザンチン帝國の末路や如何。羅馬人ならでは人に非ずとその榮華を誇りたる當年の羅馬帝國今何處にかある。武は弱國を征服するを得んも、竟に心服せしむることが出來ないのである。歷山大帝希臘を征服するや、盛んに雜婚を奬め、希臘の習慣、制度を採用して以て、東西文明の調和を計らんとせるも、劍を以て征服せられたる希臘人は果して波斯帝國に心服せしや。否彼等は餘儀なく屈從したのであつた。クロムエルは慘虐なる手段を以て

許すべきに非ず。

昨年二月ウィルソン大統領は議會に於て、米國參戰の目的を述べて曰く、『予は米國は軍事上、經濟上の野心を以て參戰するものならざるを確言す。建國創業の精神たる自由人道を世界に於て、確保せんが爲めに、敢て軍國主義打破に奮戰せんとするものにして、米國は決して獨逸國民に對して宣戰せるものに非ず。實に獨逸國民の戴ける支配者に對して宣戰せるものなり。我等はホーヘンツォルレルン王朝及それを圍める官僚、軍閥の殲滅を期し、世界人類を兇暴なる軍國主義の脅威壓服より開放し、既に蹂躙せられたる自由、人道及國際的法則を再び確立し、全世界を自由と平和の安固の地位に置かざるべからず』と。

獨逸少數の擅權者は軍國主義の非望に盲進し、全國民を擧げて劍戟の鐵鎖に窘縛し、七百萬の生命を戰場の泥土に委し、四百萬の寡婦を路頭に迷はしめ、生長盛な可愛い子供を饑餓に泣かしめ、考幼男女國を擧げて強制勞役に服せしめ、千二百億馬克の軍費を蕩盡し、さて得るところのものは何物なりや。國力疲弊困憊の極、國家百年の大計と誇稱せる軍國主義の沒落と終るのみに非ずや。

ホーヘンツォルレルン王朝を圍繞せる少數の官僚軍閥の暴斷は、國内を擧げて悲若愁怨の巷とならしめた。勿論我等は、獨逸軍國主義の由來するところ一朝一夕のものならざるを知る。獨逸は比較的新興國である。獨逸が國家統一の覇業を完成し、而して、眼を世界に放ちたる時には、經濟上、軍事上の要地なりと見らるべき植民地は悉く先蹤の強國に占有せられたのである。こゝに於て國内に充溢せる膨張的民族を如何に分布し、發展せしめんかと云ふ國家消長の大問題に碎心せるは獨り爲政者のみではなかつた。朝野の有識等齊しくこゝに留意するところあり、ビスマルクをして『獨逸の將來は植民地にあり』と厲語せしめ、カイゼルの所謂『獨逸帝國の將來は海上にあり』と相俟つて、國民を警醒し、歷代の當局者をして、軍國主義に妄執せしめ、國家の活路を武力に訴へて拓かんとし、普佛戰爭以來四十年國力を傾盡して軍備擴張に銳意し、虎視眈々只管其機會の臻らんこ

を覆滅し、歐亞に跨る大帝國を建設せんことは、國家永遠の大計としたのである。然かも英國夙に獨逸の野心を看破し、遠征軍をシリア及メソポタミアに送りて、獨逸雄飛の牙城バグダッドを攻略し、更らにエレサレムを陷れたのである。獨逸は根本の目的となす植民地を悉く喪失し、その經濟的發展の基礎を打破せられ、その商業政策を挫折せしめられたる獨逸は、軍事上に於ては四ヶ年間連戰連勝を博したるも、經濟上に於ては常に敗戰者であつた。

今日の戰爭に於て、砲火は必ずしも敵に致命的打擊を與ふるものではない。敵に致命的大打擊を與へんとせば、武力と共に經濟力に訴へねばならぬ。敵の經濟的資源を完全に打破するを以て戰勝者となるのである。聯合軍は軍事上に於ては開戰以來四ヶ年間獨逸に一籌を輸したりと雖も經濟戰に於ては常に勝者の地位に立つたのである。これ聯合軍の最後の勝利に導く最大原因であつた。聯合軍は經濟戰に於て常に勝ち、最後にフォッシュ將軍の軍事上に大成功を以つて聯合國の勝利に歸したのである。然るに獨逸は單に武力に訴へて一擧にして、聯合國を屠らんとして、敢て經濟戰のよく戰機を左右するの大事なりしを顧みなかつたのは、獨逸軍閥、官僚の大なる違算である。これ野猪的軍國主義の大缺陷の暴露せるものである。獨逸の商業及工業も、軍國主義實現の具に供せられたるは、經濟戰に於て、既に聯合國に對して敗戰者の地位にあつた。

獨逸は求めんとして失つたのである。軍國主義を以て何物をも犧牲に供し、國力を傾盡せる獨逸の軍閥及官僚も、この事實を痛感し今春以來の西部戰線の攻擊中に於ても、國力の衰殘消耗せざるに先き立ちて、體裁よく講和を結び、戰後經濟的利益の恢復を計るべき餘力を貽し置き、民族發展の基礎を作らんと腐心したのである、獨逸はこれまでも屢々中立國を介し、羅馬法皇に愁訴し、或は米國に哀求し又は聯合國を攪亂し、隱險、譎詐あらゆる手段を用ゐて講和促進を試みたのであるが、いつも聯合國に刎ねつけられた。本年二月獨逸は窮かに瑞國を動かして、聯合國に講和を求め

愛蘭（アイルランド）を征服するや、愛蘭人をしてその脚下に跪伏せしめたるも、愛蘭人その暴政を怒むこと深く凌辱、遺恨骨髄に達し、爾來三百年の今日に至るまで愛蘭問題に就て、曠古の國難に際しても、尚英國の苦める所以のものは、これ、暴壓苛辣なるクロムエルの蒔きたる種子によるのである。

獨逸軍國主義は一時よく皆耳義を征し、波蘭を領し、羅馬尼を收め巴爾幹を席捲せるも、是等の諸國の民族は、果して獨逸軍國主義に心服せしや。否彼等は國民を擧げて、獨逸帝國を呪咀したのである。暴虐なる軍國主義を怨嗟したのである。獨逸若し領土的帝國主義を實現したりとせんも、獨逸帝國崩壞の端に導くものは、その征服せる領土より發するものたるは、火を觀るよりも炳かである。然るに獨逸は今や遂に屈服し、聯合國と屈辱的休戰條約に調印するに至り、ブレスト、リトウスク及びブカレスト條約を破棄するの已むなきに至り、軍國主義の野望全く敗亡し、これらの諸民族は獨墺の鐵鎖より開放せられたのである。

四　獨逸軍閥の最大違算

獨逸軍國主義は慘風悲雨五ヶ年の大戰亂を閱みして、今日まで何程の理想を實現するを得たりや。獨逸は假令去る七月まで過去四ヶ年の間連戰連勝以つて軍事上に非常なる成功を贏たりとせんも、開戰以來、經濟戰には悉く失敗せるに非ずや。植民地は至る處聯合軍に攻略せられ、獨逸帝國主義最大の使命たる植民地の擴張は大頓挫を來したのである。一昨年七月のメソポタミヤに於ける聯合軍の勝利は獨逸に取つて最も苦痛とした打擊であつた。獨逸東方經營の策源地バグダッドの陷落は獨逸帝國主義の一大蹉跌にして、今回の獨逸軍國主義の崩壞は實に英軍のバグダッド占領にその端を發したのである。元來獨逸の野心は、巴爾幹半島を收め、土耳古を屬邦同樣となし、黑海の制海權を握り、メソポタミヤの大平原を領し、バグダッドを歐亞經綸の大策源地となし、中歐を縱斷し、伯林、維納、ソフィア、コンスタンチノープル、バグダッド間に縱貫鐵道を敷設し、東には波斯灣を扼して印度を脅かし、西には聖都（エレサレム）を收め、埃土を衝き、地中海、紅海を制し、英帝國植民地の樞軸

のてある。

五　獨逸の再建と植民政策

されどこゝに注目すべきは、獨逸は休戰條約に於て、全然國家的利益を打破せられたりと雖も、來るべき講和會議に於てはその喪失せる植民地を恢復せんと努力することである。休戰條約第十七條に於て、『東部阿弗利加に於て策動中の一切の獨逸軍隊は一箇月以内に無條件降伏をなすべし』と規定されてあるが、この條項こそ獨逸に取りては最も苦痛とするところであらう。萊因左岸の撤退又はアルサス、ローレンの還附、及ブレストリトウスク及ブカレスト條約の廢棄よりも、獨逸に取りては、植民地の喪失こそ最も打撃である。獨領植民地の還附は、獨逸の要求中最も重要なる部分をなすものにして、講和會議の曉に於て獨逸はこの點に於て決して讓歩しまいと思ふ。何んとなれば、こは獨逸死活を決する國家興亡の大問題であるからだ。獨逸の世界政策は要するに植民地の擴張に外ならぬ。獨逸は聯合國を擊破して、不公平に所有するその植民地を奪取せんとの魂膽を以て、この大戰亂を惹起したのてある。

然るに今や却つて聯合國の爲めに自國領有の植民地さへも悉く攻略せられ、商業は破壞せられ、獨逸の經濟的資源は阻絶するに至つたのである。國家にして、その經濟的地歩を蹂躙せらるゝは、これ國家の死滅である。帝國主義を提げて、世界を席捲せんとせる興國新鋭の獨逸は豈堪ふる所ならむや。獨逸は大戰に依つて、既に破產に瀕せる國資を回復せねばならぬ。もし獨逸の經濟的利益を完く聯合國に奪取せられたならば、獨逸は竟に自滅の外ないてあらう。去る十月中旬獨逸首相マックス公は、講和基礎案件の聲明に於て、獨逸は戰後何等自國の經濟發展に拘束を設けしめざるべからずと主張したのはその理こゝにあるのてある。果然我輩が本稿を草しつゝある十一月二十三日の紐育電報は、倫敦來電として、獨逸外相ゾルフ氏は、休戰條約中五箇條の條正を聯合國に求めたと報じた。その第一は占領されたる獨逸領土と其他の獨逸領土との間の經濟的交通、二は萊因河に於ける運輸の自由、三は封鎖の解除、第四はスカンヂ

た、米國大統領は逸早く、獨逸軍國主義の沒落並びに、獨軍占領地の主權を恢復すること、損害の賠償を聲明して獨逸に答へたので、獨逸宰相ヘルトリング伯は飽くまで我國の軍事的優越を基礎とせる講和を求めざるべからずと、ウイルソン大統領に酬いたのである。當時墺帝の伊太利に致したる親翰問題暴露し、講和運動に失敗した墺匈國外相チエルニン伯は辭職し、墺國の窮迫は亦々甚だしくなつた。獨逸はウイルソン大統領の講和條件に對して、占領地併合、植民地の還附を主張せるは、獨逸の空意氣を示さんとしたもので、初めより占領地放棄及非賠償に同意すれば、軍事的優越を保てる獨逸は、その國力の疲勞窮迫を見透さるゝ樣なもので自負心強き獨逸軍閥の到底忍ぶことが出來ないのである。然るに大犧牲を拂つた西部戰線の大攻擊は、全然失敗に歸するや流石の軍閥も、精歟き、根盡きて遂にフォッシフ將軍の軍營に於て屈辱的休戰條約を試みるに至つた。獨軍はアルサス、ローレンを含む其占領地全部より撤退し、且つ、來因（ライン）右岸に撤退しブレストリトウスク、及びブカレスト條約を廢棄し、又占領地に於ける總ての損害を修覆すること、重なる軍艦を引渡し、海岸要塞を撤去すること等として、獨逸軍閥は全然屈服したのである。曩に過激派は無賠償の講和を主張し、米國政府の一部も亦之れを永久講和の基礎條件ならしめんことを容認するや、英國及佛蘭西は痛く憤慨したのである。ことに英國勞働黨の如きも昨年十二月二十八日英國勞働運動特別協議會に於て『眞實に獨立せる主權の下に白耳義が回復せらるゝこと、並びに同國及其他の占領地に對して、爲せる暴行より生じたる損害一切を賠償せしむること』を決議した。

又佛蘭西の社會黨首領アルベール・トーマの如きも獨逸はその侵略せる國家の主權を復活し、又征服領土内に於ける不法行爲に依る損害、又非戰鬪員に對して加へられたる暴行に依りて生じたる損害を賠償するまで佛蘭西は斷じて講和の提議に應せず』と聲明したのである。ところが今や聯合國の宿志たる獨逸の兇虐なる軍國主義に對する應償貫徹され獨立國の更生を見汎獨主義が崩壞した

を思はゞ、正義、自由の民主的精神の前には、如何に暴威を揮ふ軍國主義も、遂に屈服するの外なきを悟るであらう、獨逸の如きは、積年經濟的獨立に汲々として、豫め今回の大戰亂に處せんとする用意周匝の遠謀ありし故、四ヶ年の大戰を閱みするとも毫も屈するの色がなかつたのである。

吾輩は決して軍備を輕視するものではない。然れども、某國民の中には、今尚、武力萬能を主張する時代遲れの舊式なる而して、極めて粗笨なる頭腦を有するものがある。彼等は今回の獨逸軍國主義の悲慘なる敗滅を見て、果して如何の感かある。複雜なる時代に單純なる考を當嵌めんとするは、そは當て嵌めんとする方が無理である。無鐵砲である。劍を以て萬事成るの勇氣は、野猪的勇氣にして、何んとか魂の一要素なるやも知らざれ共、左樣な蠻勇は實に厄介千萬なもので、唯世界人類に迷惑をかけるに過ぎぬ。武力を以て世界の自由、平和を蹂躙せんとするものは、豫め獨逸の如く、世界を敵として戰ふの決心なければならぬ。世界の怨嗟憎惡を一身に引受ける覺悟がなければならぬ。こゝに至つて、吾輩は、獨逸國民の意氣の軒昂勇壯なる、その志操の堅忍不拔なる、今更ら感服せざる能はず。鼻柱のみ強く、其の實案外腰の据らざる某國民は一朝有事の際、四面楚歌の裏に、果してこの冲天の意氣ありや。幾ら國內で威張り散らしても、イザとなると、僅か四五十臺の墜落專門の飛行器を有して何が出來るか。三年も以前英軍がソンムの戰で使ひ古した煙臭塗血のタンクを一臺英國より貰つて今更ら嬉しがつてゐる時代ではありません。

獨逸は知識的國民である。科學的國民である。獨逸はこれまで學藝の淵叢地として世界に誇つてゐたのである。故にその驚くべき科學力の秘密を傾倒して、今回の大戰に應用したのである。武器軍需品の精巧多樣なる、輸送機關の複雜、完備せる全く想像以上にして、單純なる、非科學的なる某國人の頭腦には理解し得ざるものがある。戰爭は常に肉彈に限るなど申す者の頭腦の單純さ幼稚さ、世界大勢の進運を顧みざる愚者の妄語のみ。戰爭はいつも、日清日露の役の如きものと思ふも

ネヴィア諸國に獨逸石炭の輸出許可外一項であるが、獨逸は如何に須臾も自國の經濟資源の回復に苦心焦慮せるかを覗ふことが出來るであらう。獨逸は休戰條約を締結する以前までは、西部戰場及バルガンに於ては聯合國の要求に讓歩すると共に、露國方面に於ては經濟上の優越權を要求し、卽ち波羅的沿海諸洲に於ては商業上の利權を獲得し、リガを開放せしめて、自國の經濟上の要港となし、ウクライナに於ても自國の經濟的地歩を確立し、又白耳義アントワープ港をして、自國の物資を輸出入せしむる特權を要求せん魂膽であつた。從來矯激なる軍備擴張論者として有名なる保守黨のホルテル●ラテナウは中央社會黨のシャイデマン一派と共に目下大いに戰後の經濟的回復を急呼せるは最も注目すべき現象である。殊に今回の休戰條約に於て聯合國より軍隊の降服を求められたる中央亞弗利加に植民地を建設して、獨逸民族發展の地盤を堅めんと云ふ議論は、大問題としてキユールマン博士の如きは、完全なる平和の保障は、獨逸の經濟的利益の完全なる回復なりと聲明してゐたのである。目下獨逸政府の要石となれる獨逸社會黨のハーゼの如きも『列國間經濟上の機會均等並びに、植民地の公平なる分配は、世界の社會黨の等しく希望しつゝある正當なる共存權なるべし』と述べたるを見ても、獨逸現政府は如何に國家の活路を經濟政策に求め、自國の國際的地歩を回復せんと腐心せるかを知るに足るであらう。

六　軍國主義の迷妄

獨逸の軍閥、官僚は武力を以て一切を解決せんとした。

併かも現代の戰爭は奈翁戰爭や、普佛戰爭とは甚だしくその趣きを異にしてゐる。時代は進歩した。文明は複雜になつた。而して國際關係は益々微妙になつたのである。この複雜なる時代に於て、武力を以つて一切を解決せんと考ふる單純なる頭腦は、頑迷不靈なる官僚、軍閥の徒の專有物である。四十年間、國力を傾盡せる强大なる獨逸陸軍を以てしても、尙かゝる悲慘なる末路を呈したる

七月ミハイリス内閣出現となつた。ミハイリス内閣僅々三ケ月にして倒れ、取つて代れるヘルトリング内閣は從來の官僚内閣に比し議會に基礎を置き著しく立憲的色彩を帶びたるは、獨逸軍閥が東西南北の戰線に於て活躍し居れる裡に、民主的潛勢力は次第に增大したのである。今秋ヘルトリング首相辭職し、その後を襲へるマックス内閣は政界に於ける軍閥の沒落を示すものにして、シャデマンを擧用して無任所大臣に任ぜるが如きは、官僚が漸く國民政治に屈服せる實證であつた。革命後のエベルト現政府は全く民衆政府を實現したのである。

七　獨逸の更新と文明の改造

戰後獨逸國民は、更らに國家的發展を遂げんとの理想を抱かば決して、軍國主義を採らざるべし。官僚、軍閥の犧牲となりて、手を燒きたる獨逸國民は、爾後如何なる政府に對しても、決して軍國主義政策を採るを許さざるべし。然かも進取英氣の膨脹的獨逸民族は、この敗戰に落膽することなく、他日更らに大飛躍を試みるであらう。獨逸は戰爭の傷痍を醫し、その經濟的利益を獲得せんが爲めに『倫敦タイムス』の說けるが如く、再び東亞に對して捲土重來の擧に出づるであらう。而らば我國の使命愈々重大である。國事益々多端である。日本は飽くまでも東洋の盟主として、國家百年の長計を樹立せねばならぬ。茲に於て、因循姑息、其の日暮しのやり繰り世帶にその大責任を糊塗せる當局を大いに反省せしめねばならぬ。

有史以來の慘憺たる大戰は從前曾て見ざる程に民主的思想を刺戟した。砲煙彈雨の塹壕の中には富者も資本家も、勞働者も、學者も、無學なる者も互に階級觀念を沒し、日頃の敵視、確執を忘れ塵に塗れ、血に塗れ、艱難慘苦を俱にして、祖國の爲めに殉じたのである。戰友の至醇なる心情は最も階級の障碍を徹去せられ、四民平等、心は同じ、身は同じ、俱に國難に奮戰したのである。この同胞主義は戰後益々伸長せらるゝに至るであらう。鮮血の洗禮に生き乍らの地獄の苦しみを受けたる國民は、軍國主義に懲り、自由平和の人道的文明の有難さを痛感するのである。今回の歐洲大

のこそ、寔に以てお目出度い限りである。

若し某國にして軍國主義に徹底せしめんならば、先づ國民の頭腦を根本的に改造することが急務である。二十五箇師團の擴張や八八艦隊の完成などは、これより見れば、實に枝葉の問題である本末を顚倒せる國策である。其次には、經濟上の獨立を計るべし。昨年の夏米國が僅々十四五萬噸の鐵材輸出を禁止せりとて、米國に特使まで出して、大騒ぎを演ずる國民は一朝有事の際、獨逸の如き運命に陷る時には如何なる策に出づるか。獨逸の如く、四圍に大敵を受けてよく之を防止し、よく四ケ年の籠城をなすを得る自信ありや。米鐵禁止に國を擧げて錯愕狼狽し、一年有餘の抗議をなして、それで結局泣き寢入りとは、餘りに情けないではない。かかゝる狀態では如何ですか、寺內前首相の云ふ武器の獨立を期せんや。況んや寺內前內閣の表看板たる經濟上の獨立に於てをや。

獨逸は鐵の產出額世界第一と稱せらるゝアルサス、ローレン兩州を佛蘭西より獲得し、同じく世界第一の稱あるクルップ兵器廠を有してゐる。又セルシャ、ババリヤ地方よりは、軍需品に必須なる銅鉛の多大なる產出額あり。北部獨逸よりは石炭の產額亦莫大なるあり。而して驚くべき科學文明がある。獨逸は自給自足主義にて五ケ年間押し通せるは、天惠の富饒なる爲めである。然かも獨逸の自給主義卽ち軍國經濟は、聯合國の國際經濟に打破せられ、獨逸の崩壞を導いたのである。

兇暴なる軍國主義は、遂に滅亡して、自由民主の精神が最後に凱歌を擧げた。昨年八月廿八日、米國國務卿ランシング氏は、羅馬法皇の講和提議に對して、『世界の合理的平和を確立するを得るは唯中歐帝國の瓦解あるのみ』と答へたるが、今や聯合國はよくその目的を達した。

獨逸に於ては軍閥官僚俄かに屛息沒落し、民主主義は次第に勢力を得つゝある。現にシャイデマンの率ゐる中央社會黨は帝權の縮小と選擧權の擴張と、政府の改革を提げて、政府に迫りたるは一昨年の五月である。これに依りて、內閣は窮境に陷り、首相ベートマン・ホルウエッヒが八ケ年間占有せる臺閣を去らざるべからざるに至り、同年

くはない。もつと有意義な事業にその勢力を用ゐたいと云ふのが一般の人々の考であらう。それと同様に、人類生活から不生産的な悲慘な戰爭は何んとかして再び起らぬ様にしたいと云ふのが、今日では世界全般の要求となつたのである。この要求が、今回國際聯盟と云ふ問題で具現されたのである。軍國主義の本家本元の獨逸に於てすらも、この度の革命に依つて、戰爭は影をひそめて、平和熱が熾んになつたのである。

世界人類の衷心の要求として、國際聯盟その物の性質上何人も異論はないが、たゞ、それが實現の方法如何は問題である。平和確保其物の可否は問題ではないが、その實現の方法が異論百出する困難なる問題である。

哲學者カントは『永久世界平和論』と云ふ著述を發表して、永久的世界の平和を希望したのであるが、永久の世界平和は古來學者の屢々說いたところで、問題その物は決して新しいものではない然し、これは多くは學者の學究的な理想論て、實際の政治に立脚して論を立てたものではない。學者の思索攻究からなつた單に抽象的な理想說に過ぎないのである。勿論實際の政治的見地から多くの政治家も永久的なる世界平和論を唱へたるものも尠くはない。然し今迄これを唱へた政治家は多くは、小弱國の政治家である。瑞西、和蘭、ルクセンベルグ、埃及、印度、又はシャム等の强大國間に介在して常に壓迫不安を蒙つてゐる弱國の政治家は、自國の安定保全を維持せんが爲めに唱へた論である。弱國の政治家は正義、公道、國際法を楯に取つて强國に訴へ、强國の壓迫より脫せんとするのである。正義公道又は國際法の嚴守は弱國の獨立保全の最も大切な武器である。然し乍ら、大國の政治家は弱國の政治家の主義その物には勿論贊成であるが、遽かにその要求に應ずる譯には行かぬ。プリンシブルとしては贊成であらうが、弱國の主張通りにやれば、强國の利益は全然打破せらるゝことゝなる。英國は埃及や印度を放棄して、獨立國とせねばならぬ。日本は朝鮮も臺灣も棄てねばならぬと云ふ論になる。

それ故大國の政治家も、眞に正義公道に熱中し

戰は文明の更新、生活の改造を齎らせるものにして民主的文明は新に世界を支配せんとする機運を作つたのである。

國際聯盟は可能なり

法學博士　吉野作造

一

國際聯盟の實現の可能なりや又は不可能なりやの問題はこれまで隨分論ぜられた。予輩はこゝにこの問題の内容を研究して、これに對する解答を與へたいと思ふ。此度の大戰の結果として、世界人類は著しく平和熱が昂つたことは覆ふべからざる事實である。戰爭は實に悲慘事である。莫大な人命と國費を蕩盡してさて得るところのものは如何と冷靜に顧みれば、國運を賭して殺戮戰を行ふのは實に馬鹿々々しい。それ故戰爭は避け得らるべきものならば、成るべく避けたい。何んとかして戰爭と云ふ悲慘事を人類の生活から芟除したいと云ふことがこの大戰の結果として痛切に感ぜられたのである。

ところが一方に於ては、戰爭を是認するものがある。戰爭に依りて世界が進歩するのである。世界文明は戰爭のある度に更新するのである。文明を改造するのは戰爭に依らねばならぬと云ふものもある。然れども、戰爭を是認するのは、例へば世の中に掏摸や泥棒があるから、社會が進歩するのである。掏摸や泥棒がなかつたならば一般に人々が懶けて、少しも警戒心がなくなる。泥棒の刺戟がないから、社會の進歩も發達もないと云ふ論と同一の愚論で、毫も採るに足らぬ論である。然しこの社會から泥棒を絶滅したい。人間の大切な勢力を單に掏摸や泥棒を用心する爲めに浪費した

する努力を實際的に表はしたものである。今回のヴエルサイユ講和會議に於ても講和その物の本質はさして重大なる問題に非ざれ共、國際聯盟問題即ち世界改造の根本問題に就ては幾多の難點もあり又議論もあるであらう。然しこの問題の詳細なる案件は今日まで發表されないのであるが、國際聯盟は如何なる條件に依りて確立されるか、又はこの條件は今日の國際關係より見て可能なりや否やをこゝに聊か研究して見たいと思ふ。

二

予輩は國際聯盟の確立の原則として三箇の主要條件が必要であると思ふ。第一は、國際聯盟の規約を完全にすること、第二は、國際法を強行せしむる法律を制定せしむること、第三は國際的制裁權を確立することである。國際法は文明の進歩するに從つて今日まで大に發達した。然かも獨逸軍國主義に依つて一度は蹂躙せられたる國際法も戰後はその權威を恢興して益々發達する運命を有してゐることは予輩の豫言し得るところである。國際法其物の發達は敢て疑ふところないのであるが、世界平和の最も重要なる國際法強制組織の成否が問題である。

或る一部の論者は假令國際同盟が組織さるゝとも、表面は國際法は公平であらうが、實際に於ては、大國の利益を得る樣に國際法を行使するであらうと說くものがある。つまり大國は權力を以つて獨逸の樣に國際法を勝手に解釋して、小國の利益を無視して、小國は依然として壓制を蒙つてゐるのであるから、眞の世界平和などは實現さるゝ由はないと云ふのである。然しこれは國際法の權威を認めぬ論で眞に國際法が列強承認のもとに確定されたならば、國際法は實際に權威ある制度として國際的正義を實現することが出來るのである。法の命ずるところ大國も小國もないのである。國際法より見れば諸國平等であるべきだ。然るに國際法に強制組織を設けると云ふ問題は、議論のあるところで、果して、今日の世界の狀態より觀て國際法の強制組織を實現することを得ざるものなりや。

これに就て說をなすものある。と云ふのは一國

てゐるもの以外には、小國の主義主張に耳を傾けずに、なるべく敬遠主義を採つて來たのである。一八九九年露國皇帝が提議した萬國平和會議は別問題として、これまで、年々平和議、會國際法研究會が小國に開催されたのである。ところがその平和會議を主催するものはいつも、丁抹、和蘭、白耳義、瑞西と云ふ様な弱國の政治家である。平和會議や國際法會議の時などはこれら小國の一流の政治家が出て堂々と意見を述べる。強國からは第三流四流の政治家がほんの義理合に出席して、無言のまゝ隅の方に控へてゐるに過ぎぬのである。かゝる時には強國の言論はいつも振はぬのである。

小國の政治家が如何に力んでも大國の政治家は眞面目に之を援助しない中には、その主張には毫も權威はない。實際問題としては少しも威力がない。平和保障の爲めに國際的原則を作らねばならぬと云ふ主張は、素より大國の政治家の是認するところなるも、自國の利害問題よりいつも、之れに觸るゝを避けたるが故に、今迄實際問題とはならなかつたのである。平和論はこれまで、一種の空想、又は弱國の言草として輕蔑されたのは之が爲めである。

萬國平和論、國際會議は必ず眞面目に討究さるべき問題であるが、憾むらくはこの問題の提唱者はこれまで常に弱國の政治家であつたので、その價値を低下されたのは誠に殘念である。萬國平和論や國際的正義は獨逸などでは痴人の夢として相手にしなかつた。獨逸に取つてはこの問題はその國是に全然反してゐるのであるから、敬遠してゐたのは無理もないことである。それ故にこの説を權威あらしむる強國は一國もなかつたのである。

ところがこの度の大戰爭の結果、弱國の政治家がその獨立安全を保たんが爲めに利用し來つた問題は、強國の政治家に依りて眞面目に論議されたのである。これ今回の大戰の生みたる最も重大にして價値ある問題である。

卽ちウイルソン大統領やタフト氏に依つて唱へられた『平和強制同盟』、又は英國の前外務大臣グレー卿の唱導せる『國際聯盟』は強國は率先して國際的正義を確立して、永久世界平和を實現せんと

影響は相互的になるに從つて、利害關係も段々擴大した。

封建時代には、多くは個人的利害又は藩の利害に基いて制裁を下したのであるが、今日では個人生活の安固は、その村、郡、縣、或は國の安固と密接な關係がある。文明の進歩に伴つて社會に一つの統一力が出來たのである。而してこの利害關係に基きたる制裁力は國際的に擴大したのである。勿論國際上の制裁的はまだ國内の制裁力の如く權威がなく又徹底せぬのは事實である。然し制裁力は漸進的のものであるといふことを心得ねばならぬ。

例へば一國が實に專横を極める。國際法に違反しても、自國の利益を計らんとして、他國に迷惑をかける。それでは他國は困る。自國の存在さへも脅かされることになる。初めの中は列國は默視してゐても、一國が不法行爲を重ねると、佛の顔も三度にて、列國間に不知不識の中に制裁力が段々力を得て來るのである。獨逸の如きも餘りに横暴を極めたので、列國の義憤が合一してこゝに獨逸鷹懲の制裁力が發現したのである。これ今回の大戰の原因である。

支那に於ても、袁世凱や段祺瑞の様な、壓制主義者や武斷派がクーデターをやつて國會を蹂躙することを反覆してゐる中に、これではいかぬ。どうかせねばならぬと云ふ決心が國民間に益々力を得て來る。正義の力は正義を蹂躙さる度に益々反撥的にその力を得てくるのである。而して遂には正義は國民の輿論となつて、到底之を蹂躙することが出來ない様に嚴然たる制裁力となるのである。即ち制裁力は一種の社會的勢力となるのである。利害關係を共通にした一種の國際法の原則である。それ故社會的には國際的制裁力は社會全體の確信がなければ行はれぬ。確信が制裁の根本である。

封建時代の制裁はその制裁は自己のインターデペンドされる範圍に限られてゐたのであるが、今日は個人の生活は著しく擴張された。個人の生活は社會のあらゆる方面の影響感化を受けてゐる。今日は交通頻繁、經濟上に於ても相依り相助け、個人生活から社會的勢力を分つことが絶對に

內、卽ち單一なる主權を有する國家に於ては强制組織は成立し得る。然るに多數の獨立國卽ち多くの主權者が各自割據せる國際間には强制組織の實行は不可能である。一國と國際關係とはその本質を異にしてゐるのであるから、國際間には、一國內の如く、法則、道德を以て制束することが出來ないのである。國の內部には主權者の制裁があるが、國際間には之がない。國際間に超越して絕對の主權者がなく、單に列國が便宜上約束した法則であるから、一國が之を蹂躙してもその國を制裁する絕對の主權者又は權力はないのである。

開戰當初獨逸は白耳義の中立を蹂躙したのであるが、國際上の絕對的主權者がないから、已むを得ず、蹂躙された國家が武力に訴へて自國の自由獨立を保全せねばならぬ。それ故つまるところは何時も戰爭となるのである。正邪の爭ひを解決するには戰爭あるのみであると云ふ說を立てるのであるが、然しこの議論は餘りに法律論に囚れてゐると思ふ。一體國內に統一的制裁力が實質的に發揮されたのは極めて最近のことである。封建時代には統一的な制裁力と云ふものがなかつた。地方に依りて制裁力が異なるのである。例へば仙臺藩と熊本藩とでその制度法律は異なるのである。それ故仙臺藩で當然制裁を加へらるべき者が、熊本藩に於ては何等制裁をなすことなくその儘放任する例もある。罪科その物に對する法律的見解は藩に依つて異にしてゐるのである。卽ち仙臺藩で惡いことをした人間が熊本藩に飛び出せば別に所罰されないこともある。他藩に行つて惡事をなしても自分の藩に歸れば、その所罰を蒙ることがない。これは利害關係が藩々に依りて異にしてゐるからである。ところが自分の藩內に惡人があれば之を制裁し樣と思ふのは、直接利害關係があつて、惡人に制裁を加へて置かなければ、その團體の生活の安全が脅かされるからである。自分の生活の安全が脅かされるところに初めて之が制裁の必要を覺るのである。卽ち制裁の如何は、その人の生活に、密接に關係することに依つて定まるのである。ところが文明の進步に伴つて社會は段々有機的になり、個人の生活範圍が擴大し、個人生活の

である。日米問題の根本は人種問題であるとは屢々說かれたことであるが、然しこれは通俗の人間の云ふことで、日米間の紛議は決して單に人種問題からではない。嚴密に云へば全く經濟上の問題であると思ふ。ただ人種の差は、風俗、習慣の差を伴ふのである。それ故相違の點を互に理解せぬ時には甚だ面白くない事件も生ずるのである。その誤解を一掃するにはどうしても國際的教育を國民に施す必要がある。卽ち同類意識を訓練せねばならぬ。

經濟上に於ても前述の如く、各國民は割據してゐるのではない。今日の經濟組織は單位を個人又は一の團體にのみ置く事が出來なくなつたのである。經濟組織は全く世界的となり國際的となつた經濟組織は一單位であるから、他國の經濟界の動搖は直接に自國の經濟界に影響する今日の世界文明は經濟上に於ては一單位であるから、國際間の戰爭は不可能であると云つたノルマン・エンゼルの說は依然として正しいと思ふ。

國際平和の主張は十九世紀後半紀期より次第に旺んになつて、一八九九年露帝の提議に依て萬國平和會議を開催するに至るまで發展し軍備制限問題も同會議で討究されたが、獨り獨逸が反對したる爲めに軍備制限問題は直に葬られた。軍備制限問題はその物の性質上各國一致せねば實行することが出來ないのである。丁度商賣人の組合と同樣て滿場一致して規約を定めなければ、組合制度が成立する譯には行かぬ。一八九九年の萬國平和會議に於ける軍備制限問題も獨逸の反對に會つて直に頓挫し、獨逸が軍備を擴張すれば、勢力の均衡上他國も亦軍備を擴張せねばならぬことになる。一八九九年以後列強が國力を傾到して軍備擴張に腐心したのはこの點であつて。軍備擴張の競爭其物の爲めに軍備を擴張したのではない。全く他國との均衡上行はれたることである。年々競爭的に軍備を擴張すれば國民の負擔は益々重くならざるを得ない。各國ともに國費の三分の一は不生產的なる軍備擴張に消費して仕舞ふのである。それ故軍備擴張の經濟的大負擔に堪へ切れぬ國家は已むを得ず、間諜や秘密探偵を假想敵國に放つて、そ

出來なくなつたのである。昔の様に、生れ故郷に死ぬるまで居る人も段々尠くなり、必要に依つては諸方に轉々して生活を營まねばならぬ時代となつたのであるから、個人の考へも勢ひ社會的、國際的にならざるを得ない。それ故、民衆の幸福安寧を破らんとするものがある時には、何人にも共通的にその影響を蒙るのであるから、全體を通じたる即ち共通的制裁力に訴へて、邪惡を懲さねばならぬ。國際的制裁力も國民が國際的道義を自覺する時に、必ず實現せらるべきものである。それ故、國際的強制が今日の世界に成立することを得ぬと云ふ議論は甚だ根據がないものと見ねばならぬ。

三

由來人間には同類意識と云ふものがある。人間は社會的動物であると云ふが、個人の生活そのものが既に小なる社會を形作つてゐるのである。相頼り相助けると云ふ傾向が一面人間の本能とも云ふべきもので、その範圍が漸次發達して、國境を越えて國際的に擴大さるゝ時にはこゝに人類共同の意志が生ずるのである。國際的正義に對する各國民共通の意志があれば、これを打破せんとするものに對する共通的制裁がなければならぬ。又經濟上に於ても、世界各國密接なる關係がある。今回の大戰に於て我國の蒙つた經濟上の影響は實に甚大なものである。善惡ともに痛切なる影響を受けてゐるのである。

歐米の經濟界が動搖するれば直接に我國民の經濟生活に動搖を來たすのである。それ故に、精神的の同類意識と、物質的生活の相互影響をよく研究すれば、國際聯盟は必ず實現せらるべき運命にあると思ふ。

ところが幸に歐米人は一般に國際的正義に對する精神的の基礎が確立してゐる。日本では門を出づれば七人の敵ありとか人と見たら泥棒と思へ等と云ふ實に怪からぬ言草があるが、これは封建時代の偏狹なる家族主義の生じたる缺點で、同類意識即ち社會意識の敎養がない證據である。今日歐米では東洋人に對しては人種的僻見は餘りない様だ。人種上の差別からいがみ合ふのは野蠻人のみ

にルシタニア號やサツセクス號が獨逸潛航艇に擊沈された爲めではない。苟しくも一國の參戰は汽船が一二隻擊沈された位で決行さるべきものではない。それ故米國の參戰は人類幸福の根本なる崇高なる原則の爲めである。近代に於て政治上や經濟上の爭ひを外にして、純然たる主義又は理想の爲めに國運を賭して戰爭したのはたゞ米國あるのみである。卽ち米國は戰爭に對して、新紀元を劃したものである。一國家の橫暴に對する國際的制裁を實行したのである。それ故國際法の强制はこの度の大戰に依りて可能であると斷言する事が出來ようと思ふ。既に國際法の强制にして可能ならば、國際聯盟も亦、世界の大勢上必ず可能なるものと見ねばならぬ。國際聯盟を實現せしむるあらゆる要素が益々多分に國際間に生ずる新時代は既に到來したのである。

飜つて國際聯盟問題に對する我國の態度は如何。日本が聯盟に加入するの可否を論議するものが多いが、予輩は可否は最早や問題にならず、聯盟に處する國民の準備が肝要であると思ふ。我國はその位置歐米とは遠く距つてゐるから、聯盟に加入する必要はないと云ふ者もあるが、これは採るに足らん愚論で、日本は依然封建時代の鎖國主義のもとにあると考へてゐる眼窩豆の如き過去の人間の云ふことである。政治上、經濟上、精神上世界人類は相依り相助けてゐる時代に、距離の遠いも近いもない。世界は一つのオルガナイズされた有機體である。殊に戰後は支那を中心として、我國は經濟上に於て、歐米と極めて密接なる關係を結ばざるを得ない。支那問題に於て、日本は精神上物質上歐米と融合する機運に進んでゐる。講和會議に於て日本は東洋に於て優越權を求むる代り西洋の方は讓歩せよと云ふ者もあるが、日本は地中海に艦隊を派して、聯合軍と手を携へて共同の目的と戰つたではないか。我國は大いに英米佛と世界改造の大事業に參與して、永久世界平和を實現する權利がある。（文責在記者）

の機會を探らんとする。それ故國際間は百鬼夜行の姿である。國際平和は如奈で保つことが出來よう。これが極端になつて遂にこの度の大戰が開始されたのである。

それ故國際間の放任主義の不可なることはこの度の大戰爭に依りて痛感された。一國が專擅なる行爲をなすことが出來ない樣に、國際間の統一的制裁力は益々必要になつたことを證明された。諸強國の戰後の決心は、國際的制裁的を確立することてなければならぬ。

四

統一的制裁力を國際間に確立せんとするは世界一般の要求であるが、これが、此度の大戰に米國が參戰せることに依りて明かに證明された。英佛は自由、正義を呼號して獨逸と戰爭したのであるが、英佛の自由正義も幾分割引せねばならぬ。と云ふのは英佛は獨逸とは經濟上、政治上其他の方面に利害が相反對してゐるのであるから、獨逸を倒さねば自國の存立さへも危いのである。それ故聯合國が戰爭をしたのは經濟上又は政治上の打捨から來てゐるのである。然るに米國は獨逸と戰爭をしても領土的又は經濟上には何等得るところがない。得るところがないのみならず戰爭に參加すれば、中立を保つて得たる經濟上の好況が影をひそめて仕舞ふのである。

戰爭に依つて利益したる富を莫大な軍費に徒消するのは結局損てある。損であることを知りつゝも米國は奮起して參戰したのは、損得に超越した崇高なる國際的正義を自覺したからだ。卽ち神聖なる國際的制裁力に訴へて、世界の平和を確立したいと云ふ理想から奮起したのであつた。米國の參戰は野心を伴はざる正義公道の自覺からであつたことを知らねばならぬ。

予輩は初め、米國は先づ聯合國側に立つて參戰することはあるまい。米國は自ら進んで左樣な損をする國ではない。米國大統領は羅馬法王と共に戰爭を調停して大戰亂終結者の名譽を得るのであらうと信じてゐた。然し獨逸の兇暴を長く座視するに忍びず、正義人道の爲めに奮起して、濟世極難の責に膺つたのである。米國が參戰したのは單

英國文明の特質

會津常治

英國では個人の意志を尊重することが、他の何れの特徴よりも著しく眼に著く。かゝる特質を持つ人々の織り出した文明が、人間味の豊かな點、換言すれば人間の持つ性情を有りの儘にノンビリさせておいて呉れる點に於いて、他に類例のないのは怪しむに足らぬ。個人の意志尊重の事實は、和平何れの時代にも現はれて居る。平時の自由教育、自由研究、自由競爭は、各種の方面に於ける彼等の活動に清新の氣を漲らせて居る。獨創發明新機軸は彼等の得意とする處である。惜しむらくは發明を保護し發育さす機關に乏しいので、あたら天才の所産が闇から闇へ葬れてしまつた例が乏しくない、アニリン染料の發明者も、トーマス鋼鐵製錬法も共に英人の發明だつたが、組織能力培養能力に於いて優つて居る獨逸人の利用する處となつてしまつた。彼れ英人は「君と同じ研究をやつて居る人が何處其處にも居るぜ」と教へてやつても「フーンそうか。でも自分は自分だけでゆける處まで行つてみよう」と答へて他人をあてにしないで、自分の努力をつゞけてゆく。時としては全く暗合する計畫や試みを別々の人が、我不關焉と實行して居ることがある。利口な人の眼にはかゝる努力は出來るだけ早く統一してしまつた方が、無駄な骨折をしない上に個々別々にやつたよりは、立派な成績があがる事と心得へて居る。處で發明とか獨創とかいふものは、この人々の考へるやうに「二二が四」とはゆかぬ處に味がある。英人の好む處は、ヴアライエテイ（多種多様）とエラステイシテイ（伸縮自在）とで嫌ふ處は杓子定規や劃一潔癖である。これを教育に就いて見てもすぐわかる。英國の傳統的精神の搖籃と見做されるオックスフォード大學に、新式も新式、最新

瑣言屑語

▲前後五ヶ年に亘つて兇暴を逞うし、七百萬人の白骨を戰場に曝らして、世界人類を慴伏せしめた流石のカイゼルも一敗地に塗れて起たず、和蘭は萊茵河畔のアメロンゲン古城に配所の月を眺むる身となつて、見果てぬ夢が漸く醒めて、あゝ浮世ぢやと喞つてゐる相だが、こゝに面白い話がある。

▲それは開戰後第二年目、卽ち一九一五年の九月、伯林（ベルリン）中央郵便局發で、『カレー市●アンダルター●ホテル內カイゼル陛下へ』と認めた葉書を出したものがあつた。無論聯合軍を侮つた獨逸人の皮肉で、今頃は勇敢なる獨逸軍は聯合軍を一蹴して英佛聯絡の死命を制するカレー港を占領し、カイゼルは當地に大本營を置き、今や將に英本國攻擊の準備中であるぞと云ふ諷刺である。

▲ところが之を受け取つたカレー市のアングルダーホテルに居た英兵は面白半分に、『前年來所在不明、伯林局を取調べよ』と附箋を附してそのまゝ突き返へしたが、これが九月七日カレー局の消印が捺されて伯林に回送された。

▲すると伯林局では、『コンスタンチノープル市を取調べよ』と云ふ附箋で更らに念入りにも、土耳其の首都君府に回送した。戰爭中にも餘程暇人がゐると見えてこの葉書を西瑞や伊太利方面に附箋で送つたが、トゞの詰りこの葉書は再び聯合軍側に迷ひ込んで來たが、最後の附箋には、『住所不明、配達不能なり。念の爲めに聖（セント）●ヘレナ島を取り調べよ』と記されたまゝ前後三年越し、附箋をドツサリ背負んだ葉書が歐洲戰場を彷徨つたのである。

▲ところがカイゼルは遂に沒落し、今や和蘭に蒙塵してゐるが、現に聯合國側ではカイゼルの所分論が大分問題になつてゐる樣だ。ロイドヂヨーヂなどは和蘭に對してカイゼルの引渡要求をなし、之を戰爭開始の責任者として峻嚴に問罪すべしと力んでゐる位であるから、カイゼルは奈翁の二の舞を演じて、セント●ヘレナ島に於てこの葉書を受け取るかも知れぬ。《德隣》

く議案は議員の一部に、待合で内示して、豫め運命を定めておき、議場では八百長的或は三百的辯論に花を咲かせて、採否を決し了り、提出者、討議者共に無責任に議事を進めてしまふ結果、偖愈實施となると疑問百出、個々の場合に官民共に行きづまつてしまふ。かゝればこそ、お上の布告はいつまでも、人民にはわからぬものとのみ思ひこませておくやうな、愚民政策が跋扈して居る。一國興廢の大戰の眞最中に、國内で長評定して居るなど、國情の違ふ我が國人からは受けとれぬ話であるが、個人の意思を尊重する英國人には、兵役服務除外を願ひ出すものもあるし、賃銀問題や他の勞働問題で、同盟罷業した向もある。如何に勞働黨員でも、その幹部はもとより頭のあるものは、國家の大事と黨事との輕重を穿きちがへる人はないが。不幸穿きちがへて居る人には、假すに時日を以てして、一向に急がない。理解のつくまで敎育する。況して我が良心の命ずる聲の方が國家の命よりも重しと確信し、良心が參加するなと命ずるから、兵役徵集を解除されたしともとむる。所謂「コンシエンシヤス、オヴヂエクタア」の如きに至つては、充分その人の意志を尊重して徵集を免除すると同時に、附和雷同を避くる爲めに、相當の取締を加へておいた。附和雷同者は信念薄弱であるから、兵役審問所の白洲で審問委員や陸軍代表から、たゝみつけられると論旨亂れて、シドロモドロになつてしまふ。併し確信ある處に條理示され雄辯備はる。コンシエンシヤス、オヴヂエクタアの眞僞は、たやすく區別がつく、吾人は一人でも多く兵員增加を必要とする時かゝる審問所を設けて、出來る限り個人の意志尊重を事實にあらはした英國人の、聰明と寬容とに對し、多大の敬意を拂ふものである。人類の理想は吾人の今定めおく國家を以て限らるべきものでない。必ずや之に超越すべきものである。國家に對する超國家的理想は、たとへて云はゞ、馬鈴薯に對する馬鈴薯の目卽ち成長芽の如きもので、これなくては國家それ自身も、永久に發達する見込がない。英國人がこの度この超國家的理想に幾分の默認を與へたのは、偶々英國文明が更に〳〵國境を越えて、

式の化學實驗室がある。科學を以て誇る劍橋大學實驗室にも、ラムゼー教授の居られたロンドン大學のそれにも、また應用化學でその盛名を馳せて居るリーヅ大學のそれにも優つて居るとは、之を見比べた友人の告げた事實である。それかと思ふと新式標榜の近世大學に種々な古風な形式を實行して、間接に傳統的精神の培養につとめて居る。獨り一國内に新舊二種の教育が共に榮えて居るのみでなく、一郡一市一村内にも、この二分子が兩々相存して居る。新しき故に新しきを選ぶでなく、幾年幾十年の實驗の後、よりよく效果あるを慥めたる後、始めて新しきにうつる。新しきものが實驗せられつゝある間、默々として傍觀して居るだけの心の餘裕がある。他人よりこの態度をみて「ズルイ」といふ。人に骨を折らせて、自分でその利益を占めやうとする腹黒い仕打とも名づけられる。だが當の本人は横着心だけから、かゝる態度をとるものとみられては聊か氣の毒である。たゞたしかに實際的效果が、これだけあると、眼のあたり見せつけられるまでは、他人の新しい仕事を信用せぬほどに、理解のはやくない人達である。その代りよく合點がゆくと、その事ばかり熱心にやらかす。名にし負ふロンドンの交通機關が、鐵道馬車から乘合自働車に改められたのは、最近二十年を出でぬと聞いては、ロンドンともあらうものが、とその緩漫さに一驚を喫するだらう。併し一度之を採用するや、今迄の非難攻撃は何處へやら失せ、忽ちにして全市自働車網で蓋ふはるゝに至つた。善に移ることはやからざるも、一度移ると決せば疾風迅雷耳を覆ふ遑なし。その理由はほかでもない。その愈々うつると決するまでには、其社會の凡ての人がよく理解して呉れるのを待つからである。近く大正四年末の徴兵案といひ、今春の教育案といひ、何れも數ヶ月に亘つて其大要或は全文を新聞紙上に公表して、輿論の批評を乞ひ、或は當局者南船北馬して、自らその案の説明につとめ、かくして充分個人を説得教育して、然る後に輿論の贊成を得た案を議會に提出する。個人の意志尊重の爲には、かゝる手數のかゝる政治的教育を、人民に施すことを吝まない。某國の如

親人主義の氣持がよく、窺はれるではないか。果然この度の戰にも、平和主義宣傳の講演の最も歡迎されたのは、ヨークシャー州であつたのは、予の親しく目擊した所である。要するに英國文明の特質なる徹底せる個人尊重の思想が、今度の世界文明を支配するに至るものと自分は確信する。

（十二月十一日）

世界文明改造の根本問題

佐野裟袈美

一

四年三ヶ月の間世界を惱ました戰爭も遂に終りを告ぐるに至つた。幾百萬の貴重なる生命を黃泉へと旅立たせ、幾千億圓の軍費を放擲たしめ、數限りなく多くの不具者を出し、更に息子を失ひ夫を失ひ兄を失ひ弟を失ひ父を失つた數限りなく澤山な不幸な人々をこの世に殘し、社會の秩序を全く破壞して大擾亂の中へ投げ込み、文藝學術の進歩を停滯せしめ、商工業を屛息せしめたこの大戰爭は、如何なる敎訓を吾々に與ふるであらうか。吾々はこの大戰爭から受け取る深刻なる敎訓に則つて世界の文明を改造すべき將來の方針を決めなくてはならない。

歐洲戰爭は甚大なる犧牲を拂はせはしたが、また一方確かに偉大なる敎訓を吾々に齎してくれた。多くの人々は戰爭の慘禍をしみ〴〵痛感したに違ひない。これだけでも非常なる敎訓である。人類は最早再びかゝる痴愚を演出しはしないであらう。吾々は戰爭を心から呪ふやうになることを願つてゐた。どうやらさうした時代が來たやうに思はれる。そして人類は本當に文明の理想に目覺めなくてはならない時が將に來たやうに思はれ

成長發達すべき力のあることを語つて居る。

英國文明の特徴とする個人意志尊重の由來を、人種學上より立證する事は、少くとも自分の學力を絶して居る問題である。が思ひ出せる範圍内でいふてみると、そのかみ地中海の南岸に榮えた地中海族といふ人種があつた。身體はホツソリとして、色やゝ淺黑く、頭部は卵形であつた。この人種が地中海北岸に殖民し、西に進んでジブラルタル海峽を渡つて、スコツトランドまで進んだ形跡がある。東に進んだものはダニユブ河の上流までも來た。多くのものは、地中海の東岸と、南岸とに止まつて海上貿易で榮えた。フエニキアやカーセージは、蓋しこの子孫の一部ではあるまいかと云はれて居る。英國人の由來海外貿易に長けて居るのは、この地中海族の血を混じて居る爲めであると信ずるものが多い。加之組織的なる獨逸系と創始的なるラテン系と打つて一丸として、組織的の弊なる機械的にも陷らず、創始的の弊なる空言不實行に陷らず、その中庸を得たる處に、地中海族の冒險的商才を加味する所、これ英國文明の人種的解釋として、妥當なものであらうと思ふ。

英國現存の地方的文明について、その特徴の著しきものを擧ぐれば、ランカルシヤ及ヨークシヤー二州の文明だらうと思ふ。兩者の文明が如何に他の地方よりも、ぬきんでて居るかは、足一度その地をふみその土地の人々と親しく交つたものは、皆肯づく所である。表面にあらはれた事實としては、兩州はマンチエスタア、リヴアプール、リーヅ、シエフイールドの諸市を有し、紡績業、海運業、鑛業、製造業の盛なる、英國富の大半は、この兩州より作り出さるゝといふても過言ではない。その中でもマンチエスタアは、古來自由貿易思想の發祥地として、その名高くリーヅ、シエフイールドのある。ヨークシヤーは、勤勉力行、門戸開放親切を以てその名著しい。その濶達の氣、落々の慨大に愛すべく、大に敬すべきものがある。民謠『ヨークシヤー、アンセム』を一誦せば『ヨークシヤー氣質の醇なるものを味ふ事が出來る。彼等は初對面の人にすら、「グツト●モーニング●マイ●ラヴ」といはずして、「グツト●モーニング●サア」といは

た誇りとすべき名譽なことゝ思ふやうになるてあらう、其處には非常なる危險がある。獨逸をあやまらしめたのは普佛戰爭の勝利に醉つて途方もない己惚れを起さしめたからに外ならない。聯合國は自分達の文明が優れてゐたので獨逸に勝つことが出來たのだなどゝ誇大妄想狂に罹つてはならない。さうなれば獨逸が自國の文明を世界に於いて最も卓越せるものと信じ劍によつてまでも世界に普及しようとした己惚れと同じ己惚れに陷ることになる。

最も公平でなくてはならない學者や思想家までも戰爭中はその頭を狂はせられたと見えて多くは偏見に囚へられて了つた。これは實際學者思想家としての權威をおとした最も恥づべきことであると言はなくてはならない。冷靜に返つたとき自分の書いたものを燒いて了ひたく思ふ時が來るであらう。ベルグソンてさへ獨逸を敵愾心から呼んで"Scientific barbarism" "Systematic barbarism"などゝ言ふ世俗の言葉に雷同して、「然り、文明によつて一層烈しくされた野蠻。』と言つてゐる、なるほど獨逸がプロシアの影響のもとに軍國主義化し機械化しつゝあつたことに對する攻擊は正しい。然しその故をもつて獨逸國民全體を野蠻人呼ばゝりをしたり、一面優れた文化の存するのを全然無視したりするのは公平なる批判者ではない。物質主義化し產業主義化したのは獨逸ばかりではない。てあるからその點て獨逸ばかりを攻めるのは不當てある。そして「獨逸の哲學は獨逸の野獸性と嗜慾と不德とを單に知的な言葉に飜譯したものにしか過ぎなかつた。」と言ふが如きは餘りに馬鹿々々しい。なるほど一方そんな哲學に支配された傾きはある。然し獨逸の本當の哲學はそんなところにあるのではない。戰爭の爲めに一般の人のセンチメンタルになるのは免れないとしても、思想家はもつと高いところより觀察し批判しなくてはならない筈である。

また中には英佛のデモクラシーの文明を獨の文明よりも優れたものとなし、世界の文明の爲めに英佛が勝利を占めなくてはならないと論じたるが如きも明らかに偏見である。デモクラシーは決し

る。

戰爭は非常なる破壞を逞しうした。確かに文明も破壞された。然しまた文明進步の上に大なる阻碍となつてゐたものも破壞された。吾々は一時文明が破壞されたからとて、それをそんなに悲しみはしない。大なる自覺に人類が到達して、眞の文明を建設する爲めに努力するやうになれば、この戰爭も人類に對しての一つの大なる試鍊を見ることが出來る。この戰爭を意義あるものとするも、無意義なものとするも吾々の將來の努力の如何によつて定まるのである。獨逸の軍國主義の滅亡はこの戰爭が齎らした大なる賚である。この影響は將來の世界を一變するに違ひない。それから民本主義の勝利もまた最も鮮かなるこの戰爭の結果として何人も疑はぬであらう。然しそれ等に就いてはもつと深い考察をめぐらして見る必要がある。

二

獨逸は確かに敗北した。然しそれは英米の文明が獨逸文明に勝つたのではない。それは獨逸の軍閥が跋扈して政治を誤り外交を誤つた結果に外ならない。獨逸は外部より破られたのではなくして寧ろ內から崩壞して行つたのである。軍國主義の上に築かれた文明が當然破れなくしてはならなくして破れたのである。それは間違つた文明であつたからに外ならない。然しこれは獨逸文明の全體ではない。獨逸文明には確かに一方に優れた點を持つてゐる。たゞそれは軍國主義や國家主義の跋扈のもとに陰の方へ隱されて表面的にあらはになつてゐなかつたまでのことである。獨逸は今や本當の文明に歸らうとして誤つた文明を斃したのである。獨逸の生粹の本當の文明はゲーテやカントによつて代表されてゐる文明である。それは國家主義の文明ではなくして、世界主義平和主義の文明である。

英米の文明が獨逸の文明に優れてゐるので最後の勝利を占めることが出來たのだなどゝ解するのは非常なる誤りである。そんな風に解する時はシュタインメッツの戰勝を優秀なる文明の證左であると見る說に左袒しなくてはならなくなるであらう。然る時は戰勝といふものを非常に意義深いま

偏見を持つてゐたことは明らかである。ヘッケルやオイケンもそれを免れることが出來なかつた。然しオイケンの辯護しようとしたのは決して軍國主義の上に築かれた獨逸のエセ文明ではなかつた。オイケンはゲーテやカントによつて代表されてゐる生粹の獨逸文明を擁護しようとしたのである。彼は哲學者といふよりも寧ろ文明批評家として重く見るべきである。彼が多年獨逸が物質文明機械的な科學文明の方へ墮落しつゝあるのに對して豫言者のやうな熱辯を振つて警告を與へてゐたのは、決して無意義ではなかつた。オイケンもこの戰爭の經過を目擊して更に目覺めるところがあつたに違ひない。學者思想家の落ち着いて正しい批判を下すべき時が來た。偏見に囚へられてゐてはならない。また民衆は正義とか人道とかデモクラシーとかいふ單なる空虛な言葉に欺かれてはならない。英雄を崇拜するやうな心持でウイルソンやロイド、ジョージやクレマンソーを擔ぎ上げたり祭り上げたりしてゐてはならない。單なる花々しい言葉の端に隨喜渴仰してゐる時ではない。眞に世界を永遠の平和に導き、新しく本當の文明を建設する爲めに、しつくりと落ち着いて深い考察をめぐらすべき時である。

獨逸の文明は決して英米の文明に劣つてゐはしない。科學は勿論のこと哲學に於いても音樂に於いても確かに優れてゐるものがある。現代の文學も決して他の國の文學に比較して劣つてゐやうとは思はれない。勿論トルストイやドストイエフスキーやイブセンやストリンデベルヒに肩をならぶべき作家はないにしても、英吉利に於けるバーナード・ショーやゴルスウオーシーやウエルズに比敵すべき位の作家は確かにある。ハウプトマンやズウデルマンや、其外シュミットやボンやライホルト・マリア・リルケやトーマス・マンのやうな愛すべき作家がないでもない、軍國主義の壓迫から解放された今後の獨逸文明は屹度最高の域に向つて衝き進んで行くに違ひないと思はれる。獨逸の未來は決して悲觀さるべきものではない。若々しい生命の力を本當の文明を建設する爲めに傾到するやうになるに違ひない。眞の文明は單に一國

て英米佛の專賣特許品ではない。獨逸の革命を見て英米最負の論者はどいふであらうか。英米のデモクラシーが獨逸を征服したのではない。獨逸のデモクラシーは英米のそれと全く關するところがない。獨逸には獨逸獨特のデモクラシーがだん〳〵しつかりした地盤を占めつゝあつたのだ。それを見得なかつたのは確かに不明であると言はなくてはならない。

アメリカがこの戰爭に參加しなかつたにしても、獨逸は決して英佛に對して究極の勝利を得ることの出來ないことは明らかであつたのであるから、少しく戰爭は長びいたにしても、たとひパリ邊まで獨逸軍が押し寄せて行つたにしても、英佛が自ら降服して媾和を獨逸に請ふやうなことは絶對になかつたに違ひないと見るならば、結局獨逸は疲弊してその軍國主義は當然内から破れなければならない運命にあつたのである。私が本誌大正七年の七月號に發表した「永久的平和の方へ」に於いて歐洲戰爭の引き分けになることを望んだのは、どちらが勝つたといふこともなければお互に怨みを懷くことも尠く、戰爭の馬鹿々々しさを痛感し、且つ獨逸國内の優れた分子が目覺めて自らの力でその軍國主義を斃して了ふことを願つたからに外ならない。聯合國が勝つたのはアメリカの力に負ふところ多いなどゝ思つてはならない。アメリカも自らの力で世界を平定したなどゝ己惚れてはならない。アメリカは要するにお世介のことをしたもの位に見てゐてよい。それに聯合國は決して勝つたのではない。よしたとひ勝つたと見なしても、それは名譽でも光榮でも何でもない。たゞ自然とさうなつて行つただけのことである。それを勝利者の如き態度をもつて獨逸國民にのぞむ如きは寧ろ滑稽である。

平和になつたのを世界の爲めに祝すべき理由こそあれ、聯合國の戰捷を祝する理由は少しもない戰捷的氣分に聯合國の國民が自らを甘かしてゐることが將來の大なる禍ひのもとゝならないとも限らない。

三

獨逸の學者思想家もまた聯合國の文明に對して

意義あるものであることを強く主張したい。

文明の經濟的要素の重大なるものであるといふ事實を吾々は決して無視しようとはしない。けれど唯物史觀は確かに誤りである。文明の進歩は決してそんな機械的のものでない。人間にとつて食物が必要であることは確かな事實であるが、然し吾々は食物を人間の道德よりも價値があるものだとは見ない、人間生活に必要なるものが必ずしも價値ではない。文化のみが價値の範疇に入るべきものである。物質力又は經濟力は文化的價値を造り出す爲めに利用さるゝとき、初めて意義を生ずるのである。然るにこれ迄多くの人々は物質的繁榮をそれ自身の爲めにのみ追つてゐた。それは一國としても變りはなかつた。歐洲戰爭は實にその破綻を示すものに外ならない。この點に目覺め來らなくては、將來の新文明を決して建設することが出來るものではない。

ハウストン・チエーンバーレーンは『十九世紀の基礎』に於いて、吾々の生活活動の種々なる表現を分類して知識とシヴイリザチオンとクルツーとし知識は發見と科學によつて齎らされ、シヴイリザチオンは工業と經濟と政治などを含み、クルツールを形づくるものは哲學、宗敎、倫理及び藝術であるとなしてゐる。そして彼はクルツールを最も重く見てゐる。これは正しい見方であると言つてよい。人間の生活には價値の階段がある。その價値の階段をだん〳〵高くのぼつて行かなくてはならない。

人間の生活に於いて何により多く高い價値を置くべきかが、最も重大なる問題である。高い價値の表はれは、卽ち高い文化である。高い價値を表現するところに、吾々の生活の理想を求めなくてはならない。

これ迄は個人としても、又國家としても、バートランド・ラッセルの謂はゆる所有衝動(Possessive impulse)のみが無制限に働いてゐた。軍國主義、征服主義、物質主義、利己主義、貴族主義、專制主義、コンマーシヤリズム、インダストリアリズムなどは皆其處から發してゐるのである。これ等が近代文明をどれだけ毒したかしれない。吾々は最

の爲めにするのではなくして、人類全體の爲めにするところから生れるのである。

四

戰前に於いて國家として目差すところは、領土の擴張と利權の獲得とであつて、その爲めには如何なる手段をも選ばなかつたのである。物質的繁榮にのみ向つて進み、あらゆる利己的な野心を充たさうとしたのである。それは何も獨逸に限つたことではなく、各國がさうであつたのである。實際十九世紀の文明は人間の物質的な慾望を極度にまでに煽り立てたところに生れた文明であると言つてよい。斯かる文明の傾向がその頂點に達したとき、世界的大戰爭となつて爆發したのである。人間が單に物質的な慾望にのみ驅られて行動してゐるときは、到る處に經濟上の利權の衝突が生ずるに違ひない。富力の强大を誇つたり、戰勝を光榮としたりする心は、世界を危險に導く原動力である。人間が物質的な征服慾を捨てざる限り戰爭は決して絶えない。戰後國際聯盟の設立によつて世界の平和が保障されるやうになれば、誠に結構なことである。然し單にそれが形式上の施設に止まつてゐるならば、人間の物質的慾望にもとづく利權の衝突を來す毎に、常に威嚇されなくてはならないことになる。そして世界の不安動搖をいつも免れることが出來ないであらう。されば形式上の國際聯盟の設立に努力するばかりでなく、先づ何よりも內部よりも各國民の心の改造をはからなくてはならないと思ふ。

それには國として富力や武力の强大は決して誇るに足るものでなく、領土の廣大がその國に權威を與へるものでもなく、また戰勝を光榮として歡喜する理由の全くないことを思ひ込ましめるにある。物質力は要するにそれ自身價値があるのではない。物質力は手段となるべきものに外ならない。物質文明の高潮された十九世紀から二十世紀の初頭にかけての文明は、まだ眞の文明の理想を實現したものではなかつた。物質文明を手段にして更にその上に築かるべき文明が眞の文明なのである。吾々は物質文明を決して否定しない。然し飽く迄も更に高い文明を產出すべき準備としてのみ

は怖れてゐる。勿論吾々はこれが杞憂であることを願つてゐる。たゞ美しい名の爲めに籠絡されないやうにしてゐなくてはならない。そして正當に責むべきことがあれば、責めなくてはならない。軍國主義は如何なる假面を被つてゐるにしても、打ち碎いて了ふ必要がある。

コンマーシャリズムとインダストリアリズムは軍國主義の兄弟である。これは獨逸にもイギリスにもアメリカにも認められる。軍國主義と共に破壞すべきは、實にコンマーシャリズムとインダストリアリズムの跋扈である。コンマーシャリズムとインダストリアリズムは利己主義物質主義の表はれである。生活を機械化し、人生の理想を低下せしめて了ふこと甚だしい。生活の手段と目的とを混同せしめて了ふのである。物質は要するに生命を保存し、また發展せしめる爲めの手段に外ならない。然るにコンマーシャリズムやインダストリアリズムは、物質それ自身に價値あるものゝ如く思ひ込むのであつて、その爲めに人間の生命をも犧牲にし、また文化的價値を尊重すべきことを全く忘れしめて了ふ。Commercial price が生活のすべてを支配して行くことになる。其處では人間の人格も手段に使はれて了ふ。今後の文明は如何にしてもコンマーシャリズムとインダストリアリズムの支配から解放しなくてはならない。

六

今後の世界に於ては社會主義及びデモクラシーの優勢になつて行くことは明らかである。社會主義が經濟上の分配をなるべく均等にしようとする主張は正いとしても、階級爭鬪を第一義の目的と心得たり、機械的な共產主義を現社會に於いて實現しようとしたりするのは確かに誤りである。階級爭鬪は富豪階級や特權階級が頑迷固陋に民衆の正しい主張を容れざるとき止むを得ざる手段として其經程を通らなくてはならないまでのことで、究極の目的でも何でもない。マルクスが階級爭鬪を餘りに高潮したことは、却つて社會主義を社會の秩序を徒らに亂すものである如く危險視さるゝに至つたもとである。社會主義が單なる物質主義の表はれとなり、勞働階級の利己心にうつたへる

早所有衝動を出來得る限り防遏して、その跋扈するやうなことなからしめなくてはならない。所有衝動は何等價値あるものを産出しはしない。それは既成のものを自分のものとしようとし、他人のものを暴力をもつてしても奪はうとし、富の無益有害な蓄積をはからしめ、富の奴隷とせしめ、そして生活の機械化を來すものである。それは保守的にしあらゆる進歩主義に反對せしめる。それは特權階級、富豪階級を造つて、デモクラシーを極力壓迫しようとする。されば吾々は所有衝動を自己保存に必要なる程度に止めて、それ以上は十分壓迫を加へなくてはならない。

さて又人間の衝動のうちラッセルの謂はゆる創造衝動(creative impulse)は飽く迄も解放しなくてはならない。それは文化的價値を造り出す唯一の原動力であるからである。文學、藝術、哲學、科學宗教は其處から生れる。この衝動はます〳〵人間生活を高めて行く衝動である。然るに現代の社會制度經濟組織は、人間のこの衝動を益々壓迫しようとしてゐる。そして人間を機械化して了はうとしてゐる。されば今後の社會を改造せんとする者は、人間の創造力の解放といふ原理に向つて進まなくてはならない。すべての方針をその原理に從つて決めるべきである。然らば各個人の生活を自由にして、十分その個性と能力とを發揮せしめることが出來ると共に、眞の文明の建設することが出來るのである。これは戰後に於ける文明改造の最も根本的な問題とならなければならない。

五

獨逸の軍國主義の破壞されたることは誠によろこばしいことである。これは各國に影響するところ多いと思ふ。然しまだ世界の平和にとつて大なる威嚇がある。それは英國のあの强大なる海軍とアメリカの海軍擴張的計畫である。これから世界の平和に對して大なる責任を負ふべき地位にあるのは、イギリスとアメリカ合衆國であることは明らかである。然るにこの二國が口では平和主義、人道主義、デモクラシーを唱へてゐながら、うちに深い野心を抱いて、暗に自國の利權をのみ擁護しようとするが如き行動に出てはしないかと吾々

とする誤つたデモクラシーに陷つてはならない。また最大多數の最大幸福がその目差すところでもないのである。文化的理想に向つて進むやうにと導かれなくてはならない。さればデモクラシーを裏づけるものは精神上の貴族主義である。これがなかつたならば、愚民政治に墮して了ふのを免かれないであらう。

人間はたゞ生存をつゞけて行くだけに意義があるのではない。外部生活を改善して經濟狀態を良好にしたにしても、單なる生存以上に出づることが出來ないとすれば何にならう。人生の理想的價値の表現である文化の建設の爲めに努力するのでなくては、吾々の生活は眞に意義あるものとはならない。吾々の物質的生活は要するに理想的價値を實現する爲めの手段である。で吾々は人間の文化の發展を辿り、文化現象を研究し、文化價値に關係せしめて個々の經驗事實の認識よりして、更に文化の將來に對して、指導の光を投げる爲めに、今後社會學の研究より一層歩を深めて文化學または文化科學の研究の必要なることを認めずにはゐられないのである。

家庭に於けるデモクラシー

平山信子

一　家庭に適用せられたるデモクラシー

今や世界の大戰亂も獨逸の屈服に依つて終局を告げ、幾年振りかで漸く平和の曙光を見やうとして居ります。今後當然起る可き緊急問題は、戰亂に依つて攪亂され又破壞せられた世界の文化の整理と改造でありませう。此際私共婦人も、小さい乍ら婦人の世界とせられて居る家庭に就いて眞面

やうなことをしてはならない。今迄の特權階級の位地を勞働階級の者が奪うにあるとすれば、新しい特權階級をつくることに外ならなくなる。

勞働問題が單に勞働者の外部的改善に止まつてはならない。賃銀を高めたり勞働時間を減少したりするのが唯一の目的であつてはならない。それ等は勞働者の生活を高める爲めの前提である。生活の餘裕をつくつて、更にそれを如何に善用するかといふことがより大なる問題でなくてはならない。さうでなくて勞働者の利己心や怠惰心や贅澤心を增長させることになつては何にもならない。社會主義が民衆を經濟的壓迫から解放して自由を得しめること、卽ち物質的な外部的な境遇の改善を唯一究極の目的とするとすれば、人間生活を餘りに物質的に視、機械的に視たものである。ラッセルは言つてゐる。「斯くの如くして社會主義を萬病藥と見るのは、私にとつては誤りであるやうに思はれる。何故なればそはよりよき經濟狀態を來すことだけで人間が直に幸福になれるものと思ひ込ましめるからである。」と。

デモクラシーは世界の大勢である。これに逆ふことは出來ない。これに逆ふものは國を亡ぼすより外ないであらう。吾々はデモクラシーを大に歡迎しなくてはならない。それは決して危險なるものでも何でもない。吾が國の政體と相容れないものではないのである。デモクラシーの眞に目差すところは、個人の性情や能力を十分に發揮せしめる爲めに、これ迄の不平等なる社會的壓迫を取り除いて、機會の均等を得しめるに外ならない。卽ち個人の完全なる生活と社會生活との調和をはかるものである。

で、デモクラシーが政治上にあつては、差し當り日本の現在の狀態に於いて普通選擧制の要求となることは當然である。これは如何にしても實現されなければならない。然しデモクラシーは決して愚民政治に墮することではない。民衆を指導するものは、やはり賢者識者でなくてはならないのである。民衆は政治に携はるにしても、賢者識者を選んでそれに任せるところにデモクラシーの眞の意義がある。民衆は單に自分達の利益をのみ目的

して、對等の人格者なる夫と妻とを基本とした家庭で、勿論其保護を受けて居る子供等をも加へるのであります。デモクラシーの行はるゝ家庭は此の種の家庭でなければなりません。前者を舊式の家庭、後者を新式の家庭とでも申しませうか。

然し折角の新式の家庭でも形式丈が新式で、其の内容の至つて舊式な家庭もありますし、又經濟上の事情或は其他の理由から、親夫婦、子夫婦ばかりで無く兄弟夫婦迄雜居して一大家族を成し、形式的には如何にも家長權主義的家庭を營んで居る様に見える處でも、意外に善くデモクラシーの行はれつゝある家庭もあると思ひます。

二　夫婦關係とデモクラシー

家庭と云ふ一小社會を構成して居る人々相互の關係を分類して見れば、先づ第一に夫婦と云ふ一男一女の關係があります。私は之が家庭の基本分子であると信じます。次に親子と云ふ關係があります。親子の關係を押擴めれば舅姑と婿嫁との關係となり。又祖父母と孫との關係となります。又大低の家庭には兄弟姉妹の關係があります。夫れから中流以上の家庭になりますと大抵召使を置きますから茲に主從の關係が生じます。小さい乍らも構成分子に斯く複雜した關係のある社會に於て、デモクラシーは如何に適用せらる可きでありませうか。

夫婦は家庭の基本分子でありまして、何れの一人が缺けても完全な家庭は成立ちません。尤も夫婦の一方が死んで他の一方が小供等のみと暮して居る場合も家庭と呼ぶ事がありませう。けれども夫れは傷ましい家庭の殘影丈であります。夫婦は家庭を造る上に之丈大切なもので御座いますから、家庭に於ける價値から云へば、二人は全く對等の人格者なる事を認めなければなりません。之れ公平を理想とするデモクラシーの主張であります。

然るに我國に於ける從來の夫婦關係を觀るならば、夫は天上天下唯我獨尊と納り返つて居て、妻は召使の如く夫に奉仕しなければなりませんでした。そして妻には發言の自由も行動の自由も與へられなかつたのであります。夫の過大な權威を擁

目に考へ、其改善を計る事は、幾分でも文化の改造に貢献する事となるのでは有るまいかと存じまして、先づ私が家庭生活に就いて日常感じて居ります事の一端を述べて、大方識者の教を仰ぎたいと思ひます。

偖て、デモクラシーと云ふ言葉は、現代の世界的標語として今日何處へ行つても聞く處で御座います。けれどもデモクラシーは、能率増進とか、安全第一とか云ふ様に、言葉自身が明瞭に其の内容を語て居りません爲か、社會の有識者階級に屬して居る筈の紳士達にして、尚ほデモクラシーは我國體を危うする危險思想だなどゝ考へ、堅實な我國民は之を口にするさへ憚る可き事だなどゝ云つてる方々が隨分ある様で御座います。けれども夫れは大層な間違だと思ひます。デモクラシーは小さく政體丈に限られた主義ではなく、大は國家より小は一家族に至る迄、あらゆる種類の社會生活に適用さる可き一つの社會道德上の主義であると思ひます。强者もあり弱者もあり、長者もあり幼者もあり、男もあり女もある社會の、其の誰にも通用する普遍的な道德上の主義だと思ひます。デモクラシーは by people, for people, with people 卽ち衆に依つて、衆の爲に、衆と共に社會を治むる制度だと說く人もありますし、又正義、人道、自由、公平を理想とする社會道德だと說く人もありますが、私は之を一緒にしたら更に一層善く意味が通ると思ひます。

私は最も小さい社會卽ち家庭に於けるデモクラシーに就て少し考へて見たいと思ひます。一口に家庭と申しましても形式内容は一樣でありませんから、何處の家庭に於てもデモクラシーが直ちに行るゝ譯には行きません。今日我國に於て營まるゝ家庭の形式を大別して二つにする事が出來ませう。一は家長權主義或は家族主義制度の家庭で、親權又は家長權萬能の家庭であります。親や夫の云ふ事はどんな無理な事でも唯々諾々として服從しなければならない家長專制の家庭であります。斯う云ふ家庭にはデモクラシーは大の禁物でありますから適用すべき餘地がありません。

も一つの家庭は所謂男女兩本位の家庭でありま

僅かに臺所の費用と被服費の一部位しか任せない。そして妻が物價騰貴の爲に臺所の費用を少しく多く請求すると、夫は傲然として妻を經濟の取り方が悪いの、無駄使ひをするのと云つて詰つたり、嫌味を云つたりする家庭が世間には隨分少くない相であります。夫れで夫御自身はと云ふに、今日も宴會、明日も交際と稱して料理屋歩きを仕事の様にして居る人が多い相であります。一體日本の男の社會には餘りに飲食の交際が多過ぎるのではありますまいか。斯様な人は家に歸れば妻の料理の味が悪いの、體裁がまづいのと云ふでせう。けれども專門の料理屋が材料に制限なく、數でこなした氣の利いた料理を屢々味はつて居る口には何處の料理屋に研究に出掛た事もない妻が、制限せられた經濟を以つて造り出す料理のさう美味に感ぜられる譯はないぢやであります。妻に美味しい料理を造つて貰ひたければ、見學の爲に時々妻に料理屋の美味を味はせる事が肝心であります。之れをしないで妻の料理に不滿を述べるならば、夫れは無理を強ひるのです。私は斯う云ふ境遇に置かれる婦人に對して實に御氣の毒に感じます。之れては正義も公平も有つたものでは有りません。料理屋位なら未だしも、斯様な男子は更に別の方面に發展する事が多い相であります。夫れから來る弊害の如何に恐ろしいもので有るかは、今玆に説明する必要もあるますまい。經濟の曖昧は往々夫を墮落に導き、終に家庭の神聖と平和とを破る基となるのでありまして、デモクラシーの大に排斥する所であります。

經濟上の事のみならず、何事に就ても秘密はデモクラシーの禁物であります。然るに今の世間には自分の日々の行爲全部を妻の前に展開して見せて差支の無い紳士が餘り多くないと云ふ事ではございませんか。私は先づ第一に夫たる人々に本當にデモクラシーの精神を吹込む事が急務だと思ひます。

夫婦は又精神的にも利益の分配をしなければならないと思ひます。何れかの一方が、知識、思想、靈性等の上の獲物が有つた時には、他の一方にも夫れを分つ事が必要だと思ひます。又互に過が有

護する爲に、直ちに夫の働を擔ぎ出し、夫は働いて生活の資を得、妻を扶養して居るのであるから、夫が權威を振うのは當り前だと云ふ人があります。夫が生活の資を得る事は家庭に取つて絕對無上の功勞であると思つて居るのでありませう。有名な女子敎育者の中にも、女は鵜飼で男は鵜だ、鵜が水中深く潛つてやつとの思ひで取つて來た魚を、鵜飼が其の頸を扼して吐出させ、勞せずして多くの獲物を手に入れる樣に、女は男に一生懸命働かせて其の得た收入を勞せずして卷上げるのだ等と云つ居られる方さへあります。夫れこそ飛んでも無い事で、斯う云ふ說に從へば、女は何もしないで人の恩惠に生きて居る寄生動物だと云ふ事になる譯です。夫れは餘りに皮相の觀でありませう。家庭の統御、經濟の整理、子女の養育、諸種の交際、其他家事萬般の仕事は決して遊戲では有りません。妻は家の內に在つて斯う云ふ目に見えない仕事にどれ丈心身を勞して一生懸命に働いて居るか、淺薄な人には解りますまい。夫は物質的報酬を受け得る所で働き、妻は報酬を支拂はない家庭の內で働くと云ふ丈が違ひで、二人とも働く精神は同じであり、家庭に對する二人の功勞は同等である事を認めなければ公平を缺きます。俯はれて主婦代りをして居る婦人などは、妻のする樣な細かい心配をする必要も無く、只事務的に家政を司つて行く丈でも可なり善い報酬を貰つて居ると云ふ事であります。そして誰にも扶養して貰くのだなどゝ恩に着せて威張られる事がありません。斯う云ふ婦人よりも幾層倍か心身を勞して家庭の爲に誠心誠意を盡して居る妻に對して、收入が無いからとて寄生動物扱ひをするならば罰が當ると思ひます。デモクラシーの行はるゝ家庭にはさう云ふ事が無い筈であります。

對等の人格者なる夫婦の間には秘密が有つてはなりません。家庭は二人が基本となつて造るものである以上、家庭に關係ある事は凡て二人の合議の上で決せらる可きものであります。從來の家庭で夫婦間に往々曖昧になつて居るものゝ一つは經濟であります。之は其の弊の及ぶ所大したものであります。夫は收入の全部を握つて居て、妻には

たならば、子供は斯うした辛い目を見なくとも濟むて有らうと思ひます。

親は子を以つて自分の所有物と考へてはならない。子供も矢張り家庭と云ふ社會を造つて居る一員て有る事を常に念頭に置かなければなりません。子供を愛するは親の自然の情であります。明けても暮れても愛する我が子に幸多かれと祈つて居るのは、拒む事の出來ない美しい親の情であります。斯くすれば子供は喜ぶ筈、斯うすれば子供は幸福な筈であると考へて、子供を自分の思ふ通りにさせやうとするのも尊い親の愛の一面で有ります。けれども親と子とは元來別人格者であります。そして又幸、不幸は主觀的のものであります。親の幸福と思ふ處を子は必ずしも幸福とは感じないかも知れません。或は又却つて不幸と感じるかも知れません。親の愛を本當に徹底させ様とするならば、眞に子供の理性と感情とを重んじて、之を害はない様に導かなければなりません。斯様な取扱を受ける子供はどんなに自由の喜びを感じる事て有りませうか。尤も未成年者の子女に在つては、理性にも感情にも誤が少く無いのでありますから、親の經驗と知識とを以つて子供の思想言行を善く考察し、是は助成し、非は之を改めしむる様に、道理と愛とを以つて懇切に教ふる事は極めて大切な事であります。けれども所謂親權を以つて子供には是非を云はせず壓服すると云ふ事はデモクラシーの斷じて許さない處で有ります。

又デモクラシーは、各人の人格や能力に依つて自然に起る差別の外に、人に人爲的の差別を設ける事を許しません。親が子供を扶養し教育して居る間は子供の上に相當の權利を持つのは當然な事て有ります。けれども何人と雖無理を云ふ權利は決して無いと云ふ事を忘れてはなりません。斯う云ふ意味に於て親と子との差別は當然有つて然る可きであります。けれども、多くの子供を持つた場合、親は子供を遇するに故意に差別を設けてはなりません。舊式な家庭に善く見る様に、長男の取扱を最も大切にして、其他は家來同然に取扱つたり、男の子供には何事も寬大になし、女の子供には萬事を嚴しくし、更に甚だしきは女の子供をし

らば、道理と愛とを以つて相互に反省を促す事が大切であります。夫婦間の理解は斯うして初めて得らるゝものであると思ひます。之れ又相互の向上發展を計る道て、人道に叶つた事であります。

夫は今迄も自由過ぎる程自由でありましたが、私は妻に對しても、もつと〳〵思索の自由、發言の自由、行動の自由を與へなければならないと思ひます。

三　親子關係とデモクラシー

次は親子の間の問題て有ります。子供の親に對する道は、從來の道德が說き盡して餘す處が無い程てありますが、只服從の德が餘り善く利き過ぎて、親の云ふ事ならば、どんな無理てあつても無條件て服從しなければならない、無自覺な盲從を以つて親に對する孝道て有ると考へて居る人が澤山ある樣てあります。殊に娘には夫れが無上大法の如く敎へられて居りますので、人間一生の中の最も重大事なる結婚問題等に對してさへ、御兩親の仰せならば少しも異存が有りません等と簡單に答へて、凡てを親の意に任せて置くのが如何にも殊勝な事と心得て居る。若しも親と反對の意見ても逃べやうものなら、夫れが如何に合理的な意見であつても、直ちに親の意に逆ふ不孝者と呼ばれ、大罪を犯した者の樣な取扱を受ける。夫れが恐ろしさに、自分に如何程立派な意見があつても口を噤んて一言も言はず、如何に美しい感情の流露も、如何に鋭い良心の咎も、沈默の中に葬つてしまつて、親の意の儘に成つてしまふのてあります。デモクラシーは社會の一員が斯うした不幸に陷る事を許しません。又、社會の一員が間違つた考を以つて行動して居るのを見ながら、假令夫れが親てあつても、夫れを默つて見て居る樣な卑怯な事を許しません。夫れは正義、人道、自由、公平の原則に背反するからてあります。

けれども子供許りを斯う責めるのは實は氣の毒な事です。何となれば、大體に於て子供は弱者てあつて、親は强者てありますから。强者の道が正されない以上、弱者は何時も强者にのみ都合の好い道德で縛られて行かなければならないからて有ります。私は强者なる親達にデモクラシーの思想が行渡つ

ますけれども決して干渉するの權利はありません。殊に親の經濟を補助し、又は進んで親を扶養する樣になつた子供に對しては親は相當の感謝を以て其補助や扶養を受けべきものと思ひます。親が子供に扶養せらるゝことを當然の權利だと心得るのは甚しき謬見だと思ひます。但し子供の方でも親が困つて居るのを見て見ぬふりをして居るならば、それは人道に背く卑しむべき不人情ものであります。

四　舅姑と婿嫁との關係とデモクラシー

親子の關係を延長したものは舅姑と婿嫁の關係であります。其中でも世間で最も面倒なものと考へられて居るのは嫁と姑の間であります。けれども嫁は息子と一體である筈ですから、嫁を遇すること息子と全く同樣にしなければならないと思ひます。此の問題に就いては既に多くの識者が色々と論じて居られます。殊に一條忠衞氏著の女大學評論には嫁姑の問題が遺憾なく論述されてありますから今私が茲に事新しく申述ぶるまでの必要もなかうと思ひます。只一言して置きたいことは、子供が配偶者を得たならば親子別居を以て家庭生活の原則とすべきものと私は信じます。此の親子別居の制度は現に我が國の貴族社會に行はれて居ります。此の點に就て日本民法の親族に關する規定は今や時代の進運に適應する樣に改正せらるべき氣運に向つて居ると信じます。

五　兄弟姉妹の關係とデモクラシー

今度は兄弟姉妹の關係であります。前にも申しました通り兄と生れ妹と生れるのは一の偶發事（チャンス）でありますから、年少の者に對して年長の者が特に威張る必要もなければ、兄弟に對して姉妹が奉仕するの必要もありません。年少者が謙遜な態度で多少經驗の多い年長者の指導を仰ぐことは美しいことであります。けれども何も特別に恩惠を與へて居もしない年長者が單に先に生れたと云ふ丈けで威張ると云ふことは不當であります。私は兄姉が弟妹の名を呼捨てにする風を改め度いと思ひます。故なくして社會に於ける對等の分子に對し、相當の敬意を拂はないと云ふことは公平の道に背

て兄や弟に奉仕せしむる様な事があつては以つての外の事であります。由來長男と生れ、次男三男と生れ、男子と生れ、女子と生れることは只一の偶發事（チャンス）ではありませんか。生れた當人には何の功過も無いのです。それを斯様な差別的の取扱をするならば、公平の理想に悖るの甚しいものであります。デモクラシーは斷じて斯様な不公平を許しません。又親は公平な目を以て子供等の能力を偏頗なく認めてやり、境遇の許す限り各が向き〳〵其能力を展ばしてやらなければなりません。勝れた才能を有つてる者も豐かな趣味を有つてる者も二男三男であるが爲めに又は女であるが爲めに其才能も趣味も展ばしてやらずに壓へ付けて終ふ様なことがあつてはなりません、各人の天賦の才能を尊重し、出來る丈の便宜を與へて之が發達を補けることは人類全體を向上進歩せしむることとなるので、是れ人道に忠實なる所以であります。即ちデモクラシーの一面であります。

それから子供が十五六歳になつたら、家庭の經濟狀態を開放して收入支出を明瞭に知らしめ、支出の内容及び方針を懇切に說明して聞かせる方が善いと思ひます。さうすれば十五六歳以上の子供は多少の分別心がありますから、家庭と云ふ自分の屬して居る小社會に對して眞に責任を感じ、無益な浪費に父母を苦しめるやうなことが無くなると思ひます。若し子供に家庭經濟に關する知識を與へず、或は故意に經濟狀態の眞相を僞つて子供の浪費を制限する様なことでは、精々善い結果を收めた處で單に子供の消費を多少減ずる位の處であつて、子供に經濟の觀念を授けたり、社會に對する責任感を養成したりすることが出來ません。且經濟の方針を秘密にすることは專制制度の特徵で、デモクラシーとは決して相容れない處であります。此理は唯り子供に對してのみでなく、分別ある家族全體に對して適當に應用すべきものであります。

男でも女でも經濟的に獨立した子供に對しては親は之を對等の人格者として取扱はなくてはなりません。長い間の經驗を持てる親は獨立した子供に對しても助言を與へる道德的義務を有つて居り

て、上下共に不平不滿のない平和な生活を樂しむことが出來る樣になるだらうと信じます。

尙ほ家庭の對社會關係卽ち親類緣者朋友知己等に對する交際に於て、デモクラシーの精神を如何に適用すべきかを一言したいものでありますが、是れは寧ろ一般社會のデモクラシーに就て論ずるを適當と思ひますから、尙ほ機會がありましたら稿を新たにして申述べたいと思ひます。

天文學と社會の進步

ヴアツサー大學教授　哲學博士　カロリン●ファーネス女史

一

この論文の目的は天文學と人間社會の日常の經驗との關係を明かにせんとするのである。この二つのものが非常に關係があると云ふことは、明白なことで、例へば我等の用ゐてゐる時の定め方卽ち時間は天體の運動に基いてゐるのであることは知識のある者は何人も承知のことで、例へば私共の時計の時間が狂へば『米國天文臺標準時間』に合はせるのである。又は時計店の大時計を見て時間の正確を計るのである。或は海上に於ても水夫や又は船旅人は、天氣のよい日に、海員が船橋（デヴッド）の上に佇んで、正午の時間や船の位置を測つてゐるのを興味を以て見るに相違ない。陸上の探險者も亦人跡なき山野に入つた時には、大空に輝く星を見て、自分の現在居る場所を知るのである。數年前バーリー氏の北極探險に際して、同じ北極探險者のクック氏と新聞紙を賑はした論爭に依つても、この事を諸君は充分了解し得らるゝであらう。

かう云ふ明白な關係の外に、一般に知られざる多くの微妙なる關係が兩者の間にあることを忘れてはならぬ。併かもそれは極めて了解し易き關係である。この關係は歷史的性質のもので、天文學

きます。デモクラシーの承認しない處であります。

六　主人と召使との關係とデモクラスシー

最後に主人と召使の問題になります。召使が御主人大事にと云ふとは昔から云ひ聞かされて居ることでありますが、自分も家族の一員であると云ふ自覺を有つて居たならば、言はずとも御主人大事に主家大事に盡すことが出來ませう。召使をして家族の一員であると云ふ自覺を有たせるのは主人の役目でありませう。先づ第一主人が其積りで召使を取扱はなければなりません、召使を奴隷と心得てはなりません。家庭の一員である以上、召使の幸福と向上發展の途とを考へてやらなければなりません。其社會に屬する人々總ての幸福と進歩向上とを計るのはデモクラシーの精神だからであります。召使にも一日中の適當な時を選んで自由な時間を與へ、心身の慰安を得させ、又智德技能を磨かせる樣に仕向けなければなりません。又主人が召使よりも色々な點に於て勝れて居るならば、常に親切と愛とを以て指導敎育する心掛がなければなりません。是れ亦人類全體の進歩向上を理想とする人道に忠實なる所以であります。是れ卽ちデモクラシーの一面であります。

又故なくして子供等に召使を使役することを許してはなりません。是は子供の敎育上色々な弊害があるからであります。その中最も恐ろしいのは子供等の心に人間を人爲的に差別する惡習慣を馴致することであります。卽ちデモクラシーの根本義に悖ることを子供等に敎へることになるからであります。

以上家庭内の個々の關係に就て、デモクラシーを如何に適用すべきかを述べて參りました。要するに家庭の誰もが for people, by people, with people の精神、卽ち衆の爲めに、衆に依て、衆と共に社會を治め且之を向上發展せしむるの精神を以て家庭生活を營んで行つたら、必ず家庭は平和幸福に治まつて行くに違ひないと信じます。そして此の家庭こそは今日の時代に於て社會の單位でありますから、此の單位さへデモクラティックになれば其他の社會は皆デモクラティックになつ

精確な古代文明の記錄はバビロニア及び埃及等の記錄である。是等兩國の記錄は、天文學上の基礎文事實の知識を有してゐるのである。是は今日の樣な精確巧妙なる機械の力を藉らずして、極めて幼稚な方法で天體を觀測したものに基いて得たる知識である。殊に埃及は昔から多くの旅行者に知られた國土で、到る處に聳え立つ宏壯なる石造の寺院や宮殿は廣く世人に知られたものである。これに反して、バビロンの古代遺跡が多く發見され、その歷史が詳かにされたのは極めて近代のことで、十九世紀に於けるメソポタミア地方の探險は、バビロンの歷史と、古代のバビロン國民は驚くべき文化敎養に富んでゐたと云ふ事實を推知し得らるゝ多くの材料を齎らしたのである。

この度の大戰爭に於ては英國遠征軍が土耳其軍と戰爭する爲めメソポタミア地方に進軍したが、その間に古代の遺跡及續々發見されたのでバビロンの歷史は益々明かになつた。我等はバビロンの歷史に對して新らしき興味を覺えたのである。今は一幷千里悉く廢墟と荒涼たる大平原となつたのであるが、華かなる繁榮を誇つた當年のバビロン國民は如何なる生活を送つたかは、我等は益々明かに想像し得らるゝに至つたのである。

二

古代人が天文の事實を學んだ機會は、彼等の住んでゐた土地の天候とか氣候とかの狀態より得たものである。彼等の日常生活の樣式は天候と非常に關係があつて、彼等の生活も性格も著しくその土地の氣候の影響を受けたのである。バビロニアの小記錄はこの事實を證明してゐるのである。メソポタミア太平原はチグリス河とイウフラチス河の流域を占め、その範圍は南カリフォルニア州位の大きさである。この平原は更らに遠く內地に及んで、西方の亞剌比亞の沙漠と、東方の波斯（ペルシヤ）の山脈との間に跨つてゐるのである。この地方は夏になると非常に乾燥してゐるが、冬になると數ヶ月の間絕えず雨が降るのである。冬は雨季と云つてこの地方は實に濕潤である。冬は三月又は四月の初めに終るのであるが、冬の季節は諸川氾濫して、南方の廣漠たる沼澤の低地は一面洪水となる。そこ

上の學說に對する人間思想の進步の階段は、人間の知的發達の尺度となるもので、同時に、舊套固牢なる辟見を脫して、人々が新らしき知識に對する虛心坦懷なる自由精神の發達せる階段を示す尺度となつた。

天文學の研究は常に多くの材料を蓄積せねばならぬのであるから、一國又は一時代の天文學者丈では完全なる研究をなすことが出來ない。それ故、天文學の研究は科學中で他の力と最も協力を要するもので、又國際的なものである。去る六月公にされた『明星の研究』は此事實をよく說明してゐる。明星を繼續して完全に研究するには、世界の凡ての天文臺が協力して研究せねばならぬ。例へば夜明け方になつて、我々が宵の明星が、もう見えなくなる時には、日本に於てはまだ夜が明けぬ頃であるから明星をよく觀測することが出來るのである。

更らに天文學は他の科學の進步にも賴ることが多い。物理上、化學上に於ける最近の新事實の發見は、多くの星を觀測する方法と學理とを供給し、星に關する知識は非常に擴大するに至つたのである。又機械的應用の進步も天文學の發達上非常に助けとなつた。何故ならば一つの望遠鏡にしても、實に科學的發達の精華を盡くしたる複雜なる機械が仕組まれてあるので、近代工學の生んだ多くの眞理は望遠鏡の中に縮寫されてゐるのである。斯の如き次第なれば、我等は最早や天文學者を目して、獨り淋しく高き觀測臺に立つて物思ひに耽り乍ら、永遠無限の蒼穹を仰いで取り留めないことを夢みてゐる實際世間とは全然沒交涉な學者と見做すことが出來なくなつたのである。勿論ある程度までは天文學者は社會から離れねばならぬ。と云ふのは、彼が仕事をするのは多く夜間であるからだ。然し彼は非常に犀鋭なる觀察者である。熟練した技師であつて、他の科學にも充分通じてゐるので、世の中のことは仲々分つてゐて、一面社會に於いて實際家であり、又俗世間と應酬する外交家である。

偖てこれより愈々本論に入つて、古代文明の最古の記錄に現はれたる天文學と日常生活との關係の發達を辿らうと思ふ。

るのである。ところが他方にマルダックと云ふ大陽の神があつて、常にこの世界を呪つて大地の崩壊を祈る魔神を征服せんが爲めに現はれるのである。彼は春分の神で、俗に金牛宮と云ふ星座がこの神の先驅をなすのである。大空に於て彼の反對の側にあるものは、冬季と雨季とを地上の人々に教ふるスコルピオ、磨羯宮《獸帶の第十宮》又は寶瓶宮《十二宮の中の第十一宮》等の星座である。

バビロン人は皆戸外に出てその涼しき夕べをすごしたのであるが、月の神は彼等の最も尊い神樣であつた。彼等は大空に輝く小舟の如き新月を頌して曰く、

『際涯なき蒼穹に浮ぶ光り輝く小舟よ。汝は寶に碧落の支配者なり。群星を統ぶる尊き主なり。』

彼等の曆表は三十日を一ケ月とする太陰曆に據つたもので、三百六十日の日數を以つて一年としたのである。然るにバビロン人はこれは太陽曆と一致しないことを知つて、それ故六ケ年毎に一回宛その太陰曆に餘剩の月を追加したのである。彼等は七日を以て一週間となし、その七日の日に各々天體の名稱を與へた。卽ち、日・月・火・水・木・金・土である。七曜日はかくて彼等の日々に用ゐる神聖なる日となつたのである。

彼等は又日蝕や月蝕をば精密に觀察した。段々精しく觀察する中に彼等は日蝕や月蝕が繰り返へさるゝ時期を豫め知る樣になつたのである。日蝕や月蝕は彼等に對しては最早や恐怖を與へなかつたらしい。粘土で作つた薄い平な板の樣なものが彼等の遺物として土中から發掘されたが、その表面に當時起つた日蝕や月蝕に就て『我等は月の十四日目に月を眺めてゐると、間もなく月蝕となつた』と云ふやうなことを誌されてゐる。

彼等が天文に關する科學的知識を增進するに從つて、段々觀察も正確に又精密になつて、占星學と云ふものが起つたのである。望遠鏡などのまだ出ない當時は、たゞ肉眼で星や月を歡測せねばならぬのであるから、ことに注意力と努力が必要であつた。それ故に天體觀測の仕事に從事してゐる者は、當時の貴族階級の人々や最も知識のある人

て住民は處々に大規模の運河を開鑿して、排水して彼等が住むことの出來る様にしたのである。バビロンは埃及とは異つて至つて建築石に乏しいのである。然し煉瓦を製造するには極めて適した精良なる材料が非常に豊富であつたのである。かゝる良質の煉瓦を彼等は建築の礎（いしずえ）として用ゐたのである。この礎は數英町（エーカー）の廣さを占めてゐて、その上に宮殿や、寺院が建築されたのである。勾配になつてゐる小徑は丘の頂きにまで拓かれて、こゝから地平線や一眸茫々の蒼穹をば何等の遮るものなく、思ふ様望見することが出來たのである。夏になると炎熱燬くが如く、人々は、日中は家の中に蟄居して又は狹い通りの家蔭にて、纔かに暑熱を避けるのであるが、夕べの涼しき風に誘はれて、人々は思ひ〳〵に家より出て戸外を彷徨ふのである。僧侶等は寺院や塔の頂上に登り、夜毎に暗き大空に燦爛と輝ける星を眺むるのである。彼等は夜の大空の美觀を眺めて、その壯嚴と崇美に打たれ、何んとも云へぬ靈威に心が躍つたのである。この大空より受ける崇高なる感興は彼等の日常生活に深き感動を與へたのである。

けれどもバビロン人は宗教的で、詩的な國民であると共に、又極めて實際的觀察に秀れてゐる國民であつた。そして彼等が夜毎に大空に輝く月や星を觀察して、天體の運行に關する多くの有益なる事實を教はつたのである。彼等は太陽は年々黄道線（エクリップック）に沿うて周行すると云ふ事實を知つたのである。又彼等は多くの星を黄道帶（ゾーディアック）の星座の中に入り行く道筋に依つて幾つにも區別し、星座の出現の狀態をその年の季節と關係せしめたのである。彼等はある星の群が東の空に現はれると、春の出水はもう間近いと思つたのである。彼等の農業上重大なる季節の到來は月や星を觀察して豫め知つたのみではなく、季節毎に開かるゝ宗教的饗宴の儀式に於ても、月や星を觀察して豫めその期日を定めたのであつた。例へばバビロニヤ人の天地創造の物語に從へば、原始時代の迷濛混沌たる世界は、チアマットと云ふ神に依つて再びこの世に現はるゝのである。この神は一種の魔神で、雨季四ヶ月の後に大地は悉く崩壞すると云ふことを豫言す

云ふものがあつた。

時計を用ゐて一分間たりとも時計を違へざらんとする現代人に取つては、二千年前の東方古代人が一日中の時を測つた心理經驗を如實に感ずるとが困難である。此事に關する最も驚くべき實例は舊約聖書に誌されたヨシュアの『長き日（ロングデー）』の話である。この驚くべき事件をば英國の天文學者モーンダーが彼の『聖書の天文學』と稱する著述の中に於て餘蘊なき說明を試みてゐる。この本に依ると、次の如き解釋が與へられるのである。

初めに心得なければならぬことは、イスライル人がその土地を占領して、そこに居を構へんが爲めに、ヨシュアがキャナン（聖地）を征服し、その人民を絕滅せんが爲めに、戰爭をしてゐたと云ふことである。諸君はこの日の事件を知らんが爲めにヨシュア書の九章及十章を讀まねばならぬ。その日は『長き日』と云はんよりは寧ろ『偉大なる日』と云はん方が適切である。蓋し、そは確かに猶太の歷史上偉大なる日であつたからである。

彼に從つてその身方となつたギベオンの市は、五人の王達の軍隊によつて脅かされた。彼等は己れ等の國土を護るために聯盟したのであつた。ギベオンの市民は急使をヨシュアに送つてその來援を求めた。ヨシュアは麾下の軍兵と『豪勇の士』とを率ゐて夜に乘じてジルガルを發し、突如として敵に逼つた。かくて敵陣と彼等の都市との間に兵を進めて、退路を絕つたのである。激戰數次にして、敵は遂に敗走した。激しき雹の暴風雨は、敗軍を襲ふて多くの軍兵を殺した。『雹の石に打たれて死にし者、イスライルの子等が劍もて殺せし者よりも多かりき』。ヨシアは之を追擊してギベオンより廿七哩の所にあるマケダの市に追ひ更に海に臨める平原に迫つて五人の王達とその殘兵とを皆殺しにしたのである。ヨシアは長蛇の如き大軍を進むるのに極めて敏捷であつた。ヨルダン河畔のジエリコの隘路にあるジルガルを發し、途上長列十六哩に渡る軍兵を集め、山腹を登ること、三千四百米、終に瞬く暇にギベオンに迫つた。其處に於て彼は市を圍める敵の一軍と戰つたのであるが、其時五人の王の率ゐる主力は倉皇として敗走しつ

々てあつた。紀元前六百五十年前アッシリア王は、この天候を豫報する仕事を王國の出來事を最も迅速に報告し來る使者の仕事と同樣に重んじたのである。當時に於ては王國内に起つた色々な出來事をば天空の現象と關係せしめ又近代に於ける天氣豫報と同樣に、未來を豫知する基礎として研究したのである。

三

埃及の天文學の歷史はバビロンのそれと非常に似通つてゐる。埃及人に取つて最も大切な農業上の出來事は、夏至の季節になるといつもナイル河は降雨の爲めに氾濫することであつた。その時には洪水はメンヒス地方まで及んだのである。天文學上の火災を豫知する現象は、狼星（シリアス）が、太陽に近く昇ることであつた。卽ちシリアス《狼星》は太陽の昇る烏渡以前早曉に現はれた時には、大洪水が近く起ると云ふことを埃及人は豫知したのである。當時の天文學者はこの星の現はるゝのを觀察して、人民に天災の臻ることを警告した。

太陽が靜かに東方に昇つて、狼星（シリアス）が微かに黎明の空に輝いてその光芒を放つた時に、埃及の天文學者はこの星を諦視めて、洪水の季節は今や臻ることを知つたのである。

バビロン人と等しく埃及人は十二ヶ月卽ち三百六十日を以て一年とした。これが爲めに毎年五日よりなる短かい半端（はんぱ）の月を加へるか、或は五ヶ年又は六ヶ年毎に普通の一ヶ月をつけ加へねばならなかつた。

この兩國に於て、時間を測る主なる方法は、日時計であつた。この方法は自然その用途が、非常に限られてゐた。水時計や時間を測る蠟も亦知られてゐたが、廣く一般に用ゐらるゝに至らなかつた。時としては、都市に於ては、塔の上から番人が時を告げ知らした。然し、郊外に於ては旅人や羊飼ひ又は農夫は太陽の高さ又は影の長さを測つて、或は自分のやつた仕事の出來高により、乃至は大氣の感じに依つて時を測らなければならなかつたのである。軍人は日出から、自分が行軍した哩數に依つて時を測ることが出來た。又隊商は毎日旅すべき距離を豫め定めて置いた。又安息日の旅と

は毫もなされなかつた。

四

抑も、天文學の如き一つの學問を生じたのは、希臘時代に及んでからである。希臘人は大自然の秘密を暴かんとの好奇心と願望とを有してゐたからである。我等は動もすれば希臘人の智力は彼等の詩歌や哲學に現はれてゐると信じてゐるのである。然し乍ら希臘人こそは彼等の思想の性質に於て、非常に科學的であつたので、常に現象の背後にある實在を發見せんとし、大自然の事實に對して、諸多の觀察を試み、而して、それをば何等かの法則に從つて、說明せんとしたのである。彼等は物事を抽象するの才能を有してゐた。そして幾何學の發達に依つて、恒星の運行をば記錄し、そして、天體の中に應用することが出來たのである。かくて、空間に於ける實際の運動から意のまゝに、天體を觀測したのである。これがアレキサンドリア時代になると、球圍幾何學卽ち天球の學說に關する、澤山の研究論文が出版されてゐる。これを見ると我等は今日恒星（スター）の進路を記述する爲めに用ゐる方法が大低は備はつてゐるのである。

希臘人は月の表面を說明して、明暗分割線の形よりして、月が平面に非ずして、一つの圓球體であると主張したのである。彼等は月蝕を知つてゐた。そして、月の表面に投影する地球の影が常に圓いと云ふことに注意して、遂に地球も亦圓球體なりとの結論に到着したのである。尤も地球が弧線を帶びた平面であると云ふことは、既に希臘から遙か北方又は南方に旅する旅人が、地平線に從つて星の位置が變つて行くと云ふ樣な觀察に從つて知られてゐたのである。けれども希臘人が明かにこの地球が、圓球體であると考ふる樣になつたのは、一部は希臘人が圓體或は球體を以つて完全なる、又は調和的なる形であると考ふる性向があつたからである。

希臘人は天體の運行をば、之に反對なる地球の運行に依つて說明することが出來ると云ふことを論じた。事實我等は紀元前二世紀の半ば頃サモスのキリタルコスが地球は太陽の周圍を廻り、同時にその軌道を幾度も繰り返つてして歩くものなるを

ゝあつたのである。ヨシュアは之に追ひついて全滅しなければ彼の軍略を完全に遂行したとは云へないのである。この時彼は戰の神なるエホバを呼はり、熱烈なる信仰に充ちて、エスライルの空を望んで云つた。

『陽よギベオンの上に止まれ
月よアジアロンの溪に憩へ』

かく呼ばはりければ太陽はその歩みを止め月は停まり、終に國人はその敵に讐を報ひたと云ふ。此事はヤシエルの書に誌されてゐる。かくの如く、太陽は冲天に止まつて終日動かなかつたと云ふ。神が人の聲を聽入玉ひしことは前にも後にも類はなかつたのである。

ギベオンの上に止まると云ふのは、太陽は中空近くにあつたことを意味するので、月がアジアロンの谷に懸る頃は陰暦の下旬を云つたのであらうヨシアの部下は十六時間も行軍を續けてゐたので疲れ果てゝゐた。そこで彼は太陽に命じて、『沈まれよ！その嚇々たる熱を緩げよ』と。かくて彼の部下は元氣づく樣に。この時、黑雲が集つて、霰の嵐が起つた。その勢兇暴にして、その時また、味方より、進んでゐた敵軍の主力を傷めたのである。俄かに氣候は涼しくなつたので、元氣を回復したるイスライル軍は熱心に敵を追擊した。けれども、敵の五王を追ひ付く事が出來ない中に、ギベオンから、山道を下ると二十七哩なる海岸の野邊にあるマケーダの町に到着したのである。日出から日沒に至る間にヨシュアは五六十哩進軍したのである。然かもそれが、到る處合戰を演じて城砦を拔きつゝ行つたのである。イスライルの國人はこの驚くべき勳功を追憶する時に彼等が統率者（ヨシュア）の命令を想ひ起して、彼等の號令の下にその日が不思議にも延びたと思つたのも無理ならぬことである。かやうにして、初代の天體觀測の主たる目的は一年の季節を定め是に依つて農業上、又は宗教上の目的に供せんが爲めであつたことを分かるのである。この目的の爲めには、太陽と、太陰とを觀測すれば充分であつた。尤も、星宿（プラネット）も觀測されたが、それは主として占星術の爲めに用ゐられたので、その運行を說明せんとの令

も一つ希臘天文學者の注意を牽きたる重要なる問題は太陽の距離如何を決定することであつた。アリスタルコスは太陽と月との距離を發見するの方法を考へ、太陽は月の十八倍乃至二十倍遠くにあると云ふことを知つたのである。これは、月は丁度半月の時に太陽と月との間の距離を角度を以つて測つて知り得たのである。この月と太陽との距離を角度を以つて測ることが、困難なるが故にこの結果は、甚だしき錯誤に陷つた。何故ならば、太陽は月の約四百億遠くにあるからである。けれどもこの方法は理論的に正しいものである。アリスタリコスは又日蝕の觀測に依つて、太陽の直徑が地球の直徑の約三分の一なることを發見したがこれは殆んど眞に近いのである。

五

恒星とその運行とは夙に希臘天文學者の注意を促がし彼等の觀測に依て、星宿は非常に不規則に、或は東に、或は西に運行するものであるが、月は之にも增して不規則のものであると彼等は觀察した。更らに太陽すらも今日の學說よりも小なる直徑を有し、夏には冬よりも非常に早く動くものであると考へたのである。從て又冬には太陽は遙かに遠くにあるものであると考へた。之等の觀察せられたる事實を說明せんが爲めに、圓と云ふ完全なる形より出發せずして、希臘人は中心的圓の觀念を用ゐるに至たのである。卽ち地球は太陽の運行を代表する圓の中心にあるものに非ずして、中心より少し離れたるところにあると考へたのである。この事は直徑の變化を說明するであらうが、偏差運動を說明するには足らない。これを說明せんが爲めには、epicycle 說(古代天文學の言葉にして、大圓の周邊に中心を有して、廻轉すと見做されたる小圓)を採るに至つた。この說に從へば、太陽は小圓(スモーサークル)の圓周を動くものであつて、小圓は又偏心圓の圓周を動くのである。後者を稱して、傳導的と云ひ、小圓を稱してエピサイクルと云ふ。太陽を說明する場合に於ては、この說を採る事比較的單純であるが、恒星が益々精確に觀察さるゝに從ひ、その運行の不規則なる事愈々著しくなり、更らに多くのエピサイクルの追加を要するに至つ

教へたと云ふことを知つてゐる。彼の書いた論文は不幸にして今日まで傳はつてゐなけれ共、彼の思想は一般に歡迎せられずして、反對の學說が當時の世の中に重きをなした事丈は我等は今日知り得らるゝのである。同時にこの事は希臘時代の天文學者及び哲學者に依つて自由に論議せられ、從つて、贊成說、反對說共に甚だ多いのである。後世の學者に對して憾むべきは、アリストテレースとプトレシーがアリスタルコスと說を異にしたので、プトレシーの如きは、地球の運行を論ずるに當つて、地球がその軌道の上を運行すると信ずるよりは、火て出來てゐる星が運行するのであると云ふ方が說明し易い。況んや地球の如き大きな物體が我等に全然無意識的に非常な早さを以つて運動すると云ふことは、想像するに困難なるに於てをやと結論したのである。星宿自ら天體を形造つて地球の周圍を廻るので、地球は天體の中央にあつて、恒星の距離に比ぶればほんの一點に過ぎないのである。彼プトレミーは地球が太陽の周圍を運行するの可能性を考へに入れなかつたのである。この問題はそれより遙か以前にアリストートルに依つて論じ盡くされてゐる。彼曰く、若しも地球が太陽の周圍を廻るならば、之に對する恒星の運動がなければならぬと。これは全く本當である。而して、地球運行說に對する最も有力なる反對の一であつた。卽ち若しも地球が動くとすれば、恒星の現差なかるべからずとする說である。これと同じ反對說が丁抹の大天文學者テコ、ブライエに依てなされた。彼は一千六百年頃の人であつて、夙にコペルニカスの學說を知つて居たにも拘らずとの說を主張したのである然し乍ら、その他の研究は、彼の死後幾許もなくして、コペルニカスの說を採る樣になつたのである。とは云へ、この地動說が充分に觀察せらるゝに至つたのは十九世紀に入つてからのことである。一八三八年ベッセルはケーニスベルヒの天文臺よりして、彼が六十一Cygni の視差を發見したることを公表しヘンダーソンは希望峰に於て、光の強さアルハア・センタウロー星がこれと同じ樣な視差を有してゐることを發見したのである。

のと同様なる奉仕をなすの義務を擔つてゐることを自覺したのである。科學とは與へられたる問題に關するあらゆる知識の綜合であつて、各々の觀察者は、自れの本分を盡くして、その全體に貢獻するに外ならぬのである。

次に重要なるは、ヒッパルコスは數學の一部門を發達せしめたが之に依つて、計算が非常に便宜になつたのである。而して最後に彼は數學的方法に依つて、太陽と月との運行を說明せんと努めた。卽ち彼は具體的現象をば、抽象的關係を以つて表はし、而して、之を論ずるに純推理の方法を以てし、かくてこの說をば、觀察を直接に取扱ふ事に依つてなさるゝよりも遙かに遠く進み得たのである。彼はかくの如くにして、又彼の學說の結論が果してその後の觀察と一致するや否やを發見することに依つて、假定を以て彼の假說の吟味となすことが出來たのである。彼の主なる貢獻は先づ恒星の目錄を作ることであつた。之等の恒星はその位置に依つて、一つ一つ天體間に位してゐるものなれば、之が目錄を作ることに依つて、強いて晝夜平分點《春分と秋分》の推移を發見するに至たのである。この目錄は紀元前百三十四年の頃スコルピオと云ふところに、一つの新らしい星が現はれたから思ひついたのである。

ヒッパルコスの後價値ある獨創的事業は甚だ乏しかつたのである。若干の天文學上の研究論文が表はれたのであるが、これに依つて、吾人は星宿は必ずしも、我々から同じ距離にあるものではないと云ふ思想を發見することが出來る。然し乍ら、その距離如何を測定するの方法に至つては、不幸にして一もないのである。太陽と星は非常に離れてゐる。故に地球は太陽から見たならば一小點に過ぎず、更らに之を恒星よりする時は、全く見えないであらう。

最後の希臘の大天文學者はクローデアス●プトレマイオス卽ち俗に云ふプトレミーである。彼の名聲や實に世紀百五十年後に現はれたる彼の大著述『アルマゲスト』に依るのである。これは、明快なる數學的推理を以つて進められたる浩瀚なる大論文であつて、必ずしも獨創的であるとは云はな

た。かくしてこの學說は非常に錯綜複雜して、天體觀測を滿足することが出來なくなつたのである。斯くの如きは常に如何なる假說を採つて見ても、最後の吟味はこゝに落ち來るのであつて、觀察が最早假說と一致せざるに至れば、その說は何處に於てか誤謬に陷つてゐるに相違ないのである。希臘天文學者の注意は必ずしも天體の運行にのみ限られずして、彼等は特に天體の位地を定めんが爲めに更らに恒星に重きを置いたのである。

古代のバビロニア及び埃及の天文學者は黃道帶の星座をば、四季の交替を定めの手段として用ゐたのである。希臘人は益々多くの興味を星宿の運行を說明する事に感ずるに至つて、之を更らに精確に觀察する事が必要になつたのである。而して又これが爲めには、恒星に關して、一層精確なる知識を必要とするに至つたのである。蓋し恒星は天體を漂零する無數の星宿を觀測するの規準となるからである。かくの如き星座の最初の記述は、オイドクサス《紀元前四百年頃の人》に依つたので、彼は又最初の希臘の天文臺を建設したのであるが、これに關する記錄は今尙多少保存されてゐる。これよりも更らに重きを置くべき、而して更らに偉大なる古代の天文學者はヒッパルコスであつて、彼は紀元前二世紀中葉ロード島に一つの天文臺を設けたのである。こゝに於て彼は廣汎なる恒星及星宿の觀察をやつたのであるが、これ古代に於て最も完備せる天文臺であつた。彼の著述を見ると、現代に於て我等は凡ての天文學上の事業に用ゐてゐる方法は既にこゝに於てその發端を示してゐる。而して又それを觀れば、如何に深酷に眞の科學的精神が希臘人の間に盛んであつたかを察せらるゝであらう。彼は單にその觀察を不斷に繼續したのみでなく、彼の自身の研究の爲めに、將又後世の天文學者の爲めに、これを蒐集し、且つ蓄積して止まなかつたのである。彼自ら前代の學者の仕事に依て利益を得且つ、前代の觀察と後世の觀察とを批判的に組織的に比較して、天文學上の變化は、到底人間の一生に於て學び盡くすことを得ざるものなる事を明かにしたのである。ヒッパルコスは後代の人々の爲めに、前代の人々のなせるも

軍國主義の心理

文學博士　姉崎正治氏講演

一

日本は與國と共に戰爭に捷つた榮ある天上の華は我等の頭上に來た。世界は戰爭の慘禍から脫して平和の瑞氣に憲浴するの氣運に入つた。此時我等は何を考ふべきか、又何を求むべきであらう。思へば最近日本に於ける社會的事實は、殊に今次戰亂以來の多くの事實は、其根本に於て誤れる心理から發見したものが少くはなかつたが、餘り多く利害と云ふ觀念に左右されはしなかつたか。何をか誤れる心理と云ひ、何をか利害の觀念と云ふかに就ては、世の多くの實際家の中には、或ば我等の見地を以て迂遠と稱する者があるかも知れない、自己を辯護するの立場に在つて利害に基く行動は凡て世上の通例であり、且つ正當なものであると主張するかも知れない。私は之等と見解を異にし、又立場を異にする。私の立場は丁度測候所や燈臺守の立場であつて、氣流中に起る有らゆる現象から、明日の天候を判斷する如く、世界の凡ての現象を綜合し觀測し、其處から一個の眞理を見出す事が私の役目である。測候所の示す所、燈臺守の掲ぐる燈に因づて船の針路を定むるは船頭たる實際家政治家の職分である。戰爭の慘禍は今や去らんとして居るが、此戰亂の教へた教訓から、軍國主義の權化たる獨逸の末路から諸般の材料を採つて、世界に國する者の心得べき道、戰後の國家に住まふべき人々の信仰に就て、私は私の見地を樹てたいと思ふ。

時は今より二十年前、團匪事件が世界の視聽を集めた千九百年七月十日、北海の夏蒸すが如きを病に惱みて、當時獨逸留學中の余はキール大學病院の病床に橫臥して、時ならぬ砲聲の殷々として軍港の山河を震したのか聞いた。是れぞ實に東亞の空に叛亂の起り、獨逸公使は殺され、諸國の公使館が叛徒の包圍を喰つて、命旦夕に迫るとの報に、獨逸海軍の一部は陸軍運送船と共に極東支那の地に向はんとて此日キール軍港出發の合圖であつた。余は何故に斯くも此擧擾に對して獨逸が力瘤を入れるかを訝つた。而して翌日の新聞を讀んで、此解いても解けなかつた祝砲の謎は明白に解く事が出來た。曰く出征軍人に與へたカイゼルの訓令否說教とも云ふべき一場の演說である。彼は其日御召艦上に說教師として『イスラエルの民が神に祈る間、イスラエルの軍は勝てり』と云ふ章句を首題に、獨逸人は神の選民であり、獨逸人に手向ふ者は神の意に背く者である事を說いて且左の如く放言した『汝等獨逸軍の向ふ所敵は忽ち破れん、彼の異敎徒支那人を懲らし、獨兵の恐るべきを知らしめて向後千年の間、彼等をして我等獨逸人の面を仰ぎ見る能はざらしめよ、如何に善く、如何に美はしくとも基督敎に根ざゝざる物は凡て之を剪滅せよ、是れ神に忠なる所以なり』正に是れ狂熱なる黃禍論の聲であり、高壓的威壓主義の絕叫であり、『我等の神』『獨逸人の神』と云ふ偏狹なる狂言の表現であつた。而して其言々句々は出征兵士に對する激勵と

いが、普く前代の天文學者の勞作、殊にヒッパルコスのそれに基礎を置いてゐるのである。この著述は、單に彼等の天文學的究理に現はれたる希臘人の天才の最上の產物を、吾人に傳ふる爲めのみでなく、又一千餘年の間、後世の天文學者に依つて最大の尊敬を拂はれたものなるが故に、我等天文學者に取つて最も重要なる意義を有するものである。然かもその一千年間はプトレミーの學說があらゆる天文學上の論爭に當つて最後の權威を把持したのである。不幸にして斯くの如く速に世人の歸依を得た事は、やがて天文學上の學說の自由なる發展を阻害したのである。《記者譯》(次號完結)

消えぬ光

西淵峻

失はぬ眞實のうちに我がうちに神の願の死なじと思ふ
心臟の破れの如く思はるゝ胸いたむ日の青桐の葉よ
ひとり立つ寂さのため大いなる兩手をあげて天によべるや
柳蔭人の寂さ身に負ひて傾くごとし花も覓めず
よむ書の白き頁も心地よし月澄む夜半にひとりゐて讀む
冴えしづみし秋の眞晝の中に立ち働かて棲みし古へをおもふ
曉の窓に我が倚り西見れば夜の疲れの遠のくをみる
我れ空しく天の果てをば步めりとよの戀人の如く思へり
世に住みて人と語れるうれしさよ秋の朝の光れる雲よ

獨逸主權の下に統一して、己は『世界的强國』となるか、若し能はずんば滅亡あるのみとする所に存する。彼等の軍國主義は此狂信的妄想の實行的一手段にして、其目的を達する爲めには、國内の有りとし有らゆる文物の凡てを提げて、之れに供したのである。政治も文學も學術も家業も貿易も皆是世界征服の的に對して用ひられざるものはなかつた。

眞理の下に住まふべき學者思想家すらも、學術的良心は麻痺して政府の政策に迎合する事を努め、敎會歷史家として有名なる神學者も、基督敎の眞精神は獨逸人以外に存しないと云ふ事を證するに腐心し、遂にはキリストは獨逸人種である抔と云ふ學者すらも現はれて來た。恁くの如くして奇妙な熱情的狂信は日に勢力を增すに至つたが、是れ皆例の高壓的威壓主義の發露に外ならぬのであつて、かゝる高壓的威壓主義の在つて、始めて眞の意味の軍國主義と稱するを得る。カイゼルの匈奴演說の一句として『奈何に善く、奈何に美しくとも基督敎に根ざゝざるものは凡て之を剪滅せよ』とあるは卽ち此主義の體現であつて、而も彼の謂ふ所の基督敎とは、獨逸の基督敎、否獨逸其物を指稱し、獨逸的ならざる東洋ならば、之を滅ぼして仕舞へと云ふのが其演說の本體であり、其本體が今日復もや發表された結果が、今次戰亂の挑發である。

國防の必要を强張する國防精神は、二個の精神を包藏し、一は防備精神、他は攻擊精神であるが、此攻擊精神を奈何に用ふるかに依つて其國の方針が決定せらるゝ之を用ひざる可らざる所にのみ用ふるは正當であるが、然らざる場合に用ひんとすれば邪道である。而も心内に充實すれば、屢々用ふべからざるに用ひ度がるは人情の弱點であると共に、夫の國防論者が、往々にして獨逸と同樣の高壓的威壓主義から發端する軍國主義の成行と同樣の結果に、國家を導かんとするは蔽ふ可らざる罪惡である。爰に至れば高壓精神と國防精神とは最早や區別の餘地なき程に混淆結合されて居る次第で、彼此諸共に落つれば同じ谷川の水である。余と雖も攻擊精神の軍事上必要なるものである事は否定しない、只併し其れが滿を持して發するの眞精神である時に於てのみ是認する。而も夫の柔道家が、其力を猥りに濫用したがると同樣に、充實した國防精神を轉用し濫用して、他に行使し易い弱點あるを見、且つ其弱點は到底拔く可らざる人情の自然に根ざせるものなるを特に看取せねばならぬ。

高壓的威壓主義の人類の幸福を奪ひ、世界の平和を紊るものなる事は申す迄もないが、只其主義を採用し實行しつゝある國に丈けには利福を齎すものであらうか。我等は此問題に就ても否と答ふる外はない。夫のモロツコ事件に於る獨帝の失敗と云ひ、亞弗利加に於ける獨逸植民地の不成績と云ひ、皆之れが實證の一端である。獨逸の高壓主義は其植民政策に當つても、現はれて居り、其結果として、英國のアフリカ植民地に比すれば地質上より來る遜色を大目に見るも尙且つ非常なる遜色を殘して居る。彼等は第一に對土人政策を誤つて居る。英國の懷柔方針同化方針に反して、獨逸は高壓的威壓方針を以て臨んで居るので、本國人と土人との感情は融和せず、事ある每に疎隔の因を蒔きつゝあるは、力の從つて充實せざる素因である。

彼等が又占領地に對する態度も威壓的であるを免れない。突如として世界戰亂の起り、獨逸が先づ毒手を延べて、狂亂せる軍隊の馬蹄に蹂躪せられたものは、憐れにして且つ殉義の精神ある白耳義であつた。歡樂の都は忽

云ふよりも暴徒に對する煽動であつて、當時北京內外に獨兵が逞ふした暴狀も亦頗る故ありと謂べきである。左れば此艦上送別の說敎は世に何奴演說として知らるゝ所で、カイゼルの心事と共に獨逸軍人氣質を能く代表したものと認められて居る。私は當時病院に在つてカイゼルの爲せる此フンネンリーデを讀みまた黃禍論が銳き錐となつて余の肺腑を衝くを覺ゆると共に、狂信的熱血に燃えつゝ、極力煽動に努めた彼の風丰を髣髴する事が出來た。山來獨逸人は其民族を以て地球上に於ける最上の民族と思惟し、神と基督敎とは只獨り獨逸民族のみの專有と心得つゝある。『我等の神又は『獨逸人の神』と云ふが如き信條も即ち端を爰に發するのであつて、若し異人種にして獨逸の文化、獨逸人の信仰を容るれば可し、然らずんば政治、外交、軍事の譎詐權變を以て、其異人種を剪滅せんと云ふのが彼等の信仰である。最近四十八年間の獨逸民族勃興史は凡べて此信仰の赤裸々なる告白の頁に外ならずして、而して恁かる偏見と、國民的自負心と敵愾心とを激成する高壓的威壓主義は、取りも直さず余の所謂軍國主義其物である。日本にも軍國主義と稱する者がある。併し日本に於て解されつゝある軍國主義は、獨逸史に見ゆるが如き宗敎的信念に基く深遠なるものに非ずして、彼等は只口に國防の必要を說き、其必要を主張するあるのみである。凡そ一國が世界列强の間に存し、其國の永えの榮を計る爲めには、勿論防備を施す事が必要とするか。『機關車は力なり、故に早く走るべし』と云ふも亦同樣である若し其機關車にして力の存するまい、其欲する儘に山と云はず河と云はず街と云はず奔放不羈に驅けるならば世に之れ程物騷な事はあるまい。怎うしても其處に『軌道の上を走るべし』と云ふ必須條件を忘れてはならぬと同時に、此當然言はざる可らざる事を、敢て言はざる卿等は民衆の口當りに耳き遁辭に隱れて、目的を他にも置いて居るのとせればならぬと。

二

『國家は力なり故に强からざる可らず』と云ふ信條が、之を遵奉し遂行するの結果は果して奈何なるべきや、又其貯へられたる力は事實上奈那に發露し來るものなるやの實例は、之を最近五十年間の獨逸の進路に見れば明白である。獨逸民族の最高信念は、世界の全部を

たがる者であるが、悲境時代から一躍して得意の境に入つた者は、世の凡ての事物萬端を、自己を中心とし標準として律し様とかゝる。御無理御尤もに祭り上げられれば上げらるゝ程其の心境は廣濶とならずして偏狹となり、其狹い心には到底容れ切れない或大きな物に遭遇すると、直に之を危險視するのである。何處かの國にも元老とか云ふ者が生存して居て御自分の御氣に召さない物は凡て危險思想として壓迫するのを見るが、其心境は獨逸の高壓的威壓精神と酷似して居る。或人が獨逸人を批評して『彼等は他人の心を映す鏡を持たず』と云つたが、げにや彼等の狹く小さき心に、他人の廣く大きな心を映す心鏡の有り得やう道理がない、彼等は只自己の狹き心を以て判斷した所を以て正であり是でありと思惟し、眞理は彼等以外になしとして、馬車馬的に側目も觸らず、所信に驀進する許りである。其根氣と勇氣とは大に感ずべきであるが、偖自分の信ずる所が自然の大道と一致せず眞理と符合せざりし場合には其結果は遂に奈何であるか。是れぞ最も恐るべき危險であると共に、偏狹なる我執より生れた獨逸文化の缺點も此處に存するのである。

曾て佛蘭西に世界的偉人の投票が行はれた時に、佛人は大那翁を以て其第一人者とするかと思ひきや、彼等は意外細菌學解剖學の開祖たる獨逸のパストロールを投票した。日本の醫學界ではコツホの方に尊敬者が多い様であるが實は斯學の泰斗はパ氏を推さゞる可らずして、佛蘭西人が採つて以て之を世界的偉人の第一人者であると推賞したのは故ありと云ふべく、又佛人が那翁の如き英雄を擧げずして學界の大恩人を推した抔は、彼等が奈何に平和を愛するの國民であつて、且つ其度量は奈何に寛いものであるかを示す一例證である。然るに獨逸人は怎うだ。彼等は他國の學術に嫉妬の眼を投じ、其碩學に對しては罵りと誇りを與ふるのみである。米國のゼームスや佛國のベルグソンの如きは其名聲が世界の隅々までも響き渡り褒め讃はれて居る丈けに、獨逸の多くの學者から被る罵りの聲も高く、夫のハウプトマンと云ばる丶人迄ベルグソンを以て俗哲學者、僞哲學者と呼んで、極力其名聲を蔽はんとした。只獨りジンメル丈けはベルグソンの哲學を稱へて、眞理に國境なく敵國に知己あるの本當の學者的大度を見せたが、其他の多くの學者は凡て自國の學問あるのみを知つて他國の夫れには賤す事許り考へて居る。殊に今次の戰亂以來は益々此傾向に著しきを加へ、獨逸は恰も經濟的自給策を國是とするが如くに、學問上にも自給策を樹立した如くである、否彼等のは單に自給策である許りでなく外來の物件は之を排斥しやうとする排他的自足策なのである。

日本にも此頃經濟上の自給自足策を說く者あり、前內閣の如きは之に向つて相當の力を致した如くであるが、此日本の細爾たる一小島國にして學術産業未だ開けざる所に、眞の意味の自給自足策が行はれ得るや否や、眼を廣く世界に放ち他國が如何なる發達の事情に居り、之れに對する日本の果して怎れ丈けの天然的人文的價値を有するかを少しでも考ふるならば、到底之等の囈言を言つては居られぬであらうに、憐れなる彼等は、只管に軍事上高壓上の立脚から許り推斷するを知り、彼と我と、他人と己との比較値段を考へるの頭がない。若し今强て日本が經濟上の自給策を確立固執せんとならば、先づ以て橫濱の埠頭抔より破壞してかゝらればならぬ。

四

ち阿修羅の巷となり、桃源の野は倏ち砲煙の毒瓦斯に鎖された、其工場は破壊され、其敎會は奪はれ、其財產は沒收され、其壯丁は强徵されて、若し抵抗する者あれば其者の生命は絕たれた。其處には決して協同精神の微塵だにあるなく、一團に暴力的威壓あるのみであつた。又夫の波蘭分割の結果として普魯西に歸屬した獨領波蘭に對しても、彼等は過去百年の間、學校敎會は素より、三人以上の集會に對してすら波蘭土語の使用を嚴禁し來つて居る。言語は其國民が持つて生れた自然法上の權利であつて、此權利を他より加へられた强制力に依つて剝奪せらるゝ程人間の苦痛の大なるはなく、又之れが使用を禁止する程、世に高壓强制の甚だしきはない。

而も峻酷狂暴なる獨逸の主權者は、此非違を命ずる事を以て自己の權利だと心得て居る。彼等の心理を解剖して見れば斯うである。世には治者と被治者がある、優者が劣者を支配する事は歷史上の事實であり、自然の正當なる作用であつて、世界の文明は之れから進れから進むのである。優者たる征服者が、劣者たる被征服者に臨む場合に於ても、其訓練方法は、被征服者をして征服者の命ずる所に從ひ遺漏なく抵抗なく、唯々諾々と行はしむる事を以て滿足するのみにして、之れが征服者の權利であり、被征服者の義務である。政治に於ても敎育に於ても亦言語に於ても、被征服者をして自己の意の儘に抑壓强制するのが最上の途である。此彼等の妄信は彼等が本來高壓的威壓主義の人種であると共に他民族を以て賤民となしつゝある狂信の然らしむる所であるが、果して其政策は、期する所の實際的成績を收め得たるや否や、植民地の本國に對する乖離、占領地屬領人民の本國政府に對する强烈なる反感陰謀等は皆此政策が遂に失敗に歸した事を物語る材料に過ぎぬ。

尙又高壓的威壓主義は、單り獨逸の主權者乃至其政府の政策のみではなく、又實に獨逸民族の一人一人が個人的に之を傳承して居るのである。彼等は個人的交際に當りても我意に服從する者を喜んで之れに反する者には常に威壓しやうとかゝる。若し獨逸人と交際するに臨んで我等が獨立の見解を持し、其精神を以て敢て彼等の意に服する事なくんば、彼等が直に抑壓强制の態度に出て來るは目に見える樣である。其れ丈け彼等の高壓主義は徹底峻烈なるもので、是れ彼等と眞に親しみ難き所以、同時に民族一般が怎くなればこそ、國家全體が此頑迷なる狂信の化身となつて暴威を內外に振はんとするのである。

三

かくも今は高壓的なる獨逸民族は、其の昔中世紀の頃には、他民族から間斷なき侵擊と壓迫とを被れる一小民族に過ぎなかつた。殊に東に隣して當時新銳の意氣を以て勃興し來つた露西亞民族からは最も深刻なる侵迫を受けたるが爲め、露西亞を恐るゝ事泣く子も默ると云ふ程であり、彼等をして『我等のロシヤを恐怖するの念は母の乳と共に飮まされたり』と云ふ迄に絕望的呪咀を擧げしむるに至つた。而して此外的恐怖は長じて他に對する强烈なる猜疑心を生んだが、近世に入つて普魯西の勃興となり、獨逸聯邦の成立となり、更に進んで世界强國の列に伍するに及んで、其昔の恐怖心に反動的に出で、反撥して爰に他に對する高壓的精神と轉變したのである。即ち現在獨逸の高壓的威壓主義は、中世以來の遺傳たる恐怖猜疑の心と、最近四五十年間の民族的得意との合成に係るものである。

凡そ貧乏人の成上り者程其心は偏狹になり

た、左れば有名なる漢米汽船會社の社長がカイゼルに進言して、『此のまゝに放任して經過すれば他日必ず革命起らん』と云つて切に其悛むべきを勸めたに拘らず、カイゼルは毫も之に耳を假す色なかりし許りか、其皇后はバリンを面罵して『お前猶大の商人、何を知るものか』と暴語したのである。而も一敗地に塗れて敵國の前に頭を垂るるや、國内土崩瓦解して遂に政治的社會的革命を喚起し、狂暴なる獨帝は和蘭に逃れた、今次獨逸の革命も淵源する所遠いのである。

獨逸が革命前既に恁くの如き狀態にあつたに拘らず、世の所謂獨逸信者なるものが、獨逸を以て擧國一致の本尊となし、一にも獨逸二にも獨逸と、何事に付けても獨逸を崇拜の偶像視する樣は實に氣の毒である。階級制度の峻烈痛切な所に、眞の愛國的熱情、理解ある協同一致の生れやう筈がない、成程獨逸は軍事上の形式的成績を收めた當時は國内の平和が保持せられた、併し押しても押しても泰然と腰を拔かしつゝ退却して行く英佛の戰法及び其意氣に遭つては疲れが却つて味方を襲つた、身既に疲れると同時に、其愛國心に忽ち罅が入つた、之れが高壓的擧國一致の缺陷であり、此缺陷あるを顧みずに只管個人の理解のなき擧國一致を進行しやうとした獨逸は盲目である。二十年前私は獨逸留學當時、獨逸文明は一見美しくとも其出發點に於て既に誤りがあり其精神教育に於て個人を沒却せるを看取し、遙に日本の先輩知己に書を寄せて、個人精神を缺きたる獨逸文化の必ず大局を誤るべきを指摘した。獨逸萬能の當時の日本學界では之を以て『姉崎狂せり』と云つて余を狂人扱ひにしたが、それより廿年の後、現實の事實として獨逸軍の敗衂と獨逸文化の失敗と元兇たるカイゼルの逃亡とを見獨逸を批評せる者が狂人か批評せらるゝカイゼルが狂人か、問題は爰に解決を遂げた、而して私は二十年前に受けたる此言葉を、カスゼルの逃亡と同時に先輩の許へ返上した。

五

獨逸の社會は制度と組織で動いて居り、アングロ、サクソンの社會は人が之を動かして居る、前者の原動力は機械的規律であつて人は其れに從ふ傀儡であり、後者の中心は人物に在つて機械は一片の道具に過ぎない。日本の海外に遊べる者が、獨逸を見て歸る者多きに反して、アングロ、サクソンを見る事の少い所以は實に此處に在る、制度が完全に具はり、組織系統が明瞭であれば、如何なる凡人の眼にも映じ易い、組織が判然せず、只人あつて社會を動かす底の妙味に至つては凡眼の能く見る所でない。只機械系統を尊ぶ者は、之を失へば活動は停止し遂には覆滅の悲運に導かれ易い事を忘れてはならぬ。日本人は好んで獨逸の文物を模倣し、獨逸から『文明の掏摸』とまで嗤笑せらるゝ程であるが、眞似をするにも能く物を考へた後にする必要がある。曾て日本の陸軍は一年志願兵の肩章として黑白二色の普魯西の國旗を掲げた時代がある。眞似も爰に至れば愚しさを過ぎて危險と云ふべく、かくて迄も獨逸の軍國主者を心醉し、其輸入を計らんと努めし軍閥の淺慮短見は寔に言語同斷である。

機械的規律が、一朝頓坐挫折した後は最早や再び立つ事の出來ない實例は、獨逸今回の敗壞に依つて明白である。獨逸の軍隊部内に於ける軍規の嚴格な事は、世の軍國主義者に羨望の標的となつて居たが、本年三月から七月迄の進擊意の如くならず、寸進尺退して次第に國境近く押し寄せられた時は恁うであつ

今回の大戰に獨逸人の盲心、漫心の心理が最も能く露はれて居るものに三つある。其一は開戰當時英國其他の實力を認めなかつた事、其二はヴエルダン戰當時國民に必捷を成約した程の違算、其三は本年以來の進擊である、彼等の軍事的計畫は成程完全に出來上つて居た、然るに惜むべし敵國の實勢乃至本當の意氣組と云ふ事に就ては、餘りに自己を高く買ふの結果、又は他人の心を映す心鏡のない虞みの餘りに、之を察するに準備と精神が缺けて居た。殊に此缺陷は第三の場合に於て著しく現はれ、其れ丈け違算の度も深刻を加へたが、遂には過去四年間の大なる犧牲も水泡に歸して危機一髪の土俵際に於て、彼の如き無慘なる敗方をした。

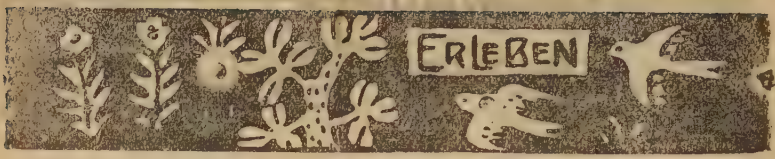
フオツシュ將軍は天才的閃きのある兵家であるが、戰線の形式に於て敗れ巴里城下既に砲聲を耳にする時、彼は第五軍の長として總指揮官ヂョッフルに宛て九月廿一日打電して曰く『我中央軍退く右翼亦退く、形勢良好之より進擊せん』とあつた、退いても退いても尙最後には押出すと云ふ不屈の精神は、此簡單なる電文にも現はれて居り、其意氣と愛國的熱情とは、恰もヂヤンダークを空に見るのである。

が如き信仰の焰に燃えて居る。かゝる道德的信仰の力が對手たる敵軍の魂に潛んで居る事を見なかつた獨逸は、其形式計畫の周到なるに拘らず、最後の敗者となつた所以である。

外に對して偏狹な又高壓的なる獨逸は內に對しても同樣である。其士官は事實上ユンケル階級のみより採用せられ、頑迷なるユンケリヅムを中心にして出來上つて居る爲め、軍人に非ずんば人に非ずとの傍若なる振舞ひは到る所に演ぜられつゝある。大戰の二年前サーベルンに於けるサーベル事件の如きは軍人の極端なる橫暴を最もよく代表したものであろ。當時普魯西の一士官は、一老人が己の通行に邪魔になつたと云つて無慘にも其老人に暴力を加へた、餘りの非道に憤つたサーベルン市民は士官を取り卷いて爰に一騷動が持ち上つた、之を聞いた獨逸の皇太子は親父のカイゼルを眞似て、左らぬだに沒義道なる士官に對し極力煽動の電報を寄せたのである。而も沒人道は尙之れに止まらない裁判は驚くべし士官の無罪を宣告した、それは百年前那翁戰爭當時に行はれ今は最早や廢止同然となつて居る普魯西の一法律を、扞げて有效としたのである。

更に又軍人部內の階級精神は恐ろしい程痛烈を極めて居る、上官と下士卒との間には、高壓的威壓關係の外に何物もない、曾て上官と下士官とが食堂に於て衝突し、遂に切合の慘劇を見た事もあつた日本の封建時代に於ける切捨御免は殆ど名のみであつたが獨逸軍人の切捨御免は實際の事實である。

官尊民卑の陋風も滔々として國內に漲つて居る、現に宿帳の端に至る迄も士官や大學教授の外は怎んな人でも悉く町人と云ふ一名稱の下に引包めて記入されてしまふ、敬禮に至つても過度に丁寧にしなければならない、身を扞げる事の大小に依つて敬禮の深淺が測定せられ、對手の稱號に依つて身を屈める程度が區別せらるる。人を呼ぶにも必ず稱號を云ひ、之を忘れゝば非常な無禮に當る、私共の留學して最初に、何よりも先きに先輩から聞かされた事は大學教授を呼ぶにも勅任教授を呼ぶにも必ずヘル、ゲライムラート、然らざるものにはヘル、プロフエツソルと稱さればならぬと云ふ事であつた。斯くの如く外的威壓精神が內的に發動して極端なる階級精神を助長した結果階級間の溫かき融和を缺き、何時かは此鬱積せる低氣壓が勃發すべき狀態に在つ



冬のうた

吉田絃二郎

初冬の朝を駒鳥の聲して影は見えず。
寂しさは灰色の雲に入りて、我が胸にかへり來。
木瓜の實の今朝も淋しく電線の下に顫けり。
鐵鎚の音、鴉の聲、汽笛の響、凡へてのもの今朝は美しく、悲し。

×

妻を失へる夫、木瓜の下に立ちて落葉を掃けり。
蒼白き男の顏、雲を見れば悲しかるべし。
子に捨てられし老媼初霜を踏みて市に出で行く。
髮の薄く、影の薄き、落葉の道を行く足音の寂しさ。
太陽はやゝに靜なる朝の街を照らせり。

×

不圖俥の扉に立つ日あり。
雲を見てあればやがて滅えゆく。
寂しからず、悲しからず、たゞわけもなき涙の湧く。
礫を蹴ればから〳〵と虛なる聲す。

×

たか。物凡て順調である場合には缺點は露はれない、逆境に立て始て其處に眞價が發揮せらるゝのである。獨軍が漸次退却し始めた時、日本の社會では豫定の退却だと稱する人もあつたが、彼等には決して豫定どころの騒ぎではなかつた。思ふに軍國主義の高壓は進擊の際には好都合であつた丈け退却の餘儀なきに至るともう捲土重來の勇氣を喪つて居る。

左れば得意の新聞政策で頻りに我軍の捷利を報じ、敗報は悉く『英國人の虚』と稱して極力國民の意氣の沮喪を防いだのみならず、軍隊に對しては有らゆる激勵と推賞を吝まなかつたに拘らず、最早や一朝挫折後の彼等は弓折れ矢盡きて四分五裂、再び盛返すの力はなかつた、ホーヘンツオルレルン家に對する國民の憤懣、ユンケル階級に對するブルチュア階級の怨恨、高壓政治に對する反抗心、其等は軍の敗るゝと共に一時に發して革命は爰に起つた。夫の英、佛、白が押されても〳〵最後には遂に押し返すと云ふ不屈なる粘着力を思ひ、彼と此とを對照する時、何人か長嘆息を禁じ得る者があらう。若し獨逸にして復活の志を抱き國家の改造を企つるならば、深く想ひを爰に致して昨の非を覺らなければならぬ。權械的規律詰めや階級制度や、而して其偉大にして且つ此力を頼みとして難局に處しらるゝのである。獨軍が漸次退却し始めた時、日本の社會では豫定の退却だと稱する人もあつたが、彼等には決して豫定どころの騒ぎではなかつた。思ふに軍國主義の高壓は進擊の際には好都合であつた丈け退却の餘儀なきに至るともう捲土重來の勇氣を喪つて居る。

左れば得意の新聞政策で頻りに我軍の捷利を報じ、敗報は悉く『英國人の虚』と稱して極力國民の意氣の沮喪を防いだのみならず、軍隊に對しては有らゆる激勵と推賞を吝まなかつたに拘らず、最早や一朝挫折後の彼等は弓折れ矢盡きて四分五裂、再び盛返すの力はなかつた、ホーヘンツオルレルン家に對する國民の憤懣、ユンケル階級に對するブルチュア階級の怨恨、高壓政治に對する反抗心、其等は軍の敗るゝと共に一時に發して革命は爰に起つた。夫の英、佛、白が押されても〳〵最後には遂に押し返すと云ふ不屈なる粘着力を思ひ、彼と此とを對照する時、何人か長嘆息を禁じ得る者があらう。若し獨逸にして復活の志を抱き國家の改造を企つるならば、深く想ひを爰に致して昨の非を覺らなければならぬ。

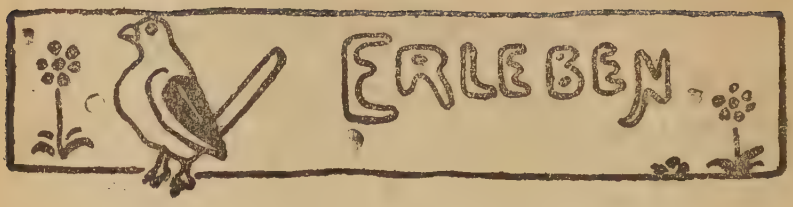
事是なり此尊き勝利は曾て望みし捷利よりも

事是なり此尊き勝利は曾て望みし捷利よりも等萬禍の本源である高壓的威壓の精神を彼等の胸から彼等の國から取り除けて始めて、彼等の新しき生命は其前に啓かるゝであらう。

軍國主義の元兇は、今、最後の敗者となつて無慘なる姿を世界の審判廷へ曳出された、狂暴と漫心と偏見と狹量との權化は、其の昔の狼にも似ず、犬の如く尾を掉り首垂れて、正義の門前に一椀の憐れみを乞ふて居る。鳥の死なんとするや其聲は悲しく人の逝かんとするや其聲は善しと云ふが、果して彼等は今、眞の神の聲を聞き、眞の基督教の福音に接して眞に、眞心の眠を醒まし得たであらうか。『我等の神』『獨逸の神』『世界帝國』の架空的狂信を擲つて、單に過去の語り草としてのみ其等の言葉が彼等の記憶に殘され得るであらうか。獨逸帝國最後の宰相マックス公は革命の波國内に渦巻かんとする十一月九日、國外の同胞に激して左の如く宣言した。

『同盟國には捨てられ、敵國には敗られ捷利は遂に獨逸に來らず、此上戰ふ事能はず、さあれ我等は之れに依つて自己に勝つを得たものを、日本と云ふ世界の場末のみが墨守するが如き事あらば、是れぞ由々敷大問題であると云ふに在る。（横濱貿易新聞より轉載）

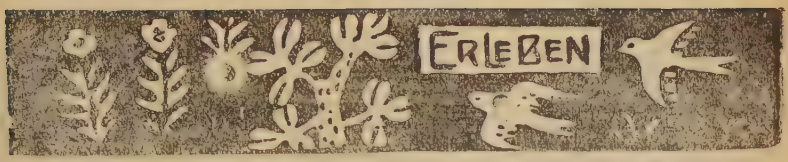
獨逸帝國五十年の覇業は、今日深き迷ひの夢より醒めて、生血を見るが如き此告白を最期に一先づ幕を卸したが、若し幸ひにして此聲が獨りマックス公に止まらず、獨逸人民全體の眞心の叫びであつたなら、新しき獨逸再造も決して難事ではあるまい。富國強兵は素より結構である、併し國の消長隆替は、それを那邊に用ふるかに依つて決定せらるゝのである。獨逸帝國は之を軍國主義に用ひたが爲めに、破滅の淵に身を沈めた。市會議員選擧の三級制は普魯西法制の直輸入である、フロックコートは今は日本のみが流行地である。三級制の百害を覺つた普魯西は既に之を廢止し、フロックを愛用する時代遲れの國は日本の外にない。眞似好きの日本は本場で既に廢れても、尚且つ存續守舊して居る事此の如き實例がある。而も余の之を云ふは恁かる些末枝葉の細事ではない、もつと恐怖すべく戰慄すべき重大事件に就て。流行の本場には無くなつ



平和來

野口せい

平和來一千九百十九年涙ぐましき初春に逢ふ。
戰ひはやめり靜かに追憶ふ日のああベルギーは悲しからまし。
くりかへし讀む休戰の提唱に心極はまりウイルソンを泣く。
どよめきは天なる星か地の上に平和のなりし神のよろこび、
戰ひはやみぬ世界のよろこびにわれも加はり歌ふ正月。
手を擧げよ世界の民よすべて世のくらきを拂ふ日の神のため。
躍らまし歌唄はまし東海に國する國のわれら女も。
幾よろづ死にし人等ものびやかに光榮の國に今日躍るべし。
ヴエルサイユ聞きのよろしも大戰の終りの幕はここにあげらる。
天の下地球の上に日よ星よああ永しへに戰さあらすな。



乙女は弱し、弱ければ愛し。
病みてあれば黒髪の寂し。
おとなしく病みてある乙女の悲しさ。
日は夜につぎて、恐しき運命をはこぶ。
過去を知らず、未來を知らず、たゞ生くることのうれしさに生きし乙女の病みてあるは悲し。
唇よ、瞳よ、柔き手よ、生くることのよろこびに顫きしいのちよ！
病みてあれば思ふことなく涙しながる。

×

野を歩みし日を想ふ。
街を歩みし夜を懐ふ。
我一人歩めり。悲しからず、呪はしからず、たゞわけもなく寂し。
夢の日は過ぎぬ。たゞ醒めやらぬ我が愚さの悲し。

×

落日の前に冬の野を歩みつゝあり。
故郷を忘れたる魂の涼たさ。
疎なる森の下に燭あり、家あり、男あり、女あるべし。
大地は寒し。大空は暗し。
たゞ一人野を歩む我が心のみ更に寂し。

斷片三章

土井晩翠

一

アフリカの砂漠のもなか
探險の隊の發きし
碧吹く鏃の花濃き
鋼鐵の扉の文字
幾千の年のいにしへ
大陸に威光照せし
大王の御代に鐫りしか
『言論よ翔くるべき羽な擴けそ
民衆よ束縛の鎖切らざれ
大瀑よ絕崖の下にな落ちそ
太陽よ大空のなかに留れ
時世の波よさかしまに汐を返せ』と。

二

大象の百千の群
疾風を鼻孔に捲きて
ガンジスの深きを涉り
バンヂャブの廣きを過ぎ
砂を蹴立て丘をにじり
日を仰ぎ雲に嘯き
五天竺擴がるかぎり
森林王の威を揮ふべく馳す。
誰そや今
朽ちし索もて大象の脚を結ぶは。

三

その昔鉢にまかれし
樫の木の種はめばえぬ
幾度も幾度も
植替られて大野に移り
あらしに吟じ風に歌ひ
光た吸ひ暗を纏ひて千尺高く
虛空に冲る。
誰そ今鉢に移し返すは。

四

いにしへの襤褸を着よと心ある
乳母は今し六尺の
ますらをに呼ぶやさしからずや。

To Miss Katrina Merzliakova

You had your office only across the street
From the house where I daily attend.
But our friend had to write us each.
From far Japan to make us acquainted.

'Twas autumn when I first arrived here.
How often have I passed the front of your office,
Not knowing it contained a lady like yon!
And now' tis already winter severely cold.

This morning when I paid you my first visit,
I had several pictures of you from imagination.
But I found none of these was correct
When you appeared before me in person.

A young lady so graceful in manners,
Speaking my language smoothly and perfectly,
How little have I expected here to find one like you
Among so many Women that daily pass the Svettanskaya Street.

Your memory of your Japanese school,
Your knowledge of our friend and her sisters,
Made me imagine as you really were
One of my country's lovely maidens.

Yes, you are a Russian by birth,
But a Japanese indeed by education.
I know not what in future awaits you,
But remain you always a link between two countries.

And whenever a stranger from Japan like me
Has a chance to see you and speak with you,
Let him learn to love Russia more,
As I hold her dearer after I met you.

Nov. 11, 918.

Tetsuzō Okada

此大根種子を蒔かん土よ我足が乾きて　弟切草
木槿の夜のつめたい花で歸りたくない　同
霧雨の手に手に栗を握つて僕ら　桂川
柿を食ふもの我に近づき難からん　同
旅の空ではコスモス折つたりして手を空しうす　望洋
家に歸れば家のたれかれが栗燒く事になれ　小鍵
柿うまく兄弟の相似たる春のさま　茨士
秋の山を下り來し眞晝の樹の匂ひ　高木
麥蒔からるゝ母の拇指の太しくば　狹青
雨の仔犬がしきりに咽喉上げて匂ふや　程一
蝗の串を作る夫婦ものにて朝日　玄圃
人々よ眠る盆の梨の動かず　一碧樓
冬來る夜の袴脫ぎあへず我が愛しき　同
木の下のしたしき冬帽の徽　同

投句略規

▲題並に句數を限らず
▲東京市外高田村大原一五二七中塚直三宛
▲封筒に虛心集稿と明記ありたし

虛心集

一碧樓選

既に弟の聲のして焚火赤々と元旦　巨鬼
此朝の雪一摑みして爐邊へ坐り込んで了つた　同
朝の牛群亂れず雪道をあやまたず來る　同
我等が笑の短日の梢のゆれやまぬ　同
栗の實ゆたかに落日の梢見ん我等　同
黑馬の息よ墓場の梢が枯れきつた　同
時雨の夜は少女よ人形の襟を汚し　逸星
仔牛よ牧場の雜草の枯れてとぼき　同
枯野道に出逢ひたる云ふことなき　同
祈る聲立てゝは樹々の初冬　飛天櫻
上司何か話し行くついて行く何にして手の紅葉　同
この木植ゑて兄よ信仰の瞳の澄めり初冬　同
いたゞきにて野菊もつ手のいとゞ小さく　一仙
暮れやすき片蔭の濡れたる菊のゆれざれ　同

×

鼻や眼を、離れ〳〵に見てゐたり。
人の顔でなくなり、
寂しくなりぬ。

×

或る時の悲しき忘想——
憎き男の首打ち切れど、
首が消えやらず。

×

下らなき友達などと、
離談が出來るやうになれり。
秋も暮れんとす。

×

いつそ、
われ狂人になりてしまひなば、
世が面白くなりもすべけん。

×

若しわれが犯人にならば、
あの男、
ヒヒと笑はんが一つ口惜し。

×

快く、咳の出る夜なり。
靄深く、日ます街を、
ひとりかへれる。

×

われにひとりの、親あることの、
とにかくに、
またしても、われを笑はしめざり。

×

われよりは、非常にえらき友あれと、
心から思ふ、
——雨の降る街。

×

道端に立ちたる馬と、手をとりて、
友となりたし。
矢楯に思へる。

×

或る夜、はげしく友と議論しぬ。
豫言者の心が、
少しは、わかるが如し。

一生のこと

白鳥

I

秋の風吹く。

×

陽の如く、
寂しき命生きなまし。
われひとりなり。たゞひとりなり。

×

葉のしげる、
暗き二階の窓べりに、
思ひねしこと、一生のこと。

×

才もなほ、
地位や財産と同じこと、
何てもなしや。

×

或る街で、ふと、
肴燒く匂を嗅ぎ——、心細さよ！
午前の電車——

×

帽とりて、くる〳〵頭を掻きゐたる、
暇さうな車掌を、
見てゐたるかも。

×

やつと、
ある宗教雑誌の編輯を、
請負ひ——夜の電車はかなし。

芝居せる如く思はる、
——須田町の朝。

×

ありとある自由が、
われにある如く思ひて、
眠る。
英雄の如く。

×

ひとりゆく、わが跫音(あしおと)に、
耳すます。
神田通りの夜中過ぎ頃。

II

×

ある夜のことである。
こみ合つた電車の中で、
うす黒い歯の人が笑つた。
ふと、
私は、生きてゐるのが嫌になつた。

×

二重(ふたへ)になつて、老人がゆく。

ありとある一生の嘆き苦しみの重荷て、
老人は二重になつて道のへをゆく。
涙が、私の両頬を流れた。
おゝ、貴き老年よ。敬ふべき老年者よ!
御身等は、
寂しき人との憂苦を堪えて來た、
ひとり、ひとりの英雄である。

風吹いて今年も暮れぬ土佐日記。　子規

此家の古き行燈や大三十日。　青々

盆梅の一尺にして偃蹇す。　漱石

冬の日の蘆一本を上りけり。　岱青

凩の吹きくたびれて暮れにけり。　黒水

×

金に汚き友なるかなと、
くわつとなりし、
あの夜の怒りも捨て難きかな。

×

何がなく、
此年はわれの死ぬごとき、氣がしてならず。
元日の朝。

×

人が皆、われを見捨てて、行く如し。
ひとり、眼つぶり、
ビールをあふれる。

×

われ死にて、後のわが家の、
いたましく、
衰へゆくが目に見ゆる如し。

×

たゞひとり、
萇の香をば親しみて、
夜更けの街をかへり居るかな。

×

今までは、
あまりに、なれをさいなみぬ。——
我よ、
今日こそ、いたはりてやらむ。

×

けふは、心少しおごれり。
何故か、心おごれり。
寂しく思ふ。

×

前にある、器の菓子に、
眼がとまつてならず。
腹立たしきかな。

×

過ぎしことのすべてが、
われの現れと思へば、
何か、慰まぬ心。

×

人がみな、
ひとり、ひとりて、

ら絶交てなことになりやしないかと薄々心配したものだ。所が案に相違して、君の雅量は感涙にむせんだといふ賛辭さへ僕に吳れて剩へその修養書たる聖書を送つて吳れろといふ手紙だつたので僕は何と云つていゝか解らん程うれしかつた。

讀んでゐるか？『生命を得んと欲する者は之を失ひ我爲めに生命を捨つる者は之を得』といふ禪機は是は吾々日本人の爲めに出來た本さ。ボウロガテンスの人々に向つて、アテンス人がしるした『知らざる神に』の說明をやつたやうに、逆に『我爲めに』を日本語に飜譯して見たい。必ずそれは君等の第一義の爲めになる。賢明なる君だ。もう察してもいゝ。

君に僕は一つ面白い話を聞かしてやらう。僕は一友から珍妙な認め印を貰つた。勿論僕の名まへが彫てあつたが、それは靑島戰で獨逸兵の用つた彈丸を材料にしたもので、我友は其處で非常な勳功をあらはしたのだ。中學時代の觀察だけだが、機械體操なんかで見た彼は臆病者であつた。然るに彼の話によると、或日の戰爭に彼の隊から決死隊を募らうとした所、伍長としての彼は敢然として曰く『出發當時既に君に捧げた身體である。今更ら決死隊とは聞えません』と出た。

隊長大いに之を嘉みし、拔ん出て之を該決死隊の長とした。彼は殺氣を含んでゐた。飮み水代りの梨の取引に面倒臭い！　といふや否や鐵砲の臺尻に可愛想な百姓の額の生血がついてゐたといふ話もある位猛々しかつた。私は之を聞いてあの意氣地なしのやうに見えた彼の不得手は、さて〳〵機械體操ばかりだつたのかと怪しまざるを得なかつた。

けれどもT君、僕の話をひねくれた心理解剖とのみ見るな。靑島の水中にあつた一種のアミイバガ彼の體內を侵し、長いわづらひのベッドに寢た時彼は僕に本音を吹いた。『梨賣爺さんに祟られた』は笑談のやうに笑つて云つたが、多少僕も知つてゐる彼の家庭問題の話になると、彼は悲痛な表情で斯う云つて。『親爺との不理解は益々烈しくなつて來た。家の中は不愉快な空氣で一杯だ。俺は實際死なうと思つたよ。靑島で俺や死ねやよか

軍人の友に

石田三治

一

T君、故郷を飛び出してから十六年、當時の同窓は皆落付いた頃を、未成品でぶら〳〵してゐるのは君と僕だけだ。ぶら〳〵が可愛想なら氣の若い學生氣質を脫してないのは君と僕だけだ。鐵道院でも今年からは陸軍大學校生と大學院學生とをば、今迄の様な紳士扱ひとせずに學生さんとして割引定期券を出すそうだから彌々以て未成品だ。てもよくも斯う二人が申合せたやうに武と文とに別れて今まで進んで來たものだねえ——お互ひに喧嘩をせずにあの竹馬の友時代の友誼を更に精錬して協力して進まうぢやないか。

T君、君が僕に新兵教育に資する爲め、日本兵が數人の假裝敵兵を擊退してゐる壁畫を描いて寄越せと云つて來た時、斷つた際の意見を僕は今もなほ把持してゐる。曰く兵を強からしむる爲に殺戮を教ふる勿れ、如何にして死ぬべき時に勇敢に死ぬべきかの修練をなさしめよと。此點は一番大じなものだ。所だその工夫の問題だが、がむしやらに死ぬ稽古なもので妙なもので、僕の望む所は人間らしく死ぬ工夫がして見たい——基督の所謂人その友の爲めに生命を捨つ云々といふ奴だ。

あの時君は怒りやしないかと思つたよ。何しろ近頃の新兵さんの氣慨のないのに憤慨してからに、理想的な新兵教育をやらうといふ矢先、第一の試みを僕が否定したのだから、ひよつとかした

餘儀なくされたのは笑止千萬』と、まあ斯うだ。

吾々の重大問題は國家的ソリダリテーを完全にするには何うやつたらいゝかといふ事である。堀内中將がその點に留意して世界の大勢を考へてをるらしい一節が、その少し前の萬朝に見えた。これは然し明治維新の際にきわだつて表はれた日本人の美徳だと心がける必要がある。卽ちこれは大勢に强迫された心がけぢやないのだと思ふ必要があるといふのは若し佐幕黨に海外の資本で我勝たん哉を考へるやうな量見違があつたら、今日の日本が如何になつたであらう。

だから武人は武人、文人は文人で互ひに我佛尊しと考へてゐるやうな事になつたら、勝海舟などを貫いてゐた士魂が吾々に滅したといふことになる。君は益々身體がよくなるし、僕は益々貧弱になるが、高等學校時代の擊劍の寒稽古に海舟の修業時代を偲んだものだ。これで流儀の一刀流といふので、山岡鐵舟の事など聞かされたが今でも忘れられない。『肉を與へて骨を得る』と云つたやうなコツが擊劍には限るまいに、近頃の誰も彼もが肉が惜しくて骨抗きにされさうだ位の惡口はまだ僕にも云へるぞ。

近頃新聞で段とかセメヨノフとか騒いでゐるが、海舟ほどの識見のある手合かね。君はセの字が好きらしいが三十に滿たぬ豪傑には罪はない。淡白だ、私慾がない、太つ腹だ、大に可し。がT君、あんまり褒めて罪を作るなよ。閑話休題、君に僕は囑望する。ちよこ材になること勿れ。ちよこ材とは操り人形師のやうなものだ。

三

T君、僕の士魂は加藤清正に共鳴しない點を持つてゐる。それは熊本城が出來た時の悲慘な話にあらはれたあの獨逸式の早手廻しの物凄さだ。外務省と參謀本部と並ぶ時、後者に相應の好感情を持ち得るのは何と云つても君といふ軍人の友があるからだが、獨逸式の早手廻しに全力をぐやうな輩は、獨逸が敗けたやうに是からは敗けるぜ。君の前で云ふのは工合が惡いが、觀戰武官中獨逸が勝つと思つてゐた人が少くないやうだが、ほんとうか？嘘だらう。世界の大勢を知るには外務省よ

つたんだ！』

二

吾々は勇敢な行動を生み出す動機のうちから、勳章をおもふ念慮も取り去りたいものだ。況んやその勇敢が一種のてれかくしに成り了るやうな場合は、その心事を大いに輕蔑せざるを得ないではないか。兎に角、這般の心理解剖をなし得る人の多きを望むは無理な話かも知れないが、勇敢なる愚物を多く養成する事は軍隊の强味にはならんと僕は信ずる。況んや敎養ありとせらるゝ者にも同樣の敎育方針を執るといふ事は甚だ面白くないことである。

尤も此敎養ありとせらるゝ者が今の處頗る疑問なもので、僕は這般の者には昔の敎養ありし人と比べて義に勇む精神の缺如を見出さゞるを得ないのである。是はたしかに一般の敎育界の缺陷を示すもので、敎育家の關心事に人格敎育といふことが高調されない爲めだと思つてゐる。と云つて君、君等の階級の人達が一般の敎育家に上位に立つて義勇奉公の範を示すに足るものと自惚れてはならぬ。君等が忠君愛國をモノポライズする振りを示す時、多くの反感が生ずるものだと思うて反省するがいゝ。

忠ぶつて忠ならぬ人の事を大隈侯が國民讀本に素破抜いた筈、僕が此處で喋々するまでもあるまい。自分の儲けが國家の儲けだと自惚れてゐる實業家に高柳少將が述べた演說は其點て面白い。君も讀んだかも知れないが、十一月三十一日の東京朝日に此麼記事が見えた。『目下東京商業會議所に開會中の全國商業會議所聯合會で二十日高柳陸軍少將を招き一場の講演を請うた。少將は世界の民主主義に就て滔々と辯じた後「幸ひにも我國は維新に際し既に此根本主義は決せられ、畏くも皇室は民の心を以て心とせられて國務は凡て此主義方針に則られて居るから、今後も洵に仕合せだが、只玆に遺憾なるは、動もすると此根本主義に逆行せんとする一階級のあることである。夫れは露骨に云ふが資產階級の思想行動が是れてある」とやつたので、參列者は悉く耳の痛い連中許り、さればとて卽座に辯駁も出來ず一同變な顏して謹聽を

ると、一かどの人格者であつた筈の邦人が、戰爭になつてそら市民權をやるがその代り徵兵應募の義務があるよとなると、そんなものはいやだと避けちや面喰ふのは向ふは官顯ばかりぢやないだらうて。君は何う思ふ？僕は面喰つた。尤も彼等の云ひ分は斯うだ。何うせ兵隊になるなら日本でなると、君此『何うせ』といふ言葉に氣をつけろ。しかし是はまだ消極的だが、一方その市民權請求書に立派に署名した日本人が澤山あつたが、驚いたことには加藤清正などと出鱈目な歷史的名まへを書いて證書を貰ひ、それを日本のさる地方で賣物にした人があつたとかで、エーの字一つ知らない自稱市民が大威張りで彼地に渡つたといふ珍妙な話は夢ぢやあるまいかと思ふほどだ。天下多事、T君、お互ひにしつかりやらう。

（七、十二、五）

▼新刊紹介▲

實用主義の哲學

文學士 豐田臻著

個人主義の哲學を生み出せる英米思想界を風靡せるプラグマテズムの我國に紹介せられたるは茲に年あり。一部の人はプラグマテズムは流俗の哲學にして、常識哲學なりと貶するものあり、然るに他方にありては空漠たる觀念哲學を脫して、哲學の民衆化、社會化を切實ならしめ、人間生活其物の內容を更改向上せしむるものはプラグマテズムに若くはなしと說くものあり、我哲學界にありてもプラグマテズム是非の問題に就て非常なる論爭を見たり。然るに今や歐洲戰爭の終熄と共に國民生活の動搖に伴ひ、思想界亦一大變轉期に際會せり。プラグマテズムの是非は今や云々する時に非ずして、プラグマテズムは如何に英米の國民思想に深き根蒂を有するかを知らざるべからず。共存的個人主義的又は經驗主義的實用思想は如何に英米國民の精神を支配せるかは這般の大戰に於て見るところにして、戰後プラグマテズムは思想界の一大主潮たるは疑を容れず。本書は著者が公平冷靜なる學者的見地より縱橫にプラグマテズムの本髓を批判闡明して遺憾なし。プラグマテズムの理論、プラグマテズムの淵源、プラグマテズムの形態、プラグマテズムの知識哲學、プラグマテズムの自然哲學、プラグマテズムの人生哲學、プラグマテズムの批判と組織的に精細に論評し、該イズムの根本問題を說き盡して餘蘊なし。著者は篤學の士にして、その論歩の明晰と、批判の犀銳とは大いに敬服するところなり。近來稀に見る忠實なる哲學研究にして、廣く江湖讀書子の一讀を薦むる所以なり。

定價貳圓八拾錢 四六六頁

神田區駿河臺佐藤出版部發行

りは機敏な筈だ。

だが米國があんなになるとは考へてゐなかつたらう。此處が大問題だと思ふが、君はさう思はんか。志願兵を出した家では、その數に應じて星を點じて犧牲旗と名づけた頃から彼等のえらい處がぼつ〳〵現れてゐたのだ。いざ鎌倉の時、公私大學專門學校に米國大國に於けるが如き氣分が起らないつて法があるものかと空威張りに威張るのはつまらない話、此際よく〳〵彼等の長所を見る必要があらう。彼等の教育は先輩の利己心を潜め勝ちの形式教育から甚しく遠かり、生き〳〵とした友の爲めには生命も捨て兼ねまい人格教育であつたといふことを忘れてはならぬ。

君等が專門だからよく知つてるだらうが、西部戰線の最初の弱味は自尊心の強い英軍と、それに並んだ佛軍の中間だつたといふではないか。流石の英軍も毎回の敗戰に全線をフォッシ將軍の指揮に委ねて、英佛二重の桓根を中間に作つたのは餘程遲かつたといふではないか。其處へ米軍が參加したと云つたゞけでは此際面白くない。彼等はフラッグを偶像に祭り上げなかつた。星條旗を惜げもなく卷いて半分は英國々旗の下に、半分は佛國々旗の下にさあ俺達を用つて呉れと進み出たといふではないか。彼等には戰爭の目的が解つてゐたそれは軍國主義の理想を打壞つことが人類平和の爲めといふことであつたのだ。

所が日本には米國が軍國主義で強くなつたなどと云ふ先生が居る。君等も既に承知だらうが、倫敦であれ巴里であれ、今日サーベルさして歩く將校が一人だつてあるか。それのみか戰線でさへもサーベルは軍國主義のシムボルとして嫌がられると云ふではないか。彼等は劍の代りに今やケーンを手にして丸腰で歩いてるのだ。戰爭はするが、何の爲めの戰爭か、彼等にちやんと解つてゐる證據だ。

日本刀の有り難みも前述の意味でこそ有り難いのだ。がらにもない獨逸流の細い〳〵にくらしい程の行屆いた早手廻しの小細工に用ふには日本刀が惜しいよ。それやそうと、米國や加奈太の在留邦人の或者に關して面白くない評判を聞くのは實に殘念だ。平常市民權がほしい〳〵と云ふ所を見

の道理を有して居る。妻はその家庭の生活に於て最も明なる二分の一の勤勞者である。姙娠、哺育家事の勤務に對しては、夫は生活費を以て代辨しなければならぬ義務者である。殊に夫の收入はその半面に於ては妻の內助的勤勞の賜である。この意味で妻は夫から生活費を與へられて生活しても毫も愧づる所がない。それは極めて尋常平凡な事柄である。併し乍らこの夫より受くる生活費なるものは、絕對的效力を有するものであるか。何うか。卽ち夫は妻に對して生活費を給與すべき絕對の義務者であるか、また妻は夫から生活費を支拂はるべき絕對の權利者であるか。言を換へれば、夫は妻に對して債務者で、妻は夫に對して債權者で、その債務の遲滯に關しては妻はこれを夫に督促し、その不履行に際しては强制執行を以ても當るべきものであるか何うか。別言すれば、夫から給與される妻の生活費なるものは、絕對的效力を有して居るか何うかと云ふに、それは決して有して居ないのである。夫が親讓りの遺產を有つて居るとか、又は相當な收入のある定職に居るのに、妻に三度の食事を與へないと云ふやうな場合ならば、妻は法廷に爭つても夫から御飯を食べさせて貰ふべき道理が立つが、夫に親讓りの遺產が無いか、又は相當以下な收入を得て居るので夫自身の食費すら危ぶないと云ふ職業に居るとか、或は營業上の失敗とか、病氣とか、死亡とか色々な原因によつて、夫が妻に生活費を與へることの出來ない場合には、妻が夫から受くべき生活費なるものは效力を失するのである。然らば斯かる場合には、妻は夫に對して斷然離婚を請求すべきであるかと云ふに、それでは餘りに亂暴に亙らざるを得ない。家庭生活に於て二分の一の勤勞者たる妻に對して、生活費を負擔し得ないと云ふならば、男子として誰でも不滿に感ぜぬ者はないので、愛妻に對して申譯が無く氣の毒千萬な事である。然るにこの場合に際し、夫が貧乏だからと云つて離婚を請求すると云ふ女子があるならば、不人情極まる惡婦として社會の指彈を受けねばならない。

然らば斯樣な場合には、妻は如何なる方法によつて自己の生活費を求めたならば可いか。親から

男女問題

母としての女子の生活費用の負擔に就いて

一條忠衞

一　四種の見解

母としての女子の生活費用の擔負は、之を何人が爲すべきものであるかと云ふ問題に對しては、四種の見解を試みることが出來る。第一種は、夫がこれを負擔すべきものであると見る說である。第二種は、妻自らこれを負擔すべきものであると見る說である。第三種は、國家がこれを負擔すべきものであると見る說である。第四種は、夫婦の相互扶養を以てこれを負擔すべきものであると見る說である。この四種の見解に於て、その何れの說が果して眞理であるかと云ふに、是れは早計に斷定する譯には行かないので、最も愼重なる研究の上に決定しなければならない。

二　夫が負擔すべきものと見る說

先づ第一種の見解から考察して見るに、此の說には二通りの解釋がある。その一は、妻は夫に飼養されて居る家畜の如き財產であるから、其の生活費用は當然その夫が負擔すべきものであると見るのである。その二は、妻は家庭の生活に於ては二分の一の勤勞を以て、姙娠、哺育、家事に從事するのであるから、其の生活費用の負擔は當然その夫が果すべきものであると見るのである。今この前後二說に就いて考へて見るに、前者の說の誤つて居ることは極めて明瞭である。古代の社會に於ける男女生活には、それも事實上の眞理であつたが、今日の社會に於ては妻は夫の財產では無く、相本位的に獨立の主體であるから、家畜のやうに飼養される意味で、その生活費の負擔を夫に仰ぐべきものでは無いのである。若しさう云ふ意味で男子に生活費用を仰ぐならば、今日の社會に於ては妾（めかけ）と同一の境遇に居なければならない。

次に後者に就いて考へて見るに、これには半面

勞銀で生活するか、若くは資金を調達して獨立の營業を始めるか、二途の一を出でないのである。市場に於て婦人勞働の賃銀が安くても、勞働時間が長くても、設備が不完全であつても、甘んじて其の劣等な職業に就かなければならない。母としての生活と職業婦人としての生活が衝突しても、生きんが爲めには職業婦人と爲つて進まなければならぬ道理になる。女子が經濟的に男子に從屬して居る社會に於て、女子が生活に窮した時には如何なる奴隷的條件にも服さなければならぬのは、免れぬ運命である。女子の生理的心理的事情を無視しても、職業の爲めに日夜齷齪として勞働せねばならぬのが、斯様な社會には普通の現象である。經濟が男子の一手に獨專されて、機會の均等が許されて居ない社會であるから、婦人職業が男子職業の補充となり、勞銀が安く、待遇が惡く、設備が不完全で、悲慘極まるのも自然の結果である。

それで斯ういふ社會に於て、母としての女子が細い腕を奮つて生活しなければならぬ境遇は不幸極まるもので、婦人職業は苦痛の至りである。然らば母としての女子がこの桎梏から逃れ出づるには何うすれば善いかと云ふに、二つの方法に依つて解決するより外に妙案がない。(一)は母としての生活費を國庫より支辨する案と、(二)は男子本位の經濟社會を夫婦の相互扶養による男女兩本位的な經濟組織に改善する案である。從つて前者は婦人職業を否定する案であるが、後者はこれを肯定してその改善と進歩とを圖る案である。先づ前者から考究して見よう。

四　國家が負擔すべきものと見る說

現代に於ける婦人職業の悲慘なることに同情して、母性を害するものと爲し、その保護經濟の案として、母としての女子の生活費を國庫より支出せよと云ふのである。姙娠、分娩、哺育、家事と云ふ仕事は國家的公事としての勤勞であるが爲めに、國家は當然の義務として生活費を報酬として母に支拂ふべきものであると說くのである。惟ふに母性を保護すると云ふとは素より當然の義務であつて、何人と雖も異議を挾む餘地の無いものである。父がその子を養育する爲めに勞働に從事す

貰つた持參金のある女子は、それに據つて生活することも出來ようが、持參金のない女子は何うすれば可いか。夫が奉職して居た役所とか會社とか云ふ公共團體から、遺族扶助料を受けて生活することも一の方法であるが、これは讀んで字の如く遺族に對する扶助料に過ぎないのであるから、公共團體が妻の生活費用の全負擔を義務として居るのでは無い。況して遺族扶助料を貰ふ場合は、夫の死亡した場合である。それも夫が勞働した勞務の報酬としての勞銀を受取るとは全々その趣を異にして居る。夫の勞働は雇主に對しては、直接に金錢に見積らるべき經濟的價値として取引されるのであるが、妻の家庭的勞務は雇人に對しては金錢に見積らるべき經濟的價値として取引される性質のものでは無い。隨つて夫が勞銀を受取る時のやうな權利を以て、遺族扶助料を受取らるべきものでは無い。經濟的價値は勞働と效用との二元から成立して居るのである。それで之れを金錢に見積つて交換する場合には、賣手と買手との間に勞働及び效用によつて價値づけられる公定相場に準據して取引されるのである。雇主が勞働者に賃銀を支拂ふのは、此の意味からである。然るに勞働者の妻がその家庭に於ける分娩、育兒、家事等の勞務は、雇主に取つては效用によつて交換された價値では無いから、取引上の目的にはならないのである。だから公共團體なる雇主が、その勞働者の妻に對して金錢を支拂ふべき義務が無いのである。唯だ勞働者が死亡した場合に、突然なる遺族の生活難に同情して、慈惠の意味に於て生活費の一部を扶助するに過ぎないのである。隨つて世の女達はこんな緣起の惡い夫の死んだ時に貰ふ慈善的な少額の金子を當にして、生活しようと欲する譯には行かない。況して夫が現在に生きて居る場合には殊にさうである。

三　妻が負擔すべきものと見る說

そこで色々考へた末に、母としての妻は第一に食はずに居る譯には行かぬと云ふ現實の切なる要求からして、妻自ら起つて自己の生活費を自己で負擔することになる。兼ての持參金も無く、夫の財產も收入も無い場合には、妻は勞働に從事して

ら生活費の保護を受けることを免れるやうに見えるが、國家は第二の夫となり、妻は國家の妾のやうになつて、依然として其の生活費を男子の保護に仰ぐと云ふ結果になる。何となれば、男子が勞働者になり、女子が消費者になり、これが國家的に決定された曉には、國家の豫算は何うなると思ふか。先づその歳入なるものは男子の勞働の結果となり、母としての女子に支拂ふ國家の歳出なるものは、此の男子の腹卷から出したものに當る。卽ち母としての妻の生活費は、父としての夫の勞銀に外ならぬ結果になる。尤も自分の夫は兼ての通り働きが無いのであるから、その勞銀は自分の夫が稼ぎ出したものでは無いけれども、他人の夫が稼ぎ出したものに當るのである。無論、母としての女子の勤勞は國家の歳入の上にも二分の一だけに該當するからして、國家の重要支拂を天引いた後で、母としての生活費を請求することも出來さうにも考へられる。けれども、地球上に於ける如何なる國家でも、今日の現狀から見て、其の歳入なるものは男子の直接勞働の結果のみでは無く、大に女子の直接勞働の結果である。

試に日本の輸出品の第一位を占めて居る重要國産なる生絲に就いて考へて見るに、大正六年の輸出額では三億五千萬圓であるが、これに關係した男女紡績職工の比例は、男子は百分の二十で女子は百分の八十である。それから大正五年に於ける我國の織物の産額は五億六千四百二十二萬圓であるが、男女職工數を數字で示せば、男子五萬四千六百名に對して女子は七十六萬五千八百名である。織物消費稅は價格の百分の十であるから、國庫に納める織物稅金五千六百四十萬圓の九割と云ふものは、女子の勞働によつて貢がれるのである。殊に日本の大昔には此の織物が、その儘で直接國稅にされて、政府の重要品であつた。東海姬氏の國とは、斯う云ふ女子の偉大なる國家的勞作その儘を直ちに國名として讃美したのであつて、日本女子の先祖は呉織漢織に師事して吾も〳〵と女子職業に從事したので、女子が産業上の勞働に從事することに由つて、國家は益々富むのである。若し女子が急に勞働市場から退いたならば、絹絲紡績

ることが、國家的勤勞であるが如く、母が子を產みこれを育むのも同じく國家的勤勞である。而も自己の子を優良な國民に育て上げなければならぬ義務も、父母同律である。この意味に於て、父性を保護する必要のあるのも論を俟たない次第である。又この道理を廣く天下に論及する時は、獨り父母の性的行爲のみが國家的勤勞では無くて、詩人が詩を作り、哲學者が哲學を考へ、兒童が學校で算盤を學び、八百屋の小僧が雪の中を註文取りに來るのも、同じく國家的勤勞であり、其他一切の人間的行爲にして惡行爲ならざる限りは、國家的勤勞で無いものは無い。國家は國民の國家的勤勞によつて組織されて居る社會的團體であるから、國民たる者は何人と雖もその國家に對して神聖なる勤勞を貢獻して居る者である。けれども、國民の總員はこの勤勞に對して、國庫から直接に勞銀を支拂はれて居る者ではない。唯だ僅に國家の統治機關の事務員たる、官吏、公吏、又は其他の職員のみが、勞銀を支拂はれて居るに過ぎぬのである。大多數の國民はその勞働の報酬を、被統治機關なる私人、法人、又は社會から支拂はれて居るのである。さうして、國家の國庫であつても私人の金庫であつても國家の富であるからして、官吏となつて月給を貰ふも職工となつて賃金を貰ふも、國家に對する勤勞的報酬なる點に於ては同一である。況して國庫の歲出なるものは、その大半は人民の稼いで納めた租稅の別形式であるから、何も尊い性質のものでも無く、有難い思召のものでも無い。繪師も職工も、商人も農夫も、學者も宗教家も、政府から年金を貰ふことを喜ぶやうでは、御用繪師、御用商人、御用學者と云ふ類にならざるを得ない。これでは國家の歲入の爲めに働らかずに、歲出の若干に有り附かんが爲めに競つて居る形である。自ら國家の歲入を少くして、歲出を厖大せしめる結果になる。一種の寄生蟲と謂ふべきである。

今、母としての女子が國庫から年金を支出されることを喜ぶのも、同一の思想に外ならない。而も夫が生活費を妻に支拂不能の折には、國家が代辨すると云ふことになれば、母としての妻は夫か

正八年度の豫算大綱に依れば、歳入は前年度に比して二億三千五百萬圓を增收し得る見込であるが、此の增收の部分は何を財源として居るのか目下のところ白紙主義であるが、その中一億圓を戰時特別稅と見積つても、その外は租稅と官營收入との自然的增加で、別段の增收計畫を爲したものでは無いらしい。これを以て見ても增稅などの容易に企てらるべき問題で無いことが解る。

斯かる時に於て、母權保護の理論からして生活費を出せと國家に逼ることは、貧乏な夫に向つて充分な生活費を强請して商賣の元金までも減らすと同樣である。殊に婦人職業を廢して、國家保護を主張するのであるから、細君一同が貧乏な亭主等の貢いた僅かの國庫歳入から、一家ならば家賃に相當する諸官廳の經費も充分支拂はずに、それを吾々の方に支拂へと途中で要擊するに異ならない。今假に母としての女子に國家が生活費を支拂ふことになつたとして、差し當り日本では幾らの歳出になるかを計算して見よう。先づ姙娠三月目頃から、滿三箇年間年額百圓を給與するとして、三百圓である。月額八圓三十三錢ばかり當るので、生活費としては不充分で申譯に過ぎぬけれども、我慢して貰ふとして豫算を立てゝ見る。大正四年の統計によれば、我が國の出產數は百八十二萬四千八百人である。それで生活費の保護を受くべき母の數も隨つて百八十二萬四千八百人であるが、これに子の頭數に從つて年額百圓づゝを母に補助すれば、第一年目には歳出一億八千二百四十八萬圓を要し、篤二年目には三億六千四百九十六萬圓を要し、第三年目には五億四千七百四十四萬圓を要し、以後年々五億四千七百四十四萬圓を要することになる。けれども是れは尙ほ正確なる計算では無い。何となれば、出產數百八十二萬四千八百人と云ふ數は國家から經濟的保護を受けて居ない母から生れる數であるが、若し國家から一朝にして經濟的保護を母としての女子に與へるから其方共相勵んで子供を製造せよと云ふ御布令を下したならば、國民は吾も吾もと結婚して出產率は急に增加すると見なければならない。私生兒を生んでも生活に困らないから、亂倫の行も從つて多くな

業及び機織業の産額に於てばかり約七億圓も國富を損ずる上に、男子も女子も着物が無くて寒くて生きて居られなくなる。管子に『一農耕さゞれば民これが爲に飢うる者あり、一女織らざれば民これが爲に寒ゆる者あり。』とある。實に至言である、流石は大政治家の言である。婦人職業は苦痛であつても、人類の幸福の爲めに忍んで貰はなければならない。勞銀が安いならば高くすることも出來る、時間が長ければ短くすることも出來る。娙娠したならば仕事を休ませることも出來る、分娩したならば保險金を與へることも出來る、子供が居ては仕事が出來ないと云ふならば母の働いて居る工場の傍に育兒院を設けることも出來る。鬼の目にも涙と云ふ通りに如何に强慾非道な資本家でも、株式と信用との經濟時代に入つた今日に於ては、株主の全部が惡人揃では無いから過半數が自己の人格を自覺して來れば、同一事業に携つて居る我が家の可憐なる職業婦人を奴隷扱にして喜んで居れない時代が來る。『忍ぶ者は救はるべし』とある如くに、勤勉なる勞働婦人は我儘なる不精婦人を飛び越して、光榮ある月桂冠を戴くの吉祥を有して居る。然るに母性保護を理由として女子職業を否定し、生活費を國庫より支出せよと叫ぶならば、それは非常な不見識である。夫が支拂不能の時は國家が代つて支拂ふべしと主張するに至つては、收入が無くて三度の食事も滿足に喉から通して居ない夫に該當する、我國の國庫に對しては甚だしい無理難題である。

大正七年度に於ける我國の歳計豫算は、歳入に於ては八億二千三百萬圓であり、歳出に於ても同額であつたので、一文と雖も餘分が無い。その中で直接國稅の分が三億六千萬圓であるが、この外に人民には府縣稅とか市町村稅とか云ふものがあつて、四方八方から賦課徵稅されて居るので苦しい一方であり、中央政府や自治體は年々に歳出の計上が多くて資源の無いのに困つて居る有樣である。動もすれば增稅を試て一時の責を免れんとするのが、局に當る者の常套手段である。けれども增稅には自ら制限があつて、民力を枯渇してまでも收斂することは出來ない。現內閣が公布した大

のであると見るのも道理に反し、又國家がこれを負擔すべきものであると見るのは更に道理に反して居る。然らば母としての女子の生活費用は、何人がこれを負擔すべきものであるか。之れを男女道德の上から見れば、夫婦の相互扶養を以て負擔すべきものであると云ふことになる。卽ち母としての女子の生活費用は、これを夫が負擔しても可し、妻が負擔しても可し、夫婦協同して負擔しても可いと云ふことになる。夫婦の經濟的生活はこれを會社に譬へるならば、合名會社に當る。夫と妻と云ふ二人の經濟的獨立者が戀愛又は結婚と云ふ性的生活の爲めに、一の家庭と云ふものに合名した生活組合である。それ故、夫婦は家庭の經濟的生活に關しては無限責任者である。何となれば、夫婦は個人としては各の獨立者であるけれども、家庭としては一の社會である。卽ち夫婦の經濟的生活は個人として見れば經濟的獨立者であるけれども、社會としての家庭から見れば經濟的連體者である。故に夫婦は相互に扶養の義務があるので協同の倫理によつて經濟生活の保證を與へられて居る者である。これは今日世界のあらゆる文明社會の民法に於ても、同樣に規定されて居るので、進歩せる道德と法律とは一樣に、夫婦の生活費用の負擔は夫婦の相互扶養の義務によつて規定されて居る。

斯樣に夫婦の生活費用の負擔は夫婦の相互扶養によることになれば、母としての女子はその生活費を夫の負擔に仰ぐのみを以て甘んじて居る譯には行かなくなり、夫と同一に個人として經濟的獨立者にならねばならぬので、その資本及び勞働の取引市場に於て男子と機會均等な活動の權利を與へられなければならぬ譯になる。先づ女子に持參金があるならば、それを夫婦財產制の規定によつて登記して置いて、結婚後にその財產の果實を自由に己が家庭の爲めに使用し得らるゝ經濟的獨立者にならねばならぬ。又學術技藝の修養がある女子ならば、それ〳〵職業婦人となつて勞銀を得ることに努めなければならぬ。又出產時の費用を拂へる爲めに、有らゆる女子は勞銀の一部を割いて產期保險に入れて置くも善からう。又資本のある女子ならば事業に投資するも善からう、證券の賣

つて來る。先づ大正二年末に於ける滿十八歲以上滿三十五歲までの無配偶女子は、四百四十三萬七千人である。その中三分の二が新に結婚すると見れば、二百九十五萬八千人であるが、その中我が國に於ては平均一箇年に結婚數の三分の一出產率があるから、新に每年九十八萬六千人の出產數を增すことになる。卽ち母に對する國庫補助の結果として新に九十八萬六千人の母を增加する。その結果として新に年額二億九千五百八十萬圓を追加しなければならぬことになる。そこで國庫は一人の母が子が生んだ時に年額百圓を三箇年間給與する結果として、年額八億四千三百萬圓を要するのである。然るに國家は既に八億圓も歲出して居るのに、又この新しい八億圓の歲出を計上するならば、一體その財源を何處から求めたならば善いか。國家の歲入が漸く八億圓なのに更に八億圓の歲入を見出さんとすることは、絕對に不可能である。如何に不德の政治家でも、八億四千三百萬圓の增稅を主張する者は無い。又た官營萬能の論者でも、この八億四千三百萬圓の純益を見るべき新事業の資本金を何處からも持つて來る所が無い。それでも此の女子の要求を容れんが爲めには、國債の發行によつて支拂ふより外に方法が無い。その結果として國家は每年八億四千三百萬圓の負債を生じ、利子だけでも五分利として四千二百萬圓支拂はなければならない。之を十年繼續したならば百億圓の負債となり。日本の全財產六百億圓は丁度半世紀にして無一物の狀態に歸し、國家は破產せざるを得ない。支那では美人のことを傾國と云つたが、全くその通りである。母としての女子が貧乏な夫が集まつて組織して居る國家から、年金を絞り取る結果は、半世紀にして國を傾けるのである。分別なき女子の望に應ずる鼻下長の男子ならば兎も角、識見ある男子階級に於ては、そんな要求は斷乎として跳け斥けなければならない。

五　夫婦の相互扶養を以て負擔すべきものと見る說

前に述べたやうに、母としての生活費用は、これを夫が負擔すべきものであると見るのも道理に反し、又母としての女子自らこれを負擔すべきも

つて之を向上し得らるゝのである。母としての職業婦人に有利なる合理的條件ぐらゐは、嚮て男女の自覺と資本家對勞働者の自覺とによつて解決される事柄である。男子でも女子でも、資本家でも勞働者でも同じ國民である。個人としては獨立者であるけれども、社會としては連體的な國民である。國民には男子の必要なる如く女子も必要であり、資本家の必要なる如く勞働者も必要である。男子は男子として或は資本家となり或は勞働者となつて經濟的生活を爲し、女子は女子として或は資本家となり或は勞働者となつて經濟的生活を爲すべきである。さうして、此の男女の經濟的生活は二箇の獨立せる主體であるけれども、家庭に於ては愛によつて和合の中に結合して、夫婦扶養の義務によつて保護されて居る。是に始めて母性に保護され、母としての生活費用の負擔は社會的に保護され、國家的に保護されて居ると謂ふものである。今日日本の社會に於て、母としての女子が自己の生活難に苦しみ、その苦しまぎれに婦人職業を否定し、同盟罷工して八億圓の生活費を國庫に逼るは、實行の不可能なる空想であるが、夫婦の相互扶養を原則として女子の社會的地位の改善を圖り、婦人職業の有利的條件を携げて國家に逼るは極めて健實である。年額八億圓の生活費を出せと云ふ謂願を議院に出すよりも、婦人參政權を與へよと云ふ請願を出した方が、男子からも歡迎され易い。金ばかり欲しがる女子の要求よりも苦しんで働いて居る職業婦人の要求を容れる方に賛成したいのが人情である。況して國産の第一位たる織物業に於てのみ、七億圓も働いて呉れる國民の母に對して、參政權を與へず、勞働條件の優遇も圖らずに捨てゝ置けるものでは無い。然るにこの七億圓を働かずに却つて八億有餘圓を請求する女子に對しては、如何に豫算に通ぜぬ代議士であつても、鐚一文も出すことに賛成しないであらう。

今次の世界大戰によつて、戰死及び重傷した男子の數は一千二百二十萬人で、戰費は二千九百四十億圓を要した。さうして此の戰費を償ふ爲めには、交戰國は如何なる方法を講ずるかと云ふに、

買を試みるも善からう。爾來、母としての女子は農業地であれば夫と與に田畑に出て働き、漁業地であれば夫と與に魚貝を漁り、商業地であれば夫と交代して店頭に出て算盤を彈き、工業地であれば女工となつて鞣皮の下に働いて居る。小供等は母が仕事をして居る傍で樂しく遊んで居るのが普通の光景である。婦人職業は古代から有つたので、今に始まつた事でないから、珍らしいことも不思議なことも無い。母としての女子が職業に從事して居るのは、極めて尋常普通なことで、農工商の間では常識の常識である。獨り大名とか公卿とか侍とか云ふ連中の細君だけが、長い着物を着て、細い指をして、勞働を厭ひ職業を卑んで居たのである。今日の日本女子に勞働を厭ひ職業を卑む者の殘存するのは、皆その亞流である。

さて母としての女子が職業に從事するのは常識の常識であるけれども、世界に於ける今日までの女子の地位は頗る低く、男子によつて經濟界を獨專されて居つた爲めに、女子の勞働の結果はその大半を男子に奪はれて居た。女子が眞に働いた仕事に相當する報酬の一部分を支拂はれるに過ぎなかつた。その上に勞働時間が長く、待遇が惡く、宛然奴隷の如くこき使はれて居た。市價に於て婦人勞働に對して賃銀の安いのは其の爲めであつた。だから、母としての女子が職業婦人として勞働して居る狀態は悲慘極まるもので、衞生の上から見ても、家庭の上から見ても非常に不都合な點があつた。けれども、此等の不完全なる事實は、第一次的には女子が男子に對して經濟上の男女兩本位的地位を獲得しない結果であり、第二次的には勞働者が資本家に對して經濟上の機會均等的地位を獲得しない結果であり、女子は目下のところ全世界を通じて二重の關門によつて不幸の地位に置かれて居るに外ならない。然し乍ら、これは人類文明の過渡期に於ける一時の變態であつて、永久的のものでは無い。人生は現實に於て理想を追求して不退轉に進む人格の努力者である。敎育と勤勉との力によつて、社會的生活の法則は改造され進歩するのである。道德上の事實でも、法律上の事實でも、經濟上の事實でも、人間の能力によ

相原なか子夫人を悼む

我『六合雜誌』同人相原一郎介氏夫人なか子氏は今春以來腹膜炎を患ひ、從來專心療養中なりしも、この夏鎌倉に轉地治療せられ一時經過大いに良好となり、去る九月中旬一旦歸京し巢鴨の自宅に靜養せられたり。然かも甲斐性なる夫人は身を忘れて家事に勵み、兒女の養育に盡しつゝありしも、氣候漸く不順となり、寒暖急變時なく、剩へ惡性感冒流行し、病後の夫人も亦風邪に冒され、病再發し、十一月中旬、麴町なる東洋內科醫院に入院せられ、高田博士の許に治療を受けられつゝありしも、經過思はしからず同月廿八日午後一時半、最愛の夫君及三人の幼き兒女をこの世に殘して、遂に不歸の客となりたり。春秋わづかに三十二。夫人は愛情と貞節の限りを盡くして夫君を助け、身を捧げて兒女の養育に努めたり。且つ資性豁達にして氣立美はしく極めて快活にして同情に富み、何人にも親切を盡くし好んで人の世話をなしたるが故、知己友人より賢夫人として常に深く敬愛せられたり。殊に夫人は我が『六合雜誌』の發展を念じ、夫君之が編輯の任に膺るや、夫君を助けて、本誌發展の爲めに渾身の努力を盡くしたり。本誌の今日あるは實に夫人の尊き努力に依るところ尠なからざるなり。

天夫人に對して、尙春秋を與へなば、益々家庭の幸福を致したるべく、且つ又わが『六合雜誌』もその發展の上に更らに稗益するところありしならん。されど今や喪し。思へば浮生夢の如く、轉た人界の無常を嘆ぜざるを得ざるなり。冬枯れの巢鴨の夕べ、風悲しみて、雲憂ふ。悽愴情切また多く言ふに忍びず。噫。（工藤生弔記）

相原なか子履歷

相原なか子は明治二十年九月七日福島縣若松市に生れぬ。父は佐藤傳平氏、母はまん子。佐藤家は會津の實業界に重きをなせる名門なり。殊に傳平氏は積極的事業家にして、養蠶、果樹、園藝に於ては地方に率先したる開拓者なりき。又同氏は同地方に於ける最初の基督教新教の信徒にして、若松組合協會の一柱石なりき晩年は寧ろ宗教に熱中して產業を意とせざる程なりき。土地の人々は佐藤家を桝傳と呼べり。今や桝傳は養蠶と基督教とを以て名物となりぬ。なか子はかゝる家庭に育ちぬ。その淵達の性質と熱

先づ荒廢された產業の回復を圖り、製造業と貿易業の奬勵を促し、勤儉貯蓄を行ふより外に方法が無い。その結果として、男子一千二百二十四萬人の補充としては既に女子を採用して居る有樣である。今や女子は世界に及んで男子の從事して居た有らゆる方面の職業に關係して、而も男子と同一の勞銀を得て居る者も無慮幾百萬人を算するに至つた。その上女子參政權を得、併せて被選擧權までも得るに至つた。さうして女子の成績の極めて有效であることが、世界の至る所に於て、知名の士而かも天下第一流の男子から幾回となく證明され賞讃された。されば女子が一旦かゝる成績を擧げた以上は、最早女子を勞働市場より退場せしめることは不可能であり、勞銀の値下げなどは紳士として發言すべからざる常識になつた。寧ろ婦人を激勵して、大にこれを喜ばせて、國運の隆盛を圖らなければならぬのが男子の政策になつた。世界第一流の文明女子は今や眞個の意味に於ける職業婦人に成り得たやうである。彼の女は職業に於ては獨立の經濟的個人であり乍ら、家庭に於ては社會的な良妻賢母である。卽ち彼の女は母としての生活と職業婦人としての生活とを調和し得たのである。歐米の婦人が男子の從事して居た有らゆる職業に携つて戰後の經營を爲し、その恢復の後に無盡藏の精力を以て東洋の天地に壓倒し來り、平和的經濟戰になつたならば、我が國の女子は何を以てこれに對抗せんと欲するか。勝手な屁理窟を列べて勞働を厭ひ、我儘な言辭を弄して職業を嫌ひ、每日子供を膝の上に載せて玩具にして遊び、貧乏な夫の相當官たる日本政府に向つて生活費の保護を仰がんと欲するやうでは、東洋の天地に於ける莫大の遺利は悉く歐米婦人の獰猛なる精力の爲めに、壟斷され終らなければならない。何うか此の際、爾來日本婦人の經濟的中堅であつた纖維業の女工を盟主として、子を產めばカンガルーの如く携帶しても、更に手廣く有らゆる職業に割り込んで成績のレコードを破り、經濟的生活に於て歐米婦人に任して一步も人後に落ちざらんことを祈るのである。

息絶えんとするや遺言して一子は必ず宗教家たらしめよと。蓋し父傳平氏以來の希望なるが如し。

たゞなか子に惜むべきは餘りに勝氣にして靜かに病を養ふ忍耐心に缺くる所ありし事なり。二男一女あり。長男貞一七歳、長女まり子四歳、二男和光二歳、一妹二弟あり。妹やす子は東京女子高等師範學校を卒業し、長弟讓は慶應大學理財科に學ぶ、次弟信治は中學を卒へて受驗準備中なり。

なか子三十二歳にして逝く。實に傷心の事なり。されどその人生の經驗は極めて濃厚にして深刻なりき。吾人は地上以外に於ける靈的生命の準備甚だ豊富なるものありし事を認めて、纔かに安んずるをうる者也。

大正七年十一月三十日

友人　内ヶ崎作三郎

相原の奥さん、今あなたの御魂を永遠の旅に送りまつる時に私共が何時も用ゐて居た通りに相原の奥さんと申すことを許して下さい。

私共の自由教會は極めて新しい小數黨の宗教團體であります。未だに日曜日だけ借家住ひをして小やかな存在を繼續してゐる位であります。今日思ひがけなくあなたの御葬を致す場合にもあなたの以前の靈の指導者、海老名先生に御願ひして本郷教會の御世話になるやうな次第であります。

相原の奥さん、あなたの御承知の通り自由教會に重に若い者共の寄合であります淋しい大都會の生活に疲れては、私共は幾度となく巢鴨の丘の上の御宅に御邪魔を致したことでありませう。そしてあなたの元氣ある面白い御話を承り時には御助言も御小言をも頂戴したのでした。御貞人一郎介君は公務多忙の御身を以て我が教會の創立當時より非常に御世話をして下さいました、あなたは音樂と歌とを以て御手傳下されたのみならず家庭の主婦として又內助者として間接にも教會を助けて下すつたのです。私共の會員中に昨年より六人も結婚した男女がありました、未だ一回も葬儀を營まざりし事は若い團體の強味と考へてゐました。殊に昨年の秋はあなたが元氣な晴々しい御仕度で榮ある仲立人となられたではありませんか、私共はかくも急にあなた御自身が永遠の御國の花嫁として嫁がるゝ事は夢にも思ひませんでした。

此度の流行性感冒は歐洲大戰亂と密接の關係があると私共は信じます。この病氣に斃れた人々は一種の戰死者であります來らんとする文明改造の氣運を促すべき尊き犧牲であります、私共はあなたに戰死者の光榮を捧げたく存じます。あなたの美はしい高いサプラノの聲は最早聞くことは出來ません、しかし永遠の御國の樂境を限りなく飾り給ふことゝ想ひます。

相原の奥さん。私共は今改めて永々の御禮を述べます、せめてもの御恩返しには殘されたる御貞人と御子樣方と御弟妹とを慰め勵ますより外に道はありません。今日は近頃にない日和です、巢鴨の御庭から眺めると富士の白雪は綠の空を背景として尊え永遠の御國を暗示してゐます。さらば安らかに。大神の御胸に宿らせ給へ。

大正七年十一月三十日

自由基督教會總代　原田長治

心なる信仰は淵源する所遠しといふべし。なか子幼くして、明敏、四歳にして、教會に於けるクリスマス祝會に演説して父母を滿足せしめたり。小學校に於ては、小柄の美しき乙女は常に少年競爭者に打ち勝ちて優等の成績なりしを以て、いたく鄉黨の注目を牽きぬ。明治三十五年父傳平氏永逝し、母まん子は家政の責任者となりぬ。まん子は男勝りの婦人にして、良人の失敗の後を繼ぎて之を整理し、遺されたる二女二男の教育に熱中し、同時に教會員の爲めに家庭を開放し、青年を鞭撻しぬ。なか子はよくその氣質を承けたるは故ありといふべし。當時若松組合教會に別派運動發生し、まん子は實にその中心人物なりき。なか子が自由教會に於ける態度之を髣髴せしむる者あるは興深しといふべし。なか子十六歳にして仙臺市中島丁尚絅女學校に入學してアゼル女史の薰陶を受けたり。青葉山の緑、廣瀬の流はいかばかり多感なる少女を動かしたりけん。なか子は片桐清治の牧する宮城組合教會に出席して、その日曜學校を教へたり。將來の良人と相識りしはこの間に於てなりき。なか子は尚絅女學校に於ても常に首位を占めたり。卒業後暫く歷史、地理、數學、音樂等を教へぬ。殊に記臆力にすぐれて、よく聖書に精通したるは教師のみならず、良人さへも驚嘆せしむる程なりき。明治四十四年母病んで死しぬ。なか子は二年前仙臺を辭して母の膝下に仕へたりしなり。同年七月四日永く約婚したる文學士相原一郎介君と結婚しぬ。眞に愛と理會とに基きたる結婚として友人間に羨望せられぬ。同年秋小石川の奥に新家庭を創めぬ。爾來なか子は主婦たると共に一妹二弟のために、母たるの其めを果してその負擔輕からざるものありき。四年前巢鴨講和舍の一隅に地を卜して新居を營み、相原家及び實家の爲めに獻身的努力をなして、今日に至れり。昨年二月次男を生みし後、やゝ健康を損せしが本年四月慢性腹膜炎に罹りぬ。

醫師小林重市氏醫學士荒井恒雄氏の懇切なる治療により七月快方に赴き九月鎌倉に轉地して養生に努めしかば、病大に怠り始ど全快せるの觀あり。家族友人やゝ意を安じたり。然るに東京に殘したる子供達が氣がかりなるとて、冬を湘南に送る準備のため十月初旬一旦歸宅したるに、折しも稍健康を損じたる次男を見て、病餘の身を押して其養育に熱中せり。十月十三日病再び發して肋膜炎となり體溫次第に高まりぬ。十一月十五日東洋内科醫院に入りて高田博士の治療をうけぬ。折しも流行の感冒を併發して肺炎となり二十八日午後一時五十分病急に革まり多少の苦痛の後に逝けり。なか子の母嘗て彼女に評りて曰く「お前は人の事のみ心配し過ぎれば子供を持たば早世するかも知れない」と。此の語讖をなしぬ。なか子は「日々の力」を愛誦せり。二十八日の條は子供の愛なりき。奇なる暗合といふべし。

なか子の才幹については前に述べたり。なか子は膽力の据りたる婦人なりき。嘗て尚絅女學校寄宿舍に深夜賊侵入して、眠れるなか子の頭を押へぬ。なか子眼を覺ませば暗中辭あり、室外に來れと。なか子同室者に危害を及ぼさんことを恐れ、そしらぬ振して之を諾し、暫く我に祈る時を與へよと。賊之を諾して室外に去る。なか子この際に乘じて靜かに舍監室に去りて之を告ぐ。賊驚いて逃げ去れり。なか子は正義を信じ固く守りて讓らざりき。殊に信仰心厚くして常に祈ることを怠らず眞に祈の人なりき。將に

近事彙報

●新學制

大學令及高校令

既報の大學令及高等學校令は左の如く十二月六日の官報を以て發表されたり。

▲大學令

第一條　大學は國家に須要なる學術の理論及應用を敎授し竝其の蘊奥を攻究するを以て目的とし兼て人格の陶冶及國家思想の涵養に留意すべきものとす

第二條　大學には數個の學部を置くを常例とす但し特別の必要ある場合に於ては單に一個の學部を置くものを以て一大學と爲すことを得學部は法學、醫學、工學、文學、理學、農學、經濟學及商學の各部とす

特別の必要ある場合に於て實質及規模一學部を構成するに適するときは前項の學部を分合して學部を設くることを得

第三條　學部には研究科を置くべし數個の學部を置きたる大學に於ては研究科間の聯絡協調を期する爲之を綜合して大學院を設くることを得

第四條　大學は帝國大學其の他官立のものゝ外本令の規定に依り公立又は私立と爲すことを得

第五條　公立大學は特別の必要ある場合に於て北海道及府縣に限り之を設立することを得

第六條　私立大學は財團法人たることを要す但し特別の必要に因り學校經營のみを目的とする財團法人が其の事業として之を設立する場合は此の限に在らず

第七條　前條の財團法人は大學に必要なる設備又は之に要する資金及少くとも大學を維持するに足るべき收入を生ずる基本財産を有することを要す

基本財産中前項に該當するものは現金又は國債證券其の他文部大臣の定むる有價證券とし之を供託すべし

第八條　公立及私立の大學の設立廢止は文部大臣の認可を受くべし學部の設置廢止亦同し

前項の認可は文部大臣に於て勅裁を請ふべ

第九條　學部に入學することを得る者は當該大學豫科を修了したる者高等學校高等科を卒りたる者又は文部大臣の定むる所に依り之と同等以上の學力ありと認められたる者とす

入學の順位に關する規程は文部大臣之を定む

第十條　學部に三年以上在學し一定の試驗を受け之に合格したる者は學士と稱することを得

前項の在學年限は醫學を修むる者に在りては四年以上とす

第十一條　研究科に入ることを得る者は醫學を修むる者に在りては四年以上其の他の者に在りては三年以上當該學部に在學し其の他相當の學力を具へたる者にして當該學部に於て適當と認めたるものとす

第十二條　大學には特別の必要ある場合に於て豫科を置くことを得

大學豫科に於ては高等學校高等科の程度に依り高等普通敎育を爲すべし

第十三條　大學豫科の修業年限は三年又は二年とす

日本統一基督教弘道會及び六合雜誌社は相原夫人の訃報に接して特に哀悼の念に堪えざるの理由を有す。

抑も我が弘道會の機關雜誌たる六合雜誌は、相原君多年の獻身的努力に依りてのみ今日の發展を見ることを得たり。而して相原君の獻身的努力は、常に夫人の犧牲的內助を背景となせるものなるが故に、我等は常に夫人に對して深甚なる敬意と謝意とを表せるものなり。然るに夫人は犧牲獻身の極終に病を得て良人愛兒及我等を殘して永逝せられたるは誠に哀悼の至に堪えず。謹んで弔意を表す。

大正七年十一月三十日

日本統一基督教弘道會幹事
六合雜誌社主任　今岡信一良

編輯餘錄

▲久し振りで平和の新年を迎へて、お互に御慶に堪えない。一九一九年は實に世界改造の第一年目であつて、此後の世界は國內的にも國際的にも極めて多事多端であらうと思ふ。本誌は世界的思想の大變轉期に際して、讀者諸君の厚き御援助に依つて、益々奮闘し我國民の思想生活の向上進歩に盡したいと思ふ。

▲本誌の發行は豫定より二三日遲れましたが、體裁內容共に大いに刷新して諸君の机上に見えることの出來たのは、編輯者の深く喜びとするところであります。先月號に豫告した通り原稿が大抵集りましたが、相原一郎介氏は愛妻を失はれた爲め、色々取込みたるがあつて、遺憾ながら氏の寄稿に接することが出來なかつた。然し二月號には大いに論ぜらるゝ相でありますから今岡信一良氏は風邪の爲め本號に執筆するとが出來なかつたのは遺憾でありますが、二月號に執筆さるゝ約束です。

▲岡田哲藏氏は十月以來浦鹽派遣軍參謀部附として從軍せられたるが、十日程以前無事凱旋されました。元氣益々旺盛以後續々本誌に雄筆を揮ふるゝであらう。內ヶ崎氏は相變らず健在。十二月十八日所用ありて鄕里仙臺に歸省し、廿二日朝歸京しました。三並氏はこの程御不快の樣子でしたが、今は全快せられました。先程編輯子のところにも見えられました。我國民の思想生活の向上進歩に盡したいと思ひましたが仲々元氣でした。相原一郎介氏も健在氏は一家を引纏めて暫く鎌倉に住われることになりました。

▲本誌の表紙は有田四郎氏の作にて、キリストの最後の審判を描いたものである。今やいに雄筆を揮ふべく、次號も本號に劣らぬ『最後の審判』に依りて漠々たる戰雲愈り平和の天日を仰ぐに至り、世界人類の戰の鬼神の興へたる鍍湯塗炭の苦みより更生せる秋に際つて、この作の成るは非常に深き意義あると思ひます。小說の扉に入れたカットも氏の描かれたものである。有田氏の熱心なる努力に依りて本誌を飾られたことは編輯者の最も喜びとするところであります。尙本誌の口繪を初めコロタイプ版にする積りでしたが、發行日が切迫した爲め止むを得ず普通の寫眞版にしました。これからは可成每號口繪を揭げたいと思つてゐます。

▲法學士平山六之助氏の寄稿せられたる『社會改善論』は仲々面白い論文であるが、締切期日に後れたる爲め次號に廻はしました。その他新年號に間に合はなかつた原稿が澤山ありますが、いづれも次號に登載することにしました。切に寄稿者諸君の御諒恕を乞ふ。

▲一條、野村、吉田、沖野、帆足の諸氏は頗る健在である。これ等の諸君は二月號には大面白い雜誌が出來るだらうと思ふ。

▲本日寒氣凛冽。朝來六花繽紛。巢鴨の草廬大いに情景を供へた。支那人に云はせると瓊林玉樹、奇觀謂ふべからず等となるだらうが雪が降ると汚ないものは皆白雲に覆はれて一淸望洋無垢の天地となるから愉快だ。

（十二月廿四日德麟記）

の高等學校に付ては此の限に在らず

高等學校豫科に關する規程は文部大臣之を定む

第十一條　高等學校尋常科に入學することを得る者は當該學校豫科を修了したる者尋常小學校を卒業したる者又は文部大臣の定むる所に依り之と同等以上の學力ありと認められたる者とす

第十二條　高等學校高等科に入學することを得る者は當該學校尋常科を修了したる者、中學校第四學年を修了したる者又は文部大臣の定むる所に依り之と同等以上の學力ありと認められたる者とす

第十三條　高等學校の生徒定數は高等科四百八十人以內尋常科三百二十人以內とし第七條第二項の高等學校に在りては專攻科を除き六百人以內とす

第十四條　高等學校に於ては同科同學年の生徒を以て學級を編制すべし

一學級生徒定數は四十人以內とす

第十五條　高等學校に於ては文部大臣の定むる所に依り學科目の種類に從ひ學級の異なる生徒を合して同時に之を教授することを得

第十六條　高等學校の教員は文部大臣の授與したる高等學校教員免許狀を有する者たることを要す但し文部大臣の定むる所に依り免許狀を有せざる者を以て之に充つることを得

高等學校教員免許狀に關する規程は文部大臣之を定む

第十七條　高等學校の設備編制學科目及其の程度教科書並生徒の入學退學及懲戒授業料入學料等に關する規程は文部大臣之を定む

第十八條　公立及私立の高等學校は文部大臣の監督に屬す

第十九條　文部大臣は公立及私立の高等學校に對し報告を徵し視閱を行ひ其の他監督上必要なる命令を爲すことを得

第二十條　本令に依らざる學校は勅令規程に別段の定ある場合を限くの外高等學校と稱し又は其の名稱に高等學校たることを示すべき文字を用ふることを得ず

附　則

本令は大正八年四月一日より之を施行す

明治廿七年勅令第七十五號高等學校令及高等中學校令は之を廢止す舊令に依る高等學校は之を本令に依る高等學校とす前項の高等學校には當分の內第十三條の規定を適用せず

高等學校大學豫科は大正十年八月三十一日まで之を存五す

人心統一 建議案改題

教育主査會決議

人心統一建議案に關する臨時教育會議主査委員會は十三日午後二時より文部官邸に開會平田、久保田正副總裁、小松原委員長以下各委員文部當局等出席成瀨、久保田、一木、山川、木場、平沼、阪谷、江木各委員より種々意見の陳述ありたる後建議案を改題左の如く決議し六時散會せり追て總會に附議する筈

△教育の効果を全からしむべき

一般施設に關する建議案

教育の事たる國家經綸の大本にして皇道の振起國運の隆昌一に之れを其力に俟たざるべからず政府夙に是に見る處あり常に教育の振興を圖り神聖健極の遺訓と祖宗弘恢の皇謨とに順ひ之れが達成に努むるは今亦喋々を要せざるなり然れども社會の狀態にし

修業年限三年の大學豫科に入學することを得る者は中學校第四學年を修了したる者又は文部大臣の定むる所に依り之と同等以上の學力ありと認められたる者とす

依業年限二年の大學豫科に入學することを得る者は中學校を卒業したる者又は文部大臣の定むる所に依り之と同等以上の學力ありと認められたる者とす

第十四條　大學豫科の設備、編制、教員及教科書に就ては高等學校高等科に關する規定を準用す

第十五條　大學豫科の生徒定數は毎年の豫科修了者の員數が其の年當該大學に收容し得る員數を超過せざる程度に於て之を定むべし

第十六條　大學及大學豫科の學則は法令の範圍内に於て當該大學之を定め文部大臣の認可を受くべし

第十七條　公立及私立の大學には相當員數の專任教員を置くべし

第十八條　私立大學の教員の採用は文部大臣の認可を受くべし公立大學の教員にして官吏の待遇を受けざる者に付亦同じ

第十九條　公立及私立の大學は文部大臣の監督に屬す

第二十條　文部大臣は公立及私立の大學に對し報告を徴し檢閲を行ひ其の他監督上必要なる命令を爲すことを得

第二十一條　本令に依らざる學校は勅定規程に別段の定ある場合を除くの外大學と稱し又は其の名稱に大學たることを示すべき文字を用ふることを得ず

附　則

本令は大正八年四月一日より之を施行す本令施行の際現に大學と稱し又は其の名稱に大學たることを示すべき文字を用ふる學校には當分の内第廿一條の規定を適用せず

▲高等學校令

第一條　高等學校は男子の高等普通教育を完成するを以て目的とし特に國民道德の充實に力むべきものとす

第二條　高等學校は官立公立又は私立とす

第三條　高等學校を設立することを得る公共團體は北海道及府縣とす

第四條　私立高等學校は財團法人たることを要す但し特別の必要に因り學校經營のみを目的とする財團法人が其の事業として之を設立する場合は此の限に在らず

第五條　前條の財團法人は高等學校に必要なる設備又は之に要する資金及少くとも高等學校を維持するに足るべき收入を生ずる基本財産を有することを要す、但し其の基本財産の額は五十萬圓を下ることを得ず基本財産中前項に該當するものは現金又は國債證券其の他文部大臣の定むる有價證券として之を供託すべし

第六條　公立及私立の高等學校の設立廢止は文部大臣の認可を受くべし

第七條　高等學校の修業年限は七年とし高等科三年尋常科四年とす

高等學校は高等科のみを置くことを得

第八條　高等學校高等科を分ちて文科及理科とす

第九條　高等學校には高等科を卒りたる者の爲に專攻科を置くことを得其の修業年限は一年とす

專攻科を卒りたる者は得業士と稱することを得專攻科に關する規程は文部大臣之を定む

第十條　高等學校には特別の必要ある場合に於て豫科を置くことを得但し第七條第二項

創作

ゲラルの一夜……沖野岩三郎
ハートのI……本多季磨
放蕩息子……長澤幸一

て不健全ならんか當局の經營教職の苦心も其の効を奏する事能はず故に學校教育の効果を完全に收めんとせば同時に社會の狀態を改善せざせざる可からず而して此の事たる教育に從事する者のみの能く爲し得べき處にあらず必ずや朝野一切の經營者の協心戮力に依らざるべからざるなり熟々社會の情勢を見るに維新の後開國進取に急にして歐米の文物制度の輸入に忙はしく或は薫蕕を頒つの隙あらざりしが爲めに一面に於ては我文化を稗補し富强の實漸く現はるゝものあるに拘はらず他の一面に於ては亦人心の亂調を來し惇美の風敦厚の俗次第に其跡を絕たんとするの勢を呈するに至れり殊に歐洲動亂の影響に依り我思想界に生じたる幾多の謬見は愈々其傾向を大ならしめんとす誠に憂慮に堪へざるなり苟も時弊を救はんと欲せば人心の歸嚮を一にし其の適從する所を定むるより急なるはなし而して其の歸嚮する所は建國以降扶植培養せる本邦固有の文化を基址とし時勢の進運に伴ひ益々之が發達大成を期するにあり今其の要目を擧ぐれば

國體の本義を明徵にし之れを中外に顯彰するが如き、我國固有の淳風美俗を維持し法律制度の之れに副はざるものを改正するが如き各國文化の長を採ると共に徒に之が模倣に安んぜず大いに獨創的精神を振作せしむるが如き即ち是れなり

之れを要するに前述の趣旨を徹底し現下の狀態を改善するに非ずんば教育の効果得て望む可からず須らく朝野一致共同事に此處に從ひ内は以て國家百年の長計を立て外は以て世界の文明に貢獻する處あるべきなり當局者に於ては深く思を此に致し相當措置を取られんことを望む

本號の創作に就て

◎沖野岩三郎氏の『ゲラルの一夜』は氏苦心の作にて新春文壇の一異彩であると思ふ。

◎本多季磨氏の『ハートのI』は叙事と云ひ、描寫と云ひ、あまり世に知られない作家であるが、慥かに非凡なる技倆があると思ふ。殊に作者は感能の極めて纖鋭であつて、作中の人物の眞に觸れてゐる。世の明るみに捨てられ暗い世界に歩一歩轉落し行く頽廢的徑路を辿る敗殘者の性格がよく現はれてゐる。陰慘にして飽くまで怪異（グロテスク）な色彩を出したところは、作者の凡手ならざるを覗ふに足る。一夜作りの濫作を發表して虚名を以つて讀者を脅かす所謂大家なるものゝ駄作とは本作は同日の談ではない。吾等はこの作を江湖に發表した次第である。

◎『放蕩息子』も輕快なる筆致と纖麗なる感情とは、確かに未來のある作家であると思ふ。

ゲラルの一夜

沖野岩三郎

一

ペリシテ人の王アビメレクは妃のルマが崩じて後兎角鬱ぎ勝であつた。近臣達は手を換え品を替えて慰めようとしたが一向其の甲斐が見えなかつた。

將軍のピコルは數ある家來達の中で一番王の寵愛を蒙つただけ、夫だけ王の憂鬱を慰めてあげたかつた。哲學者のアハザテなどが、

『なアに今に王の顏も晴やかになるよ、夫は彼の沈鬱な顏が死んで土の中に埋められる時だ。』

などゝ言つて平氣で居るのを見ると本當に机を敲きながら顏を紅くして議論の一つもして見たくなる程であつた。

柳の若芽の吹出した頃であつた。將軍ピコルはカナンから新に買つた栗毛の馬を家來に曳かせて參內

ると、香柏の葉蔭から二三十町向ふに砂埃の濛々と立上るのが眼に止つた。

『何だらう?』

斯う云ふ考へが起ると同時に用心深いピコルはクルリと馬を引返して、追隨の兵士に早く駈け付けろと云ふ相圖をした。素破こそと五十の兵士は蹄の音けたゝましく駈けつけて來た。

ピコルは早速五人の兵士に斥候を命じて殘んの兵士と共に右手の森蔭に馬を乘入れた。見ればアピメレク王は小高い所から頻りに砂塵の立上る方を見詰めてゐたが、噌と手を拍つて、

『噂に聞いたカルデヤの牧羊者だらう、屹度さうだ。』と云ひ乍らピコルを顧みて『お前は如何思ふ?』

ピコルは俄に返事が出來なかつた。實の所彼はカルデヤ人の群が此邊に居るといふ事すら知らなかつたのであつた。

聽て砂塵は靜まつて、つい眼の先に駱駝に乘つた五六人の旅人が現はれた。續いて山羊や羊を伴れた多勢の群が五十人七十人と一團一團になつて香柏の樹蔭から姿を現はして來た。

所へ第一の斥候が駈けつけて、

『マムレの樫林に居たカルデヤ人のアブラハムが一族郎黨を引具して參つたので御座ります。』と報告した。續いて第二の斥候が、

『ソドム、ゴモラに住んで居たロトの一族も一緒でござります。』と報告した。

『ピコル! お前はアブラハムに會つて、何の爲に朕の領土へ來たのか訊正して參れ。しかし決して疎忽あつてはならぬぞ、彼は牧羊者とは云へ三百十八人の手勢を引具してゐる筈だ。』

した。そして微服でヘソルの川縁をベールシバの方まで遠乗する事をアビメレク王に勧めた。

怎ういふものか王は其日に限つて大變御機嫌麗はしく、直ぐさま『夫れは面白からう、一緒に行かう。』と云つて早速瀟洒な服装でピコルと共に愛馬に跨つて宮を出た。ゲラルの町の人達は夫が王様であらうとは知る筈が無いから、唯ピコル將軍の友達であらう位にしか思はれなかつた。

しかし用意深いピコルは屈強の兵士を五十人ばかり撰抜して見え隠れに王の跡を追うて守護の任に當らしめた。

アビメレク王は乗馬と投鎗とが自慢であつた。しかし將軍ピコルの馬は動もすると王の馬を駈け抜けさうにする。

『おい、ピコル、お前の馬は大層立派な馬だな、何所から買つた?』

王は顧盼いて訊いた。ピコルは得意になつて、

『一昨日カナンから買つて來たのでござります。』と答へた。

『さうか、善い逸物を手に入れたものだ、夫は朕の馬よりずつと能く駈けるだらう。』

斯う言つたと思ふと王は鞭を擧げて、身體を前の方に屈めたが、馬は一散に駈け出した。ピコルは驚いて手綱を控へたが、俄に夫が王の輕い悪戯だと知つたので、續いて鞭を擧げた。そして二人は平坦な往還を東へ東へと駈け續けた。しかし如何してもピコルの馬は王の馬に追付く事が出來なかつた。

最う五六里も走つたと思ふ頃、王は大きな香柏の下でピタリと馬を止めた。そして靜に馬を降りて傍の森の中へ入つて行つた。ピコルは一町ばかり後れて此様を見たが、別に心にも留めず其場へ行つて見

ますから、一旦埃及へでも行つてみたいと思つて此所まで出かけて參りました次第でございます。』

話の中にもピコルは油斷なく一隊の擧動に注意を怠らなかつた。しかしアブラハムが飽迄慇懃であつたからピコルも安心して、

『左樣なら、二里ばかり行けば大きな香柏が一本立つてゐて其附近には楊の樹が澤山生えてゐる、其所に天幕をお張りなされい、若し土地の者が咎めたなら私が然う言つたと御答へ下さい、左樣なら。』

ピコルは馬に跨つて靜かに引返した、事あれかしと云ふやうな面魂で手錦を小腋に抱えて待つて居た二十騎も平和な音を蹄に響かせながら將軍の後を遂うて行つた。

しかしアブラハムはペリシテ人の殺伐な事を豫々から聞いてゐた。何か事件が起らねばよいがと考へつゝ再び一群の行進を始めた。

アビメレクはピコルの歸りを待つてゐたが一時も經つたと思ふ頃、歸つて來た。そしてアブラハムの非常に溫和な男らしい事を報告した。アビメレクは暫く默つてゐたが、

『ピコル、お前はダマスコの事件を知つてゐるだらう?』

『あの五王の?』

『うん、然うだ、五王の中でもエラムのケダラオメルなどは隨分強い男だ。けれども牧羊者だと侮つてアブラハムの甥の財產を奪つて、甚く復讐されたのぢや、朕の眼から見るとアブラハム! あれは單なる牧羊者では無い立派な無國の王だ、』

と言つてゐる時、群の一行は靜々と往還を練つて來た。屈强な男が五十人ばかり驢馬に乘つて前驅を

アビメレクは聰明な眼を輝かしながらピコルに注意した。

二

ピコルは三十騎の兵士を從へて森を出た。そして靜々と轡を並べてアブラハムの一行に近づいた。

『夫れに見えるはカルデヤ人アブラハムでは御座らぬか。』

ピコルは手綱を控えて馬上から呼んだ。アブラハムの一行は郎等も家畜も皆なピタリと歩みを停めた。そして一群の中には物凄い殺氣が漲つた。幾多の戰場を經て來たピコルは直ちに夫と察して、馬からヒラリと降りて、莞爾と笑ひながら旅人の群に二三歩近寄つた時、隊の中から年の頃四十ばかりとも見える色の白い何所となく氣品の高い男が駱駝の脊から靜かに降立つてピコルの前に來て三度び身を屈めた。

『私がカルデヤ人アブラハムでムります。御呼かけなされた貴方は？』

『私はペリシテ人の王アビメレクに事ふる將軍ピコルぢや、豫々お名前は聞いてゐたがお目にかゝるのは始めてぢや。』と云つて笑顏を作り乍ら『何地へ御旅行なさる？』

『甥ロトの一族と一緒に埃及まで參る心算でムります。』

『今宵は何方へお泊りのつもりでござる？』

『邑の近くに天幕を張りたいと存じてゐます。』

『幸ひ此の邊には水もあり牧草も充分な廣野が御座るから、其所で暫く御逗留なされては如何でござる？』

『有難うございます、ソドム、ゴモラの凹地は鹽の海と化つて了ふ、マムレの樫林には水が少うござい

直ぐ親子四人を別殿に招じ入れた。

夜の更くるまで、有らゆる饗應をした。芝生に臥し野に横はる牧羊者の耳には實に珍らしく響く音樂が奏でられた。天の使かと思ふやうな美しい服裝した少女達は彼等の前に羽を擴げて躍り舞うた。

饗て宴會が果てた時、將軍ピコルは蹣跚として醉歩を踏しめ乍ら、

『あのサライさんは貴方の妹さんだと仰しやいましたな、お年は幾つて御座る……』と問うた。

『あれてすかあれは最う婆アさんて九十歳ですよ、はゝゝゝゝはゝ』

アブラハムは次に來る問題を豫測したので態と滑稽を言つて誤魔化さうとした。

『九十歳の？　夫れはカルデヤ邊の宗教書にてもありさうな皮肉なお言葉ぢや。さう〳〵あなた方は神樣を信じてらつしやる。神樣は鶏のやうに女一人で子を産んだり、九十過ぎて赤ん坊が出來たり、死んだ人が墓から生返つて這出して來ると教へるさうだ。道理て妹さんは九十歳でもあんなに若い。あんなに若い九十婆アさんなら何人赤ちやんを産んだつて奇蹟ぢやない。はゝゝゝ』

笑ひながら廊下をヨタ〳〵と歩いて敷石の所へ行つて待たせてあつた馬にひらりと跨つたと思ふと俄に堂々たる武將となつて王城の方へ駈けて行つた。

後姿を見送つてゐたアブラハムは腕を拱いて考へ込んでゐた。そして口の中で、

『果して然うだ！』と呟きながら奥の一室へ入つて行つた。

『あなた！　どうなすつたの？　大變お顔色が惡うございますワ。』

心配さうに顔を覗き込んだサライの頸に縋と右の手を捲きつけて、ふうわりと綿の崩れるやうにアブ

してゐる。其後に駱駝に乘つた十四五人が來る。一番前のがアムブラハムである。其次に色の飽まで白い風姿の瀟洒として年若い美人、其次は色の小黒い埃及人らしい女と五六歳の可愛い子供、と云ふ順である。

『あれがアブラハムの一家族だな、』

アビメレクは大樹の蔭から途を覗きながら小い聲で囁いた。

『左樣で御座ります、あの先なる男がアブラハムでござります。』

『其次の女は？』

『存じませぬ……』

ピコルは何氣なく王の顏を見た。そして其所には王妃ルマが崩くなつて以來久しく薄ら淋しかつた大きな空虛が早くも滿たされたかのやうな希望と光明とが輝いてゐる事を感得せずには居られなかつた。

三

アブラハムは廣野へ天幕を張つた。そして家畜をヘソルの川緣へ連れて行つて水を飮ましてゐる所へアビメレク王からの使だと云つて一人の若い武士が馬を駈けさせて來た。其の用事はアビメレク大王がアブラハムを待遇したいから親身の一族だけ今晩ゲラルの町に來て王の別殿に宿つて呉れといふ丁重な案內であつた。

アブラハムは部下の誰にも相談せず、一群の總括を甥のロトに頼んで置いて、妻のサライとハガルと、息子のイシマエルとを伴れて直ぐゲラルの町へ行つた。ピコルは禮裝して町の入口まで迎へに來てゐて

喜びの色を滿面に湛へながら其所に立つてゐた。

ピコルは氣味の惡い程莞爾としながら應接室に通つて、輕い咳拂ひを一つした後で斯う言つた。

『大王アビメレクには過る年妃を失はれた。然るに其後諸所の王達から婚儀の申込もあつたが、何故か皆な素氣なく謝絶された。所が實は昨日ベールシバの此方で御身達の一行を森の中から御覽になつた。そして貴方の妹さんが御目に留つた。そしてあのダマスコで強い五人の王達を散々な目に合はせた貴方の勇氣に感じて、あれは立派な無國の王だ！　と激賞してござる。そこで今日妹さんに王宮まで御出でを願いたい。御對顏あつて双方の心が許し合ふなら早速婚儀を濟ませたい。そして此話の如何樣にか纏るまで御手下の一行は緩りと御逗留下さるやうに。』

アブラハムは意外に思つた。彼等は劍と鎗とで自分達の生命を奪ひに來ると思つてゐた。肥えた家畜と美しい若い妻のサライとだけを殘して皆殺されてしまふのだと思つてゐた。然るに何ぞ知らん其の申込は意外の邊にあつた。

『取敢ず正午過までに參內致させますから……』とアブラハムは途切れ〳〵に言つた。

將軍はいそ〳〵と歸つて行つた。

一室の中で樣子を聞いて居たサライは轉ぶやうに出て來てアブラハムの足を抱いて泣いた。

『あなたは、あなたは、どうして私を今更王の妃になんか……私はあなたを離れて他の家に行く程なら死んで了ひます。死んで了ひます……』

サライの泣きながら訴へゐる所へハガルがまた眼を泣き腫らしながら出て來て、

ラハムはサライに凭れ掛りながら、

『サライ！　サライ！　私の覺悟してゐた時が來た！』と低い沈んだ聲で叫んだ。サライは飛退さざま

『覺悟とは？　ど、どうしたの？』

『どうもしない、カルデヤのウルを出て以來折角此所まで苦心して探してゐた理想の國は今宵限り消えて了うた。』

『え？　何を仰しやる？』

『アビメレク王は我々の一行を待受けてゐたのだ。そして甘言を以て我々を此所に誘ひ出して今宵にも我々の生命を奪はうとするのだ。私は惡かつた、どこまでも惡かつた、此間ロトが彼の強い五人の王達に奪はれた時、其儘にして置けばよかつた。彼等の爲すが儘にして置けばよかつた。然るに血氣に逸つて私は五王と戰つた。そして私は美事に勝利を得た、そして私の部下は最う皆な最初の主義を忘れて全で軍人氣取りでゐる。私は王になる積りてカルデヤのウルを出たのでは無かつた。私は理想の國を建てるつもりであつた。私の王樣は萬軍の主なるエホバだ。あゝ私は僭越な考を起した。夫れが爲に私は自分ばかりか一家一族を悉く滅して終はねばならなくなつた。』

アブラハムは跪いて頻りに哀訴するやうに呻吟するやうに口走つた。サライもハガルも呆然として人の色が無くなつて石像のやうにつツ立つてゐた。

四

翌る朝疾くピコルは表の戸を敲いた。素破と身構へしながらアブラハムは出迎へた。然るにピコルは

は凛々しい眼を數打きながら、

『アブラハム殿、早速の申出、能く聞容れて下さつた。ては今日から改めて親族として御交際を願ひたい。』と優しく言つた。

『牧羊者風情の我々、身に餘る光榮に存じます。』

『あなたは何時頃カルデヤを御立ちなされた?』

『左樣でございます。私が此のサライと結婚しました年の暮でございましたから……』

話の終らぬうちに、アビメレクは顏色を土のやうに變じて、

『ビルコ!』と叫んだ。ビコルは驚いて起き上つた。アビメレクは身を顫はせながら、

『妹ては……妹ては無い……』と叫んだ。

アブラハムは靜に一步前に出て、

『其の御疑ひは御最も、サライは私の妹であつて私の妻て御座ります。』と云つた。

『妹であつて妻? そんな無法な事があるものか、』

アビメレクは身構へして詰問した。

『妹サライの父も私の父も同じテラと申す牧羊者でございます、しかし私の母とサライの母とは別の人てございます。』

『てはカルデヤ人は、父は一人ても母が別々なれば夫れで夫婦になつても宜いと云ふのか。母を認めて父を認めない國か。』

『では、私は埃及へ歸らして貰ひます。サライさんが、あなたの傍を離れて私一人が殘つてゐるといふ事は私には苦痛です、私は疾うから此事に就いて考へてゐたのです、私はシェルの泉の傍で此事に就てどんなに泣いたか知れなかつたのです、サライさんが出るなら私を歸らして下さい。』

サライとハガルはアブラハムの兩の袖に縋つて泣いた。此時アブラハムは蹴然として兩の袖を振放して叫んだ。

『お前達は私に何を訴へようとするのだ、我々の訴ふべき君は天にあるエホバだ。私は最う悲まない、萬事を神の御手に任せよう』

アブラハムは一室に入つて熱心に祈つた。魂の鎔ける程祈つた。そして默示を得たやうな晴々とした顔付て出て來た彼は、

『さア、サライ用意をしろ、私も一緒に行くから！』

元氣よく命令するやうに言つた。所が不思議にもサライは唯々として一室に入つたが、暫くして見紛ふばかりに美しく粧うて出て來た。彼女がアブラハムの天幕へ始めて入る時、被つて來た覆衣をすつぽりと被つて、花嫁のやうな優しい姿て二人は手に手を取つて家を出た。門の前には王の宮から遣はした車が朝から待つてゐたのであつた。

五

王宮は鏡のやうに綺麗に光つてゐた。案内の役人に導かれてアブラハムとサライとは王の前に立つた。紫の覆衣が靜かに除かれて中から霞のやうに現はれて來たサライの姿は一段と美しかつた。アビメレク

『我々の國には神を信ずる者は無い、我々が皆な神だ、此所に居るピコルても今に戰場の露と消えたなら、此の國民は大きな石の柱を建てゝピコルの神と崇められるのだ、朕などは直ぐエホバと同じ位に崇められるのだ、だから神の心に過誤はないと信じてゐる、善しと思つた事は飽までやる、人をも殺す、國をも奪ふ。しかし此のペリシテ國には嚴然とした道德がある、カルデヤ人のやうに母が違ふからと言つて兄と妹が結婚すると云ふやうな野蠻な事は決してしない。人の妻を奪ふと云ふやうな事は此國の道德が許さない、朕は神を信じないけれども朕には深い道德心がある。今朕は心の中で非常に愧ぢてゐる。あなたが最初から『サライは自分の妻だ』と云つて呉れたなら、こんな不道德の罪を犯すのでは無かつた。あなたの唯た一言で、朕の一家は如何だけの災難を受けたか知れない。私は今一歩て、『他人の妻を奪ふ。』といふ道德上の大犯罪人となるのであつた。あゝ恐ろしい事であつた。朕は今良心の窓を開いて、道德の眼で貴方がた二人を觀ると、朕の一寸した心の弛みから、あなた方二人の美しい愛情にどれだけの甚傷を負はせたか知れない、朕は愧ぢる、朕は愧ぢる、昨日一日の遠乘は私を此の池上の大罪人としてしまつた。ピコル！　ピコル！　一體どうすれば宜いのだ！』

アビメレクは身を悶えて王冠を脚下に拋つた。ピコルは蒼白な顏をして顏へながら立つてゐた。

此時撻を排して入つて來たのは哲學者のアハザテであつた。

『おゝアハザテ能く來て呉れた。朕は最う王冠を投げ棄てた、朕は良心の眼が闇んでしまつた。』

『委細は悉く聞きました、先づ心を落着けて私の話を聞いて下さい。』

アハザテは靜に王冠を拾ひ上げて傍の椅に腰をかけた。

『左樣にございます。』

『然らばあなたの國では政治法律も道德も何も無いのか、そして一國の長たる男子が其の權利を握るのでは無いのか。』

『左樣にございます、政治も法律も我々の生命財産も悉く神樣が御支配下さいます。』

『夫れが所謂神聖政治か、では道德は誰が決める。』

『夫れも神樣がお決めになります。』

『此のペリシテの國では男子が本位だ、父系制度だ、母系制度のやうな弊風は疾くの昔に消えて終つた。總ては男子が女子の頭に立つ、そして政治は男子の手で行はれる。法律が定められて道德が維持出來る、我々には空漠とした神に總てを一任する事が出來ない、朕は此國民の神ぢや、あなたの尊ぶエホバぢや。』

アブラハムの耳には此のアビメレクの言葉が非常に不敬な恐ろしい言葉に響いた。そして默つて俯向いてしまつた。

『しかし一應聞いて置き度い事がある、朕はライサ殿を朕の妃として迎へたかつた、夫れて將軍ピコルに、貴方との親戚關係を調べさせた時、あなたは何故妻だと言はないで態々妹だと言はれた?』

『左樣てございます、ペリシテの國人は誰も神を信じないと聞いてゐました、だから人間が神樣の權威を有ち得るやうに思つて、どんな無謀な事をするかも知れぬと思ひまして。』

『無謀とは?』

『若しもサライを私の妻だと申したなら私を殺してサライを奪ふだらうと思ひまして。』

德を引擔いで行けるやうに思つてゐるのが、馬鹿だ『ペリシテ人は正義を旗印とす』などゝ言つて今は威張つてゐるが、程なくペリシテ人と云へば直ぐ虐殺を想ひ起す程無茶苦茶な不道德な國になつてしまふかも知れないのだ。しかし、お前達だつてさうだ。理想の國ばかり夢に見てゐては、いつまで經つてもそんな國は見えるものぢや無い、待ちぼけだ、矢張りお前達の子孫にもアビメレクのやうな男が出て來て道德だの正義だのと云ふ旗を押立てゝ大仕掛に斬つたりハツつたりするのさ。私のやうな哲學者の眼から見ると何と馬鹿げた話だ、今に皆な土の中へ埋められて上から土を何尺もかけられて其の底で呻吟く力もない死人になつてみろ、そんな事の皆な馬鹿らしかつた事が解るのだ、其の事が解つた時今の私の心持が解るのぢや、私の心持が解つた時、私の神樣も私の道德も解るのぢや、イヤ斯んな事を言つたつて誰にも解らぬ、どれ此の王冠は私が頂戴して歸らう、はゝゝゝは。』

アハザテは少しく道化た身振をして其の王冠を頭に戴せて外へ出て行つた。

アビメレクは蒼い顏をして立上りながら、

『アブラハム殿、萬事は赦して下されい。』と言つて二歩三歩近寄つた。

『私とて曖昧な事を申上げまして……』とアブラハムは聲を顫はした。

『アブラハム殿、朕は誓ふ、朕の宮中には少くも百に餘る美人が居る、朕は獨身ぢや、けれども朕は今日から此の宮中の胎を閉ぢる、朕の世を治むる間、朕が王位を治むる間は決して此の宮中に『人の子を產む』ものは無い、朕は今日から石の人となつて暮す、朕は今日から天の事も考へよう、地の事も考へよう、朕も神を求めよう。』

『アビメレク、お前は此所に立つてゐるアブラハムが其の妻のサライをアビメルクに奪はれたと云つて今此場で自殺したなら如何する？』

『奪ひはしない、決して奪ひはしない。唯朕の心の弛みで一時此のサライ殿を妃にと思つただけだ。』

『いや、夫は解つてゐる、しかしアブラハムが奪はれたと思つて自殺したなら、お前は夫を馬鹿だと思はないか。』

『そんな事に生命を棄る筈はない。』

『さうだらう、しかしアブラハムには信仰がある、アブラハムは自分以上の神を信じてゐるから、神の裁判に任して平氣でゐる、『神見給ふ』と信じてゐるから漫りに死なない、しかし平生から政治だ道徳だといふお前は、他人の妻を奪ひもしないに、イヤ奪ふ事もなし得ないで王冠を投げ棄てた、私はお前を馬鹿だと思ふ、道徳ばかりに頼つてゐるからだ。自分は自分を救ふ事も審く事も出來ないやうに、道徳を審く事が出來ないのだ。アビメレク！　お前も今少しく賢くなるがいゝよ。』

アハザテは氷のやうに冷い調子で云つて王を冷やかに横目で見た。アビメレクは涙を流しながら歯を喰ひしばつてガタ〳〵と身體を顫はしてゐた。アハザテはアブラハムの方に向つて、

『アブラハム、お前達の信仰はまだ〳〵幼稚だ、お前達は神、神と云つて天ばかり仰いでゐる、神は雲の中にも山の上にも居ない、お前達の心を神殿として住むのだ、お前達は自分が地上に生きて居る人だといふ事を忘れてゐるから駄目だ、アビメレクを見よ、彼の男はお前達よりも文明人だ、遙に進歩してゐる、最う彼等は道徳の領分に入つてゐる、だがしかし、道徳だの正義だのと云つて死んだ後までも其道

になる？　終はアビメレクもお前も道徳といふ大きな垣を破つて御互ひに苦しむばかりだ。お前は矢張りアブラハムの妻だ、お前はアブラハムの妹ぢやない。お前の父とアブラハムの父と果して一人の人だといふ事が誰に知れるものか、夫は眞朱な嘘かも知れない、しかし産んだ母が別々の人だといふ事は明らかだ。お前は改めて今日から美しい若い花嫁になれ、さあ、其の覆衣を被れ。』

アハザテはアビメレクの方に向直つて、

『アビメレク、お前は未だ〳〵若い、仙人のやうでも私の方が戀の眞味も知つてゐる、浮世の苦勞も知つてゐる。お前も今言つた誓ひを取消すがよい。自分の戀の叶はなかつた時、俺は一生獨身で暮す！などゝ威張るのは男の癖だ、しかし夫れは長く續くものでない。お前は今宮中の女の胎を閉ぢると云つた、夫は彼の何百の娘達を一生宮の中で空しく枯死させようとするのか、胎を閉ぢる閉ぢない、夫は他の女達の知つた事ぢやない。お前はお前一人の操を守つて行けば宜い。しかしお前も然う道徳道徳と外だけ堅く言つても駄目だ、あの誓は投捨てるが宜い、下手な誓よりも此の王冠が大事だ。さあサライは覆衣を着た、お前もこれをお被り、そして此の美しい花嫁を祝つてやらう。』

アハザテは笑ひ乍ら王冠をアビメレクに冠らせた。

宮中の大廣間では宴會が開かれた。山海の珍味は金の大皿に山と盛られた。葡萄の濃い酒は磐石の盃に溢れた。百餘の美人は踊つた。一同は聲の嗄れるまで歌つた。殊にアビメレクは美人の群と狂人のやうに踊つた。白い腕が百も二百も彼の頸を捲いた。朱の唇が何百も彼の唇を見舞うた。

アビメレクが斯う言つた。サライは其場に泣倒れた。

『私は、私は天幕へ歸りたくない、私は今大きな眞理を知りました、私の天幕の中には神様はお出でなすつても道德がありません。私は今日此所へ來る時、私の此の身體を賣つてカルデヤ人を救はうと思つた程淫らな考へて參りましたのです、私にも道德がありません、また私の天幕には、母の異つた子供があります、私の產まない子があります……私は女です、けれども私は其の道德に生きてみたい、私は決心しました、どうぞ此の王宮に永く置いて下さい、私も今日から胎を閉ぢた生活に入ります。』

アブラハムもアビメレクも答ふる言葉が無かつた。ピコルは一室にこそ〳〵と逃げ込んだ、アハザテが再び出て來て、

『私は事情を知つてゐる、アブラハムの家に居る埃及の女ハガルは最う歸る決心がついてゐる、あの女はイシマエルといふ子供を伴れて一つの國を拓かうといふ大きな考へを持つてゐる。アブラハム！　お前は今日からサライを心から愛してやれ、そして今迄のやうに熱心に神を信じながら理想の國を追うてみるがよい。サライ！　お前はそんな事を言はないでアブラハムを助けてやれ、若い年だ、まだ十九ぢやないか、夫れを倒に讀んで九十まで生きると想像してみろ、前途の長い生命だ、お前が產んだ子が、何千年の後には末では濱の眞砂のやうに空の星のやうに世界中に廣まるに相違ない。其中には英雄も出やう、聖人も君子も出よう、帝王も大將も大宗教家も出よう、また私を百倍したやうな哲學者も出やう、私はお前が今日からアブラハムを必死に愛して彼の空想のやうな、しかも根強い事業を助けてやつて呉れる事を望む。今お前が一時の感情に任せて此所で胎を閉ぢて小い道德の型の中に自分を閉ぢ込めたつて何

ハートの I

本多季麿

西洋人を唐人と云つたのが、すたつて「異人さん」と呼び始めた頃であつた。もう黒船も居留地が出來るようになつては流石に珍らしがるものはなく、神戸の町も區制を布かれ脊の高い阿米利加人が裾を廣くさばいた白服の阿米利加女と手を組んで、三々伍々山の手や米利堅（メリケン）止波場の邊を散歩しても、見反りもするものもなくなつた。黒い煙を吐いて入る船には印度人も居た。アラブも居た。支那人も居た。世界のあらゆる國の人が皆眉の間に荒涼たる流離の悲をたゞよはせてぞろ〳〵と上陸した。阿片窟も出來た。今の言葉でバーといふようなものも出來た。怪しげな白粉の女をかゝへた家もだん〳〵ふえて來た。永い航海に疲れ切つた人々はそこで毒煙に摩痺し、魔酒に狂ひあくどい女の笑に魂をたゞらすのであつた。古い江戸繪で見るような兵庫の津が、だん〳〵和蘭陀の眞鑄盆に書かれて居るような神戸港にかはつて行つた。殘酷な事や怪奇な事があちらこちらに行はれた。

お君は今年二十八になる。小供の時どこで生れたやら父は誰やら母は誰やら少しも知らぬのである。たゞ叔母だといふ慾の深い妖婆に連られ、流れ流れて十七の年神戸に來て忘はしい稼業をさせられて、夢醜い不思議な清國人の妻になるまで、戀も知らず、字も知らず若いといふ時代をたゞ苦み遊落して暮

一夜は明けて旭は高く登つたが、未だ宮中では歌の聲が止まなかつた。しかしアブラハム夫婦は美しい輿に乘せられて宮を出た。

アビメレクは銀千枚を贈物にした。家畜を四千贈つた、そして國内の何所にても自由に井戸を掘つて居住する自由權を與へた。

アブラハムは一族を率ゐてヘソルの川に沿うてベエルシバまで引返した。そして其所で第二の妻ハガルを埃及に歸す事にした。一子のイシマエルは母と一緒に行く事になつた。

アブラハムはイシマエルの爲に財産を半分けてやうと思つたが、ハガルは斯う云つた。

『私は何も要らない。私は此の子と二人であなたに負けない大きな國を建てゝ見せる。しかしイシマエルは、あなたの大事の子だ、途で潤いて死んではならない。革袋に水を一杯だけ餞別に下さい！　夫れて私は滿足てす！』

アブラハムもサライも泣き乍ら健氣な此の女を川向ふまて見送つた。多勢の男も女も眼を泣腫らして其の哀れな女と子供の姿が見えなくなるまで見送つてゐた。

一同は其の翌日からベエルシバに大きな井戸を掘初めた。土を掘つて石を取除けて巖を斫つた時、手を斬るやうな冷い水が岩の間から噴出して來た。一同は思はず喊の聲をあげて喜んだ。

アブラハムは先づ神に感謝した。そしてアビメレク王とピコル將軍と哲學者のアハザテとを招いて野原の青草の上て宴會を開いた。しかしハガルとイシマエルとは其時丁度革袋の水が盡きて沙漠の中て倒れて死にさうになつてゐたのてあつた。‖一九一八年十二月十六日‖

彼女の夫といふのは片目で苦り切つて口をいつも一文字にむすんだ赫黒い顔の、肩に骸骨の入墨がある大男で、鴉牙の中毒の爲大分近頃は弱つて居た。ミステリアスな片目を鰐の目玉のやうにギョロつかせながらお君の姿を見て、廣東語で重い口に何か呟きながら彼女の後について家に入つた。

暗い家の中にはアラビヤンナイトに出て來さうな眞鍮の大ランプがつるしてある。お君は白い腕を延ばして火をつけた、灰色の壁に寫つた二人の影は妖怪のように物憂かつた。外は未明るいのにこゝはじめ〳〵として陰氣な氣味の惡い室で、伊太利製の古代綿の布の上に立てかけた銀わくのお君の寫眞も生きたものゝやうに思へる。風もないのに萬年青の葉が窓ぎわでひら〳〵動いた。陳さんの內では夕飯の支度が出來たらしい。韮と椎茸と豚肉を煮る頭の底まで染むような惡臭がきえて、一番末の子がギャア〳〵泣くが聲聞えた。

お君は萬家春(支那の酒の名)を甕から赤い紙をはつた德利に入れ、近所の淸國料理からとつた豆と肉のごつちや煮や素麵と乾魚や水瓜の種などを黒檀の卓子に並べた。夫はだまり込んで冷たい酒を素燒の南京猪口で、ちびり〳〵呷りながら片目を伏せて、長い象牙の箸を時々いらだたしさうに、脂だらけの服の上を手でもみころばした。燃ゆるように時々片目をかゞやかせてお君を視、突然立上つたりした。そして又坐つて酒を飲み出しては口の中で何か云つて居た。終に

「プーッアオ。」吐き出すやうに云つた彼は、猪口を抛り出してぐたりと椅子にもたれた。

「ションマテハイバエ。」(什麼的なさいましたか)眉をひそめてお君は聞いた。彼は眉の間に深い皺をよせ片目を輝やかせ上眼づかひになつて、奇怪極まる夢のような獨り言を云ふその言葉は、ポルトガル語

じてしまつた。もう三十に間のないことを思ふ度にどうせ荒れ果てゝ了つた體だから、長生きは出來ないとはいよ〳〵、それても幸福な他の女達の運命とひきくらべては、去年程から肉が落ちてしまつた蒼白い頰に涙が流れる。

秋の日は西の海に落ちたが、灼けるような、殘照がいつまでもいつまでもつける。殊に青いペンキを粗末な板に塗りつけた家の並んで居るこの支那人町には、麒麟を畫いた缺皿の上に、或は古ぼけた塵箱の上にぶちまけた腐つたトマトや、玉葱の皮の紛々と高い臭をあげて居るのに陽炎がチラチラ燃えて居る。ペンキの剝げかゝつた勝手口の柱に貼つけてある砂埃に塗れた、福が來金錢が儲かるようにといふ意味を支那流の變に硬い字で書いた赤紙の字も、熱病のような太陽の反射にくつきりと明に見える。支那人町の萬物は皆黃疸病みの如く黃色である。お君の好んで結つた銀杏返しの髮も今日は頗る暑さうである。赤犬が一匹棄てた豚の骨を喰へてそそくさと通りすぎた。町といつてもこゝは殆んど鼻突く程狹苦しい裏小路で、ごちや〳〵と汚ない腐つた魚だの葱だのが、いつでも籠に入れた儘すてゝあつて、向ひの陳さんの子が立縞の南京シャツを著て、黃ぶくれた顏をどんよりさせながら、汚物をふみしだいて、のそのそと石段を上り埃だらけの硝子扉の中に姿をかくす外、人通りといふ者は先づない。

彼女にはこの人通りのないのが淋しくてならなかつた。哀をそゝるような靜かな夕暮が過ぎ去つた悲痛艱苦をいやが上にも、思ひ浮ばせてこの眞黃ろい天地に消入りたいような遣瀨ない心持になつた。東の空がだんだん灰色になつて來る。秋の日足は早い。汽船の汽笛が港の方で鈍く鳴つた。彼女の夫の淸國人が重い足取りて博奕から歸つて來た。

慄をやつて「うむ。」と叫んだと思ふと、手足を堅くした儘大きな彼の體は、古木をたふすようにばつたり後に倒れた。

「死んだか。」と思ふと彼女はギョッとして慄える手に男の傍によつて手をとつた。手は白骨より冷たかつた。「おや」と思つて男の胸に手をやると胸は熱くつて荒海のように踊り狂つて居た。彼女はそれから夢中に驅け出して氣のついた時はある醫者の門前に居た。後には殺されたような支那人の體軀が緞通の上に横たはり、大洋燈が慄えながらにともつて居る。亞剌比亞の王宮のような此一室には幾多の秘密を藏してゐるようだつた。怪獸を彫刻した裝飾置時計の舌出し人形が魔神のように、ひよこ〳〵時計の上に上りチン〳〵と鐘を三つ打つた。それが世の中のあらゆる惡と慘忍を知ろしめす魔王の洪笑とも聞こえた。夜は刻一刻更け渡る。人の世の惡の饗宴は今酣である。

× × × × ×

彼女は歸つて來た。終夜叩き起したが醫者は起なかつたので夫の身の上を氣づかつて走つて歸つた。下駄はどこかで棄てゝしまつた足袋はだしである。室に入ると未だあけきらぬ闇が室のすみにかくれて居て洋燈はぼんやりともつて居た。彼女が驅け込むように室に入ると倒れて居た夫はむつくり起上つた。「ランシュイ、ケンシュイ」(冷水給水)、苦しさうに云つてお君の差出す茶椀の水をぐつと飲み、「お君さん、御苦勞ありました。」と日本語で云つた。そして西洋寢臺に腰を下して昨夜の苦しさを思ひ出すようであつたが思ひ直してお君に向直つた。

「お君さんもう心配することない。御苦勞ありました。全く御苦勞ありました。」

に鳩英語（ピツヂンコンリシヤリツシユ）と廣東語の交つた何とも云へぬ荒唐な獨言だつた。お君は稼業柄いろんな言葉を知つて居たので、單語單語は分るのもあつたが何しろ濁み聲で、口走つた混合語とて全體として何の事か分なかつた。「毒殺」「片足の靴」。「幽靈の船」。「白痴女」。「ツエンチイワン」。「恐ろしい」。「又來た」。「鴉片」「骸骨の入墨」。「梟が喰ふ」。「海」。「ヴエネチヤ」。「三水」。「厦門」。「長崎」。「船長」。「海賊」。等の言葉がひつきりなしに口を突いて出た。お君は彼はきつと鴉片の爲に發狂したんだと思つた。彼の動作は益不氣味になつて來てその大きな手で虚空をつかみ苦しさうに胸を押へ獸のように呻き始めた。「俺はもう堪らない。」そんなとも叫んだ。もう酒なんか飲みたくなくなつて、辨髪の頭をうるささうに打ち振ながらその奇怪な言葉を口走りつゝ、七寶の支那燒の花瓶の水をぐつと飲んだ。お君は恐ろしくなつて聲を立てようかと思つた。しかしその爛々たる片眼に射すくめられては、たゞ體が堅く胸がわく〳〵するばかりであつた。殺されるかも知れないと思ふと、夢の中で天狗に追驅けられたように足が一歩も前に出なかつた。

日はとつぷり暮れて開港場には全く夜の幕が下りてしまつた。汽船には赤や青の灯が美しくフエヤリイ●ランドのようについて、和田岬の燈臺のまたゝいて居る邊に、螢の塊を見るような星が水平線近く集まつて居る。花やかな夜ではあるがお君はそれ處の騷ぎではなかつた。支那人町の秋の星の夜が更ければ更ける程、彼女の夫の狂的動作はしんとした背景に悽味を持たせて、彼女にはどうしていゝか始末に困つた。夫の脊を撫でて、少しでも靜めてやらうとするのであるが、夫は非常な恐怖に襲はれて居るらしくぶる〳〵身慄ひして肌は一面に寒さうな鷄肌（とりはだ）に變つて居る。もう奇怪な言葉さへ舌が引つつて云へなくなり苦しさうに喘いで片目をギヨロつかせる。その苦悶が見る見るだん〳〵嵩じて來て一つひどい戰

どうしてこんな輕業師になつたんだらう、早くやめたいと思つて或時などは、象にひかせた天幕の床をぬけて脫走しようとしたこともあつた。その時は意地惡の支配人に見付かつて死ぬる程のひどい目に合はされた上、三日程食を與へられないで印度のマドラスの興行であつたが、高い梯子から落ちて氣絶したこともある。

渡り鳥のようにあてどなしに果てしれぬ世界を流れ歩く曲馬の群の中に、彼は生ひ立つて十七歳になつた。彼等の荒んだ心を醫するものは酒と阿片と賭博である。興行の時の樂屋でも旅行の時の斑馬（ピブラ）の檻の側でも、彼等はいつもカードをひねくつて居た。煙管を喰へて居た。酒の瓶を放さなかつた。

丁度其頃は一行は伊太利を興行して居た。彼は知らず知らずの內に、この惡習に慣つてしまつて伊太利の各地で賭博に勝つた快感も、酒の微醺も阿片の夢も味はつた。殊に彼は賭博にかけては天才と云つても好い位、各所の賭場を荒し廻つて伊太利人の乞食や泥棒から、多額の金をしぼり取つた。それは彼が一つ手を知つて居るからで、ハートの1といふ札を巧妙に胡魔化すのが彼の常套手段だつた。

曲馬團はヴェニチヤの興行が思はしくなかつて、ヴェネチヤから程遠からぬ小さい町で打つて居た。輕業師等は給金が渡らないで頗る不平だつた。彼は見すぼらしい支那服を著た儘カードを懷に途中の酒場で幾らかのセンテシモを投り出して強い酒をあふり賭場に出掛けた。賭場には西班牙の軍艦に乘つて居る雇水兵や、釜たきの印度人や黑人が大分來て、もう一勝負すんだらしく伊太利の無賴漢の一人は餘程負けたと見えて、札を机の上にたゝきつけて怒つて彼とすれ違ひに出て行つた。

彼はその空席に坐を占めた勝負は「ツエンチイワン。」だつた。札が切られ皆に配られると、皆は物憂い

「一體どうしなはつた。」

「それすぐいふある。おそろし。おそろし。それは不思議なことあります。いまゝて默つてゐたこと。よく聞くよろしい。」

彼が話す奇々怪々な話は殆ど人間の世界にあらうとは信ぜられなかつた。

彼は廣東に生れた梁さんて通つて居たが彼れの本姓は楚(變名)といつた。これは後年に筆者の氣附いたことだが、かの有名な楚文(變名)後ちに中華民國の臨時大總統に選ばれた革命黨の首領は、實に彼の弟なのだ。楚文が廣東の醫者の子だとは眞赤ないつわりて、彼の言葉を信ずれば英國を放浪した支那人を父とし、葡萄牙人の曲馬女を母とした間に出來た子供だといふことだ。そう云へは楚文の顏はどこかに歐洲人らしい點があり、支那人としては恐ろしく文字が拙劣であることによつて首肯されないとはない。

その時楚文については彼は自分の弟は文といつて、革命黨に入り自分と違つて若い頃から外國の書物ばかし讀んて、醫者を學んで事をあげて失敗して英國を放浪して居るんだとだけ語つた。彼は葡萄牙の名てはリッチと云つた。彼は自分が英國の國籍にあるのか清國人か葡國人かも知らなかつた。名も無い國もない彼は譯があつて子供の時家出して親さへも無くなつてしまつた。彼はそこて曲馬團(サーカス)に入つて獅子や象や風船等と一緒に世界を漂浪した。彼の屬した曲馬團は英人の經營て印度人や土耳古人が多かつた支那人といへば厦門生れのロイ(本名は何といふか知らぬ)と呼ばれて居る男と、彼と二人きりてあつてジョン、ジョン、チャイナマンといつて隨分虐められた。綺羅びやかな衣裳を著てぞつとするような危ない空中て藝をしながら、客の前ては笑つて見せても心ては不幸な運命に泣いて居たこともあつた。

そういつた。何てもてえぶん、金を持つてたのが一文なしになつちやつたとそういつてつたよ。」これを聞いた時は流石の彼も心持が好かあなかつた。爬ふように脊を曲げてぎよろりとした眼でハートの1を睨んだ顔がありありと浮んだ。その幻像を打消さうと思つても消えなかつた。彼は自轉車の曲乘をする、同じ一座で一番美くしい、小猫のポリイトさんと呼ばれて居る、マガレットといふ女の姿とすりかへようとした。しかし一時はポリイが現はれても又前の希臘人が恐ろしい顔をして睨みつける。あいつはどうしてこの酒場の入口までわざ〳〵やつて來て死んだのだらうか。事によると毒藥を懷にして後からひつこりひつこり怨めしい顔をしてついて來たのかもしれぬ。そう考へて行けば體がかた〳〵ふるへ出し、居ても立つても居られなくなり顏色は紫色に變つてしまつた。

慄えた聲で「酒だ酒だ強い酒だ」彼は頭を亂し狂人になつてでも、この怖ろしい事件からのがれようと叫び立てた。芳烈といふより毒々しいといふ程な酒が今の彼には唯一の救け船であつた。身の內から火が出るよう、頭の中は熱湯のにえ立つよう、彼はもう眼が眩みそうになつて來た。「この儘死ねば」そんなことも思つた。しかし彼は矢張生きて居たかつた。勘定をすました時は入口には死骸はもう無く、人が二三人立話をして居た。その脇をよろめきながら彼は始めて外の夜の空氣を吸つた。

彼は片手にハートの1を握つてよた〳〵と狹い家並の間を拔けて、濱邊の方へ足を向けた。

血のような月が空に出てその夜は馬鹿に重苦しく雲が低く垂れ空は黑く沖を通る船もない。息のつまるような物凄い夜であつた。彼はぐたりと砂の上に坐つた。手にはハートの1がある。

所が雨がぽつり〳〵降り出した。それが續け樣ではなくて斷片的に降るのである。空には魔のやうな

顔をして自分の札を見つめた。彼の手にハートの1があつた。札は明けられた。彼が明に勝つて居た。「寄こせ〳〵」。と彼は大分金を儲けた。又「ツエンチイワン。」をやつた。彼は又勝つた。三番四番取返さうと焦慮るが彼が勝つばかりであつた。

大勢の人は多額の金をとられた。中にも一人の駝脊の希臘人等は氣の毒な程金をとられて了つて、火のように眼を輝やかせて彼の手へいつも入るハートの1の赤い心臟形を呪ふように呪みつけた。勝負はとうとう終になつた。誰の手にも金が殘り少なになつた。殊に駝脊の希臘人なんか大分持つて居た金が一文殘らずになつて了つた。怨めしさうに彼を見上げながら暗い顔をして石段を上つて行つた。彼はかくして紙幣をくしや〳〵にして衣嚢につつ込み、昂然として先の酒場に行き舌の燒ける様なきつい酒を、ちびり〳〵飲みながらハートの1を出してひねくつてゐた、博奕に負けて自暴酒を飲みに來た連中などは八ツ當りに當り散らして居た。彼はそれ等の顔を見る度にふくれたポケットの中が嬉しかつた。

そこへあわたゞしく外へ汚物を棄てに行つた料理人が驅け込んで來た。

「皆様大變です。入口で人が死んでまさあ。」

周章者は早速驅け出した。彼も椅子から半身乘り出したが又坐つて悠々と酒を飲みつゞけた。入口は眞黒な人集りてある。

酒は未だしばらく續いたが人は未だ去らなかつた。巡査が來たのか何かがや〳〵云つて居た。見て居た客の二人が又元の席に歸つて來たので、「何だいありあ。」と彼は聞いた。

「何ね。駝脊の希臘人だがね。博奕に負けになつて毒を飲んで死んだつていふのよ。マルチノの野郎が

マチックの張りある聲でどんな身の毛の寄立つ怪談を聞かされても平氣て居た。闇の中から白い手が出たとか、古城の中て泣聲がするとか、そんな話てはちつともこたへなかつた。そして十七歳の今日まて（彼は生れ付大男てあつたから輕業師の中に入つてもめき〳〵大きくなつてもう二十歳以上に見えた）恐ろしい事知らずに過して來た。

然るに今日はどうだ。ハートの札から血が出る。雨が降る。幽靈の娘。片足の靴。駝脊の男。絲をたぐるように考へて行く。彼はどうも不思議てたまらない。夢かしら。否俺は明に起きて居た。實際とすると不思議だ。人間の住んて居る世界にそんな事が、可笑しい。しかし彼はふと自分の心をやすめる或事を考へた。そうだ偶然にそんなことがあつたんだらう。あの娘はきつとこの町に住む白痴に違ひない。血は何かて怪我。そうだあの男が自殺した時に吐いた血が酒場の入口にでも著いて居たんだらう。何だつてつまらない。そうだそうだ。そんな事が落か、アハハハと彼は笑つた儘砂を拂つて濱邊を立つて曲馬團の樂屋に歸つて行つた。

それから二十歳になるまで曲馬團は或はフランスへ或はスイスへ或はドイツへ興行して廻つたが丁度彼が二十歳の時ルアーブルて大損害をやつて、團は解散になつて了ひ彼は小さな音樂入の芝居やオペラブフファ等の寄席藝に出た。

そこて二三年支那人だといふので、大分持て噺されたが永くはつゞかず、馴染の女と一緒に所帶を持て、リールの方てくつと宗旨を變へて、料理屋をやつたがそれも思はしく行かなくて女とは別れて了ひ、彼は今度は唯一人故郷を放れた萬里の遠き歐洲の月の下を漂浪することになつた。道端て乞食のような

月が笑つて居る。月があるのに雨が降る？　訝しいな。彼はハートの1を握つて居る右の手を見た。するとぎよつとした。血、べつとり血、ハートの1の心臓形の眞中から血が出て居る。

かちかちと齒がおのゝいた。わなわなと手がふるふ。舌は痙攣した。體は固くなつた。

「エヘヘヘヘ。」高い聲でせせら笑つたものがある。ぞつと水をあびせかけられたように體中の毛穴が皆立つた。もう身動きが出來なかつた。

後(しろ)にいつの間にか女の子が立つて居る。びしよ〳〵に濡れて髪からどこからびしよ〳〵なのだ。十二三歳の女の子だが顔は恐ろしく老けて居て眞蒼だ。片足の靴を手にさげて跣足で痙攣的に「ヘエヘヘヘ」と笑ふ。その齒は刃のように白く光つて居る。雨はぽつりぽつり降る。

「毒殺。」その幽鬼とも人間ともつかぬ女の子が云ふ。今は生きた心地もない。「毒殺毒殺々々エヘヘヘヘ。」片足の靴をぬつと彼に差付ける。滴がぽたぽた落ちる。その滴が一つ手にかゝつた。氷より冷たい。神經があやしき響を傳へる。女の子はにた〳〵未だ笑つて居る。雨は止まぬ。突然白骨のような手で彼の手を握つた。

「イヒヒヒヒ。」と笑つて彼の手からハートの1を奪ひとつて、血だらけの札を寸斷々々に引裂いて例の氣味惡い笑聲を後にすた〳〵と走つて闇に消えて了つた。

彼は子供の時から妖怪變化などといふことを信じなかつた。否信ぜられなかつた。まことしやかに恐ろしい話を述べる人を見る度に口元に冷嘲が浮んだ。曲馬團などでは樂屋に遊びに來る興行先の娘や小供に妖怪の話をして、恐がらせるのを得意にする英人が居たが、彼は小供時でも英人から一種のドラ

のに。外と違つてこんなことが人々にたづねられるか。警官にても見付かつたら手が後に廻る。彼は獨り煩悶した。地團太が踏みたかつた。丁度擊劍の達人が劍を奪はれた爲に眞劍勝負を斷はるようなものであつた。

運命は彼を棄てなかつた。焦燥した眼に向ふのベンチに腰かけて居る和蘭人が寫つた。から欠伸をして怠屈さうにして居る樣子この眼付の尋常でない樣子正しく彼は泥棒だ。彼なら知らないことはあるまい。よし知らないにしても彼奴とやらうといへばやらないことはない。そしてしこたま絞つてやらうと腹をきめた。夕闇が公園をこめた。鳥は喬木のねぐらに歸る。日は西に沈む。風がぞつとする程身に染む。

「兄い。おい兄い。」波は後から聲をかけた。

のつそりその男はふり返つた。

「これを知らねえか」指指しをして見せた。それはgの附號で英國で賭場の略號になつて居る。

「こゝには賭場はねえよ。」その男はそう云ひ切つてニヤニヤ笑ひ出した。白い齒が夕闇に星のように見える。彼は先づ失望した。

「だが兄いはやるんだらう。」今度は彼が笑ひながら云つた。

「巫山戲やがるねえ。俺等そんら危ねものは嫌えだい。」彼はがつかりした。

彼の男はニヤニヤ笑つて居た。やがて、「おい若えの。そんなに氣を落したものでも無え。何も博奕ばかりが金儲けぢやねえよ。俺等を見ろ。お見掛通りは汚ねえが、小使錢なら此位はいつもかゝさず持つ

藝をして北へ北へと流れて行つた。彼は幾年かの後痩せて痩せて見る影もなくなつた姿を和蘭のロッテルダムに現はした。もう其頃には彼の運命は決して居た。丸く刈込んだ公園の草に汚れた洋服を著た儘ぐつたり倒れて旗のような夕雲の行方を見るともなしに見つめて居た。

彼の腹はへつて居た。今朝パンの片を拾つて食つた儘未だ何にも食つて居なかつた。その時彼の二三間手前にキラリと光つたものがある。「錢(チエンナ)？」昔使つた支那語がふと口から出た。

彼の推測は違はなかつた。落ちて居るのは一枚の銅錢であつた。彼は埃にまみれ垢にまみれ、それへ血色を悪くして居る悪魔のような顔に、ニヤリと笑を浮べておもむろにポケットを探つた。彼は二三枚の銅貨を今朝から貰ひためて居たのであつた。ポケットには金が無かつた。いくら探してもなかつた。上衣を脱いで振つて見た。所がそこへヒラヒラとポケットの底から出て來たものがある。紙幣か、彼は思つた。古い垢によごれた紙片。紙幣ではない。カードの札ハ札も札、ハートの1。

彼は四邊を顧みた。銅錢を失つたことには何等の悔も殘さないで。何故俺にはこの氣がつかなかつたらう。そうだ直に賭博宿に行かう。伊太利でうんと金儲けをしてからカードには手もふれなかつた。そしてこんな乞食のような眞似をして、俺も隨分な馬鹿だ。しまつた、俺ももう少し早くこの事が分つてたならこんな苦勞はするんぢやないのに、まあこの事に氣がついたからには少しも早くと思つたが、まあ待て。自分は賭場がどこにあるかも知らないぢやないか。

彼は次の瞬間に急に銅錢が惜しくなると同時に、賭場を知らぬ無念さが込み上げて、憤滿に近い感情が彼の頭をごつた返した。リールに居た時ルアーブルに居た時賭場は分つて居たのだ。あの時行けば行けた

うに大きな、海賊船は舷燈を死人の魂のようにつけながら横たはつて居た。

彼はそれから海賊になつた。

陸を放浪すること二十幾年にして又海を放浪する。海は廣いが更に淋しかつた。荒涼であつた。彼の前身が輕業師であつた關係から船では非常に重寶がつた。彼は淋しさには馴れて了つてはゐたが、それても月の好い夜などは、甲板を歩きながら遠い〳〵支那の事を思ふこともあつた。朧ながらに廣東の自分の家を思ひ出したりした。同じ船には色んな國の無賴漢が乘り込んで居たが、こゝても支那人は二人だけて彼の外には楊といふ老人が居るのだ。

楊老人は若い時には腕利きの海賊でこの船にも客將の資格て居たのだが、この二三年少し精神が可笑しくなつて普通はどうも無いが、時々途徹もないことを口走るので監禁同樣に押込めてある。もし船から出して海賊船の秘密でも洩らされては大變だからてある。彼はたよりない狂人の爺さんであるが、誰も同じ人種のないこの船内で誰一人の友達だといふので楊老人の處へは屢話しに出かけた。仙人のようにやせて眼が野獸のように閃く重々しい聲の爺さんて、海賊をした割に色は白いけれど聲だけは破鐘のやうに大きい。日に日に病勢がつのつて行くので最早片息になつて居た。

彼は或日船艙（ハッチ）を下つて楊老人の船室を覗いた。老人はその時異常に興奮して居た。もう狂死しさうな狀態て居た。彼の姿を見るや氷のような冷たい手て彼の手を握つた。ぢつと眼を見据えながら嚴そかに豫言者のような態度て「眼が不可ぬ。お前の眼がいけぬ。恐ろしい眼だ。片方の眼に影がある。お前さんは骨牌をやるにらがひない。ハートの1　ハートの1。」何の事やら分らんことを云つた。俺とハートの1どう

てらあ。」その男は豪然と懐中から札束を出して見せた。彼はこれでは掏摸に違ひない、俺を掏摸仲間に引張り込まうと云ふのだなどうせ、やぶれかぶれの體、なるようになれと思つた。

「兄いは掏摸をやるのかい。」札束を見ながら云つた。

「洒落ッ臭え。もさてこの小使がとれるかい。俺等はもさのような眞似は生れてしたことがねえんだ。兄さんを見損なふねえ。南瓜野郎。』一喝して顔色を和げ。

「だが若えの。俺等にもお前に相談があるんだ。見りや圖體もあるし力もありさうだが一つこの相談に乘つては呉れめえか。それについちや今てえぶ腹がへつてるらしいから、どこかで飯でも食つてそれから後にゆつくり話さうぢやねえか。」

彼は近所の小料理屋で餓鬼のように飯を食ひながらその男に既往のざつとした身の上話をした。勿論ハートの1も駝背の希臘人も忘れてしまつて居た。

勘定をすまして料理屋を出た時闇の中で男は彼に「お前海賊にならねえか。」と云つた。

「海賊？」反射的に口走つたが、

「いけねえのか。」と疊みかけられて、

「好うがす。」と心地よく答えた。

不安も悔恨も起らなかつた。何だか氣がせい〳〵した。

「詳しい事は後で話す。まづ船まで來ねえ。」

ロッテルダムの夜の港にたち罩めた闇を眞一文字に二人の乘つた端船は進んだ。怪魚の浮んで居るよ

「ツエンチイワンをしないかい」と水夫の一人がやつて來た。「やらう」と彼は直賛成した。彼は海賊船に乘つてから永くなるが未だその上手な賭博をしたことがないのである。それは彼が支那人だといふので何につけ、のけ者にされて居るからで、こんどが賭博に勸誘せられた始めであつた。

賭博は霖雨のようにいつまでもやまなかつた。彼は賭博の巧妙に於て皆を壓しハートの1の胡魔化しによつて、いつもいつも勝ち拔いて莫大の賭金を得た。

むし暑い夜であつたが彼は何だか寒かつた。皆暑い暑いと云ふのが可笑しい程寒かつた。不思議だ。皆の金をポケットに收めて椅子を上り甲板の柵にかけてある上衣をとりに甲板に上つた。足が馬鹿に重い。空も海も厭な程默り込んで背中が水を浴びたように寒い。すると聲が出なくなつた。體が縛りつけられたように固くなり出した。

向ふの方から甲板の上を步いて來るものが居る。誰かと思つて居るとその人影はだん〳〵近づいて來て彼の前に現はれた。片足靴をさげて頭からびつしより濡れた眞青の顏のあの伊太利で見た女の子だ。あの時は只の白痴と思つたがそうではない。やつぱり亡靈だ。少くともあれから十年以上はたつて居る。普通の女の子なればもつと生長して居る筈である。十年前見た時と同じ形で同じ大きさでよしあれから大きくならないにしても伊太利から太平洋まで來そうな譯がない。やうぱり幽靈だ。ハートの1に崇る幽靈だ。

亡靈はにた〳〵例によつて笑つた。「イヒヒヒヒ。」といつて「毒殺」。「毒殺」といひながら片足の靴をぬつと差付けた。そこ迄は此前と同じだがこんどは冷たい手で顏をなでる。彼の顏を撫でゝは覗き込んで

してそんなことを知つて居るのだらう。神秘的の考の薄い彼は格別不思議だとも思はなかつた。

明る日老人は死んで居た。首をくくつて。その傍に漢文と英語で書れた彼に當てた遺書があつた。彼は漢文は讀めなかつたが英語の方には「お前の恐るべき事柄である片目の中のハートの1の影は、早くお前の生れた故郷の廣東に歸つて、三水といふ所の巫に骸骨の入墨をして貰はぬと治らぬ」といふ意味が認めてあつた。

馬鹿にした話だと思ひながら楊老人の事はそのまま忘れられてしまつた。遺書だけは遺つた。彼は毎日眞面目に海賊を働き話相手がなくて淋しくなつたが、不平も云はず船を家として居た。

海賊船はその頃印度洋から幾多の秘密を藏した太平洋に乘出さうとして居た。廣東の家には日一日と近くなつたが彼は歸ることは出來なかつた。又歸らうとも思はなかつた。

その時彼は變な話を聞いた。それは幽靈船が出るといふ噂である。夜ヒー〳〵泣く聲を聞いたといふ水夫も居れば、砲手の男は眞黑な帆をかけた船が影のやうに海の向ふに見えて、甲板には白衣の女が大勢髮を亂して居たと語つた。彼は伊太利の話なんかもう頭のどこにも殘つて居ないし、例の性質から頭ごなしに馬鹿にして了つた。

太平洋に入つてから風がちつともなかつた。むし暑いどんよりした空合で一雨來そうであつたが降らぬ。その時丁度汽鑵に故障が起きたので、邊の島に横付にして修繕を急ぐことになつた。

彼は一向こんな方と緣が遠いので無聊に苦しんで居た。船の中をぐる〳〵歩いたり椅子で居眠をしたりして居た。そこへ

彼は次て三水に姿を現はした。例の巫を尋ねるのだ。その巫の家は三水の町では「梟が喰ふ家」と唄へられて居る。これも誰が云ひ出したものやら何故そう云ふのか分つて居ない。

「梟の喰ふ家」は陰氣な街の片隅にある物凄い建物だ。その建方がたゞの家と餘程違つて居る。Mysterious な妖しい小猿か魔性の黒猫でも出て來さうだ。キーッと不可思議な音樂的な音がして扉が靜かに開くのである。

彼は戸を開けて入つて見ると黒い服を著た老巫が居た。眼をしよぼ〳〵させて口をへの字に結んでゐる。彼の挨拶に對しても何の返答もせず。誰うなづいて居る。彼は自分の身の上に起つた今までのあらゆる不思議な事柄殊にハートの一について起つた怪異の話を細々と述べた。そしてこの怪異の起る所以怪異の正體怪異を拂ふ策等を聞いた。

老巫は無言であつた。眼で何物か或物を慕ふように天井を見やりながら時々うなづくのであつた。彼の話が終つてしまつてもうなづく外何にもしない。彼と老巫。片目の男と老いたる怪人。三十分程はその儘對座して居た。

老巫は立上つた。そして始めて口を利いた「厦門に行け、鴉牙窟で骸骨の入墨をして貰ふのだ。」そう言つて後の扉を開けて入つて了つた。

忙然とした儘彼は後に殘つた。何だか少しも要領を得ないが彼はあの亡靈の恐ろしさには、充分感じて居たので先づ老巫の言ふ事に從ふことになつた。その日廣東を出た便船で彼は厦門に赴いた。

鴉牙を吸ふものは皆骸骨の入墨をするのだそうだ。厦門には古くから鴉牙窟があつてそこに入るもの

「イヒヒ」と笑ふ。聲も立たない身動も出來ない。幽靈は顏をなでる。

亡靈はついに手を彼の片眼に當てた。冷たい〳〵手。その爲彼は氣を失つてしまつた。

明る日氣絶して居る彼が發見された。船の者の手篤い介抱の爲彼は蘇生した。蘇生した時は日がかん〳〵輝やいて居る。しかし亡靈に手を當てられた片眼はとうとう今に至るまで開かなかつた。彼は永久の不具となつた。

彼が本當にハートの1の恐ろしき世の中に、人間の智惠で計ることの出來ぬ不思議の存在を認め出したのはこれからである。

彼は狂人の縊死人の楊を思ひ出した。楊老人が遺書の中にに廣東省の三水の巫といふことを云つた事を思ひ出した。もう一刻も猶豫が出來ぬ。この恐ろしい宿命に支配せられて猶海賊船に止まることが出來ようか。船が香港についた時彼は船から姿を消してしまつた。

廣東省の三水に巫が居た。女か男か分らない。餘程の年であらうが知るものはない。支那人でもないらしい。昔への黑衣大食國（サラセン東ハクファ國）の人だらうとも云ふ。それでは千年以上にもなるだらうが誰も知るものもない。たゞ奇蹟を行ふのと豫言が恐ろしい程適中するので、餘り廣くは知られなかつたが附近からは神のように云はれて居た。

彼は三十年振で故郷に歸つた。しかし家は無い。國を放れて三千里陸に海にあてどなしに流れ歩いた放浪の子もこゝて歸るべき所に歸つたのである。廣東の町を歩いて見ると自分が住んで居た邊には錢莊が立つて居る。この邊だなと思ひつゝ幾度も振返り〳〵そこを去つた。

「幽霊又來たある。鴉牙窟、張さんの家幽霊又出たある。」恐ろしそうに彼はがた〳〵震ひだした。「今晩私死ぬある。幽霊に殺されるある。」彼女も流石に驚いた。この一室に死のような沈黙があつた。

二人共びく〳〵震へて居たが支那人は廻らぬ舌で語る。昨日例の通り鴉片窟で鴉牙を吸つて居たんだそうだ。夢とも幻とも知れない狀態に居る時に隣に居た男が「ツエンチイワン」をやらうと云ふので彼はやつたといふ。ハートの1を胡魔化すことは流石に恐ろしくてやらなかつたが、彼の手に不思議にもハートの1が舞込んで來て勝ちは例によつて彼の占むる所となつた。所が立ち上る鴉牙の煙の中から例の幽霊が出て居る。こんどは近寄らないで To-morrow To-morrow と云つてにた〳〵笑つて居たといつて、それより先は何もいはず唇をぴり〳〵ふるはして居るばかりだ。

彼女は如何云つて夫を慰めて好いのか薩張分らなかつた。まんざら氣が狂つて居るのではないらしい。何か幽霊から今日死ぬといふことを豫示されたらしい。

「今日一日わてがついてますさかい氣を大けえに持ちなはれ、何のそんな事がおますかいな。えらあんたの氣の迷ひて、そんな事があると思てるよつてそんな恐いものを見なはつたんや。ちよつともこわいことあらへん。幽霊見たいなもん世の中におますかいな。あんたがその希臘の人のことを思ひ出しなはるのやろ。そやさかいそんなことがおますのや。なんのなんの。あんた勝手に自分で苦しんでいやはるのや。」彼女はいろ〳〵に慰めた。

支那人は一日一夜まんぢりともせずたゞわな〳〵とふるへて居た。

× × × × ×

は曾その骸骨の入墨を見せることになつて居る。無いものは其場で骸骨の入墨をされるのである。鴉牙窟は賭博場と同じで人の目につかない所にあるのは云ふまでもない。痩せて痩せて死人のような人とも獣ともつかない動物が鴉牙を吸ひながら荒唐な夢を見て居る。それが何人も何人も立ちこめた煙の中に隠見して居る。

彼を案内した強慾さうな男は福建訛で「仲間の規(おきて)でな。』と彼を入墨の所へつれて云つた。

入墨は馬鹿に痛かつた。しかし亡靈にたゝられる事を思ひ思ひしてとうとう刺(ほ)り上るまで辛抱した。

入墨は出來たがチクチクしてとても立てない。そこへ鴉牙の煙管が運ばれた。

「鴉牙を吸つて見さつしやい。痛さはいつの間にか忘れるから。」先の男は笑ひながら云つた。始めの内は何だか氣味が悪く厭だつたが吸つて行く内に氣持は陶然と快よかつた。その内に眠つて居るのか覺めて居るのか分らない狀態が來て夢を見た。そんな夢は今ではどうだつたか忘れて了つた。

彼はそれから又海賊船に乘つた。骸骨の入墨が出來てからといふものはもう怪異はそれつ切り祟らなくなつた。しかし鴉牙を吸ふ癖がついて體は日增に衰へて行つた。その代り海賊船で金を大分ためて今神戸へ來て遊んで居る。

……

長い長い身の上話を終つて彼は惡夢から覺めたようにほつとした。お君はがたがた震えながらこの奇怪な片目の支那人の話を聞いて居た。彼の話が終ると彼女は、

「ほたら（そうしたらといふ事。）昨夜はどうしやはつたのや。」と聞いた。

師走の空は曇り勝ちて六甲山脈から冷たい風が海へ吹いて來た。毎日險惡な天氣てお正月が來さうなのに厭な事てあつた。

夜になつても海の向ふで風の音が聞えたり、寒さが馬鹿に強いのに雨はいつも降りそうてあつた。此樣子では雨正月かも知れないなどいふ人もあつた。

クリスマスの明る日からひどい風が吹き出した。雲は低迷して雨はなかつたが大風が暴れ出して物干が落ちたり大木が折れたりした。

お君の內でも阪を下つて吹きつけるつむじ風に大木の幹や枝はごう〳〵と悲鳴を擧げた。

內では子供達が嬉しさうに騷いて居た。その風もやがて靜まつて夕方頃から雨がボツリ〳〵降り出した。

洋燈をあか〳〵と燈して子供の相手になつて「ツウエンチイワン」をして居た彼女も九時になつたので子供達を寢かせて一人自分の室に歸つた。

彼女の室は二階で階段が馬鹿に廣く足音がガランガランとして、夜などは死人を葬つた殿堂の中を步くような氣持がした。小さな蠟燭の光を便にドアを開けて寢臺に坐つた。

古城のような靜けさて窓の外の大樹の葉末から雨がしと〳〵滴つて廣い室の中に不氣味極まる。晝ても薄暗い室だから夜は猶更てある。しかし永らく寢慣れた室だから寢られる筈だのに今夜は少しも眠られぬ、十時を聞き十一時を聞き十二時を聞いたが眼がます〳〵冴えてどうしても寢付かれぬ。寢床の上に起きて見たり、寢て見たり廣い室を步いて見たりしても雨の音が降つたりやんだり、木がザワ〳〵鳴つ

夜あけ方とろとろとしたと思ふとお君は知らぬ間に寢て居た。起きて見ると夫も寢て居る。傍によつて見れば體が冷たい。脈が止つて居る。彼は死んで了つた。

醫者は外人の醫者であつたが心臟麻痺だといつた。何かに襲はれて激甚の恐怖をしたんだらうといふ。

支那人の遺骸は南京墓（目下平野矢部町になつて居る。その當時にはこの邊には家は一軒もなかつた。そして支那人を葬る墓所が田圃の中にあつた。今では練瓦屏が出來て居る。）に葬つて。

お君は翌年英人の妻になつた。

その家は中山手通の四丁目にある。居留地以外であるがどういふものかその英人はこゝに住んで居た。家は廻りに氣味の惡い大木のゴムや、ロッキイ山の寫眞によく見當る何といふ木が知らぬが化物のような格好の木があつて、奥まつた所にガラス窓が晝でも淋しく光つて居た。

彼女は頗るヒステリックな女で感情が馬鹿に鋭どかつた。殊に怪しい片目の支那人が幽靈に惱まされて死んだ後、こんな物憂い家に居るには堪えられなかつた。彼女は夫に何度も願つてこんな氣味の惡い家から轉居するように云つたのであるが、英人はいつも笑つて答へなかつた。

彼女の家には英人の先妻の子が二人居て、その騒ぐ聲の喧しさに氣を紛らして居るのであるが、若し彼女一人なればどんなに恐ろしいことか分らないと始終思ふのであつた。

聖降誕祭（クリスマス）の日が來て外人を得意にして居る神戸の街は、歳末をひかへて居るのと兩方で賑はつて來た。先妻の子等も玩具を貰ひ新しい衣服を著て喜んで居た。彼女は下て一緒に皆て「カインドオヴキャツト」をしたり數の管（ろ）てつこをしたり子供と一緒に遊んだ。

やらロッキイ山の寫眞で見る常盤木が繁つて居る、物悽い所である。繁華な市街の眞中に丁度砂漠のオアシスのように廣大なる地域に謎をつゝんで居る。

筆者は後そこを借つた某外人が獨身者だそうだが二人まで縊死したといふ話を聞いた。

今でも誰も借る者がないらしい。一體人が住んで居るか居ないかそれも近所の者に聞いても知つて居ない。そうかといつてHouse to letの札もついぞ見受けぬ。

筆者は中學時代毎日毎日『化物屋敷』の前を通つて登校歸校した。ついぞ人の氣配もなくたゞ古い木造の建築物の硝子窓が朝日夕日に怪しく光つて居るばかりであつた。幽靈のような大樹の間から。(をはり)

たり、時計のセコンドをきざむのが聞えていやに心持が悪い。

彼女は所在なさに小さい咳をした。するとそれが向ふへひゞく、山彦かなと思ふと二つも三つもする。誰かドアをノックして居るのである。「カムイン。」夫の歸る筈はないがと思ひながら云つた。歸るならあの階段が魔が洪笑するようにガラン〳〵云はなければならない。

ドアが音もなしにスツと開いた。入つた來たのは片手に手燭を持つた男で、青い灯が闇の中にちら〳〵する。その額は！　彼女は驚いた。

死んだ夫のあの清國人だ。

片目をぎよろりと輝かせて手燭の火に何かかざして居るそれはハートの1の札。

× × × × ×

怪異は彼女がトランプを弄ぶ度に起つた。後彼女は基督教に入つて近所の人は彼女のメソヂスト教會に行く姿を認めたといふ。

彼女はまた第二の夫に分れてしまつた。

トランプは一生手に觸れないといふ。

今婆さんになつて生きて居るか居ないかどうなつて居るかそれは分らない。

彼女が英人と住んで居た家は今も尚、『化物屋敷』として殘つて居る。無論その英人は怪異があつてからそこには居ない。

その家は兵庫縣廳の裏通の松方邸に行く迄の途中にある。化物屋敷としてふさはしい家で、ゴムの木

第一の牧羊者　あゝ、いつにもなく疲れた。

第二の牧羊者　無理はないさ。隨分駈け廻つたぢやないか。

第一　今になつて自分でも氣がつくが、今日くらひ心配してあせつて、石の上と云はず藪の中と云はず、あちらこちらを駈けづり廻つたことは、今迄になかつたよ。

第二　本當にな、どんなに氣を揉んだらう。

第一　小屋に入れながら數へてゐると一匹足りないだらう。足りない事など滅多にないから始めは數へ違ひと思つてゐたが、いくら數へなほして見ても一匹の不足になるてはないか。けしからんと思つて調べて見れば、驚くや驚かんぢやない。いつも眞先に小屋に這入る、俺の大事にしてゐる牝羊がゐないのだ。それ前から氣が氣でなかつた俺は、牝羊がゐないと解ると無我夢中になつて、あんなに血眼になつて駈け出したのだ。

第二　それでも、まあ見つかつてよかつた。無事につれ歸る事が出來て、まことに結構だ。

第一　結構どころぢやない。嬉しくて嬉しすぎてたまらない。あの牝羊が裏山の圓石の後の草叢の中に見つかつた時、俺はどんなに嬉しかつたか、もう迚も口ぢや云へない。俺は泣きながらいきなり牝羊にかぶりついた。そして二度ばかりその頭を撫でたが、すぐに肩にひつかついで、あの重さだからよち〳〵したが、走るやうにして牧場まで歸つて來た。喜があまつて俺は牧場の子供達を集めて、牝羊をとりまいて躍りくるつて來た。それなのに此處まで來ると漸く疲れを覺えて、君に逢つたら、はや疲れたなど云つて仕舞つて濟まなかつた。

第二　濟まなかつたと詫びられては、俺は何と云つてよいか困るぢやないか。お祝ひを云はなければならぬと思つてる處を。此處で躍るのもちよいと、まがぬけてゐるから家に歸つて、ゆるゆるのことにしやうぢやないか。

第一　歸るかね。でも待ちたまへ、一緒にお祈りをしてから歸らう。

放蕩息子

長澤幸一

人物
放蕩息子
その父
その兄
第一の牧羊者
第二の牧羊者
第一の村人
第二の村人
第三の村人
第一の召使
第二の召使

場面
第一幕　家出する前日
第二幕　零落と悔悟
第三幕　歸國

時代
イエス在世當時

場所
パレスタイン地方

第一幕

開幕前十分間奏樂。始めは屈託のない愉快な調子、例へば讃美歌第三十一とか第四百二十九と云つた類ひ。次に哀れつぽい旋律。（讃美歌第三百二十一、第三百三十四の如き）そして靜かな確かさのある曲。（讃美歌第二百三十五又は第二百二十四）左手に家、中央に橄欖（カンラン）樹立つ。右手は岡となし、その上に牧場を望む。二人の牧羊者語りながら登場。

第二　今となつてはもう仕方があるまい。何と申し上げた處で、頭から撥ねつけるにきまつてゐる。誰の手にも餘つた譯さ。それにまた御次男の云ふことにも一理はある。こんな狹い土地にくすぶつて、むざむざ若きを亡ぼすのは、やりきれない、親爺や兄貴のこせこせした云ひつけに從つて、羊や豚や葡萄や無花果の相手になつて、朝を夕に春を冬に變へて、老いて行くといふ事なら、生れて來た甲斐がないといふのだからね。

第一　だがそれは夢を見て言つてることだ。遠い國に行つたところで、この土地とどれだけの違があらう。神樣を信ずる心でか、てなければ運命に順行する考によつて、故郷を去ると云ふなら喜ぶべきことだが、淺はかな快樂を求める出來心で、旅立つなど、此の上もない間違だ。俺は先刻の羊のことを思ひながら云つてゐる。

（家の中より放蕩息子出て來る。空ばかり見て數歩進む）

第二　噂を云へば影とやら、お出になつた。

第一　俺はまあ、ひと先づ家に歸らう。こちらから。（右手に退場。第二はひとり默して立つ）

放蕩息子　嘘も眞實になるもの、夢も本當にるもの。俺もいよ〳〵明生は出發が出來る。あゝ美しい夕燿、榮々しい誰彼、月もある。（左手を見る）若い月が夜に乘じてだん〳〵光を增さうとしてゐる。そして俺の故郷にある最後の夜を飾つてくれるのか。やがて滿つる時も來るといふ目出度い前兆か。俺の前途は何と云つても輝かしい。（あたりを見廻す）オゝ俺の搖籃の地よ、四季の花をかゝさなかつた美しい國よ、清水のたぎなかつた綠の野よ。父を富裕ならしめて、俺にも多くの財を與へた牧場よ果樹園よ。俺は明朝この土地を去つて行く。なつかしい思ひ出多いお前達を殘して遠い國へ行く。（感激し息つまる、思ひ返へしたらしく）けれども俺の行く國は、斯樣に窮屈な土地ぢやない。思ふことが十分言へないやうな不自由はなく、信ずることが行へないやうな不合理もなく、形式に嵌まり込まねばならぬやう

第二　それがよからう。神様に感謝を捧げよう。

（第一第二の牧羊者頭を下げ眼を閉ぢる）

第一　（祈る）神様、お恵によりまして今日一日、精出して樂しく働くことが出來まして誠に有り難うございます。殊に今日は日頃可愛がつて居りました一匹の牝羊がなくなりましたが、他人に盜まれもせず狼にかまれもせず、無事に探し出すことが出來まして、何ともお禮にたへません。それにつけても今日といふ今日は、私も「一人の罪人悔改めなば悔改むるに及ばざる九十九人の義人よりも尚ほ天に於て喜あらん」といふ御教を、よくよく呑み込むことが出來まして、これも誠に有り難うございます。神様よ、只今よりまた輝かしい朝の來るまで、安く憩はしめたまへ。一緒に祈つて居ります兄弟を惠ませたまへ、私共の主人とその二人の息子を惠ませたまへ。アーメン。

（祈の中頃より家の中に笑ひ聲話し聲食器の音などす。二人の牧羊者、祈りを終つて歸らうとして、家の賑かさを見て又とゞまる。）

第二　どうしたのだらう。大分賑かなやうだ。

第二　何だらう。まさか失はれ牝羊が見つかつたと云ふので、俺達の先廻りをして祝はつて居るのぢやあるまい。

第二　（間をおいて）はツはあ、いよ〳〵ご次男のお出かけだ。君。

第一　なるほど、さうらしいな。

第二　こないだから、いろ〳〵申し上げたが、強情を張りなすつて、どうしても聞き容れなさらない。

第一　お出でになるのは何方だらう。

第二　さあ、それは解らない、たゞ遠い見知らぬ國とばかりおつしやる。

第一　もう財産の方はお定まりになつたのだね。

第二　その財産がさ、あの子煩惱の御主人が割よくお分けになつた財産が、大方もう費ひ易いお金に換へられたらしい。

第一　そうして見知らぬ國に旅立ちになるのか。あゝおいとうしい。何とかして思ひ止つて戴くやうにはなるまいか。

第二　本當にどうなつて行くことか、何とも心細いものだ。

第一　もう青いものなど藥にする程もありやしない。

第二　見渡すかぎり燒け野だ、思ひ切つて荒れはてたものだ。

第一　この饑饉では、ある山の向うの、その山のかなたの、ソレ昔から乳と蜜との流れる豐饒な地と云はれるカナンも、いくら何でも、飲み食ひには自由であるまい。

第二　それにつけても、俺達の罪深いことが感じられる、今更に、神樣のお怒りに氣がつくではないか。

第一　さうだ、淺はかな人間の心が何よりもいぢらしい。まともにこのやうな饑饉に出逢はねば困るとが解らないのだ。眼の先のことより考へられないで、神樣を拜することを忘れがちである。そのくせ、こんな時になつて無暗に、神樣の名を呼びたくなるのだ。（昂奮して語つてゐる間に、コップを落す、兩人これに氣付かない）

第二　その通りだ、ありあまる時は、腹一杯食べて、その元氣で不義を働いて來た。折角神樣の惠の中にゐながら、不平を云つて來た。そして愚かにも今になつて神樣の有りがたさを覺えた。あゝ罪深いこの身、情ない俺だ。俺は如何しやう。

第一　如何しやうもない、お祈りより外には何にも出來まい。今朝もさう思つて、お祈りをして此處まで出かけて來たのぢやないか。

第二　さうだつた。生きてる間は働かねばならないと、お祈の間に敎へられて、食物の工面にやつて來たのだつたなあ。

第一　俺達は此處で餘計な事を考へたのだつた。さあ、行つて働かう。神樣はお見捨てにはならない。

第二　生きてる事がもう大きなお惠だ。

（兩人勇み立つて右手へ退場。入れ代つて第三の村人左手より登場）

第三の村人　變な天氣だなあ。寒いやうな、暑いやうな、昨日のやうなまた明日のやうな……

な不自然もない。兄のやかましい世話やきも父の愚にもつかぬ心配もない。如何なる種類の束縛もない。すべての幸福が一つも不足なく備へられてゐる。俺は明朝その土地へ……（第二の牧羊者仕事の歸りを裝ひて近づく）今歸りかね。大層遲くまで働くぢやないか。

第二　少し片附が手間どりまして。まあ、結構な夕べですね。

息子　名殘にこの邊の景色を眺めてゐる。

第二　お名殘とは？

息子　それてないだお前に話した通りさ。

第二　御旅立ですか。とうとう。それにしても隨分急ですな。

息子　急と言へば急だが、長い間のもくろみもあり、相當の準備もした積だ。

第二　本當に、御決行の時になつたのですか。

息子　あゝ、自由な生活の時が來たのだ。何の制裁も受けないどんな義務もない、飲むにも食ふにも舞ふにも歌ふにも氣儘に出來る、夢よりも美しい想像より樂しい生活に入るのだ。（空を見て微笑し手をあげて）あれ見たまへ、雲が動く。月をかくしそはまた現はしたり、美しい色ではないか。動く動く、動くぢやない。飛んでゐるのだ。廣い廣い大空を、いかにも狹いと云つたふうに自由自在に走る。あの羨しい雲のやうな運命に、俺は雲のやうに。

第二　（雲をきよろきよろ見てゐる）雲のやうに。

息子　うん、雲のやうに、（狂ふばかりに喜んで笑ふ）はゝゝはゝゝゝ。

——（幕）——

第二幕

開幕前に數分間奏樂。（讃美歌第百九十一又は第百八十六）幕開く。饑饉時に相應はしいさびれた野。右手に豚小屋、その前に豆莢のついた枯れた莖を置く。第一の村人と第二の村人とが語る。

第一の村人　（豆莢を蹴りながら）こんなに枯れたものは、いくら豚だつて食べられやしない。

第二の村人　それはひどい。だがそんなものしかありやしない、何處へ行つたつて。

第一　人間樣の食べる物さへ無い始末だからな。

てあの不様をしてゐるぢやないぜ。そりや死に場さへなくて困つて、あゝしてゐるのさ。

第一　あの人の事をよく知つてゐるかね。

第三　知らなんてどうしやう。あれは評判の放蕩息子だ。酒食ひて女遊びばかりして、もうそれは仕様のない奴だ。

第一　さうか、ぢや君くらひの親不孝者だなあ。

第三　冗談ぢやない。俺はこれでも、あいつの前ぢや大の孝行者だ。第一、親の金を盗み出してこんな方へ逃げて來るなんて、太い奴ぢやないか。

第一　それぢや、あの人は、親が汗水流して丹精して溜めた金を持ち逃げして、此方へ來て湯水のやうに使ひはたして仕舞つたといふのだね。勿體ない。

第三　尤もあいつが云ふには、親爺の財産を分けて貰つてそれを金にして持つて來たと云ふのだがね。何だか解るもんぢやない。あの落ちぶれやうを見ても、普通のことをして來たのぢやないことは知れる。

第一　まあ、氣の毒のものだ。親御はどんなにか心配してをらう。何の因果でそんなことになつたのか。

第三　因果つてことがあるものか。あいつが此方へ流れて來たから、饑饉などあるのだ。あいつの悪いために俺達まで、ひどい目に逢ふのだ。憎い奴た。

第一　何だ、怒つて仕舞つたな、もう話は解つた。

（コップを腰にはさむ）この水をよごして悪つた。

（第三の村人の怒る顏をよく見て）どうも有りがたう。

（退場）

第三　あいつは何處へ行つた（第一の村人の後より右手に退きかけて、左手を顧み）あんな方にゐるか、憎い奴、こらしてやるぞ。（左手に駈けて退場）

放蕩息子　（つきとばされたやうにして登場）なんて非道い人だらう。私の心を知つてくれない慘酷な人だらう、この荒みはてた心のたよりない私を、わけもないのに、むやみに鞭つとは何んてひどい事だらう。あアあ、一時は親切にものを云つてくれた主人からは、思ふさま辱

何んて馬鹿々々しい日が續く事だ。と天氣を罵つて見ても、日を呪つて見ても、追ひつかぬが。さうだ、ぼんやりしては居られないぞ、此奴め。（自ら尻を叩いて飛び上る。第一の村人の落したコップをその時蹴る。コップを取り上げ。）何だ、金か、なるほど金には違ひない、金のコップだ。イヤ〳〵しかもよい鹽梅に、豚の……アヽきたない。（コップを投げる）馬鹿々々しい。（右手に退場せんとして後に戻る）これはまたいけない、益々いけない。不景氣な奴に出會して仕舞つた。來た〳〵、何といふ不景色な恰好だ。（放蕩息子バケツに水を持つて右手より登場。ガッカりしたやうにバケツを小屋の前に置き、あたりを見廻し、第三の村人を見て恐れる如くにして立ち去る。）何だ、行つて仕舞つたか。馬鹿々々しい。

（第一の村人急いて登場）

第一　コップを落して行つた。（あたりを探し見ながら）碌々食べられない可愛相な腹を、せめて清い泉の水を掬んでなり滿たさうと腰を探れば、生憎肝心なコップがない。ものがまづい時には何もかもまづいものだ。

第三　本當にその通り、まづいものだ。

第一　アヽ君が其處にゐたのか。氣づかなかつた。

第三　コップは其處にあるが、豚の汚いものがついてるぞ。俺は拾つて見たがすぐ捨てた。

第一　何處に？　あつた、あつた。（拾ふ）これはいけない、あゝ臭い。（捨てる）

第三　豚は自分の出した以外のものは、何でも遠慮しないで食べるが、その臭いものだけは食べないものだ。

第一　だが、このコップがないと困る。食ふや食はずの饑饉時に、一つしかないコップを捨てるも惜しい。何か洗ふものはないかな。

第三　そんなに惜しいのか、洗ふものなら其處にバケツがある。今、あの不景氣な豚番が水を持つて來たばかりだ。

第一　あれを借りてよいか。（と云ひつゝコップをその中につけて洗ふ）あの豚番には俺も今出逢つたが、どうも風變りの奴だな。

第三　風變りは聞いてあきれるね。あれは物好き

父　（物思ひに沈みながら）昨夜の夢が氣になつてならぬ。一體、俺の悴と、ダビデ王の王子アブサロムと、ヤコブの愛子ヨセフとが、一緒になつて、あの夢の中に働いてゐるのが解らない。ヤコブとダビデ王とは十代も十五代も隔つて居る。ダビデ王と俺とではまたその倍も、もつとも違ふ。そしてヨセフと云へば、比もない聖人君子、はてはエジプトの宰相になつて功多い人。アブサロム、この方はイスラエル第一の美男子、血も涙もある天晴な武士……。ところが賤しい俺のやくざな悴が、このお二人と役割を分つて、神様におまかせしてある俺の安き眠の中に、夢の芝居を演じ居るとは……どう考へても解らない謎だ。けれども夢はともかくだ。あゝ俺の悴はどうしたのだらう。やつと年頃になつたと思へば、はや一人前の積りで横柄に構へて、己が分け前を俺から跼ぎ取つて、そのまゝ遠く家出をしてもう長い月日、何の音沙汰もない。老い行く淋しい心は、雨につけ風につけその安否を思はぬ日とてない。（感激す）それでもまだわが誠が足りないではないかと、心をこめて朝な夕な、神様にお祈りを缺かさない。俺の絶えない涙ながらの心づかひ……（言葉絶え、暫らくして思ひ出したやうに）さうだ。矢張あの夢、あの不思議な夢だ。さて……ヨセフのやうに恐ろしい縛から解かれ、危い誘惑から逃れて、一國の宰相とまで榮えて居らうとは、迚も信ぜられないが。それともアブサロムのやうに、父王の軍に歯向つて猛々しく戰ひ、走る馬に跨つて木の間を急ぐ拍子に運つきて、髪は木に懸り馬は走り去り自らは宙にぶら下り、脆くも若い貴い一命を落したあの傷ましい最後「わが子アブサロムよわが子わが子アブサロムよ、あゝわれ汝に代りて死にたらんものを、アブサロムわが子よわが子よ」とダビデ王がなげかれたその王子の死が、俺の悴に來たといふのか。あゝ、それでは困る。然うであつてくれるな。是非ヨセフのやうであつて

められ、村の人からは今のやうな目に逢はさる。あゝ情ない……うらめしい……。それにしてもこのひもじさ（豆爽の上に倒れ、それを殆んど無意識に口に運び、それを吐き出す）あゝ、ひもじい（バケツの水を手に掬んで飲む）せめて、一度だけでよいから此の腹を一杯にしたい。たつた一度。その上でなければ死にきれない。（間をおく）それにしても思ひ出さるゝは、お父様のもとにあつた日に、あの時は腹一杯どころか、何の不自由も感じなかつた。我儘を仕通してゐた。なつかしいあの家、ありがたいお父様……。とはいへあれまでにして大層なお金を分けて戴いて、お別れ申して來たあの家に、斯うなつて歸れやうか。どうしてどうして歸れやう。（間をおく）だがわが身は今、この通りだ。このまゝなら、饑え死をしなければならない。どうせ死ぬなら……あゝ死ぬ程の覺悟あれば、またお父様のもとに歸れないこともない。お父様は澤山の牧場を持つて居られる、召使を大勢使つて居られる。さうだ、私も召使の一人として使つて戴かう。死にきれない私の殘生を、お父様に救つて戴かう。いくじのない私、あゝ罪の深いこの身……（跪いて祈禱の樣子。舞臺裏より讃美歌二百番歌はる。歌終れば靜かに立ち上る）それではこの土地へ暇を告げやう。華かな夢を見て放浪の生活を喜んで幸福に醉ふてゐる筈のこの土地で、私はたゞ散財と憂欝と零落との經驗を嘗めたばかりだ。このあはれな姿で故郷に歸り行く。（歩いて見る）大丈夫歩ける。まだ力が殘つてゐる。（腹を打つ）此の力がある間は倒れはしない。なほ力が湧いてくるやうにも感ずる。神樣のお助によつて故郷まで、（歩き出す）故郷まで。

——（幕）——

第三幕

奏樂（讃美歌第四百四十九）

舞臺は、右手にやゝ高く家。この家は第一幕の家の側面を示す。左手は低くして道。幕あけば、家の後より放蕩息子の父の歌ふ讃美歌第三百十七が聞える。第一節の折返になる時、父登場。父、歌の意に近い表情を以てなほ二節三節を歌ふ。歌ひ終つて

（二人の召使顔を見合はす）

第一　随分お變りになつたなあ。

第二　何とものを申し上げてよいか解らなかつた。

第一　私達と同じ樣に召使になつてお働きにならうといふお志で戻られたやうだね。

第二　本當に驚かされたよ。旅にあつてどのやうにかお苦勞なさたのだらう。

第一　そうだらう。以前にはあのやうに我儘であつたお方が、打つて變つて、今のやうになられたとは、誰に聞かせても驚かぬものはなからう。

第二　思へば涙がこぼれさうだ。

（その時、家の中より父の聲）

父　もうよい。そんなに幾度もあやまらないでもよい。よく解つた。許してあげる。どつちかと云へば、此方からお前におわびしたい位だ。さう着物をきるがよい。

第二　オイ、それはそれと、私達には仕事がある。

第一　旦那の指圖をあてにしてゐては、今日は仕事は出來ない。葡萄でも摘みに參らうかな。

第二　碌になつてゐない葡萄など摘むより、草でも刈つた方がよからう。

第一　さうだ。遠い國の饑饉ほどの事はないが此方も、葡萄に限らず、當り年ではないな。

（行きかけながら家の中を顧みる）

第二　美しい着物をお召しになつたぞ、ご次男が

第一　立派な靴だな。指環も光つてゐる。

（二人退場。家の中にて太鼓、笛、鈴などの音類りに、タンバリンを持つて踊る響も加はる。暫くにして二人の召使また登場）

第二　なか〳〵賑かになつたな。

第一　いよ〳〵お祭のやうだ。贏を幸るなんか滅多にないお祭だ。

第二　隨分肥えてる犢だつた。誰の仕業かすばやい宰り方だね。

第一　驚いたよ、本當に。

（この時、長男急いて登場）

長男　何だ、どうして驚いた。

（二人驚く）

くれ。たとへヨセフのやうな出世はせまいと、思はぬ時に自分の兄弟達の手から奴隷に賣られた薄幸なヨセフでない俺の悴も、せめて生きてだけはゐてくれ。なんぼう考へて見ても解らない夢だ。あゝ悴がどうなつてくれると云ふのが……（ぢれざみになり地團駄を踏む、後悄らしく默し暫くにして顏を上げ眼を大きく開く）アヽ、何だまた夢か、いゝや現だ。あれは悴ではないか。さうではあるまい。あまり激して氣が迷つたのだらう。あのやうな襤褸を着た男が俺の子であらう譯がない。あのやうな打ちしほれた歩き方は見た事がない。此方へ近づいて來るな。あの窶れた顏……いや、アー悴たしかに悴だ、矢張……（わきめもふらずにその方へ走行く、代つて二人の召使登場）

第一の召使　どうなされたのだ、旦那は。

第二の召使　今日はいつにもなく朝から考へこんで居られる御樣子だ。

第一　やッ、あそこで、食乞のやうな若者と接吻して居られる。

第二　なか〳〵はげしくな。

第一　若者は倒れたやうだ。

第二　いや、ひざまづいたのだ。

第一　旦那がだき上げて此方へお出でになる。

第二　オヤ、あれは御次男でないか。

第一　（第二の言ひ終らぬ中に）御次男だ。

第二　何と云ふお身なりて。

第一　それに見違へるやうに痩せこけて、お顏は此の邊では見らない程青ざめて……（言ひながら後へさる）

放蕩息子　（父に手をとられながら登場、父手を離せばひざまづく）私は神樣と貴方の前に大きな罪を犯しましたから、もう貴方の子供と呼んで戴くに堪へられません。（頭を上げて召使の方を見る）この召使と同じやうに……

父　また何を云ふ。さ、早く奥へ入つて着物を着かへるがよい。（手を取つて立たしめ）お出で、オヽ、何んて嬉しいことか。この喜にまさる喜はない。まるで夢を見てゐるやうだ。（言葉もみだれ、息せき切つて、無理矢理に息子を家に入らしむ）

父　だから假りにさう思つて見ろと云ふのだ。解らないなあ。ては一匹の羊が失くなつて、それが見つかつた時は、どんな嬉しいものかが解らう。

兄　それは解りますが、この場合とは違ひます。

父　オヽ、お前はどうしてさう解らないのだ。俺はがつかりした。死んだも同様なお前の弟が生き返つて來たのではないか。

兄　死んだものが生き返るなんてことがありますか。

父　もうよい。それでいゝ、可愛相な俺の後嗣(あとつぎ)。俺は今嬉しさで充たされてゐる處だ。もつと嬉しがらねばならないのだ。奥へ行つてさうしやう。（家に入りかけて兄の方を顧みる。兄と反對の側に立つて感激しながら獨白。）次男は俺にこの上もない心配をかけ、苦勞をさせたが、また今日のやうな樂しい思を持つて來る。長男は俺の大事な大事な寶だが、次男こそは俺の可愛い可愛い子供だ。

（家の中にて又賑はしい騒ぎ、兄は物思に沈む）

父　オヽ、人生の、俺は人理の妙味に漸く、舌鼓を打つことが出來た。失つた者を恢復すると云ふ喜悦は、人間が經驗することが出來る最大な喜悦に違ない。疎遠になつた者が再び親密になり、反抗し合ふたものが融和してくる、疑つて去つたものが信じて歸つて來る。戰爭が平和に戻る、拒絶した者が抱擁を求めて來る……これらは如何に樂しいことであらう。悴、お前はよく歸つて來てくれた。（長男の方へ向き返り）お前にはまだ解らないか。消え失せたものをまた骨折つて造り出すのが人間のすべての仕事だ。失つた者を再び探し出すのが人の心の喜なのだ。死んで行くことが運命だから生きることが貴いのだ。此の世が完全でないから進化して行くのだ、それて人間は奮闘するのだ。

兄　（家の中より「萬歳」唱へらる）此の世にあつて一番大きな喜は、これだ、これだ

——（幕）——

第一　ハイ、何です、御次男がお歸りになりました。

長　あの騒ぎは何事だ。そのためか。

第二　ハイ、ご無事にお歸りなさつたお祝です。今、犢を宰りましたところです。

長　犢を？（冷然と二人を見かへり、話さんとするも言葉出でず）チエ！（腹立しく後へ引く）

第一　（家に父を迎へに行く）旦那は。

父　（登場）オイ、弟が歸つたぞ、待つてゐた弟が無事で歸つた。喜んでくれ、皆と一緒にお祝ひをするのだ。

兄　（前に進み）私にはかゝはりなく。（また後へ引く）

父　どうしたのだ。變なことを云ふではないか。（家の中では盛んに賑はしく騒ぐ。その方を見て父笑ふ）

兄　あたり前のことを云つて居ります。お父様、私は今日までお言ひつけに叛かず、まめに辛抱強く働いて來ました。けれども私には友達と一緒に遊ぶために、犢を宰つてもよいと、たつた一度も許して下さいませんでした。それだのに、澤山な金を持ち出して、したい放題、旅の恥をかき捨てゝ、身を持ちくづした仕方のない弟が歸つて來たからと云つて、その騒ぎ……

父　それてもお前は不服なのか、その不服なら何でもない。犢一匹はおろか、此の野もあの山も其處の畑もあんなに廣い牧場もみんなお前のものではないか。この家も誰れのものでもない。お前のだ。俺のものはみなお前のものだ。くだ〳〵しく云ふまでもなく。

兄　それは解つてゐますが。

父　何だ。弟が無事に歸つて來たのを祝ふのは當り前ではないか。

兄　併し私も怒るのが、當り前だと思ひます。

父　それはいけない。お前には何時にもなく肝心なことが解らないなあ。よし、それてはお前がこのすべての財産を、丁度ヨブのやうに一度すつかり、なくして仕舞つたと思つて見ろ、そして後になつてそれが再び戻つて來たとしたら……

兄　そんなことがあらう譯がありません。

新約書文學史講義

毎日曜日午后一時半より

（但し一月十九日開講）

新約書は我が宗教の寶典であることは云ふ迄もないが、そは如何にして傳へられたか、耶蘇の言行は如何にして記錄せられたか、記錄の全部は信ずべからずとするも其の信ずべき部分は何か、その批判の方法は何か、その他書翰部の起源性質等を論じ、而して福音書より書翰等に亘りて原始基督教思想の發展を歴史的に總覽し以てその精神を明かにしたいと思ふて此の講義を始めます、有志諸君の來會を歡迎します。

大正八年一月

擔當者　三　並　良

弘道會より

□世界の大勢と吾人の態度　と題して舊臘九日惟一館圖書室に於ける本會例會席上に於て安部磯雄氏の極めて適切なる講演があつた。來會者を啓發し反省せしめ且共鳴せしめた點に於て眞に近來の大講演であつた。

□國際的精神の勃興　は今回の戰爭の與へたる最も善き賜物の一てあらう。國際聯盟といふ機な事がヨシ直ちに實現せられぬにしても眞面目に世界各國第一流の政治家に依つて論議せられ計畫せられるだけても非常なる進歩てある。併しながら私は今玆に政治や外交を論ずる積て無い。唯私は宗教家の立場より inter-national, inter-racial movement と相呼應ずる inter-religious movement 即ち各宗教提携運動の起らん事を切望する者てある。今より二十六年前シカゴに於て開かれた萬國宗教大會の肝煎りてあつたジエンキン・ロイド・ジョーンスが是非第二回大會を東洋に於て開かん事を夢想し切望しつゝ昨年の秋終に永逝して仕舞つたと近着の米國雜誌に依つて知つて一層以上の希望を切にする者てある。さやがて私達の主張である。

□世界戰爆發前米國ユニテリアン協會のエリオット博士及びウエンテ博士等は類りに斯種の計をめぐらして居たのであるけれども不幸にして戰爭の爲に妨げられて仕舞つた。何れ其內何等かの形式を以て米國ユニテリアン協會の人々の計畫は實現されるに相違なからうと思ふけれども、我々は日本に於ける自由基督教徒として何等かの方法を以て積極的に斯種の運動に參加すべきては無からうかと思ふ。併し日本の佛教徒が奮勵一番、自ら主催者となりて世界の佛教以外の各宗教の代表者を東洋に會合せしめるの壯擧を敢てして呉れるならば此れ亦甚だ妙てあると思ふ。

□教會合同運動　は我國昨年の基督教界に於ける一事件たるを失はなかつた。此は單に日本に於ける現象たるに止まらず、實は戰爭の結果として起れる世界共通現象の一てある。超宗派的團體たる本會としては斯種の運動は最も望ましき事てある。切に其成功を祈る者てある。國際主義を盛に高唱しつゝある基督教會が小さな行き掛りや意地に拘泥して黨同伐異を事とするが如きは醜陋の極てある。往年內ヶ崎氏に依つて稱へられた教會大合同論は

□世界の最新思潮　を代表する英米の左記代表的諸雜誌を新年以後本會圖書室に購入する事になつて居る。會員及び本誌讀者諸君の利用を歡迎す。

The Hibbert Journal

The Inquirer

The Harvard Theological Review

The Christian Register

□基督教講習會　を今年四月初旬本會主催の下に開催する豫定てある。講演の內容等は追て發表するけれども凡ての點に於て天下の志道者る要求に滿足を與へん事を期してゐる。

□會員の消息　鈴木文治君は日本に於ける勞働者團體を代表して舊臘廿九日佛國媾和談判地に向け出發せらる。今井光暉君及び陶山三郎君は一年志願兵として入營せらる。

（今岡生）

○相原一郎介氏は舊臘廿五日相州鎌倉大倉邸ノ下に轉居せらる。

岡田哲藏著

我が斷片　價金貳拾錢　稅金二錢

MYFRAGMENTS　金貳拾錢　金貳錢

右合本　金四拾錢　金四錢

我が環境　金六拾錢　金四錢

MYENVIRONS　金四拾錢　金貳錢

發行所　東京市芝區三田　振替東京一〇〇〇三番　電話芝五八五五番　六合雜誌社

彼は何物をもことさらに作爲せんとはせぬ。然し彼が感受し、觀察し、判斷するものが自然の形に成り出づる。かくして成れる自然の作が「我が斷片」として見はれたのは三年前である。其後の作の集まれるを分類し配列したのが「我が還境」である。彼はさきに數年の觀察と思惟の結果を集めて「靜觀と思想」と名くる一論集とした。その範圍は主として今の思想界、卽ち他の人の心の世界であつて、それを攻究の對象としたのであつた。然してその成果は世の常の論文の形であつた。「斷片」と「環境」とはかく人の心界に限られず、他の思想に介せられず、彼自らが直ちに自然に接し、人生に接し、得たるまゝの印象を表現したのである。その表現の方式も、散文とも詩とも就かぬ、自由にして獨特のものである。然し乍ら成し得る限り短き辭に多くの意義を包含せんとの試である。自由に眞實に他の思想や形式に累せられざらんと願ふのみならず國の境を越え、時の流れの外に立つは彼の望である。

我等の宗教

毎月一回五日發行
定價一冊 金七錢 稅五厘
一ヶ年稅共金八拾錢

我れ等同人相計つて、宗教の本質を學理的にも又實際的にも研究する所の新誌を發行し、以て眞に自由主義の基督教を徹底せしめんとす。載せんと期する所の大略は凡そ(一)聖書の研究(特に難解の章句)(二)耶蘇傳の研究(三)諸教の研究(四)近代の思想と宗教(五)宗教哲學上の根本問題(六)我れ等の信仰(七)如何に兒童に聖書を物語る可き乎等なり。

——(十六號目次)——

(第二卷第十六號)——十二月五日發行——

□宗教の獨立性……三並良
□レクユージを求めて……大橋房子
□死の勝利……沖野岩三郎
□コスモスの花……芳夫
□米國通信岡山だより……
□消息……

——(十七號號目次)——

(第三卷第一號)——一月五日發行——

□偉大なる新年を迎ふ……
□一切の歸着點として形而上學……三並良
□エスのなやみ……たみ子
□生の悦……沖野岩三郎
□默示錄系思想の評論(四)……三並良
□夜と風(シモンズ)……瀧内秀綱
□隱れたる眞情……青木茂
□我が希望する世界……村上雄策
□エプロン……芳夫
□消息……

發行所 東京市芝區三田四國町 宗教研究會
振替東京三八三九四番
電話芝五八五五番

▼基督紹介書中の權威（實に何人も讀むべきの書　是を滿天下の諸賢に薦む）▲

○第一高等學校教授　三並良著

（クリスマス最好の贈答品なり）

第四版

眞人基督

傳說によらず歷史批評の立場より基督を說明し彼れの宗教を現代人の意識に紹介せんとするものにして我等の基督觀は此の書によりて闡明せられたり

ポケット入美本百三十頁

現代化せるキリストの口繪付

價金拾錢郵稅貳錢

東京三田四國町

六合雜誌社

東京振替一〇〇〇三番

電話芝五八五五番

謹迎一九一九年

恭賀五星得平和春

印刷所

東京市芝區南佐久間町一ノ三

所主　和田操

電話新橋一三一三番

振替東京三八六六五番

謹賀新年

王子製紙株式會社販賣店
富士製紙株式會社販賣店
東京板紙株式會社販賣店
梅津製紙株式會社販賣店
株式會社西野製紙所販賣店
株式會社有恒社販賣店
海外洋紙直輸出入
國內產紙問屋

大正八年
元旦

株式會社 岡本洋紙店
東京市本所區松坂町一丁目
長電話本所 一一四二三 一一四二四 一三二七三

株式會社 岡本洋紙店大阪支店
大阪市東區南本町一丁目
長電話東 一三一八

謹賀新年

大正八年元旦

統一基督教弘道會

六合雜誌社

安部磯雄

岸本能武太

內ヶ崎作三郎

岡田哲藏

岡見敬一

岡見愼二

相原一郎介

三並良

今岡信一良

工藤直太郎

和田操

高橋芳夫

讀者諸君へ急告！

一、近來本誌の發展は寄稿の數を激增し從て從來の紙數にては每號揭載し得ざる有樣であります依て本誌は年新なるに際し、一大英斷を以て紙數を增加し、內容を豐富にし、一層讀者諸君の愛顧に酬いんといたします。

二、紙數の增加と郵稅の關係とにより

一　册　金貳拾五錢　郵稅一錢五厘
半年分（六　册）　金壹圓四拾五錢　郵稅共
壹年分（拾貳册）　金貳圓八拾錢　郵稅共

但特別號は別定價にて隨時增減いたします

海外は一册につき郵稅九錢增

三、本誌は前金に非らざれば一切御送りいたしません。

四、前金の切れたる場合には「封紙」へ「前金切」を捺印いたします。

五、御送金は振替口座東京一〇〇〇三番本社宛御拂込みになるのが一番便利で安全です。

六、居ながら本誌購讀最便法はハガキで半年なり一年なりの購讀を御申込み下されば本社は直に集金郵便を以て前金を申受けます、但し此の際は集金委託料を別に御負擔を願ひます、

謹賀新年

與謝野晶子
麹町區富士見町

野口精子
小石川區宮下町十四

伊藤惠子
在倫敦

平山信子
本鄉區田町三七

佐藤安子
相州鎌倉雪ノ下大倉

大橋房子
芝區白金三光町四二九

辯護士 平澤均治
神田猿樂町

辯護士 松尾清次郎
芝區小山町九

辯護士 平山六之助
本鄉區田町三七

香川彥豐
神戸北木町六ノ二二〇

谷本富
兵庫縣武庫郡精道村

三澤糾
和歌山縣海草中學校

小島幸治
巢鴨町一四七〇謙和舍

富永德麿
東京府下巢鴨町

會津常治
本鄉町森川町一

長谷川巳之吉
芝區高輪南町六

土井晚翠
仙臺市元荒町

石田昇
c/o Dr, Brush, sheppaed Hospital, Yownson, Baltimore, Md., U. S. A.

藤井臣一
c/oThe Sumitomo. Bank Sanfrausico, Cal., U. S. A.

田中葦城
在米國加州

石島正種
小樽區稻穗町東六ノ一七

女子大學校
櫻風會實業部
小石川區高田老松町

謹賀新年

クレーマッコウレー
芝區三田四國町二ノ六

小山東助
相州鎌倉扇ヶ谷

石田三治
東京府淀橋町柏木三五三

白石喜之助
甲府市櫻町六〇

伊藤敬太郎
名古屋市東區鶴重町

吉野作造
本謙駒込千駄木町五一

帆足理一郎
東京府下下戸塚五二〇

高橋清吾
東京府下下戸塚

有田四郎
相州鎌倉扇ヶ谷要山

佐野袈裟美
小石川區宮下町六九

福田正夫
相州小田原

永井柳太郎
在米國

鈴木文治
在佛國

西淵峻
大阪市南區桃谷町二五

沖野岩三郎
本鄉區追分町二〇

一條忠衛
東京府巢鴨町一一六二

齋藤未學
宮城縣松山町千石松山一五二

野村善兵衛
東京府巢鴨町一一九一

吉田絃二郎
下谷區中根岸四〇

與謝野寛
麹町區富士見町

上山善治
大阪市基督教青年會

佐藤清
在倫敦

加藤一夫
東京府中野町一七二九

豐田實
本鄉區東片町一二六

神田佐一郎
和歌山縣串本町

中塚直三
東京府下高田村雜司ヶ谷二三

加藤時也
和歌山縣新宮町

統一基督教會集會案內

一、禮拜說教（毎日曜日午前十時）擔當　三並良

一、傳道講演（毎日曜日午後六時半）　沖野岩三郎

一、聖書講義（毎日曜日午前九時）　三並良

別掲廣告ノ通リ

一、靈交會（毎木曜日午後六時半）　沖野岩三郎

舊約聖書を研究中、猶會員諸君の信仰告白、宇宙、人生等に對する質疑等有りて頗る有意義の會合也

一、日曜學校（毎日曜日午前八時）　諸家

滿五歲以上の少年男女の入學を歡迎す

□どの集りにも、又どなたでも自由に御出席、御聽きになるとが出來ますから、御遠慮なく御來會下さい、歡迎いたします。

東京三田芝園橋際

統一基督教會

電話芝五八五五番

自由基督教會集會案內

但し自由教會は夏期中集會は悉く休む。

□講演（毎日曜日午前十時より）

內ヶ崎作三郎、安部磯雄、岸本能武太、岡田哲藏、小山東助、永井柳太郎、今岡信一良、相原一郎介の諸氏之を擔當す

□聖書講義（毎日曜日午前九時半より）

相原一郎介氏擔任

□思想研究（日曜日午前九時）

H. G. Wells, God the Invisible King の輪講文學士今岡信一良氏指導

以上會場は女子音樂學校講堂に於てす

□家庭集會（隔週木曜日午後六時半より）

各教會員の宅を巡回して開催し、相互の親睦を計り信仰に關する疑義を糺し共進互琢の實を擧げんとするものなり

□本會は大正四年六月成立し、自由基督教の立場より包容的信仰を宣傳し、現代の思想と生活に適應する宗教生活を樹立せんとする人士の組織せる獨立自給の團體なり、同感の士の來會を歡迎す。

神田錦町三丁目女子音樂學校內

自由基督教會

電話本局三七三九番

謹賀新年

大正八年一月元旦

神田區表神保町
東京堂

京橋區銀座
北隆館

京橋區銀座
東海堂

京橋區西紺屋町
艮明堂

京橋區尾張町
警醒社

神田區表神保町
上田屋

本鄉區西片町
本鄉書院

神田區南神保町
稻葉書店

神田區南神保町
岩波書店

神田區南神保町
有斐閣

牛込區早稻田
同文館

牛込區早稻田
文影堂

牛込區神樂坂通
南北社

小石川區表町
礫川堂

小石川區表町田村
誠文堂

赤坂區青山六丁目
山陽堂

四谷區忍町
洋々堂

芝區櫻田本鄉町
致知堂

芝區三田通リ
福島書店

芝區三田通リ
甲斐田書店

京橋區銀座
教文館

牛込區早稻田
敬文堂

大阪
福音社

京都
同信房

仙臺
福音本堂

仙臺
英華錄堂

岡山
文眞書院

熊本
聖書院

上海
日本店

北米
佐藤書店

C 1919

Library of the
PACIFIC JAPANESE SCHOOL
FOR THE MINISTRY
[illegible]

（明治廿五年三月二十七日第三種郵便物認可）（大正七年十二月三十日印刷納本）

ライオン齒磨（みがき）

茲に光輝ある新年を迎へて
大方各位の御清福を奉祈候

舊年中は深大の御同情を賜はり弊店組織の變更、銷路の擴張、工場及び試驗所の完備等悉く感激に堪へざる儀に御座候
隨つて ライオン油脂 ライオン石鹸 製品各種愈向上して日に月に世界の信用を高め店員一同努力報謝の一念に充實致居候次第重ねて御禮申上候

頓首再拜

大正八年一月元旦

ライオン油脂 ライオン石鹸 株式會社 **本舖 小林商店**

本舖 東京市本所區外手町
支舖 大阪市東區博勞町
地方倉庫 名古屋市西區桑名町

（本號ニ限リ特價）金五拾五錢（郵稅二錢）

437

明治廿五年三月廿七日第三種郵便物認可
大正八年二月一日發行(每月一回一日發行)

六合雜誌

六合雜誌第三十九卷第二號

PACIFIC UNITARIAN SCHOOL
FOR THE MINISTRY
Berkeley, California

二月號

THE RIKUGO-ZASSHI

No. 457 Febrary 1919

CONTENTS

On the Death of Theodore Roosevelt.....Prof. R, Tsuchii. 2

Some Comments on the New University Regulations.....

.....Praf. S, Uchigasaki. 4

A World-Republic.....Dr. R. Hoashi. 11

Some Problems about the League of Nations.....

.....Dr. S. Takahashi. 20

Social Ideas of John Ruskin.....G, Yoshida. 31

Inner Expansion of the Self.....Z, Nomura. 36

On "Tre Second Coming ofChrist by Mr kanzo Uchimura"..

.....Prof. M, Minami. 46

Some Aspects of Militarism .....N, Kudō. 54

On the Freedom of the Press.(III).....G, Ichijo. 62

My Program of Social Betterment.....R, Hirayama. 72

A Novel .....I, Okino. 82

Topics of the Day.

New Books.

Published Monthly by the

TŌITSU KURISUTOKYŌ KŌDŌKWAI

2. Mita, Shikoku-machi, Shiba-ku, Tōkyō.

千萬言の

説明を聽くよりは、此の
一管の實驗を御覽なさい
品質本位

花王石鹸

くわおうせっけん

花王石鹸製造元
東京馬喰町
長瀬商會

石鹸試驗法

石鹸ん些し削つて試驗管に入れ之にアルコールを注ぎ好く振り混ぜて火にかければ純良の石鹸は透明となる。若し混合物があれば沈澱し遊離脂肪があれば溷濁が見ゆる。又遊離アルカリを含むものは此の液にフユノールフタレイン一滴を落せば赤色に變ずる。

斯の如く純良無上の品質なるが故に絶えず帝國陸海軍、帝國大學赤十字病院等の採用品となり、化粧衛生の第一品として滿天下に賞讃を博するのです。

△哀　別　吟（和歌）……相原一郎介…六一頁
軍國主義の反對毒……工藤直太郎…六二頁
法律倫理學より觀たる言論著作印行集會及結社の自由……一條忠衞…七二頁
社會改善論……法學士…平山六之助…八二頁
不安を欲する心……大橋房子…九二頁
藝術以前……白一鳥…九六頁
▲編輯遺穗……九八頁
地に物書く人（小說）……沖野岩三郎…九九頁

六合雜誌二月號目次

第三十九卷第二號

ルーズヴエルトを弔ふ……土井晩翠…二頁
新大學令の批判……内ヶ崎作三郎…四頁
世界共和國を提唱す……早大教授 帆足理一郎…一一頁
◆佛心鬼面……一九頁
國際聯盟に關する諸問題……早大講師 高橋清吾…二〇頁
ラスキン思想の半面……吉田絃二郎…三一頁
自我の内面的發展……野村隈畔…三六頁
基督再臨問題講演集を讀む……三並良…四六頁
天文學と社會の進歩……ザアツサー大學教授 フアーネス…五四頁

自由基督教講習會

空前の大戰は既に其終結を告げ世界は今や基督教的精神に依て一大改造を遂げんとしつゝあり、果して然らば基督教の研究と體驗とは茲に新なる意義と重要とを加へたる者と謂ふべし。天下の志道者を迎へて基督教及び關係諸問題の眞相を闡明せんと欲する所以也。

講師

帝國大學教授　姉崎正治氏　　陸軍大學教授　岡田哲藏氏
早稻田大學教授　安部磯雄氏　　統一基督教會牧師　沖野岩三郎氏
帝國大學講師　石橋智信氏　　早稻田大學教授　北澤新次郎氏
統一基督教弘道會幹事　今岡信一良氏　　第一高等學校教授　三並良氏
早稻田大學教授　內ヶ崎作三郎氏　　法科大學教授　吉野作造氏

期日　來る四月一日より七日迄　每日午後六時より九時まで
會場　東京市芝區三田四國町二番地惟一館
詳細は本誌來月號廣告に依りて承知せられ度し

主催

東京市芝區三田四國町二番地
日本統一基督教弘道會
電話芝五八五五

診察毎朝及毎夕但祭日及日曜の他
院長診察月木金午前及午後六時
林、峯間兩副長は目下當院に在勤
東京市麹町區三番壱三十番地（市ヶ谷見附内）
電話番町六二番
電話番町五一六番

東洋内科醫院

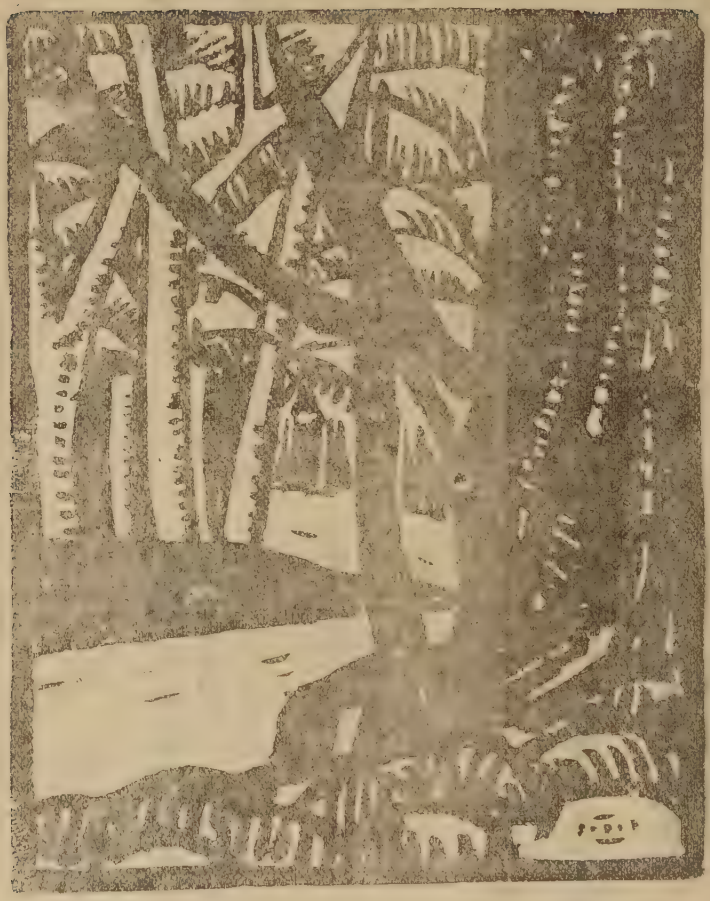
醫學博士 高田畊安

南湖院

電話ちがさき二番
神奈川縣茅ヶ崎海濱（從停車場半里）
河野、高橋兩副長は目下當院に在勤
院長診察土曜日午後、入院診後應需
診察毎朝但祭日及日曜及土曜の他

六合雜誌

二月



岡田哲藏著

我が斷片　價金貳拾錢　稅金二錢

MYFRAGMENTS　金貳拾錢　金貳錢

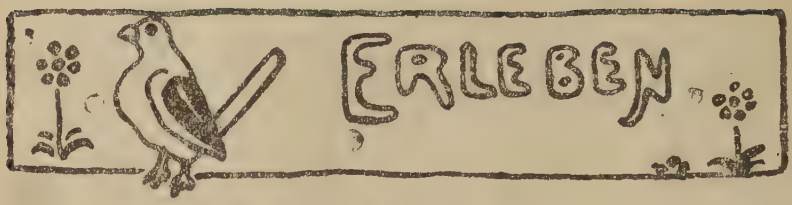
右合本　金四拾錢　金四錢

我が環境　金六拾錢　金四錢

MYENVIRONS　金四拾錢　金貳錢

發行所　東京市芝區三田　振替東京一〇〇〇三番　電話芝五八五五番　六合雜誌社

彼は何物をもことさらに作爲せんとはせぬ。然し彼が感受し、觀察し、判斷するものが自然の形に成り出づる。かくして成れる自然の作が「我が斷片」として見はれたのは三年前である。其後の作の集まれるを分類し配列したのが「我が環境」である。彼はさきに數年の觀察と思惟の結果を集めて「靜觀と思想」と名くる一論集とした。その範圍は主として今の思想界、卽ち他の人の心の世界であつて、それを攻究の對象としたのであつた。然してその成果は世の常の論文の形であつた。「斷片」と「環境」とはかく人の心界に限られず、他の思想に介せられず、彼自らが直ちに自然に接し、人生に接し、得たるまゝの印象を表現したのである。その表現の方式も、散文とも詩とも就かぬ、自由にして獨特のものである。然して成し得る限り短き辭に多くの意義を包含せんとの試である。自由に眞實に他の思想や形式に累せられざらんと願ふのみならず國の境を越え、時の流れの外に立つは彼の望である。



千秋の史に讀のむところ、おほいなる
君の勳業日の本の
民の感謝を受けてあらめや。

小村逝きウイッテ亡びて殘れりし
ルローズヴエトも遂に夢、
黒幕垂れぬ——世は日に移る。

何ものが孟嘗の輩、鷄鳴と
狗盜のかしら綽名して
英雄の名を汚せるものは。

憎むべきタマニイホール敵とせる
清節の人——姦商の
貢貧るものに比せんや。

千載に傳はる高きラテンの句
君にふさはむ、『人の世の
光榮斯くも皆過ぎ行く』と。

逝くまじき君は逝けるを、國逃れ
アメロンゲンにすくまりて
無恥の奸雄生を貪る。

情人のあるを殉せし裙釵の身
それさへ痛む今にして
おほいなる影セオドル逝けり。

ルーズヴエルトを弔ふ

土井晩翠

全世界地圖染め替ふる前にして
經綸の策おほいなる
言葉聞くべき君逝けりとや。

時も時、運命遂に測られず
一千九百十九年
一月六日セオドル逝けり。

アフリカ猛獸狩りし力もて
虎狼にまさるチユートンを
言論の上に攻め擊ちし人。

兇獨の滔天の罪懲らすべく
雷霆の聲北米に
とどろき鳴りし其人逝けり。

大義說く言葉に業の劣らめや
西の戰場砲彈の
間にかれの愛兒は倒る。

剛健の德の權化か文に武に
六十年を貫きし
「奮鬪の生」今ぞ終れる。

天を畏れ務め盡せとおほいなる
不滅の敎へ宣じつゝ
身に踐み行ける偉人は逝けり。

かれも夢、國の血汐を湧かしめし
ポーツマウスの條約の
聯想ひける一代の雄。

第三に日獨戰爭を開いて我國をして聯合國の有力なる一員とならしめたるは、大隈內閣の英斷であつた。若しその當時現內閣が成立したりしならば、元老の壓迫は或はその英斷を敢てせしめなかつたかも知れぬ。而して、突如として大戰爭は最後の幕を下ろして、講和會議に使節を送るの特權を有したるは、現內閣は實に果報者なりと云はざるを得ない。第四に原內閣は行き詰りたる官僚內閣の後を受けたるが、故に元老並びに官僚に對して、餘りに氣兼ねする必要がないことである。第五に獨逸帝國の崩解と聯合軍の大勝利は我が國の軍閥者流をして、自ら謙抑するの止むを得ざるに出でしめたるが故に、從來の內閣が苦しみたりし軍閥の壓迫を多く感ぜざるは、現內閣の大いなる强味である。

二　校舍の新築か新生命の鼓吹か

大戰亂の終りである。新文明の曙である。民本主義の勝利の時代である。苟くも政黨內閣を以て任じ、平民內閣を標榜するものは、大いなる決心を以つて經綸を行ふべき秋である。吾人は刮目して現內閣の爲さんとする所を注目しつゝある。

現內閣は大學令及高等學校令を發布した。これは前々內閣以來の懸案を解決したるものにして、教育調査會の決議を樞密院に於て審議して、勅令としてこれを發布したものである。この大事業に着手するの機會を與へられたるも亦現內閣の幸運者たる所以である。續いて現內閣は、專門學校の大擴張を計畫し、大正十四年には約二萬人の學生を收容し得んが爲めに、新に高等學校十校、實業專門學校十七校、專門學校二校を增設することに決定した。それに對する費目は建設擴張費三千九百五十萬圓、教官養成費四百五十餘萬圓合計四千四百餘萬圓を計上し、之を大正八年度以降十三年に至る六ヶ年度の經續費となさんとしてゐる。而して、恐れ多くも、天皇陛下には高等教育御奬勵の爲めに、一千萬圓の御內帑金を下賜せられたのである。故に政府は殘餘の三千四百餘萬圓を公債又借入金を以て支辨せんとしてゐる。是れ實に現內閣の企てたる大事業である。然れども教育は靈感を尊ぶ。生命の充實を重しとする。

新大學令の批判

內ヶ崎作三郎

一、幸運なる現內閣——二、校舍の新築か新生命の鼓吹か——三、大學の理想——四、大學に對する吾人の新定義——五、私立大學を保護すべし——六、女子高等教育の閑却

一　幸運なる現內閣

吾人は前號に於て文明改造の第一歩として、宗教の發達及び純化の緊要なることを論じた。蓋し如何なる國民と雖もその人生觀及び宇宙觀の進歩なくして、眞實なる發達をなすことが不可能なるが故である。然るに文明改造の第二歩は、何んぞやと問はば、云ふまでもなく、教育改造である。今より約百有餘年前普魯西が奈翁に蹂躙せらるゝや、豫言者的學者フイヒテは獨逸國民に訴へて、教育の改造を絶叫したのである。伯林大學は、獨逸國民復活の先驅として、現出したのであつた。今や世界大戰亂漸く終局に達し、歐米列强徐々として、復員を行ひ、產業を奬勵し、教育を改革し、進んで新なる國際關係を生み出して、國民的及び國際的安寧幸福を贏んと努力しつゝあるのである。この秋に當つて日本國民のなすべきことは多々ありと雖も、教育の擴張及び充實はその最も大いなる問題の一つである。

現內閣は或る意味に於て、甚だ幸運なる內閣である。第一甚だ不評判なりし寺內內閣の後繼者なりしが故に、又前官僚內閣に對して、その政黨的色彩の如何にも鮮明なりしが故に、殊に幸にして、原首相が未だに平民たるの資格を失はざるが故に、多數國民の歡迎する所となりしは仕合者と呼ばざるを得ない。第二に殆んど空前の米騷動の後に成立したる內閣なるが故に、民心は寧ろ騷擾に飽いて却つて冷靜なる社會的心理に立ち返らんとする傾向を示してゐることも現內閣の爲めに好都合なりと云はざるを得ぬ。

華の團體にして、國家よりも更に純潔なる生命と高遠なる理想を有してゐる。大學は斯くして始めて、正義と人道に立脚する眞正なる愛國者を養成することが出來るのである。かくして、學術の理論及びその蘊奥の講究が可能となるのである。然るに大學を以つて單に國家に必要なる學術を敎授及び研究を事とし、併せて國家思想の涵養のみを目的とする敎育機關なりと定義する時は、ある程度までの學術の進步發展を期待することが出來るけれども、眞にその蘊奥を究めること不可能なるに至らざるか。吾人大いにこれを危むのである。獨逸の大學にはレール●フライハイトとレルン●フライハイト卽ち敎授の自由と研究の自由とを眼目としてゐるのである。政府の權威を以てして、尙學者の自由を奪ふこと出來ないのである。眞理は自由である。自由のなきところに眞理はない。學者は眞理の研究者である。自由の與へられざる所には眞の學者が存することが出來ない。而して新大學令は眞理の研究を無視するが如き定義を大學に與へたるが如きは一大缺點なりと言はざるを得ない。かゝる狹隘なる大學の理想の下に果して世界人類を光被するに足る眞理の闡明を我國の大學より期待することが出來るか。或は恐る、國家思想に囚はれたる平凡なる學者が、平凡なる學術を講義し、世界人道の進步に對して、極めて微々たる貢獻をなし得るに過ぎざるかを憂へざるを得ないのである。東西文明の調和融合を理想とする日本國民の指導者を養成すべき最高學府の定義として、極めて缺點多きことを指摘せざるを得ない。

四　大學に對する吾人の新定義

大學たるものゝ一方面は國際的世界的なることである。中世紀に於て伊太利のボロナ若しくは巴里等に於て大學の創設せらるゝや。歐洲諸國の青年がこゝに學んだのである。今日歐米の大學に學ぶものゝ甚だ愉快を感ずるは、その世界的空氣の濃厚なることである。獨逸の伯林大學、萊府大學、ハイデルベルベルグ大學、ミュンヘン大學、その他の諸大學に於て、世界の有爲なる青年が來り學んだのである。現に戰爭前までは、獨逸の諸大學では常に數百名の日本學生が學びつゝあつたのである。オックスフォー

校舍の建造は金錢を以つてこれを善くすることが出來る。精神の充實は精神旺盛なるもののみこれを善くすることが出來る。教官養成費として四百五十餘萬圓を支出するは結構なることであるが、一大精神が之を助くるに非ざれば有力なる教師を養成すること不可能である。

更に進んで吾人は新大學令及び高等學校令に關する批評を試みやう。かくすることに依つて、教育改革問題に接觸せんとするのである。新大學令第一條に曰く『大學は國家須要なる學術の理論及び應用を教授し並びにその蘊奥を講究するを以て目的とし、兼ねて人格の陶冶及び國家思想の涵養に留意すべきものとす』と。この大學に關する定義は研究及び批評を價すると思ふ。大學は國民の最高學府なるが故に、國家に必要なる學術の理論及び應用を教授するは當然のことである。又人格の陶冶も高等教育に於ては決して無視すべき筈はない。然れども事々しく、國家思想の涵養にのみ重きを置くは如何なる理由てあるか。大學は既に國家の力に依つて支へられるならば、國家に對して、忠誠を盡すは當然のことである。然れども之を改めて定義中に加ふる必要ありや否や。或は從來の大學を以て、國家思想の涵養を怠るものと見做したるものであるか。或は尚不充分なりと認めたのであるか。或は又將來多くの大學を增設すると共に、國家思想と相容れざる新思想の勃興を豫想したものなりや。若し人ありて、これは、歐米に瀰漫しつゝある改革思想、進歩思想に對する反動主義の政治家の保守思想の出現なりと判斷を下すものある時は、現内閣諸大臣は何の言葉を以つてこれに應へんとするか。

三　大學の理想

吾人は思ふに眞の大學は、國家に立脚して而かも國際的、人道的理想を抱擁せなければならない。大學は眞理の研究所である。而して時としては眞理は國家よりも大なるものである。蓋し、國家の内容は國民全體である。國民には善人あり、惡人あり、賢者あり、愚者あり。故に國家の理想はこの複雜なる内容に依つて制限せられその行動は往々にして、控束せらる。然れども大學は、國民の道德的、知識的精

思想と言はざるを得ない。かゝる場合に於ては宜しく政府は何等かの奬勵法を講ずるは至當ではないか。例へば假に私立大學の供託すべき基金を一百萬圓として、政府は、それに對する利子と等しき金額位を補助すると云ふが如き、奬勵法を設くるが至當ではないか。苟しくも、新大學令に則らんとする私立大學は過去に於て、國民高等教育の方面に於て、多大なる貢献をなしたるものに相違ない。この種の私立大學に對しては政府は無條件の寄附をなすは當然ではないか。等しくこれ國民の學府ではないか。官立大學のみを偏狹して、間接に私立大學を壓迫するが如きは決して策の得たるものではない。

六　女子高等教育の閑却

吾人は猶ほ高校令に就ても言はんと欲する所ろ多しと雖も之を他日に讓り、現內閣が男子の教育にのみ重きを置いて、女子教育を輕んじたる態度を非難せざるを得ないのである。今日の中學生全體は十四萬人、高等女學校生は十一萬人である。前者に對して、四千四百萬圓の教育費を支出するは結構なれども、後者に對しては何等の計畫の發表なきは如何なる理由なるか。現內閣は追て之を發表するの意志を有するや否や。獨逸諸大學に於ては女子の大學生は比較的少しと云はれてゐるが、昨年の夏季に於て各大學に於ける總數は六千八百九名に達してゐる。大戰亂のたゞ中に於て獨逸がこの數丈の女子大學生を教育しつゝあつたことは驚くべきことではないか。今や我國の高等女學校卒業生にして、更らに進んで高尙なる高等教育を受けんとするもの、その數を增加しつゝあるに拘らず、現內閣は之を顧みざるが如き態度を示すを心得難き事と云はざるを得ない。女子の高等教育にして振作するに非ざれば國民は眞の進歩をなすことが出來ない。何故に政府は、女子の爲に女子高等學校を新設せざるのであるか。又何故に日本の青年女子はその要求を天下に發表しないのであるか。求めよ、而らば與へられん、何故に之を求めざるか。然れどもこれは教育調査會が責任を有するのである。同會議は女子高等教育に關する調査を打ち切りたるは不見識も甚しい。眞に我が國の文明の進歩を妨ぐる態度といはざるをえない。米國に

ド、ケンブリッチに於てもその國際的空氣と色彩はこゝに學ぶ者に非常なる快感を與ゆるのである。米國に至つては日本の官立大學に比すべき州立大學に於てすらも、外國人に對して米國人同樣の特權を與へてゐるではないか。かくして大學に於て、世界各國の有爲の青年が相集つて、學術を研究し、人格を陶冶する、不知不識の間に國際的友情を濃め、人類終局の理想に向つて不知不識の間に貢獻するところ甚だ大なるものがある。

今や日本帝國は世界五大強國の一となり、東洋諸民族の指導者として立たざるを得ない。日本諸大學は支那、印度、西伯利、暹羅、安南その他東洋諸國の學生を引きつけて、彼等の爲めに、眞理の松明を振翳す努力を果さなければならない。然るに、日本の大學は餘りに國家思想に囚はれたりとすれば、果して彼等は喜んで我大學に來學すべきや否や。假に來學しても、彼等は愉快に幸福にその數年を過すことを得るや否や。結局斯の如くにして、偏狹なる大學は國家民族の繁榮を傷くることなきや否や。吾人は之を危むものである。故に吾人をして修正案を提出せしむるを得ば、次の定義を下さんとするのである。

『大學は國家人類に須要なる學術の理論及び應用を敎授し、並びにその蘊奥を攻究するを以て目的とし、兼ねて人格の陶冶、國家思想及び人道の理想の涵養に留意すべきものとす』。

五　私立大學を保護すべし

新大學令は官立大學の外に公立大學、私立大學を認可したるは當然のことてある。私立大學は、財團法人たるべくして、大學に必要なる設備又は之に要する資金及び少くとも大學を維持するに足るべき收入を生ずる基本財產を有せねばならぬ。而して之に對する基本財產は現金又は有價證券として供託せねばならぬ。苟しくも私立大學たるものは、相當の設備をせねばならぬ。その爲めに、基本金を有すべきは當然である。然れ共、その基本金を有價證券として政府に供託せしむるは稍嚴重に失するの嫌があるまいか。一體政府は規則を以て民間の事業を束縛、制限するを以て能事と考ふるが如きは、時勢遲れの

世界共和國を提唱す

帆足理一郎

一　戰爭と戰爭

ノブルだのブロックだのウエルスだの云ふ現代の豫言者達は、遠き以前より戰爭を出來得る限り殘虐にせよ、さすれば戰爭の止む時が來る。例へば一個の爆裂彈で全大都市を灰燼に歸せしめたり、半日の戰爭に一ヶ年分の徵兵全員を屠殺したりするやうになれば戰爭は出來なくなると。されば今度の大戰爭は此種の戰爭と見る者も少なからずあつたが、戰爭の方法はやはり舊式であつて永い年月を要し、一氣にして勝敗を決することは出來なかつた。さればとて、科學の應用や機械の發明が次回の戰爭をしてどれ程慘虐なものたらしむるか分らぬ。

飛行機は勿論今回の戰爭に大に利用されたけれども、勝敗を決する程重大な効驗を見せなかつた然し、飛行機は事實發明された計りの處で、若し今から十年後に戰爭があるとすれば、その頃には飛行機は電車や自働車の如く一般の交通機關となつてゐるに相違ないから、いざ宣戰となると一夜の內に飛行機はロンドンやニユウヨオクや東京などの大空に馳せ集つて、爆彈投下の大活劇を以て瞬間に東京を破壞し盡して了ふかも知れぬ。今度の戰爭でも屢々パリーやロンドンが飛行機襲撃で脅かされた。三十機の敵軍がロンドンを襲撃して多大な損害を與へたこともまだ耳新らしい話である。戰爭が永く續けば、必ず飛行機隊を以て勝を制すべしと計畫して、幾萬の飛行機を作製中なり米國の戰略を見ても其有效なるべきは明瞭である。幾萬の飛行機が空を覆ふてベルリンの頭上に集つたならば、二百萬の市民は未曾有になつてしまつたであらう。吾等はどうしても今回の休戰の一理由を飛行機襲撃の恐怖に歸せねばならぬ。

於ては私立大學の或科を州政府及び合衆政府が維持し若くは補助する例が少くない。例へばコロネル大學の農科及び獸醫科の如きその一例である。

中學教員の優遇法に就ても現內閣は何等の計畫を發表しない。中等教員は大いに優遇せねばならぬ。又小學教師も大いに優遇せねばならぬ。現在の小學教師は十六萬六千にして、その中五十圓以上の俸給者は千三百餘名に過ぎない。十五圓より二十圓までの俸給者は四萬五千餘名である。而して教員全體の平均俸給額は二十餘圓に過ぎないのである。故に現內閣は、小學教員に對する國庫補助額を增加せねばならぬ。その財源は軍備を制限して、その剩餘金を以てこれに差し向くるを第一策とせねばならぬ。

教育改造の大事業に伴ふべき施設にして爲すべきこと甚だ多いのである。從來は軍國主義の爲めに費すところ餘りに多かつたのである。今やカイゼルの沒落と共に我國も幾分か軍備の負擔を減少し得ることを信ずるのである。教育の擴張と充實を計るは今日最もその時を得たのである。吾人は現內閣が大いなる勤勉と勇氣を以てこの大問題を解決し得んことを希望するのである。

眞に是れ教育者の態度

日本女子大學校長成瀨仁藏氏不治の病に罹るや、全校學生の大部分と東京在住の卒業生を講堂に集め、生別の演說をなす、言々句々潑溂たる生命に溢る。曰く六十年來鍛練したる靈の宮は肉の死と共に消滅するものにあらずと。彼は眞に生命ある教育者なるかな。この確信あらば病魔に對する抵抗力も永續すべし。吾人は病床の同氏に祝福を祈ると共に、新校長麻生正藏氏及び新幹部の指導の下に同大學のます〳〵發展せんことを祈る。SU生

め、粒々辛苦に打建てた文明を一夜の内に破壊して了ふであらう。斯くて十歩進めば十歩退却し、」百歩進めば百歩退却する今回の様な文明破壊の大戰爭を爲す計りて、人生は殺さんが爲め、殺されん爲めの一と休に過ぎないことゝなり、是れほど無意義な生活を送ることはあり得ないのである。されば戰爭の殘害を以て戰爭を破滅せしめよ。是等は來らんとする平和會議に於て、永久に戰爭の可能を滅却せねばならぬ。

永久の平和を確立する爲めに、今やウイルソンやロイドジョオヂによつて國際聯盟が主張されてゐる。今度の媾和會議に於て、何等か其具體的實現を見ることは慥であるが、私の意見によれば國際聯盟ではまだ〳〵其の平和の保障とはならぬ、今一歩進めて世界共和國を建設せねばならぬと思ふのである。なぜ國際聯盟では不足であるかと云ふに、ウイルソン等の主張する夫れは軍備を全廢するのでなく、聯盟に加つた國々が共同して兵員を出し合せて一個の國際警備を組織すると云つてゐるが斯様な聯合警備軍が如何程有力であり得るかは別問題として、若し聯盟國間に利害の衝突があつた場合には、各國の兵は聯盟の爲めにとて自國に逆つて戰ではすまい。結局各國兵ばら〳〵に解體して自國の軍隊に編入され、戰爭に參加するであらう。されば國際警備隊は只無事の日の御飾物に過ぎない。

又或る人は國際警備を作らないで、只軍備國内の治安を保障する程度に縮少し、戰爭の場合には聯盟國で經濟上の壓迫や聯合軍の編成によつて聯盟國の主張を通じ得ると云つてゐるが、軍備の縮少は困難であつて、何を標準として各國が縮少策を採り得るか疑問である。之を決定するには人口領土、國富、地理的關係、其他色々な要因があつて到底圓滿に、甲國は是れだけ、乙國はあれだけの兵備で澤山だなと外から決して決定してやる譯には往かぬ。若し外から決定出來なければ軍備の自由競爭は免かれ得ない所て、表面量に於て縮少しても、其戰鬪力を秘密に附して質に於て增加することはどれだけでも出來る。されば、よし軍備を縮少して國内の治安を保障するに止むると云ふ

潜航艇も今回の戰爭ではドイツに勝を與へなかつた。然し、其破壞力は驚くべきもので世界の造船力以上てあつたことは皆人の知る處で、是れに對する防備が工夫されたけれどもそれ自身危險な武器である。若しドイツが一昨年の春以來でなく開戰以來潜航艇を利用してゐたならば、或は戰爭の運命を轉倒してゐたかも知れぬ。又毒ガスの利用も誠に恐ろしいもので、或る英國の毒ガス軍事家の言に據れば、若しドイツが一九一五年の四月に行ひし三哩に亘つた毒ガス攻撃を三十哩廣さにして居つたならば、西部戰線は難なく突破され、バリーの陷落は實現されてゐたであらうと。

兎に角に、潜航艇、毒ガス、飛行機の今回の戰爭に於て最も慘虐なる破壞力を發揮したことは爭ふべからざる事實なるにも拘らず、是等の武器は未だほんの初步であつて、今より十年後、或は二十年後の戰爭には、どれ程其應用が盛んになつてゐるかも知れぬ。而も是等の武器は比較少額の費用を以て準備することが出來るものであるから、一強國が其等三種の武器に改良を加へ、充分な設備を整へてゐたならば、世界を相手にしても勝利を博するほどな大戰爭の大慘劇を企て得るであらう。然し、ドイツのやうな獰猛な國民の外、斯る非人道的な武器を使つて無辜の民を殺傷することは敢てし得ないかも知れぬが、夫れとて絶對的に保障は出來ない。聯合軍がドイツの飛行機襲撃や毒ガス使用を非難しつゝも、人道主義に立つと云ふ味方が是等の武器を使用して憚からなかつたではない乎。國際法で是等の武器の使用を嚴禁したならばと云ふ者があるであらうが、事實、毒ガスや飛行機襲撃はヘーグの平和條約で禁止されてゐたにも拘らず、ドイツ人は使つたではない乎、ドイツが使へばやはり聯合軍もだまつて居れず、同樣な非人道的手段に出てたではない乎。戰爭に法律も道德もあつたものぢやない。法律や道德がないから戰爭は起るのではない乎。戰爭の非人道的なるは勿論である。

二　國際聯盟では不完全

されば戰爭の可能を何時までも保留し置かば、そは益々殘虐となる計りで、各國爭つて武備を修

て、世界の強國が協同一致して軍備を全廢すれば戰爭の可能は立ち處に消々去るのである。

由來、兵備の負擔に堪へず、而も尙精巧な軍器の裝置に沒頭してゐた國は世界中強國計りて、是等の強國が卒先して兵備を解けば、世界中戰爭の可能は全く無くなるのである。若し戰爭の起る樣なことがあり得ても、夫れは百姓一揆が蓆旗を立てゝ戰ふ位に過ぎない。されば戰爭が絕對的に不可能となる譯ではないが、あり得ても大仕掛な國際大戰爭は全く絕無となる。國內の治安を保障するには現時の警察制度にて澤山ではない乎。

或者は云はん、現時のルシヤの如きを如何すると、現下ルシヤに騷動が止まないのは畢竟軍備の名殘があるからで、全く軍備がなくなればかうした內亂も起り得ない。されば、ルシヤやドイツの內亂が鎭まるまでは勿論世界共和國も軍備全廢は出來ないが、此等の國の治まりが付くまで持つて必ず一齊に軍備を廢する準備を今からして置かねばならぬ。

斯くて兵器は學校となり、軍器製造所は工藝品製作所と變じ、軍艦は商船となり、軍事費は凡て敎育費に充つべきである。大戰爭前世界は每年四十五億萬圓の軍費を費してゐたが、夫れは國庫歲入の三分の一に當り、每年の損失實に莫大なものであつた。若し此金を利用して敎育費に充て、世界同胞主義の鼓吹に力めたならば、世界の平和を保障することは何等の疑ひなき所である。如何に強固な國際聯盟が成立しても軍備を全廢せざる間は每年四十五億萬圓の敎育費は浮いて來ない。從つて世界の人民を世界主義的に啓發する機會が夫れだけ失はれ、戰爭の可能は永久に保存される譯である。されば是非共、世界共和國を組織して軍備全廢を實行せねばならぬ。

第二に必要なことは關稅の撤廢と自由貿易の確立である。武藏の國から相撲の國に生絲を輸入しても關稅を取らぬことは既に實現され居る事實である、舊藩時代では一國から他國へ旅行したり商品を輸出したりするのは容易でなかつた。今や日本國中、一縣から他縣への商品の輸出入に關稅の必要を認めずと云ふならば、何故に世界共和國が

ウィルソン一流の漠然たる提議が採用されたにしても、苟も軍備の存在する間は、所詮そば永久に戰爭の可能を包藏すること、休火山の如きものであつて、一種の『武裝の平和』或は『權力均衡』に外ならず、眞の平和の保障と云ふことは出來ぬ。何となれば『武裝の平和』や『權力の均衡』は十九世紀末の努力として其失敗なりしことは今回の大戰爭によつて遺憾なく證明されてゐるからである。されば吾等は再び『武裝の平和』や『權力の均衡』に欺まされてはならぬ。今回の媾和會議乃至平和會議は是非共、夫れ以上のものたらしめねばならぬ。是れ、私が國際聯盟を排して、世界共和國の設立を主張する所以である。

三　世界共和國を設立せよ

私の主張する世界共和國は民本的の全人類的大國家である。先づ世界の人口を十六億と見積つて各國から人口五百萬に對し一人宛位の代表者を出さしめて世界の大議院を組織する。さすれば議員が三百餘名ある譯であるが、初めは先づ強國だけが加盟するものと見て其半數に充たないであらうが、兎に角に有力な國家が集つて一個の世界的共和國の設立を誓約し、夫等の議員によつて憲法を制定し、大統領見た樣な行政官を選擧せしめてもよし、或は此代議院を以て政府を組織してもよい。何れにしても一個の強固な政治機關を具備すべきことは勿論必要である。而して此共和國の爲すべき第一着の仕事として私は左の三事項を提言する。

第一は勿論軍備全廢である。軍備の縮少は恰も節酒節煙見たやうなもので、其不徹底なるは勿論實行不可能であるから、恰も酒造を禁止すれば只に禁酒を實現し得る如く、又煙草の耕作を廢止すれば立ち處に禁煙の實行が出來得るのと一般、世界共和國に加盟した各國は必ず軍備撤廢を宣誓し且つ實行せねばならぬ。日本のやうな小弱國では勿論、軍備の冗費に堪へ切れないでゐるのだから勿論喜んで贊成するに違ひない。軍備がなければ國家の隆盛を來すことが出來ないとか、隣國の侵入恐るべしなど。云ふは、實は軍備に慣れたものが軍備の存在を不知不識に假定して云ふのであつ

が他國に勝つて巨大の富を蓄積してゐるのは、通貨の單位が他國の夫れよりも甚しく大なることにもよる。又通貨の單位が異ることにより生活程度の差異を計るにも不便である。其不便は勿論數學的不便ではない、米國の弗が日本金二圓であれば何も計算に困難はない。其不便と云ふは畢竟心理的のもので、米國で年千弗の生活をする者が交換價額で同等なる日本金で二千圓の生活するものを見て贅澤に思ふは慥である。日米物價の差異など著しきは其通貨の標準が異つてゐることに因る處甚だ多いのである。されば、通貨を一にして爲替相場なるものを國際市場より驅逐せよ。各國の富と國民の生活程度は段々に均衡を保つに至るであらう。

勿論斯くしても尙富の相違の永久に存すべきは各國民の經濟能率如何によるものであつて、夫れは自業自得、勤勉な國民が富を餘計に積んで、高い生活をするのは勿論至當である。只吾等の主張する處は、各個人、各國民の內的事由でなく、只外的の關係よりして富の差、生活程度の差を作る事情の凡てを滅却せんとするものに外ならぬ。而して關稅の存在と度量衡及通貨標準の不一致は其外的事情として最も顯著なるものなるが故に、吾等は之を排斥するのである。

四　世界共和國の人口問題

以上三事項は世界共和國の第一に着手すべきことであるが、此處に大問題となるは人口、乃至は移民の問題である。前述の主張により、自由貿易を確保するならば、人口の移動も自由でなければならぬ。富の不平均を作る根本は領土の廣狹に因るもの多く、米國の如く、廣大なる領土を有し一方哩三十人位しか住んでゐないのに、日本では一方哩三百數十人に當る程人口が夥多である。されば、人口の移動を自由にせば、從つて生活の程度を平均に近づく譯であるから、世界の共和國は商品輸出入の自由と共に移民の自由を認めねばならぬ。

私も勿論、此主張を人口問題の根本原理として共和國に提議したいのである。乍併、此自由移民問題は自由貿易問題とは自から異る處があるか

非民本的關稅を保存するの必要ありや。日本で必要な物が支那で安價で出來るならば、どし〳〵輸入せよ、是れに關稅を課するは國民の消費稅を高くするもので、共惡稅たるは勿論である。

由來關稅は國家主義の遺物（然り、國家主義は今度の戰爭で討死した筈だから）である。國家が他國に勝つて自國の富を增殖しようとするから、こんな惡悅が課せらるのである。世界各國富の不平均を作る原因の一つとして吾等は世界共和國から關稅を放逐せねばならぬ。關稅を廢して輸出入を自由にして置けば、各國民其長所に從つて輸出品を製造し、其短所とする處は之を他國に仰き、互に交換し合ふて、有無相通し、結局各國の富の程度少くとも生活の程度を稍々均等に近かしむるであらう。

關稅の撤廢は消極的に惡悅の廢止てある計りでなく、積極的に世界主義の傳播者となるものである。現今に於ても世界の商業化は世界の人道化と略ほ並行してゐる。關稅が全く撤廢されて、自由に世界中を跨にかけて商買が出來れば、各國互に迅速な文明の交通交換となり、世界的同胞心の發展にどれだけ貢獻する所があるか分らぬ。

第三に必要なことは、關稅撤廢と同一の理由に基くもので、度量衡の均一、特に通貨の標準を均一にすることである。ロンドン或はニユウヨオクを中心として世界共和國の中央銀行を設立し、締盟各國をして其鑄權を世界共和國に渡し、此中央銀行に於てのみ造幣權を掌握し、各國は恰も現時の國立銀行の如く只保證金を提供して紙幣を發行し得ることにし、締盟各國、同じ通貨を使用することにせねばならぬ。又同時に度量衡を均一ならしめて、一定の標準に準據せしめねばならぬ。

斯くするは、畢竟吾等の民本主義に基き、各國民の生活程度を略ほ同等ならしめんとするものである。現今の樣に英國はパウンドを、米國はダラを、日本は圓をと上ふ風に別々な制を採つてゐると、米の一弗は日本の一圓と略ほ同一價値に見えて、心理的に通貨の價値の點を沒却して了ふ傾向がある。而して通貨の異價値を沒却するは聽がて物價の高低に影響するものであつて、英國や米國

れば、世界共和國に於ては、移民は絶對自由ではなく、或種の制限の下に自由ならしめねばならぬ

世界の土地は無限ではない。然るに無限に增殖の可能ある人口は人爲的に何れの時が制限させねばならぬ。之を數に於て制限し、質に於て增殖を計ることが肝要なるは文明國の正に自覺すべき處であつて、迂愚な虐弱な、乳兒の間に能く死亡して乳兒死亡率を高からしめてゐる多數を誇る國民は健康長生な敎育ある國民を少數持つことに心掛くべきは勿論であつて、其方が却て眞の民族的繁榮である、充實である。

されば、世界共和國は、此移民問題を加へて、先づ軍備全廢、關稅撤廢度量衡及通貨の均一を計らねばならぬ。是れ世界共和國成立の外的條件であつて、其內的條件に關しては、餘白なきが故に他日之を論ずるであらう。（完）

佛心鬼面

▲巴里は目下講和會議の眞最中である世界改造は巴里に於て成らんとしてゐる。ところが我等は聯合國委員の餘りに蟲のよさに驚かざるを得ない。濠洲が獨領太平洋の諸島を自國の手に入れんとしたり、膠州灣を無條件に還附せしめたり、米國のモンロー主義を認めるが、日本の東洋に於ける當然の權利を無視したり、國際聯盟を唱へ乍ら海洋の不自由を頑守したり、殖民地をして東洋人を排斥せしめたりいやはやトント御話にならぬ。

▲我等は今日旺んに唱へられる國際聯盟の精神其物には敢て異論はないが、たゞ英米資本制度本位の聯盟方法に多大の不滿を抱くものであります。ことに目下開催せられてゐる巴里會議に於ける聯合國の態度は甚だ感服せぬのであります。自家本位、利慾主義が聯合各國の心中に藏されてゐることは、講和會議の經過に徵しても明かであります。列强が國際聯盟の美名にかくれて各自その國家的利益を計らんとする現狀では果して國際聯盟が成立するであらうか。成立するとすれば、それは有名無實の骨抜き的聯盟であらう。單にウイルソンに義理を立てたお際會の國際聯盟であらう。

▲戰後の世界も依然として列强の武力競爭の修羅場なることは火を睹るよりも炳かである、ことに英國殖民地の傍若無人の態度は、國際聯盟の成立に對して寸毫の誠意をも認められない。英國海軍卿チヤーチルが海洋の自由を排斥して依然として海軍大擴張を唱へ、近頃地中海艦隊を復活せしめたるが如き、又米國海軍卿ダニエルスが太平洋防禦の急を說き、太平洋艦隊の擴張案を下院に提出したのは、國際聯盟の御本家である丈に卿か皮肉に思はるゝ。いつその事國際聯盟など云はずに我が帆足君の樣に世界共和國を天下に高唱したら面白からう。（德隣生）

ら、人口の自由移動を原理とはするが、其處に例外を設けねばならぬ理由があるのである。先づ吾等は其例外に說き及ぶ前、移民問題と貿易問題の異る所以を辨明せねばならぬ。自由貿易の場合には、自由に粗製濫造の品を他國が輸入して來ても吾が國民が喜んで夫を使用しなければ、經濟上の自然淘汰によつて、其商品は吾國の市場から驅逐される譯で、敢て其弊害を貼すと云ふ憂ひはないが、日本見た樣に國民を粗製濫造する國が、沿々と海外へ此濫造した國民を輸出された日に他國人の迷惑一方ならぬものがある。英米佛などでは既に自然に出產制限を實行して人口の增殖を防いでゐるのに、移民自由だと云つて、他國から粗製濫造した低級の移民をどし〳〵輸入された日には彼等が出產制限の理想は全く瀑瀾されて了ふ。而して移入されたものが劣等移民である場合、そが如何に粗製國造されたものであつても、是れは商品とは全く違ふから、勞働市場の如き經濟機關で自然淘汰は出來兼ぬるし、一旦入國した以上如何に劣惡な人間でもひねり殺す譯には往かず、彼等に生活費を分與せねばならぬ。而も是等劣惡の移民に限り非常な蕃殖力を持つてゐるからたまらない。高等文明の國民が出產制限を理想としても、左樣な理想を持たぬ外來の移民に壓倒されて了ふ。斯くては移民の自由によりて却て平等の生活權を侵害することゝなる。

されば、移民の自由には結局或る制限を加へねばならぬ。若し例へば日本人がフランス人やアメリカ人と同樣に、二人か三人の兒を持つことを以て理想とし、夫れ以上は出產を制限する樣に至れば、勿論、絕對自由貿易と同樣、絕對自由移民の主張を成立せしむることが出來る譯であるが、當今の如く、粗製濫造した無敎育、無訓練な國民を以て滿されてゐる樣では、是れも自業自得て、自由移民の權利を他國に對して主張することは出來ない。されば日本のやうな國では先づ出產制限を實行せしめよ。さすれば、夫れと同時に幾分づゝ移民の自由を獲得する譯で、他國に移民せんとせば、其國の平均出產率以上の出產率を持てる國民は夫れだけ制限を受くべきことは勿論である。さ

國の同情を失ふ事となつた。其の結果は米國の參戰に對して、「世界民主主義のため」と云ふ口實を與ふるに到り、時局は露國革命の影響を蒙りつゝ更に、再轉して、聯合諸國間に於ける戰爭目的の一致となり、戰爭は大體に於いて、民主自由主義對專制主義の戰ひと云ふ事に發展した。

戰爭は、獨逸內部の困難とホツシュ將軍の不屈不撓主義の戰略とに依りて、聯合側の勝利に歸した。而して獨逸は、軍財閥の瓦解を馴致して、今や、社會革命の最中にあるのであるが、今日迄「民衆は痴愚なり、賴らしむべし、知らしむべからず」と云ふ所謂善政主義の下に幾多の犧牲を拂はしめられたる彼等國民が、この慘憺たる敗亡の惱みより、新たなる光明を見出しつゝあるを思はば、天地創造力の精進は、終に、人道の勝利、人生の向上を意味するものであり、人間を通じて認識せらるゝ創造力なるものは、永久に亘りて、決して無爲に作用くものでない事が感ぜらるゝのである。

更に露國を觀るならば、ボルセビック主義其のものは極端の嫌ひなきにあらずであるが、永年、露國特權階級の專制治下に置かれたる民衆が、東部戰場に於ける大敗と國內に起れる經濟的困憊とに耐え兼ね「パンをパンを、平和を平和を、」と叫んで、この窮境より脫せんと苦悶し初め、徐ろに過激派的傾向を帶ぶるに到つたのに加ふるに、露國の精神的文明はプシキン、ゴゴール、トルストイ、ゴルキー、ドストイフスキー及び極端派等に依つて彩られて居るが故に、多數國民が、假し其の意識程度が薄くとも、人道平和の光りを望みつゝある事は、獨逸の其れと好一對であつて、かくして、從來、文明の大敵なる專制國民なりと見做されたる獨露兩國の民衆は、國民的文明の急轉を成就し、レニンの所謂「新文明の曙光は北歐より」なる揚言をして、一層切實ならしむる樣な狀勢を創造しつゝあるのである。

其れ故に、今日の世界は、聯合側の戰爭目的なる民主自由主義と獨露兩國民の死に物狂ひに求むる民族の獨立と平和との問題、卽ち兩者共通の問題に依つて滿たされて居るのであつて、世界組織改造の實際問題は、皆この點に其の歸一點を置か

國際聯盟に關する諸問題

高橋清吾

一　世界組織改造問題の歸一點

曾て獨逸のビスマルクは歐洲列強間の關係を譬へて、「彼等は恰かも、互ひに疑ひ疑はるゝ二人の旅人が淋しい森の中で出遭ふた樣なものである。若し、其の一人がポケットに手を入れると、他の一人は直ちに、ピストルを向けて用意する。而して前者の有する鷄頭の音を聞くや否や、後者は自己のピストルを發砲する」と謂ふて居る。

東西を通じて古代の文明は、人道正義の聲を擧げ、釋迦あり孔子あり、ソクラテス、プレートー、アリストートルあり、而して小弱國エルサレムには「噫、エルサレムよ、エルサレムよ、豫言者を殺し爾に遣はさるゝ者を石にて擊つものよ、母鷄の雛を翼の下に集る如く、我なんぢの赤子を集めんとせしこと幾次ぞや、然ど爾曹は好まざりき。視よ、爾曹の家は荒地となりて遺されん。われ爾曹に告ん、主の名に託りて來る者は福なりと爾曹の云んとき至るまでは、今より我を見ざるべし」と叫べる基督ありて、人生の行路に光明を與へたのであるが、人類進化の速度遲く、時は、既に、第二十世紀の鐘を打てども、政治社會は、今猶ほ內にありては財閥と軍閥との專制、また、外にありては、ビスマルクの所謂「互ひに疑ふ二人の旅人」の如き觀がある。少くとも、歐洲大戰前までは、かゝる形勢であつて、今次の大戰の如きは、實に、こゝに其の重大原因の存するは、前號に述べた通りである。

開戰當初に於ける兩交戰側は、互ひに五分五分の理由を有したけれども、戰局の發展につれて、獨逸當局は餘りに、武力を頼んで、世界の公論を無視する擧に出でたので、漸次に、敵國側の反抗力を增さしめ、之に加ふに、米國を初め、中立諸

の他、數へ來たらば、各國に其の代表者を見出す事が出來よう。ノーベル賞金、カーネギーの財團及び其の他の平和團體が各國に存在して居る事は普く知らるゝ處であるが、此頃では英國に、かのゼームス●ブライス氏等を中心とする國際聯盟實行會が成立し、米國にも學者達の提唱にかゝる聯盟期成會が出來た。米國には更に、タフト氏等の平和强制會がある。これは紛爭を仲裁すると云ふのが目的であつて、今回の聯盟期成會とは其の形式を異にするのである。

國際聯盟の目的及び歷史は大要右の如くであるが、然らば聯盟の原則となるべきものは如何と謂ふに、戰爭の原因並びに聯盟の目的に照らして、次の三つに歸すると私は考へる。

(一) 民族獨立の保障
(二) 大小國に對する機會均等
(三) 海上の自由

民族獨立の保障は直接的には、各民族を獨立せしめ之を國際聯盟の單位として、各自に平等の權利を附與するを意味する。間接には、從來の如き列强權力平衡主義に依りて小弱國を犧牲とせる爭奪的關係を除去し、小弱國が今日迄、正義人道の聲を擧げて、世の同情を求めたるに拘はらず、大國等は、之を、弱者の泣き聲をして笑へる心理狀態を矯正せんとするにある。卽ち、小弱國の訴へを正當なるものとして認めると云ふ事である。

先般英國のロイド●ジョーヂ氏は「愛蘭問題の殘る內は英國に平和なし」と謂ふたが、これは單に、彼れの總選擧に對する政策より出でたるものと觀るべきではない。愛蘭の民衆が英國のために犧牲になつて居る、愛蘭は愛蘭人の愛蘭であると云ふ意識を旺んに有する以上、彼等の要求を大體に於いて認むるが、平和の上より觀て當然であると考へる。

何等獨立の自覺を有せぬ民族ならば、止むを得ぬが、然らざる限りは、民族の獨立を認めて、民族特有の文明を全世界の文運に功獻せしむると云ふのが、人道の聲である。

バレスタインに猶太人の一國を建てんと努むるのも、マザリック博士等のチエック族がボヘミヤ

ねばならぬと思はれる。卽ち、民主自由の理想でも、民族の獨立と平和に對する願望でも、皆、道德的理想なるを以て、世界平和の問題は、この道德的根礎の上に立てらるゝが自然の順序であつて、今日、國際聯盟案の實際問題化されつゝあるは、世界の人心に、この道德的理想を實現せねばならぬと云ふ確心が出來て、其の實行方法の手段として、聯盟問題が喧ましくなつたのである。

されば聯盟の目的は、人類の共同幸福を增進せんとする道德的目的であつて、これを達するためには道德的目的を法律に依つて保證する、卽ち、世界進步の保證を法の目的とする、其れには、世界にある力を組織せねばならぬ。もー少しく根本的に謂へば、戰爭の慘苦に依りて一層濃厚となれる世界人道の國際心理を具體化して、之れを有效に組織する。これが國際聯盟の目的であると考へる。

予は前號に於いて世界民主主義の問題は、これを國內と國際との兩方面より觀て行かねばならぬ。隨て、國際方面の問題なる國際聯盟は國內の改造がなければ、實行不可能なりと云ふたが、國內の問題は政治、經濟、軍事等の民主化に依りて解かるゝと云ふ事は前述したのであるから、茲には國際聯盟のみを述べるに止める。

二　國際聯盟の思想の發達とその原則

抑も、國際聯盟の思想及び其の實現に就いては古來より歷史があるのであつて、例へば古代希臘諸國に行はれたる各種の同盟(部局的ではあるが)を初め、神聖羅馬帝國の實狀及び平牙の平和會議等が、大體に於いて其れに近かく、また、我國戰國時代の後を承けたる豐臣德川時代に於ける、封建制度や、今日の米國合衆國等に、場合は違ふが矢張り、聯盟の形式丈けは存すると觀られ樣と思ふ。

更に思想方面では、古代のストア學派に其の面影の一端を見出す事が出來る。近世ではグロチユース等の國際法は茲に論じないとしても、佛國にサン・ピエール、ルハー等あり、露國にトルストイ、ブロツホあり、獨逸にカントあり、英國にノルマンエンゼルあり、米國にジヨルダンあり、其

るゝのであつて、從前の如く或る國々のみが、切言すれば或る國々の財閥特權閥のみが、世界の寶庫を所有して、この繩張り内には何人と雖、彼等の許しなしには入れぬと云ふ事では、經濟的弱國、は、聯盟の第一原則で權利の平等を保障されても經濟的の保證がないので、權利は空虛となり終る事となる。其の結果は、絶えざる暗鬪であり、國際聯盟其のものの目的が達せられなくなるのである。

この第二の原則は、更に、國際的の行動は凡べて公明正大で、何國に對しても公平なる取扱をせねばならぬと云ふ精神を含む。卽ち或る國々のみが秘密條約を結んだり、又は關稅條約を締結して他國を不公平に取扱ふと云ふが如き事は、絶對に認めぬのであつて、かの千九百十六年六月に協定された巴里經濟會議決議の如きは、この原則に反するものとなるのである。米國の稱へた滿洲の門戶解放機會均等の精神は、假し當時の事情は何んであつたにせよ、原則としては、聯盟の第二原則と同一なりと私は考へる。

卽ち第二の原則の內容は主として經濟的であつて、國民的經濟生活の自由發展を保障するものと觀て差支ひないのである。

第三の原則は海上の自由である。

今日の如く英國が海上權を握つて、世界の要所要所に海軍の根據地や、要塞を置き、一朝戰爭の場合に、海上を封鎖すると云ふ事は、獨逸の陸軍と均しく平和の攪亂者である。ウイルソン大統領が聯盟の主唱者なるに拘はらず、海軍擴張を議會に推擧せるは、海の問題が今後如何に發展するか、未定なるが故である。

海の問題は畢竟英國海軍力の制限を意味する。卽ち、各國の自由發展を保證するために聯盟の原則は海上の自由を含み、而して海の問題は、根本に於いて英國海軍處分の問題でとなるのである。小さい問題としては米國のパナマ運河が自由運河となるや否やである。

或る國が海軍力を有して戰時に海上を封鎖すると云ふ事は、平時に於いても、他の諸國に制限を置く事となる。何故ならば、或る海軍國が海の大

の故郷に新天地を造らんとするのも、蓋し自己を意識する民族の必然の顯現であり、自意識の民族は其の意識の程度高きにつれて、其の民族的特性を發揮するに到り、以て、全文明に錦の一筋を增す事となるのである。

世界は要するに、民族の集團であり、世界の進歩は、其れ故に、徹底せる民族化即ち、民族の自由發展を意味するのであつて、新國際心理を組織せんとする國際聯盟が、其の原則の一に民族獨立の保障を含み、强制力を行使しても、其の獨立を保護せんとするは自然の數である。

民族の獨立は、更に、軍閥財閥の跋扈を防ぐ事となる。何故ならば、或る國の財閥や、軍閥が、如何に、他の小弱國を策しても、小弱國は國際聯盟の一原則、卽ち、民族獨立の保障に依りて、自決權と平等權とを附與さるゝを以て、聯盟諸國の輿論に反する事は、一國、財軍閥の善く爲し得ない事となるが故である。其の結果として、其の國の內部に於ける、民主化も徹底的に行はるゝ順序となる。

聯盟第二の原則である國の大小を問はず機會の均等を與ふると云ふ事は、各國の生活を保障すると云ふ意味である。

米國の如く天然の恩惠に富む國ならば兎も角、我國の如き生活狀態にありては、人口過剩と食糧品不足とに始終苦めらるゝのである。其の結果は海外發展となるを以て、諸外國よりは第二の獨逸として痛くもない腹を探らるゝ事ともなる。

或る人々は、「日本は出生兒の制限（バース・コントロール）をしたならば如何」と謂はるゝが、生活程度の低い國には迚も望めない註文であるのみならず、世界到る處ろに青山あるのに、日本人のみが出生兒の制限をしろと云ふ事は、許し難い利己主義であると考へる。

其れ故に、第二の原則に依つて國民生活の保障をするために世界に於ける均等的の機會を附與して以て、一國の人口過剩並びに經濟的發達の自然的出口を解放して置く必要がある。

また、セルビアの如く海に遠ざかる國には其の出口を設けてセルビアの經濟的發達に平等の機會を與へてやると云ふ事も、この第二の原則に含ま

居る傾向なきにあらざるが故に、聯盟の原則、殊に海上の自由に就いては、如上の原則を取り上げぬかも知れぬ。

更に米國は如何と云ふに、大統領ウィルソン氏が熱心なる聯盟主唱者であり、予の掲げたる三原則の實際的提唱者たる事は衆知の事實である。卽ち千九百十七年一月二十二日、ウィルソン大統領は上院に演説して「政府が其の政權を有するは民衆の承諾に基づくと認めざる以上は平和來らず、各國は相互に、モンロー主義を世界の主義として認め、如何なる國も他に干渉する事なく、各國は皆、自己決定權を以て自己の運命を開拓し小國なりと雖、決して大國に強迫さるゝ事なく、また、大國を猥りに恐れざる樣期せざるべからず、利己的陰謀競爭等を刺激する葛藤的同盟を結ぶべからず、各國は均しく、共通の心理共通の目的共通の利害の下に行動し、共同保護を以て自由並びに警察力程度までに軍備を縮少する事は平和保障のために必要なるは勿論にして、更に、國際的に組織せられたる力を以て平和の保障者とする事絶對に必要なり。卽ち永久の平和は人類の主力を組織する事に於いてのみ來る」と宣言したのであつて、昨年一月八日の十四ヶ條の平和條件及び九月廿七日の演説等は、倶に、この演説を再述せるに過ぎなかつたのである。

米國では、故ルーズヴエルト氏を初めロッヂ、ホインデッキスター、リード氏等の上院議員が聯盟を目して「有妻者が他の婦人にも愛を分つ不倫行爲」となし、又は、聯盟は米國建國の本旨及びモンロー主義に反すと稱するのであつて、大分、國民間に勢力を有して居る。この種の人々は、頑固の保守派か然らざれば、何か爲めにする所ありと觀らるゝのである。

斯樣な譯で、聯盟問題は世界の空氣に生れたのであつて、恰かも、我國に問題になつて居る選擧權擴張の如く、一度は空想と目されたものが、今や、事實の問題となり、只、何の點まで選擧權を擴張するかに、異同存するのみと同樣である。

四　國際聯盟の機關

然らば國際聯盟の機關を如何にすべきか、こゝ

權力を有する結果、自國の利益明確に言へば、財閥の利益に反する競爭者が現はるゝ時は直ちに抗議を申込み得る地位にあるので、競爭國の經濟的發展は、假し、自然的、民主的なる發達にせよ、沮止さるゝ事となる。かるが故に、海上の自由は國際聯盟の原則の一つとなるのである。

以上の三原則を含む聯盟にして、初めて、世界平和の基礎定まるのであるが、世界平和と稱するも、予は決して靜的平和を指すにあらず、かのジエー、エーチ、ウエルス氏の所謂「動的平和」であつて、人類が平和の保障の中に、不斷の奮鬪を續くる意味のものを云ふのである。

三　國際聯盟に對する歐米國民の態度

歐洲各國の社會黨や勞働團體等は概して聯盟の成立を希望して、これら三原則を認むるのであるが、只露國の過激政府は、聯合國政府者を以て、ブルヂヤー階級の代表者と見做して居る樣であるから、聯盟には徹頭徹尾賛成でも對手其のものが信用ならないと謂ふかも知れぬ。

獨逸にありてはシャイデマン、エベルトの一派でもリーブクネヒト派でも、固より聯盟には賛成なのであるから、特殊の事情が起らぬ以上、別に反對がないと思はれる。

佛蘭西に於いては、内閣議長のクレマンソー氏が何處まで聯盟に同情を有するや疑問であるが、ブルジョア氏及び社會黨のトーマ氏等は熱心なる聯盟論者である。

伊太利にありては別に反對が旺んでない、また我が日本に於いても、加藤子爵等は英米兩國政治家等の誠意を認めて居るが故に、聯盟にも賛成であると云ふて居る。

英國に於いてはアスキス、グレー、ブライス、セシル、ヘンダーソン、ウエツブ、ウエルス、ロー、及び首相のロイド・ジョーヂ氏等諸名士が、熱心なる聯盟論者であり、ロイド・ジョールヂの如きは、去る十一月十一日英國自由黨員に演說して聯盟の根本的必要を說き、また同樣なる演說を勞働團體の前にも爲したのである。

只、去る十二月の總選擧は統一黨の勝利であり首相は英國保守派及び財閥、軍閥等に利用されて

て國際の軍備は共同保護の目的を有するのであるから、幾ら大きくも可なりであつて、現在各國が有する軍備を聯盟に移轉すれば容易に出來るのである。

五　國際聯盟と各國主權との關係

國際聯盟の機關に續いて起る問題は國際聯盟と各國の主權とが衝突すると云ふ事である。

人類社會の進歩は未だ一國内に於ける民主化と國際社會に於ける人道とを成就するに足らる現狀にあるを以て、人間性質の一方面なる權勢慾性（Will to Power）が各國内外に發揮されて居る。卽ち弱肉强食、權謀術數と云ふものが、國の内外に行はるゝので、國内にありては或る特權閥が權力を握り、外に向つては、絶對主權の福音を鼓吹して帝國主義をかざし、内に對しては國家萬能の聲を大にして、民衆の心理に偏狹なる愛國心を確立せしめんと努むるのである。其れ故に、各國の特權閥、財軍閥なるものが、自己等の利害問題である國際聯盟を以て、一國主權と相矛盾するものなりと主張するは、敢て怪しむに足らぬ所である加之、法學者のある人々は、時勢に遠ざかるためにや、役に立たなくなつた主權絶對の法理論を固執して、眞理は我家にありと自惚るゝ結果は、閥族に乘ぜられて、折角の法理的研究が、彼等の利益を擁護する御用說となり終るのである。獨逸法學界の大勢は、かくの如きものであつたので、かのハイテルブルグのイリネック教授すらも、この批難より免れ難いと私は思ふのである。

抑も、主權と稱するものが、事實上絶對にあらざる事は、イリネック教授や、我が美濃部博士等も認められるゝ所であるが、この人々は主權の絶對性卽ち法理的の性質を何處迄も保存せんがために、主權の自制限說さへも主張するのである。問題は事實問題でなしに、法理論なるが故に、改めて論爭するを要せぬが、只、玆に問題起るのは世界一般の人々が、どれ丈け主權の絶對性を信じて居るかと云ふ事である。近年佛蘭西のドユギュー教授や米國のヒル氏等は、これも矢張り法理論であるが、主權は法理的にも絶對に非ずと主張して居る。ドユギュー氏は國家（政權團體）は社會連帶

が實際問題なのである。

國際憲法とも稱すべき規約を出來得る限り民主的性質のものたらしむる事は、聯盟の原則より推して明かな事であるが、先づ第一に起る問題は、各締盟國は、如何なる事に就いても絕對的平等に取扱はるゝや否やである。原則としては權利の平等、機會均等であるが故に、米國とセルビア乃至は新興國たるべきボヘミヤのチエック國との間に、如何に實力の相違あるとも、又は、我國と支那との間に如何なる差異があらうとも、各國は、凡べて聯盟機關に平等に參與するのは自然の結論である。豫めお斷はりをするが、予は、玆に、實際問題としての聯盟機關が如何なる妥協案の下に成立するやを述べんとするのではない。寧ろ、聯盟の原則より生ずる國際機關が、如何なるものでなくてならぬか、卽ち、道德的に、合理的に、如何なるものであつて欲しいと云ふ事を述べんと欲するのである。

各締盟國が機關に平等に參與する事が極まれば、次いで起るは機關其のものの問題である。

國際機關は立法議會と行政司法の三機關必要であつて、立法部には各國內に於ける少數黨をも代表する國際議員を含まなければならぬ。また、議事は委員會のものに到るまで公表するを要する。この議事の公表と云ふ事は言論の自由と相俟つて、人類自由發達の要件となり、更にこれらは少數代表の制と俱に、眞民主主義の世界を成就する事になるのである、

それから國際裁判所の判決は絕對に各國の守る所とならねばならぬ。而して立法司法の兩權を完全に行使せしむるためには、行政部に、軍事、經濟の器を兩武附與して、違反者を武力並びに經濟力を以て懲戒する事が必要となる。其の結果として、國際陸海軍及びボイコット等が、聯盟行政部の主たる權限となるのであつて、これを實現するには、各國の軍備を制限すると俱に、新たに、國際の軍備を設ける必要がある。ウイルソン氏は各國の軍備は警察力たる程度までに制限すべしと云はるゝが、國情に差があつても、警察力主義が、軍備制限の原則なりと私も考へるのである。而し

大戰爭の報償として、須らく、世界の識者の喧傳を要すると俱に、戰爭のために寂しくなつた人々は、こゝに、文明的なる慰安を求むるが良いのである。

かく歡じ來れば、國際聯盟は人間性質改造の問題を兼ぬる世界改造根本問題である。聯盟は、卽ち、民族の獨立と其の機會均等とを保障す組織であつて、之に依つて世界の人道平和を維持せんとするのである。これ世界奉仕の聯盟である。而して、これが根底となるものは世界民衆の自覺である。己れを知ると云ふ事は個人主義と民族主義と世界主義とを矛盾せしめざる唯一の鍵である。國際聯盟の永久的基礎も、結局はこゝに存するのである。（完）

ラスキンの思想の半面

吉田紘二郎

一　勞働問題の提唱者

十九世紀に於ける英文學で特に自然界の大きな理解者であり、歎美者であつたジョン・ラスキンは、他の一面に於いては人間社會の眞面目な研究者であつた。Modern Painters の著者ラスキンが他の一面に於いて熱心な社會問題、勞働問題の提唱者であつたといふことは面白い現象である。アメリカに於けるホヰツトマン、またはロシヤに於けるトルストイ等が民衆詩人であり、民衆藝術家として貧民、農民の伴侶となり、また民衆のために考へたといふことよりも、雲や、山や、河の詩人であつたラスキンが、民衆のために色々な問題を提示したといふことは私たちに一層の興味を抱かしめる。

こゝでは私は、極大體にわたつてラスキンが勞働について、何のやうな考方をしてゐたかを述べ

の事實より起る行爲の準則にして法規たるものに依つて制限せらると謂ふて居る。また、ヒル氏は國家(人間の集團)は各人に内在する法的意識より生ずる人間社會の法序に依りて制限せらると主張するのであつて、兩者とも多少、抽象的ではあるが、現在社會的事實の學說としては、絕對主權論に優る數等にして、且つ、より一層科學的なりと謂はざるを得ない。

この種の學說が近來、歐米に大いなる勢力を振ふに到り、我國に於いても、帝國大學の穗積重遠氏までが、影響を受けて居る樣に見受けるのである。されば主權の絕對論は單に事實問題として否定すべきものなるのみならず、法理論としても、之に對する反對說が勢力を得つゝある現狀なるが故に、主權の主格として國家萬能論は、漸やく、世界一般の人心より、其の光りを失へつゝあるものと觀ざるを得ないのである。

卽ち絕對主權論は大體に於いて、現狀維持者若くは閥族等の主張に過ぎぬのであつて、政治問題としても、また、法理論としても、人生の進步と云ふ點より歡るならば、文明の進行を沮む主張と私は考へる。

果して然らば、國際聯盟が國家主權と衝突すると云ふが如き困難は、元來、問題にならぬ困難であつて、自覺せる民衆の勢力が自己を主張するに到れば、反つて、眞の國際化が眞の民族化であり眞の民族化は眞の個人化であると云ふ合理的理想を實現するに到る事となるのである。

今度の戰爭は軍閥と財閥とが自己を主張して一國内に軍國主義なる心理を一般民に持たしめた所に其の重大原因を有する事は前號に述べた所であるが、國際的に謂へば、各國相互!!!! 切言すれば權力階級相互の間に嫉視猜疑の念が深く、彼等の間は固より、一般民衆の間に、協同一致を本とする國際心理が確信となつて勢力を持つに到らなかつたためである。

されば戰爭の慘禍より出てたる人道主義の國際的確信、卽ち、相互の信任を高調する新國際心理を以て、舊軍國主義の心理に代ふるは、今回の戰爭!!!! 悲しき犧牲を拂つて兎も角も終局を告げたるこの

の如きものがある。彼等の救世主は『されど人の子には枕するところなし』と言つたくらゐ貧しい生活を送つたのであつたが、近代の英國の富豪たちの建築の壯大であり、華美であることは驚くべきほどである。更に貴婦人の衣裝道樂の如きに至りては、良く一個の寶石に三千パウンドの黃金を投げ出して惜しまないやうな狀態である。このやうな遊戲的生活は美術に於いても、文學に於いても到處に見出すことができる。

そしてこのやうな遊戲は、その半面に於いては幾多の悲しむべき犧牲者を出してゐることを忘れてはならない。富める人々の遊戲心を滿足せしむるために、寶石細工人、織物師、不幸なる勞働者の幾多の生命が、年々短かめられてゐる。しかも贅澤なる遊戲者たちは、貧しき犧牲者の悲しみを顧ることをしない。曾て人類は『我等笛吹けど、汝踊らざりき』と言つたが、今日ロンドンの市場に坐れる悲しき少年たちは『我等悲しめど、汝悲しまざりき』と叫んでゐる。

この富者の貧者に對する冷淡な無關心がやがて上下階級の間に溝を横たへたのであつた。私たちが考へなければならぬことは、この二階級の間に横たへられたる溝を埋めてしまふ事業に就いてゞある。

二 『我果して正當に食物を得たりや』

人間は先づ第一に、他人の血液を吸ふことによりて自己の遊戲心を滿足せしむることの極めて卑しむべきことを知らなければならない。斯の如き生活法は蚊や寄生蟲にふさはしき生活法であつて、決して人間の生活法ではない。私たちは毎日食前の祈禱に際しては『我れ果して正當に食物を得たりや』といふことを顧みなければならぬ。凡べて人間は正しく得たる食物の他は食つてはならぬ。これが最も明かな基督教主義である。このやうな思想を以て生活することになれば、地主は決してその小作人に對して『馬鹿野郎、俺の葡萄畑に出かけろ』などゝいふ言葉を使ふことはない筈である。彼等は『子供たち、葡萄畑に行つて働いてくれ』と言ふやうになる。同時に彼等自身も何等かの勞働をしないではゐない。人間はみな勞働

て見るつもりである。

勞働といへば大抵は硬勞働を意味するやうに考へ易い。野を耕すこと、山を切り拓くこと、船を操つること、機械を運轉させること……このやうな肉體的な努力を勞働と考へる人が多い。

しかしラスキンは私たちの軟勞働（ソフト・ワオーク）、即ち藝術家思想家等の頭腦（ブレーン）の努力をも立派な勞働として認めて、この硬軟二つの種類の勞働者は互に理解し合ひ、提携し合つて新世界の感設に從事しなければならないとするのである。

硬軟何れの種類の勞働であれ。それが明かな人生本位の目的を持てる間は、決して甲乙はない筈である。農夫が野に種子を播く仕事が尊い間は、思想家が書齋のなかに思索することも尊い生活の表現である。

但し、農夫の勞働も、勞働の第一義的目的を忘れてゐる時は決して、それは尊い生活表現ではなく、それは遊戲であるに過ぎない。このことは頭腦の勞働たとへば藝術や、思想生活の場合に於いても同樣である。

さて、勞働の第一義的目的とは何であるか。今日の新しい言葉を藉りて言へば全的な自己表現である。勞銀、富、幸福、愉悅といふやうなものは第二義的なものである。ラスキイは勞働を定義して『勞働とは、爲なければならないから爲るものであり、明かな目的を持つたものである』と言つてゐる。彼のいふ明かな目的とは卽ち自己表現であり、自己表現の必然性そのものに他ならぬ。

この第一義的な目的を缺ける時、凡べての人生の努力、煩瑣、熱中は遊戲に墮してしまふ。

勞働と遊戲はしばゝ無差別に取り扱はれ易い。たとへばロンドン市に於ける多くの金錢取引は一種の遊戲である。何故なれば、彼等の第一目的は金錢であつて、決して勞働の第一義的なものを持つてゐないからである。ロンドン市そのものが一種の撞球臺（ビリヤード・テーブル）となつてゐる。

ロンドン市に於ける遊戲は銀行業を始め幾等の商業取引であるが、一歩ロンドン市を出づれば、またそこに多くの遊戲を見出すことができる。たとへば競馬、狩獵の如き、または美しい庭園道樂

無智から生れて來る。卽ちイスカリオテのユダの取引（バーゲン）は無智から生れて來たのであつた。多くの人々はイスカリオテのユダをこの上もない惡人であるかのやうに考へてゐる。けれども彼はキリストが殺されなければならぬことを知つた時に、驚き悲しみし彼の銀を投げ捨てゝ死んだではないか。彼は心の弱い善人であつた。彼は初めからキリストを殺さうとは少しも思つてゐなかつたのであつた。しかも彼は金錢を第一としてゐたがためにキリストの眞の姿を見ることができなかつたのであつた。その彼の無智からしてキリストを殺すことになつたのであつた。彼は不幸な無智な男であつた。彼が尙少し賢い人間であつたならば、彼はキリストを知り、キリストを愛したにちがひない。

しかし金錢第一の思想を抱いてゐる人々は今日の世界にも多過ぎるほど多い。この誤れる貨銀第一の思想が現代の幾多の誤れる資本制度を生んでゐる。この點に就いてもラスキンは可なり細かに資本と勞働者との關係について論じてゐるが、それはこゝでは略く。

四　頭腦の働勞者

ラスキンの考では明かに頭腦の勞働と肉體の勞働とを共に尊い生活の必然的表現を見てゐるのであるからして、彼は學者であれ、宗教家であれ、農夫であれ、自分の天分に從つて、それ〳〵の勞働に從事することが生活の第一義であつて、決して農夫が學者の生活法を呪ひ、巷の勞働者が、書齋のなかの勞働者を敵とするやうなことがあつてはならぬとするのである。彼等は勞働するものなるが故に、齊しく尊い生活者であると考へるのである。

彼はまた多くの肉體の勞働者たちが、頭腦の勞働者は一層多くの報酬を得つゝあるといふ批難の聲を擧げるのに對して次のやうなことを話してゐる。

卽ち、今日英國に於いては隨分怠惰者に數千ポウンドの年金を與へながら、勤勉な掃除人や思想家に一日一シルリングだけを與へてゐるやうな不合理なこともある。しかしこの勞働に對する貨銀の不公平なことは、昔から頭腦の勞働者ほど多く

者である。何等かの意味に於いて……かうなつて來ると上下二階級の差別は失はれて來る。兩者の溝は取り除かれる。

三　勞働と賃銀

更に自己及び社會の平和や幸福のために考へなければならぬことは、金錢と勞働との觀念をば明かにすることである。ラスキンの考に依れば、前にも述べたやうに金錢は決して勞働の目的物ではないのであつて、勞働そのものが目的となるのである。彼は勞働は祈禱なりと言ふのである。子供は何物かを欲するが故に、母に訴へる。人間は生きんがために何物かを要求する。卽ち生くるための必然的要求が勞働である。『神の國を來らせ給へ』と言つて祈るが、神の國を求むる心はやがて勞働となつて表に現はれて來る。神の國は私たちが探して歩いて見出すべきものでなくして、私たちの眞劍な要求に應じて神の國自身が私たちの方へ近寄つて來なければならぬ。卽ち神の國は勞働する人々の自身のうちに生れ出づるのである。

人間は何等かの形式に於いて祈らないでは居れないと同樣に、何等かの形に於ける勞働をしないでは居れない。勞働は生きるための必然的生活表現であるからである。

勇敢な軍人は如何に豐かな報酬のみを與へられても、戰爭や、演習なしには生きて居れない。立派な醫師は如何に多くの年俸を與へられたとしても、一人の患者をも與へられないでは眞實の生活の幸福を見出すことはできない。牧師に一つの敎會も、一人の敎會員も與へられなかつたとしたら決して牧師の生活は幸福ではない。人間は働くことによりて生活の意義をも、光明をも見出すことができる。卽ち人間生活にとりては勞働が第一で賃銀は第二である。

勞働を第一とする時、彼の心に天國が生れ、賃銀を第一とする時彼の心に地獄が生れて來る。『人は二人の主に仕へることはできぬ。』

私たちが勞働を第一とする時、私たちは神の僕となるのであつて、賃銀を第一とする時、私たちは惡魔の僕となるのである。

しかして、賃銀を第一とするやうな誤つた考は

らぬが、世間一般の理解の確實であることを證明することも又基礎づけることも出來なく、却つてその反對に彼等の理解のいかにも幼稚で虛妄でそして非哲學的であることを曝露した。言ひ換へれば、彼等の宗教に對する理解が全く根本からまちがつてゐるといふことを確めた。卽ち吾々の信仰や生活を支配して來た宗教、そは儒教にしても耶蘇教にしても、又は佛教にしても、決して自我を否定したり或はその根本要求を滅却したりするものでなく、却つて世間の虛妄なる執着に反對して眞の自我を赤裸々に熱烈に主張するものであること、隨つて所謂愛とか慈悲とかいふものは自我否定の幻影ではなく、却つて自我の熱烈な根本要求であること、否それ自身の如實の發露でなければならぬ、こゝに愛や慈悲の無我性ではなくて、むしろ極端な主我性の存することを認めずにゐられないといふのが、讀者の既に充分認容されたことゝ思ふ余の理解の結論である。

尤も余の理解に對して、或は反駁する人も或は辨護する人もあるだらう。しかし余は是等の人々の心術をよく知つてゐる。卽ちいかなる根據によつて或る人は反駁し、いかなる根據によつて或る人は辨護するかを知つてゐる。余は兩者の孰れをも享受しようと思はない、何故なれば、兩者とも未だ余の理解を充分に理解してゐないから。詳しく云へば、兩者とも余の理解がいかに深いものであるか、卽ち體驗的にも哲學的にもいかに徹底的なものであるかといふことを、全く意識してゐないからである。たゞ漫然と常識的な理解や自然科學的な表面的知識を楯にして、或は反駁したり或は辯護したりするに過ぎない。丁度太陽の光線に對して、或る人は硝子板をもつて或る人は金屬製の板をもつて遮蔽しようとするが如きものである。讀者は後者の人がよくその光線を遮蔽し得たと信ずるであらう。しかし太陽の光線には金屬製の板をも貫徹する光線、卽ち化學線の存することを知らぬものである。之れと同じく余の理解を辯護するにしても、又反駁するにしても、未だ全く徹底的に理解してゐないからである。是等の人は余の理解を理解してゐないのみでなく、又ワイル

輕驗したものはない。

かのホーマーはその著『イリアッド』に對して幾何の報酬を與へられたか？　ダンテは彼の『天國』に對して何を與へられたか？　彼はたゞ苦きパンと鹽のみを與へられたではないか。或る聖徒は生涯の傳道の報酬として石を與へられたではないか。

要するに古來勞働と賃銀とが必ずしも一致してゐないことは事實である。しかしそのために決して勞働の尊いことが些かも傷けられたことはない。

更に彼は勞働の究竟目的が平和と愛と謙虚な心に充てる嬰兒の世界を生み出すことであると說くのであるが、この事に就いては、他日トルストイの勞働觀などゝ比べて研究して見たいと考へてゐるので、こゝではこれで筆を擱く。

自我の內面的發展

野村隈畔

一　世界人類の問題

余は前號において、基督や孔子や釋迦等の自我觀を極めて簡單に覗いて見た。これは何も彼等の自我觀を讀者の前に祖述しようとしたのではなく、唯吾々の間に比較的によく理解されてゐる宗教、卽ち基督教とか儒教とか佛教とかいふ大なる宗教が、果して世間一般が否恐らく知識階級の大部分が理解してゐるやうに、自我を沒却したゞ献身犧牲のみを說くものであるか、謂ふところの愛とか慈悲とかいふものは積極的には何者でもなく、たゞ自我を根本的に否定し一切を拋擲した瞬間に、吾々の無氣力な眼にボンヤリと映じた蜃氣樓の如きものであるか、否やといふことを確めた丈けであつた。而かも吾々の研究は幸か不幸か知

によつて、眞の個人主義者であると同時に民本主義者であるといひ得るならば、四海兄弟、一視同仁の理想によつて筏に乘つて東夷に至らむ（論語公治長第五、子罕第九）と憤慨した孔子、或は「一切衆生悉有佛性」の哲理を說きながら、而かも「是の衆生は皆これ我が子なり、今等しく大乘を與へむ」（法華經譬諭品）と熱叫獅子吼した釋尊は、同じく眞實なる民本主義者であると言はねばならぬ。

諸君！　吾々の尊敬して措かざる夫の偉大なる宗教家、卽ち基督や孔子や釋尊は眞に個人主義者であると同時に、又眞の民本主義者であつたといふ徹底的觀察に驚くであらう。しかし余は前にも言つた通り、好んで奇論や囈語を吐くものではない、たゞ余の理解や信仰を赤裸々に告白したまでゞある。余は思ふ、彼等はたゞ宗教家として或は熱烈な信仰家として偉大なのではない、又單に彼等の人格が非凡であつたから世界人類の崇敬の目標となつたのではない、たゞ彼等は偉大なる個人主義者であると同時に眞の民本主義者であつたから、彼等の人格が永遠に偉大なのであり、そしてそれが爲めに世界人類の熱烈な精神的憧憬を熾烈ならしめたのである。若し彼等の思想乃至生活のうちから、個人主義及び民本主義の內的生命を去勢したならば、殘るものは果して何であるか。そこに果して彼等の人格に永遠の光明を點じ、世界人類の讃嘆に値ひする永遠の價値があるであらうか。

諸君！　吾々の尊敬する基督や孔子や釋尊は、既に二千年乃至二千五百年のむかしにおいて、偉大なる個人主義者であると同時に偉大なる民本主義者であつたのである。人類發達の歷史には隨分恐ろしい皮肉も存することであるが、現代人たる吾々が吾々の生活乃至文化を改善するにあたつて、個人主義や民本主義の前に逡巡したり、躊躇したり、或は疑惑を懷いたりして居るとは何事であらうか。而かも個人主義及び民本主義の眞理を自覺し、その實現を切に翹望してゐるに拘らず、從來の習慣や傳說の前を憚つて遷延日を空しふするとは、實に淺間しいことではないか。吾々が彼

ドやローエルの批難者であるといふことも、解かり切つてゐる。ワイルドは基督をもつて眞の個人主義者であると觀破した一人である。しかし豈基督のみならんやである、「忠恕」を說いた孔子も、「佛性」を力說した釋迦も、亦同じく偉大なる個人主義者である。彼等を外にして人類歷史上、いづこに眞の個人主義者があるか、いづこに自我の徹底的理解者があるか。基督が「自己」をもつて當爲と價値との生きた具體的融合と見た如く、孔子も「忠恕」のうちに當爲と價値との眞の融合があると見た。卽ち「己れが心を盡くす」ところの「忠」はこれ當爲の生ずるところで、「己れを推して人に及ぼす恕」はこれ價値の生ずる所である。これを根本的に云へば、釋迦の解したやうに自我は卽ち「如來藏」、言ひ換へれば、無限の創造力そのものである。人類の歷史は畢竟じて自我の歷史である、言ひ換へれば、個人主義の具體的實現である。

しかし吾々は今や、彼等を眞の個人主義者であると言つた丈けでは、滿足ができなくなつた。現代における吾々の生活乃至文化は、もつと具體的な生活に接觸した表現を要求してゐる。卽ち吾々の生活は世の識者や敎育家達が何と言つたところで、個人主義をいかに處分するかといふことではなく、むしろいかに個人主義を吾々の生活の上に立派に實現すべきかといふことが、唯一の問題になつてゐる。これを言ひ換へれば、自我はいかなる生活において完全な自己實現を爲し得るかといふことである。この問題に對して具體的な光明を齎らしたものは、卽ち民本主義である。然らば民本主義に對して、眞の個人主義者たる偉大なる宗敎家は、いかなる態度をとつたであらうか。米國の詩人ローエルは今から約三十年前卽ち一八八四年の講演において、「基督は第一の眞實なる民本主義者であると呼んで居る。これは誠に穿つた觀察であると思ふ。しかし眞の民本主義者は豈獨り基督のみならむやである。孔子も釋迦も亦同じく眞の民本主義者でなければならぬ。眞の個人主義者にして初めて眞の民本主義者であることが出來る。基督が「我れは眞理なり」と叫んで、「自己」の無限の要求を赤裸々に熱烈に主張し具體化したこと

〳〵偉大なそしてもつと〳〵深遠なものである。（これは後にだん〳〵說く）。要するに、眞の個人主義を理解し得ないものに眞の民本主義が解らない、何故なれば個人主義は民本主義の根柢であるからである。是において吾々は個人主義の根據たる自我を徹底的に理解する必要がある。これはどうしても避くることは出來ない。

二　自我批判の哲學

諸君！　世間一般から無我の敎へてある、犧牲の實行である、だからそこに眞の尊といものがあると誤解されたかの大なる宗敎が、實は却つて猛烈に否狂信的に自我を肯定し主張するものであり、そしてそこに人類靈をして惚恍たらしむる偉大な、永遠に氓びざる生きた宗敎が存するものであることが解かつた。宗敎は決して有神論や無神論を主張するとでもなければ、眞善美の綜合といつたやうな空漠な概念に渴仰することでもない。況んや神は人格的でなければならぬとか何とかいふことは、閑人の寢言に過ぎない。たゞ自我の赤裸々な自由なそして自發的な表現、そこに眞の宗敎がある。そしてそこに眞の哲學がある、否そこに眞の吾々の生活がある。諸君！　既に宗敎は自我を肯定するものである、この自我を理知的に肯定せんとするものが哲學であることは、讀者の既に認容せらるゝところであると思ふ。謂はゆる泰西の哲學史なるものは卽ちこれ自我の自覺史であり、特に近世におけるそれは全く自我の理解に全努力を傾倒して居ることは、哲學史を繙くものゝ何人も否定すること出來ないであらう（朝永博士の『近世に於ける我の自覺史』參照）。所謂「個人主義」なる名稱は哲學史上いかに理解されたにしても、近世における哲學的產物であることは言ふまでもないが、自我の活動と密接の關係ある謂はゆる「當爲」とか「價値」とか或は「自由」とかいふ概念的表現も、近世哲學の產物であることは最も明白な事實である。哲學は宗敎における自證的直覺的な自我を、吾々の論理的要求によつて學理的に理解せんとするものであるから、その理解的把握は或る意味において明瞭でありそして具體的であるけれども、しかし宗敎のそれの如く直接的でなく

等を尊敬し彼等の教訓を信ずるといふのは、彼等が眞の個人主義者であつた如く吾々も眞の個人主義者となり、彼等が眞の民本主義者であつた如く吾々も亦眞の民本主義となることの、永遠のそして實在的な誓ひではないか。若し吾々が從來の習慣や傳說の爲めに個人主義及び民本主義を實現することが出來ないといふならば、むしろ忌憚なく吾々の信仰を形成する儒教や基督教や佛教等を根本的に破壞し、そして彼等を永遠に忘却することが却つて自己に忠實なものではあるまいか。諸君！

吾々は二つのものに同時に事へることは出來ない、卽ち「神と財とに兼ね事ふることは出來ない」「熊の掌も吾々の欲するところ義も亦吾々の欲するところ」である、吾々は今その孰れかを擇ばねばならない。かく言ふと世の牧師や僧侶や漢學者連中は躍起となつて主張するであらう、吾々の奉ずる宗教には眞の個人主義あり、眞の民本主義がある。所謂自由平等の思想や政治上に言ふ王道や善政の觀念は、吾が宗教本來の理想であると。又言ふであらう、民本主義などいふものは何も新しいものではない、わが東洋においては既に三千年の昔において立派に實現して居ると。成る程さうかも知れない。しかしかくいふ連中が今の今まで個人主義の「個」の字も自覺し得ず、民本主義の「民」の字も考へ得なかつたといふことを自ら反省して見ねばなるまい。彼等はたゞ默つて自分の信仰をからにして、人の言ふことを聞いてゐたに過ぎない。米國の宣教師を見て耶蘇教の本尊樣のやうに感じたり、或は印度のタゴオルを生きた釋尊と間違ひて、支那人や猶太人を輕蔑したりする人々に、釋迦や基督が眞の個人主義者であると同時に、眞の民本主義者であつたことを理解し得る道理がない。そして謂はゆる東洋流に民意を尊重する王道や善政なるものが眞の民本主義であるといふ人もあるが、成る程その形は民本主義であつても、併しその精神はもつと深いところに在るは言ふまでもない。徒らに民衆に平等の權利を與へ或は民衆の爲めに平等の利福を增進するといふことが、眞の民本主義でないことは解かり切つてゐる。現在吾々の要求する民本主義なるものは、もつと

この根本問題を解決することによつて、他の凡ての保留された若しくはそれに關聯した問題が理解されるからである。然らば根本問題とは何であるか、それは前から何遍となく繰返した「自我とは何ぞや」といふことである。

諸君！　諸君はこゝまで來るうちに定めてウンザリしたことであらう、そして尻に解決したと思つた「自我とは何ぞや」てふ問題が、恰も大なるスフインクスのやうに横つて居るのを見て、さぞ倦怠と厭氣とが增したであらうと思ふ。しかし哲學は白馬を眼前に見るやうに左程容易なものでないことは、讀者の既に承知して居ることゝ思ふ。「自我とは何ぞや」といふことは、余は讀者と共にこの研究の目標にして進んで來たのであるが、未だそれを突破してゐないのである。これを突破して初めて吾々の努力に光明が生じ、そして吾々の勇氣は百倍するであらう。そこに新しい歡喜と新しい創造とが續々と湧いて來るのである。この根本問題をたゞ外部から望見した丈けでウンザリしては、到底文化改造の先驅者、勇者たることが出來ない。かくいへば或は失望して自暴自棄に陷ゐり自我などは解らなくとも何の影響もないといふ人があるかも知れぬ、しかしそんな讀者は吾々の研究には初めからゐない筈で、かゝる人は何等の創造生活も爲し得ないのみでなく、どんな哲學だつて理解すること出來ないであらう。尤も吾々が「自我とは何ぞや」といふことを爰に提出するには、尠くとも吾々の現在の生活乃至文化に卽した要求を有つてゐる。卽ちその理解が吾々の生活乃至文化の根據となり生命となつて、それを內部から自發的に展開し創造する底のものでなければならぬ。初めから宗教や哲學で既に解決した自我をそのまゝ理解するなら、何等の問題も起らない。たゞ刻々創造的な吾々の思索乃至生活の要求があるから、過去の舊い問題が新しい生命をもつて提出さるゝのである。從つて自我とは何ぞやといふことも、吾々の最も新しい最も根本的な要求を包含してゐる。吾々は今自我の新しい把握によつて、吾々の思索乃至生活を根本的に改造しなければならぬ。

從つて體驗的强度に乏しい、言ひ換へれば確實性の根據が明瞭でないことは免れないが、時としては全く脫線して具體的に何ものも摑んでゐない場合が往々にしてあり得る。しかし前にも言つたやうに、論理的な理解は體驗を背景として初めて生命を有し、體驗は又論理的理解を足場として自己を確實にし、且つ具體化するものであるから、體驗と理解とは相俟つて自我を把握し實現するものであると言はねばならぬ。もつと根本的に言へば、自我は具體的に體驗と理解とを融合してゐるものであるから、二者ともに自我の自發的創造と見なければならぬ。この意味において論理的理解卽ち哲學なるものは、ベルグソンやショウペンハウエルの批難したやうに實在に對する外部的模寫ではなくて、眞に自我の內面的自覺史であるといふことが出來る。勿論この場合、自我の自覺はその體驗を無視するものでないことは言ふまでもない。孰れにしても哲學は自我を否定し滅却する爲めにその歷史的努力を經續してゐるのでなく、却つて自我を發掘し闡明し主張せんが爲めに奮鬪してゐるのである。だから眞の哲學は熱烈な個人主義によつて初めて成立するといふことも出來る。言ひ換へれば、自我の根本要求の上に如實に立脚した哲學、卽ち自我批判の哲學 Kritik des reinen Selbstwillens が眞の哲學であると思ふ。かくして世界の人類がその永遠の創造と勞作とを擔にした宗敎も哲學も、共に自我を肯定し實現するものであることが解かつた。諸君！ 吾々の主張する個人主義の普遍的根據と、永遠の生命とは爰にあると思ふ。

しかし諸君！ 吾々はこゝに止まつて居ることは出來ない、吾々の根本問題はまだ殘つてゐる、そして吾々は今その根本問題に撞き當つてゐる、これはどうしても避くることは出來ない。これを避くることは、吾々の理解と努力とを悉く拋棄するに均しい。そして余が前段から說明と解決とを保留して來た凡らゆる問題は、悉くこゝに集注して來て、そしてその說明と解決とを俟つてゐる。それらの問題に對する責任を果す爲めにも、余はこの根本問題を突破しなければならぬ。何故なら

らう。吾々が自我を根據にするといふのは、それをもつて吾々の思索乃至生活の一切を內發的に展開する永遠の創造力とすることである。吾々の體驗する自我は果してかゝる創造力たるべきものであらうか。

現代の哲學は概して認識論的に傾き過ぎて居るが（勿論認識論を嚴密に潛つて、そこから確實な實在を摑み出すのが哲學の正當の道であり、そして現代の哲學はこの道を眞摯に辿りつゝあることは明かであるが）しかし自我を實踐的に深く研究した學者も尠くない。就中、自我の意義を闡明した點においてカントの右に出づるものはなく、自我の本質を把握した點においてはベルグソンの右に出づるものはないであらう。勿論彼等の哲學は完全なものではないが、しかし他に彼等に追隨し得る或はそれを凌駕し得る哲學者は見當らない。隨分彼等を攻擊し批難するものはあるけれども、しかしそれは彼等の哲學の十分の一をも構成することの出來ない者流のすることである。それは兎に角、現在吾々がカントやベルグソンの哲學のみて滿足出來ないのは言ふまでもない。意味といひ本質いひ、これ自我の兩面の見方であつて決して如實の自我そのものではない。吾々が自發的に活動するときには、そこに意味といひ本質といつた區別はない。勿論吾々は意味を要求し本質を重んずる、しかし吾々は意味によつてのみ活動するのでもなければ、又本質によつてのみ活動するのでもない。吾々は意味を要求すると同時に本質をも要求する、吾々の自發的な活動は意味と本質との具體的融合である。然らばこの二つは哲學上いかに結合すべきであらうか。所謂新カント派の哲學はこの方面に向つて努力して居ることは事實であるが、しかし下手にやるとこれは失敗する。オイケンはその例である。オイケンは確かにカントの缺點を觀破し、從つてその意味の方面と本質の方面とを融合して缺點を補はむとしたのであるが、併しその融合點を無雜作に靈生命に押しつけて、そしてむやみにそれを振り廻した結果、遂に哲學とも宗教ともつかないお化けが出來上つたのである。

吾々は今基督や釋尊の體驗した自證的自我をもつて、思索乃至生活を律しようとしても、茫然として爲すところを知らないであらう。そして第一彼等と同一の自我を同樣に自證するといふことは困難なことである。たとへ自證することが出來たとしても、そのまゝ吾々の思索乃至生活を律することが出來ない、何故なれば、吾々の現在の思索乃至生活においては餘りに論理的要求が强いから。然らば泰西の哲學者の構成した煩瑣な自我の說明が、吾々の生活の創造的根據となり得るであらうか、しかしこれも餘り當にならぬ、何となれば吾々の論理的要求は徹底的であることを要求してゐるのに、惜しいかな哲學者の理解は徹底的でない。言ひ換へれば、彼等の理解は未だ體驗に接觸してゐない。前にも言つたやうに論理的理解は體驗に透徹して初めて生命がある。體驗といふことは哲學者のみが使つてる言葉のやうであるが、その哲學者は普通の凡人よりも體驗を知らない。吾々は自我の活動には當爲があり價値があり、そして自由がなければならぬといふことを學ぶのであるが、その當爲とか價値とかいふことが何であるか、何故にかゝるものが自我の活動になければならないか、そはいかにして自我の活動のうちにあり得るか、といふことは少しも明瞭でない。當爲といふものは勿物體驗的なものであらうが。現今の哲學ではそれは「自發自展的な一般者」と看做されてゐる。そして吾々の最も狂熱的な體驗である自我が、この「一般者」と如何なる關係にあるか自我がこの「一般者」即ち絕對當爲に服從するものであるか、或はそれを却つて自發的に展開するものであるか、若し前者ならば何故に自我はそれに服從せねばならぬか、若し後者ならば如何にして自我はそれを展開するか、更に若し自我と「一般者」とは同一のものであるとするならば、そはいかなる意味において同一であるか、是等の煩瑣な問題が少しも解決されてゐない。若し泰西哲學の說明をそのまゝ採用するとすれば、是等の問題がいつも吾々の念頭にこびりついてゐて、却つて思索乃至生活を阻碍し澁滯ならしめるばかりで、それを自發的に展開する生きた根據とならないであ

考へても——けれども研究のことは必ずしも多き歳月を積んだから善き結果を得、その歳月が少くないから結果が悪いとも云へまい。私如きものは歳月を多く積んでも結果の悪い方の例である。

然し内村氏にしても「基督再臨」の信仰に到達されたのは、四十年間の聖會研究によつて、自然に、或は内的自發的に得られた結果ではないらしい。而も「新約聖書の到る所に高唱する最大眞理」に自ら到達されなかつたのは甚だ不思議である。氏は自ら云ふやうに、氏が「學問の傾向と時勢の成行（評者云ふ、これは今度の世界の大亂のことである）とは氏をして絶望の深淵に陷らしめた」そして氏は「余は玆に行き詰つたのである」と告白して居る。而も年來の氏の聖書研究は未だ氏に一方の血路を發見せしめなかつた。然らば之を發見せしめたものは誰れか。其は舶來の二部の雜誌であつた。二部の雜誌とは「日曜學校時報」である。而もそれは氏が「其の常にキリスト再臨を主唱するにより厭うて購讀を廢した」ものである。けれども今度は二部の雜誌を「讀下し、「行一行、余の心に訴へ、再讀三讀余をして然り然りと、默頭首肯せしめた」と自白さるゝ程の感動を與へた。誠に奇妙なることもあるものと思はざるを得ないのであるが、併し再來の信仰が絶望と行き詰りより、人々を救ふことは必ずしも不思議ではない。そは何んとなれば私の見解によれば、元來再臨の信仰は絶望と行き詰りの極生れた信仰であるからである。私は耶蘇は再臨の信仰を有つて居なかつた者てあると信ずるが（其のことは拙著「福音書大觀」「眞人基督」等に說明してあるが故に玆には詳說せず）其の死後使徒等に此の信仰が起つて絶望と行き詰りを打ち破つたのである。若し又他の論者の云ふやうに耶蘇自身に此の信仰が、その生涯の末つ頃起つたとしても、矢張りその爲めである。これが彼等が信仰に血路を開いた所のものである。併しさうであるからと云つて、私共までが此の血路に一處に這入つて行く必要はないと思ふ。耶蘇の初めの間の所信丈けで、少くとも私には充分である。

三　ハルナツクの再臨說に對する見解

基督再臨問題講演集を讀む

三並良

一　批評の理由

「基督再臨問題講演集」とは畏友内村鑑三氏の近著である。私は常に氏の信仰的奮闘を尊敬して居る。併し氏と私とは立場を異にして居るのは、氏も了解して居て下さる。それは氏の言中にもユニテリアンが基督再臨を信じないのは當然であるが正統教會派の者に之を信ずるでもなく、信ぜざるでもなく、曖昧な態度を持する者ありと云つて其の處決を促して居るものあるを見ても判然して居る。然らは此の書は單に曖昧な立場の者のみに勸告するものかと云ふに、さうではない。内村氏は自己の立場を說明すると同時に、ユニテリアン派のものゝ立場は聖書の意義にあらざることをも述べて居る。さうして見ると私も一度は自分共の立場を、此の著書に對しても說明しておく必要がある。殊に本書が批評の爲め發行所より、我が六合雜誌社へ、そして社より私へ送附せられて、私の意見を求められるゝに於て、私は沈默することが出來なくなつた。内村氏が海老名氏の所見を批評する時に云つて居らるゝやうに、私も論爭せんが爲めに書くのではないことを、同君も諒とせらるれば幸である。併し氏の著書は小冊にてはあるが二百四十餘頁もある。それは雜誌の一論文で詳細に批評することの出來ざるは無論であるから大體に止めておく。

二　内村氏の「再臨」信仰の動機

内村氏が聖書の研究家であることは誰れでも知つて居る。氏自らも研究既に四十年と云つて居らるゝ。四十年は隨分永いことであるが、我が邦に於て聖書を研究すること四十年になる人々も、氏以外に尙ほ幾多もあることは想像に難くない。私如きものでも既に卅餘年からになるのから推して

內村氏の所見や如何、これ等も聽き度きものである。

然し內村氏は、如何にその尊敬する所の學者なりとも、その所說を全然採用さるゝことはなく、必ず取捨するであらう。私は之を當然と思ふ。これは各々理性を有する吾々の權利である。然らば吾々は何故に此の權利を聖書に對しても主張することが出來ないであらうか。否な我々は此の權利を有して居ると思ふ。

以上は餘論に過ぎなかつたが、私はこれからハルナックの本論に入る。今私が繙いて居るのは、彼れの大著中の大著と稱せられる「基督敎敎義史」の第四版卽ち最新版であるが、その初めに於て彼れは例の通り立派に耶蘇自身の所信を記述して居る。そしてその一節には次ぎのやうなことが云つてある。曰く「福音は默示的(アポカリュプティッシー エスカトローギッシ)—末世的使命として世界へ來た。默示的—末世的と云ふことは、單に福音の樣式にばかりではなくて、その內容にも屬して居る。併し耶蘇はその自己の活動と共に、神の國が既に現はれ初めたことを宣べて居る(「盲者は視、跛者は行く」等)そして信じて彼れを受け納れたものは、此の初現を感じた。是れ「默示的なものは、先づ第一に、支配者及び父としてその神の現示であつて、單に未來の曝露ばかりでないからであつた。又「末世的なるもの」は耶蘇の救主運動を直觀することに於て、及び確かに御國へ召さるとの確信に於て、及び生命と將來の支配は主なる神によつて確保され、且つ彼れによつて保護さるとの確信に於て平衡を保つて居た。されば福音を說述するに當り、猶太敎の時代史的氣分(三並云ふ、これは默示的末世的なるものを指したのである)と連終するものを最つ先きに置かず、それを超越するものを以てするは、後ちの歷史の暗示に從ふのみならず、又事柄其れ自身の要求に從ふのである。耶蘇は「御國の世つぎ」たる希望の代りに、復た直ちに「靈魂(生命)を保護(獲る)することを說いた。」云々と云つて居る。さればハルナックは耶蘇自身の福音の宣傳には、末世的なるものと現世的なものとの兩面があつたことを看過したのではない。且つ彼れは脚註に於て彼のシュワイ

私はこのことをA・ハルナックの說を借りて述べて見やうと思ふが、本論に入る前に一寸云つておきたいことがある。

內村氏はハルナックの所見に就き「最高の學者的權威を以て斷じて言ふ」と云はれるけれども、これは彼れが英國百科辭典のなかに、氏の所信と多少一致するやうなことを述べて居るからであらう。若し彼れにして氏と異る斷案を下すも、矢張り最高の學者的權威として、その斷案に同意せられるかどうか甚だ疑はしい。否な吾々は皆な如何なる學者の所見と雖之を批評し、或は取捨するの權利がある。私は今自分の手許に英國百科辭典を有せず、學校も始まつて居ないので、之を一覽するの機會を有せざれども、ハルナックが耶蘇の生涯と敎訓とを說述せんとせば、其の前に先づ原記問題(Quellenfrage)を片附けざるべからずと提唱し、ヨハネ傳は使徒ヨハネにあらず、長老ヨハネの著なりと云ひ、ペテロ書やヤコブ書は彼等の著にあらずとなしたるが如き態度(これは彼れが一八九七年の著クロノロギール出づ)に對して內村氏はどうせられるか。特にハルナックが基督敎社會の物議を釀したる、彼の「基督敎の本質」中に云へる「耶蘇の宣傳する所によれば福音には父のみ屬して、子は屬せず」と云ふ斷案に就て何んと考へらるゝか聽きたいものである。

序に云いたいのは、內村氏は彼のデーリツチ父子を擧げて大に尊敬の意を表せられる。其は固より適當なことである。憶ひ起せば卅年前私も恩師シユミーデル先生の許で聖書を研究して居た頃、說こそ違つて居たけれども、老デーリツチ書を、先生から頻りに讀ませられたものであつた。內村氏は此の老博士に共鳴せらるゝ所もあるが、氏は果して彼れが「第二エザヤ」を囚虜時代の、又ダニエル書をマツカベール時代の著述とするに對して如何なる態度を執らるゝか。更に進んでは若デーリツチの有名なる講演によつて惹起せられたるBibel und Babel 問題、卽ち若デ博士が舊約聖書中の古代史はバビロンの傳說に基くものにして、而も若干の點に於てはバビロンの傳說の方が聖書の所記よりも高尙であることを主張した點に對する

「人類の完成せらるゝと同時に天然も亦完成せられ、而して其の完成せられたる天地萬物が、完成せられたる人類に賦與せられんとするのである。故に曰ふ『己の子を惜まずして我等凡ての爲めに之を付せる者はなどか彼に添へて萬物をも我等に賜はざらんや』(卅二節)と。

併し內村氏の云ふ天然の不完全とは何の謂であるか。「美はしき山野の間に毒草あり毒蛇あり毒蟲あり、又人の健康と生命とを奪ふ黴菌あり、動物界に於ける生存競爭あり」と云ふのがそれであらうか。或は「天然其ものが甚だ不完全なるものとして而も其完全に達せん事を深く待ち望みつゝあり」と云ふことがそれであらうか。果してポーロはさう廣い意味で玆に受造物の不完全を說いたのであらうか。私の所見によればポーロが云ふ「受造物の歎き苦しみ」は、廿節に云つてあるやうに「無常」に服從せしめられて居るから來て居る。卽自然界の「無常」をのみ云つたもので、內村氏の云ふやうな廣義ではないと信ずる。然らば自然は何故に無常であるか。此の點に就てポーロは現代人のやうな自然史的觀察を有つて居なかつた。從つて自然が無常の域を脫するのは自然史的進步の結果によるともしなかつた。自然が無常であるのは强いてさうせしめられたのである。彼れは卽ち廿節に云つて居る。「受造物は無常に服從せしめられた。(其は)自發的ではなく、彼を服從せしめたものによつてゞある」然らば無常でなかつた自然を强いて服從せしめて、無常ならしめたものとは何者であるか。我等は之を說明するには猶太の神學によらねばならぬ。其れによると自然が無常になつたのは、創世記三章にあるやうに人間が墮落した爲めであつた。爾來「自然は今に至る迄共に歎き、苦しんで居る」(ポーロの文は自然が互に連れあつて歎くのであつて、內村氏の云ふやうに「人類に共に」の意ではあるまい)彼れの耳は自然の音響が此の愁嘆の聲にきこへたのであらう。これは彼れの宗教的詩人たる天性より來つて情調であつたと、私は考へる。さうすると肉と罪と受造物と云ふことを如何に調和して考ふべきか。其はポーロ神學論の難問題であるが、其れは今云ひたく

チエルが、耶蘇の說教の全體は末世說（エスカトロギー）によつて支配せられて居たと主張することに對し、之を信ずる能はずと論じて居る。されば私は內村氏のやうに「キリストの再來こそ新約聖書の致る所に高唱する最大眞理なり」と云ふものではないと信じて居る。

四　羅馬書八章の根本思想

內村氏の所見に對する私の總括的批評はこれ位にしておいて、偖てこれより進んで氏の聖書本文の說明を少しく批評して見たいと思ふ。尤もこれは材料が多いから全體に就ては紙面が許さない。私はその孰れでもいゝのであるが、先づ內村氏が「若し聖書が金の指環ならん乎、羅馬書は其寶石にして第八章は寶石の尖頭である」と稱せらるゝ羅馬書八章の說明に就いて云つて見たい。

羅馬書八章は內村氏も云はるゝ通り、新約書中の最美なものである。されば「信仰の雅歌」とか或は「福音の反響（ユヒヨー）」とさへ呼ぶものもある。併しさう考へるにしても、吾等は玆にポーロが言表して居る通り、其儘そつくり彼れと信仰の行き路を同うしなければなるまいか。私はポーロを尊敬し、彼れの信仰に共鳴するけれども、彼れの思想に囚はれはしない。二千年近くも昔の彼れと悉く同一樣に考へることは出來ない。內村氏が八章の說明は一場の講演であるが故に、僅かにその十四—廿三節丈けの講義であるが、此の八章には今日の吾々から見ると神話的に見えるものもある。美は美なれども詩的としか見えないものもある。例へば「律法は肉に由て弱く、その能はざりし所を神はなし玉へり。卽ち己の子を罪の肉の狀となして遣し、罪の爲めに、肉に於ける罪を罰しぬ」と云ふが如きは私から見ると、神話的な犧牲思想である。又「萬の受造物は今に至る迄、共に歎きて苦しむを我等は知る」とは美はしき詩的の云ひ表はし方である。

併し內村氏の本論は勿論さう云ふ問題ではない。氏は十七節なる「我等もし子たらば後嗣（よつぎ）たらん」より出發し、後嗣となるとは何物かを有する所の者なりとの義であつて、此の所有となる何物かとは天地萬物であると云ふのである。氏は云ふ

であるやうに感せられる。（此の物質的觀察はラザロの復活や耶蘇の變貌に關する氏の所論にも顯れて居るが、其は他日評論したいと思つて居る）若し斯く物質的に考へたならば遂には天理教や金光教或は昔しからある俗佛教の地獄極樂の信仰とどれ丈け違うかわからなくなる時の來るを恐れる。

餘り長くなるからこれで批評を止めるが、世界の大亂に激成せられて勃興した內村氏の再臨信仰も、世界が平和となるにつれて、再び以前の平靜に復することと思ふ。これは急に起つた狂爛怒濤であるが、鏡のやうに平靜となるべき世界は氏の心池にも舊の如く春風が靜かに吹きそめんことを希望する。殊に氏は基督の再來と云つても千年の後か萬年の後かは知れないと云はるる。そうであるなら百萬年の後か壹億年の後か、或は尙ほ其れ以後かも分るまい。さうすれば我地球が既に雲霧に歸つた時かも分らない。さうなれば基督の再臨はどうでもいゝ問題になるではないか。而も氏は「我誠に汝等に告げん、汝等イスラエルの村々を廻り盡さざる間に人の子は來るべし」といふ句を與げ又「此後人の子の大權の右に坐し天の雲に乘りて來るを汝等見るべし」と云ふをも引照して平氣で居る。氏は彼等が千年も萬年生きて居るつもりであらうか甚だ不思議でたまらない。

けれども私は神が最後の勝利者であることを內村氏と共に深く堅く信ずるのを幸とするものである。

ない。

又内村氏は「後嗣たる者なり」と云へば、譲受くべき何ものがなければならんと云はるるのは、至極當然のことであると思ふ。氏は此の何物かは萬物であると云つて、茲に記した卅二節を擧げて居られる。けれども「などか彼れに添へて萬物を我等に賜はざらんや」と譯するのが正當であらうか。少くともそれが唯一の譯であらうか。茲のタ・パンタと云ふ原語は色々の意味が讀みこまれたものであるが、私はこれにはそんな面倒な意義があるのでなく、又前の後嗣問題に關係するのでなく、簡單に我等の爲めに神はその最も大切な愛にさへ與へ玉ふた。されば「どうして彼れは彼れ(卽ち基督)と共に其の他のすべて(卽ちなんでもの意)を與へ玉はないことがあらうか」との意に譯すべきものだと信じて居る。

五　内村氏の物質的解釋を難ず

併しこれ丈けては未だ譲り受くべきものゝ何物であるか、に就て私の意見が分らない。私はそれは「限りなき生命」のことをポーロは云つて居るのだと思ふ。元來ポーロは「後嗣」と云ふことを他の書翰にも云つて居るから、それ等をも參考すべきであるが、既に今吾々が論じて居る十七節に於てもその答は出てゐる。曰く「我等が(後ち)彼れ(基督)と共に榮を受くる爲めに、彼れと共に苦しむ以上は、我等は神の後嗣であり、其基督と共同の後嗣である」と云つて居るので、問題の答は既に同じ節にあると思ふ。茲にポーロが「榮」と云ふのが譲り受くるものであつて、私は「榮」とは「限りなき生命」のことだと解するが、その證明はくど〳〵しいから略する。

併し私はポーロに再臨の信仰がなかつたと云ふのではない。それはあつたが、内村氏のよりはもつと靈的であつたと思ふ。内村氏は「神の造り給ひし驚くべき宇宙萬物が永久に惡人の手中に存じ神を嘲る所有に歸すべき筈がない。……時到らん乎、天地萬物一切の受造物は忽ち彼れ等の手より奪れて、眞實なる神の子に與へらるるのである。完成せられたる全宇宙、是れが神の後嗣の譲受くべく遺産である」と主張せられるのは、餘りに物質的

題は、廣く世人の注意するところとなつた。地球の大きさは一層精確に決定せられた。理論的天文學に於ては、何等見るべき進歩がなかつたけれども、舊來の數學說上に試みられたる改良は、極めて重要なるものにして、光輝ある大發見こそなけれ、知識は着々として蒐集せられ、ルネッサンスと稱する人智の一大覺醒を助くるとなつたのである。何等過去の傳統に依つて束縛せられざる自然其物の研究に對して、人々の心は次第に開かれた。科學的研究、實驗、觀測、假說及び假設の吟味等の精神は再び來つて、人間の心を捉ふるに至つた。

近代天文學に於ける最初の大家はコペルニクス（一四七三年―一五四三）である。彼はトルンに生れたる波蘭系の僧職であつて、その少年時代の大部分を伊太利に過ごしたので、當時コンスタンチノープルから輸入せられて、日尚新らしかつた希臘語を研究することが出來たのである。かくして彼は地球は運行するものなりとの古代希臘人の思想に接し、之に非常に興味を覺えて、その本職の傍ら、遑ある毎にこの問題の研究に勉めたのである。彼は決して天體觀測者ではなかつたけれども立派なる數學家、又周到なる推理者であり、更らに思慮ある研究者であると共に、由來天文學者の然りしが如く、廣く世間の事情に通じたる人であつた。彼の學說は太陽中心說を以つて宇宙を說明せんとするものにして、この思想は、アリストトルの教ふるところと全く正反對のものであつた。彼は天體觀測者をして、他の天體が運行するが如くに思はするは、その實地球その物が運轉するものであると說いた。彼はプトレミーや希臘人が書て試みたるが如くに、天體運行に關する數學的理論を發達せしめたけれども、圓のみが唯一の完全なる形態なりとの觀念を去てることが出來なかつた。故に尙偏心圓とイピサイクルとを混同するが如き迂を踏襲するに至つたのである。彼は若し地球にして動くならば、星は視差的變位を生ずべきであるとのアリストトルの說に注意した。けれども、かゝる變位のこれなき所以は、それらの星が餘りに遠距離にあるが故なりと彼は考へたのである。

天文學と社會の進歩

ヴアッサー大學教授　哲學博士　アアーネス女史

一

その後約百年にして、基督敎徒がアレキサンドリアに建設したる大圖書館は破壞せられ、かくしてアレキサンドリア派の希臘文獻は衰へた。それより文藝復興の時代に至るまで、歐洲に於ける天文學史は、頗る空漠たるものであつた。東洋に於ては、プトレミーの天文學は、嘗て歐洲人に信ぜられたるが如く亞剌比亞人の信奉するところとなつた。天體を觀測するに當つて、亞剌比亞人は極めて周到且つ精確であつて、已れ自ら左まで獨創の見を有せざるにも不拘、容易に外國の學術思想を目化して、之を更らに進歩せしむることを得た。

羅馬帝國滅亡の後、歐洲に於ては、實際世間の仕事にたずさはらざる人々は擧つて神學の研究に一身を投じた。之等神學者は思想界の權威を把持し、かくて、諸科學の發達をして不可能ならしめたのである。と云ふのは、科學は何よりも先づ思想の自由と、他の學者との自由なる交通とを有するが故である。成程彼等は、暗黑の中の光明であつた。例へば、十三世紀に於て、ロジヤー・ベーコンは古典學者、特にアリストートルの學說を盲目的に信奉するの不可なるを論じ、科學的研究に當つて、實驗と、數學的推理の重要なる所以を力說したのである。コンスタンチノープルの落城と、印刷術の發明とに依つて起れる希臘古典文學の復興は知識の發達を促した。恒星の表は當時の天體觀測に基いて新たに作られた、それは天文學上の器械の進歩に依つて、古代の希臘人が試みたるものよりも遙かに精確なものであつた。一層完全なる航海者用の天文曆表が出版せられ、現にコロンブスの如きも之を用ゐたる一人であつた。海上に於て、經緯を決定すると云ふが如き實際的なる問

開かれたのである。ガレリオがその科學的研究を續くるに當つて、如何なる攻撃を受けたるかを見るものは、當時宗教との教權が如何に強く社會人心を支配したるかを知ることが出來る。然して彼が敢然としてコペルニクスの學說を採つて動かなかつたことはやがて彼が一大迫害を蒙るの原因となつたのである。

恰もこの時に當つて、天體は楕圓を描いて太陽の周圍を環るものとのケプレルの法則が現はれ、かくて二千餘年の間累代の天文學者を謬らしめた環繞的運行說を一掃して仕舞つた。

ケプレルの後サー・アイザック・ニュートン現はれ引力の法則を發見した。然してその時までは科學的研究は既に確然として建設せられたるが故にこれが再び失はるゝに至るが如き虞れは最早やなかつたのである。迷信と超自然的なるものを妄信するの風は、尙無智無學の人々の間に行はれるかも知れない。然し乍ら世界孰れの國に於ても教養ある人士は諸現象の背後に横はる大自然の法則を求めて止まないのである。今や彼等は絕えず自然界の事實を探求してこれが結論を求めてゐる。この大原則を建設するに當つて天文學は如何なる貢獻をなしたるかに就ては、既に吾人の述べたるが如くである。

三

ニュートン以來の天文學の進歩に關しては、紙面の都合上これが概要を略說するの外はない。先づ第一に天文學の發見と數學的分析方法の發達に伴ひ、天體の研究は非常に進歩して遂に太陽系に於ける天體運行に關する學說は殆んど完成せられたるに近く、今や單に二三の特別なる過誤のみが說明せられずに殘つてゐるのである。水星と月とは後者の列である。之と同時に望遠鏡の製造、その反射鏡の大いさ、並びに之が投影を精確ならしむることに於て、非常なる改良が試みられた。吾人は天體觀測の器械その物を研究し、その誤謬の起る原因を發見し、之を除去するの方法を學んだ。斯の如き研究的精神は他の諸科學特に物理學に傳へられ、吾人は近くワシントンに度量衡局を新設し、茲に於て天秤又は螺線の如き精確なる尺度を

二

次に特筆すべき天文學上の功績者はテッヘ・ブラアーエ（一五四六年―一六〇四年）である。彼は有名なる丁抹の天文學者であつて、肉體に於て精神に於て非常なる勢力家であつた。名門に生れ宮廷に出入してゐたので、彼は丁抹王の保護を受け又後皇帝ルードルフ二世の眷顧を蒙ることが出來たのである。之が爲めに彼は大規模にして非常に精確なる天體觀測の器械を作り、之に依つて前人よりも遙かに精確な觀測を行ふことが出來たのである。

彼は恒星の視差あるが爲めにコペルニクスの太陽中心說を信ずることが出來なかつたけれども、この一事を離れては彼の研究は非常に重大なる意義を有し、彼の熱心と名聲とは彼の指導を受けんとする多數の青年學徒をその門に集むるに至つたのである。彼は天體の運行に關する不斷の記錄を作る様な觀測を行ふの重要なるを理解し、多數の助手と共に多年の間毎日太陽觀測を續行したのである。彼の天體觀測の中には、金星に關する長篇の記錄がある。彼は之を門人ケプレルに殘し、ケプレルは之に依つて、天體の眞の軌道を發見することが出來た。彼自らは色々な事件に關して非常な多忙であつたので、コペルニクスの學說の中に非常なる誤謬の存することを知りつゝも精確なる學說を確立するに必要なる時を得ることが出來なかつた。彼の事業を概括して見るに彼は最も顯著なる天體觀測者であつた。恐らくはヒッパルコス及びサー・ウイリアム・ハーセルのみがその研究の多様にして且つ大膽なる點に於て彼に匹敵することが出來る。若し夫れ多數の部下を率ゐるの手腕に至つては、彼はアレキサンダーと共に伍すべきである。彼は鏡望遠の發明より僅か以前に反の世を去つた。その望遠鏡の發明こそは近代の天文學的研究をして非常に精美ならしめたのである。

檢微鏡を初めて天體の觀測に用ゐたるものは、ガレリオにして、そは一六〇九年のことであつた。之を以つて彼は月球の山脈や、木星の環や、金星の態や土星の環や太陽の斑點などを發見した。かくの如くして、天文學者に取つて大なる新天地が

球が寧ろ小なる天體の一つにして太陽が光り強き星の一つにあらざることを知つてゐる。然かも實際に於てそれは普通の五等星の大いさと光りとを有するものなることを認められた。太陽が前記の螺線狀の星雲中の如何なる處に位地するかは、まだ精確に知るを得ない。この星雲の半徑を見るによしや他のものよりも一層光度の強い地點はあつても、銀河の密度に於て何等大なる差異を認めないのである。兩極に向つてその半徑に垂直に見ても星の密度には何等の大なる差異がない。單に外觀に依つて見れば、我等はその星雲の中心近くにあると思はれる。然し乍ら我等は他の星雲を研究して見るに、この證據が確かでない。それらの星雲の多くは、非常に明るい中心體を有してゐて、それからして螺線狀の光が放射されてゐるのである。若し我等の螺線も亦斯の如きものであるとするならば、而して又我等がその中心に近く位地してゐるものであるならば、我等の近くには、今よりも遙かに多くの明るい星があるべきである。然るに太陽なるものは、極めて疎らに散在してゐる餘り光度の強からざる星群の一つである。我等が現在に於て斷言し得るものは宇宙間に於ける太陽の總體的位置に關しては、贊否共に何等の確證がないと云ふことである。天文學的に云へば、宇宙に於ける人間の地位は極めて些細なものである。

四

天文學者は到るところに於て、己れの周圍に見ゆる物體の實在を信じて疑はない。彼は法則と秩序とが全宇宙に遍滿することを信じてゐる。勿論天文學者の未だ發見し得ざる法則は多々ある。蓋し、自然界の現象は、極めて複雜にして、彼は尙未だ之を說明し盡すことが出來ないが、然かも、彼の知識は日夜進んで止まないのみならず、天文學的世界は人間進化の目的に關して何等の證憑をも示して居らぬ。勿論之に關しては、嚴然たる一大法則がある。けれどもこの法則は物質それ自身に內在するもので、任意的に外觀より命令せらるゝものではない。

これと共にこの驚くべき大宇宙に關する吾人の知識は、凡て我等の五官と推理力との協力に依つ

測るの機會を研究して之が誤謬を發見せんと努むることゝなつた。夙に十九世紀の初頭に於てガウスは種々なる天體の觀測を調節比較するの新方法を發見した。この方法は又他の諸科學、殊に物理學及實驗心理學並びに統計學の踏襲するところとなつた。恰も當時同樣なる天體の觀測を續行する中には觀測者の異なるに從ひその結果にも亦異論あるべきことが發見せられた。これ卽ち『個人的差』と稱せらるゝもので、公平に研究せられ且つ解決せらるべしとせられた。更らに近代に至つて個人的差は天文學者に依つてなさるゝよりも更らに多種類の天體觀測に影響することが發見せられて、これが『研究は今や心理學の一大分科となつてゐる。

分光の原則と分光鏡を天文學上の諸問題に應用することの發見は、寫眞術の發達と共に、天體研究の範圍を非常に擴大したのである。若し夫れ大なる近代の天文臺の建設に至つては、世人の夙に熟知することなるが故に最早や蛇足を加ふるを要しない。此等天文臺の主要なる目的は恒星の研究であつて、之が助けに依つて我等の恒星や星雲や銀河に關する知識は非常に發達した。星の視差に關する問題はその價値の小なるにも不拘種々なる困難があるのである。然し乍ら多くの有効なる研究の結果が集められつゝある。

恒星界の構造は吾人の研究の共通目的にして、之に關連する最も重要なる問題の一つは、抑もこの恒星界は無限なりや否やと云ふことである。この事は螺線狀の星雲が我が太陽系に屬するものなりや否やと云ふことには差したる關係がない。この意味に於て、宇宙なる言葉は、存在する物體の凡てを包含するものに非ずして、渾一體をなせる天體及星雲の一團を指すに止るのである。天河を含む我等が宇宙は恐らくは挽臼のやうに扁平にして、アンドロメーダーのそれの如き巨大なる螺線狀の星雲であるかも知れない。果して然りとすれば、他の螺線狀の星雲も亦別個の宇宙を形作るものであるかも知れないのである。

我等は斯の如き大虛空の中に於ける我等人間及び太陽の位地如何を考へざるを得ない。我等は地

哀別吟

相原一郎介

きみひとり逝けりともなしわれもはた半(なかば)は死にてここにあるかな
かくまでもすべてに君をたよりきとそのなき後に思ひしるかも
せめてもに敲きて見んとくろがねの扉の外に立てる吾かも
ふといでし反古の中なる文がらも君なき今はをしまれてけり
いかなれば棺(ひつぎ)の中などに寝たまふといぶかる子等をなだめかねつも
わが胸に亡き母の乳房さぐる子の夢やすらかに夜の雨きく
悲しみの糸をたぐれば思出の繪巻物こそいみじかりけれ
うつし世の重き衣を脱ぎすてゝ身もかろやかに君はゆきけん
山見れば心なてみぬ冬枯れの雑木林に鳥の聲して
悲しみの木下闇に泣き居れば不思議なるかなわか魂(たま)は燃ゆ
すゞふるも蘇生り來ぬわかおもひ君と相見し昔のやうに
七年をひと日の如く過ぎしかどゆるされし身を幸とこそ思へ

て生ずるもてある。若し我等に理性がなかつたならば、恰もかの無辜の獸類の如く、我等は宇宙の法則に關して何等知るところがなかつたであらう。抑もこの推理の力は何處より來れるものなりや。そは如何にして發達したるか。我等は未だ之れを詳かにせぬ。且つ又この問題を研究することは天文學者の本務ではない。蓋し斯の如きは、直接に人間を研究するところの諸科學の任務である。然し乍ら我等は、その歷史的發達を判斷せんと努めてゐる。蓋し前述の如く、古代の人間は天體を觀測し、法則に從つてその行爲を律したることを我等は知るからである。恐らく、自然法なる觀念が、初めて人間に生じたのは、四季の交替に關する知識からである。この單純なる出發點よりして我等は數千年間の天文學的推理の發達を追究した。而して天文學の歷史卽ち文明の歷史なりと主張することは、決して過言ではない。誠に人間の精神こそは、かの爛々たる星自らの如くに、驚くべく不可思議なるものてある。

（終り）

松井須磨子の自殺については見る人々の心々の相違の如く紛々としてゐる。吾人は彼女が抱月氏と永別して淋しさに堪へかね、又道德上の罪を謝する意味に於て自殺したのであるとすれば同情せざるを得ない。しかしわが幼稚なる劇壇の改革及び進步のために犧牲となる決心をなして寂寥と侮蔑との裡に奮鬪の餘生を送り得たらんには更に一層意義ある生活なりしならんを、是れ吾人の大に遺憾とする所。　S N生。

れ故これまで嚴正中立、平和主義、モンロー主義を膠守して、喧嘩は要するに孰れも悪いから起るのだ。喧嘩兩成敗と高く止まつて空嘯いてゐた米國は、獨逸の無制限潜航艇戰の宣言を聞いて遽々然として戰爭の渦中に入り、米國の所謂愚なる喧嘩の中に進んで入つたは、果してデモクラシーのみであつたらうか。暴虐なる軍國主義、專制主義の獨逸を殲滅して人道平和の世界を建設する爲めであつたらうか。

米國が獨逸のオートクラシーとミリタリズムを以つて不倶戴天の敵と見るならば、歐洲戰爭開始當初から、戰爭に參加して、獨逸攻擊の擧に出づべきであつたのではないか。獨逸のオートクラシーとミリタリズムは戰爭以前より分り切つた話である。英佛も獨逸のオートクラシーとミリタリズムを打破せんが爲めであると宣言して戰爭に參加したではないか。サセックス號やヤルシタニア號の擊沈で初めて獨逸のミリタリズムに氣がつく樣な鈍愚なる米人ではあるまい。況んやサセックス號やルシタニア號は英國の軍需品、及び食糧品を輸送してゐたのではないか。獨逸から見たならば、自家防衞の爲めに當然の處置である。それ故眞に徹底した平和論者ブライアンの如きは、獨逸のルシタニア號擊沈は當然の行爲である。中立國でありながら、獨逸の敵國に軍需品や食糧品を供給して、金を儲けようとする米國の商人が間違つてゐるのだ。米人は何も獨逸を怨むに當らぬと天下に言明して、大統領の對獨戰爭宣言書に署名を固く拒んで、國務卿の地位を惜し氣もなく擲つた程ではないか。日清戰爭當時、今の東鄕大將が高千穗艦を率ゐて、英國船高陞號を擊沈した事件は大分問題になつて、英國では日本攻擊囂々として起つて、我朝野を恐駭せしめたのであるが、當時の國際法學者にブライアンの樣な正論家があつて、紛々たる俗論を排して、日本海軍の行爲の正當なることを發表したのである。

兎も角、今日デモクラシーを提げて世界人類の救世主の如く自任してゐる米國ならば、開戰當初既に獨逸のオートクラシーに對して宣戰せねばならぬ筈である。オートクラシーを殄滅する以外に

軍國主義の反對毒

——安價なるデモクラシーを撲滅せよ——

工藤直太郎

一、果してデモクラシーの勝利か

這般の大戰亂に依りて、獨逸の國家主義より割り出された兇暴なる軍國主義の殲れたることは、世界の人道平和の爲めに洵に幸慶に堪へざるところである。英米の民本主義が、獨逸の軍國主義に對して打勝つたのであると多くの人は云ふのであるが、なる程獨逸は破れて、聯合國は勝つた。獨逸の專制主義（オートクラシー）を破つたのはデモクラシーであると云ふことには、私輩も異論はない。然し乍ら一部の論者の云ふが如く英米の唱ふるデモクラシーが獨逸と戰つて勝利を得たのでないと信ずるのである。英米のデモクラシーは多くはポリテカル・デモクラシーであつて、我國に於ても吉野博士や大山郁夫氏などが之れに就て精細なる議論を發表してゐるが、それは氏等の專門とする政治學上の論議である。

英米の政治組織、國家組織の一部は明かにデモクラシーの理想を實行してゐるかも知れぬ。又これを以つて聯合國が獨逸討滅の大なる武器としたことは疑を容れない。然し乍ら獨逸を倒したのは英米が對獨開戰の口實とするデモクラシーでないことは我輩は斷言して憚らぬのである。英米のデモクラシーはポリテカルである丈に一つの政策に利用された。米國の政治家は自國の對獨開戰以來殊更らに聲を大にして "Democracy against autocracy" を呼號して、米國の國論を統一し、巧みに民心を收攬し、對獨戰爭の唯一の口實とした。又國民をして戰爭に熱狂せしむる手段とした。そしてこれを世界に宣傳して、米國參戰は世界の人道平和の爲めであることを信ぜしめたのである。そ

見たならば、獨逸と英米とは左樣に甚だしき相違はなかつた。その形式はとも角實際に於ては英米と相爭ふ程の相違點はなかつたのである。カイゼルてもウイルソンでもロイドジョージても、オートクラット的なる政治振りに於て同一であることは休戰條約締結以後のロイドジョージやウイルソンの態度は全然オートクラット其物ではないか。カイゼルがミリタリステックオートクラットであるならば、ウイルソンやロイドジョージはカピタリステックオートクラット若しくはエコノミカルオートクラットではないか。軍國主義的專制者に代ふるに經濟的專制者を以つてしてもその差執れぞや。誰れか烏の雌雄を辨ぜんやではないか。

獨逸の軍國主義を倒ぼしたのは、聯合國の高唱するデモクラシーてあると見るのは實に嗤ふべき淺見者てある。我國の學者に英米國民の出張店員や代理人となつてゐるものも尠くはないが、彼等は英米のデモクラシーを以つて、恰も世界人類の救世主の如く隨喜の涙に暮れてゐるのである。相當の學者てあると目せられ乍ら英米流のデモクラシーを眞似ざれば人間に非ずとする樣な知識的馬鹿者もある。獨逸を破つたのは決して英米のデモクラシーではない。獨逸の軍國主義を破つたのは矢張聯合國の武力である。武力を以つて武力を壓倒したのだ。武力にデモクラシーもオートクラシーもない。義戰とか人道の戰爭とか、勝手な美名を用ゐるが、武器を把つて戰爭をすると云ふことに何等道德上の功績はない。宗教家は宗教戰爭を神聖戰爭（ホーリーオワー）と云つてゐるが、こんなことを云ふ連中は文明人の戰爭ても野蠻人の戰爭ても要する人を殺す殘忍なる行爲であることをわきまへざる人間てある。宗教上の戰爭と云ふと何か神聖な事業ても神の爲めに行つてゐる樣に考へ、又英米のデモクラシーの爲めの戰爭と云へば、人類同胞に偉大なる慈悲を施してゐる聖業とも思つてゐるのてある。英米のやる戰爭は決して殺人行爲ではない。英米兵の打つ彈丸は毫も獨逸人を殺傷せざるものてあると思つてゐるのかも知れぬ。デモクラシーの彈丸ならば決して敵人を傷けぬと思つてゐるのてあらう。かゝる見地より出發する我國の一部の

何等野心がないと自己宣明する米國ならば、宇治川の先陣となつても獨逸を膺懲すべき筈ではないか。それを超然恬然と構へて、喧嘩兩成敗、米國は嚴正中立と澄し込んでゐたのは、聊か氣が知れぬと思ふ。一九一七年二月四日より忽焉として獨逸のオートクラシー打破を叫び出すと云ふことは少々可笑しいではないか。獨逸は決して、無制限潛航艇戰を宣言した一九一七年二月一日よりオートクラシーやミリタリズムの國家となつたのではない。獨逸はミリタリズムを惡用して、極端なる蠻行を演じたのはその前年二ヶ年間であつたではないか。米國が戰爭をする頃には、獨逸の蠻行手段が非常に緩和されてゐたのである。

二、ポリテカル・デモクラシーとソーシアル・デモクラシー

米國の參戰は資本家の壓迫と膨張主義者の運動に依るところ尠なかつたことは、何人も異論の餘地がないところである。米國に於て殆んど絕對の勢力を有する資本家の壓迫の爲めに餘儀なくせられた戰爭なる以上は、その戰爭手段に著しく資本萬能臭を帶びたのは蓋し止むを得なかつたことであらうと思ふ。ことに南部選出議員コールマンの如きは下院に於て、米國の參戰は北部の資本家の爲めに餘儀なくせられたのであるから、我々南部人の關知するところに非ずと公然戰爭反對を力說した位であるから、米國の參戰の動機及び目的はデモクラシーの爲めであると早呑込みすることを許さない。資本家的戰爭を途中でデモクラシーを以つて脚色したものである。デモクラシーを一つの政策として世界に宣傳（プロパガンダ）したのである。米國のデモクラシーを以つて全然一種の國家的術策であると貶し去るのは、餘りに酷に失し且つ正鵠を得て居らぬかも知れぬが、兎も角米國のデモクラシーの中には幾分術策が包含されてゐたことは爭ふべからざる事實である。

ウイルソンやロイドジョージの唱へたるデモクラシーはリンコルン流の Government of the people, for the people by the people. であつて、ポリテカル・デモクラシーである。要するに政治組織の方法に過ぎない。單に政治組織の方法から

モクラシーがオートクラシーに打勝つたと云つて、それがデモクラシー其物の勝利ではない。たゞ方法手段の勝利に止まる。勝利と云ふよりもつと明白に云へば寧ろ方法の轉換に過ぎない。

這般の戰役に於て英米の政治家は萬りにデモクラシーを提げてオートクラシーと戰ふと疾呼したのであるが、今日獨逸、墺洪國に起りたるものは徹底的社會主義である。英米は寧ろ前門より豺狼を逐ひて後門より猛虎を迎へたるが如く懊惱してゐるのである。英米のデモクラシーは最早や政體論と何等干繋がない。米佛は共和政體、我日本國及び英、伊、白の諸國は君主政體である。而して相偕にこれを唱和して相戾るものではない。然るにウイルソンがデモクラシーを主張するところは政體に拘泥してゐるのである。卽ち政治上の方法の爲めにデモクラシーを高唱してゐた。然れども今日デモクラシーと政體問題とは既に干繋がなくなつた以上は、これまで獨逸の政治方法のオートクラシーを攻擊しつゝあつたウイルソンのポリテカルデモクラシーも最早や問題ではなくなつたのである。それ故今後のデモクラシーは英米に起つた政治的デモクラシーと云ふよりも、露獨に起つた社會的デモクラシーでなければならぬ。政體論のデモクラシーは最早や過去の語草となつた以上は、今後のデモクラシーに殘る問題は、社會的階級、人種的差別、經濟的爭鬪でなければならぬ。

四、虫のよき國際聯盟

今日盛んに唱へらるゝ國際聯盟問題も眞に永久的世界平和を確立するには、このソーシアルデモクラシーをその根本の要件とせねばならぬ。國際聯盟の主要條件は通例民族獨立の保障、大小國に對する經濟的機會均等、海洋の自由等であるが、これは世界民族がソーシアルデモクラシーに徹底して初めて實現せらるべきものである。然るにデモクラシーを單に一の政策とする英米は果してこの問題を解決せんとする誠意があるか。この三大要件を實現する秋には、英米の資本制度が根本的に覆滅せらるゝのである。英米今日の社會制度が革命を起さねば、眞に恒久の平和を保障する國際

民本屋的學者は、英米のデモクラシーを以つて世界文明改造の要諦であると、臆面もなく淺薄な流行思想の提灯を持つて、英米思想の奴隷たるを誇りとするのである。

三、單に方法の轉換のみ

獨逸が破れた大なる原因は他にも一つある。それは獨逸のソーシアルデモクラシーである。ソーシアル・デモクラシーが獨逸のオートクラシラーを倒壊したのであつて、聯合國のデモクラシーが獨逸を倒したのではない。寧ろ獨逸自身のソーシアル・デモクラシーが勝利を得たから、遂に聯合軍は武力上勝利を贏ち得た事になつたのだ。此のソーシアル・デモクラシーは英米の寧ろ恐怖し警戒してゐるのである。英米が蛇蝎視せる思想が、聯合軍の獨逸のオートクラシーの武力討伐に大なる應援となつてオートクラシーを倒したのである。

元來ソーシアルデモクラシーは社會主義が政治上に於て具體的形を取つたものではない。社會民主主義其物は決して主義ではない。又主義全體を言ひ表してゐるのではない。要するに一の運用方法に外ならない。政治上のデモクラシーも一つの運用方法である。ソーシアルデモクラシーも社會的運用の方法である。オートクラシーも政治上の運用の一方法に過ぎぬ。這般の大戰爭に於てデモクラシーがオートクラシーに打勝つたと云つてゐるが、打勝つたならばそれはポリテカルデモクラシーなる政治上の運用方法が、ポリテカルオートクラシーなる一の政治上の運用方法に打勝つたのである。單に一の方法が他の方法に打勝つたに過ぎない。結局方法の轉換である。方法の轉換を以つて眞の意味に於けるデモクラシーの萬歳を叫ぶことが出來るであらうか。出來るとすればそは、時流に盲動する英米の術策的思想にかぶれた淺見者のみである。ソーシアルデモクラシーを奉ずる社會黨の究極の目的とするのは勿論社會主義である。卽ち人類社會にソーシアルデモクラシーと云ふ方法を敷くのではなくして、人類社會その物が、社會主義（ソーシャリズム）とならしむるのである。社會黨の究極の目的は手段や運用方法ではない。社會をソーシアリズムを以つて根本的に改造することである。デ

獨領植民地を國際管理に委ねることを極力主張し乍ら、マーシャル、カロリン兩島を濠洲の手に入れずんば之を國際管理とせよと非合理なる主張をしてゐるのである。過日濠洲のシドニー・サン紙は、日本は赤道以北の島嶼を要求せるが、米國は太平洋に於ける日本の勢力範圍の擴張に反對し、濠洲も亦母國政府の後援に依りて、濠洲通商の門戸に當つて散在せる諸島を、斷じて侵略的強國の手に歸せしむべからずと不埒千萬なことを云つてゐるのである。マーシアル、カロリン兩島を自分の國が領有するならば、世界の平和があるが、之を日本に領有せしむると世界の平和が攪亂されるのであるから濠洲が之を領有することが出來ないならば、寧ろ兩島を國際管理に委ねよと云ふのである。白人の鐵面皮にして慾の皮の厚きこと今更ら驚くの外はない。

殊に英領加奈陀バンクーバー地方に於ては、出征軍隊の歸還するに從つて勞働問題の見地より東洋人排斥の熱漸く熾んになつて、歸還兵士は日本人排斥の示威運動を行つたとのことである。更らに米國下院は講和成立後四ヶ年間一般移民の禁止法案を可決した。是れは機會均等、入國自由を主とせる國際聯盟の精神に反するは勿論、人種の差別撤廢を唱へてゐる米國としては實に矛盾も甚だしいものではないか。今日國際聯盟を主張せる國家が最も海洋の占有を實行し、人種の差別を敢てし、經濟上門戸壅塞をやつてゐるではないか。國際聯盟を唱へ乍ら、自ら國際聯盟を骨抜きとしてゐるのである。この骨抜き的國際聯盟を以つて永久的世界平和を建設せんとする英米の虫のよさ加減がわからない。

五、資本主義的似而非民本主義を撲滅せよ

日本が石井ランシング協約に依りて米國の國是とするモンロー主義を認め米國の南北米大陸に於ける優越權を承認したのであるから、日本がこの度の講和會議に於て日本の東洋に於けるモンロー主義を認めよと提議するのは理の當然であるが、米國は國際聯盟を楯に取つて飽くまで日本の東洋に於けるモンロー主義を排斥したのである。それ

聯盟が成立するものではない。英米は國際聯盟を今日巴里講和會議の重大議題としてゐるのであるが、國際聯盟の實現の障碍となる自國の經濟制度を改革せずしては出來るものではない。英米の社會制度は明かに國際聯盟の精神に反對の制度で固つてゐる。先づ自ら自國の障碍を去除せずして國際聯盟が實現さるべきものではない國際聯盟の根本要件たる海洋の自由を英國が否拒し、更らに經濟的機會均等主義を骨抜きにし、民族自決主義を自己の都合通りに解釋し、更らに人種の差別問題もよい加減にして國際聯盟を成立せしめんとするならばこれは一種の陰險なる政略的國際聯盟に過ぎぬのである。

海洋自由問題が論ぜらるゝや英國は非常なる苦痛を感じた。海軍卿ウインストン・チャーチルの如きは、英國は自國の存立上海洋の自由を討議することが出來ぬと云つた。ロイドジョージに取つてもこの問題は非常に苦手であつたのである。然かも辣腕縱橫なる彼は、ウイルソンを說き伏せて、講和會議に於て、全然この問題を討議せざることに成功したのである。のみならず、經濟上の機會均等を聯盟の骨子とした英國に於て、ボナ・ロー及カーゾン卿の保守黨が勢力を得て、益々商權政策を以つて世界の經濟界を縱斷せんと企畫してゐるのである。ウイルソンのおつきあひとして國際聯盟を唱へ乍ら、他方に於ては、戰後極端なる關稅政策と植民地の原料品管理を試みんとしてゐるのである。この儘にして推移せんか、英國は戰後益々經濟的獨占主義を發揮することは火を睹るよりも炳かである。

又植民地問題に於ては機會均等どころか植民地と英米國との連繫を益々緊密ならしめ、經濟上の大合同を企てて世界に商權を擴張せんとするのである。國際聯盟の唱へらるゝ今日濠洲に於ても加奈陀に於ても盛んに有色人種、殊に日本人排斥の聲が到る處に起つてゐるではないか。近頃濠洲首相ヒューズが公然日本人排斥を公言し、日本の野心を臆測し日本のマーシアル、カロリン兩島の領有を反對して我國の朝野の物議を釀してゐるのである。濠洲がニューギニア島の占領を主張し、

よ。英米は國際聯盟などを唱へ、所謂曖昧模稜の永久世界平和、正義人道を以つて國際間を瞞着し、其實獨逸の再起を豫防し、又他の強國の勢力を挫肘せんとするボイコット的手段に腐心せる間に、英米の健全分子——眞にデモクラシーを徹底せしめんとする分子——は刻一刻その實力を養ひつゝあるのだ。英米の社會革命家が一齊に烽火を擧げたる時こそ、卽ち露獨の徹底デモクラシーが似而非なる英米のデモクラシーに大逆襲を企て、その專制的壓制的殺人的資本制度を覆滅する秋である。

新刊紹介

社會的研究　高田保馬著

（定價金貳圓、東京寶文館發行）

最近社會學の進歩は實に驚くべきものなり。殊に應用社會學に至りては幾多の新研究現れ、社會學研究上新生面を拓きたるなり。本著は高田保馬氏が過去八年間に亘りて諸雜誌に發表せる幾篇の論文中よりその優秀なるもの十二章を選びて一卷をなせるものにして、斯學に造詣深き著者の創見を最もよく覗ふに足る。全卷を分ちて第一社會學的方法論の問題、第二社會人口及び社會心意の問題、第三社會組織及び社會幸福の問題の第三篇となし、その創說と卓見は大いに見るべきものあり。殊に第二篇の分離論及び第三篇の家族の將來と社會の團結等は幾多の創見に富む。近來人間の社會的生活及社會心理の研究漸く盛んにならんとする秋に當りて本書の如き價値ある研究論文を得たるは大いに喜びとするところなり。大方の讀書子の一讀を薦む。

* * * * * *

ならば、我國も國際聯盟の要件を楯に取つて米國のモンロー主義を認めざる方針に出づるならば、米國はこれは我國の國是である、米國存立の大理由であると云つて、飽くまでモンロー主義を主張するのは明かである。由來英米人は慾となると人情も道理もわきまへざる人種である。相互觀念（リンプロシテー）に缺如してゐるのが彼等である。英米人に都合がよければ世界の平和があると思つてゐるのである。這般の大戰も英國が經濟上餘りに都合が好すぎるから起つたのである。英國の好都合は英米が今日唱道する國際聯盟に反するのである。獨逸から見たならば、世界の永久的平和を確立するには、英米の好都合を打破せねばならぬと云ふであらう。英米が或程度まで、不自由になり不都合になつて初めて眞正なる世界平和が確立さるゝのである。國際聯盟の要件とする經濟上の機會均等を期する爲めには、英國の商權政策に大改革を加へねばならぬ。卽ち英米の資本制度に大革命を施さねばならぬ。

獨逸は既にソーシアルデモクラシーに依つてミリタリズムの革命を見た。次に來るものは、英米の資本制度のオートクラシーの大革命でなければならぬ。過日の英國の總選擧に於て、不幸にして、自由黨、勞働黨は失敗を招き、表面ロイドジョージを擁する保守黨の天下となつた樣であるが、然し英國の反資本主義が決して屛息せるものではない。否却つて社會主義が英國社會の暗流となつて、次第にその勢力を加へつゝあることを觀取せねばならぬ。保守黨が勢を得て却つて、反貴族、反資本家、反地主熱が日々に昂進せんとしてゐるのである。勝利に醉ふ英國の政界の裏面には露獨に釀成された恐るべき革命思想が漲つてゐることを悟らねばならぬ。ヘンダーソンやラムゼー●マクドナルドやロバートスシレーの諸氏が奮起する秋は卽ち英國資本制度大革命の警鐘を亂打する秋である。

米國に於ても安價なる而して欺瞞的なる術策的デモクラシーの破產の秋は必ず到來する。スパーゴ、ゴンパース、ダンカンの諸氏は似而非デモクラシーの打破を叫ぶのは近き將來であることゝ思

様な見方は正しいか何うかと云ふに、一面に於ては眞理を傳へて居るけれども他面に於ては甚だしい謬見に陷つたものと謂はなければならない。自然法派が人類に於ける普遍性を求めるとに偏依して國民に於ける特殊性を蔑にした點を攻撃したのは一卓見であつたけれども、國民に於ける特殊性を求めるに偏依して人類に於ける普遍性の存することを忘れたのは非常なる誤解であつた。是れはフイヒテの民族主義や商業的鎖國主義又はイエリングの社會的功利主義と軌道を同じくするもので人格に對する自由の正當なる解釋で無いのみならず、自由そのものを湮滅する傾向がある。

五　社會學派に於ける自由の意義

(一)社會法學に於ける自由の觀念

功利派や歷史派の影響を受けて獨佛の兩國に於ては、法律現象が社會現象であつて法律は社會的生活の規模であると云ふことに留目して、法律を研究するに社會學的方法(méthode sociologique)を以てすべきことを主張し、謂ゆる法律の社會化(The socialization of law)を標榜する社會法學(Rechtssoziologie)の一派を生じたのである。その思想の淵源は社會學の鼻祖として知られる佛蘭西のコントの實證哲學(Cours de philosophie positive)に發したのである。けれども社會學がコントの實證哲學から漸次獨立するに至つたと同じ徑路を辿つて、社會學的法律學もコントの實證哲學から獨立して且つ社會學そのものからも分岐して單に社會學的方法に憑據して研究するに至つたのである。それで此の派の學說も最初は社會學と同樣に或は實證學的方面に偏し、或は心理學的方面に偏して居たのであるが、漸次に綜合的統一的傾向を帶んで來て、今日の謂ゆる社會法學を現出するに至つたのである。米國ハーヴアード大學敎授バウンド氏が法理學講義案(Outlines of Lectures on Jurisprudence)の中に綜合して居る社會法學者の主張に、更に其他の學者の意見を加へて敷衍して見れば左の如き主張になる。

以爲らく、(一)法律制度とか法律學說とか云ふものは、其の實際社會に及ぼす效果の如何に重きを置かなければならぬ。例へば法規とか學說とか

法律倫理學より觀たる言論著作印行集會及結社の自由（三）

一條忠衞

四　歷史法學派に於ける自由の意義

自然法學派が法律の理想を自然に求めて、過去の社會を無視したのに反對して、法律は吾人の意識に由つて作られるものでは無くて、過去の社會の習慣や判例に基き、その輿論制裁の中に存すると說いたのが歷史法學派である。この思想はライブニッツ又はシェリングに發したのであるが、佛蘭西革命や普佛戰爭の影響から獨逸諸國に於ける國民的自覺によつて具體化せられ、フーゴー、テイボー、ザヴイニー等に提唱されたのである。

彼等の意見に依れば、法律と民族とは最も深い關係を有して居るもので、法律の統一と民族の統一とは相表裏して居るのである。研究方法から言へば歷史的法律であるが、その內容から見れば民族精神（Volksgeist）の發現であつて、民族の法律確信に基くのである。そして此の法律確信なるものは卽ち民族的心理を以つて本體となし、民族法（Volksrecht）として習慣、判例、學說又は條文となつて發現するに過ぎないのであると說くのである。だから此の學派は別に法律上の自由に關して當面から研究を試みたのでは無いが、件の學說に依つてその自由の解釋の上に大なる制限を加へたものである。その結果として、此の學派に於ける自由なるものは、自然法學派に於けるが如き個人の自由では無くて、民族の自由であると解されたのである。卽ち法律上の自由は民族精神に於ける自由であつて、民族と共に生じ、民族と共に長じ民族と共に亡ぶものと考へたのである。然らば斯

法律の無缺陷(Lückenlosigkeit des Rechts)は望むことの出來るものでは無く、唯だ個々の事件の有理正當なる解釋による自由法說に從つて進まなければならぬ。(二八)要するに法律の究竟目的は其の實效到達に存する。法律の制裁よりも寧ろ法律の社會上の目的に重きを置かねばならない。だから概念法學や論理法學を離れて、目的法學(Zweckjurisprudenz)利益法學(Interessenjurisprudenz)に到らなければならぬ。上部の孔から事件を挿入して下部の孔から判決を抽出す自動機械になることを避けて、吾々の實際的生活の規範たるべき、活きたる法律(das lebende Recht)を研究し適用するやうに成らねばならぬ。是れが社會法學の根本的精神であると。

今、社會法學の主張を見るに、此學派は畢竟するにイエリングの社會的功利主義を發展させて、法律の社會化(The socialization of law)なるものを徹底させんと試みる最近學界の思潮である。だから社會を主として個人を後にし、社會の利益(Interesse)を目的として個人の利益を手段に供するのである。從つてこの學派は從來の法律學說や裁判に對する缺點を指摘して、社會學的研究を併せ、自由法說を加味したのは頗る卓見であつたけれども、その反動として終に極端に走つて却つて正鵠を失するの傾がある。殊に社會學的方法を偏重して自足論に陷つて居る點や、又は從來の法規に基く論理法學を排斥して裁判官に法律補充の自由權能を無限に與へて、法律の安定を危くする傾向の存する點である。其結果として社會法學には個人の人格に於ける自由と云ふ方面に就いては頗る稀薄なものとなり、何等の研究も無く、何事も言つて居ないと云ふ有樣である。個人の存在は社會の存在の方便であるからして、コントの言つて居るやうに、個人は社會に對する義務を負ふのみで、個人の權利と云ふものは無いと云ふことになる。隨つて個人には自由と云ふものは無いと云ふ結論にもなる。又た墺國のグムプロヴイツツの言つて居るやうに、國家の元素は個人では無くて社會階級と云ふ集團の自然法的運動に由つて發生した社會的現象と見るのであるから、個人の人格に

を斯様に規定したり主張したりすることが、社會に如何なる實益を與へるか、若し其の反對の規定や主張を試みたならば、それが社會に如何なる損害を與へる結果になるかを攻究することが必要であり、又た法律的社會現象を統計的に調査して見ることが肝腎である。(二)從來の立法準備は內外法制の分析や比較の研究のみに沒頭して居た。法律生活に於ける現象中の一面に過ぎぬ法規(Rechtssatz)の抽象的內容のみを取扱ひ、而も此の意味の法律學を以て獨立的に法律現象を說明するに足るものと思ふて居たけれども、斯様な意味に於ける法規自身の比較研究のみでは極めて不充分であつて、法律の社會的作用の比較的研究が更に一層重要である。その方法として採用すべきものは實に社會的方法である。(三)法規の要は施行と云ふ點にある。然るに法律に關する施行方法の學術的研究に至つては、從來の法律學には遺漏されて居た。之が補はらなければ如何なる法規と雖も、各法規それ自身の社會的目的をすら達するに足らぬばかりで無く、社會全體の目的を保證することは到底不可能である。それで法規をして實效を奏する手段方法の研究が大切である。(四)法制史は從來のやうに單に法規史と云ふものに止つて居てはならない。法律學史も亦た學說史や方法史に滿足して居てはならない。進んでその法規と學說とをその當時の社會狀態や經濟狀態に於ける關係上から研究しなければならない。卽ち法律は社會史(Sozialgeschichte)を主眼とし、法律學は社會學自身の一方面として、社會的法律史學と云ふものに成らなければならぬ。(五)從來の法學は法規の論理を拙はんが爲めに、適用の衡平を犧牲に供する傾があつた。その結果は啻に法律學の不幸のみならず、法律が社會的目的に順應せず、裁判官が社會的目的を了解せず、法規は杓子定規になつて社會上正當なる結果に導くの規矩準繩と考へられず、その結果は法律的生活と事實的生活との間に一致しない社會的損害を招致するのである。だから法規は單に裁判官の一般的指針に過ぎぬもので裁判官は法規以外に科學的自由討究によつて、事物の眞諦に基く法律を見出さなければならない。

は犯罪者と稱せられる特定人に科せらるゝ處置であり、害惡である。然らばこの犯罪者と稱せらるゝ者の謂ゆる犯罪とは如何なる性質のものであるかと云ふに、それは責任(Schuldhaftigkeit)に對する違法(Rechtswidrigkeit)の行爲であつて、この違法の行爲なるものが社會の法益秩序(Rechtsgüter ordnung)に對して特に危險(Gefährlichkeit)であるが故に刑罰を以て威嚇するのである。語を換へて言へば、犯罪とは法益的に保護されたる利益に加へた暴擧(アンシリッフ)である。さうして此の暴擧なるものは、立法者の見地から見て所與の法律秩序に對し、特に危險なる所の暴擧であるが故に、國家がこれに刑罰を科して其の違法行爲を處分するので、課刑された者が謂ゆる犯罪者である。然らば此の犯罪者なるものに刑罰を科するのは如何なる必要からであるかと云ふに、それは刑罰を科せんが爲めに刑罰を科するのでは無くて、それに由つて謂ゆる一般豫防(Generalprävention)と特殊豫防(Spezialprävention)との目的を達せんに外ならぬ。さうして、此の一般豫防に於ける刑罰なるものは直ちに想像されるが、その特殊豫防に於ける刑罰なるものは犯罪者をして社會の有用なる一員となさんと欲することが目的であつて、(一)改善され得る能力あり又改善を必要とする犯罪者に對しては改善刑罰となり、(二)改善を必要としない犯罪者に對しては懲戒刑罰となり、(三)改善され得る能力のない犯罪者に對しては不能加害刑罰となるのである。だから吾々の主張する刑罰なるものは、絶對說又は形式說の如くに犯罪の責任に對する應報なるものを目的として、犯罪者に科刑する害惡ではない。責任とは遂行した違法行爲に對する應答(フォルアントヴォルトリッヒカイト)であつて、責任能力とは常態に決定し得(ノルマールデターミニールバールカイト)ることで、刑罰を科して效果を收め得る能力である。だから責任能力なくては責任なく、從つて犯罪の無いことも元より明である。刑罰の基礎としては何等原因なき自己決定や因果律を無視した意味の自由の意思を必要とはしない。人間の有らゆる行爲は機械的では無く心的に因果されるものである。卽ち寫象によつて規定され動かされるもので何れの方面から見ても非難さるべき點の無い事實

は自由と云ふものは無くなつて單に集團本位になる。又た獨逸のギールケのやうに人類各種の團體に個人人格對社會人格と個人意志對社會意志との存在を許して法人論に關して卓見を示しても、又はワードのやうに動的社會學を主唱して社會力の本質を心理力に置いても、其等の學說にのみ法律の根抵を敷いて、而も社會本位を墨守して社會利益の保護を法律の終局目的として居る以上は、吾々の人格に於ける自由と云ふものは客位となり、手段となり、方便となり、奴隸となることは極めて明瞭な成行である。隨つて法律は單に他律的のものとなつて自律的の性質を失ひ、義務本位になり權利は第二義に貶せられ、而もその義務なるものは吾人の人格に於ける自律の發動では無くて社會の專制的命令に應ずる外部の反動に過ぎぬものと爲るのである。カントの法律倫理學の長所は個人の自由を主張し、權利義務の觀念を明にし、人格の尊嚴を高調した點であつて、その短所は人格の社會的方面に冷淡な點であつた。又た英國に於ける個人的功利主義の長所は個人の自由を標榜した點であつて、その短所は個人の福利と云ふ漠然たる標準を揭げて最大多數の最大幸福を認知するに足る計量器であると思つた點であつた。然るに社會法學は此等の點に於て冠履顚倒の見を懷いて居る。カントの短所を矯めんが爲めに社會學的方法を以てして反つて其の長所を傷け、個人的功利主義の弱點を正さんが爲めに社會的功利主義を以てして反つて其の長所をも害したのである。然らば眞理は那邊に介在して居るかは想像せらるゝので、社會法學者は尙ほ竿頭一步を進めて研究する餘地がある。

(二)社會防衞說に於ける自由の觀念

以上は法律全般に亘つての社會法學派の主張であるが、それが刑法の方面に向ふ時はその主張が一層鮮になり、謂ゆる社會防衞說となつて現はれるのである。今その代表學者として獨逸のリストの主張を傾聽して見よう。

以爲らく、刑罰の本質とする所は、特に防護すべき價値があり、特に防護を必要とする所の社會の利益(Interesse)を防護するにある。そして其れ

本的弱點である。次に防衛論者は刑罰の解釋に就いて、刑罰とは犯罪者と稱せらるゝ特定人に科する害惡であると云ふのである。然らばその犯罪者と稱せらるゝ者は如何なる性質のものであるかと問へば、犯罪と云ふものは責任能力を有する人間にして危險なる結果を將來した違法の行爲であつて、かうした意味の犯罪を爲した者が犯罪者で科刑の唯一の對象であると答へるのである。だから此等の點に於ては倫理學上の見地と同感である。然るに防衛論者はこの犯罪に對して刑罰を科する目的は行爲者の責任に對して行爲者を懲戒し又は改善して人格的生活の規範を防護することが目的では無くて、社會の法益を防護せんが爲めに一般豫防又は特殊豫防の目的を達せんとすることであると主張するけれども、若し防衛論者が斯樣な目的から犯罪者に刑罰を科する必要があるならば、行爲者の責任能力を云々する必要なく、吾人の意識に於て違法行爲に對する應答性や常態性を吟味する必要は更にないので、意思の自己決定すら問ふを用ゐないでは無いか。過失行爲でも、衝動動作でも、本能行動でも、或は精神病者の行爲でも又は小供の無意識的行爲でも、其等が若し社會の法益秩序を亂る時は之を暴擧として刑事上の犯罪に問ふべきでは無いか。然るに此等の行爲は行政的處分に止まるのみで、倫理的罪惡の對象にもならず、防衛論者自身と雖も之を刑事的犯罪と目することには大に躊躇するのである。然らばこの躊躇する理由を防衛論者は那邊に置くかと云ふに、彼等は刑罰を科して效果を收め得る能力と云ふ點に置くのである。責任能力なくては責任なく、又犯罪も無いとまで言及して居る。けれども是れは防衛論者に取つては、甚だしい矛盾であり、且つ頽環論法であり、尠しも說明には成つて居ない。何となれば、刑罰を科して效果を收め得る能力ならば、刑罰を分類してロンブローゾ一派の不能加害刑罰（Unschädlich machung）を設けることは矛盾の甚だしいものである。且つ刑罰の觀念を明にせんが爲めに責任能力の觀念に入り、責任能力の觀念を明にせんが爲めに吾人の意識に於ける常態的能力と非常態的能力とに分類して、後者は何故

を承認すれば足るのである。然らば斯様な意味に於ける精神上の行爲と云ふものは何んなものかと云ふに、それは外界に於ける變化を有意的に惹き起すこと、若くは防止せぬことである。だから刑罰も個人の發達に見るが如くに、無意識的に合目的な放恣的な衝動行爲から、目的觀念によつて規定され、穩當にされたる意思行爲へ推し移つて來たのである。それ故、『罪せられるものは行爲では無くて其の行爲者である』(Nicht die That, sondrn der thäter ist zu bestrafen) と云ふことが、吾等の標語で無ければならぬ。卽ち罰せらるべきものは行爲では無しに、行爲者としての犯罪者であり且つその目的は犯罪者の改善と云ふことにあり、犯罪的素質の根絶にある。隨つて其の改善は市民的改善(ビュルガーリッヒ・ベッセルング)であつて、必ずしも倫理的改善(シットリッヒ・ベッセルング)では無い。單に社會の利益を防護せんが爲めの目的觀念に發するに外ならぬ。これが吾々の主張する社會防衛說の本義であると。

右の主張によつて社會防衛說なるものを見るに一般の社會法學の主張に憑據したものであるから社會法學に存する長所は總てこれを繼承して居るのみならず、それが持に刑事上の學說であるが故に、自己獨特の長所を發揮して舊刑法學に優つて居る點が多いのである。隨つて其れに含蓄されて居る基礎觀念(グルンドベグリッフ)に於て倫理上の觀念から見て頗る發達した點があるけれども、社會法學がまだ其研究の首途にある理由からして、社會防衛說にも幾多の難點が附屬して居るのである。先づ社會防衛論者は社會學の根本觀念に從ひ、社會を先にして個人を後にするのであるから、刑罰を科するに當つて社會の利益を目的として或る特定人を手段にする點に於て、社會學的功利主義に對する倫理上の一般的非難を免れないのである、抑もその社會の利益と云ふものは如何なるものを指すのであるか防衛論者は極めて無雜作に平凡なる常識として解して居るけれども、倫理學上に於ては社會の利益なるものを計量するメートルは無いと云ふ定論になつて居るのであるから、其れに代るべき確實なる標準を見出さぬ中は、學說としては一大難關に差し掛つたものである。これが先づ防衛論者の根

足るとしたので、勢ひ刑罰や犯罪の意義を客觀的に尋求して社會の利益を本位に防護しなければならぬ事情からして、個人の人格に存する主觀的直接經驗として最も明かなる自由意志や責任能力の觀念をば、自己の學說の組織上不純の觀念として抹殺したのである。是れは防衛論者が常態的能力と非常態的能力との差別を說明するに當り、吾人の意志に於ける自動自發（Spontaneität）の自己決定的作用に基ける自己の行爲に對して、善惡の觀念に由來せる當然の結果として受くべき責任であると解する人格上の價値規範の意識を加へなかつたからである。この價値規範の意識はカントによつて主張されたる人格に於ける自由の觀念に當るので、『自然的必然の普遍的法則と矛盾せざる自由的原因の可能』（Möglicket der Causalität durch freiheit, in Vereinigung mit dem allgemeinen Gesetze der Naturnothwendigkeit）と云ふことであり、これ有るが爲めに道德も法律も可能となるのである。責任とは此の人格的意識に於ける自動自發の決定的作用に基く應答であり、犯罪とはこの責任に對する違法の行爲であり、刑罰とは此の犯罪を爲した特定人に對して善惡の觀念に基く人格上の規範的要求を國家の公權力（obrigkeitliche）に據つて處置することである。だから刑罰と云ふものは社會を防衛するのが目的では無く、人間に普遍的なる規範意識の要求として、吾々の人格的生活の法則に違反した犯罪者を懲戒又は改善して人間に於ける人格的生活の法則を防護することが目的である。斯かる意味の刑罰の結果として初めて應報論者の目的も達せられ、同時に防衛論者の謂ゆる社會の利益なるものも防護され、リストの謂ゆる一般的豫防も特殊的豫防もその實效を奏し得るのである。社會を主とするのでも無く個人を主とするのでも無く、また利益といふやうな功利的目的からでも無く、應報といふやうな刑罰自身の目的からでも無く、もつと偉大なる人生の根本目的から出發して、社會と個人とを綜合した人間の人格に於ける生活規範の理想を防護することが目的でなければならぬ。是れが法律倫理學上から觀て最も進步した刑罰の意義がある。社會の利益を防衛する必要を論ずるなどは、僅に眞理の一端を主張するに過ぎない。（未完）

に犯罪と稱せらるゝかの理由を尋ねて居るのに、刑罰又は責任能力それ自身を持ち出して答に應ずるは循環論で無くて何であるか。ハモンは此の點の說明に窮して、『責任といふ語を存して而も其の實を採らぬ』と云つたが、若しその實を採らぬならばその語を存して置いても一向意味のない虛字に過ぎぬもので、學術研究の繫辭にはならぬ。然るに法學博士牧野英一氏はこのハモンの意見に同意されて、『實は其の通りなので、此の點から云へば責任と云ふ語其者は使用せざることが誤解を避ける途かも知れない』と言はれて居る。けれども責任と云ふ語を使用しなかつたならば、隨つて責任能力と云ふ語も使用せぬことになり、隨つて有意的行爲と云ふ觀念も朦朧となり、意志の自由と云ふ語などは全々否定され、その結果として吾人の意識に於ける常態的能力と非常態的能力とを區別する手段を失ひ、終に刑罰を科して效果を收め得る能力なるものを定義することすら不可能になつて了ふのである。唯だ殘されたものとしては、吾人の合法的行爲又は犯罪と云ふものは社會現象の因果關係により實證的生理的心理的作用であつて、非決定的意志の結果だと云ふ結論になる。そこで過失行爲でも、衝動行爲でも、本能行爲でも精神病者の行爲でも、常人の有意的行爲でも、小供の無意識的行爲でも、苟も社會的生活の利益に危險を與へる場合には、悉く犯罪として處罰しなければならぬ道理になる。その中で獨り常人の有意的行爲を犯罪として取扱ふのは、單に便宜の上からであつて學術的に理由の存するものでは無いと云ふことになる。延いて人間の人格には自由と云ふものは探しても無く、善をするも惡をするも必然の豫定であつて責は負はないと云ふ結論になる。

然るに社會防衞論者は人間に目的觀念と云ふものを許容し、有意的行爲と云ふものも承認し、自己決定の觀念すら嘉納して居るので、明に人間の人格に於ける自由と云ふものも行爲に於ける責任と云ふものも內含させて居るのである。然るに防衞論者は社會と云ふ觀念に餘りに心醉して、實證的な生物的な心理的な客觀的考察のみを以て自ら

五、法律學との關係。今日の時代に於て吾人は法律を離れて國家を考ふると能はざるが如く法律を離れて社會を想像すること能はず。即ち社會の組織及び制度の大部分は法律に依りて成立し且維持せらる。故に社會の組織若くは制度の改善を策せんとせば勢ひ法律學の力に頼らざるを得ず。其の改善の手段として或は現行法の改廢を要するものあるべく、或は新たなる立法をなすを要する場合あるべきが故に、何れも大多數の場合に於て法律學の力に俟たざるを得ざる也。此の意味に於て法律學は社會改善學の基礎をなす。而も之と同時に又法律學は社會改善學の指導啓發に因り其の指示する社會的理想に向つて向上進歩の階梯を登ることを得べきが故に兩者は互に因となり果となりつゝ相俟つて無限に進歩して止む時なかるべし。

醫學……生理學。＝社會生理學。（社會學概論）

社會改善學……病理學。＝社會病理學。（例へば貧民發生の原因及びその生活狀態の研究）

治療學。＝社會治療學。（例へば犯罪癖の矯正又は貧困生活の退治の研究）

衞生學＝社會衞生學。（例へば犯罪の豫防又は貧困生活の豫防の研究）

六、醫學との比較。人體も社會も等しく有機的生活體也。故に互に比較することを得、從づて理解を援くること大也。

以上の如き趣旨に基き、順序を追ひて着々研究の歩を進めんとす。只研究の題目、範圍共に頗る廣汎に渉るを以て、短日月の間に研究の完成を期するは固より不可能事に屬す。且又微力なる余輩一人の力に依りて此の大業を成就せんは甚だ難しとする處なれば、憂を同うする天下の識者に教を請ひ、材料を蒐集して大成を他日に期せんとす。今左に研究方針の大綱として内容の概略を掲げ、各題目に付き各方面より材料を蒐め、同憂の志士に對して其の垂教と援助とを仰ぐに便せんとす。希くは不完全極まる現代社會を理想の域へと導かんが爲めに、各位の垂教と援助と鞭韃とを惜まれ

社會改善論

平山六之助

緒言

社會改善學創設の趣旨

一、現社會には缺陷多し。其の缺陷の何たるかを究め其原因を探り、其の矯正方法を發見せんとす。

二、社會改善の事に關し、現に國際間の平和運動勞働問題、感化事業、救濟事業の如き獨立せる社會事業ありと雖、統一ある一體として之に系統を與へ、獨立の學として組織せられ且理論的に其說明を試みし者未だ之れ有るを聞かず。單に內務行政の一些事として臨機吏僚の手に處理せられつゝあるは、社會萬般の事、組織的統一的機運に向ひつゝある現代に於て、眞に經世濟民の理想を實現する所以に非ざるを思ふ。是れ社會改善の事を理論的方面より觀察して、之を一の學として組織的に研究するの必要あるを痛感せる根本理由なりとす。

三、社會學との差異。社會學は『社會とは何ぞや』に對する答を學ぶを主たる目的とするも、社會改善學は『社會は如何に在るべきか』の理論に立脚して、此の理論に背反せる社會制度、法律組織の改善を策せんが爲め、其の原理原則を發見するを以て主たる目的となす。

四、社會政策學との差異。社會政策學は主として社會生活と經濟との關係を研究することに重きを置くも、社會改善學は其の範圍更に廣く且研究の目的は一層根本的なり。固より改善學と政策學とは研究の目的に共通の點多きが故に、彼此互に相補ふの便あるべしと雖も、研究目的に根本的差異を含む點に於て、其研究の範圍及び程度を異にする點に於て、自ら二者の獨立存在を理由あらしむるものと信ず。

し、手續法は其の權利保護の方法手續等を規定するが故に、外觀上權利保護に缺くる所無きが如しと雖、此等の場合に於ける權利實行の方法は、大部分は辯護士の手に賴らざるを得ず。蓋し自ら訴訟を爲すも法律の專門家を相手にすれば理ありて負くるの非運に遭ふこと多きを以てなり。辯護士に依賴せんとすれば請求金額に比して不相應の報酬を支拂ふ事を要するが故に、五圓、十圓の請求は之を斷念して泣寢入りする場合寧ろ現時普通の狀態なり。五圓、十圓の金錢は少額なりと言ふ勿れ。小商人の實生活と對比すれば富者の數萬金に該當する事寧ろ普通なりとす。而かも無報酬又は僅少の手數料にて此の如き權利の實行を爲し得る機關は今日我國內に未だ存在せず。之を結果の上より觀れば我國の社會は貧富の差に依りて其人民の權利保護に差等ありと言はざるべからず。以上は民事々件に付てなれど刑事々件の輕罪に付ても同樣なりとす、此の缺陷を救濟する方法の研究は社會改善學の重要なる一部を成す。(慈善病院と同性質の慈善的權利擁護の機關を必要とす)

(三)貧民及乞食等に對する援助及救濟に關する研究

社會學者經濟學者の所謂第三紙民及第四級民は其の數の上より言へば社會生活を營む全人類の四分の三以上なり。斯かる多數の人々をして諸種の社會的事情に因り終生其志を遂ぐるを得ずして終らしむるは、人生悲慘の極と言はざるべからず。又此種の貧民の存在は社會全體の進步向上を害するが故に、之が救濟援助を圖ると共に其生活の向上發展の方法を研究せざるべからず。

(四)勞働者と資本家の調和の方法に關する研究。命令服從の關係より個人對立の關係へと進みつゝある現代に於て、兩者間に各種の紛爭を生ずるは時代の進運に伴ふ已むを得ざる現象と言はざるべからず。而して此間の爭議解決の方法として或は司法機關の裁判に依り或は個人の仲裁調停の手段に依りて一時爭議の解決を爲しつゝあるも、固是れ姑息の方法にして勞働爭議の根

ざらんことを。

社會改善學（內容の概觀）

第壹編　總論＝社會改善學の概念。

第一章　現代に於ける社會制度上各人に對して存する共同の缺陷とは何ぞや

（一）社會とは何ぞや。（社會學概論＝社會生理學）

（二）社會は如何にあるべきか。（社會向上の目標＝理想）

（三）社會の缺陷とは何ぞや。

第二章　社會病理學

（一）社會に缺陷の存する理由及び發生する原因如何。

（二）社會の缺陷と實生活との關係如何。

第三章　社會治療學

（一）如何にして現在の缺陷を除去すべきか。

（二）缺陷除去の最良の方法如何。

第四章　社會衞生學

（一）缺陷發生の主觀的豫防法＝內部的豫防法。

（二）缺陷發生の客觀的豫防法＝外部的豫防法。

第五章　結論

（一）正義と人道のみの行はるゝ愛の世界實現の爲の努力。

（二）各人の一致協力を要求す。殊に教育家、宗教家、政治家及び各種專門學者の一層大なる社會的共働的活動を要求す。

第貳編　各論

第一章　弱者に對する援助の研究

（一）老幼、病者、癈疾不具者に對する援助制度及び援助の方法に關する研究。

現時既に養育院の如き設備ありと雖も、社會的制度として之を觀れば尙甚だ多くの缺點を有す是れ其の根本的研究に於て未だ至らざる所あるが爲め也。

（二）貧困なる人民の權利擁護の方法の研究。

一國の法律が其の人民に與ふる權利保護は平等公平なるべく、貴賤貧富に依りて其の取扱に差等を設くべからざるや論なし。而かも之を實際生活に徹するに此の理論は毫も貫徹し居らざる也。例へば小商人の賣掛代金、職工の勞銀等に就て、我が實體法は明に其の請求權の規定をな

て其制度の根本的研究を要するもの甚だ多し。各國制度の比較研究亦重要なる一部を爲す。又少年裁判法は近く成法たらんとしつゝあり。甚だ喜ぶべし。只其實施に際して法を活用する特別の注意を切望す。

(八)婦人の社會的待遇改善に關する研究。

我國に於ける待遇は近世文明國中最も不公平也。之れ社會の健全なる發達を期する所以にあらず。社會制度の根本に觸るゝ問題なるを以て愼重の研究を要す。

(九)家族制度改善の研究。

我現行法は家長權に對して相當の制限を加へたるも、吾人は未だ充分なりと信ずる能はず。政治上立憲制を採用しつゝ家族制度上依然として專制的家長權を認むるは一の矛盾ならずや。今日の家長權は必要の限度を超えて過大なりと信ず。實例は結婚問題の悲劇として吾人の目前に頻出す。實際上は法律の認むる以上の程度範圍に於て家長權を濫用する者甚だ多く、爲めに家庭生活の調和を缺き、其の爲めに勢力の空費を爲す者、家庭悲劇の犧牲となる者吾人の耳朶に絕たざるは深く憂へざるを得ざる所とす。此の社會の實狀に鑑みて家族制度に關する根本的研究をなさんとす。

(十)社會敎化の方法の研究。

(イ)家庭使用人敎化の研究。

(1)未成年の丁稚女中の敎育。

諸種の社會的事情に因り幼にして使用人となれる者の境遇には同情すべきもの多かるべく、壁たるの素質を有しつゝ琢磨を加へざる爲めに生涯を塵裡に終ふる者亦尠なからざるべし。之が一般的敎育の方法は人道上の問題として研究せられざるべからず。

(2)丁年以上の使用人敎化の研究。(廿歲以上四十歲)

或程度の束縛の下に他人に賴りて生活しつゝある彼等に對し、他日自由獨立の生活を營ましむる準備として、彼等の衷に潛在せる社會生活の適應性を開發誘導して其屈從生活に墮するの弊を矯正せざるべからず。

本的解決手段と言ふ事を得ざる也。吾人は更に進んで時代の進運に適應する勞働爭議の一般的解決機關の特設に就き、其の根本的研究を爲さんとする者なり。勞働者に薄くするの非なるは論なしと雖、資本家の利益を輕視する傾向は之を矯正せざるべからず。

(五)織業紹介機關の設立に關する研究。

社會生活の復雜に赴くに連れて、各人の自由競爭は益々激甚となり、優勝劣敗の原則によりて失職者を生ずるは數の免れざる所とす。斯る人生の落伍者と雖も、之を放任して顧みざるは人道に反し且つ社會を全體として向上發展せしむる所以に非ず。之れに對して其の能力に適應する職業を授くるは唯り本人の幸福利益たるに止まらざる也。而して今日既に公設の職業紹介機關なきに非ざるも、其の設備に於て其の方法に於て甚だ不完全なるのみならず、其の存置の場所亦極めて小局部に限らるゝが故に、之れを一般的機關と言ふことを得ず。之れ其の根本的研究を要する所以也。

(六)出獄者に對する援助の方法の研究。

一般社會は出獄者を嫌忌し且之を冷遇す。冷遇に止まらば猶ほ忍ぶべし。生業を與へられざる者尠からざる事實を目睹しては吾人心より世の殘酷を悲まざるを得ざる也。累犯者の多きは其原因の一を茲に含むと言はざるべからず。一般人に向て『レ、ミゼラブル』のミルエル僧正の心を望むを無理なりとせば、せめては彼等出獄者の生活に援助を與へ且其の寂しき心に慰安を與へて向上の一路を辿らしむるの機關を設備する位は社會生活より利益を享受しつゝある各人の道德的義務ならずや。犯罪そのものは厭ふべく惡むべきものなれど人を惡むは人道に反す。愛の精神は此研究の根柢をなす。

(七)不良少年感化の研究。(附、少年裁判法の研究)

現在の感化院の制度及び設備は吾人の理想に對して可なりの距離あり。又幼年囚に對する取扱方法に付ても吾人は尠からざる不滿を有す。一言之を掩へば愛の精神の缺乏に歸す。設備の如きは第二義以下のものたり。然れども更に進ん

し。良俗に反するが故に直ちに之を絶滅せしむべきか。三段論法にて片付け得る程簡單なる問題に非ず。蓋し性慾は人類の生存慾中の最も強烈なるものゝ一なれば也。理論に從つて之を絶滅せしむるとも、何等かの形式方法に於て再び其實質が社會に行はるゝに至るは東西の歷史の實證する所也。殊に生活難の結果結婚生活の遲るゝ爲め、此の現象は一層甚だしきを加ふる傾向あり。最善を得ずむば次善を採るの外なし。唯今日の制度には甚だ多くの缺點を有す。此の制度の存在を最小限度に局限しつゝ之れより生ずる害惡防止に付き充分の考慮を費やさゞるべからず。是れが研究亦社會改善學の任務たらざるを得ず。

弱者に關する援助の研究項目は固より以上を以て盡くるに非ずと雖、元來社會問題の發生は數に於て無限なるを其性質とするが故に、有限の中に之を網羅するは不能なるを以て其顯著なる問題のみに付き研究の方針を列擧せり。之が實際の研究に當り其項目の加除按配の自由なるべきは論を俟たざる所とす。以下各章凡て之に準ず。

第二章　國字改善の研究。

(一)現在の我が國字が教育及び一般社會に及ぼす影響如何

(二)國字改善は可能なりや。

(三)國字は之を如何に改むべきか

(四)現國字より新國字への過渡的手段の研究。

第三章　學校改善の研究、(小學校より大學まで)

(一)設備の改善。(附、教授科目及び學校系統改善の研究)

(二)教授法の改善。(附、優秀生徒の特別教育の研究)

(三)教師の改善。(附、教師優遇方法の研究)、

(四)學校教育と宗教々育との協力に關する研究。

第四章　人種改善の研究。(優種學(ユーヂニックス))

(一)人種改善の意義如何。

(二)人種改善は一般的に可能なりや。

(三)人種改善の方法如何。

(イ)積極的方法。(優良人格者間の結婚)

(ロ)鑛山工場農場大商店其他の使用人の敎化の研究。

(1)未成年者に對する敎育は(イ)の場合に同じ

(2)丁年以上の者の敎化亦(イ)の場合に準ずべき也。

右(ロ)に列擧せる如き場所の使用人に對する敎化は、集合敎育を實施する上に多大の便宜を有す。

(ハ)一般人の敎化に關する研究。

一般文明の進歩に比して各人の道德的生活の進歩甚だ遲々たるの感あり。慨世の志士、物質文明を呪ふは一面の眞理を含むと信ず。精神文明の發達と道德的生活の向上とを圖らんとせば、現時の學校敎育の外、更に進んで一般人の敎化に付き其の研究の歩を進めざるべからず。

以上(イ)(ロ)(ハ)に於て述べたる理想を實現すべき方法の研究は亦社會改善の重要なる一部をなす。吾人の現に考へつゝある案としては、社會敎化の實際上の任務を負ふべき者は敎育家及び宗敎家なりと信ず。殊に一般人の敎化(前述の(ハ))は主として宗敎家の任務なり。然るに現時我國に於ける幾萬の佛敎僧侶は何を爲しつゝありや。彼等の中の或者の如く宗派內の權力爭奪に腐心するが如き淺ましき心を以て衆生を濟度し敎化し得べしとせば、盜賊を雇ひ來つて倫理道德の先生となすも何等の不思議なき世とならむ。斯る忌むべき現象に對し社會的制裁の手が何故彼等の頭上に及ばざるか。衆愚は恕すべし。一人の立つて彼等の惰眠を覺醒し、其非違を糺彈する卓見の志士なきは何ぞや。吾人は一般社會の敎化を始むる前に先づ此腐爛せる幾萬の僧侶に淸凉劑を注射して其惰眠より呼び醒ますの急務を思うて悲まざるを得ざる也。世人の良心の保育者として、世道人心の啓發指導者として社會改善事業の先頭に立つべき彼等に對し、吾人先づ彼等を改善せざるべからざるか。噫。

(十一)公娼私娼制度の研究。

公娼私娼の制度が社會の良俗に反するや論な

はしめざるべからず。

第七章　正義人道自由公平の原則に牴觸する法令及び社會制度改善の研究。

我が憲法に規定せる臣民の自由權のみに就て稽ふるも、憲法の精神に背戻せる法令の規定甚だ多し。憲法上の臣民の自由權は固より法令によりて一定の制限を加へ得る事憲法自身の規定する所なりと雖、其の制限拘束は出來得る限り範圍を狹め絕對的に必要なりと認むる最小限に止むる樣規定せられざるべからず。然るに現在多くの政治家は此憲法の大精神を無視して濫りに當局政治家の好都合なる法令を設定するの弊に墮しつゝあるが如し。言論著作集會結社の自由、居住移轉の自由等は現在果して一般に不必要なりと認めらるゝ程度までの制限拘束を加へ居らざるか。妻の姦通は處罰するも夫の姦通は措て問はざるが如き法制は果して正義公平の原則に牴觸せずとなすか。將た又公序良俗に反せずとなすか。斯る不正不公平の法令の存在を看過するは、社會に正義の威力を認識せしめ因て社會を理想に向つて向上せしむる所以に非ずと信ず。又所謂參政權分配の不公平なる事は識者の皆承認する所なり。之が研究の重要なる言を俟たざる也。

第八章　國際間の平和促進の方法の研究。

(一)帝國主義と民本主義との比較研究。

(二)人類同胞の大義に立脚して正義人道のみの行はるゝ世界實現の方法の研究。

(三)各國の軍備及人種的偏見の撤廢の方法に關する研究。

(四)世界一國家主義＝國際聯盟＝確立方法の研究

(五)國際警察隊設立の研究。

(六)各國民共通の居住移轉營業の自由の原則設定の研究。

(七)各國民生活手段の機會均等並に海洋の自由主義確立に關する研究。

(八)世界に永遠の平和を確立せしむべき方法の研究。

第九章　世界的思潮の研究。

第十九世紀の末葉より再び興起しつゝありし民本(デモクラシー)的思潮は近來に至りて一層强烈となり、其結果と

（ロ）消極的方法。（禁酒、遺傳病の撲滅等の研究）

第五章　監獄改善の

（一）監獄の本質如何。（附、刑罰の目的）

（二）現在の監獄の缺點の研究。

（三）教誨師及び司獄員の改善と優遇の必要。

第六章　裁判制度改善の研究

予輩が現に從事しつゝある司法事務に關して最も不滿を感ずるは、裁判所に於ける事實認定の方法の甚しく不合理なること是れなり。現在の國法の下に於ては裁判官は殆んど如何なることにても事實なりと認定することを得。一步過てば無罪の者を死刑に處するが如き極端なる事實の認定をすら爲すことを得るなり。予輩は大正七年中、山形に於て舅姑毒殺の嫌疑を受けたる一女性が第一審裁判所に於て、毒殺したりと認定され、遂に死刑の宣告を受けたるを宮城控訴院に控訴したる事件を取扱ひたることあり。初め事件の辯護を依頼されて書類を取調べたる時は、調書の上の事實のみを見れば第一審の判決は如何にも相當らしく見えしも、監獄に被告人を訪ねて親しく事實を聽取し且被告人の思ひも寄らぬ方面より探りを入れて當人の陳述の眞僞を試みしに、此の殺人事件は斷じて此被告人の行爲に非ずとの明白なる確信を得たるを以て、出來得る限りの細心の注意を以て被告の無罪たるべき證據を蒐集し、江木博士其他の人々の協力に依りて遂に被告の無罪を確定せしめたり。斯の如き誤判は抑も何に由來するか。云ふまでもなく我が國現下の裁判制度、司法機關の組織に大なる缺陷を有するが爲めなり。其缺陷とは何ぞ。曰く事實の認定權を裁判官の專權に屬せしむること是れなり。裁判官と雖も神に非ず。日々多數の事件を裁判すべき忙はしき職に在る人に、一々其の事實の眞相を明白ならしむることを望むは元來が無理なり。英國其他の各文明國に於けるが如く、商店の主人其他各種の職業、各種の階級に屬する人々を陪審官として、事實の調査認定を陪審官の權限に屬せしむるを以て、比較的安全にして誤判少く且つ事實の眞相を把捉するに近き制度と見ることを得ん。然れども是れ社會制度上の重大改革なり、愼重に研究して社會改善の目的に叶

々は不安なればこそ、平安の境地を憧憬れてゐるのだ。受動的な靜止の狀態に滿足してゐる間は知らず、一度自覺して積極的に自己を擴大伸展して何事かを爲さんとする時、此の不安は我々の胸を異樣に躍動させながら、而もいひしれぬ賴りない影をさしかける。野心に燃える英雄の胸にも、希望に波打つ靑年の心にも、長夜の夢から覺めかけた女性のハートにも、怪しい不安の影は遠慮なく侵害してゆく。コロンブズが確信と希望とをもつて、遙かなる想像の島を目がけて太西洋を西へ〳〵と進んで行つた時にも、彼の確信が强ければ强いだけ、それだけ大きな不安の雲が彼の行手を遮つたであらう。學者がある眞理に向つて實驗を重ねてゆく時にも、其の原理が自明なればなるだけ、彼の證明に用ふる注意は細心であり、又その眞理の客觀的承認を得るまでは、いふべからざる不安の胸騷ぎを感ぜねばなるまい。

×

靑年期は不安な時代だといふ。覺めかけた世界に對する驚異と幻滅と、不可知な未來に對する不安は、靑年期に於いて最も激しいであらうが、一瞬先の事もしつかりとはは知る事の出來ない人間の無智と盲目とを自覺したものは、その靑年たると老年たるとを問はず、到底生存の不安からのがれる事は出來ない。思へば一寸先は闇の世だ。宿命の手はいつ何時我々を襲うて來るか分らない。我々はどうして凝つとして居られやう。

斯くして若き詩人は山間の僧院を訪れた。かくしてトルストイはイエスに歸つた。しかしかうして得た平安が——彼等が果してそれを得たか否かは知らないが——何時まで續くだらう。一切のものを拋棄した聖者も、此の不安の雲ばかりは拂ひのける事が出來なかつたであらう。神の意志に從ふ事に人生の意義を見出したヤスヤナ、ポリヤナのお爺さんは、その神の意志に從つてか抗つてか悶え〳〵てのたれ死にせねばならなかつたではないか。知識の寶庫に分け入つて、其處に救ひの閃光を見出さうとするものも、探ればさぐる程奥底の知れなくなつてゆく怪しき暗闇の中で、今更のやうに戰慄しないでは居られない。

して支那の革命を遂げしめたり。歐洲大亂中に此思潮は海嘯の如き勢を以て全世界に波及し遂に露國、墺匈國、獨逸其他の革命を結果せり。徒に金甌無缺を誇りて此れが研究を怠らば或は意外の事變の突發するなきを保せず。萬事は用心に如かざる也。用心と言ふも徒らに危惧の念に囚はるべきに非ず。宜しく活眼を開きて世界的思潮の流れ行く方向を達觀し、事前に計を回らして世界の大勢に順應するの賢明なる處置に出でさるべからず。是れ深慮遠謀、世界思潮の大勢を研究して其歸趣を明かにせざるべからずとなす所以也。

* * * *

予輩微力と雖も一研究の成るに從つて、或は言論に、或は文章に、出來得る限りの方法と手段とに依り之を發表して識者の敎を請はんとす。希くは此の研究をして唯机上の空論たらしめず、現代社會の輿論を指導して叙上社會改善の理想を實現するの權威有るものたらしむる爲めに、天下同憂同感の志士の指導と後援とを切望して已まざるなり。

不安を欲する心

大橋房子

×

堪へがたき惱みを胸に抱いた青年ダンテが、思ひにうなだれながら山間の修道院を訪れた時に、彼の求めて居たのはたゞ『平安』のみであつたといふ。有史以來人類は、どれ程平安を求めて苦しんだであらう。たゞ此の安きを得んが爲に、どんなに迷つたであらう。殊に戰亂の憂き目を身に沁みて味つてきた我々は、どんなに『平和』の聲に憧憬れてゐたであらう。

平安を求むる心は不安な狀態を前提とする。我

副産物かもしれない。歡樂と幻想とに疲れ果てたバイロンは

O sleep without dream after a rough day
Of toil, is what we covet most

と歌つてゐる。しかし夢なき熟睡をうらやんだのは彼の贅澤な空想の遊戲ではなかつたらうか。そんなら一日思ふ樣勞働してみるがいゝと云つたら、バイロンは首をすくめて逃げ出して行つたであらう。不眠と不安にいくら苦しめられても、私は今更繪に書いたやうな天國や涅槃の絕對的靜止と平安との中に身をおき度いとは思はない。死が直ちに私を其處に運び去るなどゝは、考へるさへ恐ろしい。平和の樂園は求めても永久に得られぬものであつて欲しいのだ。

絕え間なき不安の闇に迷ふ心よ、

一九一八、一二、一九

心頭雜草を讀む

今日までの世界文明は男子本位の文明であつた。今次の世界大戰も此の男子本位の文明が招致した災禍で、男子が政治を私擅し經濟を獨占して居た結果であつた。然るに斯の人類に於ける大失敗史に鑑るところあつて、女今や世界の子は飜然として自覺し、道義上の人格主義に憑據して機會均等の間に男女の兩本位的權利を主張し、その義務に忠實になつて來た。政治に於ても經濟に於ても男女の性別と云ふものは撤せられて、唯だ男女の本然の性に率由する人類の協同事業であると云ふ意識より外に殘すものが無くなつた。是の世界的大風潮は今や空氣の如くに地球の全土を掩ほんとして居る。與謝野晶子女史は日本の社會に於ける女流識者である。夙に世界の趨勢に見る所あり、最近十箇月間に亙り此種の問題を評論されたのであるが、今回女史が叢書の第七卷として書肆天佑社に依り上梓されたのが本書心頭雜草である。輯むる所の論文感想詩歌大凡六十餘篇に達し、思想豐富にして清明なる議論の間に優麗なる情緒を織り出したのが、本書の特色である。茲に感想を附して淑女及君子諸君に一讀を薦むる次第である。（一條生）

平和は爭鬪に對峙する。しかし不安は必しも戰ひを意味しない。不安は絕え間なき旋回であり、混沌である。戰爭が破壞を齎すに反し、不安は何物かの生成を暗示する。『世はかつて最も不滿なりし者の手にあつた。』といふ言葉は眞理である。不滿の內面には不安が渦巻いてゐる。多くの偉大なるものは此の渦巻から生れ出た。而も不安の渦巻そのものは不斷にその運動を續けてゆく。

こゝろやすし
かみによりてやすし

へいわよ
くしきへいわよ
みかみのたまへる奇しき平和よ

×

暫しの間も止む事のない不安に疲れ果てゝ、私は時々思ひ出したやうにかう口の中で歌つてみる。と、いひしれぬ靜かな涙が胸の底からこみあげてくる。しかしその涙のまだ出きらぬ中に、私の胸には新しい不安の雲が大きく波打つてゐる。私は飢えたものゝやうに平安を追ひ求めた。しかしその平和を得たと思つた時に、私は更に大なる不安の下にあつたのだ。

『地にはおだやか、人にはめぐみあれ。』

晴れ渡つた星の夜に響いたといふ天使の聲は、今も美しい旋律を私の胸に殘してゐる。しかし、平和の君と稱へられたイエスの短い御生涯は、決して平安なものではなかつた。『神より出でゝ人の凡て思ふ所に過る平和……』といふパウロの言葉さへ、私には不安な響をもつて聞える。

"Peace be with you." 溫い愛の情に溢れた兄弟姉妹の口から幾度此の言葉が迸り出たであらう。さうだ! 私も全心の熱情をこめて、凡ての兄弟姉妹に "Peace be with you!" と叫び度い。しかし私は自分がさう云はれた時の喜びと悲しみとを思つて口をつぐむ。私は "Peace be with me," とは叫ぶ事が出來ないのだ。

×

切ない不眠と惱ましい不安とは、神經病時代の

わづか二日の興行にて、已に無慮數千のお客様方の大喝采を忝ふし、樂屋裏は申すに及ばず、數ならぬ某まで、歡喜雀躍、手の舞ひ、足の踏む所を知らざる有様。こゝに座員一同にかはり、幾重にも御禮申し上ぐる次第でムいます。

さて、本日の替狂言は、昨日、一昨日とかはりなく、

「三千世界大曼陀羅」と稱し、まことに、雄大無比、天地開闢以來の大奇劇でムいます。從つて、新しいお客様方へ、御見落しのこれなき様、こゝに、當操り人形の古今無類の特色を吹張致しまする次第でムいます。

まづ、現れまする人形どもは、森羅萬象、三千世界の生まれ替り、恍として往き、洋として來たり、ゆうらり〳〵と搖めき踊るのでムいます。明暗とり〳〵の色光線を以て、照らしますれば、これ等の人形は、この不思議な光線の中にあるは現れ、あるは消え、筑紫の海の不知火か、あさじが原の狐火か、といふ工合に、ゆうらり、ゆうらりと踊ります。

それ、人形の舞踏と云へば、三千世界の曼陀羅踊り、無始以前の古から、恒河沙刧の末までも百まで息まぬ雀の踊り。

そのまた舞臺の天井裏には、哲學者どもが這ひつくばつて、一生懸命に人形を、操つてゐるのでムいます。搖めく事象や人形を、論理の絲で繋ぎとめ、締めた〳〵と「やつやよい」懸聲かけて鼻高々と、操つて居るのでムいます。所で、お客様方は、天井裏の役者どもに、決してだまされてはなりませぬ。實は論理の絲はない。この人形は自動人形。誰のおかげも蒙らず、ひとりで踊つて居りまする。そこを如何にも、絲ありげに操る役者の手振り、足振り、これも一つの見え藝でムいます。

次に舞臺の兩側から、頭が禿て、眼鏡を懸けて道化役者が出て參ります。人形の手振り、足振りから、とんぼがへりの仕工合を、細大もらさず書き留める、科學者といふ役前でムいます。こゝらもまた〳〵例のない、面白い仕組みでムいます。

委しい所は飛び〳〵に、まづ荒ましはこれ終り。さあ〳〵、この妙珍無類の大奇劇、さても不思議

藝術以前

白鳥

吾等にとつて、すべてなるものは、藝術以前であつて、藝術そのものではない。否、すべての「以前」である。文學者が筆を執らない以前、畫家が畫都に向はない以前、思想家が著作をしないその以前である。

すべての「以前」は一に歸り、そは純一不二なる人自爾の精進勤行である。

惟ふに、一切の表現以前に還元し、この究竟の「以前」に卽するの精進が、吾等の生活のすべてでなくてはならぬ。そこには、たゞ、人間としての眞摯と勤行とより他には、何ものも存在しない。

吾等は眞の意味での宗教家でなくてはならない。卽ち、人自爾でなくてはならない。小說家であつてはならぬ。學者であつてはならぬ。政治家實業家であつてはならぬ。更には、所謂宗教家であつてはならない。

私は、このすべての「以前」に卽するの精進勤行を懈怠せぬ眞人を、彼が如何なる階級にあり、また如何なる職業に服してゐやうとも、眞の意味での宗教家と呼びたい。(勿論、こゝに云ふ宗教家は神の福音を說く宗教家の謂ではない。)人は帝王といはず、庶民と云はず、すべて、この意味に於ける宗教家たるすべきであることを、私は深く信じて疑はない。

操り人形木戸口の口上

東西。

毎々のお得意様方に申し上げます。この度、當劇場に於て上演致して居りまする操り人形は、古今東西、天下一品と申しまする、まことに、珍無類のお芝居でムいます。

地に物書く人

沖野岩三郎

一

『不可い、如何しても思ひ止らう。』と云ふのはあなたの理性の叫びだ。しかし其の叫びは小い。あなたの心の中にはモット〳〵大きな強い或物があるだらう。其の強い力が現はれて來て、あなたをグン〳〵と引張つて行く時、あなたは一生懸命に其の力と戰ふだらう。あなたは幾度も鎗を投つける。しかし投げても投げても決して當らない。さうしてあなたは矢張り淺ましい行爲を繰返す。しかし其時は既うあなたは戰ひ疲れた敗殘者だ。甚く傷いた負傷者だ。敗れたもの傷いたもの。夫れを尚責めたり罵つたりするのは、尚々惡い事だ。私は最前からあなたの話を悉皆聽いて氣の毒に思つた。あなは其の戀人を捨てようと幾度も思つたらう。既う逢つては不可いと幾度も考へたらう。あなたの理性は彼の女を愛する事の最も忌むべき恐ろしい事だといふ事を能く知つてゐる。しかしあなたの心に非常な力をもつて現はれて來る他の勢力は苦もなく其の理性を打ち毀して了ふ。あなたは隨分戰つたらう。しかしあなたの投げた鎗は悉く外れて了つた。そしてあなたは憐れな敗殘者となつてしまつたのだ。けれどもあなたは其所に悔を持つてゐる。後悔を感じてゐる。其の心の惱みが卽ち罪人の狀態だ。敗れて瘡いて呻吟してゐる

の操り人形、またとは見られぬ大芝居、人に後れず、われ先きにと、御覽の程を、伏して御願ひ申しあげます。

太陽光

太陽は、虛空に燃ゆ。
人火は地上にいぶる。
人火は相照らし、
太陽光はたゞ照らす。
深甚寂靜の虛空、
太陽光は恍たり、燦たり。
寥々たり、寂々たり。
縹渺不遍の光、
遍滿無礙の光、
朗々として孤獨なり。
太陽は虛空をゆく。
照らされざる太陽は、ひとり虛空をゆく。

編輯遺聽

▲本號は編輯者が流行感冒に罹つて長く臥床したる爲め意外に發行期日が遲れまして、稿者並びに讀者諸君に誠に申譯がありません。今後は必ず努力して御迷惑をかけぬ樣に致しますからどうか御許し下さる樣にお願ひ申上ます。

▲本號に登載した帆足理一郎氏の『世界共和國を提唱す』は中々面白い論文です。僕も不完全極まる國際聯盟《それも成るかならぬか甚だ曖昧なる》などに拘泥して居らずに世界共和國と一つ高飛車に出てゝ正義人道、世界平和、人類同胞を我物顏に賣物にする白人の鼻を開かしてやつたら痛快であらう。尙帆足君は來月號にも面白い論文を書かれるから諸君は刮目して待つて下さい。

▲內ヶ崎、三並、岡田、一條、野村、相原の諸氏は相變らず健在、內ヶ崎氏は一昨年以來『アブラハム・リンコルン傳』を執筆せられてゐたが、この程漸く脫稿せられ、不日實業之日本社より出版さるゝとの事にて、目下校正にて多忙を極めて居られます。氏苦心の作でありますと云へば、定めて興味ある讀物であらう

▲本誌の俳壇選者一碧樓氏は新年早々關西に旅行せられたる爲め、本號に俳句を登載することが出來なかつたのであります。本號俳壇は三月號のと一緒にしますから、投句諸氏及讀者諸君の御諒承を願ひます。

▲今岡信一良氏は令息の御病氣の爲め相州葉山に行つて居らるゝ。速に御回復を祈る。尙氏は『宗教の國際聯盟』と云ふ興味ある論文を執筆されたが、紙面の都合上來月號に廻はしました。これまた御諒承を乞ふ。

（德隣）

を眞闇がりの中に投げ込まうとした。私は此世の道德を呪つた。宗教を呪つた祭司達を呪つた。しかしかし私は過つてゐた。私は昨日殿の廊下で熱心に說教してゐた貴方を見た時。ふん、又た例のお說教か……と思つて最初の頃は碌々聽かうともしなかつた。けれども段々と聽いてゐるうちに私は貴方が普通の敎法師でないといふ事を知つた。だから今朝、私は貴方を不思議にも此所に發見けた時、私は最う默つてゐる事が出來なかつた。そして私は今此世に唯つた一人の友達を得た。私の心の暗い〳〵蔭から微かな光明が閃き初めた。私は嬉しい。本當に嬉しい。』

青年が斯う言つて涙の露に光つた睫毛を數打いた時、俄に坂の下の方から、ワア〳〵と人聲が聞えて來た。青年は少しく伸上つて下の方を見た。ガリラヤ人は芝生の朝露を靴の尖て撫てる樣にしながら何氣なく人聲のする方を眺めた。

群集は四五十人もあるらしかつた。何事か大聲で喚き罵りながら園の方に近づいて來た。凝乎と坂下の方を見詰めてゐた青年は俄に氣相を變へてガリラヤ人にも何の會釋をせずに逃げるやうに橄欖の樹蔭に隱れてしまつた。

二

『居た〳〵、其所に居た。』眞先の四十恰好の男が園の入口から叫んだ。ガリラヤ人は少しく驚いたやうに群集をチラリと見たが沈着いた容子で二三間離れた大きな橄欖の根元の方へ靜に歩いて行つた。

ガリラヤ人が不圖後を顧眄いた時、既うドヤ〳〵と彼の後に押かけて來た群集は、其所へ年若い一人の女を引据えた。女は年の頃十九か二十位に見えた。色の白い細面に解れかゝつた髮が少しく其の美し

あなたを私は決して責めない。罪人よ！起ちて歩め！私は斯う奨勵したい。』

若きガリラヤ人は斯う言つて凝乎と青年を見詰めた。其の眼には無限の憐憫が含まれてゐた。

『私は本當に弱い、矢張り敗殘者です、私はどうして此の強い敵を擊退する事が出來ないのでせう。私は途に迷つた旅人のやうに饑えて渇いて足腰が立たなくなつて此儘滅びて了ふのでせうか。』

青年はハラ〳〵と涙を流しながら頂垂れてしまつた。

『鎗を敵に投げて當らないのを悔む心、途を踏迷つて目的地に達しないのを悲しむ心、夫れが罪といふものだ。其の後悔と悲嘆とに呻吟いてゐる人が罪人だ。此の罪を感じない人は責むる必要もあらう、悟す必要もあらう。しかし苦しみ惱んでゐる罪人は最う憐れな負傷者だ。私は其の憐れな負傷者を介抱して勞はつてあげたい爲に斯うして旅から旅へ道を說いて歩くのだ。私は今決してあなたを咎めない。私は最も親しいあなたの友だ。』

ガリラヤ人は右の手を伸して青年の肩を輕く打いて、其の顏を覗き込むやうにした。青年は一歩二歩後の方に退つて異樣の輝きを眼に閃かしながら、

『あゝ何といふ嬉しい言葉だらう？　永い間私は苦しんだ。私の心に王座を占めて私を闇の世界へ引摺つて行く強い〳〵力と私は如何に戰つたか知れない。そして戰ひ敗れた時世間の人は皆な私を不義不倫不德な男として有らゆる罵倒と侮辱とを私に加へた。私は肉が破れ骨が粉にせられるやうに思つた、けれども私の心の惱みに些かの同情もして呉れないで漫りに私を足蹴にかける人々に對して私は默つてゐられなかつた。私は強いて〳〵悔の心を打消して良心の囁きを打消して、もう夢中になつて自分と自分

何に處置すべきかを貴方に御尋ねしたくて參つたのです。』

學者は勝利者のやうに傲然として其の胸を反した。群衆は悉く冷笑を唇に浮べながらガリラヤ人の顔を見詰めた。

ガリラヤ人は學者の顔をチラと眺めた。そして又たシク〳〵と泣いて居る若い女の頭に眼を落して凝然と眺めてゐたが、何を思つたか靜に蹲んで膝頭の上で兩手を組合したまゝ默つて眼を閉ぢてゐた。

『どうすれば可いんだい。モーゼの律法を破れといふのか。利未の書には何と書いてある？　殿の廊下て彼んな廣言を切つて位だから何とか裁判をつけるだらう。早く何とか言つて見ろイ。』顎の尖つた男は薄い唇を反しながら意地惡さうに叫んだ。群集は『夫れ見ろ何とも返事が出來ないだらう。』と言はぬばかりに冷やかに笑つたり私語いたりし初めた。

學者はガリラヤ人が蹲んで默つてゐるのを見て、既う彼れを窮地に追詰めたと思つた。しかしガリラヤ人の顔には何等の恐怖が見えなかつた。彼は靜かに眼を見開いたが、食指の尖を微かに動かし乍ら砂の上に樂書をし初めた。其の指頭は無意識に段々と速く動き初めたが、夫れが何等かの意味を示すのかも知れないと思つた學者は、眤と眼を見張つて其の指の動く樣を見た。

最初の間は(私の親)といふ字を繰返して書かれて居たが終には(私は誰の子だ)と書いた。

事情を知らない學者は彼がダビデの子だといふ事を主張するのでは無いかと思つた。

『早く返事をしろ！』と後の方から嗄れ聲で叫ぶ者があつた。

ガリラヤ人は靜に起上つた。そして群集を一通り見廻して徐ろに口を開いた。

い顔を慥に見せた。紫の新しい衣が所々引裂かれて、雪のやうに白い足には血が流れて跣足のまゝで何町も何町も引摺られて來た事が知れた。彼女は隨分打たれたらしい小突廻されもしたらしい。泣腫れた眼からには未だ涙が流れてゐる。悲鳴を擧げたらしい口元は少しく歪んで怨み言の一つでも言ひたさうであつた。

美しい衣を纏うた學者らしい男が横柄に進み出てガリラヤ人の前に立つた。

『貴方は罪人の友だと仰しやつた。そして七度を七十倍して罪を赦してやれと仰しやつたさうです。殿の廊下で貴方は然ういふ意味の說教をなされたさうです。そこで私共は困つた問題に打ッつかつたから其の解決を貴方に求めに來たのです。』

學者は冷やかに引据ゑられた若い女を見ながら斯う言つた。

『罪人を皆な赦してやつて 世の中を如何して治めて行くんだい。斯んな淫奔女を如何しようと云ふのだ。先ア其返答から聽きたいもんだ。』赭ら顔な男は叫んだ。

『罪人の友だつて？ どうせ斯んな不埒者の友達なんだらう。彼の生ッ白い若え野郎の仲間かも知れねえぞ。』頸の尖つた男が怒鳴つた。

『先ァ〳〵皆さん靜にして下さい。』と學者は喚き立つてゐる一同を鎭めて、ガリラヤ人の前へ一歩詰寄つた。

『此所に泣いてゐる女、これは不倫な事を行つた女です。モーゼの律法によれば誅さねばならない大罪を犯した女です。相手の男は行方知れず逃げて了つた。しかし此女だけは捕まつた。我々は斯の女を如

書をした、砂には(誰が撲つ?)といふ四字が太く鮮かに現はれた。

『俺だつて自分の心に反省した事があるさ。』

『俺だつて良心は有つてゐる。』

『罪の惱みを經驗しない? そんな人間が此の地上にあるものか。』

とり〳〵に呟き初めた。そしてガリラヤ人の樂書の文字が益々太く大きくなつて行くにつれて、群集の數は反比例に段々少くなつた。彼等は皆な慈悲心あるものの如く頭を垂れつゝ首を傾げつゝ一人去り二人去り遂には誰も居なくなつた。

三

『誰が撲つ?』斯う呟きながら學者も憂はしげに園を出た。殘されたのは若い女唯一人であつた。ガリラヤ人が樂書の手を止めて顏を擧げた時女は悄然と二間ばかり離れた所に立つてゐた。亂れた髮を其儘に、泥に塗れた衣を其儘に。しかし死地から救出されたといふ喜びを禁じ得ないやうに優しい眼でガリラヤ人を見詰めてゐた。

『あなたを引摺つて來た人達は何所へ行つた?』

『皆な何所かへ往つてしまひました。』

『では、あなたを罰する人は居ないのか。』

『誰も居ません、皆な歸へて了ひました。』

ガリラヤ人は二三間向ふの大きな平たい石の所に歩いて行つて坂下の方を眺めた』其所には最前の勢

『私には此女の所業が略ぼ推察せられる。成程此女は利未の書に照せば石て撲殺すべきてあらう。しかし夫れは誰が此の女に石を投げるかと云ふ事から先づ決定しなければならない。』

ガリラヤ人が斯う言つた時、群集は一頻り騒いだ。憐れな女は怨めしさうにガリラヤ人を見上げて哀を乞ふやうに潜々と泣いた。

『いよ〳〵殺しても宜いと言ふのか。確かに然う言つたのか。』胡麻鹽髪の男が叫んだ。

『然だ、撲て！石で撲て！　しかし漫りに打つてはならない。あなた方の中て未だ嘗て心の惱みを懷いた事の無い者があるなら撲つが宜い。自分の心に現はれて來る黒い蔭に鎗を投げた事の無い者があらば撲て！。一度も自已を反省した事のない、獸のやうな荒い人が居れば撲て。何故なら心の惱みを懷いた事のある罪人は決して指一本も此女に觸れ得ないであらう。正しきに就かう、眞理に歩まうと決心しても強い〳〵敵が心に現はれて來て苦しめられた經驗を有つものは石を投げよと命ぜられても投げ得ないてあらう。幾度か人生の途を踏迷つて苦しんだ經驗のある者は此の憐れな女を罵れと命令されても一言半句の罵倒を浴せる事は出來ないであらう。若し此所に罪の惱みを經驗した事のない、一度も自已を反省した事の無い人が居るなら、私が命令しなくとも其の獸のやうな人が此の憐れな女を撲ち得るであらう。』

ガリラヤ人は再び身を屈めて砂に樂書をし初めた。學者は砂の上に動く指頭を注意して視た。指は靜に動いて（誰が撲つ？）と書いた。

群集の騒ぎは止んだ。學者は重ねて何も問はなかつた。ガリラヤ人は殿々と強く力を指頭に籠めて樂

ガリラヤ人は勞はるやうに悟すやうに言つた。女は恥かしさうに顔を俯伏して、

『だつて、先生は如何して私の過去を御存知なのです？』と問うた。

『不思議は無い。最前あなたの戀人ソバテルから悉皆詳しい話を聽いた。あなたは既う彼の冷い心の持主ルシアスから解放されたのだ。あなたは今まで優しいソバテルに對する燃ゆる愛を懷き乍ら愛の光の見えない牢獄に囚はれてゐたのだ。そしてルシアスといふ無慈悲な獄卒に監視されてゐたのだ。けれどもあなたの愛は其の翼を擴げて何所までもソバテルを尋ね求めて彼を引寄せたのだ。あなた方二人の心はこれが爲に如何に暗くなつたか、如何なに悶え苦しんだか、私は能く夫れを知つてゐる。けれども、あなたは今朝其の囚屋から解放された、其の獄卒から放逐された。あなたは今本當に新しい世界へ愛の翼を擴げて自由に翔つて行く事が出來るのだ。』ガリラヤ人は涙ぐんだ眼を擧げて天を仰ぐやうにして、『行け！若い娘よ！　そしてソバテルと二人は光明に包まれて樂しく暮せ、二度と苦しい戰に陷るな！』と宣言するやうに叫ぶやうに言つた。

其時坂下から俄かに騷がしい人聲が聞えたので、ガリラヤ人は少しく周章てたやうに手を打振りながら、

『行け！　早く〳〵！』と言つて、くるりと身を轉して右手の方へ歩いて行つた。女は見返り見返り名殘惜しさうにベタニヤ街道の方へ急いで歩いた。

橄欖の綠葉が露に濡れて朝日にキラ〳〵光つてゐる其の繁みを透してガリラヤ人は女の後姿を凝然と見送つてゐたが、女が街道に出た時、傍の棕梠の葉蔭から躍り出た若者があつた。そして縺れ合つた二

に引替へて魂を抜かれたやうに項垂れつゝトボ〳〵と殿の方に行く學者の後影が見えた。

『人は皆な眞實だ。矢張り必に惱みを有つて居る。意地惡く罵つた男達も、賢ら顏に詰寄せて來た學者も、皆な心の暗い蔭と奮闘した尊い經驗を有つてゐるのだ。其樣な經驗を有ち乍ら何故彼等は自分と同じ弱い者を苦しめやうとしたんだらう？否や彼等を其樣な無謀な企に追やつたのは古い律法だ、死んだ道德だ、役立たぬ舊習だ。夫れらが彼等を彼樣に僞善な不德な境遇に追やつたのだ。けれども矢張り根を敲いて見れば、野獸のやうな心にはなり得ない。彼等は律法といふ古い鬼面を被つて道德といふ恐ろしい石を握つて此の弱い女を殺さうとした。あゝ何といふ恐ろしい事だらう。』

ガリラヤ人は心の中に斯う叫びながら坂下の方を凝然と見詰めて居たが、靜かに女の方へ歩み寄つた。

『娘！　あなたを訴へた人達は居なくなつたぢやないか。』

女は『娘！』と呼びかけられてドギマギした。ガリラヤ人は更に優しい聲で、

『娘だ！　決して驚く事はない。今からあなたは元の娘だ。あなたは既う解放せられたのだ。あなたが今朝寢床から引出された刹那に古いあなたは恐ろしい律法の爲に石で撲殺されたのだ。そして今は元の清い美しい娘に復活してゐるのだ。』と言つた時、女は暫らく呆れてガリラヤ人の顏を見詰めてゐた。

『先生……』狂人のやうに叫んだ女は地にひれ伏して『あなたは豫言者です。どうして私の總てを御承知なんでせう？』と言つて又た潛々と泣出した。

私は豫言者でも何でも無い、私も矢張り心の惱みを持つてゐる人間だ。だから私も、あなたを審く權威を有つてゐない。私は弱いあなた方の友達だ。』

新約書文學史講義

□日時　毎日曜日午後一時半より
□場所　芝區三田四國町芝園橋際統一教會

新約書は我が宗教の寶典であることは云ふ迄もないが、そは如何にして傳へられたか、耶蘇の言行は如何にして記錄せられたか、記錄の全部は信ずべからずとするも其の信ずべき部分は何か、その批判の方法は何か、その他書翰部の起源性質等を論じ、而して福音書より書翰等に亘りて原始基督教思想の發展を歷史的に總覽し以てその精神を明かにしたいと思ふて此の講義を始めます、有志諸君の來會を歡迎します。

大正八年二月

擔當者　三並良

人の姿は直ぐ石垣の蔭に消えて了つた。

園の入口に人の跫音がした。そして頓狂な聲で。

『やア、先生は彼所に居なさる。』と叫んだのはペテロといふ男であつた。十二人の若者はガリラヤ人の傍に駈け寄つた。多勢の年寄や若者が彼等の後にゾロ〳〵と躍いて來た。

* * * * * *

夫れから間も無い事であつた。此のガリラヤ人は大きな犯罪の嫌疑で法廷に引出された。其時此のガリラヤ人はエルサレムの殿を破壞しようと企てた重罪犯人であるといふ事を證言した二人の證人があつた。其の一人は嘗てベタニヤから美しい娘を娶つて町中の評判者となつたルシアスといふ金持であり、他の一人は律法學者のルキヲといふ男であつた。

裁判中二人が滔々とガリラヤ人の罪狀を陳べ立てた時、ガリラヤ人は始終俯眼になつて此の二人の顏を見なかつた。そして絶えて一語も吐かなかつた。けれども其の縛られた右の手の食指が空に動いてゐた夫れは(誰が撲つ?)といふ文字を書かうとするのであつた。學者は物凄い眼でガリラヤ人の食指の動く態を睨と見詰めて居た。(完)

——一千九百十九年一月十三日——

統一基督教會集會案內

一、禮拜說教（毎日曜日午前十時）（當擔）　三並良

一、傳道講演（毎日曜日午後六時半）　沖野岩三郎

一、聖書講義（毎日曜日午後一時半）　三並良

新約書文中の講義

一、靈交會（毎木曜日午後六時半）　沖野岩三郎

舊約聖書を研究中、猶會員諸君の信仰告白、宇宙、人生等に對する質疑等有りて頗る有意義の會合也

一、日曜學校（毎日曜日午前八時）　諸家

滿五歲以上の少年男女の入學を歡迎す

□どの集りにも、又どなたでも自由に御出席、御聽きになるとが出來ますから、御遠慮なく御來會下さい、歡迎いたします。

東京三田芝園橋際

統一基督教會

電話芝五八五五番

自由基督教會集會案內

但し自由教會は夏期中集會は悉く休む。

□講演（毎日曜日午前十時より）

內ヶ崎作三郎、安部磯雄、岸本能武太、岡田哲藏、小山東助、永井柳太郎、今岡信一良、相原一郎介の諸氏之を擔當す

□聖書講義（毎日曜日午前九時半より）

相原一郎介氏擔任

□思想研究（日曜日午前九時）

H. G. Wells, God the Invisible King の輪講文學士今岡信一良氏指導

以上會場は女子音樂學校講堂に於てす

□家庭集會（隔週木曜日午後六時半より）

各教會員の宅を巡回して開催し、相互の親睦を計り信仰に關する疑義を糺し共進互琢の實を擧げんとするものなり

□本會は大正四年六月成立し、自由基督教の立場より包容的信仰を宣傳し、現代の思想と生活に適應する宗教生活を樹立せんとする人士の組織せる獨立自給の團體なり、同感の士の來會を歡迎す。

神田錦町三丁目女子音樂學校內

自由基督教會

電話本局三七三九番

▼基督紹介書中の權威（實に何人も讀むべきの書是を滿天下の諸賢に薦む）▲

○第一高等學校教授　三並良著

第五版

眞人基督

ポケット入美本百三十頁
現代化せるキリストの口繪付
定價金拾錢　郵稅貳錢

傳說によらず歷史批評の立場より基督を說明し彼れの宗教を現代人の意識に紹介せんとするものにして我等の基督觀は此の書によりて闡明せられたり

東京三田四國町
六合雜誌社
東京振替一〇〇〇三
電話芝五八五五番

我等の宗教

我れ等同人相計つて、宗教の本質を學理的にも又實際的にも研究する所の新誌を發行し、以て眞に自由主義の基督教を徹底せしめんとす。載せんと期する所の大略は凡そ（一）聖書の研究（特に難解の章句）、（二）耶蘇傳の研究、（三）諸教の研究、（四）近代の思想と宗教、（五）宗教哲學上の根本問題、（六）我れ等の信仰、（七）如何に兒童に聖書を物語る可き乎等なり。

毎月一回五日發行
定價一册金十錢　稅五厘
一ヶ年稅共金壹圓

（第三卷第一號）――一月五日發行――

――（十七號目次）――

□偉大なる新年を迎ふ……三並良
□一切の歸着點として形而上學……たみ子
□エスのなやみ……沖野岩三郎
□生の悅……三並良
□默示錄系思想の評論（四）……
□夜と風（シモンズ）……瀧內秀綱
□隱れたる眞情……青木茂
□我が希望する世界……村上雄策
□エプロン……芳夫

（第三卷第二號）――二月五日發行――

――（十八號目次）――

□福音の反響……三並良
□自然（トルストイ）……瀧內秀綱
□ヨハネ默示錄の性質……三並良
□消えにし燈火……沖野岩三郎
□小さな悅び……青木茂
□エスの教へ……たみ子
□消息會告……

東京市芝區三田四國町
發行所宗教研究會
振替東京三八三九四番
電話芝五八五五番

《明治廿五年三月二十七日第三種郵便物認可》（大正八年一月三十日印刷納本）
《大合雑誌第三十九巻第二號》（大正八年二月一日發行）（毎月一回一日發行）

科學的立場より信頼すべき齒磨は、唯
ライオン齒磨
あるのみです。

ライオン齒磨
ライオン石鹸
本舗 株式會社 小林商店
支店 大阪東區博勞町二丁目
名古屋市西區名町四丁目

明治廿五年三月廿七日第三種郵便物認可
大正八年三月一日發行（毎月一回一日發行）

六合雜誌第三十九卷第三號

六合雜誌

三月號

THE RIKUGO-ZASSHI

No. 458 **MARCH** 1919

CONTENTS

The Educaional, Religious and Social Foundations of Democracy..... ..... Prof. S, Uchigasaki. 2

On The League of Religions.....Rev. N, Imaoka. 10

The Religion of Democracy... .....Dr. R, Hoashi. 14

The Inner Expansion of the Self. . .....Z. Nomura. 22

Prayer.....Hide Besshō. 37

To Windsor.....Prof. K, Sato. 38

Tolstoism in the Current Thought.....S, Ishida, 42

Some Sketch of a Pastoral Life..... ..S, Nikaido. 69

The Life of "N".....Rev. I, Okino. 51

Topics of the Day.

New Books.

Published Monthly by the

TŌITSU KURISUTOKYŌ KŌDŌKWAI

2. Mita, Shikoku-machi, Shiba-ku, Tōkyō.

千萬言の

説明を聽くよりは、此の
一管の實驗を御覽なさい
品質本位

花王石鹸

くわおうせっけん

石鹸試驗法

石鹸を盛し創つて試驗管に入れ之にアルコールを注ぎ好く振り混ぜて火に炙れば純良の石鹸は透明となる。若し混合物があれば沈澱し遊離脂肪があれば濁濁が見ゆる。又遊離アルカリを含むものは此の液にフユノールフタレイン一滴を落せば赤色に變ずる。

斯の如く純良無上の品質なるが故に絕えず帝國陸海軍、帝國大學赤十字病院等の採用品となり、化粧衞生の第一品として滿天下に賞讃を博するのです。

花王石鹸製造元
東京馬喰町
長瀨商會

現代思想中のトルストイズム……石田三治…四二頁
Nの履歴(小説)……沖野岩三郎…五一頁
聖母の子(小説)……二階堂眞珠…六九頁
◈編輯便り……七九頁
其前夜(小説)……住谷爲太郎…八〇頁
虚心集(俳句)……一碧樓…八九頁
▲時事斷片……九一頁
『煉瓦の雨』合評……九三頁
淺田江村……吉田孝太……渡邊英一……巖谷小波……
新居格……紫太勝衞……大橋房子……相原一郎介……
岸邊福雄……高須梅溪……江口渙……龍居枯山……
佐野袈裟美……

六合雜誌 三月號目次

第三十九號

民本主義の教育的、宗教的、社會的基礎……內ヶ崎 作三郎……二頁

宗教聯盟を論ず……今岡信一良……一〇頁

民本主義の宗教……ドクトル、オブ、フイロソフイ 帆足理一郎……一四頁

自我の內面的發展……野村隈畔……二二頁

戰後も依然列强の武力競爭……工藤直太郎……三一頁

◇佛心鬼面……三六頁

神に額く（和歌）……別所秀子……三七頁

ウインザまで……在倫敦 佐藤清……三八頁

自由基督教講習會

空前の大戰は既に其終結を告げ世界は今や基督教的精神に依て一大改造を遂けんとす。基督教の研究と體驗とは茲に新なる意義と重要とを加へたる者と謂ふべし。天下の志道者を迎へて基督教及び關係諸問題の眞相を闡明せんと欲する所以也。

期　日　四月一日より七日迄　毎日午後六時より約三時間

會　場　東京市芝區三田四國町日本統一基督教弘道會館（惟一館）

會　費　金五拾錢　但本會々員は不要

演題及び講師

新時代の宗教	帝國大學教授文學博士	姉崎正治氏
基督教より見たる社會主義	早稲田大學教授	安部磯雄氏
新時代に對する基督教の使命	市民教會牧師	久布白直勝氏
神觀の改造	弘道會幹事	今岡信一良氏
國際聯盟の宗教的根底	早稲田大學教授	內ヶ崎作三郎氏
我が夢の國	陸軍大學教授	岡田哲藏氏
日本の文壇と基督教	統一教會牧師	沖野岩三郎氏
勞働問題と基督教	早稲田大學教授	北澤新次郎氏
耶蘇傳の諸問題	第一高等學校教授	三並良氏
世界の大勢と日本の將來	法科大學教授法學博士	吉野作造氏

目下來朝中の米國哲學界の第一人者**デューエー**博士にも出演交渉中。猶禮拜說教感話會親睦會等を開催す地方よりの來會者の爲には宿所の紹介等出來得る限り便宜を計るべし

主催　東京市芝區三田四國町二番地　電話芝五八五五　**日本統一基督教弘道會**

神戸 關西學院高等學部學生募集

▲文科
▲商科

壹學年
凡貳百名

▲專門學校令ニ據リ修業年限四ヶ年
●特典　在學生徵兵猶豫
▲入學資格　中學校甲種商業學校卒業生
●出願　四月五日午前十時限
▲入學試驗　學科試驗（英語、國語）　四月七日午前八時
人物試驗及體格檢查　四月九日午前九時

二月五日 官報 三月五日 參照

私立 關西學院高等學部

六合雜誌

三月號

米國哲學者ゼームス原著（四六判箱入クロース美本）
文學士太田善男氏譯（定價一圓六十錢送料八錢也）

信仰の哲學

本書は最も天才的哲學者として有名なる米國の大哲學者ヰリアムゼームスの傑作『ウイルツーベリーブ』を、英米思想文藝の專攻者たる文學士太田善男氏が忠實に飜譯したるもの也。獨乙思想の專制より解放されたる今日、此民本的にして個人的なる大名著は世界の新趨勢に眼覺めたる人士の是非一讀すべきもの也

吉井勇氏著

百人一首物語

四六判箱入美本定價金壹圓三十錢送料八錢也

斯道の新大家吉井勇氏が從來の陳套なる解釋を脱して新たに見たる百人一首を其歌意及其動機、其人の傳記等詳細に物語りたるもの也世の歌がるたを弄ぶ者は勿論、一般歌學に志す人は是非一讀せざるべからざる良書にして家庭には一本を備へ置くべきものたり

米國大統領ウイルソン著
代議士關和知氏譯

縮刷廉價

新自由主義

（定價金壹圓也送料內地八錢）

第九版出來

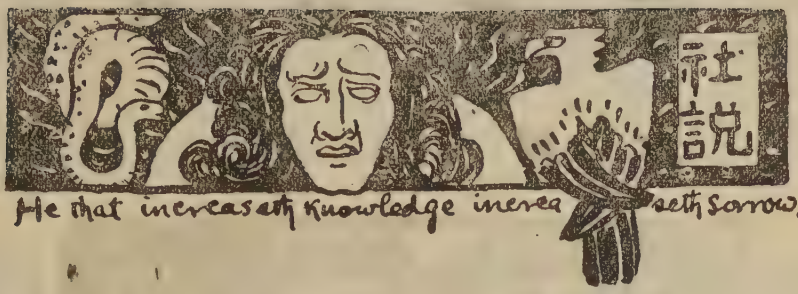
世界の新趨勢は急轉直下せんとす
此際平和の盟主が獅子吼を讀め！

發行所　東京市飯田町一丁目二番地　天佑社　振替口座東京一〇一二八番

國を肇造し以て無窮に垂れたり』と。又仰せ給はく『朕が親愛するところの臣民は、卽ち朕祖宗の惠撫慈養し給はりし所の臣民なるを念ひその康福を增進しその懿德良能を發達せしめん事を願ひ、又其翼贊に依り與に俱に國家の進運を扶持せんことを望み云々』と。卽ち知る帝國憲法の精神は、大御心と共に臣民の品性と智能とを協力するとに依つて有終の美を濟すことを得るのである。卽ち形式に於て君主統治の憲法たると共にその內容に於て君民同治の憲法たるの資格を充分に具備するのである。故に憲法の運用は國民の智識的、道德的、宗教的進步發達を豫想するのである。而して維新以來國民の是れ等の方面に於ける進步は著しきものあれども、未だ充分なりと云ふことが出來ない。維新前に於ては、京都の禁裏に於ては無位の陪臣參朝の公卿に對して、敬禮する特權すらも有せなかつたのである。又憲法發布の當時東京のある老人は、此度天子樣より絹布の法被を頂戴すると云つて糠喜びをしたものがあつた。かゝる時代を去ること數十年の今日に於て、民衆の知識と品性の甚だ高からざるは當然のことである。

二　デモクラシーの眞僞

識者思ひらく、我國の政體は、皇室より見れば、民本主義にして、人民より見れば、君本主義である。蓋し適評である。民本主義は世界の大勢である。然れ共この主義は嘗て佛蘭西に於て疑はれ、米國に於て危まれたものであつた。而して今日これを怪しまざるは何んであるか。蓋し教育の進步與つて力がある。一體民本主義の定義には、有名なるものが二つある。一はアブラハム●リンコルンの下したる定義、卽ち『人民に依つて、人民の爲めになさるゝ人民の政治』である。この定義は世間に流布してゐるが、『人民の爲めに』と云ふ點を力說せねば、動もすれば衆愚の政治に陷る傾向無きにしも非ずである。他の定義は伊太利建國三傑の一人になるマッヂーニーの言である。『最善、最賢の人士の指導の下に一切人民に依つて一切人民の進步』卽ちこれである。この定義は前者に優ること數等である。總ての人を平凡化するは、謬れる民本主義である。眞正なる民本主義はあらゆる人々をして、最高品性を發揮せしめ、



民本主義の教育的宗教的社會的基礎

內ヶ崎作三郎

一日本憲法の特色

去る二月十一日の紀元節を以つて、吾人は帝國憲法發布三十周年を迎へた。殊に世界大動亂の後に來れるこの祝典に對して、誰れか祝意を表せざるものあるか。然れども、大國民の襟度は廣くして、自己批評を包含しなければならぬ。英國民は、忠君愛國を以て當然の事として、自ら發表することなく、常に自國の政治に對して不平と不滿とを漏してゐる。然かも一朝緩急あれば義勇公に奉ずるの精神は極めて旺盛である。故に吾人もこの英人氣質を學びて我國に於ける憲政三十年の功過を批判して、祝意を表したい。或る政治學者の云ふ所に依れば、政界の憲法を分ちて三つとする。一、君主統治の憲法、二、君民同治の憲法、三、人民共治の憲法是れである。而して日本帝國の憲法は、君主統治の憲法にして、世界に於て比類なき憲法である。英國憲法は第二に屬し、米佛の憲法は第三に屬する。然り帝國憲民は君主統治の憲法たるのみならず、欽定憲法である。然るに憲法發布の勅語に『惟ふに我が祖我が宗は我が臣民祖先の協力輔翼に倚り我帝

國に於てさへも、選擧權擴張は敎育に先んじたのである。何故に我國に於て、敎育普及せざるが故に普通選擧權を與ふる能はずと主張するか。千八百七十年に敎育令施行せられ、必要に應じて義務敎育令も勵行せられた。今日は十歲以上の人口百人中九十九人まで讀み書きの力を有してゐる。北米合衆國に於ては千七百九十五年より千八百二十年までの間に東部諸州に於ける敎育令が制定された。千八百四十年に至つて殆んど全國の敎育制度が備つた。最初米國に於て敎育の設備甚だ不完全にして、敎師に對する手當なども、甚だ僅少であつた。然るに千八百九十九年大統領マッキンレーが報告する所によると、千八百九十七年より八年に亘れる年度に於て小學校に出席したるものは人口の二割に達してゐた。千九百九年に於ける統計を見るに、北米合衆國全體に於ける小學校に學籍を有する者一千七百餘萬その平均一日の出席者一千二百餘萬、敎師の數四十九萬六千餘人である。其他大學、專門學校に於ける學生總數男子二十萬四千餘名、女子約七萬六千人、千九百十五年に於いて同國に於ける一切の敎育費總額十億萬圓に達した。而してこれは我日本帝國の歲入歲出全額に比敵するものではないか。

英國に於ては、大戰爭中にも拘はらず、戰時內閣の文部大臣フィッシャー氏は大改革的の敎育法案を議會に提出して、二年間の奮鬪の後、昨年國王の裁可を得た。この案に依れば、滿五歲より、十四歲、若しくは十五歲までを義務敎育年限とし、十六歲まで補習敎育を行ふ、七年後には、補習敎育の年限を更らに二年延長する。又滿二歲より滿五歲までの兒童を敎育する爲めに市町村の自治團體をして保姆學校を經營せしむる。一體英人は、早熟晩老の人種である。然るにかゝる敎育法案に依つて國民の文化を開發せんとするは、その國民的向上心の偉大なるを知るべきではないか。吾人は、原內閣の高等專門學校及び大學の增設に贊成するが、現內閣は現行の小學令を以て完全なりと思ふや否や。我國に於いて大正四年度の全國一切の學校の敎員數十九萬六千七百餘人、學生生徒八百五十四萬四百餘名、米國の統計に比して決して誇ることが出來ない。故に吾人は、日本の立憲政治を完全ならしむる爲めには、敎育の形

最高能力を開發するに存する。從つて民衆と亂民（モッブ）との間に大いなる相違あることを知らねばならぬ。民本主義は可なりと雖も、亂民主義は否定せねばならぬ。敎養なきデモクラシーはモッブクラシーとなる杞憂なきにしも非ず。大いに愼まねばならぬ。若し、不二の高嶺や日本アルプスの、雪際に聳ゆるを心憎しと思つて、日本全土の一切の山嶽丘陵と平原谿谷とを水平に切り崩したならば、恐らくは日本は海拔數百尺の磽确不毛の大高原と變化するであらう。そこには雪を戴く峻峯もなく、その裾野を洗ふ清流もなく、幽邃なる谷間もなく、豐饒なる沃野もなく、人は生活の資料すらも得ることが出來ないであらう。況んや、一切の文明は殆んど消滅するであらう。誰れかかゝる不合理なる平凡主義を歡迎する者があるか。從つて、民本主義は敎育の基礎なくんば堅實なる發達を遂ぐることが出來ないのである。

日本の國富を假りに五百億萬圓と定めて之を六千萬の國民に平等に分配すれば、一人の割宛八十圓に過ぎない。この小額の資本を以て各個人は如何なることをなし得るや、されば富力に於てもその國民的平均化必ずしも歡迎すべきものではない。

三　敎育と民本主義

近代歐米列強の民本主義の健全なる發達は敎育の普及と正比例をしてゐる。例へば和蘭に於て普通敎育令は千八百一年に布かれ、義務敎育は千八百七十八年より行はれた。普魯亞は今より丁度百年前に義務敎育を布いた。瑞西は千八百三十年より同四十八年までの間に小學の增設を行つた。佛蘭西に於ては、奈翁は人民を聰明ならしむることを反對したるが故に、その沒落後まで、普通敎育は發達しなかつた。卽ち今日佛蘭西にては人々の八割五分は讀書力を有してゐる。伊太利にては羅馬敎會が普通敎育に反對したるが故に、千八百六十四年には人口の二割のみ讀書力を有した。今日は五割に達してゐる。英國に於ては、千八百十八年に於て人口の半數のみ普通敎育を受けた。その當時結婚したる男子の三分の一のみ姓名を登錄することを得た。千八百六十七年に選擧權が擴張せられ、敎育の改善を促進した。卽ち英

その卒業生も、又學校に來らざるものも、日曜日毎に、かゝる大仕掛の精神教育を受けつゝあるのである。歐米人の聰明及び品性の大部分は、教會教育の結果なりと云はざるを得ない。又世界に於ける英語國民の宗教の統計を示せば、次の如き數を示すのである。監督教會派、二千九百二十萬人、メソデスト各派一千八百六十五萬人、羅馬舊教徒一千五百五十萬人、長老派各派一千二百二十五萬人、バプテスト各派九百二十三萬人、會衆派各派六百十五萬人、自由思想家五百二十五萬、ルーテル派各派二百八十萬、ユニテリアン派二百六十萬人、小宗教團體五百五十萬、無所屬一千七百萬人、合計一億二千四百十三萬人である。

英語國民はその人口に於て、日本國民の二倍に過ぎぬのである。而して彼等は、殆んど彼等は世界の三分の一を領有し、其經濟的、精神的政治的影響は全世界に及ばんとしてゐる。彼等の秘訣は何處にありや。その原因多しと雖も、日曜日毎の基督教主義教育に負ふところ甚だ大なるを理解することが出來る。

大年四年度に於ける我國に於ける佛教各派の統計を示せば、佛教各宗寺院總計七萬一千七十二、住職總數五萬一千五百八十四名、神社總數十一萬七千七百二十九、神官及神職總數一萬四千六百九千二名、基督教各派、宣教者邦人一千六百二十七名、外國人は八百十二名、會堂一千四百三十四、信徒總數十八萬八千二百三十九(大正五年末調査)。この表に依れば、神社總數甚だ多しと雖も、その教育數の效果は比較的に少きものと判斷せざるを得ない。佛教寺院及住職もその能率果して英語國民間の同數の基督數會の牧師の能率に比敵するを得るや否や。之れ眞面目なる研究を要する問題である。又我國の少數なる基督教會は、餘り歡迎せられざる割合に多少の貢献をなしつゝあるは云ふまでもないが、尚一層自由清新の氣に滿ちて潑溂たる精神を發揮し得んことを希望する。

五　新聞雜誌と民本主義

然れども學校と教會との外近代文明の原動力は新聞雜誌である。最も善良なる多數の新聞を有する國

式の完備及び内容の充實を計らねばならぬことを主張する。然るに、今日の教育家は、過去の功績を以て安んずるが如き傾向あるは、大いに憂ふべきことである。

四　宗教と民本主義

米國の詩人ローウエルはそのビグロー●ペーパーの中に歌うて曰く『米國は貧りと雖も、各戸の近くに學校と教會とを有す』と。學校は智慧を教ふるところ、教會は品性を訓練する所である。教育と宗教とが提携するに非ざれば、國民を眞に開發することが容易ではない。米國がその參戰に於て示したる能力は驚くべきものがあるが、その原動力は、學校、教會、及び新聞雜誌である。抑も米國の建設、殊に東部諸州の建設は、高尚なる宗教的信念を有したる人々に依つて行はれたのである。卽ち清教徒は新英州を建設し、英國國教會の騎士はヴアージニア州に移住した。ハドソン河畔に居を占めたる和蘭人は熱心なる宗教家であつた。佛蘭西より逃れたるユーグノー教徒は紐育州及びペンシルヴアニア州に定住した。ウイリヤム●ペンを中心としたるクエーカー教徒はフイラデルフイアを建設した。又信仰の爲めに本國を逐はれたる獨逸人はジヤーマン●タウンを建設した。又ペンシルヴアニア州及びカロリナ州には、蘇蘭土及び愛蘭土の長老教會の信者が多かつた。メリーランドには、天主教徒多く、ジョージヤ州には、ジョン●ウエスレーの兄なるチヤーレス●ウエスレーの感化が殘つてゐた。又ベンジヤミン●フランクリンの發案に依つて上下兩院は會議に先じて祈禱を捧ぐるの習慣を作つた。

又一九〇九年の統計に依れば、米國に於ける基督教諸教會の總數二十一萬五千百六十、牧師の數十六萬八千三百餘名、教會員三千四百五十一萬七千三百餘名、又同年度に於ける諸教會の座席數五千八百五十三萬六千八百三十にして、それより二十年以前約一千五百萬席の增加を見る。更らに又一千九百八年の報告に依れば、北米合衆國に於ける日曜學校の總數十四萬五百十九、教師數百四十萬一千八百五十五名、生徒數一千一百三十二萬九千餘名、實に盛んなりと云ふべしである。かくして學校に通學するものも、

新聞紙以外社會教育の機關は歐米に於いて行はれてゐる社會植民である。之れはジョン●ラスキン等に主唱せられ、英國に於ては、倫理學者トマス●ヒル●グリーンの高弟トインビー之を實行した。千八百八十五年東倫敦にトインビー館設立せられ、後四年にして紐育に於て隣人組合（ネーボアーギルド）が設立せられた。今日米國この種類の事業は二百七。英國に五十六、和蘭十一、蘇蘭八十、佛蘭西に四、獨逸に二ある。この事業は超宗教的にして、寧ろ人道主義を標榜する。シカゴに於て、ミス●アダムスの經營するハル館（ハウス）は尨大なる建物を有し、一週間九千人の人が出入して或は音樂を聽き、或は講義を聽き、遊戲娛樂をなす。四十餘人の男女寄宿舍にあつて、各の職業に從ひその餘暇を割いて奉仕をなす。百五十人の外來教師之を助ける。目下滯在中のファーネス女史の如きは我國に於てもこの事業の發達せんことを希望して居られる。

日本の憲政は過去三十年に於て、その教育的、宗教的、社會的基礎は不充分であつた。今日に於て憲政の運用宜しきを得ざるは當然のことである。吾人は來らんとする三十年に於てこの缺陷を補はねばならぬ。現在の事情を考察すれば悲觀すべき點もある。然れども吾人は前途に希望と光明とを認める。吾人は日本に於ける民本主義及び立憲政治の基礎の爲めに努力せねばならぬ。

民は最も聰明なる國民と云はざるを得ない。千九百十年に於ける統計に依れば、世界に於ける日刊新聞は約六萬にして、北米合衆國及加奈陀に二萬四千二百四十五、その中北米合衆國は二萬二千七百三十を有し、英國は九千五百を有し、獨逸は八千四十を有し、佛蘭西は六千六百八十一、日本は約一千、伊太利は二千七百五十七、墺匈國二千九百五十九、日本を除ける亞細亞全體に於て一千を有し、西班牙一千露西亞一千、濠洲一千、希臘百三十、瑞西は一千〇五、和蘭九百八十、白耳義は九百五十六、他の諸國に於ては約一千あり。

大正五年度末に於ける我國の新聞雜誌數は左の如くである。

種別			計
新聞	日刊	五〇八	一、九五〇
	月四回以上	二三六	
雜誌（月三回以下）	有保證金	一、二〇六	
	無保證金	一七五	一、一一六
		一五九	
		七八二	

我國の新聞は年々著しき進歩をなしつゝあるは意を強ふするに足る。殊に東京大阪には、我國の代表的新聞の數種を有するは喜ぶべきことである。然れども地方新聞の大多數は今尙ほ低級なる狀態にある。これは、刷新を要する。倫敦タイムス、マンチエスター●ガーデアン、紐育タイムスの如き大新聞が早晩我國に於ても發刊せらるゝことを希望する。蓋し新聞は、民衆の大學である。國民のあらゆる階級は是れに依つて統一せられ刺戟せらるゝのである。米國に於ては、約四千一百人毎に、英國は四千七百人毎に、獨逸は七千八百人毎に、佛蘭西は五千九百人毎に一新聞を有する割合である。我國の人口は大正二年末に於て、內地、朝鮮、臺灣、樺太を合して七千一百餘萬である。假りに之れに對して一千の新聞を配當すれば人口約七萬一千に對して一新聞を有するに足らない。この方面に於ける努力愈々大ならざるを得ないのである。

も日本に於ては宗教は比較的に研究されなければならぬ。併しながら比較的に研究する事は面倒であるだけそれだけ單純なる研究に依つて得られぬ利益もある。他山の石以て我玉を磨くべし。西洋人の思ひ附かぬ新生面を基督教に發見する者は東洋の基督教徒でなければならぬ。之を基督教の發達史に就て見るに、基督教は先づ希臘思想と接觸し次いで羅馬思想と聯盟する事に依つてのみ發達する事を得て居る。果して然らば西洋に發達した基督教が東洋文明の只中に來り、特に其の佛教と接觸する事に依つて新生面を開拓するといふ事は決して單なる想像説では無いのである。無論其れは佛基兩教徒の覺悟にも依る事であらう。且つ希臘思想が基督教に對してロゴス思想を與へた程の偉大なる貢献が果して佛教徒に依つても成就せらるゝや否やは疑問であるかも知れぬ。併しながら先には前ユニオン神學校總理ホール氏、後には目下來朝中の佛國哲人リシャール氏の如く東洋文明に隨喜渇仰する歐米識者もある程なれば東西の二大世界教が互に他に何等の影響をも與へずして終るといふ事は信じ得べからざる事である。ソコデ私は我邦の基督教徒に對して大に東洋文明、特に其の佛教に對する興味を喚起したいと思ふ。斯く曰へば多くの基督教徒は答へるだらう『基督教と佛教とは段違ひの宗教である。基督教は佛教の研究に依りては何の裨益する所も無い』と。果して左樣であらうか。假に左樣だとしても研究も何もしないで獨斷的に斯く判斷するといふ事は實は基督教者の精神にも反する事である。私は妄りに他教を非難攻撃する基督教徒の基督教なる者に對して、常に疑義を有する者である。

基督教と佛教との比較研究の結果如何は教界既決の問題だといふ説もある。果して左樣であらうか。我邦今日の基督教徒中能く佛教の眞相を理解せる者が果して幾人あるだらうか。少くも佛教に對する眞面目なる研究を遂げたる者、若くは遂げつゝある者が果して幾人あるだらうか。私は我邦今日の佛教識者の中に案外基督教に對する知識の貧弱なる事を發見すると同じく、基督教徒の仲間にも佛教に對する知識は極めて貧弱なる事を發見

宗教聯盟を論ず

今岡信一良

一　世界戰と基督教

世界戰の最も顯著なる現象は國際主義の勃興である。國際聯盟問題が講和會議の第一問題として各國講和會議員の討議を受けつゝある事は其最も顯著なる證據である。而して國際主義の根本精神が基督教に在る事無論なるを思はゞ、戰爭勃發以來絶えず其が無力を罵られたる基督教の威力に對して新なる歸依尊信の念を起さしめられる。基督教の人類同胞主義は今や國際間に活ける新道德を生む事に依つて世界改造の偉業に從事しつゝあるのである。世界戰に於て眞に利を占めたる者は實に基督教其者である。

基督教は勝利者であるだけそれだけ一層重大なる責任を感じなければならぬ。國際聯盟の如きも果してウイルソン大統領の理想通りに實現されるかどうかは大なる疑問である。基督教は一層の努力と一層の發展とを遂げなければならぬ。佛蘭西に開かるゝ萬國講和會議は如何にも政治家や外交家の會議であらうけれども、眞に世界に平和を齎す者は政治家でも無く外交家でも無く、實は基督教の精神である。かるが故に私は今更の如く敢て天下の識者に對して既に基督者たると否とを問はず大に基督教研究を慫慂せんと欲する者である。

二　佛教と基督教との聯盟

然らば基督教は如何にして研究すべきかを論ずべきなれども、詳論は之を他日に讓り、今は唯日本に於ける基督教徒の取るべき基督教研究法の一端を述ぶるに止めうよと思ふ。

歐米諸國に在りては基督教と宗教とは殆んど同一視されて居るけれども、日本に在りては決して左樣で無いのである。卽ち我邦に於ては基督教の外に佛教あり儒教あり且神道もある。否ても應で

て明白である。但し私は宗教聯盟を以て國際聯盟を成功せしめん爲めの手段若くは政略と考へる者ては無い。宗教聯盟は飽く迄も宗教聯盟其者の爲に組織されなければならぬ。

三　宗教聯盟の過去及び將來

國際聯盟の實現は未だ將來の問題に屬するけれども、宗教聯盟は既に或程度迄は實現されて居るのである。千八百九十三年(明治二十六年)北米シカゴに於て開かれた萬國宗教大會は單に其時だけの會合に止まつたけれども、其は實に私の所謂宗教聯盟の發端を成した者であると思ふ。卽ち米國ユニテリアン教の識者は、右大會の精神に隨て、永續的なる萬國自由基督教大會を創立し、其第一回を千九百一年倫敦に於て開催した。而して此大會は漸次其の自由主義を徹底せしめたる結果、近年に於ては必ずしも基督教的會合たるに止まらず、廣く一切の自由主義の宗教家の大會たるに至り、全然一種の宗教聯盟たるに至つたのである。千九百十五年の春我國に於ても右團體の主催を見る豫定であつたけれども、戰爭勃發の爲め中止となつた。然るに飜つて我國に於ける各宗教提携運動の歷史を觀るに、同じくシカゴ大會の影響の下に、明治二十九年宗教家懇談會なる者が開かれた。主としてシカゴ大會に出席せる神佛兩教者の斡旋に依つた者らしい。而して無論其は單なる懇談會に終つたのであるけれど各宗教間の意志を疏通せしめた點に於ては極めて有意義な會合であつた。次いで明治三十七年日露戰爭勃發の當時宗教家大會なる者開かれ時局に關する宣言書を發表した事がある。降つて明治四十五年床次內務次官に依つて所謂三教會同なる者の行はれた事は未だ私達の記憶に極めて新なる事柄である。而して最後に同年澁澤男爵、姉崎博士及び成瀨仁藏氏等に依つて、永久的三教會同とも見るべく且日本に於ける宗教聯盟とも云ふべき歸一協會が創立された事も日本に於ける精神運動に注意を怠らぬ人々の熟知せる事件である。要するに宗教聯盟は既に世界にも日本にも存在してゐるのである。私は事新しく宗教聯盟を組織しようと思ふ者では無い。唯私は時局に際して宗教聯盟の使命特に重大なるを思ひ、敢

する者である。佛基兩教の比較問題は未決問題たるのみならず、實は未研究問題である。田中達氏の佛教研究以外何等佛教に關する著述を有せざる日本の基督教界は大に其の無識と懶惰とを恥ぢなければならぬ。

他教の研究は單に他教の知識を獲得せしむるのみならず、やがて其は自教の眞相を明にする者である。隨つて優等宗教の眞相を捕捉する爲に劣等宗教との比較研究といふ事も極めて重要なる條件である。まして、優等宗教と優等宗教との比較研究が各優等宗教の眞相を闡明する爲に必要缺く可らざる條件なる事は申す迄も無い事である。卽ち世界の二大宗教たる佛教と基督教とは互に他を研究する事に依つてのみ各自の眞相を明にする事を得るのである。加之、佛教にしろ基督教にしろ、既に幾千年前に於て出來上つて仕舞つた固定的の者て無く、何れも進歩發達の餘地を存する者なる以上、兩教の比較研究は必しも兩教の優劣問題を決する者て無く、寧ろ互に採長補短せしむる事に依つて、世界將來の精神的文明の基礎を作る所以である。私が茲に佛基聯盟を主張する所以は實に此所に存する。

前にも述べたる如く國際聯盟は基督教的精神の實現なる事無論である。而して其は同時に佛教の理想なる事も亦明々白々であると思ふ。果して然らば國際聯盟に參加せんとする東洋、特に日本の如き佛教國にありては、國際聯盟の精神的基礎を佛教の內に發見する事、極めて當然であると思ふ。併しながら日本は成程最も多く佛教に感化された國家であるが、今や大に基督教の感化にも浴しつゝある事を忘れてはならぬ。而して基督教は歐米各國に於ける國際聯盟運動の根本精神なる事を思はゞ、佛基兩教の接觸と聯盟は今日の時局に於て特に重大且適切なる意義と價値とを有するのである。何となれば宗教聯盟特に佛教と基督教との聯盟は國際聯盟に對して最も有力なる精神的根底を提供するからである。現に世界には基督教と佛教とが併立する以上、世界國民を提携歸一せしめる爲には單に何れかの一宗教によるよりも寧ろ兩者の聯盟と提携とに依つた方が遙に有力なる事極め

斯く云へば、宗教は常に社會經驗に隷屬したもので、社會を指導するのでなく、社會に指導されてゐるやうに見えるかも知れぬが、一體、宗教は少くとも其表現に於て常に社會生活の理想化されたものであつて、而も飜つて常に社會生活を指導し來つたものである。理想は現實の粹を拔いて未來に投影したもので、云はば一個の影に過ぎないのであるが、而も其影は現實を支配し、影なる理想自身を實在化する點に於て理想は力である、實在である。宗教の表現も現實の理想化されたものとして、現實を指導する理想の世界を描き出すべきものなるが故に、時代〳〵の要求に應じて宗教的理想は進化發展すべきは勿論であるが、そは現實を指導する理想として常に現實に觸れて而も現實を超越したものであらねばならぬ。

今や歐洲の大戰が收つて、世界萬國の社會生活を改造（レコンストラクト）すべき機運に蒞んでゐる。否な、世界は着々として改造されつゝある。而して其改造の根本原理は民本的人道主義、乃至世界同胞主義である。世界は今や國境を超越した同胞主義の下に軍備は全廢され、官僚政治、貴族政治、富豪政治、男性本位主義は廢たれて、眞の民本政治、智慧政治、男女平等の平民主義が行はれなければならぬ時代となつた。斯る原理の上に立つ社會生活はイエスの宗教に包含され暗示されてゐる所であるが、過去二千年間に於けるクリスト教の理想は妥協に妥協を重ねて現世に降るか、或は超然彼世的世界に勇退するかして、現實を指導する力を失つて了つたのである。若しイエスの兄弟主義が歐洲人の理想を眞に指導して居つたならば、今度大戰爭は起り得なかつた筈である。其起つた事實から見れば、從來の宗教が既に時代の要求に適せぬ、時代の理想と緣遠くて、之を指導することが出來ない程生命なきものとなつてゐることを示すものではない乎。

宗教は時代の要求に適應せねばならぬが、そは妥協の爲めではなく、時代の生活を指導せんが爲めである。されば宗教は常に其時代に於て最も高尙なる、而も實現可能なる理想を擁立せねばならぬ。卽ち民本主義の現代に於ては、宗教をして最

て天下の識者の注意を喚起せんと欲するに止まる。而して既存の宗教聯盟的團體に對しては、此際一層の努力と發展とを希望する者である。若し歸一協會が主催者となり、敢て歐米自由基督教徒の計畫に先立つて、今後一兩年內に我國に萬國宗教大會を開催するの壯擧を企てるならば、極めて愉快な事と思ふ。萬一佛教徒自身がこの種の會合を主催して呉れゝば更に妙であると思ふ。

歸一協會が宗教聯盟として申分なき者なりや否や、國內宗教聯盟と萬國宗教聯盟との關係如何、宗教聯盟の先決問題たる宗派聯盟の問題如何に解決すべきか、又宗教聯盟の實質如何の問題は紙面の都合上他日に論ずることとする。

民本主義の宗教

帆足理一郎

一

神の本體や實在如何の問題は別として、古來、宗教が社會生活經驗の樣相を背景とし、日常生活の言葉を以て表現され、それが時代の要求に應じて不絕變遷し來つたことは事實である。例へば社會生活に國王ありしユデヤ教ではヤアヴェ神を王として崇拜し、國家の政治をなす貴族及び大臣ありし如く、祭司及び祭司の長があつた。降つてローマ帝國の時代には神の罪の審判者たる皇帝の如く、其代表者と稱せしローマ法王があつた。近世に至り憲法政治が盛なるに從ひ、國王が憲法を制定して自分の權限を定むる如く、神も自然法を制定して是れに從つて行動し給ふ如く見る所謂自然神教の神や、十九世紀に於ては人間の自由意志に對する神の自己制限（セルフリミエーション）の思想が現はれ、法王の權力は削がれたけれど、尙僧侶階級が殘つてゐて、英國のやうな民本的憲政國に於いても貴族の面影を存してゐる。

も民衆の一人として普通の職業生活を送らねばならぬ。

私は民本的宗教の要求として先づ僧侶や牧師の階級を打破し、彼等が說教を以て職業とし、文に衣食すると云ふ從來の風習を改め重ぜなければ宗教は生きて來ないと思ふ。宗教に携はる凡ての人々をして平人たらしめよ、大工、左官、商人、官吏、學校教師、又は農夫や、勞働者たらしめよ。若し然らば、彼等が平人としての宗教的經驗を語る一言は、僧侶や牧師を職業とせる人々の萬言に優りて吾等の實生活に有效なる教訓となるであらう。吾等は神の前に萬人等しく同胞兄弟である。僧侶や牧師のみ神樣のことに就いて特別な經驗を持ち、特別な知識を持つてゐる筈はない。高い美はしい經驗を持ち之を有效に他の同胞兄弟に傳へ得る者は皆夫れ僧侶である牧師である。何ぞ之を一部少數の人々の職業とする必要あらんや。此意味に於てクエカアの信者等が原則として牧師の必要を認めず、神のインスピレエションに接したものが、誰れでも構はず、男でも女でも立つて自分の感想を述ぶると云ふ、此態度は私の所謂宗教上の民本主義であつて、此點に於て我等がクエーカアに學ぶべき所甚だ多いと思ふのである。

三

昔の宗教は人間を罪に汚れた墮落したものと思つてゐた。中世紀の原罪說などがまだクリスト教の一部に殘つてゐて、動もすれば人間自身を罪の子と稱し、恰も難波船の乘客が助け船を求むるが如く號叫する。是れは間違ひである。勿論吾等は人間の罪を認むる。然し、それは吾等が罪を犯して高い所から墮落したこと許りではなく、愛を以て低い處から絕えず努力して向上すべきものを努力しないで停滯してゐることが多く、それが却て罪である。罪は卽ち無愛であつて、愛とを積極物に献身的の努力を捧げて社會に奉仕し、之によつて自分の人格を完成し往くことである。換言すれば吾等の所謂罪とは少くとも或る理想標準を蹈みはづして墮落したこと許りでなく、日々の生活に於て彌益高き理想標準に向つて積極的に努力しないことである。人間は動物的生活を後に脫き去つ

も民本的なものたらしめて、社會生活に於ける遲々たる民本思想及其實行を常に鞭打し督勵し指導せねばならぬ。それが爲めには傳來の宗教が貴族的、帝王的、軍國主義的、慈善主義的なるを排して、平民的、民本的人格主義の宗教に改造せねばならぬ。

二

昔の宗教には僧侶や祭司が必要であつた。それは僧侶や祭司の起原を詮ぬれば直に分る。彼等は神と人間との仲介者となつて、神の恩惠を人間に取次いでやる役目であつた。彼等は神を取扱ふ一種特別な技術を知つてゐるので、平民は彼等に依つて神の恩寵に預らんとしたとが、僧侶階級と云ふ分業の起原であつて、今日吾等は凡ての仲介者を排して直接に神に近かんとするものであるから僧侶階級の無用なるは勿論、牧師傳道師などゝと云つて宗教の事を職業とする者の必要はないのである。然り、民本主義の宗教は牧師や僧侶を必要としない。彼等は宗教上の貴族であつて、彼等が實際生活を遠かつた僧侶や牧師としての特殊の生活は彼等をして吾等平民の生活と沒交渉ならしめ、從つて彼等の說教は吾等平民の思想感情と何等共鳴する所なき單なる言語に過ぎない。ポロニヤスがハムレットの讀んでゐる書物を窺き込んで何を御讀みなされますと問ふと、『言葉だ言葉だ』とハムレットは答へた。ハムレットの苦悶がポロニヤスなどに分るものか、そは只言葉に過ぎない。然り、當今多くの牧師や僧侶の說教は吾等の眞劍な實生活と沒交涉な言葉に過ぎないものが多い、是れ畢竟彼等が平民の生活と離れた生活をしてゐるからである。彼等は牧師や僧侶として特別の取扱ひを受くるだけ、夫れだけ平民生活から遠かつてゐる、從つてほんとうの生活を味ふことが出來ないでゐる。憐むべきは炭坑の坑夫や泥溝の浚渫人夫ではない、人間の實生活に觸れることが出來ないほど世間から祭り上げられてゐるのは僧侶や牧師である。殊に日本の僧侶や神官は社寺附の財產や他人の喜捨に衣食してゐるから、彼等に人生の眞味が分らう筈はない。若し牧師や僧侶にして眞に民衆を指導しようと思ふならば、彼等

處て神様から先に人を愛しなければ人は神を愛するに至らぬ様なことを信じてゐた。今の宗教は人本的である、吾等が向上の努力撓みなき處、其所に神様の力が加つて來る。是れ吾等の信條である。

從來の宗教家は叫んで曰く、神様に一切を任せろと、そして自分の重荷が輕くなつたの、安心立命を得たのと喜んでゐる。從來の人間は鋭い知識の光を恐れた、一切を神の恩寵とか安心とか云ふ曖昧なものゝ中に然り、彼等の所謂神秘の中に包み込んで、分らぬ所に味があると思つてゐた。自分の罪を神に任せて夫れで、肩が輕くなつたなど思ふ連中は、自分の借金を他人に支拂つて貰ふことを喜ぶ人間である。我等の罪障は斯様な手易い信仰や悔悟などに依つて消滅するものではない。吾等が犯したと感ずる罪は何時までも我等の罪であつて、神の萬能を以てするも之を取消すことは出來ぬ。既に發生した罪の事實は罪の事實である。吾等が進んで之を改造するまでは、卽ち之を改造して善化するまでは永久に罪として殘つてゐるであらう。

私は一切を神様に任かせてと、全心全靈を捧げた信賴の美を認むるに躊躇するものではない。然し、自分の罪を一切神様に投げ掛けて、自分から自分に對する責任を誤魔化して初めて安心とか平和とか云ふ難有味を感じてゐるものよりも、トルストイの如く死ぬるまで自己反省の鋭い刃て自分を解剖しつゝ常に不退轉の向上的努力を撓まなかつた、其奮闘的生涯の方が如何に慕はしいものであるか分らぬ。安心だの立命などに隨喜の涙を流してゐたのは中世紀に於ける彼世主義の隱遁者である。自分の責任を曖昧にした安心の睡藥に値ひするもの、吾等は常に安心のないことを却て喜んでゐる。吾等の求むる所は絶間なき新らしい事業である、修養である。絶間なき自己更改の事業の爲めに吾等の心は熾ろ火の車の如く廻つてゐる。何の安心ぞ、何の平和ぞ。

されば、民本的宗教は衆生濟度だの救ひだの云ふ貴族的思想を排斥し、之に換ふるに靈的向上の爲めにする努力奮闘を以てし、先づ神なる人生の理想を愛して同時に神の愛を受くることを信ずべ

て、徐々神的生活に昇つて往かねばならぬ。此進化の過程を辿らないで躊躇し逡巡してゐることが罪である。

斯る意味に於ての罪は吾等の日々感ずる所である。吾等が偉大な人格を築き、清き美はしき愛の生活をなさんと努力すればする程、吾等自身に對する不足不惜を感じて、此罪を滅さんと希ふ。乍併、吾等は最早獨裁專制の神が慈善的に救ひを與へ給ふなど云ふことを信ずることは出來ない。今後の宗教には此救ひとか、衆生濟度とか云ふ考へを許さない。此等の思想は昔し專制君主の時代の遺物である。吾等は神の慈悲や情で救つて貰ふことを屑しとしない。慈悲なる言葉は人間が自からを神の奴隷とか僕(しもべ)とか云つた中世紀の舊思想に屬するもので、佛教の慈悲もクリスト教のマアシイも階級思想の所産である。慈悲とは貴族階級の人が奴隷階級の人に所謂憐みを施す慈善主義であつて、吾等は最早他人から惠んで貰ふ慈善を要求しないやうに、只神樣から慈善的に救の恩寵に預ることを嬉しがるものではない。

神は慈悲ではない。愛である。愛は平等である對等である。吾等は神を愛せずして神からのみ愛を求めはしない。中世紀の思想には先行(プレヴェニエント)の恩寵(グレエス)なるものありて、吾等が神を求むる前、神樣の方から既に恩寵を垂れて吾等を救ひ給ふと。若しさうだとすれば、そは誠に都合のよいことである。當方から求めないでも、先方から來て下さる、難有いに極まつてゐる。何の努力なく、何の奮鬪なく、袖手傍觀して救ひに預り得るならば、夫れは牡丹餅に棚である。然し、斯樣に神樣からの慈善的恩惠のみ求めてゐたから、ニイチエなどがクリスト教を奴隷道德と罵倒したのである。吾等は神樣から計り愛を求むるのではない、吾等は先づ吾等が生活の理想して神を愛して而して後に神樣の恩寵に預つた方が遙かに心地よいのである。故に私は中世紀の思想に反して後行(エピヴェニエント)の恩寵(グレエス)を主張する。少くとも。吾等が神を愛し得るだけ、同時に、夫れだけ神樣の恩寵に預りたいと思ふ。西洋の諺に『神は自からを助くる者を助くる』と、是れ民本的宗教の信仰である。昔の宗教は神本的であつた。

ない。吾等は神の共働者である。神は善美の勇士であり、正義の擁護者であり、博愛の實行者である。而して神は吾等の父であり友であり。靈の指導者である。吾等は彼を友として如何なる惡戰苦闘にも堪へ忍ぶ勇氣を得る。吾等は彼を父として全世界の人類に一視同仁の兄弟的愛を致すことが出來る。吾等は彼を指導者として最も高い理想に憧れ、最も清き美はしき生活に向つて不退轉の精進を續け往くことが出來る。我等は神の子とし友として、神と倶に働き神と倶に樂しむことを以て人生無上の法悦と信ずる。吾等に安心あり悦樂ありとせば、そは神と倶に働き得ると云ふ確信である。神を無限に愛し、又人を無限に愛し得ると云ふ悦びである。我等が愛人に對する愛も常に苦痛煩悶を伴ふ、而も其處に限り知られぬ愛の悦びがある。吾等の悦びは卽ち苦しみ得る悦びある。

五

上述の如き神觀を有する民本主義の宗教は卽ち愛の宗教である。愛は對等なる人格的交渉である。他人を道具視し、機械視し、奴隷視する處に愛はあり得ない。個々人格の獨自無双性を認めて、之を尊重し、互に其肉體的、知的、道義的可能を無限に發展せしむるやう相扶け合ふことが吾等の愛を實行する所以である。

愛の宗教は國境を超越し、民族的區別なく、階級的差等なく、貧富、老苦、賢愚の區別なく、世界十六億の民衆をして各自の個性を磨き、其天職を全ふせしむる爲めに均等の機會を與へんことを主張するものである。生産や分配の問題を處理し、貧富の懸隔を緩和し、又富者に公共心を鼓吹して公益の爲めに彼等の積財を提供せしめたり、貧者や勞働者をして自覺せしめ、單に衣食の爲めに生きず、高尚な精神生活の實現の爲めに努力せんことを鼓舞したりする、是れ皆愛の宗教の要求である。

愛の宗教は軍備の全廢を主張する。かの五大强國が中心となつて國際聯盟を結び、武備を以て世界の平和を維持せんなど云ふが如きは、一種の國際的貴族主義の寡頭政治を稱ふるものであつて、民本主義の宗教的理想を距ること甚だ遠いもので

きてある。

四

吾等は神に愛を捧けて神の愛を求むる。斯る神は決して九重の奥に龍顔畏れ多くも仰ぎ見ることの出來ないやうな神ではない。神を超然的に宇宙の外に祭り込んで、神の本體を神秘（ミステファイ）化し、吾等と到底比較することも出來ない、了解することも出來ない、無限、絶對、全智、全能と見るは、人間を奴隷化するものである、又機械化し傀儡化するものである。若し神が萬能なれば、吾等に眞の自由意志はなく、只神の御心の儘になる運命觀に滿足するより外はない。全能者の御意の儘になるのは制專主義の宇宙である。專制的宇宙では、人間が如何に努力しても、又努力しなくても、世界は神の意志の儘にしか動きはしない、そは吾等の預り知る處ではない。ユデヤの宗教や、かのブラウニングのラビベンエズラに現はれてゐる中世紀の思想では、神は陶工て人間は陶器、神の御意の儘に吾等は善人にもなり、惡人にもなり、英雄にもなり、馬鹿にもなる。是れ人生を機械視し傀儡視するものてある。人生が若し斯様なものてあつたならば、是れほど馬鹿らしいものは他にあるまい。

吾等は個々心靈の自由を要求する、是れ民本的宗教の叫びてある。吾等は一個の人格として神の子の自覺に達し、神の友たるを得んことを希ふ。吾等は『三寶の奴』てはない、吾等は『神の僕（しもべ）』てはない。吾等は自由意志を有する人格てある。自由意志は自分以外宇宙の何者からも拘束を受けない獨創力てあつて、是れあるが爲めに吾等は自分の人格的責任を重んずるのてある。若し吾等に何者からも拘束を受けない自由があつたならば、吾等の人格は根據なき空名のみ。吾等は自分としての生活義を持たないことゝなるのてある。

吾等は神から助力を受くると共に、神を助けて彼れの事業を成就せしめ得ることを喜ぶ。受くること計り知つて與ふることを知らないのは慈善院の厄介者てある。吾等は宇宙を以て絶間なく進化向上しつゝある神の仕事場だと思ふ、そして吾等は神に使役される奴隷でもなく、操られる傀儡でも

生活があるといふ人は恐らくないであらう。もつと手近かな例をあげるならば、今卓子の上にある時計は晝夜廻轉して一刻も停止しない、そして時の刻々の刻みには秋毫の差もなく正確にその針を指してゐる、今この時計の廻轉を見てそこに時計の生活があるといふ人があらうか。吾々は毎日次郎や太郎と往來し談話し握手してゐる、吾々は毎日水を呑み米を食ひ火を使つてゐる、そしてこれらのことが自分の生活だと考へてゐる。しかしこれらの對象物は一として自分の自由になるものはない。太郎が病氣をすればそれが爲めに悲み、米が無くなればそれが爲めに心配する。太陽が山の蔭に隱れてさへ吾々はその影響を免るゝことは出來ない、或は眼が見えなくなり、或は寒くなり或は眠くなる、どこにも吾々の自由がないやうである。併し吾々の生活は次郎とか太郎とか或は米とか水とかいつたやうな對象物にあるのではなく或はそれらの對象物との自然必然的な物質關係にあるのでもなく、その對象物に對する意味即ち價値の交涉のうちにあることは、少し考へのある人には直ちに首肯さるゝことと思ふ。吾々が次郎や太郎と交際し談話するのは、彼等の人格のうちに意味即ち價値を認め、そしてその價値を要求するからであつて、決して投げてやつた毬が板塀に撞き當るやうな關係のものではない。又吾々が米を食ふにしても水を呑むにしても、それらのものの吾々の生命を維持する丈けの力即ち價値を要求するからであつて、決してかの幢(のぼ)りの鯉が器械的に空氣を吸ひ入れるやうなものではない。それが爲めに吾々の交際にもその他の行動にも撰擇といふことがある。吾々は次郎と交際しても三郎とは交際しない、米は食つても石や砂は食はない。この物を選ぶといふことはそのものに意味があつて初めて可能なので、決して心理學者のいふやうに意志があるから可能なのではない。ウィルソンは今や世界人類の注目の的となつて、世界の存在は彼れの存在になつて維持せられて居るやうな有樣であるが、しかし片田舍のお婆さんには彼れの名さへ知られてゐない。彼れが生きてゐやうが死んでゐやうが、そんなことは何の關はりもない。これ即

ある。吾等はウイルソンやロイドジョーヂやクレマンソオを我等の民本的宗教に來らしめ、彼等を啓發し、彼等の理想を高からしめて、直に民本的世界共和國を實現せしめねばならぬ。米國が海軍擴張をやつたり、英國が制海權を棄てないなど主張したり、又嘗て民族自決主義を主張しながら、自國の領土には是れを適用しないなど勝手がましいことを云つてゐる彼等は實に民本主義も何も解しないやはり國家至上主義の迷夢に囚はれてゐる奴等である。

世界改造の秋に當り、げに今日の如く、吾等が稱ふる民本的愛の宗教の必要なことは他に在り得ないのである。

自我の內面的發展（三）

野村隈畔

三　自我は價値の創造者

諸君、は余は自我の外に何者も認めないものである。何者も認めないといふのは、恰も太陽が獨り天空に懸つて何者の支配をも受けないやうに、自我は全く孤立してその存在を續け得るといふことではない、たゞ自我は一切のものゝ創造者であるといふことである。然らば自我はウイルソンやロイドヂョージを創造し、牛や馬を創造し、更に水や火を創造したかと反問する人があるかも知れないが、余は笑つて然りと答へておかう。諸君吾々の生活は決して砂漠の如きものではない。いかに大膽な自然科學者といへども、ウイルソンと馬とが並立してゐることが眞の生活だといふものはないであらう。例へばこゝに子供の人形箱があるとするに、その箱の中には男や女の奇麗な人形が澤山並べられてある、しかしその箱の中に人形の

重要な根本問題である。要するに、吾々の生活は意味即ち價値である、そしてこの價値を創造するものは自我の外にあり得ない。若し自我の外に價値の創造者即ち「一般者」の如きものがあるとすれば、吾々の自我は決して眞の自我ではない。何故なら眞、の自我といふものは自己以外にいかなる創造者(即ち對立者)をも許容しないものであるから。たとへ創造者があり得るにしても、そは直ちに自我によつて征服され若しくは同化さるゝであらう。恰も光線や濕氣は麥の發展を支配するやうに見えるけれども却つて麥によつて征服され同化されると同じことである。既に同化されたものは最早や自我の對立者ではない、そはむしろ自我の一種の價値として創造されたものである。だから自我は凡てのものに對する唯一の創造者である。そして自我の創造するものは凡て價値である。價値を離れて自我の創造といふことは考へられない。吾々の生活における凡ての問題は悉く價値の問題である。小は衣食住の撰擇から大は世界の人類に對する交渉に至るまで、悉く價値の問題である。

吾々は舊觀念に囚はれて、形式的な道德のみが價値だと考へて居るが、豈圖らんや、經濟上の競爭も階級間の爭鬪も悉く價値の問題である。吾々が目下現代の生活乃至文化の上に問題にして居る個人主義や民本主義は、無論價値の實現である。否吾々が吾々の思索乃至生活の根據と考へ理想と信じて居るところの當爲とか、自由とかいふものは價値の別名に過ぎない、從つて眞善美といふが如きものも、この價値の分割的反省であることは言ふまでもない。所詮生活乃至文化の發展は即ち價値の發展である、永遠なる價値の發展、これが即ち人類の歷史である。然らば自我はいかにして永遠の價値を創造するであらうか、自我を支配し服從せしめねば止まないやうな絕對當爲とか、絕對自由とかいふものを自我はいかにして自發的に展開するか、これ吾々の當面の問題となつた。

諸君！　自我は決して傀儡師ではない、だから彼れの價値の創造は、恰も人形箱から佛でも鬼でも勝手に出すやうなものではない。亦自我は決して自動機械ではない、だからその價値の創造は、

ちウイルソンとお婆さんとは全く價値の交渉がないからである。しかしこのお婆さんは若かい時分に失つた子供に對しては、死ぬまで忘るゝことは出來ない、それは卽ち子供に對する密接な關係卽ち意味が存するからである。死んだ子供に對する記憶をいつまでも維持して居るのは、お婆さんの意志ではなくて意味に對する要求である。要するに吾々の生活は決してその對象物にあるのでなく、それとの內面的交涉卽ち意味にあることは明白な事實である。若しこの意味を無視するならば、吾々の生活に何等の價値もあり得ないであらう。意味卽ち價値があつて初めて吾々の生活が出來る、從つて吾々の對象物といふものはこの價値の客觀的名稱に過ぎない。言ひ換へれば、內面價値の客觀化されたものが卽ち對象物である。だから價値がなければ從つて對象物もないわけである。卽ち田舍のお婆さんに對してはウイルソンは決して生きてゐないのである。

諸君！　然らば價値とはいかなるものであるか、そはいかにして生じたものであるか。諸君、自我が一切の創造者であるといふのは、卽ち一切價値の創造者であるといふことである。卽ち生活における凡らゆる價値の創造者は自我である。そして生活は畢竟じて意味卽ち價値そのものであるから、自我が卽ち自發的に思索乃至生活を創造したものといふことが出來る。吾々は今自我は何故に一切價値を創造するかと問ふことは、赦されてゐない、何故なれば自我は吾々にとつて最も根本的な直接的なものであつて、自我の外に自我を支配する意味の存在を考へることが出來ないからである。たゞ吾々は自我はいかにして一切價値を創造するかと問ひ得るのみである、これは自我の創造的發展によつて問ふことが出來る。卽ち自我の創造的發展は、言ひ換へれば價値の自發的展開そのものであるから、この質問は取りも直さず吾々の生活を創造することとなるのである。丁度吾々は一粒の麥が何故に發展するかといふことが解らなくとも、いかに發展するかといふことは、その根を生じ葉を出すことによつて理解できると同樣である。從つてこの問題は哲學上乃至生活上、最も

を捧げて居る人が多いが、哲學者の間にも眞の自我を摑んでゐるものは甚だ尠ないやうである。或は子供の遊戲のやうに、友達や妻子や色々の道具を集めて來て、それらを自分を中心にして結ぎ合はせたのが眞の自我だと考へてゐる哲學者すらある。諸君！　余が數年前即ち大正三年の末において、自我を『純粹自己意欲』(seine Selbstsucht oder reiner Selbstwollen)であると叫んだこと(拙著『自我の研究』參照)は、讀者の既に了知せらるゝところであらう。この「純粹自己意欲」の把握は余にとつては非常に大なる發見であり、又哲學史上沒すべからざる功績であると信じた。余は狂氣の如く喜んだ、余は一切神秘の鑰を摑んだと熱叫した。しかし諸君！　余はその後この純粹自己意欲の爲めに、いかに苦悶し號泣し瞑想し奮鬪したか知れない、或る時は根本的に否定しようと藻掻いたことすらあつた。眞の自我だと思つて摑んだこの純粹自己意欲は、或る時は黑いそして冷たい鐵塊のやうに、或る時は恐ろしいスフインクスのやうに余に見えた。けれども余はこれを抛棄することも出來なかつた、それに對する信仰と努力とを廢することは出來なかつた。余はます〳〵直覺を銳敏にし思索を明晰にして、純粹自己意欲を深く深く掘り下げた、そしてこれを愛し育み培ふと爰に數年に及んだ。昨年の夏七月の或る朝であつた、まだ涼しいうちに何か書かうと思つて机に向つて坐つてゐると、粹純自己意欲の微細なる內面的發展がハッキリと頭に浮んで來た、自分は早速ペンをとつてノートに書きつけた。それは簡單な三段の發展であつた、余は無雜作に横に發展の順序に從つて(一)(二)(三)の番號を附し、その下に形而上性、當爲性、自由性とかきつけた。諸君、この名稱に拘泥してはいけない、これは一二三では不明瞭だから、その發展の狀態を明示する爲めの記號であつて、謂はゞ發展の內面的順序に過ぎない、恰も種子から根や葉や花を生る如きものである。ところがこの發展の發見によつて非常な光明と廣大な世界とが一時に展開した、といふのは今まで不變不動恰も鐵の扉のやうに固く閉してゐた純粹自己意欲は突然その本性を曝露して、內部の創造性

恰も蓄音機から種々のリズムが自由に流れ出るやうなものではない。亦自我は決して動物ではない、だから彼れの創造は恰も鷄が卵を産むやうなものではない。亦自我は決して合財袋のやうなものではない、だから彼れは一切價値の集合ではない。亦自我は決して眞珠の玉のやうなものではない、だから彼れは何年經つても不變不動、不冷不溫といふものではない。諸君、「牛乳から酪が生じ、酪から生酥が生じ、生酥から熟酥が生じ、熟酥から醍醐が生ずる」といふことは、何遍となく佛典に出て來る議論であるが、釋迦がいつたやうに牛乳は牛乳であつて、酪でも酥でも醍醐でも何でもない。丁度一粒の種子から根を生じ、葉を生じ、枝を生じ、花を生じ、實を生ずるけれども、種子の中には葉もなければ花もなく果もないと同じことである。或る人は種子の中には花や果の可能性があるといふかも知れぬが、可能性といふことは因果律によつて想像したもので、結果がなければその實質が解らないのである。丁度外國の友人から送られた或る植物の種子を、そのまゝいつまで研究したつて、いかなる葉を生じ花を開くものであるか解らない。しかしそれを地に播いて根を生じ花を開いて初めてその種子の本性が理解されるが如く、自我も亦同じことである。自我は一切の價値を生ずるけれども、價値そのものでもなく又價値の貯藏池でもない。種子を分析しても葉や花がないと同じく、自我を分析しても何處にも價値がない、たゞ在るものは無限の創造力のみである。だから未知植物の本性は種子の發展によつて理解し得る如く、自我が當爲とか自由とか眞理とか善とかいふ種々の價値をいかにして創造するかといふことは、自我の本性の內面的發展によつて理解し得るのである。

四　自我と純粹自己意欲

しかし自我はいかなる發展をなすものであるかを決定するには、先づ自我の本性を如實に把握しなければならぬ。麥の本性を知らむとするには、稗や粟の種子を撰んではならない。隨分世間には本當の神だと思つて、狐や變な木偶に向つて信仰

實である、そこに何等の名稱も記號も概念もない。永遠の創造力たる自我においても亦さうである。余はその三段の發展を名けて形而上性、當爲性、自由性といふけれども、もとくかゝる名稱が附着してゐるわけではない、三者とも持續的なものであつて純粹自己意欲の必然的發展である、そして具體的な事實である、卽名稱や概念ではなくて本質である、Wesen である價値とか善とか美とかいふ名稱は何處にもない。是等の概念は悉くこの三段の發展の或る狀態を反省したもの又は自覺したものである。この意味において價値といふものは、具體的には無いものであるといふことも出來るし、又はその反對に必然的事實的に發展するといふことも出來る。かくして純粹自己意欲の內面的發展は自覺され反省されて、或は實敎的な「聖淨（ヘイリゲ）」となり、或は哲學的な「一般者（アルゲマイネ）」となり、或は價値となり、或は自由となり、或は分割されて眞善美となり、或は綜合されて神となり、更に自我が生活の上に具體化さるゝに及んで無限の價値差別が生じて來る。かくして自我は內面的（體驗的方面）にも外面的（生活乃至文化の方面）にも、無限にそして永遠に自己發展卽ち價値の創造をやるのである。「聖淨」とか「一般者」とかいふのは形而上性の反省であり、規範とか價値とかいふのは當爲性の反省であり、自由とか權利とかいふのは自由性の反省である。反省といふのは必然的實在的な本性を自覺して規範化することである、故に反省がなければ凡ての價値は本性に歸復して事實化する。反省がなければ價値がないといふことは出來ない、何故なら凡ての價値は必然的に事實的に發展するものであるから。恰も植物は何等の反省もないから、根もなく葉もなく果もないといふこと出來ないと同樣である。要するに一切の價値は自我の必然的發展によつて展開されたものである。神を叫ぶ宗敎も、絕對實在に醉ふ哲學も、至善を理想とする倫理も、乃至一切の生活は悉く自我が自發的に創造したものであり、從つて一切生活の規範たる種々の價値は自我の本性において、必然的に實在的に燃燒し發展しつゝあるものである。諸君！　全宇宙よりも永遠なる自我、全生活を創造

を赤裸々に明示したからである。そして余は自我卽ち純粹自己意欲はその三段の發展によつてのみ理解し得べく、而して三段の發展は又純粹自己意欲によつてのみ自發的に展開さるべきものであるとを論理的に確めた。丁度麥粒の本性は根や葉や花を展開することによつて解かり、そして麥の根や葉や花はたゞ麥粒によつてのみ自發的に創造さるゝが如きである。尤もこゝにいふ三段の發展は麥の葉や花を見るやうなものでなく、自我が吾々の內面的自證に現れてから、生活の上に具體的に實現されむとする迄の、卽ち未だ具體的に自己實現をしない間の極めて瞬間的の發展、卽ちベルグソンが言つたやうに全く分析解剖を容れない、體驗的持續的な發展であるが、これは哲學上極めて重要なるものであると考へたから、余は以上の發見を昨年の夏の暑い盛りに整理し完成した。それが卽ち余の『自我批判の哲學』である。

諸君！　余は興に乘つてあまり自分の秘密を語り過ぎたが、併しこれは諸君の疲勞をねぎらうための餘興位に聞き流して貰はふ。兎に角余はいくたびか棄てよう否定しようと煩悶した純粹自己意欲は、その內面的發展によつて眞の自我であるとが解かつた。余は稗でも粟でも眞の麥種子を確かと摑んでゐたことを、今になつて限りなくうれしく思ふ。そして今まで吾々の思索乃至生活を束縛する當爲とか價値とかいふものは何であるか、それは何者が創造したのであるか、いかにして創造されたものであるかといふやうな、いくら考へたつて到底解りつこのない問題は、この三段の發展によつて今は決して問題ではなく、却つて吾々の內面性の必然的な事實となつたのである。諸君、種子は自らに向つて「余は何故に又いかにして根を生じ葉を生じ、花を開き果を結ぶか」と問はないが、而かも自發自展的に根や葉を生じ、花を開き果を結んでゐるではないか。そして種子自らは根も葉も花も果も意識しない、それらは凡て同一なる創造力の自發的展開に過ぎない。根とか花とかいふことは傍觀者の吾々が假りにその發展の或る狀態に名けた記號である。創造力の自發的展開は悉くこれ本質的であり、必然的な具體的な根本事

戰後も依然列強の武力競爭

工藤直太郎

一　人格（パーソナル）と非人格（インパーソナル）

デモクラシーが世界を支配せんとしつゝあると云ふのが、現代の流行語であるが、熟々考ふるに凡そ流行なるもの程に世に果敢なきものはない。通例デモクラシーを解釋して『人民に依つて人民の爲めの人民の政治』と云つてゐるが、それがデモクラシーの一大定義となつてゐる樣に思つてゐるのである。けれども本當を云へば何もデモクラシーは人民の爲めに人民に依りてなされたる人民の政治とは限らない。王樣が、人民の爲めに人民を本としてやる政治もやはりデモクラシーである。又デモクラシーは共和國憲法を基としてゐる大統領の政治でもない。

それ故デモクラシーの本當の意味を解釋するならば、デモクラシーは政府（ガヴァメント）をインパーソナルなものと考ふることにある。政治をインパーソナルなものに考ふることの出來る人ならば、その人は明かにデモクラシーに徹底してゐる人である。政府をインパーソナルなものと考へ樣とする人は當然君主專制主義又は專制的大統領に依つて行はれる共和政治に反對でなければならぬ。ところでオートクラットとは如何なる者かと云へば、爲政者その者が一般多數民の上に一つの人格（パーソナル）として臨む者である。

それ故王樣でも大統領でも、もし彼等が自らパーソナリテーを備へたものと信じて人民に臨むならば、彼等は專制主義者である。然るに王樣でも皇帝でも自らインパーソナルを以つて人民と共に政治を執るならば、彼等は明かにデモクラットでなければならぬ。オートクラシーもデモクラシーも政治上の形式ではない。單に死物たる政治的形式から論じても何等所詮のないことである。その

する自我を支配し束縛する何者が、この世界に存するであらうか。余が前に自我の外に何者も認めないと言つたのは、自我以外のものを凡て否定するといふ意味ではなく、價値界においては自我の外に認容すべき創造者が決してあり得ないからである。

諸君、この自我の發展的三性は尚充分に說明しないと、純粹自己欲の眞の意義が明瞭でないのみでなく、又三性の必然的持續的關係も解らないのであるが、これは頗る學術的專門的に亘り、又して徹底的に論じないと却つて誤解を招く惧れがあるから、詳しい說明は余の『自我批判の哲學』において述ぶることにして、茲にはたゞ自我は一切價値の創造者であるといふこと、卽ち自我は純粹自己意欲であるが故に形而上性、當爲性、自由性の三段の發展を必然的に展開し、そして三段の必然的發展は卽ち價値の具體的な自發的創造であるといふことを固く記憶して貰ふことに止める。そして個人主義とか民本主義とかいふ所謂文化意識の研究は以上に述べたやうな自我の內面的發展の研究によつて眞に解決さるゝものであると思ふ。余は次に筆を改めて吾々のこの研究の主題であつた「個人主義の文化史的意義」について、論じようと思ふ。

今以上に述べた自我の三段の發展を便宜のため、梗概だけをあげておかう、(自我は三性の並列的集合でなくて持續的發展である)

純粹自己意欲（卽ち自我）
- (1) 形而上性 — 體驗的 — 創造的 — 宗教的文化意識（自由主義）
- (2) 當爲性 — 自己承認的 — 自己實現的 — 倫理的文化意識（個人主義）
- (3) 自由性 — 自律的 — 發展的 — 政治的文化意識（民本主義）

は、個人の絶對必要を節約して蓄積せるものであると云つてゐるが、個人の絶對必要の生活費用より掻き集めた資本制度は、今日の社會制度の根本を成してゐるのである。

一體資本は各個人の生活上絶對必要を充足して而る後その餘剩を以つて作らるべきものなるにも不拘、いつも個人の本來の生存費用即ち bare existence の費用さへも蹂躙してかき集めたる資本を個人の專有とすることは公平なる社會制度と云ふことが出來ないと思ふ。一般の所謂無產階級（プロレタリアン）が資本家に對して反對の聲を擧げるのは、資本其物に對して反對するのではなくして、彼等の絶對的生存必要を犧牲にせんとする方法に對して反抗するのである。それ故資本家にして彼等の絶對生存慾を認めて、之を充足せしむる機會並びに方法を與ふるならば、彼等は決して資本家に對して反對はしないのである。現代のプロレタリアンが資本家に對して一大脅威であると云ふのは、資本家自らプロレタリアンのアブソリュート・ネスエサリーを脅威するからである。

三　骨拔き的國際聯盟

國際聯盟問題が盛に唱へられてゐるに拘らず、國際聯盟の成立せざるは、各國の政治家は、資本家の後援に依りて單に國家的術策を弄するからである。英國が海上の自由論を壓迫し、米國が依然モンロー主義を楯に取りて、人種差別を撤廢せず、佛國がライン右岸の併合又は之が軍事的統管を要求し、伊太利はダルマチア沿岸の割讓を要求し、英領植民地は更らに廣大なる獨領植民地の併合を要求したり、各々自分勝手なる要求を貫かんとするから、誠意ある國際聯盟の實現は困難であるのだ。互に自己の欲望を遂げんとするならば、決して國際聯盟が成立するものではない。もしも資本家を後援とするウイルソンやロイドジョージの國際聯盟が世界に平和を實現するならば、軍閥の後援を有するカイゼルでも世界の平和を實現せしむる充分の權利がある。たゞ武力を後援とせる平和と、資本家を後援とせる世界平和との相違のみである。共に征服的平和なることに於て相違はない。今日の世界は軍國的オートクラシーに代ふるに經濟的

國の政治がオートクラシーであるかデモクラシーであるかを知るのには、たゞその國の政治は皇帝に依つて行はるゝか、又は大統領に依つて行はるゝかと云ふことを見る必要はないのだ、其國の爲政者が自ら國民に對して、インバーソナルなものであると云ふ確信を有し、且つ又その國民がその政府をインバーソナルに見てゐるか否かと云ふことに依つて、オートラシーとデモクラシーの境が定まるものである。王様でも大統領でも國民に對する時はバーソナルを備へて居らぬ。全然無人格と思はねばならぬ。最高の人格者を以つて國民に臨む時は壓制政治となるのである。また國民もミニスターを以つて政治の最高人格者と思つてはならぬ。もしもかやうに考へる國民ならばそれは奴隷國民と云ふの外はない。

二　無産階級（プロレタリアン）と絶對生存權

大統領を戴く憲法を有せる國であれば、必ずデモクラシーの國であると思ふのは淺薄者の淺見である。かゝる人は方法と實質とを混同する人である。成る程米國は政治上の方法から見たならば明かにデモクラシチックであるかも知れぬ。けれどもその方法を運用する實際問題に於てはデモクラシーと全然正反對のことをやつてゐる點が尠くはない。デモクラシーと云ふのは決して政治上の方法や手段にあるのではない。然るに我國の一部の啓蒙運動者と自稱する民本屋は、デモクラシーと云ふ方法さへ政治上に行はるれば、直に社會のデモクラタイズがある様に思つてゐるのである。デモクラシーと云ふ政治上の抽象形式を以つて社會の改造を期せんとする心事が分らない。今日デモクラシーやオートクラシー等の政治上形式主義を云々する時代ではない。デモクラシーであるかオートクラシーである等と云ふ議論よりも、個人生活の改善を努力すべきである。

デモクラシーの本家本元とも見られる米國に於て、資本主義が跋扈して如何に無資產階級を壓迫してゐるかを知るならば、政治上の方法と其實際化とは決して同一ではないと云ふことを知り得らるゝのである。

バーナード、ショーは今日の所謂資本と云ふの

る所謂デモクラシーの本家本元の米國に於て、戰後益々猛烈なる有色人種の排斥を行ひつゝあるのだ。實に矛盾も甚だしい。倫理道德學者の許から手に負へぬ放蕩者を出した様なものだ。世界平和の根蒂となるべき主要條件を骨抜きにして、國際聯盟が立派に成立するならば、それこそ全世界は英米の術策に籠絡せられたりと申す外はない。世界人類は欺瞞的平和の裡に安住することを強制さるゝのである。國際聯盟を審議してゐる聯合國の政治は本來眞面目に世界平和を實現せんとしてゐるのでもあるまいから、誠意のある聯盟の成否などはどうでもよい様なものゝ、英米の國家的術策に眩惑せられて、明日からでも世界平和が成立する様に思つて、デモクラシーを擔いで騒ぎ廻る我國の淺薄なる民本屋は更らに滑稽至極である。

四　萬國社會黨大會と平和問題

正直に云へば、巴里の講和會議に對して永久的世界平和の實現を期待するとが出來ない。僕は世界平和の眞面目なる審議は寧ろ別方面に期待せられると思ふ。それは目下瑞西ベルン市に開かれてゐる瑞典社會黨首領ブランチングの主宰する萬國社會黨大會である。巴里會議は各國の野心陰謀の舞臺となつてゐるにも拘らず、萬國社會黨會議は平和問題を比較的眞面目に講究しつゝあるのを見て、僕等は眞の世界平和の保障の幾分は必ず此方面より實現され得べきものと期待するのである。同會議は戰爭責任者の調査、勞働者の向上發展、國際聯盟の組織及び國際勞働法律制定問題を審議し、現在の資本階級制度を根本的に打破し、勞働階級の改善を計り、經濟上のオートクラシーを破壞して國民一般の狀態を向上せんとするにある。

由來國際社會黨大會は、開戰以來幾度か開催せんとして、英佛聯合國政府の干渉の爲め其意を果すことが出來なかつた程に、世界平和の徹底を期する社會黨が、所謂デモクラシー政府から壓迫せられたのである。目下開かれつゝあるベルン市の國際會議は巴里講和會議に對して一大脅威であると思ふ。產業に關する國際的スタンダードの規定移住勞働者の保護及び永久的國際法廷の設立を眞面目に研究して、その成立を計るのは、國民否全

オートクラシーを以つてせんとするのである。

巴里講和會議は經濟上の機會均等、自由平等を聲明してゐるに不拘、其實經濟上のオートクラシーを實現せんとしてゐるのである。經濟上の門戸壅塞を最も極端にせんとしてゐるのは今日の講和會議である。所謂デモクラシーの神樣と云はれるロイドジョージの策略と懸引から生れた世界平和は必ずや策略的世界平和なるとは疑を容れない。講和會議は我利々々亡者の寄合會議ではないか。殊に聯合國の手に保留せられつゝある獨艦處分問題に就てウイルソンは、獨艦を公平に聯合國に引渡すことが出來ないから、いつそのこと獨艦全部を爆沈して了つた方がよいと眞面目に會議に提議するに至つては世界平和のデモクラシーの神樣共の了簡も亦滑稽千萬ではないか。平和會議は畢竟各國の野心の展覽會である。我等は巴里の講和會議に於て、如何に眞面目に世界平和を確立せんかと云ふことよりも、如何に切實に、而して赤裸々々に各自勝手な欲望を遂げんとするかを知るに極めて便利な會合である。

國際聯盟議題に於て聯合國は、日本の提議せる人種差別撤廢論を壓迫して議題より除外したり、海洋の自由問題をば、英米が妥協して有耶無耶の裡に葬らんとしたり、經濟上の門戸の開放を英米は自國領土に除外例を設け、日本の軍備擴張に對してその制限を忠告し乍ら、英國は海軍の大擴張を行ひ、更らに地中海大艦隊を復活せしめ、米國は五十萬の常備軍を組織すること及び太平洋大艦隊の擴張を斷行することを、上院軍事委員會を通過せしめたりして、それで世界が平和になり、デモクラシーが世界を支配せんとするならば、餘りに虫の好きデモクラシーではないか。俺の國はデモクラシーの國であるから、世界の平和の爲めに、軍備を擴張するには少しも差支へはないが、君の國は軍國主義の國であるから、軍備を擴張しては不可ぬ。宜しく軍備廢止を斷行すべしと云ふのが、英米の日本に對する態度である。英米の好都合は世界の平和の爲めになるが、日本の好都合は世界平和の大障害となると云ふのである。

その證據には、世界同胞主義を最も高唱してゐ

神に額く

別所秀子

めさむれば我間の窓は白々とはや朝あかり漂ひてあり
朝あかりほとさしくればいみじくも涙さしくみ神をことほぐ
きららにも日はいでにけり天地にみなぎる聲のひびくを覺ゆ
チヽと呼びチヽと答ふる小鳥等のいとしきままに眼をとぢにけり
かにかくに朝な夕なに食をとるただこの故に神にぬかづく
うら若き日なるにはやも世のつねの悲しさ知りて生きてい行くか
人の子をめづるが故に生れこし人の子故に悲しさを知る
よどみなく流るる水のそのまゝにわがししむらを横へにけり
今ははや歌さへいでずとなげかひし君をし思ふ湘南の地よ
君もまた立ちてやあらん星遠き大空の下冬寒き夜を
ひじり等は皆さびしさを知りけりといひこし君に涙ぐまれつ
泣きぬれし雨のたもとに悲しみのあつまりしごとみつめてありき
秋きたり冬また過ぎぬ吾心君にかたらん日の遠きかな

人類を後援とせる國際勞働大會の本務であらねばならぬ。それ故國際勞働大會は資本家を背景とせる專制政治家の講和會議の一大敵國である。これ等の政綱を以つて世界の永久的平和を確立せんとする方法は既に千九百十六年七月英國リーズに於ける聯合國職業組織協議大會に於て佛國社會黨アルベール、トーマ及英國のヘンダーソン、マクドナルド、シミリーの諸氏の決議せしところである。

巴軍講和會議は欺滿的國際聯盟を高唱して世人を瞞着し、その背後に於て軍備擴張を行ひ、陰然經濟的野心を逞うし、戰後獨逸に對して一種のボイコット的聯合を國際聯盟とするならば、世界は明かに經濟的軍國主義に依りて威嚇せられるのである。獨逸のオートクラシーとミリタリズムを打破せる聯合國は、國家的野心に制せられて、一種の資本的軍國主義に墮せんとしつゝある現狀を觀なば、誰れか戰後も亦列强の武力競爭を否定するものであらうか。

佛心鬼面

▲これは僕が米國に行つてゐる一友人から聞いた話だが、日本のある外交官が米國の一政治家に向つて、世界平和を實現せんとする國際聯盟の主要條件として戰後人種差別撤廢を提議したと云ふを▲處が、米國の一政治家は暫く考へてゐたが突然、それでは君の國の人種を黑人と同一視してもよいかと云つた。こゝに至つて且つ支那人や印度人と同一視されたくないと云ふ一種の虛榮心を有する日本の外交家はグット詰つて『それは宜しく……』と答へたら、米國の政治家は手を拍つて『それでは矢張白人は一等人種で、東洋人は二等人種で、黑人は三等人種であると云ふことが動かぬ眞理ではないか。白人の多くは殊に米國に居る白人勞働者が日本人と同一視されたくないと思つてゐるのは、日本人は黑坊と一緒に視られたくないと云ふと同じさ。世界同胞一視同仁も主義として結構だが、理論上の結構は必ずしも實際上の結構ではない』と云つた相だ▲今回の巴里講和會議に於ても國際聯盟を實現する最も大なる骨子とも云ふべき人種差別問題を提議するを虞れて、移民問題を提議するとを虞れて、移民問題を握り潰しにしたと云ふことであるが、日本側の云ふことが、何一つ通らずに、世界平和だとかデモクラシーとか體裁のよいことを言つて胡麻化相としてゐる。英米の術策に我國が陷つてゐるのも知らず、デモクラシーとか世界平和とか騷いでゐる我國の滔々たる民本屋の淺薄さ加減が分らない。彼等民本屋が世界の完全なる平和は英米が完全なる利益を得れば實現せられ、結局日本の利害などはどうでもよいと思つてゐるのであらう

五片にしては隨分遠く走つたやうな氣がして、オクスブリヂでトラムをおりた。曇つてゐた、雨がふらないので、空氣がしつとりして、却て歩くに氣持がよかつた。

曲線を描いて、幅の廣い流れが流れてゐた。流れの向側には、荒れた、まばらな、草地があつた。流れのこちら側には、伐られた大きい頭から、細い枝を幾本も幾本も出してゐる、ウィローの列樹があつた。これだけの景色も、わたしには不思議なヒーリング・バクがあるやうに思はれた。

煉瓦で出來てゐる、古い、小さい、橋を渡つて行くと、そこからはもう全く田舍道で、家一軒見えなかつた。細く、高いエルムにへりどられてゐる道路は、所々にぬかるみさへあつて、ゆるく曲線を描いてゐた。歩きながら、前方に見える、さういつた曲線を見詰めて行くのが、人知れぬ初戀のよろこびをもつてゐる少女の思のやうな、やわらかい、そして飛立つやうなたのしさを、わたしに與へた。

ロンドンの道路は石だ。冷たい、死んだ、堅い石だ。尺寸の土をもしんで、石にかためたロンドンに半年ゐたら、からだの髓をしぼりとられるやうな思がし初めた。一年ゐたら、心臟がだん〳〵冷たくなるやうな氣がしだした。二年近くもゐたら、わたしのうちの魂が、日夜にすゝり泣きを初めたやうな感じがし初めた。若しわたしが一生ロンドンにゐたら、死ぬ前に氣狂ひになつてしまふだらう。——けれどわたしが今踏んでゐる此土を見ろ！　土は生命だ。生命のみなもとだ！　わたしは、土そのものより成つてゐる、此うつくしい、微妙な、道路の曲線を踏みながら、戀人の胸を踏むよりも、やわらかくて、しかも強い、そして生命を新たにする力を感じないではゐられなかつた。

やがてわたしたちは廣い道に出た。そして左右にうつくしい森を見ながら、乾いた、すが〳〵しい大地を踏んで行つた。

しばらく行つてから、H.さんは森を通りぬけるために、わたしたちを路傍の木立の中に導いた。

ウインザまで

ロンドンにて　佐藤清

＊

ブリチッシュ・ミュージアムの近處の小さいレストランで、いつの頃ともなく知合になつた中老の英國利人がある。初めて遇つた時、わたしが一ぱい書入れをしたキーツの詩集をテーブルの上においたのを其人がさりげなく見て、詩人や文人の話をわたしにしてくれた。聞いて見ると、ブリチッシュ・ミュージアムのバインデングの方に働いてゐる人で、書物や、繪や、建築が好きだと言つてゐた。

いつか遊びに來いと言はれて、一二度宿をたづねたことがある。どうも獨身者らしく、フラットを借りて、兄さんと自炊生活をしてゐるらしかつた。獨身者といふと、いかにも氣むづかしい、神經衰弱的な、みぢめなものに思はれるが、此人は少し髮こそ灰色になつてゐるけれど、まだ〳〵しつかりした、いつも機嫌のいい、そして如何にもデモクラットらしい人である。

二ヶ月程前、アメリカから來た同志社のA君と、此頃は殆ど毎日のやうにリーディング・ルームであふ。それでランチも一緒にわたしの行きつけの所でとるやうになつた。二人でそこへ行くと、屹度H さんがゐて、三人一つのテーブルを圍んでは、いろんな話をするやうになつた。或日偶然ウインザの話が出た。A君も、わたしも、まだウインザへは行つてゐないし、それにH さんが案內してくれるといふのだから、こんないゝ機會も滅多にない。さう思つて、わたしだちは次の日曜の朝早く一緒に行くことにきめた。

＊

青い草の上を走つてゐる水の流れは！　日本に歸つたら、あなたも奥さんを連れて、ちと、僕のとこへも遊びにいらつしやい！』

道は平凡になつた。遠くの方に、高い高いエルムの列樹が、肉を剝ぎとられた魚の骨のやうに、うつくしい輪廓を示して立つてゐた。

『こゝの隅から、カッスルが見えますよ。』とHさんが道の或角に來た時言つてゐた。

スラウの町を通り過ぎると、もう一本道で、そこからもうイートンも近かつた。

路傍の柵をはづして、馬車がやつて來た。Hさんがいくらと聞くと、シクスペンス● イーチて、イートンまで馬車に乘つた。サンデ● ドレスを着た少年學生等が、三三五五道を歩いてゐた。

*

學校の前で馬車をおりて、まづチャペルを見た。そこにあるバン● ジョンスになつたモリスのデザインといふ、大きな壁畫は、バアミンガムの美術館で見たものと同じだつた。ワッツの騎士の繪もあつた。高い窓にきら〳〵してゐる五色のステーンド● グラスも、わたしの眼を強くひいた。

それから教室の方へ行つて見た。千四百四十年に成つたといふ其教室には、ナイフでいろんな名を切りきざんだ古いデスクや、暗い窓や、罰をうけるための臺なんかゝあつた。——いぎりすだなあ！』わたしは思はずかう歎息しないではられなかつた。

それから二階へ上つて見た。板を張つた壁には、卒業生の名が一面に刻まれてゐた。ホームにはいると、そこの壁には、グラドストンや、ピットの名が、多くの刻まれ名の中に見出された。それよりもわたしの心を動かしたのは、あの十九世紀初頭の革命詩人、自由と理想美と、雲雀との詩人、沙翁以後の英吉利隨一のあの天才詩人が、自ら刻んだ Shelley の七字だつた。（大正七年十一月）

手頃なオークやビーチが、すはだかになつて、列を組んで立つてゐた。地は一面に黄金の薄い葉が幾枚も幾枚も敷詰めてゐた。落殘つてゐる、極めて僅かなオークの葉が、黄金色にひら〳〵木の間を落ちあへず漂うてゐた。幹の淺黒いオークの間に、入交つて、やさしく立つてゐるビーチの幹は、すつかり青苔にいろどられて、素裸の細い高い木が、青い煙――おのづから立登る青い煙につゝまれてゐた。いゝえ、青い煙に包まれてゐたといふよりも、ビーチのやさしい木の髄から、青い青い煙が、ひとりでに、音もなく、立ちのぼつてゐるやうに思はれた。

森の向うには、高い〳〵スコッチ・ファの、綠を戴いた赤い幹の列が見渡された。遙かの行手には、ブラック・バアクの湖水の、澄んだ靜かな水が見渡された。……青い煙に包まれたビーチの木、黄金を敷くオークの落葉、細かい雲を振つたやうな、やさしいシルヴア・バアチ。……『フェアリ・ランド！フェアリ・ランド！』わたしは心の中でさう叫ばないではゐられなかつた。

*

『いぎりすにも、こんな處があるんですよ。』と、H.さんが森を出てからわたしに言つた。『こんな景色を見ないで、日本へ歸られると困りますよ。』

『えゝ、ほんとですね。こんな景色を見なかつたら、日本くらゐいゝ處はないなんか思ふ所でしたよ。』

わたしは、森の精の宴會にでも出て、魔術でもかけられたやうな、途方もなくうつくしい幻覺を、振棄てることが出來なかつた。

*

路傍には、小さい流れが走つてゐた。青い草の上を、青い草を吹靡けて、水の流れが走つてゐた。それがわしに樂しいことを思はせた。

『わたしがゐた、西灘にあつたものが是ですよ。』とわたしは日本語でA君に言つて見た。『どうです、

といふ非難ならば當るが）實踐理性に沒交渉だといふ勝手な前提を定めて論歩を進めさうとするからである。

其處へ行くと、同じエスカトロジーを避ける人でも、ユニオン神學校のブラォン博士の言ひ現し方などは却々當を得た表現法である。博士はその名著『基督敎は實行し得べき乎』中に、熱心な信仰家中には此際エスカトロジーを信ずる人もあるが、私はそれに贊成することは能きないといふ前置て、成程今は獨逸の强國が發散する軍國主義の毒圍氣が吾等を强迫するも、此暗雲はやがて霧散するに違ひない。それはあたかも曾て紐育市政を紊亂してその止る所を知らざらしめたタマニーホールが壞滅したやうに崩壞するであらう。そしてその方法は、タマニーホールを憎む正義の人士が、此處に一つ彼方に一つと小さい俱樂部に寄り集つて、紐育市政の廓清の爲めに劃策協議を重ねてゐるうちに自然と生じたのである。と同樣に今吾等正義を愛するの徒が、所在に結束するならば、如何に軍國主義の組織は鞏固にその力が强大であらうとも、吾等に勝てる道理はないと、まあ斯う云つたやうな以塞亞の所謂レムナント殘れる者の信仰を高調したものである。

私のアンティシペーション想化も多少あるかも知れないが、記憶にして過なければ、ブラォン博士の例言中に、當時正義の士にして紐育市民たるを恥ぢて去つた人もあるといふ言葉があつた。私は此語に無限の意味を考へるものである。それはエスカトロジーの信仰家をも聯想させるし、腐敗した羅馬のむかし肉の大都市を背景にして、靈の僧庵を結んだ修道士の面影をも察せしめるからである。彼等は正義を愛する點に於いて尊敬すべき性格の所有者である。けれどもその實行の點に於いて、私はとても贊成することは能きないのである。或人は這般の態度を評して powerlessness 及び selfishness と斯う云つた。

日本に於けるエスカトロジーのプロパガンダを觀測したものは、彼等の來らせ給へと祈る天國が、現代產業革命に熱中せる社會改良家の理想境とほゞ同一なることに思ひ及ばゞ、袖手して十字架の

現代思想中のトルストイズム

石田三治

——思想界過渡期の信仰問題——

一

次に示すやうなトルストイの思想は、彼の論文中到る所に散見するものであるが、一例として彼の菜食論中の一節を擧げて見ると、『……然し乍ら、必ずしも萬人いづれも基督教を解して天なる父の全きが如き域に到達する大願望としては考へてないのである。多くの人々は救の教として之を認めた。たとへばカトリックと希臘正教とに從へば、教會を通じて傳へられた恩寵に依て罪の赦しが得られるとか、又は新教徒、リフォームド・チャーチ・カルヴィニスト等に從へば、基督の贖罪に依て人に救はれるとか、乃至は他の派に依て云はるゝやうに、兩方を混ぜ合せたやうなもので救を說くとかするのである。』と先づ斯うてある。卽ち彼から云はせると、基督教は舊教に於いても新教に於いても、理性の自力を說かない爲めに世界の所在德教の基本たるべきカント流の無上命令から沒交涉となり、反對にその信徒を道德的に墮落させるやうに導いたと斯ういふのである。

トルストイ一流の論理の飛躍をやつてゐる點もある。といふのは、例へば今度の大亂の影響で起つたエスカトロジーの信仰家の如く、吾々自力で神の國は來るものではなく、聖書に示されたやうに、彼ナザレの耶蘇が再び來臨の上、永久平和の理想境が現出するのだと信じつゝも、その時の用意に彼理性の命令に從ひつゝ善行を勵むのを忘れない人達には彼非難は向かないのである。何となれば彼の這般の信仰を有つ人は（理性的（フェルヌンフティヒ）ではない

耶蘇は大工の子で勞働者だが、ついぞ不平を云はずに働いたといふ歌を敎へて、之と似寄つた說敎をし乍ら、勞働は神聖なりといふ事を說いたといふので、その場に列席してゐた山川菊榮女史が、えらい見幕で或雜誌に斯う書いてゐる。『その說く所の虛僞に對する私の憤が猛然と炎え立つた』と。私は此際の山川女史に同情せざるを得ない。エスカトロジーと違ふ意味で、目下澎湃として起れるカント主義の體驗すべき善の威力に、カントを產んだ耶蘇の精神を洞察しつゝ、現代に基督誕生しつゝありと觀ずる宗敎家は、此時のしるしを見ずば基督者に生命無けんとさへ考へてゐるのである。フォスデックの名著『現代危機の桃戰』の試驗に及第した基督者は、今將に積極的傳道の時機を迎へつゝあるではないか。基督者ならざる者も、約耳の所謂靑年のまぼろしを見る此世に、彼の所謂老人の夢を、基督者と稱する者が夢むとすれば、今また更に『異邦の人』に道の說き易きを思はざらんとしても得ないのである。

ソーシャリズムに關する羅馬法王レオ十三世の敎書はその意味でトルストイを顚蹶させた。殆んど角力にならない薄弱なる論據を以て、私有財產の惡に關する該主義の見解に對して辯駁がましい事を述べた後、法王は何と云つたか。曰く『何人と雖、その人並びにその一家の必要とする所のものに應ずる諸物を、他人に分け與ふべしと命ぜらるべきものにあらず。然り、生活上その舊來の狀態を適當に維持すべく當然要すべき物をだに之を分與すべしと命ずるを得ず。何となれば、何人も不適當には生活するの要なければなり』と。トルストイは此最後の一句が、聖トーマス・アクイナスから出てゐることを指摘しつゝ、眞理の言葉を迎合のそれに轉用して恬として恥ぢざる法王の良心に疑惑をさしはさみつゝ、次の句に目を通した。其處には斯う書いてある。『されど、若しその必要にして快く滿されんか、乃至は人その所を快く得んか、それより超過する物は是を貧者に施すを義務とすべし。殘餘こそ施物なれ』と。トルストイが希臘正敎會に破門された時、『我は正敎會に破門されるゝも意に介すべきものなし。否、その名は今

聖訓を說く者と、ゴルゴタ山上の血潮を己自ら體驗するを敢て辭せじとなす者との基督觀の相違に驚くであらう。その意味に於いてトルストイが前者の態度を非難し後者の態度を稱揚したことは立派なものであつた。尤も前者は辯護して斯ういふであらう。吾等の理想はゾムバルトの所謂合理主義ソーシャリズムの理想境の如き人間臭を帶んだものと同一視すべきものではなく、以塞亞の所謂獅子と羊と戲るゝ眞のユトウピアて、現代人の夢想すべからざる境地なのてあると。

茲で辯護は立派に能きたと同時に、彼等と現代人との交涉が奇麗に切れるのである。トルストイが明言したやうに彼等の『空想』が、彼等の『救』になり得ても、基督教の眞髓たる『同胞愛』の原理は其處から導き出されるものては無い。宗教は倫理に化して場而が廣く、後者が人の間にのみ人格を見出す時、前者は同時に宇宙の間に大人格を見出す。さういふ意味て兩者の差違を見分けるならば私も贊成だが、乍遺憾、前記の宗教はアミエル(フィクション)に依て云はれた敬虔なる虛構てあり、詩歌である。て詩歌てあり、虛構であるとしてこそ吾々はヘンデルのオラトリオには醉はされるのである。アラトリオを以て說教さすに及んで吾々は劇場を教會と混同する。的藝術エクスタシーを宗教的それとするとが、往々藝術論者に依て說かれるのを聞くが、彼等は宗教の倫理的要素を觀測するに概ね鈍感である。卽ち彼等は美しき天國の來臨を將來に豫見することに專念しつゝ、憑念しつゝあるその間如何なる不正が行はれてゐても意としない弊がある。腕の人を要求するに餘りに急なリレトルストイは、教會外に於ける不道德者として藝術科學に汲頭する人や机上て道德問題を考へる人達を擧げてゐるが、是はちとひど過ぎるにしても這個の消息に多少の眞理なきを得ない。

二

押上のさる大工場に月に一度の休日がある。その日を利用して吾等の友救世軍の人達が、有志の女工に傳道をするそうてある。ヘロデを狐と罵倒する程の勇氣に乏しい私にはあんまり口幅つたい事も云へないが、ある時如才のない救世軍人が、

い。喧嘩を破裂させる動機となつた彼慈善事業をするといはれたツルゲニエーフの娘が正妻の出てはなかつたのだといふ話を聞くと、折角農奴の人格を見てやらうとする西歐主義者の同情も心もとない感じがする。果然ロイド●ジョージにあやかつたケレンスキーが失脚當時、好きな女優と戯れてゐた。ウイルソンは米國民の性情に發生的觀察を多くしつゝ、彼等の訓練に信頼してゐるらしいが、露西亞には昔も今もその種の人民は少いらしい。立憲を口にするもの然り、況んや之を口にするを厭ふ者に於いてをやである。

農奴問題には割合沒交渉て（彼は制度の封建と否とを問はず溫情主義で解決を見やうとしたのは流石に伯爵（グラーフ）であつたらう）濟ましてゐたトルストイは、ツルゲニエーフの慈善に僞善を看破する手腕に於いては、バーナード●ショーに讓らなかつた。そこで彼の婦人問題に關してもお白粉が目につき過ぎて彼女の魂を生かす方には非常な手抜かりを演じてゐた。是には集めると澤山の例證があるが、次に日記の言葉を二つ擧げるだけにして置かうと思ふ。一八九五年十二月七日『美しい女がするといはれたツルゲニエーフの娘が正妻の出てはなかつたのだといふ話を聞くと、折角農奴の人格を見てやらうとする西歐主義者の同情も心もとない感じがする。果然ロイド●ジョージにあやかつたケレンスキーが失脚當時、好きな女優と戯れてゐた。ウイルソンは米國民の性情に發生的觀察を多くしつゝ、彼等の訓練に信頼してゐるらしいが、露西亞には昔も今もその種の人民は少いらしい。立憲を口にするもの然り、況んや之を口にするを厭ふ者に於いてをやである。

農奴問題には割合沒交渉て（彼は制度の封建と否とを問はず溫情主義で解決を見やうとしたのは流石に伯爵（グラーフ）であつたらう）濟ましてゐたトルストイは、ツルゲニエーフの慈善に僞善を看破する手腕に於いては、バーナード●ショーに讓らなかつた。そこで彼の婦人問題に關してもお白粉が目につき過ぎて彼女の魂を生かす方には非常な手抜かりを演じてゐた。是には集めると澤山の例證があるが、次に日記の言葉を二つ擧げるだけにして置かうと思ふ。一八九五年十二月七日『美しい女がするといはれたツルゲニエーフの娘が正妻の出てはなかつたのだといふ話を聞くと、折角農奴の人格を見てやらうとする西歐主義者の同情も心もとない感じがする。果然ロイド●ジョージにあやかつたケレンスキーが失脚當時、好きな女優と戯れてゐた。ウイルソンは米國民の性情に發生的觀察を多くしつゝ、彼等の訓練に信頼してゐるらしいが、露西亞には昔も今もその種の人民は少いらしい。立憲を口にするもの然り、況んや之を口にするを厭ふ者に於いてをやである。

農奴問題には割合沒交渉て（彼は制度の封建と否とを問はず溫情主義で解決を見やうとしたのは流石に伯爵（グラーフ）であつたらう）濟ましてゐたトルストイは、ツルゲニエーフの慈善に僞善を看破する手腕に於いては、バーナード●ショーに讓らなかつた。そこで彼の婦人問題に關してもお白粉が目につき過ぎて彼女の魂を生かす方には非常な手抜かりを演じてゐた。是には集めると澤山の例證があるが、次に日記の言葉を二つ擧げるだけにして置

かうと思ふ。一八九五年十二月七日『美しい女がするといはれたツルゲニエーフの娘が正妻の出てはなかつたのだといふ話を聞くと、折角農奴の人格を見てやらうとする西歐主義者の同情も心もとない感じがする。果然ロイド●ジョージにあやかつたケレンスキーが失脚當時、好きな女優と戯れてゐた。ウイルソンは米國民の性情に發生的觀察を多くしつゝ、彼等の訓練に信頼してゐるらしいが、露西亞には昔も今もその種の人民は少いらしい。立憲を口にするもの然り、況んや之を口にするを厭ふ者に於いてをやである。

や穢れたれば、一個の基督者たらんことを敢て願はじ』と斷乎として呼號した。

トルストイの傳說を繙くと、民衆の非常なる喝采を博したのは此破門の時であらう。散歩の歸り彼は群衆を逃れて漸々の事に莫斯科の彼の邸に戻ると其處には大勢の群衆が既に待ちかまへてゐて彼等の同情心をこめた美しい花を浴せたといふ。けれどもその聲望はやがてゴルキーに移つた事に吾々の注意點を向けて見たい。トルストイは德富健次郎氏に『吾々東洋人は』と斯う云つたが、先年ゴルキーは『露西亞人は西歐の如き立憲的社會を作るには餘りに多く神秘的な蒙古人の血を受けてゐる』と斯う云つて歎じてゐた。此處に兩者の微妙なる差異があり、其處に民衆の信賴の變化があつた。トルストイは勞働者の虐げられるのを見ては之に非常な同情を加へたけれど、一般露西亞人の性情を彼は代表しつゝ well-ordered liberty を解することが遂に能きなかつた（米國人と何といふコントラストだらう）。斯くて勞働者が力を得、結束をなし、勞働組合式の規則（憲法）を作るや否や、忽ち彼は彼等に背を向けた。そして云ふのに『彼等は新しい暴力を以て個人の自由を束縛する』と。反之、ゴルキーは餘程ハイカラであつた。最近に於いては英米主義のキャピタリズムに反對しなければならぬと云つてボリシエヴイズムの爲め大いに氣を吐いてゐるらしい報道も聞くのである。

不幸にして露西亞人は立憲的と云つても比較的はなして、その邊の訓練に至つては米國人にかなはない。ゴルキーが米國へ同伴した夫人が正夫人でなくて、米人から排斥された恨をキャピタリズム排斥で返すのかとも思はれるほど、德操問題にルーズな所が多いのである。是は立派な人道主義のトルストイさへ免れなかつた點で、トルストイの晩年細君をヒステリーにさせて之を置き去りに自分の慰を求めて家出した事など、決して彼の偉大さを以て覆ふべき些事ではないのである。トルストイがツルゲニエーフとの論爭點は、前者にも理窟はあるが、後者が前者の農奴問題に沒交渉な舊式の貴族的態度が氣に食はなかつたものらし

此妙諦を知らず今以て人種的差別待遇を置くのは怪しからん事だそうである。むかし東洋の君子國を以て自任してゐた日本は、今でも矢張り君子國らしい。三十有餘の團體が奮然起つて人種的差別撤廢を叫んで、その理想主義の決議をクレマンソーに送るそうであるが、蓋し彼佛教徒の宣言と共にウイルソンの十四ヶ條以上の理想文であるに違ひない。人種的差別撤廢の會合に於いて、佐々木蒙古王等がビールを飲みつゝ卓上演説をやつたそうである。今や人道を叫ばざる者は人で無いやうな世の中である。

喜ぶべき現象か、悲しむべき現象か。基督者の立場から見て之を何う解釋すべきであらう。私は此際トルストイの『未完成人格論』に敬意を表せざるを得ないのである。トルストイは斯う云つた。ヒイーマニズム乃至はペーイガニズムの道徳と基督教のそれとの差はたゞ一點である。それは前者の高尚なる道徳は、徳目一つ〳〵の成就に依て人間が完成されることを教へるに反し、後者のそれは『神の完きが如くならんが爲め』未完成の人格を意識しつゝ、不斷の精進努力をその徒に強ゆるのであると。其處には常に謙遜が無ければならず、發達の餘地がなければならんのである。斯くてトルストイは、パリサイ宗は所詮基督教と相容るゝものではないと論斷した。

世の基督教徒よ。多くの人道主義者を産み出しつゝある我東洋の君子國を、パリサイ宗に導くも基督教に導くも卿等の双肩なる重任たるべきを思へ。更に退いて、たとへばウエスレーの『基督者の完全』の秘義を考へ、國民の指導者として己自ら彼パリサイ宗に陷ることなからんことを努めよ。『天國は近づけり悔い改めよ』

（一九一九・二・六）

高橋芳夫

○ 西灘の摩耶山麓の春寒日、溫泉に籠り粥煮らすとはたらちれの、慈悲のおんまみいとほしみ、
汝よ故郷へ心飛ばすや

○ みちのくの、故郷さりてはるゝと、
西灘の夕陽に祈り安かれ

三宅雄二郎博士の如き文明批評家に依て、最近代思潮の基督教化の實情を聞かされて、ぼんやり北叟笑んでゐる基督者があるならば、その人は餘程お芽出度い人でなければならぬ。トルストイが或時云つたやうに、信仰なくして基督教式行動をする人は警戒を要すべき人であらう。特に警戒すべきは、誠意が何處にあるか解らない手腕家の行動である。成程現代は基督教徒以外の人が、基督教徒以上に基督教を宣傳する時代である。聖書を丸のみにすることを教へるエスカトロジーの或人達は、是等を以てアンチ基督と見るかも知れないが、私は彼ブラォン博士と同様に彼等の大前提を肯定し得ないものであるから、勢ひ時代の大勢を見る觀方も彼等と異らざるを得ないのである。て私は斯う考へる。

カント主義の勃興を見る現代人の實踐理性はたしかに基督教の面目を備へてゐる。だからその點に於いて天國は近づけりの感がしてならないのである。けれども現代人は『悔い改めよ』の預言者の聲を念頭に置かない傾向を持つてはゐないか何うか。此處が吾々の大問題でなければならぬ。最近日本の諸新聞にあらはるゝ論調を見ると、如何にも基督主義が漲つてはゐる。けれどもそこには基調となるべき信仰の影が薄い。從つて世界は知らず、日本に於ける基督主義は大勢の附和雷同に思はれる。此際基督者は起つて點晴の大業を仕遂げなければならない責任を持つてゐると私は思ふ。

ウイルソンの偉業行はるゝや、未だ曾て今日ほど日本特有と稱せらるゝ人道主義、東洋人獨特と稱せらるゝ平和主義の持ち合せを日本人が誇稱した時代はなからうと思はれる程所在に人道主義者が現れて來た。彼等の言葉を聞いて見ると、古來日本ほど民本主義を行つた國はないそうである。ウイルソンが平和主義平等主義の奮戰をば、天照大御神がみそなはして莞爾として微笑まれてをらるゝに違ひないとのことである。更に吾々の先祖を濕ほした佛教の平和主義の絶對さは、とても今日の國際聯盟などの企圖する事の能きぬやうな偉大さだそうである。そしてあはれにも基督教國は

Nの履歴

沖野岩三郎

(一)

彼の日は急がしい日であつた。私がまだ寝床を離れないうちに故郷の友人が二人まで流行感冒で死んだといふ通知を受取つた。私は顔も洗はないで取敢えず机の上にあつた葉書へ弔ひの言葉を書いた。

朝飯を濟した後で私は妻にフロックコートを出して置くやうに命じた。夫れは其日二つの葬式と一つの結婚式へ立合はねばならないからであつた。

私が或雜誌から頼まれた原稿の整理を終えて家を出かけたのは最う十一時頃であつた。麻布の何とかいふ寺で友人I氏母堂の葬儀へ駈けつけたのは十二時少し過ぎた頃であつた。私は久し振りで讀經の聲を聞いた。そして子供時代に自分の打いた木魚の事などを追憶しつゝ濕やかな葬儀を始から終まで默つて傍觀した。

I氏の一族が馬車に乘つて火葬場の方へ行つたのを見送つてゐた私は、ポケットから時計を取出して見た時、既う次の葬式の時間の迫つて來た事を知つた。

私は坂を天現寺の方へ走降つた。そして芝の白金へ行つて、H氏の宅へ駈けつけたのは三時前であつた。H氏の家では今歳六つになつた花子さんといふ可愛い娘を亡くしたのであつた。

『今度の流行感冒で時々下痢を起す者があるのです。私は其の原因に就いて多少の自信があつたので、

新刊紹介

基督教々理史

我國に於ける基督教文學中には、傳道用のものは隨分澤山あるやうだけれども、學問的のものに至つては未だ數ふる程にもない。これは基督教思想の獨立の爲めに甚だ惜しむべきことである。丁度斯う云ふ時に當り、日野眞澄君が大努力を以て本書のやうな大著作をされたことは、我基督教の學問界にも春の音信が來たやうで、誠に喜ばしいことである。特に基督教教理の歷史の如きは、單に神學者や牧師のみならず、一般の信徒と雖、智識階級に屬するものは、一應心得ておいて然るべきものであるが故に、本書の如きは一般基督教社會から歡迎さるべきものであるのを疑はない。

本書の目的とする教理史の記述は固より容易なことではない。上下二千年に近き間の歷史に關することであるから、頁數も多大を要する。日野君は菊版で九百頁近くを使つて居るけれども、ハルナックの大著の如きは、それよりも大きな紙面で、三倍近くも書いておる。特に西洋の史類は、我邦で獨特の研究するのは甚だ困難であると思ふ。假へばハルナックの、如きに至つては、脚註も中々面白い。それは歐米の學者は皆なオーガスチンを論じても、其他何人を論じても、皆な自らこれ等の人々の著作を讀破してから自分の識見を立てる。我邦では恐らく必要の原本すらも一通り備はつて居まい。ハルナックでも其他誰れても皆な脚註にこの原本に於ける憑り所を擧げ、或は他の學者との異同を辯じたりして居る。此の點に於ては日野君も歐米の學者に一歩を讓らざるを得ないであらう。從つて君の議論が果して憑り所ありや否やを試驗するのが甚だ面倒になる。

斯う云つても、私は君の著書を非難するのではないが、列傳的であるよりも（私は君の書き方をさう思ふが）もつと發生史的に、そして大綱をつかんでほしかつた。さうしたらば君が云ふやうに、教理の意義である「基督教の思想」の歷史、或は獨逸のクリューゲル（ガイステスゲシヒテー）が云ふやうに「基督教の精神史」の發達を、もつと明瞭につかむことが出來るやうになりはしまいか。それは丁度獨逸のアウグスト、ドルネルが其著「基督教的信仰教理の發生」で成功して居る。そして此の著書は菊版三百餘頁で要領を得て居る。併しドルネルの如きも、此の著作の以前には教義史を著はして居るから、日野君の如きも更に第二の企があつてはどうかと思ふ。どうも列傳體では前後の關係やその時代々々の思潮との關係が餘り明瞭でないのを遺憾に思ふ。

尙ほ澤山に云ひたいこともあるが、それは略して最後に一寸云つておきたいのは、教理史と云つても、ドグマ史即ち教義史と云つても、さうたいした相違はあるまいかと思ふ。ドグマは若し之を獨逸語で平たく譯せば、Glaubenslehre 即ちそれを邦譯して「信仰教理」と云つても差支へなからうと思ふ。日野君は獨逸では組織神學をドグマチックと云ふと記されて居るけれども、それは何かの思ひ違いであらう。獨逸でも Systematische Theologie と云ふ名稱はある。そしてそれは教義學、倫理學、宗教哲學、辯證學（アポロゲーチック）などを總括する。このことは何れの神學概論にも載つて居る。

併し私は決して日野君の新著が、我國の基督教界に於ける著大の功績を稱揚するに於ては人後に落つるものではない。そして此の書が大に歡迎せられんことと、その後篇とも稱すべきものが速かに出でんことを希望するものである。此の種の書でなければ、到底我邦の基督教思想の徹底は期待することが出來ないからである。（警醒社發行、價四圓五拾錢）三並。

を語つて見やう。

Nは熊野の海岸に生れた。そして二里ばかり隔たつたS町の中學へ入つたのは今から十七年も前であつた。しかし彼は三年級になつた時最う普通の學生のやうに代數や幾何の難問にばかり頭を惱して居る事が出來なかつた。彼は小說を讀んだ、和歌を作つた。新體詩を作つた。そして夫れを少年雜誌へ投書して夫れが揭載された時は算術の時間でも漢文の時間でも度々夫れを取出して讀んでみた。のみならず隣りの生徒に竊と夫れを渡して讀む事を勸めた。そして彼は此の小い惡戲が敎師に發見されて、其の雜誌を敎師が奪り揚げて呉れゝば宜い、さうしたなら敎師までが自分の文才を認めるだらうといふやうな事を思つた。しかし鈍才な敎師達は此の雜誌の事を氣付かなかつた。

て、彼は遊步時間に故ら敎師の目に付くやう其の雜誌をポケットに押込んで、表題の所て外へ見えるやうにして步いたが、誰一人として『おい、其れは何だい?』と言ふ者も無かつた。

斯んな事が昂じて來て『僕は孤獨だ、人生は矢張り淋しい!』といふやうな事を口癖に言ふやうになつた。

とう〳〵Nは三年級を了へずに學校を止した。そしてOドクトルの所の藥局生に住込んて、クロールナトリウムが食鹽て、ブロームカリウムが臭素加里の事て、癲癇の患者には此藥を一日三、〇乃至五、〇より一〇、〇乃至一五、〇までを數回に分服せしむるのだといふやうな事を熱心に覺えた。

NはOドクトルの所に五六ケ月も居る中に既う一廉の大家に成りすました。

『君、何所か惡い時には僕に言ひ給へ、僕が藥を作つてあげるから。などゝ友達に公言するやうになつた。しかし一年も經たないうちに既う平凡て變化の無い調劑が嫌になつて來た。

彼は院主の許可を得て每日曜日には町の敎會へ行つて說敎を聞いた。そしてHといふ米國宣敎師から洗禮を受けたのは彼が敎會へ通ひ始めた三ケ月の後であつた。

花子の屍體はM博士に御頼みして、昨日傳研で解剖しました。』

H氏は斯んな冒頭で、花子さんの病狀から解剖の結果までを詳しく私に語つた。假令自身が醫者であつて多くの他人を解剖した事があるとは言へ、現在自分の可愛い可愛い娘の屍體を皮を剝ぎ肉を斫り、臟腑を取出して一々解剖して行くのを、じつと傍て見守つて居られたのかと思へば、私はH氏の心根を悼ましく思はざるを得なかつた。

鏡て葬儀の時が來た。私は灰に化した遺骸を守つて程遠からぬ教會へ行つた。教會は僅かに三十人を容るゝ程の小い教會であつた。牧師のG君は日、米、英三ヶ國の神學校に學ばれた有名な人である。

葬儀が始まつた、私はこんな小い子供の葬儀――夫れは唯純清な悲みと『可哀相に！』といふ一語で言ひ盡される底の可憐な葬式――は十分か二十分で終るべき筈だと思つて居た。何故ならば三十年五十年の間、罪惡の中に生きて居た者が死んだ時のやうに、其人の生前の寸善尺功を尋ね出し探り出して夫れを誇張して總ての缺點を包み隱してあげるといふやうな最後の救濟事業をする必要が無いのだから。

しかしG氏の說教は實に長かつた。古今東西の事例を引き聖書の言葉を引き、諄々として一時間半に渡る說教をした。これでもか、これでもかといふ風に若い兩親の涙を絞り取つた上、參列者の總てを泣かさねば止まないといふ勢であつた。僅かに六ヶ年の短い生活を小鳥のやうに歌つて、その可愛い聲を兩親の耳に殘して置いて遠く天の一方に飛んで行つた小い者の死を吊ふ言葉としては餘りに誇張的であつた。

私はG氏が熱心の餘り此の說教を爲るのであるから差したる惡感情は持たなかつたが、とう〳〵私はG氏の說教の半頃から、今朝通知を得た私自身の友達N氏の事を考へ出した。

『Nは死んだ。私が彼の男の葬儀を司會するとしたなら、私は何んな態度を取るだらう？』

私は斯んな事を考へてみた。夫れはNと私との間に斯んな關係があつたからである。私は今Nの履歷

二人は暫く默つてゐた。五六分間沈默が續いた後、Y子は『Nさん、お祈りして歸りませう、』と云つた。Nは驚いて坐様を直した。彼の心の中には今神の事もキリストの事も考へてゐなかつたのであつた。けれども二人は祈つて別れた。祈禱が濟んでNは窓を閉めた。Y子も西側の窓を閉めた。會堂内は眞闇くなつた。

『Yさん待つて下さい、眞闇で薩張り足許が見えない。』

『危いですよ、腰掛に蹴躓かないやうに……』

Y子は入口の所に立つて中の方を覗き込んでゐた。Nは生れて以來此時程或意味の幸福を感じた事が無かつた。自分に同情して呉れる者の無い、淋しい此の世界の光線を遮つた暗黒な別世界で優しいそして清い信念を有つてゐるY子と唯た二人きりで新しい世界を發見してゐる事を知つた時、彼れは火の鞭て心臟を強く打たれたやうに感じた。

外はまだ雨が猛烈に降つてゐた。人通りは絶えて無かつた。Nは態と會堂の中央に立竦んで入口の方を眺めてゐた。Y子が柱の所から默つて自分の方を見てゐる心根に對して或獨斷を與へたNは少し顫へる聲で『Y子さん！』と呼んだ。

『さん、早く出てゐらつしやいよ。』

Y子は何故が周章てゝ外へ出て行つた。Nが出て來た時は既うY子の姿が向ふ隣りの無花果の葉蔭を右へ曲る所であつた。

Nは其日の夕方長い〳〵手紙を書いてY子に送つた、しかし返事が來なかつた。幾日經つても返事が來ないばかりか、夫れからといふものはY子の姿が教會へ、ちつとも見えなくなつた。

Nは非常な破廉恥罪でも犯したやうに思つて、次の日曜には教會へ行かなかつた。

（二）

其頃教會には定住牧師が居なかつた、て、長老の友木といふ男がいつも說教をした。しかし友木は種んな事業に携はつてゐる忙しい身であるから、說教が濟むと直ぐにサッサと歸つて了ふ。其後で若い男女が居殘つて讃美歌を歌つたり勝手氣儘な議論をしたりして面白可笑しい時を過した。

Nは友木の說教よりも此れが最も樂しいので日曜の朝夕は必ず出席した。青年の男女は本當に衷心から兄弟姉妹のやうに交際してゐた。彼等は皆な青春の燃ゆる血を有つてゐた。しかし彼等の熱心な祈禱と信仰とは夫れを容易に破裂させなかつた。

或晩にIといふ頗る感情的な青年が、明日から一週間早天祈禱會を開かうと言ひ出した。Nは第一に賛成した。そして其の翌朝五時過に行つてみるとIが既うちやんと戸を開けて待つてゐた。六時過に三人の若い婦人が見えた。彼等五人は涙聲を振絞つて祈つた。丁度其頃此町へ新たに置娼されて遊廓が建てられるといふので彼等は熱心に此町の風教の爲に人々の魂の亡びさらん事を祈り求めた。此の祈禱會は五日間續いた。三日目に來た一青年の如きは自分の父が大工であつて、遊廓の建築を請負うた事を告白して、『私は身命を賭しても此の不正な事業を請負うた父を諫めて見る。』とまで言つた。Iは自分の父が町會議員であつて、そして置娼論者である事やら、親類の一人が藝妓の置屋業である事を言つて、泣き乍ら祈つた。

Nは斯うした仲間（グループ）の中で非常な感激をもつて祈つた。

六日目の朝は甚い雨であつた。しかしNは外套に身を包んで出かけた。行つてみると何うしたものか其日は誰一人として來なかつた。六時過まで薄暗い會堂の中で身動きもしないで默禱してゐると、表のドアがギイーッと開いて『Nさん……』と優しい聲で呼かけたのはY子といふ娘であつた。

『Y子さん……今朝は誰も來ませんが、どうしたんでせう？』

『ねえ、どうしたんでぜう、Iさんが來さうなものです……』

滿して來るのを、兩親は夫れと知らずに、

『其の體格で働けない筈はない。毎日畑へ出て働いてみるがいゝ。』

などと言つて叱つた事も二度や三度ではなかつた。けれども實際彼れは病氣であつた。少し勾配の急な坂を登ると直ぐ息切れがした。て、彼れは文學者になつてみようと思つて、種々な文學雜誌を購つて讀んだ。そして其中に揭載されてゐる小說や新體詩が、左程自分の作より優れたもので、無いやうに思つたので、盛んに小說や新體詩を作つて文藝俱樂部だの新小說だの中央公論だのといふ大雜誌へ投書した。

彼は『今に！』といふ希望を懷いて遙々一里ばかり隔つたS町の書店へ出掛けて行つて夫れらの雜誌を見た。表紙を開けて目次を見る時、彼の心はいつも踊つた。けれども直ぐ失望の淋しい蔭が彼の心にさして來た。彼はこれらの雜誌を一々買ふ事が出來なかつたから、毎月、月の初めに態々夫れを見に行つたのであつた。

彼は斯うして二十あまりの短篇小說を作つた。或時は萬朝報の懸賞にも應じた。種んな雜誌の懸賞募集にも應じてみたが一回も當選しなかつた。しかし彼は自分が赤門も早稻田も卒業しない無學閥だから採用せられないのだと思つた。

そこて彼は繪を描いて見ようと思つた。父に強請つて書籍代に貰つた五圓の金て水彩繪の具や寫生帖を買つた。S町へ行つて油繪具も少しばかり買つて其の名前を熱心に覺えたが、偖繪は新體詩よりも小說よりも、もつと拙いといふ事が自分にも直ぐ自覺出來た。しかし彼は空想だけても宜いから自分が大藝術家であり得たかつた。て、彼は毎日繪の具とキャンバスを持つて熊野の濱に出て行つて、キャンバスの位置を、あつちにして見たり、こつちにして見たりして二三時間を費して、そして遂う何も書かないで歸つて來るのが常てあつた。最初の中は夫れがホンの自己を僞る業だと思つて幾分か自分自身に對

或日の夕方Oドクトルが往診から歸つてみるとNが調劑室に居なかつた。彼れの部屋を覗いてみたが其所にも居なかつた。妻君を呼んで聞いてみたが、『今の先まで其所に居たが……』といふ答だけであつた。

Oは Nが此の五六日間頻りに鬱ぎ込んでゐたのを知つてゐた。て、少し氣懸りになつてNの室を又た覗いてみると、机の上に一通の手紙があつた。宛名はOドクトルてあつた。

Oが急いで其の封皮を披いてみると中には簡單に斯う書いてあつた。

先生、私は心臟が弱い、そして私の意志も弱い、私は適者生存の理法から言つても、到底生存の價値なきものです。

私は十七年間の生活によつて得た所のものは、人生といふものは淋しいものであるといふ事を知り得ただけです。

Oは非常に驚いて早速出入の車夫を呼んでNの實家を訪問させた。所がNが實家に歸つてゐないといふので諸所方々を調べさせたが何所にも居なかつた。

最初の程はヨモヤ死にもすまいと言つてゐたが、或は？……と云ふやうな氣も起つて來るので、實家へも其事を言ひやつて、俄かに大騒ぎを初めた。

翌朝になつて村の青年が小山の麓にある小い池の堤にNの居るのを見付けて報告して來た。夫れッと云つて駈けつけてみると、Nは堤の芝草の上て潛々と泣いてゐた。Oも行つて種々と聞訂してみた。Nは唯泣くばかりて何も言はなかつたが、默つて懐から藥袋紙に包んだものを出してOドクトルに示せた。

『君、これはモヒぢやないか』

Oドクトルは叱るやうに言つた。けれどもNは何も言はないて默つてゐた。

此事件があつて以來、Nは實家へ歸つて毎日ぶら〳〵と遊んてゐた。心臟が弱いので段々と身體が肥

『有りますがね、どうなさるのです』

『まア〳〵兎に角御貸し下さい、私は實際人物の方が何うも面白いのです。人格が現はれますからね。』

『あゝさうですか。有難う。では寫眞よりも矢張り實物から直接にお寫し下さい。夫れが宜いでせう？』

Nは一寸返答に詰つた。しかし何氣なく、

『私のは少々空想が混るんですからね。直覺した人格を現はすのが本意ですから。』と云つて寫眞を一枚借りて其所を出て來た。

彼は途々日曜學校の事に就いて種々と考へてみた。そして彼は彼の教會で眞劍に宗教教育を兒童に施してみたいと思つた。

次の日曜には朝疾く教會へ行つた。音無牧師に逢つて直ぐ尋常科の一組を受持つ約束をした。そして其日は音無の授業振りを見學して歸つたが、偖て此の六日の間に彼の本を讀んで見よう此の本を讀んで見ようと思つて、音無の所へも態々二回ばかり訪問した。そしてウエスレーの傳やら、リビングストン傳やら、教會歷史、教理史といふやうな書物を十二冊借りて歸つたが、何れも此れも一頁も讀まないうちに次の日曜日が來た。

けれどもNは取敢えず教會へ行つて、話さなければならないので、中學校で習つた、アネクドウッの中の兵卒が敵に水を飲ましてやる話をする事に決めた。そして教會へ行つて夫れを話したが、彼は此時に宗教と音樂との關係の密接なものだといふ事を不圖考へついたので、早速受持の兒童の裏庭へ連れ出して其所で讃美歌を教つてみた。

彼れの空想は美しかつた。日曜の朝、無邪氣な子供達と一緒に青草の上で天を仰ぎ乍ら神を讃美するといふ程清う美しい事は無いと思つた。そして子供達と一緒に細い美しい聲で聖い歌を歌ひながら、天

しても愧かしく思つたが、遂には、

『どうも今日は氣分が進まない。明日にしよう。』などゝ言つて舌打をするやうになり、途中で村の若者に出逢つた時、

『熊野の怒濤を寫生してみようと思つたが、どうも氣分が進まないから止した。こんな藝術的の事は、君達が稻を刈つたり麥を蒔いたりする樣には行かないからね。』などゝ平氣で言ふやうになつた。

或時Nは S 町の教會を久し振りて訪問した。夫れは新に東京の神學校を卒業した音無といふ牧師が赴任したと聞いたからであつた。彼は其時も矢張りキャンバスと繪の具箱とを持つて出掛けた。

彼は教會の牧師館を訪問して、自分が此の教會の信者である事を告げて、夫れから種んな事を一時間ばかりも語つた時、音無牧師は非常に喜んで、

『では君、誠に濟まないが、日曜學校を一つ助けて呉れないかね。僕も今困つてゐるんだから。』と言つた。

Nは其時何等の思考も無く早速夫れを承諾して、これから王子ヶ濱へ寫生に行つて來るから歸りがけに今一度伺はうと云つて教會を出た、しかし其日も無論繪は描かなかつた。

『折角行つてみましたが、今日は少しく雲の色が惡かつたので止しました。』

Nは歸途に牧師館へ立寄つて斯う言つた時、音無は怪訝な顏をして、

『雲の色が惡ければ惡いまゝ寫生したら何うてすか。』と問うた。

『こんな天氣になると、私の頭も少しくグルーミイになりますからね。』

Nは其儘に話を打切る事が出來なかつた。彼は遂に一歩踏込んで、斯う言つた。

『先生、あなたの御寫眞がござりますか。御座りますれば一寸御貸し下さいませんでせうか。一二週間……』

『一寸私は一言感話を致します。我々人類の運命と云ふものは眞にシイクレットなものであります。斯んな事は私が申すまでも無い事ですが……と云つて十四五分間も滔々と話した。しかし其の話といふのは殆どシドロモドロなもので何の條理も理屈も無かつた。彼は『これ私が今夜此の告ピヤクをなす所以であります』。と云つた時、隣りに坐つてゐた豐田が頻りに坐睡つてゐた事に氣付いた。音無も說教後少し變な顏をしてゐた。Y子は逃げるやうに會堂を出て行つてしまつた。

Nと豐田とはKの渡頭を渡つて田圃路を默つて歩いてゐた。五六町行つたと思ふ時、豐田は立停つて斯う言つた。

『耶蘇になつたら、亞米利加へ行かれるぢやらうか。』

Nは始めて豐田が耶蘇にならうといつた意味が解つた。しかし此時Nの頭を刺激したのは『自分も米國へ渡りたい』と云ふ事であつた。

豐田のやうなABCも知らない男ですら渡米しようといふのに自分が今まで其所へ氣の付かなかつたのは迂濶であつたと思つた。

Nは其後頻りに渡米の事を空想してみた。東京の神田にKといふ社會主義者で渡米案內といふ本を書いた男の所へ手紙を出して何回も事情を尋ねたが、一向要領を得なかつた。そこで彼れは此日の末にS町の敎會へFといふ宣敎師が來ると聞いたので其の宣敎師に逢つて渡米したいといふ意志を陳べてみようと思つた。

彼は二十世紀日英會話を片ッ端から裏の蜜柑畑の中へ行つて暗記し初めた。中學校でも英語の時間には能く英語の敎師から『Nさん、讀んで御覽！』と言はれた程で彼れは發音と習字とは常も滿點を取つたので、自分ながら餘程上手だと思つた。

て、最後の日曜に敎會へ行つて、F宣敎師に會つて日本語と英語とを混ぜ〳〵に使つて渡米の相談し

の使と一緒に虚空遙かに舞上りたいやうにも思つた。さう云ふ心持で彼は兒童を裏庭に連れ出しては見たが、讃美歌の調子も節もチグハグで、何の興味も起らなかつたばかりか、兒童の中には、

『先生、もう歌はマイせられい（止さうといふ意）一寸も面白う無いワレ。』

『うーん、歌ら面白いもんか。夫れよりか菓子でも呉れる方が善えワ。』

などゝ云ふ者すらあつた。道がに彼れも興醒めざるを得なかつた。けれども彼は其時献身犠牲といふやうな事を考へて子供達を叱らなかつた。しかし何うしても次の日曜に今一度此の子供達を教へて見ようと思はれなかつた。

て、土曜の夕方音無牧師を訪問して、どうも家事の都合で朝は出られないから夜分の集會を手傳はうといふ約束をした。

夫れから彼れは村の若物達に宗教の話をしてみた。リビングストンや、ルーテルや、ウェスレーなどの話をしてみたが、一向何の手答へも無かつた。しかし唯た一人頻りにNの話を熱心に聞く豊田といふ青年があつた。

『Nさん、S町の教會へ俺を伴れて行つて呉れんか。俺は一つ耶蘇になつてなりたくつてやらうか知らんと思ふんぢや。』

豊田は眞面目に斯う言つた。Nは本當に嬉しかつた。て、早速其の次の日曜の晩豊田を伴れてS町の教會へ行つた。其晩にはどうしたものか教會には音無牧師夫婦と、久しく出逢はなかつたY子と三人しか來なかつた。

Y子は吃驚したやうな顔をしてNを振返つて見たが、夫れつきり俯向き込んで了つた。Nの心は異常な喊聲に震動された。

音無の説教が濟むと同時にNは突然起上つて、

院長は凝乎とNの顔を見詰めた。Nは得意を禁ずる事が出來なかつた。

『Bleienerhalorathie.(鉛毒腦症狀)を起すと困りますね。先ア Bleilahmung.(鉛毒痲痺)や Bleikolik.(鉛毒疝痛)位なら何とか處置は出來ますが。』

Nは拾ひ讀みに讀んで Pharmakologie. から覺えてゐた言葉を三つ並べて見ただけであつた。しかし院長は俄かに態度を改めて、

『失禮ですが、あなたは今何年生てゐらつしやいます。』かと問うた時、Nは思はず『二年です。』と答へてしまつた。しかし餘り心苦しかつたので、『しかし今は退學してゐます。』と言つて誤魔化した。

翌日手術を受けたが、蓄膿症は大した事も無いだらうから切開しないで簡單な方法で膿を取つた。

Nは三日目に一通の手紙を書いて音無牧師に送つた。

私も大手術を受けました。出血一升二三合で體格が全く衰弱して了ひました。毎日死生の間を彷徨してゐます。しかし神は私に尚ほ活きる事を命じ給ふてせう。

Nは斯う書いた時、出血一升二三合といふ文字を平氣て書いた事を別に不思議とも思はなかつた。

彼は十日目に退院した。しかしS町の醫院へは歸らずに直ぐ實家へ歸つて、大阪の醫學校へやつて呉れと父に頼んでみた。

父は多少賣藥の事も知つてゐて、獸醫の假免狀を持つてゐるので、Nが若し藥學校へ入學するなら學資を出してやらうと言つた。

Nは非常に喜んで早速大阪の藥學校へ入る爲に翌月の半頃勝浦から乘船して大阪へ行つて○○藥學校へ入學した。學校は頗る不完全なもので藥屋の小僧の通ふ夜學校てあつた。しかし彼れは洋服と制帽とを早速買求めて毎晩熱心に通學した。

學期試驗の成績は彼が首席であつた。て、案外藥學は容易なものだと思つて必死に勉強して、二年目

てみた。

『あなたは米國へ何をしに行きますか。』

F宣教師は微笑しながら問うた。

『I want to enter a theological school.』

Nが斯う言つた時、F宣教師は冷やかに笑ひ乍ら、

『神學校は日本に澤山あります。音無さんは紹介して呉れます。』と云つて、其上碌々話相手に成らうとしなかつた。Nは少々周章てゝ『日本の神學校は駄目ですから……』と云つたがFはNの顔を笑ひ乍う見詰めたまゝ何とも言はなかつた。

（三）

Nは其後醫者に成りたいと思つて、S町へ新に開業した小兒科醫の所へ書生に入り込んだ。院主は醫專を出てまだ間も無い若い醫者で獨逸へ留學するのだと云つて必死に獨逸語を獨習して居た。マイエルの百科全書と首引きて論文のやうなものを書いてみたりしてゐた。Nは時々エンゲリンの一を教へて貰つたが獨逸語の方が英語より遙かに覺え易いやうに思つた。

二月ばかり此の醫院に居たが、始終頭がグラ〳〵するので、院主に診察して貰ふと、多分蓄膿症だらうといふので五里ばかり隔つた所にあるT病院の院長に紹介狀を書いて貰つて其所へ入院する事になつた。

Nが此の病院へ行つて院長に會つた時、院長は大變丁寧に應接して呉れた。種々の話をしてゐる中にNは不圖、

『此邊には Saturnismus chronicus.（慢性鉛中毒）はありますまいね。』と輕く言つた。

『ありません、絕對にありません。』

Nは夫以上言はなかつた。しかし音無の口もとには觀破の微笑が動いてゐた。

夫から半年も經たないうちにNはS町へ歸つて來て藥屋の番頭になつた。

彼が藥屋の番頭をしてゐる間に頻りにS町の新聞へ藥草の事やら化學の事やらを書いたので、皮肉屋の音無も段々と彼れの實力を信ずるやうになつた。

或日の事Nは一枚の新聞を持つて教會へ行つて。

『熊野にも斯んな女流詩人がありますからね、私は本當に感心しちまひましたよ。實に立派な者です。』

と云ひ乍ら其の新聞を音無の前へ差出した。

『女流詩人が？』音無は『又た初まつたか、』といふやうに其の新聞を取上げて一頁の下の方にある文藝欄を覗いた。其所にはS、Mと云ふ女の名で和歌が十首ばかり載せてあつた。Nの君に捧ぐといふ題で、何れも濃艶な和歌ばかりであつた。握るに太き御手だとか、房々と波打つ如き髪だとか、キスだとかいふ文句が並んでゐた。

『兎に角上手だね、此女は。』

音無が斯う云つた時、Nは非常な滿足を感じながら歸つた。

秋の初であつた。Nは或日突然友達の柿田といふ男の所へ葉書形の薄つぺらな書物を百部ばかり提げて駈け込んで來た。

『君、これに題をつけて呉れないか。』と云つた。柿田は其の淺黄色の表紙をして小冊子を取上げて中を披いてみると、

我等心と心との相ゆるせる歌びとどちが、近く擧げなんとする結婚式に參列を請ふべかりし諸兄に此の歌集を捧ぐ。

の春一度檢定試驗を受けて見たが及第出來なかつた。

彼は試驗の成績が發表ならない前に一度故郷へ歸つた。羅紗服に金鈕をつけて、角帽を被つて歸つたのである。そしてS町の敎會へ行つて音無牧師に會つた時、

『學校の生徒三百五十人と一緒に湯崎の溫泉へ修學旅行に來た序に、一寸研究したい事があつて歸つたのです。』と云つた。しかし音無はNの入つてゐる學校が三百五十人も伴立つて修學旅行をするやうな學校て無い事を能く知つてゐたから、一向學校の事は問はないて、

『何を研究するのてすか。』と問うた。

『熊野の海藻から大變なものを發見してみたいと思つて粗ほ成案はついてゐるのですが……』

『海藻ぢやァ駄目だよ、此の海を其まゝ田圃にてもする方法を考へ無くちやァ。』

音無は冷笑する樣にハヽヽヽと笑つた。しかしは別に氣にも留めなかつた。

二年目の冬に彼は藥劑師の試驗に及第した。そして校長の世話て紡績會社の附屬醫院へ月俸十五圓て傭はれる事になつた。

彼は赴任前に又た故郷へ歸つた。そして前のやうに音無の所を訪問した。今度は、

『及第したつて云ふ事だね、本當にお目出度う、文學者になるよりも、美術家になるよりも神學校を卒業するよりも、さうした實際的の仕事を知つて置く事は必要な事だよ、さうして藥劑師をしながら文學ても神學ても何ても勉强出來るからね。先アお目出度う。』と言つて音無は握手を求めた。

Nは右の手を强く振り乍ら、

『先生喜んて下さい。私も今は友達と聯合て小い乍ら會社を建てゝゐますから。』と云つた。

『會社を？　何會社てすか……』

『えゝ詰らない小い會社ですが。』

『一晩にシナピて了ふのは其の諸判ばかりぢやア無いよ。』
『何ですッて？』
『はゝゝゝは、女流詩人のお腹も二三ヶ月後には一夜の中にべちやんこに萎びるだらうよ。』
『もう其様なの？』
『さうさ。君は未だ氣づかないのかね？』
『知らなかつたね。……しかし和歌は中々上手だね、N君と餘り違はない位、上手だね。』
柿田が斯う言つた時、音無は少しく下唇むやうな眼付て、
『N君の歌と違はないさ。違はう筈が無いから。』と言つた。
『S、Mの自作ぢやア無いと仰しやるんですか。』
『そんな事は問ふが野暮さ。夫婦は一體なりだもの、先アN君をして斯んな歌を詠む詩人と結婚したのだと思はして置くさ。そして理想の妻を持つたと想はせるさ。我々だつて其様な空想に生きた時代があるぢやないか。ね、柿田君。』
音無はからゝゝと打笑つた。柿田は小い欠伸を一つして、しなびた藉判を机の上に投げながら、『成程ねえ、矢張り男らしい句調だと思つたよ。』と云つた。

Nの履歴はもつとゝゝ長い。けれども私は今朝死亡の通知を得たNの爲に取繕つた修辭澤山な履歴書を讀む代りに、彼れのファンシイフルな二十餘年の生涯の中てこれだけを繰返して考へてみたのであつた。
六時が打つた時G君の說教が漸と終つた。私は未だ一つの結婚式を見舞はねばならぬから一歩も先へ失禮して築地の精養軒へ駈けつけた。そして名士や博士達の祝辭を澤山聞いたが矢張り其の多くは花嫁

と印刷してあつた。そして其終りに、Nの名と並べてS、Mの名をも陳ねてあつた。

『君はあの女流詩人と結婚するのか、夫りやア奇抜だなア。』

柿田は手を拍つて踊るやうにし乍ら言つた。

『歌の批評をし合つたのが縁になつてね。しかし僕は幸福だと思ふよ、君。』

『幸福とも〳〵大成功だ、大いに賀するよ。詩人同志だから理解があつて宜いだらう。』

『うん、僕も然う思ふ。……時に柿田君此の歌集へ題をつけて呉れないか。』

柿田は暫く考へてゐたが、

『暮がいゝだらう、『暮』としよう、結婚は戀の夕暮さ、はゝゝゝは。』

Nも一緒に笑つた。其時柿田は庭の隅に土に塗れて轉がつてゐる馬鈴薯の一つを見付けたので、『宜いものがあつた。』と云ひ乍ら、走り降りて夫れを拾つて來た。そしてナイフで夫れをスカッと二つに切つて其の切口へ『暮』といふ字を左文字に墨で書いて夫れを彫付けた。そして其の薯判を朱肉で歌集の表紙へ捺してみたが、一寸風變りな面白い字が現はれたので、二人は大笑ひをして別れた。

翌朝柿田はNが殘して置いた百部の歌集へ昨晩彫つた馬鈴薯の印を捺さうと思つて其薯判を取上げてみると、一夜の中に、くしや〳〵に萎びて形も文字も變挺なものになつて了つてゐた。

柿田がしなびた馬鈴薯の印をニコ〳〵と笑ひ乍ら捺してゐる所へ、ひよつくりと入つて來たのは音無牧師であつた。

『何だい夫れは?』

音無は机の上に廣い額を突出して問うた。柿田は一部始終を詳しく語つて、しなびた印を高く差上げながら。

『一晩に、こんなに萎びちやつたんですよ。』と言つて笑つた。

聖母の子

二階堂眞珠

Teh muss Maria sein und Gott aus mir gebüren,
Soll er mich ewiglich der Seligkeit gewähren.
——Angelus Silesius

平和な北國の夏の陽は、もう沈みかけてゐる。涼しい夕風が牧草の香や乾枯びた牛肥の匂ひを、牛乳小舍の方まで運んでくる。それが牛乳の匂香に混つて塵場てなければかげぬ獨特のアトモスフエヤを作つてゐる。

小舍では、小枝子と下婢と二人で牛乳壜を洗つてゐる。さえ子は近くのミッションの女學校に通つてゐる、何に不自由のない、こゝの農場主の娘なのである。

草花を育てたり、羊の面倒を見てやつたりすることが大好きだつた。長い睫毛のかげに潤ひのある大きな瞳と、愛くるしい口元とを持つてゐた。

言葉で言ふよりは、寧ろ多く表情で言ふ娘だつた。聲高に笑ふよりは微笑みがちだつた。そして默つてしげ〳〵と人の顔をみる癖があつた。

もう夕陽は牧場の涯のポプラアの蔭に沈み、長い縞を草原に描いてゐる。

七面鳥がかしましく鳴きながら鳥部屋に歸る音が聞える。さえ子は少し赤味のある光澤のいゝ髮を無

花聟をNのやうに空想に生きさせやうとするのであつた。

私は披露宴の最中に又たつく〳〵と死んだNの空想たつぷりな生活に就いて考へてみた。そして斯う思つた。

『彼は矢張り大詩人だつたのだ。

彼は矢張り大きな會社をも建てたのだ。

彼は女流詩人を妻に娶つて美しい〳〵家庭を造つたのだ。否彼の一生涯の大事業は其の女流詩人と歌集の合著をしたといふ事であつたのだ。

無邪氣なNよ、私は本當にあなたを愛する。あなたは罪のない可愛い男であつた。』

私は芽出度い結婚式の最中に、死んだNに斯んな引導めいた事を心の中で囁いた時、思はずホロリと涙が溢れた。

═一九一八年二月廿日夜═

もないものはない。

その騒ぎのあつた翌日、さえ子は

『傴太爺さんもあんまりですわね……』と慰めると、みわ嫗さんは涙を泛べながら、こんなことを云つてゐた。

『ばゞあなんかは、もう殺されたつてかまはねいが、傴太だつてたゞは済むめいし、あんな齢して監獄さ這入つたら三日と生きますめい。なんぼ撲れたつてかまはねいだけれどあんな眞似だけは、眞個にやめて呉れゝばいゝだなあ、——おご様。老婆は恥しく世間さ顔も合はされねいだもの……』

皺だらけの眼尻からぽとりと落つる涙をみると、さえ子も一緒に涙に濡れるのであつた。

『なぜ傴太爺さんは、こんなにいゝお嫗さんを撲つたりたゝいたりするんでせうね。……一生懸命働いて盡して上げてゐるのに……』

『おごさま、泣いて下さるてねい。またとんでもねい愚痴をこぼして濟まねいだ。そんなに泣いて下すつちや勿體ねい。老婆は人様には、あんまり物を言はねいが、おごさまにだけは、みんな言つて仕舞ひたくなるので……』

さう言ひながらみわ嫗さんはやつぱり涙をこぼしてゐる、そして半分獨言の様に、

『わしの子もなあ、おごさまみたいな親切な子だつたら、こんな恥はかゝしてくれめいに……みんなあれに似て遊び歩いて家になど寄り附かねいし、またあれみたいに人様に迷惑をかけると思ふとほんとに救世主(ジエズ)様にまで愚痴をこぼしますだあよ。

おごさまはまあなんて優しいお子だろ……。

世間ぢやおごさまを、小さいマリヤ様だつて申してゐますだよ。老婆は胸がむしやくしやした時でも、おごさまに逢ふとからつとしますだあ……。

造作に後ろに束ね、時折小指て後毛をかき上げながら、せつせと牛乳壜を洗つてゐる。

蝙蝠はすぐ小舎の前に輪を描いてゐる。

「さえ子、もうご飯だよ——ついでに牛乳二三本持つておいて……」

主婦らしい人の聲が、母家から聞えてくる。

恁うした平和な日が、いつまでもいつまでも續くやうに見える。どんな悲劇も此處へは這入られさうにも見えない。實際さえ子は人並に笑ひもし談話もする。

誰が見ても、樂しい富裕な家庭に育つた幸福な娘に違ひない。けれども、眞の悲哀や苦悶といふものは、決して外部からくるものではなかつた。

さえ子の好きなみわ老媼さんといふ、かれこれ六十に近い人が、近所にあつた。もとはかなりよく暮してゐた農家であつたけれども、夫の傳太といふのが、若い時から放蕩て、二匹の馬も人手に渡し、田地も賣り拂つて仕舞ひ、あとはたゞ家屋敷が殘つてゐるばかりだつた。

その家屋敷も齢甲斐もなくある女と關係してからは、それを抵當にして金を貸りて、湯水のやうにさんざばら撒いて了つた。勿論家になどは寄りつかなかつた。

みわ媼さんは、ひとりて春は養蠶をしたり、秋は柴木を拾つたりして貯へたほまちの臍繰金——丁度痩地の畠の馬鈴薯が、花も咲かずに、みすぼらしい葉をしながな、たゞ球根を大きく育てるやうに着るものもきず、食ふものも喰はずに貯へたほまち——

傳太はいつの間にかそれを探し出して、有難うとも言はれずに、女にやつて仕舞ふのであつた。

いつかなんかは、傳太が出刃庖丁てみわ媼さんを斬り殺すつて大騒ぎを演じたことがあつた。近所の人が仲に這入つてやうやく無事に濟んだのであつた。若い女に瞞されて、狂つてゐる老爺ほど、みつと

ばら色の雲がちぎれ飛ぶ美しい黄昏であつた。さえ子はひとりで恁う思つた。——みわ堀さんの様な、氣立のやさしい辛棒な女が可愛がられないで、あんな素性も知れぬ女に僧太爺さんは無中になつてゐる。愛といふものは超自然なものだ。美しい顔や貴い魂を持つた人だからとて、必ずしも愛せられると限つたものではない。若き日を歎き盡しおのが生命を捧げても、いさゝか愛の報ひをも求めることは出來ない。所詮愛は人の勝手に出來ぬものだ、さう思ふと決して人を恨んではならない。みんな正しいのであらう。

さえ子にもみわ堀さんのやうな、しかしもつと美しい惱みがあつた。報ひられない愛の哀しみがあつた。

さえ子はなんとなくみわ堀さんに縋りついて、二人で泌々と泣いてみたい様な物哀しさを覺えた。

もう夕闇が野面をそろ〳〵と這つて來て、地は薄暗くなつてゐた。たゞ西の空に餘光がほのかにあるばかり……さえ子はふと空をみるとリイラ星が一つ淡く眼に入つた。始めて見つけた星に願ひをかけるとなんでも聽かれるといふ……

『わたしには、わたしにはなんとも望みがないんだもの……』

恁う獨言しながらさえ子は靜かに歸つて往つた。

雪ばかり多かつた厭やな冬の月もやがて過ぎて、野火で燒かれた黒生の上には、若葉が萠え出て、足駄の齒をとられさうな雪消の泥濘もそろ〳〵固まつて、櫻の花がもう咲くといふ頃であつた。

さえ子の屬してゐる天主敎の會堂は、美しく花で飾られて盛大な結婚式があつた。

もしそこにさえ子が居はせたら、たぶん、うら若いダンテとベアトリチエとを、逆にしたやうなもの

老婆はいつても、おごさまのしやはせになるやうにつて祈つてゐますだよ。』

實際みわ嫗さんは、誰にでもさえ子のことを心から賞めて、いつも『あんなおごさまは何處にだつてありやしません』と結ぶのであつた。そしてさえ子と仲好しなことはおみわ嫗さんにとつて何よりも誇りがなことのやうに見えた。

倉太爺は時々醉どれになつて歸つて來ては、みわ嫗さんに亂暴するのであつた。

いつかさえ子がみわ嫗さんの家の前を通ると、倉太が例の亂暴をしてゐる。

『……おめへのやうな梅干婆が生きてけつかるからだ。この邪魔くされ！　さつさとくたばりやがれ……。』

さえ子は駈け込んでお婆さんをかばひ、倉太の手に縋ると、倉太はぐいとさえ子を押し倒してみわ嫗さんを撲うとする。

みわ嫗さんは今まで毛を切るものゝ前の羊の樣に「こんどだけ、こんどだけ堪辨してお呉れ」つて詫つてゐたのであつたけれども、倉太がさえ子をぐいと力まかせに押し退けやうとすると、みわ嫗さんは怒りだした。

『この惡たれ老爺！　一指でもおごさまに觸つてみろ！　この老婆だつていつてもさう敗けてはゐないぞ。よくもおごさまを押し退けたな……。』

さえ子は泣きさうになつて、『みわ嫗さんそんなことを言ひなさんな……』やつきとなつて二人の間をさくのであつた。

さえ子はみわ嫗さんのこんなに怒つたのを見たのは、始めてであつた。その歸途にさえ子は、ずつと牧場の方を一人て歩き廻つた。

"She revealed Herself no doubt to certain persons, more especially to the souls in love with sorrow, the mystical souls that delight in reviving the anguish of the Passion and following the Mother in Her heart-breaking way to the Cross. She would thus seem less attractive to the vulgar who do not love woe or weeping." この有名な Huysmans の the Cathedral の一節が、どんなに此處に、ふさはしらであらう。

いつの間にか讃歌もやんで、森乎としてゐる。さえ子はロザリオを指に繞きながら、生きてゐる人にても話すやうに、聖母に恁う言つた。

「聖母さま、夕べ、傷いたイエズス様の御繪を凝視めながら。一晩泣きあかしましたの……聖母さま貴女はみんなご存じでございませう。わたしは卑しい醜いものでございました。私はあの人たちの幸ひを憾みましたの……わたしは亂れた思ひを鎭めたいと思つて、あのイエズス様のご繪をみましたの……み姿はみるも淺ましく、苦惱と暴虐とに傷き破れ、臙涙は血汐に交つて、滴つてゐるやうに見えました。いかに人の罪を負へばとて、グビトのみ裔なる秀麗なおん姿は、なんといふ淺ましい變りかたでせう。……けれどもぢつとみつめてゐましたら、子供のやうにわつと泣き崩折れて、仕舞ひました……まあ……額は茨に引き裂れ、鼻筋は曲り、口はゆがみ、眼は深く窪みはてゝ、人の顔とも見えぬまでに惱みと暴虐とに、deform されたみ顔には……あゝあゝいさゝかの恨みの痕だになく、たゞ恩愛がほの見えてゐました。わたしは泣いて、泣いて、呼吸が詰まるほどでした。夕べこそわたしの心は、ほんとに破れたのでございます。

聖母様、わたしはもう決して、誰れをも愛しません。あの人に呼ばれても、私はもう返事も致しません、振り返りも致しません。いつまでも、いつまでも、私は聖母さまに仕へます。そして惱めるもの、哀し

てあつたらう。

ダンテのやうに卒倒して、擔ぎ出されたかも知れぬ、或は更に華かなウエッデングマアチのまだ消えやらぬ中に、物哀しい "Soul Bell" が鐘樓（キャンパニール）から響かなければならなかつたかも知れぬ。

しかしこの賑かな婚禮の行列の物音を、さえ子は人知れず、みわ媼さんの手にぎつしり縋りながら聞いたのである。實際この樂しげなマーチは、彼女にとつてたしかにソオルベルであつた。

會堂から四五丁はなれた後の山にルヽドの聖洞がある。そこには念珠（ロザリオ）を腕にかけて合掌してゐる聖母の像がある。み足のもとには野薔薇が茂つてゐる。洞の左側にはちよろ〳〵と清水が流れてゐる。さえ子はこのルヽドの聖母が大好きだつた。

もう明日から受難週が始まるといふ黄昏であつた。さえ子は一人このルヽドの聖母の前に第二の塑型の様に膝まづいて、身動きもしないでゐる。

星明りに "Je suis l'immoculle" といふ金文字の圓い後光（ロハ）がやさしく光つて見える。

謝肉祭（カアニバル）から受難の日に移りゆく凪のやうな靜かな宵である。

近くの會堂で、夕べの勤行が始まつたのであらう。

"Stabat mater dolorosa
Juxta crucem lacrymosa,
Dum pendebat Filius:……

Mother of Jears, Our Lady of Seven Dolours

を歌つたあの哀しい、しかし懐しい調べが、途切れ途切れに、顫へて流れてくる。

ますまいか、それらの人は、この世の戀の爲めに朽ち果つるには、あまりに貴い美しい魂を持つてゐるのです。神樣はこの世の戀よりも、もつと高い、もつと純な悦びや悲しみを、與へやうとなさるのでせう。

さあ、接吻してあげやう……おまへは、むかしお母樣に接吻されたこの世で一番甘い接吻を、覺えてゐるかい？……おゝ　なんてかあいゝ子だらう……』

聖母は自分を抱き搖りしながら、幾度も接吻して下さるやうに、彼の女には思はれた。

紫の桐の花が、咲いては落ちる初夏のある日のことであつた。

さえ子は何の變りもなく、羊の子の世話をしてゐると、みわ嫗さんの隣家の兒があわたゞしく駈け込んで、來て息を切りながら、『あの、あの、みわ……嫗さんが死ぬところだから早く來てくなえんとしや』

さえ子は吃驚して駈けつけた時は、司祭が聖油を以てお嫗さんの目や耳や手や足に、十字架を印しながら終油の秘蹟を行つてゐた。

傳太は傍でおどおどしてみてゐた。

終油の秘蹟が濟むと、さえ子は病人の側に往つて、自由の利かなくなつた手を握つて、『みわ嫗さん…』と呼ぶと、

『おゝ　おごさま、よく來て下さつた、よく來て下すつた。……』しかし舌が縺れてはつきり言へないのである。

傍から傳太が『おごさま老婆があなたに逢ひたい、逢つて死にたいと申すので、迎へに上げたのです。』とつけ加へた。

みわ老婆さんは、しげ〳〵とさえ子の顏をみてゐた。

めるものの慰めとなり、病めるものの看護をしやうと思ひますの……私はあの時、美しく死んで仕舞はうかと思ひましたの、けれども今は、ながらへて貴女のみ傍に、仕へやうかと思ひます。人に愛せられるよりも、聖母さまに愛せられる方がどんなに幸でせう。聖母さま、わたしはほんとうに可愛がられたいの……

……しばらく沈黙……

聖母さま、一言やさしい言葉をかけて下さい、一度もほんとうに優しい言葉をかけられたことが、ございませんでしたもの。若き日を歎き盡して、愛を捧げた人からも、一言の愛の言葉も聞くことが出來ませんでしたの、てももう人を怨みはいたしません、何の報ひも望みません。

聖母さま、貴女はわたしを可愛つて下さいませう……』

さえ子は、泣きながらもの云ふ幼子のやうに、頬から流れる涙を、そのまゝにして包み切れぬ胸の思ひを聖母に告げてゐた。

そして、柔かい胸に抱き上げられて、すうつと、夢のやうに遠くへつれてゆかれる様に、さえ子には思はれた。そして聖母は、さえ子の耳元近くに口をよせて恁う呼くやうに思はれた。

『おゝ可愛い娘、もう泣くんぢやないのわたしはいつも惱むものゝ母なのだから……もうもうたれも、おまへをいぢめたりするものはないのだから……

あんなに美しい戀が破られても、つゆ人をも神をも恨まずに、反つてます〳〵優しくなるのを見て、わたしはどんなに憫れに思つたか……多くの人は、あんなに烈しい嵐に逢ふと、心は石のやうに冷くなりがちなのに、おまへはなんてしほらしい……おまへがつとめて人々の前で微笑むのをみて、わたしはひとしれず涙を拭いたのだ。

なぜ神さまは、この世の多くの人々の美しい清い戀を破りなさるのでせうね……でもかうてはあり

は美しい魂だからである。

おゝ聖母さま、わたしはなんにも欲しくない……たゞ貴女から、クリストから、眞に愛せられるにふさはしい美しい子となりたい……

みわ嫗さんのなきあとに、小枝子はある憫れな病人を見舞つた歸りに恁んなことを思つた。そしてなにやら悦しくて涙がこみあげてくるのであつた。(をはり) ——十九、二、十二——

編輯便り

▲寒い寒いと云つてゐる中に、いつの間にか。春となつた。春となると木の芽も萠ぐむ花も咲く、人間の頭腦もフワ〳〵して急に暖氣に溫醸されるので、安定を失つた人間が澤山出てくると云ふわけだ。

▲この安定を失つた人間が普通選擧運動とか黎明運動とか騷いでゐるのは强ち時局の原因(せい)ばかりではあるまい。日比谷の集會が物になつた例しはないと相場が定つてゐる。

▲一體日本人の示威運動(デモンストレーション)はまだ曾て其目的を貫徹したことはない。日比谷の集會が物のみではあるまい。慥かに陽氣の加減だ。

▲黎明會の演說や日比谷行列で我が國の政治と社會制度が改革され、日本文明が改造されると思ふものは、日本を飜譯すれば米國となるが一般生活から考へて、何等影響するところがない。

デモクラシー程安價なものはあるまい。日比谷の行列からデモクラシーが生れて來るならば、デモクラシーと云ふことは鳴物入れの政治で盲動心理より生れる政治であらう。こんな政治は米國あたりなら知らぬこと、我國民文明は飜譯政治で改造さるべきものではない

『……わしや、まだ倉太にも話さねいでゐたが、夕べこんな夢を……あの聖母さまがお迎へに來て下すつたのだ……よくみたらおご樣とそつくりの顏をしてゐらしただ……ほんとにおござまし、よく來て下さつた、よく來て下さつた。勿體ない。……』

しばらく安らかな沈默が續いた。

『倉太、倉太、……』

倉太を呼びよせるやうであつた。倉太が耳をよせて聞くと、はつきり解らなかつたが、次のやうなことであつた。

あのまだ言ひ忘れたことがある。ほまちが拾圓ばかり紙に包んで襤褸屑箱の底にあるから、それで羽衣でも着てくれ。といふことであつた。

さえ子は言ひ知れぬ哀れさに咽び泣いた。

さんざ自分を虐待し盡した倉太の爲めに、臨終のときまで思ひ煩つてゐるみわ媼さんの心は、なんといふ美しいものであらうと思つた。

偉人の妻になつて宗教改革の大業を果さしめたカタリナ●フォン、ボラや、偉大な科學の發見をなしたマダム●キューリや、或は深い感化を遺した神祕的な聖者テレザの如き——その人達は偉大な人達には違ひない。しかし凡ての外飾を取り去つた魂そのものの美しさは、果してこの名もない無智なみわ媼さんの魂よりもより美しいとは言へないかも知れぬ。

おゝ美しい魂よ！　この世の人は魂の美の價値を知らない。よしやどんな偉大な働きをするとも、おのが魂を美しく育てなかつたならば、神樣は決して悅びなさらぬであらう。たとへ聖母やクリストの爲めなりとも、自分の魂の美を傷けてはならない。神樣が凡ての所有を盡く賣りても、求め給ふよき眞珠

てないこともよく判る。』

俺は云つた、

『兎に角F君、人間は愛すると云ふ心を離れて何もすることが出來ないのだ。牧師がよく人類を愛するとか人間を愛するとか云ふだらう。こんな無責任な言葉はないと思ふよ。僕は昨日「カラマゾフの兄弟」を讀んでをつたら豪いことが書いてあつた。人生と云ふものに眞劍になつて苦んだことのある人には、人類だとか社會だとか云ふ無責任な言葉は出ない筈だね。

私は多くの人を出來るだけ多く愛しやうとすれば、却つて一人しか愛することが出來ない。又私が一人を憎む時には、益々一般の人々に對して愛着を感ずる。』

ゾンマ叔父が田舍の女に話して聞かせる所にこんなことがあつた。僕はこれを讀んだ時手を叩いて喜んだ。をかしな話だけれど僕は嬉れしさの餘り本に接吻した。俺の一年間の傳道も要するにそれだつた。人道を愛しよう、人類の爲めに祈らうと願つてをりながら、其結果は一人の兄弟に水一ぱいをさへ拒む冷たい個人主義者となつて行つた。恐ろしいことだよ。だから俺は生じいかな愛を捨てゝ仕舞つて一片の木石となつて本に嚙り付かうかと思つてをる。さうしない限り俺は日本で失敗したことを外國で又繰返すことになるのだから。俺は本を愛する。例へそれが俺の本心でなくとも、強ひてでも俺はさうしなければならぬのだ。

F君、まゝ聞いて呉れ給へ。今夜は俺に全部喋べらせて貰ひたい。旅立ちの思出でに、この憂々の情を洩らすべき友を、他に持つてをらぬのだから。(俺はその時涙ぐんだ)

今日君が來るまで行李の底から過去の日記やら手紙などを出して整理してをつた。さうしたら調度二年前のことを考へ出して堪らない氣持になつた。それ見給へ、こんなに澤山の手紙がある。これは全部C子から來たものだ。この五冊のノートはあの惱ましい數ヶ月の日記だ。まあ僕の悲しい夢物語に耳を貸して呉れ給へ。(Fは圓い顏に好奇の眼を輝かせて點頭いた)

僕が彼女を知つたのは北國の海岸のある淋しい

其前夜

住谷爲太郎

昨夜F君がわざ〳〵中野から訪ねて來て呉れた俺はそれがうれしくてうれしくてならぬ。今の處俺の心持ち――この苛立つた今の心――を理解して呉れるのはF君を措いて他にない。彼は穩かな男だ。そして又一種のセンチメンタリストである。俺は彼を捕へて昨夜は思ふ存分過去の追憶に耽つた。涙を流して話した。昨夜位ゐ昂奮したことは近來にないことだ。

「F君、君一體どんな心持ちで日本を去る積りか。いやかう云つた方がいゝ、日本を去らうとしてをる君の此頃の心持はどんなだ。」と。

F君は俺にこんな月並みな問を發した。俺はその心持ちを一寸口で云ふことが出來なかつた。

「心持ちか。俺は今それを一寸口で云ひ兼ねるね。あまり複雜になつてゐて一寸纏めることが出來ぬ。色々なことを考へ出すととてもわからないね。昨夜銀座から歸り途に俺はつく〳〵思つたよ。もう考へることは止めにして勉強するのだね。子供の樣になつてやるのだね。」

F君は暫く默つてをつたが考深い瞳を光らせて處女の樣な口つきで云つた。

「そんなことが君に出來るかな。一寸であつたけれど兎角社會と云ふものゝ中に頭を突込んで苦んだ揚句、偉大な發見でもしたかの如く今度の洋行を企てたのだらう。そして明日後は船に乘らねばならぬと云ふ今の今までそんな苛立つた心持ちでゐる君に再び本に歸ることが出來るだらうか。君の心持は僕にわかるがそれが到底果せらるゝこと

こゝまで話して俺は机の抽出から彼女の寫眞を出してF君に見せた。F君はそれを見てをつたが『隨分ヒステリックなしかし賢さうな顔をしてをるね』と云つた。俺は話を續けた。

『九月に學校に歸つてから、二三度手紙を貰つた。しかし愛するとか戀するとか云ふ文字が二人の間に交換される樣になつたのは十月の終頃からであつた。そら僕達が伊香保に旅行したことがあるだらう、多分あの後であつたと思ふ。俺はとてもあの頃の若々しい夢の樣な戀心地を言葉や筆で云ひ表はすとは出來ぬ。今から先どんな幸福な境遇が俺を待つてゐるか知らないが、恐らくあの時の樣な美しい聖い心持——何と云つてよいかわからぬが幸福と云ふものがもしあんな心であるとすれば——あの時の樣な幸福な自分には俺は一生涯會ふことがあるまいと思つてをる。僕達はそれから度々會つた。一番始めて會つた時は一寸心がひけた。會ふまでも隨分心配をした。けれども會つて見て俺はすつかり安心することが出來た。男女の密會と云ふ厭な文字を君は知つてゐるだらう。世の中の唯物論者（マテリアリスト）の使ふあの汚い言葉を。F君、愛と云ふものは決してそんなものではないね。相愛してをる若い男女ほど美しいものはない。俺はあの日のことを思出すと考へた丈けで美しい心持になる。二人は柔かい芝生の上でお祈をした。俺はあの時位ゐ美しい輝いた彼女の顏を見たことがない。

F君、實際僕は幸福だつた、愛すると云ふことがこんなにまで幸福なことだとは夢にも思はなかつた。一週に一度は屹度手紙を呉れた。それが定つて月曜日の朝だつた。彼女の手紙に、私は日曜日の午前を神樣の爲めに、午後を貴方の爲めに捧げたいと思ひます。どうかすると貴方のことばかり考へて神樣のことを忘れることがあります。こんなことを云つたら屹度貴方からお叱りを蒙るでせうけれど、その都度私は眞赤な顏をして神樣にお詫びを致します云々、と云ふ樣なことを云つて越したこともあつた。俺は彼女の純一な心を思つて感謝した。俺の樣な複雜な男でも戀をすると子供の樣な單純に歸る。夜床に入る時僕は祈りのあ

田舎町であつた。僕はその年の一夏をその町から六里ほど離れた村に夏期傳道に行つてをつた。そこは又實に淋しい處でね。話す人はなし、食べるものとて別に變つたものはなし、恰るで島流しにでもあつた様な心持で、毎日黒い海の色を眺めて暮してをつた。始めの内は一生懸命で本を讀んだ。しかしその單一な生活に我慢が出來なくなつて僕ばは思出した様にS牧師を訪ふてあの町に行つた。一週間と云ふものを毎日の様に海に行つた。僕が始めて彼女を知つたのは牧師の家であつた。疲れ切つてをつた僕にとつては女を知つたことがどんなに嬉しかつたか想像がつくだらう。彼女がそして東京のD學院の高等科にゐると云ふことを聞いて僕は一倍の親みを感じた。彼女も僕を待つてゐて呉れたかの如くに。親しい話を僕の爲にして呉れた。たつた三日であつたけれど彼女は毎日の様に牧師の家を訪ねるし僕も彼女が來るのを待つてをつた。一所に歌ふこともあつた。けれども別れる日がすぐやつて來た。六里の山道を歩いて村に歸つてから二日目の朝彼女から、もし都合がよかつたら一所に東京へ歸つて貰ひたい、彼女のお叔父さんもそれを承知して呉れたからと云ふ意味の端書を受取つた時、僕は今まで感じなかつたものを感じた、そして變な氣持になつた。しかしそれは何と云つても僕には嬉しいことだつた。

君もよく知つてゐるだらう、あの百噸内外の汽船で一晝夜も搖られるのだから耐らないよ。彼女と曉星に行つてゐる弟と僕と三人で船の片隅に毛布を敷いて座を取つた。波が靜かであつたのと月がよかつたのとで僕達三人は愉快な航海をすることが出來た。どんな話をしたかそんなに細かくは覺えてをらぬが、Lilasuarrey の話を船の手摺に倚りかゝりながら話したこと丈けはよく覺えてをる。ビスケットを噛りながら夜おそくまで話した終りには弟は寒いと云つて船室へ歸つて仕舞つた。殘された二人はそれから一時も話したのだ。眠くはありませんか寒くはありませんかと云つても彼女はいゝえと答へて動かうとしない。眼に涙を一ぱい含ませて俺の話を夢中になつて聽いて呉れた。

の仕事を手傳つた。彼女の父は京城に大きな商館を持つてをつた。彼女はこの青年とは少さい時からのお友達であつてよくその性質を知つてゐた。仕事好きな精力家であつたさうだ。俺はもうその人のことを多く語ることを好まぬ。その青年が歸つて來たことゝ忙はしい店の仕事の爲めに是非一人の後繼者を要すると云ふ理由で彼女と結婚は急に早められた。母から彼女の許に委はしい事情を知らせて來た。彼女は恐ろしい程無垢な處女だつた。そのことを僕に話してよいか惡いかわからなかつた。母からの手紙を半月も抱いて苦しんだ末到頭僕に打ち明けて來た。この手紙がそれだ。此中に母からの長い手紙が封入してあつた。(と云つて俺は手紙を抽出から出して下に示した)「私にはとてもわかりません。お母さんの云つたことを聽いて今迄に一度として後悔したことのない私は今となつて叛くことが恐ろしくあります。お母さんは私を愛して下さるのです。けれども貴方のことを思ふと私には何もかもわからなくなります。弱い私はお母さんと貴方の間に板挟みになつて毎日泣いてをります。どうしたらよいのでせう。敎へて下さい。』これを受取つて俺は何と考へたと思ふかへ。何を考へたつて判るものか。苦んで〳〵毎日を送つた。彼女は心配して又手紙をよこした。終りに「手紙ではもう駄目です、會つて話し度う御座います。次ぎの土曜日に何卒會つて下さい」とあつた。愛すると云ふ心丈けでは動きのとれない時になつた。世の中がそれを認めて呉れない。許して呉れない。そしてそれを敲き破はして仕舞ふのだ。その時が來た。又昔の孤獨に歸る時が。

四谷見附で待合はせて壕端を歩きながら山王山の杜の方へ行つた。今日の様に曇つた日で山には誰の陰も見えなかつた。社のうしろの石の上に腰を卸した。然して一言も云はなかつた。到頭彼女は泣き出した。何か云ひ出さうとしては咽泣の爲めに杜絶されて言葉が續かなかつた。

「延二さん、私一人でもうきめてしまつたの。赦して下さい」

と云つて彼女は聲をげ揚て俺の膝の上に泣伏した。俺の頭も其時は何を考へていゝかわからぬ位

とてCさんお寢みなさいと云つて電燈を消すのが常だつた。俺はそんなに子供になつてをつた。

おゝさうだあの日のことを話さねばならぬ。僕の敎會の禮拜を濟ませて僕は彼女と二人で會堂を出て某公園の杜を散步したことがあつた。其の日彼女は始めから何だか顏色が惡かつた。あの寺の裏の土橋の所へ來ると急に思出したかの樣に僕に「貴方は結婚と云ふことを考へたことがありますか」と尋いた。僕は五分間も默つて考へ込んでをつた。「お氣に障つたのですか」と彼女は心配さうに云つた。俺は彼女からその言葉を聞いた時悲しい豫感に打たれた。「いや、決してさうではありません。結婚と云ふことは考へたことが度々あります。然しその都度私は考へまい〳〵と努力致しました。愛すると云ふことの他何も考へまいと思ひました。私は貴方と結婚する爲めに貴方を愛したのではありません。私は貴方を愛すればよいのです、貴方から愛して戴けばよいのです。その他のことは何も考へたくありません」と僕は云つた。僕達二人はそれから十五分間も默つて杜の中を步いた。「私もさう思ひますわ」銅像の下に來た時出拔けに彼女は云つた。俺は何だか不安に襲はれた。二人の間から幸福と云ふものが永遠に奪はれて仕舞ふのではないか知らんと思ふた。愛と云ふことが傷ましいことの代名詞になつて仕舞ふのではないかと思つた。

F君、その日から俺の懷から幸福と云ふ無邪氣な小鳥が逃げて仕舞つた。愛すると云ふことが苦痛になつて來た。苦めば苦む程しかし俺の彼女に對する愛は强められて行つた。彼女から離れ難くなつて行つた。

しかしF君、その時はもう彼女は自分の意志でどうすることも出來ない境遇になつてゐたのだよ。彼女は三月の學年試驗を終るとすぐ朝鮮の兩親の許に歸省らねばならぬことになつてをつた。信仰の篤い彼女のお母さんは可愛い娘の幸福の爲めに自分のお眼鏡に適つた有爲な一人の青年を彼女に娶せる積りで夫と相談の上米國の大學に送つてあつた。その青年が丁度正月に歸朝してからと云ふものはずうと彼女の家に寄寓して忙はしい店

つた。

試驗中彼女はそんなことて可成り苦しんだらしい。試驗が終んて會つた時頬の肉が大分落ちてゐた。彼女が出立すると云ふ前の前日、朝から二人て鎌倉へ行つた。汽車の中て、今日はもう涙ぽい話は止して面白く笑つて遊ばうと話したのてあつたがやつぱり駄目だつた。彼女の眼にはいつも涙が溜つてをつた。何を話しても眞面目になつて行く眞面目な話は十中八九悲痛な話てあつた。鎌倉から江の島まて濱の砂を踏んて歩いた。其途中、俺にこんなことを云つたのを覺えてをる。俺に來年卒業したら屹度洋行して呉れつて、そして歸朝の後は牧師にならずに出來るなら神學校の教授になつて呉れつて、その方が俺に適してをると云ふのだ。俺はその時は默つて聞いてをつたが、あとて何かの話のついてに俺は云つた。「僕はやつぱり傳道するのです。學問を愛するよりも人間を愛する方が私には尊く思はれます。私はイエスを離れて何もしたくありません。私は貧しい傳道者になります。私のことをもし貴方がこれから先思出すとがあつたら延二と云ふ一人の貧しい青年が——私はいつまても青年てありたいのてす——貧しい心を以つてイエスの言葉を傳へてをると云ふことを覺えて下さい。お祈をして下さい。」と云つた。彼女はしく〳〵泣き出した。そして又云つた。あなたからそんな尊いお言葉を聞かされると私は身を裂かれる樣な辛い思ひが致しますの、やつぱり諦めねばなりません。えゝ私は貴方の爲めに一生お祈り致しますわ。」と。藤澤の驛についた時は五時頃だつた。俺の體も心も綿の樣に疲れ切つてゐた。

正君、しかも到頭別れる時が來た。永遠に別れる時が。永遠と云ふ言葉は餘り大袈裟かも知れぬがいつ又會ふかわからない俺達の未來はどうしても永遠でなくてはならぬ。俺は彼女と品川で別れた日から二日の間に一生懸命になつて長い手紙を書いた。彼女と始めて會つた時から今までのことを思出すまゝに書いた。どん〳〵書けた。日本の卷紙て二本書いた。終りに「私達の交りは貧しい心と貧しい心との悲しい邂逅てありました。」と書いた。「しかし神みのが知り給ふ。我等の愛は永遠に

ゐ混亂してゐたのだ。彼女と一緒に泣けたらと思つても俺には涙も出ねば聲も出ない。彼女に會ふまでは俺はもう心を決めてをつたのだ。母の家へ歸るのが眞實だ。C子としてはその方が當然だ。羊の樣な溫順な彼女に反逆の旗を揚げさせるなんてそんなことが出來るものか。母の家へ歸るのが彼女には何よりの幸福だ。俺の落ついた心は俺にさう敎へたのだ。しかしF君、それは餘りに觀念的な考へ方だつた。俺の膝の上に泣き崩れてゐる彼女を見た時、俺は思つた。——俺はどうして此女を人手に渡すことが出來るか。彼女を所有すべきものは俺を除いて誰がある？俺は彼女を離れ得ない。どうしても出來ない——俺の心は本能的にさう叫んだ。さうした心持が、彼女が俺の意見を聞かずに獨斷で承諾の手紙を母に出したことを聞いて俺を激怒させた。俺は踏潰された樣な氣がした。しかし涙にうるんだ彼女の瞳に溢れる樣な愛の輝きを見た時、俺は又もとの心に歸つて、赦してやれ。母の家へ歸るのがほんとうだ。と何の矛盾も感ぜずに云つた。俺は云つた。

「私には隨分苦しいことです。しかし朝鮮へ歸るのがほんとうです。私にはさう思はれます。私には貴方の心が何もかもよくわかります。安心して歸つて下さい。」彼女は又泣き出した。「私はほんとうに罪な女です、赦して下さい。」と、斷々に云つた。俺はその時彼女の手を堅く握つた。神の前に出すべき無垢な人の手を彼女の夫に先つて俺は汚したのだ。恐ろしいことだね。俺はその時慘敗者の勝利と云つた樣な複雜な心持を味つた。惡い言葉を語りながら俺はそんな異數的な心を持つた。

それからお祈をして山を降りた。赤坂見附から電車に沿うて半藏門まで歩いた。その間出發の日どりやその前後のことなどを語つた。會ひたいのは山々だけれども早運命の定つた人と會ふことは自分の心にも咎めるし彼女の夫になるべき人に對しても濟まない氣がしたのでもう別れるまで會はないことに極めた。しかしいざ別れるとなると急に淋しくなつて俺は自分で極めておきながら前のことは取消してもう一度最後に會つて呉れと賴んだ。彼女は笑つて「私もさう思つてゐました」と云

虛心集

一碧樓選

山懷で青い襟巻をして我につらければ　流吉
やがて歸らん水仙の古葉正しく　同
まじめに急ぎたる朝の山茶花ひかる　同
衣服を重ね青い海なれば見に出たり　同
歸りたくなつて山の端の冬木ゆさぶりぬ　同
幾夜の炉邊の福壽草の凋みたる故里　巨鬼
夜の土間の積藁にふれんとしふれたる俺　同
冬の夜の赤子笑はせて嘆きある身とて　同
屋根の落葉の夜の机の蜜柑がもられて　同
十勝の山口よ雪道の我があゆみのちさし　一仙
舟を出てそして裏白がほしく若者　同
丘の枯やぎの短き影にしのばねばならぬ　同
かくも夜の母が古綿をほぐす心亂れず　矢双
朝寒い馬の背にずんと近寄り笑まし　同

基督のものであります。」と書いた。

三田の木村屋で買つた菓子箱の中にこの二本の巻紙を入れて俺は東京ステーションに急いだ。彼女を見送る若い女學生や西洋人やが澤山待合所に集つてをつた。彼女には澤山の友達があつた。彼女は皆から愛せられてをつた。俺は人の顔が恐ろしくて待合室に入れなかつた。開札が始まるまで三等の待合所で新聞を見てをつた。どうしてこの箱を渡さうと絶えず心配してをつた。皆がプラットホームに出たあとで俺は恐る〳〵歩いて行つた。窓から顔を出して彼女は友人と握手を交してをつた。群集の後に隱れてをつたが發車用意のベルが鳴ると俺は夢中になつて前へ出た。

これを途中であがつて下さい。

Cさん、左樣なら、

と小さな聲で云つた。俺は顔を眞赤にして女學生の前を通つて後にさがると、車掌の鳴す發車の笛も聞かずにプラットホームを降りて行つた。

F君、もう話はこれきりだ。彼女は俺の處から去つて行つて仕舞つた。朝鮮へ歸つて仕舞つた。俺も元の孤獨に歸る時が來たのだ。連絡船で書いた手紙を受取つたきり今日まで二年足らずの間に彼女からは一本の手紙も來ない。初戀の思出が時々俺を惱ます。時と云ふものもこの悲しい結果を葬つて仕舞ふには餘りに無力だ。彼女を失うてからと云ふもの、俺の生活は日一日と荒んで行つた。俺の信仰までが破壞されて行つた。傳道者の貧しい心を捨て本に歸る爲めに、過去のむさ苦しい繫絆から脫れたいばかりに俺は escape を企てた。

F君、俺は然し、やつぱり傳道せねばならぬと思つてをる。フランシスの樣な單一の心に還つて來る時が俺を待つてをる樣な氣がする。渡航を前に控へてをる俺の心は決して單一ではない。複雜になつて來れば來る程俺の平和は亂されて行く。

あゝ隨分話したね。もう何時頃だらう。思はず昂奮して時の過つのを忘れて仕舞つた。」

——終——

時評

時事斷片

X・Y・Z生

△普通選擧の問題が大分國民全體を動かして來たやうである。ぜひともこの問題は今議會で立派に成立させて欲しいと思ふ。ところで普通選擧が實際に行はれるやうになつたとして、この際心細くてならないことは、各個人の敎化の程度である。殊に政治界に飛び出して働いて見たいと思ふ人々の大部分の品性の下劣なことである。これは日本人がまだ眞實に政治といふものに對する尊敬と理解とを持つてゐないからであらう。今日のやうな、野卑な、利己的な、彌次馬的な代議士が多くては我々は決して議會そのものに對して侮蔑の念をこそ抱け、少しも敬意を拂ふ所以を見出すことはできない。偶々高潔な代議士たちが奮ひ起つて眞面目な問題を提出しても一笑に附せらるゝやうな有樣では、まだ〳〵日本の憲政の前途は遠いといふ感を抱かずには居れない。

禁酒問題、廢娼問題のやうな重大問題の提議に對して、幾何の人が眞面目に考へて見たであらうか。

しかしこれは代議士ばかりではないかやうな代議士を生んだのは國民全體が、このやうな重大な問題に對して餘りに無關心だからである。米國では國民全體が禁酒の實行に對して燃ゆるやうな熱心を持つてゐるではないか。日本人は米國が軍艦や陸軍兵を盛に作るのを恐れてゐるやうであるが、恐しい敵は日本人自身の利己的な、放埒な心のうちに潛んでゐるのではないか。

普通選擧の運動も大切だが、同時に日本人自身の心の改革はもつと根本的なことである。

△一つの問題を摑まへて小說なり、脚本を書くといふことが、この數年來の一つの傾向になつてゐる。少しづゝでも今日の生活を改善して行くために、藝術家が當然取るべき、また取らざるを得ない手段であるにちがひない。有島武郎氏を始め大抵の新しい作家にはその傾向が見出される。これ等の作品について共通な點は趣意が可なりあり、眞面目であると、同時に一方では何うかすると餘りに決論を急ぎ過ぎた結果、作品の眞實味や妥當性を缺くといふ恐れが多く見出される。眞劍ではあるが、その割合にしんみりしたところが薄いといふ弊害は一般に免れない。これは作家のブレーンがあせつてゐるほどハアトが燃えてゐないのかも知れない、或ひはアハトは燃えてゐても、生活そのもの〻苦惱が充分でないのか知れない。これは常に新しい問題を提げて立たうとする作家の考へなければならないことであると思ふ。

雜誌團欒の主幹石丸梧平氏の『幻影の女』（早稻田文學）を讀む

漁夫らに舟板の揃ひ寒潮の夜があけた　同
冬よ我らの去らんとす土黒々　風來子
冬帽を摑みひたぶるに願のあるや　同
冬の流が青く牛車避けたり　同
枯藻の一筋二筋の黒さ嗅ぎたり　鈴靈嶺
クリスマスの夜てもの食む牛は肥えたりし　同
青首大根をぬきてありて夕べ云はまく　狹青
葱の土がばら〳〵落ちて思ひつまつて嫂　同
農婦が轡たやすくとる畝の冬草短し　望洋
小春日牧場の外の樹の光りて　高木
大根畑すつきり冬日に透く葉が嬉しく　蕗村
泣く〳〵墨をする綿入の高い膝しとる　一碧樓
懐爐買はんにもこの杜の道よ來し　同
寒明の樹の根方の我が毬ありし　同

投句略規

▲題並に句數を限らず
▲東京市外高田村大原一五二七中塚直三宛
▲封筒に虚心集稿と明記の事

沖野岩三郎作『煉瓦の雨』合評

讀者泣かせ

浅田　江村

貴作『煉瓦の雨』の中、『煉瓦の雨』は私の一番閉口した作です。部分的には色々いゝところがありますが全體として隨分筋合の混雜した纏りの悪い、よくもこんなに意地悪く讀者泣かせに仕上げられたものだと呪ひたくもなります。それだのに私は差向きこの一篇を前期スパニッシュイフルエンザの病床で脇目もふらず一氣に讀まされてしまひました。讀者泣せのくせに、讀み初めるとどうしてもおしまひまで意地悪く讀ませられるのです。そして私の十六七歳の生意氣ざかりのしかも純な信仰に燃えてゐた時代を今更らながら回想していひ知れぬ感慨に打たれました。煉瓦の雨に粉微塵となつた殉教者、その周圍にある色々な意味の殉教者の面影がまざ〳〵と眼前に浮ぶやうな氣もしました。そこに貴下の藝術の勝利を認めればなりませんが、併しそれでも尙ほ私はこの作を何うしても好きになれません。

私の一番好きなのは『自轉車』の一篇です。貴下は創作家であるよりもこの一篇に於て批評家たるの天分に勝ち誇つてゐます。私はこの作全體を通ずる深刻な皮肉なそして眞面目なユーモアの色彩に富む現代批評に傾倒しました。父と子とが同じ時代に幾年かを共に過さねばならぬ人生の皮肉な矛盾は既に幾人かの父である私には人事でないやうに泌々感ぜられます。若し作中の父親が陽一郎のやうな諦めのいゝ聰明な人でなかつたならばやうどイプセンの建築師にあるやうな恐ろしい悲劇の一幕で落ちになつたでせう。

貴作が全體に私に特別の興味をそゝり舊知に會ふにも似たる親しみ深いものであることを此際是非とも一言させていたゞきます。それは作中に出てくる多くの題材が私が嘗てしばらく寄食したことのある土地であつたり、又はそこに關係のある事柄であつたりすることです。お蔭で二十年前の夢のやうな熊野の印象がはつきりと蘇生つてきます。併し私の知つてゐる熊野は太古のまゝに靜かに眠つてゐるやうな溫かい淋しさが、その頃の若い落伍者や隱遁者の生活に餘りに都合よく適應してゐたために、貴下の『山風の如く』のやうな物凄い人生の爭鬪がこの土地を舞臺にすることが何だか不思議でなりません。全く別の世界のやうにも思はれます。斯うした激しい而かも懷かしい今昔の感が貴作の全部を通じて私の心胸を動かします。

大阪より

吉田　孝太

沖野さん。あなたの記念すべき第一創作集『煉瓦の雨』は何とも云ひ知れぬ親みをもつて私の机上を訪れました。私はそれを電燈の光で讀みながら、もう彼是れ十六七年にもなるあなたの和歌山時代の生活をまざ〳〵と思ひ起しました。

だ時、私はやはり一つの問題を持つた作家の長所を見出したと、同時に作家に對する不滿を見出した。作者は家庭婦人問題に對して研究もあり、深い興味を持つてゐる人だけに、家庭生活に對しては可なり細かい觀察を働かせもし、充分な意氣込や熱心を持つてゐる。描寫法も手に入つてゐる。問題に對する眞率さも充分認められる。けれどもそこにたゞ一つ物足りない感じがある。作者の哲學（フィロソフィ）が却つて主人公や女主人公の人間らしさを殺してゐやうな點が見出されるやうに思ふ。

しかしこの不滿は氏一人に對しての不滿ではない。今日の新しい問題提供者の凡べてに對する不滿である。私たちは作者の今の眞率に對して將來の醇化を思ふのである。

△文部大臣は私立大學の教授の俸給を補助するといふことを議會で述べたやうであるが、私立大學經營者たちは何のやうな心持でこの話を聽いてゐるであらうか。私立大學は何處までも私立大學である。私立大學自身で立派に經營して行かれるだけの自信と矜持とを持つべきである。私立大學の實質さへ優れてゐるならば、世間の同情は必ずそこに集るにちがひない。自らを卑しくするやうな私立大學經營者の下にありてこそ私立大學は權威なきものとなる。

△シベリヤ、滿洲地方にゐる日本の醜業婦を救ふために、何とかいふ婦人團體が活動してゐるのも宜しい。しかし醜業婦は目前にもある。手近な醜業婦から救ふことが更に大切である。富の爲めに社會的虛榮のために處女性の尊さを滅すことを何とも思つてゐない、父兄や處女たちの救濟は更に大切なことである。

私の好きな作

佐野袈裟美

沖野氏の「煉瓦の雨」の中から自分の氣に入つたものを拾ひ上げることにしますと、私は先づ第一に「自轉車」が大變好きです。實にいゝ作だと思ひました。あれには妙に皮肉なところがありません。如何にもやんばりしたしなやかな感じがします。いぢけたところがなくのびやかです。またセンチメンタルなところもなく、上品なユーモアがあります。作中の人物に懷つかしみを感じます。單に現在頭角をあらはし來りつゝある或る新進作家の家庭を描いたといふ個人的な興味ばかりではありません。あの作は誰が讀んでもいゝ感じを與へられるに違ひないと思ひます。あの作の主人公鳳一郎は非常によく描かれてゐます。あれが實際の人間にあつてゐるかゐないかといふやうなことは問題ではありません。單に作者がクリイトした人物としても實に立派なものです。あれほどよく描かれた人物は「煉瓦の雨」以外に屠他の小說に滅多に見る事が出來ません。鳳一郎が自分の子供を理解しようとし、新しい時代を理解しようとする心持に非常に同感します。この作は確かに傑作です。

次に私の好きなのは「山鼠の如く」です。この作も確かによく描かれてゐます。作中の人物も皆活躍してゐます。そしてしつくりした懷かしい感じを與へます。以上の二作を私は寶玉のやうにつかしみます。

縮し遠慮し歪み押しひしがれてしまつてゐるさうである。或る人に依れば、沖野さんは一種の本能的作家で、眞實性があり、客觀性は透徹し、活動寫眞的な小說の中で、運命の運鎖を發見して高笑してゐるさうである。或る人によれば、普通の珍らしい噺話で、物の看方には、牧師といふ職業から來る耶蘇敎的の臭み——憂鬱と固定觀念とがあるさうである。或人は作の奧底に流れてゐる一脈の哀愁の氣分が一番氣に入つたさうである。或る人は宿命論に偏してゐるといふ。或る人は個性が乏しい。最も遺憾なき自然主義者で、通俗文學作者に適當なキツト、ユーモア、センチメンタリズムがある。

精鍊された腕を誇る江戶風の板前ならば、きれいに鹽梅して、三人前にも五人前にも仕上げる料理を、沖野さんは血の出る樣な生まの材料のまゝ、コテコテ一つの膳部に盛り上げてゐる。これから本物の出來上る小說の荒筋を話してきかされるといふ感じがある。一部の長所と短所とはそこから來る。暗示に依つて想像を刺戟するよりも、材料を投げ出して料理を任かせるのである。筆が餘りに省略されたといふよりも、書き足らないといふべきところがまゝあつて、概括的說明語が力なく宙に浮いてゐることがある。生活は誇されるが、性格は描かれない。關係は述べられるが、その主體は寫されない。思想は說かれるが、心理の描寫は乏しい。眞實性の透徹はある、そこが一番うれしいところであるが、客觀性の透徹といふことを私は肯はない、作者はつとめて客觀的にならうとしてゐるが、深い主觀味は底を流れてゐる。宿命論的の看方、自然主義的態度はかなりに强い。併しそこに徹底して安住してゐるとは思はれない。理想主義改善主義の欲求を發見することは決して難くないと思ふ。作者はあまりに數奇の運命に弄ばれてゐる、人生の矛盾に逢着してゐる、遭逢のはかなさを經驗してゐる、生活の表裏、心事の異違を見すぎてゐる。幻滅の悲哀を痛感してゐる。憂鬱やセンチメンタリズムは必ずしも宗敎からのみ來るとは限らない。宿命論も自然主義も生まれて來る筈と思ふ總て善人である。殊に主要な人物は多く聰明で、理解と同情とに富み、自省自責の念が强い。之も宗敎から來る偏屈ばかりとは思はれない。如何に客觀的態度を通つて出て來るにしても、宗敎は今少し力と熱意を持つてもよさゝうに思ふが。多くの場合に憧憬と感傷とに現はれ、甘い明るさを添へるだけであるといふ感が無いとは言へない。

妄評多罪

巖谷 小波

煉瓦の雨の著者はなか〳〵油斷のならぬ人である、日常社交裡に見聞した事片を直ちに藥籠中の物として巧みに鹽梅、調理するといふ氣の利いた腕のある人だ。

なるほど此道の苦勞人から見たら所々に生々しい不練れな筆が眼に付かう。然し又た其の代りには心憎い程細い所を旨く捕まへてゐる點も少くない。

要するに此の著者は所謂る未成品たるは爭はれまい。だがなまじ既成品の下手なりに固まつた濕柿式の物よりはどれ程味があるか知れないのである。

就中あまり長からぬ作物の中に殆んど素人放れをした或作がある。夫れば丁度素人浮瑠璃の段物よりもさばり丈けにヤンヤと云はせる樣なものだらう。

だが、其樣な喝采につけ上つて、のべつにさばりばかりやる樣な人で無い事は僕が保證

▲沖野さん。打明けて云ひますと、私はあなたが創作家として、早晩中央文壇に現はれて來なければならない人だと思つてゐました。否もつと早く、少くも爰三四年前に出なければならない人だつたのです。それも五點生といふ雅號でなくやはり、本名の沖野岩三郎でなくてはならないといふことも。

▲沖野さん。あなたの心血を注がれたといふ『宿命』が大阪朝日の當選小說として發表された時、私は先づ誰よりも先に頰笑まずにはゐられませんでした。『いよ〳〵やつたな』といふ考が、私の頭に鋭く閃きました、併し沖野さん、私に率直に云ひして下さい、打明けて云へば、私は彼の『宿命』を待兼れて讀んで行く中に、何だか云ひ知れぬ悲哀と失望とに滿されました。尤も彼の作は或事情の下に幾度か改竄され、殆んど最初の空氣や色彩を殆んど滅殺されたものとは、萬々承知してゐながら、それでも尙且つ私の大なる期待を全然裏切られたやうな、一種の皮肉を感ぜずにはゐられなかつたのです。

▲沖野さん。私は重れてあなたに向つて失禮なことを申上げるかも知れません。寬大なるあなたはきつとそれをお宥し下さるだらうと信じます。

▲沖野さん。實際あなたが非常なる勇氣と、努力とをもつて華々しく創作壇に打つて出ようとする意氣ごみを、彼の『宿命』によつて挫かれてゐねばしないでせうか。私はそれをあなたの爲めに悲しみます。あなたが書きたくつて〳〵うづ〳〵してる或物——それが始終あなたの頭にこびりついてゐて、そして絶えずあなたを脅かしてゐるのぢやないでせうか。私は『煉瓦の雨』の何の作をも通じて、さうした一種の宿命觀が執拗に纏綿してゐることを見遁す譯には行きませんでした。

▲沖野さん。あなたの頭腦に一等深く刻みつけられた或物——それを立體的に說明し、批判し得られない社會組織が解放されない間は、今のあなたの心の底から『妥協』といふ文字を削除されないかと思はれます。卷頭の『煉瓦の雨』にも、卷末の『山鳳の如く』にも、それが最も色濃く表はれてゐるのを拒むことが出來ないかと思ひます。私はあなたの苦しい立場に同情すると同時に、あなたの遣る瀨ない悶えに對して涙ぐまずにはゐられません。

▲沖野さん。あなたの何の作を拜見しても、あなたの主觀が可なり鋭い力をもつて働いてゐるに拘らず、客觀的の觀察が比較的輕く取扱はれてはしませんでせうか、斯う云つては失禮ですが、宗教家といふ偏した思想が、兎もすると全體の調子を破壞しやうとする傾向が全然無いとは云はれまいと思はれるのです。事件に對するあなたの理智的な批評や、寧ろ冷酷に近い皮肉があるやうですが、創作家としての是非有つて欲しい情熱の分量に缺けてゐはせぬかとも思はれるのです。併しそれはあなたの小說には、總て眞實性の潛在を生命とすると同じやうにあなたの特色であるかも知れません。

▲沖野さん。『指相撲』『侵入者』等は面白く讀みました。殊に私としては『髮』を最も興味深く讀まざるを得ませんでした。

血の出るやうな材料

渡邊 英一

沖野岩三郎氏の初めての作品集である。その中に收められた『煉瓦の雨』『指相撲』『髮』『親』『轉宅』『侵入者』『自轉車』『彼の僧』『山鳳の如く』を讀み終ると、その後に澤山の人々の跋文がついてゐる。或る人によれば氏の藝術的な座談に較べて、小說は著しく混雜し萎

る作者が、同じ作品集の中の『彼の僧』て、特殊部落の中に置かれて、強い運命の絆に縛られた一人の主僧を描くと共に、多分作者自身を描いたであらうと思はれる所の年若き客僧をも、同じ運命の陥穽に陥し入れてゐるのは、どうしたものでせう？　其間に於ける作者の心の傾斜面に、可なり矛盾したものが無いでせうか？　若し一方が作者の本當の心持であるとしたならば、他の一方は嘘の心持であると云ふ疑ひを持たしめる慨れはないでせうか？

『轉宅』の中に現はれてゐる太田の心持も、私には理解の出來にくいもの、一つでした。太田は孫江と同棲する事によつて、彼女を幸福にしてやる事が出來ると信じてゐたらしいが、太田は果して本當に心から左樣いふ確信を懐いてゐたでらうか？　又同じ陥穽に陥み込まうとして、自分獨りだけが助かつた時、太田は女に對して何ういふ責任感を懐いたであらう？　作者の鋭い神經にも似合はず、かうした道義的精神の稀薄な事を、私は氣にかけずにゐられませんでした。

以上の歸結として私は恁う云ふ事を言ひ度い。『煉瓦の雨』一卷の藝術味を稀薄にしてゐるところのものは、作者の持つてゐる基督教的宿命觀でなくつて、寧ろ作者がそれを蔽せるだけ蔽して、自由な、赤裸々な人間を裝ひたがつてゐる一種の妥協的精神ではあるまいかと思ひます。此の必要のない遠慮が擲つて、もつと本然的精神生活に入つたならば、此の作者の藝術もこれ迄に見るやうなあまさを失ひ、そしてもつと本質的なものとなり、それと同時に十分個性を發揮し得るやうになりはしないかと思ひます。

御承知のやうに、かの獨逸のグスタアウ、フレンセンは、極めて忠實な素材の蒐輯家でした。彼は牧會の途中も、旅行の途次も、原稿紙と萬年筆を體から離した事がなく、すべての見聞や感想を、一々細かに記錄に取つて置いて、いざと云ふ場合には何時でもそれを直ぐに役立てる事の出來るやうにしてあつたと言ひます。そして私は素材蒐輯家としての沖野君を敢えてフレンセンに負けない程の自負心を持つた人だと想像してゐます。何故なら『親』といふ小説の中に在る『又た奇談かれ、一つ承らうぢや無いか』といふ一句の中て、作者自身が明らかに「奇談家」たる自負心を示して居られるから。

然かし乍らあれだけ素材の豐富を以て驚嘆されたフレンセンでさへ、素材其ものゝ興味にのみ囚はれる事から免かれました。彼の胸中に高鳴り響いた革命的精神は、彼をして素材の興味に引摺られる事から免かれしめたばかりでなく、逆に手に餘る程の素材を縱橫無碍に驅使して、すべての主題を彼自身の觀照の下に置かしめました。鄕土藝術家としての、又たは宗教小説家としての彼の個性は、其處から湧いて來たのであります。

沖野君もどうか其の積りで、新領土を開拓して頂きたい。（二月一日）

探偵のやうに出る信次さん

大橋　房子

作物を通じて作者を想像してゐた者は、目のあたりにその作者を見た時にまゝ失望すると申します。おどけと皮肉のお好きな先生に先づ近しく接してゐた私が、『煉瓦の雨』を讀み終つた時の涙に光つた微笑の裡には、淡い一種の幻滅の感がなかつたとは云へません。實際のところ系圖を書いてツルゲネーフの小説をお讀みになるといふ先生のやうな勉強家でない私——ぢつと座つてゐてある調子に觸

するまでもあるまい。僕は恬目して此作者の將來を見てゐる。

大阪毎日社にて

新居格

「煉瓦の雨」錯綜した世相とそれをあざなつてゐる運命(性格に根ざした)をよく描出されてゐると思ふ。そうしてそのうちにヒユメーンな哀傷が流れてゐる。そこが尊い。たゞ事件の說明に詳かため多少の無駄がありはしないかとも思はれる、筆致は自由に暢達してゐる。「髪」は近江なにがしと云ふ無髪の奇人が既に取材の上に興味である。そしてこゝにも運命が何でもない些事から大きな破綻を見る事を明示してある。

「親」此編は親に對する感想を創作化したものであり從つて主觀的な行方であるそしてそれを色づけるに氏特獨の宿命觀を以てしてゐるたけのもの。

「侵入者」では二人の女性の性格と其關係が或點まで巧に取扱はれてゐるしかし此編では特に二人の會活に於いて自然と云ふよりも作者の會活と云ふぎこちなさがありはしないかそれから松子の伯父と云ふのは何をしてゐるか不明だが何しろクリスチヤンらしいが松子が伯父の家を去るときの教訓の言葉はあまりに(言ひ方が)その人らしくないやうに思ふ。

「自轉車」一夫にたいする父親鳳一郎の心的推移を描いて成功をしてゐる。寛一の點出が實に全體を生かしてる。

「山鳥の如く」はわたくし自身の個人的興味から面白くよみました。

「指相撲」は瞬に立てついて一生獨身で通そうとする老孃が自分の經驗とよく似た事件の發生に悶えるあたりが面白いしかしもう少し狩り込んでかけないものか知らとも思へる。

妄評多謝

單に奇談家たる勿れ

柴田勝衛

沖野君の『煉瓦の雨』一巻は大體に於いて面白く拜見致しました。殊に素材其のものゝ與ふる興味には、到底生仲な通俗小說でさへ及びのつかぬものがあります。其の點ではかの迂餘曲折を極めた、大星一家の永い物語も又たかの聖人の生れ代りから、普通の平凡人に迄引下げられた近江法正の話も、特に興味の多いものでしたし、それからかの「山鳥の如く」の中に出て來る大川流二の一生の如きは、ドラマテイツクな、そしてセンセエシヨナルな場面さへも具へてゐて、殆んど興味の盡くる所を知らないと云つても宜い位のものでした。

けれども沖野君の小說には、かうした素材の與へる興味以外に、何ものか作者に獨自な心の傾斜面が、現はれてゐるのであらうか?

私は不幸にしてそれを發見するのに苦しんだ。作者の魂のいぶきのかゝつてゐない作品は、たとへ其の素材がどんなに奇抜であり、又た面白いものであらうとも、到底立派な藝術品にはなり得ない、とふだんから信じてゐる私に取つては、此の點が一番、沖野君の爲めにも、また此の作品集の爲めにも、惜しまれたのであります。

單に恁う言つたゞけでは鳥渡解り難いかも知れませんが、近い例があの子煩惱の親を描いた『自轉車』といふ話の中に『親』に於いて示された、ニヒリスティツクな省察が、少しも働いてゐないのは、どう云ふ譯でせう?又或る箇所に於いては、因循姑息な教員生活に向つて、可なり手嚴しい指彈を差向けてゐ

くした編輯振て特色のあつた「反響」誌上て屢々拝見して居ましたから、直にあの力のこもつた筆致で書き出された一種の告白文は間もなく本誌の一讀物となりました。私もその頃からあなたは小説をかいたらきつと面白いものが出來るだらうと思つて居ました。しかしあなたは迚も駄目だと首を振つて居ました。然るに一昨年の正月あなたは何やら長いものを二週間許て書き通したけれど、人に見せるものではないから棄てゝ了つたなどいふ便を下さいました。所がそれは思がけないあの大阪朝日の懸賞當選小説でした。尤もあなたの言が讖をなしたといふのはこれこそ眞實の「運命」でしたらふ。牧師にして詩歌をよみ文章を作る人は珍しくないけれど、小説を作る人は蓋しあなたを以て第一人者としなければなりません。私はあなたの小説集「煉瓦の雨」を讀んで何よりもその説教氣分の少いのを喜びました。宗教家の書いたものは兎もすれば、何時もの説教口調が出て來て嫌氣がさすものです。私はいかに宗教文學だからといふて、説教を露骨にすべきものではないと思ひます。もしそうてあつたら矢張り勸善懲悪の講談がより面白いかもしれません。ただ人生の觀方や書きあらはされた格の中に、自のづから著者の深い生活の反影と人生に對する深き愛とがにじみ出して來るにひないと思ひます。

「煉瓦の雨」では其巻頭のものが代表作てあるだけ一番面白くよみました。そして其の背景をなして居る事件が事件だけに、あなたが牧師として眞に涙のある働をして居られるのを見て感じました。あなたは運命には從順なれと常に説いて居るが、創作の上ではどちらかといふと運命に反抗せんとしてもがきながら冷笑して居る様な態度があるやうに思ひました。「煉瓦の雨」の中の小鳥の死の挿話などは深酷な社會批評――皮肉が藏されてあると思はれました。

門外評

岸邊福雄

僕は君の小説よりも前に君の童話を讀んだのであつた。そして其都度子供を十二分に了解した氣分の溢れて居る新らしき資材、それも多くが君の郷里地方に在る口碑傳話を骨子としたもので、云はゞ掘り出しものであるが、それが非常に兒童化した文體と輕妙な用語て統一されてあつた。我々子供黨大は將の授事を得たやうに喜んで居た處が、

突如として君の作品が大阪朝日の募集小説の優勝圈内に悠々飛び込んだ事を知つた。其當時君は『かれての遊び書きを無意味に出品したまてゝあつたが』と話した。此の告白は謙遜五分と實際五分てあらうと首肯いた。此作品とても亦處女の態度て發表されたやうである。それが實際てこそ君の作に對して愛も敬も油然として湧き出して來る。

君の作品は、全く君の三十餘年間の經歴てあり記錄である。其寫實的なる所に生々した新らしい生命がある。そして豐富なる内容の中に少なからぬ諧謔味がある。其輕い淡い味を含んて居る中に終に深刻なる感傷的の舞臺に引き込んて往く。丁度遠淺のやうてある。君は元來多血質の性格てあつたてあらう。それが、十餘年間嘗め盡くした苦い辛い經驗が敏感にしたのかも知れない。君の作品は慥に多血神經質である。

君がお伽噺に趣味を持ち筆を持ち口を持つ所以は、全く此の多血質の方面の活躍て、講演と小説に感傷の方面の現はれるのは神經質の方面の露出てあらう。

れようとする瞥澤に私には『煉瓦の雨』はあまりに煩しいものでした。それに、あのテマの背景をなしてゐる例の事件の事にも氣が付かず、又あの小說に於いて重要な位置を占むべき八十枚の原稿を無茶に切り裂いてしまつたといふ〇〇〇の惡戲の事も全く知らずに讀んだのですから、目まぐるしい場面の變轉に疲れ切つた私の頭に殘つたものは、譯の解らぬ不安な暗雲の一塊に過ぎませんでした。私は瞬間的感激を得る事は出來ましたけれど、全體を感嘆する氣持にはなれませんでした。

『僕、沖野さんはどん〳〵書いた方がいゝと思ふ。

例のお得意な座談に醉はされて、夜の闇に眼を輝かせながら、芝圖橋から三田通りの方にぶら〳〵歩いて行つた時、義夫兄さんが沈んだ調子で云ひました。

『ありあまる材料を書いて書いて書きなぐつたら、其處に眞の沖野さんの藝術が生れるだらう。』

不思議さうにちいにいさんの顏を見上げてゐた私は、此の意味深い言葉にすつかり感心してしまひました。

『私はあつちの人から半分、こつちの人から少うしもつてきて書くもんだから、これは事實と違ひますつて云はれて困ることがある。』

いつか先生はこんな事を仰しやいました。その半分と半分とがちぐはぐなものになれ。諸君の評もありましたが私には夫れ程文藝家かぶれがしてゐるとも又た牧師臭いとも思はれませんでした。ナチュラリスチックなことゝユーモアのある點とは私は同感することが出來ました。尙幾つかの短篇に取扱はれた材料其ものには私の知らなかつたのも種々あつて夫れが又別の意味で興味を唆りました。諸々の問題は解決せずに殘されてありますが、貴兄を知る私には其の答案は皆な分つて居り夫れが結局一點に落着く樣に見えます。

これから私は又た描きかけた畫を畫きます其うち御目にかゝつて緩り御話ししたいと思ひます。

沖野さん。

私が本誌の編輯を直接やつて居た頃あなたの原稿を加藤一夫君から紹介してよこしました。私はあなたのものを、その頃丁度きびしく

んで來ると、あなたの本質の善い所、まじめな所、美しい所が四邊の空氣の中に解けて流れます。あなたの愛はあなたの自覺しない領域にまで擴がり、春の陽光が萬物を抱くやうに、あなたは話の中の何人にも人間としての一席を與へて平等にはぐくみ、いたはつて居られるのを感じます。聽く者は輕薄な興味中心の感激で無くて、人格的にあなたの愛に引き附けられ、あなたの涙に濡れます。その時のあなたの言葉には、わざとらしいアクサンが無く、低い靜かな調子の中に、話は渾然として奥深く、且つ縷々なく流れて行きます」以上は決して讃め過ぎた批評でない。私は與謝野氏の感想を、無條件で其のまゝ受け容れる。

「煉瓦の雨」は、斯うした牧師の小說集である。「煉瓦の雨」ほかに篇を求める三五〇頁の美本、これの文學上の價値を批判する事は私の柄にない重荷だから避けるが、暫らく讀後の感の一端を述べさせて貰ふ。私は幼い頃から一氣呵勢に事をやつつけるのが得意であつた。私は一氣呵勢にこの小說集を讀んだ。しかし、本書こそ既に著者が一氣呵勢にできたものではなからうか。一氣呵勢、そこに私の讀書の缺點があるやうに、沖野氏の創作にもな所、美しい所が四邊の空氣の中に解けて流此の長所と短所とが有るやうに思はる。澁滯しないで空を馳せる天馬に乘る快はあるが、途上で世に稀なる寶を見おとして行くやうな心配がある。早い早い、活動寫眞のやうに早い。著者には說教に表れるやうに、深入りして靜かに留まつて考へる心があるのに、小說を書く筆は妙なユーモアに誘ばれて、表通りして了ふ事がある。私は、讀者にたゞ歎ばれる通俗文學者になり易い傾向が著者にあるやうな氣がしてたまらなく悲しい。私は興味のみを刺戟する文學を、遊蕩文學の變態として批難したい。人間性のどん底に響くものは、一氣呵勢の通俗作家から起るものでない。

かく述べた所だけでは、私は本書を推奬すること少きに過ぎた觀がする。しかし斯く批難した私もその實、本書を讀んで居る時には、異常の興味をもて讀み耽つたものである。恐らく本書を批難する專門の文學者でも、讀んで居る間は著者の澁滯なき筆と數奇な經驗事實に引つ張られて、卷を終るまで息をもつかずに耽讀するに違ひない。入篇悉く事實もしくは脚色した事實で何れも著者の異常な經驗を基として居るが、殊に面白いのは音無信次といふ名を假りて著者が顯れて來る事である。各編に就いては人各々その觀る所を異にするから玆に批評したくない。私としては卷頭の長編「煉瓦の雨」と一番短い「親」とが就中よい創作だと感じた。

未成品沖野氏

江口渙

作品を通して推定する處に依れば、人としての氏は略ある程度にまで出來上つた人であるらしい。人間苦乃至は世間苦と云ふものに依つて、並びに人間的知識、乃至は世間的知識と云ふものに依つて、いろ〳〵の苦痛を經た結果、既に人としての或る種の既成品になつてゐるらしい。同時に私一個の立場から見て、既成品としての滿足もあり又不滿もある。つまり私が人間として歩きたくつて歩く機會に逢着し得なかつた途、乃至は將來に於いて是非歩かなければならない途の幾分の一かを、氏はもう既に歩いてゐる。その過程の幾分の一なりともを、氏が作品の奥に見せてくれたと云ふ事は、私にとつては大きな美望でもあり又滿足でもある。同時に若し私が氏と同じ過程を歩いてゐたならば、いやでももつ

牧師にして小説家、我國にては類例の少な い事だと聞く、由來君は自由思想の人だ。前例などに捕はれるやうな窮屈者ではない。思ふ事を思ふ様に徹する人である。今後の轉移も亦豫測出來ない。けれども、君の所有する劇的生活の記錄と素材を遺憾なく發表してほしい。そして文藝界に新空氣を送ると同時に、兒童文學界に更に新らしき刺激を與へてほしい。茲に此の佳作を通して希望をも述べる。

第一印象

高須　梅溪

「煉瓦の雨」については、既に、文壇諸家の批評が紛つて出てゐるのですから、私としても、それ等各方面の批評以外に、新しい發見も、なし得ないのです。卷頭にある「煉瓦の雨」は、少しゴタ〳〵した話振で、齒痒いやうな所もありますが、私は、それを一番、傑れたやうに拜見しました。キリスト教と或家との關係を中核として、世相の一面が、生々しく、出てゐるやうに、思ひます。而して、甚の中へ出て來る大星庄平や、東家の婆さんなど、何れも、強い感動を、私の胸に與へました。而して、全體が卒直な話振である所に、自由な、ノビ〳〵した趣があつた、プロット無しの不統一なところが、却て、在來の小說物だ類りに要求してゐるのです。

以上は、批評ではありません。單に、私の斷想を、のべさせて、戴いた丈ですから、他日を俟つて、貴兄の長編大作を批評させて戴く時期の來るのを、切に、待つて居ります。

（一月十八日夜）

牧師の小說

比屋根安定

著者沖野氏が五六年まへ六合雜誌に文を寄せた時、私は氏が自らの眞を語るの卒直なのに、私は感服するよりも呆れてゐた。其のの、ち折々てた評論を讀む度に、僞善めいた皮肉なのに私は、憎らしくて、堪らなかつた。所が去年晩秋、自殺した齋藤正氏の追悼會で、赤ら顏の肥えた紳士がその頃世間を騷がせた神近市子の「引かれ者の唄」を携へて居たので、誰かと聞く傍に尋ねると沖野牧師だといふ。私が氏を尊敬し出したのは、此の時に初まる。私は初めて理想に近い牧師に出遭つた、昨年の夏以來私は三度かれの說敎を聞いた。評論を讀んで氣持ちを惡くした私に、說敎は之を償つて餘りあるよい感じを與へた。與謝野寬氏の語を借りていへば「あなたの談が澄

於いてすら、氏は形式的自然主義の後を追ひ過ぎたため、題材の幾分を殺して了つた憾がある。

勿論氏はかくの如く表現に於いては形式的自然主義の跡を追ひながら、尚その底には歴す事の出來ない人道主義的な精神、否むしろ基督教的な精神が脉々として流れてゐる。そこが世間にざらにある形式的自然主義の作品に比して餘程その價値を異にしてゐる點である。然し氏の作品を裏附けてゐるこの尊い愛の精神も、私かる云はせればまだ〳〵餘程基督教的色彩を帶びすぎてゐる。無論それは普通の牧師などのもつてゐる基督教的色彩と全然その趣を異にした、純なものであるが、藝術家としてはもつと自由な精神が欲しい。同時に基督教的消極主義を捨てゝ、全然積極的に燃え上つて欲しい。かくの如く自己を自由に解放する事が出來るならば、始めて氏の作品に往々缺如してうるフレッシュネスとストレングスとを把持し得るに違ひないから。その時こそは氏の特性の一つとも見るべき純な素直な態度とその表現とは始めて、大きな價値を帶びて來るに違ひないから。これ等のいろ〳〵な點に於いて、人間としては略一と通り出來上つた人であるらしい、沖野氏も、藝術家としてはまだ〳〵未成品であると云はなければならない。然し私が沖野氏に種々期待する事の出來る點は、一つにこの未成品であると云ふ點である。然かも現在未成品である沖野氏の將來は、生田長江氏の云つたやうな大乘藝術の作家としてよりも、小乘藝術の作家として大をなし得るかも知れない。無論近頃の私は長江氏同樣、小乘藝術をもつて必ずしも恥づべきものとは思つてゐない。（雄辨所載再錄）

矚目すべき將來

龍居　枯山

私か沖野氏の小說を初めて讀んだのは昨年二月の大學評論に掲げられた『彼の僧』であつたが、その時私は、たゞ一人の新らしい鄉土小說家を迎いたといふに止まらず、何となく將來大きな作をしさな人といふ豫感に打たれたのである。

『彼の僧』に描かれたる眞實僧侶の哀れむべき生活、殊にそれが絕對絕命の貧乏寺の隕落僧の醜い生活と、その周圍の地方色は如何にも巧みに扱はれてゐるが、本當の所私は『可なりよく表現されてゐる』と思つたに過ぎなかつた。けれどここに何となく將來恐るべき人のやうに思はしめる或物があつたのである。

それから『煉瓦の雨』（黑潮掲載）も恰度『彼の僧』と同じ頃に讀んだやうに思ふ。而してこれとてもその扱はれたる事實、即ち作の内容からいへば近年稀に見る貴いもので、そこに作者の云はんとした社會觀、人生觀も相當に共鳴し得るものがあるに拘はらず、だいつ厭いといふ遺憾さがあつたのである。即ち云ひ換へれば内容はいゝが、描き方に不完全な所——無論部分々々には實にいゝ所がある、彼の老婆の描寫などは實に巧妙を極めてゐる、それ等は巧みとして認めるのであるが——があやうに思はれたのである。

また私は同年の四月雄辨で此の『指相撲』を見た、而してこの時私ははじめて氏の小說家として益々成功すべき人たることを承認したのである。勿論この一編が前二者に比して優れてゐるといふのではない、この中に描かれたる老嬢の淋しさと悲しさとが、加何にも巧みに表はされてゐると思つたのである。殊に變態心理の描寫に一種の才を有つてゐること

と積極的態度に出て敢て火中に飛び込まざるを得なかつたであらうと思はれるいろ〳〵の機會に於いて、氏は比較的消極的な懸度を持し得るらしい。

藝術家としての沖野岩三郎氏に對しては、以上と全然別種な意味に於いて、滿足をも感じ又不滿足をも感じる、氏はその世間苦、乃至は世間的知識から得た藝術品としての好い材料を可なりに多量に持つてゐる人であるらしい。この點に於いて他の多くの作家に較べに遙かに多彩であると云ふ事が出來る。唯、それを表現する場合に氏は不思議に異つた二樣のものを手易く混淆させてゐる形跡がある。即ちあつた事實を唯あつと事實として何の粉色もなく素直に表現する場合と、それに可なりの「やま」を作る場合との二つである、然も前者に於ける氏は、多くの場合好い效果を收めてゐるに關らず、後者の場合にはその「やま」の作り方が中途半端であるがために、多く失敗に終つてゐる。

沖野氏の場合には前者に於いては、可なりにストライキングな事件を取扱ひながら敢てしやうとしてゐながら、他方に於いて多少の誇張せず、又敢てチャレンヂせずに甚た素直に又素朴にその事件を物語つてゐる。「煉瓦の雨」の如きがそれである。然るに「やま」を作る場合に於いてはその態度は大いに考え切らない。「轉宅」の如きが殊にその適例である。もつとも「煉瓦の雨」の如き作品は、新宮を搖藍としたあの恐しい事件がその背景をなしてゐると云ふ事を推察し得ない讀者にとつては、作者があまりに或る種の遠慮をしすぎて、あの作品にとつて大きなターニング・ポイントである所の、主人公大星氏が突然居なくなりやがて骨になつて歸つて來た前後の事情をあまりに書かなすぎたために、作全體に充分徹底した理解を持ち得ないかもしれない。然しこれは今日の場合止むを得ない抄略であつて決して作品を貰むべきではない。唯、この作でも注意すべき事は、作者が忠實に經驗を再現しやうとしてゐる場合は、それが素直に讀者に働きかけるが、妙に小說らしく書かうとしてゐる所、例へば庄平、雪子の會話を庫藏が山の中で立聞きするあたりは、その作爲があまりに考え切らない不滿がある。これは一方に作者が自然主義的の態度を忠實に墨守しやうとしてゐながら、他方に於いて多少の作爲を加へやうとする矛盾を敢てするために起つた事ではあるまいか私は氏がかゝる中途半端の煮え切らない態度を捨てて、その何れかをきつぱり採らん事を切望する。こゝに若し私の勝手な推定を許されるならば、作者の意圖は怖らく後者にあるのであるまいか。もしさうであるならば、むしろもつと大仕掛の「やま」のある、然かもその「やま」の頂上まで嫌でも應でも讀者を引摺り上るに足るだけの力と熱を是非とも作品の中へ吹き込むべきである。かくすれば讀了の後に於いては讀者に作爲のあつた事を悟られても、隨間毎に於ける作品の實在性だけは確保する事が出來るに違ひない。若し又、作者の意圖が前者にあつて、忠實に直接經驗の再現だけを目的としてゐるならば、そして事實を讀者に提供する事に依つて讀者をして社會苦、人間苦の如何に恰しきものであるかを知らしめるとともにその社會苦、人間苦を除去すべく關心せしめる事をその目的とするならば、氏の如く徒らに形式的自然主義のもう一步奥に踏み込んで、その中に包まれた火の如き核心をも摑み出すべきではあるまいか。形式的自然主義のもう一步奥へ踏み込んでこそ、始めて正しい意味での直接經驗の再現と云ひ得るのではあるまいか。「山鼠の如く」のやうな好い題材に

"MY ENVIRONS" REVIEWED BY THE LONDON TIMES.

MY ENVIRONS by Tetsuzo Okada, 156 pp. Tokyo: The Rikugo Zasshisha.

With the charm of true directness, Mr. Okada takes us a little way into his secret mind. A little way only, because it is inherent in his very individualism to "keep himself to himself" as our poor say. He is the gentlest and least aggressive of individualists, looking out on the world with a patient skepticism, holding off from its bustling concerns in order to find himself and life:—

What am I ?
Not a philosopher,
Not a poet,
Much less a preacher,
Or an educator.
Because I want to be MYSELF.

"So-called work I care little," he writes elsewhere (making one of his very few slips in English). "The hignest respect I can pay it is seeing it"; and he goes on to tell us what it is that he really wants to see:—

The secrets of nature, the secrets of men,
The secrets of time, the secrets of space,
The secrets of beings, the secrets of gods—
These are what I really want to see.

This attitude to self and life qualifies all Mr. Okada's poetry, whether he is telling us of the travels and of the little daughter who was left behind at home; giving us morsels of shrewd worldly wisdom, or discussing religion, friendship, preachers and propagandists, great men, the bores who interrupt him when he wants to read, and many other subjects.

The book is various, gentle, wise, continuously pleasing; and by no means least by reason of the fresh associations of ideas which occur very happily to the poet. "Freedom and Necessity" is one instance:—

On the deck of a ship,
In whatever direction you may walk
The ship carries you to its destination.

On the face of an ocean,
In whatever way a ship may sail,
The earth conveys the ship over its planetary course.

And from many others we might choose the still more philosophical "Contact and Communion":—

A watch on a soldier's wrist.
The two, beating time—the pulse and the instrument.
Similars in contact, but no communion between,
Until a man consciously compares the two.

(The Times Literary Supplement, Sept. 5, 1918.)

MY ENVIRONS, Price One Shilling or 25 Cents including postage.

が益々確かに認められたのであつた。

それから私が沖野氏の小説で、特殊な價値を認めたのは、宗教界の暗い影の前に如何にも美しい何物かを描き出すことて、今でも忘やることの出來ぬのは同年五月の科學と文藝に發表された『侵入者』てある。この中に描出されたる同性の愛は處女と老女の心理が如何にも巧妙に表されてゐると思つた。

最後に私をして沖野氏を優れたる小說作家として本當に確信せしめたものは何てあるかといふことを一言したいと思ふ。

それは矢張り同年同月の大學評論に揭げられた『山鳥の如く』てかつた。私がこの小說を讀んだ時、それが紀州の一地方に起つた事實を詳細に描いた記錄に過ぎないと思ひつゝ、何といふことなしに作者のある力に壓せられて、讀後實に立派な作てあると嘆稱せざるを得なかつた。殊にあの作に描かれたやうな職工を指導しつゝある社會主義者や、宗教家の眞面目なる精神や、彼等に惡意なくして裏切つた流二の苦悶は定によく表されてゐると思つた。而してこの時に私は『今月發表されたあらゆる小說の中で、『山鳥の如くは最も傑出したる作の一てある』とまでいつたやうに記憶する。全く私はその時から沖野氏の小說を確かに一領域を確定に占むべき特殊のもの將來大に展びんとするものとして認めたのてある。

弘道會だより

□同仁教會と統一教會との提携　近年まて日本に於ける同仁教會ミッシヨンの首長たりしケールン博士が米國アトランタ市に於ける同仁教會と統一教會との合同教會の牧師として就任したといふ記事が近着の一宗教雜誌に揭載されて居る。多くの意味に於て興味深き新聞てある。

□宗教聯盟論　と題して私は一月の弘道會例會席上に於て愚見を陳述するの光榮を有した。私は之を單なる机上の空論とせずに出來得る限り實際運動に爲度いと思ふ。基督教各派の提携合同は固よりてあるが、或程度迄は佛教徒諸氏との接近聯合をも圖るべきだと思ふ。此點に關して廣く天下同感の士の高教に接する事を得ば誠に幸甚の至てある。猶一月の例會には來會者一同の要求を容れて近く西比利亞より歸朝された岡田哲藏氏が一場の□西比利亞見聞談　を試みられた。西比利亞を背景にしたる聯合國將士の活動振りを極めて興味深く語られた。

□高潮せる我國の勞働問題　と題して二月の弘道會例會に於て北澤新次郎氏の講演があつた筈てある。猶今月の例會には松尾清次郎氏が『近代思潮より見たる儒教』と題する講演を九日（日曜）午後二時惟一館に於て試みらるゝ豫定てある。讀者諸君の來會を歡迎する。

□自由基督教講習會　は廣告欄所載の通り四月初旬春期休暇を利用して開催の筈てある。優に一般基督者及び志道者を啓發するに足る極めて有意義なる講習會たらしむべく目下熱心に準備中てある。東京帝國大學に於て哲學に關する講演を爲すべく來朝中の米國哲學界の第一人者たるデュウエー博士にも出演を請ふべく交涉中てかる。（今岡生）

新約書文學史講義

□日時　毎日曜日午後一時半より

□場所　芝區三田四國町芝園橋際統一教會

新約書は我が宗教の寶典であることは云ふ迄もないが、そは如何にして傳へられたか、耶蘇の言行は如何にして記錄せられたか、記錄の全部は信ずべからずとするも其の信ずべき部分は何か、その批判の方法は何か、その他書翰部の起源性質等を論じ、而して福音書より書翰等に亘りて原始基督教思想の發展を歷史的に總覽し以てその精神を明かにしたいと思ふて此の講義を始めます、有志諸君の來會を歡迎します。

大正八年三月

擔當者　三並良

岡田哲藏著

我が斷片 價金貳拾錢 稅金二錢

MYFRAGMENTS 金貳拾錢 金貳錢

右合本 金四拾錢 金四錢

我が環境 金六拾錢 金四錢

MYENVIRONS 金四拾錢 金貳錢

發行所 東京市芝區三田 振替東京一〇〇〇三番 電話芝五八五五番 六合雜誌社

彼は何物をもことさらに作爲せんとはせぬ。然し彼が感受し、觀察し、判斷するものが自然の形に成り出づる。かくして成れる自然の作が「我が斷片」として見はれたのは三年前である。其後の作の集まれるを分類し配列したのが「我が還境」である。彼はさきに數年の觀察と思惟の結果を集めて「靜觀と思想」と名くる一論集とした。その範圍は主として今の思想界、卽ち他の人の心の世界であつて、それを攻究の對象としたのであつた。然してその成果は世の常の論文の形であつた。「斷片」と「環境」とはかく人の心界に限られず、他の思想に介せられず、彼自らが直ちに自然に接し、人生に接し、得たるまゝの印象を表現したのである。その表現の方式も、散文とも詩とも就かぬ、自由にして獨特のものである。然して成し得る限り短き辭に多くの意義を包含せんとの試である。自由に眞實に他の思想や形式に累せられざらんと願ふのみならず國の境を越え、時の流れの外に立つは彼の望である。

統一基督教會集會案內

一、禮拜說教（每日曜日午前十時）擔當　三並良
一、傳道講演（每日曜日午後六時半）　沖野岩三郎
一、聖書講義（每日曜日午後一時半）　三並良
　新約書文中の講義
一、靈交會（每木曜日午後六時半）　沖野岩三郎
　舊約聖書を研究中、猶會員諸君の信仰告白、宇宙、人生等に對する質疑等有りて頗る有意義の會合也
一、日曜學校（每日曜日午前八時）　諸家
　滿五歲以上の少年男女の入學を歡迎す

□どの集りにも、又どなたでも自由に御出席、御聽きになるとが出來ますから、御遠慮なく御來會下さい、歡迎いたします。

東京三田芝園橋際
統一基督教會
電話芝五八五五番

自由基督教會集會案內

但し自由教會は夏期中集會は悉く休む。

□講演（每日曜日午前十時より）
　內ヶ崎作三郎、安部磯雄、岸本能武太、岡田哲藏、小山東助、永井柳太郎、今岡信一良、相原一郎介の諸氏之を擔當す
□聖書講義（每日曜日午前九時半より）
　相原一郎介氏擔任
□思想研究（日曜日午前九時）
　H. G. Wells, God the Invisible King の輪講文學士今岡信一良氏指導
　以上會場は女子音樂學校講堂に於てす
□家庭集會（隔週木曜日午後六時半より）
　各教會員の宅を巡回して開催し、相互の親睦を計り信仰に關する疑義を糺し共進互琢の實を擧げんとするものなり

□本會は大正四年六月成立し、自由基督教の立場より包容的信仰を宣傳し、現代の思想と生活に適應する宗教生活を樹立せんとする人士の組織せる獨立自給の團體なり、同感の士の來會を歡迎す。

神田錦町三丁目女子音樂學校內
自由基督教會
電話本局三七三九番

▼基督紹介書中の權威（實に何人も讀むべきの書是を滿天下の諸賢に薦む）▲

第五版

眞人基督

○第一高等學校教授　三並良著

ポケット入美本百三十頁

現代化せるキリストの口繪付

定價金拾錢　郵稅貳錢

傳說によらず歷史批評の立場より基督を說明し彼れの宗教を現代人の意識に紹介せんとするものにして我等の基督觀は此の書によりて闡明せられたり

東京三田四國町

六合雜誌社

東京振替一〇〇〇三

電話芝五八五五番

我等の宗教

我れ等同人相計つて、宗教の本質を學理的にも又實際的にも研究する所の新誌を發行し、以て眞に自由主義の基督教を徹底せしめんとす。載せんと期する所の大略は凡そ（一）聖書の研究（特に難解の章句）、（二）耶蘇傳の研究、（三）諸教の研究、（四）近代の思想と宗教、（五）宗教哲學上の根本問題、（六）我れ等の信仰、（七）如何に兒童に聖書を物語る可き乎等なり。

毎月一回五日發行

定價一册金十錢　稅五厘

一ヶ年稅共金壹圓

東京市芝區三田四國町

發行所宗教研究會

振替東京三八三九四番

電話芝五八五五番

——（第三卷第二號）——二月五日發行——（十八號目次）——

□福音の反響……三並良
□自然（トルストイ）……瀧内秀綱
□ヨハネ默示錄の性質……三並良
□消えにし燈火……沖野岩三郎
□小さな悅び……青木茂
□エスの教へ……たみ子
□消息會告……

——（第三卷第三號）——三月五日發行——（十九號目次）——

□死より生へ……三並良
□怪しき影……大橋房子
□許すことに就て……多美子
□所感……瀧内秀綱
□聞いたまゝ……村上雄策
□消息……米國通信……

THE NANKOIN HOSPITAL

Chigasaki, Kozagori, Sagami. (Near Oiso)

UNDER THE MANAGEMENT OF

Dr. K. TAKATA

Within a few minutes from the
Chigasaki Railway Station

Healthiest Situation

FACING THE SAGAMI BAY

FINE SCENERY

Telephone: Chigasaki No. 2.

□診察毎朝及毎夕但祭日及日曜の他

□院長診察月木金午前及木午後六時

□林、峯間兩副院長は目下當院に在勤

□東京三番町三十番地(市ヶ谷見附内)

電話番町六二番
同 五一六番

東洋内科醫院

院長 醫學博士 高田畊安

電話ちがさき二番

南湖院

□神奈川縣茅ヶ崎海濱(從停車場半里)

□河野、高橋兩副長は目下當院に在勤

□院長診察土曜日午後、入院診後應需

□診察毎朝但祭日及日曜及土曜の他

本誌讀者諸君の特權

◎圖書取次！

一、東京市內發行の書籍ならば定價の金額丈御送り下さるれば別に送料は要しませぬ。但し法律書、醫書及び教科書は元價が非常に高いのですから送料を添へて下さい。

一、御送金は可成安全な振替貯金にて御拂込み下さい。（振替口座は東京一〇〇〇三、六合雜誌社宛）

一、本部へ當て返書を要する質問書御發しに際しては必ず返信料を添付して下さい。

一、御注文に際しては必ず書名著者氏名及び發行所等を御記し下さい。（海外よりの御注文は郵税を要します）

六合雜誌社營業部
電話芝五八五五番

本誌定價

壹冊	一ヶ月分	金廿五錢	税一錢
六冊	半ヶ年分	前金壹圓四拾五錢	郵税共
十二冊	一ヶ年分	前金貳圓八拾錢	郵税共

●海外は郵税一冊に付金八錢（清國を除く）
●特別號出版の際は規定以外の代金を申受く

本誌廣告料

特等	表紙二三四面	一頁	金貳拾圓
普通		一頁	金八圓
普通		半頁	金六圓

●表紙四面は一頁以下の廣告は御斷り申上候
●二回以上連續掲出の際は特別割引可仕候

大正八年二月廿八日印刷納本
大正八年三月一日發行
（毎月一回一日發行）

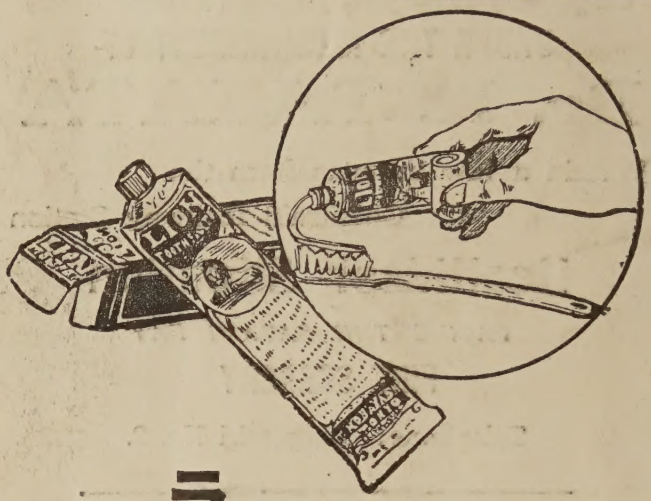
本號定價 貳拾五錢

發行兼編輯人 東京市芝區三田四國町二ノ六 工藤直太郎
印刷人 東京市本鄉區眞砂町三十六番地 和田操
印刷所 東京市芝區三田四國町二ノ六 三光堂
發行所 統一基督教弘道會

發賣所 東京市芝區三田四國町 六合雜誌社
振替東京一〇〇〇三番
電話芝五八五五番

March

PAC UN IAN SCHOOL
R TH NISTRY
rkeley, alifornia



新時代の人の
高尚な趣味
に合(かな)つた
ライオン煉齒磨
チユーブ入！

（明治廿五年三月二十七日第三種郵便物認可）（大正八年二月二十八日印刷納本）
（大合雜誌第三十九卷第三號）（大正八年三月一日發行）（毎月一回一日發行）